こゝの鉢
まきは工

みんがゆるしの
色みえてしらつゝ
かはらじ・かれわ木の乙
松のはけ嵐すき窓

皆春を山荘にて

日本名著全集
江戸文藝之部第八巻

歌舞伎脚本集

この卷の裝幀――

背及表紙意匠　木村莊八氏畫
見返し前附・後附　木村莊八氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

歌舞伎脚本集目録

例　言

本集に載錄した作品の選擇標準は、作の內容からも、作者としての代表すべき意味からも、價値あるべき事を第一とした。が、作者に就いていつてみても、一人減らし二人減らしして、目次に並べた通りの極く平凡な而も僅かな數しか擧げられなかつた。作は、數は勿論望まれなかつたが、たゞ悉く、直接書卸しにのみ據る事が出來たのは幸であつた。その爲め、同一外題の飜刻があつても、或もの以外にはそれと相當辭句の出入りのある事を御承知願ひたい。

そこで繪入根本は全然用ゐなかつた。書卸し臺帳と如何に相違あるかを示す例として、「桑名屋德藏」の挿畫の中には大分根本を挾んでおいた。元祿期の脚本としては、矢張り致し方なくて繪入狂言本をとつておいた。但し、狂言本は純粹の脚本と解釋すべきでないと思ふから、飜刻の形式を臺帳と多少變へてゐる。卽ち、狂言本には小說的の形式を殘すやうにし、而も唯の書下しでは讀難いから、臺詞別の樣式も捨てずにおいた。「好色傳受」は特殊な狂言本で、これは純粹の脚本と認めて其樣な形式をとつておいた。

編者の最初の欲が、大きに過ぎて、實際問題と齟齬を來たし、遂に豫期の半ばも仕上げえなかつた事は遺憾の極みである。是非入れるべき作も作者もあつたが、差當りこれ以上の方法は執れなかつたのである。

たゞ本集に容れた作の半ばは、始めて世に出たものである事を讀者諸彥と共に悅びたいと思ふ。

解説

守隨憲治

大名なぐさみ曾我　近松門左衛門作

繪入狂言本一册。京都、八文字屋八左衛門版。

上下二番續。二幕四場。

天和三年七月(?)、京都、都萬太夫座、坂田藤十郎座興行。

本書の奥書には印行年月を記してない爲め、興行時期が問題になつて來る。そこで、本書の中からその方面の資料を探ると、本文の始めに、

私が京へ上りました時、四條の川原へ參り嘉太夫と申す淨瑠璃を見物仕りました。卽ち世繼曾我と申すで御座りました。

この一文が先づ物をいふ。嘉太夫の語つた近松作「世繼曾我」の丸本の或ものには、「天和三年九月」とある。そこで、彼が語つたのが九月であらうといふ事になる。これを義太夫が竹本座旗上げに際して語つたのは、貞享二年の事だ。すると天和三年か貞享元年かに、この曾我の興行を考へなければならぬ。扨、曾我狂言といふも

のは、作柄の方からも一つの型物といふべきで、耳塵集や役者舌鼓によつても知らるゝ如く、當時の習はしでは、曾我は七月狂言であつた。春二の替りに傾城事をする所から、盆替りの方は、大磯の虎を持つて來たのである。この事實と、嘉太夫節の件とから考察を下すと、天和三年の七月か、貞享元年の七月かの興行でなければならぬ。此點は疑ふ餘地はあるまい。本文に「七月參宮」の句を入れたのが、その用意であると思ふ。又かういふ事實も考へる必要がある。嘉太夫時代の丸本印行年月が必ずしも語られた時期と一致してをらぬといふ點だ。「天和三年九月」の奥書が、語つた月と一致しえぬ場合も考へられる。而して、前文の「世繼曾我と申すで御座りました」より以下の數句を讀下して、如何にそれが詳しい說明であるかに注意すると、その詳細な辭句の必要が何處にあるかを思はせる。私は近世演劇の性質上、廣告的な臺詞を舞臺で言はせたのであると解釋する。絵入の丸本を舞臺で說明する科も、この意味でなくて、何と解すべきだらうか。すると、假に天和三年九月嘉太夫によつて語られたとして、それから翌年の七月までの隔りは餘りにも長い。

「むゝこれは面白い。仕組を覺えてゐるか。」「則ち本を買うて參りし。」

の、この對話は現在として始めて役立つ。こゝで、嘉太夫節「世繼曾我」印行の時期が當然考究されなくてはならぬ。現存の「世繼曾我」の正本からいへば、九月と記したものが數は尠いといふ事、又嘉太夫即ち加賀掾の正本の奥書は「正月刊」が多いが、何年刊とか、唯「秋」といふのもあつて、要するに、興行期と刊行期とは、強ち一致してない事が知られる。で、私は「世繼曾我」の九月が果して興行期なるや否やには疑を持つ。くだ〳〵と述立てゝ來たが、以上の如き理由から、この「なぐさみ曾我」は、天和三年中のものと見、更に恐らく其年の七月上演のものであらうと信ずる。(昨年歌舞伎研究第十五輯に紹介した際に、多少說に飛躍があ

つたから此處に筆を改める。）役者の中に大和屋甚兵衛がゐる所から、甚兵衛の元祿二年上京說によつて本作の時代考證が左右されさうにもなるが、本作のは元祿期甚兵衛の親と見れば一應の說明はつかうかと思ふ。二番續の形式からいつても元祿期迄引下げる勇氣はない。

「大名なぐさみ曾我」の稱呼は、勿論本文第一頁によつて分明の通り、大名が參宮から歸つて、慰みに曾我の狂言をやつたといふ意味である。

筋は大體「世繼曾我」に據るものである事も、幕あきの臺詞に見る通りである。但し、「世繼曾我」を時代物と見ると（世話がゝつた時代とでもいふべきだらうが）、これは世話に書替へた世繼曾我と呼んで宜しからう。本全集近松名作集上卷の「世繼曾我」と併せ見られたら、確かな興味が湧く事と思ふ。

この作は近松ものとして、極く初期にあり乍ら、傑作の一と見られる。まづ、近松が如何に書替へにも優れた腕があつたか、本作を見れば分る。而して脚色が面白い。一種の劇中劇の形式をとり、而も、些の無理がなく第二次劇へと進展する。大體の配役が終つてから、竹之丞の杖持竹藏が五郎に決まつたが、大鳥毛の城介折介が、敵役に廻つたのに不服で、五郎に惡口する。五郎は、怒つて脇差を拔かうとした爲めに、狼藉なとあつて繩目にあつてしまふ。これからの竹藏の臺詞は、既に五郎の臺詞になる。大名は賴朝格になつて、これを直に狂言の序に取做し、竹藏の五郎は繩のまゝ、由比ケ濱ならぬ屋敷に歸るといふ手順になる。

近松の作には又、親愛的な味が濃く漂ふ。この作に就いて見れば、配役が濟む迄の大名家中としての役名を見給へ。

立傘の吉介……………金子吉左衛門

狭箱持藤介……坂田藤十郎
大鳥毛の城介……三笠丈右衞門
同　折介……萩野折右衞門
槍持七介……玉川七三郎
草履取庄介……櫻山庄七
杖持竹藏……村上竹之丞

まづ、こんな風になつてる。贔屓役者の誰彼に接する氣で、この場を見た觀衆は、どんな嬉しさと親しみとを感じた事か。作者の第一の狙ひは必ず成功した事と思ふ。

鬼王團三郎兄弟が、夫々に和田の姉妹を手に入れる場面がある。鬼王が目指してる姉の帚木自身は、團三郎の方に傾くので、鬼王は一計を案じて、弟を癲癇病みだとして姉をせしめる。この邊りは、何でもないやうではあるが、如何にも、あど氣なさが横溢した作者一流の筆つきが見られる。女房に家出されて追駈けて來た荒くれ男の朝比奈が、書置を見て大泣きするのも面白い。單なる馬鹿〳〵しさでなくて、彼の如き荒男にも、然く人間的な半面が宿つてゐようと悟らしめるものがある。この、ゆとり、和らか味は、實に後年の近松作に益々眼立つものなのである。

後指さゝれ乍ら躍狂ふ宗若が、一旦、角前髪になり振袖を短かく切られると、生れ變つた勇士となつて敵役を一々取つて伏せる。めでたい〳〵で幕になるのだが、目先の變化と共に、曾我贔屓の胸を撫下ろさす。

一體に曾我は古い。此作の臺詞によつても、藤十郎が既に數回十郎役を演じた事が察せられるが、今これ

を「世繼曾我」の姉妹篇と見、そこに曾我狂言の類型を立てた場合、吾々は曾我もの〻歷史の上に、此作が如何なる地位を占めてゐるかを考へなくてはなるまい。

「世繼曾我」と共に、曾我の後日物語とも見られ、裏の狂言とも考へられる。これは、曾我狂言の直系以外に傍系の發生を認める事になる。その傍系がそれ自身に價値を持つたのは、近世に入つてゞある。然し傍系とはいへ曾我狂言である。斯かる類の曾我ものは歌舞伎の歷史中にも稀であつた。多少曾我に緣故のあるのを、本集中に例をとつて見れば、まづ「助六」がある。助六實は曾我の五郎時致である。が、これは曾我ものといふ譯にはいかぬ。次に「初買曾我」がある。序幕が本筋の曾我であつたのは言ふまでもないが、それを世界に使つて、本筋は梅の由兵衞にある。それ程には發展し切らずに、曾我の世界で曾我を趣向に持つてゐるのは、「世繼曾我」「なぐさみ曾我」等の一つの立場であり、價値である。

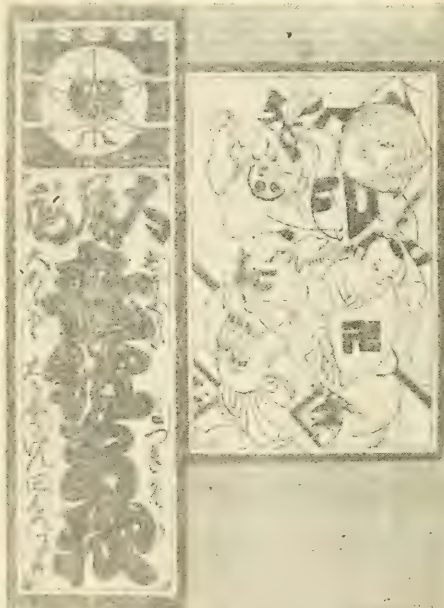
さう考へると、作者近松の腹案が何れに起因したか、ほゞ見當はつかう。家老父右衞門が大名に對つての臺詞の中に、

毎年……一家中の者が承つて曾我物語を致しますが、毎年〳〵致しますゆゑ、五郎十郎が身の上も致し盡しまして、さして變りました趣向も出來ませぬにより……

といはせてゐる。これは、近松が腹案をうつかり言つてしまつたのである。斯くて鬼王團三郎狂言が成立したのである。

かうして曾我もの〻歷史上に一時期を劃したと見れば、歌舞伎操りを通して、此期に構想上の發展が考へられる。前の引用文の中で「曾我物語を致しますが」とある個處を注意したい。「曾我をする」とか「曾我狂言

をする」とかいはないで、曾我物語といつた所に時代の解釋を生む。「曾我物語」といつた語に「曾我」ものゝ前身時代を示すのである。曾我狂言で古い歴史をもつのは、十番切とか夜討の類である。近世演劇の曾我もののゝ取材の範圍は大體これより出でゝない。この事は同時に脚色上にも言及ぼしうると思ふ。從來の曾我ものは曾我物語と密接な交渉の下に成立する。曾我物語から飛躍し切れなかつたのである。卽ち小説飜譯の時代、又は語り物飜譯の時代であつた。それらが劇に展開する相が「世繼曾我」の群によつて、はつきり見られると思ふ。曾我ものゝ系統の中で、「世繼曾我」「なぐさみ曾我」の一群の地位は、斯くて眼覺むるものがある。

近松の狂言本は元祿を過ぎると操り劇の影響を餘りに受けて、愚作の點が眼について來る。それとは違ふが、此作は極く初期に屬する方と

して、操り劇に影響を受けてゐる。然し、如何になだらかな筆致かを見れば壯年時の傑作と見て恥づかしからぬものである。

とにかく、變り種の曾我は正に效を奏したらしい。曾我といふ特殊な作である爲めもあらうが、記錄の上で見ると相當流行してゐる。繪入狂言本で現存するものを探ると、

大屋形世繼曾我　四番續　作者津打九平次　寶永三年五月江戶市村座興行

などある。但し、これは餘程江戶がゝつて脚色されてゐる事勿論である。

本書の原本は前島春三氏愛藏する所である。

好色傳受　小嶋彥十郎作

繪入狂言本三册。元祿六年八月、京都菊屋七郎兵衞版。

上中下三番續。三幕九場。

元祿六年八月、京都、早雲長太夫座、哥仙重良兵衞座興行。

作者小嶋彥十郎に關しては、何等所傳あるを聞かない。想像するに或は狂言師等の出ではあるまいかとも思ふ。拍子きゝの竹島幸左衞門とは特殊の關係があつたらしく思はれるからである。彥十郎の作には、他に、今の所「大雜書伊勢白粉」一部の存在しか見當らない。而して此兩作の通性は所作場にある。その所作は本行を使つてゐるのである。此作の如きは煩はしい迄に能狂言を織込んでゐる。幸左衞門が本行出である事も勿論考へねばならぬが、それに應ずべき作をこれ程大膽にやつてのけた作者は他にはゐなかつたのである。

此作を本叢書に加へたのが、從來知れなかつた小嶋彦十郎の名作を紹介するといふだけでは餘りに物足りない。もう一つの理由は書物の形式として、實に歷史的意義を持つからである。挿畫の寫眞を見て下さればお判りにならうが、所謂繪入狂言本とは全く異なる姿を見せてゐる。

俗にいふ所の狂言本、則ち繪入狂言本は、「なぐさみ曾我」や、「雷傳記」に見るやうに、見様によつては一種の小說なのである。一々例をあげる迄もなく、小說的要素が、かなり濃くて、作者の主觀が其儘露出してゐるのである。だから先日高野博士飜刻の近松狂言本の時も、どうもうまく一人の役の臺詞になり難い所が出て來てる。但し、讀むのには都合がいゝ。そこで大體本叢書の狂言本もその形式をとらうとしが、其場合、この「好色傳受」には些かそんな心配が要らないのである。狂言本といふ名稱を書物の形式に則した用法と解するなら、「好色傳受」を狂言本といふ事は當らない。他の臺帳並に取扱つていゝのである。本文は、臺詞とト書とのみで作者の主觀的辭句は他に何處にも見出せない。全く後の臺帳、吾々の現にいふ戯曲の形式と同一である。

元祿の昔に、斯かる形式が存在したといふ事は注目に値する現象である。作者は奧書に言つてゐる。

今まで狂言本數多出ると雖も、九牛が一毛にて、一つとしてあやち聞こえず。此度出す本は、三番續始より終まで、臺詞殘らずつぶさに書記し出す者也。

と。彦十郎の意圖は、間に菊屋を考へるにしても、大いなるものがあつた。此奧書から推す時は、元祿六年までは、まづ此種の形式が發生しなかつたと考へてよささうに思へる。實際の舞臺の臺詞に、出來る限り接近した形を傳へようとした努力が見られる。此種の書史の上から見て、興味深い事件である。

從來此方面の研究者達は狂言本式の、即ち小說式のものが、元祿時代に存在した脚本筋書の唯一のものだと考へ、さう斷定してゐた。それが破れた。筋書でない、これ程正確な脚本があつたのである。而も「一つとしてあやち聞こえず一といつたのは、必ずしも作者一人の言と見たくはない。時代の聲である。「桑名屋德藏」に挿畫に入れた絵入根本と比較して見給へ。これは當然な現象たといふに躊躇されまい。と見ると、彥十郎といふ人間の輪郭だけでも、も少し分つたら、興味深いものがあらうと思ふ。唯、憾むらくは彼が先見の士でのみあつた事である。何故推通さなかつたか。此次に出た「伊勢白粉」を見ると、平凡な所謂狂言本に逆戻りしてしまつてゐる。が、これには實際問題が手傳つたのであらう。そこ迄穿鑿する必要はない。要は元祿年間にも、現在の戯曲の形式はあつたといふ事を認めて頂きたいのである。

「好色傳受」の外題に就いては、內容との關係に於いて、何等言ふべき必要あるを認めない。戀の臺詞を敎へるといふ程度に過ぎないのである。思ふに、西鶴の浮世草子以來、「好色」の文字が多少世間の好奇心を釣つてゐたから、寧ろ興行上の策から附けたものに過ぎなからう。「好色傳受」の語は、これより少し前に、遊女用の文範に附けた事はある。若し直接に由來するものありとすれば、これらを考へるもよい。但し、內容には何等關係はない。別に小說年表浮世草子の部に「好色傳受」があるが、これには年表編者の不用意の致す所かと思ふ節があるのである。

素材は當時の作の通例通り、但馬橘家のお家騷動を背景に置いて、姫のみさきの前對言葉數馬、段之丞對夕顏、林之助對撫子等の幾つかの戀を綴つたものである。素材の上で、ある種の物語や傳說を利用しない限り、成功した新作は餘りない。場面としての興を追ふ當時の舞臺では、新作は脚色上の問題であつた。で書

物を通した解釋にすぎないが、脚色から見れば、恐らく效果をあげたものであらう。家老が姫を連れて隱れてる家が薬鍾屋だつたり、段之丞や林之助の女夫の隱れ場は餅屋と酒屋だつたり、これらは、觀衆がわが世界として悅んだに違ひない。その他、舞踊の要素を多く取入れてる點も注意を要する。

舞踊場面を入れる事は、矢張り、當時の習はしである。近松等も切には多く大踊りを遣つてゐる。此作になると、やゝしつこい位に入つてる。特に能狂言が多い。例へば、第二番目に、龍田の舞樂の舞、間狂言の眞似、舞々の曾我と和田酒盛、第三番目に關寺小町といふ風。その他大踊りは小原木を女方全部にやらせ、南京操りの羅生門を人形振りで見せたりする。この時代、この顏振れでは、十分效果があつただらうと思ふ。四に、歌舞伎劇に於ける人形振り研究には、本作は重要な資料であると信ずる。

源平雷傳記　三升屋兵庫作

繪入狂言本一册。元祿十一年八月、江戸かいふや版。
四番續。四幕十場。
元祿十一年九月九日初日、江戸中村座興行。
三升屋兵庫とは初代團十郞才牛の事である。彼が役者である傍ら作者を兼ねて居つた點が、他の近松等とは違ふが、これは當時として考へれば、寧ろ近松等の方が異數なので、大部分の作者は役者が兼ねてゐたのである。尠くも役者出であつた。但し、役者の座頭格乃至一流所が、作をする事が漸く稀になつて、兼業ではあつても、そこに作者としての分業が行はれんとして來た時代であつた。

この點から見ては、江戸が上方よりは稍〻後れを示してゐるが、それにしても、役者として一座を率ゐたと同時に、作者として一頭地を拔いた彼は、興味ある人物だと思ふ。

「金の揮」とか「芝居年代記」等の所傳によると、彼が十四歳で初舞臺を踏んだと見なされて、彼の役者生活は此時から初まる事になるが、作は貞享元年（廿五歳頃）の「門松四天王」を最初とすることになる。所傳の記錄の性質から多少事實には粉飾もあらうが、當時の江戸劇壇でいへば、強ち無根の說とも言兼ねる。但し、現存してゐる江戸の狂言本としては、元祿十年を最も古しとするので、雷傳記も江戸の作では、極く古いものゝ一つになつて來て才牛は恰も四十前後の時代で、筆の潤ひ切つた頃と見られる。

元祿十年頃の江戸劇壇、特に作品は、然し

（三度目の門松四天王。金の揮より）

もう隨分上方の影響をうけて來てゐる。その中にゐて、團十郎が主として立籠つた中村座は、江戸草分けの座である關係からか、いはゞ保守的であつた。といふより純な江戸氣質の持主だつた。それで兵庫の殊にこの作の如きは、江戸の劇壇を成るべく純に知らう爲めに、最も適宜な性質のものと言ひうるであらう。
興行を九月九日としたのは享保十三年印行「金の揮」によつたのである。今、これ以上の古い所傳はない。
外題は勿論、鳴神の傳記の謂で、源平と附けたのは、賴光四天王を背景にしてゐるからと見られる。又角書に雲絶間名殘月とあるのは、この狂言の切に、荻野澤之丞元服の名殘の挨拶等がある所から、澤之丞の扮した雲の絶間を持つて來た事いふ迄もない。更に今一つの當込みがあつたと思ふ。それは、作の內容にも關係する意味になるが、久夢日記等によると、當時、男達の雲の絶間なる者が吉原で殺された事件がある。これをきかしては居らぬだらうかと思ふ。

この作の素材をなす主なものは、いふ迄もなく鳴神である。次いでは四天王である。
第一番目は殆ど鳴神の說明由來に終止し、第二第三幕が鳴神の活躍場である。特に第二幕に作の中心興味たる龍神ケ窟の場を入れてゐる。怒氣を含んで祕法を行じてゐる怪僧と凄艶人を魅する妖婦と、この對立が生む雰圍氣と、更に、交互の變化が生む興味とは、正に成功したのである。が、筋としては決して珍らしいものではなかつた。能の一角仙人を其儘歌舞伎化したに過ぎない。だが其歌舞伎化に於て成功したのである。
「一角仙人」では仙人と龍神との爭ひの結果、龍神が敗けて、仙人の爲めに窟に閉込められるといふ筋になつてゐるので、桂の黛羅綾の衣の、世にも稀れな旋陀夫人と名乘る美人が都から來て、旅人と僞り仙人に酒を勸めた爲め、仙人は遂にその術の力が破られる事になる。龍神は勝利を叫ぶが、その龍神と夫人との間に

は直接的には何等の關係も見出されてない。この點に破綻なきを得たのが、作者兵庫の腕である。舞臺效果からいへば、能と歌舞伎の間に横たはる根本的な相違は認めなければならぬが、他に、雲の絶間を單に山路に迷ふ女とせずに、「今昔物語」以來の粂仙人傳説と綯交ぜた所に、一層濃艶な又愛慾的な雲の絶間が現れたのだと思ふ。この作の方が一角仙人よりも間近く、民衆に接しえたのも、ここが與つて力ありはしまいか。

次に四天王を考へる。一般に、才牛の起した藝を荒事と名づける。荒事の發生に就いては多くの人々の考へた通り、主としては當時流行の操りなる金平淨瑠璃に據る所と思はれ、更に才牛自身の出生や傾向も考へられるが、兎に角、極めて武張つた力み返つた藝である。心なら、形なら、剛壯濶達其物である。そこに江戸氣質の基づきを示さうとしたのが荒事である。所で、金平淨瑠璃にも勢の消長があつた通り、歌舞伎にも元祿當時は、あの人形の首を引拔いて語られた時代の如き金平劇からは、遙か開化したものである。作者が脚色上の苦心の第一はそこにあつたらうと思ふ。彼の劇の評判も所謂見功者の言以外は、矢張り常に荒事にあつた。才牛劇と荒事とは切つて離す可からざるものであつた。さりとて、荒事のみを以てして滿足する時代ではなくなつた。四天王にも筋を要求する。

賴光は此作で餘り働いてゐない。事件は賴光の總領賴近が反逆を抱いてゐる爲め、朝命により賴近の弟賴信が家來を差向ける事になる。所で、賴近の謀反の原因は何かといふと、父賴光が總領の自分を差置いて弟に家を繼がしたにある。この筋はお家騷動の形式に屬する譯で、作者の態度が讀まれるかと思ふ。苦心の存した所であらう。脚色の歷史からいへば、正に傳説から筋への展開である。當代の江戸歌舞伎の苦悶が見られる。賴信や四天王を生んだのは、金平にあるが、賴信は説明上の楔に過ぎず、四天王も顏を出すだけで、實

際の金平張りは公時と子四天王が見せる筈になつてこれも其儘に大した荒事は見せぬ。で寧ろ荒事の見せ場は、鳴神に任せてしまつた。鳴神が女に瞞されたと知つた後、天地を震駭さす荒場こそ、四天王になり代つたものと見られる。

これに戀の場を配する。小野の道風が居て直姫との戀の他に、平井保昌との間に衆道關係も成る。然しこれらも單に戀の輪郭に留り、殊に直姫は酒呑童子の化身と分り、飛去る時羅生門もどきに腕を切られるといふ樣になつてゐて、上方の劇に見る濡れ場の妙味は全く影を隱してゐる。

本作に入つてゐる型で後世に傳はつたものに卒塔婆引きがある。第三番目末に、竹若についた鳴神の靈が公時と卒塔婆を引合ふ場面である。爾來市川家の荒事として傳はつてゐる。

（卒塔引の型。金の揮より）

脚色の上で、鳴神は實は別雷の神であり、絶間は唐土養由の娘で、網に弓術を授けん爲めに現れたのだといふ事になつてゐる。或は、魔障とて天井から足が出るとか、これらは傳奇的興味を覗つたもので、幼稚な時代の殘骸である。尙幕切に、澤之丞元服の名殘りの意味を附けて座中一同大踊りがある。これは、上方と江戸を問はず、當時の作劇法なのである。必ず、踊場なり踊幕なりを添へるのである。

鳴神劇の祖は、今の處貞享元年の「門松四天王」と考へる。本作が勿論、これから出た事は考へられるが、直ちに雷傳記となつたとは思はれぬ。此作には網と公時の二人の他に似せの網公時が居て、これが、一つの山であつたらしい。雷傳記は後世に殘らなかつたが、門松四天王の方は、由來が添つてる所爲もあらうが、寶永七年才牛の七回忌と享保十一年の廿三回忌にもやつてゐる。

鳴神劇の系統に屬する狂言で、最も名を擧げたのは、寬保二年正月江戸上りの海老藏菊五郎によつて演ぜられた大阪角の芝居佐渡嶋長五郎座の「雷神不動北山櫻」である。毛拔や不動と共に、今日市川家十八番として殘つた型は、この作から派生したものである。二三年前、左團次が松蔦相手に演じた舞臺は猶諸彥の記憶に新たなるものがあらう。

直接鳴神の書替へと思はれるものに、女鳴神がある。鳴神を女でいかうとした作で、相當古い。元祿九年江戸中村座興行「子子子子子(ねこのこねこ)」で、雷傳記で雲の絶間をやつた澤之丞が、女方で鳴神をやつたのだつた。女方の一種の藝として、外題のみ變へつゝもその儘に、現在迄傳はつてゐる。

けいせい淺間嶽

中村七三郎作

繪入狂言本二册。元祿十一年、京都八文字屋八左衞門版。

上中下三番續。三幕七場。

元祿十一年一月廿二日初日、京都布袋屋座山下半左衞門座興行。

外題は、開幕の最初に、淺間の住持の口から言はれる通り開帳を當込んだのである。信州淺間の普賢菩薩を東山に於て二月十四日より開帳がある。これを目指したので、當時の脚色の一つの習慣が、ここにも見られる。近松の作中だけにも、開帳當込の作は相應に算へたてられるのである。

古くこの作は、嫁鏡・夕霧と共に、歌舞伎三大部といはれた當り狂言である。七三郎の京へ上つたのは前年の元祿十年で、その顏見世は「關東小六今樣姿」であつたが、これは、都座で水木辰之助歸阪に際し、その七化の人氣に、徹底的に壓倒されてしまつた。春興行の「不老門」は亦青蠅もたからぬと冷笑され、この爲めに翌春二の替り狂言に、一座肝膽を碎いて、出來上つたといふのが、この淺間嶽である。遂にその效あつて、百二十日間打續いての興行といふ、想像も及ばなかつた大評判を擧げたのである。何處に、斯んな當りをとつた原因が潜んでゐるか。それは、倘別に考へて見たい。下つて、文化二年五月、書肆八文字屋は、本狂言本複製を行ひ、序に古狂言追慕の意もあつてか、寶暦頃迄のこの狂言の評判を纏めて、卷末附錄として出版してる。挿畵に入れたから、御覽を乞ふ事にして、詳しい都度〳〵の批評はそれに讓つておく。

本作が、中村七三郎の作と傳へらるゝ一方、辭句や文意の結構上等から、恐らく實の作者は近松ではなからうかとの說もある。實際、古い近松の淨瑠璃の文句そつくりの部分が數箇處ある。が然し、わたしはそれあるが故に、寧ろ、七三郎作の傳記を信じていゝのではないかと考へてる。興行上手の半左衞門等は、當然

作者の帷幕に參じたであらうと思ふ。

彼の傳記の中で、丹前男としての襍評や記錄は割に多く見られるが、人としての彼、作者としての彼に就いて餘り正確な記錄は傳へられてをらぬ。作者としてより、寧ろ役者としての彼の爲めには、此處に研究すべき要もあるまいが、彼の追善集たる寶永五年版「殘る露」が傳へられてゐるから、必要と思はれる部分のみ左に拔書しておかう。

中村氏七三郎。姓は天津。行年四十七才にして野邊の霞となりぬ。其骸を本所報恩寺に山なして、日映と法名し、墓石の數に入りたり。爰に小長か一生をみるに、芽の顯たる事しるし。了角の比より遊樂の人に隨ひ、貴人のおそば近く召れたれば、やさしさ事もみえたり。長なるに至て、歌舞妓の道に入り、しかも世に高し。名ニ一藝ノ者無レ不レ庸。元祿の初年都より迎へ一とせにて下りぬ。などりに非盤嶋の狂言をなし、感應の名を殘せり。さらば、三ケの津の丹前に長したるなれば、麟鳳龜龍に准して、彼を此道の靈といはん。一樂一幅の朝は清然の皮枕に花獨り暮れ、淨居の納涼に舞袂の勞を安し、居待の宵月は萩の本に心をまかせ、北窓の雪に水仙をため、かこうたる爐中に池田をたえさずしてたのしむ。誠に年のおしまるゝは名の殘る所也。常に金字の法華經を書寫し、江武の佛閣に奉納す。(原文に句讀點なし。假名遣を訂正した外、原文の儘。)

少し長過ぎたが、從來の傳記を、補翼する部分もあると信ずるまゝに、記しておく。

再び本作に戻つて、素材や脚色やに就いて一通り考へて見なければならぬ。

一體當時の脚色の樣式は、前の二三の作例によつても知られる通り、大體の型がある。お家騷動が第一で

ある。濡れ場が第二である。大踊が第三である。これらを型といふより、否、條件と見た方がいゝかも知れない。脚色は、この條件に束縛される要はないが、忘れてはならないのである。淺間嶽は、素材としては諏訪家のお家騷動といふに留まるが、脚色を見ると、成程と思はすものがある。當時の上方狂言の脚色が、理詰に重なつてゐるのである。諏訪家の騷動としては、例の通り後室とその連子の今の若殿利根五郎とが、世繼の音羽の前を邪魔にするといふ起りがあつて、家老和田右衞門が音羽の前を立てゝ家國を治めるに終るのである。所で、これだけの事件は、上卷と下卷の一部とで完全に片付いてゐるので、中卷と他の部分は、諏訪のお家騷動から派生した、挿話と見做される。

利根五郎が附廻した太夫三浦は、實は家老和田右衞門と許合つた仲だつた爲めに、中卷ではこの二人は夫婦になつてゐる。而して音羽の前の言號なる小笹巴之丞の爲めに、夫婦が艱難するので、三浦も爲めに二度の勤めに出る迄になる。更

に別に、巴之丞は傾城奥州と離れ難い仲になつてゐる。斯うして二組の濡れ場を豫想さす。而も、當時上方を風靡した藤十郎の傾城買振りは、巴之丞役の七三郎が專ら與るので、和田右衛門の方は、武士氣質を行かうとする。そこに、同じ様な型に、差別的な仕活かし方が働く事になる。

更に細かい趣向を考へるに、かなり算へられる。最も有名だつたのは、上巻の終近く、奥州の靈が火鉢から現れる箇處である。凄味に加へて驚異がある。驚異には又、駕籠舁の二人が和田右衛門と巴之丞であつた件にも讀まれる。一番の愁嘆物は、和田右衛門の娘おさんが惡漢兵介の爲めに殺される場である。而も殺されたおさんが、普賢菩薩の功力で助つてゐた等といふ事になる。理詰の點で、關西人を悦ばせたと思はれるのは、廓の場で巴之丞が三浦にしかけた戀である。大騒動迄持上つた結果、實は恩義に感ずる所あつて、打つた芝居だつたといふ事になる。

その他瓦細な趣向を考へると、種々な點に氣がつくであらう。が、要するに、當時の歌舞伎の持つあらゆる趣向を網羅した作になる。總べての場面に遭遇して、すべての情緒を味はひ得る。これが此作の獨占する一つの强味であると思ふ。

この作の主人公たる巴之丞の態度に就いて見ると、おさんを附廻す時の彼と、碁盤縞で奧州相手の口說をする彼と、この二場を並べて見ると、殆ど異なる人物かと見られる。連鎖に破綻を見せずにしまつたが、これらは確に作者の苦心の跡と思ふ。藤十郎の濡れ男とは、多分の隔りが考へられる。七三郎一人の胸から出た脚色とすれば、彼の苦心や察するに餘りある。

この作が後世へ傳はつた次第は、附錄挿畫の樣に中期寶暦前後迄が盛で、其後は、稀れに上方に上演されるのみであつた。然し、他の筋と綯交ぜて使はれた事は隨分多い。これは上方劇の方に屢〻あつた。上方の春狂言の傾城物に奧州(又は逢州)がしきりと出て來るやうになつたのも、その傾向を物語る。見給へ。本集に入れた「桑名屋德藏入舟物語」に出てくる巴之丞は女に嫌はれる人物にされてゐる。現存してゐるのは、上方狂言の「淺間獄面影草紙」である。但し、この方は元祿の淺間獄からは、間接に傳はつたといふべきである。それは、例の柳亭種彥の合卷に、文化五年「淺間獄面影草紙」(後篇は逢州執着物語)がある。これに據つた作である。而して、この面影草紙より「時鳥殺し」が派生して來る。猷阿彌作「曾我綉俠御所染」は、その代表的當り作である。

種彥は面影草紙の卷頭に於いて、それが全く古來有名な淺間ものゝ飜案である由を述べ、更に主として外記淨瑠璃の詞章によつてまづ案を立て、富本常磐津に據つて後篇を綯んだと自白してゐる。

その様に、普通淺間ものと稱するのは、傾城淺間嶽その物ならで、寧ろ所作の淺間嶽を指すので、所作幕としての傳統を成した。この傳統は上方より江戸に流れてゐるので、元祿の昔から、現に綿々として絶えぬのである。

原作の趣向の中に、奥州の靈が、火鉢に立昇る煙の中に、すつくと現れる場がある。反魂香の傳説から來てる事、いふ迄もないが、これは非常な評判だつた。所作としての興味や、唄の面白味も勿論人を惹附けたに違ひないが、せり出して而も煙の中から出るといふ珍趣向その物が、人々の好奇心をそゝつた點も十分あらう。そこの歌詞は、當年流行の小唄を集錄した落葉集の中にも採られて、座敷淨瑠璃としてその儘後年へ傳へられた程で、此處の場が、何かの折に取入れられては、淺間淨瑠璃を成して行つたのである。種彥が據つたといふ外記淨瑠璃は、元祿十三年、江戸森田座興行の「景政雷問答」の切に、奥州が煙の中から出るので、この時語られたものである。その懺悔の段のみを「逢州執着物語」の卷頭に傳へてゐる。爾來、一中に、河東に、富本に常磐津に、淸元に、十數回の所作幕が試みられてゐる。

享保十九年春、江戸中村座「十八公今様曾我」の切に千中の語つた「夕霞淺間嵩」は、宗十郎と菊之丞とで七月迄大入を續けた程の當り狂言。後の所謂淺間ものは、尠からずこの作の影響をうけてゐる。淺間淨瑠璃の詞章方面では、一の時代を劃した作といひうる。

寶曆七年春、江戸中村座「日本塘鷄音曾我」の時、常磐津の「妹脊塚松櫻」があつた。俗に「二人淺間」とも「八つ橋」とも稱へて、淸玄との絢交である。踊りの名手、富十郎と團十郎とに當てゝ書いたので、筋も面白し、場面は眞に華やかである。この踊りから後世へ影響してゐる部分も多い。本集に入れた惹賣（隅田川續

俤」の如き一例である。

安永八年三月、江戸市村座「蝶千鳥若榮曾我」の時、菊之丞七回忌追善の意味を附けて、三代目菊之丞に先代の當り作の奧州と石橋の所作をやらせた。それで外題は「其俤淺間嶽」と附けた。太夫は富本豐前太夫であつた。普通淺間といふ時、大抵富本のこれを指す。それ程に名を擧げた。然し詞章は明和六年中村座に書卸した容觀淺間嶽をその儘用ゐたのでこの成功は一に舞臺にあると言はねばならない。以來、菊之丞と淺間は附物になつた。

中村七三郎の「碁盤縞」

寛政四年三月、中村座「隅田川戯場緣日」の時、「けいせい淺間嶽」を一中節で出してゐる。これは陽氣な所作幕で、他の淺間ものとは類を異にしてゐる。

以上の如きが、注目すべき所謂淺間ものなのである。奥州亡靈の趣向を、如何に江戸人が好んでゐたかゞ知れるであらう。

淺間が、元來江戸者の七三郎が上京早々の作で、これが上方で當つたのであり、江戸に來てからは、京土產として評判をとり、爾來上方にも江戸にも名聲を恣にし通したので、こんな事は稀れな事である。作の性質を考へ、その配合を想ふ時、眞に當代の名作なるが故の價値でなければならぬ。但し、吾々は、上方と江戸といふ二つの土地を考へる時、その土地のもつ好尙の、自ら二つのものであるのを注目せざるをえなくなる。見給へ。原作は正しく二分された。筋と所作とへ。而して筋は上方に、所作は江戸に流れたのではなかつたか。

男伊達初買曾我　藤本斗文作

寶曆三年春、江戸中村座興行。

六幕七場。

序に此處で一寸斷つて置きたい事がある。前の雷傳記等は繪入狂言本によつたもので、拵薗等によつて知られた通りの一種の讀みものであつたが、初買曾我以後のは、さういふ讀者を豫想したものでなくして、全く上演用といふ點をのみ目論んだ書き物で、それが往々後世へ殘つたものなのである。芝居者のいふ正本

といふのは、この事である。臺本、臺帳ともいふ。根本といふ語も遣つてゐた。正本とは、書拔きと稱する抄本樣式のものが別にある處から、之に對していふ全本の意味。臺本・臺帳・根本は字義通りで同じ意味。但し、語としては同じ意味になるが、根本といつた場合は、繪入根本を指す事になつてる。江戸中期以後の言慣はしである。

善きも粗しきも、所謂珍本呼ばゝりをされてるが、狂言本は古いが故の珍、臺帳は善い故の珍といふ所であらう。狂言本の中には、來歷の名だゝるものにも、くだらぬ品が間々ある。それらを矢張り善本同樣に騷ぐのである。臺帳の方は、年代の長い故もあるが、狂言本程、盲滅法に珍本扱されて來ないのが、まだしも自己に滿足すべきである。

が、臺帳も古い邊はやたらにあるものでなく、震災前迄は寶永年間のものがあつたが、もう今は、寶永當年の臺帳を見るのは困難である。現存するものでは享保が過ぎて、元文年間のものがあるが、これ等が最も古いと思ふ。初買曾我の寶暦年代の作等も、勿論さうあるものでなく、斗文の作となると、更に少く、初買曾我の臺帳の如きは、何れから見ても珍しいものたる事言ふ迄もないのである。

扨、江戸中古の作者として、元祿期の後を繼いだのに、津打治兵衞がゐた。斗文は作者道としては、治兵衞の門から出たといひうる。が、彼も當年の多くの作者の樣に、元は役者出であるらしい。三代目長十郎の門弟として澤村長作と名乘つてゐたが、享保末頃、中村座に作者として名を出し、澤村斗文と改めた。後更に藤本斗文と改めて、かの治兵衞の名が劇界に去る時分から、彼の名は漸く認められ、忽ち名望を獲た。この初買曾我は、斗文の傑作中の一である。

江戸狂言の筋を荒唐無稽と笑つたのは、上方人であつた。綯交ぜといつて、ある筋へ他の筋を持つて來て、これ上げる形式である。然し、これは土地柄の相違で、上方人が筋を見ていかうとする主知的な作用は、江戸人の無關心な所である。江戸人には寧ろ主情的な方面が濃い。感じが面白く愉快に書けてゐれば、十分滿足するのである。この作は、春狂言の例として、曾我と銘打つたが、扨、曾我らしい所は始の幕位なものである。俠客梅の由兵衞を書いたのが主で、それと曾我を綯交ぜた意味で、外題も「男伊達初買曾我」と名づけた。初買は正月初の傾城買の意味。傾城買としたのは、筋に就いて納得されると思ふ。それから、江戸の狂言では、江戸だけとはいへぬが、元祿後になつてから、外題の語の配合に苦心し出したものである。非常に凝り初めたのである。ここでも男伊達初買と來て、初買曾我と轉じたのに、初芝居の前先を祝ふ意味をきかせてゐて面白い。尙、曾我の文字を、上に附ける事、中に入れる事、又は曾我と現はさずに知らす書き方等と、種々凝り方もあるが、兎に角、下に何々曾我と置くのが普通なのである。

當代の江戸の立者は十町大谷廣治である。この作は十町の爲めに、作者が筆を執つたもので、春狂言でゐて非常な當りをとつた。廣治の由兵衞も仲々の好評で、この狂言は六月十日迄半歲打續けたといふ。曾我狂言の流行につれて、春の曾我狂言が五月迄續くと、五月廿八日に曾我祭といふ事をやつたが、この年の興行がすばらしかつたので、この時から、舞臺で曾我祭を仕初めたと傳へてゐる。兩國橋詰髮結床の場と、由兵衞住居の愁歎場とは最も有名だつた。焉馬の年代記に、橋詰の場の圖が入れてあるのも尤と思ふが、平氣で舞臺面を間違へて書かせた等は愛敬である。本文の挿畫にして置いたから、本文と較べて讀めば判る。

梅の由兵衞とは、過眼錄や新著聞集その他傳奇作書の類に傳へてる梅澁屋吉兵衞といふ、實は惡黨なのであ

る。その銀を獲るに巧妙だつたといふ點、兩替屋の小者長吉を切殺したといふ點、是等は直接この作の素材として取入れられてゐる。殺し場を隅田堤に替へたのは、梅若劇の影響等も考へられるが、要するに、江戸狂言だからである。所が大體に於て、操りにも歌舞伎にも由兵衛は然く惡人としては、脚色されてゐない。たゞ當年の流行唄は、比較的眞を傳へたものらしく、筋に過ぎぬ文句ではあるが、これには惡人になつてゐる。歌詞は元祿の落葉集に見られ、歌舞伎には享保十三年冬、大阪角の芝居に、「梅の由兵衛命代金」が見えるが、筋は傳はつてない。古く型を殘したの

梅の由兵衛

歌舞伎

は、江戸歌舞伎だつた。享保廿一年（五月改元）江戸中村座の春狂言「遊君鎧曾我」の二番目で、宗十郎の由兵衞である。江戸の巷説として、延寶年中大門通りに梅の與四兵衞なる男達が居つた由を、江戸眞砂六十帖に傳へてゐる。わたしは、梅澁吉兵衞から梅の由兵衞への轉化に、この説の存在をも認めたく思ふ。宗十郎の見せた型に、惡人梅澁吉兵衞は到底見出されないのである。この時の由兵衞は、實に色立役の見えてあつた。白と紺の繻子の片身替りに鷺と烏の縫を見せ、錣頭巾へ錠を下し、立あつて、「今を始めの旅衣、よいや

實錄

まかしよ」と、尻をからげ頭巾をはねると、前下りの奴といふ風俗。この思附を當時の江戸は、やんやと讃めた。そこで澤村家の型としたと、「澤村家賀見」等に誌してゐる。江戸歌舞伎に殘つた型はこの時に出發する。その後二年經つてから、院本で有名な「茜染野中隱井」が書かれてる。尤も、これより前に、「梅屋澁浮名色揚」があつて、茜染はこの書替へに過ぎないが、上方歌舞伎の由兵衛は、主にこの茜染の院本系統を後世迄傳へるのである。

宗十郎が由兵衛で大名譽をとつたのは、斗文がまだ治兵衛の下に就いてゐた頃の事である。これは、彼の爲めには强い刺激であつたらう。その他、茜染の如き院本によつて、案を建てたのが斗文である。まづ梅堀といひ源兵衛堀といひ、江戸の地名を以て親みを求めた。

「澤村家賀見」

然し、饱迄曾我狂言の二番目といふ態面を、持堪へて行かねばならない。その爲に、茜染で手向山の色紙詮議といふ程度の、簡單なものでは留まらなくなつてる。由兵衞が鬼王、源兵衞が八幡の外、草摺引を入れて、五郎朝比奈を出し、梶原富樫も使ふ。傾城虎も出す。所が、曾我の上へ、義經傳說が加つて來る。由兵衞女房小梅が遊女奧州として勤めをするが、身元は佐藤繼信の妹忍の前であり、源兵衞の言交はしてるおまんも、實は繼信の乳母藤太の妹である。虎も敎經の娘であつたり、奧州の客衆の七は旣の喜三太だといふ風で、事件の中心は、義經の遺子經若丸が捕はれの祐經の館から逃出たにある。曾我傳說を入れ、義經傳說を入れた爲めに、餘り複雜化される憂のある樣だつたが、物が物だけに、却つて觀衆の親しみを買つたらしい。

男達由兵衞の脚色としては、源兵衞を持出して二人の男達を對立させた所に、作者の狙ひがあると思ふ。この對立は、廣治助五郎の對立である。うまくも狙つたものだと思ふ。幕切きから、四ツ目迄、この對立が興味の中心をなしてゐる。而して對立によつて、比較されつゝ由兵衞の輪郭は、鮮かに浮出て來る。由兵衞あらしめん爲めの源兵衞、さうも見られる部分が多い。

斗文は寬延二年の助六の作者だつた、思ふに、この由兵衞にも、かの助六が流れてゐるであらう。意休を若くした所に源兵衞の俤は浮ぶ。三ツ目、六ツ目の趣向には確に、助六劇の及んでゐると言ふに躊躇しまい。

場の趣向としての、舞臺の利用法は注意する價値がある。序の草摺引の科の所や、特に、四ツ目等の仲の町では、兩花道の中を步みを十分に利用してゐる。仲の町の場の如きは、花道を使つてこそ觀客の興味は、幾度か危期を味ふ樣な瀨戶際迄上り詰める。最近でこそ、逆輸入の見解で、しきりと花道の議論が初まつた

が、實地にその效果を味はつた江戸人は餘程昔から用ゐたのである。尚、本作には、序幕に、せり上げ道具を應用してゐる。本作から一年程經つて後に、大阪で並木正三作「けいせい天羽衣」の時、三間道具のせり上げが試みられて、有名になつてゐるが、江戸にも古く行はれた道具な事が知れるであらう。歌舞伎の舞臺構造、舞臺作用の研究には、古い資料である點に注意されたい。

この狂言は再演された事なく過ぎてしまつた。一つには曾我である爲めだ。曾我は春狂言に極まつてゐる。而も春狂言は新作なのである。曾我狂言の要處〱が何處かに入つて作られたものであるといふ點には、例年同じものを繰返して行くだけの話である。然し、そこに傳統藝術の價値と研究が存在する。その價値ある事は、年々の曾我を江戸人が、如何に、心から樂ん

三上り

[illegible]

でゐたかに知れるであらう。が、それだけに又、曾我なるが故に、春狂言の臺帳や詳しい筋は、再演もされず、後世には稀にしか傳はらぬといふ結果を生じてる。この作が面白いに拘らず、評判のみに終つた第一の理由はそれである。第二に、役者の方面からも考へられる。紫頭巾以來、由兵衛は澤村家の藝として來た。初買曾我の時は、十町に特に或る事情が在つたのかとも想像されるが、要するに、他家の役者の指を染めるべきでない。せめて書替へでなければならなくなる。初買曾我を書替へと見ると宜しからう。然し、他人のやつた書替へを澤村家でやる事は自尊心が許さぬであらう。殊には唯の書替へとは大分變つたものである。

たゞ、寛政十三年四月河原崎座の「的當哉初寅曾我」は由兵衛を女にしたもので、この書替へといふべきで

あつた。多くは、澤村家で、特に古い頃は主に宗十郎の狂言であつた。或はその追善興行としてゞあつた。尤も、一變化を來してゐる。それは寛政八年春、桐座の「曾我大福帳」の二番目「隅田春妓女容性」である。宗十郎が上方から連れ下つた並木五瓶の作で大當りであつた。小さん金五郎を書込んだが、手向山の色紙から事件が起きてゐて、脚色は全く茜染の系統といふべきで、五瓶が大阪から持下つたとも見られる譯になる。但し、從來の宗十郎の型も入れ、初買曾我も入れてゐるので、この意味では五瓶が一の集成をやつたとも見られる。即ち現に傳つてゐるのは、茜染と隅田春との二流の山兵衛だと言ひうるのである。

初買曾我が春の曾我としての場面は、一番目である。勿論、對面の趣向だつた。その臺帳は傳はつて居らぬが、十二段淨瑠璃の前後の部分は、せりふづくし（後の鸚鵡石の類）によつて知られる。補ふ意味で、序に寫しておく。本文

繪入根本隅田

通り、役者名にして出しておく。臺詞中に經若云々が出るのは、勿論二番目へ連絡さす爲めである。
富樫をとがせとあるは當時の江戸辯と見ればよい。

蝶衢出遣ひ十二段
かけ合せりふ

大磯の虎　中村富十郎
化粧坂の少將　佐野川市松

富十郎「お尋ねなうてもこの様な言立の口上に巾上はの蝶千鳥、庵の中に木瓜の紋日物日はいふがくだ。常に身上り手管にて、人目を忍び、大磯の虎が名に負ふ虎藥師、

市松「その虎藥師の申し子淨瑠璃御前に忍びの段、一夜の枕を交はしまの、水ももらさぬ源の同じ流を汲み給ふ、九郎判官義經様を讒言して、

春妓女容性

富十郎「これ／＼。これは義經樣の牛若君と夕月の鞍馬の山のうづ櫻、その稚兒櫻のお姿を、寫してお目にかけまくも、

市　松「かしこき君を無實に沈めて、

富十郎「これ／＼。かしこき君の御前ぢやぞ。ナア御前へ召されて嬉しくも、出羽が出遣ひ辰松が手妻を學ぶ人形に、

市　松「昔を今に三河の國、矢矧も間と笛竹の一夜契りて別れ路の、

富十郎「東（あづま）の空を戀慕ひ、

市　松「薩摩と申せし琵琶法師、節をつけたる物語、四季に分けたる十二段、

富十郎「淨瑠璃御前の書給ふ、その名によつて淨瑠璃と、

市　松「名附けて語る薩摩外記、

富十郎「土佐半太夫萬太夫と

市　松「流儀を別けて、とり／＼に、世に弄び四季折々、

富十郎「花見月見やとり分けて、廓に流行る色節の色をも香をもしらま弓、

市　松「矢筈は名に負ふ梶原、

富十郎「これ。矢筈の紋の名にし負ふ箙御前は工藤左衞門祐經さんのお妹御、

市　松「虎少將は曾我ぎくの、

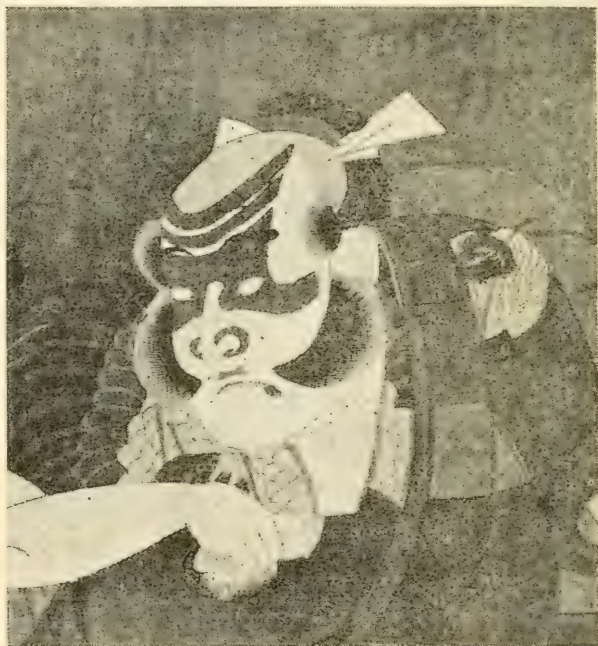
富十郎「由縁（ゆかり）の色の、

市　松「花待ち得たる、
富十郎「對面と、
二　人「ホヽ、敬つて申す。

虫盡しのせりふ

小林の朝比奈

中　村　傳　九　郎

傳聞く。唐土のちんぷんかんぷんの詩に曰く。それ、邪魔とは邪は邪法。魔は魔法。邪法魔法を一口に邪魔とこぼして邪魔のじやく。じやまだの大蛇。じやまの神。それ、邪魔になるものは、釋迦に提婆、素袷にぴん、太子に守屋、間夫に遣手、鯨に鯱、梶原に朝比奈、ちつとお邪魔になりや正月嚙み初め、惠方に向つて、阿呆めら、片つ端から横つ頰、張り初め、踏み初め、叩き初め、傳

九郎ぞめの玉程な瘤を摩つて、喜ぶと祝ひ直して苦笑ひ。笑ふ門には福茶に山椒、ひり〳〵とうづく所へ唾をつけ、痛まぬ面で澁面を作りし罪の報いにて、辛き憂目を蓑虫の、身の程知らぬ虫の蚰蜒八手鋏虫、蜥蜴もそ蜘蛛の尺蠖、毛虫芋虫寄りたかつて、未だ散りほけな玉虫を、どうぞしてやる日算を、天知る地知る、小林が知ると堪へぬ持病の虫、たゞ一飛に飛虫の、出合頭の歳玉に、握拳の蝶蝶殼苦虫面の眉間から、鼻面かけて喰はせたら、鼻血がたら〳〵垂るゝ虫、松虫鈴虫轡虫、蜘蛛手かく繩十文字に、はらり〳〵とはり倒し、脊中の骨を踏折られ、脊虫になつて、めそ〳〵と泣虫面が見る様な。腰骨の抜けない中、早く無くなれ。なくならぬと、煮え湯をかけて往生させるが、虫の子めら、返答は何とだやい。

かけ合のせりふ

とがせの左衛門　坂田半五郎
小林の朝比奈　中村傳九郎
梶原源太　中嶋三甫右衛門

傳九郎「もう追付舞樂の刻限だ。はつつけめ。萬歳の稽古をひろぎアがらないか。
三甫右衛門「サア、成程。萬歳の稽古をすべいが、マア、その經若を渡せいやい。
傳九郎「經若とは。
三甫右衛門「その經若を。
傳九郎「經若に御萬歳とは、氣味んの悪きしやつ面は、愛敬微塵も無かりける。新玉の歳立返る朝には、
三甫右衛門「ちゞいも若やぎ、ばゞアも榮えて、御用の德利を手に持つて、注が盃を口にくはへて、五郎八

茶碗で引かけるは、
傳九郎「眞に芽出度うさむらひける。
三甫右衛門「イヤ、こいつは、何故蹴たやい。
傳九郎「ハテ、眞にめでたう、侍を蹴るが萬歳の肝文だわやい。
三甫右衛門「ハ、ア。
傳九郎「ハア。
三甫右衛門「ハ、ア。
傳九郎「ハア。斯つかる芽出度きたわけの君の、音頭の作りの棟上は、
半五郎「矢筈の紋に扇をくつ付け、
傳九郎「まんが手斧。
半五郎「はんにやが鉋。
傳九郎「はらんていがのみや鋸。五郎三枕箱ここにこん鑿、小手斧。
三甫右衛門「卷いたりや細工の槌。飛驒の工が鉋を持つて、四角に打ちや削り、八角に打ちや削り、曲を當て、墨を打つて、しやましやんとおつ立てけるは、
傳九郎「眞に芽出度うさむらひける。
三甫右衛門「イヤ、こつつは蹴飛ばしたな。
傳九郎「蹴轉ばし、

三甫右衛門「蹴轉ばし、
傳　九　郎「蹴轉ばして、
三甫右衛門「おつ轉ばして、
傳　九　郎「だき付きやつて、
三甫右衛門「ひつ付きやつて、
傳　九　郎「あそこの隅でむつくり、
三甫右衛門「ここの隅でもむつくり、
傳　九　郎「むく、
三甫右衛門「むく、
傳　九　郎「むく〱するのが、殿樣も御座れだが、
三甫右衛門「奥様もござれだが、
傳　九　郎「才藏なんぞもござれだが、
三甫右衛門「太夫なんどもござれだ。
傳　九　郎「まつちやらこ、
三甫右衛門「まつちやらこ、
傳　九　郎「まつちやら、
三甫右衛門「こつちやら、

二　人「まつちやら〱〱、こりや〱〱。

傳九郎「ハ、、

三甫右衛門「ハ、、

二　人「眞にめでたうさむらひける。

桑名屋徳藏入舟物語　並木正三作

明和七年十二月廿七日初日。大阪角の芝居、小川吉太郎座興行。

五幕十二場。

江戸に斗文の居たと殆ど同時に、上方には並木正三がゐた。大谷十町や傳九郎が出たと同様に、歌右衛門爲十郎が現れた。よき作者とよき役者とが、提携できた時こそ、常に十分恵まれたる作品は生れるのである。かの初買曾我は確にさういへるし、同じ意味で桑名屋徳藏入舟物語もさういへる。本作が當代の當り狂言の中でも、特に輝きを見せた主な理由はそこに在らうと信ずる。

歌右衛門は、旅役者から本舞臺に乘出した者だけに、藝毎に、眞に腕の冴えを見せてゐた。その中に、作として考へると、矢張り、正三の作が最も評判を擧げてゐる。正三の名作も隨分多い。その中で、廿歳臺の作で寶暦三年の「けいせい天羽衣」と後年の本作とは雙璧をなすものと見られる。

歌右衛門との交遊の動機か奈邊にあるかは、此處に一々詳しくする暇も無いが、並木正三一代噺等の記事によつても想像さるる如く、互に相扶けた意味は餘程あつたらしい。丁度、歌右衛門も漸く中央劇壇に認めら

れようとした頃で、わが爲めの作者を索めて居たであらうし、正三も、漸く親の膝から離れて一本立ちの決心を固め、師の宗輔について、操りで一生を了へようか何うかと迷つてゐたらしい頃である。而も、二人の握手に都合よい事には、その傾向が類してゐた點である。歌右衛門の藝の本領は、形式からいへば實惡であり、演出からいへば寫實である。「その人になりたる心持にて」やらなくてはならぬとか、「心の中、腑の下より誠しやかに仕打」をしなければならぬとか、いつてをる。彼のこの態度の由來を如實に知る事は不可能だが、想ふに彼の修業時代の賜であるのだらう。而して當代の歌舞伎は、操り劇全盛時代の跡をうけて、その洗禮を享けてゐる。劇藝術の上からでなく、一つの作として觀察した當時で見れば、ここから影響をうけた歌舞伎が抽象的より寫實的へ向くのは、當然ではあるまいか。わたしは歌右衛門の藝の由來する所を斯う一概に考へる。恰もよし、正三は宗輔配下の産んだ秀才である。そこに、前いつたやうな要求が互にあつたとすれば、許合ふ程な親しい關係も出て來ようではあるまいか。正三が最後に迫つて訪ねたのは、歌右衛門であつた。臨終に馳附けた人の中に、歌右衛門の居たのは、勿論である。これらの事を、單に仕事の上の關係と

第一中村歌右衛門

芝翫節用百戯通

のみは見たくないのである。

正三の傳のある部分を少し考へて見る。これは、本作の理解の上にも役立つ事だからである。

彼の父は、元、雲州に仕官したのだが、辭して大阪堀江に住まふ頃、彼を產んだ。所が、女房の妹に芝居茶屋を營んでゐた和泉屋といふのがある。ここに聟入し、ここで成長したのが幼い正三であつた。而も、親正兵衞は出羽芝居の世話役をしてゐた爲め極く幼少から芝居の空氣は吸つてゐたのである。水船の操仕掛を十四五歲の時やつてのけたと傳へてゐる。爾來若くして俚巷話說を歌舞伎に脚色をしては評判を擧げてゐた。寶暦元年並木宗輔に入門したが、二年には又歌舞伎に現はれ、爾來多くは歌舞伎作者として働いてゐた。廿四歲の作の「幼稚子敵討」の如きは、大評判をえた傑作である。歿したのは、安永二年の四十四歲であつたが、

並木正三像「役者百人一首」

四十一歳の折の作が、この「桑名屋德藏入舟物語」である。

彼の作の殆ど大部はお家騷動式である。それも、從來のお家騷動よりは、規模の大きいものが大抵出て來る。でなくとも、要本人物は、裏の裏を行くといふやうな、惡人なら無論實惡でなければならぬ類である。彼が宗輔に仕込まれた影も見え、歌右衛門の「日の出　實惡」等と呼ばれた謂はれも分る。

德藏といふ人物は惡人ではない。寧ろ愛すべき點もあるが、然し一條繩でいく人物では決してない。德藏に就いて記したものには、雨窓閑話が詳しい。これによると、

「桑名屋德藏といふ者、名ある船乘の名人にて、所々難海共を乘りし事あり。……或時、德藏が何方にかありけん、唯一人、海上を乘行きしに、俄に風變り逆波立ちて、黑雲覆ひかゝり、船を宇宙に卷上ぐるやうにて……向うへ脊の高さ一丈許りの大入道、兩眼は鏡へ朱をさしたるが如き妖怪出でゝ、德藏に對ひて、わが姿や怖ろしかるらんといひければ、世を渡る外に分けて恐ろしき事なしと答へければ、かの大入道忽ち消失せ、波風も靜まりければ、德藏はからき命を助かりけるとぞ。……

或時、德藏北海乘りける時、風烈しく方角を分たず吹付けしに、船中……破船なんどせんとする時は、髻を離ち、帆柱を切る事と申すなれば、いざや其通にせんといふ。德藏曰く、我は其事嫌也。船主と生まれし上は、唯其職分を大切にして、他に心の動く事更に無し。……命は天命也。風は天變也、人力に及び難し……。」

その他一鳳も傳奇作書に同じ樣な事を傳へて居て、相當古く、人口に膾炙してゐたものであるらしい。

とにかくに、右の如く傳へ記された船頭德藏は、太つ腹な、剛氣さを持合はしてゐる。又惡人でない。職

分を守る事にかけては人後に落ちない。而してどことなく深さ大きさが認められる。斯ういふ處から、德藏の輪郭は追々はつきり浮かんで來る。その人物と、彼が航海中、荒れに遭つて、妖怪が現れて問答したといふ事、それらの事件は直接脚色の素材として取入れてある。

この德藏と、讃州丸龜のお家騷動といふものと、これらによつて構想は成立つのである。

このお家狂言も、例によつて、かなり手廣く、將軍家に關係した事件になつてゐて、相模五郎は足利家倒壞を目論む曲者である。單なる惡人といふより以上な、深味悽味が添ふのでなければならぬ。歌右衛門の當り役であつたのは當然と思はれる。惡人が根深い惡人だけに 事件は裏の裏を樣々な形で進む。德藏の居る所に又德藏が來て、似せかと思ふと、前のが似せ者だつたり、勅使が又、似せと似せとのたくみだつたり。これらの脚色法には確に操り臭が強い。無理や嫌味は無いでもないが、操りを見慣れた當時の民衆の眼からは何でもない事だつたらうし、寧ろ、眼先の巧妙な變化を逐ふ興味は、十分味はつた事と思ふ。

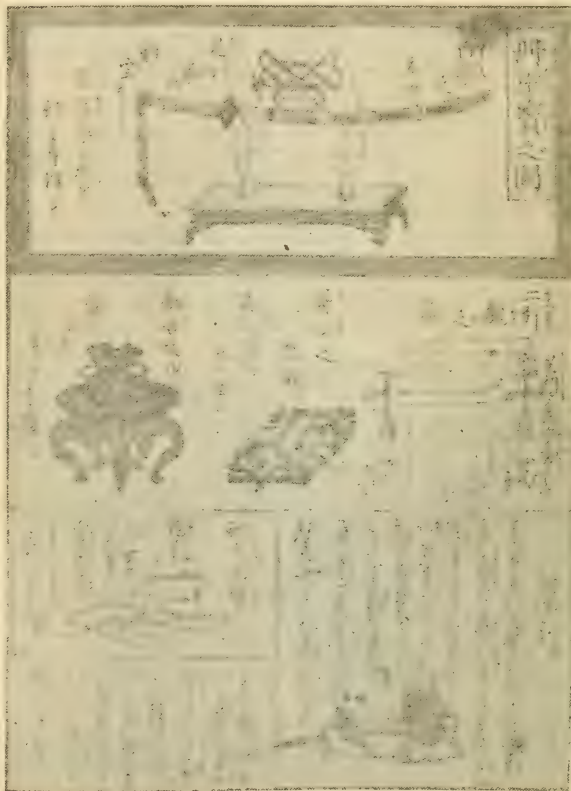
一番の見せ場は、遠州灘の場であつたらう。緣次郎が深川の揚屋で傾城達に取圍まれて盃を交してゐる。と思つたのは、家老等の計らひで、實は遠州灘を走つてゐる船中で、傾城と思つたのも許嫁の姫だつたといふ變り樣である。此場が返つて船の續になる。ここで、德藏が沈めた遊女檜垣の幽靈が出る。他の船頭が怖氣付いて打伏してゐる間、德藏は幽靈と問答する。幽靈は德藏が忠義を誓つたのに得心して消える。かの大入道海坊主を遊女に書替へたのである。幽靈が遊女であるといふ事、而も、怖はがらせの幽靈ではないといふ事、想ふ男に附添つて守らうといふ幽靈である事。これらは成程、幽靈の描寫としては面白い新し味を持つ所である。作者の才が見える。

四つ目で、徳藏と双子の相模五郎が、徳藏と名來つて留守の女房を怪します件があるが、五つ目では反對に、徳藏が相模五郎となつて、淡路館へ入込む筋に書かれてゐる。この四つ目と五つ目の書き分けに、作者の腹は一つに極つてゐるが、破綻を出さないのは、凡筆でない所と思ふ。四つ目の徳藏は、恰も權謀の將と見られ、船頭徳藏は隱れたかのやうにも見える。が、五つ目の中頃から、その持前の愛すべき性質が露はれる。而して、再び、船頭徳藏の腕を以て波瀾曲折を切開くのである。作者が、操り出である爲めの作劇の技巧も見られるが、一貫した徳藏の性格には、單なる目先本位以上の興味を認めうると思ふ。

然し、一幕〳〵、一場〳〵の結構の上には、確かに淨瑠璃の影響が考へられる。徳藏が御目見榮で、緋を附けられて困る所は、「五斗兵衛」を取入れてゐる。大詰の大領館には「菊畑」が入つてゐる。等々といふ風に、細かい技巧的部分には、種々算へ立てられる類が多い。たゞ、目先が目先に終らなかつた所に、當代の作者としての彼の意義があつたと思ふ。當時の操り芝居衰因の一面は、合作淨瑠璃が綜合美に盲目になつて徒らに超躍したにあると思ふ。その缺陷に染まなかつた彼は、流石に一流をなすだけあると思ふ。

元祿期を過ぎた上方の歌舞伎界は、操り芝居の興隆ありとしても、先づ脚本に於いて行詰まりを生じて來て居たのは事實である。その傾向から救つた恩人は並木正三であるのだ。彼は宗輔門から出たものゝ、宗輔以外の天地を認め、丁度それは前に述べた歌右衛門と一致すべき運命を豫期したものゝやうにも思へるが、この新天地を歌舞伎狂言に書上げたのである。同時に、操り芝居の觀衆を吸收するにも效があつた。元祿後、操り狂言を歌舞伎狂言に直譯して來た趨勢に對して、拗くも、歌舞伎化の見られる樣になつて來たのである。折々は淨瑠璃が歌舞伎を書直す現象さへも見えて來た。この大勢の緒は正三に初まると見ていゝのであ

る。而も、形式上の問題のみでなく、內容に於いても十分この意味は述べられる。歌舞伎脚本に時代物を發生させた、或は成長さすべき氣運を齎したといひうると思ふ。この意味に見ると、彼の作は眞に興味あつて讀まれる。お家騷動に家の寶が相當有意義に活躍するのは、上方劇の中でも當代のものに限る。歌舞伎に操りが入つて、夫を消化した新たな態

繪入根本「桑名屋德藏入舟物語」

度を以て、歌舞伎が成長して行く所に、當代歌舞伎劇のもつ意義はある。本作の如きは、然く解しつゝ味はふべき作品であると信ずる。

この作は當代の當り作として大評判であつたので、後年操りにも入つてゐる。文化年中の作と覺しい。勿論多少筋は簡略されてゐる。が、かういふ、筋の複雜さを狙つてゐる點や、その筋を一貫する人物の深い腹黒さ等は、江戸の地には向かなくて、殆ど上方のみに興行を續けて居た。奇技は好むが惡は好まぬのが江戸の好尚である。それで、寧ろこの作と類似の天竺德兵衞の方が、割に多く江戸に行はれてゐて、德兵衞と德藏とが交つた事等はある。但し、原作が遊離して興行された事は多々ある。場としては矢張り、舟中の檜垣の闇籠が現れる箇處が最も多く働いてゐる。趣向としての興を見た故であらう。德藏は近くは、德兵衞として獸阿彌の姐妃のお百にも入つてゐるが、これらは極く輪郭のみを投つたので、全く原作の德藏を捕へたものでない。それから見れば、南北の獨道中五十三驛に出て來る方が、船があり、海が荒れ、娘が水に飛込むといふだけの趣向は、本作から生のまゝ取つてゐる事になる。要するに、原作がその儘には、歌舞伎として現存して居らぬのである。

因に、從來の飜刻書が繪入根本によつたものである結果、原作臺帳とは場處によつて非常に出入りがある

天保三年三月

ので、根本の文章の箇處まで挿入したのはその點を示す爲めである。大詰宮薗淨瑠璃の詞章の如きは、根本には全く省略されてゐる。恐らく、これは淨瑠璃として後世に殘らなかつた爲めであらう。

天滿宮菜種御供

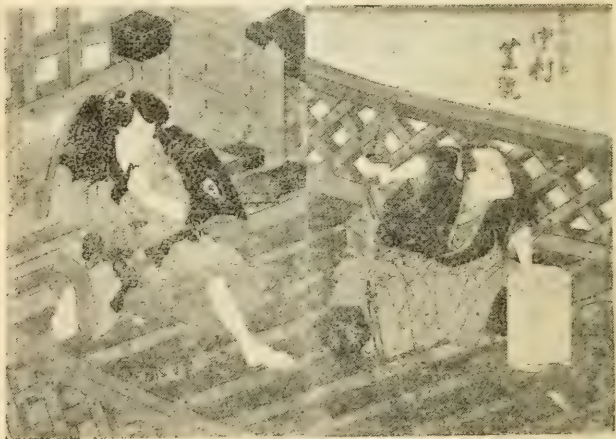
並木五瓶作

八幕十四場。

安永六年三月。大阪角の芝居小川吉太郎座。

外題、天滿宮は、勿論本作が天神記の書替へだからである。菜種御供は、五つ目、武部源藏宅の場で、源藏が、畚から菜種を出し水に清め折に載せて、火を打ち松の木に供へると、女房戸浪が不審がつて質ねる所がある。源藏がいふには、故人の菜種の詩に、花の色は蒸したる粟の如しとあるから、心ばかりの粟の飯だといつて、「菜種の御供は百味の飯食」の句がある。その意味をとつて、外題としたものである。

作者五瓶は始め辰岡万作の門であつたが、やがて並

江戸中村座「櫻時女行烈」

木正三を師と仰いで仕へ、よくその長所を吸收した作者である。上方劇壇が生んだ一傑才である。而して又、上方劇を江戸に直接輸入した當人である。彼が本作を上演したのは、卅歳を出た計りの頃だつた。その後十二三年して、宗十郎に伴はれて江戸下りをやり、以後江戸劇壇の爲めに、頗る功績の大いなものがある。本作はその五瓶が大劇場の爲めに執筆して大當りをえた最初の作である。而して、この頃から彼は立作者の位置に据ゑられたのである。

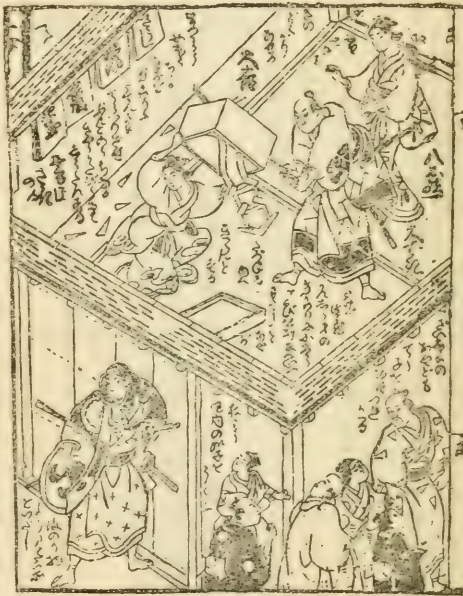
本作の粉本は、近松門左衛門作の「天神記」であつた。而もその天神記が改作されたものに、是より早く延享三年に、例の寺子屋と呼ばれる「菅原傳授手習鑑」がある。夫と歌舞伎の本作とが、天神記の系統をひく狂言の中で、雙璧たる位置を保つてをる。然し、本作は手習鑑を先に持つ關係上、その長所を巧に利用せんとしてゐる。

近松の天神記は、文字通りの天神記で、道眞說話の要點を具へてゐる。卽ち、京都に於ける道眞、流罪の途中、筑紫の道眞と、是である。京都では時平が、途中大物の磯では御隨身秦の粂竹が、筑紫では白太夫が、問題の中心に居て、一篇の戯曲を展開させてゐる。この天神記から見ると、他の二作は、道眞外傳とも言はれうる程の潤色が十二分になされてゐる。道眞に關する直接的な問題よりも、間接た方面を多く盛上げ、此處に舞臺效果を狙つたものであると思ふ。操り臭といふ點を許容するなら、天神記よりも手習鑑の方が、又同時に、菜種御供の方が、上作だといひうる。手習鑑で、有名な道明寺・車引・寺小屋は天神記にさして關係はなく、殆ど出雲等の創作と見られるが、夫等が巧に五瓶によつて鹽梅されてゐるのである。

菜種御供の脚色上の重な點を考へると、まづ天神記から秦粂竹と十六夜の件を取つて、菅原に端役で働い

てゐる輝國の名を用ゐ、筑紫白太夫住居の場を成した。天神記の大物の濱邊を播州曾根の濱に書替へ、十六夜親子の最後を見せるが、その事件を此處迄ひいて來て、十六夜の幽靈を出して、親子姉妹夫婦の愁歎場を見せ、直ぐ、道眞が現人神の場に移る。輝國を血も涙もある武士に仕立てたのは五瓶の力である。

　手習鑑の道明寺は、六つ目の宿禰太郎の家に來てゐる。道明寺も上作であるが、この六つ目の方が戲作としては遙か面白い。殊に、本作が齋世親王と紅梅姫の相當に働かせてゐるが、丞相を隱まふのでなく齋世親王が隱まってあつて、姫がこの家に迫りつく事になつてゐる等も色氣を失はぬ脚色である。手習鑑が梅王・松王・櫻丸を創作したが、夫を小櫻・松月尼・紅梅姫の姉妹にかへ、かの兄弟の、性格をも、女で行かうとしてゐるのに興味が惹かれる。その爲めに、小櫻は良人宿禰太郎の刃に掛つて殘忍な殺され方をし、松月は、戀の焔に驅立て

「菅原傳授手習鑑」の寺小屋

られて、半ば畜生に化する。是等の脚色は全く手習鑑から來たものではない。

松月尼とは、元來松ケ枝といふので、現、尼になつてゐるのは、その以前、都で齋世親王を見染めて成らぬ戀の前に悶えたからである。その宮が計らず我家に隱まはれてあると知ると、妹紅梅をも排して宮に近寄らうとして、遂に母覺壽の手に倒れるのである。その時、松月尼は雞になつてしまつた。是に覺壽がなした業の報いである。

親が娘の良緣を祈つて、白雞千羽飼つたので、紅梅姫は親王に添ふやうになつたが、今や道心を破つた松月は、その爲め雞になつたのである。この脚色は、手習鑑にも白相國を持出し乍ら、此處迄は考へ及ばなかつたと見える。但し、白雞千羽飼ふと娘が后になるといふ口碑は平家物語等にもあるし、雞娘としては歌舞伎にも早く見えるから、作者は夫等からも暗示を得たであらうが、此處に織込んだのは成功だつた。宿禰太郎が、亦この作では、終始大役に書かれてゐる。手習鑑では簡單な惡人にされてるにすぎない。斯くて、この六つ目は、成程後世に殘つた程、名作といふに恥づかしからぬ。

寺子屋の松王は、紀長谷雄に書替へられ、源藏と筆法の論談が初まる。長谷雄女房常盤木は始め、松の精だといつて、子供を連れて消えるが、夫だの、長谷雄が身替り首を二度切る等は稍〻目間苦しく、是こそ人形ならばとも思はせる。が、源藏は前幕から働いて、相應詳しく説明されてゐる。要するに、本作は天神記から題材の系統はひいたが、說話の本筋である道眞を相當描寫してゐる一方、傍筋たるべき齋世親王、輝國、宿禰太郎等にやはり重きを置く事を忘れなかつたので、割に擴がつて關係も統一を缺く事なく出來たのだと思はれる。

本作について、面白い挿話がある。大阪で興行中、さる國學者が見物して、二つ目の切の、時平が道眞をまんまと計り了せて大口開いて笑ふ幕切を見て、狂言作者等は「埒もなき作り事のみするかと思へば、中々博識の者の作する」ものだと讃歎して、五瓶を先醒〳〵と尊敬したといふ。是は大鏡にある話で、道眞が時平と政治を執つてをつた頃、大分時平の議論が强硬になつて、道眞が弱つた時、太政官の下役の某の史が、時平に笑癖のあるのを利用して道眞の迷惑を救つたといふのである。時平は「此の左大臣物のをかしさぞ、え念ぜさせ給はざりける。笑ひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事も亂れけるとか」と

手習鑑ノ改作「大自在雷子寶貨」

[illegible]評判よし同じく九月名残狂げん
手向山紅葉御幣 [illegible]所作事
再春菘種蒔 清元連中 長唄連中 右例の三番叟
一菅原時平 一小野[illegible] 一[illegible] 一松月尼 一白太夫
一[illegible]實ハ[illegible]人[illegible]倶利迦羅[illegible]不動[illegible]

傳へた。が、實は五瓶はこの幕切れに腐心して、「テモ道眞はいかい阿呆ぢやなア」と述來て了つて、困つてゐたが、「まゝよ！」とその儘木を入れた所が、却つて笑ひ幕と言はれて、大評判を擧げる事になつたと、一鳳が傳へてゐる。笑ひの幕切は車引から來たらうと思はれるが兎も角その様な事實もあつたかと思はれる。

五瓶は脚本史の上で見ると、上方狂言を江戸に輸入した功勞者である。事實上で見れば夫は三世宗十郎との關係である。即ち、寛政六年宗十郎が大阪から下ると共に、五瓶を招いだ事である。宗十郎に認められた事は、是より早かつたであらうが、宗十郎の藝は、いはゞ大阪生立のものである。その彼にして、江戸と上方を往復してゐた間に、彼が江戸狂言に飽足らない考を抱いた

思ふ。
雛助は幼年で既に「幼稚子敵討」で名を成して以來、藝の幅は他の歌右衞門や爲十郎等より廣かつた役者である。さうした雛助の壯年期を賣出したのは此「菜種御供」であつた。作者五瓶も是で賣出した。五瓶の作柄が師の正三等と全然違つた味を持つてゐるのは、最初の雛助との提携時代の賜で

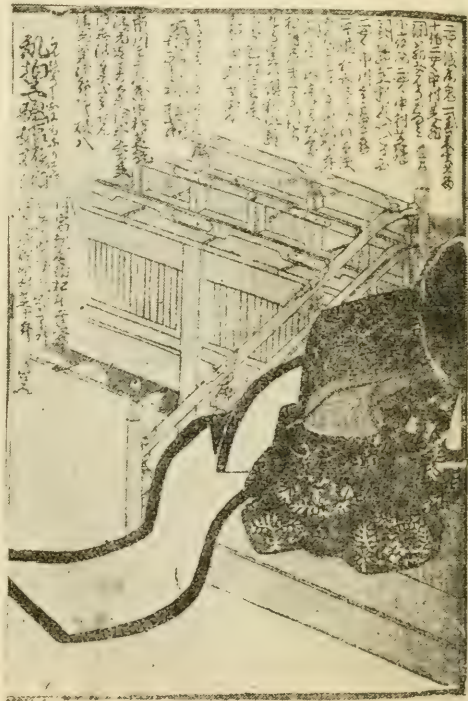
と見れば當然の成行かとも思はれるが、同時に五瓶の方でも、同門の多士濟々の中にあつて、江戸下りこそ、自己の希望を達せん機會を狙ひ得たものと考へたであらうと思ふ。然し、よし二人共に新進の意味に於て、希望を持つ意味に於て、丁度似合はしい事と考へるとも、その機會を、促進させるに力あつたものは、嵐雛助との提携であると

あると思ふ。雛助と似た藝の持主で嵐三五郎が居た。三五郎も「菜種御供」を度々やつてゐる。而して、宗十郎と三五郎との間には近しい關係がある。つまり、雛助から三五郎へ、三五郎から宗十郎へ、といふ關係が五瓶江戸下りの背景として成立してをるのを認めざるをえない。而も、斯かる關係の楔を成すものが「菜種御供」である事を思へば、一本作の意義はかなり重大なものがある。

さはれ、是を完璧に近い傑作とする事は餘りに五瓶に對する阿諛にならう。本作が彼の傑作の一であると認められるにつけて、先行脚色たる「手習鑑」の存在を覆ふ事は如何とも不可能なのである。そこに、少くもある意味の弱點を持つのである。

かの近松の天神記は當時でこそ歌舞伎芝居にも上演されたが手習鑑出て、菜種御供出て以後は、殆ど姿を消して、後の兩作

のみが天神記狂言の主流をなすので、各々が種々な傍系的書替狂言を生んで、江戸中期後、今日迄、劇壇を賑はしてゐるので一々の外題は擧げる遑のない位である。

本作が上演された最近の記録は明治四年三月守田座左團次の時平、訥升の菅丞相で、その後は殆ど聞かない。改作といふべきもので櫻痴が、九代目團十郎の爲めに書いた明治卅年歌舞伎座の「時平公七笑」があるが、考證癖に囚はれた作で、作としても劇としてもよいものではなかつた。歴史的に名のあるのは、天保四年九月芝翫（四世歌右衛門）が、江戸中村座でお名殘興行として上演した「手向山紅葉御幣」であらう。妙に人氣のあつた芝翫の主役であつた。本作の最も流行したのは、江戸中期の上方に於てゞあつた。その後多くは、上方下りの役者によつて、江戸

劇壇に移植され上演されたのであつた。上方劇の勢力の失墜と同時に、本作の如き純上方劇がその儘に江戸に流行するのは困難であつた。それで、寧ろ一幕〳〵に殘されて、かの雛娘の場と笑幕の場とが獨立して、夫々更に發展の相を示した夫等の獨立して上演や、夫等が他の江戸狂言と綯交にされた場合は屢々起きたのである。

中古説話で斯く迄一般的な民衆的な性質を持つものは稀である。天滿天神が筆法の神とされてゐるにも本づからうが、道眞の傳説が判官贔屓の國民性に一致する所以もあらう。而も近世中期以後は、劇としての道眞説話が民衆生活に對して、直接に、又は間接に、浸潤

爲拜天滿宮

した所は決して尠くはあるまいと思ふ。

都鳥の時代事（ふること）
吾妻の世話事　**隅田川續俤**　奈川七五三助作

四幕六場。

天明四年五月十三日初日大阪角の芝居藤川菊松座興行。

外題は、隅田川狂言の、「續（ごにち）」で、即ち後日狂言の意味である。後に、上演された時、「續俤」を「つゞく俤」と讀ませた場合もあつたが、是は寧ろ讀誤りといふべきである。角書（つのがき）は、時代事たる吉田家のお家騷動と、お組要助の世話事との綯交ぜを知らす。

班女の扇

切には、浄瑠璃所作幕を据ゑる。長唄「垣衣（しのぶぐさ）の戀寫繪」である。太夫は上方唄浄瑠璃界の當代の名手、鈴木万里である。

本作は俗に「法界坊」の名稱で有名な作である。而して、切の所作幕は大抵獨立した形式で扱はれ、「双面（ふたおもて）」とか「惑賣」とかいつて呼ばれて居る。

外題からいへば、時代世話混交といふべきであるが夫は湊村からの言方である。本作は種々な狂言の系統が流れ集まつてゐる所から、その點を闡明にする爲めに、まづ、切の所作事を別に扱つて見ると、始の部分は、隅田川劇と法界坊說話とからなるものであり、後の部分は、その上に更に日高川劇に双面劇惑賣劇等

鐘銘道

を入れたのである。が、夫等は巧に鹽梅され、渾然と一の舞臺を爲してをる。

隅田川劇の由來は古い。室町期の小說「秋夜長物語」邊から稚兒松若は現れたが當時の人買傳說緖子苛め傳說等により、一篇の戲曲となつたのは謠曲隅田川である。此處には旣に、吉田家の稚兒梅若の名が見えるが單に人買說話としてのみ終始してゐる點に室町期の背景を語つてゐる。是が假名草子の角田川物語ともなつたが、全くお家騷動の背景を得、その爲め鯉魚昇天の故事を持出したのは、近松であつた。享保五年八月竹本座に上演した「双生隅田川」は是である。近世の隅田川劇は主として近松のこの作から出發してゐる。

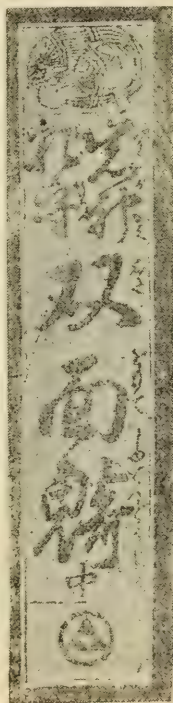
成寺傳記

本作の素材は、夫と法界坊説話とに據るものである。但し、法界坊説話の成立に就いては多少の考へがある。現に、近江國坂田郡上品寺の所謂法界坊の釣鐘に關して、明和年間建立の緣起並びに鐘銘等も見られる所から當年の法界坊の存在を認め、これによつて法界坊劇の發生を考へようとする說がある。だが、是は寧ろ反對の現象を豫想させる。即ち、法界坊劇によつて、生まれた法界坊說話であり、上品寺の法界坊緣起であると思ふのである。法界坊が當時上品寺の鐘の建立を思立ち江戶中を勸進して廻つた所、當時吉原の全盛の太夫扇屋の花扇が率先して寄進したので、忽ち鐘が出來し、近江迄引いて歸つたといふのである。「實事談」に出てゐるが、此書物が極めて如何はしいもので、恐らく上品寺にある緣起等によつて綴り上げた文ではあるまいかと思ふ。所で、上品寺の傳へを考へると、全盛の花扇が居たのは時代が全然違ひ、鐘銘に見える他の連名等も全く當時のものでない事は、吉原細見等によつても證明されるのである。

さうなると、直接歌舞伎の法界坊の成立を考へなくてはならなくなるが、當時の黑本に「斑女の扇」なるものがある。是は隅田川傳說をお家風に脚色した小說である。因果關係は恐らくなからうと思ふが、丁度同じ頃、寶曆十年七月京布袋屋上演の「花筐斑女扇」を見ると、是亦お家狂言に書かれた隅田川傳說である。挿畫に入れた番附の通りで、この中に法界坊と名乘る破戒坊主が見える。この邊りに、劇としての法界坊の輪郭が覗はれるかと思ふ。近松が書いた法界坊は山伏であつた。惣太が假の名で、その殘忍さも實はお家の爲めとある。これが「花筐斑女扇」になると、全く二人の人物に別れて、法界坊は純然たる墮落僧として描寫されたのである。鐘の建立に關しては、當時の「道成寺傳記」等によつても、梅若傳說との接觸は考へられ、江戶市中に流行した乞食坊主の風態を取入れれば、直ぐ歌舞伎の法界坊といふ坊主は出來上るかに思ふ。法界坊

といふ一箇の坊主の成立も甚だ興味ある問題かと思ふ。要するに、斯くて、歌舞伎の法界坊の成立を見、何時の間にか、上品寺が是を流用したものと察せられる。

ここまでの法界坊と所作事の法界坊とは、別に考へる方が便宜であり、又事實發生に於いては、別箇の立場を持つてゐると思ふ。双面、惣賣、隅田川等の別名を有する如く、夫等を直接素材として利用したものである。

「双面」とは二人の人物が、同じ姿を現はす科で、そこに既に傳奇的な意味をもつ。傳奇的な性質は、同時に劇的な解釋を孕む。歌舞伎の科として好箇の取材たる事勿論である。此趣向は古く室町期にあつて、能樂の「二人靜」はその有名なものである。近世の劇は歌舞伎といはず、操りといはず巧に利用してゐるので、歌舞伎にも、「門松四天王」や貞享四年の「二人照手姫」等は江戸の古狂言としてこの趣向が見える。操りで見れば、寶永六年十月豐竹座近松作「赤染衛門榮花物語」の如き古く、近松は「双生隅田川」にも流用したのである。爾來上方に淨瑠璃作者が好んで遣つた手法だつた。延享四年「千本櫻」の狐忠信の如きは、合作時代に入つて屢々現はれて來る。が、最も多く此趣向が流行したのは、江戸中期であると思ふ。文藝全般に涉り、黒本や初期の黄表紙には盛に現はれて來た。これらの流行が作用して、江戸歌舞伎に

「二人淺間」がは現れた。常磐津「妹脊山梅櫻」である。作者は壕越二三治。爾來江戸淨瑠璃に一つの系統を成すに至つた。

「惑賣」とは、双面の二人の姿が惑賣きを演じてゐる所から名附けたものである、是は恐らく當時の江戸市井の直接描寫であらう。そこに歌舞伎獨特の親和の作用、殊に江戸町人の親和の作用が認められる。歌舞伎の特質にある民衆性の前に、大いな效果をあげたのである。

外郎賣もあれば白酒賣もあり、風鈴賣虫賣黒木賣もあるといふ風に、歌舞伎と市井とが直接交渉を遂げてゐるのである。

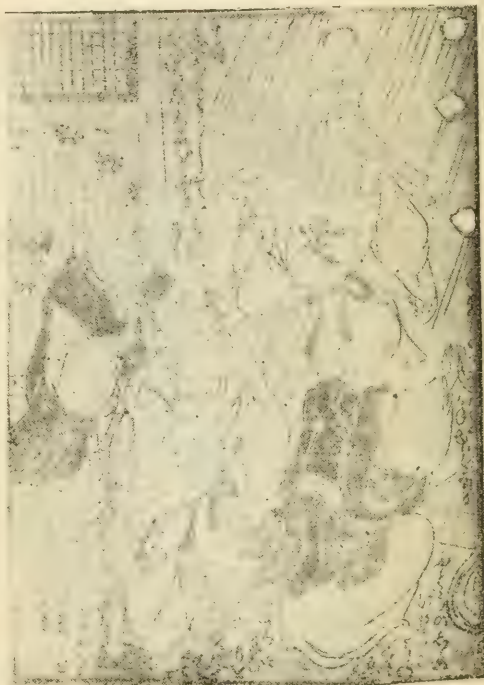
「隅田川」といはれたのは、その背景に於いてである。隅田川の渡し場に辿りついたお

鐘　路　道

組要助の一組の前に法界坊が姿を現はす事になつてゐる所からいつた名である。而して隅田川とする所に、前幕迄の吉田家の騒動を引いてゐる事が知れる。要助が實は吉田の公達といふ解釋もつくのである。更に、鐘ケ淵にある鐘ケ淵傳説は「隅田川」に關係をもたせて、そこで日高川傳説と交渉をもつ。道成寺の趣向はその儘に、「隅田川」となつてゐるのである。

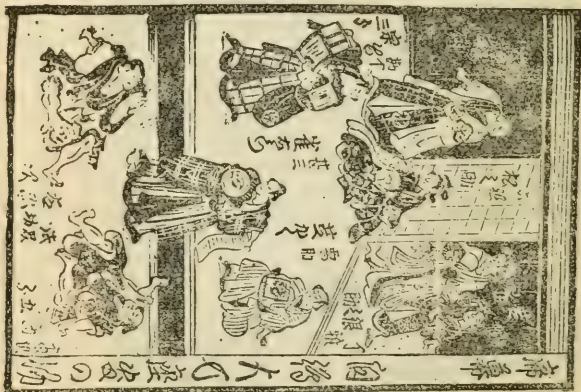
所作事としての系統をもつ所から、右の如き各名稱も出たので、夫等の系統が調整された所に本作の淨瑠璃が生れたのである。然し、作者の案の中には、更に一の趣向を持つてをつた。法界坊といふ一人の坊主を考へて見ると、所作幕の彼と前の場の彼とは全く別人である點に誰しも氣付くであらう。想ふに作者の頭に所作幕を作る時、第一に浮んだ

成寺傳記

花筐班女図

案が別にあるからだと思ふ。前幕の、例へば土手場等にも其影が見えぬでもないが主として所作幕に作用したと思はれるのが、「清玄」である。茶氣と惡たれとが、斯くの如き怨恨の强さとは性格的に一致しえぬ筈である。戀にやつれた恨みの僧が、艶麗な姫を追ふのは、古く「二河白道」以來有名になつた清玄なのである。それを法界坊對野分姫と書替へたものでなくてはならぬ。

本作の粉本といはれる安永四年二月江戸市村座「色模樣青柳曾我」の成立に當つて、一つの挿話が殘されてゐる。當時道成寺の所作の所演は中村富十郎等一流女方の權限内にあつたが、秀鶴仲藏は是非之を演じたくて初代河竹新七に相談を持ちかけた。そこで新七の案で「葱賣」が書上がつたのだと「手前味噌」に傳へてゐる。話の筋には多少疑はしい點があ

るが、秀鶴と新七との合議によつて「葱賣」が成つた點は事實といへよう。現に向島百花園の葱塚の碑は、默阿彌が後年に至つて、當時を追懐して建てたものである。この所作幕は、大體其儘に「續俤」へと移されてゐるが、所作幕以外の本筋の部分は、多少脚色上の變化が認められる。「青柳曾我」には法界坊の名稱はなく、景清の叔父大日坊となつてゐる。お組要助でなく、お染久松である。斯かる配役上の變化は、お家狂言への一の展開とも考へられる。純然たる江戸狂言が、茲に至つて、首尾一貫した構想を持つたのである。

扨、隅田川劇と日高川劇との抱合せは既に明和二年三月、中村座「天津風念力曾我」の二番目淨瑠璃「双面花入相」にも見えてゐる。

明治の法界坊

明治の法界坊

是に墮落僧を交ぜたのが「法界坊」である。所が「法界坊」の粉本たるべき「青柳曾我」は傳はらずして、寧ろ、本作の方が現存してゐるのである。今後の「法界坊」に「青柳曾我」の書替へはなくして本作から出發してゐる點を、法界坊狂言の歴史から見逃す事はできないのである。

この作者七五三助は、俗に洗濯屋と呼ばれた程繼接に巧みだつた。然し、昔の作者は何等かの意味で洗濯屋なのである。その中で、斯く迄見榮えして書上げたのは、確かに作者の腕と思ふ。「青柳曾我」から本作への過渡には、愁歎場からお家狂言への展開が考へられる。而も、是を全く背景化して角書にいふ如く、世話化し切つた所に、「双生隅田川」や「双女房」等とは、又格別な味が汲取られる。江戸で集

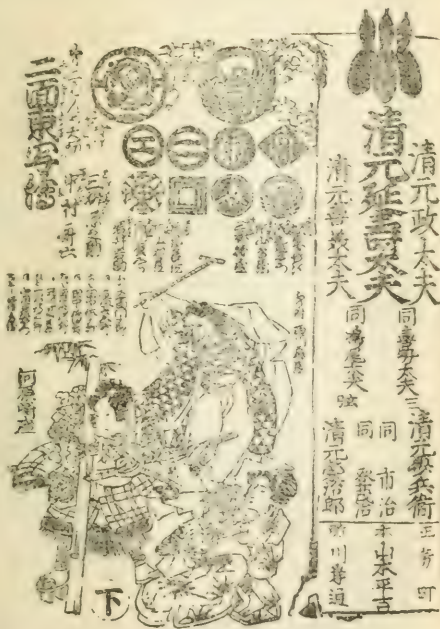
隅田川月と梅花（春色隅田川）

成された狂言が、大阪に上つた結果とも考へられるが、作者の功を覆ふ事はできない。同時に七五三助に斯く書上げさせた團藏の功をも忘れる事は出來ない。「青柳曾我」の大日坊を法界坊としたのは彼であつたが、法界坊としたが故に、今日の如き破戒無慙な惡たれの一面に、愛敬と茶氣の横溢した坊主が描き出されたのだと思ふ。

團藏は元來上方役者だつたが澁い藝の傍、所作に長じてゐた。安永から天明始頃迄江戸に居たが、天明四年歸阪に當つて、この作を上演したのである。彼は江戸で、「青柳曾我」で秀鶴に交つてゐた。秀鶴の亡靈に引かれて、大刀を擔いだ儘後返り三度やつた。夫を法界坊で傘を擔いだ形でやつてのけた。是は現に、法界坊の型として傳はつ

こゐる。斯かる型を殘したのは主として團藏の功にある。

但し、今日殘つた「法界坊」は淺山主膳の件を全然略してある。この筋は、上方狂言として書かれた爲めに生れた背景の說明に過ぎないので、あらでもの事ではある。が主として江戸に存續した場合の型を殘した現在の「法界坊」である爲めに、斯うなつた事と思ふ。

「双生隅田川」以來多少の變遷を經たが、本作に到つて落着き、以後の「法界坊」は幾分の添削があらうと、「續俗」の脚色によつて傳はるのである。尤も默阿彌の「都鳥廓白浪」にも花菱屋の花子實は吉田の松若が出て來るが、輪郭こそ同じに見えても、内容は白浪物で全然別に考へるべきである。所で、切の所作幕のみは發生當初の性質を失はずに、清玄と組み、粟と組み等して、ある範圍内では遊離した自由

な姿を示してゐる。文化十二年七月河原崎座「戀紅葉汗顔見世」の切淨瑠璃「垂帽子不器用娘」は、土手の道哲と果との双面、天保十一年十一月「優平家劇場軍配」の時の所作「嫐容顔花競」では俊寛と頼長公息女千鳥の前との双面、といふ風に一の興味ある趣向として迎へられたのである。が、現在「双面」としいへば、法界坊の「双面」を指す事勿論で、多くは常磐津の地である。清元の場合もある。

本作は大阪の繪入根本になつてゐて、「春景淺茅原」といふ。文化五年印行。畫家は廣國である。淺茅原の名は梅若の母が身を投げたといふ傳説によつたものである。又、江戸で草双紙にもされてゐて、直譯的なものに文久三年版「隅田川月と梅若」等がある。この作は六篇物で、前半は種彦、後半を有人が繼いだ。國貞芳虎の畫。三篇迄は「春色隅田川」の外題で出版したものである。

揚巻助六　廓の花見時

一幕一場。櫻田治助補筆。

寛政十一年三月。江戸中村座興行。

江戸狂言の粹といはれた助六劇である。助六劇は形式の整つた昔の舞臺が、大體に於て今日迄遺存してゐると見ていゝのであるが、扨、古い臺帳となると、殆ど見當らなくて、寛政度の大三浦達壽の二番目の本作の如きが、先づ現存する助六劇中、古さに於て首位かと思はれる。古劇との距離は最も近い譯になる。但し、斯ういふ種類の劇は、上演の都度〳〵、多少の加筆は免かれないので、上演當時としては、そこに却つて一種の親しみを得て、效果は擧がるのである。普通、助六の母とあるべき所が、本作では叔父になつてをる。

その折々の關係からである。その約束を承知して見れば、何の差支へもなく讀めるのである。本作の作者も、實は作者といふ程の意味はないので、此處に治助と斷はつたのは、當時の中村座の立作者である所から、實際筆をとらぬ迄も、彼の意見を重しと見て斯うしておいた迄である。

以上の如き筋路であるから、本作の解説は、勢ひ、直接本作に觸れる事少くして、助六劇といふものに就いての説明にならうと思ふ。單に本作のみに就いて云々する事の餘りに無意義に終らうと思ふからである。

助六劇は、古く二代目團十郎（柏筵）によつて創められたものである。柏筵は生涯に三度演じてゐる。正德三年四月山村座「花館愛護櫻」と、正德六年（享保元年）二月中村座「式例和(やはらぎ)曾我」と、寛延二年三月中村座「男文字曾我物語」とであつた。第一回に、男達助六傾城揚卷の一對の構想が成立し、第二回第三回で遊廓美の整頓を見たのである。第一回の作者は津打半右衛門、第二回は津打治兵衛、第三回は藤本斗文であつた。ここ迄の間に、竹之丞も菊五郎も三代目團十郎も夫々助六を見せたが、斗文の作に至つて助六劇は完成を見、爾來助六劇の標準はこの作に則る事になる。わたしは惟ふに、この助六劇の成立には、團十郎柏筵の功績が多いかに信ずる。夫に就いては別に述べようと思ふ。

揚卷助六の實説については、仲々紛糾を重ねてゐるが、要するに上方に流行した淨瑠璃を江戸の男達に書替へたものと考へる。

正德四年二月の評判記「役者色系圖」に、第一回の助六劇をかういつてる。

「巳の三の替り太平記愛護若（この外題は誤傳であらう）の狂言に、揚卷助六心中、荒事さつて濡事がゝりの男達、お江戸八百八丁裏々迄評判」

とある。「揚卷助六心中」とは、上方の心中事件で、これより早く、京大阪で舞臺にも上つた心中狂言の當り作であつた。一中が下つてその淨瑠璃を語つたのを團十郎がきいたとも傳へてゐる。これを、從來の市川の藝たる荒事の男達でなしに、濡事がゝりの男達でやつたものだといふ意味に讀める。

「墨水消夏錄」「奇跡考」「戲場書留」等に、江戸市中の多少實在らしい話を傳へてゐる。それによると、大した人物ではないが、古く、承應年中死んだ男達で、花川戸に助六と稱する者がゐたといふ。大捌助八とか市兵衞とかの名も傳へられてゐる。兎に角、夫等を通じて描寫された助六なる男達に、丁度、當時三浦屋の全盛の太夫總角を配して、扨も揚卷助六の一對にしたと見られる。

「荒事さつて」とはいへ、單なる濡事ではない。矢張り、男達の本分は持つてゐる。而して、吉原の場を入れた所に、當時の觀衆は我が意を得たりと喜んだのであらう。大道寺田畑之助、後に花川戸助六を團十郎、傾城總角を玉澤林彌、白酒賣新兵衞實は荒木左衞門を生島新五郎、髭の意休を山中平九郎、傾城喜世川を藤村半太夫、この他に、かんてら門兵衞等男達十人位ある。

意休に就いては、髭の無休なる元祿年中の幇間から名を取り、深見十左衞門自休の人物に冠せ出來たものと見られる。意休の下の男達の中に出る朝顏せん平も、北八町堀の町奴藤屋清左衞門方の賣出した朝顏煎餅から持つて來た。白酒賣は勿論當時の江戸の流行を入れたので、現在の助六にでも新兵衞や、せん平の臺詞は、猶當時を彷彿さすものがあらう。斯かる趣向を凝らした作意は正に大評判をあげたのである。但し、この最初の助六は、まだ／＼荒事といつていゝ位な科である。

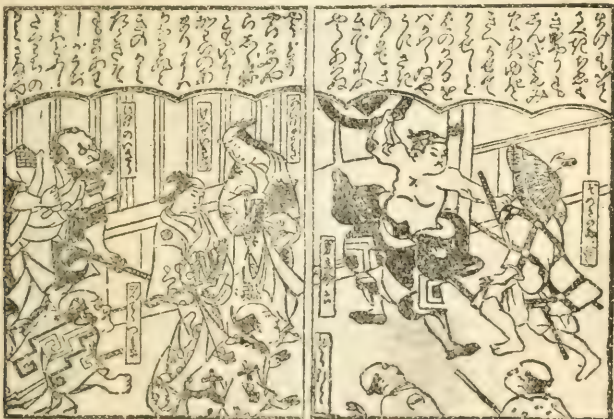
第二番目の幕あくと白酒を飲み乍ら、仕出し二三人ゐる所へ、男達が二人來て白酒を飲む。江戸半太夫の

助六の出の浄瑠璃がある。と、尺八を振被つて、喧嘩／＼と罵して、二三人の男達を逐つて橋懸りから現れ、舞臺にかゝる。すると、上手から意休が現れて、口論になると、暖簾から總角と喜世川が出て留める。此時、新兵衞の爲めに、意休が助六の尋ぬる敵だと知れて、意休は梯子で屋根に逃げる。助六新兵衞は追つて上り、立廻りあつて、遂に助六は敵を討つ。

この時の助六の衣裳は、黑紬に三升と牡丹の伏縫で、巾廣帶に、柑子色の木綿の鉢卷、紺足袋、三升鍔の長刀一本差といふ拵であつた。

三番目は、愛護の師匠野村要右衞門の住居の場で、こゝでも、助六の大道寺田畑之助は、荒い仕ぐさを見せてゐるが、興味の中心は、矢張り二番目吉原の場にあつたのである。夫で、二番目のみが愛護の若の世界から遊離して、後世へ傳はつて行くのである。

二回目の評判は、正德六年(享保元年)春の「芝居

花館愛護櫻

晴小袖」にいふ。

「切落しの最中に陣を張り、良き蒲團積み重ね、逆澤瀉の鎧に鏡を立て、片袖ぬぎかけ、髪梳きの所、江戸半太夫淨瑠璃に合はせ、所作大當り……髭の意久大谷廣右衛門あざ笑ひ、こ才の分として紙子着ての傾城買おいてくれさ。……傍痛いといはるゝ悪口きいても、少しも荒事なしに、お江戸中に響かさるゝ。」

三年前の時から見ると、餘程和らいで見える。外題の「和曾我」もこの故であらう。まづ注意すべきけ、世界が曾我に變つた事である。春狂言だから曾我にした事は當然であるが、助六が曾我と抱合ひ、その助六が和事を示した所には、正しく始の助六と大分隔りをもつて來た事が分る。

この時の役割は、花川戸助六本名曾我の五郎市川團十郎、白酒賣新兵衛本名曾我の十郎中村洲十郎、傾城揚卷中村竹三郎、髭の意休大谷廣右衛門、傾城喜瀬川若村四郎一郎、かんぺら門兵衛中嶋勘藏等である。

此度の廓の舞臺は非常に華かになつた。

幕明きに派手な傾城の道中を見せてゐる。助六は、黒小袖、小さ刀、一つ印籠、一つ前塗り鼻緒、黒絹の鉢卷、江戸半太夫の半太夫淨瑠璃で、傘さしての出端の身振りがあつた。意久は白髭、金銀箔摺込衣裳、香をた

花屋形愛護櫻

かせ男達の供を大勢連出る。助六の臺詞で友切丸詮議の爲め、廓に入込んだ事が分る。遂に意休を殺して友切丸を取り、十郎に渡す。櫻花の散るを見て、「やがてこの身も散る花の」と述懐の幕切れ。

助六が曾我の世界を得た所に特殊な親しみを得た點と、助六の姿が、初演の時から見て如何に舞臺效果を擧げたかの點とには、注目の價がある。助六の執るべき態度はこの時に大體規定されたと見られる。而して是が第三回の助六劇で磨きをかけられたのである。

團十郎は海老藏となつてゐた。一世一代の助六である。揚卷は瀨川菊次郎、喜瀨川は中村粂太郎、白酒賣二代目中村七三郎、意久市川宗三郎、門兵衞、澤村喜十郎、せん平市川團太郎、伊藤九郎祐清澤村長十郎等。今の助六劇の滿江がこゝの祐清である。本集に入れた助六劇にも出てゐる。

助六の出には、河東節を始めて使つた。助六廓家櫻」である。この時の作者の手柄はまづ、舞臺技巧に次いで助六の扮裝にある。この年、吉原で始めて仲町に櫻を植ゑた。夫を當込んで、舞臺から花道まで櫻を飾り附け、觀衆の眼をあつといはせた。舞臺道具の飾附にも一段の進歩があつた。

助六の傘は、そこで花の雨といふ意味をつけた。黑羽二重紅絹裏の小袖、下に淺葱無垢の一つ前、綾織の

式例和曾我

帶、紫縮緬の鉢卷、パッパ鮫鞘、後差の尺八、桐柾くり拔下駄といふ扮裝である。當年流行の粹を集めて、助六の姿は成立し、この形が後世へ傳はるのである。

牡丹の紋は、元來近衞公の紋所で、その小袖を江嶋へ渡されたのを、江嶋が芝居に來て、團十郎助六の時に彼に送つたものだと「墨水消夏錄」とか「劇場書留」とかに傳へたが、解釋の仕樣によつて此說を信ずべきか何うか。かの鉢卷に就いては、江嶋から贈られたといふやうな傳說は信じてもいゝかと思ふ。二度目の助六の時、既に鉢卷の問答があり、「この鉢卷は過ぎし頃、由緣の筋の紫の」の淨瑠璃文句が見える。正德四年の江嶋事件と合せ考へると、多少の解釋は生ずるのである。

要するに、柏筵の生涯中で、彼によつて三度の變遷を經て、助六劇は固定したのである。而して、この三度目は單に柏筵の獨斷でなく、享保十八年に竹之丞の助六あり、元文四年に三世團十郎の助六あり、延享三年に菊五郎の助六あるを思へば、正しく研究的なものであつたことが知れよう。淨瑠璃も、河東、長唄、宮古路と來て、河東に落付いたのであつた。是等の關係は研究者に對して、更に興味ある問題を提供してゐると思ふ。

わたしは助六劇の成立としては、寧ろ第二回の正德六年の「和曾我」を推したい。是を完成された舞臺とした

式例和曾我

のが第三回の助六であると思ふ。
爾來江戸を中心に上方にも江戸役者が宣傳して江戸歌舞伎の中心位置を占めたのであつた。今日の助六劇の如く、喜瀬川が白玉となり、揚清が滿江となつたのは明和安永度である。本集の助六が、揚清になつてゐるのは、口上の都合である事分明であらう。外良賣の入る事があるが、是は新しくて、天保三年市村座の助六劇以來であらう。河東節が「所縁江戸櫻」となつたのは寶暦十一年三月市村座以來である。

助六の本名五郎が、十郎になる時もあり、京の小次郎の時もありして、多少の書替は常にあつたが、書替の助六として著しかつたのは、早く延享三年春市村座「聞往曾我物語」の二番目の菊五郎の若衆の助六で、以來この系統もある。明和元年春市村座「江戸染曾

黒本

我雛形」の時は、瀬川菊之丞が女達揚卷で女助六をした。

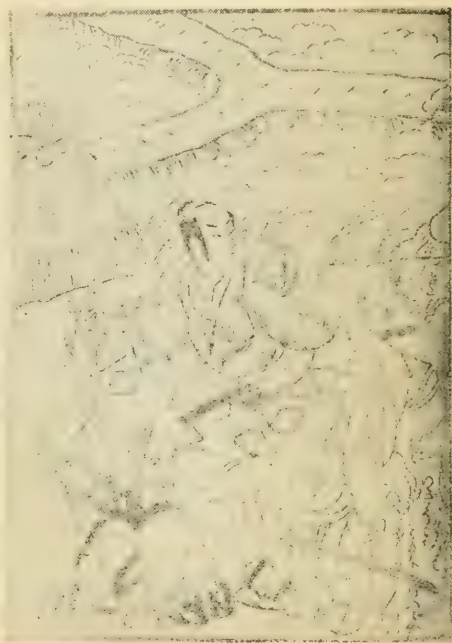
寶暦五年春市村座の「擡愛護曾我」では五郎十郎二人助六がある。據越二三治の作で、かなり特殊な助六であるが、これは黒本等と關係がありはしまいかと思ふ。

歴史的に有名な助六劇は、明和元年春、江戸三座で競爭上演した事がある。中村座は「人來鳥春告曾我」、市村座は「江戸染曾我雛形」で前の女助六、森田座は「誰袖粧曾我」で若衆の助六。この時、

「野良の助六、若衆の助六、女の助六。主の助六が無いといひたりしが、お玉ケ池には坊主の助六がある。」（半日閑話）

といふ咄もあつて評判だつた。

最も贅澤な助六は文化八年春市村座の助六だつた。七代目團十郎廿二歳の初役である。この時、幸四郎の

「女助六」

意久が八人の男達を連れ出たのは團十郎への馳走の意味とある。衛來男達連中の數が増したといふ。この時の助六の帯は一尺に付き七十匁に當つたとか、揚卷の裲襠七十五兩、白玉のは四十兩費つたとかいふ樣な贅の限りを盡くし、又藏前吉原の連中からは酒樽蒸籠の積物、小田原町から團十郎と河東へ引幕二張、そこで祝儀が百廿兩とか、そんな細かな話迄が傳へられてゐる。殆ど想像を許さぬ派手な興行だつた。江戸中が擧つて助六劇を禮讃した樣がしれる。

歌舞伎十八番を定めたのは七代目團十郎である。殆ど大部分當り作の古劇から選んだのであるが、中でこの助六のみは世話歌舞伎である。世話歌舞伎に斯く迄價値をつけたのは柏筵であらう。舞臺の藝として、一の型を發達完成させるに柏筵は如何に苦心した事か。彼が系統的には荒事に長ずべくして、更に和事や所作に長所を

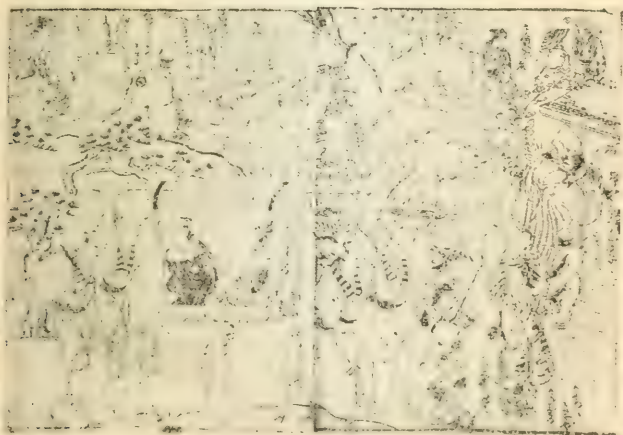
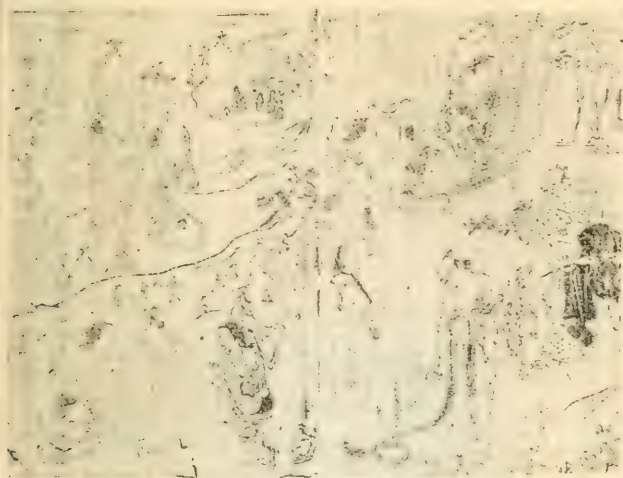
天保三年三月の助六、外良賣團十郎

持つた事は意味深きものがある。彼の成長に力を注いだのは新五郎であつたとか聞くが、又一面には才牛の横死も手傳つたのであらう。彼は、才牛の開けなかつた和事の天地を發見し、心中狂言等を屢々手にかけた。そこで、強く和らか味を含んだ助六となつたのである。

江戸人は歌舞伎劇を心から悦んだが、助六劇程積極的な態度は他のものには持たなかつた。

助六劇の櫻は舞臺から花道迄飾るが、更に劇場の外迄及ぼす。外の飾は傘があり、蒸籠がありする。而して、藏前や吉原から贈物の行列は一の江戸の賑はしである。即ち、江戸が助六劇をやつてゐる事になる。歌舞伎劇の本質の一面に親しみがあるが、この親しみの精神が斯く迄徹底して發揮された現象は少いのである。思ふに、助六劇の生命は、歌舞伎の生命の存續する限り、續くものと思ふ。前の助六劇の系統に對して、所作に書かれた時と、實録に書かれた場合とある。

うゐらう賣

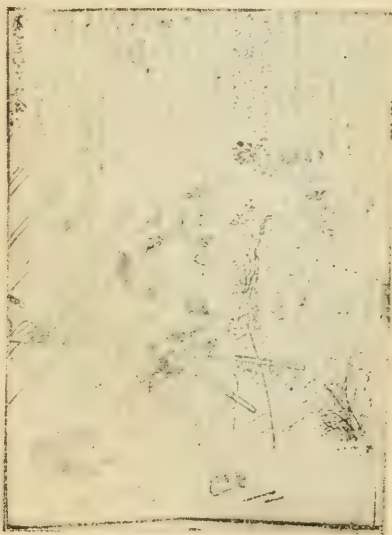
「万屋助六二代橋」

所作は天明五年春桐座で菊之丞が五變化の中で女助六を踊り、是から出發して、種々の助六劇中の人物が所作として殘されてゐる。最近には六代目が所作の助六を演じてゐる。

實錄風のは黒手組助六である。默阿彌の「江戸櫻淸水淸玄」で、小男の小團次が切に助六を演じたくて、默阿彌が彼の身體にはめた作だとの傳へがある。序幕は白玉櫓九郎の道行で滑稽な科を見せる。「白玉」と呼ばれて是だけ獨立しても行はれてゐる。

別に櫻痴が、九代目團十郎に書卸した「俠客春雨傘」がある。十八大通の大口屋曉雨が助六を氣取つて吉原通ひをしたといふ所から、曉雨に關する逸話を中心に脚色したものである。

以上の種々な助六は、其儘現在傳はつてゐる。而して、それらの母胎をなす柏筵の「助六」は、容易に他人の容喙を許さぬ完成した劇である。

全く別に、上方には義太夫淨瑠璃で丈助作「万屋助六二代𥿻」が享保廿年豐竹座に上演されたが、その系統の助六心中は上方に殘つ

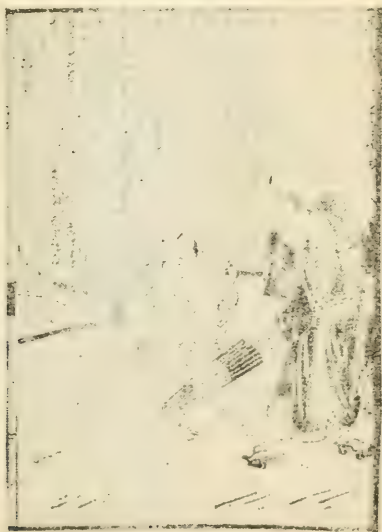
「吉原大全」所

た「浄瑠璃で、更に、明和五年一紙子仕立両面鑑」とも書替へられてゐる。

江戸歌舞伎として、中心的位置を占めた結果、すべての江戸浄瑠璃に、助六は歌はれたが、文藝の各方面への影響も廣く、殊に黄表紙洒落本の類に至つては、一々名を擧げる遑もない迄の流行であつた。是等の内容を見ると、助六劇は既に江戸人の生活の一部を成してゐるので、極く近い日常經驗事に過ぎない事が分る。江戸人が生んだ助六劇であつたが、更に、江戸人がその得意と滿足を味はひえたのは助六劇であつた。

叔助六仇討の圖」

東海道四谷怪談

鶴屋南北作

五幕十場。
文政八年七月、江戸中村座興行。

寛文年中、四谷左門町お先手組同心田宮又左衞門の娘お岩が、連添ふ良人に對する嫉妬の極、遂に身を了へて、死後も種々と祟りを爲したといふ巷說があつた。是をまづ捕へた。お岩に配する小佛小平は、南北が文化五年「彩入御伽草」の中にも書いてゐる、松助の弟子で、女房に謀殺された小幡小平次といふ役者の事で、再度利用した譯である。直助權兵衞といふのは、二人の名前で、享保六年の事、何れも主人を殺した科の下に三日間日本橋に晒され通行人に挽首勝手とされた擧句同日に所刑されたといふ、有名な話があつた。丁度其頃、砂村隱亡堀に心中者の死骸が、身體を揃へた儘で流れ著いて江戸の評判だつた、つまり、夫等の幾つかの實說傳說に本づいて、この怪談劇は成立してゐるのである。

御家人が一人の侍を殺しておき乍ら、敵をとつてやるからと、その娘と緣を組み、終に娘をも殺すといふ仕組は、矢張り早く文化八年「謎帶一寸德兵衞」に現れてゐて、南北は之を伊右衞門お岩に書替へてゐる事いふ迄もない。又、お岩殺しや幽靈は、「累與右衞門」から來てゐる事も諾かれるであらう。

南北はこの作を菊五郎の爲めにお名殘狂言と銘打つて書いたのである。

「黃表紙に現れた助六」

口上書に、
「尾上菊五郎儀兼々天満宮信仰にてこの度心願之旨有之、倅松助同道仕、筑紫太宰府へ參詣仕度由、暫時御當地をも相離れ候儀故御暇乞之口上申上度段相賴候に付」
といはれを書添へ、初代菊五郎が太宰府參詣のお名殘に忠臣藏をしたといふ型に似せて、今回も忠臣藏を上演と決し、その二番目狂言として、
「菊五郎二而工夫仕置候四ッ谷宿お岩物語男女の怪談新狂言」を作り、忠臣藏の大序から討入迄を二つに割り、新作怪談劇をも二つに割り、忠臣藏の前半にこの怪談の前半を取合はせて第一日、他を第二日といふ風に交替の上演を目論んだのである。この年中村座の夏狂言が終ると直ぐ櫓に紙鳶をからめた。これには女の生首が振袖を咬へた繪が書いてあつた。斯うしてまづ江戸人を釣つておいたといふ。

與　右　衛

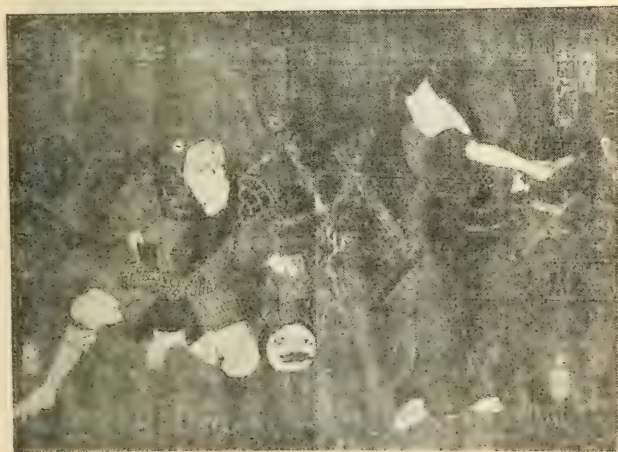
元來　菊五郎といふ役者は、菅丞相を得意とする傍、お祭佐七が出世役だつたといふ如き、藝に幅のある自由な役者であつたが、更に兼ねて仕掛物に深い興味を持つてゐた。この點は南北の好尚と一致して、當時の江戸人をば、たゞど膽を拔いて驚かしたのであつた。累與右衛門の早變りたとか、本作のお岩小平與茂七の早變りだとかの類に、手品師の如き鮮かさを見せてゐる、道具の長谷川勘兵衛とも苦心を重ねたとかの逸話も種々傳はつてゐる。

お岩が藥の力で相好が變つて來たり、髮の毛から血がたれたりするのも「累」の時の手法であつたが、觀衆はたゞもう不思議と怖しさに記憶等を失つてゐた。幽靈の動き樣や化物屋台の變化、殊に戸板返し等には神經を尖らすのみだつた。要するに、役者と作者とが案の一致に出來すると思ふが、作の上からも、本作は南北作での首位を占めるものなる事、勿論である。

門　と　累

南北は化政度の劇壇を一人で背負つた名作者であるが、其特色は人間の本能を遠慮なくズバリ／＼と言つてのけるにある。夫が何がな變化を／＼と先計り見詰めてゐた當代には至極向いたのである。南北の樣な人間が出たといふ事も、當代でこそと思はれるが、江戸は、寶暦明和のゆとりある大腹な文化から、纎細な神經的な文化にと進んだのが化政度である。黄表紙合卷等の文藝作品に見られる傾向にも此形勢は十分汲取られるので、血腥さゝと氣味惡さと肉の香りとは、强ち南北のみの獨占ではないのである。然し、之を舞臺に現はして實しやかに示しうる所に作者としての腕はある。彼が、當代の劇壇に覇を唱へたのも尤もである。

この作は菊五郎の生涯中、九回も演じてゐて上方人をも驚歎させたので、其間には多少の加筆も試みられて今日の型を殘してきた。富本淸元等も使ふやうになつた。菊五郎は文政九年大阪角の芝居に上つてこの怪談劇を上演した。是が「いろは假名四谷怪談」で、繪入

隱亡堀

根本にはこの方が入つた。「首が飛んでも動いて見せるワ」の伊右衛門の有名な臺詞は此「いろは假名」にある。

上方に喧傳された四谷怪談は義太夫節にも入つた。天保年度の綴と覺しい。但し、內容は寧ろ忠臣藏に接近して、師直や由良之助迄現れて來るので、上方だけに世話の儘に置かず、お家に書替へてゐるのである。

歌舞伎では今後、柳櫻の口演に入つて實錄物に書かれたり、諺藏の「四谷評判娘怪談」等近代的な味ひを見せた。草双紙にも原作の儘「東海道四谷怪談」があつた。

の趣向

花街模様薊色縫

河竹默阿彌作

四幕六場。

安政六年二月、江戸市村座興行。

普通「十六夜清心」で呼ばれてゐる。「小袖曾我薊色縫」の二番目に書かれた作である。

默阿彌が、小團次と提携し相扶けて幕末の劇壇を風靡したのは、丁度南北が菊五郎の親の松助との關係に似てゐる。今迄の小團次の役者生活と默阿彌の作者生活とは、何れも練習時代だつた。その效も積み思慮も

熟して、爛々華々しき活動期に入るのが安政年代であると思はれる。その時代の、言はゞ門出の作が、この十六夜清心であつた。と同時に、優しい美貌の若女方たる岩井粂三郎が世に認められる様になつた出世作でもある。粂三郎を世に出さうとして、小團次が默阿彌に頼んで出來たものだと傳へる。

但し、この脚色中に、當時喧しかつたお金藏破りの藤十郎一件を入れた爲めに、當り作だつたが、中途興行を差止められ三十五日目で幕を閉ぢた。それまでにも、多少原作に加筆されてゐるかに思はれるが、夫も役に立たなかつた譯である。

背景をお家によつて、八重垣紋三を主人公にしてあるが、作の中心は夫から派生した十六夜清心の作にある。清心に文化年中所刑された鬼坊主清吉を書込んだのは講釋に據つたものである。その清心の兄が上手の鼓の大寺正兵衞で、この人間に藤十郎を書込んである所から官邊の隈にふれたのである。

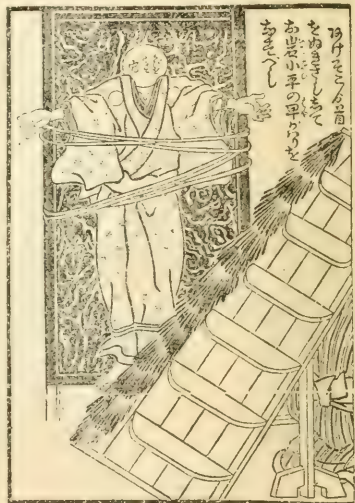
默阿彌が白浪作者と言はれ生世話作者と呼ばれるが、その何れの立場からも本作は傑作といふに難くないと思ふ。南北が惡を惡として生の儘を寫し、そこに一の境地を見せたが、

四谷怪談の一

是を全然美化して了せたのは默阿彌である。如何な惡人も美を持つてゐるかに見えるのが默阿彌劇の特徴である。その美は心の美卽ち善き心と、形の美卽ち世話情緒とに現はされた。十六夜が惡に染まつて、お小夜と名乘り强請、に現れても、憎しみより、先づそのいなせな美に打たれるであらう。終に强請に來た惡としては見えぬのである。

彼は又、淨瑠璃を巧みに利用した作者であつた。彼の使つた淨瑠璃は淸元が多いが、その情調と、彼の作の情調とは全く一致したものであつた。音樂の舞臺化と舞臺の音樂化とが理想的な效果を示したのである。本作の序幕も注意して見ると、興味深い舞臺な事は知れよう。

この作が作者會心のものであつたらしい事は、後、慶應二年の鑄かけ松「浪打込橋間白浪」に同じ技巧を發揮してゐる事や、その翌三年の和尙次郎「善惡兩面兒手柏」が殆ど書替作と見られるのでも知れると思ふ。

原作以來屢々上演されてゐるが、明治十七年二月新富座「柳巷春着薊色縫」と外題が据ゑられて以來、原作の外題よりこの方がよく使はれて來た。今は羽左衞門の當り藝となつてゐる。

板返しの趣向

「粹興吉人傳」の默阿彌像

草双紙に「小袖曾我薊色縫」種清編が安政六年出版されてゐる。十六夜清心の當りによつて編述されたものである。

藤十郎の部分は、明治十八年十一月千歳座「四千兩小判梅葉」として現はれ、晩年を占むる傑作の一とされてゐる。この方も、今菊吉の顔合せ劇の樣になつてゐる。

忠臣藏年中行事

三世　河竹新七作

十二幕十九場。

明治十年五月、東京春木座上演。

年中行事と稱ふのは、勿論各幕を一月から十二月迄に配當して脚色したからである。

四十七人居たといふ默阿彌の門葉中首席を占めたのが勝諺藏、次席がこの新七であつた。彼が立作者になつたのは明治五年であるから、本作は彼の極く初期のものである。而も中々の好評だつたので、直ぐ翌月同座で増補した「忠臣藏後日實録」を上演した程である。

本作を此處に入れた事は忠臣藏が歌舞伎の獨參湯といはれて是非入れたいのと、夫も歌舞伎の忠臣藏を入れたい念願と、搗てゝは、明治物を一種入れて置きたい事等が錯綜した要示として現はれ、結局是か選ばれた爲めである。仕出しの臺詞等に注意されると、如何にも明治ものらしい、散切臺詞が眼につくであらう。その特殊な興味をも覗つたのである事を自白する。

前に說明した曾我と共に、忠臣藏は幾多の劇的題才を含蓄してゐた爲めに、素材の二大分野を示してゐるのである。

仇討快擧のあつて直ぐ十日程後に歌舞伎に仕組まれて三都の流行を來したが、劇として纏つた構成を見せた最初は近松の「碁盤太平記」であつた。この時大星由良之助の名も始めて見えた。爾來操りに歌舞伎に種々な書替が試みられるのであるが、寛延元年八月竹本座上演出雲等の作の「假名手本忠臣藏」が現れるや、爰に從來の忠臣藏の一大集成を見、更に後世への忠臣藏の門戶を開いたのである。合作淨瑠璃で後世へその儘傳

三題噺時代の

はるものが稀な中にあつて、假名手本のみは多く全幕出揃ふのであつた。合作時代の劇としての傑作である事勿論である。是は直ちに歌舞伎にも入つて、寧ろ歌舞伎に於て生命を續けたかの觀がある。

一方、この作の書替へも幾つとなく現れる。明和三年十月竹本座、半二等の「太平記忠臣講釋」は矢間重太郎おりえを書込んで、殆んど目新しくされた。勿論歌舞伎にも直ぐに入る。

是等の作が、全篇、又は一幕物として歌舞伎に移植されると、夫に歌舞伎として更に發展し續けるのである。歌舞伎の忠臣藏で今に生命あるものを見ると、寛政三年九月大阪角の芝居上演、奈川七五三助作「いろは假名四十七訓」が見え、「高田

默阿彌の咄作

の馬場」や「彌作の鎌腹」「鳩の平右衛門」「丹後縞」等が殘された。寛政六年十一月大阪中の芝居上演五瓶作の「義臣傳讀切講釋」からは、「淺草觀音」「植木屋」が傳へられた。この種で有名なのは天保四年三月江戸河原崎座上演、三升屋二三治作「裏表忠臣藏」である。假名手本と實錄とを半々に交へたので、裏表とつけた。其他、「忠浦の太鼓」は安政三年春森田座「新舞臺いろは書初」から、「赤垣源藏」は安政五年五月市村座上演默阿彌作「假名手本硯高島」から、どいふ風に現存するものだけでもまだ中々の數に上る。

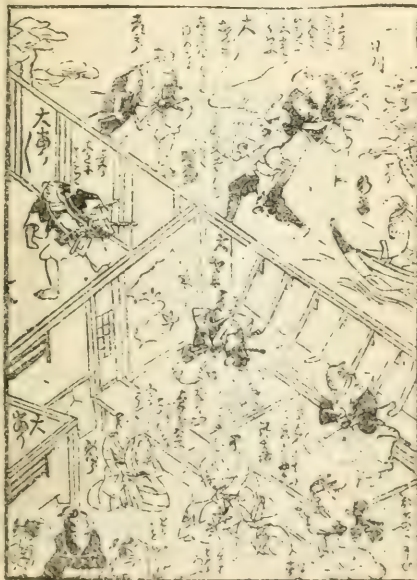
歌舞伎に流行した結果は、當然江戸淨瑠璃に忠臣藏を生んだ。最も激しかつたのは、忠臣藏十一段變りを市村羽左衛門が、弘化四年三月市村座に演じた時である。長唄常磐津淸元大薩摩まで使つた。是は、その儘には傳はらぬらしい。普通上演される所作幕の淨瑠璃は、文政八年三月河原崎

寛政十一年興行の假名手本

座常磐津「道行旅路の嫁入」、天保元年四月市村座、清元「道行旅路の嫁入」、天保二年夏市村座「祇園町一力の段」、天保四年三月河原崎座清元「道行旅路の花聟」、天保八年六月森田座常磐津「契草旅路の嫁入」其他ある。而して是等はその上演の都度毎に、加筆加工される場合がある。

扨、顧みて如何に多くの忠臣藏のある事ではないか。成程忠臣藏は一の國民傳説的素質をもつ。そこから講釋種の忠臣藏が生まれるのも當然至極である。が又夫程な指示を與へたのは、かの假名手本ではあるまいか。淨瑠璃史の上で合作時代といふのは、文學的本質と劇的本質との交錯する關係によつて、種々議論の種を蒔く時代である。良きは良く、惡しきは拙く、夫等は際立つて舞臺效果として現はれるのである。流石の合作流行期にも、各幕が效果をえて、而も一篇の統一を得たものは稀なのであつたが、其意味から見て、假名手本の如きは申分ない傑作だと言へると思ふ。自身に持つ強い魅力が、之を示したので、後世への種々な忠臣藏劇を生産したのであると信ずる。

並木五瓶作の忠臣藏

本作は前いつた通り三世新七としては處女作に屬するが、如何にも彼の機敏な才の認められるものがある。但し、年中行事の趣向は、言はゞ師匠讓りのものと見たい。明治四年の默阿彌の作「四十七刻忠箭計」(とけい)である。子の刻の密議から初まつて、十二時に配した趣向なのである。是を月と案を立て直したものである。だが狙つた興味は全く十二時とは違つた筋を行くので、其點で當時の觀衆からは正直にうけられた事であらう。蔭の配合等は如何にも氣の利いたものと思ふ。先年、帝劇で演じた事があつた。

「いろは假名四十七訓」

以上簡單な解說に過ぎないが、要は脚本を單なる讀物と見ずに、役者を考へ、音色を考へ、彩色を考へつつ、文字が眼から頭に入つた時、聽覺や視覺をも作用させ乍らに讀下して頂きたいと思ふにある。

更に、冷やかに解剖的に接せずして、暖かく包容する態度で過して頂きたいのである。随分野卑な文字もある。下劣な辭句もある。然し、又、夫あるが故に、極

黃表紙「早業七人前」團藏の七役

めて接し易い。赤裸々に相對する事も出來ようかと思ふ。わたくしは思ふ。人間は所詮裸で生れたもの、裸で終るものである。隱し隔てなしに眞心と眞心とで許し合ふのが、一番貴いのでないかと思ふ。その境地を江戸時代の民衆は、無知な中に、羨ましくも營んでゐた事を知る。歌舞伎の如き民衆藝術によつて、氣が附かぬ間に、江戸民衆は赤裸な生活の尊さを體驗してゐたかに思ふのである。

與一兵衛定九郎早變り

元祖 坂田藤十郎

名代 都万太夫座

太夫 大和屋甚兵衛

大名曽我

たいみやうなぐさみそが

兄弟の出立へついしのえんだこ

寺町通
八文字屋
八左衛門

大名なぐさみ曽我

大名なぐさみ曾我

上　鬼王 團三郎　駒引錢　付　庵に木瓜荷ひ賣の市立

下　朝比奈 祐若　臍繰銀　付　手習の筆の鞘抜打の敵

一　曾我の老母　　松本六右衛門
一　五郎時致　　若衆　村上竹之丞
一　禪師坊　　若林四郎右衛門
一　和田娘帚木　　若女　袖崎いろは
一　同妹寄生木　　太夫　霧浪千壽
一　腰元綸島　　山本掃部
一　同三島　　尾上右近
一　古郡左衛門　　若衆　大和川甚之介
一　ゐがらの平太　　櫻山おの三郎
一　虎御前　　太夫　玉川半太夫
一　粧坂少將　　玉村衛門

一　小柴掃部勝重　　櫻山庄七
一　曾我祐若　　霧浪小傳次
一　曾我致若　　道化　金子吉左衛門
一　祐若乳母　　玉川藤之介
一　致若乳母　　早川初瀬
一　朝比奈の三郎　　藤川武左衛門
一　同女房　　袖島源次
一　工藤犬坊丸　　江口甚五郎
一　新開の荒四郎　　三笠丈右衛門
一　荒井の藤太　　荻野折右衛門
一　近江の小藤太　　難波利右衛門
一　八幡の三郎　　秋山加左衛門
一　箱根の別當　　玉川七三郎
一　小姓みお丸　　玉川はんや
一　弟子雲哲　　田島半兵衛
一　道具屋長左衛門　　天井又右衛門
一　鬼王　　座本　坂田藤十郎
一　團三郎　　立役　大和屋甚兵衛
一　其外座中不殘出申候

大名なぐさみ曾我

近松門左衛作

上

華やかなり。大名の行列、對の挾箱、臺笠、立傘、大鳥毛、七つ道具の奴ども、御國入の所作。こゝを晴れとぞ振つたりけり。その次は徒歩の衆、皆一様に黒羽織、菅笠のお小姓衆、大小をしやんと差し、しとやかに振り出す。あとより大名、伊達六法、繻子の髮附立髮や、當世模様の羽織に、鮫鞘の長大小。杖持の竹藪、草履取の庄介、ぎつばを磨き御供す。大名御機嫌一入に、振つた姿ぞ美事なり。所へ家老又右衛門お迎ひに出て、

〔又右〕これは〳〵お芽出たや。誠に殿様には、毎年七月には御參宮をなされます。當年も遊ばされ、道中御堅固にて、今日御下向なされますとあつて、一家中殘らず、あれなる高みまで御坂迎ひに出ました。あれにて御酒を一つ召上がられて下されませ。

〔大名〕おゝ心得た。先づ少時こゝで休んで行かう。

〔又右〕然らば私が上げまする物あり。

と西瓜を切り、鉢へ入れ、御前へ持つて出づれば、殿見て、

〔大名〕道具持の奴どもが精を出した。彼等に呉るゝ。急いで喰へ。

畏つて手に〳〵取つて喰ひにける。又右衛門申すは、

〔又右〕さて、毎年お坂迎ひに、殿様の、狂言が御好きとあつて、一家中の者が承つて、曾我物語を致しますが、毎年〳〵致します故、五郎十郎が身の上をも致し盡しまして、さして變りました趣向も出ませぬにより、殿様の御歸りを待つて、未だ仕組が極まりませぬ。

〔大名〕むゝ誠に曾我をすれば、何時も身が五郎になるが、いづれ三年程もする。嘉例なれば今年も曾我をするであらう。然し五郎十郎も古い。變つた事があらば誰にても申せ。

時に挾箱持藤介畏り、

〔藤介〕誠に曾我をなされますれば、殿様は五郎をなさるゝ。拙者めは十郎役を致します。

又右衛門聞き、

〔又右〕其方が十郎をするも再々ぢや、何度程する。

〔藤介〕されば十郎になりまするも、十度程致します。

〔又右〕むゝ、それで其方を藤十郎と云ふ。

〔藤介〕　さすれば五郎十郎は古う御座ります。それに付いて、私が京へ上りました時、四條の川原へ參り、嘉太夫と申す淨瑠璃を見物仕りました。即ち世繼曾我と申すで御座りました。これには曾我兄弟の者、富士野にて本望を遂げ相果てまして、その兄弟が子に祐若致若と申す、九つと七つの子が御座りましたを、家來鬼王團三郎と申す者が養育致す事を仕つた。これをなされましては何と御座りませう。

大名聞き、

〔大名〕　む丶これは面白い。仕組を覺えてゐるか。

〔藤介〕　則ち本を買うて參りし。

と草紙を差上ぐれば、披き繪を見、

〔大名〕　五郎が繩をかゝつてゐる所がある。

藤介聞き、

〔藤介〕　此處は五郎が賴朝公の前へ出、この後由比が濱にて首を打ちます。そこは樂屋の內でいたします。

〔大名〕　む丶すれば五郎が役も少しの間要る。次の繪を見れば惡人を箱へ入れ、大石で押しつけてゐるがどうぢや。

〔藤介〕　それは御所の五郎丸と申した者が元服仕り、荒井の藤太と名乘り、新開の荒四郎といふ惡人と一所になり、虎少將に無體の戀慕を申すを、朝比奈の三郎が聞いて、二人の者を大石で押しつぶす所で御座ります。

〔大名〕　む丶面白い。この曾我をせう。其方は鬼王になれ。身は團三郎にならう。

〔藤介〕　すれば殿樣とお相手になりますか。忝い。

〔大名〕　お丶殘りの奴も身が見立て丶役付をせう。臺笠の土左衞門は髭が美事ぢや。朝比奈をせよ。

〔土左〕　畏りました。

立傘の吉介罷り出で、

〔吉介〕　私は望みが御座ります。曾我の十郎五郎が子に祐若致若と申す九つと七つの子が御座ります。その弟の七つになる子役が致したう御座ります。

大名聞き、

〔大名〕　變つた望みをする。子役にその髭ではなるまいが。

〔吉介〕　いやこの髭は洗ひますれば皆落ちまする。頭へは子供の鬘をかづき、致したう御座ります。

〔大名〕　む丶然らば致せ。さて、大鳥毛の城介折介は、顏が憎々しい。朝比奈に押殺された惡人にその儘ぢや。城介は新開の荒四郎、折介は荒井の藤太になれ。

槍持七介出で

〔七介〕　私は箱根の別當になりたう御座ります。
〔大名〕　お丶なれ〱。
草履取庄介申すは、
〔庄介〕　さて、女形若衆形は何となされます。
〔大名〕　それは小姓どもの中を見立て、女形若衆形をいひつけよ。
〔庄介〕　畏りました。私は虎御前の兄、小柴の掃部が致したう御座ります。
〔大名〕　お丶致せ。
杖持竹藏申すは、
〔竹藏〕　私はその淨瑠璃をよみ、五郎が申す事を覺えてる居ります間、曾我の五郎に仰付けられませ。
〔大名〕　お丶せよ〱。
時に城介折介つつと出て、
〔兩人〕　やい竹藏。其方が曾我の五郎役をせうとは、偏へに鬼の持つたる餌食を、餓鬼が取らんとする如く、思ひもよらぬ事。汝に似合うた役がある。祐經が子に、犬坊丸といふ臆病者がある。これをせよ、五郎役は似合はぬぞ。
竹藏腹を立て、
〔竹藏〕　何といふ。某に五郎が似合はぬとや。これはもとお慰みの狂言。すでに立傘の吉介は、致若の七つ子の役を

望めども、もと狂言故いたせよとある。其方兩人は憎々しいとあつて、新開荒井の敵役を仰付けられたれば、はや心が邪になり無體を言ふ。山椒は小粒でも辛いぞ。

兩人聞き、

〔兩人〕 何の、おのれが口を囀る。いくらでも五郎が役はさせぬ。

〔竹藏〕 殿様よりはせよとあるに汝等がさせまいとは、堪忍がならぬ。御許されませ。

と脇差を抜かんとする。奴小姓衆立ちかゝり、

〔皆々〕 御前にて狼藉。

とやがて繩をかけにける。大名見て、

〔大名〕 これは當座の喧嘩とは見えぬ。先づ身は頼朝と同じ事。その前で狼藉は、扨は國の母にも云うて來たか。

〔竹藏〕 これは大將の仰せとも覺えぬ。喧嘩は時の花。母たるものが喧嘩をして相果てよと申す親が候べきか。

〔大名〕 むゝ内々に意趣あつての事ならば、此度伊勢道中の途にてせずして、身が前では何事ぞ。

〔竹藏〕 されば彼兩人は、過ぎにし茸狩のかへるさに、由ない口論に付き、身が親を打擲させ、この無念を晴らさんと、心をつくるは何處〳〵ぞ。陽田宮

川明星が茶屋、松坂の泊り〴〵、据る風呂行水昼休み、隙を覗ひ候へども、彼等は日頃一倍酒に朋輩を誘ひ、休むといふても五人三人並びゐれば、もし仕損じては恥辱と存じ延引し、この度五郎の役を望み、相手になつて本望遂げんと存ぜしに、悪口堪忍なりがたく、飛びかゝつて本望遂げ、狼藉者よと朋輩達が相手にならば、某が刀の鐵味をも見せんものを。最前小姓衆に女形の役を仰付けられしゆゑ、はや女と思ひ侮つて、やみ〳〵と縄をかゝつた。小姓衆さへ無かりせば、望みをば遂げんものを。藤介をはじめと歯嚙みをなして申しける。奴ども飛出て、

〔皆々〕　狼藉者にて候へども、此度参宮下向の折なれば、命を御赦されて下されませ。

大名聞き、

〔大名〕　をゝ命をゆるす。さてこれにて直に狂言の序にせう。直に五郎になり、縄をかゝつて屋敷へ帰れ。如何に時致。縄を解き帰さうけれども、只今云うた臺詞が、その儘五郎が詞ぢや。これを助けたきものなれども、朋輩のそねみあれば、急いで由比が濱にて頭を刎ね

大名なぐさみ曾我

よ。疾く〳〵。

と大名は、皆々引具し入らせ給へば、竹蔵は五郎になり、

〔五郎〕 えゝ有難や〳〵。これや文選の言に、晉の文王は、その仇を用ゐて天下を匡し、齊の桓公は、その讎を親しみて、諸侯を覇り給ふとは、今この君の御事よな。弓箭とる人はこの時致にあやかれ〳〵。親の敵祐經をやす〳〵と打滅し、天下の大將軍頼朝公の御前に召出され、只今の如く有難いお言葉にあづかる段、この時致は果報者よ。さり乍ら只今のお言葉を、兄祐成諸共に承る程ならば、如何ばかり嬉しからう。嘸や祐成殿、冥途の旅で待兼ねさつしやるで御座らう。時致追付き奉つて、死出の山三途の川を、手に手をとつて渡らんものを。思へば時致果報の者。二世の契の緣の繩、佛の前の善の綱、社の前の御注連繩、各々手をかけ結緣し、念佛申して給はれ。

とにつこと笑ひ云ひければ、知るも知らぬもおしなべて、皆々袖をぞ濡らしける。屍は土に埋めども、名をば埋まじ人々よ。譽は富士の上もなき、雲井に名をこそ上げにけれ。

かくて曾我兄弟の郎黨鬼王團三郎兄弟は、主なき駒の口を取り、泣く〳〵曾我へぞかへりける。鬼王申すは、

〔鬼王〕 まこと、不定世界ぢやわ。御兄弟の一萬箱王と云ひし時よりも、晝夜附添ひ成人あり、親の敵が討ちたいと、明暮仰せらるゝ故、この度、富士野にて敵祐經を討つて、本望とげ給ふ。我々も未來迄御供と申したれば、それでは誰あつて、曾我の母樣へ知らする者がない。この遺品の品々を送りてくれよ。さなくば七生迄勘當とある故、是非なくかへりた。やい團三郎。そちはこれより曾我へ行き、遺品を進ぜ。その後、御兄弟のお子祐若致若樣を守立てよ。身はこれより高野へ上り出家とげ、御跡を弔ふぞ。

團三郎聞き

〔團三〕 これは近頃無分別で御座る。御兄弟の、我々をあとに殘し給ふは、祐經が一子に犬坊丸といふ奴がある。此奴が祐若致若樣を搜し、殺さんとせう。それ故兄弟の御子達を成人させ、犬坊丸を討たせてくれよとある御心入りで、我々を殘し給ふ。何と合點なされた。

〔鬼王〕 けにさうぢや。坊主になつたりとも、犬坊がお子達を殺したと云ふを聞かば、野心は止むまい。その時還俗せば出家を怯ぢる科。その上役に立たぬ。坊主を止めう。

〔團三〕　いかにも〳〵。憂ひに沈んでゐては爲にならぬ。氣をわさ〳〵と伊達に持たせ給へ。

〔鬼王〕　成程心得た。

〔團三〕　それを聞かうためぢや。お前には意見がある。常に心が伊達過ぎて、女か若衆が通れば、そのまゝ扇を翳して御覽なさるゝ。

〔鬼王〕　いや俺は覺えぬ。今からたしなまう。又そちへも意見がある。滅多にぎごつで腹を立てる。今から物事ほんじやりと、やは〳〵としたがよい。

〔團三〕　畏りました。

と互に誓言を立てる。

〔鬼王〕　さてしばし休んで行かう。この馬を向うの松原へ繋ぎておじやれ。

畏つて團三郎は、馬を繋ぎに行きにける。所へ十六七なる若衆、編笠深く、大小差し、奴一人召連れ通る。鬼王扇にて若衆の尻を叩く。

これはと見かへれば、その扇をいたゞき、

〔鬼王〕　あまり美しさに叩きました。お腹が立ちまするなら、おゐどをさすりませう。

とさすれば、

〔若衆〕　いや苦しうござりませぬ。

といふを手を取る所へ、團三郎戻り、

〔團三〕　これは自墮落な。これ若衆。道を通るなら、つつとなぜ通らぬ。

〔若衆〕　おゝ道通るを其方に習うては通

らぬ。默つてゐよ。
〔團三〕いや丁稚めが、推參な。首引き拔かん。
といへば、鬼王見て、
〔鬼王〕やい。最前荒氣はせまいと、誓言を立て又發つたか。
〔團三〕あやまりました。お通りなされませ。
といへば、若衆見て、
〔若衆〕さては御兄弟さうな。
鬼王聞き、
〔鬼王〕成程、兄弟で御座ります。してお前はどなたで御座ります。
若衆、笠をぬぎ、
〔若衆〕私は鎌倉にて和田の末の子、古郡左衛門と申す者ぢやが、曾我兄弟の郎等鬼王團三郎の方へ用事あつて呼びに參る。
〔鬼王〕さては左樣か。その、鬼王團三郎と申すは我々で御座る。お返事をなされて下され。
〔左衛〕むゝすればよい所で御目にかゝつた。親義盛申すは、帚木寄生木と申して、私の姉が二人ござる。これをこなた方へ進ぜ、夫婦になしたいとある。
〔鬼王〕これは忝い。
といへば團三郎引きのけ、
〔團三〕そのお娘御達は、主人五郎十郎殿と緣を組み給へど、御兄弟は虎少將

と深く言交はし、その御中に萠若致若と申す御子がある故、成人させ、敵の子犬坊丸を討たさねばならぬ故、我々は女房持つ事はなりませぬ。

左衛門聞き、

〔左衛〕 それは猶以ての事。三浦は一門廣ければ、後立になつて討たさう。

〔團三〕 いや／＼人を頼んでは手柄にならぬ。

鬼王は左衛門に近づき、

〔鬼王〕 私は合點で御座ります。彼奴にも合點させませう。さて、二人のお娘御はどちらが美しう御座ります。

〔左衛〕 それは俺が姉様達ぢやが、どなたも美しい。

團三郎は、

〔團三〕 これ、兄ぢや人。何をいうてぞ。

と叱れば、左衛門は、

〔左衛〕 これ、此方はあまり堅い。

〔團三〕 いや、堅うは御座りませぬ。私がこのやうに申さねば薬袋がない。して、姉御が美しう御座りますか、妹御がよいか。よいのを私が持つて、わるいのを兄にあてがひます。

と云ふを、鬼王立聞きし、

〔鬼王〕 それは手が惡い。

といへば、肝を消し、さて、和田殿へは、

〔團三〕 心得ました。

と返事をすれば、左衛門は歸らるゝ。

兄弟は曾我の館へ行き見れば、大門に貼紙あり。
「此曾我の館、賴朝公より犬坊丸に下さるゝ。荒井の藤太承つて此屋敷を賣拂ふ。望の者どもは入札を致す可きもの也。」
〔團三〕 さては曾我の屋敷を犬坊丸に下され、入札で賣るとや。あた忌まくしい。
と引きめくらんとするを、鬼王押へ、
〔鬼王〕 やれ待て。賴朝公といふ書付あれば、破つては科になる。敵の犬坊がこれへ來るであらう。所をとびかゝつて本望遂けん。
といふ所へ、乘物二挺 侍腰元附添ひ來り、
〔侍〕 これは此方へ買うた屋敷へ又貼紙がしてある。面倒な。
と引きめくり、皆中へ入る。兄弟は後なる腰元を呼返し、
〔鬼王〕 只今のは屋敷をお買ひなされた方さうな。お名は何と申します。
〔腰元〕 彼方は和田樣の御娘御、帚木寄生木樣と申すが、曾我の御家來鬼王團三郎殿と、御夫婦にならせ給ふ故、曾我の屋敷を餘の人に買はしてはと思召し、お買ひなされ、卽ち曾我の老母へ進ぜられた。後な乘物が老母樣で御座んす。
〔鬼王〕 さては左樣か。卽ち鬼王團三郎とは我々で御座る。御兄弟の遺品を持つて參つた。この由申して下され。
〔腰元〕 さてはお前方か。申す迄もない。御入りなされませ。
と伴ひ中へ入りにける。帚木寄生木二人の姬は木蔭より見て、
〔寄生〕 どうでも弟の團三郎樣がしやんとしてよいっ
姉聞き、
〔帚木〕 俺は團三郎樣と夫婦になる。そなたは鬼王樣と夫婦になりや。
〔寄生〕 姉樣は何をいはしやる。こなさまは總領ぢやによつて、兄御と夫婦、わしは妹故、弟の團三郎樣と夫婦になる。
〔帚木〕 いやそれは昔の事。俺が團三郎樣と夫婦ぢや。
とせり合へば、腰元縮島三島立出て、
〔縮島〕 なう姉樣。私らは只今迄奥にゐて見ましたが、又兄御程あつて鬼王樣は、人挨拶諸事に御心が付き、よい殿御ぢや。やはり兄御になされませ。
〔帚木〕 おれも碌に見ぬ。とくと見たい。呼び出されまいか。
〔縮島〕 されば今は素襖を召して、母御へ遺品を渡してぢや。どうぞ呼出して見ませう。
と奥へ行き、鬼王を連れ出て、

〔給島〕　これに暫時御座つて下され。
といへは、うつかりと空を見てゐる。姉は見
て、
〔帯木〕　どうやら阿房らしい顔ぢや。
妹、氣の毒がり、
〔寄生〕　いや先づ、挨拶、笑ひ顔を見や
しやんせ。
と鬼王が傍へ行けば、
〔鬼王〕　其方は見知らぬが誰ぢや。
〔寄生〕　私は腰元で御座んす。ちと笑う
て下さんせ。
〔鬼王〕　何の可笑しい事もないに笑はる
るものか。
〔帯木〕　私がためによい事がある。頼み
ます。
〔鬼王〕　そんなら。ハハア。
と笑へば、姉は、
〔帯木〕　さても、にべのない笑ひや。
と腰元引連れ入り給ふ。後にて鬼王、妹をつ
く〲見て、
〔鬼王〕　はてさて其方は美しい。折々は
お見舞ひ申さう。可愛がつて下され。
とにつこと笑へば、
〔寄生〕　その笑ひを、先程して下さんす
れば埒があくに。
鬼王は、
〔鬼王〕　さて問ふ事がある。姉がよいか
妹がよいか。
〔寄生〕　それは姉樣が美しい。妹御は色
が黒うて、目が片面は藥罐程大きな。
〔鬼王〕　それは片輪ぢや。姉に極めう。
これを聞いたら團三郎が持たうといふ
まい。騙して云付けて置かう。
と呼び出し、
〔鬼王〕　俺は姉と夫婦になる。そちは妹
を持て。
〔團三〕　いや只今仰せられたを聞いてゐ
ました。妹の藥罐は嫌で御座る。どう
でも姉ぢや。
といへば、寄生木を傍へ招き、
〔鬼王〕　姉に會はして仕樣がある。呼び
給へ。
といふ。扨、團三郎に近付き、
〔鬼王〕　成程其方次第にせう。姉御の此
處へ出給ふ程に、刀をするりと拔いて、
これ〲いやか、やつこのよいと
鞘へ差し、後で足手を背返し、虚空を
摑む眞似をせよ。それが姉御の好きぢ
や。
といふ所へ出で給へば、鬼王は、
〔鬼王〕　あれに團三郎がゐまする。
とそばへやれは、團三郎心得たと刀を拔き、
右のやうにすれば、姉は肝を潰し、
〔帯木〕　あれは何事ぞ。
鬼王聞き、
〔鬼王〕　癲癇と申す病で御座ります。
姉聞き、

〔帶木〕 いや〳〵。私はこな樣と夫婦ぢや。
〔鬼王〕 それに違ひはないか。忝い。
と抱き付けば、團三郎見て、
〔團三〕 それは違うた。俺が夫婦になる筈ぢや。
〔帶木〕 妹は、はてよう御座んすわいの。妹と夫婦にならせ給へ。
〔團三〕 いや妹の藥鑵は嫌ぢや。
〔寄生〕 それは嘘ぢや。妹は私ぢや。
〔團三〕 此方がさうか。これはよい。
と抱き付けば、姉は、
〔帶木〕 おゝ又病が起らうぞ。
〔團三〕 いや今のは兄がせよといはれた故、故意とした。病はない。
〔鬼王〕 彼奴をはめると思うて、俺がはまつた。
と打笑ふ所へ、曾我の老母立出て、
〔老母〕 おゝ祝言が濟んで芽出度い。誠に歎きの中の悦びぢや。和田殿の娘達を曾我兄弟に許嫁ありしに、富士野で相果てたる故、兄弟ぢやと思ひ見たいとあつて、鬼王團三郎と娶し給ふとある。俺も兄弟の子ぢやと思ふ間、孝行に頼む。
〔鬼王〕 これは冥加ない御言葉。
と悦ぶ所へ、侍、馳せ來り、
〔侍〕 荒井の藤太申します。これに和田殿娘達が御座るとある。屋敷を渡し、道具を今日賣拂ひます故、追付これへ參る。
と申し、使は歸れば、鬼王團三郎は、
〔鬼王〕 我々が會うては惡い。
と老母諸共中へ入る。
所へ荒井の藤太、道具屋共を大勢連れ來り、
〔藤太〕 さあ曾我の貧乏人の道具を市に立て賣るぞ。二足三文に買へ。定めて曾我の一類が買ふ事があらう。それと見たらば値をつけ上げ、買はすな。早く〳〵。
といへば、道具屋長左衞門床几へ上り、
〔長左〕 さあ先づ烏帽子いくら。
〔○△〕 一文々々。
〔長左〕 さあ曾我の一もん、二文か。おつと、まけてやらう。
と鍬細引を市に立て、
さあきつい物を出すぞ。これは曾我の十郎が大磯の虎が所へ遣うた文。又金を借りにやつた狀ぢや。女郎買ふ者はよい慰みぢや。さあ、いくら。
〔○△〕 おつと一兩。
と値をつくる。鬼王團三郎は編笠深く忍びしが、これを人手へやりては恥辱と思ひ、三兩につくれば、さてこそと道具屋ども七兩につくる。鬼王せいて、
〔鬼王〕 十兩。
〔長左〕 おつとまけてやる。さあ名は誰

ぢや。
〔鬼王〕いや曾我の在所の者ぢや。金は
持て來てやらう。
〔長左〕名が知れねば、今取らねばなら
ぬ。
と取りかへす。荒井の藤太見て、
〔藤太〕その文五十兩でも賣るな。身が
買うて一枚づつ衾具にし、諸大名を申
入るゝ時、廣間へかけ並べ、これが曾
我の瘦浪人が、傾城狂ひの状ぢやとい
はば、よい笑ひ草であらう。扨、殘りの
道具は一所にして賣つてしまへ。身は
屋敷を改め渡す。
と皆奥へ入りにける。鬼王は、
〔鬼王〕やい團三郎。そちは殘つて箱根
に御座る祐若致若を守り奉れ。身は藤
太めを討ち果たす。
〔團三〕いや、こなた兄甲斐に大人しう
子達を守り育て給へ。藤太めは身が手
にかくる。
〔鬼王〕いや／＼身が討つ。きかぬと七
生迄勘當ぢや。
〔團三〕勘當面白い。この上は藤太が首
取つて其方へ打ちつけて見せう。
〔鬼王〕をゝ打ちつけらるゝか、おのれ
に打ちつくるか。今に見よ。
と門の中へ切入れば、
〔長左〕やれ夜討よ。
とあわてふためき、道具屋共うろたへて逃げ
出づる。近江の小藤太八幡の三郎切つて出づ
るを、心得たりと、兄弟一々に切り伏せる。
所へ荒井の藤太、後より鬼王を取つて伏せ危
く見ゆるを、團三郎駈付け切付くれば、かな
はじと逃行きける。何處迄と追つかくる。所
へ古郡駈付け、
〔古郡〕先づしばし。
と押し止める。鬼王は、
〔鬼王〕やれ團三郎。兄は手負うたを見
捨てゝ行くか。
〔團三〕なに手負はせ給ふか。
と驅け戻り、
〔團三〕勘當を許して下されませ。
〔鬼王〕をゝ許す／＼。其方を留めう爲
ぢや。手は負はぬ。先つ近江八幡を打
つたれば氣も晴れた。藤太は何時討た
うともまゝぢや。先づ人々を伴ひ曾我
へ歸らう。
と老母娘達皆々伴ひ、兄弟扇をひらき、
〔鬼王〕〔團三〕松の葉の散り失せずして、まさ
きのかづら幾千代かけて。
と祝言謡ひ立ちかへる。兄弟の心の中ぞゆゝ
しき。

下

虎御前少將は比丘尼の姿となり、尼寺へ引籠
り、曾我兄弟の後を弔ひ、佛へ仕へのため水
を汲みに井戸へ來り、釣瓶を下し、

〔虎〕　これは面妖な。昨日迄汲まれた
に、水が滴上らぬ。底も暗うて碌に見
えぬ。
といふ所へ、
〔井掘〕　井の底〳〵。
と呼ばはり來る。幸ひと、
〔虎〕　これ、井底。よいのがあらば、
一つ二つあてがや。買はう。
井底掘、腹を立て、
〔井掘〕　鈍な奴がある。菜かなんぞ賣る
やうにあてがへとは。賣僧坊主めが。
といへば、
〔虎〕　やい、己を賣僧とは憎い事をい
ふ。井の底〳〵と云うて歩く故、己は
持つて來て賣るかと思うてさういう
た。
といさかへば、少將尼は、
〔少將〕　いや、これは聞きあやまりぢや。
嬲るではない。井の底の水を汲めども
上らぬ程に、ようして下され。
〔井掘〕　お前のやうに仰せられますれば
聞えまする。何ぞ落ちてあるもので御
座りませう。
と井の中を見、
〔井掘〕　何やら丸い物が見える。やあ、
動くわ。
と逃げ退き、
〔井掘〕　これは知れました。盗人めで御
座りませう。尼寺ぢやによつてこゝに
隱れてゐて、夜になつて寺へ入り、盗
まうといふ事ぢや。憎い奴の。仕樣が
ある。
と錨に繩をつけ井戸へ下し、
さあかゝつた。
と皆繩を引上ぐれば、十七八なる美しき女な
り。
これは此方は何故はひつてゐるぞ。
〔女〕　私は男と夫婦いさかひをし、こ
の井戸へ身を投げました。即ち松の木
へ書置を懸けて置きました。死なして
下され。
虎聞き、
〔虎〕　さてはさうか。こなたはあやか
り者ぢや。
井戸掘聞き、
〔井掘〕　身投ぐるをあやかり者とは。
〔虎〕　されば彼方は男があればこそ、
夫婦いさかひをし出し給へども、緣が
切れねば又夫婦になり給ふ。二人の尼
は夫が死し給ふ故、せめて菩提をとは
んと、かく出家となりました。夫婦いさ
かひの様子はどうぞ。此方は何人ぞ。
〔女〕　いやそれは云ふ事はなりませぬ。
〔虎〕　よい。松にある書置で知れう。
と拔き見て、
こな樣は朝比奈の三郎樣のお内儀千種
樣か。私は虎少將がなれのはてにて御

座んす。

井戸掘これを聞き、

〔井掘〕 さては千種か。俺は其方とは胤がはりの弟ぢや、久しや〳〵。

〔千種〕 いや〳〵。尤も胤がはりの兄樣、十郎樣五郎樣といふはあつたが、其方は知らぬ。

〔井掘〕 おゝ尤もぢや。身は親河津が死して、その忌の間に生れし故、名を隱亡といひしが、父が菩提をとはさんと、越後の陸上へ上し、出家せし禪師坊よ。曾我兄弟がためには弟、そちがためには兄ぢや。これ見よ。

と頭の鉢卷を取れば、男の附髮取れ、坊主なり。千種見て、

〔千種〕 さては禪師坊なればのがさぬ。

と合口拔き、つきかくるを引つたくり、

〔禪師〕 身に逢うたらば悅ばう所に、却つて手向ひするは何事ぞ。

千種聞き、

〔千種〕 されば私が朝比奈樣にたのまれたも此方故ぢや。これを見給へ。

と狀を出せば、

〔禪師〕 實に、見れば俺の手のやうな似せ筆ぢや。むゝ聞えた。この度、鬼王團三郎が、和田の娘達と夫婦になりたれば、朝比奈とも一門、それを敵がいやがり、某が似せ狀を造り、朝比奈と其方が緣を切らし、その上で鬼王團三郎を討ち果たさせんためぢや。某朝比奈方へ行き、この段々を申し、そちを呼びかへさせう。氣遣ひすな。それ迄は御兩人へ預くるぞ。

と禪師坊は朝比奈屋敷へ馳せ行きける。人々悅び寺の內へ入り給ふ。所へ十七八なる若衆かけ來り、編戸を叩き、

〔若衆〕 此處へ朝比奈のお內儀は見えませぬか。

といへば、

〔虎〕 いや〳〵こゝには御座らぬ。

〔若衆〕 然らば申し置く事あり。某は和田の從兄弟に荏柄の平太と申す者ぢや。朝比奈の三郎はお內儀が見えぬとあつて、方々を尋ねあるく。若しお內儀が此處へ來り給はうとも、朝比奈の尋ね來らば、これには御座らぬといひ、構ひて會はし給ふな。會うたら怪我があらう。これを賴む。

と云ひ捨てかへりける。その後へ朝比奈の三郎義秀は、大童になつて馳來り、編戸を崩るるはたゝ叩き、

〔朝比〕 身は朝比奈ぢや。女房めが家出をした故、侍共に追つかけさせたれば、この寺へ入つたといふ。急いで出せ。

虎少將これを聞き、

〔虎〕 いや〳〵これへは見えませぬ。餘處を尋ね給へ。

〔朝比〕 むゝいつはりを云うて會はさぬな。いで、戸を踏み碎いてはひらん。

といへば、

〔虎〕 あゝこれ／＼。此處は尼寺で男は法度ぢや。制札を見給へ。

朝比奈うしろを見れば、

〔朝比〕 何々、「此尼寺へ十歳より上の男入るべからす。右大將賴朝在判。」南無三。鐵壁でも踏み碎く某なれども賴朝公の制は破られぬ。

とあきれる。女房は虎少將にいふは、

〔千種〕 あのやうにきつうても、女房にあうてはたわいがない。

〔虎〕 そんなら今の書置をこし給へ。

と取り、

もし朝比奈樣。お內儀かは知らぬが、先程こゝへ御座つて、これをこなさまへやりてくれというて、置いて御座つた。見させ給へ。

と絹戸の外へ投げ出せば、取り上げ見、

〔朝比〕 何々、「由なき疑をうけ、言譯立ちがたく、身を徒波の底に沈め候。一遍御回向を賴む。南無阿彌陀佛。」扨は死んだか。可哀や。

と大聲上げ泣く。女房見て、

〔千種〕 あの心なれば會ひませう。

と云ふを、朝比奈聞き、

〔朝比〕 今のは身が女房の聲ぢや。さては俺をだました。憎い奴の。

と戸を打破り中へ入れば、夜中なれば虎はそのまゝ火を消す。朝比奈は、

これは火を消した。女房は何處にゐる。

と探り、虎を捉へ、

これは衣を着たか。尼にしてはならぬ。

と衣を取り、懷中へ入れ、

これは髮も切つたか。

といへば、女房は髢の添を出し、

〔虎〕 わしはこの寺の尼ぢや。

と附け聲すれば、

〔朝比〕 何をいふ。この髮をくゝり附け、其方が親の祐信に渡さねばならぬ。

と髢をば虎が頭へ結ひつける。所へ少將火を持ち出づれば、千種はその儘奥へかくるゝ。

朝比奈、顔を見れば虎なれば肝を消し、

さては此處には居ぬか。

と歸らんとするを、虎押し止め、

〔虎〕 歸す事はならぬ。賴朝公の制札を破り、尼に髮を結ひ衣を剝ぎ、出家を還俗させ給へば、この上はこな樣の女房になる。

朝比奈、迷惑し、髮をほどき衣を返し、

〔朝比〕 あやまつた。堪忍せよ。

〔虎〕 そんなら師匠の御寮樣を呼びて來る。その間、この戸棚の中へ入り給へ。

と朝比奈を中へ入れ、錠下しゐる所へ、新開の荒四郎侍引具し驅け來り、

〔新開〕やい侍ども。斯様に顔へ紅を塗り、朝比奈に似せ來つたは、曾我が子共此處にゐるとある。それを奪ひ取らんためぢや。

と云ふ所へ、禪師坊驅け戻り、

〔禪師〕それなるは何者ぢや。

〔新開〕身は朝比奈の三郎よ。

〔禪師〕扨は左様か。某は禪師坊で御座る。聞けば某が妹方へ、こなたを打ち、その後頼朝公へ怨みをなさんと狀を遣はし、それ故、女房を去り給ふとある。全く身はやらぬ。何者が左様には申した。

〔新開〕おゝこの寺の虎少將が狀を持つて來た。これは曾我はこの世に無き故、敵にたのまれ其方と身と打果たさせんためよな。この上は子供を彼等が手には置かれぬ。奪ひ取り此方で育てん。

禪師聞き、

〔禪師〕私が搜し申さん。

と寺の中へ入りにける。新開は、

〔新開〕又禪師坊に一ぱい喰はした。子供を奪ひ打殺さん。

と奥へ行く所へ、虎少將驅け出づるを引捉へ、

祐若致若は何處に在るぞ。君よりの上意ぢや。急いで渡せ。

〔虎〕二人の子供は箱根へ上し置きました。

と云ふ。所に戸棚の戸を中より叩く。

〔新開〕　さてはこの中へ隠し置く。これ禪師坊。この錠ねぢ切り、朝比奈が力を見せん。

とねぢ切れば、中より朝比奈飛び出で、突立てば、新開怪顛す。禪師見て、

〔禪師〕　此奴は何奴ぢや。

と引き退けんとすれば、足を取つて投げ拋れば、禪師肝を消し、

さてさて強い奴かな。これ朝比奈。こなたの力で引き出し給へ。

新開聞かぬ顔してゐるを、朝比奈首攫んでひしぎ付くる。所へ千種出で、

〔千種〕　なう禪師様。夫の朝比奈様はこの御方ぢや。

朝比奈聞き、

〔朝比〕　此方が禪師坊か。疑うたれども、悪人が知れたれば心が晴れた。これ新開顔へ紅を塗り、身が姿となり、子供を奪ひ殺さんとや。厚顔な事ばかり。

と打笑へば、新開は、

〔新開〕　えゝあらはれた。これ迄。

と打つてかゝれば、

〔朝比〕　推參なり。

と打ちつくれば、敵はじと逃げて行く。朝比奈は侍どもを十人ばかり一つ繩に括り、

新開めは重ねて討たん。先づ皆身が屋敷へ來れ。

と皆引連れて歸らるゝ。

こゝに箱根の別當の弟子雲哲は、太鼓をたゝき、祐若は鉦を叩き、乳母諸共、
〔皆々〕致若をかへせ〳〵。
と呼ばはる。雲哲は、
〔雲哲〕なう、向うから来るが致若さうな。あれが曾我の五郎が子といはれうか、あの形わい。
といふ所へ、七つ子の致若は、踊り狂ひ来りつゝ、乳母を見付け、
〔致若〕なう乳呑まう。
と抱き付き、ねてゐて祐若が乳母の、巾着をあけ、錢を取るはといへば、その儘かへし、雲哲が懐中にある錢を足にて取れば、
〔雲哲〕これは盗人よ。
といふ所へ、小姓みいお丸出て、
〔み丸〕お師匠様、御機嫌あしい。
といふ所へ、別當出て給ひ、
〔別當〕やい致若。汝は護摩の壇の御不動様の頭を、何故打落した。
と散々打擲し給へば、致若泣き〳〵、
〔致若〕不動とは何ぞ、あれは佛様ぢや。俺は敵の工藤と心得打落しました。
〔別當〕むゝ子心にさう思うたれば尤も。扨又さもしい錢は何故盗んだ。
〔致若〕されば私が母様は、虎少將といふ傾城で、人が買うて錢があつたが、今は尼になつて鉢開き給へば、せめて摘菜買はしやる錢にやらうと思うて、孝行のため盗みました。
〔別當〕さてはさうか。子心にしをらしや。そんなれば堪へる。
との給ふ所へ、荒井の藤太犬坊丸を連れ、侍引具し来り、
〔藤太〕これ〳〵別當。祐經遺言故犬坊今日寺入さする。頼み申すぞ。
〔別當〕心得ました。幸ひ手習の時分ぢや。いざ筆始なされ。
と夫々に机を直す。犬坊机下座なれば、
〔犬坊〕これはどうぢや。
〔別當〕さればこの山の作法で、一時でも遅う御座つたのが下座で御座る。
〔犬坊〕いやどうあらうとも上座へ直せ。又曾我が子供があると聞く。其奴等に硯の水を汲まし身に教へよ。
〔別當〕それは兄弟子が教へる法なれば致若教へよ。
と是非なく机を上へ直し、致若顔ふくらし、犬坊が手を取りいろはを教へれば、
〔犬坊〕鈍な教へやうぢや。
とさん〴〵叩く。所へ虎が兄小柴掃部一散にかけ来り、荒井の藤太犬坊を取つて抛る。所へ新開馳せ来り。
〔新開〕やい、今日犬坊を寺入りさせたは、曾我が子供これに在りと聞き、其奴等を殺させんため、人を切る手習にこした。
掃部聞き、

〔掃部〕 むゝ身は文盲第一なれども、左樣に贅を吐く惡人を切る手習を覺えた。先づいろはの四十八字は兵法の四十八手。それ、いの字を以と讀ませ、以つて開いて車切。さあ身が寺入りした。兄弟子ぢや。犬坊敎へよ。

〔犬坊〕 むゝ美事ならふか。

〔掃部〕 おゝ習うて見せう。

〔犬坊〕 心得た、敎へう。

と犬坊手を持ち、いろはを敎へ、組伏せんとするを取つて拋れば、新開荒井、致若を手込めにする。所へ虎少將千種、和田の娘帝木寄生木古郡、皆鎧を着て驅け付け、「こは何とせん」といふ所へ、朝比奈の三郎、大童にてづか〳〵と來り、

〔朝比〕 騷ぐまい〳〵。やい致若を返さぬか。さらば受取りに參らう。

と步み寄れば、恐れて致若をつき放し、

〔荒井〕 これは喧嘩ぢや。尋常にさせたがよい。

〔朝比〕 おゝ然らば相手むかひにせよ。

大坊聞き、

〔犬坊〕 あの子供を相手にはせぬ。

朝比奈聞き、

〔朝比〕 やい致若。元服して相手になり、敵を討て。

と剃刀にて髮を剃り、角前髮にし、振袖を短く切つて捨てれば、致若は、

〔致若〕 さあ男ぢや。のがさぬ。

といふ所へ、花柄の平太、曾我が家の旌を持ち驅け來り、

〔平太〕 賴朝公より曾我が子供へ下さるる。犬坊新開荒井を討てとの上意ぢや。

〔致若〕 こは忝い。

と一々に取つて伏せ、

〔一同〕 芽出度い〳〵。曾我の狂言は是迄。いざ酒呑まう。

と皆勝手へ入りにけり。

八文字屋

八左衛門板

上 風流女 かつら川づり
中 八幡大名 付 いもせのかさゝぎ河
下 手桶へぬき石娼 付 思へいろ橋の象

好色傳受

三だんつゞき せりふのもど

并ニ 天王さいもいのたいこ わらしべ太夫どを せんちうわすれ てうさやうさ 千秋万歳楽

・名代 早雲長太夫
・座本 斎仙重良
・狂言作者 山嶋荒十郎

狂言役者替名之次第

役	役者
橘兵部太夫後室妙壽院	安田吉郎次
同　姫みさきの前	玉川半太夫
弟橘松五郎	藤田靜馬
腰元青葉	芳澤小せん
同　若葉	唐松勝三郎
同　下葉	荻澤八汐
今川式部	竹嶋幸左衛門
大ち段之丞	藤川武左衛門
同弟林之助	村上竹之丞
橘大造	柴崎龍左衛門
淺野數馬	櫻山林之助
宇津浪之助	筒井千太郎
松ヶ枝	すき新十郎
夕顔	袖崎いろは
撫子	岩井勝彌
松浦傳七	藤田藤右衛門
玉木粂之進	川上三郎右衛門
石井長藏	高岡林右衛門
袖垣彌忠太	梶川千左衛門
花かい又七	かま田瀧右衛門
瀬川平助	三わら彌右衛門
侍	大島源右衛門
同	坂本清左衛門
同	岩井半三郎
同	生嶋四郎左衛門
同	大山彌三左衛門
同	澤村十郎次
園浦木八郎	くが六郎右衛門
今川郡右衛門	柴崎林左衛門
藥鑵屋又兵衛	南北三ぶ
女房おせん	芳川尾上
玉で新之丞	出來島小三郎
がん兵衛	伊藤爲右衛門
座本	哥仙十郎兵衛

上風流女　付り　かつらの川がり

舞臺に、桂川のきはに、みさきの前手枕して寢入り居給ふ。腰元青葉若葉下葉附添ひゐる。附舞臺より數馬浪之助がん兵衞歌藏いづれも網を持ち出る。數馬、みさきの前の寢てゐ給ふを見て、

〔數馬〕浪之助殿。あれさて大事ないもの〻。

浪之助　されば、美しい上臈で御座る。流石、都程御座る。あのやうな美しい上臈の豐かにして御座るを、誰が見る者も御座らぬ。國許で此方樣や私がちとだてな風をして、町を通りますと、はや目に立てます。

數馬　如何にもさうで御座る。はて都では美しい上臈達がある處ぢやによつて、珍しう思はぬで御座る。扨あの上臈を何人と見立てさしやつた。

浪之助　私は吉峯參りの下向と見ました。今から歸りても日は高し。此處で慰み、日暮しに歸らうといふやうな事で御座ろ。

數馬　これはよい見立てで御座る。此方に吉峯參りと見立てられて物がないわいの。して歌藏は何と見立てた。

歌藏　私は美しい上臈が寢て御座ると見たてました。

數馬　はて譯も無い。がん兵衞は何と見たてた。

がん兵衞　私は團扇の判じ物と見たてました。

數馬　それはどうした事ぢや。

がん兵衞　されば、どやくやと譯が知れませぬ。

數馬　何をいふやら。あれ〳〵向うの岸に、いかい事、鮎があそこへ行く。網を打て。

（と云うて四人乍ら本舞臺へ移る。）

がん兵衞　私網を打ちましよ。

數馬　こりや〳〵、上臈の休みて御座る所へ網を打つたらば目が覺めましよ。要らぬもの。

がん兵衞　目の覺めませぬ、音のせぬやうに、打ちましよ。丸になりとも、菱になりとも御望み次第で御座ります。御氣遣ひなされますな。

（というて姫の前の川へぱつと網を打つ。姫腰元に水かゝる。網の音に驚き眼覺ます。がん兵衞逃げ歸る。）

數馬　さて〳〵己がいはぬ事か。麁相して知らぬ振りしては居られまい。詫言に人を遣りましよ。

浪之助　一段よう御座りましよ。

数馬　歌藏。あの方へ參つて申さうは、唯今は麁相なる事を致し、何とも迷惑に存じます。御詫言のため人を以て申します。又御慰みにもなりましよば、美しい魚が御座ります。御目に懸けましよかと申してこい。

歌藏　畏つて御座ります。

（というて姫の前へ來て、口上の通りをいふ。姫聞き、）

みさきの前　むゝ。其方(そなた)は内の人か。名は何といふぞ。

歌藏　歌藏と申します。

みさき　はて、しをらしい名の、よい男ぢやわいの。

歌藏　何方(どなた)も左樣に仰しやります。

みさき　歸りやつていうて給(たも)らうには、御念の入りました御使で御座ります。水がかゝりましても、些(ちつ)とも大事御座りませぬ。とてものお情に、願くは此方(こな)樣(さま)の御手にかけて此深い處へとんと沈めて下さりませというてたも。

（歌藏呆れたる顏付して、「さう申しましよ」、というて歸り。）

歌藏　扨々どうもたまられた物では御座りませぬ。あの方に仰しやりまするは、濡れました事は些(ちつ)とも大事御座り

上　風流女　付り　かつらの川ぐり

[illegible]

ませぬ。願くは此方様の御手に懸けられ、此深い處へとんとはめて下さりましたら、忝う御座りましよと仰しやります。

(というて居る所へ、腰元青葉銚子盃持ち來る。)

青葉　申し御姫様の仰しやります。「先程よりあなたこなたとなされまし、御心盡きなされましよ。折しも、酒など持合はせまして御座ります。御氣晴しに參つて下されましたら、忝う御座りましよ」との御使に參りまして御座ります。

數馬　これは忝うこそ御座りまずれ。浪之助殿、此方から參れ。

浪之助　いや先、此方から取上げなされ。

數馬　これはあなたからのお盃で御座る。内々に知らしやる通り、わしは上臈の盃は遠慮致さねばなりませぬ。

浪之助　誠にさうで御座る。然らばわしが飲うでさしましよ。

(というて飲みて數馬へさす。數馬頂き盃收め、青葉に對ひていふやう。)

數馬　扨、御歸りなされては、御姫様へ宜しう御禮を申して下され。

青葉　畏りまして御座ります。

(というて銚子土器持ち歸らんとするを、

がん兵衛呼戻し、盃を水で洗ひ返す。）
みさき　扨も〳〵何故に盃を洗はしたぞ。あのお人様の盃を頂かう爲に遣つたに。あゝ辛氣。何とぞ、こゝへ呼寄せればしてやつたものぢやが。どうぞ呼寄する思案があらうものぢやが。
（というて、みさき腰元案ずる。）
みさき　あるぞ〳〵。若葉。そちはあそこへ往て、妾が前の川に、いかい事魚が居まする程に、獲つて下されませいというておぢや。
若葉　畏りました。
（というて數馬前へ行き其由をいふ。）
數馬　如何にも心得ました。成程、易い事で御座ります。申付けて取つて進ぜましよと仰しやりて下され。
（若葉歸り、其由みさきの前にいふ。がん兵衛打網持ち、姫の前にて網を打たんとする。姫見給ひて、）
みさき　コレ〳〵、又其方か。
がん兵衛　旦那、魚を獲つてあげませと申付けまして御座ろ。
みさき　其方なら魚が往んだ。
（といへばがん兵衛興さめ顔て。）
がん兵衛　はあ。それに御座りませ。（というて逃歸り、數馬に斯くといふ。）
數馬　これは身共が誤つた。おれに獲

つて呉れとの御頼みに、内の者に申付けたによつて、御腹立は御尤もぢや。御座れ、往て獲つてやりましよ。

(といふて數馬は掬網を打ち、浪之助打網を打引き、數馬魚を掬ひ取り、みさきの前、盃持ち數馬が傍へ寄り、これへ下さりませいと盃へうける。)

みさき　申し、此魚は何と申しまするな。

數馬　これな鮎と申します。

みさき　何故に鮎と申しますな。

數馬　はて、あいとしいによつて鮎といふさうに御座ります。

みさき　はあ、申し。こな殿は前にから此盃の内を、いかう眺めさしやりますが、何故に眺めさしやります。

數馬　されば。最前お盃を下されました時は、うつかりと氣が付きませなんだが、今見ますれば、盃の中に歌が御座ります。それで眺めます。

みさき　えゝ、此歌な。これはお前と妾とが仲の歌で御座ります。此歌の心、御合點で御座りましよ。

數馬　いや魚がちらついて見えませぬ。

みさき　讀みましよ程に聞かしやりませ。『廻り會ふ今日は彌生のみかは狩、名に流れたる花の盃。』お前と妾が仲の歌で御座ります。數馬樣。

數馬　これは合點のいかぬ事で御座る。二人が仲の歌ぢやの、數馬殿と仰しやる。

みさき　いや隱さしやりまするな。これ此方樣は近江の國淺野數馬樣。彼方を連のやうにさつしやりますれども、此方樣の知行代、鵜川浪之助。隱さしやりまするな。

數馬　してさう仰しやる此方は誰で御座る。

みさき　妾は此方樣と許嫁の橘兵部が娘みさきの前で御座ります。

數馬　やあ此方がみさきの前とや。誠に互に、親達が許嫁して置かしやつたれども、遂に御目に懸つた事も御座らぬ。して何として此處へは御座つたぞ。

みさき　さればで御座ります。國許で承りますれば、此方樣には御氣色けなとあつて、京へ御養生に上らしやりましたと聞きました。心許無う御座りましたによつて、妾も、故意と氣合が惡いと申しまして此方樣に何とぞして、會ひましたさに許り、都へ上りまして御座ります。承りますれば、御氣色も良うて、今日は此處へ川狩にお出でなされますと聞きましたによつて、最前より此處に待つて居りましたが、餘り淋しさに酒を飲うで遊びて居りましたが、思はず知らず寢入りました所に、夫婦の縁とて御目に懸りまし、これ程嬉しい

事は御座りませぬ。

數馬　さて／＼左様で御座るか。知りませなんだ。私も此方の事は常に心に懸ります。最前お盃を下された時、女中の盃は御遠慮致しますと申したも、此方への心遣ひで御座る。

みさき　皆の衆。聞きやつたか。あの御心底ぢやもの。おれが常にいふも惡うはあるまいがや。申し、抱付きたう御座ります。

數馬　それははや、夫婦の仲ぢやによつて、はて問はいでも大事ない事の。

（といへば、みさき數馬抱付く。）

青葉　申しお姫様。妾もあのお人様に抱付きたう御座ります。

みさき　はて、戀は面々の流にしたがよいわいの。

（といへば青葉浪之助傍へ行く。）

青葉　申し、抱付きましよかの。

浪之助　ハテ問はいでも大事ない事の。

（さいへば抱付く。）

がん兵衛　歌藏抱付きたい。

歌藏　はて問はいでも大事ない事の。

（といへばがん兵衛歌藏に抱付かんとする。歌藏逃ぐる。）

數馬　最早日も西に傾きまして御座る。歸りましよ。又、重ねて御目に懸かるで御座りましよ。

みさき　妾も明日は、最早國へ歸ります。話しましたい事も御座ります程に、妾處へ御出でなされて下さりませ。御供申しましよ。

數馬　如何にも、忝うは御座れども、それは餘りで御座る。人目も御座れば、又重ねて御目に懸りましよ。

みさき　それならば、妾が乗物が御座ります。あれに召してお歸りなされませ。

數馬　いや／＼此方乗らつしやりませ。

みさき　いや／＼大事の殿御様を餘しまして、妾が乗りましよ様は御座りませぬ。一寸乗つてつい下りさしやりませ。

數馬　はて難しい。そんなら一寸乗つてつい下りますぞえ。

みさき　如何にもさうなされませ。乗物持つて來い。

（さいふ。乗物持來る。數馬乗る。おし續いて、みさきも乗り、「斯うせうといふ事ぢや」といふて乗物舁き入る。）

中入

（右の方より、橘松五郎出る。橘懸りの方より橘大藏杉浦傳七、其他侍、今川式部文庫を持ち、大ち段之丞同林之助、おし續いて出で、大藏松五郎へ禮ある。）

大藏　松五郎殿。大殿の御死去御歎きは理では御座れども、最早返らぬ儀で、兎角跡目が大事で御座るぞ。

松五郎　仰しやります通りで御座ります。私も途方失ひまして御座ります。此上は、萬事お前を頼みます。

大藏　何がさて〳〵。

松浦傳七　松五郎殿へ申上げます。誠に御力落し、御歎きは、申しましよ樣も御座りませぬ。然乍ら、ふつつと御悔みをおやめなされましたが、よう御座ります。扨、今川式部殿へ申しまする。此方には大殿樣御病中には樣々と御心を碎き、晝夜御看病なされたと承りました。其甲斐もなく、さぞ此方にも御殘り多う思召しましよ。其節私も節々御勝手迄は御見舞申して御座れども、故意と遠慮致し歸りて御座る。必ず御跡目が大事で御座る程に、御煩ひ無きやうになされませ。

式部　如何にも仰せの通り大殿樣此度の御病氣、今一度何卒御本腹と存じ、樣樣と御看病申して御座れども、死の道は是非も御座らぬ。遂に御快氣なく、一家中は申すに及ばず、民百姓に至る迄闇夜に燈消え、月日の影を失ふ如くに存じ、歎き悲しみます。扨是非もない事で御座ります。

大藏　おゝさうあらうとも。段之丞兄弟、扨、其方達は大殿の御鑑をもつて召抱へられた。未だ新參者の事なれば、さぞ一入殘り多う思ふであらう。

段之丞　御意で御座ります。われ〳〵兄弟は新參に召抱へられ、御知行下され、させる御奉公も相務めませいで、一入歎かはしう存じます。

林之助　兄段之丞申しまする通りで御座ります。私儀は一入御不便に預りました故、死の御供を仕りましよと申して御座りますれども、式部殿、強つて御留めなされて御座りますゆゑ、惜しからぬ命長らへまして御座ります。

式部　彼は若輩に御座りますれども、心猛い者で御座ります。是非に追腹を切り、大殿の御供と申して御座りますれども、私の申しますは、尤もなれども、唯今死の御供を申すも、又後に殘り松五郎樣に忠を勵み御奉公申すも、以ては同じ忠義、是非にと思ひ留まられと申し宥めまして御座ります。天晴な侍で御座ります。

大藏　むゝ尤も、でかした〳〵。式部云付けた通り一家中殘らず詰めたか。

式部　夜前より詰めまして御座ります。

大藏　然らば妙壽院殿に其由申上げ。

式部　畏つて御座ります。

（といふて手を突き、大藏樣御出でと應ふれば、御簾上る。妙壽院みさきの前、膝元附添ひ居る。）

妙壽院　大藏殿松五郎式部段之丞兄弟。

（というて泣く。）おれ程悲しい者はない。大殿お果てなされた時、同じ道にと分別を極めたけれども、此方姉みさきの前や、松五郎二人の兄弟の衆が力無からうと思うて後に殘つた。（というて歎く。）

みさき　母樣の仰しやりますは御尤もで御座りますれども、最早御歎きなされましても、返らぬ事で御座ります程に、ふつつりと御歎きをお止めなされましてよう御座りましよ。

大藏　おゝよう仰しやつた。隨分力を付けられたがよい。さて式部大殿御死去の砌、樣々と書置をなされた。其方へ渡し置いたが持參めされたか。

式部　これへ持參申して御座ります。

大藏　然らば拜見申されて宜かろ。

式部　畏つて御座ります。

（というて大藏前へ文箱持ち出て。）私預ります砌、封をおつけなされました。御改めなされましよ。

大藏　何のそれに及ばうぞ。

式部　然らばこれで封を切ります。（というて文箱の封を切り開くる。）何れも、殿の書置で御座るぞ〳〵。（というて開き讀む。）

遺言狀之事。一、われ卑しくも橘の家五十餘の星霜を重ねしかど無常の使は逃れ難く病かに就く事數日也。既に此時橘の家破却せん事を思ふ。併し二男松五郎は未だ幼稚の者なれば、城主にならん事不審し。一子出家すれば九族天に生ずと有りて、衣鉢染衣の身になし、わが後をとはすべし。又姉みさきの前が事は、內々近江の國淺野數馬といふ者に婚禮の許嫁をしぬれども、かの者酒に長じ色の氣にのる所の惡人故、わが心に合はず。然ればさしづめ、此國並に系圖の一巻、同氏甥の大藏に讓る也。即ちみさきの前と婚はせ、諸事治むべし。此證文我本心せんせつの折なれば、豈疑ひやあらん。若し家中一人にても此儀相背く者あらば、多年の舊功無になし、未來永々勘當たるべし。仍而遺言狀如件。家中の諸士へ。但馬千代の郡城主兵部太夫判。

（と讀みければ、妙壽院みさきの前松五郎一家中怪顚の顏付する。）

妙壽院　これ式部。今の書置はどうぞ。やあどうぢやぞいの。大殿にはこれは氣が違はしやつて此樣な書置をなされたか。常々仰しやるはあの松五郎程可愛い者はない。一國の主にしても不足はないと、他には子も無い者の樣に常常仰しやつた。又みさきの前事は、近江の國淺野數馬殿と許嫁して、近い中に其方を遣らしやる筈であつた。其內に

御煩ひに取りつかしやつた。此數馬殿といふ人は器量といひ、詩歌は人に勝れた人と聞いたに、これは先つどうした事ぢやぞ。

松五郎　母様、まづお待ちなされませ。殿様の私に見落しが御座りますればこそ、出家にさせと御座ります。私は出家になりまして殿様の跡を弔ひますで御座りましよ。

妙壽院　なうあの子の云やる事わいの。何が大殿の見落しがあらうぞ。譯も無い出家はする事ではない。大藏殿は何と思召すぞ。

大藏　私も當惑致しました。

妙壽院　さう御座ろ。式部、何を默つてゐやる。何と思案はないか。

式部　されば、私も當惑を致しました。此儀を察しまするに、是は大殿様松五郎様に御意見の爲、斯様に書置かつしやりましたと存じます。何故と申しますに、親たる者の子を憫れまぬ者とては御座りませぬ。大藏様にも左様には思召しませぬか。お前にも氣の毒に思召しましよ。

大藏　されば、身も當惑致した。其御言葉に

式部　さう御座りましよ。

甘えまして、些申上げましたい儀が御

座りますが、なに傳七殿、これへ御出でなされませ。唯今大藏樣の御言葉に甘えまして、申上げたい儀が御座りますが、申上げて見ましよかな。

傳七　何なりとも申上げられましよ。

式部　然らば惡くば惡いと侮して下さりませ。まづ大殿樣御死去なされてから此方は、松五郎樣の此國を治めなさるゝと一家中皆極め切つてゐまして御座る所に、今日御遺言狀の趣、大藏樣へ此國を御讓りと御座りますれば、殿樣御死去の後今月今日迄は、大藏樣の御國よ。其大藏樣の御國を松五郎樣へ今日唯今御讓りなされて下さりませ。大藏樣にも其御心入で御座りましよを、下として上を計らひまするは、慮外で御座りますれども、此段を御聞分けなされて下されましよならば、忝う御座りましよ。

大藏　身もさう思ふ事ちやが、併乍ら、それは又折もあらう、重ねての事。

式部　左樣で御座りますれども、御歎きの中で御座ります。強て申上げます。

段之丞　これ式部殿。まづお待ちなされ。こなたの仰しやる所、一つとして其意を得ませぬ。

式部　上より御意も下りぬに、待ての其

意を得ぬ等とはどうした事で御座る。
段之丞　されば、書置の表に、大藏様に此國を御讓りなされて置かしやつたれば、大藏様の治めなさるゝに極まつた事。それを唯今松五郎様へお讓りなされ等との御訴訟は、道を知らぬといふもので御座る。
式部　いやこれ段之丞殿、身を何役ぢやと思召す。代々お家の執權を致す者に道を知らぬとは。
段之丞　むゝこれ道を知らぬとは大殿の書置を反古になさるゝからは、道を御存じないといふものぢや。
式部　いやさ、此書置がなければ、何の詮議も無けれども書置があるによつて御訴訟申す。御家の惡しき事なれば、一命を擲つて御意見を申さねばならぬ身共ぢや。大殿斯様の書置をなさるゝといふ事を知るなれば、幾度でも御諫言を申すなれども、何をいうても殘る物は書置許りぢやによつて、是非もない。むゝ何とも其方合點がいかぬ。
段之丞　どうでも大藏様の此國を治められねば治まらぬ國の騒動ぢやが、いやいや邊りに人らしい者がない。牛馬あれども人か知らぬ。是非もない事ぢや。
式部　やあ段之丞。邊りに人がましい者がないとは身共を畜類に譬へるか。此方も歴々のお侍なれども此家へは昨今の人、御家の作法は御存じあるまい。大殿、此方を召抱へらるゝ時、仰せらるるは我殿の御爲にならう者ぢやとあつて、忝い御言葉をうけたではないか。すれば其方の御主は松五郎様よ。其御主を出家になして芽出たいか。
林之助　式部殿、まづお待ちなされ。これ兄者人、何とも合點いきませぬ。式部殿、唯今の通り御訴訟なさりよなら、共々に仰しやりさうなお人が、さうは無うて無用と仰しやる仁態。何とも心得ませぬ。御心底が違うたからは、兄とも存じませぬ。式部殿と一緒で御座る。
段之丞　なに推參な。兄たる者に慮外な。道を知らぬ奴ぢや。日頃思ふには、己が弟程あつて思案の深い者ぢやと思うたに、これはどうした事ぢや。式部殿に合點のいかぬさへ氣の毒に思ふに、又其方迄さういふか。此國を大藏様の治めなされねば、此國が、こりや治まらぬが合點がいたか。
式部　段之丞。如何にしても心底が合點がいかぬ。割つて見たい。
段之丞　割つて見たいとは何とする。
式部　さあ、これで割つて見る。
（というて式部段之丞林之助、刀に手を掛け、ぎしむ所へ松浦傳七つつと出で、）
傳七　これ〳〵。御前で御座る。靜ま

しやれ。どうした事で御座る。
大　藏　やれ留めく〳〵。
（といふと互に怒りを止め退く。）
妙壽院　これ段之丞。今の言分はどうした事ぞ。大藏殿、式部申さるゝ通りが道で御座る。此方から松五郎に唯今讓らしやりて、此方の後見をなされて下され。頼みます。さもなうて此國を此方の治めさしやつては、人が道ぢやといひましよかや。
大　藏　道とも人も申しますまい。
みさき　もし大藏樣。申しましよならば、此家は、わしが繼がいで叶ひませねども、女の事なれば、是非も御座りませぬ。松五郎はわしが弟なれども、男なれば、松五郎家を繼がいで叶ひませぬ。松五郎にお渡しなされて下さりましよならば、忝う御座りましよ。
妙壽院　おゝ、よう云やつた。大藏殿、侍は名が大事で御座るぞや。此方の此家を繼がせうては、人が人とはいひますまいぞや。
大　藏　むゝ人が人とは申さいで、畜生と申しましよか。
妙壽院　おゝ祥ない人の口ぢや程に、畜生ともいひましよ。
大　藏　こりや死損ひの老婆め。やい己。云はして置けば方圖も無い事をいふ奴かな。己めは自體成上り者、長い端たでありつるに、自體大殿は色深い人であつた。ひよつと御手を懸けられ、此二人の子を設け、御隱居樣の、奥樣のといはれ、付上りをしをる。さあ今一言、今の言葉を吐出せ。元頸を淩へ落ぞ。
妙壽院　えゝ扨、腹の立つ事かな。大殿の御座つたら、あの口は明かせまいもの。やい己を成上り者とぬかすか。己が先祖は家中に知らぬ者は無い。それは云うて要らぬ物。汝こそ性が惡うて此國を追出されたを己が折々、最早心も直りましよ程にと、度々御訴訟申したれば、慈悲深い殿樣で再び呼戻さしやつたではないか。其恩を忘れて今の言葉は何事ぢや。侍共、何故にあれを引立てん。
（松五郎大藏が前へつつと寄り、刀に手をかけ、氣色して、）
松五郎　コレ大藏殿。若輩には御座れども侍で御座るぞ。其侍の母に對ひ、今の言葉は何事で御座る。今一言いうてみやしやれ。其場を去らしはせぬぞ。
（というて氣色。）
大　藏　ヤイ侍共。こいつに繩を懸け。
（といふ。侍共松五郎妙壽院みさきの前を手籠にする。）
大　藏　さあ何奴でも、指でも指いてみ

よ。扨段之丞、最前より其方が言分、満足致した。向後身共が國の守ぢや。芽出たいな。

段之丞　お芽出たう御座ります。皆お侍衆、今日より大藏樣、此國を治めなさるゝ。何れも御同心で御座るか。

侍　共　畏りました。

大　藏　式部は何とな。

式　部　早皆さうで御座りますならば、私も同じ事で御座ります。（さ不精〴〵うけあふ。）

大　藏　おゝ芽出たい〴〵。扨老婆は段之丞兄弟に預くる。連れて行て、きつと番をせい。悴めは傳七新左衛門に預くる。引立て。みさきの前は身共が女房なれば奥へ連行け。

（といふ。銘々に受取り、連れ入る。其後にて、）

大　藏　侍共。

（と目はじきする。侍共式部に向ひ、）

侍　式部殿、お立ちなされ〴〵。

（といふ。式部立兼ね、うぢ〴〵として立ち、）

式　部　いやお芽出たう御座ります。先程は慮外を申上げまして御座ります。御許されなされませ。罷り歸ります。

（というて睨付け歸る。）

大　藏　さあ身が本望は達したといふものぢや。大儀ぢや。此方へ來い〴〵。

（さいうて入る。）

（さて其後段之丞屋敷の體、飾る。見臺に太平記の本立置く。侍三人番の態。林之助出て、）

林之助　何れも毎日の御番、御大儀で御座ります。

侍　衆　いや大儀にも存じませぬ。お前には御氣が詰らしやりましよ。

林之助　兄弟一所にて勤めますれば、氣も詰ります。唯今兄ぢや人、お袋樣へ詰めてゐられます。此間私代りましよ。お歸りなされ、御休足なされませ。

侍　然らば左樣に致しましよ。

（さいうて皆々歸る。）

林之助　兄ぢや人は堅い人ぢや。晝夜詰めても氣も盡きぬさうな。

（さいうて見臺に立てゝある太平記を讀み居る。所へ撫子つか〴〵と來り、林之助胸座をとる。）

林之助　こりや、此方は何として御座つた。女子の來る所ではない。が、侍衆は見付けはしませなんだか。

撫　子　見付けられても大事御座んせん。わしは云ふ事があつて來ました。

林之助　如何樣さう御座ろ。強い聲さしやんな。奥に兄ぢや人が御座る。聞え

まするわいの。
撫子　むゝ強い聲をする事が法度で御座んすか。そんなら何故に大きい聲して此本を讀まさんす。
林之助　さて無理をいふ人があるものかな。云ふ事があらうば、こゝも離して、心を靜めていはしやれ。強う急かしやつたさうな。
撫子　そんならば此處へ御座んせ。云ひましよ。此方様は度々文を越しますれども、何故に返事を爲らんせん。此樣にお國が騒動しましては、若しも長い別れもしましよかと、何ぼう案じます。返事が來たらば此文を遣ろ、返事が來たらば此文を遣ろと思ひまして、此樣にして置きました。
（さいうて文認めたるを十四五出す。林之助見て、）
林之助　いや仰しやるといふ事は、此事で御座るか。まづ安堵致しました。わしも返事しましよと思うても、首尾が御座らなんだ。おつ付け、返事もしましよし、又云ひたい事も有る程に、首尾つくらうて此方より便をしましよ。今にも人が來て見ますれば惡う御座る。歸らしやれ。
撫子　いや／＼、まだ云ふ事が御座る。直にいふも恥しう御座るによつて、これ、此文に書いて置きました。（さいうて又文を封じめを解き出す。）
林之助　今申す通り後から返事をしましよ程に、まづ歸らしやれ。（さいうて文を見臺の傍へ投げて置く。）
撫子　むゝ、あの文も見やしやんせんの。よう御座んす。あの文の中の事を申しましよ。此方様と馴初めてから、戀しゆかしと思ふが積りまして、お腹が大きう成りました。たゞならぬ身に成りました。
林之助　それも氣遣ひさつしやるな。成程思案をして置きました。此處も靜まつたらば、何うして斯うしてと思うてゐまする。
撫子　むゝそんならわしを見捨てる氣では御座んせんの。さうならまだ話したい事も御座んす程に、今夜は此處に泊りましよ。
林之助　はて後や先ともののいふ人ぢや。早う歸らしやれ。
（さいうてせり合ふ。段之丞出て、これを見て與覺まし、知らぬ振りして太平記讀み居、かの文を手にとり讀む。林之助撫子迷惑がる。）
段之丞　林之助。これはどうした事ぢや。侍といふ者は女に白い歯も見せぬ物ぢや。閑なれば必ず惡人起こる。假初にも太平記等を讀めば、武士憤りを覺え、

善いとは常々申さぬ事か。既に新田義貞は名將なれども、勾當の内侍に心をかけ一生させる事もなく、敢ない死を召されたと有るではないか。撫子殿、お腹が大きに成つて奥の勤めがなるものか。棚な物を取る事もならぬがや。沙汰の限り千萬な。

（さいうて叱り、又太平記讀みゐる。林之助撫子迷惑がり居る所、表へ夕顔來り、手をたゝき案内乞ふ。）

林之助　申し表に案内が御座ります。

段之丞　案内があらうば出たいものではないか。

林之助　私出ましよか。（さいうて出て見れば夕顔なれば林之助肝つぶし。）これは夕顔殿、何として御座つた。

夕　顏　些用があつて兄御樣に會ひに來ましたが、此方樣とは差合ひで御座んす。

林之助　合點で御座る。わしが會はせて進じよが、今はいかう機嫌が惡うて、わしも叱られました。さり乍らどうぞ會はせて進じよ。

夕　顏　どうぞ賴みまする。

林之助　それに待たしやれ。（さいうて入り。）申し、大藏殿より、お使で御座ります。

段之丞　お使なら受取りやれ。
林之助　鵜野がん兵衛殿で御座ります。
段之丞　がん兵衛殿ぢや。これは出て會はずばなるまい。
（といふて出る。夕顔を見て肝をつぶす。夕顔段之丞を捕まへ胸座とり、）
夕　顔　これ、此方は何故に文を越しても、返事をしやらぬ。今日はいふ事があつて來ました。
段之丞　此處へは來る處では無いが、侍衆は見はせなんだか。
夕　顔　見られても大事御座らぬ。
段之丞　弟が聞けば首尾が惡い。後から返事をする。早う歸りやれ。
夕　顔　いやこれわしが身の上の事を話さうと思うて來ました。こな樣と馴初め一夜二夜と思へども、唯ならぬ身になり、お腹が大きうなりましたわいの。
段之丞　こりやならぬ。
（というて逃げんとする。林之助見合せ、段之丞夕顔面白ながる體。）
林之助　これ兄ぢや人。侍といふ者は女に白い歯も見する者では御座らぬ。既に新田義貞は勾當の内侍に心を懸け、一生させる功もなく、敵ない死を召されたといふでは御座らぬか。
段之丞　いふまい、〳〵。最前身共が申

したによつて、言返しであらう。斯う現はるゝ上は別儀ない。身が斯うした事有り乍ら、最前の如くにいうたは自堕落にならん爲の意見ぢや。此上は打寛いで何なりとも話したがよい。兩方相孕みぢやが、一處に置いて怪我はあるまいか、別々に片付かうか。兄弟は他人の初まりといへば大事ない。

撫子　何と、これ程嬉しい事は御座らぬ。今の事いひましよかいの。

段之丞　何なりともいふ事があらば、遠慮なしにいうたがよい。

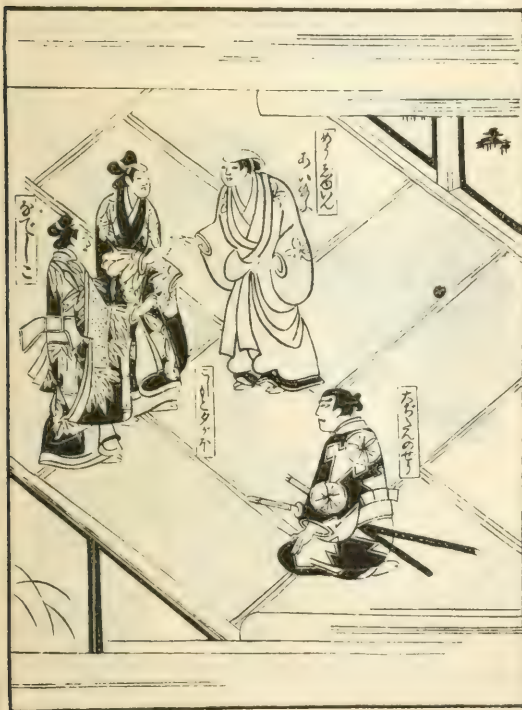
撫子　別の事でも御座りませぬが、お姫様の仰しやりますは、母様は御煩ひなされぬか、御着物も召換へられたか、何とあるぞ。見て來るやうにと仰しやりました。お袋様に會はせて下さりましたら、忝う御座りましよ。

林之助　兄ぢや人。これは何としたもので御座らう。

段之丞　それはならぬ事ぢや。若しさうした事が大藏殿へ聞えては、我々が一分が何と立つものぢや。其方衆が來たといふ事も聞えては、爲が悪い。早々歸りやれ。それは成らぬ事ぢや。

撫子　むゝすれば會はせて下さんす事は成りませぬの。夕顔殿何としましよ

の。

夕　顏　はて今の樣にしましよはさて。

（というて撫子夕顏兩人一度に段之丞林之助が刀に取付くを兩人取つて伏せ。）

林之助　兄ぢや人。最前よりの樣子、何とも合點がいきませぬ。

段之丞　これには如何樣樣子があらう。女の事なれば、さ迄の事はあるまい。そこを話して、樣子を聞いたらよかろ。

（というて兩人ともに離す。）

段之丞　さあ〳〵樣子があらう。眞直に申さぬに於ては、爲が惡しかろ。

夕　顏　樣子がなうて何としよ。此方は侍ではないわいの。お姫樣は女子なれども、大藏殿心には隨はしやれぬわいの。それに此方衆があの惡人と一味するといふ事が有るものか。これが侍か。此方を殺して死なうと思うたに爲損うた。最前身もちになつたといふも僞ぢや。お袋樣に會はす事が成らずば此方の手に懸けて殺しや〳〵。（というて取付き歎く。）

撫　子　おゝよう云はしやつた。これ其樣な心底とは知らいで、睦しい語らひをなした。お袋樣に會はす事がならずば、此方の手に懸けて殺さしやれ〳〵。

（というて林之助に取付き歎く。）

段之丞　さて／＼頼もしい心底かな。林之助、斯うした心底を聞いて、我々が心底を話して聞かせんも無下ない。

林之助　お話しなされませ。

段之丞　こりや／＼。些とも氣遣ひするな。我々惡人と一味と思ふけれども、全くさうではない。最前の書置は正しく大藏が僞狀とは思うたれども、其場で詮議に及ぶ時にはお袋樣お姬樣松五郎樣の御命が危い。それ故惡人と一味同心にもてなしたれば、案に違はず心を許しお袋樣を我々に預けた。追付、御世に出します程に氣遣ひするな。

夕顔　いや／＼合點がいきませぬ。それは此方に、當分の言譯といふものぢや。誠ならば誓言で聽きたうござる。

段之丞　具足を肩に懸けぬ方もあれ、虛言は無い。

撫子夕顔　さてはさうで御座りますか。嬉しや。

林之助　なにお袋樣に會はせますまいか。

段之丞　これへ呼びまして會はせませ。

（といふ所へ妙壽院出る。撫子夕顔會ひ喜ぶ。）

妙壽院　樣子を聞いた。頼もしうこそござれ。

段之丞　少しも御氣遣ひなされまするな。一味で御座ります。

（というて皆々喜びゐる所へ、傳七表へ來り立聞きし、樣子を聞き、手を叩き物申し乞ふ。）

傳七　頼みましよ。

（といふ。段之丞聞き、案内が御座る、奥へまづお入りなされ」といふて立出で。）

段之丞　何方で御座る。

傳七　傳七で御座る。

段之丞　松浦傳七殿。さあこれへ御通りなされ。（といふ。奥へ入る。）

段之丞　まづ以て此方にもさぞ御苦勞で御座りましよ。

傳七　それは此方とても同じ事。して、これは姉妹の御衆、端近く／＼御出でなされて、何故にお傍にきつと御番をなされぬぞ。私は新左衞門用事御座れば私詰め、片時も油斷無う番を勤めまする。各々にはいかう如才に御座るよ。

段之丞　いや／＼、我々も油斷無うきつと番を勤めます。

傳七　すれば、きつと御番をなさるゝぢやまで。さて／＼白々しい顔付して、今の樣子を知るまいかと思召すか。最前より表に居て、みな樣子を聞きました。何ぢやお袋樣と一味同心して落しましよと仰しやるが、聞きました／＼。大藏殿へ此由を申上げます。

（というて出るを段之丞林之助取卷いて、）

段之丞　これ傳七殿。まづお待ちなされ。

今の様子を御聞きなされて此由を殿へ申上げられよとな。よい〳〵成程、お袋様に味方を申す心底ぢや。其方歸しはせぬぞ。覺悟せ。

傳七　すればそれに虚言はないか。

段之丞兄弟　くどい〳〵。

傳七　はお。（といふて手を打ち、）此様に割符を合はする如くなる物か。これ〳〵、身共も其方達と一緒の者ぢや。必ず卒爾な爲さるゝな。若殿松五郎様事、様々と新左衛門に申して御座れども、一圓承引せなんだによつて、打つて捨てゝこれへ參つて御座る處に、此方にも左様の御心底、滿足致した。必ず粗相をせまいぞ。

段之丞　いや〳〵、今となり兄弟に取圍まれ、陳じるとも逃しはせぬぞ。

傳七　これ〳〵、其方達が威勢に怖れて、此場を逃りよといふ此傳七ではない。侍が兩腰に手を掛けぬは。扨斯ういうた許りでは合點がいくまい。證據には若殿を連れまして來た。これ若殿様、御出でなされませ。

（といふと松五郎走り出づる。）

松五郎　これ〳〵段之丞兄弟、傳七は身方者ぢや。卒爾をしやるな。

段之丞　扨々若殿様で御座りますか。嬉しや。まつお袋様に會はせましよ。此方へ通らしやりませ。

（といふて連れ來る。妙壽院腰元何れも走出て、會うて泣く。）

妙壽院　みさきの前は何としたぞの。

傳七　成程、御心安う思召しましよ。私が追付、連れまして參りましよ。

段之丞　然らば何れも様は身共が知邊の方へ連れまして立退くであらう。お姫様事は其方に預くる程に連れまして後より御座れ。

傳七　おゝ心安う思はしやれ。御姫様を預つた。人の見ぬ間に立退かしやれ。

段之丞　然らは預けたぞ。

（といふて皆々樂屋へ入る。）

上之終

中八幡大名　付り　いもせのなみだ川

（大藏並びに小姓玉手新之丞出る。玉木粂之進　能田の神樂に段能有り。舞ひ納め　樂屋へはひる。）

大藏　あれは此度抱へた粂之進な。中中味をやつた。して此次は何ぢや。

新之丞　文藏と申します間の狂言で御座

ります。

大藏　それは誰が勤むるぞ。

新之丞　今川式部松浦傳七兩人して勤めます。

大藏　一段宜からう。早う始めといへ。

（式部傳七兩人出で、本まの狂言勤める。）

大藏　おゝ大儀ぢや〳〵。此度のは國の祝ひ許りではない。一つは奥が心を慰めう爲ぢや。何なりともして、慰めてたも。身は奥へはひる。休足めされ。

（というてはひる。）

式部　殿の御機嫌で御座つて、嬉しう御座る。

傳七　されば〳〵滿足に存じます。

式部　扨休みましよか。樂屋へ入つて衣裳着せに袴を疊ましましよかな。

傳七　樂屋も喧しう御座る。これで疊みましよ。

式部　然らばさう致しましよか。

（というて兩人ながら長袴脫ぐ。）

式部　此方持つて下され。

（というて下袴を兩人して疊み、臺詞。）

式部　さて〳〵此方には、一寸申合せて御座るに、御器用千萬な儀で御座る。

傳七　俄かの事で御座つたによつて、私も覺束なう御座りましたが、どうやら斯うやら間を合はせました。私が臺

詞が、さぞ、此方の胸に當つて、爲され惡う御座つたで御座ろ。

式　部　さうも御座なんだ。此方には文武二道のお侍、御器用なお人ぢやが、元は役者では御座らぬか。

傳　七　はて譯も無い。

（というてゐる所へ、腰元若葉銚子盃持ち來り。）

若　葉　申し、上よりお使に參りました。

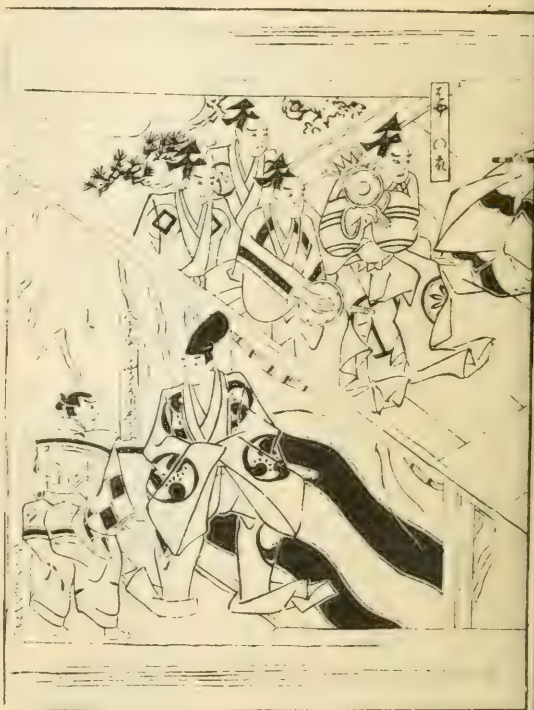
（といふ。兩人共に「はあ」といふて聞く。）

お姫樣の仰しやります。さぞお草臥れなされましよ程に、酒を一つ參りましよとのお使で御座ります。

式　部　御氣を付けられ忝い御意かな。宜しう御禮を賴みます。

（といふ。若葉そこを立つ。）

式　部　お酌も言付けなされさうなものぢやが。

（といふ。若葉又下に居て。）

若　葉　妾に酌を致しますやうにと申し付けられました。

式　部　此方にな。これは好み出したやうなもので御座ります。然らば賴みましよ。此方から取上げなされ、此方へ下さりませ。

若　葉　お前から取上げなされませ。

式　部　申しても貴女からの御盃で御座

ります程に、まづ此方から取上げなされ。

若　葉　そんならさう致しましよか。

（というて盃取上ぐる。式部酌する。若葉式部に盃差す。傳七頭を掻き急く。橋懸りの方へ立腹たて袴を投付け、）

傳　七　えゝ何の面白うもない。

（というて腹立て袴疊み居るを式部見て、）

式　部　さても強う腹を何やら立てます。物申さん所をいはして御目に懸けましよ。太郎冠者〳〵。

傳　七　太郎冠者は忙しいとぞ申されける。

式　部　此處へ來て酒を飲めとぞ申されける。

傳　七　太郎冠者は下戸なりとぞ申されける。

式　部　さても〳〵強う腹を立てます。此方あそこへ酒を持つて往て盛らしやれ。

（といふ。若葉立ち銚子盃持ち、傳七前へ行く。）

若　葉　これ何を其樣に腹を立てさしやんすぞ。酒を參りませ。

傳　七　酒は飲みたう御座らぬ。

若　葉　さても其袴はわしに疊めといはん計りに。どれ此方へ。（といへば、）

傳　七　これ〳〵、構うと貰ひますまい。皺になります。人の機嫌も知らいで、強う面白さうに御座るの。

若　葉　先にから此方樣は異な言樣さしやんす。何が腹が立ちます。

傳　七　何が腹が立つ。腹が立たいでならうか。最前盃を持つて來たらば、まづ己が前へ持つて來る筈ぢや。それを式部前へ持つて行て、ぢやら〳〵と、それが腹が立たいでならうか。

若　葉　それはわしもさう思ひましたけれども、さながら式部殿前があるによつて、故意と控へました。無理な事ばかりいうてをらしやる。（というて歎く。）

傳　七　すれば、別に心は變る事は無けれども、式部に覺られまいと思うてか。それでこそ可愛かつた者なれ。扨先づ何時染々と會うた事もない。今日は善い首尾ぢやが、式部が邪魔になる。氣の毒ぢや。此暑いのに眼でも廻しさうなものぢやが。

若　葉　式部樣には、酒をたんと進ぜて醉はしましよ。

傳　七　先つ久し振りぢや。盃しよ。何としてしたものであらう。えゝ、あるぞ。（といふて袴の肩衣を左の腕に打掛けて、）これ〳〵、これであそこへ見えぬ。若し式部がこれはと咎むるなら、模樣を見せると云ふを。

若　葉　これは出來まして御座んす。

（といふて酒盛して抱きつき居る。式部差足して行き、肩衣を開け、）

式　部　これの内方に御座りますか。

（といふて傳七若葉恥かしがる態。）

式　部　これは味で御座るの。

傳　七　されば、しをらしい事で御座る。先程の狂言を奥でしたらば御慰みにもならう程に、習ひたいと御座るに由つて教へます。

式　部　教へさしやるはよいが、今の抱付いてゐたは何ぞ。

傳　七　眞田と股野が組んだ所で御座る。

式　部　出來た。習ひたう御座らうば身共が教へましよ。これ傳七、今の樣に組ましやれ。

傳　七　はて爲てもせいでもの事を。（というて若葉と組合うてゐる。）

式　部　しつかりと組め。己が長尾の新五新六ぢや。それに組んだる武者は下なるがお敵か、又上なるがお敵かとぞ申しける。

傳　七　はて譯も無い。（といふて笑ひ、立退きけろ。）

傳　七　面白うも御座らぬ。さり乍ら、終に一夜の枕も並べませぬ。

式　部　それが侍の道といふものか。若

葉殿、此方もこなたぢや。何故に早う夫婦にならんと申しける。

傳七　はて生けつ殺しつする人かな。此上は兎角頼みまする。

式部　今現れてからは腹が立つとぞ申しける。

（というて居る處へ、玉手新之丞出る。）

新之丞　御意が御座ります。

式部　如何樣の儀で御座ります。

新之丞　殿の仰せられまするは、内々の儀を御相談なされましよと仰せられます。追付お上りなされませいとの事で御座ります。御出でなされましよならは、平常の通りへ御座りませずと、廊下傳ひにな。合點で御座りましよ。私が待つてをりましよ程に。

式部　内々の儀御相談なされたい。平常の通りへ來ずに、廊下の方へ。委細心得まして御座ります。追付仕候申しましよ。

（といふ。傳七若葉くつ〳〵笑ふ。式部見て。）

式部　傳七殿には御機嫌で御座るが、何ぞ身共が申し誤りでも致して御座るかな。

傳七　いや〳〵何の申し誤りが御座りましよ。唯今の樣子承りまするに、殿樣には何やら御相談なさるゝ事がある程に、式部殿に平常の通りへ御座らずに、廊下傳ひに御出でなされ。廊下の先に彼方が獨り立つて御座る。其處へ御座つて。（といひ指差して笑ふ。）

新之丞　いやこれ傳七殿。私若輩者で御座るによつて、唯今の御使に申し損ひでも致して、お笑ひなさるゝか、承りたう存じます。

傳七　何の申し損ひが御座りましよ。

若葉　式部樣。隱さしやりまするな。わしがよう知つてをります。新之丞樣とはこれ〳〵で御座んす。なう式部樣。

式部　扨は知つて居るか。

（というて皆々笑ふ。）

若葉　今の事をいうたら宜う御座ろ。

傳七　誠に式部殿。別の事でも御座らぬが、都に島原といふ色里があるぢやまで。此處の傾城が、此處へ緣の者が在るによつて來てゐますが、これを呼寄せ、御姫樣に會はせまして、御心に從はしやりますやうに、色噺をさしましよと存じ、案内を申して置きました。

式部　これは一段宜う御座ろ。殿樣へも御内證を申上げたらばよかろ。

新之丞　私御内證申上げましよ。（といふて入る。）

式部　はれやれ、これは一段の事で御座る。私が下見を致さう。早う參るやうにお人を遣はしやれ。

若葉　妾往て參りましよ。（というて呼びに行く。）

式部　あのやうなる者に出會うては、樣々と挨拶が有るげな。

傳七　なか〳〵挨拶のある事ぢや。まづ此方のやうな堅い人でもとんと和らげて、先づ此處が揚屋なれば、或ひは馴染の女郎があつて來るか、そこで、何と此中は會はなんだ。先途文をおくしやつたが、あのやうな事はいうておこさんものぢや、譯が惡いわいの、等といふやうな挨拶で御座る。

式部　侍の交際なれば此頃は御意得ませなんだ等といふを和らげて、何と此中は會はなんだ等といふぢやまで。

傳七　それぢや〳〵。

式部　たゞとるやうな事ぢや。

（というてゐる所へ、淺野數馬傾城になり附舞臺より道中あり來る。）

傳七　いや、お出で。さあ〳〵。

數馬　話の男はあのお人かえ。先づ近附きになりましよ。

（というてつか〳〵と傍へ行き、足を投出しゐる。）

式部　（氣色して、）諸侍の前とも憚らず、肢を投出して何とした事ぢや。

傳七　はてこれが所作で御座る。

式部　むゝまそつと投出さしやれ。何と此中は會はなんだの。此中は文を給つた。いかう譯が惡いぞや。

（傳七汗かく。）

數馬　傳七樣とは此方樣の事かえ。此方樣のやうな角の取れた飛入りがあるさかいで、拜むぞ〳〵。

傳七　これは迷惑。眞實當地の者で御座る。

數馬　實かえ。

傳七　何の僞をいひましよ。如何樣前は五六年も京に居ましたが、此方には會ひませんだわいの。

數馬　私も見ませなんだ。今からは話さねばならぬわいの。

（というて立ち、傳七が膝の上へもたれかかりゐて、此間に又臺詞有り。）

傳七　浮々と此方が慰みをしてゐた。殿樣へ此由申上げられて宜う御座ろ。

式部　成程さうで御座る。

若葉　妾申上げましよ。

（というてはひろ。大藏出る。）

式部　兼て御內證申上げました女が參りまして御座ります。

大藏　これか。はて扨、味な者ぢやな。お女郎。聞けば洛より此處へ初めておぢやつたとある。さぞ物毎初々しからうの。

數馬　御推量なされて下さりましよ。これへ參ります時は、初々しう存じま

した。存じましたよりは結構な御國で人の心も柔和に御座りまして、これ程嬉しい事は御座りませぬ。お國の端に居りますれば、御不便を加へられて下されましよば忝う御座りましよ。

大藏　何が扨〳〵。

數馬　承りますれば、お前には奥様がお心に從はしやりませぬと承りました。それを妾に申してお心の和らぎますやうにとの御賴みで御座りますな。

大藏　成程〳〵。

數馬　御氣遣ひなされまするな。此戀は叶へて進ぜましよ。先づお前の風が惡う御座ります。其樣に長い物を差し、ぎごつに仰しやりましては、叶ふ物では御座りませぬ。鬢の髮は薄からず厚からず、口中に香を留め、しやんとした樣でせぬ樣なを上品上の伽羅男と申しまする。

大藏　扨も〳〵、面白い事かな。

數馬　戀にも樣々の口說樣が御座りますが、して先づ御前の戀はどうした戀で御座ります。

大藏　身が戀は義理の戀ぢや。奥には身より先に許婚の男がある。それで靡かぬ。

數馬　お腹が立ちましよけれども、それは奥樣のが道理で御座ります。さり乍ら其樣な義理と思はしやります方は、猶口說樣が御座ります。先づ妾が殿樣になつて、此方樣を奥樣にして、いうて見ましよ。殿樣お許しなされませ。（というて式部が前へ行く。）

大藏　大事無いてに。

數馬　まづ、わしが殿樣なれば、奥樣の前にしよんぼりと立つて『これ奥、さりとは其方は聞えぬ人ぢや。己がこれ程にいふのに、心に從うて給らん。其方の先の人を想やるも、己が其方を想ふも、以ては同じ事ぢや。これ程にいふに去るとはつれない人ぢや。』と斯う仰しやりましたらば、奥樣は何と仰しやりましよや。何うぞ、云ひやうがあらうば云うてみやしやりませ。又申しやうが御座ります。

式部　これはや、奥樣にどうも仰しやり樣は御座りますまい。お許しなされませ。私が奥樣になりまして申してみましよ。

大藏　大事ないてに〳〵。

式部　そこで奥樣の仰しやりましよには『申し殿樣、左程に思うて下さりますが、今迄さうは存じませなんだ。其御心底で御座りましよば、御心に從はいで何としましよにや。』（というて抱付く。）まつ此樣に仰せられましよ。

（さいうて數馬懷へ式部手を入れ、傾城

かと思へば男ぢやと思うて膽つぶしたる顔付、所作有り。數馬が手を捕まへ離さず、數馬も現れたと思ひ、膽つぶした顔付、互に所作有り。）

式　部　『おいとほしや御前には、これ程迄に御心を盡さしやりますか。御氣遣ひな事は御座りませぬ。妾もこれ、いつぞは靡かう〳〵と思うてゐました。妾は御前と一緒で御座ります。夫婦で御座りますわいの』とま、此如くに仰しやりましよ。（と眼遣ひしていふ。）

數　馬　御自分は。

（といふと式部氣の毒なる顔付して紛らかし、）

式　部　妾は夫婦一處で御座りますわいの。

數　馬　それは眞實かや。其方は斯うした事を知つて人は知らぬか。

式　部　いや〳〵家中に人多けれども、此方とわしが仲は知らぬ。

數　馬　さう云やつた分では、合點がいかぬ。誓言できゝたい。

式　部　何が扱侍、（というて言兼ねて。）侍の娘で御座るもの、何の僞が御座りましよ。

數　馬　おゝ嬉しや〳〵。其方がさういうて給れば安堵した。

式　部　『此方とわしが夫婦になりますからは、追付お國は芽出度く治まります。御氣遣ひなされますな』とまあ此如くに仰せられましよ。（といふ。）

大　藏　おゝさうあらう。先づ奥に早う會はせたら宜かろ。身もそれへのいてゐるよ。式部もそれにゐれば氣が詰まる。奥へ入りて休みたら宜かろ。

式　部　畏つて御座ります。これ女郎、國の守の奥樣に御眼にかゝる事、有難いと思うたがよい。必ず粗相をいふまいぞ。

數　馬　若し粗相があつたらば、こな樣、よい樣にいうて下され。

（といふ。式部樂屋へ入る。）

若　葉　御案内を申しました女郎の御出で御座ります。

（といふと簾上る。姫出給ふ。）

みさきの前　京の女郎のおぢやつたといふか。早う會はうわいの。

若　葉　申し、殿樣もあそこに御座りますぞ。粗相を仰しやりまするな。洛の女郎は目恥かしう御座りますぞ。

みさき　會ひたいと思ふので、殿の御座るも眼が付かなんだ。それへ出て會はう。（というて下へ降り、數馬を見て、）あこな樣は。（といふて抱付かんとしていやつと思直したる顔で、）其方は洛から此中おぢやつたげな。名は何といふぞ。

數　馬　かをると申します。かをるとい

ふ名は、たゞも付きませぬ。歌によそへて付きまして御座ります。

みさき　聞けば其方(そなた)はおれが殿様に從はん樣子を聞きやつて、おれに戀の品をいはうというて、おぢやつたげな。さだめし人に習うておぢやつたであらうの。

數馬　誰に習ふといふ事も御座りませねども、色所に染まつてをりますれば、自づと覺えまして御座ります。

みさき　むゝ色所に染まつたと云やるか。おれが思ふとは違うたわいの。誰が許して色所へは行きやる。いや、誰が許したぞ。あの、性惡(わる)めが。(というて泣く。)

大藏　これ／＼女郎。氣にかけてたもんな。我儘に育つた者なれば、我儘許りいひたがる程に、かまへて氣に懸けてたもるな。

數馬　あの樣な事を仰しやりましたというても、少しも氣に懸けます事では御座りませぬ。御氣遣ひなされますな。

みさき　今の樣に申しましたをお氣に懸けさつしやりましよ。あの人の心人が憎さに今の樣に申しました。

大藏　如何にも／＼。なにこれ女郎、奧は三味線が好きで、三味線が鳴る唄

でも歌うて氣を慰めてたもれ。身もそれへ寄つて聞かう程に。

數　馬　何と仰しやりますぞ。奥様には三味線をなされますとや。お慰みになりましよば、歌ひましよ程に、お慰みにお彈きなされませ。

みさき　久しう聞かん程に、彈いてやらうぞや。いつぞや乘物の中で聞いた儘ぢやあらう。

（さいうて三味線調べて彈く。數馬唄を歌ふ。互の心を小唄にて知らせ、眼遣ひにて悲歎あり。歌ひ彈き仕舞ひて、）

數　馬　奥様にも御心が和らがしやりましたさうに御座ります。

みさき　申し殿樣。今迄は何かと申しまして御座りますれども、成程お心に從ひましよ。唯今は御歸りなされまして、日暮れましてから妾方へ御忍びなされませ。但し、妾が申します事を御聴きなされませぬかえ。

大　藏　すれば身が心に從はう程に、唯今は歸りて、晩け忍べぢやまで。忝い。これと申すも、女郎の蔭ぢや。然らば、唯今は先づ歸ろ。女郎、隨分後で氣を慰めて給れ。さらば〳〵、晩程御目に懸らう。

（さいうて入る。後にてみさき數馬寄合う

て泣く。)
みさき　妾は此方様故に何ぼう辛い目に會ひまして、今日は死なうか、明日は死なうかと思ひましたれど、此方様に會ひたさ許りで命永らへまして、今日御眼に懸りました。これ程嬉しい事は御座りませぬ。
數馬　さう御座らうとも。私も此方に會はう許りで、此様なあられもない姿になつて來ました。もつては同じ事で御座る。やあ、最早夜に入りました。早う此方を連れて退きましよ。傳七と旁ゝ約束をしたが、何として遲い事ぢやまで。
(さいうて待兼ね居る所へ、附舞臺の方より、傳七忍びて來る。數馬見て、)
數馬　傳七で御座る。
(さいうて傍へ行く。みさき數馬悦ぶ。)
傳七　扨、よい首尾で御座ります。裏道の案内もとくと首尾ようして置きました。さあ〳〵御座りませ。此様に灯を點して置いたら惡からう。消して參ろ。
(さいうて燭臺の燈火を吹消し、立退かんとする所へ、大藏來り、此様子を聽く。)
大藏　やい侍共。最前の女は紛れ者ぢや。油斷するな。
(さいうて用心してゐる所へ、式部走り來る。)
式部　式部で御座ります。參りました。
大藏　式部か。最前の女は紛れ者ぢや。
式部　扨は左様で御座らうと存じまして、駈付けました。御氣遣ひなされまするな。
大藏　式部は裏門へ廻れ。
式部　畏つて御座ります。私は裏門へ廻りましよ。(さいうて行くを、)
石井長藏　これ〳〵式部殿。私も御供申さう。
式部　どうなりとも。
(さいうて連立ち、附舞臺の方へ出る。)
式部　裏道は式部が廻つたぞ。
(さ大音擧げ、云うて附舞臺の方へ廻る。闇の夜の心也。傳七みさきの前若衆を連れ。附舞臺の方へ落ちる所　式部傳七兩人行會ひ當り、互にさゝやく。長藏咎める。)
長藏　式部殿、何で御座る。
式部　松の木に行當りました。
長藏　はて危い事の。
式部　左へ廻らしやれ。
(さいふ。長藏傳七に行當り、捕つたといふ。式部傳七が後へちやつと廻り、手を出し、)
式部　これ己ぢや。(さいふ。)
長藏　はて粗相な。
(さいふ間に、傳七みさきの前を連れ、落ち行き樂屋へ入る。數馬後にて働く。侍

共手籠めにして繩を掛くる。附舞臺の所にて、は式部長藏を取つて伏せ、)

式部　狼藉者を召捕つて御座るぞ。

長藏　これ己ぢやわいの。長藏ぢやわいの。

(といへども、膝の下に引敷き居る。)

大藏　狼藉者は此方に召捕つた。

式部　いや此方に召捕りました。

(といふ所へ、掌提燈出る。式部長藏を見て故意と呆れたる顔付。)

式部　はて此方、(というて離し、大藏前へ走行く。)狼藉者はこれで御座りますか。扨己めは憎い奴かな。(というて擬勢有り。)奥様は内に御座りますか。侍衆、御覧じやれ。

(といへば侍共尋ねて、)

〔侍〕　こゝには御座りませぬ。

式部　さては此奴めが落しをつたな。

大藏　して先つ己めは何奴なれば、此様な狼藉を働く。

數馬　やい何奴とは愚かや。身は近江の國淺野數馬ぢや。姫を奪ひ返さんため、此様にして來た。姫を落したからは別に心に悪る事が無い故、此上は其方が思ふ儘に行へ。さあ、どうなりともせいさ。

大藏　はあ、たばかられた。此奴め、片

時も生けて置く奴ではない。式部首を
討て。
式部　畏つて御座ります。やい唯今其
方が首を、身が手にかけて討つぞ。
數馬　むゝ何と其方が手にかけて、身
共が首を討つといふか。
式部　おんでもない事。
數馬　むゝ先づ安堵した。雜兵原が手
にかゝらうかと思うて、何ほうか口惜
しかつたのに、其方が手にかゝれば滿
足ぢや。早う討て〳〵。
式部　今に暇を吳りよぞ。扨斯樣の折
からに、傳七が見えさうなもので御座
りますが、何として見えませぬ。
大藏　誠に最前傳七といふ聲がしたが
氣が付かなんだ。
式部　扨は傳七も彼と心を合はせ、奥
樣を連れて退いたと見えました。捕手
を遣はされて宜う御座りましよ。
大藏　それは後して生捕るは易いこ
と。先づそいつを早く首を刎ね。
式部　侍衆、捕手に早くお越しなされ。
侍共　先づ早う其奴をお討ちなされ。
式部　殿樣、御油斷なされまするな。
傳七に限りませぬ。まだ御傍に謀反人
が御座りますぞ。おぬかりなされます
な。
大藏　合點だ〳〵。
（大藏身用心する態。）
式部　先づ此奴めを。（というて長藏を捕
つて伏せる。）
長藏　これは何とするぞ。
式部　何とするとは。先づ此者が一人
さうで御座ります。最前から路で正し
く傳七を私が手へ入れまして御座る
を、此奴めが振離し落しまして御座り
ます。
長藏　覺えもない事をいふ。
式部　覺えがないとは證據を出して見
しよ。（といふて數馬に對ひ、）これ、こ
いつめは其方と一處ぢやあらうがや。
大事の所ぢや、さうであらうがや。
數馬　長藏。逃れぬ所ぢや。白狀しや。
（といへば侍共繩をかけ、片傍へくゝり置
く。式部又一人侍を捕へ、）
式部　こいつめもさうであらうがや。
又七　己は嘗て覺えがない。これはど
うぢやぞ。
數馬　いや〳〵此場で逃れぬ所ぢや。
（といへばこれも繩を掛け、一處に括り置
く。數馬今一人の袖垣彌忠太を見て、）
數馬　これそこな人。こなたも逃れは
せまい。
（といへばこれも亦繩を掛け、三人一處に
括り置き、）
式部　唯今此者が首を討ちます。（とい
うて數馬が繩を切り解き、）これ〳〵大

藏、其方を討たん謀に斯くの通りにした。逃れはあるまい。覺悟めされ。
（といふて數馬式部兩人討つてかゝる。）
大　藏　えゝ口惜しい。謀られた。
（といふて拔合はせ戰ふ。式部逐うて行き、歸り數馬に對ひ。）
式　部　えゝ無念な。討洩らして御座ります。
數　馬　いや／＼、長逐は要らぬものぢや。先づ姫が方が心許ない。先づ急ぎや／＼。
（といふて二人乍ら入る。）

中入終

（藥罐屋店飾る。又兵衛藥罐薄鍋酒樽擔ひ出る。）
又兵衛　嬶戻つたぞ。
女房おせん　戻らつしやつたか。遲う御座つた。
又兵衛　されば悦べ。難波屋仁兵衛殿で大分仕事を受取つて、それで隙が要つた。
おせん　それは嬉しい事で御座る。何を受取らしやつた。
又兵衛　いかい事受取つた。先づ藥罐を三百、酒注を三百と六百受取つた。手附に銀五十匁受取つた。內祝もせうと思うて、九十三文が酒を買うて來た。
おせん　それはいつ出來してやる筈で御座る。
又兵衛　明日の朝出來してやる筈ぢや。
おせん　此方も餘りな事をいはしやれ。そのいかい事の物が、明日出來る物で御座るか。
又兵衛　はて律儀な事をいふ人かな。商人と屛風は直では立てられぬというて、些宛の僞はいはねばならぬ。人は知らぬ。己はたゝぬ。して傳七殿は。
おせん　樣子を聞きに、町へ出やしやんした。
又兵衛　お姬樣は何として御座る。
おせん　おいとほしや。奥につつくりとして御座ります。
又兵衛　御いとほしい事ぢやわ。此樣な處にかゝつて御座つて、御不自由にあらうわいな。先づこれへ呼出しまして、細工を受取つて來たを喜ばしましよ。又御酒も進ぜまして、御心を慰めましよ。これへ呼びましや。
（といふ。みさきの前出て又兵衛を見て。）
みさき　又兵衛殿、戻らしやつたか。今朝は何う出やしやつたか、いかう遲う御座つたの。
又兵衛　されば旦那衆で仕事を受取りまして、手附に銀五十匁受取つて歸りました。御前にも喜ばしましよし、又內祝も致しましよと存じまして、酒も九

十二文がの買うて參りました。女房ども、御神酒を神樣達へ進ぜませ。（おせん樽を持ち立ち荒神へ酒かくる。）

又兵衞　われがやうに物もいはずに進ぜて受取らしやるものか。（というて酒樽取り、）三寶荒神樣。家内福貴繁昌。（というてかけ、）この鞴へも進じよ。稻荷大明神樣。これへも進じよ。鉄挺大明神樣。（というて鐵槌を見て。）これは何とも名が無い。とてこの大明神。（というて酒かける。）芽出度う御座ります。

（といふ。店へ今川郡右衞門落魄て曾我の舞を舞うて勸進する。）

又兵衞　あれは何ぢや。

おせん　物貰ふ舞まひで御座る。

（といふ。又兵衞舞の拍子に合はせて「通りやし」といへど聞入れず、舞ひしまひて、）

郡右衞門　私浪人者で御座りますが、御覽じつけます通り、尾羽を打枯らし、お店に立ちます。御合力なされて下さりましよば、忝う御座りましよ。

又兵衞　通らしやれ〳〵。合力する物は御座らぬ。通らしやれ〳〵。

郡右衞門　こゝな人は通れならば、最前から通れといひもせいで、折角舞はしてから今となつて通れと云やる。

又兵衞　いやこゝな人はねだり臭い人ぢ

やわいの。先にから拍子にかゝつて通りやといはぬか。其方その舞を覺えてゐるではないか。

郡右衞門　覺えてゐいでならうか。

又兵衞　そんなら置いては行かず、そつちへ取つて行くはさてねだり臭い事をいうて。舞まひを眩暈にしてやらうぞよ。

みさき　かまやんな〳〵。

又兵衞　兎角、構ひませぬが宜う御座ります。女房ども樽を持つて來い。

（おせん、樽と盃を持ち出る。郡右衞門見て、）

郡右衞門　酒盛があるさうな。あゝ久しう酒を飲まんが何とぞして、あそこへ行て飲まれさうなものぢやが、（と思案して、）内方へ頼みましよ。

又兵衞　物もうがある。お姫樣御覽じませ。内が賑かに御座りますれば物もうの絶ゆる間が御座りませぬ。又仕事訛なれば、興さめ顔して、）

ひにがな參つたもので御座りましよ。

又兵衞　こなたはまだ往なしやれんか。

行て參りましよ。

往なしやれ〳〵。

（というて立出て見れば最後の舞まひ

郡右衞門　いや些申したい儀が御座りま

す。御聞きなされて下さりませ。今朝程より方々と歩きまして御座りますれば、口中が渇きまして、かきくけこなにぬねのの開口をも廻りませず、咽喉を渇かしまして御座ります。あはれ微温が御座りましよば、一口御意にかけられて下さりましよば、忝う御座りましよ。

（又兵衛おせんに對ひて、）

又兵衛　今の聞きやつたか。長ういはいでも、短かう咽喉が渇きます程に、水を飲まして下されといふて、短かう濟む事を、長たらしう、今朝程より方々と歩きましたれば、口中が渇きまして、かきくけこなにぬねのの開口も遣はれませず、咽喉といふ事を一踊り踊らして咽喉が渇きます程に湯を一口御意にかけられ、扨も〳〵長たらしいねだり臭い言ひ樣かな。よう御座る。湯を振舞ひましよ。飲ましやつたらば往なしやれ。

郡右衛門　御意にかけられますか。はて忝い。

（といふて内へ入る。又兵衛茶碗に湯を汲み持ちて、）

又兵衛　これ、飲ましやつたら往なしやれ。まだ進じよか。手桶に三杯程飲ましたら宜かろぞ。さあ往なしやれ〳〵。

（郡右衛門立ち兼ね、やはり居る。）

又兵衛　芽出たい酒盛で御座ります。私一つ飲みましてあげましよ。女房ども注げ。（といふて一つうけ、）扨も、泡がづぶ〳〵と浮いた處はどうもいへぬ。（といふて一息に乾し、ほつと息をつき、）扨も〳〵、足の爪先がひり〳〵〳〵とする。

（といふて飲乾す。郡右衛門羨む態。）

又兵衛　お姫樣へ慮外申しましよ。お前とお盃を心安う致しまする等とは、此處に斷うして御座りますればこそ。近頃慮外で御座ります。

みさき　そち達の情の程、忘るゝ事ではない。數馬樣に廻りあひ、世にも出てあらうば、そち達にも此樣な手業もさすまい程に頼む。

又兵衛　女房ども聽いたか。御世に御出でなされたらば、己もじや〳〵馬に乗らうし、其時は其方も乗物に乗せて歩かさうぞ。頼もしう思へ。

おせん　其時は藥罐屋も仕舞ひましよ。嬉しい事で御座る。

又兵衛　己は其時も藥罐屋を、矢張馬に乗つてしよ。そちも乗物に乗つて槌を打て。

おせん　譯も無い。

みさき　此盃は先づ芽出度い盃ぢやによつて、又重ねて細工を受取らしやるや

うに押へましよ。

又兵衛　その大きな物で又何として喰べられましよ。

（といふ。郡右衛門又兵衛が袖を引く。又兵衛振返り見て、）

又兵衛　まだ此方は往なしやれぬか。往なしやれ〳〵。

郡右衛門　私も祝儀男で御座りますわ。先程からこれに居りまして立兼ねてをりますが、承りますれば、何やら芽出度いお盃さうに御座ります。それで貴方に押さようと仰しやります。酒相と申しますものは、さうしたものでは御座りませぬ。私も一つ喰べまするが、急に大きい物では下され難いもので御座ります。一寸私相致しましよ。

（トいうて盃を取る。又兵衛ひつたくり、取返し、）

又兵衛　たとひこれで死ぬるとて、其方に相を頼まうか。

（というて腹立つるを、みさき見給ひて、）

みさき　これ〳〵又兵衛殿。急にはなるまい程に相を頼ましやれ。

又兵衛　そなたが相はしたうは有るまいけれども、酒が飲みたさであらう。これを飲ましやつたらば往なしやれ。

（というて、盃擲り出す。郡右衛門盃取り受ける。女房酒注ぐ。又兵衛見て、）

又兵衛　女房ども、定に注ぐな。

（というて注いでゐる樽の尻を又兵衛抑ゆる。郡右衛門一つ呑みほす。）

郡右衛門　さて御念の入りました結構な御酒で御座ります。

又兵衛　何を追従らしい。銭で買うた物ぢやもの。

郡右衛門　何と致しましよ。御芽出たい御盃ぢやに、今一つ重ねましよかいの。

又兵衛　しつこい人じやわいの。こちへおくさしやれ。も、往なしやれ〳〵。

（というて盃取り、）も一つ下されて進ぜましよ。

（というて一つうけて飲み、みさきの前にさす。みさき盃取り、おせん一つ注ぐ。）

みさき　これは〳〵、いかい事つぎやつた。これを何としておれが飲もにや。

郡右衛門　それはお前に惡う御座ります。急には參りにくう御座りましよ。御肴に舞でもまひましよか。

又兵衛　舞はしやれ〳〵。

（といふ。郡右衛門和田酒盛を舞ふ。次第次第に又兵衛心浮かれ、舞に合はせ、手鼓うつ。郡右衛門和田酒盛の舞に合はせ、十郎になり虎になり、しかたにてさけ引つかけ〳〵飲む。空樽にする。又兵衛あきれて、）

又兵衛　さても〳〵。和田酒盛を舞うて己を虎にして、たゞ一杯はか飲ませい

で、和田の一門九十三文が酒を皆のまれた。
（郡右衞門酒に醉ひ千鳥足にて、）
郡右衞門　私はお暇申しましよ。
又兵衞　往なしやれ〳〵。（というて追出す。）さても仕事に早うとりつこ。相槌の仁助は。
おせん　氣が惡いというて宿へいにました。
又兵衞　ひとりは其方にうたそ。御姫樣もなるまいし、えゝ今の舞まひを賴もうであつたものをな。
おせん　まだ表にゐまする。
又兵衞　まだゐるか。いて賴も。
（というて表へ出る。郡右衞門歸らんとする。）
又兵衞　これ和田酒盛。
郡右衞門　私で御座りますか。這々で御座ります。まづ歸りましよ。
又兵衞　しね根性の惡い物の言樣の。ちと賴みたい事が御座る。
郡右衞門　舞を舞へとの事でござりますか。又重ねて參りましよ。
又兵衞　さうでは御座らぬ、まづ戻らつしやれ。賴む事がござる。
郡右衞門　他の御用と御座るか。それへ參りましよ。
又兵衞　まそつと早う歩かしやれ。仔細らしい歩きやうの。ちとこなたに賴みたい事がござるが、賴まれて下さろか。
郡右衞門　私を見かけて御賴みなされたいとござる。何樣の儀なりとも、仰せられませ。私も只今こそ浪人を致し斯樣の見苦しい態を致して居りますれ、以前は鑄鎗もつかした者でござる。
又兵衞　其樣な重い事では御座らぬ。見やしやる通り、わしは藥罐屋で御座るが、仕事しまするに相手が要ります。いつも槌をうつものがわづらうていんでゐます。急な仕事で御座るが、相槌をうつてもらひたいがと申す事で御座る。
郡右衞門　すれば私に槌をうつて吳れで御ざるじやまで。ついに手慣れませぬ事で御座るが、只今の御おんしやうに打つて上げましよ。
又兵衞　相手になつて下さるゝぢやまで。はて嬉しや。そんならこちらへござれ。（というて仕事場へ直る。）
郡右衞門　さて申さぬ事は、始めの私語、後のどよみになつて、惡う御座ります。先づ、わしも舞をまうて渡世を送ります。まだ今日も四つで御座ります。晩迄はまだ餘程御座りますれば、其所を御了簡をなされて下さりませ。
又兵衞　今の聞きやつたか。物に慣れた

人ぢやわいの。今のは今から晩までの賃を極めてくれといふ事ぢやあらう。何がさて骨を盗も様は御座らぬ。してこなたは何程欲しいと思はしやる。

郡右衛門　高うも申されますまい程に、今から晩までを壹貫で賣つて上げましよ。

又兵衛　扨も興がる事をいふ人じやわいの。今から晩迄一貫出してあふものかいの。此薬鑵が生金になつても合はぬ。譯もない。いや百の物一文につけるもならひぢや。物しましよ。十文に十五槌にまけさしやれ。

郡右衛門　はて譯もない。

又兵衛　五槌七文か。

郡右衛門　それは同じ事で御座ります。

又兵衛　ならぬ事をいうてはなるまい。物しましよ。一槌を五文宛にしましよ。

郡右衛門　よう御座る。まけましよ。してついに打つた事が御座りませぬが、どう打つた物で御座ります。

又兵衛　別の事も御座らぬ。わしが槌をとんと打たば、又こなたがとんと打ち、又わしがとんと打つ。互にとてこ〱と打ちます。

郡右衛門　其拍子なれば舞の拍子を覺えてゐますれば、成程心得ました。打ちましよ。

(又兵衛薬鑵を俯向け打つ。郡右衛門うつ。又兵衛うつ。郡右衛門うたずにゐる。)

又兵衛　これはどうぢやぞいの。

郡右衛門　只今の一槌の代五文を御意にかけられましよ。

又兵衛　はやとるか。(というて錢五文やる。)さあ、打たつしやれ。

(というて又兵衛槌うつ。郡右衛門一つうつ、又兵衛うつ。郡右衛門休みゐる。)

又兵衛　どうぢやぞいの。

郡右衛門　只今の一槌御意にかけられましよ。

又兵衛　又とるか。扨も忙しない。薬鑵がなまつて役にたゝぬが。物しましよ。いつそ晩迄百でしきりましよ。

郡右衛門　まけてなりとも進ぜましよ。

(というて錢百文受取り、又兵衛と拍子をうち、今薬鑵を打ちつぶし槌をすて歸る。門口にて侍、郡右衛門見て、)

侍　ちと物尋ねう。薬鑵屋の又兵衛といふのはどこぢやぞ。

郡右衛門　これで御座ります。

侍　やれ、侍共。のがすな。

(といふ。侍四五人して郡右衛門を取卷く。郡右衛門刀に手をかけ擬勢して、)

郡右衛門　これは何とも合點が參らぬが、様子を承りたう存ずる。

侍　様子は其方が身に覺えが有らう。

郡右衛門　全く覺えは御座らぬ。卒爾を

召さるな。

侍　覺えが無くばいうてきかしよ。此國の主人、大藏殿の奥樣を、兩家老、心を合はせ落しまして、藥鑵屋又兵衛といふ處に御座るときいた。御迎ひに來て尋ぬる所に、最前其方に藥鑵屋又兵衛はと尋ねたれば、これで御座るといふた。すれば其方は又兵衛ぢやによつて、逃がさんといふが誤りか。

郡右衛門　それで安堵しました。はれやれ、餘程、氣遣ひをした。すれば、最早藥鑵屋の又兵衛と御尋ねなされました時、これで御座りますと申したによつて、私を又兵衛ぢやと思召して、今の樣にお咎めなされたな。

侍　共　さうぢや。

郡右衛門　いや〱私は御覽じつけられまする通りの浪人で御座る。用事御座つて此所へ參つて、歸るさで御座る。主人の又兵衛はうちにゐまする。又兵衛殿お出でなされ。

（といふ。又兵衛槌を二本腰にさして夫婦連にて出て、）

〔又兵衛〕又兵衛はおれぢや。身は粉になるとても、渡しはせぬぞ。

侍　尋常に拔け。

又兵衛　拔かうも槌ぢや。おのれら歸らぬか。

（といふて夫婦して槌でたゝき出す。おし返して踏込む。みさきの前を見つけ、）

侍　お姬樣、これに御座りますか。御歸りなされませ。

みさき　由無い所へ出て見付けられた。歸りはせぬぞ。

侍　私が見付けましてからは、連れまして歸らねば置きませぬ。今川式部傳七を搦め取り、奥樣を連れまして歸らずば、再び御目に掛りますまいと申して參つたれば、否でも應でも連れまして歸ります。

又兵衛　いくらでも渡しはせぬぞ。

（とせりあふ。郡右衛門興さめ顏にて割つて入り、）

郡右衛門　先づお待ちなされませ。（といふてみさきの前に行き宥めて、）お前は兵部の太夫樣のお姬樣のみさきの前樣か。これは〱。（といふて追手の侍に向ひて、）扨、申しまするは、御覽じつけられます通りの浪人で御座りますが、承りますれば、式部傳七、此お姬樣をお尋ねなさるゝ由を承りまして御座る。何とぞ尋出し搦取り、浪人の身で御座りますれば、御褒美に預りましよと存じまして、最前より私がこれへ參つて居ります。御姬樣は私が追付それへ連れまして參りましよ。御歸りなされませ。私が預かりました。

侍　これ〳〵、浪人。由無い事を云はずと、退いてお居やれ。是非共身が連れて行かねばならぬ。其方が志、無にはせまい。褒美が欲しくば、後から付いておぢや。宜しう申上げて褒美を貰うて呉るゝで有らう。

郡右衛門　それはお情ない仰しやりやうで御座る。何ぼう御褒美が欲しいとても何の功も無うて申受けられましよか。追付お姫様を連れまして參りましよ。私が預りました。お歸りなされませ。

侍　聞分もない浪人かな。構ひ召されな。（と互にせりあひきしむ。浪之助編笠を著、忍び來り、此由を見て、笠ぬぎ捨て、附舞臺の方へ廻り、みさきの前に會ひ、奪うて行く。郡右衛門見て南無三寶とあとを慕ひ追駈くる。追手の侍共も追駈くる。又兵衛夫婦もあとを慕ひ走り行く。皆々樂屋へ入る。）

（土手道飾る。浪之助みさきの前を背中に負ひ走り、）

浪之助　先づこれへ下りさしやりませ。（というて背中より下ろし、）これへ御座りませ。（というて土手の上へ連上る。）

みさき　數馬様は何となされたぞ。

浪之助　御氣遣ひなされますな。會はせましよ。かう御座りませ。

（というてゐる所へ、郡右衛門拔身にて走り來て、）

郡右衛門　こりや〳〵、其御姫樣は身が召捕つて褒美に預からうと思うた所に、何奴なれば、何方へ連れ行くぞ。おのれ、此方へ返へさぬか。

浪之助　推參な事をいふ奴かな。此御姫樣は身が連れゝして立退く。其方が命は助くる。早々歸れ。

郡右衛門　口の過ぎたる奴かな。返へさぬに於ては、おのれ逃しはせぬぞ。尋常に勝負をせよ。

浪之助　憎いやつの。

（というて拔合せ戰ふ所へ、追手の侍二人來り、以上四人仕合有り。手負の所作種々有り。追手の侍二人ながらしまはるゝ。）

みさき　浪之助。これ氣をはつたと持ちや。疵は淺いぞ。

〔浪之助〕お姫樣か。怪我はなされませぬか。

みさき　いや〳〵怪我はせぬ。氣遣ひしやるな。

浪之助　あゝ嬉しう御座ります。一人は留めをさしましたが。ま一人留めをさしませなんだが。

みさき　それはあそこにをるやつであらう。あそこへ切られんか、連れ往て留めさゝさうが。

浪之助　參りませう。

（というてみさきに取付き行く。みさきの前、郡右衛門が手を負ひ倒れゐる所へ浪之助を連れ行く。郡右衛門起上り、浪之助と組合ひ、浪之助を取つて伏せて、）

郡右衛門　あゝ嬉しや。おのれめに隔てられ、思はずも深手を負うた。お姫樣は何となされた。怪我はなされぬか。みさきの前樣は何處に御座る事ぞ。

みさき　みさきの前はこれに居るが何ぞ。（と不審さうな顏付にていふ。）

郡右衛門　おゝ嬉しやお姫樣か。最前よりわしを、胴慾な者ぢやと思召しましよの。疾う名乘ろと思ひましたれども、敵は大勢なれば、若しお前に怪我が出來ましよかと存じ、わざと敵と一味の樣に見せ、名を名乘りませなんだ。私はお前の家來、今川郡右衛門で御座ります。

みさき　やあ郡右衛門か。

浪之助　扨は、此方には郡右衛門殿で御座るか。私は味方でござる。卒爾をなさるゝな。

郡右衛門　今となつて何味方とは。

（というて留めさゝんとする。みさき留める。）

郡右衛門　これは何故にお留めなさるゝ。

みさき　麁相しやんな。あれは數馬樣の家來浪之助ぢやわいの。

郡右衛門　（やあといふて放し呆れる。）さて
さて、互に存ぜぬとて、きつうぶちかけ
ましたが、疵はきつう痛みますかの。

浪之助　私は寸々になりましても苦しう
御座りませぬ。お姫様に怪我の御座り
ませぬが嬉しう御座ります。遠慮なし
に此方へも討ちかけましたが、疵は何
と御座る。お姫様は連れてのがれます
かいの。

郡右衛門　心が確かなれば死ぬる事では
御座らぬ。こなたもござれ。お姫様を
つれ、此所を立退きましよ。

（と云うて、二人の手をひき、みさきの前
に取付き、立退かんとする處に、又兵衛
夫婦傳七走り來て、傳七みさきのまへを
引きつける。）

傳七　あぶなう御座ります。御退きな
されませ。おのれ。（といふて郡右衛門へ
討ちかけんとする。）

みさき　これ／＼麁相をせまいぞ。それ
は味方ぢやぞ。

傳七　味方とは誰で御座ります。

みさき　今川郡右衛門ぢや。

傳七　やあ、郡右衛門で御座りますか。
（といふてそばへ行く。）これ／＼、郡右
衛門、傳七ぢや。

郡右衛門　やあ、松浦傳七か。

傳七　そなたは兄式部に勘當を受けら
れた。此度の働き式部にいうて勘當を
許さしよ。してあれにゐるは何者ぢや。

みさき　あれは數馬様の所の浪之助ぢ
や。麁相しやんな。

傳七　やあ、浪之助殿か。これは／＼
内に居合はせいで兩人の衆に手を負せ
た。此所にゐてはまだ追手の者が心許
ない。まづ此處をたて／＼。

（といふて皆々樂屋へ入る。）

これまでにて中のをはり

下切　手桶はぬれの始　付り　あくにんたいち　たちばなのいへ

（餅屋酒屋の茶屋店飾る。撫子手桶と箒を
持ち出て、）

撫子　こちのは何をしてゐやしやるや
ら、とも／＼に掃除をせうといふ事は
せいで。

（と云ふ所へ林之助出づる。）

撫子　何をしてゐやしやる。水なりと
も打たうと事はせいで。

林之助　淨瑠璃本を讀うでゐました。

撫子　これはいかな事。わしが水を打
ちましよ程に、此箒で掃かしやれ。

（といふて、撫子水打つ。林之助は箒で掃

く〳〵。）

撫子　こな様は、其様な掃き様があるもので御座んすか。人の掃くを大方見習うたが宜う御座んす。水を打つた跡を、これ、此様にして掃く物で御座んす。（といふて箒とりはく。）

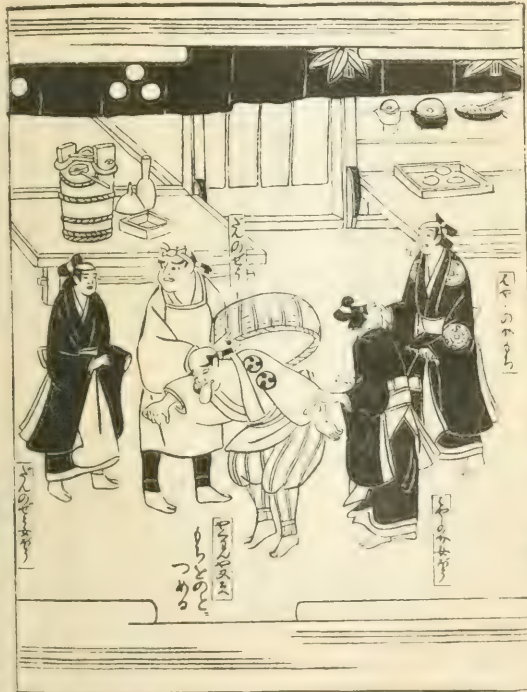
林之助　俺が水打たう程に、そなた掃かしやれ。（といふて手桶を取り、水を打ち、撫子にかける。）

撫子　これ〳〵水がかゝります。

林之助　最早水が無い。汲んで御座れ。

撫子　こな様、くんで御座んせ。

林之助　そんならば汲んで来ましよ。（といふて入る。夕顔出て、）

夕顔　さても夫婦の仲がよいは見よい物で御座る。水を打つて掃かつしやるならば、こちの店の先も掃かしやりたと、科にはなりますまい。如何にこちの人がうちにゐやらんとても、餘りで御座る。こちの人のうちにゐやしやる折は、いつも先づそちの店先から掃き掃除をさしやる。其方衆はたまに掃き掃除するとて、餘りで御座る。

撫子　それは、そちの人とこちのとは生れ付きが違うて御座る。こちの人はほつそりと華奢な。そちの男は大佛の柱を見る様な。

夕　顔　何ぢや、こちの男を大佛の柱の様な。そちの男がよい男ぢや程に蟋蟀を見る様な。

撫　子　何ぢや。こちの人を蟋蟀の様なあ。

夕　顔　おしようらいの挟箱持の様な。

撫　子　おゝそちのやうな不調法な男を持たうより、こちの様な細そりと華奢な男を持つてみや。

夕　顔　おゝそちの様な痩せた男が、そなたにせがまれて、やがて後家になりやるを見る様な。

撫　子　後家は流行物ぢやによつて、大事はないが、云はして置けばそなたはこちの人を呪やろか。

夕　顔　はて、さうぢやは。さて。

撫　子　いやこゝな人は。

（というて叩きあふ。段之丞酒を擔ひ商ひ歸る。此様子を見、二人が中へ割つて入る。）

段之丞　これは何事ぢや〳〵。

夕　顔　こなたを大佛の柱ぢやといひます。こゝへ御座れ。（というて段之丞が腰を叩いて、）これ此様な腰が大佛の柱か。見や。

段之丞　大佛の柱に身が似たといふが、柱が建つか、それは確かでよいわ。さて臼に薦巻いた様なというたら、まだ何程に腹をたてうぞ。腹の立つ事ではないわさて。（というて撫子に對ひて、）そなたもそなたいの。他人向の様に、そなたの男も蟋蟀の様なわさて。

撫　子　こな様まで其様にいはさんす。

段之丞　はやあれがさういうたか。互に腹の立つ事はないわさて。して、今朝から商賣したか。餅でも賣つたか。

撫　子　一文が物も賣りませぬ。

段之丞　其様な事で埒があく物か。そちは酒を賣つたか。

夕　顔　いゝえ、今朝から家主の婆様が火を貰ひに御座つたばかりで御座る。

段之丞　おれは今朝から一貫が酒を賣つて來た。今時の商賣はそちたちが様に、酒参りませの、餅参りませの、というたばかりでは賣れぬ。まづ浮々として陽氣らしい者が通るならば、上戸ぢやと思うて『酒を参りませ。酒も種々御座ります。伊丹諸白鴻池。酒奴様お好きならば白酒も御座ります。白酒を参りましよば上髭の用心なされませ』といふものぢや。又浮々とわせず、阿房らしい者が通るなら、これは下戸ぢやと思うて『申し餅参りませ〳〵。餅も種種御座ります。お好きならば、野郎餅も御座ります』とかういうて賣りや。まづおれは奥へいて休も。（というて入る。）

撫子　申し〳〵餅參りませ。酒などは必ず參りまするな。酒はたち酒と申していまく〳〵しい物で御座ります。餅程、芽出度い物は御座りませぬ。餅も種々御座ります。（といふて種々餅の言立てあり。）

夕顔　申し〳〵酒を參りませく〳〵。必ず餅などを參りまするな。餅は四十九の餅といふて忌々しい物で御座ります。酒に四十九の酒と申すは御座りませぬ。酒も種々御座ります。（といふて種々酒の言立てあり。）

夕顔　申し奴樣、お好きなれば、白酒も御座ります。白酒を參りましよば、上髭の用心をなされませ。

撫子　そなたは、こちの商賣の妨げをしやる。

夕顔　そなたが。

（といふて叩きあふ。又兵衛饅頭賣になり、饅頭々々と賣りまうて出る。叩き合ふ間に餅を盜み喰ひ、咽喉につまりて、『何事ぢや〳〵』といふて、段之丞林之助出る。四人して又兵衛を叩く。段之丞又兵衛を見て、）

段之丞　そちはばんたの又兵衛ではないか。

又兵衛　面目ない對面で御座ります。扨

今日は此處の神事。敵大藏が見物に出ますげな。幸ひの事ぢやと御座つて、數馬樣式部傳七私が處に御座つて、今日本望を遂げさつしやる筈で御座る。私は檢見のため參りました。

段之丞　扨はさうあるか。嬉しや、此方等も其通りぢや。心を合はせ本望遂ぐるぢやあらう。まづ、各々に對面を致さう。こちへ來い〳〵。

（というて皆々入る。）

（拍子木を打ち、大藏神事を見物する。小原木踊。女方座中殘らず出る。哥仙十郎兵衞藤田藤左衞門出て踊る。南京操、羅生門淨瑠璃有り。人形南北三ぶ。淨瑠璃狸十郎右衞門。使ひ平田島半兵衞つかふ。關寺小町の舞有り。竹島幸左衞門舞ふ。舞ひおさめて面をぬぎ、）

式部　これ〳〵大藏。いつぞやの書置、正しく謀書と知つたれども、わざと事を改めなんだ。唯今本望を遂ぐるぞ。御輿を渡せ。

（といふ所へ、數馬其外皆々來る。大藏座敷より飛下りる。式部取つて伏せ、）

（といふ。御輿かき出す。）

てうさや、ようさや。

式部　さあ〳〵敵は手へ入つた。先づ、千秋萬歳

雲絶間
衣猿月

源平雷傳記

雲絶間(くものたえま)名殘月(なごりのつき) 源平雷傳記

作者 市河團十郎

四番つゞき役人之次第

一 源の頼光　杉山彌惣左衛門
一 同　頼信　中村數馬
一 妹　直姫　市川はつせ
一 坂田の公時　山中平九郎
一 孫　坂田の公宗　猿若まし之介
一 卜部季宗　瀧井源右衛門
一 子　季兼　かさ切順之介
一 碓氷の貞景　中村清五郎
一 子　貞春　市川せんや
一 藤原の仲光　あぶらかん六
一 平の鬼澄　田村平八
一 源の頼近　猿若山三郎

一 渡邊竹綱　村山四郎次
一 女房　雲の絶間　荻野澤之丞
一 妹　曙　をの川おりへ
一 渡邊の國綱　市川九藏
一 薄衣　桐山政之介
一 神主國平　松本源左衛門
一 八重垣姫　澤村小傳次
一 弟いつき丸　袖崎村之介
一 鳴神上人　市川團十郎
一 櫻山たんや　嵐門三郎
一 一臈きやうち坊　秋田彦四郎
一 殘雲坊　山川彦五郎
一 殘雪坊　岡田九郎左衛門
一 雲來坊　中村清九郎
一 天龍坊　杉山勘右衛門
一 小野の道風　中村半三郎
一 獨武者　中村勘三郎

雲絶間名殘月　源平雷傳記

第一

こゝに源の頼光は、田の面の諺とて、頼信公の館に入り給ふ。御前の人々には季宗貞景、君をもてなし奉る。頼信宣ふ様。

〔頼信〕さて四天王の者とも、君に御願ひの旨候。如何仕り申さん。

とあれば、とく／＼とありければ、頼信宣ふやう。

されば、四天王の者ども悴を持ち申し候。今日壽の折柄なり。あはれ御召あつて、それ／＼に御名を賜はれかし。

とある。

〔頼光〕なる程めでたき折柄なれば名を付けてえさすべし。

〔頼信〕それ、御召。

とありければ、貞景心得、

〔貞景〕先立つて、公時次の殿に召具し候。

とて、子四天それ／＼の名を名乗りてこそ出でにけり。頼光御覧じ、

〔頼光〕なに公時。四天王が悴共か。誠に子四天王ともいひつべし。先なるが貞景が悴。今日より貞若を引代へ、碓氷の貞春。

と下さるゝ。

さて次なるは。

〔頼信〕されば季宗が悴季若。

〔頼光〕今日より季兼。

と下さるゝ。有難しとて列座なす。

扨三番目は惡太郎公時が悴公宗。

と下さるゝ。

さて渡邊が一子は國綱。

と下さるゝ。

それ／＼に引出物を賜はり、銘々に壽のせりふあり。公時を始め、皆々君萬年と祝ひける。かゝる所に渡邊下向とある。渡邊出る。公時見て、

〔公時〕渡邊。貴殿は、君の御代參として、熊野に參詣めさるゝ段、思ひの外早し。さて渡邊。悦び召されい。今日壽の儀式ありて、貴殿の悴三田若にも、今日より渡邊の國綱と賜はる。

綱、悦びは限りなし。

〔渡邊〕扨、參詣の折柄、君の御身に一大事が出來仕り候。

人々驚き、如何なる仔細とある。

〔渡邊〕　されば、か樣の物を拾ひ取り候。
貞景立ちより見れば、繪姿に釘を打ち、鎮守府の將軍源の賴光と御名を書き、裏には南無日本第一大龍權現とあり。願主源の賴近。貞景讀兼ねける。公時とむろ。渡邊讀ませ給へとあり互の論やまず。君御覽じ、

〔賴光〕　貞光。願守は誰ぞ。

〔渡邊〕　源の賴……。

といふ。

賴信　某か。

〔渡邊〕　いや賴近。

といふ。公時腹を立て、

〔公時〕　これはまさしく賴近の調伏。併し主從の好み、斯く申す公時育て申す賴近なれば、綱、少しは容赦致せ。

とある。渡邊聞き、

〔渡邊〕　されば、賴近公ばかりなれば苦しからず。其手を見よ。まさしく三田の源太が手跡なり。某爲には弟なり。

公時　しからば會得致したり。

貞光　さて賴近の討手には、誰を遣は

萩野沢之丞一世一代
源平雷傳記
雲絶間名殘月
壱才　車僧
二才　股白雪天女
三才
四才
口上

捨置いては後日の難儀と存じ、持參致し候はん

賴光　[illegible]と申さんより、四天王發向したり。

致すべし。
公時　いや、某一人ならば參るべし。
とて腹立て、
渡邊　然らば公時一人參るべし。併し身が倅竹綱は未た熊野に參詣せす。此度の討手ながら、貴殿召連れられ候へ。
といふ。
〔公時〕 倅れ參らん。
といふ。國綱悅び、
〔國綱〕 公宗殿。私は討手に行く。
といへば、
公宗　父樣。某も參らん。
といふ。
公時　面倒な。倅れ行かん。
といふ。
貞若　某も參るべし。
季宗　由ない儀により、身が倅季若も參りたきよし申す。いかゞ申さん。
渡邊、宥めけり。

〔季若〕 然らば腹切らん。
といふ。
〔公時〕 然らば子供四人ながら連行かん。
といふ。皆々悅び、公時殿、倅を賴むといふ。
〔公時〕 心得たり。
といふ。賴光喜び、
〔賴光〕 早、下向致し、賴近を討取るべし。
とて、皆々退出なしにけり。
されば爰に平非の保昌は供あまた召具し、住吉に參りけり。神主國平立出でけり。保昌種々神主に恨みをいふ。
〔保昌〕 聞えぬ。賴みおきし事は如何致したるぞ。今日、道風殿のこれへ參詣召さるゝ。今日は是非取持ち、兄弟契約の盃を致すやうにせよ。
〔國平〕 承り候。
とて保昌を奧に入る。扨、今日は小野の道風これへ勅使に御立ちあり。即ち案内には渡邊が御供とて、古硯の名石を取出し置く所へ、住吉踊來へる。國平も浮氣者、踊にうつり、種々道化あり よく／＼見れば女なり。
〔國平〕 扨、住吉踊と思ひしに女なり。如何なる仔細。
局立寄り、
〔局〕 いや／＼、別に仔細に候はず、誠は賴光樣の御息女直姫樣なり。
といふ。國平驚き、
〔國平〕 その直姫樣が如何やうの仔細にて御出で候ぞ。
〔局〕 いや、「あそこ」へ御立ちなさるゝ道風樣に惚れての事。國平。そなたを賴む。
とありければ、心得たりとて人々を隱し置く所へ、道風は渡邊が案內にて、古硯の名石を申下し賜はんとて、住吉に參らるゝ。渡邊が附添ひあれば、成りがたしとて、神主が計ひにて、渡邊をまきにけり。姬、時分は宜しと

て種々くどき給ふ所へ、保昌來り、種々當言をいふ。

道　風　念者(ねんじや)を持つ事はならぬ。

といふ。

直　姫　保昌が戀も、妾(わらは)が戀もかなへてたべ。

といふ。道風承引あり、盃を取出し、

〔保昌〕　さて起請を書かん。

とて保昌名石を取出し、書かんとする時、直姫、かの石を取り、逃げんとするを、渡邊留め、

〔渡邊〕　此石を盗み行くは、正しく變化の所爲ならん。

というて名石をとゞむる。

直　姫　扨は現はれしか。眞(まこと)は酒呑童子が精魂なり。此名石を奪ひとらんため來りたり。

といふを、渡邊飛びかゝり、片腕を打落し、跡を慕うて急ぎけり。

さればにや貞景は、直姫館を出て給へば、心許なく思ひ、迎ひのため、乗物をつらせ來りけり。所に、

女　　もし、頼み申したうござる。妾(わらは)は手を負ひました。

といふ。助け給へといふを見れば、直姫なり。

〔貞景〕　扨は姫様。今日の御供は何者が致しました。

〔女　〕　いや、渡邊が自ら(みづか)に惚れたというて、其戀がかなはぬとて、此如くに腕を切つた。

〔貞景〕　扨は左様か。渡邊を討取らん。

といふ。

直　姫　いや〳〵、これへ渡邊が來る。

といふ。貞景、先づ姫君を乗物の内に隠しけり。所へ渡邊來り。

〔渡邊〕　貞景。此所へ化(け)したる者を附込んだ。いやさ魔が入つた。

貞　景　扨は魔が入つたか。

とて飛びかゝり打つ。太刀を互に鬪ひ、

主に戀慕し、其戀がかなはぬとて、よく片腕を切つたな。

渡　邊　いやさ。貞景。それは人でない。

貞　景　人でないさ。

と互に爭ふ。その處へ保昌、眞の直姫を手込めにし來りけり。國平は道風を守護し、互に爭ふ。

〔貞景〕　此處にも直姫様がある。

とて不思議晴れず。乗物の内を見れば、何もなし。扨は保昌が御供申せしこそ眞の直姫とて悦ぶ。

〔渡邊〕
〔貞景〕　扨、方々。先立つて公時は頼近の討手に參つた。併し子供大勢遣はし、心許ない。三人打連れて參るべし。

とて國平に姫を預け、三人打連れ、熊野路さして急ぎけり。

浮世なき侍とて通る車僧。頼近は禪門の態と
なり、頭陀僧となり給ふ所へ、貞景が妹は漁
夫の様に形をかへ、頼近を諫め申さんとて來
りけり。陶朱公が昔を思ひ、一つの魚を捧げ
けり。（此内薩摩外記淨瑠璃政之介仕候）頼近は、

〔頼近〕 扨は貞景妹薄衣か。汝、兼々不
便の加へし故、某を踏付けての諫言、
なかく左様でなし。逆心の心はなし。

薄衣 左様でなし。これ、御覽ぜよ。

とて、張りたる幕を引切り見れば、父頼光を
調伏の壇上。

〔頼近〕 扨は現はれし。

と既に危く見えにけり。公時、子四天王を伴
ひ、此體を見て、中に入り、女を見れば貞景
が妹なり。公時、頼近に向ひ種々諫言あり。
既に頼近を捕つて押へければ、郎黨ども、子
四天王を奪ひ、

〔郎黨〕 頼近を殺したらば、子供を殺す。

といふ。さすがの公時、我子ばかりならず、
大勢の子供を殺しては、預りし前が立たぬと
て、爲ん方つきたる所へ、貞景平井渡邊來り、

〔貞景〕 必ず卒爾を致すな。公時。渡邊
が子供をよこしたるは、斯様の儀。貴
殿が逆心過させまじきため。扨方々。
頼近公御發起あらば、助くへし。必ず
悴と朝敵とは見替へは致さぬ。

頼近聞き給ひ、

〔頼近〕 方々の志切なれば、成程、發起

致すべし。

四天王悦び、頼近の命を助け、子供を奪ひ取り、扨、禮參りに熊野へ。頼近公を先達にて、「熊野へ參詣々々」と皆々打連れ、三熊野さして急ぎけり。

第二

されば朝廷には公卿數多參内あり。禁廷伺候の武士には、平の鬼澄、唯一の神道をもつて住吉の社家津守の國平をもつて神道加持ありけれども、其效更になかりけり。其時、頼信重ねて奏聞ありけるは、

〔頼信〕 とかく、神道の威力未だ威徳も見えず。某存じ當り申し候。七大寺の住僧懐山和尚を御召あつて、一加持御祈り候へ。

とありければ、鬼澄承り、やがて使を立てにけり。懐山、香衣を着しつゝ、やがて禁裡に出で給ふ。攝政御覽じ、

〔攝政〕 いかに懐山、早々雷を鎭められよ。

〔懐山〕 承り候。

とて壇上さして番祈あり、（此内雷問答淨瑠璃あり）國平も雷電に怖ぢ、大床さして逃げ行きけり。鬼澄、蟇目を引きけれども、今はたまらず、「何樣、これは大江山酒呑童子の精魂ならん」と、顔ひわなゝき御簾近くぞ逃げにけり。その後、雷電鎭りけり。帝、叡感淺からず、すなち鳴神上人と賜はりけり。上人、悦喜淺か

らず、會稽の譽を得、傍らに入り給ふ。

かゝる所に、碓氷の貞景頼近を生捕り、禁裡に相詰む。

〔攝政〕 扨、いかなれば頼近を早速縛め参つたるぞ。

〔貞景〕 されば、頼近出國の身となり給へど、逆意の心止むことなく、剰へ此度は西國に落行き、大物の城に取籠り、都勢を待ち給ふ。早速發向致し、これまで参内仕り候。

頼近　朝敵にはあらず。某總領たる身なりしに、あれなる頼信に武將をつかはす口惜しさに、扨こそ叛逆の思立ちあり。かく縄目に及び申し候。

と陳じ給へど、既に罪刑極まり、六條河原に引立てんとしたりし時、鳴神上人出で給ひて、

〔鳴神上人〕 先づ待て。

とて留め、

何、怪王丸。そちは若年にて禪門の身となり、某が弟子となりしに、かく縛めに及びしよな。某、命にかけて命乞ひ致さん。

と御簾間近くつつと出て、種々命乞ひあり。

君承引ましまさず。

鳴神　最早かなはぬ。頼近よ。併し申し請けたりし上人號、返進申し候。某これより龍神が窟に籠り、南海下界の

龍神を封じ、干魃天下に極めん。
と怒りをなして、上人は龍神が窟に籠らるゝ。
爰に鳴神上人の弟子、同宿一人つれ來り、
〔弟子〕　聞いたかく〱。此度、上人樣には賴近の命、乞ひ給へども、其事かなはぬ故、此窟に取籠り、龍神の封じ給ふ故、此如く干魃する。てんと最早何處も彼處も照り割るゝ。
所へ上人出端ありいで給ふ。
〔上人〕　いよく〱今日より坐禪觀法に入る間、必ずく〱物をいふな。
といふ。窟の内に入り給ふ所へ、雲の絶間と打見えて、手に觸れ持ちし薄衣物洗はん。白瀧の流れの末に立寄りて、脛の白きを人や見ん。これまことに古の久米の仙人の昔かと思ふばかりに、同宿かの絶間を打眺め、物いひたがる風情なり。上人思はず打眺め、絶間が妙なる容色に見とれ給ひて、窟よりはつしと下座に落ち給ふ。同宿立寄り、
〔同宿〕　上人樣。いかにく〱。
とこたへけり。上人、面目なく顏打赤め立ち給ふ。絶間立寄り、上人に樣々いたはり奉る。上人心を移されて、扨も優しき上﨟と思ふ心に迷ひつゝ、「人の心の花の色、志の嬉しさに、寄添ひ語り申さん」と、同宿を目くばせして立て給ふ。此内彦四郎道化あり　後にて、
上　人　なに、上﨟。國は何處の人。
〔絶間〕　妾は後家でござります。いとし

いと思ふ夫に別れました。
〔上人〕 扨はさやうか。いたはしや。
といふ内にも、絶間を見て、亂心となり給ふ。
絶 間 はて此方様はよう似ました。
〔上人〕 誰に。
〔絶間〕 はて、死なれました夫に、よく此方様が似ました。
と戯れの餘り、夫婦の契約なして、
今よりして、此方様を還俗させて、立派な殿様にして大小をさゝせて、夫婦になりませう。
と盃して打亂れ、互に引請け〳〵飲み、上人、醉ひ亂れ、
〔上人〕 おれは名僧であつた。あれを見たか。あれは龍神が窟ぢや、頼近が命を乞請けた。それがかなはぬによつてその返禮に龍神を封じて、窟へ封じて置いた。仰に醉つた〳〵。
とて、彼處にかつぱと臥し給ふ。絶間、時分な今ぞとて、
〔絶間〕 いかに上人。まことは、我、渡邊が妻絶間なり。御身かく龍神を封じ給ふゆゑ、御身落さんと思ひ、宣旨によつて來りたり。
とて、龍神が窟に入り、四方の七五三繩切つて放して、下山して乘物に打乘り、都をさして急ぎけり。一﨟同宿立出で、
〔一﨟同宿〕 扨々大きな雨かな。上人様〳〵。
と起しけり。
上 人 水が飲みたい。絶間々々。
といふ。
一﨟同宿 もし今の女は僞り者でござります。眞はお前を落しに參りました。麓より乘物に乘り參りました。渡邊が妻ぢやげにござります。龍神が窟の七五三を切りました。
と見れば、七五三が切つて青龍はなかりけり。上人大きに怒り給ひ、
〔上人〕 扨は、君よりの謀によつて參つた。無念なり。
と彼處に立ちし不動の索掻摑み、岩石古木を引倒し、顏色變つて怒らるゝ。同宿驚き留むれば、取つては投げ、掻摑み、勢ひかゝる有様は、凄じかりける次第なり。荒人神か、鳴神かと、みな〳〵恐れて見えにけり。

第 三

こゝに鳴神上人は、雲の絶間に落され、今は爲ん方あらずして、萬事の床に臥し給ふ。一﨟を始め、同宿達種々看病なされけり。然し、今は夜詰も重なり、慰みの爲に、同宿達、碁を打つて慰みけり。互に言葉を爭ひ「最早、此石は死んだ。いや息が絶えた。」といふ。兒立寄り、
〔兒〕 いかに方々。只今上人様は休み

給ふが、今は石が死んだ。息が絶えたりとは、餘りといへば差合なる詞。平に止まり、お藥を進ぜられ候へ。

とある。皆々げにもと思ひ、看病盡くしてゐたりけり。所へ、女の薦僧、今一人は若衆にて、道行にて出でにけり。（此内小傳次道行あり）急ぐに程なく、尼が崎に着きにけり。さて、若衆申すやう、

〔若衆〕　先づ以て、お前の事は大和におきまして、本荻長者の獨り姫八重垣姫樣と申しまして、御祕藏の姫。妾が、弟いつき。扨、こな樣には許嫁の殿樣がござりますとて仰しやりました。聞きますれば、其殿樣は出家の望みあるとあり、出家遊ばされました。それ故、お前にも未來が大事ぢやとあり、出家なされました。私は、出家やら何やら斯樣に御供致します。最早、心にかゝります事もござりませぬ。

とて、互に來し方行末を思ひ、

宿を借らんと見れば火が見えます。あれは摩耶山でござります。宿を借りましたらば、ようござりませう。

とやう〳〵家路を見つけたり。軒に立寄り、樣子を見れば、鳴神上人、目をさまし、

〔上人〕　なに、一﨟同宿ども。水が飲みたい。定めし永々の病氣に、もはや精氣もつきつらん。

と立寄り水を飲まんとて、忽ち蛙の形となる。人々は人かと思ひ、

〔いつき〕　宿を貸し給へ。

といふ。

〔上人〕　宿を貸すべし。

とて見れば、大きな蛙なり。

〔いつき〕　斯樣な時の御供なり。いかで逝さん。

とて打つてかゝる。同宿、驚き立出で、

〔同宿〕　やれ狼藉者。

と人々を取卷き、

汝等は盜人ならん。

〔人々〕　いや〳〵左樣の者でなし。我々は宿借りに參つたれば、家を貸さんとある。見れば怪しき者ぢや。

〔同宿〕　なる程宿借りぢや。

とて見れば、上人、蛙となり給ふ。人々怪しみ、

〔同宿〕　上人樣。

と呼びにけり。上人息つき、

〔上人〕　我こそ上人ぢや。成程宿を貸した。扨は形が蛙になつたか。なに口惜しや。扨、方々は何ぢや。

〔八重垣〕　我々は大和に於きまして、本荻長者の姫八重垣。

〔上人〕　扨は八重垣か。我こそ、幼き時夫婦の語らひなしたる身なりしが、出家の望みある故、夫婦にならなんだ。今こそ鳴神上人ぢや。

〔八重垣〕扨は上人様か。何故かやうに煩ひ給ふぞ。

〔上人〕されば。恥かしながら、最初あさましい形になりしは様子がある。其、仔細あつて、龍神が窟に籠りしに、雲の絶間に落された。恥かしや。

とて泣き給ふ。八重垣聞き、

〔八重垣〕扨は、雲の絶間に落され給ふか。自らと夫婦になる事は嫌とあり、出家し給ふ身が、雲の絶間に落され給うた。よく〳〵絶間が美しい者であらう。某取持ち申さん。

此内上人に文を書かす とて行かんとし給ふを留めけり。

其隙に、上人は舌くひ切つて死し給ふ。人々驚き、

〔同宿〕扨は、上人様は捨身なされ候。

とて歎く。

八重垣　扨は、果て給ふか。いや〳〵、嫌でも應でも絶間に申さん。

とて、物狂はしくなり給ふ。

此文を持ち参らん。

とて、上人の書き給ふ文を見れば、「書置の事」とあり。

何々「八重垣。其方の前に言譯なし。又、畜類の形となる恥かしさに、捨身致し候。」扨は左様か。

といよ〳〵物狂はしくなり給ふ。同宿驚き留めければ、心亂れて行方知らずなり給ふ。

一　薦　とかくの詮議はなし。上人様を

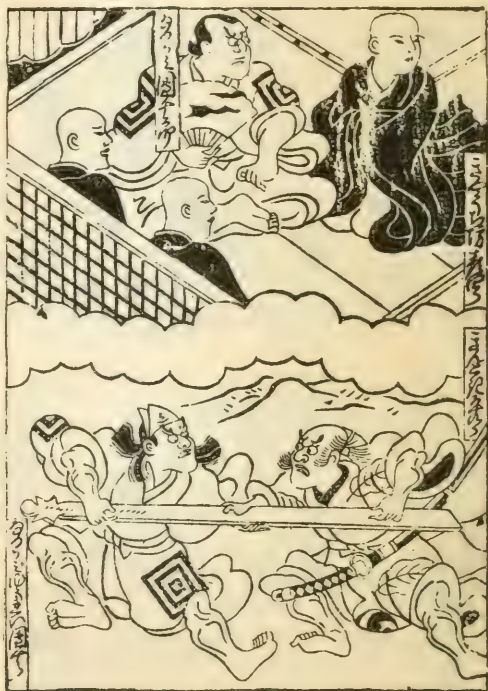
弔ひ申さん。扨、形が蛙の形となり給ふ。蛙殿のお死なやつた。おんばく殿がお弔ひ。

とて、嘆きながら、上人の死骸を取置きけるこそあはれなり。

こゝに山崎の館には、雲の絶間、氣色平癒にて目出度しとて、皆々腰元寄合ひ島臺を捧げける所へ、渡邊の竹綱は絶間妹を伴ひ、

〔竹綱〕 都よりはる〴〵來るに、絶間が氣色よくて嬉しい。さて、今宵は名殘の月見ぢや。

とて、出入りの座頭志賀市瞽女の信夫を呼びけり。志賀市瞽女と夫婦喧嘩をしいだし、

〔志賀市〕 もし渡邊樣。御覽なされませ。如何に不具同志が夫婦ぢやとて、無理ばかりいやる。

とて、互に論じけり。渡邊、瞽女の信夫を見て、妹を頼みよき瞽女ぢやとて、さま〴〵口説く。此内いろいろぬれあり 志賀市腹を立つのを、面白がりけり。所へ絶間は來り、

〔絶間〕 扨、渡邊樣。最早妾が氣色ようございます。妾も名殘の月を見ませう。

とて、座頭を呼び肩を打たすれば、

〔座頭〕 絶間樣の肩を打ちますが嬉し。

といふ。信夫は渡邊が肩を山車舞にかゝり、渡邊を打ちたがるしこなしあり。所へ公時御入りとあり。瞽女も座頭も奥に入る。公時、箱の内に大きなる卒塔婆を入れ、

〔公時〕　なに、渡邊。そなたは雲の絶間が氣色見舞ひとあり。喜びしに、さはなくして、酒宴遊興は何事ぞ。この卒塔婆は供養致させんがため所持致したり。絶間、そちは鳴神を落したぞよ。その罪を逃れうと思ふか。やれ、鳴神はそちを思ひ死に死した。

といふ。

〔絶間〕　成程。卒塔婆の一本も供養致しませう。

〔公時〕　おゝうれしい。然らば身は、孫竹若に逢はん。

とて、奥に入る。

渡　邊　別公時が尤もさや。しかし今宵限りの月見。

と共々語り慰みける。時に島臺なる龜動き出でけり。渡邊首を打ちければ、心といふ文字になり薄の中に入ると見えしが、死して久しき鳴神現はれけり。方々に掲げし燈火一度にはつと消ゆると、二人驚き、「やれ火を出せ」とありければ、公時驚き、竹若が手を引き出づる時に、竹若彼處にかつぱと伏す。絶間竹綱驚き、

〔竹綱〕　なにと、竹若、苦しきか。

と問ふ。

〔鳴神〕　いや。竹若ではない。鳴神た。竹若が命を取る。

公時腹立て、

〔公時〕　鳴神が取りついて、扨は我々に

憂目を見するか。

とて駈出でんとするを止め、

〔絶間〕　もし、公時様。その鳴神は死にました。

公時是非なく嘆く。

なに鳴神。幼いに取付いて苦しみを見せんより、もし上人様、あやまりました。この絶間に取付き給へ。

と嘆く。竹若聲をあげ、

〔竹若〕　然らば絶間を去れ。離別してあるならば、立退かん。

渡邊是非なく、

〔公時〕　いや／＼、竹若を殺さば殺せ。絶間は去らぬ。

上　人　然らば竹若を殺す。

といふ。

公　時　こゝは絶間會得して、一度館を出でよ。

とあり。是非なく絶間出でにけり。此内澤之丞四郎次

平九郎名殘の所、浄瑠璃薩摩外記語り申候　絶間是非なく出る時、

竹若續いて出る　公時見て、

〔公時〕　怨靈の精續いて出るはいかなる事ぞ。

〔上人〕　いや絶間を去るからは、上人が夫婦になる。

公時今は耐へかね、側なる塔婆押取り、互に竹若と引合ふ。此内薩摩外記浄瑠璃　不思議や上人眞の形を現はし、遂に卒塔婆を引つ切りけり。いよ／＼怨靈怒をなし、飛んでかゝるを打散ら

す。所へ瞽女と座頭出て、上人の敵と打つてかゝるを、取つて押へ、

〔公時〕 何者なるぞ。

〔瞽女〕 某は幼き時、許嫁したる八重垣。これなるは上人の弟子一臈なり。

すでに事に及びしを、又ぞや上人の精魂現はれ、

〔上人〕 我、まことは鳴神にあらず。もと別雷の神。濟度方便に現はれ、鳴神といへり。又絶間は唐土養由が女なり。渡邊に弓流を授けんため、假に絶間と現はれたり。

と紀の森に隱れ入り給ふ。紀の森に形は見えずなりにけり。

第四

こゝに源の頼光は、都よりの宣旨により、小野の道風と直姫を婚姻の結びあるべしとて、館に迎ひ取り給ひ、その祝言の御能とて棧敷を構へ、皆々興をなしにけり。さて、その次の御能は何、四大王の者共承り、早々御能始まりとある所へ、侍一人参り、

〔侍〕 樂屋の内に狼藉者がござ候。

〔貞景〕 それ引出せ。

提つて、引出し見れば女なり。貞景立寄り見てあれば、妹の薄衣なり。

渡邊 立寄り見れば、貞景妹なるが、何故狼藉をなしたるぞ。

〔薄衣〕 されば、自ら儀は頼近公と夫婦の契約致し候へども、頼近、道ならぬ御思立ち候ひしを、度々諫め申せども、御承引なく、遂に路頭の露と失せ給ふ。自らも出國の身とならんと思ひ候へども餘りの事の悲しさに、頼近失せ給ふは、四天王の計ひと思ひ、兄貞景はいふに及ばず、四天王の面々一太刀づつ恨み申さんため、かく參り申し候。とく／＼首を召され候へ。

と辨舌清く申しけり。渡邊とかくの言葉なく、立寄り繩を解きにけり。

貞景 何、竹綱。某が妹と思ひ、容赦召され候か。

といふ。

〔渡邊〕 いや／＼左樣でなし。餘りといへば神妙なる志。女心に一騎當千といはるゝ四天王を討たんとはしをらしい。命は助けん。志あらう。

といふ。

〔薄衣〕 忝うござります。

とて髮を切る。頼光御覽じ、

〔頼光〕 やさしき志。朝敵なれども、頼近は一子なれば不便に思ふ。頼近が菩提を弔へ。

とて、御所において三百貫賜はり、退出なして歸りけり。

〔貞景〕 扨、この次の御能は何。とくとく保昌御番組を語るべし。

、とて、保昌物語る。（此内外記淨瑠璃勘三郎仕候）物語過ぎて、天井より大きなる足出る。保昌叱り付ければ不思議や、魔障の形現はれ、

〔魔障〕 實は賴近にあらず、我こそ伯耆の大山なり。賴近が皮肉に入り、逆臣の徒黨となす。いで物見せん。

とかゝりしを、取つて押へ滅しけり。威勢の程こそゆゝしけれ。

此所にて團十郎口上あり。

〔團十郎〕「此度澤之丞元服を致します。もはやこれが名殘でござります。」

とて、役者不殘、澤之丞を勇め、もはやこれへ澤之丞元服召され、立髮にて、六方振り出づる。（此所澤之丞六方出端所作有り）名殘姿も男山器量よし、又立髮も似合ひしとて、勇めながら、又というてはなりがたしと、勇めのため座中不殘大踊。子供は花を飾りければ、立役は萬石踊。我も／＼と俵踊。江戸評判の名殘姿。踊は

なに、柳之介が俵踊、萬石千石、千秋樂。めでたし／＼大踊。

元祿十一年寅八月吉日

堺町東横町

板元かいふや刊

けいせい淺間嶽(あさまがたけ)

一　諏訪殿の後室　　小かん　太郎次
一　諏訪利根五郎　　桑原　三左衛門
一　妹音羽の前　　山本かもん
一　腰元おたさ　　藤井小きん
一　局　　吉川たもん
一　さほ川　林太郎　　吉川　求馬
一　花岡和田右衛門　　座本　山下　半左衛門
一　娘おさん　　今村彌太郎
一　下人輿太郎　　道外　山田甚八
一　使者の侍李之丞　　みつせさこ右衛門
一　淺間の住持　　筒井半十郎
一　兒千壽丸　　尾上源太郎
一　同せいし丸　　藤枝林之介
一　二階堂兵介　　敵役　大森　辰右衛門
一　傾城三浦　　太夫　芳澤あやめ
一　禿たつや　　山下吉十郎
一　傾城奥州　　太夫　岩井左源太
一　禿文字野　　小倉七十郎
一　傾城大橋　　小倉主水

一　禿ともや　　岸川豊之介
一　傾城八重霞　　芳澤小紫
一　禿きく野　　山本市十郎
一　禿小きち　　伊藤小十郎
一　くつわや長左衛門　　淺田　善左衛門
一　九文字屋後家お長　　玉澤吉三郎
一　弟九平次　　近松勘之介
一　年寄　藤右衛門　　藤村　宇左衛門
一　揚屋井筒屋伊左衛門　　若林四郎右衛門
一　女房おつな　　今村粂之丞
一　桔梗屋　長四郎　　若衆　菊川みなと
一　北國屋　又三郎　　生島庄九郎
一　幇間吉兵衛　　宮崎義平太
一　下男六兵衛　　津山平五郎
一　小笹園四郎　　岡野傳九郎
一　巴之丞女房お夏　　岩井花之丞
一　小笹巴之丞　　立役　中村七三郎

けいせい淺間嶽

上

淺間の住持は、兒千壽丸勢至丸同宿共を召連れ出給ひ、

〔住持〕 抑も信濃の國淺間が嶽と申すは、人皇五代孝昭天皇の御宇に至つて、諏訪大明神、淺間大明神出現の御地なり。開山は行基菩薩。唯今迄二千百七十年が其間、佛法繁昌の御山なり。されば一念の瞋恚には、倶泥劫の善根を燒く。悲しきかなや凡夫、愛慾我慢愚痴の煙、淺間に上つて峰を燒く。さるによつて此御山、夜に三度日に三度燒ゆること淒じく、されば歌にも、信濃なる淺間が嶽に立つ煙と、在五中將の詠めり。山はこれ金色の蓮華。斯かる尊き御山なれば、五障三從の女人參詣する事叶はざるによつて、此度衆生結緣の爲、都東山に於て、二月十四日より開帳す。本尊は普賢菩薩、開山行基の御作なり。附屬圓滿王、七難即滅の牛王。この御守を戴く人は、現に勝利を得、惡事災難を遁るゝ故、結緣にこれを出す。其外寶物數多し。一度參詣の人は假令死したる人にも二度逢ふ。御信心の方々は、御參詣あつて、現當二世の緣を結び給へ。南無普賢菩薩〳〵。

と宣ふ所へ、亡八九文字屋後家お長、弟九平次、年寄藤右衛門、廓中引連れ通り合せ、緣起を聞き、

〔お長〕 扨々有難い事かな。只今承りますれば、午王の御守を戴けば、惡事を遁れ、立所に勝利を得るとござります。我々は廓の者共でござりますが、少お願ひ事がござりまして、御代官樣へ只今御訴訟に上ります間、その御守を下されば有難う存じませう。

〔住持〕 むゝ易い事、進上。

と取出し、遣り給へば、

〔お長〕 これは忝い。訴訟に上る道にて御目にかゝり、斯樣の御守を戴くは、願ひ事叶はう瑞相。

と悅び、兩方へ別れ行きにける。

こゝに諏訪殿の家老、花岡和田右衛門は、侍引具し屋敷へ上る所に、廓の者共、口々に、

〔廓の者〕 大勢の者迷惑致します事でござります。お慈悲にお聞分け下されませ。

といへば、

〔和田右衛門〕 むゝ訴訟の者なら、なぜ役

所へ參らぬ。

〔廓の者〕 御役所に參りますれども、お取上げがござりませぬ故、お前へ申上けまする。

〔和田右衞門〕 むゝ。して、迷惑をするといふ様子はどうぢや。

年寄、罷り出で、

〔年寄〕 されば。それに居まするは亡八九文字屋作兵衞が後家お長、次は弟九平次と申すでござります。彼が抱への女郎に三浦と申すがござります。この御屋敷の若殿利根五郎様が、その三浦に二十度ばかりお會ひなされ、何やら御立腹なされ、三浦をお縛りなされて、繩目には封をお付けなされ、解いた者は曲事とあつてお預けなされました。この三浦が勤を致しませねば、後家九平次難儀仕りまする。廓中はこの事に闘つて、商ひも碌に致しませず、迷惑仕ります。お慈悲に三浦をお赦し下されませ。

和田右衞門 （一々聞き、）むゝ此處に傾城町をお許しなされたも、處の繁昌を思召しての事。それに汝等が難儀する事をなされう様がない。若殿様と知らいで、何ぞ慮外申したものであらう。

〔年寄〕 いや、お出でなされますより、利根五郎様と存じ、隨分御馳走申し、下々迄慮外のない事にきつと申付け、少しも左様な儀はござりませぬ。

〔和田右衞門〕 むゝ。然らば御機嫌を伺うて見よう。汝等もお歎きを申せ。

と奥へ通り、

これ〳〵侍衆。先づ、若殿の御機嫌を伺ひ給へ。

といへば畏つて奥へ入り、斯くといへば、利根五郎腹を立て駈け出る。侍共留めれば、

〔利根五郎〕 いや、放せ〳〵。

と駈け出る。後室出で給ひ、

〔後室〕 これ、若殿。何を腹を立て給ふぞ。

利根五郎は、

〔利根五郎〕 やい、和田右衞門。家老ぶるな。其方が身を侮る故ぢや。

〔和田右衞門〕 これは迷惑な。何と仕りました。

後　室 （聞き、）若殿。それは卑怯な詞ぢや。音羽の前は世繼。それ除けて、此方ならで若殿はない。誰でも侮ると、おれが聞かぬ。和田右衞門。さうでないか。

〔和田右衞門〕 左様でござります。音羽の前様は、御世繼なれば格別。若殿と申してはお前ばかりぢや。何を腹を立てられます。

〔利根五郎〕 いやさ、三浦といふ女郎めが身を嬲つた故縛め置いた。それを訴訟

に來るを、其方が取上げるとある。廓の奴等がいふが大切で、身が一分は捨てゝも大事ないか。

後室 (聞き、) 日頃、其方は心が短慮で、手廻りの者が少し氣に入らぬと、其儘手討ちにし給ふ。大將といふものは、慈悲と情を知らぬと役に立たぬ。それ故何卒戀の心も出來れば、心も和がうと思ふ所に、聞けば廓へ行き給ふとある。嬉しや心も和ぐかと思へば、何が腹が立つて女郎を縛り給ふ。樣子をば申し給へ。

〔利根五郎〕何とも、母樣の前で申し難いが、いはねば聞えぬ。三浦と申す傾城に、二十度程會ひまして、屋敷へ來るかと申したれば、成程參らうと申して、其際になつて申すは、深い馴染の男があるゆゑ、行く事はならぬと申す。すれば、某を嬲つたゆゑ、搦め封を付けて置いた。五十年が七十年も、身が腹の癒るまで繩は解かぬぞ。

和田右衞門 (聞き、) 御尤もぢや。さりながら、傾城と申す者は、大名高家をも振つた例もあれば、御耻辱にはならぬ。何と致せば御一分は立ちますぞ。

〔利根五郎〕されば、三浦が俺がいふ事を聞いて、今でも屋敷へ來り、手廻りで使はるれば別儀はない。

〔和田右衞門〕それはお易い事。一旦は振つたりとも、今では三浦も後悔に存じてゐませう。お屋敷へ召さるゝに、廓の者が否とは申すまい。さりながら戀はさうでない。金銀を遣はされ請出し給へ。

後室 (聞き、) おゝ、三浦が屋敷へ來て、若殿のお氣に入る事なら、金銀は何程でもおれが出さう。

和田右衞門、廓の者共に向ひ、

〔和田右衞門〕やい／＼、三浦を金銀を遣はされ、御請出しなさるゝ。却つて汝等が幸福になつたぞ。

九平次、承り、

〔九平次〕畏りましてござります。さりながら三浦と申す太夫は、我儘を申し、我等がいふ事も聞きませねば、お請けを申しても、亦何かと申せば難儀に存じます間、三浦を召出され直にお聞き下されませ。本人だに合點致さば差上ませう。

〔和田右衞門〕おゝ、全盛な太夫は我儘をいふものぢや。それは連れて來たか。

〔九平次〕成程、乘物に乘せ、門外へ參りて居まする。

〔和田右衞門〕然らばこれへ呼べ。

〔九平次〕畏りました。何と繩をほどいて出しませうか。

〔和田右衞門〕おゝ、お氣に入れば、後々

は御臺所ともなる。殊に若殿後室樣もござれば、繩をほどき風流に出立ちて出よと申せ。

畏つて斯くといへば、太夫三浦は傾城姿、八文字を踏み、座敷の眞中へどうと直り、

〔三浦〕皆樣。御免なさしやんせ。

といへば後室見て、

〔後室〕これが三浦といふ女郎か。はて、よい器量や。大名の奥といつても、ちつとも大事ない。これ三浦。其方は若殿と屋敷へ行かうといつて、其際になり、行くまいとは詞が違ふ。侍の娘ならば、契約は違へまいが、流石傾城で誠がない。不心中な。

とあれば、三浦聞き、

〔三浦〕此方樣は利根樣の母御か。彼方の親御なら偏意にて、小面憎からうと思うたが、利根樣と違うて愛くろしいお人ぢや。妾がこの屋敷へ來ぬが不心中なとの事か。眞實誠のあるといふは、傾城ならで外にない。こんな事をいうたと、此方樣方の野暮なお衆は合點が行くまい。

和田右衛門 （聞き、）これは私が太鼓を持つて、尋ねて見ませう。

と側へ寄れば、三浦、和田右衛門と顏を見合せ、

〔三浦〕なう、よし樣か。懐しや。

といへば、和田右衛門肝を消し、

〔和田右衛門〕これ、其方が三浦といふ太夫か。はて扨、太夫ぢやな。

といひ紛らせば、三浦は、

〔三浦〕何ぢやの。人に物いはさず、鈍らしい。おれが此國へ來たも、主のことばかり思うて、勤めを碌にせぬが憎いといつて、親方が又此處の廓へ賣つて遣した。なれども、此處へ來たらば主にも再々逢ふであらうと、心の内には嬉しう思うて來た。此處へ來たは隠れがない。それに文一つ音信がない。まだおれが思ふには、便のない筈はない事ぢやが、もし煩うてではないかと案じたに、赤松打割つた樣な顏をしてゐる。小面憎い。

といへば、利根五郎は、

〔利根五郎〕紛らはしい詞ぢや。外に言交した男があるさうな。

三浦 （聞き、）おゝある。心に覺えがあらう。

和田右衛門 （氣味わるがり、）これ〳〵、侍衆の中に覺えはないか。

〔侍衆〕いえ〳〵、ござりませぬ。

後室 （聞き、）これ三浦。其方が言交した男があらば、誰と名をさしていひ給へ。

和田右衛門 （聞き、）いや〳〵、三浦ともいはるゝ太夫が、男の恥かく事を名

をさしていふまい。

三浦（聞き）深い男の名をいふまでもない。互に二世迄もといふ起請を書いて遣つた。

和田右衛門聞き嫌がれば、利根五郎は、

〔利根五郎〕起請なれば俺ぢや。

と懐より取出せば、和田右衛門取り、

〔和田右衛門〕これは扨、起請ぢや。この返答は。

三浦（聞き）それが何ぞ。傾城の習ひで、十も二十も會うた男が、眞實なら證據を見たいといへば、爪を切り誓紙を書かねばならぬ。おれも起請は八百も書いた。其書いた人毎に心中を立てうなら、おれが身を八百に斬つて、それぐ\に分けて遣らねばつまらぬ。さうはならぬ。

和田右衛門（聞き）是は私が若殿の名代になつて、詮議致しませう。先づ、お前も起請を持つてござります、又私もなけれど、先づ起請を持つて居るになされませ。どちらが誠でどれが嘘ぢやぞ。傾城の起請には、嘘と誠の書き様があるか。

三浦（聞き）いや書き様に二つはない。誠の嘘、嘘の誠といふ大事の祕密がある。心の捌きぢや。知らしやるまい。

和田右衛門　（聞き）これは心の沙汰になつた。禪法ぢやまで。一不審以て參らう。誠の嘘、嘘の誠といふ二つは如何。

三　浦　（聞き）さらば、愚痴の野暮達に聞いて聞かさうか。先づ、誠の嘘といふは、眞實に深く言交したれども、其男が首尾がさけて親の勘當を得るか、主の手前が損ね、廓へ來る事もならぬ樣なり、會ふ事がならねば、始の言交した時は誠なれども、後に會はねば嘘になる。是を以て誠の嘘。又ざは〳〵と惡口をいうて、嫌らしい男ぢやと思へども、二十も會うて先には誠の心で誓紙を取り、請出し女房にもすれば、始は嘘なれども、女房になれば男を眞實に思ふ。なれば是を嘘の誠といふ。兎角、傾城は嘘もなし誠もなし。誠なければ僞りもなし。只緣あるを誠といふ。知らずば物なのたまひそ。

和田右衛門　（聞き、）あら有難の敎化やな。私は悟道致しました。兎角、緣あるが誠ぢや。起請は役に立ちませぬ。私もさる女と言交しまして、御披露申して、女房にも致さうかと存じ、心中を見て居をりますが、苦にせいでも埒が明きました。何とぞ申しましたら、緣がないと申しませう。

後　室　（聞き）それでは恨みをいはうぞや。

（和田右衛門）いや、其時私申しませうは、はて縁がない證據は、三浦殿を出しませう。ざつとこれで埒が明いた。

といへば、三浦其儘和田右衛門が胸座を取り、

（三浦）これ、男。其方ばかりは縁が無うてもおれがあらす。何を一つ其方に違へた事があるぞ。

和田右衛門　（聞き）されば、其方が以前の葛城といふ名を換へた故知らなんだ。眞實ならあの鈍ぼになぜ起請を書いて遣つた。

利根五郎　（聞き）身を鈍ぼといふはどうぢやぞ。

（和田右衛門）起請を嘘に致せば、お前を鈍ぼにすると申す事ぢや。

（利根五郎）如何にもさうぢや。

三浦は和田右衛門を捕へ、

（三浦）これ、おれが此處へ來たはまだ六十日にならぬ。あの人が此方の主ぢやと知れば、旁會はぬ。請出さうといやるに就いて聞けば、この屋敷ぢやとあるゆゑ、行くまいというて、それ故にこそ縛られ、憂目に遭うたは誰故ぞ。皆此方故でないか。それに縁がないとはいはさぬ。

と、しがみ付いていへば、

（和田右衛門）おゝ聞えた。何とお聞きなされましたか。

と言紛らせば、利根五郎は、

（利根五郎）成程、樣子聞いた。

と抜討ちに斬付くるを、和田右衛門しかと取り、

（和田右衛門）これは何をなさるゝ。

と太刀をもぎ取れば、

（利根五郎）やいゝ、三浦が馴染の男といふは汝ぢや。其方が妨げとなり三浦を請けさせぬ。汝、許さぬぞ。

後　室　（聞き）こりや、和田右衛門。家老の身として傾城狂ひをして、國の仕置がなるか。やい侍共。和田右衛門が大小を取つて、國境より阿房拂ひにせよ。やい廓の奴等。三浦も同罪ぢや。これより直に阿房拂ひにせよ。

といへば、侍共大小取らんと立寄れば、和田右衛門怒つて、

（和田右衛門）何處へ。推參な。

と睨め付け、

なに、傾城狂ひをしたゆゑ阿房拂ひとや。國の制法は一つも背かぬ。傾城狂ひで阿房拂ひにするなら、身より先へする者がある。

利根五郎　（聞き）それは誰ぢや。

（和田右衛門）誰であらう。其方ぢや。若殿ともあらう人が、傾城に無體をいひ、

承引せぬが憎いといつて縛搦め、廓中を騒がすは何事ぞ。此方は先づ何人ぞ。

〔利根五郎〕身は若殿よ。

〔和田右衛門〕其方は誰ぢや。

〔後室〕おれは諏訪殿の連合、後室なればぢや殿ぢや。

和田右衛門（聞き）どこへ殿。其方は以前の下樣の奉公人であつたを、大殿不便を加へられ、音羽の前樣の母御はお果てなさるゝ。後見にして置くまいかとあつた故、兎も角もとこの和田右衛門が料簡を以て備へ置く。あの利根五郎は殿の肉身分けられたでない。其方が里より連れて來た子で、何處の牛の骨やら馬の骨やら知らねども、若殿よ後室よと、某が威を付けていはすれば、それに乘つて、なに、和田右衛門を阿房拂ひとや。二人共隠居をしやれ。音羽の前樣へ許嫁の聟を呼入れ、國は治めるぞ。

後　室（聞き）阿房拂ひを口惜しう思ひ、惡口をいふ。よい〱。今迄の好みに腹を切らす。急いで切れ。

〔和田右衛門〕おゝ、身が腹を切れば、姫君を逐失ひ此家を利根五郎に繼がせんと、日頃企まるゝとは聞いたれど、もしや、何程の事かあらんと思ひしに、只今の折を幸ひに身を殺さうとや。推參な。

と太刀引ん抜けば、侍共斬り結ぶ。此騒ぎに廓の者は皆恐れ逃歸る。利根五郎を始め侍共、和田右衛門に斬り立てられ、皆々奥へ逃げ入る。三浦は、

〔三浦〕これなう、ひよんな事になつた。

〔和田右衛門〕其方が由ない事をいふ故ぢや。

〔三浦〕わしも此樣にならうとは思はなんだ。婆の料簡で、廓へ住なずに直に阿房拂ひといはれたれば、金なしに身請けしたといふものぢや。何處へなりとも二人連れで行きませう。

〔和田右衛門〕何をいふ。お姫樣が心許ない。が、上へ知れてある御世繼なれば、滅多にはえ殺すまい。よいわ。其方と阿房拂ひに會はうまで。

と和田右衛門は三浦を打連れ、其處を退きにける。

戀に沈める深草や、十二三なるしやれた風なる小娘、後に風呂敷包みわへがけ來る。後より、

〔七兵衛〕これ〱、駕籠まけませう。

と、綺麗なる男、駕籠を擔げ來り、

淺間の開帳まで七分ぢやぞえ。さあ乘らしやれ。

と娘を乘せ、一人して擔げ行かんとすれど、埒明かず。娘は、

〔娘〕これ何としやる。相手を呼んで早うやりや。

と叱れば、

〔七兵衛〕　七分を二人して取つてはあはぬ。よござろ。相手を呼びませう。（と、）やい作兵衛。來いやい。

と呼ばはれば、

〔作兵衛〕　おゝい。

と答へて、和田右衛門駕籠舁となり、作兵衛と名を付け、息杖持ち來れば、

〔七兵衛〕　いや汝とは肩が合はぬ。餘の者おこせ。

〔作兵衛〕　はて、遣つてくれ。どう合はぬぞ。

〔七兵衛〕　汝は背が高し、俺は低い。

〔作兵衛〕　それは舁き樣がある。上り坂の時は、其方先肩をし、俺が後を舁く。又下り坂では、俺が先肩をし、其方が後を舁くと丁度よい。

〔七兵衛〕　これは出來た。坂はそれでよいが、平道はどうせう。

〔作兵衛〕　其時は、其方が下駄はいて舁くとよいわ。兎角今日は暇ぢや。相借屋の好みぢや。遣つてくれ。

〔七兵衛〕　如何にも淺間まで七分ぢや。行くか。

〔作兵衛〕　信濃の淺間へは百二三十里ある。

〔七兵衛〕　たはけた事ばかり。やい、それを七分でやるものか。汝は物を書かぬか。辻々に立てた札を見い。東山で淺間の開帳がある。

〔作兵衛〕　むゝ、開帳場迄か。そんなら遣らう。

と煙草喫めば、

〔七兵衛〕　どれ煙管貸せ。俺も喫まう。

〔作兵衛〕　煙草はあるか。

〔七兵衛〕　旦那殿に貰ふわ。煙草があるか。下されませ。

娘はそれと差出せば、

〔七兵衛〕　扨も結構な煙草入。これは服部ぢや。お前は煙草がなるか。

〔娘〕　いや、おれは喫まぬが、太夫樣方へ吸付けて進ぜる故、煙草を持つて居る。

作兵衛　（聞き、）七兵衛。伊勢衆ぢや。太夫樣へ進ぜるといはしやる。

〔七兵衛〕　やい、其方と相肩すれば、俺まで恥をかく。これは西ぢや。

〔作兵衛〕　西とは田の畔か。

〔七兵衛〕　はて鈍な。島原ぢや。

〔作兵衛〕　むゝ、禿ぢや。

〔娘〕　おゝ、おれは禿ぢや。島原ではない。橋本淀を過ぎて來た程に、何處ぢや、指いて見や。

〔作兵衛〕　そんなら大坂の新町か。

〔娘〕　いや堺ぢや。

〔作兵衛〕　すれば乳守か。一人よう參らしやる。

〔娘〕　いや、太夫樣の深い馴染の男があ

るが、行方無うならしやつた故、其男
に逢はせて下さんせといふ名代に、お
れが參る。早う遣つてたも。
〔二人〕　心得ました。
二人は駕籠舁けば、禿は、
〔禿〕〽駕籠の鳥かやうらめしや。
と投節謠へば、
〔二人〕　これは面白い。
と行く。後より、作兵衞女房三浦、前垂姿にて
七兵衞女房諸共、出家小姓衆と連れ來り、
〔三浦〕　これなう、用がある。
と呼びかくる。二人は、
〔作兵衞〕〔七兵衞〕　何事ぢや。
と立戻れは、女房共は、
〔女房〕〔二人〕　即ち此兩人でござります。どれ
なりともお極めなされませ。
二人は、
〔七兵衞〕〔作兵衞〕　何事ぢやぞ。樣子をいへ。
小姓林太郎聞き、
〔林太郎〕　別の事でもない。此度東山に
於て、淺間の開帳がある。それに人が
多く要る故、雇ひに參る。此女房衆の
申さるゝには、兩人は相借屋とある。
どれなりとも雇うてくれとある故、こ
れへ來た。五十日が間、給銀に五枚、
彼方から小袖が一つと、大小が出る。
それも掛流しになさるゝ。
とあれば、七兵衞聞き、
〔七兵衞〕　待ならば、私が參りませう。
〔作兵衞〕　いや私。
とせり合へば、
〔林太郎〕　やい、せり合ふな。何でも一藝
ある者でなければならぬ。
作兵衞は、
〔作兵衞〕　私は先づ物を書きまする。內
で手習子を取りますが、今日は休み故
駕籠に出ました。開帳の戒名でも書き
ませうす。又お使ひに參つても、云つて
よさゝうな事は申して參ります。ひよ
つと信濃へ飛脚が遣りたいとある時、
百二三十里は二日に往つて戻ります。
〔林太郎〕　むゝ、それは調法ぢや。そな
たにせう。
七兵衞女房は、
〔お夏〕　これ、うつかりとして居ずと、
此方も雇はれる樣にさつしやれ。
〔七兵衞〕　何をいふぞ。隣の人の雇はる
るを、かち落す事は嫌ぢや。あの者が
する事は俺が片手でする。此片手がお
德なれども、御合點がなければせう事
がない。
出家（聞き）　むゝそれは耳よりな。
何をする。
〔七兵衞〕　先づ片手で髮月代致します。
又お忙しい時、御出家方の頭を一度手
にかけますると、一期生えませぬ。
〔出家〕　それはどうするぞ。

〔七兵衛〕天窓の毛を一本づつ拔きます。
〔出家〕　はて、藥袋もない。
作兵衛、罷り出で、
〔作兵衛〕私がは左樣な事ではない。開帳には賽錢が多うござりませう。それを何ほあるといふ事が其儘知れまする。
〔出家〕　それは調法な。どうぢやぞ。
〔作兵衛〕　賽錢を一つに寄せて、片端から讀みまする。
〔出家〕　はて、鈍な。讀うだら知れいで何とせう。兎角人群集の事なれば、腹立てぬ者がよい。
七兵衛　（聞き、）然らば私ぢや。つひど腹の立つた事がない。何れ、四つ五つの時腹を立てたといふ沙汰がござりましたが、私は覺えませぬ。
出　家　（聞き、）何を。最前から役に立たぬ事をぬかす。鈍な奴の。
〔七兵衛〕　其方は雇はねば其分さ。人を鈍なとはどうぢや。
と腹立てれば、
〔出家〕　それ見よ。腹立てる。其方はならぬ。
作兵衛、側へ行き、
〔作兵衛〕　私は生れ付いて氣が長うて、腹立てる事を存じませぬ。踏んで下されませ。
〔出家〕　われ、踏むぞよ。
と肩を踏めば、
〔作兵衛〕　有難い。如來樣の來迎ぢや。
〔出家〕　これは誠に腹を立てぬ。汝にせう。先づ手附ぢや。
と小判二兩渡し、
宿へ行き、極めう。
と出家小姓は作兵衛夫婦と打連れ行きける。
七兵衛女房お夏は、
〔お夏〕　作兵衛殿は、日頃女房當りがよい。其上耳が大きい故、耳果報があつてよい事に行き給ふ。
と羨ましがれば、
七兵衛　（聞き、）耳が大きいが果報があれば、兎は何とせう。いふ事も違ふわ。あの人は見事な鼻ぢやといふとも、違ふのがある。
と打笑ひ、
これは駕籠に寢てゐらろゝ。
と禿をおこし、
相手が往にました故、負うて行きまするぞ。
〔禿〕　おゝ、どうなりと開帳場へ行けばよい。
といへば、
〔七兵衛〕　こりや女房。駕籠を内へ持つて行け。
〔お夏〕　おれは持つた事がないに。
と駕籠を引きづり歸れば、七兵衛は禿を負ひ歩み行く。

〔七兵衞〕其方は幾歳ぞ。
〔禿〕十三ぢや。
〔七兵衞〕むゝ、ちと休まう。
と下へおろし、
戀のいろはを教へうもの。
〔禿〕何を譯もない事いやる。
〔七兵衞〕はて、七分をはづむが。
〔禿〕嫌ぢや〳〵。
と逃げ、側なる路次へ當れば、内より女の聲て、
〔女〕何者ぢや。
〔七兵衞〕いや、生醉ひでござります。御免なりませう。
〔禿〕これ、嘘にいうた。負はれさつしやれ。
といふ所に、路次の内に女の聲、張上げ、江戸弄齋、
〔女〕〽憎や憎しと思へばいとし、我にいとしき人しなければ。

禿は此弄齋に聞入り、
〔禿〕扨も面白い。覺えて太夫樣への土産にしたい。今の節がま一度聞きたい。
七兵衞〔聞き〕そんなら其方、最前の小唄うたや、時には又あの方にうたうであらう。
〔禿〕如何にも代りがある。謠はう。
と聲張上げ、
唄〽今日と暮らせし飛鳥の川の、なうさて、幾夜なん〳〵、馴染も變れば變るよの。朝別れ。
と謠へば、路次の戸を明け、局腰元立出て、
〔局〕今の唄は其方か。
七兵衞〔聞き〕私でござります。
〔局〕むゝ、よい聲を持つた人ぢや。此屋敷のお姫樣が小唄好きぢや。ま一度謠うて聞かしや。
〔七兵衞〕畏りました、そちへ退いて、折々顏を御覽じませ。

と禿を後に隱し謠はせ、わが謠ふ樣に口を動かせば、
〔局〕其方ではない。後の子がうたやる。はて綺麗な子ぢや。お姫樣の前へござれ。
〔禿〕行く事は嫌ぢやわいな。
七兵衞〔聞き〕行け。やい又親のいふ事をきかぬ。
〔禿〕わが身は親ぢやない
〔七兵衞〕又、あいつめが。あの樣に申す筈がござります。私が身が、見苦しうござります故、何方がお問ひなされたとも親ぢやといふなと申しつけて置きました故ぢや。やい行け。七分ぢやが。
〔禿〕むゝ、そんなら行かう。
〔七兵衞〕これ、吸物が出たと、賤しう喰うまいぞ。又菓子などは辭儀したも惡い、紙に包んで此方へほれ。
皆打連れ路次の内へ入りにける。

姫君音羽の前は、
〔音羽〕小唄謠うた者を連れて來ぬか。
と宣ふ所へ、局腰元、禿を連れ、
〔局〕唄うたふは此子でござります。
〔音羽〕むゝ、綺麗な子ぢや。
と菓子を出し給へば、七兵衞は下座より、
〔七兵衞〕これ、ほれ、ほれ〳〵。
といへば禿は、
〔禿〕えゝ忙しない。
と掴んでほる。姫君は、
〔音羽〕此子を側で使ひたいが、奉公せぬか。
〔禿〕妾は嫌でござんす。
七兵衞罷り出で、
〔七兵衞〕成程奉公に上げませう。
〔音羽〕其方は誰ぢや。
〔七兵衞〕親でござります。年を十年切り銀三百貫下されませ。四季の仕着せも銀にして今取つて歸りませう。
禿〔聞き〕此處に居る事はいやぢや。親でもなうて何いやる。
七兵衞禿を連れ次へ立ち、
〔七兵衞〕よい事ぢや、奉公せよ。
〔禿〕嫌ぢや。駕籠舁の分で親とはなぜいふ。
〔七兵衞〕やい。禿より駕籠舁は上りぢや。
〔禿〕いや、禿が上りぢや。
〔七兵衞〕兎角は御前で申さう。
と罷り出で、
禿より駕籠舁が上りでござりますな。
姫君聞召し、
〔音羽〕あいつは親かと思うたれば、駕籠舁ぢや。あつちへ去なせ。
とあれば、傍へ立退き居る。姫君は、
〔音羽〕むゝ其方は禿か。名は何といふ。
〔禿〕文字野と申します。
〔音羽〕むゝ道理で悧巧な。所は何處ぞ。
〔禿〕乳守でござんす。
〔音羽〕乳守とは。
七兵衞小蔭より、
〔七兵衞〕堺の事。
〔音羽〕又さし出をる。其方は誰に使はるゝぞ。
〔禿〕太夫樣でござんす。
〔音羽〕名は何といふ。
〔禿〕太夫樣の名はいふなといはしやんした。
〔音羽〕むゝ隱す事なら聞きますまい。
〔禿〕お前方も、廓へちつと見物にござんせ。
〔音羽〕いや、傾城は見たうはないが、其買人の風が見たい。
と宣へば、駕籠舁は息杖を腰に差し、袖をかざして、
〔七兵衞〕買人々々。

といへば姫御覧じ、
〔音羽〕買人はあの様なものか。
禿〔聞き〕歩き様は似ましたが、形が
穢い。
〔音羽〕扨は以前買うたものであらう。
局〔聞き〕餘り買ひ過しての果てが、
駕籠舁でがなござんせう。
七兵衛、側へ行き、
〔七兵衛〕あゝ買うたぞい。木幡の里に馬
は二疋あつたれど、君を思へばてんと
徒歩で通うた。雨の降るにも風の吹く
も厭はず通うた。あゝ昔になつた。
と涙を流せば局見て、
〔局〕買人が泣くわ。
と笑へば、
〔七兵衛〕買人は泣かぬものか。君ゆゑ
に焦れ／＼て鳴く蟲よりも、泣かぬ買
人の身ぞ焦るらんといふ歌もある。
姫君聞召し、
〔音羽〕これ、此小袖を着て、買人の風
をして見せ給へ。
〔七兵衛〕買人が振袖は着ませぬ。
禿〔聞き〕買人の着る物を持つて居
る。貸しませう。
と風呂敷より小袖取出せば、局は、
〔局〕これを着て、早うしや。
〔七兵衛〕買人は着る物取つては着ぬ。
着せよ。
〔局〕はて横柄な者ぢや。
と小袖着せ換へ、帶をし、脇差扇差し、巾着を
提げさすれば、
〔七兵衛〕どれ鼻紙。いはずともおこせ。
先づかうした風でござります。
姫御覧じ、
〔音羽〕人形も衣裳ぢや。よい男に見ゆ
る。
〔七兵衛〕何とようござりますか。
と着る物の紋所を見、
これは俺が紋ぢや。や、禿。太夫が名
は何といふ。
〔禿〕いふ事はならぬ。
〔七兵衛〕俺指いて見せう。奥州とはい
はぬか。
〔禿〕如何にも。卽ち妾は太夫様の禿
ぢや。
〔七兵衛〕嘘をいふ。奥州が禿は式部と
いふのぢや。
〔禿〕よう知つてぢや。其式部様は去年
の御影供から出やしやつて、今は八重
霧様といふ太夫様ぢや。それで妾が奥
州様に附いて居ます。
〔七兵衛 實は巴之丞〕むゝ此小袖は形見に俺が遣
つたのぢや。おれは小笹といふ者ぢや。
〔禿〕扨は太夫様の戀しいと仰しやる巴
様か。此方様に逢ひたいとの願ひに、
此着る物を淺間の開帳へ上げさつしや
る。

〔巴〕 扨は太夫はまだ俺を思うて居るか。
といふを姫君聞き、
〔音羽〕 お前が小笹巴之丞様か。
と抱き付き給へば、
〔巴〕 巴之丞でござるが、此方は誰ぢや。
〔音羽〕 お前の許嫁の音羽の前でござります。
〔巴〕 む〻、さればこれは諏訪殿の屋敷か。
と駈け出れば、人々留め、
〔局〕 なぜ左様には仰せられます。
〔巴〕 されば、其方と許嫁あるに傾城に戯れし故、親の勘當を受け、此姿となり、今何と逢はる〻ものぞ。
姫君聞き、
〔音羽〕 それは聞えませぬ。お前の行方の知れる様にと、淺間へ願ひをかけ、開帳に參り此所へ宿を取り、此處でお目にか〻るは、偏に淺間の御利生ぢや。往なしはしませぬ。
〔巴〕 すれば、此身になつても某と夫婦になる心底か。
〔音羽〕 何が扨、二世迄でござんす。
〔巴〕 お〻嬉しい。然らば足を止めう。
偏に淺間の御蔭。南無普賢菩薩〱。
と拜み給ふ。所に禿は、
〔禿〕 なう悲しや。
と氣を失ふ。人々驚き、
〔人々〕 やれ、文字野〱。

と呼び生ければ、心付き、
〔禿〕 なう熱や、衿に掛けた物を取つて
下され。
といへば、巴其儘取り、
〔巴〕 これは護符ぢや。
といへば局手にさへ、
〔局〕 なう熱や。
姫君も觸り、
〔香羽〕 あゝ熱や。
巴は、
〔巴〕 面妖な事をいふ。
と護符を拾ひ、
扨も熱い。
と棄てれば煙出る。
はて不思議な。
といふ内に煙止めば取つて見、
最早熱さが止んだ。
と護符を開き見れば、
是は皆起請ぢや。これに願文があるわ。

と讀みて見れば、
「敬つて白す。願書一通、僞りの無き世なりせば如何ばかり、斯く我罪の恐しからん。とても浮世に生れなば、士農工商の家にも生れず、殊にためし少なき川竹の、遊女は何の報いならん。遊女に實なしとのお疑ひを晴らさんため、指を切り髪を切り、起請さへ此春迄七十五枚書き參らせ候。あさましや悲しや。我故に知行に離れ、親の勘當

受けし人の、執心夜な／＼枕に立ち添ひ、わが指返せ爪返せ、起請報い嘘の堅まり、思ひ知らずや思ひ知れと、枕にかゝる血の涙、夜に三度、日に三度、焔となつて此身を焼く、夜晝の苦しみ、此身も焦るゝばかりに候。さるによつて多くの起請を集め、淺間の山に納め、後の罪を助からんと願ふ。依て願書一通如件。乳守の遊女奥州 敬つて白す。扨は起請に執心宿つて燃えたるよな。あゝ恐しや／＼。俺も奥州がくれた起請を持つてゐる。其方と夫婦になれば、これも要らぬもの。この起請どもと一所に皆焼いて退けう。

と懐より取出し、側なる火鉢へ投げ入れ、焼き棄つる煙の中より奥州が形現れ、恨めしさうにじつくりと立てば、姫君局腰元禿はこれを見て、

〔人々〕なう恐ろしや。

と倒れ伏す。巴之丞は、

〔巴〕何をいふぞや。

と後向き、はつと驚き太刀に手をかけ、

やあ何者ぢや／＼。

小唄へ 問うてたもつて嬉しやな。問はれて今の恥かしや。浮名にも換へ身に換へて、いとしき殿のいとしほく、たんと心を盡したわいの。

〔巴〕むゝ、扨は奥州か。何とて迷うてこれへ出た。

〔奥州〕其方いとしさに、逢ひたうて、見たうて、語りたうて來たわいの。

巴は夢とも辨へず、

〔巴〕おさましの姿や。

と抱付けば、はつと消え、袖や袂を打振ひ見れど、人の形もなく、こはそも如何に不思議やと、立つたり、居たり身を悶え、惘れ果てたるばかりなり。又形現出で、

小唄二上り へ 恨みも戀も殘らねど、若しや心の變りやせんと、思ふ疑ひ晴らさんための誓紙をば、なぜに煙になし給ふ。恨めしや。合の手へ 胸の焔は夜に三度、此方の思ひは日に三度、煙くらべん淺間山。あれ御覧ぜよあさましや。合の手へ 邪淫の悪鬼は身を責めて、なう劍の山の上に戀しき人は見えたり。嬉しやとて、攀ち登れば、思ひは胸を碎く。こはそも如何に怖ろしや。花の姿も弱々と、彼處に立行かんとすれば、此處に消え、あるか無きかの春の夜の、朧月夜に儚なくも、消えて形はなかりけり。

巴は、

〔巴〕扨は起請の一念であつたか。これ／＼。

と人々を起し、

兎角、女は執心が殘らぬがよいぞ。

姫聞召し、

〔音羽〕 よく／＼、お前を大切に思はるればこそ、太夫の姿が現れた。此上は請出してたも。先づ秃は人を添へ遣りてたも。いざ先づ後室へもお目にかゝらう。

と皆打連れ奥へ入り給ふ。

所へ利根五郎、傘鉾を持ち、侍共に手桶を持たせ、華やかに出立たせ、

〔利根五郎〕 女房よんだ。水浴せ／＼。

と囃し立て來る。後室立出て、

〔後室〕 これは何事ぞ。

〔利根五郎〕 されば巴之丞殿音羽の前との祝言が濟んだ故、水浴せを致します。

〔後室〕 聞えたが、こゝはいうても旅宿ぢや。國へ歸りてからの事ぢや。

〔利根五郎〕 然らば、母者人のお止めなさるゝ程に、先づ止めませう。男共、休め／＼。

といへば、皆勝手へ入りにける。所へ巴之丞、上下着し 姫君諸共立出て、

〔巴〕 此方が利根五郎殿か。祝ひの水を下されうとあるは忝い。此處は旅宿なれば、國へ參りて目出たう申受けませう。

〔利根五郎〕 成程。それ故延ばしました。

といふ所へ、小倉の庄右衞門様より巴之丞様へお使者の由を申す。

〔巴〕 むゝ一族も廣うござれば、失念した。其使者を通し給へ。

とあれば、使者の侍共引連れ通り、

〔玉水〕 遠路なれば土足の態は御免なれ。諏訪殿の姫君音羽の前様へ、巴之丞殿と申す人を聟にお取りなされたとある。何方でござる。

〔後室〕 おゝ自らは諏訪殿の後室、これなるは音羽の前。それにござるが巴之丞殿ぢや。

〔巴〕 身が巴でござる。

〔玉水〕 扨は此方か。某は衞門家來玉水杢之丞と申す者ぢや。此方の御一家に小笹團四郎といふを御存じか。

〔巴〕 それは身が叔父が伜で、指渡しての從弟ぢやが、幼少より出家させたと聞いた。それが何と致した。

〔玉水〕 されば、その團四郎が、身が主人へ奉公に入り、主人衞門を討つて立退くを搦め取つた。主を討ちし故一門へお祟りなさるゝ。斯くいうた分では疑ひもあらうと思ひ、科人を引かした。對面せられよ。

と繩附きを引出せば、巴見て、

〔巴〕 やい顔を上げ。これは團四郎か。

〔團四郎〕 巴之丞殿。面目もない對面を致す。私は十六の時出家致したけれども、心惡黨にて、十八にて還俗し、寺を出でて方々流浪し、衞門殿へ漸う大

小を差す迄の侍奉公には入つた。鎗の一筋もつかふ程の奉公ならば、斯樣な事もあるまいに、少しの落度ありしとて、侍たる某を立蹴に蹴た。某堪忍ならず、其座で主人を討つて棄て立退かんとせしに、思はずも生捕られ、繩目に及ぶ。えゝ無念な。

といへば、

〔巴〕　扨は主を殺したれば、一門を遁さぬとあるは尤もぢや。して、國へ行けば何となります。

玄之丞聞き、

〔玉水〕　主殺しの同類なれば、國中を引渡し、法に行ふ。

〔巴〕　尤もぢやが身も侍でござる。此方の料見で、これで切腹仕りたい。

〔玉水〕　立歸り、主人何と申さうも存ぜねども、然らば急いで腹を切り給へ。

〔巴〕　畏つた。

とあれば、後室は、

〔後室〕　これは難儀な事が出來た。どうぞ言譯はなりませぬか。

〔巴〕　いや、これは親の罰でござる。音羽と緣を組みながら、傾城に戯れし故、親が腹を立て勘當致した。なれども、惡しい子はなほ不便がり、某が事を苦にし、父は相果てました。其罰でかやうな目に逢ふ筈ぢや。これ利根五郎、介錯を頼む。

〔利根五郎〕　心得ました。

と太刀拔き背後に廻れば、姫君、

〔音羽〕　こは悲しや。

と巴に取付き、

お前がお果てなされ、妾は何となりませうぞ。

と嘆き給へば、後室は、

〔後室〕　おゝ道理ぢや。殿御に別れ、生きてはゐられまい。先へ死ねや。

〔音羽〕　何しに存へませう。これ迄。

自害せんとし給ふを、巴、押し止め、

〔巴〕　いや、男が死んでも女房は死ないでも大事ない。此家の手本がある。

後　室　（聞き、）夫と一緒に死ぬるに、死ないでも大事ない、手本とは誰ぞ。

〔巴〕　はて此方ぢや。女が一緒に死ぬる筈なら諏訪殿のお果てなされた時、なぜ此方は死なしやれなんだ。

〔後室〕　それはおれが元から幼馴染なれば、死ぬれども、馴染がなさに死にませぬ。

〔巴〕　むゝ、然らば以前の男の死んだ時、なぜ死なしやれなんだ。

〔後室〕　其時はあの利根五郎が小さかつた故、不便さに死ななんだ。

〔巴〕　むゝ、最早あの樣に牛にも馬にも踏まれぬ樣になつて、眼の內には何ぞ惡を企みさうに見ゆる。も氣遣ひはな

いと、なぜ死なしやれぬ。

〔後室〕 それは／＼。

と赤面すれば、

〔巴〕 さうでござらう。この姫は家の總領。それを殺して誰が世を繼ぐ。利根五郎に繼がさうといふ事。姫は上に知れた世繼なれば、只殺しては詮議に遭ふ故、夫と一緒に死んだといつて殺さう爲な。家老和田右衞門も此方が惡心で追ひ出したと、姫が物語で先立つて聞いた。何程企みやつても、左樣なうまい事はならぬ。俺がさせぬ。此上は姫と一緒に諏訪の家を身が治めて見せう。これ使者。腹も先づ切らぬ。さう心やれ。

團四郎 （聞き、） 此方は血迷うたか。死ぬまいとは卑怯な。身迄面目を失はさしやる。

〔巴〕 汝は何をいふ。其方が主を討つて、身迄同罪に遭へといふ奴が、面目とは何とした詞ぢや。

杢之丞聞き、

〔玉水〕 由ない事をいはさずと、それ引立て。

と團四郎をかしこへ入れ、

これ、巴之丞。其方が首を取つて歸らねば、身が主人へ詞がない。どうあつても腹を切らす。やい、主を殺した者は一門を同罪に行ふわ。國中を引き渡し、刑場にて科に行ふ。これは上のお慈悲ぢや。主殺しは一門迄斯くの通りと證人への見せしめぢや。

〔巴〕 然らば、なぜ某も國へ引いて、法に行はいで、其方が料簡で腹を切れとは。狼狽者めが。

といへば返答なく、うち／＼と押退る。所に、後の障子越より鎗突き出すを、巴開き、しかと取り、

何奴ぢや。

と鎗共に引出し、

汝は團四郎めではないか。惡人共に賴まれたな。あり樣にぬかすまいか。

と太刀斬付けんとすれば、

〔團四郎〕 あゝ命を助けて下され。樣子を申しませう。小倉の衞門殿へ奉公に參つたといふは僞り。方々流浪致し、此邊りへ參り、承れば、お前が此處で蟄入されしを聞き、御目にかゝり御合力を受けんと存じ、これへ尋ね參つたれば、それなる利根五郎殿が、私に主を討つたといつて繩目にかゝつて出で、巴之丞に腹を切らせなば、其後で五百石下されうとある故。

といふ所を、

〔巴〕 むゝ、それで賴まれたな。

と其儘鎗にて突き殺せば、後室利根五郎は、

〔後室〕〔利根五郎〕 えい顯れた。それ遁すな。

と一度に斬つてかゝるを、巴之丞、

〔巴〕 心得たり。

と散々に突きかゝれば、皆奧へ逃げて入る。侍一人手の下に取つて伏せ、

〔巴〕 姫を負うて立退かば、命を助けうが、何と、

〔侍〕 畏まりました。

といへば、音羽の前を負はせ、大刀を口へ啣に當て、又、大勢討つて出れは、巴之丞は槍押取り、散々に追散らし、姫諸共立退き給ふ。

中

浮き沈む世の習ひ、和田右衞門は三浦と夫婦となり、月日重なり女子を儲け、おさんとて十三になりにける。和田右衞門は外へ行き留守なるが、相借屋に二階堂兵介といふ浪人ありしが、おさんに百人一首を敎へに來れば、おさんは本を擴げ、天智天皇より讀み出し、持統天皇、春過ぎてと讀めは、兵介聞き、

〔兵介〕 持統天皇を、ぢどうと濁つて讀むものぢや。

と敎へれば、三浦は茶を立て、

〔三浦〕 お雖しいに、忝うございます。

〔兵介〕 いやいや、おさんが樣な子に敎へるは慰みになりまする。

と敎へてゐる所へ、和田右衞門は阿房與太郎を共に連れ、宿へ歸り、編笠を脫ぎ、

〔和田右衞門〕 これ、なぜ取らぬ。汝が手は何とし居つた。

〔與太郎〕 握つて居まする。

〔和田右衞門〕 何を握つて居る。

〔與太郎〕 寶物を。

〔和田右衞門〕 たわけめが。片手で取れいの。

〔與太郎〕 ほんにさうぢや。

と笠を取れば、和田右衞門内へ入れば、兵介は、

〔兵介〕 お歸りなされたか。お留守に遠慮なしに參つた。

〔和田右衞門〕 それは苦しうない。娘に物讀を敎へて下され、忝う存じます。

と禮をいふ 三浦は、

〔三浦〕 やい與太郎。なぜに入らね。

〔與太郎〕 客がある故、遠慮して居まする。

〔三浦〕 これは拙、わが内へ遠慮がいるか。米も仕入れて置けといふに、其儘にして行きをる。憎い奴め。

〔與太郎〕 はて、其方がしたがよいわ。俺が留守なら、飯喰はすに居やしやるか。

〔三浦〕 又、口答へをしをる。

と散々叱かれば、

〔與太郎〕 傾城の果ては人遣ひが惡いといふが、定ぢや。

三浦 (腹を立て、)あの樣な事をいはして置かれるか。

〔和田右衞門〕 はて、阿房を相手にして何

をいやるぞいの。あいつを使へば世話ぢや。餘の者を使や。

といへば、

〔三浦〕　馴染でもある。おさんを可愛がる程にようござるわ。

〔和田右衛門〕　といつて置いて、世話を燒きやる。やい與太郎。いふ事をきかぬと追出すぞ。

與太郎　（聞き、）　不自由なめして、此處に居たうは無いけれども、おさん様がいとしさに奉公する。旦那殿も、女房の贔負さつしやる。

三浦腹を立て叩かんとすれば、逃げて机の上に腰掛け居る。おさんは、

〔おさん〕　母様を惡ういふと叩くぞよ。

〔與太郎〕　おゝ母の贔負ぢや。其方に遣らうと思うて買うて來たれど、叩かうといやるさかいで遣らぬ。

と笛を取出し、吹けば、

〔おさん〕　それを呉れやい。

〔與太郎〕　いや遣らぬ〳〵。

と隱せば、

〔おさん〕　汝遣らぬぞ。

と追はへ歩けば、與太郎逃げ様に和田右衛門の刀を蹴る。女房三浦は、

〔三浦〕　これは勿體ない。

と取り、すん袋を取り見れば、擂木の様なる木なり。

これは合點のいかぬ。今朝出やしやるまで刀であつたが、何とさつしやつた。

與太郎は、

〔與太郎〕　刀は旦那殿、賣らしやつた。

〔三浦〕　なぜ賣らしやつた。様子はどうぞいの。

和田右衛門迷惑し、

〔和田右衛門〕　何を、阿房めが口をたゝく、其方も惡い。人もある。

と目配すれば兵介は聞き、

〔兵介〕　長居を仕つた。罷り歸りませう。

〔和田右衛門〕　なぜお歸りなさる。

〔兵介〕　いや御夫婦の中で、お話しなさるゝ事もありさうな。お邪魔になれば惡いによつて、歸らうと申す事ぢや。

〔和田右衛門〕　それは迷惑な。此方へ何の遠慮致さう。矢張りござれ。

兵　介　（聞き、）　然らば居ませうが、此方には刀をお賣りなされたとある。何とも呑込みませぬ。

〔和田右衛門〕　成程、御尤もぢや。様子を話しませう。全く、私が身の爲には致さぬ。先日此方ともお近付きに致した巴之丞、彼方は私等が主の姫君と縁を組み給へば、主分の人でござる。私は流浪致し、方々と駕籠舁迄致したが、其時分は相借屋に居たこともあつたれども、私も名を申さず、あの方も包み給ひし故、知れなんだ。其後、姫にお

逢ひなされたれば、悪人共が仕業で國が亂れ、前の相借屋の誼みを思ひ、尋ね來り給ふ。姫君に様子を聞けば右の仕合せ故、二三丁脇に庵室を借りて、入れ置きしました。元、傾城狂ひをした人でござるが、燃杭に火が付きがよいわ。又廓へ通ひ、八貫目の揚錢が重なつた。大名の果てを見込んでか、懸けも懸けたではないか。何が、それをせがむ、金はなし。いとしや姫君のしをらしい。道具着類を賣つて五貫目餘り濟まし、また殘りが二貫八百匁目もある。それを濟まさずば、町所へ断つての、廓へ連れて行かうのといふ。昨夜俺を呼びに來たがその事ぢや。此銀がないとどうもならぬと、御夫婦がしを〳〵としてござる。それが、明日渡さねばならぬとある故、御氣遣ひなされな、調へても進ぜうと請合うては戻つたれども金はなし、せう事なうて刀を二貫八百目に賣つた。腰があく故、古道具屋で此様な物を買うて差いて歸つた。阿房めが寶ぢやというて持つて居るは、其銀ぢや。それ出せ。

とあれば、懐より財布取出し、銀包みと小判を包みしとを取出す。兵介聞き、

〔兵介〕さては左様でござるか。お頼ち

しい心底ぢや。

女房は、

〔三浦〕 それはよう進ぜさつしやる。案じてござりませう。銀が調うたと早うお知らせなされませ。

〔和田右衛門〕 おう與太郎。巴様へ行き、銀が調ひました程に、これへお出でなされませいと呼うで來い。

と狀を遣れば、與太郎聞き、

〔與太郎〕 此方行つたがよい。

〔和田右衛門〕 主を遣ふか。

〔與太郎〕 されば、巴様は又お前が主ぢや。銀を遣らう程に取りに來いといふは、主を遣ふ様なものぢや。

〔和田右衛門〕 これは阿房がいふ通りぢや。身が銀を持ち行き、直々渡さう。

と袂へ入れゝば、女房は、

〔三浦〕 銀をつい渡さしやつたら、買ひ調ふことぢやと思召して、又廓へござれば惡い。此處へ呼び、妾が御意見を申し、其上でお渡しなされたらよからう。

〔和田右衛門〕 おゝいはれゝばさうぢや、此銀を戸棚へ入れて錠卸して置きや。

〔三浦〕 心得ました。

と入れて錠を卸す。

〔與太郎〕 御供に參りませうか。

〔和田右衛門〕 いや銀がある。留守をせよ。

兵介は、
〔兵介〕 某も歸りませう。
といへば、
〔和田右衛門〕 然らば連立ちませう。
と連立つて行きにける。女房は、
〔三浦〕 これは日が暮れた。
といへば、與太郎行燈に火點し、出ればおさんは、
〔おさん〕 かゝ様。も寢よう。
〔三浦〕 此子は火を見ると寢たがる。よいわ。寢て明日早う起きよ。
と蒲團着せれば、與太郎は、
〔與太郎〕 私も寢たい。
〔三浦〕 よいわ。旦那殿留守ぢや程に、戻らしやる迄寢よ。
といへば其儘寢る。女房は、
〔三浦〕 今でも、巴様を連れてござつたら、先づ盃出さう。酒があるか知らぬ。やい阿房。酒がなくば取つて來い。これは轉ると他愛がない。これは扨、樽に滴もない。阿房起したと目が明くまい。おれが取つて來う。恥かしや。大きな樽に五合下されと、いふぢやまで。
と女房酒買ひに行きにける。其後へ兵介は大脇差し、内へ忍び入り、戸棚の錠捻切り、銀を懷へ入れるとて、小判ばら／＼と落ちる。おさん目覺し、
〔おさん〕 誰ぢや。お師匠様か。父様の金をなぜ盗ましやる。
〔兵介〕 むゝ、おさんか。盗みはせぬ。和田右衛門の取つて來てくれと云やるゆゑ取りに來た。
〔おさん〕 それでも盗ましやる。
と聲を立つれば、
〔兵介〕 喧し云ふな。これ返す。戸棚へ入れて置け。
と投出せば、取りにおづ／＼寄る所を、引つ捕へ、
〔兵介〕 この金をよく取れ。
と脇差を突き通す。
〔おさん〕 あゝ苦しや。
と手を擴げ、身を悶く ばた／＼する音に、阿房目を覺し、これを見、悲しがる。難なく、おさんを突き殺せば、與太郎は椽の下へ隱れ居る。兵介銀を懷へ入れ、
〔兵介〕 この阿房めは何處へ行きをつた。序でに殺さん。
と尋ぬれども見えず。表へ出る所へ女房酒を買ひ戻れば、兵介は行方知れず逃げ失せける。女房内へ入れば、與太郎は、
〔與太郎〕 なう、おさん様を殺した。
〔三浦〕 何をいひ居る。
と見れば血汐になつて居る。
これは何者がした。
與太郎 （聞き、）浪人の兵介めが戸棚の錠を切り、銀を盗むを、此子がなぜ取

りやると云はしやつたれば、脇差で突殺した。
〔三浦〕 それは悋い。
と駈け出でんとすれば、おさんは、
〔おさん〕 あゝ術ない。
と呼吸すれば、
〔三浦〕 おゝ道理ぢや。苦しいか。
〔おさん〕 なう、かゝ様。兵介めが斬りました。あいつめを捕へて、おれを斬つた様に斬つて下され。あゝ父様に逢ひたい。
と遂に空しくなれば、
〔三浦〕 やい、死んだか。これは何とせう。
と前後亂し嘆き居る。然る折節、門口にて巴之丞を廓の者共、取卷き、
〔廓の者〕 金を遣さぬと、廓へ連行き廓の法にする。
〔巴〕 推參な。身は侍ぢや。街中で何とする。
と刀に手をかけ給へば、
〔廓の者〕 侍伊達をするな。
と大勢立掛り、髮をむしり着物を引き裂き、摑み合ふ所へ、和田右衛門、巴方へ行きしが、道にて違ひ戻り、此態を見て廓の奴等を引退け、
〔和田右衛門〕 身は彼方の家來分の者ぢやが、何故狼藉をなす。
〔喜左衛門〕 されば、俺は河内屋喜左衛門といふ抱主でござる。あの人に二貫八百匁といふ揚錢の殘りがある。それを今日濟まさうとある。方々の議定で取りに來れば内に居やらぬ。此横町で見付けた故おこしやといへば、金は遣さずに刀で斬らうとしやる故、今の體ぢや。
〔和田右衛門〕 むゝ、其銀は今日限りならば、今でも渡さば何とせう。
〔喜左衛門〕 金さへ濟んだら、後では存分にならう。
〔和田右衛門〕 おゝ、存分にせいで置かうか。身が渡す。入れ。
と皆、内へ連入れる。
氣遣ひなされますな、銀は調へて置きました。
巴 （悦び、）急いで渡してたも。後で存分にせねば置かぬ。
〔和田右衛門〕 畏りました。これ、女房。最前の銀を出せ。
女房涙を隱し、
〔三浦〕 その銀はござんせぬ。
〔和田右衛門〕 はて刀の銀は何とした。
〔三浦〕 それは盜まれました。
〔和田右衛門〕 何者が取つたぞ。
〔三浦〕 此中で詮議に及ばぬ。銀はござらぬ。
といへば、巴も和田右衛門も力を落す。亡八は、

〔喜左衞門〕 銀を渡さうとあつたが、どうでござる。暇要るからは、銀はないであらう。兎角、本人を連れて行かう。

と立ち掛かれば、女房は亡八を連退き、

〔三浦〕 銀はあつたれど盗まれてござらぬ。銀の代りに妾を連れてござれ。銀の値になる程奉公をしませう。

〔喜左衞門〕 むゝ、此方の夫に問うて、合點なら、さう致さう。

と和田右衞門に近付き、

此方から好むではない。兎角事の濟む樣にぢや。お內儀を連れて行きませうか。

〔和田右衞門〕 何をいふ。腮斷裂かれな。

〔喜左衞門〕 あれ、あの言分ではならぬ。

女房、側へ寄り、

〔三浦〕 これ、よう合點さつしやれ。銀がなければ、巴樣を連れて行かうといふ。如何にしても彼方は遣られぬ。當分事の濟むまで妾が行き、明日でも銀さへ調へば戻る。合點して遣らせ給へ。

〔和田右衞門〕 むゝ聞えた。皆の衆。兎角今は銀がない程に、女房を渡さう。五日十日過ぎても、二貫八百匁銀さへ渡さば女房は戻るか。

〔喜左衞門〕 さうでござる。合點の行く樣に返手形をして遣りませう。又銀が濟まぬ間は、五年が十年でも、端傾城に賣つても構ひないとある手形をなされ。

〔和田右衞門〕 おゝ、それをせいでは其方達の合點せぬ筈。手形を取り交はさう。判を持つてか。

〔喜左衞門〕 いや判は置いて來ました。

〔和田右衞門〕 そんなら女房を連れ、廓へ往つて致さう。

といへば、巴、物をもいはず居給ひしが、

〔巴〕 これ和田右衞門。とても沈んだ身ぢや。俺一人を如何樣とも沈めてたも。

〔和田右衞門〕 はて、未練な事仰せらるる。お前は御世に出さねばならぬ。私等が事はお心にかけられますな。短氣な事などなさるゝと、七生迄恨みますぞ。與太郎お側に附いて居よ。

女房も側へ寄り、

〔三浦〕 必ず短氣な御心を出しなされますな。妾は往て參ります。

と菅笠を着れば、和田右衞門も編笠を着、立出づれば、與太郎は、

〔與太郎〕 なう、お內儀樣。これを見捨てゝござりますか。

と泣き泣きいへば、女房も現在娘の死したるを押隱しては居れども、包み兼ね、聲を放かし喚げけば、和田右衞門は夢にも知らず、

〔和田右衞門〕 はて未練な。阿房め。何を喧しう泣くぞ。おさんが寢てゐるさうな。目を明けば惡い。

と死したるを知らず、女房を引つ立て皆打連

れ、廓へ行くぞ哀れなり。與太郎、悲しく泣き入つてゐる。巴之丞は、

〔巴〕　おゝ、其方が愚かな心でさへ歎く。俺が身になつて見よ。悲しうあるまいか。おさんは寢て居るか。おとなしい者なれば、起して樣子をいうて合點させう。これ、おさん〳〵。

と起せど返事なし。蒲團取退け見れば、血に染まり居る。巴驚き、

これは何者がした。

と慌て給へば、與太郎泣き〳〵、

〔與太郎〕　これは此方が殺した。

〔巴〕　身が殺したとは、何をいふ。

〔與太郎〕　されば、此方が傾城の金を負うて迷惑さつしやる故、旦那殿が刀を賣つて其金を戸棚へ入れ、此方を呼びにござつた間に、浪人の兵介が來てゐその銀を盜むを、此子がなぜ盜みやると云やつたれば、兵介が刀を拔いて突殺した。皆此方故なれば、殺しやつたといふものぢや。

〔巴〕　なに、殺したは兵介か。それは何時の事ぢや。遁さぬ。

と駈け出れば、

〔與太郎〕　もつつと以前の事。こゝらには居ますまい。

〔巴〕　これは何とせう。此子が死んだを和田右衞門は知つたか。

〔與太郎〕　いや、旦那樣は知らしやれぬ。

〔巴〕　おかたも知らぬか。

〔與太郎〕　あの人は知つて行きやりました。

〔巴〕　なに、死んだを知つて居て、俺が爲に廓へ往たか。可愛や、今頃は道で和田右衞門に話すであらう。俺も生きてゐる心底でなけれども、和田右衞門は姫が家來なれば、身が家來といふでもない。それに身を主にして大切にし、樣々苦勞をする。今行く時も短氣をしたらば、七生迄恨みるというた。其詞を思ひ、存へては居れども、俺ゆゑにおさん迄殺さし、存へて居られうか。縱令七代八代恨めうと儘よ。これまで。

と刀拔き腹を切らんとするを、與太郎、手へしがみ付けば、

〔巴〕　これ、阿房め。放せ。

〔與太郎〕　いや放さぬ〳〵。

と叩かれても構はず放さず、

これ、死なうとは聞えぬ。此子を殺した敵を、なぜ討つては下されぬ。

巴（聞き、）愚かな者でも直な事をいふ。さうぢや、死なぬぞ。放せ。

〔與太郎〕　そんなら刃物を放さしやりませ。

〔巴〕　おゝ、それ。

と放せば、與太郎は大小を持ち、歎き居る。

巴は、

〔巴〕　誠に、負うた子に教へられて、淺い瀬を渡るといふは俺が事ぢや。兵介めを討つて、おさんに手向けう。氣遣ひするな。

〔與太郎〕　忝うござります。

〔巴〕　それ、先づ持佛堂へ御燈を點せ。今朝迄は物をいうたに、不便な事をした。先づ寺へ取置くであらう。

と泣く／＼死骸を抱上ぐれば、與太郎は、

〔與太郎〕　この笛を吳れいと仰しやつたに。遣らうものを。

と涙と共に行きにける、これぞ哀れの至極なり。

戀と色との堺なる乳守は一入賑はしく、思ひを殘す朝別れ、禿文字野菊野に女郎の名寄せを謡ひ來る所へ、禿友彌小吉使ひに行く道にて逢ひ、

〔友彌〕〔小吉〕　後に逢はう。さらばや／＼。

と南方へ別れ行く所へ、幇間の吉兵衛揚屋へ來れば、女房お綱走り出て、

〔お綱〕　何と、此中は見えなんだ。

〔吉兵衛〕　されば、今日は北又樣のござる。外に凄じい客を連れて來た。そこへござる。

といふ所へ、買人北國屋又三郎は桔梗屋長

四郎といふ脇詰の若衆を連來れば、

〔お綱〕　これは又樣お久しい。先づ御入り。

と座敷へ通せば、亭主伊左衛門罷り出で、

〔伊左衛門〕　これ、旦那お久しい。

〔又三郎〕　されば、但馬へ湯治して一昨日戻つた。扨凄じいのを連れて來た。これなるは桔梗道齊の子息長四郎といふ。今の世の粋といふは道齊ぢや。世間の親は、子が銀遣ふをせいたうするに、道齊は此子が生れ付いて内氣な故、どうぞ人中へも出る樣に、銀を遣はしてくれと、俺を頼まるゝ故、連立つて來た。吉兵衛。樣子をいへ。

〔吉兵衛〕　畏りました。俺がいふと、これはといふて夫婦ながら反る事ぢや。これ。

と、懐より金百兩包みを取出し、

まだ百。はい。これ先づ二百。はい。長四郎樣の揚錢を先へ渡して置かしやる。何と凄じいか。

又三郎は、

〔又三郎〕　まだ其上に二百。はい、頼まれた役に俺が控へる。

吉兵衛は、

〔吉兵衛〕　まだ四百。はい、あるは。長四郎樣の斷う〳〵ぢやといふと、手代

衆から出る。合はせて八百。はい。天目。百。はい。金八百。はいぢや。
伊左衞門 （悦び、）やい女房。それ、先づお盃を出せ。
吉兵衞は、
〔吉兵衞〕 これならぬ。盃より先づお授け者を呼べ。
〔伊左衞門〕 さうぢや。何方がよからうぞ。
又三郎 （聞き、）奥州殿がよからう。
〔伊左衞門〕 奥州樣はお煩ひで、勤めを引き私が所に御養生なされてござります故、なりませぬ。好いのがござります。此頃、越後屋から突出しの太夫樣に、三浦樣と申して、御器量なら、それは〱〱、見事な事でござります。これを呼びませう。
〔又三郎〕 然らば、それがよからう。
〔伊左衞門〕 して、旦那は。
〔又三郎〕 俺は休まう。
〔伊左衞門〕 それは惡い。大橋樣。
〔又三郎〕 此方は誰ぢや。
吉兵衞 （聞き、）又謀叛を起さうか。
〔伊左衞門〕 いつもの高倉樣か。心得た。
と伊左衞門、女郎達を呼びに遣し、
いざ奥へ御入り。
といへば、又三は
〔又三郎〕 奥座敷が廣うてよい。長四郎。ござれ。
と伊左衞門と打連れ、奥へ行く所に、二階の障子明け、太夫奥州禿文字野に凭れつゝ、
投節〽別れゐる身はナ夢こそ頼め。定めなきこそナ命なれ。
長四郎 （見て、）あれは誰ぞ。
〔吉兵衞〕 太夫奥州樣ぢや。これ、太夫樣。お前の煩ひは、皆虚ぢやと申しますぞえ。
〔奥州〕 吉樣。それが定ぢや。惡性をせぬは損ぢや。
〔吉兵衞〕 これは凄じいお詞。もし珍しいお客を連れて參りました。後程、一寸借られて下さりませ。
〔奥州〕 それはどれぞ。
〔吉兵衞〕 この御方。
と立退けば、長四郎見合ひ、
〔長四郎〕 後に頼みますぞ。
〔奥州〕 むゝ、よい若衆ぢや。成程行きませう。先づそれ迄、餘の女郎樣としつぽらしやんせや。
と障子をさせば、長四郎は、
〔長四郎〕 あの太夫にしたいものぢや。
と吉兵衞お綱と打連れ奥へ入り給ふ。然る所へ小笹巴之丞は、羽織に大小編笠深く被、揚屋の體を眺めゐる所へ、大橋八重霧は禿引連れ來り、八重霧の笠の內を見、
〔八重霧〕 此方樣は見た樣な。
と笠引取り、
巴樣か。お久しや。死なしやんたとい

うたが、何とぞいの。
〔巴〕式部か。俺も死ぬる筈であつたが、まだ得死ないでゐる。聞けば其方も勤めに出たとある。
〔八重霧〕されば、去年の御影供から出まして八重霧と申します。
〔巴〕むゝ水揚は誰がした。太夫が手筋の者なら、井筒屋の彦か。
〔八重霧〕いえ。
〔巴〕そんなら傘屋の太郎か。
〔八重霧〕さうでござんす。
〔巴〕むゝ傘屋が水揚なれば、跡は氣遣ひない。
といふ所へ、下男六兵衞は、
〔六兵衞〕もし、大橋樣。早うお出でなされませ。
と急しく呼べば、
〔大橋〕巴樣。妾は先へ行く。ござんせや。

といへば、八重霧は、
〔八重霧〕妾はいふ事がある。そこ首尾のよい樣に賴むぞや。
〔大橋〕心得た。
と大橋は揚屋へ行く。八重霧は、
〔八重霧〕なう巴樣。太夫樣はお前の事を案じ、散々煩うてござる。お逢ひなされませ。
〔巴〕いや俺は太夫に逢ひには來ぬ。放してくれい。
〔八重霧〕いや、往なしませぬ。
〔巴〕そんなら此方から往ぬる。
と逃げて行く。向うより、又、女郎來れば、其儘羽織で顏隱し行かんとす。八重霧は、
〔八重霧〕それ捕へて下さんせ。
〔三浦〕妾が捕へてだんないか。
とつかまへ、
若い女郎を置いて逃げさんすは惡い。なぜ隱れさんす。

と羽織を取れば、
〔巴〕其方は三浦か。
〔三浦〕これは巴樣。お懷しや。
〔巴〕されば、其方に逢ひに來た。
〔三浦〕忝うござんす。
八重霧（聞き）えゝ鈍な、奧州樣に逢ひにござつたかと思へば、三浦殿と間夫しにござつたの。惡性な。
と巴を叩き、
よい。太夫樣にいふ。
〔巴〕はて、さうでない。
といへども聞入れず、禿、諸共奧へ入る。巴は、
〔巴〕先づ、何から、云はうやら、彼から云はうやら、禮の申し樣もない。晝は何かで紛るゝが、夜になれば和田右衞門と阿房と俺三人が、行燈の側につくりとして居て、おさんが事を思出しては泣いてばかり居る。

〔三浦〕 さうでござんせう、死んだ儘見捨てゝ參つたれば、戒名も知らぬ。何と申しますぞ。

〔巴〕 春月童女といふ。今日は百ヶ日になる故、墓參りをし、其方にも逢うて、息災なか顏を見て往なうと思うて、これへ寄つた。

〔三浦〕 忝うございます。左樣心細う思召すな。扨、これへ參ると、お前の馴染ぢやと思うて、先づ奧州樣に逢ひましたが、扨々よい心中ぢや。お前のことばかり苦にして今煩うてぢやが、瘧の樣な煩ひで、きつう重いげな。幸ひ此提屋に養生してぢや、お逢ひなされませ。

〔巴〕 いや俺は、奧州に逢ひには來ぬぞや。和田右衛門が聞いても迷惑ぢや。往なしてたも

〔三浦〕 それは戀知らずぢや。是非逢はさねば歸しませぬ。

と手を取り、無理に入れば、

〔巴〕 あゝ草履が脱げたノヽ。

といへども聞入れず、連れ入りける。所へ奧州は、八重霧いひしを聞き、腹を立て、二階より駈下るれば、大橋八重霧禿共迄取付き、

〔大橋〕 先づ待たしやんせ。

と引留めれば、

〔奥州〕 いや、きかぬ。放しや。

と振倒し行かんとするを、揚屋お綱駈出て押止め、

〔お綱〕 これは太夫様。何ぞいの。

〔奥州〕 されば、お綱様。聞いて下さんせ。此方様こそ知つてなれ、妾が煩ふは、巴様の事を思うてぢや。それに今日此處へおぢやつたけな、妾にかと思へばさうではなうて、三浦殿と間夫をし、手管で逢ふといの。これが聞いてゐられうか。

お綱 (聞き、)それは誠か。誰がいひました。

八重霧 (聞き、) 確かに妾が見ました。

〔お綱〕 む丶、あの三浦様も室では口利いた太夫様であつたけな。めつたな事はなされまい。思案をしてから、いはしやんせ。

〔奥州〕 これお綱様。妾も奥州ぢやぞえ。三浦の如何様にいやつたて丶、云負けて居ませうかいの。放しやんせ。

と身をもがく内に、震ひ出て、

あゝ術ない。

と倒るれば、

〔お綱〕 それ、氣を上さしやる故、病が起つた。

と夜着を着せる所へ、

〔女〕　大橋様。八重霧様。お客が尋ねさしやんす。早うござりませ。

とせはしく呼べば、

〔大橋〕〔八重霧〕　なうお綱様。妾等は行く程に、頼みます。

と二人は奥に入る所に、奥より、

〔女〕　お綱様。二階の客に揉めが出來ました。早うござりませ。

〔お綱〕　おれも此處に用がある。伊左衛門殿を遣れ。

〔女〕　旦那様は酒に醉ひ、他愛がござりませぬ。

〔お綱〕　お客より亭主が酒に醉ひてなるものか。行かずばなるまい。

と奥へこそ入りにける。奥州只一人、夜着着て寢てゐる所へ、巴來り、

〔巴〕　これ、三浦。廣い座敷へおれ一人おこしてどうぢやぞい。これはしたり、女郎衆が寢てぢや。客が歸つたと見えた。きつう草臥させたの。

と側へ寄り見て、

これは奥州ぢや。

と、夜着をそつと取れども、寢入りて知らず。

可愛や、いかう痩がついた。病が術ないと見えた。

といふ時、奥州うつゝに、

〔奥州〕　やい文字野。湯を一つくれ。

巴心得たと邊りを見、

〔巴〕　藥鍋に藥が煎じてあれば、定めて其方が飲むのであらう。

と茶碗へ入れ、持ち行き、

これ藥ぢや、南無藥師瑠璃光如來。

と戴かせ手へ渡せば、奥州目を開き、巴を見、はつと恨めしさうに見据え、藥共に茶碗を投付け、微塵に碎き、夜着引つ被き寢れば、

〔巴〕　これは何ぢや。口説か。ならぬ。それは迷惑なわ。此方人は當地不案内な者ぢやによつて、外の事さへ不調法なに、まして口説などは思ひもよらぬ事ぢや。あゝ、酒一つ飲まさぬかい。淋しいに、何ぞ所在がしたい。兎角茶碗ひとつの迷惑ぢやまで、碁石の樣になつた。碁なと一番打ちたい、太夫様。打たしやれませぬか。

といへども返事せねば、

久しうて逢うたに、恨みがあらば、詞でいつたがよい。それは惡い。

と側へ寄れば、足にて踏退ける。

はてさうでない。

と夜着の袖より、顔差入るれば手で突けば、

あ、痛い。目から火が出た。目が潰れます。兎角、人に構はず碁をうつぢやまで、幸ひ羽織が碁盤縞。

と脱ぎ疊んで膝の上へ載せ、盤にし、茶碗の割れを碁石とし、

諸へ「山寺の春の夕暮來て見れば。」おれや、此方に逢ひにや來ませぬぞや。俺

が目を潰して、一眼にして殺さうといふ事か。何ほさう思はしやつても、此方は構はずに渡つて居るによつて、死にやしませぬ。自體、此方の石が強いによつて、こちとが樣な下手碁はたまらぬ。聞けば外に強い相手があつて、此方の病石でござるを、三百六十目が間、此井筒屋へ呼んで、煩ひの療治をすると聞いた。そこで俺とは緣が切れたかというて、先刻から問うたれば、如何にも切れましたと云やつた。俺が手前を丈夫にして置いて、今日ひよつと俺が覗いたによつて、頭からおのしが押やる。俺を死なさうと思やつても、打込み／＼劫にして隅に目を持つて居る。滅多に死ぬる事ぢやござらぬ。俺も此方と相手になりたけれども、此方には溜が一目もないによつて、此碁は俺が負けぢや。兎角、先づ今日は歸りませう。さらば／＼。

と立歸るを、奧州走り行き、後より帶を取り留めれば、

〔巴〕其處は背戶口でござる。用があらば表へ廻らしやれ。

〔奧州〕何をいやる。

と引き据えれば、

〔巴〕これはどうでも口說か。それは島原が西の洞院にあつた時分の事。今は流行らぬ。

〔奧州〕また口を叩きやるか。

と巴を叩き、太腿へ喰付けば、

〔巴〕あゝ痛。俺が腿を雉子ぢやと思はしやるか。それ程ひだるくば茶漬でも參れ。叩いたり喰付いたりするは、天草陣の時代の事。今は古い。何なりといふ事があらばいへ。

〔奧州〕されば、あの三浦とはいつからの馴染ぞ。

〔巴〕大方六十日程になる。

〔奧州〕むゝ、隱さずとよう云やつた。おれは其方ゆゑに煩ふに、隱して、よう三浦に逢やつた。

〔巴〕むゝ、其事か。三浦が傾城になり、此處へ來たは、皆其方ゆゑぢや。よう聞け。其方に逢うた揚錢の殘りが二貫八百匁ある。それを遣さずば、俺を廓へ連れて來て、桶伏にせうといふにより、三浦は家來分の者の女房なるが、それを難儀がりて、銀の代りに傾城になつてゐる。すれば、元が其方ゆゑでないか。斯ういうたら、其方が云はうは、それが誠なら、三金輪で聞かうといはう。要らぬもの。直に聞けば、扨はさうか忝ないと、禮をいつて泣かねばならぬ。泣くは古い、何と言分があるか。

奧州聞き、尤もなれば返答なく、

〔奥州〕何ぢやの。おれには物をいはさず、たつた我一人して云つて退けて。
と夜着を着、寢て、
さあ此處へござんせの。
巴（聞き）とうからそれがよい筈ぢや。
と夜着の中へ一緒にはひる。所へ揚屋伊左衞門、酒の醉醒めに、うか／＼と來れば、奥州其儘巴を夜着の中に隱し置く。伊左衞門は、
〔伊左衞門〕太夫樣。これにござります。私が頼みました戀はどうして下されます此煩ひで、もしお果てなされますと、迷ひの一つとなります。
と口說く所へ、「伊左衞門樣／＼」と奥より呼べば、
〔伊左衞門〕太夫樣。賴む。後に屋根から二階へ行くぞや。
と奥へ入れば、巴、夜着の中より出で、
〔奥州〕種々の惡性ぢや。
といふ所へ三浦來り、
〔三浦〕奥州樣。逢はしやつたか。今日は顏の色もよい。
〔奥州〕此方樣の蔭で逢うて嬉しい。此方樣を誹つた事もあつた。怺へて下さんせ。
〔三浦〕む〻、そんな事もあるものぢや。大事ない。
といふ所へ、
〔女〕奥州樣。お醫者樣のござつた。早うござんせ。
といへば、是非なく奥へ入る。三浦は、
〔三浦〕なう巴樣。氣の毒な事が出來た。妾が今日逢ふ相手は若衆ぢやが、妾を請出さうというてばた／＼する。親方は慾深い人なれば、合點するであらう。何としたものであらう。
といふ所へ、又三は、伊左衞門吉兵衞を連れて出で、
〔又三郎〕さあ長四郎が氣に入つたれば、違ひはない。親方を呼び三浦を請けてくれ。
〔伊左衞門〕心得ました。
さらり／＼と手を打ち、亡八を呼びに遣り、伊左衞門吉兵衞は、
〔伊左衞門・吉兵衞〕三浦樣。見事な儀ぢや。あやかり者／＼。
と皆奥へ入りにける。巴は夜着の中へ隱れ居しか、
〔巴〕皆入つたか。
と立出づれば、
〔三浦〕さあ、今聞かんしやんす通りぢや。妾が請けられては、和田右衞門殿はいふに及ばず、お前迄一分の立たぬ事ぢや。どうぞ行かぬ思案をして下さんせ。
巴（聞き）それは急な事ぢや。何としたものであらう。
と思案の體に見えしが、三浦が顏をつく／＼

見て、
いづれ此方の様な美しい人を請出し、上段の間に置いて、煙草でも喫うで眺めて居たらば面白うあらう。
〔三浦〕 それは何を云やしやんすぞいの。行かぬ思案をして下さんせ。
〔巴〕 いや、内にござつた時より、むつちりと肉が附いて、甚う見事にならしやつた。顔は美しゝ。手はよう書かしやる。此方の様な人を女房に持つたら、思ふ事はあるまい。
〔三浦〕 又、つがもない事を仰しやる。
〔巴〕 いやさうでない。何を隠さうぞ。此方が内にござる時から、俺は惚れてゐましたぞ、和田右衛門が手前を思うて云出さなんだ。これへござつて勤めといふ流れの一字が忝い。其上、今日請けられてござるとある。時には、今云はねば俺が思ひは無になる。たつた一度ぢや。思ひを晴して下され。
〔三浦〕 何をあられもない事を仰しやる。そんな心ではござんせぬ。
〔巴〕 いや、斯く言に出していふからは、きつう詰つた事ぢや。主ある花も蔭の枝は手折るといふ。人が来れば悪い。早う合點して下され。
〔三浦〕 いや妾が心を引いてごらんじやるか。
〔巴〕 いや眞實ぢや。
と取付けば、三浦難儀し、
〔三浦〕 むゝ、後で和田右衛門に仰しやるまいものでもない。御眞實なら證據が見たい。
巴邊りを見廻し
〔巴〕 おゝ見せう。
と脇差抜き小指を押切り、
これ、證據。
と投げ出せば、三浦紙に包み、懐へ入れ、
〔三浦〕 扨はか程に思召して下さるか。忝い。
と側に寄り、脇差引ん抜き、
これ畜生。一人の娘を殺し、おれ迄傾城するは皆其方故でないか。其心を無にして、ようおれに惚れやつた。其心からは、とても世には得出給ふまい。おれが手にかけ殺してやらう。
と斬付くれば、
〔巴〕 あゝ危ない。免せ〳〵。
と鞘にて支へ、逃げ入れば、
〔三浦〕 何處へ。卑怯な。遁さぬ。
と追つかけ入れば、揚屋騒ぎ、
〔人々〕 やれ心中よ。切つたわ。
と廓中棒を持ち馳せ集る。巴は鞘はかり持ち、門へ逃げ出れば、
〔人々〕 彼が相手ぢや。遁すな。
といふ所へ、和田右衛門来り止め、
〔和田右衛門〕 これは何事でござる。や

い、皆棒を引け。身はこのお人の家來ぢや。詮議せねば置かぬ。

と巴を伴れ揚屋へ來たり、

先づ何事ぢやぞ。

〔廓の者〕 されば、其人が太夫と心中をしやつた。

〔和田右衞門〕 むゝ、女郎と心中せまいものでないが、相手は死んだか。名は何といふ。

といふ所へ、三浦拔刀持ち、

〔三浦〕 卑怯者。どこへ行つた。

と追ひかけ出づる。和田右衞門見て、

〔和田右衞門〕 やあ、女房。何事ぢや。

〔三浦〕 和田右衞門殿、ござつたか。あの人は畜生ぢや。殺さねばおかぬ。

と打付くるを引つたくり、

〔和田右衞門〕 お前の脇差さうな。

と鞘へ差さし、

其方が相手か。痴呆めが。

三浦 （聞き）先づ樣子を聞かしやれ。あの人がおれに惚れたと云やります。

〔和田右衞門〕 はて、譯もない事。この樣な處では、處の興に仰せられまいものでもない。

〔三浦〕 否いの。それで、眞實なら證據が見度いと云うたれば、小指を切つておこした。これ見給へ。

と取出せば、和田右衞門見、肝を消し、小指を巴の側へ持行き、氣色變り、

〔和田右衞門〕 これは此方が切つたの。なう、これは誰でござるぞ。和田右衞門が女房でござる。それに指切つて執心なとは、其方は氣が違うたか。これ、其方が當どもない傾城狂ひをしやつて、二貫八百匁の揚錢が濟まぬというて、廓の者が表中で、其方を門へ押付け、頭をむしる。それを見て笑止さに、おれが一腰の刀を賣つて、濟まさうとしたに、其銀をば盗まれ、それ故一人の娘を殺され、女房迄傾城にしたは誰故ぢや。皆、其方故でないか。斯程まで志を盡す夫婦の者の心を何とも思はず、ようも身が女房に惚れ、指は切つてやつた。それで侍は立つまい。腹を切りや。これ、よう切らぬか。よい。身が手にかけてやらう。

と刀に手かけしが、

いや、其方の樣な畜生を、侍の刀を汚すも無益、仕樣がある。

と履きたる草履を脱ぎ散々に打ち、

さあ死ね。死なぬと草履で打殺す。

といへども、巴一言の返答なく、差俯いてゐれば、奥州見兼ね、

〔奥州〕 これ、巴樣。此方はおれを傾城ぢやと思うでござらうが、おれは此方の女房ぢやと思うてゐる。其男を見ろ前で、只今の樣に草履で叩かして、お

れが堪忍がならうか。其方も侍ぢや。如何に戀ぢやというて、履いた草履で叩かれても、返答のならぬやうにはようもしやつた。腹切つて死にやれ。それもならぬの。名代におれが死ぬる。

と脇差を持ち、

これ、三浦殿。

〔三浦〕なんぞ。

〔奥州〕此方も三浦というて、口利いた太夫ぢや。人が惚れたと云ふは、餘り腹は立たぬものぢや。其方が合點する事がならずば、盃ばかりをするか、せめて詞でなりとも優しう云うて、どうぞ思ひ切らせやうもあらう。侍を草履で叩かするやうには、ようもしやつた。情知らずよ。人には法があるものぢや。其方が夫が大切なれば、おれも男が可愛いゝ。えゝ恨めしい人ぢや。これ迄。

と自害せんとするを、巴、脇差引つ取り、草履と共に和田右衛門が前に置き、どうと膝組み、

〔巴〕こりや和田右衛門。身も侍を、汝が草履で打つたな。

〔和田右衛門〕おゝ、打つたが何と。

〔巴〕やい。よう聞け。汝の女房に身は執心はない。最前これへ來れば、三浦がいふには妾を請出さうといふ者がある。誰ぢやと問へば、それにゐる長四郎といふ若衆ぢやといふ。請けられては此方迄一分が廢る程に、どうぞ行かぬ樣にしてくれいといふ。何をいうても二貫八百目といふ銀が無うては止められぬ。先は有徳なる者なれば、大分銀を出し請ける。手前には無し、當惑をした。汝又銀なしに止める思案があらば止めて見よ。身は分別に困つて、三浦に惚れたといはば、先が若い者ぢやによつて、扨は三浦には深い馴染の男がある。面白うないといつて身請けの事が止まう。時には立歸り、其方と相談をせうと思ひ、先づ當分を延ばさうため、わざと惚れたとはいつた。

〔和田右衛門〕むゝ、然らば言葉でいつても濟む事を。なぜ指は切つた。

〔巴〕されば、心中を見せよといふ故、どうで切る指ぢやによつて切つた。

〔和田右衛門〕むゝどうでも斬る指ぢやとは。

〔巴〕おゝ、これを見よ。

と懷より一通を投げ出せば、和田右衛門披き見れば、

〔和田右衛門〕何々「佛へ申して白さく、一、世の定めなき事を思へば、花岡和田右衛門が娘十三にて夭にかゝつて失せぬ。父母の歎きをわが爲に斯くしぬ。爰を思へば未來の罪恐しく、遁世するものなり。妻又眷屬に再び今生にて對面せまじき誓言に、小指を切つて佛に

捧ぐ。未來は上品上生に救ひ取らせ給へ、南無歸依佛歸依法歸依僧。小笹巴之丞敬つて白す。」扨は御出家の思召し立ちか。

〔巴〕おゝ、豫ては此度淺間の開帳場で切らうと思うたれど詮方なく、とても切る指ぢやによつて此處で斬つた。身は出家になるゆゑ、草履で叩いても恨みとも思はぬ。これ見よ。

と上の着物を脫げば、下には袈裟を掛け、元結を取れば、髻切つてあり。

身が心底は斯くの通りぢや。歌へ〽鳴子をば己が羽風に搖らせて、心と騷ぐ村雀かな。南無阿彌陀佛。

と立出づれば、和田右衞門抱止め、

〔和田右衞門〕これはお情ない。子を殺し、夫婦の者が苦勞致すも、お前を世に出さうためぢや。出家にはしませぬ。

〔巴〕むゝ出家にせいで何にする。

〔和田右衞門〕侍にしまする。

〔巴〕侍なれば、草履で叩かれては一分が立たぬによつて、これ迄。

と腹を切らんとし給へば、

〔和田右衞門〕なう待ち給へ。止めてもお止りなされぬな。よい。某も一緒に死なうと申しおいた詞は違へぬ。お前よ

り先へ身が死ぬる。

と腹切らんとすれば、巴押止め、

〔巴〕　やれ待て。和田右衛門。そちが死んではおさんが敵は誰が討つ。

〔和田右衛門〕　いや、敵の事も思はぬ。草履で打つたお恨みが晴れぬもの。

〔巴〕　俺が何の恨まうぞ。

〔和田右衛門〕　そんなら、出家を思召し止つて、侍になつて下されますか。

〔巴〕　おゝ、どうなりともせう。

〔和田右衛門〕　止めうばかりぢや。忝い。

と互ひに取りつき泣き給ふ。主従の誠の道ぞ殊勝なれ。

然る所へ、下人與太郎息を切つて馳せ來り、人々の耳へ口を寄せ、

〔與太郎〕　敵兵介が此處へ來る。

と囁けば、人々心を合はせ、皆々奥へ入り、待つ所へ、群集に紛れ兵介は、深編笠に長刀、ぬさ／＼歩み來る。和田右衛門見付け、

〔和田右衛門〕　兵介。娘の敵覺えたか。

と編笠越しに斬付け、散々に戦ひ、奥へ入る。

〔廓の者〕　やれ、斬つたわ。

と廓中棒を持つて出づれば、與太郎は散々に斬り拂ふ。巴は、

〔巴〕　これは敵討ぢや。側へ寄るな。

と制し居る。所に、兵介散々手負ひ駈出れば、和田右衛門、深手負ひ、女房三浦に手を引か

れ立出て、
〔和田右衛門〕汝。娘の敵通さうか。
と心は勇めど、兵介は大兵にて叩き付け、危く見ゆれば、巴之丞助太刀討ち、斬込み〳〵難なく兵介を斬る。和田右衛門、乗つかゝり、
やい恨めしい兵介。科もない十三になる娘をよう殺したな。此様にして殺したか。報いを知れ。
と胸板を突通せば手を摑げ苦しみける。女房も恨みの刀斬付くる。與太郎も、
〔與太郎〕お主の敵、覺えよ。
と斬付くる。巴は、
〔巴〕俺ゆゑなれば、盡きぬ恨み。
と散々に斬付け、止めをさし、追付け世に出て、廓へ禮をいはうと、段々の斷りいひ、三浦を連れ、皆々打連れ歸らるゝ。

下

ほの〴〵近き朝鴉。野寺の晨朝響くにぞ、夢の浮世の旅姿。三浦奥州は音羽の前を誘ひ東山淺間の開帳へぞ參らるゝ。後より下人與太郎來りつゝ、
〔與太郎〕これが則ち開帳場ぢや。
と人々を連れ寺へ參り、
お住持樣に逢ひたい。
といへば、兒達奥へ斯くと宣へば、住持立出て、
〔住持〕どなたでござる。
三浦（聞き）妾は此中十三になる娘に離れし者でござります。剃髪を淺間が御山へ上げたう思ひ、持つて參りました。跡を弔うて下されませ。
とあれば、下人與太郎風呂敷より笛人形を取出し、
〔與太郎〕これは其子の持遊び物でござります。これは御布施なり。
と一々渡せば、住持、曲物の蓋を開き見、
〔住持〕これは剃髪ではないが。
與太郎（見て、）ほんに納豆ぢや。住持は、
〔住持〕はて粗相な人ぢや。して、死んだ娘の戒名は何といふぞ。
〔三浦〕春月と申します。息災な時はおさんと申しました。
〔住持〕はて、似た事がある。十三になる娘の名もおさんといふが、この開帳して五六日過ぎて、此寺へ迷うて來てゐる。もし、左樣な子を尋ぬる人があらば教へて遣して下され。其娘の子も見せませう。
と呼出し給へば、内より立出で、
〔おさん〕なう母樣か。
〔三浦〕汝はおさんではないか。其方は兵介に殺され、死んだが、これは夢ではないか。
と肝を消し、
何として此寺へ來た。

御夫婦となし、國家を治め給ひける。

おさん（聞き、）佛樣がござつて、此處に居れば兵介が殺す程に、こちへ來いというて連れてござつた。あの開帳の象に乘つてござる佛樣であつた。

といへば、

〔三浦〕　扨は普賢菩薩の御利生か。有難や。

と皆拜み給ふ。然る所へ利根五郎、侍、引返し、寺へ駈込み、

〔利根五郎〕　此處へ音羽の前を附込うだ。急いで出せ。

住持衣を脫ぎ、

〔住持〕　渡す事はならぬ。

とあれば、「推參な」と打付くるを、住持、棒にて太刀打落せば、與太郎、其儘利根五郎を棒縛りにし、奥へ引立て入る。扨、普賢菩薩開帳の儀式、二十五の菩薩練供養の次第、殊勝なりける次第なり。其後人々は利根五郎を國へ連れ行き、科に行ひ、巳之丞音羽の前と

男伊達初買曾我

男伊達初買曾我

一

一 蒲冠者範頼　門十郎
一 侍一　七五郎
一 侍二　傳藏
一 彦六　又藏
一 五郎時致　八百藏
一 梶原景季　三甫衛門
一 朝比奈義秀　傳九郎
一 鬼王新左衛門　廣治
一 靜御前　富十郎
一 工藤犬坊丸　大吉
一 平樂平馬之丞　五郎三
一 御所の黒彌五　平藏
一 富樫左衛門　半五郎
一 京の小次郎　辰十郎
一 十郎祐成　七三郎
一 工藤祐經　助五郎
一 八幡の三郎　助五郎
一 若い衆　大勢

本舞臺。瓦屋根の大門明立つ。橋懸り、一面の練塀。門の前に、蒲冠者範頼、金烏帽子直垂にて床几にかゝりゐる。侍一侍二、烏帽子素袍龍神卷にて床几にかゝりゐる。末座に富樫左衛門、裃股立にて床几にかゝりゐる。その傍に侍、羽織袴股立にて桐柄の刀を持つてゐる。其他、侍大勢突棒刺股を持ちゐる。眞中に疊敷き、三寶に九寸五分を載せてあり。右の見え、能の太皷にて幕開く。

（ト向うより工藤犬坊丸、裃の股立を取り、馬に乘り、京の小次郎中間の形にて尻からげ、馬の口を取つて早乘にて駈けつける。思入れにて出る。少し引きさがつて若黨二三人羽織袴の股立取つて駈けて出る。犬坊丸、馬より下りて思入れする。犬坊丸、小次郎を連れて富樫に向ひ、）

犬坊丸　富樫左衛門殿。拙者儀は、只今館へ歸ります途中に於て、承りますれば、親祐經儀、何とか不調法御座りまして、切腹仰付けられますと承りまして、驚入りまして駈けつけまして御座ります。いか樣な落度で御座ります。承りたう御座ります。（ト急いたる思入れしていふ。）

富樫　犬坊丸。存じよらぬ椿事出來致して、驚いたか。工藤殿の落度といふは、今日この富樫の左衛門が生捕つて來た義經公の公達、經若丸を我君より祐經殿へお預けなされた所に、何者か

盗み取り、經若殿の行方が知れぬ。我君、以ての外お怒りなされ、反逆の義經が倅、大切な囚人をとり逃がす段、至極の落度、元より出頭の祐經なれば、猶以て用捨しては政道が立たぬとあつて、切腹仰付けられ、乃ち太刀取りは某、檢使は梶原源太に仰せを蒙り、切腹の用意をして罷りある。何ともはや苦々しいことだないか。

犬坊丸　浪介。聞いたか。

小次郎　イヤモ、承りまして言語を絶しまして御座ります。さりながら、何ケ度も御赦免の御訴訟を遊ばされますがよう御座ります。先づ、祐經様へ御對面の儀をお願ひなされませう。

犬坊丸　いかにも。何卒、祐經に對面仕りたう御座ります。門內へお通しなされ下されませう。偏へにお願ひ申します。

富樫　いゝや、犬坊丸。その願ひはかなはぬ。ハテ祐經殿は、もはや科人。科人に親子の對面はかなはぬ法令だわやい。

小次郎　アいや、憚りながら祐經一所懸命の場に臨みまして、犬坊丸親子の對面を致しませいでは、孝行が立ちませぬ。御憐憫の御了見を持ちまして、門內へお通し下されませう。ひとへに。

犬坊丸
小次郎　お願ひ申しまする（ト辭儀する）

富樫　ハテ扨、科人に親子の對面は叶はぬ。見れば汝は步中間の身として、範頼公のお口通りとも憚らず、さし出た願ひ、推參な。さがらぬか。

小次郎　ハア、いや御意で御座りますが、步中間にも致せ、祐經が祿をはみます拙者。主の大事を餘所に見ましては忠義が立ちませぬ。併し、拙者はともあれ、犬坊丸親子の對面を。

富樫　ヤア、ひちくどい奴だ。さがらぬか。

範頼　イヤこりや富樫、犬坊が願ひ、餘儀ないことだ。祐經に會はせろヤイ。

富樫　いや、それでは法令が立ちませぬ。

範頼　サアその言譯は賴朝へ範頼がする。苦しうない、犬坊。祐經が不慮の椿事、さぞ悲しからう。もとより、某が弟義經が若、經若が事について祐經が難儀、某とても氣の毒な。しかれども、和田秩父北條をはじめ大小名、思ひ〳〵に祐經が赦免の訴訟をするほどに、力を落すな。

犬坊丸　有難い御意に御座りまする。

範頼　兩人ともに、範頼について奥へ參れやい。

犬坊丸
小次郎　畏りまして御座りまする。

（ト範頼犬坊丸小次郎、門のくゞりの中へはひると、花道より、鬼王新左衞門、十郎祐成ばた〳〵とかけて出る。門の方

（行かうとする。）

侍一、二　これ〳〵、門の内へは叶はぬ。控へろやい〳〵。

鬼王 十郎　ハッ〳〵。（トうろたへる。）

富樫　待て〳〵、わいらは曾我の十郎祐成主従ではないか。

十郎　富樫の左衞門殿で御座りまするか。承れば、工藤左衞門祐經何か落度によつて、切腹仰付けられましたと承り、驚入りまして駈けつけまして御座りまする。たとへ祐經いかやうな不調法にも致せ、幾重にも御訴訟仕り、祐經か命を救ひましたう、駈けつけまして御座りまする。何とぞ門内へ。

鬼王 十郎　お通しなされて下されませう。

富樫　ハテ心得ぬ。祐成、御邊は祐經に恨みある身を以て祐經が命を救ひたいとは、その意を得ぬが、仔細があるか。

十郎　その儀は。（トつかへる。）

鬼王　アいや、ありやうに富樫様へ申上げませずば、貴方の御了見も御座りますまい。申上げませう。ハイ、祐成、工藤様のお命を救ひましたいと願ひまするは、御存知の通り、祐經様は曾我兄弟が親の敵で御座りまする。その敵の祐經様の御切腹なされましては、兄弟五ツや三ツの頃より、心を盡しまする大望が無になりまして、本意を失ひまする。よつて、身に代へましても、祐經様のお命乞を仕りたう駈付けまして御座りまする。祐成が心底をお察し下され、何とぞ御憐憫をもちまして、門内へお通し下されまするやうに、ひたすら、

鬼王 十郎　お願ひ申しまする。

富樫　いゝや、そりや叶はぬ。ハテ工藤は曾我兄弟が親の敵故、命乞をして本意を遂げたいなどといふ、私な事に頓着して、上の御政道が立たうか。叶はぬ願ひだ。歸れやい。

十郎　成程、祐經殿の儀につき、祐成風情が願ひに御頓着は御座りますまいが、親の敵を持つ身は、陣の小口も遁るゝとやら申します。祐經が命を救ひ、本意を遂げましたいと申す節義孝道をお聞分け下され、御恩免ござるまいものでも御座りませぬ。叶はぬ迄も、何ヶ度も御訴訟致したう御座ります。門内へ、

鬼王 十郎　お通し下されませう。（ト門の方へ行かうとする。）

富樫　ハテ扨、叶はぬといふに押して通らうとは、上を輕しめるか。下らぬか。

侍一、二　下れやい。

（ト兩人、うち〳〵と花道の角迄下つて顔見合せ、）

十郎　鬼王。

鬼王　祐成様。

十郎
鬼王　ハテ是非に及ばぬ。
（ト思入れする。門の内にて、）
梶原景季　侍共。大切な囚人だ。心をつけろやい。
侍　ハツ。
（ト三絃の合方になり、門の扉を開いて、梶原景孝、烏帽子素袍にて出る。後より乘物に工藤祐經を乘せ、兩脇に平業平馬之丞、御所の黒彌五附き出る。六尺四人股引にてかつぎ出で、後より犬坊丸、京の小次郎附き出る。）
犬坊丸
小次郎　一寸對面致したう御座ります。お頼み申します〳〵。
平馬之丞
黒彌五　乘物へ寄るな、退けやい〳〵。
（ト出る。）
十郎　あれが祐經か。（ト思入れする。）
鬼王　先づお急きなされますな。お控へなされませ。
（ト兩人、花道の角にじいと思入れしてゐる。乘物を本舞臺へ据ゑる。）
梶原　富樫。祐經贔負の諸大名が叶はぬ訴訟で手間取つたが、さぞ退屈であらう。
富樫　サア、いかう手間取るはなんぞ變があるかと案じてゐたが、シテ諸大名の訴訟はいけ申さぬか。
梶原　サア諸大名の訴訟も、もう緣が切れると見えたによつて、早くおつ片付けてしまふべいと思つて、連れて來た。なに、平馬之丞、黒彌五。囚人を出せやい。
平馬之丞
黒彌五　心得ました。サアお出でやれ。
（ト上蓋の乘物の戸を開ける。工藤祐經、白無垢に水色の麻裃に、きつと思入れする。十郎、アレと思入れ。鬼王ぢつと引留め、樣子を覗ふこなし。）
犬坊丸　申し父上。（ト寄らうとする。）
平馬之丞
黒彌五　寄るな。
犬坊丸　でも、
梶原　コレ〳〵、犬坊控へろ。我君の上意があるぞ。
小次郎　先づお控へなされませい。（ト犬坊丸を連れて下る。）
梶原　祐經。改めて君の上意を申し渡すべい。それえ。
（ト祐經、思入れして乘物を出る。疊の上へ直り、きつと手を突き辭儀する。）
梶原　祐經へ、我君よりの上意には、反逆人の義經が伜、大切な囚人をお預けなされた所に、とり逃したは必定義經へ心を通じ、謀反一味故わざと經若を逃したに極まつた。よつて、切腹仰付けられるとの上意で御座るぞ。
祐經　上意の趣、謹んで承知仕りまして御座りまする。祐經お預けの經若殿をとり逃しましたる段、判官殿に心を通じ、謀反の一味とお疑ひの上、縛首に

も仰付けらるべき所を、切腹仰付けられまする段、武士の冥加に叶ひ、有難い仕合せに御座りまする。(トきつと辭儀する。)

梶原　神妙なお受けで御座る。もとよりこの源太は御邊の妹婿、近頃氣の毒に思へども、主命なればもだし難く、檢視に立ち申した。尤も御邊が死んだ後でも、大切な一臈別當の職は他人へは渡さない。この梶原が早速君へ願つて今日から一臈別當になる。又犬坊も甥も同然だによつて流浪はさせまい。俺が茶坊主にでもして使ふべい。案じぬがえい。オヽ、云はば親子、今生の別れだ。景季が私の了見で對面させべい。犬坊、傍へよつて暇乞をしろやい。

犬坊丸　ハッ。(ト祐經傍へ寄る。)父上樣。存じよらぬ儀が出來致しまして、御切腹仰付けられまして、かやうな悲しい儀は御座りませぬ。さぞ御無念に御座りませう。(ト泣く。)

祐經　犬坊。もとより祐經が命は君に奉り置けば、今更驚く事でない。親に別れても狼狽る事はない。今景季殿の賴もしい一言をきつと忘れず、隨分武藝學問を勵み、工藤の家名を引興す樣にせい。

犬坊丸　ハッ。(ト泣く。)

祐經　犬坊。その歎きは何事ぢや。工藤が倅の樣にもない。見苦しい。泣くな。

犬坊丸　ハッ。(ト思入れ。)

祐經　顏を上げい。

犬坊丸　ハッ。

(ト祐經、犬坊丸が顏を見て涙を隱し、)

祐經　勇士の本意は戰場に臨み、君の御馬の先に於て、討死することこそ本意なれ。何ぞや讒者の僞に筋なきお疑ひを蒙つて、切腹するは口惜しい。

(ト思入れ。梶原氣味惡きこなしにて、)

梶原　犬坊、下れやい。

(ト犬坊丸、涙を拭ひながら、)

犬坊丸　父上樣。

(ト祐經、ぢつと向うを見て、構はぬ思入れ。)

平馬之丞
黑彌五　下れやい。

(ト犬坊丸を引立てる。こちらへのける。ト梶原、桐柄の刀を取つて、)

梶原　工藤殿。イザ切腹の用意。

(ト立ちかゝる。祐經肩衣をはね、三寶を戴き九寸五分へ手をかける。)

十郎　待つた。(ト跼寄つて、祐經が手にすがる。)

富樫　邪魔をするな。退け。

(ト十郎へかゝらうとすると、鬼王富樫を取つてのけ、祐經が後に立つて、)

鬼王　まづ、暫くお控へくだされませい。(ト祐經をかこふ。)

梶原
富樫　なぜ切腹の邪魔をするやい。

鬼王　いゝや邪魔は仕りませぬ。工藤様へ一言申上げたい儀が御座ります。暫くお控へ下されませい。御承引御座らぬとお爲になりませぬぞ。控へさつしやれ。

（ト反打つて思入れする。ト梶原、富樫、氣味の惡き思入れして控へる。十郎このうち祐經手を取り、ぢつと顏を見詰める。祐經も十郎を尻目に見てゐる。）

十郎　祐經殿。某は日頃そこ許様に何卒お目にかゝりたい〱と、明け暮れ心にかけて居りましたが、時節もなう打過ぎまして今日の只今、かゝる時宜に臨んでお目に懸りますは、大慶なと申さうか殘念なと申さうか、最前より拳を握り、齒をくひしばり罷りあります。

（ト祐經、きつと見て。）

祐經　祐經が腹切らんとする拳にすがつて、様子ありげな詞をのぶる若者。ついに見馴れぬ侍なるが、何者なるぞ。

十郎　始めて御意得ますれば、お見知り御座らぬ筈。某は河津三郎祐泰が長男、只今は曾我太郎祐信が養子曾我の十郎。

祐經　祐成か。

十郎　祐經殿。

祐經　祐成。

十郎
祐經　ハテ珍しい見參ぢやなア。

（ト兩人思入れする。鬼王、ちやつと中へ入り、十郎を少しこちらへ引きさげ、兩人ぢつと思入れしてゐる。祐經も思入れあり。梶原富樫方へ向ひ、）

祐經　御兩所。御覧の通り一家の祐成に、かゝる仕儀に臨んで始めて見參致します。申さば最期の暇乞、暫く切腹猶豫致したう存じます。

梶原
富樫　いかにも。

（ト鬼王、祐經方へ思入れして手を突く。）

鬼王　拙者儀は曾我の郎黨、鬼王新左衛門めで御座ります。始めてお目見え仕ります。不慮にお身の御大變と承りまして、及はずながら、何卒お暇乞の願ひを仕りたう、祐成が供仕りまして、馳付けまして御座りますが、最早、御切腹の場に望みまして、途方にくれまして罷りあります。

祐經　扨は其方は、豫て聞及ぶ鬼王新左衛門か。

鬼王　ハツ。

祐經　祐成諸共、工藤が命を救ひたいと馳付けた心底、尤も、祐成兄弟幼年よりこの祐經を親の敵と覘ふ由、豫て聞及ぶ。殊に最前舞樂の場に於て、弟箱王にも對面遂げ、けなげな振舞を見て感じ入る。時節もあらば兄弟と勝負

して呉れんと思ふ所に、不慮の椿事によつて祐經切腹の仕合せ。祐成。嘸殘念にあらうなァ。

十　郎　仰せにや及ぶ。祐成兄弟竹馬に鞭打つ頃より、いつか本意を遂げたいと寝ても覺めても忘るゝ隙もなう、心を盡しました甲斐もなう、今、工藤殿の切腹なされて、誰を敵と討つて亡父河津の靈魂に手向けませう。不孝の罪、世の謗、殘念さを、憚りながらお察しなされて下さりませう。（ト泣く。）

鬼　王　工藤樣。もとより潔いお覺悟ながらも、祐成が心底をお察しなされ、何卒お身の罪を仰せ開かれまする御賢慮をお頼み申上げまする。すでに、曾我兄弟幼年の節、讒者のわざによつて君の御不審を蒙り、由比が濱へ引出され、すでに誅せられまする所を、畠山我にお志あるお大名樣から、替る〲のお訴訟。別して秩父の重忠樣、所領に代へさせられての御訴訟故、兄弟命を助かりました例も御座りまする。幸ひ、和田秩父北條樣、君のお供と承りますれば、拙者お目見え仕つて、御訴訟の儀をお願ひ申したう御座ります。しばらく御切腹をお控へ下されませう。

祐　經　天晴忠臣。鬼王新左衞門、餘儀なき願ひ、尤もながら、上職に補せられ、三老の面々と共に、天下の政を司れば、喬木風に破らるゝ道理。佞人讒者、工藤をなきものとなし、一臈別當の職を汚さんと、經若殿をとり逃した落度を幸ひに、判官殿に心を通ずるなどと、虎口の牙をならして君の叡智を晦まし、忽ち御不審を蒙る上は、身の罪を申し開けば、君の御誤りを諷ぶる道理、不忠至極の至りと、一言の陳謝に及ばず、塵芥に比してゐるが、祐成兄弟が年來の本意を失ふ殘念さを思へば、最後の心懸りになるわい。

（ト十郎、思入れして、）

十　郎　南無阿彌陀佛。

（ト自害せうとする。鬼王、ちやつと留めて、）

鬼　王　待つた。こりや何故の御切腹で御座りまするぞ。

十　郎　聞かぬか鬼王。工藤殿の經若君をとり逃したは、義經公へ心を通ずるとの御不審によつて切腹仰付けられたれば、經若君を盜み出した科人さへ出れば工藤殿の命に別條はない。何を隱さう、經若君は祐成が盜み出したわい。

鬼　王　これ〲、粗忽な事仰せられまするな。

十　郎　いゝや、粗忽でない。今、祐成が腹切つて死んでも、祐經殿さへ存命でおゐやれば、後には五郎と禪師坊が控

へてゐる。彼等に本意を遂げさせれば、祐成が孝行は立つわい。鬼王留めるな。

鬼王　いゝや、そりやお情ない。

十郎　なぜ。

鬼王　サア、鬼王が罪をお身にお引受けなされて下されうと、お思召しまするお志は、有難う御座りまするが、それでは新左衞門めが日頃の忠義が無になりまする。もとより、經若君は拙者が頼まれまして、盗み出しましたからは、切腹致して祐經樣のお命の助かりまする事なら、何を厭ひませう、必ず御聊爾をなされまするな。南無阿彌陀佛。

（ト自害せうとする。十郎ちやつと留めて、）

十郎　待つた。はやまるな。

鬼王　いゝや、お留めなされまするな。

十郎　いやさ、粗忽するな、鬼王。志は尤もながら、其方が死んではお年寄られた母人や祐信殿が、朝な夕なの營みに御難儀なされるわい。俺はほんの惣領の甚六で、何の役にたゝぬ。俺は死んでも大事ない。必ず死んで呉れるな。鬼王。拜むわい〳〵。（ト思入れする。）

鬼王　これは御勿體ない。御兄弟樣御幼少からお傍を離れず、今日迄晝夜艱難辛苦を厭ひませぬも、御兄弟御揃ひなされて御本意を遂げられ、お悦びのお顏を見ませうと、それを心の張弓に、光陰の矢のたつをも忘れて暮しまするものを、そのお前が御生害なされては、鬼王がこれ迄の忠義が無になりまする。もとより、忠義に捨つる命、これに過ぎたる本望は御座りませぬ。必ずお留めなされまするな。

十郎　いゝや、そちが死んでは曾我は闇になるわい。鬼王。

鬼王　祐成樣。（ト顏を見合せ、）

十郎鬼王　よく〳〵武運に盡きた身の上ぢやな。（ト泣く。）

梶原　やれこれ、祐成主從。何をたわけを盡くす。わいらがくたばつたと云うて、謀反人の祐經が命が助かるものか。うぬらが私に關はつて切腹の邪魔をひろぐと、爲にならないぞ。

富樫　やれ、そいつらを叩き出せやい。

侍皆々　立てやい。

（ト棒をもつて取卷く。鬼王十郎を圍ひ、）

鬼王　お侍衆。聊爾をさつしやるな。工藤樣のお身の御安否を見屆けぬうちは、一寸もこの場は動きませぬぞ。むざと、棒三昧をおしやると、鬼王新左衞門がひつこぬくが最後、箱根の山を黑土にし申すぞ。

（ト反打つて思入れする。侍、怖がり後へしざる。）

梶原　やれ、そえつらを叩き出せやい。

侍皆々　うせぬか。（ト打つてかゝる。）
鬼　王　イヤ、推參な。（ト侍を取つて投散らす。）
小次郎　待つた。（ト中へ入つて留めて、）何れも聊爾さつしやるな。經若君を盜み出した科人は、こつちに御座るぞ。靜まらつしやれ。（ト鬼王が方へ思入れして、祐經へ向ひ、）ハイ、恐れながら御前へ申上げまする。下司めは、昨今お目見え仕りました浪介と申すお草履つかみで御座りまするが、仔細あつて義經公の御家來に頼まれまして、御前の御預りの經若君を盜み出し、相渡しまして御座りまする。これによつて御前の御謀反のお疑ひをお受け遊ばされ、御切腹なされまする段、見るに忍びませず、われと身の惡事を白狀仕りまする上は、梶原樣富樫樣のお目通りに於て、御成敗を待たず、切腹仕りまする。（ト大肌ぬいで、）南無阿彌陀佛。（ト腹切らうとする。）
祐　經　待つた、待たう。
小次郎　お手打になされまするか。
祐　經　おのれ、もとより新參者、させる祐經が恩顧も受けぬ身として、工藤が命を救はんと、經若殿を盜み出した科人と名乘つて、命を捨てんとする心底は、祐成鬼王が志に等しく、工藤を存命させて、曾我兄弟に本意を遂げさせたいと思ふ志だな。
小二郎　エ。
祐　經　おのれ、昨今目見えする時の立ち振舞、腹からの下司でないと見たが、今の振舞を察するに、その方は河津の三郎祐泰が在京の折から、風折といふ白拍子に馴染めてまうけた、京の次郎祐俊だな。
（ト小次郎ぎよつとして、）
小次郎　御眼力の上は何を包みませう。いかにも拙者は河津が倅、京の次郎祐俊。面目ない見參を致しまする。
祐　經　流石、河津が落胤。ハテけなげな振舞だな。
十　郎　扨はこなたが、京都に於て成長さつしやれた京の次郎殿で御座りまするか。
小次郎　祐成。不思議な對面をしまする。何、其方は鬼王。
鬼　王　ハイ。なぜ疾うにも曾我へはお出でなされませぬ。
小次郎　サ、早速母人にお目にかゝりに行かうと思ふ折節、ふと工藤殿へ緣あつて歩中間に住んだも、まさかの時は兄弟が力に。（ト云はうとして、）力になるべき器量もなし、祐經樣のお草履取の浪介。ハイ何とぞお命に代りましたう、ひたすら願ひ奉りまする。（ト祐經

（思入れする。）

梶原　やいこれ、うぬらは大切な科人の切腹の邪魔をなぜひろぐ。なくならないか。サア工藤、時刻が移る。あいつらに頓着せずとも、早く腹をかつさばいたがよい。

（ト祐經思入れして、）

祐經　梶原殿、富樫殿。御兩所へちと願ひ御座る。お聞き下されませう。

富樫 梶原　末期の願ひ、何だ、聞き申すべい。

祐經　別の儀でも御座らぬ。曾我殿原が親の敵の祐經が、只今切腹致しては、年來の本意を失ひまする故、御覧の通り祐成主從京の次郎、工藤が命に代つて弟どもに本意を遂げさせたいと餘儀なき志、もだしがたう存じまする。よつてとても死する祐經が命、祐成祐俊と刃を合はせ、彼等に年來の本意遂げさせたう存じまする。何とぞ御兩所御了簡を賴み存じまする。

（ト十郎鬼王小次郎、嬉しがり顏見合せ、思入れする。）

梶原　ハアて、何の願ひかと思うたりや、藥袋もない事を云ひだした。この梶原は科人の祐經が切腹をこそ仰付けられたれ、敵打の檢視には立ち申さない。

富樫　この富樫も科人の祐經が腹を切る太刀取を仰付けられたれ、敵打の見物には來申さない。

梶原　馬鹿々々しい事を。

（ト祐經、むつとするをしづめる思入れ。鬼王十郎小次郎も思入れあり。）

祐經　いや、御兩所。只今迄天下の政道にも關はりました祐經が、私な願ひを致すも、曾我殿原が殘念を察し、もだしがたう願ひに及びまする。旣に長上しいわれを敵と狙ふ、昔の豫讓が志を感じ、着したる衣服を脫いで豫讓に與へ、彼に切らせて當座の本意を遂げさせた例も御座る。ましてや祐經とても死すべき命を祐成祐俊と刃を合はせ本意を遂げさせたう存ずる。武士の節義を君の上聞に達せられましたなら、お聞屆けあるまいものでも御座らぬ。武士の情で御座る。御前よろしうお取りなしを賴み存じまする。

梶原　いゝや、そんな馬鹿な願ひは叶はない。ハテ、御身は謀反人だによつて縛首を討たれ、獄門に晒されべき所を切腹を仰付けられたは、君のお慈悲だが、その上に。

富樫　敵打の願ひとは、そんな馬鹿な取次がなるものか。無駄口をきかずとも、早く、

梶原 富樫　腹をかつさばけやい。

祐經　默らう。

梶原
富樫　黙れとは。

（ト祐經、思入れする。鬼王十郎小次郎犬坊丸も、反打つて梶原富樫をぢつと睨みつけてゐる。梶原富樫、氣味の惡き思入れ。）

祐經　一﨟別當祐經がおのれら如きの穀賊に詞をつくすも、曾我殿原に本意を遂げさせたさ。武士の節義を聞分けぬさへあるに、祐經を謀反人とは汚らはしい。もとより無實の罪を申し開けば、君讒者に迷はされ給ふ御誤りを、改めるに似て不忠の至りと、中分に及ばず、無念ながら切腹に及ぶ。忠臣無二の祐經を謀反人なんどと、汚らはしい舌の根を鳴らすと、穀賊め見よ、祐經今無念の最期遂ぐるとも、忠義の魂玲々と、君の傍らを放れず、佞人讒者を取りひしがずに置かうか。おのれ人非人めが。

（トじり〳〵睨みつけながらいふ。鬼王十郎小次郎犬坊丸も反打つてじり〳〵思入れする。梶原富樫、氣味の惡い思入れして尻ごみする。祐經、思入れして、）

祐成を始め、さぞ殘念であらうが、弓手も馬手も、佞人讒者の人非人。祐經が詞を聞分くる人間がない。是非に及ばぬ。今祐經切腹するほどに、せめて屍になりとも刄を當てゝ、年來の志を遂げをらう。さらば。（ト身づくろひする。）

十郎、犬坊丸
小次郎、鬼王　待つた。（ト留める。）

平馬之丞、黒
彌五、侍一、二　寄るな。

（ト留めるを鬼王とつて投げる。奥にて、朝比奈義秀聲かける。）

朝比奈　待てやい。（トばた〳〵にて駈出で、富樫を取つて投げ、祐經をかこひ、きつとなる。）

梶原　イヤ、野郎め。科人の祐經が切腹を、なぜ。

富樫
皆々　邪魔をひろぐやい。

朝比奈　だまりやアがれ。邪魔ぢやない。君より上意があるわやい。

皆々　上意とは。

朝比奈　工藤殿。こなたの一﨟別當の職を毒蟲めがしてやるべいと、僅かな落度を得たり賢しと、大頭殿へ耳をなめて既に切腹と仰出されたが、こなたがごねては、曾我兄弟が月夜に釜の仕合せだ。そこで曾我贔負、鐵砲義盛を始め、智惠なしのこの朝比奈迄、こなたの命乞ひに口を酸くしてやう〳〵願ひ了ふせたが、君の上意には、祐經に百日が間に經若を尋出して差出せ。それ迄は出仕止め、きつと逼塞して罷りあれとの上意で御座るぞ。

（ト思入れする。梶原富樫、皆々顏見合せ、殘念な思入れする。鬼王十郎小次郎犬坊

祐経　（九寸五分、祐経朝比奈、思入れして、）存じよらず切腹御赦免を蒙り、百日が間に経若殿を尋ね出し差上げよとの上意、畏り奉りまして御座る。郎党どもに申付け、草を分けて詮議いたさせ、早速召捕つて差出しませう。小林殿。御前宜しう御沙汰を頼み存じまする。

朝比奈　心得ました。なんと祐成、鬼王。工藤殿の命を繊の中から掻き出したが、安堵したか。

十郎　今にはじめぬお志。

鬼王
皆々　忝い仕合せに御座りまする。

朝比奈　なんと毒蟲めら、算用がくつ違つて残念だか。

梶原　なんにもかにも、よく邪魔をひろぐ野郎めだな。

富樫
皆々　されば、けちな奴で御座ろ。

祐経　祐成、鬼王。工藤が命は蘇生も同前。さぞ大慶であらうな。

十郎
鬼王　御推量下されませう。

祐経　もとより親しき一家の祐成に始めての見参といひ、年始なれどもかゝる仕儀なれば、土器を取交す事もならぬ。よつて取敢へず、工藤が寸志の引出物をつかはさう。近う。

十郎　ハツ。

（ト思入れする。祐経三寶の九寸五分を取つて、）

祐経　この短刀は工藤累代の重寶、赤木の刺刀なるが、せめても家の重寶を以て切腹せんと、上への御免を蒙つて腹切り刀に用意したが、一腰なれば引出物につかはさう。重ねて兄弟と勝負して、祐経が討たれなば、この赤木の刺刀を以て止めを刺せ。祐成。いざ。

十郎　鬼王。親の敵の工藤殿に、引出物を申請けても苦しうあるまいか。

鬼王　工藤様の御重寶、名に負ふ赤木の刺刀を、止め刀にせよとの御一言が面白う御座りまする。お請けなされませい。

朝比奈　さうだ／＼。祐成。善い曾我への土産だ。もらへ／＼。

十郎　然らばお志の賜物。（トつか／＼と祐経傍へ行き、）申請けませう。

（ト思入れする。祐経よきいとして、）

祐経　しかし、いはば年玉包み。熨斗の代りに、（ト腕をひいて三寶へ乗せ、柄を十郎方へ向けて、）祝うて、祐経が血肉を注いで遣はす。いざ。

十郎　いざ。（ト三寶に手をかけ、きつと顔見合し、つと思入れして、）

祐経
十郎　いざ。

（ト十郎、三寶を取つて退り、すぐに赤木の刺刀をもつて、祐経へ近寄らうとする。朝比奈、鬼王、ちやと中へはひつて隔て

る。祐經きつと思入れする。小次郎犬坊丸思入れあり。）

朝比奈　祐成。兄弟揃はいで殘念だか。

十　郎　サア寶の山へ入りながら、手を空しう歸ると思へば、殘念で御座る。

（ト祐經をきつとみる。）

鬼　王　いや、手は空しうは御座りませぬ。赤木の刺刀に、工藤樣の血肉を注いで下さるお志を、此場の思ひ出になされませう。祐經樣。鬼王めが經若君を、百日が間に尋出し差上けませう程に、それ迄隨分お患ひなされませぬやうに、お身の御保養をなされ、益々御雄健を願ひ奉りまする。

祐　經　いふにや及ぶ。經若殿を尋出し、君の御不興御赦免蒙らば早速兄弟に見參せう。小林。先づ早速歸宅いたし、謹んで差控へて罷りあらう。呉々、御前の御沙汰宜しう賴み入りまする。

朝比奈　心得ました。

祐　經　梶原、富樫。御大儀に御座る。

（ト梶原富樫、うじ／＼する。祐經、乘物へ乘る。十郎鬼王、つか／＼と寄るを朝比奈隔てる。小次郎は乘物に引添ひて思入れる。祐經、きつと思入れして、）

祐成。さらば。

（ト小次郎、乘物の戸をぴつしやりたてる。）

梶　原　ハイ、虻も取らず、蜂も取らずになつた。

富　樫　ハテまだ、百日過ぎねば知れ申さぬわい。

黑彌五、平馬之丞、侍一、二　さうです／＼。

朝比奈　ハヽヽ。彼奴らは目算の絲操の絲が切れても、まだやつてみる氣さうな。太い奴等だ。最早、安堵したからは、早く曾我へ歸つたがよかんべい。

十　郎　いかさま。鬼王。母人や祐信殿、工藤殿の身の上をさぞお案じなされて御座らう。早う立歸つて御安堵させませうわい。

鬼　王　成程それがよう御座りませう。しかし、拙者はとてもの儀に、工藤樣のお館迄お乘物のお供を致し、お後から參じませう。

十　郎　ヲヽ尤もな。然らば兄ぢや人。先づお別れ申しませう。

小次郎　母人へ宜しう賴みまする。

十　郎　心得ました。しからば朝比奈殿。

朝比奈　祐成。

十郎 朝比奈　さらば。

（ト三重にて、十郎、思入れして花道へはひる。花道より、ばた／＼と音して、（助五郎）八幡の三郎の早變にて、麻裃の股立にて駈けて出る。）

八　幡　犬坊樣。それに御座りまするか。

犬坊丸　八幡の三郎か。

八幡　拙者は三嶋へ御代參に參じまして、只今歸りまする道すがら、祐經樣お預かりの義經公の若君を、何者か盜み取りましたその落度によつて御切腹と、とり〳〵巷の風說を承り、驚入りまして驅付けまして御座りまするが、最早御生害遂げられましたか、如何で御座りまする。

犬坊丸　サアすでに御切腹の所に、和田、秩父、北條樣、これなる朝比奈樣の、命乞ひをなされた故、御赦免なされた。喜べ。

八幡　すりや、御切腹御免で御座りまするか。ハテ扨、嬉しや。

小次郎　八幡樣。さぞお膽が潰れましたで御座りませう。只今、犬坊樣の御意の通り、いづれも樣の御訴訟によつて、百日が間に經若君を尋ね出せ。それ迄逼塞致せとの上意で御座りまする。萬端朝比奈樣のいかいお心添へに御座りまする。お禮を仰せられませう。

八幡　ヲヽ、ハテ扨、朝比奈樣。御親切の段、拙者におきまして有難う存じ奉りまするで御座りまする。（トきつと思入れする。）

朝比奈　ヲヽ、工藤殿の命は、小林が救はねばならない譯があつて世話をやいたが、八幡。工藤殿の落度は、經若殿を取逃したばかりでは切腹の所へはゆかないが、かのナア、かの例の毒蟲めが、祐經が判官殿へ謀反の一味故、わざと經若を逃したと大頭殿の耳をなめた故、そこで切腹と仰せ出されたわい。

八幡　扨は例の毒蟲殿が、大頭樣のお耳をなめましたか。現在の小舅までなめるか。縞蛇を生殺しにしたやうな、いけ好かないしやつ面だ。（ト梶原を睨めつける。）

梶原　やいこれ八幡。うぬが俺を睨廻して味な御託をあけるが、祐經めは俺が讒言でもしたと思ふか。工藤は謀反人に一味した科で、切腹と仰せ出されたわやい。うぬ、なんにもくつ知らないで馬鹿な寢言をほざくと、工藤が郎黨とは云はせない。ぶつ放すぞ。

八幡　へヽヽ。陪臣でも祐經の執權八幡の三郎。ぶつはなしだておしやると、こなたのその土取場を見る樣な頭が逐電するがよいか。

梶原　イヤ推參な。

八幡　推參とは。（ト思入れする。）

小次郎　コレ〳〵、八幡樣、お乘物に祐經樣のお入りなされますぞ。

八幡　ヤア、お乘物にお入りなさるゝ。（ト乘物へ駈け寄つて、）ハツ、八幡の三郎で御座ります。御代參の歸るさに御様子を承りまして、仰天致して駈付け

ましで御座ります。先づは御安泰にゐらせられまして恐悦至極に存じ奉ります。(思入れ。)ハツ〳〵、畏りまして御座ります。(ト乗物にてもの云ふ思入れにて耳をかたむけ、こなしあり。)然らばお後に殘り、新左衞門と申合せますで御座りませう。犬坊樣。イザ御歸宅をお急ぎなされませう。

犬坊丸　いかにも。然らば朝比奈樣、お暇申しませう。

朝比奈　乗物に心をつけて行け。

犬坊丸　ハツ。

八幡　浪介。大切にお供をせい。

小次郎　畏りました。

鬼王　拙者もお館迄お供致しませう。

八幡　イヤ、鬼王殿はお控へなされ。チト御相談が御座る。

鬼王　心得ました。然らば浪介とやら、隨分と心を付けてお供しやれ。

小次郎　お氣遣ひなされますな。御主人に愚かは御座らぬが、別して大切な祐經樣　ぢつとお駕籠を放れす、この浪介がお供致すから、ちつともお案じなさるゝことは御座りませぬ。ナア。(ト鬼王へ思入れして。)八幡樣。必ずお案じなされますな。

八幡　でかした。然らばお乗物をやれやい。

侍皆々　ハア。

(ト三重にて乗物を先にたて、犬坊丸小次郎侍皆々付いて花道へはひる。八幡後見送り、思入れして。)

梶原　富樫。今迄氣を張つてゐたが、張合が拔けてがつかりと草臥れたわい。

富樫　サア、どうか氣がめいつた。別當が勝手へ行つて、一杯ひつかけべいわい。

黑彌五、平馬、之丞、侍一、二　それがえい〳〵。

梶原　ヤイ、野郎め。うぬ、折角面白くやりかけた操へ、よく邪魔を入れやァがつたな。この矢反に安穩ぢや置かない。うぬは朝敵の義仲が巴と夜食の塊だと言上して、おはんさいを喰はせるぞ。覺悟してけつかれ。

朝比奈　うぬは朝比奈をもなめる思案か。太い奴だ。所詮うぬが樣な毒蟲を生けて置けば人種がない。いつそ頭を叩きみしやいで、溝へうつちやるべい。覺悟ひろぎやァがれ。

(ト思入れする。梶原氣味惡き思入して。)

梶原　これ〳〵、小林。急くな。今のは戲言だ。

朝比奈　なんだ。戲言だ。

梶原　ハテ、われと俺が此所で鎬を削つて、われが死んでも、俺がいがみ相手がなくなる。俺が死んでも、われがいがみ相手がなくなる。それぢやァ面白

くない。兎角朝比奈と梶原は犬と猿の樣に、どこ迄もいがみやつてゐるがえい。マア俺や樂屋へ行つて一杯引つかけて氣を付けて、又後に打出し際で、いがみ合ふべい。サア皆來う。

(ト梶原、皆々を連れはひる。朝比奈鬼王八幡殘り、)

朝比奈　先づ毒蟲めらはなくなつて、氣障りもない。鬼王、八幡。經若殿を尋出す談合をしろ。小林も智恵はないが共に枕を割るべい。一所へ寄合へ。

八幡 鬼王　ハツ。(ト三人一所へ寄り、)

鬼王　八幡殿。其許には御主人の儀、拙者迚も曾我一家の工藤樣の御難儀、身にかゝつた儀に御座れば、何事もお互に申合せたう御座るが、其許にはいかゞ思召すぞ。

八幡　御念の入つた御挨拶で御座る。拙者は元新參者で御座るが、譜代の八幡の三郎行氏病死致した後へ、御主人の目がねを以て名跡に申付けられ、譜代の近江の小藤太ともに、家の束をも申付けられ厚恩に預ります故、かゝる大事に身命を擲つて恩を報じたう存じます。何を申しても、雲を摑む樣な詮議で御座るが、其許にはどう致したらよからうと思召すぞ。

鬼王　サア拙者が懸念には、經若君を鎌倉近處には隱し置きますまい。武藏下總の邊には、義經公の恩顧の者蟄居致すと承れば、幸ひ拙者は、武藏國梅堀と申す處に知邊の者も御座り、又小梅村と申す所に小梅と申す女にちと由緣も御座れば、かしこへ立越え、詮議の手段に町人と罷りなり、梅堀の由兵衞、或ひは梅の由兵衞と名乘つて詮議致さうと存じます。

朝比奈　至極面白い〳〵。

八幡　然らば拙者も、幸ひその梅堀の近處源兵衞堀と申す所に知邊も御座り、又兩國と申す所に、ちと出緣ある女、仔細有つて町方に乳母奉公を致して居りますれば、かしこへ立越え、拙者も手段の町人となつて、源兵衞堀の源兵衞、或ひは姥の源兵衞と名乘つて詮議致しませう。

朝比奈　至極面白い〳〵。

鬼王　然らば御一處に武藏國へ立越え、或ひは商人となつて人家を窺ひ。

八幡　或ひは床髮結となつて世上の噂を聞き。

鬼王　男伊達となつて廓へ入込み。

八幡　禿子供を詮議して、終には經若君を尋出し。

鬼王　誓て立歸つてお目に懸りませう。

八幡 鬼王　朝比奈樣。

朝比奈　鬼王、八幡。

鬼王
八幡　お暇申しませう。

朝比奈　行け。

（ト三重になる。鬼王八幡思入れして、兩花道へ別れはひる。朝比奈見送り、門の中へはひる。舞樂の合方になる。）

返し

（五つ建目の道具になり、太鼓出してあり。臆病口の方より、彦六、肩衣に一腰を包み持つて出る。）

彦六　まんまとしおふせた。忝い。

（ト戴き走りはひる。ト奥より、靜御前つか／＼と走り出て、）

靜　今彦六が神前から何やら取出して、肩衣に包んで持つて退いたが、もしもあの。（思入れ。）それ。

（ト身繕ひする所へ、奥より富樫出る。靜御前思入れして向うへ駈出さうとする。）

富樫　コリヤ待て。

靜　エヽ。（ト悔り。）

富樫　見りや、わりや、處置振が斜者と見える。今日今樣に召された女郎か。

靜　アイ、女郎で御座んすわいなア。

富樫　そんならちいつと用がある。此處へ來給へ。

靜　アイ。（トうぢ／＼する。）

富樫　ハテ惡い事はしない。早く來給へ。

靜　アイ、さうしてマア、お前はどなたで御座んすえ。

富樫　俺は富樫左衞門國秀だ。

靜　エヽ、あのお前が。（トつか／＼と傍へ來て思入れして、）御用とはなんの御用で御座んすえ。

富樫　ちつと、われに賴みたいことがあるが聞いてはくれまいか。

靜　アイ、身に叶うた事なら聞いてあげませう。

富樫　それは嬉しい。

（ト靜御前を切らうとする。思入れあり。靜、悔りする事、二三度あり。）

靜　お賴みなされたいとは、なんで御座んすぞいな。

富樫　どうか言出すも、こつ恥かしいが、俺は折々大磯化粧坂へ出かけて女郎束を掴るが、どういふ因果かどの女郎も快く會つて吳れない。どうぞ女郎がうまく會ふ魂膽もあらば、傳授して吳れまいか。

靜　それは心安い事で御座んす。女郎に心よく會つて貰ひたくば、まづ、なめ過ぎず、粹過ぎず、おぼこにさへすれば女郎が可愛いがるわいなア。

富樫　ムヽ、そんならおぼこにさへすれば、女郎が可愛いがるか。

靜　サア、それでもいかねば幇間といふものがゐるぢやて。

富樫　幸ひ〳〵、此處に太鼓がある。（ト取つて來て、）サア、太鼓々々。

靜　いゝえいな、それぢや御座んせぬ。客衆と女郎の仲をようするを、幇間といふわいな。

富樫　スリヤ客と女郎との仲を直すを、幇間といふか。

靜　サア、何ぼ幇間が世話を燒いても、先の心が合點がいかぬによつて、（ト太鼓を指で彈き、）アレ見さんせ、鳴らぬぞえ。鳴らぬ〳〵。そこをコレ、中にゐる幇間が引くに引かれぬ樣に云ふによつて、そこで女郎が合點して、心の小締を取つて、くり〳〵と締めて、なァ。

富樫　ハテ、面白くやりかけたものだな。

靜　この表皮は男、裏皮は女、互に心を合はせて、（ト調をかけ、）二重も三重も念に念を入れて、これ、此處が縁を結ぶ所、心のよりの後へ戻らぬやう、固う約束をして結ぶの神樣を呼んで、寢所の上にかう直して、二つ枕をもつてかう直つたものぢやぞえ。

（ト富樫、切らうとする思入れ。）

コリヤ何さんす。

富樫　サア、これは。

靜　反打つて、何さんすぞいなァ。

富樫　これは舞樂の稽古をするのだ。

靜　それに反を打つて、わしを切る樣には、なぜさんすえ。

富樫　今日の舞樂は判官殿の、牛若といつた時からこの方の身の有樣を、謠物に作つて、舞ひ奏でる。最前、祐經が熊坂の能を勤めた。これがら又俺が舟辨慶の能を勤める。われと此處で稽古をせうと思うて。

靜　ハテ、氣味の悪い稽古で御座んすなァ。それならお前が知盛の役、わたしが義經樣になつて。

富樫　俺が知盛になつて、われを義經にして。

（ト立廻りあり。）

靜　この義經を切らんとは、（思入れ。）思ひもよらぬ浦浪の。

（トこれより地へ取り、長刀取直し、種々謠ふ。富樫刀を拔き、切りかける。）

コリヤ、なんぢやえ。

富樫　コリヤ長刀。

靜　これが長刀かえ。

富樫　如何にも。

靜　ハテ、お前の長刀は、さきの長い柄の短い長刀ぢやなァ。（思入れ。）巴浪の紋。

（トこれより地へ取り、前後を忘ずるばかり也と、こゝ迄謠ふ。こゝにて靜、氣味よき立廻りあり。）

その時、義經少しも騷がず。（ト地へ取

り、)辨慶押し隔て、打物業にて叶ふま
じ。(ト地へ取り、)船を漕ぎのけ、渚へ
よすれば、猶怨靈は、(ト地へ取り、)追
拂ひ祈りのけ。

(トこれより、仕舞まで地。この中に、富
樫、懷中の一巻を落す。靜取つて、)

コリヤ虎の巻。

富樫　それを。

(ト取りにかゝる。靜、富樫を投げて、)

靜　忝い。

(ト虎の巻を持つて、花道へ駈けてはひ
る。)

富樫　靜め。待ちやがれ〳〵。

(ト追駈けてはひる。簾の中にて、)

五郎丸 實は八幡　待てやい。

五郎 實は鬼王　放せやい。

(ト烈しき合方にて屋臺を突出す。一面に
石段。奥の方、廻廊の體見える。繪馬を
かけ金燈籠數多つるし、火を點しあり。
石段の上に、鬼王、五郎の形にて袋に入れ
たる大刀を持ち、八幡、五郎丸の形。鬼王
の五郎を組み留め、兩人きつと思入れし
て夜討曾我の謠にて少し立廻りあり。)

五郎丸　ヤアラ合點の行かぬ。九郎判官
義經公、箱根權現へ奉納し給ふ友切丸
を引つはらつて立退かんとひろぐか。
ぶつかぢりめ。そも先づうなア、ナ、
ナ何奴だやい。

五郎　知らずや。われこそ宇佐美、久
須美河津三ケの庄の主、河津三郎祐泰
が二番生、今は繼父、曾我太郎祐信が
名字をくつ付け、曾我の五郎。

五郎丸　時致か。

五郎　さ云ふ童めは。

五郎丸　ても愚かや。鎌倉殿の御馬添の
小舍人、御所の五郎丸。

五郎　重宗か。

五郎丸　時致。

五郎　重宗。

五郎丸　ハテ珍しい。

五郎 五郎丸　參會たなア。(ト思入れあり。)

五郎丸　待て時致。四も五も喰はぬ箱根
權現に、下貫をくはせて友切丸をせし
めたは、開帳場の靈寶にでも出すのか。
但し、質屋の藏へ奉納するのか、どう
いふ思付きでしてやつた。仔細をまけ
出せやい。

五郎　時致大願あつて、さいつ頃箱根
權現の寶前に通夜なし、暫く花やぐら
を上ける折柄、權現枕上に突立ち、善
哉々々。時致。汝判官が奉納せし友切
丸を手に入れなば、親の敵祐經を安々
とぶつた切るべしと、あらたなる靈言
に任せ、權現と相對づくで、友切丸を
借取らんとつんでた所へ、横合から我
意におせゝ燒餅と出かけるか。うぬ、
惡く五郎に洒落かゝると、素首をかつ

掴んで、處は名に負ふ箱根の名物、ぶつ／＼煮える甘酒の鍋底へ、はふり込むが、仁王の小姓め。返答は、ド、、どうだやい。

五郎丸　ム、。パ、、、。凡そ力は八十五人力、強いと云つては庭布にも俺が名を呼ぶ五郎丸、命知らずの若衆だが、甘酒の鍋底へはふり込むとは甘口な。夢妄想に魘されて、友切丸をしてやらんと、若衆姿は正眞の、鬼も十八鬼王が、五郎に化ければ八幡も亦、五郎丸に化けまして、えい春でごんすであんすの小笠原も、疊ざはりの荒若衆。一番年頭に力だめしを霜月の、顔見世から正月迄、取付けの角力の裏藝と、つんでべいかやい。

五郎　面白い。伊豆日記から、曾我へ移るは通ひめを春狂言。またの河津の虎めは五郎。

五郎丸　五郎丸。

五郎　友切丸をまへぎりの腰かけ博奕。

五郎丸　蚊に喰はれない呪禁に。

五郎　ちくとんばかり。

五郎丸實は八幡
五郎實は鬼王　ヤ、あがくべいか。

（ト立の合方になり、兩人友切丸を奪合ひ、立になり、刀袋を引切り、中より木刀に鍔をはめたる小大刀出る。）

ヤア、こりやアどうだ。

八幡　扨は、何奴かとうに友切丸をしてやつて、吹替の木刀を一本させられたか。

（ト鬼王、奥の方へ誑出さうとする。八幡ちやつと留め、）

まて鬼王。コリヤ、どこへかつ走るやい。

鬼王　箱根權現の寶前に、數多奉納の劍の中で、若し取違へたか、詮議に行く。放せやい。

八幡　いゝや、主人祐經を討つ友切丸を、汝が手へ入れては八幡が忠義がたたない。そこでわれが、五郎に化けたをかざつけた故、五郎丸に化けて。

鬼王　組留めたか。

八幡　待て。

鬼王　放せ。

八幡
鬼王　どつこい。

（ト組留めの見えにて、きつとなる。人寄せにて、兩人をせり上る。下より、笹龍膽の幕を張つたる屋臺をせり出す。破風高欄一面の山御簾になる。ト幕の中にて、）

五郎　放せ。

朝比奈　留めた。

五郎　放せ。

朝比奈　留めた／＼。留めたわやい。

（ト合方にて、幕絞り上る。五郎時致、半切、小手、臑當、襷にて、逆澤瀉の鎧を持ち、朝比奈、烏帽子素袍にて留め、思入れにて、兩人きつと睨らんでゐる。）

鬼王八幡これを見て思入れする。大薩摩の淨瑠璃になり。〕

〽されぱにや、曾我の五郎時致は、敵工藤を討たんとて、逆澤瀉の鎧を持ち、たゞ一さんに駈出すを、朝比奈得たりとおつ留めて、互に白眼んで立つたるは、身の毛もよだつばかりなり。

朝比奈　兄イやい。見れば怪したる處置振で、伊東代々の逆澤瀉の鎧をもつて、一文紙巾の切れた樣に、天上無性に駈出すは、茶に浮かされたか寢ほけたか、どこへかつ走るやい。

五郎　知らずや朝比奈。工藤左衛門祐經、大頭殿から預りの經若をつん逃した落度によつて、百日の閉門と聞く。もし、祐經、氣欝して勞咳でも煩つてくたばると、年來の大望が無になる。よつて、時致親の形見の逆澤瀉の鎧をひつかけ、工藤が館へ踏込んで、生つ首をひつこ拔いて、未來の河津へ年玉にすべいと駈出すが、朝比奈、ナゝ、なせおつ留めたやい。

朝比奈　扨こそ、無性に駈出すは、碌なことぢやあんまいと、おつ留めたが、兄イ。討たは共にと言交した兄アを出しぬいて、獨り手柄をして手向けちやア、未來の河津が受取らない。朝比奈が悪い事は云はない。いゝ子だ、留まれ。應つと云つて留まつて呉れたならば、近頃忝なすびの香の物を入れた鰒汁だもさ。

五郎　愚かや朝比奈。明日の命も知れぬ科人の祐經を、今ぶつた切らずに猶豫がなるべいか。日頃の洒落とは違ふ。邪魔をひろぐと頬の酒林をかつ摑んで、箱根の山から新吉原の大文字屋の臺所迄はふり投げるぞ。

朝比奈　おやつかな。にしやア、俺を南瓜だと思ふか。わがものに狂ふをうつちやつて置いちやア、兄アへたゝない。應つと云つて留まればよし、だゞをおこすと、とつつらまへて、もゝんぢいに喰はつせるぞ。

五郎　推參な。うぬ、邪魔をひろぐと、持つたる鎧でぶつて／＼ぶつ殺すが、なくならないかやい。

朝比奈　面白い。然らば正月遊びの寶引きの代り、一番草摺引きと、つんでべいわやい。

〽其時時致、まづから／＼と打笑ひ、愚かや朝比奈金剛力を出すとも、やわか五郎が動かんやと、ふんじかつて立つたりける。朝比奈も幸ひに、五郎が力をためさんと草摺をかつ摑んで。

ありや／＼／＼。

〽こりや／＼／＼。

時致、ちつとも動かばこそ。
〽さしもの朝比奈、大汗かき、額の筋
が胴へさがり、
脚の力が拳に廻り、
〽荒れたる骨は巖の如く、九丈の藤葛、
松をからんで木枯に、もまれて立つ
たる如くにて。
(ト鼓の合方にて花道より引臺にて舞臺
へ來て、)
〽草摺三枚引きちぎつて、左右へばつ
と退いたるは、すさまじかりける次
第なり。
(ト段切にて、兩人思入れする。トどんど
んにて向うより、梶原、裸身に鎧を着て後
に紅梅の枝を差し、馬に乗り、平榮平馬
之丞御所の黒鬮五侍一、二、甲斐〳〵し
き形にて附き、東の花道より、富樫、半
切小手脇當にて、軍兵大勢連れて出る。)

梶原　ヤイ、朝比奈、時致。確かに聞け、判官殿が箱根權現へ納めた友切丸がなくなつた。兼て曾我兄弟心をかけるとあれば、朝比奈とうなづいて時致が盗んだに極まつた。よつて討手として梶原源太景季。

富樫　富樫左衛門國秀が、發向した。

梶原　時致、朝比奈。尋常に繩を。

皆々　かゝれやい。

朝比奈　イヤ推參な毒蟲めら。惡くそばえると、片つばしからはり殺し。

五郎　死人の山をつくが、

朝比奈　五郎　なくならないかやい。

梶原　イヤ、仇口な童め。ものな云はせそ。ぶつて捕れやい。

朝比奈　五郎　どつこい。

男伊達初買曾我

（ト皆々、立廻りにて留まる。）

八幡　待てやい。
鬼王

皆々　待てとは。

梶原　シャア、箱根權現の神前に、怪したる童めらがけつかるが、そも先づうぬらは。

富樫　何奴だやい。

鬼王　輕少ながら、曾我の五郎時致に濃紫の由縁ある、鬼王新左衞門が友切丸を申しおろして立退く所。

八幡　組留めべいと五郎丸に、實珊瑚珠の赤つ面は八幡の三郎。二人あがいて、刀袋ひつちぎつて見たれば眞赤な贋物。

鬼王　正眞の友切丸は疾うになくなつたつ。全く時致が仕業では、

八幡
鬼王　おりないぞ。

梶原　扨は、友切丸の盗人は外にあるか。然らば五郎めが命は助けておとなしく。

富樫　尋常に別れべい。

朝比奈　時致。

五郎　朝比奈。

鬼王　八幡。

八幡　鬼王。

梶原　富樫。

富樫　梶原。

鬼王　春永に。

八幡　いがみ合ふべい。

朝比奈　先づそれ迄は。

皆々　さらば。

（ト謠にて、時致軍兵を積重ね、其上に上り、朝比奈鎧を引合せ、梶原富樫兩方につつ立ち、大勢兩方へ別れ、上に鬼王八幡組留めの見えになり、皆々並よく並ぶ。若にて。）

幕

男伊達初買曾我

二

一 町人の子鶴松　與惣次
一 樽拾ひ長吉　吉次
一 亭主長八　段五郎
一 女房お春　仁作
一 豆藏屋彦六　又藏
一 紫の七　十四郎
一 傾城奥州　菊次郎
一 髪結源兵衛　助五郎
一 女淨瑠璃お染　忠五郎
一 同　お色　傳藏
一 一時清兵衛　七五郎
一 稻妻の權　平藏
一 かめん坊平左衛門　五郎三
一 乳母おまん　市松
一 曾我の十郎　七三郎
一 髪結由兵衛　廣次
一 若い衆　大勢

本舞臺。髪結床二軒並びある。一軒の髪結床の障子には、廣次と富十郎が紋を比翼につけ、一軒には助五郎と菊次郎が紋を比翼につけあり。髪結床の傍より兩國橋を筋違ひに見て、石垣の上り場あり。兩國橋懸りの方、茶屋の二階の體、幕の中より見世物の鳴物にて幕開く。

（ト眞中に莚を敷き、彦六豆藏の形にて、品玉の道具を前に置き、かしこまりゐる。女淨瑠璃お色振袖の女太夫の形にて淨瑠璃本を前に置き、女淨瑠璃お染留袖の女太夫の形にて、三絃を彈きゐる。一時清兵衛勢の形、其他仕出し大勢見物してゐる。）

彦六　相變らぬ不調法をお目にかけまして御座ります。扨、この後は聲色物眞似で御座ります。それ過ぎましては、女太夫お色お染連節の淨瑠璃で御座ります。一錢づつお投げ下されませ〳〵。

（トお色笊を持つて見物へ廻る。見物一錢づつ入れる。この中、お染、合方を彈く。この合方にて向うより、紫の七、羽織着流し大小にて顔に痣あり。撫附の鬘、丸頭巾にて、奴草履取を連れ出る。花道にて、）

紫の七　四五介。奥州が來るを待合せる間、女太夫が淨瑠璃を聞かう。こつちへ來い。

奴　ナイ〳〵。

（ト兩人本舞臺へ來て、長床几に腰をかけゐる。亭主、茶を持ち來る。彦六この中、お色が笊の錢を出し、算へて見て、）

彦六　これ程のお立合から、たつた廿四文御座ります。これでは聲色も始められませぬ。もう少しで御座ります。

お投げなされて下さりませ。
（ト見物錢を投げる。彦六拾ひ算へて、）
漸く三十二文になりました。これでは水も呑まれませぬが、御退屈にも御座りませう。聲色を始めませう。
（とお色、お染、三絃彈きかけ、彦六物眞似する。見物ほめる。）
扨これから女太夫が連節で御座ります。先づ前狂言に笊を廻しませう。
（ト見物へ笊を持つて廻る。見物錢を入れる。彦六かぞへ見て、）
漸く二十五文ござります。これでは女太夫が淨瑠璃を語る張合がござりませぬ。もう少しの事でござります。お投げなされて下さりませ〳〵。これはきついものだ。これ程のお立合に錢を持つたお方はないさうな。これでは女太夫が淨瑠璃は初められませぬがようござりますか。

紫の七　コリヤ、四五介。とらせいやい。
奴　ナイ〳〵。（ト腰に挾んだる錢を二三十ぬいてやる。）
彦六　ハイ〳〵。（ト拾ひ算へて、）エヽ有難い。これで六十四文になつた。さらばこれからお色お染が淨瑠璃の始まり、左樣にお心得なされませう。東西〳〵。
（トお色お染、三絃彈き、淨瑠璃になる。彦六これに合はせ、種々をかしみあり。淨璃瑠終ると見物ほめる。一時淸兵衞懷より木櫛を出し、）
一時淸兵衞　コレお色。此處へおぢや。
お色　アイ〳〵。（ト傍へ來る。）
淸兵衞　こりやこれ、今流行る利休型の木櫛だが、蒔繪が面白い。さしやれ。
お色　アイ、これは節々お忝う御座ります。
（ト櫛を取る所を、お色が手を一時淸兵衞取り、惚れたこなし。お色恥しき思入れして、二人うぢ〳〵思入れ。紫の七これを見てむつとして、）
紫の七　四五介。烏目を一筋おこせ。
奴　ナイ〳〵。
（ト錢を百やる。紫の七、錢を鼻錢に包み、）
紫の七　コレ娘。此處へ來う。
お色　アイ〳〵。
（ト一時淸兵衞を振切つて、紫の七傍へ來る。一時淸兵衞、むつと思入れする。紫の七、お色が顏を見て、）
紫の七　傍で見てもよい器量だ。幾歲になる。
お色　わつちや十六で御座ります。
紫の七　十六、アヽうまい盛りだ。コレ身は紫の七と云つて、吉原の奧州が獨り客だが、今日は奧州を連れて惠方參りといふ趣向で出かけたが、追付け奧

州が舟で來るを待合する間、わが淨瑠璃を聞いてゐるが、さりとはわれが器量も可愛いらしければ、聲も可愛いらしい。身共いかうわれを贔負になつた。それで花をやるぞ。

お色　それはお有難う御座りやす。

紫の七　コレ、百あるぞ。

お色　アイ〳〵。

（ト錢を取る所を、紫の七、お色が手を取つて、）

紫の七　十六だな。

（ト濡れかゝる。お色、恥しき思入れする。一時淸兵衞、むつとして紫の七を突退ける。）

こいつは、なぜ突退けた。

淸兵衞　このお武士には、から、見たくもない。なんだ、目の傍は痣だらけで、汁粉餠の化物を見る樣な面で、えいかと思つて、女太夫へ甘氣つくとは太い奴だ。置きにしろ。なんのこつた。やい、コリヤ又。

紫の七　イヤおのれは、武士に向つて推參な。首切の素町人めが。

（ト反を打つ。彦六、留めて、）

彦六　申し〳〵旦那、此處で喧嘩なされては私が商賣が微塵になります。それぢやお前、女太夫を贔負の引倒しといふもので御座ります。平に御勘忍なされませ〳〵。

紫の七　いかさま。あいつが樣な下司を相手にするは癩と棒打だ。

淸兵衞　イヤ、こいつは。癩と棒打とはなんのこつた。

彦六　コレ〳〵、旦那。ハテ扨、お前でもない。それぢやお色を可愛いがらしやる甲斐はないといふものだ。平に勘忍なされませ〳〵。

淸兵衞　嫌だ〳〵。聞かない〳〵。新五左め。うぬア、俺を誰だと思ふ。姥の源兵衞が子分の一時淸兵衞と云つちや、つがもない、安い勢ぢやアないぞ。忌々しい。

（ト押肌ぬいで思入れ。お染、一時淸兵衞にすがつて、）

お染　コリヤ、ハテ、お色ばかりが女ではあるまいし、わつちも年增でこそあれ、藝者ぢやわいなア。わつちを贔負して下さんせいなア、（トしなだれる。）

淸兵衞　エヽ、こしたゝるい。置きやアがれ。（ト突退ける。）

お染　ハテ、さう云はんすないなア。

（ト取付く。）

淸兵衞　エヽ、うるさい奴だ。寄りやアがるな。（ト突退け、）新五左め。覺えてけつかれ。おかへ廻りがおいとしい。コリヤ又なんのこつた。忌々しい。碌の松明とほしめが。（ト惡態いひ乍ら、橋

を渡りはひる。)

紫の七　ハテ扨、憎い下司めだ。

彥六　いえモウ、おへぬ手合で御座ります。よく御勘忍なされました。御機嫌直しに聲色と出ませう。サア子供衆頼むぞ。

(トお色お染、三絃彈く。トこの唄を借つて、曾我の十郎、袴大小一文字の編笠にて、小さき松の植木を、根を紙にて包み持つて出る。後より、稻妻の權、木綿やつし手拭頰冠にて、曾我の十郎思入れして、懷手にてぶら〳〵出る。花道にて、)

稻妻の權　お侍樣。えい松を買はつしやりましたな。

(ト十郎傍へ寄る。)

十郎　あそこの植木店で買つて來たが、附けばよいが。

(ト稻妻の權、十郎が印籠へ手をやらうとする。十郎思入れ。稻妻の權、ちやつと後へしさり外見してゐる。)

ハテこの男は柳原から俺を附けて來たが、氣味の惡い男ではあるわい。

權　コレお武士。俺や橋向う迄用があるによつて、お身樣の後から來たが、氣味の惡い男だとはなんのこつた。俺や巾着切ぢやないぞよ。

十郎　ハテ、巾着切ぢやといひはせぬわい。

權　又云つて見たがえい。それこそおしいめに會はせるわい。なんだ、一文字の編笠で礫場の葬禮戾りを見る樣に忌々しいお武士だ。

(ト十郎、思入れして、)

十郎　ヲヽ、氣味の惡い男ぢやと云つたが、腹が立つなら勘忍し給へ〳〵。

(ト本舞臺へ行く。)

權　なんのこつたい。忌々しい。

(ト後から付いて行く。十郎、紫の七が腰かけてゐる處へ行て、)

十郎　チト、御許されませう。

紫の七　これへおかけなされませう。

(ト少し寄り。)

十郎　矢張ござりませい。(ト紫の七傍へ腰かける。)

紫の七　扨、女太夫がよう語ります。

十郎　サア、きつい評判で御座ります。

紫の七　コレ四五介。烏目をやつて、モツト語らせろやい。

奴　ナイ〳〵。(ト又錢をやり、)サア、旦那のお望み、早く語らせろ。

(ト彥六戴き、)

彥六　ハイ〳〵、これは有難う御座ります。サア〳〵、早く語つた〳〵。東西〳〵。

(トお色お染、三絃彈き、淨瑠璃少し語る中、稻妻の權、十郎と紫の七が印籠を切つて奧へはひる。淨瑠璃終ると皆々ほめ

ろ。)
さらば、合の狂言に笊を廻しませう。
(ト見物へ持つて廻る。)
◇　又笊か。エヽうるさい。橋向うへ行つて、女角力見ようぢやないか。
△　それがよい。サア／＼ござれ／＼。
(ト橋を渡つて、皆々はひる。)
彦　六　笊を見ると逃げる。日高たさうな。こゝはすつきと銭にならない處だ。橋向うへ場換へをすべい。
お色
お染　それがよからうわいなア。
彦　六　サア來給へ／＼。
(ト三人、三絃品玉の道具笊莚を持ちはひる。)
紫の七　四五介。サテ奥州が遅いが、かうしてもゐられまい。回向院へ往つて、淡雪で一杯飲みかけう。
奴　それがよう御座りませう。
十　郎　然らば、拙者も藥研堀の不動へ参詣致しませう。
紫の七　左様なされませ。
(ト十郎、花道へ行く。紫の七、衣裳の塵を拂ふ思入れして、腰の廻りを撫で、)
ヤア、印籠を切られた。
奴　ハテ、それは。
(ト紫の七、思入れして、)
紫の七　コレ／＼、お侍。待たつせい。
十　郎　なんぞ御用が御座りますか。
紫の七　一寸此處へ御座りませい。(ト舞臺へ呼ぶ。)
十　郎　なんの用で御座ります。(ト傍へ寄る。紫の七せいて、)
紫の七　出さつしやい。
十　郎　出せとは何を出します。
紫の七　今淨瑠璃を聞く中に、ちよつきりとやつた身が印籠を。
十　郎　コレ／＼お侍。麁相仰しやるな。
紫の七　イヤサ爭ふと爲にならぬぞ。
(トきつといふ。)
十　郎　これは近頃迷惑な。(ト腰を探つて、)ヤア、俺も印籠を切られた。扨は今俺をつけてうせた巾着切が切りをつたか。エヽ油斷して殘念な。
紫の七　扨は其處許も印籠を切られさつしやれたか。
十　郎　サア、柳原から巾着切につけられて、隨分油斷をいたさずにゐましたが、淨瑠璃を聞く中につい切られました。
紫の七　ハテ扨、それは御同前に殘念な事をしました。イヤ、お侍へ麁忽な事を申しました。眞平、御赦されて下されませう。
十　郎　イヤ、お心得違ひのあるまい物でも御座らぬ。少しも苦しう御座りませぬ。拙者は大切な親の形見の印籠で御座りますに依つて、どうぞ取返した

う御座ります。何とよい御思案は御座りますまいか。

紫の七　いやモウ、あいつらが手へ渡つたら、中々出ることでは御座らぬが、それ共に、身共も祕藏の印籠で御座るゆゑ、詮議せうと思ひます。シテ其許の印籠はどの樣な模樣で御座る。

十　郎　拙者が印籠は、群衡の蒔繪に、青貝で庵の中に木瓜の紋が御座ります。

紫の七　ムヽ、群衡の蒔繪に、庵の内に木瓜の紋とは、其許には、曾我の十郎祐成殿では。

十　郎　アいや、コレ。（ト邊りへ思入れする。）

紫の七　イヤ誰も居りませぬ。其許には、當處へは何ぞ御用でも有つて御座りましたか。

十　郎　拙者は尋ねる者が。（ト云はうとして、）オヽ兼て、お聞きも及ばれませうが、大磯の虎と深う申し交して居りますが、虎が拙者へ心中を立てまして、他のお客を麁末に致します故、親方も持餘して、當地の吉原へ鞍替へ致させましたが、虎が住馴れた大磯を放れ、馴染みの拙者に別れましたを悲しみまして、勞症の樣に煩うて、漸く快氣を致しましたが、大病のあがり故か性根が拔けまして、阿房になつて、漸く勤めてをると申す沙汰を聞きました故、不便に存じ、會ひませうと存じて、この間當地へ參つて、逗留致してをります。

紫の七　それは御親切な事で御座ります。身どもも、三浦の奧州を揚詰めに致して、廓を宿にしてゐます故、虎にも度々會ひます。成程、餘程阿房に見えます。名代の虎故、いかう流行ます。案じさつしやる事は御座りませぬ。

十　郎　それはせめてもの儀で御座ります。時に拙者は、今の巾着切めを搜しに橋向うへ參らうと存じます。もし其許樣も捕へさつしやれたなら、只今申した群衡に庵に木瓜の印籠を持つて居ますか、お心をつけられて下されませい。

紫の七　心得ました。

十　郎　お頼み申します。

（ト見世物の合方にて十郎奧へはひる。橋臺の際より、かめん坊平左衛門、船頭にて舟を付ける。船の中に、傾城奧州女郎綿帽子にて、お春揚屋女房の形、長八亭主の形にて、遣手若い者を連れて舟より上る。）

平左衛門　サア〳〵、舟がつきましたぞ。

長　八　おい〳〵、歩を丈夫に頼むぞ。

平　左　合點です。（ト歩を渡し、）サア、靜かに上らつしやりませ。

遣手　サア奧州樣、草履を召しませ。
（ト草履を歩の上へ直す。）
奧州　これは慮外で御座んす。わしやもう怖うてならぬ。賴みやすぞえ。
長八　わしが腰をとらまへろ。怖い事はない。靜かに〱。
奧州　アイ〱。
（ト皆々、舟から上がる。この中、紫の七思案しながらそろ〱花道へ行く。お春見付けて、）
お春　ヤア、あそこへむら樣が御座んすわいなア。
奧州 長八　ほんになア。モシ〱。
（ト手を叩く。紫の七振返り見て、）
紫の七　ヤア奧州、今來たか〱。（ト嬉しがつて駈けて來る。）
奧州　さぞお待兼ねで御座んせう。
紫の七　待兼ねた段ぢやない。大方、お主が髮と、禿が髮に隙が入つたであらう。コリヤ禿はなぜ連れて來ぬ。
奧州　イエ子供を連れては目に立つ故、子供は來たがりやんしたを、叱つて連れて來やんせぬが、それは〱わたしが支度が出來兼ねてな。マア聞かんせ。わしらは常が素足で足袋を持たぬによつて、俄かに淺草へ足袋を買ひにやる。さうして又、綿帽子がないによつて、吉原から大坂町迄、瀨川綿を買ひにやる。さうしたれば、又雪駄が無いに依つて、堺町迄買ひにやる。それからそれを買つて來る間の遲さといふものが、さぞ、お前の待兼ねさんせうと思うて、氣が急いたとこそいへ、モウ〱ほんに、ぬし達御夫婦の知つてゐさんす通り、大體もがいたことぢやないわいなア。
長八　ほんに、奧州樣の、お前の待兼ねで叱らつしやらうかと、私の內でもそればつかり云つて御座りましたが、ほんにわしも揚屋商賣をするが、お前のやうな、女郎衆に大事がられる客衆を見た事がない。
お春　ほんに主樣の樣に、女郎樣方に可愛いがられさんすお客樣は少いわいなア。
紫の七　面妖、俺には綺がつくサ。
平左　綺がつく筈、お前の頰には痣があるもの。
紫の七　イヤ大事ない。身共はこの痣で紫の七と可愛らしい異名を付けられて、女郎に惚れらるゝわい。
長八　コレ。（ト叱る。）
平左　ヘエ、えいかと思つて。
長八　コレ。（ト思入れする。）
平左　長八樣。歸りにも乘らつしやりますか。聞いて下さりませ。
長八　ヲヽ奧州樣。歸りも舟かえ。

奥州　いえ〳〵、わしやモウ船は怖うてならぬ。歸りは駕籠にしやんせうわいな。

平左　そんならわしや歸りますべい。

紫の七　大儀だ。一杯飲め。（ト花紙袋から一分を出しやる。）

平左　ハイ、これはお有難う御座ります。ハヽヽヽ、大盡樣。わしや堀の若い者仲間でも、かめんぼう平左衞門と云つちやア、廓へのめり込む地廻り共も、立てゝ奥れる男で御座ります。もし、お前へ突つかゝる奴があらば、わしに仰しやりませ。直に締めてあげます。へヽヽ、奥州樣。御機嫌ようお遊びなされませ。

奥州　アイ、御大儀え。

平左　ハイ、長八樣。祝ひにそこらへ行つて一杯引つかけますべい。

長八　ヲヽ、大儀々々。

（ト平左衞門、橋を渡つてはひる。）

奥州　さうして、これからどこへ行くのぢやえ。

お春　マア、回向院へお參りなさんせいなア。

奥州　ほんに、それがよからう。紫樣さうせうかえ。

紫の七　ハテ君を慰めに御 を勸めたのだ。儘にし給へ〳〵。

奥州　アイ〳〵。そんなら回向院へ參りやせうわいなア。

長八　サア、回向院へ押せ〳〵〳〵。

（ト見世物の鳴物になる。奥州、お春、紫の七、長八、奥へはひる。トおてゝこてんの唄になり、二軒の髮結床、一度に上障子上がると、西手の床に、由兵衞、髮結の形にて侍の月代をそつてゐる。東手の床に、源兵衞、髮結の形にて町人の月代してゐる。）

由兵衞　源兵衞。

源兵衞　なんだ。

由兵衞　おらが旦那の月代はお侍程あつて、かたいと云つたものぢやない。剃刀が松坂踊りをするわい。

源兵衞　おらが旦那は蒟蒻天窓で雲脂だらけで、剃刀が白和の樣になるわい。

由兵衞　揉まつしやりませ。

侍　おい〳〵。（トよむ。）

源兵衞　お前も、もまつせい。

町人　アイ〳〵。

（トよむ。由兵衞、源兵衞、剃刀合はせる。侍、町人、もんで直ろ。兩人、剃刀を手合はして剃りにかゝる。）

侍　由兵衞。お身の床の障子に轡十文字と矢車の紋をつけてあるが、廣次と富十郎が贔負か。

由兵衞　アイ、矢車の紋は、ちつとわしが譯のある女の紋で御座りますが、轡

十文字は反次贔負でつけます。

侍　そんならお身は廣次贔負か。

由兵衛　きつい贔負で御座ります。

侍　おれもきつい廣次贔負だわい。

由兵衛　お前も廣次贔負か。そんなら念を入れて剃つて上げべい。

町人　ほんに源兵衛。貴樣の床の障子には結綿と丸に仙の字、そんなら助五郎と菊次郎が贔負ぢやの。

源兵衛　アイ、結綿の紋はわしが傍惚に惚れてゐる女の紋ですが、丸に仙の字は助五郎贔負でつけます。

町人　貴樣は助五郎贔負か。

源兵衛　きつい贔負ですが、お前も贔負か。

町人　いんにやおらァ廣次贔負だ。

（ト源兵衛むつとして、）

源兵衛　道理で蒟蒻天窓だ。

（ト腹立て乍ら剃る。由兵衛むつとして、）

由兵衛　源兵衛。廣次贔負はナゼ蒟蒻頭だ。

源兵衛　ハテ廣次は弱いによつて、廣次贔負を蒟蒻頭だと云つたが、それがどうした。

由兵衛　どこに廣次が弱い。去年顔見世の股野河津の角力を見ないか。廣次が助五郎を場中へ投げたわい。

源兵衛　アリャ狂言の仕組みだ。魚楽は強いと云つちや嘘はない。俺や助と心安い。昨夜も遊びに行つたれば、俺を羽子板の上へ乗せて、座敷中を持つて廻つた。アノ眞似を廣次がなるものか。アヽつがもない。

（ト云ひ乍ら剃る。町人、痛がる。）

由兵衛　云ふな。廣次が力はそんなこつちやない。おらも十町と心安くつて、今朝も行つたが、馬を掌へ乗せて座敷中を持つて廻つて見せた。アノ眞似が助五郎が生れ代つてもなるものかい。つがもない。

（ト無性に剃る。侍痛がる。）

源兵衛　馬鹿をいへ。馬が掌へ乗るものか。

由兵衛　そんなら羽子板へも人が乗るものか。

源兵衛　そりや力で乗せるわい。

由兵衛　馬も力で乗せるわい。

（ト互に爭ひ乍ら剃る。侍、町人、痛がる思入れ。この中に、由兵衛、侍の片鬢剃落す。源兵衛町人の片眉を剃落す。）

侍　コレ／＼、われが剃るは、痛くつて／＼どうもならぬ。

町人　おらも月代がぴり／＼する。モウ清剃をせずともこれでえい／＼。

（ト侍町人思入れあつて、花道へはひる。）

由兵衛　ハヽヽヽ、口をきいてツイ侍の片鬢を剃落してやつた。

源兵衛　俺も片眉を剃落してやつた。

由兵衛　いかいたはけ。ハヽヽヽ。

源兵衛
（トてんつくになり、向うより樽拾ひ長吉酒屋の御用の形、徳利数多提げ、蒟蒻の田樂の皿鉢を片手に持ち、御用御座りますか〳〵と、云ひながら出て來る。）

源兵衛　由坊。肥前屋の御用が來た。十六文づつだしつこをすべい。

由兵衛　いかさま、今朝梅堀を出がけに引つかけたが、モウ醒めた。よかんべい。

源兵衛　御用々々。

長吉　アイ〳〵。

源兵衛　その酒はどこへ持つて行く。

長吉　見世物芝居へ持つて行きます。

源兵衛　見世物芝居へは遲くつてもえい。マアこつちへ置いてゆけ。

長吉　いえ〳〵。親方樣の、髪結の源兵衛には、いかい事酒の貸があるが、大晦日にも留守を使つて一文もおこしをらぬから、モウ重ねて八文でも貸すなと言付けさつしやれたに依つて、行く事はなりませぬ。

源兵衛　この樽拾ひめは、源兵衛に業をさらさせる。忌々しい餓鬼めだ。

（ト長吉をはり倒す。長吉こける拍子に、蒟蒻の田樂の皿鉢二ツに割れる。源兵衛長吉を蹴る所を、由兵衛駈寄つて留める。）

由兵衛　コレ〳〵、源兵衛。大人しくもない。子供を痛めるといふ事があるものかい。

源兵衛　デモ、餘り忌々しい餓鬼めだ。

（ト長吉泣いてゐる。）

由兵衛　長吉。どこぞ痛むか。泣くものぢやない。泣くな〳〵。

長吉　いゝえ痛められてもよう御座りますが、酒はこぼされ、皿鉢は割られて、親方樣に折檻にあふが怖さに、それで泣きますわいなう。（ト泣く。）

由兵衛　えい〳〵、泣くな。おれが親方殿に折檻にあはぬやうにしてやるべい。待て。（ト床の箱から錢を取つて來て、）コレ、この皿鉢は、十二文では賣る。ソレ十二文。蒟蒻の田樂二串四文。酒が卅二文。サア、これ遣るから持つて行け。（トやる。）

長吉　アイ、お忝うござります。（ト戴く。）

源兵衛　コレ由坊。埒もない。あいつに遣るより蕎麥切でも買つて喰つたがえい。費な餓鬼め、よこしやアがれ。

（ト取りにかゝらうとする。）

由兵衛　コレ〳〵、源坊。ハテ扨可哀さうに、あれも人の子だわいの。初雪やこれも人の子樽拾ひといふ發句もある。コレ、早く往け〳〵。

長吉　アイ〳〵。御用御座りますか。

御用御座りますか。(ト云ひ乍ら向うへはひろ。)

源兵衛　エヽ、あつたら錢を溝へうつちやつた樣なものだ。

由兵衛　ハテ、贔屓ばかり男ぢやない。ちつと慈悲もしたがえいわい。

(ト唄になる。兩人床へ上り、剃刀を研ぐ。向うよりおまん乳母にて、鶴松町人の子の形にて、おまん手を引き、日傘をさしかけ出る。源兵衛が床へ來て、)

おまん　源兵衛樣。

(ト源兵衛、顔をふり上げて見て、)

源兵衛　お乳母殿か。イヤ、坊樣お出でか。

鶴松　髮結殿。月代を剃つてくれなさい。

源兵衛　これはおとなしい。イツモ月代を嫌がる旦那が、剃つて呉れろとは見上げたわい。

おまん　なんのい。あれでも又剃りかゝると嫌ぢや〳〵と泣き出しやす。モウ腕白でなるこつちやないわいな。

源兵衛　腕白でも、源兵衛おぢイがよく剃るに依つて、泣くこつちやないヨ。

鶴松　おらア泣かない。強いヨ。(ト睨む。)

源兵衛　強い〳〵。金平だ。サアお乳母殿。いつもの樣に抱いて、俺が膝の上へ腰をかけ給へ。

おまん　お前の膝が痛まうと思うて氣の毒ぢやわいな。

源兵衛　膝が痛んでも拉げても、大事ない。掛け給へ。

(トおまん、鶴松を抱いて、源兵衛膝の上へ腰を掛ける。)

源兵衛　遠慮なしにもつと掛け給へ。

おまん　アイ重うはないかえ。

源兵衛　重くつても心地よし。(ト剃刀を取つて、)この子の月代は湯にも及ばぬ。唾で揉むべい。(ト揉んで剃りながら、)唾といふ奴がなんにもかにも調法な奴だ。

おまん　口をきいて切らんすな。あぶないぞえ。

源兵衛　ほんに貴樣を膝の上に乘せてゐれば、氣が上ずつて剃刀が震へる。

(トこの中、由兵衛剃刀を研ぎながら見て思入れして、剃刀を砥より他の處へやつて、がつくりとする事あり。源兵衛、おまんが懷へ手を入れたり、囁いたり、頰ずりをしたり、種々あり。おまんが所を鶴松見て、)

鶴松　ほうやほう、〳〵。

(ト囃す。兩人氣の毒がり、)

おまん　コレ〳〵、鶴松殿。よいお子ぢや。内へ御座つてお母樣に何にも仰しやるな。餅買つて進ぜるぞえ。

鶴松　羊羮を呉れるならいふまい。

おまん　羊羹上げう〳〵。

源兵衛　モウこの子さへ強請(ゆすり)を覺えた。

由兵衛　ほうやほう、〳〵。

（ト兩人、悔(ひつく)りしておまん恥かしがる。）

源兵衛　コレ由坊。蕎麥を振舞はうか。

由兵衛　おらァ羊羹が喰ひたい。

源兵衛　拜む〳〵。

由兵衛　コレ、お乳母殿。源兵衛が貴樣と乳繰(ちゝく)つてゐる故、姥(うば)の源兵衛と異名を付けられて、世間に隱れもない仲だが、モウえい加減にして止め給へ。源兵衛はよそ〳〵に色があるぞ。

おまん　エヽ、そりやどこに色があるえ。

源兵衛　コレ、つがもない。アノ惡口者の云ふ事をほんにするな。由兵衛。惡い藝だ〳〵。

おまん　由兵衛樣。そりやほんの事かえ。

由兵衛　貴樣はまだ知らないか。大磯から吉原へ鞍替へをした虎と、ちん〳〵鴨の足だわい。

おまん　そんなら、アノ、エヽこな樣は。

（ト源兵衛が胸座(むなぐら)取る。）

源兵衛　コレ〳〵、ありやたきつけて慰むのだ。大誓文、吉原へは一昨日(をとゝひ)始めてやきばの歸りに見物に行つた。虎とやら猫とやら見たこともないわい。

おまん　默(だま)らんせ。エヽ、ほんにコレわしや、こな樣に、ツイ騙されて言交して、世帶でも持つ事か、乳母奉公に出されて、其上僅か取る切米(まい)をもせがみ取られて、苦勞苦患(げん)も、今迄は手慰みが過ぎて術(じゆつ)ながらんすとばつかり思うて、どこぞでは意見を云はうと思うてゐたが、扨はわしが身の皮を剝いで女郎狂ひをさんすか。モウ〳〵、ほんに胴慾なと云はうか、情ないと云はうか。エヽ腹の立つ。

（ト源兵衛が肩へ喰付く。）

源兵衛　コレ〳〵痛いわい〳〵。

（ト思入れする。橋を渡つて傾城奥州、女房お春、紫の七、亭主長八、遣手、若い衆出る。）

長八　サア〳〵、又これから藥研堀の不動樣へお參りなされませ。

紫の七　それがよからう。君どうぢや。

奥州　ほんに音に聞いた不動樣ぢや。參りやせうわいなァ。

（ト由兵衛と顏見合せ、互に物云はうとして思入れする。奥州思入れして、）

もし紫樣。わしやさつきに來る時、舟が怖うて痞(つかへ)が起つたわいな。それが今に納らいで、いかう術(じゆつ)なう御座んすによつて、此處(こゝ)に暫く休んでゐたう御座んす。わしや、藥研堀の不動樣へ大願をかけて置きやんしたによつて、お前、わしが代參りに皆を連れて一寸參つて下さんせ。（ト痞の起つたこなし。）

紫の七　それは痞氣とは氣の毒な。長は。そんなら俺ばかり參つて來ような。

長　八　いかさま。あなたは痞氣なら要らぬものでござります。ちつとの間此處に休ませまして置きませう。

お　春　それがようござんす。もしえ、奥州樣。お前の名代にわしがとつくりと拜んで參りませう。さうして御籤を取つて來やんすぞえ。

奥　州　アイ頼みんすぞえ。

紫の七　然らば一寸お主が名代に拜んで來よう。若い者共。サア來い〳〵。

長　八　そんなら一寸此處を貸して下され。サア〳〵、お出でなされませ。

由兵衞　畏りました。

長　八　そんならお頼み申します。

（ト云ひ乍ら皆々向うへはひる。）

奥　州　御無心ながら、ちつとの間、此處をお貸しなさんせえ。

由兵衞　お安い事。お休みなさい。お前はお痞氣なら背中を揉んで上げうか。

奥　州　それは忝う御座んす。そんなら慮外乍らお頼み申しやんせう。

由兵衞　なんの慮外。御遠慮なさるゝな。療治して上げう。

（ト背中を揉み、奥州が懐へ手をやり、）

オヽよつぽど痞へた。

（ト顏見合せ、思入れして噂合ふ。源兵衞此うち奥州を見て惚れてゐる思入れ、種種あり。むつとして、）

源兵衞　ほうやほう、〳〵。

（ト兩人こなし。奥州恥かしき思入れ。）

由兵衞　コレ源坊。蕎麥を振舞はうか。

源兵衞　おらァ羊羮がえい。

由兵衞　拜む〳〵。

源兵衞　コレ小梅殿。貴樣は由兵衞故につらい勤めの身になつてごんすさうなが、えい加減にしてやめ給へ。由兵衞はよそ〳〵に色があるぞ。

奥　州　エヽよそに色があるえ。

由兵衞　コレ〳〵、ありや惡口だ。コレ源坊。惡い藝だ〳〵。

奥　州　そりやマア眞の事かえ。

源兵衞　貴樣は知らないが、世間で梅の由兵衞は二人の女房と唄に謳ふわい。ほんに惡性者に欺されて憂き勤めをせうより、おらが樣な心中のえい男と、なァ。

（ト思入れする。乳母おまん、此うちむつとして、）

おまん　コレ、こりやどうぢや。一昨日始めて吉原へ往つたと云うた者が、女郎に近付きがあるものか。さうして、マア、わしが見る前で、何ぢや、いやらしいことを云うて、エヽ憎らしい、大體にしておくこつちやない。こつち へ來や〳〵。

(ト源兵衛が胸座を取つて引きずつて行く。)

源兵衛　コレ〳〵、床を明けちや行かれない。馬鹿な者だ。放せ〳〵。

おまん　いゝや、此處には置かぬ。來や〳〵。

鶴松　コレ乳母。喧嘩をするな。

源兵衛　眞に喧嘩をするなやい。

おまん　何をだまりや。(ト源兵衛が鼻を摘まんで引きずつて行く。)

源兵衛　鼻が痛む、鼻息がならぬ。放せ〳〵。

(ト鼻聲にて、おまんに引きずられ、鶴松も共に奥へはひる。)

奥州　ようこな様は色を拵へたなう。

由兵衛　ハテ野暮な者だ。アリヤあいつがわれにたきつけて、堰かせるのだわい。マアよく思つて見ろ。一人の女房にさへ勤めをさせる程の貧乏で、二人の女房が持たれるものか。ツイ知れた理窟だわい。

奥州　さういはんすりや、成程聞えた事が御座んす。アノ源兵衛が、今の様に無い事をたきつけてわしとお前の仲を惡うして、さうしてわしを手に入れうといふ目算ぢや。テモ怖い男ではある。

由兵衛　そんならお主は、アノ源兵衛と近付きか。

奥州　さいなア。以前わしや小梅村にゐる、お前は梅堀に御座んして馴染んだ時、アノ源兵衛は源兵衛堀にゐて、度々わたしへ文を付けやんしたわいなア。

由兵衛　ハヽア、それで今の白づけだ。

奥州　アイ。さうしてマア今のアノ美しい乳母は、源兵衛と念頃でもしてゐやんすかえ。

由兵衛　サア、可愛いや、あの乳母が彼奴に欺されて裸にされるわい。

奥州　ハテ、それは笑止な。いやモウ女子といふ者はいかい阿房で、よう男に欺されるものぢや。わしも、お前故に勤めの身となつて。オヽ、いや、わしが此身になつたは、お前のお主様へ貢にさんす事ぢやによつてわしも本望ぢやが、夫婦別れ〳〵になつて寝ても覺めても戀しいゆかしいと、忘れる隙もなう思うてゐやんすが、この中お前から文を下さんして、何かお上の御詮議者の御用で、以前ござんした梅堀へござんして、晝の間は兩國へ出てゐさんすと、知らせの文の嬉しさ。どうぞ會ひたうて〳〵やう〳〵今日、アノ紫といふ客に頼んで惠方參りというて、連立つて來やんしたもお前に逢ひたさ。マア久振りで丈夫なお顔を見やん

して、嬉しう御座んす。さうしてマァその詮議者の御用とは、なんの詮議者で御座んすえ。

由兵衛　詮議者は義經公の若君經若君。

奥州　エヽ、アノ經若君樣を。

由兵衛　サア、經若殿を工藤左衛門祐經殿が、頼朝公から預つてツイ取逃した故、其落度によつて祐經殿は既に切腹する所を、三老の方々御訴訟なされ、當座の切腹は遁れたが、百日過ぎて經若殿が出ぬ時は、又切腹を言付けられる。元より祐經殿は御兄弟樣の親の敵、切腹させては年來の本意を失はつしやる故、そこで俺が經若殿を詮議の役を願つて、當所へ來たわい。

奥州　そんなら、アノお前は經若樣を見合ひ次第、搦取つて出さんすかえ。

由兵衛　サア、義經公の若君、お痛はしくは思へども、背に腹は替へられぬ。工藤殿を安穩にして置いて、御兄弟樣に本意を遂げさせませねばならぬ。忠臣の爲他の歎きも顧みられぬ。アノ源兵衛は、元より工藤殿の家來ゆゑ猶以て主の命を救はうと 俺と一緒に樣々に身をやつして經若殿を詮議するわい。

（ト奥州、思入れして、）

奥州　エヽ、憂き世ぢやなア。お前が經若樣を詮議の役とは、頼む木の下に。

（ト思入れあり。）

由兵衛　ヤ。

（トこなし。奥州もちやと思入れあり。）

奥州　サア、まだ御幼少な若君樣が此處やかしこに忍び隱れて、さぞ御苦勞をなされうかと、子を持つた身は身につまされてお痛はしう御座んす。これにつけてもわしが勤めに出る時、お前に預けた二人が中にもうけた虎松は、息災で成人しやんすか。わしや產落してそれから間もなう別れたによつて、顏も覺えやんせぬが、朝夕懷しうて忘れる隙も御座んせんが、さぞ大きうなりやんしたであらう。丈夫でゐやんすかえ。

（ト由兵衛思入れして、）

由兵衛　虎めが事は、お主にどうも言譯のない仕合せだて。

奥州　エヽ、そりやなぜに、死にでもしやんしたかえ。

由兵衛　イヤ、さういふ事ではないが、マア虎松が生れて間もなく、お主が勤めに出たによつて俺が預つて、どうも男の手で育て上げられぬによつて、早速古手の彌介といふ者に里子にやつたれば、聞きやい。二月も立たぬうちに彌介が何處へか宿替へをしをつて、行衞が知れぬわいの。

奥州　エヽ、そんなら虎松も連れて行きやんしたかえ。
由兵衛　サア、ぢやによつてその當座から處々を尋ねるが今に。
奥州　尋ね逢はしやんせぬか。
由兵衛　サア水子の時に別れてモウ八年になるによつて、成人の顏姿を知らねば、たとひ鼻の先に居ても知れぬ故、今に尋ね逢はぬわい。
（ト奥州、しやくり上げて大泣き。）
道理だ。俺も日頃われに會つてこの言譯をどうせうと苦にしてゐた。許しやれ〳〵。
（ト奥州が背中を撫で、涙を拭ひ思入れあり。花道にて。）
長吉　御用御座りますか〳〵。
（トいひ〳〵出る。兩人思入れする。長吉、味噌桶を肩にかけ、酢の茶碗を持つて出る。由兵衛が傍へ來て。）
由兵衛様。さき程はお忝う御座ります。
由兵衛　長吉か。なんと俺が錢をやつたで內の首尾がよからうが。
長吉　アイ、お前のお蔭で折檻にあひませぬ。
由兵衛　マア仕合せだ。
長吉　由兵衛様。御無心乍ら、伽羅の油をちつと下されませ。
由兵衛　伽羅の油を何にする。
長吉　皹へつけます。
由兵衛　皹の藥にするか。安い事だ。待て。（ト床の伽羅の油を取つて。）ドレドレ、とてもの事に俺が付けて呉れべい。足を出せ。
長吉　アイ、そんなら草鞋を取りませう。（ト草鞋を取りにかゝる。）
由兵衛　まだ碌に體も固まらぬものを、素足に草鞋を履いて朝から晚迄歩くものを、皹が切れる筈だ。ドレ、足を出せ。
長吉　これはお慮外に御座ります。
（ト足を出す。由兵衛見て。）
由兵衛　エヽこれは如何な。踵が八角十文字に割れてゐる。
長吉　アイ、どうも痛うて漸う歩きますわいの。
由兵衛　さうであらう。コレ、小梅。顏を上げてこれを見やれ。世間には酷い事もあるものだ。この子が皹を見やい。
（ト奥州、涙を拭ひながら見て。）
奥州　ほんにこれはいぢらしい。さうして、マア、見ればよい生付きな子ぢやが、酒屋の御用さうなが、まだ年端もゆかぬ者を奉公させるといふ。親達がよく〳〵貧しい故か。エヽ情ない。さぞ痛からう。藥ならようつけてやらしやんせえ。
由兵衛　この様な纖弱な子を、ひどい奉

公に出すとはほんに心強い親だ。
（トこの中に長吉が兩の踵へ油を付ける。思入れして、）
長吉　アイ〳〵。
（ト出す。由兵衞、長吉が手を取つて見て、）
サア、踵の療治は濟んだ。序でに手の皸へ付けてやらう。手を出せ。
由兵衞　これはきつい皸だ。いつそ山葵卸の樣だ。（ト手へ油を塗り、）サアえい。又、明日、療治に來い。
長吉　アイ忝う御座ります。
（ト草鞋を履く。奥州、長吉が顏をつく〴〵と見てゐる。）
由兵衞樣。このお禮には今度酒を買はつしやる時、注ぎを良くして持つて來ませう。
由兵衞　ハヽヽ。しをらしい事を云つた。禮には及ばぬ。穴一でも打たずに隨分精出して、親方の樣な身代になれ。
長吉　アイ。後に來ませう。（ト行かうとする。）
奥州　コレ、まア待ちや。
長吉　御用が御座りますか。
奥州　今、そなたが顏を一寸見ると、どういふ緣か可愛うなつて別れ難い。もちつとゐて呉りや。ほんに、見れば見る程よい生付きな子ぢやが、齡は幾歳になるや。
長吉　わしは八ツになるさうで御座ります。
奥州　八ツになるなら、虎松と同い齡ぢやが、虎松も丁度この子の大きさであらうが。
（ト由兵衞が顏を見る。由兵衞、頭を掻きながら、）
由兵衞　ほんに、虎松も今年は八ツになるがどこにゐをるか。可哀い事をした。
（ト兩人、ほろりとする。奥州思入れして、）
奥州　コレ、さうしてそなたの父樣の名はなんと云ふや。
長吉　父樣の名はなんと云ふやら、わしや小さい時の事は何にも知りませぬわいの。
奥州　そんなら、そなたはそれ程迄は誰が育てたや。
長吉　小父樣が育てました。
（ト由兵衞こなし。）
由兵衞　その小父樣の名はなんと言ふ。
長吉　その小父樣は小さい時別れましたによつて覺えませぬが、今の小父樣の名は八兵衞といひます。
由兵衞　其八兵衞とやらは何處にゐる。
長吉　在鄕にゐます。
由兵衞　その在鄕はどこだ。
長吉　どこか知りませぬ。

（ト由兵衞思入れして、）

由兵衞　小梅。可哀やこの子は孤子さうなが、何を聞いても小さい時の事は覺えぬといふ。この子を見るに付けても、虎めが親は有りながら孤子になつて。思へば、不便な事をしたわい。（トほろりとする。）

奥州　サア、わしもこの子を見るに付けても、虎松が他人の手へ渡つて、丁度この子の樣につらい奉公でもさせられて、憂き苦勞をしてゐるか、どうかかうかと案じられて、この子を見れば、どうやら顔も覺えぬ虎松に會ふ心がして可愛う御座んす。これに付けても返らぬ事ながら、虎松を悲しい事をさんした。（ト泣く。）

由兵衞　どうも、はや、爲うことがない。堪忍して呉りやれ。それにつけてもどうかこの子は。（ト思入れあり。）コレ、われや襟に守袋でもかけてゐるか。

長吉　いゝえ、守袋は番頭殿の櫃へ入れて置きました。

由兵衞　そんなら守袋は持つてゐるか。コレその守袋を後に持つて來て俺に見せろよ。

長吉　アイ。

（ト奥州、思入れして、）

奥州　それ、虎松は生れ落ちるから右の腕に痣があつたが。（ト思入れして、長吉が腕をまくり見て、）ヤアこれ痣があつた。

由兵衞　ヤア／＼。

（ト狼狽へ騷ぐ所へ、花道にて、長八聲にて、サア／＼お出でと云ふ。兩人悔りして遠くへのく。向うより、紫の七、長八、お春、遣手、若い者出る。）

紫の七　どうだ／＼。奥州、痞はえいか。

お春
長八　お快う御座りますか。

奥州　此處で休んだで、ちつと痞が下りやしたわいなア。

長八　それは嬉しや。そんなら、コレ、晩にはわしが處でお前の日待をさつしやる筈故、むら樣も大騷ぎの趣向を思ひ付かつしやれて御座る故、早く町へ御座りたからう。モウ、お歸りなされませ。

奥州　アイ、なんとお春樣。この子は良い子ぢや御座んせぬか。

お春　ほんに可愛らしい子で御座んすわいなア。

紫の七　サア、奥州行くべい。

奥州　アイ、この子に何がな遣りたいが。（ト懐より袱紗に包んだ小さい香箱を出して、）コレ、この香箱をやる程に、人に取られぬ樣大事にしや。

長吉　アイ、お忝う御座ります。

紫の七　サア、奥州早く行くべい。

奥州　コレ行くぞえ。随分煩はぬ様になア。
(ト長吉へ思入れして、由兵衛と顔見合せ、互にこなしあり。紫の七見てむつとして、)
紫の七　コレ。
(ト大きな聲して云ふ。奥州、悔りして思入れ。)
わりやアノ髪結と味な目遣をするが、間夫か。コレ俺や野暮大盡ぢやないぞ。
長八　コレノヽ、むら様。ハテ、扨、お前でもない。なに、主がお前といふ深間がありながら、髪結つれと間夫をさつしやるものだ。通り者の様にもない。悋氣とはどうで御座ります。
お春　もし奥州様。いかう主様の御機嫌が悪うござんす。サア早うお帰りなさんせいなア。
奥州　ハテ、ありや主の癖ぢやわいな。

(トこちらへ思入れ。)
紫の七　長は。俺は獨り行く。
(トむつとして行く。長八、留めて、)
長八　コレノヽ、野暮らしい。マアマア、モシこれ、奥州様。あんまり、ずるいノヽ。サアノヽ、むら様を浮かしませう。大黒舞を見さいな。
(ト大黒舞の唄にて、長八、無理に奥州を連れて行く。奥州、兩人の方へ心を殘し、見返りノヽ、皆々と一所に向うへはひる。)
長吉　扨は。
(ト長吉、傍へ寄らうとすると橋の上から町人出て、)
町人　御用々々。(ト呼ぶ。)
長吉　エヽ。
町人　うぬはなぜさつき誂の味噌と醤油を持つてうせぬぞ。
長吉　コレ、今持つて行きますわいの。

町人　早く持つてうしやアがれノヽ。
(ト長吉が襟を取り、引きずつて橋の上へはひる。)
由兵衛　コレノヽ、荒氣な事をせまいぞ。むごい事をせまいぞ。(ト思入れ。)確かにあれは。ソレ。
(ト思入れして、後から追ひかけてはひる。ト橋の上へ稲妻の權、一時清兵衛、曾我の十郎が胸座を取つて、引きずり出る。若い者大勢出る。源兵衛も後から付いて出て様子を見てゐる。)
權 清兵衛　うしやアがれノヽ。(トいひながら、引きずつて出る。)
十郎　コリヤ、おのれ等。武士の胸座を取つて何とひろぐやい。
權　武士とはなんのこつた。生節が。うぬが印籠を俺がいつ切つた。何故言懸ひろぐ。ヤイ手許を見やがつたか。
十郎　手許を見れば、おのれ、生けて

は置かぬ、卽座に打放すわいやい。

權　太い奴だ。うぬがその赤鰯で切られる安い野郎だと思ふか。慮外ながら、姥が源兵衞が子分稻妻の權。

淸兵衞　一時淸兵衞だぞ。

權　力み廻ると大川へはふり込んで、土左衞門にするぞ。

十郞　エヽ俺が身に大切な願ひがないと、生けては置かぬ奴等ぢやが、一生に一度ならで刀の柄に手はかけまいと誓つてゐる故、無念をこらへる。命冥加な下司めらが。

淸兵衞　こいつア太い奴だ、モウこたへられない。（ト十郞が胸座を取る。）

十郞　イヤ、推參な。

權
淸兵衞　置きやアがれ。なんのこつた〳〵。

（ト十郞を取つて投げて踏む。若い者、大勢にて無性に踏む。源兵衞後から來て、）

源兵衞　コレ〳〵若い者共。豪氣な事をするな〳〵。（ト取りさへる振りをして、十郞が衿にかけた守袋の紐を取つて盜み、內懷へ入れ、）モウえい。堪忍しろ〳〵。

（ト引分ける。十郞種々無念の思入れあり。掛らうとするを、源兵衞留め、）

コレお侍樣。堪忍さつしやりませ。お前の相手にさつしやる奴等ぢやアない。たかが蟲同前な奴等。正眞の癩と棒打だ。堪忍さつしやりませいの。

（ト介抱する。十郞思入れあり。）

十郞　どなたか存ぜぬが、いかいお志忝う御座る。武士たる者が蟲同前な奴等に打擲されて、兩刀を帶しながら柄に手もかけぬは、卑怯な奴とさげすみも恥かしう御座るが、大切な願ひを叶へる迄は、刄に血を注ぐまいと誓つてをる故、おめ〳〵と手ざしもせずに、打擲されてゐた無念さを推量して下されませ。（ト泣く。）

源兵衞　いやモウ至極御尤もで御座ります。よくおとなしう踏まれて御座りました。わしや此處の床にゐる源兵衞といふ髮結で御座りますが、こんな喧嘩は日には幾度か髮結床へ持込むを、みんなわしが割をつけて仕舞ひます。聞けばお前は印籠を切られさつしやつたさうなが、それもわしが詮議するとツイ出ます。氣遣ひさつしやりますな。

十郞　扨々、其許は、町人衆には珍しい志な人で御座る。御親切近頃忝い。親の形見の印籠で御座る程に、どうぞ詮議して取返して下されい。賴みます。

源兵衞　シテマア、そりやどんな印籠で御座ります。

十郞　群千鳥の蒔繪に、靑貝で庵に木瓜の付いた印籠。

源兵衞　ムヽ、群千鳥の蒔繪に庵に木瓜の

紋の付いた印籠を提げさつしやるは、お前は、お名を聞かずとも知れた。お身に大切なお願ひの有るお方だ。斯ういふ處に長居をなさるは惡う御座ります。お歸りなされませ。印籠はわしが詮議して置きませう。明日でもお出でなされませ。

十郎 それは忝う御座る。いかさま、斯樣な處に長居はいかゞで御座る。歸りませう。然らば印籠の詮議くれ〴〵頼みます。

源兵衞 畏りました。

權清兵衞 早く、うしやアがれ。

（ト十郎、振返つてきつと思入れ。）

源兵衞 構はずにござれ。

十郎 明日會ひませう。（ト三重にて、十郎向うへはひる。）

權清兵衞 親分。虎が起請は手に入りましたか。

源兵衞 わいらが蔭で、まんまとしてやつた。虎が起請さへ引つたくれば、祐成と虎が仲を切れさせる目算は思案して置いた。（ト云ひながら守袋の中より狩場の繪圖を出して、押開き見てぎよつとして皆の方へ思入れ。）コリヤ、いつそ祐成めを片付けて。（思入れ。）耳を出せ。

（ト兩人へ囁く。）

權清兵衞 呑込んだ。

源兵衞 ぬかるな。

權清兵衞 合點だ。

（ト兩人花道へ駈けてはひる。源兵衞、狩場の繪圖を擴げて見て、）

源兵衞 虎が起請ではなくつて、祐成が狩場の繪圖を所持してゐるは、工藤殿の狩屋の案内を見すまして、本意を遂ける心掛けか。思掛けなくこれをしてやつたも、工藤殿への忠義の一ツ。忝い。

（ト守袋へ入れ襟にかける所へ乳母おまん、鶴松が手を引き出る。）

おまん 源兵衞樣。

（ト源兵衞、恟りして、）

源兵衞 おまんか。

（ト守袋を、内懷へ隱す。思入れ。）

おまん 今お前の橋向うで云はしやんした通り、いよ〳〵、虎が所へ通はしやんせぬが定ぢやな。

源兵衞 ハテしちくどい。あれ程譯を云つて聞かせるに、滅多無性に悋氣するか。わりや、どうでも俺が色男ではなし、惡たれ者ではあり、嫌になつて、それで悋氣をしかけて、俺に愛想を盡かさせて退く思案だな。

おまん それ、モウ、そんな曲りくねつた事を云はしやんす。わしやその樣なさもしい心根の女子ぢやない。縁でがな、お前に口說かれて、かうした仲に

なつてから、日頃お前に慳貪邪見に當たられるけれども、わしや、微塵も、聞えぬとも恨みとも思ひはしやせぬ。この上に、どの樣な憂いつらい日をも辛抱して、お前と添通すも、お前が大切な故で御座んす。手慰みと惡性とを止めて下さんせ。それさへ止めて下さんしたなら、わしやお前の爲なら傾城にでも何にでも賣られて、お前を過すわいな。必ず金が慾しいと云うて惡い工みや怖い事をして、悲しい別れをさせぬ樣にして下さんせ。わしや、そればかりが苦になりますわいなア。

（ト泣く。源兵衞も泣いて、）

源兵衞　添い。われが樣な美しい面ぢや、どの樣なえい者の女房になり兼ねない身で、俺が樣な者にくつ付いて、憂き苦勞をしても、俺をその樣に大事に思つて呉れるといふは、餘り有難い女房だ。俺や女房冥利に盡きねばえいが。モウ〳〵これからは手慰みも惡工みも止めて、念佛組になつて精を出して稼いで、われに樂をさせべい。オヽ、それ、樂をさせるといへば、俺や今夜晴な所へ行くが、この樣な油染みた形ぢやア行かれぬ。どうぞ日外まけた取つて置きの小袖を、工面して出して呉れまいか。

おまん　わしもモウ、お前にみんな剝がれたによつて、置き替える樣なものも御座んせぬが、着て行かいで叶はぬ事なら、どうぞ工面をして見やんせうが、又欺して女郎買ひに行くのぢやないかえ。

源兵衞　それ、モウ悋氣する。よく譯も聞かないで、惡氣を廻はすわい。マアよく聞け。俺が今度、以前ゐた源兵衞堀へ來てゐるは、お上から詮議者を言付けられて、それでこの樣に身體をやつしてゐるわい。今にもその詮議者を搦めて出すと、俺やえい身に成る。その時はわれを鋲打の乘物に乘せて御新造樣とあがめさせるわ。今夜晴な所へ行くといふも、その談合に行くのだわい。

おまん　さういう事ならよう御座んす。お前の出世さんす事ぢやものを、どの樣なひどい事をしてなりとも、工面して着せやせう程に、そんならお前もわしと一緒に伊勢屋へ御座んせいなア。

源兵衞　そんなら、節々でも、又苦勞をして呉りやれ。

鶴松　乳母。約束の羊羹が喰ひたいわいの。

おまん　アイ〳〵、羊羹を買つて進ぜやせう程に、内へ往つても、おかゝ樣に何にも云はしやんすなえ。云ふとつめ

つめするぞえ。
鶴松　おらァ抱かつて行きたい。
源兵衛　おい／＼。源兵衛おぢい抱くべい／＼。（ト鶴松を肩車に乘せて、）サアお乳母様御座れ。
おまん　アイ／＼。
（トおまん、日傘をかつぎ、思入れして行く。源兵衛、鶴松を肩車に乘せ、向うへはひる。ト見世物の合方になり、由兵衛出ると、向う、はた／＼にて十郎走り出で、由兵衛に行きあたり顔見合せ、）
十郎　切られた／＼。
（ト急いで云ふ。由兵衛恟り、）
由兵衛　ヤア／＼。（ト狼狽へる。）
十郎　いんや、巾着切に印籠を切られた。
由兵衛　エヽ馬鹿／＼しい。俺には恟りさせた。ナゼ印籠を先へおつしやりませぬ。
十郎　それからその巾着切めを詮議にかゝつて惡者共に打擲されて、その騒ぎに大切な狩場の繪圖を入れて置いた守袋を盗まれたわい。
由兵衛　ヤア、それは。
十郎　やつぱり、そなたに預けて置けばよかつたものを。要らざる俺が持つてゐて、ツイ盗まれたが、マアどうせうぞ。
由兵衛　ハテ扨、それは一興千萬。シテその惡者共は何やつでござります。
十郎　姥の源兵衛といふ者の子分ぢやとぬかしをつた。
由兵衛　シテ、その他に何奴ぞ居りましたか。
十郎　ヲヽ髪結の源兵衛といふ者が取りさへて、いかう親切にいうて呉れたわいの。
由兵衛　そいつが姥の源兵衛。本名は、八幡の三郎で御座ります。
十郎　ヤアおれが工藤の家來の八幡か。
由兵衛　サア、彼奴も拙者と共に經若君の詮議の手段、晝は髪結を致し、夜は男伊達となつて廓へ入込みます。狩場の繪圖は彼奴めが盗みましたに極まりました。
十郎　ハテ扨、殘念な。取りさへる振りをして盗みをつたか。エヽ憎い奴めぢや。どうぞ取返し様はあるまいか。
由兵衛　幸ひ、あいつも拙者も今晩廓へ參じます。男伊達ででつくはせて引つたくり返しませう。
十郎　ヲヽ、そんならついでに、かの箱根で紛失した友切丸も詮議してたも。
由兵衛　それも心掛けて居ります。（ト床の床下より、風呂敷包を取出し、一腰ぼつ込み、）支度は路で致しませう。
十郎　それがよからう。俺も姿を替へ

て行かう。

由兵衛　お先へ御座りませう。

（ト三重にて、花道へはひる。ト源兵衛向うより忙がしく出る。奥より、彦六、お色出る。）

彦六　お色實は傳七　親分か。

源兵衛　彦六、傳七。詮議の手掛りは聞き出さぬか。

彦六　身態をやつして嗅いで歩くが、まだ手懸りも嗅ぎ出しませぬ。まつ日外箱根で手に入れた名劒。（ト友切丸の刀を渡す。）

傳七　夜前、尾形の三郎殿より此書狀。

（ト封じ狀を渡し、女形の鬘を取る。）

源兵衛　でかした。今夜も、追付け廓へ行く。わいらも體をやつして。

彦六　傳七　廓へ出掛けませう。

源兵衛　行け。

彦六　傳七　合點だ。

（ト兩人駈けてはひる。ト向うより、おまん風呂敷包をかゝへ出る。）

おまん　源兵衛樣。サア／＼漸く工面して、取出して來やんした。着て行かしやんせ。（ト源兵衛へ風呂敷包をやる。）

源兵衛　でかした／＼。どうでも、わりや俺が白鼠だ。

おまん　何を。この樣な時ばつかり譽めさんしてぢや。ほんにそしてマア、お前は何か大切な詮議者があるとは、何の詮議さんすえ。

源兵衛　詮議者は義經殿の若君經若だ。

おまん　エヽ。

（ト膽を潰す。源兵衛、一寸氣を付け、）

源兵衛　モウ由兵衛めは詮議に行つたと見える。あいつに手柄をさせちやアならない。俺ア今から行くぞ。（ト行かうとする。）

おまん　待たんせ。

源兵衛　なぜ留める。

おまん　今夜は詮議に行く事は、要らぬものにさんせいなア。

源兵衛　なぜ。

おまん　なぜであらうとも今夜は行かんすないなア。

（ト源兵衛思入れ。）

源兵衛　われやア今經若を詮議すると聞いて、エヽと、膽を潰して、それから俺を詮議にやるまいとするがどういふ心だ。

おまん　エヽ。どういう心でも御座んせぬが、どうでもお前はわしを欺して、女郎買ひに行かしやんすのぢやによつて、それで留めた。オヽなんぼでもやる事はならぬ。（ト取付く。）

源兵衛　この女めは、から、見たくもない悋氣をしやアがる。おきやあがれ。

（ト突きはなし行かうとする。）

おまん　待たんせ。（ト取付く。）

源兵衛　退きやアがれ。

（トおまんをむごく投げて行かうとするを、おまんちやつと源兵衛が足にしがみ付き留める。）

面倒な。

（ト蹴倒し、尻からげ駈けてはひる。おまん起上り、）

おまん　コレ、なう、待つて下さんせ〳〵。

（ト追駈けてはひる。）

幕

男伊達初買曾我

三

一 經若君　重の井
一 亭主長八　段五郎
一 女房お春　仁作
一 禿一　若五郎
一 同二　歌川
一 同三　才若
一 同四　花崎
一 一時清兵衛　七五郎
一 稻妻の權　平藏
一 別當行實　宇十郎
一 傾城一　藏介
一 同二　小松
一 同三　梅松
一 同四　小伊三
一 同五　松五郎
一 同六　まつぎく
一 同虎　藤藏
一 同奥州　菊次郎
一 かめん坊平左衛門　五郎藏
一 品玉彦六　又藏
一 曾我十郎　七三郎
一 梅の由兵衛　廣治
一 厩喜三太　十四郎
一 乳母おまん　市松
一 姥の源兵衛　助五郎
一 若い衆　大勢

本舞臺。一面に唐紙。正面に箱梯子かゝりあり。破風の張出し、一面に障子。臆病口の方に暖簾あり。橋懸りの方庭の景色。幕の中より傾城六、紫の七賓は厩喜三太と双六打ちゐる。傾城五、煙管持ち双六を見てゐる。傾城三、傾城四、傾城一、傾城二、亭主長八と寶引を引きゐる。女

房お春、帳箱の傍に帳を繰つてゐる。娣
子の際に若い者料理をしてゐる。皆々、
捨白、わや／＼いふ。騒ぎにて幕開く。
（ト別當行實袈裟衣にて、草履取を連れて
出る。花道の角にて。）

行實　物まう／＼。

長八　どうれい。（ト出迎ひ。）これは御出家様、どれからお出でなされました。

行實　其許が御亭主か。

長八　亭主長八で御座ります。

行實　然らば其許へ、チト御無心が御座るが。

長八　イエ佛餉袋なら宗旨が違ひますだ。

行實　イヤ左樣の儀では御座らぬ。愚僧は傾城を調べに來ました。お世話を頼みます。

長八　ハイ／＼、まづ、あれへお通りなされませ。女房共、お客樣のお出でなされた。お煙草盆よ、お盃よ。
（ト思入れ。別當行實、上へ通る。）

お春　アイ／＼。（ト煙草盆持つて行實が前へ置く。）ようお出でなされました。

行實　其許が御内室か。

お春　アイ長八女房で御座ります。女郎樣方はどなたぞお心當てが御座りますか。

行實　いや心當ても御座らぬ。

長八　そんなら、幸ひ、あれに暇な女郎衆が遊んで御座ります。アノ中でお見立てなされませ。

行實　然らば目利をしませうか。（ト女郎の居る方へ行く。）

喜三太　御出家には御奇特に、よう御參詣なされました。

行實　其許も御信者と見えます。
（ト傾城六傍へ寄り、浮繪を見る樣な手付きをして顏を見る。）

傾城六　オヽ怖。この和尚樣は味な手付きをして見さんすが、わしが顏を、浮繪ぢやと思うてさうな。わしや、お前に見立てられる事は染々ぢやぞえ。
（ト又、行實、眼鏡を掛け、傾城五が顏を見る。）

傾城五　コリヤをかしい。眼鏡で女郎を見立てるとは、刀の目利でもする樣に仰山なすがや。
（ト行實段々に女郎を見て廻る。）

傾城四　エヽ氣味の惡い坊樣ぢや。生醉ひぢやさうなわいなア。

傾城三　見れば、ぬけ／＼とした顏ぢやが、置いて來たのぢやさうなわいな。

傾城一　但し、氣違ひ坊主ぢやないかいな。

傾城二　なんと、この和尚樣に談議を說かせうぢやないかいな。

長八　御出家樣。どうで御座ります。

お氣に入つたが御座りますか。
行　實　ハテ口惜しい。信心が甲斐ないさうで拜まれぬわい。
お　春　ホヽヽ、お物好きがないさうな。なんと、虎樣よからうぢやないかいな。
長　八　それ〳〵。互に美事同志でよからう。
喜三太　成程、虎とはいゝ思付きだ。勸めろ。
長　八　和尚樣。この中にお物好きがなくば、名代の虎樣になされませ。
行　實　それ〳〵。虎といふ遊女は兼て承知致し居る。どうぞ、下直に調べたい。
長　八　呑込みました。わしがお馬を。
（ト向うへ行かうとして向うを見て、）イヤ嬉しや、よい所へ虎樣が御座るわい。
女皆々　どれえ。（ト向うを見る。）
長　八　アレ。
女皆々　ほんになア。
（トぬめり唄になり、花道へ雪ちら〳〵と降る。ト傾城虎、道中して出る。若い者長柄を差掛け、提燈持ち先に立つ。禿一禿二、對の禿にて、遣手附き出る。花道にて、）
禿　一　申し、太夫樣。お前の歩かしやんすを人が見て、虎はよつ程姉ぢやといひやんすが、お前は誰が姉樣ぢやえ。
禿　二　ほんにお前は妹も持たしやんせぬが、ナゼ人が姉といふえ。
遣　手　子供。口をきくな。
（ト睨らめると、長八出迎へ、）
長　八　これは〳〵、虎樣。今お前の迎ひに行く所であつた。よい所へお出でなされました。
虎　長八樣。アノ、わしが歩くを人が見て、虎はよつ程姉ぢやといひやんすさうなが、わしや袖を留めて間もないが、いかう老けて見えるかえ。
長　八　イエ、老けては見えませぬ。抜けて見えます。
虎　老けては見えぬ、抜けて見えるえ。それは、嬉しや。抜けて見えるは煩ひ上りで髮が抜けたものを、マア老けて見えぬで嬉しい。
長　八　ハヽヽ。虎樣。お前の抜けて見えるに相應な臺無し抜けた客衆が、お前に會ひたがりなされます。サア〳〵座敷へお出で〳〵。
（ト皆々、本舞臺へ行く。）
女皆々　虎樣御座んしたかえ。
虎　さつても、よう詞が揃うた。稽古をさんしたかえ。
女皆々　オヽ笑止。
長　八　お客樣。サア虎樣の御來迎で御座ります。

行　實　御來迎だ。それは有難や。(ト珠數を持つて、虎を見て、)これが正眞だ。エ、有難い。
(ト虎を、立つたり居たりして拜む。虎もきよろ/\同じ樣にする。)

傾城六　これは面白い出合ぢやわいなア。

女皆々　さればいなア。

虎　長八樣。主はわしを祈禱をさんすのかえ。

長　八　ハヽヽヽ。なんと和尚樣。お氣に入りましたか。

行　實　日頃の大願成就致して、この樣な有難い事はござらぬ。

お　春　そんなら、お盃を出しやんせう。

(ト取つて來る。)

喜三太　長八。コリヤ女郎も客も思ひ合つたわい。

虎　抜けたといふ事かえ。ほんに主はわしが樣な事ぢやない。豪無し抜けさんした。時疫でも煩はんしたかえ。(ト行實、頭を撫る。)

行　實　エヽ有難い。今こそ愚僧が心底を明かさう。何れもお聞きなされ。愚僧日頃思ふには、木像畫像の佛は眞の佛でない。何卒、正眞の佛を拜みたいと大願を起した所に、聞けば西行法師は、夢想に依つて江口の君といふ傾城に對面したれば、江口の君忽ち普賢菩薩と現はれ、白象に打乘つて西の空へ入り給ふと聞いて、西行が羨しさ。數多の傾城の中に、もし、普賢菩薩のましまさば拜まんと存じて參つたが、信心が屆いて、正眞の普賢菩薩を拜して感涙に咽びます。(ト虎を三拜して泣くこなし。)

女皆々　これはたまらぬわいなア。

喜三太　長八。今夜の日待によい志道軒が獲れたわい。

長　八　左樣で御座ります。虎樣。お前は正眞の普賢菩薩で御座ります。

虎　長八樣。アノ普賢菩薩といふ佛は、アノ朝鮮人の小姓の樣な佛かえ。

長　八　アイ、白象に乘つてゐる佛の事サ。

虎　ハアヽ。アノ乘つてゐるのは、白象といふ物かえ。それで聞えた。親方樣も、わしを普賢菩薩と知つてゐさんすさうで、昨夜云はんすには、『虎、わが樣に客をせぬと、河岸へおろして百藏にする。』と云はんしたわいなア。

女皆々　笑止。

長　八　シイ/\。

行　實　扨、御亭主。とてもの儀に、虎が普賢菩薩と現はれて、西の空へと入り給ふ所を拜んで歸りたいが、どこぞ靜かな座敷は御座らぬか。

長　八　二階へ御案内申しませう。

行賞　時に、虎御前の代物はいか程で御座る。
長八　主は九拾匁で御座ります。
行賞　金子にしてはいくらで御座る。
長八　壹兩貳分で御座ります。
行賞　ハテ高い普賢菩薩だ。
（ト思入れして、長八と一緒に梯子へ上る。ト唄になり向うより傾城奥州、曾我の十郎座頭の形にて、禿四禿三對の禿にて出る。遣手若い者は長柄をさしかけ、提燈持ち、先に立つて皆々出る。ト雪降る。花道の中程にて。）
禿四　小吉や。おいらが太夫様も物好きな。知らぬ按摩取りと手を引合つて歩かんすによつて、地廻りが見て、座頭の心中ぢやといふたわいなア。
禿三　ほんにこの按摩取りは粋な形で、紫の括り頭巾を被つて、盲人の椀久を見る様ぢやわいなア。
（トこの中、女房お春出向ひ。）
お春　奥州様。紫様のいかう待兼ねさんして、むつとして御座んす。早うお出でなさんせいなア。
奥州　又逆上つてか。きつい好き。子供來や。
禿三四　アイヽヽ。（ト本舞臺へ來る。）
女皆々　奥州様。今御座んしたかえ。
奥州　お前方に先越されたわいなア。
喜三太　コレ奥州。折角日待の趣向をさせておいて、何をしてゐた。あんまり勿體をつけるな。
奥州　何を、いつ、わしが勿體を付けたえ。早う來たうてならなんだが、俄かに痞が起つたによつて、針をしてゐやんしたが、又逆上つて斷出さんすであらうと思うて、按摩取殿を頼んで連れて來たわいなア。
喜三太　スリヤ痞が起つて針をしてゐたか。そんなら、又、今夜も背中を拜んでお日待を致さうか。
奥州　サア按摩殿。又揉んで下さんせ。
十郎　又一療治やりかけませうか。
（ト捻りにかゝる。）
虎　よう似た聲もあるものぢや。（ト十郎へ思入れする。十郎もこなし。）
奥州　お春様。主はどこの女郎衆ぢやえ。
お春　アイ、彼方は新大磯屋の虎様で御座んすわいなア。
奥州　主が大磯から御座んした虎様か。これは／＼、虎様。お近付きになりやんせう。わしは三浦の奥州で御座んす。お心安うしやんせうぞえ。
虎　奥州とは、火鉢から出る名ぢや。
奥州　なぜにえ。
虎　奥州が立姿。古いかえ。
奥州　ホヽヽ。ほんに、名代程あつ

〽美しい事ぢやな　惜しい事ぢやな
ア皆様。

お春・女皆々　さいなア。

十郎　サア又お腹を揉みませう。

奥州　アイ、胸先から揉み下して下さんせえ。

十郎　冷え物で御座ります。

（ト奥州が懐へ手を入れる。虎思入れ。）

奥州　オヽ冷めた。

十郎　てんと柔らかな肌かな。

（ト喜三太むつとして、）

喜三太　コレ按摩。俺が見る前で、奥州が肌を捜ぐるとは。

十郎　ハテこれが療治で御座ります。

喜三太　でも素人目には痴話と見ゆるわ。

十郎　ハヽヽ。いかさま、わしらが様な者が、奥州様の雪の肌へ手を入れて、どこもかしこも遠慮なしに撫でさするといふは、これも按摩の蔭。藝は身を助けるぢや。

奥州　ほんに、こなさんの様な按摩の上手はない。これから毎夜御座んせえ。

十郎　それはわしが得手に帆でござります。

喜三太　その得手に帆が嫌だ。座頭の、思ひやられた。

奥州　虎さんも痞持ちさうなが、この按摩殿に揉んで貰はんしたなら、つい痞がさがらうが、按摩殿、揉んで進ぜたがよからうな。

十郎　アイ、わしや商賣だによつて、何方にでも揉んであげたう御座ります。虎様のやうな御全盛な女郎衆は、わしらがやうな大津の座頭のやうな按摩取りには、揉ませはさつしやりますまい。虎様は乳母の源兵衛様の針でなければ夜が明けないげな。ハヽヽ。あぢな針に喰ひついた。

虎　按摩殿は、姥の源兵衛さんを知つてかえ。

十郎　ア、おほきに知つてるます。

虎　源兵衛さんは、今夜何やら詮議者があるによつて、行かうと云うておこさんしたが、早う御座んすやうに呪をしよう。子供、硯箱を持ちや。

禿一二　あいゝ。

（ト硯箱を持つて來る。虎、書付けする。奥州、姥の源兵衛が來ると聞いて、ぎよつとして、）

奥州　姥の源兵衛が詮議者に來るとは。

（ト云はうとして思入れする。）

十郎　ハテ、お前は、俄かに胸先へ動悸が致しますわい。

奥州　エ。（ト思入れする。）

喜三太　奥州。姥の源兵衛が詮議者に來ると聞いて、わが胸先へ動悸のするはどういふ事だ。

奥州　エヽイエ、わしや姥の源兵衛はもとより知らぬもの、来ようが来まいが頓着はござんせぬが、虎さんの、オオ、ほんに虎さん。姥の源兵衛を待兼ねるお前ではあるまいがな。ハテお前をその様に、心も蛻になる程に煩はせた戀の塊は、これ。（ト十郎顔をつめる。）

十郎　お痛い〳〵。（ト思入おする。）

奥州　逢ひたい〳〵と、心はやたけに思へども、親方さんへ知れうか、遣手が見付けうか、世間へ名が立たうかと、氣を兼ね心を痛めて、それが積つて大煩ひ。皆臆病からぢやぞえ。それ程親方遣手が怖くば、なぜ間夫を拵へさんした。間夫をするからは、魂を据ゑて奈落迄も仕遂げねば、街道一の虎様ぢやない。今更、姥の源兵衛を待兼ねるなどとは、性根の腐つた、さもしい。源兵衛に會はんすなえ。切れさんせえ。可愛い間夫に逢ひたくばこの奥州が手管で逢はせう。アヽ、慮外ながら頼まんすとあれば、命にかけて取持つ、すんど、意氣な女郎で御座んす。なア按摩殿。さうぢやないかえ。

（トこの中、禿、紙に姥の源兵衛と書いて、禿二に渡す。禿二、日附柱へ倒に張つて置く。）

十郎　成程さうで御座ります。たかで身を庇ひ、命を惜んでは色になりませぬ。シタがさういふ女郎衆は千人に一人あるかなし。其他は皆選取りに付きます。そこにござる大盡様の御器量は、わしや盲だによつて知らぬが、金さへ費へば、頬に瘤があらうが、鼻が大きくつて目が猿眼であらうが、女郎衆が有難がつて廻る事、あたかも餓鬼獨樂は跣足でござります。

（トこの臺詞の中、喜三太こなし）

喜三太　按摩。金さへ費へば、頬に瘤があつても女郎が廻るとは、大きな了簡違ひだ。俺は奥州を揚詰めにしてゐるが、　　りになると、奥州が背が起つて背中ばつかり拜ませられるが、積り積つて、終には俺が　　となつた。

（ト二階から、長八忙しく下りて、）

長八　お春。和尚が小判が切つて貰ひたいと仰しやる。男共は忙がしいか。

お春　アイ、みんなお夜食の支度にかかつてゐやんすわいなア。

長八　そんなら俺が行つて切つてこずばなるまい。

虎　長八様。わしが切つて進ぜうかいな。

長八　お前の切つて呉れる。ムヽ今夜は日待だによつて、宵でも打つつもりで、儲けんでお出でだな。然らばお頼み申す。（ト虎へ小判を渡し、）紫様。扨

今迄、和尚の佛法噺を聞いてゐて氣がつきました。二階へお出でなされて、一杯上りませ。お相手になりませう。

喜三太　いかさま、酒宴と出かけうわい。

（トこの中、虎硯箱の鋏にて、小判を四ツにはさみ切り、）

虎　長八様。サア小判を切りやんしたぞえ。（ト出す。）

長八　それは有難い。（ト取つて見て、）やァこりや小判を四ツに挾み切つた。

虎　なんと、よう切つたであらうが。もつと切りたくば出さんせ。

長八　あんまり、呆れて腹も立てぬ。

喜三太　思切つた藝をした。

女皆々　笑止。

お春　これはマア氣の毒な。和尚殿へ早速小粒を上げずばなるまい。

長八　エヽ、埒もない事をした。

喜三太　コレ／＼、紫が控へてゐる。ソレ。（ト小判をはふる。）

長八　これは有難い。

（ト二階から、若い衆下りて、）

若い者　モシ／＼、虎様。和尚様のお待兼ね、二階へお出でなされませ。

虎　おい／＼。モシエ、皆様。さつき和尚様の云はんす通り、わしや追付け普賢菩薩と現はれて、白象に打乘つて西の空へ飛びやんす。折角まめでゐさんせ。さばえ。（ト二階へ駈けて上る。）

女皆々　これはたまらぬわいなア。（ト笑ふ。）

喜三太　これを肴に二階へ行つて呑まう。

長八　お相手になりませう。

喜三太　サア、奥州。來給へ。

奥州　まだ按摩を取らせるわいな。

（ト喜三太むつとして、）

喜三太　その取らせるが氣懸りた。

長八 お春　マア、お出でなされませ。

（ト騒ぎになり、長八女房お春、喜三太、奥へはひる。向うにて、）

かめん坊平左衛門　切つた／＼。手を折つたぞ。

（ト船頭の形にて、額より血流れ出る。若い者大勢にてかゝへ出る。）

若い衆　かめん坊。手は淺いか深いか、どうだ。

平左　何かは知らず、眉間をざつくと割られて、目が舞ふとも死ぬとも、あいつを締めにやァ置かない。若い者共。働け。

若い衆　合點だ。

（ト唄になり、かめん坊平左衛門皆々、尻からげ、おつ肌抜ぎ、思入れして花道へ行く／＼と向うより、姥い源兵衛男伊達の形にて、栄螺殻を持つて思入れして出る。後から、若い衆大勢、棒や割木等を持つ

一源兵衛を打たんと付けて出る。平左衛門皆々、思入れしてかゝるを、源兵衛榮螺殼を振上げ、きつと見え。平左衛門皆皆怖かり後へしさる。と後ロから、若い衆思入れする。と源兵衛、振返りきつとする。若い衆、怖かり後へしさる事あつて、じり／＼と本舞臺へ來る。）

平左　そりや。

若い衆　合點だ。

（ト源兵衛へかゝるを、取つて投げる。平左衛門もかゝるを、取つて投げてきつとする。）

平左　こいつは味な藝をする奴だ。おそらく五丁町へのたをかへす野郎めらに、このかめん坊平左衛門をなめる奴は覺えないに、心安く小ひどい目にあはせる奴は覺えない。先づうぬが戒名は。ふやい。

源兵衛　なんだ、薪ざつぱを振廻して、乞食の木拾ひを見るやうな野郎めら。うぬらはとゝうかゝあが、夜業の小刀細工に、たま／＼人間と刻まれて、俺を知らないとは不便や、井の內の蛙、大海を知らぬ、虱つたかりめら。耳の穴へ燈明を點して、うがひ手水で身を淨め、心をとつて聞きやァがれ。およそ、此若い者は、生國は日に向ふ國に名高い姥が嶽、或る時母が轉寢の夢妄想に、廿尋の蟒鼻の穴へのたくり込むと見て、忽ちつつ孕んで、あたる十月に、明神の神木、姥櫻の下で、ひよろりと產まれて、取上婆は足柄山の山姥、乳付け親は、姥が池の椀荷乳母、抱守は姥が火のてんば姥。門傍の乳母が餅を喰はせたり、鬼殺しを飲ませたり、臍の緒切つてちりけもするねば、丸薬一粒くつつまぬ、無病、無造作、無鐵砲、無性、無體なむくつけ者にも、夫夫に結ぶの神が割付けて、破鍋に閉蓋の緣は異なもの、おまんといふ乳母に、浮名が立つ子產子も名を聞くと、そのまゝ泣き止む靈驗あらたな男伊達、勢仲間の氏子共が、東で源兵衛堀に勸請して、親分と崇め奉る姥の源兵衛といふ色男だ。乞食野郎めら。善の綱に取つ付いて拜めやい。

（ト平左衛門ぎよつとして、）

平左　若い者共。こつちへ來う。（ト花道へ逃れて行き、）鬼の樣な俺をひどい目にあはせたこそ道理、聞き及んだ姥の源兵衛だ。どうでかなはぬ。降參して子分になるべい。

皆々　それは善い思案だ。早く降參し

平左　随分、懇懃にしろ。

皆々　呑込んだ。

（ト皆々源兵衛傍へ來る。平左衛門、揉み手をして、）

平左　ハヽヽ、はれやれ、姥の源兵衛様とも存じませず、突掛りまして、慮外を致しました。わしや堀のかめん坊平左衛門というて、こつきに競ふ野郎で御座ります。此奴らも皆わしが子分で御座ります。かうひどい目に會ひますも、畢竟御縁の深いので御座ります。これからわしらもお前の子分になつて、一人食をする勢になりたうござりまする。

皆々　お願ひ申します。

源兵衛　姥の源兵衛が子分になつて、一人食もする勢になりたいとは、奇特な心掛けだ。成程、子分にして呉れべい。

皆々　それはお忝う御座ります。

源兵衛　併し俺が流儀は、わいらとは違ふ男伊達だ。わいらは勢だ。男伊達と勢はがいな違ひはないが、鰹と鯇鰹ほどの違ひがある。その一寸のいきかたを呑込むと一人食がなる。明日から皆、机を持つて源兵衛堀へ通へ。男伊達のいろはを教へてくれべい。

皆々　それは有難う御座りまする。

源兵衛　行く先き／＼で子分が出來れば、その度に祝つて、手拭ひの下駄のとやるによつて、源兵衛も大儀ださ。ハヽヽ。（ト皆の方を見て、）てんと、色の摑み取りだ。奥州様。姥の源兵衛がお傍へ御見舞ひ申したいが、誰も叱手はあるまいかな。これ奥州様、／＼。この女郎は耳の穴が塞がつたなら、煮え湯を注ぎこんで紙縒で通さないか。姥の源兵衛が詞を掛けたに、なぜ舌を鳴らさない。たゞし骨箱に錠でもおろして置いたか。源兵衛をつぶすか。どうだやい。

奥州　その惡態を聞かうばつかりに挨拶をせぬわいな。姥さん。味に化けさんしたな。

源兵衛　戀に身をやつすですわい。お傍へ割込みませうか。

奥州　叱らうぞえ。

源兵衛　誰が。

奥州　虎さんが。

源兵衛　へヽヽ、馬鹿を見込みに會つてゐるが、讀と歌ですわい。（ト奥州へ思入れして、）さらば冷えものです。お許さりませう。

（ト脛をまくつて奥州傍へ腰かける。ト花道から、品玉彦六、稲妻の權、一時清兵衛、忙がしく出る。）

彦六 權 清兵衛　親分。梅の由兵衛が。

源兵衛　コレ。（ト奥州方へ思入れして、）
コレ、そこにゐる地廻り共は、皆俺が
子分にした。近付きになれ。
彦　六　アヽ、これ、近付きになるべい。
ハテどれも。
権　清兵衛　よい仕込みだ。
平　左　兄弟子達、隨分。
皆　々　揉込んで下さい。
彦六　権清兵衛　精出したがえい。
源兵衛　ハヽヽヽ。おれらが小笠原は手
もない。（ト十郎を見て、）奥州樣。見れ
ばお前の傍に生にやけた面な座頭がゐ
るが、藝者か、按摩か、なんです。按摩
にしては粋な座頭だ。どうか按摩は取
らずに色を取りさうな面た。これ座頭。
近付きになるべい。おりや、男伊達を
商賣にする姥の源兵衛だぞ。
十　郎　アイ。
源兵衛　わりや、名はなんといふ。

十　郎　わしが名は、（トつかへる。）
源兵衛　なんといふ。
十　郎　四日市と云ひます。
源兵衛　四日市。そりや日本橋だ。
十　郎　サア、四日市から宿替へした、
神明のしやうか市が弟子の富澤町の朝
市と申します。
源兵衛　富澤町の朝市といふ。
十　郎　アイ。
源兵衛　道理で袴が襤褸だ。ハヽヽヽ。奥
州樣、お前この朝市が氣に入りかえ。
奥　州　アイ、主はいかう按摩が巧者で
御座んす故、わしや術持ちぢやによつ
て、常住頼んで揉んで貰ひやんすわい
な。
源兵衛　すりや按摩が上手ですか。
奥　州　きつい巧者ぢやわいな。
源兵衛　それは耳よりな。幸ひ俺も、今
地廻り共を張りのめしたで、肩が張つ

た。朝市。揉んでくれろやい。
十　郎　アイ／＼。（ト揉みに出る。源兵衛
が襟の守袋に思入れして。）
源兵衛　禿共、煙草を吸付けてくれろ。
禿　四　大吉、聞きやつたか。客衆でもな
うてしこなした。禿共煙草を吸付けて
くれいといな。エヽ、染々好かぬによ。
禿　三　ほんにえいかと思うて、あの樣
に意氣過ぎて、女郎さん方に振られる
が見るやうな。
禿三四　わあい。（ト高く笑ふ。）
源兵衛　エ早熟た奴らだ。さしもの姥の
源兵衛も、うぬらには勝たれない。
傾城五六　これは子供が味をやつたわい
な。
女皆々　さればいな。
源兵衛　ハヽヽヽ。朝市。ほんに、わり
や按摩が上手だわい。
十　郎　どなたもさう仰しやります。ハヽ

ハヽ。なんだかお前の肩は、饂飩屋の俎を見るやうな大きな肩で、さうして堅さといふものが、石だ。こりや骨が折れるわい。

源兵衛　えい、骨は盗まぬ。随分、身柱から尻ぺた迄、捻つてくれろ。

十郎　そんなら、ちつと俯かしやりませ。

源兵衛　呑込んだ。(ト俯く。)

奥州　なんと上手な按摩で御座んせうがな。

源兵衛　どうもいへぬ〳〵。

(ト此うち、十郎、そろ〳〵源兵衛が襟の守袋の紐を解き、取る所を源兵衛思入れして、)

待て。

(ト十郎が手を摑む。十郎、震へる。奥州、危ぶき思入れする。)

此奴は太い奴だ。姥の源兵衛が襟に掛けゐる守袋を外すは、うぬ、按摩は附たり、客の鼻紙袋や巾着をせしめる盲目の巾着切だな。うぬ、筋骨を抜くぞよ。

十郎　この守袋は、この朝市が目を懸けて貰らふ旦那衆が、両國で切られた守袋。眼は見えねど手探りで知るが座頭の不思議。取返して旦那衆へ遣る。渡さつしやれ。

源兵衛　イヤ甘口な。(ト十郎取つて踏む。)

奥州　申し、これ〳〵。(ト十郎へ覆ひかゝるを、)

源兵衛　邪魔な、退け。(ト奥州を捕まへて引退け、源兵衛頭にて差圖する。)

皆々　合點だ。

(ト十郎を散々に踏む。十郎、矢張目を塞いで、踏まれながら源兵衛へ搦付く。源兵衛首筋を摑み、引寄せる。此うち、奥州、留めたがり、あせるを、源兵衛片手に奥州を捕へ、じつとめて、)

源兵衛　若い者共。此奴を土手へ荷ひ出してたゝめやい。

皆々　合點だ。うしやァがれやい。

(ト十郎を引立てうとすると、花道にて、)

由兵衛　待てやい。(ト聲する。)

皆々　待てとは。

由兵衛　男伊達、梅の由兵衛がおつ留めた。はつつけめら、待ちやァがれやい。

(ト「梅の由兵衛は二人の女房」といふ唄になり、梅の由兵衛、男伊達の形にて出る。彦六、稲妻の權、一時清兵衛、平左衛門、若い衆、皆々尻をからげおつ肌抜ぎ、思入れして、花道へ出迎ひ、由兵衛へ掛らうとする。由兵衛きつと睨める。皆々怖がり、後へしさる。由兵衛、しづしづ思入れして、舞臺へ來る。)

源兵衛　それ。(ト思入れする。)

皆々　合點だ。

(ト掛るを、由兵衛、取つて投げてきつと

する。皆々詰めかけ思入れする。奥州、危き思入れして。)

源兵衛　待て、梅の由兵衛。姥の源兵衛が盲目の巾着切めをとつ捕へてたゝむところを、なぜ。

皆々　おつ留めたやい。イヤ、なぜ、おつ留めたやい。

由兵衛　此奴らはなんの眞似だ。廣小路で薩摩芋の買喰ひをひろぐ宿無し野郎めら。うぬらが騒いだと云つて、俺に歯がたつものか。梅の由兵衛が握り拳の蕾が横ぞつ頬へかつ觸ると、忽ち血吐を白梅の、生白いしやつ面でも、恐ると直に紅要らずに、血筋血走る紅梅の、色も香もある梅堀に、歯が根をならす勢共のお頭、男伊達の總本地、味噌ぢやない薄墨の、綸旨梅を持つてる由兵衛に、悪く執ねて小ひどい目に鶯宿梅、一度にころりと飛梅の、とんだ死様を信濃梅、冬中勤めて三百に貳升貰つて越路へ歸る、皸足の山猿を見るやうな丁稚めらが、駄味噌を上げるを横合から、鎗梅をつん出して、つつかゝるからは如才はない。盲目の巾着切でも座頭の唐人踊りでも、梅の由兵衛が一番貰つた。おつと云つて献上しろ。やだとほざくと鼻息で新吉原の揚屋町から、相州箱根の樫木坂迄ふつ飛すが、雲介めら、返答はなんとだやい。

平左　ムヽ、梅の由兵衛でも韋駄天でも、只一口にかめん坊平左衛門。

彦六　宙に掴んで曲手毬にする品玉の彦六。

権　掴んで投げる早業は稲妻の権。

清兵衛　うぬが命は朝顔の一時清兵衛。

彦六　男伊達の本山、姥の源兵衛が子分の手なみを今。

皆々　見ろやい。(とかゝる。)

由兵衛　イヤ小癪な。(ト取つて投げ、腰の尺八を取つて散々にぶつて、きつと思入れ。)

平左　お頭。此奴は俺が小刀細工ではいけませぬ。御馬を出さつしやい。

権　マアわしらは、打身の藥を飲みに居酒屋へ行きませう。

彦六　ゆるりと締めさつしやい。

皆々　おさらば。

(ト皆々、花道へはひる。此うち、源兵衛煙草吸ひぢつと思入れしてゐる。)

由兵衛　源兵衛。あいつ等が按摩取りを踏んだ代りに、あいつ等をひどい目に會はせたによつて、これで双方ためて引込んで、按摩取りに言分はあるまい。もし言分があらば、これからは汝と俺との立引きだぞ。

源兵衛　面白い。すりや、わが横合から出て喧嘩を買ふか。

由兵衛　ハテ、喧嘩を買ふが男伊達初買ひ曾我の大名題、しつぽりと出會ふべいわい。

源兵衛　源兵衛としてみるか。

由兵衛　まづ足手纒ひを片付けべい。こりや按摩。もうえい。此所に長居は要らぬものだ。按摩を稼ぎに行け。

十　郎　どなたか、聞いた樣なお聲だが、いかいお志、忝う御座りまする。しかし、あの源兵衛殿の持つて御座る守袋は、命に替へても手に入れねばならぬわしで御座りまする。夜中故お見違へも御座りませう。わしは。（ト目を明く。）

由兵衛　これ。

（ト思入れする。十郎、ちやつと目を塞ぐ。）

ハテ扨、後は俺との立引きになつたからは、俺が呑込んでゐる。假令、按摩取りなればこそ、姥の源兵衛に踏まれてもすむ。わがどうかした身分だと、これぢや濟まされない。五丁町の大騷ぎになる。必ず何も云はずに早く行け。

十　郎　成程、至極致しました。然らば奥州樣。又後程、捻つて上げませう。

奥　州　アイ、必ず何處へも行かずに、奥座敷にゐさんせえ。

十　郎　アイ。

（ト行かうとする。源兵衛留める。）

由兵衛　源兵衛。なぜ留める。

源兵衛　今、わが、あの盲目がどうかした身分だとこれぢや濟まされないと云つたによつて、俺が盲目めの化けの皮を引剝いで、どうかした身分にして汝に見せべいと思ふ。

由兵衛　いゝや、そりや要らぬもの。

源兵衛　なぜ。

由兵衛　サア、どうかした身分になると、この場がきつうむづかしい。

源兵衛　そりやなぜ、むづかしい。

由兵衛　サア、そこは云ふに云はれぬ、以心傳心だ。ハテ俺が横合から出てこの喧嘩を買つたからは、汝と俺とこゝ向ひで片付けべい。按摩風情に大人氣無く構はずとも、やれやい。

源兵衛　ムヽ、それも成程面白い。然らば盲目め。うせろやい。

十　郎　アイ。按摩針の療治。いかい、たはけ座敷だものを。（ト十郎奥へはひる。）

由兵衛　姥の源兵衛殿。喧嘩の相場がたつた。そこへ身體を荷ひ出さつしやい。

（ト兩人、舞臺先へ出る。奥州、危き思入れ。）

源兵衛　身體を荷ひ出したが、盲目をふんだ仕返しをしてみるか。

由兵衛　いゝや、盲目はどこの馬の骨か、あれに喰合はない。今日俺が旦那が、

爾國で悪者めらに打擲されて、その上に大切な書物の入れた守袋を盗まれたが、どういふ絲の加減か、その守袋がお身のほつほにある。お出しない。

源兵衛　由兵衛。わりや稀有な寝言を唸り出したが、俺を盗人にするか。盲目を踏まれた仕返しなら、謎をかけずと假名で言へ。骨箱の開いたまゝに、馬鹿な御託をあけるなやい。

由兵衛　ハテ、わが盗んだとは云はぬわい。なに又、姥の源兵衛が盗みをすべい。盗みはせまいがわが懐中に守袋があるからは、白波の龍田の山に入りぬれば、同じかざしの名にや汚れんと、盗人の名は逃れぬ。赤つ恥をかゝない前に、早く出せやい。

源兵衛　いゝや、懐中の守袋は俺がのだ。

由兵衛　ハテ、情を強くすると、わが爲にならぬわい。

源兵衛　僞にならないとは、してどうする。

由兵衛　由兵衛がちよつかいを、わが懐中へ突つ込むが最後、目口から五臓を吐かせるがえいか。

源兵衛　わがちよつかいを俺が懐中へつつ込む間には、汝へ土砂を振りかけて、早桶へ浚ひ込むがえいか。

由兵衛　出さないと取るぞ。

源兵衛　美事取るか。

由兵衛　取るわ。

源兵衛　取るか。

由兵衛 源兵衛　イヤア。（ト南方からかゝるを、）

奥州　待つた。（ト中へはひる。）

由兵衛 源兵衛　退け。

（ト突き退け、三人立廻りありて、由兵衛、源兵衛が懐中へ手を突込み守袋を引出すを奥州、ちやつと守袋の眞中へ手をかけて、三人きつとする。）

奥州　聊爾さんすな。

由兵衛
源兵衛　退け。

奥州　いゝや、なんぼでも退かぬ。お二人さん。マア、心を靜めてよう聞かんせ。互に力の強いに任せて男伊達をさんすが、昔から男伊達の身の果は、皆、浮名を流すぞえ。ナア、難波の里の五人男がよい鑑、お二人ながら、わが身でわがものならぬお主持ちぢやないか。短氣に任せて身を滅ほして、お主樣へ立ちやんすか。これ程の事に心のつかぬお前方でもなけれども、急かんして前後も見えやんせぬが情ない。必ず聊爾さんすな。この喧嘩は女子ながらもわしが貰うた。奥州が貰ひやんしたぞ。

（ト兩人思入れする。）

由兵衛　源兵衛。負うた子に淺い瀨を教へられるとやら、お身も俺も、大切な詮議者の役人。

源兵衛　詮議しだす迄は、大切な命を私に捨てゝは。

由兵衛　不忠と云はうか。

源兵衛　不覺と云はうか。

由兵衛
源兵衛　ハテ粗相な。

奥州　嬉しや、わしが詞を聞分けて下さんしたか。そんなら、とても事に源兵衛さん。美しうこの守袋を由兵衛さんへ。

源兵衛　やつては、どうも主へたゝぬ。

奥州　エ、オゝそんなら由兵衛さん。理を非に曲けて守袋は源兵衛さんに。

由兵衛　持たせて置いては、どうも俺が主へたゝぬ。

奥州　すりや互にやらぬ渡さぬと、又命勝負に及ばんすか。

由兵衛
源兵衛　サアそれは。（ト思入れする所を、）

奥州　わしが預かつた。（ト守袋を取る。）

由兵衛
源兵衛　これ〳〵、それは大切な。

奥州　サア、大切な守袋ぢやによつて、互にやらぬ渡さぬと、命に及ぶが悲しさに、わしが預りやんすが、必ず氣遣ひさんすな。由兵衛さんへも渡さぬ。源兵衛さんへも渡さぬ。

由兵衛
源兵衛　してどうする。

奥州　この守袋は。

由兵衛
源兵衛　どうする。

（ト此うち、奥より、虎、顏に小さき紙を付けて出る。此處にて、）

虎　わしが貰つた。（ト奥州が持つてゐる守袋をひつたくり、懷へ入れて駈出す。）

奥州　これ／＼、それは大切な守袋ぢや。おこさんせ。

虎　いや／＼、こりや美しい守袋ぢや。わしに呉れな／＼。

奥州　それをやつては詰まらぬ。ほんに、いかい姉ではある。これよい子ぢおこさんせ。

（ト取らうとする。虎、思入れして、）

虎　べかこう。この守袋にはお前のさつきの按摩取りへ遣る起請がある。そこで、わしが取つて此起請を火鉢の中へくべると、ぱつと火が燃えて、ひうどろ／＼とお前が裲襠で奥州が立姿といふ淨瑠璃でござんす。わしや小さい時見たによつて、また見ようと思うて、そこで取つたわいな。やらぬぞえ／＼。

奥州　どうも、持上らぬ姉さんぢや。これ、よこさんせぬと遣手を呼んで叱らせるぞえ。

虎　これ／＼遣手を呼ばぬものぢや／＼。

奥州　いゝや、おこさぬなら遣手を呼んでしめさせる。これおすぎ殿や。アレ虎さんの。

（ト虎思入れして、）

虎　これ／＼遣るわいな／＼。遣りは遣るが奥州が立姿を見せるぞえ。（ト火鉢へ懷の守袋を投込み、）それ今幽靈が出るによ／＼。

（ト云ひながら奥へ駈込む。皆々、瞻潰し、由兵衛ちやつと守袋を取出し、）

由兵衛　大切な狩場の繪圖を既に灰にせうとした。

源兵衛
奥州　ほんにきつい姉ではある。

（ト此うちに、由兵衛、守袋を開け、矢の根を取出し、ぎよつとして、）

由兵衛　ヤア、こりや狩場の繪圖ではない。矢の根だ。

源兵衛
奥州　ヤア。

由兵衛　しかも矢の根の銘は能登守教經。

源兵衛
奥州　ヤ。（トぎよつとする。）

由兵衛　ハテ。

（ト兩人をきつと見る。兩人じつと思入れ。）

ハテ心得ぬ。能登守教經の矢の根を入れた守袋を、虎が懷中してゐて、狩場

の繪圖と取違へたは。
（ト兩人を見る。兩人思入れして。）
源兵衞。数經の矢の根を虎が所持してゐたは、すつきと讀めぬが、お身はどう思ふぞ。
源兵衞　さればなァ。
由兵衞　お主も合點がゆかぬか。奥州。お主はどう思ふ。
奥州　さればな。
由兵衞　お主も讀めぬか。ハテ。
（ト兩人を見る。源兵衞、思入れして、奥へ駈出す。）
待て源兵衞。なぜ奥へ行く。
源兵衞　大切な狩場の繪圖を、あの阿房な虎に片時も持たせちや置かれない。
由兵衞　それで取りに。
源兵衞　行くわ。（ト駈出す。）
由兵衞　待て。（ト留める。）
源兵衞　退け。
（ト立廻りあり。奥州中へ入つて、）
奥州　待つた。これ、狩場の繪圖はわしが取返す程に、必ず爭はしやんせずにおとなしう一緒に。
由兵衞 源兵衞　行くべいか。
奥州　サァ。
由兵衞 源兵衞　サァ。（ト兩人つめかける。）
奥州　これ。
（ト兩方へ思入れする。ト唄になり、兩人きつと、奥州思入れすると、雪降り出す。三人、思入れして奥へはひる。花道より乳母おまん、町の女房の形にて頬被して下駄傘にて、小提燈を提げ出る。）
おまん　ても扨も、折惡う雪が降る。積らねばよいが。この廓へは去年の七月燈籠見物に始めて來たばかりぢやによつて不案内で困つたが、今の勢が寶屋といふ揚屋で、大きな達引があると云うて通つたゆゑ、てつきり源兵衞さんであらうと思うて、寶屋を尋ねて來たが、此處にゐさんせばよいが。（ト云ひながら來て、内覗いて見て、目付柱に張附けてある書付を見て、）何ぢや。姥の源兵衞と書いて逆様に張つてある。こりやどういふ事ぢや。
（ト奥より、虎うろ〳〵出る。）
なぜ主の名を書いて逆に張つて置いた。
（ト虎、これを見て、）
虎　お女中さん。それが知れぬかえ。
おまん　エ。（ト虎、顔見合せ、）
虎　お前はそれが知れぬかえ。
おまん　アイ、姥の源兵衞と書いて逆に張つて御座んすが、どういふ事か知れやせぬわいな。
虎　そりや大事の祕密事ぢやが、云うて聞かさうかな。
おまん　アイ。
虎　これはわしより他に誰も知らぬ咒禁

で御座んす。どうぞ呼びたいと思ふ客衆の名を書いて、逆に張つて置くと、奇妙にその客衆が來やんす。さつきわしが姥の源兵衛さんを呼ばうと思うて、それを書いて逆に張つて置いたれば、直に御座んしたわいな。

おまん　そんなら源兵衛殿が來てゐやんすかえ。

虎　奥に酒盛をしてゐさんすわいな。

おまん　嬉しや。さうしてお前は何方で御座んすえ。

虎　わしや虎で御座んすわいな。

おまん　あのお前が源兵衛殿に逢はしやんす虎さんかえ。

虎　アイ。わしや今夜は坊主客があつたが、源兵衛さんのござんしたによつて、貰うて出るわいな。

おまん　源兵衛殿のはまつたも憎うない。ハテよい御器量ぢやな。

虎　わしが器量かえ。その筈、わしや普賢菩薩ぢやわいな。

おまん　エ。

虎　不思議な事ぢや御座んせぬか。今夜の坊主客がわしを正身の普賢菩薩ぢやというて、拜み禮拜しやんしたわいな。

おまん　ハヽヽヽ。何を仰しやるやら、酒にでも醉はしやんしたさうな。

虎　いえ〳〵、誓文くつされ。わしや追付け普賢菩薩と現はれて、白象に打乘つて西の空へ行きやんすわいな。

（トおまんをかしがる所へ、花道より稻妻の權、若い者の形にて、葛籠を持つて來る。）

權　虎樣。寢道具を持つて參りましたが奧座敷へ。

虎　おいな。

（ト若い者、寢道具を擔いで奧へはひる。）

さらば、普賢菩薩と現はれぬうちに、源兵衛さんと寢よう。お女中さん、さばえ。（ト奧へはひる。）

おまん　もうし〳〵、これ。（ト思入れして、）餘程よい機嫌ぢやさうな。どうぞ主に逢ひたいものぢやが。

（ト奧を覗く。奧にて奧州、）

奧州　虎さん〳〵。（ト忙しさうに出て、おまんと顏を見合せ、）ヤア、お女中さんは、今日兩國で見かけやしたお乳母殿ぢやないか。

おまん　アイ左樣で御座りまする。（トうじ〳〵する。）

奧州　扨はこなさんは、源兵衛さんの女郎狂ひを制討に御座んしたな。ハヽハヽ、お前もきつい妬き手ぢやな。

おまん　アイ、いえ悋氣ばかりで、參りは致しませぬ。源兵衛殿が經若。（ト云はうとして、）大切な詮議者があつて來られましたによつて、それが心許なさ

に参りましたわいな。
（ト奥州、思入れして、）
奥　州　すりや悋氣ではない。源兵衛さんが大切な詮議者があつてござんした故、それが心許なさに。
おまん　参りましたわいな。
奥　州　はてな。
（トおまんをぢつと見る。花道より、若い者葛籠を持つて來る。）
若い者　奥州様。お寢道具を持つて参りましたが、座敷は此處かえ。
奥　州　ヲヽ此處ぢやわいな。
（ト若い者、寢道具をがつたりと下す。奥州、はつとして、）
これ〳〵葛籠を靜かに置きやいな。
若い者　ハテよう御座りますわい。寢道具が割れ物ぢやあるまいし。
奥　州　でも葛籠がたまらぬわいな。
若い者　それでもお前の葛籠は重いによつて、上げ下しが大儀で御座りまする。外の女郎様方の寢道具は輕いが、なぜお前の葛籠は此様に重たいか知らぬ。
（ト奥州、思入れして、）
奥　州　ナニわしが葛籠ばかりが其様に重たからう。そりやそなたの河岸狂ひが過ぎて弱うなつたのぢや。聞いた事がある。これ、今夜はわしが日待ぢやに、そなたもそれ。（ト楊枝差の中から小判を出して若い者にやる。）
若い者　ハイこれは。
奥　州　河岸へ往つて日待をしや。
若い者　あいゝ。
（ト走つて向うへはひる。おまん思入れして見てゐる。）
奥　州　若しえ、お乳母殿。こなさんは源兵衛さんの大切な詮議者に來さんしたが、心許なうてござんしたとあるが、どう心許ないえ。
おまん　エ。いえ、なんでおらうと、わしや源兵衛殿を連れて歸らうと思うて、迎ひに來やんしたわいな。
奥　州　やれ、それはよう迎ひに來やんした。成程連れて歸らんすがよい。主を此處に置かんすと、酒でも過ぎるとよい事はできぬ。それ〳〵、そんなら斯うさんせ。奥へござんして、奥州が日待に來いと約束故、寶引引きに來たと云はしやんして小座敷に待つてゐさんせ。わしがよい時分に源兵衛さんに會はせやんせう。
おまん　それはお忝う御座りまする。そんなら奥へ参りやせうが、咎めはしやんすまいかな。
奥　州　奥州が客といはんすと、誰も咎める者は御座んせぬ。氣遣ひさんせずとちやつと御座んせ。
おまん　あい、そんならよいやうにお頼

み申しますぞえ。(ト奥へはひる。)
奥州　ついそこの小座敷ぢやぞえ。
(ト思入れして、)嬉しや、源兵衛を早う歸すと安堵する。とてもの事に、由兵衛さんをも歸したいものぢやが、
(ト思入れして、)オヽ、マア人目の隙に一寸。
(ト葛籠の紐を解かうとする。奥より、遣手、膳持つて出る。)
遣手　奥州様。
奥州　ヤア。(トびつくりする。)
遣手　もう座敷へ膳が出ますが、お前は何をなさんすえ。
奥州　あい、わしやあの、それ膳が出るによつて、もう床をとらうと思うて、それで。(ト、うじ〳〵する。)
遣手　輕忽な。お前に床をとれとは誰が言付けます。それはわしがする。マアお前はこつちへ御座んせ。(ト膳を置いて傍へ来る。)
奥州　これ〳〵、よいわいな。わしが自身とるわいな〳〵。(ト思入れする。)
遣手　奥州さんとした事が、めいよ、わしに床をとらせることを嫌がらんして、自身とばつかりとらしやんすが、葛籠の中に何ぞ隱す物でも御座んすかえ。
奥州　いえ、〳〵〳〵、何にも隱す物はないが、なんぢやて、アノ、わしや知らんす通り、小梅村の百姓の娘で床のあげおろしも自身とした故、人のとつた床は寢にくうて、それで。(思入れ。)ハヽヽ、これ、今夜はわしが日待ぢや。こなさんも何も構はずと遊ばんせ。これ。(ト楊枝差から小判を出してやる。)
遣手　アイこれは。
奥州　奥へ行つて、讀でも打たんせいな。
遣手　あいゝ。(ト奥へ駈けてはひる。)
奥州　もうこれで邪魔は入るまい。
(ト葛籠の中より、經若君を出して、捨てゝある膳を見付け、經若君に据ゑる。既喜三太、二階より降りかゝり、見ている。)
喜三太　奥州。
(ト奥州びつくりして、ちやつと經若君を隱さうとする。)
信夫の前殿。邊りへお心を付けられませい。
奥州　ヲヽ。いや奥は日待の遊びで、皆餘念は御座んせぬ。この隙に御膳を上げうわいな。
喜三太　然らば密かに。(ト喜三太、邊りへ心をつける思入れ。)
經若君　出て居ても大事ないかや。
奥州　誰も參る事では御座りませぬ。お氣遣ひなされまするな。

（ト經若君、喜三太を見て、）

經若君　あの侍はや。

奥　州　ほんにお見違ひなされましたらう。ありや厩の喜三太で御座りまするわいな。

經若君　喜三太かや。

喜三太　ハイ、去ぬる頃、箱根に於て御前の危いお身の上を、靜御前と少將が盗出し立退きました所を、直に拙者、これなる信夫の前方迄お供仕りまして、それより斯樣に面容を變へまして客になつて居りまするも、御前のお身の上に若し大事出來致さば、御用にたちまする手段に信夫の前と申合せまして、斯樣に身をやつしまして罷り在りまする。

奥　州　喜三太がいかう苦勞を致しまして、金銀を才覺致して妾が客になつてをりまする故、他の客にも會ひませず、御前を障り無うお隱まひ申しまする。いかい喜三太が忠臣で御座りまする。もとより妾は佐藤庄司元春が娘、繼信忠信が爲には妹で御座りまする。母が縁にひかれて、幼少より小梅村に居りまして、ふと致した縁で曾我殿原の郎黨鬼王新左衞門と子仲までなしまして、御前のまさかの時の力にもと、賴みに思うて居りましたその鬼王が、御前を搦め捕つて出しませねばならぬ仔細御座りまして、曾我殿原へ忠義の爲に身をやつし、梅の由兵衞と申す町人になりまして、ともに詮議の役人、姥の源兵衞と申す者と一緒に奥へ參つて居りまする故、心も心なりませぬが、ちよつと御膳をあげませうと存じまして、お出し申しまして御座りまする。

喜三太　それ、信夫殿、其許へ申譯もない事が御座る。其許から預かつた矢の根の入れた守袋を、何者にか盗まれました。

奥　州　いや、その守袋は虎が持つてゐたが、夫由兵衞が手に入りましたからこつちへ貰ひます。氣遣ひさんすな。元よりあの矢の根は、屋島に於て兄繼信殿が義經公のお身替り、胸板へ受止めたもの。能登殿の、忠義を感じて矢を放すまいとあつたを、童の菊王が支へて射させたとあれば、菊王は云はば兄の敵。幸ひ世にながらへてゐると聞いた故に、巡り會つて當の矢を返さうと思うて、繼信殿の胸板へ受止めた矢の根を、大事にかけて持つてゐますわいな。オヽ、イヤ、これは私事。マア若君樣のお身の上が、いかう危うなつたが、どうぞ急にお供して立退く思案は御座んせぬか。

喜三太　如何にも急に。イヤ承れば若君

詮議の爲に鎌倉より梶原源太が發向して、大門口に密かに目を付けてをると御座れば、たやすくはお供致されまい。何ぞ、若君のお身を隱す物を急に才覺して、オヽそれ、拙者も此姿では目に立ちます。待たつしやれ。(ト小袖をぬぐと下に木綿物を着てゐる。顏の痣を拭き、なでつけの鬘を取つて、)サアこの形で、菓子屋の蒸籠を才覺して、若君を入れまして大門を擔いで出ませう。それ迄必ず油斷をさつしやるな。

奧州　アイ氣遣ひさんすな。早う御座んせ。

喜三太　若君樣。おつつけ參じませう。

(ト行かうとして、)イヤ行かれぬ。(ト俯むく。)

奧州　何故にえ。

喜三太　サア何處へお供申しても金がなければならぬ。

奧州　ムヽ金はどうさんしたえ。

喜三太　こなたの客になつてから毎日毎夜の揚げ詰め。いくらの金でももう御座らぬわい。(ト口惜しき思入れして。)

奧州　というて、どこにお隱し申すというても先立つものは金ぢやが。ハアなんとしたらよからうな。どうぞ、金を急に才覺したいものぢやが。(トいひながら思入れして、)氣遣ひさんすな。どうぞして、わしが出來さうほどに、お前はまづ蒸籠の工面をさんせ。おしつけわしが方から知らせやんせうによつて、仲の町の松屋に待つてゐさんせや。

(ト喜三太、色を直して、)

喜三太　そんなら待つてゐませう。若君樣、後程。信夫殿、おさらば。

(ト花道へ駈けてはひる。奧州、見送り、)

奧州　おいたはしや。讒者の爲に思はぬ憂目にお會ひなされまするな。サア御膳を召上げられませう。

經若君　信夫の前。いつか父上樣の無實の明りが立つて、御代においでなされて、讒言した梶原が首を打つて日頃の無念を晴らしたいわいの。(トほろりと泣く。)

奧州　エヽ、けなげな事を御意遊はしました。

(とほろりとする。奧にて、)

長八　サア源兵衞樣。おいでなされませ。

(ト聲する。奧州、ぎよつとしてちやつと經若君に夜着を着せ隱し、傍におつと思入れしてゐる。奧より、源兵衞、長八、女房お春、禿を連れて銚子盃を持たせて出る。)

お春　奧州さん。源さんのお出でなさんしたぞえ。

奧州　アイ。(ト思入れしてゐる。)

源兵衛　奥州殿。もう床が濟んだか。
長八　奥州樣。膳が見えるがお前は夜食をあがつたか。
奥州　アイ。
源兵衛　ハヽヽヽ。深間と並んで床の上でまゝをあがりなさつたか。羨しいな。
奥州　羨しくばお前も奥へ往つて虎さんと一緒にあがれ。わしや痞氣ぢやによつて、もう寢やんす。サア虎さんの處へ行かんせ。
源兵衛　今來た者をもう追出すきつい好きさ。ヘヽヽヽ、俺が虎が樣な馬鹿女郎を買つてゐるも、さつき云ふ通り讀と唄ですわいなア。(ト思入れして、)幸ひ、野暮大盡殿もゐない。鬼の留主に洗濯と出べい。銚子を持つて來う。
禿一　あいゝ。
(ト銚子盃を持つて來る。源兵衛、盃を取つて注がせながら、禿の顏を見る。)
源兵衛　壽か。
禿二　わしが顏が何が面白いえ。
源兵衛　此奴も女郎になつたら、よく質を置きさうな面だ。
禿一二　わあい。(ト笑ふ。)
源兵衛　注げ。(ト注がせて飮んで、)奥州樣。ちと揚羽の蝶とでようか。こりや古い口だ。俺でもない。
長八　ハヽヽヽ、古い口と云へば源樣、何ぞ新しい落咄でも御座りませぬか。
源兵衛　新しいがあるが、話すべいか。
お春　アイ、聞いて客衆へ賣りやせう。お話しなさんせいな。
源兵衛　然し、もし古いかも知らないが、或る處に爺いと婆あがあつたが、爺いは山へ木をかりに行く。
長八　婆あは川へ洗濯か。古し〳〵。
源兵衛　いんや、やつぱり内に茶を飮んでゐる。
長八　これはえい〳〵。
お春　ほんにこれはどうも云へぬ。もつとお話しなさんせいな。
(ト源兵衛、奥州を見て、)
源兵衛　奥州樣は落咄を聞いても、につこりともせぬが、俺が來たのがそれ程腹が立つかえ。
奥州　いゝえ、わしや痞がおこつて、それで。(ト思入れする。)
源兵衛　御惱氣か。それでも笑はせてみせべい。何を話さう。
長八　マア、わしがちよつと一ツ、話しませう。
源兵衛　古いのぢやないか。
長八　いゝえ、昨日客衆の話したのだ。お聞きなされ。或る處に床髮結が讀に勝つて。
お春　シイ〳〵。
(ト長八が袖を引く。長八口に手をあてゝ

思入れ。奥州笑ふ。）

源兵衛　ハテ大事ない。俺が床髪結になつたり男伊達になつたり、種々に化ける。詮議の魂膽だ。

（ト夜具の方へ思入れ。奥州思入れする。）

ハヽヽ。なんぼ奥州樣が苦り切つてゐても笑はせにや置かない。一ツ話すべい。或る女郎衆の座敷へ泥棒がはひつた。と五丁町が騷いで高提燈で女郎屋の店先を取巻いたれば、泥棒が二階の格子を破つて紅襦袢でぬつと出て、まづ今日はこれぎり。

長八　これは新しい。

源兵衛　えいか。

お春　どうも云へやんせぬわいな。

（ト源兵衛、奥州を見る。奥州、笑うてゐる。）

源兵衛　ホヽ今の落咄を奥州樣の　感まし〳〵て、　顔美しうわたらせ給ふ。有難い。長は。おらは此處で飯が喰ひたい。言付けてくれろ。

長八　あい。わしもお前には飯の思付きでをりました。言付けませう。女共、來やれ。

お春　あい〳〵。（ト立たうとする。）

源兵衛　マア待て。始めての見參に印なうては叶うまじ。（ト云ひながら、鼻紙を一枚長八にやる。）

長八　これは〳〵。女共。神の棚へ上げろ。追付け飯を上げませう。女共來やれ〳〵。

お春　あい〳〵。

（ト長八、お春、禿奥へはひる。）

源兵衛　奥州樣。昔になつたな。お前は小梅村にゐて小梅といつた時、わしや源兵衛堀にゐてお前に死ぬ程惚れて、文を付けたり口說いたり、心を盡くしたが、よく一度も情らしい詞も掛けてくれなさらぬ、それから今に思切られぬ。かういふ首尾も又あるまい。ちよつと久しい思ひを晴らさせて下さらぬか。

奥州　ほんに久しい事をよう今に思つてゐて下さんす。忝う御座んす。したが、わしや知らんす通り、梅の由兵衛といふ男がござんすによつて、どうもお前の心に從う事はならぬわいな。

源兵衛　ハテ、由兵衛といふ男があつても、今では貴樣は傾城だ。客に橫番を切らせると思つて會つて下さい。

奥州　成程、わしや傾城ぢやが、かういふ身になるも勤めは格別。お前に色で會う事はどうもならぬわいな。

源兵衛　ハテ、堅い事をいふ。勤めで會はうが、色で逢はうが、後の減るものではなし、野暮な事を云はずとも、かういふえい首尾はない。ちよこ〳〵と、〳〵。（ト奥州へ抱付く。）

奥州　これ〳〵、ならぬといふに、いけ好かぬ。退かんせ。

(ト突きこかす。源兵衛、こけしなに懷中より金財布を落す。奥州、見て思入れする。)

源兵衛　ハテ張の强い女郎だ。

(ト財布を懷へ入れる。奥州、思入れして、)

奥州　今の金は何にさんすえ。

源兵衛　この金は虎が身請をせうと思ふが、談合が濟むと手付に渡すつもりで持つて來たわい。

奥州　それみさんせ。虎さんを身請する程の仲でゐて、わたしを口說かんすとは、性の惡い。その水臭い心ぢやによつて、わしや合點せぬわいな。

源兵衛　そんなら虎が身請はよしにするが、合點するか。

奥州　何を嘘ばつかり。

源兵衛　ハテナニ、嘘付くものだ。誓文くつされだわい。

奥州　そんなら眞實わしに惚れたに違ひがなくば。(ト云ひ兼ねる。)

源兵衛　違ひがなくば。

奥州　今の金を下さんせ。

源兵衛　ヤ、今の金を吳れろ。

奥州　女郎の口から金を下さんせといふはさもしい奴ぢやと思はんせうが、女郎になる者に一人も親元の良しい者は御座んせぬ。皆、先づ親兄弟の爲に勤めに出やんす。わしも、親の處へ急に金を合力せねばならぬ事があるによつて。

源兵衛　そこで俺に金を吳れろと押付けていふのか。

奥州　サア、お前の、眞實に違ひなうてその金を下さんすと。

源兵衛　金に抱かれて寢るか。

奥州　ハテ、わるがうな事を云はんせずとも、お前はわしに眞實惚れてゐるぢやないかえ。ぢやによつて、遠慮なしに金下さんせと云はれたもの、隔心な人にどう云はれうぞいな。

源兵衛　ヲヽ、元より久しい戀。金は扨置き、首でも遣るが、由兵衛と離れて俺が女房になるか。

奥州　ハテ、勤めする身は夫があつてないやうなもの。そりや、どうなりとせうわいな。

源兵衛　しからばそれ。

(ト金を投げてやる。奥州、取つて、)

奥州　忝う御座んす。

源兵衛　それで俺が心中は見えたか。

奥州　見えいでわいな。

源兵衛　然らばお主が心中を見べい。

奥州　アイ、起請を書いて進ぜやせう。

源兵衛　いや〳〵、空起請は八百枚書いても役にたゝない。

奥州　そんなら髪を切らうかえ。
源兵衛　髪も後から伸びる。
奥州　さうしてどうするゑ。
源兵衛　俺が望みの心中は。
奥州　なんぢやえ。
源兵衛　これだ。（ト奥州が小指を取つて、木枕へ押當て、脇差を拔いて思入れする。）
奥州　マア待たしやんせ。
源兵衛　待てとは卑怯な。
奥州　いゝや、卑怯ぢやないが、わしが小指が無うては女房にさんした時に悪からうぞえ。
源兵衛　いゝや。その女房になる性根を見屆ける爲に切る小指。然も一ト思ひには切らない。そろり／＼とすり切つて、わが土性骨を試す。こたへろ。（ト切る思入れ、奥州痛む思入れする。）痛いか。
奥州　いゝえ。主親の爲には命さへ捨てるを。その大切な主。
源兵衛　主とは。
奥州　サア舅姑を育む孝の爲に、小指一つで三百兩の金を貰ふ事ぢやもの、なんの痛からう。遠慮さんすな。
（トにつこりとする。めりやすになり、源兵衛奥州が顏を尻目にちつと見ながら、そろ／＼とすり切る思入れ。奥州こらへる思入れ。源兵衛、指をすり切ると、奥州ハツと思入れして小指を包む。源兵衛、脇差の血を拭いて、小指を紙に包み。）
源兵衛　小梅、今にても由兵衛が俺を間男だといふと、この小指を見せて、小梅が俺に惚れて、切つて臭れたといふぞよ。
奥州　アイ。（トこちら向いて泣く。）
源兵衛　まつ久しい戀が叶うて、女房にするといふは大願成就だ。善は急げだ。幸ひ、床もとつてある、ちよつと新枕とでかけべい。（ト夜着の傍へ行かうとする。）
奥州　これ／＼。寄らんすな。（トつき退ける。）
源兵衛　なぜ。寝るは嫌か。
奥州　サアどうも今は寝られぬわいな。
源兵衛　そんなら三百兩欺し取りにするか。
奥州　ハテ、ひよつと由兵衛殿でも來ては悪いわいな。
源兵衛　いゝや由兵衛がうせても、小指を持つてゐるから、つかへた事はない。寝ろ。（ト夜着へかゝる。）
奥州　これ／＼聞き譯のない。（トつき退ける。）
源兵衛　默れ。最前から心を付けて見れば夜着の中に人がゐるな。
奥州　エヽ。
源兵衛　それで寝られないな。

奥州　いゝえ。さうぢや御座んせぬ。

源兵衛　默らう。夜着の中にけつかるは間夫だ。由兵衛とは違ふ。源兵衛は鼻毛を讀まれちやゐない。間夫は何奴だ。見べい。（ト寄らうとする。）

奥州　マア待たんせ。成程、夜着の中なは人ぢやが、わしが間夫ぢやない。虎さんと祐成さんと會はれぬ仲を、わしが手管で夜着の中に隠して置きやんした。お前が見さんしては惡い。マア奥へ往つて下さんせいな。

源兵衛　いゝや、祐成なら、尚、見る。退け。（トかゝる。）

奥州　待たんせ。

（ト留める。此うちに、源兵衛が膝の疵を見付ける。）

これこの疵は。

源兵衛　これはかすり疵だ。

奥州　扨は童の。

源兵衛　なに童。わつぱはその夜着の中にゐる。わつぱさつぱと騒いでは爲になるまい。奥州。

奥州　エヽ。

源兵衛　サア、その童の詮議に入込むこの源兵衛。思案をしてものを云へ。奥州。

奥州　成程、この中には大切な御主人。何とぞ、この場を見逃しにして下さんせ。鳥類だにも例あり。溫鳥といふ事があるさうに御座んす。あまり寒夜には、小鳥を捕へて鷹が足をあたゝめて、夜の明けるを凌ぐげに御座んす。夜が明ければその鳥を放して、その恩を思ひ、その日はその鳥の飛んだ方へは行かぬげな。丁度、その小鳥同前、何とぞこの場を見逃しにして。

源兵衛　呉れろか。サア俺が云ふやうにするなら、どうでおらは祐經殿の譜代では無し、くたばらうが構はぬが、由兵衛は兄弟の爲祐經を殺してはたゝぬ身の上。必ず由兵衛に見付けられるなよ。サア此處で寢るがどうだ。

奥州　成程、寢るわいな。

源兵衛　そんなら帶を解くべい。（ト源兵衛帶を解く。）

奥州　まゝ、ちつと待たんせ。

源兵衛　なぜ。

奥州　この指が痛むによつて。

源兵衛　その指が邪魔にはならない。

奥州　サア、そんならば帶を解くわいな。（ト帶を解く。）あまり明うて惡い。この行燈を消して置いて。

（ト乳母おまん、奥より出て見てゐる。奥州火を消す。暗闇になる。）

源兵衛　あんまりこれは暗い。

（ト奥州が帶を取つて抱付く。此うち、奥州經若君を出して奥へ遣る。）

奥州　サア／＼寝るわいな。
（トいひながら、源兵衛つき退け、奥へはひろ。源兵衛尋ねる。）
おまん　源兵衛さんか。
（ト源兵衛、びつくりして、）
源兵衛　や、おまんか。
おまん　おまんが。
（ト傍へ探つて寄るを、源兵衛つき退け奥へ駈けてはひる。此うち、曾我十郎奥より出て、暗闇の思入れして様子を聞く。おまん、源兵衛が落した文を拾うてすかして見る。）
これはなんぢや。何、菊王殿へ尾形の三郎と書いてあるは。サテは童の。（ト云はうとして、）待たんせ／＼。
（ト十郎、そろ／＼傍へ寄る。おまん、十郎を捕へて、）
サア捕まへた。もう放さぬ。（ト十郎をこづく。）
十郎　これ／＼。俺だわい／＼。
おまん　俺でなうては。エヽほんまに憎い。（ト十郎が肩に喰付く。）
十郎　あいた／＼。これは迷惑な、俺だわい。
おまん　俺とは誰ぢや。
十郎　按摩取りですわい。
（ト頭を撫でて、膽を潰す思入れ。）
おまん　エヽこれはいかな。心の急いたまゝに人違へをした。許して下さんせえ／＼。
十郎　大事ごんせぬ。お前は姥の源兵衛殿の性根と見える。廓まで、お世話嫉妬とでたな。
（トおまん、じつと思入れして、）
おまん　扨は源兵衛殿の本名は。（ト思入れする。）
十郎　八幡の三郎。
おまん　ハテさうぢやなア。（ト駈けて奥へはひる。）
十郎　エ、あの乳母めを此處で。惜しい事をした。
（ト云ひながら探つて歩く。別當行實、品玉彦六、奥より出る。）
行實　祐成殿。
十郎　誰だ。
行實　愚僧でござる。
十郎　どうか聞いたやうな聲だが、暗くつて知れぬ。誰だ。
行實　ハテ箱根の別當ですわい。
十郎　行實様か、これは／＼お前は女郎買ひに御座りましたか。
行實　つがもない。箱根の別當、女郎を買つてつまるものか。愚僧は其許に會ひたくつて來ました。
十郎　わしに會ひたいとは何ぞ用でも御座りますか。
行實　サア聞かつしやれ、かの判官殿

の箱根權現へ奉納めされた友切丸が紛失して、賴朝公から御詮議が嚴しいが、何者が云ふともなく友切丸をば曾我殿原が盗んだと評判する故、祐信殿へ詮議がかゝり愚僧へも詮議がかゝつて、大騷ぎになつた。

十郎　ハテ、それは。

行實　サアそこで、もし箱王めが盗んだかと思つて欺して聞いたが、あれが仕業でもない。もし貴樣の出來心でものしたなら、そつと愚僧へ返して下され。この事を密かに御意得ようと思つてわざ/\尋ねて來ました。

十郎　成程、友切丸の事は兄弟が兼ての望みを掛けてはゐましたが、全く盗みはしませぬ。

行實　そんなら盗人は他にあるか。

十郎　友切丸を盗人の手へ渡しては大望が。

(ト思入れする。と彥六、此うちそろ/\近寄つて、)

彥六　盗人め捕つた。

(ト行實取つて投げる。十郎、膽潰しうろたへる。)

行實　これ/\祐成。愚僧は盗まぬぞ/\。

彥六　默れ。盗人猛々しい。捕つた。

(ト行實摑み合ひ、立廻りあり。彥六、行實を踏みのめし、裸にする。行實逃げながら、)

行實　これは箱根の別當を、湯屋泥棒を見るやうにしたが、これから直にすた/\坊主とでべい。(ト花道へ行く。)ダも三百。はれ藥袋もない。

(ト云ひながら、向うへはひる。十郎も奧へはひる。彥六、行實が着物を尋ねて奧へはひる。三味線合方になる。奧より奧州、最前の葛籠を引ずつて出る。舞臺の眞中に直し、)

奧州　若君樣を此處に置きましては危い。喜三太殿の來る迄も待たれぬ。葛籠からお出し申してマアこの危い場をお退け申すがよい。さうぢや。

(ト葛籠の紐を解かうとする。奧から由兵衞出る。)

由兵衞　小梅か。

奧州　エヽ。(ト葛籠へ身を寄せて、膽を潰した思入れ。)

由兵衞　はれ、けたゝましい膽の潰し樣な。

奧州　でも、お前の思掛けもなう、小梅かと云はしやんしたによつて、びつくりしたわいな。

由兵衞　ハテいかい臆病者だ。ハヽヽヽ。小梅。俺は詮議者の爲とは云ひながら、たま/\揚屋へ來て女郎も買はずに寶の山へ入りながら手を空しく歸ると思

へば残念だが、なんと久しいぶりでかう寄合つたからは、一戦せずに別れるといふも卑怯の至りと思ふが、なんと、組打とでる氣はないか。

奥州　サア久しいぶりぢやけれども、氣の毒な。折悪うわしや、

由兵衛　口が悪いか。

奥州　癪氣ぢやわいな。

由兵衛　お主は、そんなに癪持ではなかつたが。

奥州　さつきにお前の、源兵衛殿と喧嘩さうとさんした時、はつと思うて癪が差込んで、それが今に下がらぬわいな。おやによつて、今夜はもう氣の毒ながら許して下さんせ。

由兵衛　さう云やれば、無理に嗜まにやならないか。エヽこれなら、新造でも揚げて置けばよかつたものを。算用が違つた。

奥州　さうして、マア、あの源兵衛殿といふ人は底意にお前を睨んでゐるによつて、どのやうな災出來まいものでも御座んせぬ。お前はそつとこれから歸らんせいな。

由兵衛　何を馬鹿をいふ。源兵衛奴はなんだ。あいつ味噌をあげるとはり殺してしまふわ。あいつを怖がつて戻つて男伊達がなるものか。そんなけちな由兵衛ぢやないわい。

奥州　サア、そりやお前の云はんす通りぢやけれども、大事のお身の上ぢやによつて、危い所にゐさんすは要らぬもの。ハテ、今夜に限つた事かい、明日の夜でもいつでも客になつて來て下さんせ。わしもゆるりと話したい。マア今夜は歸つて下さんせ。サア夜の更けぬ内に早う歸らしやんせ。サア、これ、な、これ、歸らんせいな。

由兵衛　この女は滅多に俺を追出したがるが、マアよく思つてみろ。久し振で斯う會ふからは、俺が歸らうと云つても、わりが無理に留めて、帶をひつ解いて、簞笥の引出へ入れて、しやんと錠を下して歸る事のならぬやうにする筈だわ。又さうしてもらはにや嬉しくない。それに、わりや間夫を引込んで置いた女郎が、野暮大盡を歸したがる樣に、意見ごかしに俺へ、歸したがる樣に云ふは間夫でも來てゐるか。

奥州　ハヽヽ。でも扨も、マアそんな解心の悪い。振袖の時に馴染めて、子仲までなしたわしを、今に疑がつて御座んすか。そりやあんまりむごいわい。帶や羽織をかくして歸る事のならぬやうにするも、そりや品により人による。わしとお前の仲が抓つたり抓られたりする仲かいな。野暮らしい。なんぢや腹

を立てさんせうが、どうせうが、斯ういふ危い處には置かぬ。サア〳〵、歸らんせ〳〵〳〵。（ト由兵衛を押出す。）

由兵衛　これ何をする。放しやあがれ。（ト奥州が手をとつて、小指の包んだをひよつと見て、）こりや小指はどうした。（ト手を捉へる。）

奥州　エヽ。（ト手を引かうとする。）

由兵衛　待て。（トどつと捉へる。）指を切つたな。これで、俺を歸したがる狂言がさらりと解けた。ハテ大きな藝をひろいだな。由兵衛だぞ。梅の由兵衛だぞ。悋氣嫉みをする未練な根性なれば、たかでうぬを賣女にや出さない。うぬが賣女になつたも、もと俺が貧しい付我に仕へて苦勞するを見て勤め奉公に出て、その身の代を以てお主への貢にさせうと、うぬが方から言出した故。ハテ奇特な者だな。土に喰り付くとも、女房に勤めをさせるは口惜しいが、忠義に恥を顧みる事はないと、そんなら勤め奉公に出て、俺に忠義をたてさせてくりやれ、賴むぞよ、忝いぞよと、男泣きに泣いたを覺えてけつかるか。辛い勤めをすれば樂みも無うては勤まらぬ。好いた男があらば色もしろ。廓にゐる中は大事ないが、俺が面の汚れるやうな事をば必ずしてくれるなといつた言葉を忘れて、うぬは小指を切つて、俺が面へ泥を塗るわ。男をたてる梅の由兵衛が女房が指を切つて、俺が世間へ面が出されるものかい。情ない事をひろいだな。（ト思入れする。）

奥州　道理で御座んす。さぞ腹が立たう。言譯の品は海山あれども、どうも今はその言譯がされやんせぬ。許して下さんせ。堪忍して下さんせ。（ト噎返り泣く。）

由兵衛　許すの許さぬのといふ事は、そりや事による。由兵衛が男が廢つたわやい。何奴とひろいだ。ぬかせ。間夫といふも間男といふも、頰は面だ。重ねて置いて四ッにする。何奴だ。何處へおつ隱して置いた。出しやアがれ。出さないと骨を拉いでも出さすが、うぬ。（ト奥州が胸座を取つて引寄せる。）

奥州　マア急かしやんすな。今云ふ通り、どうも今は言譯がならぬ。明日迄待つて下さんせ。お前の男の立つやうにしやんせう。情ぢや。慈悲ぢや。拜みますわいな〳〵。（ト泣く。）

由兵衛　太い奴だ。うぬに情も慈悲も要るものか。ぶつ放すわやい。サア、間夫を出せ。間男を出さないか。四足めが、人非人めが、畜生めが。

（ト叩いたり、踏んだり、種々に打擲して髮も引きほどき、小袖も引き裂かれて　思

入れする。）

うぬはこれでも間夫を出さないな。家捜しをするぞ。見ろ。

（ト葛籠へ掛らうとするを、奥州、ちやつと由兵衛が足にしがみ付き、）

奥州　待つた。待つて下さんせ。

由兵衛　うぬ、間夫めを構ひだてをひろぐと踏殺すぞ。

奥州　サア、踏殺すとも切るとも、お前の存分になりませう程に、マア聞いて下さんせ。わしが指を切つてはお前ばかりへたゝぬぢやない、わしもたゝぬぞえ。ハテ梅の由兵衛が女房小梅と、世に謳はれるわしが、指を切つて人に面が向けられうか。お前が助けて置かんせうが、それに恥も命も捨てゝ指を切つたは、譯があらうと了簡さんして、明日迄待つて言譯を聞いて下さんせぬは、日頃のお前でもない。あんまり理強い。慈悲で御座んす。どうぞ明日迄待つて下さんせいな。（ト泣く。）

由兵衛　エ、うぬは切つても血の出ない奴だ。その口車で由兵衛を茶に醉はせべいとか。うぬが指を切つたに何の譯があんべい。譯は間夫狂ひだ。助平めが、播磨鍋めが。退きやァがれ。

（ト奥州を蹴倒して、葛籠へ掛らうとするを、奥州、ちやつと由兵衛を突退けて、葛籠を後へして立塞がり、）

奥州　これ／＼、待つて下さんせ。言譯が御座んすぞ。

由兵衛　言譯も絲瓜も要らない。間夫めを淩ひ出さないと、葛籠へ拔身を突込むぞ。

（ト思入れする。奥州思入れして、）

奥州　そんならどうあつても間夫を出さねば合點さんせぬな。

由兵衛　くどい。

奥州　エヽ、是非に及ばぬ。葛籠の中の間夫は。

由兵衛　何奴だ。

奥州　名を云うたならこの場を了簡さんして、明日迄待つて下さんせうかえ。

由兵衛　サアまづ名をぬかせ。

奥州　葛籠の中の間夫は。

由兵衛　何奴だ。

奥州　姥の源兵衛殿で御座んすわいな。

由兵衛　ヤア葛籠の中の間夫は姥の源兵衛だ。

（ト奥にて、）

源兵衛　姥の源兵衛は此處に居る。

（トつか／＼と出る。奥州、はつと思入れして葛籠に心遣ひする。由兵衛ぎよつとして、）

由兵衛　源兵衛か。

源兵衛　奥州、姥の源兵衛は今迄奥座敷に女郎を買つてゐたが、葛籠の中に姥

の源兵衛がゐるとは。俺や、陰の煩ひはしないぞ。但し、狐かなんだ。正體を見べいわい。

由兵衛　ハテさて、うぬはまざ〳〵しい噓をつきやァがつたな。サァうぬ眞直に間夫の正體をぬかさないと、息の根をぶつ止めるが、白狀ひろがないか。

源兵衛　これ由兵衛。間夫の詮議はもうわがするに及ばぬ。俺がする。奥州は俺が女房だ。

由兵衛　待て、奥州をわが女房だとはそりやなんのこつた。

源兵衛　奥州が俺に惚れて指を切つたが、わりや知らないか。

由兵衛　ヤ、扨はあの小指は。

源兵衛　俺へ心中に切つた。しかも唯も切らない。小指一本が金三百兩。現金にしてやつて、その上で間夫をひろぐとは、こいつは身體を切賣りにさせて、その上汁を喰ふ奴か。(ト由兵衛を見て、)なァ、この葛籠の中にけつかるぞ。

由兵衛　ハテ扨、うぬは言語に絶した畜生めだな。源兵衛に指を切つては猥褻が大きいぞ。源兵衛。先づわれと詰開きをしまつて、葛籠の中の間夫の詮議にかゝるべいか。但し、われをばマァ後へ廻すべいか、どうすべい。

源兵衛　由兵衛。間夫の詮議は斷うするわ。

(ト源兵衛、葛籠の上へ上り、刀を抜き葛籠の中を突く。血流れる仕掛け。兩人思入れ。奥州敗亡して、)

奥州　エヽ、是非に及ばぬ。(ト泣き沈む。)

由兵衛　源兵衛。手ばしこい事をしたな。

源兵衛　ハテ、いつ迄だら〳〵と詮議するものだ。早くおつ片付けてしまつて、小指の詰開きをするわい。葛籠の中の間夫め。念佛でも唸つてくたばれ〳〵〳〵。

(ト刳り、抜身を抜く所を由兵衛見て、ヤツと、刀へ思入れするを、源兵衛ちやつと抜身をこちらへかげにして、衣裳をつかみ上げて血を拭き乍ら、尻目に由兵衛と顔見合せ、互にじつと思入れ。奥州、ちやつと由兵衛が脇差を抜いて、)

奥州　お主の敵遣らぬわ。指を切つたも疑はれたも經若樣を助ける爲。斯くなり給へば、生きてせんない命、源兵衛覺悟。

(ト切り掛ける。ひつ外し、葛籠の蓋をとる。中から乳母おまん、血だらけになつて轉げ出る。皆々、膽潰す。)

源兵衛　ヤア、こゝゝこりやおまんだ。どゝゝどうして葛籠の中にゐたやい。これ、おまん。源兵衛だぞ〳〵。

(ト介抱する。奥州も介抱して、)

奥州　ても扨も、思ひもよらぬ。こなさんはどうして葛籠の中にゐさんしたぞいな。

（トおまん、思入れして、）

由兵衛　手は淺いぞ〳〵。

源兵衛　氣をはつきりと持て。

（トおまん、思入れして、）

おまん　源兵衛さん。

源兵衛　ヤヤヽ。

（ト傍へ寄る。おまん、源兵衛が手を取つて、）

おまん　由兵衛さん。

由兵衛　ヤ。

おまん　奥州さん。

奥州　エヽ。

（トおまん、奥州が手を取つて頂き、）

おまん　奥州さん。私がお前の葛籠の中にをりましたは、經若樣のお身替り。

奥州　これ。（ト思入れする。）

おまん　ア、いや、もう源兵衛さんが、經若さんをお前の隱まうておかんす事を知つてゐますによつて、もう隱されませぬ。私はお前の兄上樣、繼信樣忠信樣の乳母、信夫の藤太が娘で御座りますわいな。

奥州　ヤヽ、なに、そなたが信夫の藤太が娘ぢや。ても扨も、不思議に廻會うたな。さだめて樣子があらう。身をもまずに心靜かに云や。エヽ、いぢらしい。

おまん　私は、どういふ惡緣か、源兵衛殿と女夫の語らひを致しましたが、今宵、經若樣を詮議の爲に廓へ參りました故、心なりませず、悋氣に事寄せ參じました。最前、源兵衛殿と虎さんの物語を立聞きしましたが、虎さんは能登守教經樣の姬君、源兵衛殿は童の菊王で御座りまする。

由兵衛 源兵衛　ヤア。

（ト源兵衛、ぎよつとする。）

おまん　繼信樣を教經樣へ支へて射させた菊王、お前の日頃お恨みで御座りますると聞き及びまして居りましたが、その菊王とも知らず、源兵衛殿に馴染め、最前本名を始めて聞きまして驚きまして御座ります。一度言交しました夫を、今更捨つるも道ならず、女夫になつてはお主樣の仇、お前へたゝず、なんと爲うかと思ひ煩うて居りまする折から、源兵衛殿の奥座敷で、お前の葛籠に經若樣のお忍びなされて御座るを悟つて、失はうといふ色目を見ました故、密かに經若樣をお隱し申して、私が入替り、せめてもお身替りに立ちますが、これ迄お主樣の仇と女夫になつた申譯。その志が届いて、しかも源兵衛殿の手にかゝりまして、わしや本望に御座りまするわいな。

（ト泣いて思入れ。奧州、目拭ひながら介抱する。）

奧　州　ても扨も、男に勝る忠心。出來しやつた。嬉しいぞや。お二人さん。樣子をお聞きなさんしたか。

由兵衞　サア、女には珍しい健氣な志だ。さしもの源兵衞もこりや泣かずばなるまい。

源兵衞　鬼の目にも涙と、胸が一杯になつた。日頃は澤山さうに、打つたり叩いたり、いぢりせつちやうしたが、斯ういふ事になつたれば不便な。（ト泣く。）おまん。如何さま、繼信が家來の娘なら、俺に添つては主へたゝぬによつて、幸ひに經若の身替りとは出來した。後は俺がよく弔つてやる。言置く事あらば。

おまん　言置く事はなんにも御座んせぬ。たつた一ツお前へ願ひ、經若樣へお身替りにたつたわしが心を無にせずに經若樣をお助け申して下さんせ。言置く事はこればかり、千部萬部の經よりも、それがわしが菩提になるわいな。

（ト由兵衞、源兵衞が顏を見る。源兵衞あちらへむく。）

源兵衞さん。

源兵衞　苦しいか。

（トおまん、源兵衞が顏をじつと見て、）

おまん　たとへお前がお主樣の仇敵にもせよ、一度女夫の語らひをしたからは、未來迄も女夫で御座んすぞえ。わしが死んでも、必ず女房を持つて下さんすなえ。

源兵衞　ナニ持つものだ。

（ト泣く。おまん思入れして、）

おまん　奧州さん。わしやもう目が見えぬ。折角御機嫌よう。（ト苦しむ。）

奧　州　エヽ可愛やな。これ、念佛々々。

おまん　南無阿彌陀佛。

源兵衞・由兵衞　南無阿彌陀佛。

奧州・おまん　南無阿彌陀佛。（ト思入れして死ぬ。）

三　人　南無阿彌陀佛。

（ト泣く。源兵衞、脇差を拔いておまんが首を切らうとする。）

由兵衞　待て。源兵衞そりや何をする。

源兵衞　女房が願ひの通り首を切つて經若の。

由兵衞　身替りか。

源兵衞　如何にも。

由兵衞　いゝや、そりやなるまい。

源兵衞　なぜ。

由兵衞　ハテ僅かに十一二になるかならぬ經若殿の身替りに、廿歳前後の女の首がなるものか。實檢にいれると直に事が現れて、兩人落度になるわい。

源兵衞　そんならこいつは犬死させて、正眞の經若の首を打つて出すか。

由兵衛　云ふにや及ぶ。經若殿の首を打つて出さねば祐經殿の切腹なされて、祐成兄弟が年來の本意を失ふによつて經若殿の詮議を願つて來たからは、何處にどういふ引釣り引張りがあらうとも、正眞の經若殿の首を打つて出さにや、俺が主への忠義がたゝない。われも勿論心ず女房の願ひだなんどと血迷つた事を云つて、役目を粗末にするなよ。

源兵衛　尤もだ。然らば奥州。もう經若の命は逃れはないぞ。

奥州　サア、エ、折角、信夫の藤太が娘お身替りになつた效も無う御生害なされねばならぬ仕儀になつたか。よく〳〵御運つたない若君樣ぢやな。この上はわしが如何程詞を盡しても御了簡は御座んすまい。是非に及ばぬ。さりながら、義經公の若君樣で御座んす。潔う御生害を遂げられまするやうに、御覺悟を致させまして、せめてわしが御介錯申してお首を給はりたう御座んす。この願ひを、お二人さん、お聞屆けなされて下さんせいな。

源兵衛　由兵衛。どう思ふ。

（ト由兵衛、源兵衛、顔見合せ、）

由兵衛　お身はどう思ふ。

源兵衛　女房めが願ひも。（ト云はうとして、）斯う云つたら又未練なと思はうが、せめてこれ程の事は。

由兵衛　聞屆けても大事。

源兵衛　あるまい。お身さへ。

由兵衛　得心したなら。

源兵衛　おりやどうでもだ。

由兵衛　ムヽ。お身がその心なら、何が扨、然らば奥州、暫らくの猶豫はするが、今宵の中は延ばされぬ。

源兵衛　七ツの鐘を限りに。

奥州　お首を打ちませう。

由兵衛　然らばいざ奥へ來て心靜かに。

源兵衛　經若殿の最後の。

由兵衛
源兵衛　用意をしろ。

奥州　アイ。

（ト泣く。唄になり、三人思入れして奥へはひる。奥より、彦六、禿二に覆面頭巾させ顔を隱し、その上に猿轡をはめ、ひつ抱へて駈け出る。）

彦六　まんまと經若めをしてやつた。忝い。

（ト駈け出さうとする。奥より虎、駈けて出る。彦六を取つて投げ、禿二をかこつて思入れ。）

イヤ馬鹿女郎めらうぬは、なぜ大切なお尋ねの餓鬼を圍ひだてをひろぐやい。

虎　この若君樣は、梅の由兵衛さんと姥の源兵衛さんの此日頃、心を盡して詮議する經若樣。由兵衛さんにも源兵衛さんにも、緣のある虎が見咎めたから

は、そちが手へは金輪際渡さぬ。女子ぢやと思うて侮つて怪我せぬ先に、早う歸れ。

彦　六　おやつかな。この馬鹿女郎めは、思の外な御託をあげるが、その餓鬼めは品玉の彦六が出世の玉だが、うぬ、渡さないとばらすが、おつと云つて渡さないか。

虎　愚かや、勤めはすれど世の常の女郎ぢやないぞ。侮つて怪我するな。

彦　六　甘口な。うぬ、渡さないか。

虎　渡さぬ。

彦　六　渡せ。

虎　渡さぬ。（トじり／＼思入れする。）

彦　六　イヤ渡せ。

（トかゝる。兩人にて種々の立あり。虎、彦六を殺す。後より奥州出て見てゐる。虎、彦六が死骸を片付け。）

虎　サア虎がお供致しまする。おいでなさんせ。（ト禿二を連れて行かうとする。）

奥　州　虎さん。待たんせ。

虎　エヽ。（ト振返り。）奥州さんか。

奥　州　最前おまんが若君樣を何處へお隱し申したか、御座り所が知れいで、わしや奥を一遍尋ねてゐたが、はれやれ、危い所をようお前は健氣な働きをして、御難を救うて下さんした。忝う御座んす。

虎　あい。良い處へわしが來合せて御難を救ひましたが、もう此處にお忍びなさんすは危い。マア、早うわしがお供して立退きませうわいな。

奥　州　それは重ね／＼お志、忝う御座んすが、若君さんを詮議さんす祐成樣に縁のあるお前へ。

虎　若君樣を預けるは心許ないといふ事かえ。

奥　州　いゝや、若君樣は今宵七ツを限りにお首を打つて、由兵衞さんと源兵衞さんへ渡さにやなりやんせぬわいな。それで、どうもお前には預けられぬわいな。

虎　奥州さん。素人にいふ樣な事を云はんすな。お前の身替りの心掛けも知つてゐるわいな。

奥　州　エ。

虎　ハテ、身替りの時刻が延びて、若君樣の命に及んだなら、美事お首を打たんすか。よもや打たれはしやんすまい。ナア、そこでお前に身替りをたてさせては、虎が祐成樣へたゝぬ故。

奥　州　サア、それで若君樣を奪取つて、祐成さんへ渡すのぢやな。

虎　サア祐成さんに若君樣のお首を打たせて、祐經樣のお命を助け、本意を遂げさせませうと、一筋に祐成さんへ心中を盡す、虎が命に懸けて若君樣をお供

して。
奥州　立退かせて、立たうか。渡しや。
虎　ならぬ。
奥州　渡しや。
（ト兩人、立廻りにて、禿二を引合ふ拍子に覆面頭巾とれる。奥州、見て、）
ヤア、こりや經若樣ではない。こなさんの禿ぢやが、この子を若君樣に仕立てゝ、祐成さんへ渡さうといふお前の心はえ。
虎　サア若君樣をお前の隱まうて置かんすを、わしが知りながら祐成さんへ隱しては不心中。操がたゝぬ。ぢやと云うて、若君樣の訴人はならず。せめても祐成さんへ言譯に。
奥州　身替り思付かしやんした。ても扨も、貞節な。人は氏より育ちといへども、流石、教經樣の姫君。
虎　これ〳〵。
奥州　さうして、マア、經若樣は何處に御座んすえ。
虎　最前おまん殿とやらが經若樣へ何やら云ひ含めて床の下へ。
（ト炬燵の炭櫃を上げる。經若、禿二の形にて顏を出す。）
奥州　嬉しや若君樣か。
經若　信夫か。
（ト奥にて、）
若い者　虎樣〳〵。
（ト呼ぶ。兩人、思入れして、ちやつと經若を隱し、炬燵を直して置く。）
虎樣〳〵。（ト呼ぶ。）
奥州　又呼ぶわいな。
虎　あい、一寸行つて來やんせうぞえ。
（ト傍にある一腰を取つてはひる。）
奥州　はて扨、嬉しや。
（ト禿二が顏を見て思入れする。若い者出る。）
若い者　この餓鬼めは何をして此處にゐる。忙がしい。うしやあがれ。（ト引立て行く。）
奥州　これ〳〵。その子の着てゐる小袖はわしが禿の小袖ぢやぞや。
若い者　あい、今脫がせておこしませう〳〵。（ト連れてはひる。）
奥州　エヽ、あの子が良いお身替りぢやものを、殘念な。最早段々夜も更ける。最前思ひ付いた通りに、わしが禿の大吉をお身替りに、大方そこらに假寢をしてゐるであらう。そつと殺して、というても刄物はなし、えゝ今の虎さんの刄物を止めて置けばよかつたもの。ぬかつた事をした。アヽ、どうぞ、刄物を才覺。オヽ、それ、二階の客衆の刄物をそつと、それ。
（ト身づくろひする。長八、生醉にて脇差を持ち奥から出る。）

長八　ア丶きつう酔うた。モウ寢よう。ちつと風に吹かれて見ようか。（ト云ひながら、奥州に突當る。）誰だ〳〵。

奥州　長八さんか。これはきつい酔ひやうな。（ト脇差を見て、思入れ。）お前が突當らんしたによつて、脊中を打ちやんした。ちつと、揉んで下さんせ。

長八　はてあぶない事。どれ〳〵揉んでおけまんせう。

（トたわいない思入れ。此うち、奥州が肩揉む。奥州、長八が持つてゐる脇差の柄を膝にて押へ。）

奥州　ア丶もうよい。行つて寢さんせ。

長八　そんならやうごんすか。この腰差は奥座敷の客衆のだ。（ト鞘を持つて立つ。と鞘ばかりになるを知らずに持つて、よろ〳〵しながら奥へはひる。）

奥州　エ丶、嬉しや。天の與への双物。まんまと手に入れた。これで。

（ト奥を思入れする。禿大吉、禿二が着た若君の小袖を持つて出る。奥州行當り、びつくりしてちやつと抜身を隱す。）

大吉　太夫さんかえ。

奥州　この子とした事が。すでに行當らせうとした程にの、又居眠つてゐだな。

大吉　い丶や。わしや道中双六を振つてゐやんしたが、七介殿がこの小袖をお前の處へ持つて行けといひやんすによつて、來やんしたわいな。

奥州　オ丶、こりや無うて叶はぬ小袖ぢや。

大吉　この小袖は誰がのぢやえ。

奥州　ヤ、オ丶。この小袖はあの、明日わしが芝居見物に行くによつて、われに着せて連れて行かうと思うて、誂へて拵へた程に、ちよつと着てみや。

大吉　あい。それは嬉しや。着てみやんせう。

（ト奥州、大吉に小袖を着せ替へ。）

奥州　オ丶、よう似合うたわいな。

大吉　そんなら、ほん〳〵に明日これを着て、芝居へ行きやんすかえ。

奥州　オ丶、明日、夜の中から堀の船に乘つて兩國迄行くが、今から髪を結はねば間にあはぬによつて、一寸わしが結うてやらう程に、炬燵にあたつて一人で道中双六でも振りや。

大吉　あい〳〵。わしやもう、嬉しうてどうもなりやんせぬ。

（ト炬燵にあたり、櫓の上に双六置き振る。奥州、櫛箱を持つて來て、思入れして邊りを見廻し、神酒の口をとり、若君の撥元結のやうにこしらへ。）

奥州　こりや、明日の芝居は晴ぢやによつて良い撥元結で結うてやるぞや。

大吉　あい、それは嬉しう御座んす。

（ト道中双六の骰を轉がして、一人思入れ。奥州大吉が髪をなほし見て、）

奥州　これではほんの若君樣。（ト云はうとして思入れする。）

大吉　エ。

奥州　サア、芝居で狂言にする若君樣の髪の樣に美しう出來たわいな。

大吉　それは嬉しう御座んす。

（ト奥州、投身をそつと後へ、）

奥州　南無。（ト振上げて、切り兼ねて涙ぐむ。）

大吉　お前は何いはんす。

奥州　ヤ、イヤ、その道中双六を振つてみやといふ事よ。

大吉　アイ／＼。振つて見せやんせう。

（と骰を轉がす。）

奥州　骰の目はなんぢや。

大吉　六が出やんした。

奥州　六なりや何處ぢやや。

大吉　日本橋。

奥州　品川。

大吉　川崎。

奥州　神奈川。

大吉　程ヶ谷。（ト骰を持つて算へる。）

奥州　南無。（ト振上げて切り兼ねてほろりとする。）

大吉　南無ぢや御座んせぬ。戸塚で御座んす。

奥州　ほんに戸塚ぢやものを、粗相な。サアおれが名代を振りや。

大吉　あい／＼。（ト振る。）

奥州　何が出た。

大吉　四が出やんした。

奥州　四ならどこぢや。

大吉　藤澤。

奥州　平塚。

大吉　小田原。

奥州　南無。（ト振上げて、切り兼ねる。）

大吉　わあい。南無ぢや御座んせぬ。箱根ぢやものを。

奥州　ほんに、箱根ぢや。箱根の賽の河原へ行くか、可愛いや。（ト泣く。）

大吉　誰が賽の河原へ行くえ。

奥州　ヤ、イヤ。オヽそれ、その箱根の處の繪を見や。賽の河原が。

大吉　どれえ。

奥州　それ。

大吉　どれ。（ト思入れするところを。）

奥州　南無阿彌陀佛。

（ト大吉が首を切る。と首、仕掛けにて炬燵の上を走つて下へ走る。奥州、つかつかと行つて、首を取上げ、顏を見て、わつと泣沈む。七ツの鐘鳴る。奥州ぎよつとして指を折り、思入れして大吉が白無垢の袖を引きちぎりて包む。奥にて、）

由兵衛　源兵衛。七つを打つたぞ。

源兵衛　合點だ。

（ト兩人出る。奥州、涙を拭ひ思入れして居る。）

由兵衛　奥州。經若殿の首を打つたか。

奥州　あい。

源兵衛　どれ見せろ。

奥州　あい。

（ト兩人の前へ行き首を見せる。兩人、きつと見て、）

源兵衛　由兵衛。ハテ思切つてよく切つたな。

由兵衛　サア、小指を切賣りにする根性程あつてよく切つた。

奥州　三代相恩のお主樣のお首を打つたは鬼王とも魔王とも思はんせうが、とてもお助かりなされぬお命、他手にかけまするは、口惜しう御座りまする故、これも忠義の一筋と、思切つてお痛はしい事を致しました。

（ト泣く。源兵衛首を布に包み抱へて、）

由兵衛　源兵衛。その首をどうする。

源兵衛　大門口に梶原源太殿がゐられるによつて、早速、實檢に入れ鎌倉へ注進して工藤殿の安堵させる。

由兵衛　すりや、お身一人の手柄にするつもりか。

源兵衛　いゝや、兩人心を盡し尋出し、首打ちましたと披露する。氣遣ひするな。追付け立歸つて、小指の詰開きをすべい。

由兵衛　面白い。然らば、必ず待つてゐるぞ。

源兵衛　如才ない。奥州でかした。われもどこへも動かずに待つてゐろ。由兵衛。

由兵衛　源兵衛。

源兵衛
由兵衛　後に會ふべい。

（ト思入れする。三重にて、源兵衛向うへはひる。）

由兵衛　ハテ扨、われは思切つてよく打つたな。

奥州　逃れぬ場になつて、是非に及ばず、心を鬼になつて可愛い事をしましたが、よう了簡を。

由兵衛　これ／＼、むざとした事いふな。耳へ入ると濟まされぬぞ。さしもの源兵衛がすみづもつかずに、早々梶原に見せて、うぬ一人の手柄にせうと駈出してうせたからは、あの若君の首で工藤殿の切腹御赦免相違ない。先づは安堵した。出來した。

奥州　あい。嬉しう御座んす。そんならこの指を切りました言譯も。

由兵衛　聞くに及ばぬ。今の若君の事について、金が欲しさに三百兩を見込んで指を切つたであらうが。

奥州　あい。無理に源兵衛めが切りましたわいな。

由兵衛　ハテ、憎い奴めだな。

奥州　いやもし、憎い奴の段か。それに逆にぢに、今私の詰開きに來ようと詞をつがうて行きましたが、會うては事が喧しい。お前は今から歸らんせいな。

由兵衛　いや歸られぬ。

奥州　ハテ、それが惡いわいな。

由兵衛　イヤ、歸られぬと云ふは、あいつが最前一腰を葛籠へ突込んだ時、ちよつと見咎めたが、確かに紛失の友切丸だ。兼て箱根權現靈夢によつて、御兄弟樣の望まつしやる名劍。それと睨んでは手延にはならぬ。こつちからしかけて引つたくり返す。さらば。

（ト行かうとする。奥州、留めて。）

奥州　待たしやんせ。源兵衛も世の常の者ぢや御座んせぬ。時節もあらう。マア今夜は見逃しておかんせいな。

由兵衛　いゝや、天の與ふるを取らざれば、却つて其罪を受くる。片時も猶豫がなるものか。馬鹿な事を。留めるな。退け。

（ト奥州をはふり投げて、駈出す。奥州も追駈けて行く。）

幕

男伊達初買曾我

四

一　一時清兵衛　　七五郎
一　大磯屋虎　　藤藏
一　十郎祐成　　七三郎
一　由兵衛　　廣治
一　かめん坊平左衛門　　五郎三
一　三浦奥州　　菊次郎
一　源兵衛　　助五郎
一　若い衆　　大勢

本舞臺。仲の町。雨戸さし、破風の張出し、二階東の棧敷迄一面に屋根庇、氷柱下りあり。日附柱の際に用水桶雪積りあり。その傍に立臼横倒しにして雪積りあり。兩方の棧敷、一面に茶屋の庇、雪積り氷雪下り、橋懸り一面に茶屋、本舞臺花道一

面に雪の積りたる景色。茶屋の軒下に、大磯屋虎、下駄傘にて客をつけてゐる思入れにて居る。臆病口の方より、歸る客大勢、種々の形にて、或ひは羽織を被り、或ひは頭巾頬被りにて、雪をはたき乍ら出る。騒ぎにて幕開く。始終雪降る。

㐅 扨々よく降る事ではある。この春は、正月度々雪が降るが、雪は豊年の貢といへば、これも芽出度いかい。

△ 芽出度いかなんだか知らぬが、この雪に馴染なら傘でも借すべいが、初會といふものはけちなものだ。

(ト虎を見て。)

□ サアあの様に雪をもいとはず、深間の客をつけてゐる君もあるに、おらが相方めはつう〳〵と寢て、歸るかともぬかさない。

(ト云ひ乍ら、皆々花道へ來る所を、向うより奥州、下駄傘にてお客と摺違ひながら客の被つてゐる羽織を取ると、片目潰れたなでつけの侍なり。奥州、顔を覗いて。)

奥州 オヽ、怖。

(ト侍を突退ける。)

⊕ これは狼藉な。

(ト思入れする。奥州その次の客の頬被りを取ると、白髪の親仁なり。奥州、顔を覗いて見て。)

奥州 すかや。

(ト突退ける。親仁、懐より錢を四五百落し。)

親仁 ハイ釣の錢を落した。

(ト取る。奥州突退け、次の客の頭巾を取ると藥罐頭の坊主。奥州、頭を覗いて見て。)

奥州 笑止。(ト突退ける。)

坊主 南無妙法蓮華經。

(ト思入れして、皆々逃げて入る。ト奥洲、虎を見て。)

奥州 そこにゐさんすは虎様ぢやないかえ。

虎 奥州様かいなァ。

奥州 お前は十郎様をつけてゐさんすかえ。

虎 アイ、主に會はねばならぬ用が有つて、つけてゐやんすが、お前も由兵衛様をつけるのかえ。

奥州 さいなァ。さつきに由兵衛殿が源兵衛殿と討果すと云うて、わしが留めるを振切つて駈出した故、心許なうて、廓中を一遍尋ねて歩きやすが、お前は源兵衛様に會はさんせぬかえ。

虎 いゝえ、宵に會うた儘で會ひやんせぬが、さういふを聞いてはわしも心なりやせぬ。共々尋ねやせうわいな。

奥州 アイ、そんなら又伏見町から一遍探して歩きやせう。こつちへ御座ん

せいなア。

虎　サア行かしやんせ。

（ト合方になり、兩人臆病口の方へはひる。ト臆病口より、十郎、丸編笠に雪の積つたるを杖の先につけ、傘の樣にしてさし、最前の麻袴を肩から前へ引つぱり、藥草履はき出る。雪降る。）

十郎　オヽ寒い〳〵。扨も降つたる雪かな。ソレ雪は鵝毛に似て。こんな仔細らしい事を云ふ人柄でもない。エヽ口惜しい。世にある人は此雪に居續けと出かけるであらうが、傘一本の才覺さへならず、漸く供部屋の口に有つた編笠を盗んで頭の雪はしのげども、一帳羅を濡すが悲しさに、麻袴を引つぱつて、人が見たなら雪の化物だと云はう。郭公曉笠を交せけり、といふ句もあるが、この寒さでは仲の町の雪の曙の趣向も出ぬ。これはいかな、水湊が口へはひつた。アヽ寒い。（思入れ。）「駒止めて袖打ち拂ふ蔭もなし。」

（ト謡をうたひながら行かうとする。軒の下に寢て居る犬、起き、吠えかゝる。）

すつとめ〳〵。こいつは俺を乞食だと見たさうな。すつとめ〳〵。

（ト追ふ。犬喰付かうとする。十郎、草履をぬいで犬へ投付ける。犬飛びかゝる。十郎、杖にて拂ひ。）

ヤアおろかや、己。如何程はやるとも曾我の十郎祐成が手並は兼て知つつらん。イデ物見せんといふ儘に、

（ト杖にて犬とからかふをかしみあり。犬におつ轉ばされて。）

コレ〳〵、犬ぢや人。謝つた〳〵。

（ト思入れする。奥より、虎、下駄を持つて走り出て。）

虎　これは〳〵、誰か知らぬが憎い犬めではあるぞ。すとつめ〳〵。

（ト礫打付ける。犬逃げる。）

コレ〳〵犬は逃けやんした。起きさんせ〳〵。

（ト十郎、思入れして。）

十郎　ハレヤレ、ひどい犬めだ。すでに犬死する所であつた。何方か良い所へお出でなされて危い命を。（ト虎を見て。）ハヽア虎か。

虎　十郎樣か。エヽたしなまんせ。わしや廓中を尋ねて歩いたわいな。ナゼ沙汰無しに歸らしやんす。それぢやによつて度々地廻りに出會つて大きなめに會うたり、今の樣に、犬に迄慰まれさんすわいな。何故わしに知らせて歸らしやんせぬ。

十郎　仰しやるな。御全盛なお傾城樣の、結構な夜着蒲團を召して、淨瑠璃御前の痰の起つた樣にして寢て御座るお座敷へ、おらが樣な目黒参りの夕立に

違つた樣な形でお見舞申すと、忽ち罰が當つて立ちずくみになりますわい。

虎　何を。あれ程昨夜云はぬか。歸らしやんすならいつもの樣に謠をうたはしやんせ。それを待つてゐるぞえと云うて置いたぢやないか。それに何時の間にか沙汰無しに。マアさうして此雪に傘もさゝず、足駄もはかず、其樣に肌薄で、わざと煩ひたいのかえ。エヽ憎らしい。これはかんせ。（ト下駄を直す。）

十郎　この樣な結構な足駄をはいて、足が曲らねばよいが。

（トはく。虎、襠補を脱ぎ、）

虎　これを着さんせ。（ト十郎に着せ、緋扱をさせ、）サアこれをさゝんせ。（ト傘をやる。）

十郎　これはいかい御報謝で御座ります。

虎　サア、これでは雪もしのがれる。早う戾らんせ。イヤ待たんせ。（ト袖の中から守袋を取出し、）コレお前の取返したがらしやんした大切な守袋を取返しやんした。受取らしやんせ。（ト十郎へやる。）

十郎　委細は宵に物蔭で聞いた。今更改めて禮をいふ仲でもないが、この年月、何から何迄いかい其方の志に預かるが、これも先の世の緣でがなあらう。忝いぞや。

（ト守袋を戴きほろりとする。虎も涙ぐみ。）

虎　親方遣手にせかれる仲ぢやに依つて、心に任かせぬ事のみで御座んす。この雪に道の程も思ひやられて、さぞお寒う御座んせうが歸つて下さんせえ。オヽそれ、お前は經若樣のお身替りの事を。

十郎　シイ。（思入れ。）最前、由兵衞に一寸會うて、何もかも聞いて悅んでゐる。モウこの上は五月下旬に。（ト云はうとして思入れ。）

虎　エヽ五月下旬にとはえ。

十郎　ヤ、いや。五月下旬に富士の牧狩があるによつて、その前に俺も曾我へ歸らねばならぬが、それ迄は每晚顏を見に來ようと云ふ事ぢやわい。

虎　アイ必ず晚に御座んせえ。

（ト十郎涙ぐむ。）

お前はなんとしたえ。

十郎　そなたの志が餘り嬉しさに涙が、ハヽヽヽ、いやモウこの樣に溫かな形で土手の景色を眺め乍ら歸るとは、「面白の花の都や、祇園淸水。」

（ト謠ひながら行く。謠の中、矢張、虎聲かけ、）

虎　足駄が小さい。轉ばしやんすな。コレ、必ず晚に待つてゐるぞえ。

（ト十郎、花道の半にて振返り顔見合せ、）

十郎　虎。

虎　祐成樣。

虎十郎　さらば。

（トほろりとする。雪降る。唄になり、十郎思入れして花道へはひる。虎、見送り思入れして、臆病口へはひる。トこの唄にて、兩方に花道より、由兵衛源兵衛半合羽、傘、下駄小提燈さげ出る、源兵衛由兵衛を見てちやつと傘をすぼめ傘の中へ顔を隠し、提燈を吹消し、兩人本舞臺へ來て通りすがりに互によけまいと思入れ、鞘當有つて、源兵衛花道の方へ行かうとする。）

由兵衛　待て。

（ト源兵衛、聞かぬふりにて行かうとする。）

待たぬか。

源兵衛　待てとは俺が事か。

由兵衛　夜目遠目傘の中へ、しやつ面を隠して尻を隠さぬ赤鰯を一本さめてけつかるは、供部屋から戸惑ひをひろいたぶんぬきめしの幽靈と見えるが、男の魂へ後家鞘をぶつつけて、何故一言の辭儀もほざかずにかつつ走る。此處へうせて、雪の中へちよつかいを突込んで、三太をひろけやい。

源兵衛　此奴は洒落た寢言をほざく野郎めだが、うぬは、土手で八文が甘酒を喰つて此處へうせて、百が鐵砲をぶつて歸る二合半の出替り野郎めと見えるが、男を見損なつてじやれかゝるか。うぬ惡くそばへると雪の中へ叩き込んで、鹽漬の死人を見る樣にするが、足下の明るい中に早くなくならないか。馬鹿な野郎めだ。（ト行かうとする。）

由兵衛　待てやい。

源兵衛　うぬは俺を留めるは一番して見る氣か。

由兵衛　雪轉ばしの代りに、踏轉ばして玩びにする。早く此處へうせろやい。

源兵衛　コリヤ一番面白い。雪の降賣り、喧嘩を一番買ふべいか。

由兵衛　賣るべい。

源兵衛　買ふべい。（トすぼめたる傘にて、ぶつてかゝる。）

由兵衛　どつこい。

（ト傘にて受け、互に立廻りあつて、顔見合せ、）

源兵衛　ヤア由兵衛か。

由兵衛　源兵衛。

源兵衛　ハレヤレ、お身とは知らずに既にぶち殺すべいとした。

由兵衛　俺もお身だと知らずに既にぶつた切るべいとした。

源兵衛由兵衛　ハレ麁相な。ハヽヽ。

由兵衛　先づ以て、日頃互に心を盡した

經若丸の詮議。

源兵衛　首尾よく仕了せ、互に。

由兵衛 源兵衛　安堵です。

由兵衛　扨、源兵衛、お身にちつと改めて云ひたい事があつて最前から尋ねて歩いたが、良い所で會つた。一寸、そこへ出て貰はう。

源兵衛　ヲヽ。

（ト兩人舞臺先へ出る。）

由兵衛　今迄は、大事の詮議者を仕了せぬ中は、互に大切な身體故、隨分水魚の如く交つて、蟲に當る事もこらへてゐたが、最早經若丸の首を梶原が請取つて鎌倉へ歸つたからは、お身の旦那殿のお身の上は安體だ。さぞお身は悦びであらう。

源兵衛　サア、この日頃、旦那殿の命を救ひたいと晝夜心を盡したが、首尾よく仕了せて重荷を下した。これといふも偏へにお身が力を添へて吳れたお蔭と、千萬忝い。

由兵衛　これは御慇懃な。俺が身にも掛つた事だものを、禮どころかい。マアこれは扨置き。俺がお身に改めて云ひたい事とは別の事でもない。この由兵衛をちつと立てゝ貰ひたいわい。

源兵衛　立てゝ貰ひたいとは、最前俺が按摩取りを蹈んだ返報を返したいといふ事か。

由兵衛　イヤ、あの按摩取りはその場を按摩取りで仕舞つた。仍つて、今更改めて事を好むにも及ばぬが、立てゝ貰ひたいといふは。

源兵衛　奥州が指を切つた事か。

由兵衛　サア奥州といふ賣女になつてゐても、梅の由兵衛が女房小梅と誰知らぬ者もない。その女房に不義を言掛けて、無態に指を切つたを、知らぬ振りで濟ましたなら、通り者だと云はれべいが、お身も俺もなまじい男伊達と云はれる名題株だけで、鼻を塞いでもゐられない。

源兵衛　ヲヽ男を立てる梅の由兵衛が女房に濡れかけて、無態に指を切るからは、身體は野へ出した死人と算用をしてゐた。幸ひ、人通りもない。心靜かに。

由兵衛　支度をすべい。

源兵衛 由兵衛　イザ。

（ト立別れる。奥より、虎出て、これを見て思入れして、）

虎　源兵衛樣。此處にゐさんすか。

源兵衛　虎か。

虎　わしや、こな樣に急用があつて、さつきから一遍尋ねて歩きやした。よい處で會ひやんした。こつちへ御座ん

せ。

源兵衛　イヤ、俺や此處に用があるが、なんの用だ。

虎　用であらうと急用ぢや。御座んせ。

（ト連れて行く。）

源兵衛　これは惡い邪魔が入つた。由兵衛、今來る。待つてゐやれ。

由兵衛　えい事にして外すな。

源兵衛　源兵衛だ。氣遣ひするな、待つてゐろ。

虎　サア〳〵、早う御座んせ〳〵。（ト臆病口の方へ連れてはひる。）

由兵衛　源兵衛。待つてゐるぞ〳〵。エエ、あいつ殺して友切丸をひつたくるべいと思つたに、邪魔が入つた。今あいつが、俺がすつ隙を見て傘で頬を隠して外すべいとひろいだが、今虎が來たを幸ひにこの場を逃げをらうも知れぬ。逃がしては算用が合はぬ。待て。

（ト奥へはひる。合方になる。奥州出る。）

奥州　由兵衛樣〳〵。エヽどこにゐさんすやら。モシ泰雲寺前あたりで討果しはさんせぬか。心許ない。假令、主に會はいでも、源兵衛に會うたなら、兄樣の敵、本望を遂げたいものぢやが。又一遍尋ねて見ようか。

（ト合方になり、花道へはひる、ト奥より、源兵衛出る。）

源兵衛　由兵衛めが、俺がさしてゐるこの友切丸をしてやりたがつてつけて歩きやアがる。うるさい奴だ。早く歸るべいと思へ共、俺を兄の敵と覘ふ奥州めを返り討にぶつ放して、枕を高くすべいと思つて探して歩くが、まだ揚屋にけつかるか。行つて探して見べい。

（ト花道へはひる。奥より、由兵衛出る。）

由兵衛　ハテ扨、殘念な。源兵衛めをぶつ放して、友切丸をひつたくるべいと思ふ所へ、虎が邪魔になつて、ツイつん逃がしたが、まだ廓の中にからまつてけつかるか。揚屋町を詮議して見べい。（ト臆病口の方へ行かうとして、）いや、モウ揚屋にはけつかるまい。大方、四寸が百藏を買つて味噌を上げてけつかるべい。河岸を捜して見べい。

（ト合方にて、東の通ひ道へ入る。と向うより、奥州出る。）

奥州　由兵衛樣〳〵。これ程尋ねても何處にもゐさんせぬか。エヽ心許ない。オヽそれ、また河岸の方を尋ねて見ぬが、もし近付きでも有つてゐさんすまいものでもない。河岸を尋ねて見よう。

（ト東の通ひ道へはひる。と向うより、源兵衛出る。）

源兵衛　奥州めは揚屋にもけつからないが、もし、河岸の闇で由兵衛めと出會ひ、相圖でもひろいで待つてけつかる

た　河岸を捜して見べい、
（ト東の通ひ道へはひる。ト奥より由兵衛出で。）

由兵衛　ハレヤレ、奇妙な奴だ。河岸にもけつからないが、但し風を喰つて、とうに廓を外しをつたか。イヤ伏見町を捜して見ぬが心掛りだ。捜して見べい。

（ト花道へはひる。ト奥より、源兵衛出る。）

源兵衛　奥州めを、是非今夜ぶつ放すべいと思つて捜して歩くが、今河岸でちらと見かけたは確かに由兵衛めだが、あいつは俺を捜して歩くと見えた。會つては面倒だ。早く廓を外すべい。イヤしたがもう一遍、伏見町の方を捜して見べい。（ト向うへ行かうとして）イヤ奥州めが事は重ねての事にして、マア由兵衛に會はぬ先に早く外すべい。

（ト東の通ひ道を通つて、中の間の歩へ行く。中の間へ下りて、東木戸の方へ行かうとすると、木戸より由兵衛、覆面頭巾にて出て來り、互に行き會ふ。）

由兵衛　源兵衛か。

（ト頭巾を取る。源兵衛、恟りして、）

源兵衛　由兵衛。

由兵衛　用が有る。後へ戻れ。

源兵衛　イヤ俺は宿へ急用が有る。

由兵衛　俺も急用だ。後へ戻れ。

源兵衛　これは迷惑な。

（ト兩人思入れして、本舞臺へ來る。）

由兵衛。急用とは何の用だ。

由兵衛　なんの用だとは、われや最前しさして置いた眞劍勝負をうにやにするか。

源兵衛　急用とはその事か。

由兵衛　又邪魔の入らない先に、早く劍の舞をおつ初めべい。

源兵衛　然らば支度すべい。

（ト合方になる。雪降る。兩人合羽を脱ぎ、尻からげ下駄をぬいで互に思入れ。）

由兵衛　源兵衛、仲の町に降積る雪の中へ血が飛んだなら、白縮緬の鹿の子絞りを見る樣で美事にあらうな。

源兵衛　ヲヽ仲の町の雪の中を、生首が轉がつて、雪轉ばしをするを見たなら面白かんべい。

由兵衛　そりや誰が生首。

源兵衛　われが首が。

由兵衛　ヘヽヽ。由兵衛が首の骨は堅いよ。正宗でぶつかけても切れないよ。

源兵衛　切れないか切れるか、源兵衛が引導を受けて見ろサ。

由兵衛　どうして見せる。

源兵衛　斯うして。

（ト立廻り、互に拔くと、撞鐘の聲して合方になり雪降る。兩人思入れして少し立有つて、）

由兵衛　先づ待て。
源兵衛　待てとは逃げるか。
由兵衛　先づこれ迄は、男伊達梅の由兵衛、姥の源兵衛が立引き。これから、とても事に互の本名を名乘つて。
源兵衛　童の菊王、鬼王新左衛門が魂で。
由兵衛　勝負すべいわ。
源兵衛　面白い。平家の大將能登守教經が股肱の臣菊王丸が樣々に體をやつすも、賴朝が首をしてやるべい爲、よつて判官義經が奉納のこの。
由兵衛　友切丸を帶してゐるを睨んだ故、引つたくる算用で立引きに事寄せて、切先の勝負に及ぶ。友切丸渡せば男伊達の意氣地は捨て、尋常に別れるが、菊王どうだ。
源兵衛　賴朝の大頭を叩き落すべいと手に入れたこの名劍を、われにやつて算用が合ふものか。無益の舌を鳴らして、時刻を移さずとも、早く勝負を決しろ、鬼王。
由兵衛　菊王。
源兵衛　サア。
由兵衛　サア。
源兵衛
由兵衛　サア。
（ト合方になる。兩人、こゝにて白襦袢になり、大立。互に手を負ふ。源兵衛、けつまづき雪ころばしの上へこける。雪二ツに割れてぱつと散る所を、由兵衛切る。源兵衛、思入れして、我身を腹へ突込む。）
由兵衛　待て。われやなぜ腹へ突込んだ。
源兵衛　數ケ所深手を負つたれば、モウ働かれぬ。よつて切腹の眞似するも、菊王といふ名を汚すまい爲。新左衛門一言云ひたい事が有る。聞いて呉れい。
由兵衛　云ひたい事は。
源兵衛　別の事でもない。知る通り、虎は教經殿の娘、女なれ共守立てゝ、平家の世を引興さんと時節を待つ所に、武運に盡きて、今われが爲に菊王がくたばれば、虎が力になる者は天地の間に祐成ばかりだ。武士の情に見捨てずに祐成と夫婦にして呉りやれ。菊王が黄泉の障はこればかり。鬼王、賴むぞ。
由兵衛　日頃に似合はぬ神妙な一言、感心した。何が扨、虎は鬼王が預かつた。氣遣ひせずに、手は淺い。立上つて勝負しろ。
源兵衛　ヲヽ、元より奥州が兄の敵の菊王だ。新左衛門。奥州になり替つて、改めて。
由兵衛　敵討の勝負をすべいか。
源兵衛　イザ。
由兵衛　イザ。
由兵衛
源兵衛　イザ。
（ト合方にて、少し立廻りあり。由兵衛、

源兵衛をゑぐり殺し、友切丸を取り、よく／＼見て鞘へ納めようとする所へ、向うより、かめん坊平左衛門舟宿の形にて提燈を持ち走り出て、これを見て膽を潰し。）

平　左　ヤア人を切つた。

（トいふ所を、由兵衛提燈を切つて落す。）

ヤレ切つた。人殺し／＼。

（トわめいて向うへはひる。ト方々にて、早柏子木金棒の音して、アリヤ／＼と騒ぐ。由兵衛、少し周章て、友切丸を鞘に納め、種々ある所へ、五丁町の高提燈を持つて、平左衛門先に立つて若い者大勢棒を持つてわめいて出る。由兵衛、ちやつと隠れる。皆々本舞臺へ騒ぎ、平左衛門死體を見て膽を潰し。）

平　左　ヤア、切られた者は親分の姥の源兵衛殿だ。

若い衆　ヤア、シテお身は切つた奴を見届けたか。

平　左　イヤ流石な俺も狼狽てゝ、しやつ頬を見届けずに逃げたが、廓の中に隠れてけつかるには極つた。わいらは角町の方へ廻れ。俺は揚屋町を捜すべい。ぬかるな／＼。

若い衆　合點だ。

（ト皆々わめいて平左衛門、若い衆少し花道へはひる。殘りは、東のあゆみへはひる。由兵衛、そつと出て、端折を下し、身繕ひして友切丸を差し、向うへ行かうとする。花道にてアリヤ／＼の聲。由兵衛、又奥の方へ行かうとする。中にてアリヤ／＼の聲する。由兵衛こなしの所へ一時清兵衛大勢出る。

清兵衛　どつちへ行つた／＼。（ト捜し歩く。）

平　左　一時清兵衛ぢやァないか。

清兵衛　かめん坊か。ハテ早い狼藉者めだ。仲の町から江戸町迄の屋根は俺が捜す。お身は新町の間を捜しやれ。

平　左　合點だ。ぬかるな。

（ト皆々別れてはひる。由兵衛、種々あり。一腰をさす。清兵衛、大勢を連出る。）

清兵衛　人殺しめは此處にゐる。ヤレぶち殺せ。

（ト皆々棒を振上げ打たんとする。奥より奥州出て帶を解いて、由兵衛を肌に抱きしめ。）

奥　州　コレ／＼、若い衆。己ぢや。聊爾をせまいぞ／＼。

清兵衛　待て。（ト提燈を差出し。）コリヤ奥州樣だ。あぶない。退かつしやりませ。

奥　州　何があぶないぞいなア。

平　左　人殺しめを棒伏せにして縛り上げます。退かつしやりませ。

奥　州　ハテ扨仰山な。その人殺しは何

處にゐるぞいな。
清兵衛　たつた今此處にゐました。怪我有つては惡い。お前は揚屋へ御座んせ。
奥州　ハテ扨、誰も此處にゐるぬわいな。麁相な、わたしを見違へてぢや。此處には誰もゐぬ。その隙に脇へ詮議に行かしやんせえ。
平左　いえサ、確かに今見つけました。
奥州　待ちや。そんなら、奥州が嘘をつくと思やるか。
平左　いえサ、それでも。
奥州　それでもとは、慮外ながら三浦の奥州ぢやぞ。嘘をつくやうな女郎ぢやないぞ。但し、この奥州は嘘をつきさうな女郎か、どうぢや／＼。それこそ惡う棒三昧をしやつて、わしが身にちつとでも當るといふと、堪忍せぬぞ。但し、奥州を相手にしやるか。何とぢや。
清兵衛　いやはや、お前のさういはつしやるのに無理にまた。
奥州　サア、なんとぞ云うて見や。言分があらば聞かう。
平左　如何さま。お前が胡亂な事をいはつしやらう樣もない。清兵衛。若い衆。そんなら狼藉者めは此處にはゐぬに極まつた。これから、京町から新町を搜して見べいわい。
清兵衛　それがいゝ。
平左　サア皆來やれ／＼。
奥州　イヤ、こりやどうぢや。奥州に相手にならぬか。いふ事はないか。詮議をせぬか。
（トいふ中に皆々はひる。奥州、由兵衛抱き上げ、）
由兵衛樣。
（ト大きな聲して、ちやつと口を塞ぎ、種々思入れあり。申し／＼、と呼べども由兵衛、性根のつかぬこなし。これより奥州水を掬ひ來て、口移しにする。由兵衛、氣がつく。）
申し氣が付きましたか。
由兵衛　奥州か。
奥州　エヽ、嬉しや。氣がついたかいなア。（ト抱きしめる。）
由兵衛　ハテ扨、無念な。薄手を負つて暫らく雪の中に疵を冷したで、氣を失なつた。ハテ良い所へ來て呉れたなア。
奥州　ても扨も、あぶない事かな。ひよつと若い者共が見付けようかと、ハア／＼思うたが、なんとマア首尾よう仕了せさんしたかえ。
由兵衛　難なく源兵衛めを殺して、友切丸は手に入れた。われが爲には兄の敵の菊王だ。屍へ刄を當てゝ、手向けろ。
（ト一腰をやる。）
奥州　アイ／＼。（ト死骸に立ちかゝり。）

童の菊王。兄の敵。思ひ知れ／＼。
（ト死骸を切つて、）エヽ嬉しや。日頃の恨みを晴らした。これもお前のお蔭。忝う御座んす。

由兵衛　ヲヽ、シテこれからどつちへ立退かう。

奥州　いや、モウどつちへ逃げさんしても人が見知つてゐれば、どうもならぬが。

（ト思入れする。由兵衛、屋根へかけて有る梯子を見て、）

由兵衛　オヽ幸ひ／＼。屋根傳ひに逃げべい。

奥州　屋根傳ひに美事逃げられるかえ。

由兵衛　氣遣ひするな。モウ氣は確かだ。

奥州　そんなら怪我せぬ様に、一時も早う。

由兵衛　合點だ。

（ト梯子へ登り、屋根に腰かける。奥州あぶながるこなし。）

奥州　わしや、西河岸の方へ廻つてゐる程に、田圃の方へ下りさんせ。

（ト屋根の後より、平左衛門出る。）

平左　取つた。（トかゝる。）

由兵衛　合點だ。

（ト拔打ちに平左衛門を胴切りにする。腰より下、ぶらりと下り下へ落ちる。奥州、思入れして、）

奥州　由兵衛様。

由兵衛　奥州。

奥州　早う退かんせ。

由兵衛　合點だ。

幕

男伊達初買曾我

五

一　經若丸　　重の井
一　心太賣喜六　　傳藏
一　備前屋權八　　五郎三
一　近江の藤内　　門十郎
一　八兵衛妹　　千藏
一　母　　歲三郎
一　かるこの八兵衛　　助五郎
一　若い衆　　大勢

本舞臺。臆病口の方に橋あり。堺杙に業平橋と書付けあり。橋詰に、葭簀張の心太店あり。後一面に土手。てんつゝにて幕開く。

（ト喜六、心太賣の形にて居る。若い衆、大勢仕出しの形にて、長床几に腰をかけ

居る。（ト向うより、備前屋權八、町人の形にて菅笠をかぶり、細布の風呂敷包を背負ひ出る。）

喜六　サア／＼。名代の心太／＼。業平橋の喜六が心太はこれで御座るぞや。サア／＼、おかけなさい／＼。（ト權八と顔見合せ、）イヤこれは備前屋の權八殿か。

權八　どうです。兄樣。商ひがごんすか。

喜六　アイ、この頃はめつきと暑くなつた故、心太が賣れるといふものぢやごんせぬ。モウ朝の間に一ト舟賣りました。

權八　ハテ、それはえいこつてすな。

喜六　時に、お前は何處へごんすぞ。

權八　わしや今朝商ひ事に付けて、吉原へ行つたですが、この春大磯から鞍替をして來た虎が、梅の由兵衛が所に掛人になつてゐる曾我の十郎祐成殿へ言傳物をしたですが、聞けば、由兵衛は、今は小梅と世帶を持つて隅田川に植木屋に成つてゐるとある故、尋ねて行くのですが、何がモウ町で虎に酒を強ひられて、大棒鱈になつてです。なんと酔醒しに、ひいやりと、心太と出ようかい。

喜六　あがるか／＼。辛にせうか、黄粉にせうか。

權八　イヤ、蕎麥切り料理／＼。

喜六　合點だ／＼。（トいひ乍ら心太を突き藥味をかけて、）サアきこしめせ。

權八　どれ／＼。（トほんの心太を食ひ、）てんと、どうも云へぬ／＼。

若い衆　コレ／＼。俺にも一本下さい。

喜六　合點だ。（ト突く。）

若い衆　こゝへも一本下さい。

喜六　合點だ。

（ト突くと、てんつゝになり向うより、近江の藤內、神道者の形にて、侍、鎧箱擔ぎ付き出る。）

藤內　八介。心太を喰ふか。

侍　ハイ、それはよう御座りませう。

喜六　サア／＼。おかけなさい／＼。

藤內　いづれも許さつしやれ。（ト腰をかける。）

權八　こつちへ寄らつしやりませ。（ト藤內、傍へ寄る。）

藤內　これは矢張御座りませ。

權八　神主樣、お前はどつちから出さつしやりました。

藤內　わしは、伊豆の三嶋の神主八剣內記で御座るが、當處宮戸川に御座る佐々木盛綱樣のお屋敷へ參つて御座る。

權八　それは、なんぞ御祈禱にでもお出でなされましたか。

しは日頃、盛綱樣へお出入り致す者ですが、去ぬる頃、盛綱樣には平家の殘黨又は義經公の餘類を詮議のお役を仰付けられさつしやれて、鎌倉から當處宮戸川へ引越さつしやれて御座る故、御機嫌伺ひに遙々三島から來まして今日盛綱樣のお屋敷へ行きましたが、いかうこの邊が野駈舟遊山で賑かなと御座る故、五百羅漢から龜井戸へ廻りましたが、さて龜井戸の藤は美事な事で御座るわい。

權八　左樣で御座ります。

藤內　サア、供の者へ心太を喰はせて下され。

喜六　畏りました。

（トてんつゝになり、喜六、心太を突き、供の者に喰はせる。此うち、向うよりかるこの八兵衞、木綿やつし尻からげ脚絆細布の風呂敷包を脊負ひ、煙草吸ひ乍ら出る。）

サア〳〵、天や〳〵、お休み〳〵。

（ト八兵衞を見て、）イヤ、これは龜井戸のかるこの八兵衞殿か。

八兵衞　喜六か。變る事もないか。

喜六　こなたは此間駿河へ行つたと聞いたが、なんぞ錢儲けでもあつてか。

八兵衞　イヤ、錢儲けの筋ぢやない。俺は日頃駿河のお富士樣を信心して、この貧乏な身で月參りをするが、おしつけ賴朝樣の富士の牧狩が初まつたなら、參ることはなるまいと思つて、俄かに思立つて參つて來たわい。何と、きつい信者か。

喜六　それは御奇特な。草臥れたんべい。休んで御座い。

八兵衞　モウ內へは一ト足だ。ちつと休て行くへい　となたも御許されませう。（ト腰かけ、風呂敷包を取つて、權八が風呂敷の傍へ置く。）

權八　八兵衞殿とやら。なんと駿河は牧狩が近寄つて嘸賑かでごんせうな。

八兵衞　賑かな段ぢやごんせぬ。鎌倉から駿河迄の道中は、狩場へ詰めるお大名方のひきもきらずに振らせて通る、その裝束のきらびやかさ。もう前代未聞の見物です。

藤內　さうでえせう。して賴朝公には何時時分鎌倉をお立ちなされる沙汰ですぞ。

八兵衞　賴朝樣は廿日過ぎにお立ちなされるとあつて、道中の路、橋の掃除のなんのと、日傭人足、近國から入込んで、もう錢は摑み取りです。

喜六　そんなら、こなたも直に駿河に往て日傭でも取ればえいに、なぜ早く

歸らしやつた。

八兵衛　されば い。俺も一稼ぎすべいと思つたが、思も寄らぬえい仕合せに出合つたによつて、それで早く歸つたわい。

喜　六　思も寄らぬえい仕合せとは金でも拾つたか。

八兵衛　イヤ、そんなやすいこつちやない。俺が日頃お富士樣信心のお蔭で、どうもいへぬ有難いめに出合つた。話して聞かせべい。何れも、聞かつしやれ。今度、わしがお富士樣へ參つて一心不亂に拜んでゐる所へ、さも異形な仙人が現はれて『善哉々々、いかに、かるこの八兵衛。われはこれ九郎判官義經が郎等、常陸坊海尊なるが、唐土の蟇仙人を師と頼み、仙術を學び、則ち其名を殘夢仙人と申すなり。われ汝が正直正路の志を感じて、蟇仙人の法を傳へん爲、これ迄現はれたり。』と一軸の掛物を出して『卽ち、これは蟇仙人の御影なるが、これを信心する輩は、壽命は八千歲、富貴圓滿にして日に七兩づつの金が涌くなり。その他、藝能に達し、水練は勿論、劍術早業飛行自在を得る程に、隨分々々信心して、一家一門は云ふに及ばず、信心の輩はこの御影を拜ませて蟇仙人の法を世に弘めよ。猶々行末守らん。』と搔消す如くに失せ給ふ。其時八兵衛、感涙膽に銘じ、夜を日について歸つたのです。なんと何れも有難い事ではごんせぬか。

權　八　それはいかさま有難い事です。いづれも、とてもの事にその蟇仙人の御影を。なア。

皆　々　サア、拜み度いもので御座る。

八兵衛　何が扨、結緣の爲に拜ませませう。何れも信を取らつしやれ。

皆　々　心得ました。

（ト嗽ひ手水を遣ふ。八兵衛、懷より掛物を出し、心太店の柱へ掛ける。仙人の蛙の手に乘せてゐる繪なり。）

八兵衛　サア、いづれも近う寄つて御契約をなされませう。

皆　々　南無蟇仙人樣。（ト拜む。）

權　八　いづれも、扨々、蟇仙人樣は怖い顏ですの。

藤　内　されば、さうして、アノ、掌に乘せて御座るは蛙では御座らぬか。

喜　六　ほんに、蛙をなぜ持つて御座るな。

八兵衛　ハテ、蛙を御寵愛なされるによつて、蟇仙人といふ。蟇とは卽ち蛙の事だ。蛙は奇妙不思議の物で、いかなる惡魔外道も恐れをなす故、弓に蟇目の法といふがある。元より蛙は、合戰

をしたり歌を詠んだり、人間にも勝つた智恵の有るものだによつて、蓬仙人の遺はしめになされる。今もいふ通りこの法を信心すると、日に七兩づつ金が涌くが、なんと有難い事か。法に入りたいと思ふ衆は重ねて龜井戸のかるこの八兵衞と尋ねてごんせ。法を授けてやりませう。なんといづれも有難いか〳〵。●、俺ばかり有難がつて、息精はつて、蓬仙人の緣起をしやべつたれば咽が乾く。兄イ。心太一本喰はせろ。

喜六　合點だ。(トついて、)サアまゐれ。

八兵衞　ドレ〳〵。(ト喰ふ。)

權八　俺も醉醒めで咽が乾く。モウ一本辛でしてやろか。

喜六　呑込んだ。(トついて辛をかけ、)サアあがれ。

權八　ドレ〳〵。

(ト喰ひにかゝり、辛にむせて、嚔する。藤内が顏へかゝる。藤内、思入れして、)

藤内　これは〳〵不躾な。これはどうだ。(トむつとする。)

權八　どうとはなんです。

藤内　俺が頰へ唾がかゝつたわい。不躾な男だ。

權八　ハテ、わざとしたこつちやない。辛にむせたのだ。仰々しい。なんのこつた。

藤内　イヤ己は。(トきつぱ廻す。)

權八　イヤ、こいつは赤鰯をひねくつてなんとする。りきんだ糟禰宜めだ。喰ひそばへると張倒すぞ。

藤内　慮外な奴。身を何者だと思ふ。工藤左衞門が執權近江の小藤太が弟、藤内成景といふ者。

權八　エヽ。

藤内　神職と身をやつすを何故だと思ふ。當春、主祐經曾我の祐成見參の折柄、重ねて敵討の勝負に及び、もし祐經運盡きて討たれなばとゞめの刀にせよと赤木の刺刀を得させた所に、祐成、傾城狂ひに行詰り、その赤木の刺刀を質物に置いて受戻す事叶はぬ由、元より大切な名劍故、由なき者の手に渡らば殘念至極、何卒、その質屋を聞出し手に入れよと、祐經が命令に仍つて、質屋詮議の爲に身をやつして徘徊するが、人を見損つたか。推參者。己は先づ何奴だ。

權八　私は兩國の備前屋久兵衞と申す町人の手代、權八と申す者。元より祐經樣の御家來樣とも存じませず慮外を申し上げまして御座ります。眞平、お許しなされて下さりませう。

藤内　イヤ、己。武士の面へ唾を吐きかけ、その上雜言を吐いて許せとぬか

して濟まうか。素町人めが、ぶつ放す。覺悟ひろがう。(ト刀を拔いて切りかけうとする。)

八兵衛　ヤレ、聊爾なされまするな。

(ト藤内が手を取つて留める。)

喜六　ヤレ早く逃げた。

權八　合點だ。(ト周章てゝ、八兵衛が風呂敷包を取違へ持つて駈出す。)

藤内　待たう。放せ。(ト思入れ。)

八兵衛　急かつしやりますな。(ト刀をもぎ取る。)

皆々　ヤレ、早く逃げた〳〵。

(ト喜六權八皆々向うへ逃げ入る。)

藤内　素町人め。待たぬか。(ト脇差を拔いて、追駈ける。)

八兵衛　待たつしやりませ。(ト脇差をもぎ取る。)

藤内　イヤ、己はナゼ邪魔をひろぐ。

(ト思入れ。)

八兵衛　ハテ急かつしやりますな。町人風情にお侍の魂を穢してお手柄になりませうか。先づ鞘へ納めさつしやりませ。

(ト兩腰を突出す。藤内、思入れして、取つて鞘へ納める。)

お侍樣。むざと劍戟を振らつしやるとヤレ喧嘩といふが最後、そこら中から棒ちぎり木が出て、お前を半死半生にぶちのめして、大小も石へぶつつけてぶん曲げて笹箒にして、仕舞ひは、わい〳〵にします。いかにお若いといつてお氣の短い。必ず、すつぱ拔きをなされますな。御緣もあらば、其うち、お目にかゝりませう。(ト云ひ乍ら、殘りし風呂敷包を取り、向うへ行かうとする。)

藤内　待て。

八兵衛　エ。

藤内　日頃、劍術手練の某が、拔放した兩刀を手もなくひつたくつた働き。中々、世の町人とは見えぬ。兼て、祐經、曾我兄弟といふ敵あれば、別して富士の狩場滯留の間、用心の爲に末々の家來迄も覺え有る者を選んで召連れんと、今吟味最中だが、なんと、其方は、主人工藤方へ奉公する志はないか。

八兵衛　これは忝い御詞に預りまして御座ります。拙者も腹からの町人でも御座りませぬ。ちつと、由緒有る身の上。何卒、刀差す身になりたいと、兼て願つて居ります。殊に御威勢有る祐經樣の御家來になりますは、身の出世。何卒、お取持ちをお賴み申します。(ト辭儀する。)

藤内　何が扨、御由緒有る御身の上と御座れば、一入大慶致します。然らば早速鎌倉へ御同道申して祐經へ目見得

致させましたう御座るが、只今お聞きの通り、赤木の刺刀(きすが)手に入らぬ中は、歸國致し難う御座る。よつて、兄小藤太方まで書狀を相添へませう。お控へなされ。

八兵衛　宜しう賴み存じます。

藤内　イザ、この書狀を早速小藤太方へ御持參なされ。

（ト藤内、矢立にて狀を書き、）

八兵衛　首尾よう召出されましたならば、鎌倉に於て。

藤内　御意得ませう。（ト書狀を八兵衛へ渡す。）

八兵衛　先づそれ迄は、おさらば。

（ト三重にて、内藤、向うへはひる。此うちに奥より八兵衛母、同じく妹、經若君やつしにて小さき龜の子笊と庖丁を持つて、摘草の態にて、業平橋を渡り出る。後(うしろ)に樣子を聞いてゐて、母と妹思入れして嬉しがる。）

妹　兄樣。戾らしやんしたかえ。

（ト八兵衛、恟りして振向く。）

母 經若　まめで戾つたかや。

八兵衛　これは〱。母人、經若樣。嘸待兼ねて御座りましたらう。

母　待兼ねた段か、大方、今日あたり歸らうと思うて、摘草がてらに迎ひに出たわいなう。

八兵衛　マア、お悅びなされませ。たつ

た今此處で工藤左衛門祐經殿の方へ抱へられる筈に契約をしましたわい。

母　様子はみんな立聞きした。ヤレ／＼。結構な事／＼。

妹　ほんに今朝の下り蜘蛛が、斯ういふ吉左右を聞かう知らせで有つたか。兄様。お前はこれから知行取りにならしやんすの。

八兵衛　ヲヽ、歡樂活計な身の上になり、マア芽出度い折柄だ。此處で駿河土産をお目にかけう。（ト風呂敷包を下し、）皆の單衣物にえい木綿を買つて來た。（ト開けて見て、）ヤアこれは違つた。

（ト膽を潰す。）

母　そりや絹布の卷物ぢやないか。

妹　ほんに文箱も御座んすぞえ。

八兵衛　ハテ、扨。（ト思案する。）

母　待ちや。木綿を買つて來たといやつたが、その結構な卷物は、勿論そなたに限つてさもしい心が有らうとは微塵も思はぬ。かゝる風情の身でその結構な絹布を他人が見たなら疑ひのかゝりさうな事ぢやぞや。

妹　なんのい。大方どこぞから進上物に貰はしやんしたで御座んせう。ほんに、下り蜘蛛が大當りぢや。

（ト八兵衛、思案して、）

八兵衛　ハテ扨、どこで取替つたか。この文を見たなら、先樣が知れべい。どりや。（ト文箱を開けて、包み金と封じ文を取出して、）コリヤなんだ。（ト金の書付を見て、）金子十兩。ハテ、（ト思案して、上書を見て、）御許へ御存じより。コリヤ女郎の文か。（ト封を切つて讀む。）『よき便りに任せ、文にて御問ひ〻。いよ／＼御機嫌樣よう御入らせ候哉。數々御問ひ申し度く存じ〻。つきては、富士の御狩も近寄り嘸々御心いそもじと推し〻。それに付き、狩場の御晴にもと緞子三本紅絹五疋綿の代金子十兩、取添へ進じ〻。くどうは御見と。早々かしこ、御許へ御存じより。』（思入れ。）ハテ（思入れ。）聞かつしやりましたか。御許へ御存じよりとばかり書いて、双方の名が知れませぬ。いつそこれは沙汰なし。

（ト母が顏を見る。母あちら向く　八兵衞うぢ／＼して、）

折角天道から授かつたものを、辭儀するも不躾なり。これは芽出度う受納するがよささうなものだ。ナア妹。

姉　アイ。それがよう御座んす。

母　いゝや、取替つた物を幸ひにして留めて置いては、己や心が濟まぬ。たとひ、何程貧苦にせまつても、鷹は餓えても穗はつまぬ。今こそあれ、古は奧州五十四郡の主。

八兵衛　コレ、もし。（思入れ。）御尤もで御座ります。（ト矢立を出し、書付二三枚書いて、）業平橋の邊りにて絹布の入り候風呂敷包と、我等風呂敷包取替り申し候。御知らせの爲如斯に候。（思入れ。）月日。かるこの八兵衛。これでよい。妹。この書付を辻々へ張つて來い。

妹　エヽ。そんならお前は絹布と金を返す氣かえ。

八兵衛　母人のお心を休める爲だ。早く張つて來い。

（ト書付を投げてやる。妹、受取つて花道へ行く。）

妹　エヽ、兄樣とした事が、絹布と金とが有ると米も薪も家賃も苦のない樣になるに、母樣とした事が、瘦我慢ばかり。

八兵衛　早く行かぬか。

妹　行くわいなア。エヽ。（トぴんしやんして、花道へはひる。）

八兵衛　母人。辻々に張札をしますから、後日に絹布の主が出ても、こつちの横道にはなりませぬ。氣遣ひなされますな。

母　ヲヽ、それで心が涼しい。サア、早う家へ歸らう。

八兵衛　經若樣。お手を引きませう。

（ト合方になる。向うより、備前屋權八、風呂敷包を持つて走り出て、八兵衛に行當り、）

權八　ヤア、かるこの八兵衛か。よい所で遭つた。待て。（トせいたるこなし。）

八兵衛　そなたは誰だ。

權八　コレとほけるな。わりやよく風呂敷包をすり替へたな。男を見損つたか。備前屋の權八といつちや、臍に毛の有る男だぞ。サア謝つたと詫言をして戻せばよし、さもないと木の空へ上げて凉ませるが。大泥棒め。

八兵衛　こいつは顎から産れた野郎め。うぬァ最前侍に切りはぐられて、逃げしなに取違へて、俺を泥棒呼ばはりをひろぐか。うぬに其顎を叩かせまい爲に、辻々に張札をしたが、見やァがらないか。大盗人めが。うぬ。すてつぺんを梨割にして。

（ト脇差に手をかくる。權八、ぎよつと思入れ。母、留める。）

母　コレ〳〵、短氣な。ハテ扨、出世する身がこの樣な小事にかゝはつて大望を無にしやる。

八兵衛　でもあいつ。

（ト思入れ。權八、怖がる。）

母　マア〳〵、靜まりや。コレ、若い人。誤つても德を取るが町人の習ひぢやが、惡い合點な。

權八　ハヽヽ、ヘヽヽ。いやモウ大き

な粗相を申しました。誤りました。八兵衛様。どうぞお返しなされて下さりませ。

八兵衛　たゞは返されぬ。謝罪證文を書け。

權　八　謝罪證文を書けえ。

母　ハテ、早く請取るが徳ぢやわいの。

權　八　如何さま、さうで御座りますの。

八兵衛　ソレ、矢立。（ト投げてやる。）

權　八　アイ〳〵。（ト書いて、）これでよう御座りますか。

（ト八兵衛へやる。取つて、）

八兵衛　ムヽ。『謝罪證文の事。我等麁相にて風呂敷包を取替へ、却つて無體を申しかけ謝り入り申し候。以上。月日。かるこの八兵衛殿。備前屋權八。』（思入れ。）これでよい。返してやるべい。わが親方に袴をはかせて貰ひに来い。

權　八　エヽ。いえ。親方にこんな事が知れては、わしがしくじります。どうぞ、内證で渡して下されませ。

八兵衛　ならぬ。

權　八　ヤ。

八兵衛　謝罪證文を取つたからはどこへ出ても俺が理窟だ。早く失しやァがれ。

權　八　これは、きれいなおこわにかゝつた。えい〳〵。百年目だ。これからはやけの權八。赤鰯怖くない。（ト尻からげ、）うぬ。大騙りめ。

（ト八兵衛にかゝらうとする。八兵衛、火繩の火にて煙草吸ひながら、煙を權八へ吹きかける。權八むせて、）

イヤうぬは。

（ト八兵衛睨む。權八怖がり、母を見て、）

この婆めが、相槌をぶつて、よく謝罪證文を書かせたな。名代にうぬを絞めるぞ。（ト母が胸づくしを取る。）

八兵衛　イヤうぬは、（ト反打つてかゝる。）

母　コレ〳〵。短氣な事をせまいぞ。

八兵衛　デモお前を。（ト寄らうとする。）

母　イヤサ、聊爾な事をしやると勘當ぢやぞ。

八兵衛　エヽじれつたい。

權　八　うぬら親子、點頭いておこわにかけるな。サア戻さないか。イヤこれでも戻さないか。

（ト母をきづく所を、經若丸の子笊庖丁を持つて、權八が脇腹を突く。權八、種々有つて、）

アイタ〳〵。（ト倒れる。）

經　若　突いた〳〵。突込んだ〳〵。

（ト手を叩いて嬉しがる。）

母
八兵衛　ヤアこれは〳〵。

（ト經若をこちらへかこふ。權八、痛む思入れ。）

權　八　うぬは八兵衛が餓鬼めか。よく俺が横腹へ庖丁を突込んだ。うぬ。摑

み殺して。

（ト經若へかゝらうとするを、八兵衞、權八が腕を捻上げる。此うち、母、經若を逃す。）

八兵衞　うぬ芋ざしに。（ト脇差へ手をかける。）

アイタ／＼。こりや殺すかやい。

母　コレ／＼。聊爾すると勘當ぢやぞ。

八兵衞　エヽ、うぬ。生けて返す奴ぢやないが、母の詞を重んじて助ける。失せう。

（ト權八を投げて花道へ行く。權八起き上り取りつく。八兵衞取つて投げて向うへはひる。權八、起上り追駈けてはひる。）

幕

男伊達初買曾我

六　大切

一　近江の藤内	門十郎
一　備前屋久兵衞	十四郎
一　火の車五兵衞	半五郎
一　由兵衞女房小梅	菊次郎
一　五郎時致	八百藏
一　十郎祐成	七三郎
一　梅の由兵衞	廣治
一　若い衆	大勢

本舞臺、一面に龜井戸の社地の景、舞臺先の水舟の際一面に藤棚、大臣柱より藤棚迄松の枝這ひかゝりあり。橋懸り迄、社地の道具、夜神樂にて幕開く。

（ト向うより、備前屋久兵衞火の車五兵衞若い衆二三人小提燈をさげ、棒を突き鉦を鳴らして、）

久兵衞　迷ひ子の長吉ヤァイ。

五兵衞 若い衆　迷ひ子の長吉ヤァイ。（ト代る／＼呼びながら出る。）

久兵衞　ハテ扨、長吉めがどこに狼狽へてゐるか。若し、三圍で狐に化かされはせぬか。但しは、秋葉で天狗にでも攫はれはせぬか。

五兵衞　何を、こな人は。秋葉に天狗が居るものか。エヽこなたも鼻の下の長い人だ。アノちつぽけな長吉に百兩といふ金を取りに遣るとは阿房らしい。大方どいつぞ金を持つてゐる事を知つて、つけて來て絞め殺したも知れぬ。なんにもしろ、今夜中に質屋へ百兩持つて行かぬと、赤木の刺刀は由兵衞めに受けられて、あはゝの三太郎になる。さうなると此方の願ひの元の神主も上つたり大明神だが、えいか。

久兵衛　いかさま。長吉めが金を持つてゐるを見込んで絞め殺して、川へでもぶち込むまいものでもない。若い者共、呼んで歩くばかりぢやない。随分、川の端や土手の陰などを氣を付けて見ろよ。

若い衆　心得ました。

久兵衛　五兵衛殿。大儀乍ら、モウ一遍尋ねて下され。

五兵衛　エヽ忌々しい。お茶湯にもならない事に、宵から夜食も喰はずに使はれて、擧句の果に迷ひ子の鉦叩きになつた。シタが、早く長吉に尋ね會つて、金を受取つて、赤木の刺刀を受出して、由兵衛めに鼻明かせて、腹癒せせにやならない。精出して尋ねべい。迷ひ子の長吉ヤイ。

久兵衛 若い衆　迷ひ子の長吉ヤイ。

（ト鉦を鳴らして、代る〳〵呼び〳〵はひる。ト神樂になり、小梅、十郎向うより出る。）

小梅　石が御座ります。あぶなう御座ります。そろ〳〵おひろひなされませ。

十郎　合點ぢや〳〵。

（ト云ひながら、本舞臺へ來り、）

小梅。最前云やつた通り、彌々由兵衛が金を百兩才覺したに違ひはないかや。

小梅　なんの僞りを申し上げませう。金の出來た事を、お前を起し申しましてお知らせ申すも氣が急く、片時も早う赤木の刺刀を請け戻してこようと駈け出して參りましたが、首尾よう、手に入るやら心許なう、宿に居る空も致しませぬ故、お前をお供して此處迄出迎ひまして御座りますわいな。

十郎　ヤレ〳〵、それは嬉しや。俺はモウ宵から一寢入りに夢を見てゐた故、百兩といふ金を才覺する騷ぎも知らずにゐたが、正直の果報は寢て待てとやら、俺が生きてはゐられぬ急難の金子が調うたも、由兵衛が忠義。そなたの志。生々世々、忘れは置かぬ。嬉しいぞや。

小梅　これは勿體ない。なんのお禮。却つて冥加が恐ろしい。モウこれからはやがて富士の狩場で御本望をお遂げなされますばかりで御座ります。お目の御養生を、オヽそれ、最前上げました多田の藥師樣の御夢想の御封は、たちどころに奇妙が御座ります。夜の明け方の朝日に映して、水初穗を信をもつて御頂戴なされませ。

十郎　いかにも云やる通り、この上は早う眼病をようして本意を遂げねばならぬ。成る程、多田の藥師の御夢想の御封を、夜が明けたなら戴かう。此處も俺が日頃信ずる天滿宮の寶前。眼病

快全の祈誓をかけう。

（ト靜かな神樂にて兩人樂屋の方へ向ひて祈り居る所へ、向うより、梅の由兵衞赤木の剃刀を持ち走り出る。兩人に行當り、互に思入れ。）

由兵衞　誰だ。

小梅　こちの人か。

十郎　由兵衞か。

由兵衞　ヤア旦那か。サア〳〵赤木の剃刀を請けて參りました。早速上げませう。

十郎　それは嬉しや。ドレ〳〵。（ト取つて戴き、）由兵衞。今改めて云ふに及ばぬ日頃の忠義。とりわけ艱難貧苦の中に、病人の俺を厄介にして、夫婦共に何から何迄の心遣ひ。別してこの危難を救うて呉れた忠心。家來とは思はぬ。未來の親人のお手から頂戴すると思うて、コレ戴くぞや〳〵。（ト赤木の剃刀を戴く）

由兵衞　これは〳〵。これしきの儀に御褒美の御意、有難い仕合せに御座ります。只今質屋の蓬萊屋が方へ佐々木樣の御家來が遣繰に參りまして、話で承りましたが、今日曾我から時致樣の、お前のお迎ひの爲に盛綱樣のお館迄お出でなされましたと御座ります。直にこれから佐々木樣のお館へお越しなされませい。

十郎　ハテ、それは時致、よう迎ひに來たなア。

小梅　ほんに御兄弟思ひなお優しい儀で御座ります。

十郎　由兵衞、そなたも、モウ此邊に居る事は要らぬもの、これから直に、曾我へなりとも鎌倉へなりとも行くがよからう。

由兵衞　なぜ。左樣に御意なされます。

十郎　サア、最前、宿でそなた衆夫婦が百兩の金才覺する中、俺は奧によう寢てゐた、何も知らぬが、此邊に居ては俺が心が落付かぬ。夜の明けぬ中に曾我へ往て呉りやれ。

由兵衞　ハイ。併し、拙者は宮戸川の佐左木樣のお館迄お供致して。

小梅　いえ〳〵、あなたのお供はわしがしやんす。成程、祐成樣の御意の通り、こな樣を此邊に置くは、わしも心が落付かぬ。ハテ百兩といふ金を才覺して悦んだ後は、ナア、どの樣な災が降り來るまいものでも御座んせぬ。ナア、ぢやによつて、片時も早う曾我へ往て下さんせ。頼みますわいな。

（ト東の棧敷下にて、）

若い衆　迷ひ子の長吉ヤイ。

（ト呼ぶ。三人、ぎよつと思入れ。）

小梅　忘れうと思うても、傍に立ち、

悲しみの中にァノ迷ひ子の長吉と呼ぶを聞いて、わしや胸が一ぱいになりやんしたわいな。片時も早く、曾我へ往て下さんせ。拜みますわいな。（ト由兵衞に取付き泣く。）

十郎　いか樣。夜更けて迷ひ子を尋ねる聲はどうやら物凄いものぢや。然らば早う佐々木殿の館へ行かう。小梅。大儀ながら渡場迄送つてたもれ。

小梅　アイ、サアお出でなされませ。

十郎　由兵衞。必ず此邊にからまつてゐまいぞや。

由兵衞　ハイ、直にこれから曾我へ參じませう。お案じなされますな。

（ト又、東棧敷下にて、）

若い衆　迷ひ子の長吉ヤイ。

（ト呼ぶ。十郎小梅花道の半迄行く。）

十郎　小梅。アノ迷ひ子の長吉が、百兩の金、サア俺は最前寢て居て、二人が百兩の才覺するを夢に見たが、よう思切つて祐成が急難の用に立てゝ呉れた。その志、詞にも盡くされぬ。嬉しいが可哀い事をしたなァ。

（ト泣く。二人も泣く。）

若い衆　迷ひ子の長吉ヤイ。

（ト呼ぶ。十郎、小梅涙を拭ひながら向うへはひる。由兵衞見送り、こなしあり。）

由兵衞　今迄は大切なお主の御用に氣を張弓にして、體は鐵石の如くになつてゐたが、赤木の刺刀を祐成樣へ渡してしまつたれば、がつくりと氣草臥がして、我身ながら體に影がない樣に思はれて、迷ひ子の長吉と呼ぶ聲が膽に應へて、後から摑み立てる樣だ。エヽ、思へば不便な事をした。（思入れ。）祐成樣や女房が、事顯はれぬ先に立退かせたがるが、これから直に曾我へ行かうが。但し佐々木樣のお館へ行つて御兄弟のお供をして行かうか。ハテどうせうな。

（ト花道より、どん／＼にて、近江の藤内捕手の侍大勢、てんでに馬上提燈十手を腰にさし、備前屋久兵衞火の車五兵衞尻からげ、一腰さし附き出る。）

藤内　ヤレ縛ばれやい。

捕手皆々　捕つた。

（ト由兵衞へかゝる。由兵衞取つて投げ散らし、）

由兵衞　待つた。コリヤ何故に繩をかけうとさつしやる。人違ひか。麁相さつしやるな。

久兵衞　だまれ。うぬ、おれが網市の長吉を殺して金子百兩盜んで隅田堤の古井戸へぶち込んで置いたを、たつた今見付けたわやい。

藤内　それ故、近江の藤内が發向した。遁れぬ所だ。繩かゝれやい。

由兵衛　イヤこれ粗相仰しやるな。嘗て覺えは御座らぬ。シテ由兵衛が長吉を殺したといふ確な證據が御座るかな。

五兵衛　證據はこの火の車の五兵衛だ。今長吉が死體を改めて見れば長吉が口に銜へてゐた木綿縞の褞袍の褄は、俺がうぬにうけぎつて引張らせた木綿縞だ。コレ見ろ。これでも爭ふか。

（ト褄を見せる。由兵衛恟り。）

なんとぐつとも音は出まい。サア尋常に。

捕手皆々　繩をかゝれやい。

由兵衛　由兵衛が一生にない惨い事をしたその歎きに心散亂して、褞袍の褄に心の付かぬは時節到來、いかにも長吉は俺が殺して金子百兩奪ひ取つた。赤木の刺刀を請け戻して主人へ忠義を立てたれば、元より覺悟のこの身體は野へ出した死人だ。うぬらが樣で梅の由兵衛に繩をかけべいとは、蟷螂が斧、寄ると片つ端から鏖殺しだ。うづ虫めら、覺悟ひろげやい。（ト尻からげる。）

藤内　ヤレ、ぶつて取れやい。

捕手皆々　遣らぬわ。（ト切つてかゝる。）

由兵衛　イヤ推參な。

（ト拔打ちに、捕手を眞甲梨割りにする。）

皆々後へしさる。

久兵衛　長吉が敵。觀念。（ト切りかける。）

由兵衛　イヤ小癪な。

(ト少し切合ふ。由兵衛久兵衛が尻こぶたを切る。)

久兵衛　アイタ。シコ南無三、尻ぺたを切られた。五兵衛、助けて呉れ。(ト五兵衛へ取付く。)

五兵衛　これはみじめな。俺も働きたいが、マア足手纏ひの手負を片付けべい。藤内様。ぬかるまいぞ。(ト久兵衛を肩にかけて臆病口へはひる。)

藤　内　ヤレ、ぶつて取れやい。

捕手皆々　違らぬわ。(ト切つてかゝる。)

由兵衛　イヤ、甘口な。

(ト思入れ。神樂になる。由兵衛、捕手を切り倒す。藤内かゝるを、由兵衛立廻りにて眉間を切る。)

藤　内　南無三寶。してやられた。ヤレ逃げろ〳〵。

(ト皆々逃込む。由兵衛、追駈けてはひる。アリヤ〳〵の聲する。向うより、久兵衛尻ぺたをかゝへよろ〳〵して出る。)

久兵衛　アタヽヽ。(思入れ)エヽ口惜しい。要らぬ事をして由兵衛めに刄向ひ尻ぺたをしたゝか切られた。備前屋の久兵衛。本名は大藤内。狩場の夜討の取越しに出合つた。アイタヽヽ。いたい。たはけ。

(ト神樂になる。久兵衛向うへはひる。由兵衛出る。五兵衛、後より付けて出て覗ひ見る。由兵衛、花道へ行かうとする。アリヤ〳〵の聲する。思案して布子を脱ぎ捨て、本舞臺へ來り、後より由兵衛が刀をもぎ取る。これより立になり、種々あり。とゞ、兩人藤棚の上へ上り、又立廻り、種々有つて五兵衛を蹴落す。五兵衛水舟へ落ちて、中より千兩箱を引上げ。)

五兵衛　コリヤなんだ。黄金千兩。この主七草四郎國平。扨は大將四郎殿の軍用金を水底に隠して置かれたか。

由兵衛　待てやい。(ト水船へ飛込む。)反逆の大將七草が軍用金、見遁しにならぬ。渡せ。

五兵衛　どつこい。

(ト兩人せり合ふ。由兵衛、千兩箱を引たくり、上へ上り、五兵衛も續いて上る。由兵衛、五兵衛髻を取つて、)

由兵衛　動くな。

(トぐつと引寄せ、千兩箱を上げて睨む。向うはた〳〵にて、小梅走り出る。)

小　梅　ヤレ〳〵、こちの人。怪我はないかえ。

由兵衛　小梅か。

小　梅　申し。悦ばしやんせ。祐成様は多田の藥師様の御夢想の御封を戴かしやんすと、忽ちお目がようなつて、直に曾我へ打立たうと、時致様を御同道なされて、これへお出でなされますわいなア。

由兵衛　ヤア、それは嬉しや。南無藥師瑠璃光如來。

（ト鞭の合方にて、向うより、十郎五郎、侍烏帽子素袍の露を取り、小手脚當にて、てんでに弓矢を携へ出る。）

十　郎　鬼王、聞いたか。多田の藥師の利生によつて眼病忽ち平癒した。赤木の刺刀手に入るといひ、大願成就したわい。

由兵衛　恐悅に存じ奉ります。

五　郎　新左衛門。先立つて團三郎が荒岡源太となつて、佐々木殿の使者首尾よく仕了せ、鎌倉殿より友切丸を拜領して時致へ渡した。これからは狩場に於て敵工藤をぶつた切つて、河津殿へ手向けるばかりだ。喜べ。

由兵衛　ハレ、それは團三郎奴がでかしました。何から何迄、カウ甘々行くといふは、首尾よく御本望を遂げらるべき瑞相で御座ります。御兄弟樣。狩場の門出、軍神の血祭り、イザ、こいつを一矢遊ばされませう。

五兵衛　ヤア。（ト大きに膽を潰す。）

小　梅　ホンニこいつは憎い奴で御座ります。射殺しておしまひなされませ。

（ト十郎五郎、弓矢を番ひ、）

十　郎　然らば、きやつを時に取つての敵、祐經になぞらへ、一の矢は十郎祐成、親の敵を眞この如く。

（ト矢を切つて放す。五兵衛が首筋へ立つ。）

五　郎　二の矢は五郎時致、親の敵左衛門祐經、思ひ知れ。

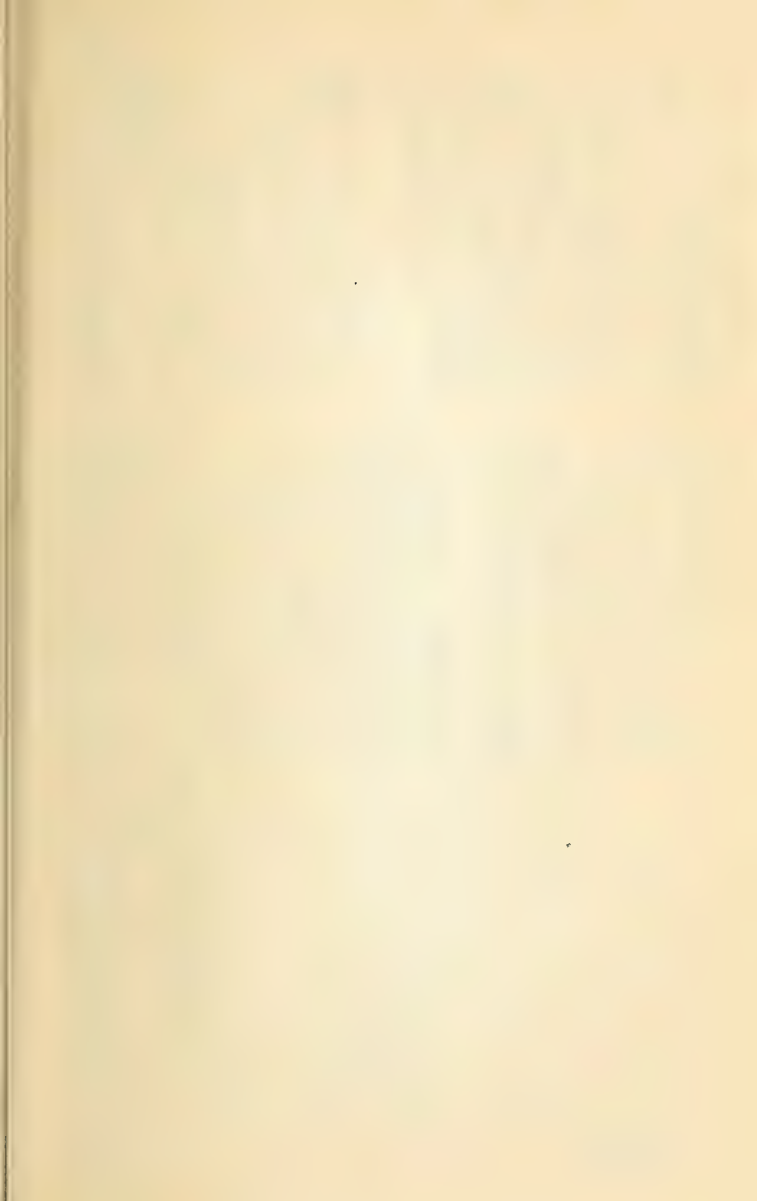
（ト同じく矢を切つて放す。又五兵衛が首筋に當り、苦しむ。）

由兵衛　然らば新左衛門めも、お相伴にお主の敵祐經を、眞この如くに。（ト五兵衛が首をポンと切る。）

小　梅　オヽ出來た〳〵。

十郎 五郎　大願成就嬉しやなア。（トきつとなる。）

由兵衛　まづ今日はこれ切り。

ト打出し

桑名屋徳蔵入船物語

桑名屋徳藏入船物語

口明

一 傾城宮城野　粂治郎
一 遣手杉　久五郎
一 吾妻屋喜作　友十郎
一 大館勘解由　勘藏
一 大館勘解由本名水夫の五郎太　新五郎
一 踊子春雨本名豐姫　豐松
一 奴定助本名權太　金才
一 踊子櫻本名象潟　市川吉太郎
一 山名巴之丞　岩五郎
一 奴又助　又太部
一 傾城檜垣　粂太郎
一 多度津一角　大五郎
一 踊子　新之助
一 同　初藏
一 同　森藏
一 同　若助
一 同　菊助
一 同　乙吉
一 禿文字野　林之助
一 親方徳兵衛　吉次
一 小俣三太夫　藤九郎
一 市ノ瀬和十郎　助五郎
一 石堂帶刀　彥四郎
一 鑑和田右衛門本名徳藏　歌右衛門
一 高丸龜次郎　座本小川吉太郎
一 諸士　大勢
一 男　大勢
一 侍　四人
一 駕籠　大勢

造り物。奥浪幕、見付、櫻の花見幕打ち有り。多度津一角衣裳羽織置手拭、酒飲んで居る。又助奴にて酌する。市ノ瀬和十郎小俣三太夫諸士大勢袴にて平伏する。上座に高丸龜次郎衣裳羽織煙草盆振上げ居る。踊子春雨、其他傾城禿殘らず花笠を着て踊子の形にてとめて居る。傍に毛氈茶辨當散らしてあり。何れも此見えにて宜しく。踊三味線にて幕あく。

高丸龜次郎　イヤ〳〵、放せ〳〵。

皆々　マア〳〵お待ちなされませ。

奴又助　エヽ旦那の常の短氣は知つて居ながら、御意見ならば、何故に折を見て仰しやらぬぞいな。

多度津一角　殿樣。さりとては端たない。私はちと醉の傳授も受けうと存じてをりまするに、これはマア、高が鎌倉の留守居家老共は、世間を知らぬ野暮助、諸事は拙者が呑込んでをりまする。構ひなされずと、又助、酒にせい。

サア皆々踊れ〳〵。

市ノ瀬和十郎　待て〳〵。踊子共、待ちをらう。

諸士　待てといふに待たぬか。

踊子皆々　はい〳〵。（ト留る。）

一角　さりとては喧しい衆ではある。

和十郎　いや、喧しう申さう。お國家老の一角殿、申分があるぞ。

一角　身共にか。

三太夫皆々　ヲヽサ、おひかへなされい。

龜次郎　こいつらが。知れた意見じやと思うて、いはしておけば、おれが廓通ひしたらば又なんぢや。一國の大名が廓通ひすりや何とする。

和十郎　サア、それをいなと申す者はござりませぬ。

龜次郎　そのいなと云はぬ者が、なぜに太夫が身請の金も

おこさず、揚錢の疊りまで一錢も拂はずにしめ上げるぞ。おれは廓に借金が出來て、思ふ樣に吉原へ行かれぬによつて、太夫にも得會はず、もう自棄になつて居る處へ、國家老の多度津一角が來て、こいつ意見に來たさうなと思ひの外、アヽ又家老は家老ぢや。わいらが胸とは裏表ぢや。おれが思ふ樣にしてくれる。誠の忠臣といふは一角が事ぢや。心よう遊んで居るに、言句にも立たぬよまひ言。皆おけよ〱。

和十郎　たとへ御手打に成るというても、申す事を申さにやならぬ。一角殿。今日は何日ぢやと思はつしやる。

三太夫皆々　イヤサ、何日ぢやと思召す。

一角　先將軍尊氏公、讚州金比羅大權現の御利生によつて、天下の主とお成りなされたる吉例に、末々御家督讓りには、公達直に讚岐へお下りなされ、象頭山へ御社參ありて御勅使と御立會なされ、大內鎌倉兩所より大權現の御造營あり、其上にて將軍跡目に御立ちなさるゝが當世の格式。

和十郎　その饗應は誰が致す。

一角　知れた事、御主人高丸龜次郎樣。

三太夫　シテ、讚岐へは何日のおなりぢやな。

一角　定日は三月十日。

和十郎　今日は何日でござる。

一角　三月七日。

三太夫　此鎌倉より讚岐まで路程はいか程あるな。

一角　されば百八十里餘もござらう。

和十郎　京都よりの御勅使、鎌倉より義詮公、兩所共に最早國元へお入りなされしと、追々早飛脚。

一角　それ故國元より一角直に參つたのさ。

和十郎　道程は百八十里、饗應の日までは、もはや三日ならでは無いぞや。

三太夫　殿様はアノ通り。所詮國元の間に合はねば、御家の斷絶は。

皆々　眼のあたりで御座るぞや。

一角　アヽこれ。突かけ〳〵いはつしやるな。もう國へ行ぬる日數は無いによつて、間に合はぬはというて、どうするもので。他の御家とは違ふ。マア御病氣か何となと云ひくろめて、まんざらお咎めの來るやうな事もあるまい。その様に固くいうて浮世が渡られるものぢやない。マア〳〵一ッ飲んで踊らつしやれ。家老のおれでさへ打解けて居るのに、鎌倉の留主居で醉の中に塗れて居てどうぢやいの。サア又助。注いで呉れ〳〵。

龜次郎　一角が來ずは病者になるであらう。皆あいつらには構ふな〳〵。

一角　殿様。差上げうかい。

龜次郎　差上げうとは、まだ家老めくな。

一角　そんなら殿め、一ッ飲みをれ。

龜次郎　ヲヽ飲むわい。

（ト龜次郎、一角と横になる。）

和十郎　家老のあの態を見さつしやれ。

三太夫皆々　何ともはや。

（ト皆々手を組み。）

春雨　申し、妾は何にも知らぬが、どうやら難かしさうな事でござんす。そんな事なら、その吉原のお傾城もお傾城、男が可愛いと思ふなら、マア、一旦國へ往なしまして、又參勤の折しつぽり會ふのを樂しみにしたがよい。なんぼういとしがらしやんしても、斯うなつては、自然と、會ふに會はれぬ様になるもの、深川の者の氣は小さいか知らぬが、わしやマアさう思ふわいな。

獅子櫻　さうでござんす。始めからこの深川へ通はしやんしたら、この様なもめの出來る樣にはせぬけれど、吉原といふと、天人もある樣に通はしやんすによつて、この樣な事になるわいな。

春雨　これ、又助さん。なぜ今迄殿樣を連れましては御座んせぬぞいな。

又助　腹を立てるな。吉原といふと打晴れた廓で、深川だの品川だのといふと我々しきや町人は遊びに來れど、大名は踊子買ひに來られるものぢやない。コリヤほんの氣晴しぢやてや。

春雨　憎らしい。戀に上下の隔てはない。それ程惡い踊子に、何故昨夜の樣な無理な事さしやんした。

又助　無理な事とは。

春雨　そりや、殿さんの心に覺えがあらうぞいな。

一角　昨夜、すりやもうお橋を懸けられたか。

龜次郎　橋は懸けぬ。ちよつと楊子位の事ぢや。

又助　はて、ちよびかはとまめな事ぢやなア。

櫻　ムウ、そんなら姉さん。もうお前はあなたに。

春雨　どうもならぬが、つい隱して吳れというてぢやによつて、それで隱したわいな。

（ト櫻、龜次郎を捕へ）

櫻　お前は、此中、妾にいはしやんした事・覺えて居やしやんすか。われさへ應というて吳れると、もう一生女には目も見合はぬ。身請けして女房に持つと、堅い誓言立てゝ置いて。ありやどうでござんすえ。

春雨　すりや、こなさんにもそんな事いうてかえ。

櫻　アイ　大抵の事かいなア。

春雨　わしにいはしやんしたのも丁度その通り。たかが妾ら風情の者ぢやと思うて、なぶらしやんしたのか。もう斯うなるからは、姫御前の意地ぢや。お國へも何處へも往なしやせぬぞえ。

櫻　それ〳〵。御大名さんぢやとて、こはい事はない。此譯を立てさんせぬと、一寸も離しやせぬぞえ。

（ト兩人してゆする。又助引退け。）

又助　此奴等は善いと思ひ上つて、旦那を嘲齋坊にしをる。なぶられたを有難い事ぢやと思はいで、惡く思ふと、張り歪めるぞよ。

春雨　さういはんすと、腰据ゑて猗臺詞せにやならぬわいな。

又助　さういや、うぬらを。

龜次郎　こりや、待てやい。

又助　でも、餘り大々しい奴等で御座りまする。

龜次郎　ハテ、戀の諸譯といふものは、わいらが樣な、き木像ではいかぬ。二人ながら尤ぢや。成程なぶつたのに違ひはない。愛をよう聞いて吳れ。おれが吉原へ通うて檜垣といふ太夫に深うなじんで居る所に、そこに居る家老共が、金を渡さぬによつて揚錢は滯る。太夫が內證、諸方の附屆け、始めは忍んで行くが、二日か三日、厚う出かけて見ても、金の無い悲しさ。行くに行かれぬ樣になつて、爲事無しにこの深川へ來て遊ぶのは、檜垣に會はれぬ腹立ちぢや。でも、大名のいふ事、反古にはせぬ。檜垣さへ手に入つたらば、わいらも手廻りで使うてやらう程に、堪忍せい〳〵。

春雨　さつても、負惜み無しに、さつぱりいうたものぢやなア。餘り有樣にいはしやんすによつて、とんと張合が拔

けて、恨みいふ氣がないわいなア。
櫻　サア、妾等が顔さへ立てば、檜垣さんの事は構はぬ。傍にさへ置いて下さんすりや、共々檜垣さんの相談に乘らうわいなア。今の事の違はぬ樣にして下さんせえ。
櫻春雨　きつと詞をつがうたぞえ。
又助　南無三。又厄介が增えた。
龜次郎　これといふも家老めらが企占ゐて、渡しならぬ故の事ぢや。よい、渡さいでも美事檜垣を手に入れて見せるわ。
一角　ハテ其樣に御氣をもまれます事は御座りませぬ。拙者が居ります。かの申合つた樣にさへなさるれは、自然と御手に入りまするぢやないか。
龜次郎　サア、それで落付いて居るによつて、廓をよけてこの深川へ來て遊んで居るのさ。
和十郎　又助、その高札を主人のお目にかけい。
又助　ネイ〳〵。
（ト高札を龜次郎一角眞中へ立てる。）
一角　御覽下されい。
龜次郎　なんぢや。廓判じ物、作者大膳大館勘解由。此大館勘解由といふ大目付の役人、顔は見知らぬが廓へ判じ物を出して、べつたりと作者大膳勘解由と平たう名を出したは、こいつ偉い粹ぢやわいの。
一角　何ぢや。糟禰宜と掛けて、龜次郎と解く。心は拂ひをえゝせぬ。
龜次郎　何といふ。（トむつとする。）
又助　身延の御命講と掛けて、龜次郎。心は紙花それなり。
春雨　角力取の脚氣と掛けて、龜次郎。心は足踏えゝせぬ。
櫻　操りの三重と掛けて、龜次郎。心は太夫ちやんとひける。
又助　龜は龜ぢやが、どん龜ぢや。心は往んだ顔ですつこんでゐる。
一角　あらはぬ鍋で居合拔くは、これ泥坊の形也。歌に。
龜次郎　身請とて身は沈みけり、丸龜の、地蹈鞴踏んだ借錢の淵。
（ト皆々思入れ。）
和十郎　それ、その高札が廓の大門口に立て有るとの噂。早速駈付けたるところ、町人共迄群集して、高丸龜次郎が事よと、とり〴〵の噂。もしお上の御評定に懸からば、お家の破滅であるまいか。
三太夫　大目付の名を出し、鬱憤あらば來れと云はぬばかりの判じ物。
和十郎　御國の饗應にて、百日以前に御上よりは出立の御暇出たれば、もはや國に御座なさるゝ趣故、表むいて顔の

出されぬと知つて書きたる、この判じ物。

（ト龜次郎無念がる。一角尻目にかけ、）

一角　エ。角を直さんとして牛を殺すと、武ばかりにとつて、思慮のある衆中は一人もない。

皆々　なんと。（ト武士皆々擬勢。）

一角　又助參れ。

又助　ネイ〳〵。

一角　コリヤ、（トさゝやく。）篤と申し渡したぞ。

又助　畏つて御座りまする。

一角　早くいけ。

又助　ネイ。（ト高札を持ちて走り入る。）

和十郎　一角殿。御家老職。こなた無念にはないか。口惜しうは御座らぬか。

三太夫　一家中もあきれて評議の致し様がない。

皆々　拙者共は無益しうござる。

（ト龜次郎甚だ急いたる氣色にて行かうとする。）

春雨
櫻　申し、御待ちなされませい。

（ト留める。この內、石堂帶刀幕の內より深編笠にて出る。樣子を聞いてゐる。）

龜次郎　いや。怪我設くるな。

一角　殿樣。コリヤいづれへ。

龜次郎　知れた事。廓へ。

一角　すりや、大館勘解由を。

龜次郎　打ちはなしてしまふわい。

一角　それでは、檜垣殿を手に入れる妨げになりますがや。

龜次郎　馬鹿盡くせ。戀は戀。アレあの如く落書を立てられ、了簡ならうか。檜垣に通ひ詰める山名巴之丞といふは諸大名、お暇賜はつて國元へ着致したる儀を、早飛脚にて達すれば、相違ないといふ印形を出す見屆けの役目。この龜次郎、百日以前御暇賜はりたれば、國へ歸らぬ故、國元へ着致したるといふ飛脚も達せず。それ故巴之丞へ屆けの印形、エ、とらぬを幸ひ、おのれが戀の意趣晴らしに、大目付の勘解由に吹込み、此落書にて身を釣寄せ、捕へて科に落さんといふ彼が計略ぢやわいやい。

一角　左程御存じの上その中へ御出でなさるゝは。

龜次郎　檜垣は後の事。勘解由を打ちはなしてしまふ。留めるな。

一角　御尤。大名の、あの如く惡口せられ、誰に憚る事は御座らぬ。勘解由をすつぱりと遊ばされい。

龜次郎　さすがは一角。さうでなうては叶はぬ筈。

一角　シテ、お腰の物は。

龜次郎　重代の政宗。

一角　後は氣遣ひ遊ばされな。

龜次郎　萬事宜しう取計らへ。

（ト向うへ行かうとする。皆々留める。一付きのけはひる。皆々、申し／＼と殘らず大勢向うへはひると、相方。一角一人殘り、しやんとする所へ帶刀出て。）

帶刀　千里が野馬は常にしも有れど、伯樂は常にしも有らずといふか。ハテ伯樂も有ればある。

一角　そなたは石堂帶刀樣。

帶刀　讃岐の家老多度津一角。

一角　スリヤ。最前よりのあらましを。

帶刀　イヤ、石堂帶刀は目付役ではないぞよ。

一角　ハッ。

帶刀　音に聞えた國家老。密かに願書を出したる故、分明に見聞せん爲忍びの遊興。主人と同じ酒色にふけり、放埒の身持、感心致した。イヤ斯うなくては計らはれまい。先達ての內意の通り、やつつけて見るか。

一角　ハッ。悉くは心許なう御座れ共、一ッかけませうか、二ッかけませうか。

帶刀　其位の儀は身が宜しう取計らうて吳れう。

一角　もし萬事首尾よく致さば。

帶刀　いやもう、それこそ點の打手はない。古今の手柄、古今の忠臣。

一角　宜しう御推擧の程を願ひ奉ります。

帶刀　一角、顏を上げやれ。

一角　ハッ。

帶刀　ムウ。君にては、材をはかつて官を授くが一ッ。功をはかつて賞を控へる二ッ。罪を明かにして罰を行ふ三ッなり。材に長短ある故、官に能否有り。功に高下ある故に罰に輕重。皆それぞれのかへ事。斯程の者を陪臣とは、ハテ惜しい事ぢやなア。

一角　何にも申上げませぬ。心が急けば、無禮ながら最うお暇申上げまする。

帶刀　一國を立てるか立てぬかは薄紙一重。大切の儀ぢや。行きやれ／＼。

一角　ハッ。（ト行かうとする。）

帶刀　アヽこれ一角。

一角　ハッ。

帶刀　餘り、獨り氣をもむと、ほつとして勞が出る。忠義にも草臥の來るものぢやが、どうぢや。

一角　劉賓は殺され、比于は主に胸を割かれ、務光は海に身を投げ、屈原は汨羅に沈む。一命の有る中は。

帶刀　よし／＼。もうよい。行きやれ／＼。

一角　ハッ。

（ト走りはひる。帶刀は橋懸りへ悠々とはひる。）

返し道具

（廓の體、門口掛行燈、炬燵に蒲團。よき所に長持あり。脇唄にて、大館勘解由、衣裳羽織大小。眉間を切られ、定助奴にて附き、龜次郎には奴又助つく。切合ひにて居る。此見え、春雨櫻禿皆々、亭主吾妻屋喜作止めて居る。市ノ瀬和十郎、小俣三太夫諸士殘らず隔て居る。）

定　助　旦那。踏込んで働かつしやれ。たとへいか程徒黨を拵へて參つても、奴めが居るからは氣遣ひない。一々撫切りぢや。覺悟せい。

勘解由　擦疵でも負うたからは、もう絶對絶命ぢや。定助。下郎に助太刀せられたといはれては、大館勘解由が武士が立たぬ。控へて居らうぞ。

定　助　てもアノ方に大勢加勢が御座りまする。

龜次郎　ヤイ又助。必ず手を出すと、おのれ共に許さぬぞ。何、一家中の者共。喧嘩は相手向ひ、其方達が加勢すると身が武士が立たぬぞ。

皆　々　ぢやと申して。

龜次郎　はて扨、控へて居ようてや。

（ト皆々靜まる。）

喜　作　いやもう、とかく私の家のもめぬ様になされて下さりませ。これ、深川の衆も皆頼みます〳〵。

和十郎　何を、うぬらが知つた事ぢやない。控へてをらう。

喜　作　はい〳〵。

龜次郎　大館勘解由。此高札の返禮は眞劔で云はう。サア、尋常にこれへ直れ。

勘解由　いや。猪口才な。

（ト双方詰寄る。）

和十郎　待つた。（ト割つて入り。）何れも、なんと思召す。主人と相手向ひの勝負をさせ、ぢつと見て居られうか。ハテお手討に會はばあふ迄の事。勘解由を打殺してしまうではないか。

三太夫　なる程、一人に一刀宛切下げても、こた〳〵になる事ぢや。皆さうぢやないか。

皆　々　左様で御座る。（ト皆々上をはねる。）

龜次郎　やい〳〵。主の詞を背くか。

和十郎　背きまする。如何様とも遊ばされませい。拙者共はアノ兩人さへ、こた〳〵に致せばようござる。

皆　々　左様で御座る。（ト振上げる。）

定　助　アヽコリヤ〳〵。卑怯な。相手向ひの喧嘩にさう〳〵が寄つて懸つて、それがどう相手になられる物で。これ〳〵龜次郎殿。御自分様も此様に大勢して取廻はすは卑怯で有らうが。

和十郎　ヲヽ、どうなとぬかせ。皆寄つて打放さつしやれ。

勘解由
定　助　アヽこれ〳〵。

又助　やい。要らざる高札を立てやがつて、それ程命が惜くば、逆になつて謝りをらう。旦那の蟲に入る程頰恥かゝさにやおきやせぬ。

春雨　これ勘解由さんとやら。人に頼まれさんしたのなら、意趣も遺恨もない中を、あの樣な事書かんすによつてぢや。皆そつちの誤りぢやぞえ。

櫻　どうぞ命助かる樣に、詫言して見さしやんせ。こちらも共々いうてやるわいな。

定助　旦那、よう思ひ廻して見ると、皆こなたが惡るい。これ過つて謝るに飾ふ事なかれぢや。どうぞ詫言なされませ。

勘解由　おれは疾うから謝る氣ぢやけれど、われが強い樣な事いふによつて、調子に乘つてつい生たのぢや。

定助　ハテ、藥袋も無い。賴みにする樣な奴ぢや御座らぬわいの。

勘解由　チヽ、天晴極道。驚入つた。いや諸事酒の上で致した事で、何にも覺えませぬ程に　御了簡なされて下されませい。それとも御腹が立つなら、この奴めを如何樣になり共、お試しなされて、私はお助けなされて下さりませうならば有難う存じまする。

定助　自體私は不仁身で、お切りなされても、切甲斐は御座りませぬ。あの和郎も切られてから、詫言する。それともにお腹が立てば、私と二人前をあの和郎一人で仕舞はつしやつて下さりませい。

勘解由　いえ〳〵、こいつを切つて下さりませ。

定助　いえ〳〵、こいつを切つて下さりませ。

勘解由　いえ、こいつを。

定助　いえ、こいつを。

兩人　はい〳〵、どうぞ御了簡をなされて下さりませい。

春雨　あの樣に、侍の手をついて詫びさんす事ぢや程に、もう了簡してやらしやんせいの。

龜次郎　頰に疵を付けられ、謝つて武士が立つか。

勘解由　いえもう、立たいでも大事御座りませぬ。

龜次郎　サア、立寄つて勝負せい。

定助　いえもう、委へ下つて居られまする。

龜次郎　おのれ、大目付もする身分でないか。

勘解由　いや最う、目付も押目になつてをりまする。

龜次郎　アヽ張合のない奴ぢや。

又助　ふぬけめ。皆樣どう致しませう。

和十郎　絶對絶命と存じた故、拔放した
れ共、あの態なれば却つて毛を吹いて
疵。事を好むことも有るまい。
三太夫 皆々　左樣で御座りまする。
和十郎　エヽ、命冥加な侍ぢや。
（ト皆々刀を納める。）
龜次郎　二人ながらこれへ出い。
勘解由 定助　ハイ。
又助　サア。づつと出をらう。
兩人　ハイ。
三太夫　出ませい。
又助 皆々　出をらう。
和十郎　出ませい。
皆々　出をらう〳〵。
（ト兩人龜次郎が傍へうぢ〳〵して來て）
勘解由　兩人に出ませい〳〵と仰せられ
まする故、出まして御座りまする。
定助　して非人めには如何樣の儀で御
座りまする。（ト物まねにていふ。）
皆々　大馬鹿め。
兩人　ハイ〳〵。
龜次郎　ヤイ此高札の判じ物はおのれが
細工であるまい。山名巴之丞に頼まれ
たのであらうがな。
定助　ハイ。宜しう御推量なされて下
さりませい。
龜次郎　身どもは上の御暇が出たれ共、
國へ往なずに廓の居續け。何と大目付、
どうぞいうて見ぬかやい。
勘解由　何のお前。
定助　口もくされ、もう何ともいやし
られませぬ。
龜次郎　もう何をいうても、馬の耳に風。
腰拔めが。
皆々　左樣で御座りまするとも。
龜次郎　エヽ。餘り張合がない。せめて
胴ごしに。（ト兩人をむねうちにする。）
兩人　お痛〳〵〳〵。
龜次郎　其硯持つて來い。
和十郎　畏つて御座りまする。
（ト龜次郎高札の表へ貼紙して書く。）
龜次郎　こいつらを一ツに括れ。
又助　ネイ〳〵。（ト兩人を背中同
志合はせて括り、眞中に高札を挾み。）
龜次郎　立寄つて讀んで見い。
和十郎　私共儀、巴之丞といふ大馬鹿に
頼まれ、判じ物の高札を立て候科によ
つて、兩人共に打ちのめされ、大門口
にて諸人に恥を晒し申す者也。
　月　日　　大館勘解由
三太夫　なる程これで良い成敗で御座り
まする。
龜次郎　迚もの事に顏を書汚してやれ。
和十郎　畏つた。皆女子ども手傳へ〳〵。
櫻　ほんに餘り憎い事ぢや。わしらもち
つと手傳ふわいな。
春雨　叩く替りぢや、塗つてやらう。

（ト皆々懸り、兩人の頬を墨にて様々に塗り、種々をかしくあり。）

勘解由　アヽこれ〳〵。表ばかり塗らずと裏の頭も頼みまする。

定助　これ〳〵表側が肝腎ぢやぞ。

龜次郎　あの様を見い。

皆々　ハヽヽヽ。

喜作　（思入れ。）やれ〳〵嬉しや。これでちつとなと納まつたまで。龜様。久し振の御機嫌。一ッあがりませんか。

龜次郎　揚錢拂はぬ客ぢや。いつそ、桶伏にせぬかい。

喜作　勿體無い事仰しやりませい。

傾城宮城野　檜垣さんも追付け見える程に、奥で待つてゐさしやんせいな。

龜次郎　檜垣より來にや、引ずりにでも遣らにやならぬ。和十郎。其方達はあの馬鹿めらを大門迄連れていて突放せ。皆歸れ〳〵。

和十郎　イヤ最前申上げた通り、一旦屋敷へ御歸りなされねば、御家が。

龜次郎　はてさて、又しても同じ事を。聞く耳持たぬ。サア奥へいて一ッ飲まう。皆も來い。

（ト騒ぎ唄になり、はひる。和十郎諸士三太夫殘る。）

三太夫　和十郎殿。どう有つても御家は心許無い。こりやマア。

皆々　何と致しませう。

（ト手先で、表へ出いと和十郎する。呑込み、皆々表へ出る。小聲にて、）

和十郎　如何にしても、一角が心底其心を得ぬ。貴殿方はお先へ。拙者は後より。

三太夫　然らば善惡の安否は。

和十郎　追付け御知らせ申さう。

皆々　おさらば。

（ト皆々橋懸りへはひる。和十郎は奥へはひる。勘解由、奴定助最前より、裏になり表になり、兩方へ歩かうとして居る。）

勘解由　こりや、ちつとおれに附いてあるけいやい。

定助　そつちの自由にすると、おれが歩かれぬ。斯うせう。おれを負うて蟹で行かう。

勘解由　どうなとして歩きさへすりやよい。

定助　それ〳〵。

（ト行かうとして立留り、きつとなる。これより無間の合方になる。）

定助　エヽどうも行かれぬ。心ある人あらば、どうぞ此繩解いてほしいなア。

（ト合方早める。勘解由奴定助前後へ入替り、）

勘解由　さうぢや。たとへ此繩解けんというても、我念力を以て解かいで置か

うか。ちん〳〵。
(ト相方に合はして、兩人少時種々して、無間の相方に合はせ、入替り〳〵して、をかしき身振宜しく有るべし。程能き處にて兩人こけ。)

兩人　あ痛〳〵。

(ト又助奥より出て二人の繩を解く。一角奥より出て、互に顏見合して)

一角　德藏舟の水夫の者共。大儀であつた。

兩人　もう宜う御座りまするか。

又助　急に仰付けられたによつて、わいらに何をいふ間もなかつたが、ても氣轉の利いた奴らぢや。

勘解由實は五郎太　機嫌よう寄合うて酒飲んで居るものを、何か譯を云ふか、衣裳を着せるか、假令間に下の八兵衛の芝居でも見りやこそ。なア、權太よ。

定助實は權太　おりや切られる迄は夢中で居たが、ちよつきりいわされてから、酒の醉が覺めた。それからようしやべつたてや。

一角　疵は痛みはせぬか。

五郎太　なんのこれ位の事は鹽ぬすくつて置きや。

權太　なんぢややら、奴殿の云ふ通りに、滅法界に遣付けたが、コリヤ、どうした事で御座りますぞい。

一角　必ず詑言すな。其高札を立てた侍は主人に意趣有る者共。是非打殺す主人の色目を悟つたる故、急に又助に申付け、斯く計らうたは主人の無事にあらせん爲。一寸延びれば尋延びる。仕返ししたと得心させ、腰を折るのが家老の計略。

兩人　出來た。(ト大きういふ。)

又助　シイ。聲高な奴等ではある。

一角　大切な役目申付けた德藏が水夫の者。萬事首尾よう仕了ふせたらば、一角の褒美。先づ疵養生骨折代。(ト金子二兩宛やる。)

兩人　コリヤ忝う御座ります。

(ト戴く。和十郎聞き居て、)

和十郎　一角殿。

一角　貴殿は和十郎。

和十郎　天晴の御家老。驚入りました。

一角　一家中ともに、嘸安心御座るまい。

和十郎　とても事に、御奉公の御思案聞いて安堵仕りたい。

一角　他言は御無用。

和十郎　武士に首をさげられませう。

一角　拙者が存心は。

(ト囁く。和十郎手を打ち、)

和十郎　御國の柱。エヽ、忝い。(ト拜む。)

一角　委細の事は其兩人同道して篤と樣子を。

和十郎　然らば左樣仕りませう。
一角　大方今宵は過すまい。家老分の者共へ密かに。
和十郎　安堵致させませう。
一角　早く御座れ。
和十郎　おさらば。
一角　又助來い。
又助　ネイ。
（ト唄になり、一角又助を連れはひる。和十郎定助勘解由を連れ襖懸りへはひる。向うより山名巴之丞紫縮緬の長羽織にて大小尋常にさし、網笠にて出る。內より傾城宮城野裲襠にて禿一人連れ出る。）
宮城野　檜垣さんが遲いというて喧しい事ぢや。そなた一走りいて呼んでおぢや。
禿　アイ〳〵。（ト門へ出て行過ぎる。）
巴之丞　コリヤ〳〵、文字野ぢやないか。
禿　誰さんぢやえ。
巴之丞　おれぢや〳〵。
禿　ヤア巴さんか。宜う御座んした。
巴之丞　太夫はまだ來ぬか。
禿　アイ。遲いによつて、呼びに行くわいな。
巴之丞　すりやまだ來ぬか。昨夜の程いうて置いたに、何處へいて居る事ぢや。
禿　又そろ〳〵口舌の種が始まらう。どれ呼んで來うか。
巴之丞　コリヤ、必ずおれが來て居る事いふなよ。
禿　それでもおまへに會ひたがつてゐやんすもの。
巴之丞　いや〳〵、誰やら田舍の髭男が待つて居るといや。必ずおれぢやといふな。
禿　アイ〳〵。（ト向うへはひる。）
巴之丞　今からあの辯口では、末ではよい濡をしをるであらう。
（トいひ〳〵中へはひる。宮城野炬燵に腰掛け居る。）
宮城野　巴さん。來さんしたかえ。
巴之丞　エヽ、宮城野太夫。いつ見ても〳〵可愛らしい御面相ぢやな。
宮城野　そんな事は檜垣さんにいはしやんせ。こちやなんともないわえ。
巴之丞　如何樣。廓といふものは、花の三月でも炬燵をして懸香の妙なのは、こちのそけ太夫が　の匂ひをさますのでエすか。
宮城野　又惡口かえ。いふぞえ。
巴之丞　御意なされ。嘘ぢやなし。
喜作　これは忙がしい事ぢや。（ト出で）エヽ、巴樣。今もお前の噂。檜垣樣が遲いので長う細う待つてをりまする。私、一寸お迎ひに。
巴之丞　こりや〳〵、おいてくれ。檜垣よりは干菓子にせう。こりや、茶を汲

め〳〵。

喜作　とは何故で御座りまする。

巴之丞　いや〳〵、怖い〳〵。傾城の誠と女子の山伏は無いものぢやてや。

喜作　又そんな事仰しやる。アヽ申し。さう疑はれうより、いつそ申しませう。あの意地わるの龜樣、來てで御座りまする。

巴之丞　なんぢや。龜次郎が來て居るか。

宮城野　これ喜作さん。由無い事をいうて、又檜垣さんを泣かすのかえ。

喜作　ても、巴樣に疑はれては、私が立ちませぬわいな。

巴之丞　そんなら龜次郎が。

喜作　お腹が立ちまするか。

巴之丞　ハヽヽ。なんの腹が立たう。あつちは當時御發向。我らは名もなき大名なり。どうで較べたら稚馴染の方へ花札は落ちぬ。どうなと成らう。少時睡眠と出かけう。（ト炬燵へあたる。）

宮城野　枕あげうかえ。（ト渡す。）

巴之丞　亭主見て呉れ。太夫スがお手づからぢや。まだ武運にも盡きぬさうな。

喜作　あれ〳〵。あそこへ太夫樣が見えるは〳〵。

（トぬめり唄になり、傾城檜垣向うより傘差掛け、禿遣手付いて出る。）

宮城野　檜垣さん。遲かつたなア。

檜垣　宮城野さん。まそつと早う來うと思うたけれど、菱屋の奥州さんが心悪いといはしやんしたによつて、見舞ひに杉をやつたれば、聞かしやんせ。疱瘡ぢやわいな。

宮城野　オヽをかし。

檜垣　なんぼう姫御前同士でも、直に會うたら恥かしがらうと思うて、よう行かなんだ事ぢやわいな。

遣手杉　今日が山あげの最中。出物はよいが、阿多福の樣な顏を見て、逃げて出て太夫さんに其通りいうたれば、直に大きなぴん〳〵する鯛と裸人形、今買うて來いといふ。わし一人をてんでん廻して今になりました。

檜垣　さうして巴さんは來てかえ。

喜作　あれあそこに。

宮城野　又奥に、カノが來てぢやぞえ。

檜垣　かのとはえ。

宮城野　龜樣がいなア。

檜垣　オヽ好かん。

喜作　なんぼうお前が嫌がつても、呼んで來いというて、韋駄天の樣になつて我等に迷惑を御推量。

（ト親方出る。）

德兵衛　オヽ太夫。大抵待つてゐた事ぢやないわいなう。

檜垣　申し親方さん。なんで妾を待つて御座んすえ。

徳兵衛　外の事でもない。亀様がそなたの身請をするというて、裏からそつと呼びにおこした。なんと太夫、嬉しいか〳〵。

檜垣　何を、おいて下さんせ。わしや身請しられる事は嫌ぢやわいな。

徳兵衛　そんなら一生勤奉公する氣か。

檜垣　わしや他に行く處が御座んす。その人の處より他へというては、妾や嫌で御座んす。

徳兵衛　それでも親方の後見ぢや。無理に亀様の方へ身請さそうというたら。

檜垣　あい。直に死にまする。今でも決つたら直に戒名付けて置いて下さんせ。

徳兵衛　その我儘を。（ト懸らうとする。）

喜作　これ〳〵、徳兵衛殿。其様に親方の後見ばかりいはしやるな。又其處には以心傳心があつて、どちらでも、貴様は金さへ儲けりやよいぢやないか。マア此臺詞はおれに預けて置かつしやれ。

徳兵衛　これ面無かな事いふ人ぢや。こんな時に押切つて置いて、どうなるものぞいの。

檜垣　ハテ、どうなと勝手にさしやんせ。死ぬる分の事ぢやわいな。

徳兵衛　ムウ。さう腰据ゑるは蟲があるな。

檜垣　勤の樂しみぢや。間夫もあるぞいな。

徳兵衛　その蟲の名は何といふ。

檜垣　可愛い男の名を、輕々しう。ほんにをかしいわいな。

徳兵衛　われは〳〵。

喜作　これ、おれが預つて居る。

徳兵衛　いや、聽かぬ〳〵。

喜作　おれ次第にして置かつしやれ。

（ト種々もみあひ、宮城野遣手禿付き皆々奥へはひる。ト合方になり、檜垣煙草のんで思入れして、巴之丞傍へ行く。）

檜垣　コレ〳〵、巴さん〳〵。

巴之丞　ムウ身請ぢや〳〵。

檜垣　寢言聞きたうもない。今の喧しさに目の覺めぬといふ事があらうか。狸寢入りおかんせ。これ。話したい事があるわいな。（ト揺起し。）起きさんせざ、いつそ寢て話そ。

（ト敷布團の中へ入る。巴之丞ちやと起きて、）

巴之丞　オヽ、よう寢て居た所へ、すつての事に、また猫が見入らうとした程にの。どれ化かされぬ中に早う歸りませう。（ト行かうとする。）

檜垣　待たしやんせ。

巴之丞　身請の相談のあるお傾城。玉の輿にお乘りなされい。

（ト振切るを又立廻りにて留める。）

檜垣　いや、なんぼうでも往なす事はならぬ／＼。

巴之丞　こちも足があつて、美事往んで見せる。放し下され。

（ト振切るを、裾に取付き、種々留める。巴之丞にしがみ付く。）

檜垣　イヤ、離しやせぬ／＼。

巴之丞　其涙を龜次郎に泣いてやれいヤイ。

（ト巴之丞が顏を見て、）

檜垣　これ、巴之丞さん。

巴之丞　なんでエす。

檜垣　身請の事を聞かんしたら、腹の立つは尤もぢや。見す／＼知れてある事でも、さう腹を立て下さんすは、わしや嬉しい。成程、龜さんは突出しから會ひ掛つて一通りの客ぢやない。惚れもする惚れられもしたけれど、知つての通りの短氣者、屋敷の首尾が悪いとやら、紋日日柄も投遣りに、廓へとては御座んせぬ。お前は繁う通うて下さんす。アノ水臭い我儘者と心で較べて、扨も一生男を持つなら、あの様に思ひ込む殿御を持つのが女の仕合ぢやと、ふつと思うて、それからが、どこともなう可愛うなつて、今日よりは明日が尚いとしうなり、どうも斯うもならぬ程大切になるほど、龜さんが煩さうなつて、斯ういうたらば、浮氣な者とさげしまんすであらうが、姫御前といふものは、假令にも僭上にも、これ程に惚れてからは、取戻しのなるものぢやないわいな。（ト泣く。）

巴之丞　それ程におれを思ふ者が、何故に表面ばかりで、今迄帶は解かぬ。その上われがこの守袋、コリヤ確かに龜次

郎が起請ぢや。これを引出して見て、
おのれをマア。
（ト檜垣が肌の守袋を出し、中より書物を
出し讀む。檜垣ぢつと泣いて居る。）
巴之丞「其方事、突出しよりなじみにて、
人目には仲良く見えれども、身請する
迄は帶解くまいとの言分、何ともその
意を得ぬ。これは我身を疑うての事か
と存じ候。身請の隙取り候事は、口に
いはれぬ身の難儀、心の底には少しも
如才なく、ぞつこん思込み、一生妻と
定め申すべき事。日本大小の神祇を誓
ひに入れ、毛頭相違は無御座候。
氏神へ血判如件。
右起證文遣し候。此上に肌觸れ申され
ずば、そもじ我を嫌ひ申され候事と存
じ候。それにては女子の風上にも置か
れ申さず、此返事急〳〵可被爲候。返
事來る迄は廓へも遠ざかり申し候。

檜垣どのへ　　龜より」
この血判の起請を見れば。
檜垣　ぞつこん思込んだ事なら、今迄
肌を觸れずにゐるようかいな。
巴之丞　すりや、龜次郎に一度も肌は觸
れぬか。
檜垣　それその樣に疑ひ深いによつ
て、人が寢ようと思うて跪いても、負
惜しみで逃げ歩いてから。肌觸れぬ恨
みなら、こつちにいかい事云ひたいの
に、餘りで、憎いわいなア。
（ト抱付き泣く。巴之丞背中撫でて、）
巴之丞　成程、皆おれが惡かつた。堪へ
てたも。堪忍してたも。あり樣は惚れ
拔いて居る心から、龜次郎に心中だて、
おれは嫌ふであらうと、拗て見せたり、
外したり、そなたが寢ようと思うて亭
座敷へ外した時、こちの目には、寢と

むながつて上手ごかしに外したと見え
るのは、やつぱりおれが氣の迷ひぢや。
もうとんと疑ひは晴れた。
檜垣　そんなら疑ひは晴れたかえ。
巴之丞　此世は愚か未來迄も。
檜垣　必ず變つて下さんすなえ。
巴之丞　女房ども。
檜垣　嬉しいわいな。
（ト抱付く。內より、）
龜次郎　いや〳〵。檜垣にはおれが直に
會うていはう。
（思ひ入れ。）
又助、われや、高見から見物せい。（ト
內にて。）
檜垣　ありや龜さんの聲。
（ト巴之丞奧へ駈込まうとする。檜垣取付
き。）
檜垣　これ、お前の身體に凶事がある
と、妾やなんとせうぞいな。

巴之丞　そなたさへ女房に持ちや、例へどの樣な無念口惜しい事があつても辛抱する。

檜垣　エヽ嬉しう御座んす。妾が可愛くば必ず短氣を出して下さんすなえ。

巴之丞　そりやちつとも氣遣しやんな。

龜次郎　檜垣〳〵。

（ト奥より龜次郎・又助・春雨・櫻・傾城禿殘らず出る。巴之丞はちやつと炬燵へ隱れる。檜垣裲襠にて隱し、腰掛けてゐる。）

檜垣　龜さん。其後は御遠〳〵しう御座んす。

春雨　ほんに檜垣さんとやら。終に御目に懸りませぬが、妾は龜さんのちつとばかりの馴染、深川の踊子春雨といふ者で御座んす。

櫻　妾は櫻と申しまする。よう見知つてお呉れなされませ。

檜垣　珍しい深川の踊子さん方。門より外へ出ろ事のならぬが、勤めの憂きふし。テモ可愛らしい。お心安う御交際申したい程に、ちよこ〳〵來てお呉れえ。

春雨　聞けばお前は龜さんと深い仲ぢやげな。

檜垣　誰がえ。

春雨　ハテ、突出しから馴染の深い仲ぢやないかいな。

檜垣　勤めする身ぢやもの、呼出して下さんすを嫌ともいはれず、座敷ばかりの酒相手はあるうち。深いの淺いのと、そんな事ぢやないわいな。

春雨　ムウ。そんならお前は、龜さんは可愛うは無いかえ。

檜垣　ハテ、萬更他人の樣にも無いで有らうけれど、さしてこれぞといふ事も無し。

櫻　アノ、抱かれて寢ても、可愛うないかえ。

檜垣　可愛けれや抱かれて寢いでいな。こちや一度も、龜さんに帶解いた事は無いわいな。

櫻春雨　エヽ。

檜垣　もし、おまへ方、お馴染なら隨分いとしほがつて進ぜて下さんせ。

（ト兩人龜次郎傍へいて、）

櫻春雨　申し、龜さん。こりやどうで御座んす。

龜次郎　檜垣。わりや、おれが起請の返事何故にせぬ。

檜垣　どうも返事の仕やうが無いによつて。

龜次郎　すりや、おれが嫌ぢやな。

檜垣　始はさうでも無かつたけれど。

龜次郎　われが嫌と思ふ程、おりや又、金輪際われに惚れた。金輪際、ォヽ、

身請して抱いて寢る。

又　助　嫌といふと手も足も引張紙鳶に括付けて置いて、抱いて寢さすのぢや。

檜　垣　身請が出來ると直に死ぬる。死んだ後は御勝手次第。

龜次郎　何で、それ程におれを嫌ふ。

檜　垣　言交した可愛い男が御座んす。

春　雨　その男は誰で御座んすえ。

檜　垣　死ぬる程思詰めて居る者をいうてよいものかいな。深川の意氣地は知らぬが、此廓ではマアいふまいわいな。

春　雨　ほんに、案の外といはうか。

龜次郎　餘りな事で物が言はれぬ。

春　雨　龜樣、立たぬぞえ。

宮城野　日頃の氣に似合はぬ。檜垣さん。そりやマア何を云はしやんすぞいなア。

龜次郎　われが心中立てるのは山名巴之丞であらうがな。

檜　垣　それ程よう知つて居ながら。オオくど。

龜次郎　よいは。さう腐合うて居る仲を、無理に身請するは殺生ぢやが、今夜はおれが揚げる。大名の揚げた太夫を盜み喰ひする野良猫めを引摺り出してぶち殺す。

又　助　左樣で御座りまする。總體、野良猫といふ奴は、人の無い處では、とこ吠えたり、わめいたり、盜み喰ひをしつけた癖で、人さへ見ると、縁の下炬燵の中へ引かゞんでけつかるものだて。

龜次郎　を盜み歩く野良猫め。サア出さらぬか。

(ト巴之丞無念がる。)

檜　垣　アヽこれ〳〵、出まい〳〵。サアわしが事を思うて吳れる猫ならば、山犬のたんと居る所へ出さうむないものぢや。必ず氣を出して下さんすなえ。

龜次郎　又助。野良猫めがうぢつくわい。

又　助　なんとして。面出すが最期鼻柱を引裂くものを、出てたまるもので御座りますか。

龜次郎　サア檜垣。抱かれて寢い。(ト手を取る。)

檜　垣　嫌で御座す。(ト振離す。)

龜次郎　嫌と云や、此炬燵を。(トかゝる。)

檜　垣　こりや。何さしやんす。

龜次郎　サア、それが嫌なら抱かれて寢い。

檜　垣　いやぢやわいな。

龜次郎　いやといやこの炬燵を。

(ト引きまくる。立廻りにて龜次郎見えになり、又助かゝり、ちやつと拔かうとする。巴之丞當てる。ト此間親方德兵衛、男共皆々出て、怖々見て居る。)

檜　垣　これ、さつきに云うたはこゝの

事で御座んすぞえ。
巴之丞　龜次郎。お身は百日以前に御暇を給はり、明後日は國許で勅使將軍家の饗應ぢやが、まだ國へは歸らぬな。
龜次郎　知れた事。おれのからだでおれが往なぬを、おぬしの構ひになるか。要らぬ世話を。篦棒めが。
(ト巴之丞聞きつく。)
巴之丞　いやさ、構ひはせぬが、たとへ此處に居るにもせよ、國許へ着致したといふ、家老共よりの訴へに、何月何日に國へ着いたといふ書附に身が判を捺さねば御前が濟まぬが合點か。
龜次郎　判自慢おけ／＼、おぬしが判を取らぬとて何事、戀の意趣に大館勘解由に落書を張らせ、身が出て來たらば、大目付の勘解由が直に押さへて申上げる言合せか。サア出て來たぞよ。勘解由は先達て面縛させたが、わりや炬燵へかゞんで、コリヤ此面をえゝ出さぬぢやないか。
(ト指にてつく。巴之丞無念がる。)
巴之丞　成程太夫が心變り、腹の立つは尤もぢや。身請はおれがする程に、今宵の所はどうぞ了簡に預りたい。
龜次郎　いやぢや。
巴之丞　いやさ、所詮心變つた太夫が事、今宵一夜の所は、コレ龜次郎、武士が手を下げて頼む。
龜次郎　エゝいやぢやといふに。
(ト巴之丞の横面はる。無念がる。)
巴之丞　こりや武士の生面をはつたぞよ。
龜次郎　ヲゝ、はつた。はつたばかりぢやない。かう。(ト蹴る。)
又　助　オゝ奴がお脛戴いてをらう。(ト蹴る。)
巴之丞　太夫、堪へてたも。もう／＼了簡が。
(ト刀抜かうとする。檜垣巴之丞に抱きつく。巴之丞檜垣を抱きしめ、涙をこぼし、無念の思入れ。)
檜　垣　サア堪へて下さんせ。わしが可愛ゆくば辛抱して下さんせいなア。
巴之丞　といふてあんまり。
龜次郎　うぬより先へこつちから。
(ト拔かうとする。巴之丞一刀切る。)
皆　々　そりや切つたわ／＼。
(ト龜次郎又助皆々橋懸りへ逃げはひる。巴之丞は「おのれ」と拔刀振上げ居る。檜垣巴之丞に取付き居る。)
巴之丞　エ、龜次郎め。まつ二ッにと思うたに。
(トドン／＼太鼓なる。親方男棒つき出る。)
德兵衞　これ／＼。其太夫に疵でもつけたら、御大名とは云はしませぬぞえ。
巴之丞　親方、氣遣ひすな。太夫は今宵

中に身が身請する積りで、掛屋方へ金子申遣したれば、少時待つて呉れ。

徳兵衛　いや〳〵、かうなつてからは金と引換でなけりや待たれませぬ。マア其太夫をこつちへ戻さつしやりませい。

檜垣　いや〳〵、わしや何ほうでも離れやせぬ〳〵。

巴之丞　今手放すと、何れ悪人共が手をかける。ちつとの内おや、待つてくれ。

徳兵衛　千も萬もない。棒づくめにして請取れ〳〵。

(ト皆々叩きにかゝる。巴之丞追散らし、追込み、ドン〳〵と早太鼓打つ。「ありや〳〵」といふ。大館勘解由大目付のなりにて侍大勢連れ、向うより出てくる。)

勘解由　廓の中に狼藉者があると訴へたが、いづれにをるぞ。

徳兵衛　ハイ〳〵。怪我人も御座りまする。其上縦横十文字にあぶれをりまする。

勘解由　家來共縄打つて参れ。

侍　ハッ。

(ト侍大勢橋懸りへはひる。「アリヤ〳〵」といひ、巴之丞檜垣の手を引き、抜刀にて出る。後より町人大勢棒つき出る。)

勘解由　貴殿は山名巴之丞ではないか。

巴之丞　大館勘解由殿か。

勘解由　廓のあぶれ者といふは貴殿か。

巴之丞　檜垣が、身が心に従うたを、亀次郎めが段々の雑言、打ちはなさんと思ひの外、手に餘りますてや。

勘解由　シテ檜垣はま者で御座るか。

巴之丞　拙者に取付いて居まする。これ太夫、震ふ事はない。じつとおれに取付いで居や。

勘解由　そりや、皆、叩き伏せい〳〵。

(ト男、親方皆々出る。)

巴之丞　待て〳〵。勘解由殿、シテ金子持参なされたかな。

勘解由　今宵中に檜垣が身請するといふて越された故、金子千両持参いたし、五百両は身共が貴殿へ貸ぢや〳〵。さて〳〵首がにえ込む様にござるて。

(ト千両の財布渡す。請取り内より七百両出し。)

巴之丞　親方。檜垣が身請七百両。請取れ。(トほふる。)

徳兵衛　アヽ、コリヤ小判ぢや。(ト七包懐中する。)

巴之丞　早く證文渡せ。

徳兵衛　ハイ〳〵これが年季證文で御座りまする。(ト渡す。)

巴之丞　確かに受取つた。太夫これで相違ないか。

檜垣　アイ、私が年季證文。

巴之丞　そんなら大事にかけて持つて居

や。

（ト檜垣取る。）

巴之丞　太夫、これからはそなたの身儘ぢやぞ。序でに龜次郎めを捜出して。

町　人　どこへ〳〵。怪我人が出來たからは、動かす事はならん。

勘解由　エヽ面倒な。打廻さつしやれ。

（ト振上げる。）

巴之丞　合點ぢや。

（ト切懸かる。皆々追込む。勘解由は奥へはひる。檜垣「アリヤ〳〵」の聲に橋懸りより走出る。後より龜次郎も走出る。兩人よき所にて行當り、）

兩　人　ハイ〳〵。御許されませい〳〵。

（ト兩人顏見合せ。）

檜　垣　ヤア龜さんか。

龜次郎　太夫か。

檜　垣　これ、年季證文。

（ト渡す。龜次郎見て悦び、）

龜次郎　恭い。（ト散々に引裂き、おとし泣く。）

檜　垣　堪へて下さんせ。

（ト兩人びつたりと抱付く。勘解由奥より出て、此態を見て、びつくりし、）

勘解由　こりや見つけた。

（ト兩人へ掛かる所へ、奥より多度津一角出で、大館解勘由を引退ける。又掛かる所を當てゝ、兩人を長持の內へ入れる。）

大　勢　えいや〳〵〳〵。

（ト大勢聲する。右の中、勘解由起きて一角に切掛ける所へ、向うより石堂帶刀善き衣裳裃にて、若黨大勢連れ出る。）

帶　刀　それなるは大館勘解由でないか。

勘解由　石堂帶刀殿。

帶　刀　そなたものは。

勘解由　讃岐の家老多度津一角にて御座りまする。

帶　刀　何故の刄傷ぢや。

一　角　いや拙者は構ひませねど、このお侍が理不盡に切掛けさつしやる故。

勘解由　イヤサ今の者を出せ。（ト一角に又きめ付ける。）

帶　刀　今の者とは何者で御座る。

勘解由　イヤサ今の者とは。

帶　刀　何で御座る。

勘解由　イヤ何でも御座らぬ。

帶　刀　狼藉者の人違ひか。さうか〳〵。

勘解由　マ、左樣さうに御座る。

帶　刀　ハテ慌てた。

皆　々　えいやア〳〵。

（ト巴之丞抜身にて出る。後より棒つき大勢出て、其後より戸板に又助が死骸乘せ、浪人和田右衛門付き出る。眞中へ直る。ト、）

帶　刀　人をあやめた狼藉者はこれか。

皆　々　左樣で御座りまする。

帶　刀　お身は山名巴之丞。

巴之丞　ヤア石堂帶刀殿。

帶　刀　將軍御家督讓り前、鎌倉中を忍びの巡見、人をあやめし狼藉者と聞いて、駈けつけたが、ハテ、味な處に居召さつたの。

巴之丞　サアこれは。

勘解由　エヽ惡い手つがひ。

帶　刀　何が惡い。

勘解由　イヤサ、拙者も目付の道筋、狼藉者と承つて駈付けまして御座る。

帶　刀　それが何の惡い手つがひ。よい手つがひでこそあれ。

和田右衞門　それに御座るは多度津一角樣で御座りませぬか。

一　角　其方は中間又助の兄の和田右衞門。

和田右　弟めは人手にかゝり相果てまして御座る。

一　角　何がなんと。

和田右　浪人こそ致せ、以前は錆槍の一筋も突かせた者。弟を殺されて相立ちませぬ。見ますれば常の御代官樣とちがひ、重い御役人樣御出での樣に存じまする。弟が敵を打ちたう存じまする。敵討の願ひ御聞屆け下されうなら有難うござりまする。

一　角　氣遣ひしやるな。相手は何者にもせよ、人を殺せば下手人は天下の大法。敵は目前にあれば貴殿の心委せ。

巴之丞　ヤアどこへ、下手人。たかが徒中間。慮外働いた故切捨てにしたが、何と。

一　角　町人百姓の慮外は格別。武家奉公の者は其主人へ、貰ひ請取渡しの作法があるが、又なんの科致して、いつ屆けさつしやれた。

巴之丞　イヤサ、それは。

帶　刀　シテ又御罰責の廓へは何用有つて來召されたな。

巴之丞　イヤ其儀は。

帶　刀　お上へ申上げ、きつと御定目の通り取計らはう。絕體絕命ぢや。覺悟してゐやれ。

巴之丞　アヽこれ。それを仰上げられると、拙者輕うて切腹、重うて打首ぢや。爰は貴殿のお情で見逃してさへ下さるれば、浪風なしに助かると申すもの。これ石堂殿。お情ぢや〳〵。エヽこれ勘解由。こゝらが朋友の誼みぢや。共々共に取成を〳〵。

勘解由　ハヽヽヽ。イヤなに、石堂殿。もので御座る。畢竟若氣の至りと申す。其許さへ見逃して遣はされば相濟むと申すもの。爰は御憐愍づくぢや。

帶　刀　イヤサ見逃されませぬ。拙者が見逃しても、アレ人をあやめ、兄たる者が敵を取ると申す。なりや此口より

是非知れにやならぬ、それとも、此敵討さへ内證で納らば、ハテ、そこは目は眠るまいものでも御座らぬ。

勘解由　スリヤ敵討さへ濟めばよう御座りまするか。

帶刀　先づそんなものかい。

巴之丞　これさ勘解由。當人ぢやによつて、けつくいひ難い。其許宜しう、はて、羽繕うて下されいの。

勘解由　イヤ何一角。畢竟これはお身の一存で濟みさうなものぢや。どうぞアノ兄に取置代などいふ樣な事で圓う濟まして吳りやるまいか。

巴之丞　これさ、偏へにお願ひ申す。手を下げまする。

一角　これは〳〵。陪臣の私にお歴々の御手を下げられまする。何違背御座りませう。天邊拉ぎに申付けませう。

兩人　それは千萬忝う存ずる。

一角　和田右衛門。今聞く通りぢや。延引ならぬ御頼み、取置代を持つて敵討を濟ましてしまやれ。申付けたぞ。

和田右　命は萬寶の隨一。でも主人の權威、浪人こそ致すれ。金子で濟ましたというては武士が立たぬ、といふは昔の事。成程金で相濟ましませう。

一角　すりや聞届けてくりやるか。先づは安堵なされい。

巴之丞　段々忝う存じまする。

一角　扨此方は權威で相濟ましましたが、巴之丞樣、ちつと其許樣へ御無心が御座りまする。

巴之丞　ムウ、シテ無心とは如何樣の事ぢや。

一角　イヤ他の儀でも御座りませぬが、ちと御無心とは、御存じの通り百日以前出立致した主人龜次郎、家老共の無念で、いまだ國許より着致したる儀を申越しませず、其許樣の御判をもらひませぬ。延引ながら何卒其御判が頂戴致したう存じます。

巴之丞　イヤ他の事とは違ふぞ。參勤交代の改まるは大切なる掟。見す〳〵國へ歸りもせぬ龜次郎を國許へ着致したといふ判を致せか。そりやならぬ。

一角　御尤も至極。私が無態なれど、マア、申出して見たものぢやが、ならぬと仰せらるれば是非がない。ナニ和田右衛門殿。挨拶あけた程にさう思やれ。

和田右　ハツ、御挨拶が上つたら弟が敵。サア勝負々々。

（ト和田右衛門刀に手をかける。帶刀はきつとなり、上の方にて纏捌きしてゐる。勘解由兩人を見てあせり。）

勘解由　待つた。早まるまい。これ〳〵巴之丞。かうなつたらば百年目ぢや。そちらからは敵打たうといふ。こちら

からはそれ、れそぢや〱。（ト縄捌きの仕方して、）どうなと埒を明けてしまはつしやれ。
巴之丞　でもこれは。
勘解由　ハテ扨、たとへ判は納つても、國の饗應は明々後日。たとへ羽が生えて飛んでも、たかが底の括つてある事ぢやないかいなう。
巴之丞　成程。然らば一角。判は呉れうが、今此處には持合はさぬ。屋敷へ歸つてのこと。
一　角　御判がなくば貴方の御直筆の書判でも。申し帶刀樣、納りませうがな。
帶　刀　ハテ直筆の書判。納らいで何とせう。
和田右　さらば序でながら矢立進ぜませう。（トはふり出す。）
一　角　サア〱遊ばされて下さりませう。
（ト巴之丞不承々々に紙に書く。）
巴之丞　さうして國への着は幾日にせう。
一　角　百日以前に出立いたしたれば、先月朔日の着になされて下されい。
巴之丞　ハテ自由な事ぢやなア。（ト書判して、）それでよいか。
一　角　成程これでよう御座りまする。（ト石堂帶刀に渡して、手をつかへ、）龜次郎儀、先月朔日國許へ着致し、即ち御判頂戴仕りましたれど、家老共の不念故、差上げまするを失念仕り、重々恐入りまする。延引ながら、御前宜しく御取成し乞ひ願ひ奉りまする。
（ト帶刀開き見て、）
帶　刀　すりや、龜次郎は先月朔日に着召されたか。
一　角　ハツ。
帶　刀　此書付はとく取つたであらうに、今迄差上げぬは家老共の不念であらうぞ。
一　角　ハツ。
帶　刀　よい〱。聞届けた。御前宜しう申上げて呉れう。
一　角　有難う存じまする。
巴之丞　ハテよい工合ぢやな。
勘解由　サア、それが濟んだら、早う金やつて濟ましてしまはつしやれ。
巴之丞　浪人。シテ金子はいか程ぢや。
和田右　イヤモウ見る影も無い浪人。何程も金子は要りませぬ。
巴之丞　ヲヽ、さうで有らう。
和田右　たつた千兩有ればよいでござります。
兩　人　ヤア。
和田右　何程でもない。千兩遣はされませい。
勘解由　アノ小判で千兩かい。
和田右　ほんの小遣ひ程でござりまする

て。ハヽヽ。
勘解由　アノ千兩かい。
（ト此うち巴之丞邊に證文の破落ちて有るを拾ひ見て、見覺え有る故、びつくりして心付き。）
和田右　すりやなりませぬか。
勘解由　いやさ、ならぬといふではない。
和田右　ならざ勝負仕らうかい。（ト反打つ。）
勘解由　アヽ、こりや〳〵。待て〳〵。これ、何をうろ〳〵するのぢや。
巴之丞　檜垣〳〵。これ檜垣はどこへ。（ト手に破を持ち、うろ〳〵した顔する。勘解由頭掻き、はふ〳〵氣の毒がる。）
勘解由　エヽ。これサ。ちつと傍へ目を利かして物をいはつしやれいの。
巴之丞　イヤサ。それでもさつきの大事の證文が破れて御座る。何處へ往た〳〵。
（トうろつく。勘解由見て。）
勘解由　どれ〳〵。（思入れ。）ムウこれなれば尤もぢや。待たつしやれ。や、最前どさくさの中に、檜垣とどれやら若い男と何やら破つて抱付いて居た。
巴之丞　さうしてどう致した。
勘解由　そこらは拙者ぬからぬわ。と、兩人を引摑まようとするところを、ォォその一角が出て拙者をとんと當てたわ。
巴之丞　ヲヽ、さうして。
勘解由　サ其後はねつから存じませぬ。（ト右の臺詞皆々仕方でいうて。）
巴之丞　そんなりや。こりや又やられたわいの。
和田右　サア千兩の金がなくば勝負仕らうか。（ト反打つ。帶刀もこなしあり。）
巴之丞　これさ。聊爾せまい。
和田右　サア立合はうか。
兩　人　サア〳〵〳〵。
和田右　どうぢや。
巴之丞　いかにも金子呉れう。
和田右　金子さへ請取りや、言分はない。
（ト山名巴之丞首にかけゐる最前の殘の三百兩と證文の破を一ツにして和田右衞門前に持ち行き。）
巴之丞　浪人。成程金子は千兩持參致したけれど、七百兩は檜垣を身請して年季證文の破が此處に有る。殘り正金三百兩。これ、都合千兩。どうぞこれで了簡に預りたい。もう一文もない程に偏へに頼み入るぞ。
和田右　そんならもう一文も無いぢやまで。
巴之丞　とんとなしぢや。
和田右　すりや、此破れた證文が七百兩で、正金三百兩、是で千兩の都合。

巴之丞　いかにも。
和田右　ハレ、高い反古で御座るてなう。よい、百貫目の抵當に編笠一蓋。了簡。
（ト一角が顏を見る。一角よいといふ心入れする。和田右衞門呑込み〳〵）
和田右　よい〳〵、了簡して進ぜう。
巴之丞　まつ忝い。
和田右　エヽ、命冥加な侍ではある。
帶　刀　すりや敵討は相濟んだか。
和田右　さつぱりと片付きまして御座りまする。
巴之丞　テモひどいめに合はしをつた。
（ト巴之丞一角側へ坐り、こなし有つて）
巴之丞　サア一角。檜垣龜次郎を出せ。
一　角　檜垣龜次郎を出せとは、そりや何の事ぢや。
巴之丞　イヤサ、われが隱した兩人を出せといふ事さ。
一　角　これ、帶刀殿の御前ぢや。粗忽お云やると宥さぬぞ。
勘解由　何が粗忽。最前そちが。
一　角　龜次郎儀は先月朔日に國許へ着いたし、たつた今、御自分樣の書付を差上げたが、但し、御上を僞り奉書を差上げても大事御座らぬか。
巴之丞　サアそれは。
和田右　その上、弟の命代に請取つた證文。これ爰に有る。すりや、檜垣は拙者が者。その檜垣を戻せとは。
巴之丞　サアそれは。
一　角　但し、言分有るか。
巴之丞　チヽ言分はない。
一　角　亭主喜作參れ。揚錢の殘金は幾らぢや。
喜　作　ハイ三百兩で御座りまする。
和田右　弟めが命の冥加、御用立てませう。
一　角　それ揚代、請取れ。
喜　作　ハイ確かに受取りました。
（ト三百兩投る。）
一　角　これ若殿。これでな巴之丞樣。お前の身分はさつぱりと濟みましたが、なんと嬉しいか。（ト巴之丞にあて、長持叩く。）
巴之丞　チヽ嬉しい〳〵。
（トふぬけのやうにいふ。勘解由背中をたたき。）
勘解由　エヽよい加減に馬鹿を盡さつしやれ。何、帶刀殿。イザ同道して歸りませうかい。
帶　刀　イヤまだ詮議が有る。
勘解由　なんの詮議が。
帶　刀　御枕金の盜賊。
兩　人　ヤなんと。
帶　刀　イヤサ兩人共に腕廻せ。（トきつとなる。）
巴之丞　御枕金の盜賊に。

勘解由　兩人に腕廻せとは。
帶　刀　アノ財布は御身が定紋。すりや、そちが渡したのか。
勘解由　いかにも、巴之丞が入用に付き、掛屋から請取つて貸して遣はしたが、それが何とした。
帶　刀　先達て渡したる、檜垣が身の代七百兩に、義詮公御枕金の松といふ極印。實否を糺し都合せん爲、わざとこれへ參つた。亭主、其三百兩の上包は壽の字の印形であらうがな。
喜　作　成程壽の字の印形で御座りまする。
帶　刀　都合千兩、なんとこれでも盜賊で有るまいがの。
兩　人　サアそれは。
帶　刀　サア／＼／＼。
兩　人　こりやたまらぬ。
（ト兩人逃げるを和田右衞門一角兩人して美事に投げ、綱かける。）
帶　刀　家來共、繩附受けとれ。
侍　ハア。（ト兩人を受取り、引立てる。）
帶　刀　詮議相濟みたれば、此所に最早用事はない。廓の者共、其千兩の金は、われ達が配用無印の金子と引換へ吳れう。持參致せ。
喜　作　有難う御座りまする。
權　太　サア／＼、親方。偉い負手になつたが、早う御座れ／＼。
（ト風の音する。）
（ト兩人向うより、船頭の形にて走り出でいふ。）
五郎太　この勢ひにばらかして。
一　角　こりや此長持を。
（ト囁く。和田右衞門合點して、）
和田右　心得ました。こりや、二人共此長持をそれな深川の座敷へ。
（ト囁く。合點して、）
權太／五郎太　呑込みました。（ト長持に棒さす。）
一　角　又助もうよい。
又　助　ハツ。（ト戸板の上より起きる。）
和田右　こりや委細は路々いはう。此長持を早う。
權太／五郎太　合點ぢや。
一　角　又助、付いて參れ。
又　助　ネイ。
和田右　急げ／＼。（思入れ。）これ旦那樣。
（ト一角にいはうとする。一角早う行けと急く顏付。）
一　角　早ういけ。
（ト權太、五郎太長持擔げ向うへ急ぐ。後より又助付きはひる。和田右衞門本名德藏も船頭のこなしにて、後より付き行く。勘解由巴之丞、右の中始終合點のいかぬこなしにて、縛られながらきよろ／＼して居る。）
帶　刀　一角。最早そちが思ふつぼか。

一角　ハッ。帶刀樣の御助力なくて、一角が一存で事が計らはれませうか。重々の御恩。エヽ忝い。（ト拜む。）

帶刀　鎌倉の首尾は受合うた。縁あれば、重ねて。

一角　ハッ。

帶刀　さらば。（思入れ。）家來共、繩附引け。

（ト石堂帶刀、繩附引立てさせ、侍連れ向うへはひる。後より廓の者皆々向うへ付き入る。勘解由巴之丞あきれた顏して、縛られ向うへはひる。一角一人殘り。）

一角　未だ金比羅大權現御家を捨て給はぬか。エヽ忝い。

（ト向うを拜むと、向うより廓の者引返し出る。）

一角　騷がしい。何事ぢや。

勘解由　今の侍の中に勘解由の家來が有つて、そこらあたりを切散らしまする。二人共到頭ふけりました。

德兵衛　私らは大事の金持つて居るによつて逃げて戻りました。

一角　シテ帶刀樣に兇事はなかつたか。

勘解由　否々、二人は逃げたけれど、一々括上げられました。何をいうても暗うて知れぬ。大事の金持つてをりまする故、道を變へて逃げて歸りました。ヤレ／＼。怖や／＼。

（ト震ひ／＼兩人橋懸りへはひる。）

一角　いつそ御加勢申さうか。

（ト向うへ行かうとする所へ、橋懸りより權太走出て、）

權太　これ／＼旦那、今ぢや／＼。

一角　合點ぢや。（ト後へ戻る。）

權太　サア、ちやつとごんせ／＼。

（ト一角定助連れ橋懸りへ走り入る。）

返し道具

（一面に座敷の體。踊提燈釣りある。前の長暖簾切落し踊三味線になる。中に龜次郎春雨櫻酒飮んで居る。子供殘らず踊つて居る。）

龜次郎　待て／＼。もう檜垣は來さうなものぢやが、呼びにやれ／＼。

春雨　たつた今、人を走らせまして御座んす。もう追付け、見えるで有らうぞいなア。

櫻　何やかやの悅び酒。しつぽりと飮まねばならぬ。サア／＼皆踊らんせ／＼。

（ト皆々踊る所へ、一角東の方より着流しにて出る。）

龜次郎　ヤア一角。戾つたか／＼。

皆々　皆待つて居たわいな。

一角　道が遠いによつて、扨、呼吸を切つて歸りました。

龜次郎　扨、何から禮をいはうやら。お

れが長持の中に居た時に、わが身が蓋を叩いて嬉しいかといやつた時は、餘り嬉しうて、太夫と二人長持の中でてんてこ舞ひをしてゐたわいなう。

春雨　いやもう、檜垣さんの身請は出來る。揚代の借金は濟む。悪者共は皆縛られたげな、なア。

龜次郎　なんでも日本晴がした様な。時に、檜垣をちよつと呼びにおこしやつたが　それから今に太夫が來ぬが、早う呼びにやつてたもいなう。

一角　いや呼びに遣はさるゝ迄もない。檜垣は只今同道致して御座りまする。

龜次郎　どれ〳〵どこに居る。コリヤ檜垣々々。

一角　いや檜垣はこれにをりまする。

（ト位牌を出す。）

龜次郎　何ぢや是が檜垣ぢや。（ト取つて見て。）「春榮大姉。」

（この間、踊三味線。）

龜次郎　「俗名檜垣。」コリヤ戒名ぢやないか。

一角　いかにも檜垣は船頭德藏と申す者に言付け、海へ沈めにかけまして御座りまする。

（ト龜次郎聞いてしばし恍惚として、狂氣の様になり。）

龜次郎　ヤア、（ト一角に取付き。）ヤイ。なゝ何で檜垣を殺した〳〵やい。（ト泣く〳〵、一角胸倉を持つ。一角つき飛し。）

一角　何でとは。エヽ、殿。こなたはなう。鎌倉へ着くがいなや、同じ様にとち狂ふのを、こなたは誠ぢやと思うて居るか。なか〳〵いふには及ばぬ。こなたの胸に覺えがあらう。先づ第一に金比羅御造營に預りの金子千兩。こなたが費ひ捨てたを、弟新藏が身に引受け、既に御仕置になる所を、漸々御上も御存じありて追放仰付けられ、こなたは尻こそばうはないか。傾城に迷ひ、國入もせず、鎌倉の金は費ひなくし、諸方は借金だらけ。コレ、明々後日は國許の間に合はさねばならぬ。コレ、お國は斷絶するぞや。千變萬化に碎いた一念が通つて、萬事首尾つくろひ、こなたの爲には姐妃褒子の檜垣を殺せば、此後心にかゝる雲はない。否でも應でも引ずつて往ぬる。家來の心をちつとは不便と思はつしやれぬか。エヽこなたはなう聞えぬ。御情ない御心でござるなう。

（ト龜次郎位牌を抱かへ、あちこちして地蹈鞴蹈み大泣して、一角を刀背打にする。皆々拔身を取上げる。邊の渡盞、盃、煙草盆皆々を一角に打付け、後にて一角を足殴かけてこかさうとする。一角じつ

と立つて居る。手に合はぬ故、足かけたり、たゝいたり、わが手にこけんとする一角坐る、扇子にて打叩き。)

亀次郎　コリヤ、楡垣を生けて戻せ。戻しくされ〳〵。

一　角　どうなとさつしやれ〳〵。

亀次郎　ヲヽどうなとせいでは。(ト又種種かゝり。)ヤイこりや、泥坊め。忠義面で其様にぬかすけれど、口の揃はぬといふは、たとへ判を取らうが楡垣を殺さうが、肝腎の國許て物使のお成りは十日に今日は七日。三日の中に此鎌倉から、あの讃岐へ往なれるものか。百萬陀羅ぬかしても、是はつかりで潰れるわいやい。エヽおのれはなア。(トたたき泣く。)

一　角　コレ、阿房殿。こなたは此處を鎌倉の深川ぢやと思うて御座るか。

亀次郎　深川でなうてそんなら此處はどこちや。(ト急いでいふ。)

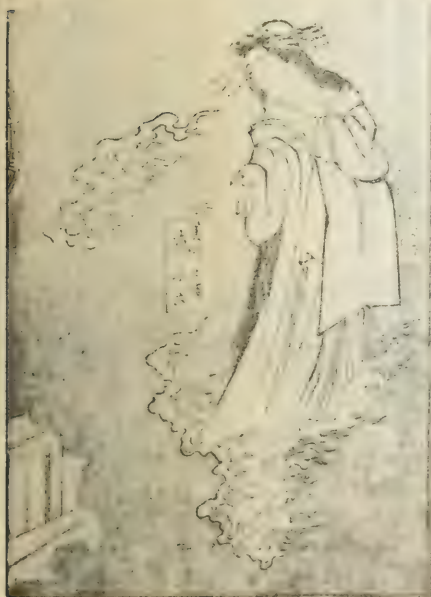
一　角　此處は遠江灘の大難所で御座るわいの。

(ト前へ蹴込、通り舟の縁になる。)

亀次郎　ヤア〳〵(トへたばる。)

一　角　此處に居る二人の娘御は御別家筋、淡路の大領様の御兄弟のお娘御達で御座るわいなう。

春　雨　妾は豐姫。

櫻　妾は象潟と申しまする。

一　角　金比羅御造營參詣を幸ひ、無理に鎌倉へ連れ下つて、深川の瀬子に捨へたはお前の船へ乗らうはかりで御座りまする。

豐　姫　此様に座敷と見えれど、船の中で御座りますわいな。

亀次郎　ヤア〳〵。

一角　百廿間の長船を作らせ、早業の船頭德藏といふ船乘の名人に申付け、最早四五十里も舟は往つて居ります。否でも應でも十日には國許へ入らにや成りませぬわいなう。

龜次郎　そんならかうして居るは皆船の中か。

兩人　アイ。

一角　天井の上には帆を十分に持つとも知らぬこゝな阿房殿。

龜次郎　エヽ〳〵〳〵。(ト地蹈鞴踏む。)檜垣ヤアイ〳〵。

皆々　道理で御座んす。尤もぢや〳〵。

(ト宥める。)

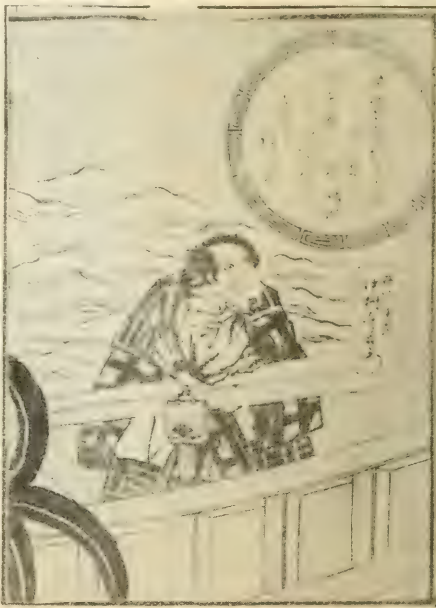
一角　力を一杯大聲上げて泣かつしやれ〳〵。

龜次郎　檜垣ヤアイ〳〵〳〵。

(此道具一面に西の方へ人共に引込む。東より段々舟の形になり、眞中へ直る。大船の舳櫓の形となるト、德藏櫓柄を取り滋石を見て、街へ煙管にて居る。五郎太權太水夫の者皆々帆足の世話する。思入れ。後の一面浪幕なり。)

權太　明神丸ヤアイ。

五郎太　コリヤ〳〵何ぬかすぞいやい。

權太　テモ檜垣〳〵と呼ぶぢやないか。

五郎太　何をぬかす。ありや、それ、お船頭がどんぶりやられた。それを君が呼んで、とこほえるのぢやわいやい。

權太　エヽ、とても、どんぶりさすものなら、　　して置いてどんぶりさせたがよかつたに。いぢこらしいものぢやなア。おりや、どうやらをかし

い氣になつて來た。
五郎太　をかしい序でにあぢな風が吹いて來たぞよ。
權　太　ほんになア。西北風かと思やまぜなり。
五郎太　東風かと思や南風の樣な。アヽ、何やら腥いやうな。ありや〳〵、浪が來るわ〳〵。
權　太　そりや白馬ぢや〳〵。
（ト風の音する。）
五郎太　そりや帆足ぢや〳〵。
權　太　三合にせい〳〵。
五郎太　おろせ〳〵。
德　藏　アヽ喧しい。黑子程な雲が出るか、鼻息程な風が吹くと、喰物で身體は動かさすに聲ばかりでおだてをる。ろくたまな船頭にはえゝ成るまい。あんだらめらが。
權　太　なんぼうその樣に叱らしやつても、あれ〳〵あの浪を見たがよい。
五郎太　いつそ、かゝらうかいの。
德　藏　大馬鹿めが。時限りの船ぢや。時化見かけて乘切れ〳〵。
皆々　アヽ浪よ〳〵。（トどろ〳〵にて震動する。）
兩　人　こりやたまらぬわ〳〵。
（ト大どろ〳〵になり、舟頭大勢、あれあれと舟底へかゞむ。檜垣の幽靈せり上げにて出す。吹水上がる。）
檜　垣　待ちや〳〵。なんぼうでも此船遣る事はならぬ。
德　藏　ムウ。何者ぢやと思や、どんぶりさした女中か。エヽそれで嵌しなに事を別けて聞かしたぢやないかいなう。
檜　垣　八寒地獄の苦しみも厭ひはせぬ。思ふ仲をば引きさかれた其悲しみは、何の浮まう。此船に乘つて一緒に連れて行けばよし、さもないと我々ともに底の水屑となす。ならぬぞ〳〵。
德　藏　これはしたり。譯のない幽靈ぢや。これ別にこなたに意趣遺恨はない。また一丁押したらよかろとこそ思へ。又殿樣ぢやというて可愛けりやこそ、國へ往なずに居たぢやないか。このわろも知らぬ事ぢや。家老の一角殿が殺して呉れにや、ほん、仕舞ひぢやというて頼ましやるによつて殺したのぢや。もう腹が立たうけれど、了簡さあれ。此船も時限りぢや。押さにやならぬ。了簡さあれ〳〵。
檜　垣　たとへ雲の浦までも殿さんと連立つて行かにや置かぬ〳〵。というて乘る事は叶はぬ。エヽ胴慾な人ぢやなう。
德　藏　なんぼう船幽靈にも逢うたが、貴樣の樣にど執拗者は見た事がない。

これ、すべて大晦日には海上せぬものぢやと、人は怖がるが、おりや、大晦日に灘を乗る。其高慢押さようてゝ、時々に鼻の高いわろがちよこ〳〵邪魔して、夜走りに舟の向うで大きな山を拵へるが、してこいと其山を乗割つて通る。大きな城が出れば門を突抜くが、皆おれが氣性でやりつけて來た。これ、大きな高入道さへ出逢うても一寸も舟かゝらぬ徳藏が、貴様の様な美しいほんじやりとした幽靈怖がつてたまるものかいの。停めるわごりよぐるめに走るのぢや。來たか勝手についてござれ。

檜垣　徳藏。そなたは世界に怖いといふ事があるか。いつち何が怖いぞ。

徳藏　此徳藏が怖いといふものは、オオ、主親より他に怖いものはないわい。

檜垣　その中、主が重いか親が重いか。

象潟　ハテ振脈な幽靈ぢや。親といふものは大事のものぢやが、その親を養うて貰ふが主ぢやによつて、喰はにや立てらんといふ心で、マア主が重いわ。

檜垣　アノ親より主が重いぢやの。

徳藏　しれた事。

檜垣　必ず其詞忘りやんなや。

徳藏　えゝ様々の念つがひをるわい。

檜垣　それなれば助けてやらう。舟に乗る事は叶はず、先へ往て待つて居るというてたも。徳藏さらばや。

（トどろ〳〵にて消ゆる。徳藏　こなしあろ。ト火の玉出る。）

徳藏　エゝもう百里餘りも走つてゐるものを。コリヤ若い者、皆起きやい。起きをれやい。

（ト大きな聲にていふ。皆々笘を上げ、氣の付きたるこなしにて顔を上げ。）

五郎太
權太　もう大事有るまいか。

徳藏　ヲヽやい。

（ト流星糸にて向う棧敷へ行く。皆々わあいとこける。ト方々明うなる。兩人船頭皆そつと起き、）

五郎太
權太　もう夜が明けた。

（ト皆々一緒にいうて、西の方を見て、）

兩人　取舵。（トロを揃へていふ。）

徳藏　をゝゝ。

（ト舵取返事答へる。）

幕

桑名屋徳藏入舟噺巻之三終

二段目

一親方德兵衛　吉次
一吾妻屋喜作　友十郎
一大舘勘解由　勘藏
一高丸將監　九十郎
一山中辰五郎　新五郎
一豐姫　豐松
一象潟姫　市川吉太郎
一梅園中納言本名灘六　助五郎
一敎善法師　又太郎
一傾城檜垣　粂太郎
一梅園中納言本名五郎時行　歌右衛門
一船頭德藏　歌右衛門
一白鳥采女　菊助
一柁舵の權太　金才
一足利義滿　歌次
一山名巴之丞　岩五郎
一敷浪　三勝
一吳服　大吉
一多度津一角　大五郎
一同新藏　大五郎
一高丸龜次郎　小川吉太郎
一住持　一人
一百姓　大勢
一捕手　五人
一早駕籠　大勢
一船唄　大勢
一子供　大勢
一侍　大勢

造り物。二重舞臺、小高うして西の方亭屋臺、之も同じく高うして、橋懸りは高塀、後には浪板に返る仕掛。向うは一面に結構なる金襖。上の方に高丸將監散髮にて八德長袴。次に敷浪、衣裳裲襠にて居る。下の方に敎善法師大廣袖丸絎毬栗にて、片手に鈴を振り、杵舵の權太股立の侍にて、手を捩上げられて、裃の侍數多敎善に詰めかける。大鼓謡にて、幕あく。

侍皆々　動くな。

敎喜　百年の榮耀は風のまへの塵、一念の發心は死後のともしび。將軍とをがまはれ、匹夫となるも、天地一體、涌物と觀ずれば、御靈に違ふ事なし。汝等が未來の罰不便さに、佛緣の結んで取らせんと、これまで來つて將軍義滿に報謝せよと傳へい。（ト權太を投げる。）

侍　いや、慮外者め。

將監　待て。如何なる貴僧高僧にもせよ、將軍義滿公に報謝せよと、居丈高に施物を乞ふは、仔細なうては叶ふまい。

敷浪　左様で御座りまする。殊に十日の御神事、御造營も首尾よう納まり、十五日巳の今日、御勅使廿五日の御着。先觸にて、義滿御對面の上、此御家に預りの寶御勅使樣へ御渡しなされ、直に御出船遊ばす大切な吉日。マア荒立てずと、篤と樣子を尋ねたがよいわい。

權太　いやさ、こいつは碌な奴ぢやない。今日の御芽出度を見かけて、ぐずりにうせたのぢや。ヤイ、嫁入りや祝言事に猿廻しが來るとは違ふぞ。おのれやよいほこ松ぢやなア。やい、誰ぢやと思ふ。德藏船の水戶、柱舵の權太といふ侍を投げたぞよ。

（ト又かゝる。立廻りにて、權太また投げらるゝ。）

敎善　推參千萬。あら、穢らはしやなア。

將監　シテ、御僧には何人で御座ります。

敎善　破笠蓬髮に裟を裹け、水瓶鐵鉢の外はたづさへねば、面も變り、見紛ふは道理、鎌倉の將軍義詮が弟荒治郎定重、比叡山にて出家し、當國白峯の麓に一寺を建て、大師の後を追ふ敎善法師を見忘れたか。

將監　ヤア、まことに覺え有る義滿公の伯父荒治郎樣。

敷浪　スリヤ、鎌倉の御舍弟樣で御座りまするかえ。

將監　御長髮の體といひ、久しき儀なれば、御面體を見損じましたる段は、眞平御宥免下されませう。小姓共、右の由を義滿公へ申上げい。

小姓　かしこまりました。（トはひる。）

將監　先づ〱これへ御入り下されませう。

權太　すりあ、奧にござる將軍樣の伯父樣で御座りまするか。

敷浪　御怪我が有つてよいものか、皆ひかへい〱。

（ト皆々ひかへる。）

權太　どりや、足下の明い中に次へ立ちませう。（ト橋懸りへ入る。）

（奧より）義滿公の御出で。

（ト義滿袴衣裳、小姓釆女付いて出る。）

將監　御聞きあられましたか。

義滿　珍しや伯父樣、當國に一字を御建立と承りましたれど、大切の神事こと終りまする迄は寸隙を得ませず、先づは御變りもない態を見受けまして滿足に存じまする。

將監　サア〱これへ御出であられませう。

敎善　イヤ〱、義滿が伯父にもせよ、

出家となれば三界無庵。矢張この儘この儘。

敷浪　シテこれへ御出で遊ばしました仔細はな。

敦善　兄義詮も京都へ隱居の志とやら、甥の義滿吉例にまかせ金比羅造營。十日の神事。芽出度く相勤め、廿五日の今日は勅使下向と有り、先づ滿願の段此方にて加持いたし居る。重疊〳〵。

義滿　御悦びなされて下さりませい。今日御勅使に御對面致し寶を禁庭へお渡申し、直に繼目の參内に登りまする。

敦善　それにつき、芽出度い折から、とても施物が受けたい。

義滿　御勸化の儀は如何やうとも諸大名へ申付けませう。

將監　左樣で御座りまする。かゝる砌でなくとも、將軍の伯父御樣、勸化遊はされますに、我々に至る迄違背致しませうぞ。

敷浪　夫一角承りましても、國中へ申付け、御心に叶ひまする樣にいたし、如何樣の儀なりとも仰付けられ下されませい。

敦善　召使の寺僧もつれず、只一人來るからは格別の勸化。見かけて頼む。報謝してたもらうか。

義滿　如何樣とも承りませう。

敦善　誓言で承りたい。

義滿　武將の跡目繼がぬ法も有れ。

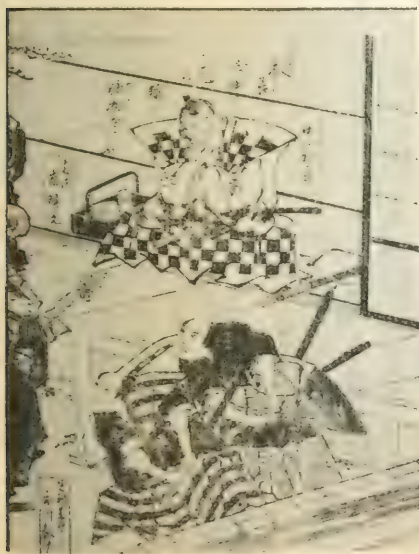
敦善　先づもつて安堵いたした。他の事でもない、二ッ引両の旗が欲しい。

將監　なんと仰しやる。

敦善　イヤサ、二ッ引両の旗を勸進して貰ひたい。

將監　出家の身として二ッ引両の旗、何になされまする。

数善　天下が欲しい。

皆々　エヽ。

数善　今度の縫目を見かけて、頼みに参つた。二ッ引両の旌をわが鐵鉢へ托鉢して天下の報謝に預りたい。サア義満報謝々々。

一角　其勧化、一角報謝仕りませう。

（と出る。）

将監　一角委細聞いたか。

一角　御出家の托鉢餘り胴切つて承知仕つた。強ち御當惑の儀も御座りませぬ。物使御入の刻限に間も御座りますまい。義満公御用意有つて然るべく存じ奉りまする。

敷浪　然らば萬事の御用意、奥へ御入り有られませう。

義満　将監参れ。

将監　ハア。

（ト義満小姓連れ、将監奥へはひる。）

敷浪　これ、こちの人。将軍の伯父御様御望みの勧化は、どうやら味なもので御座んすが、お前申上げ様が御座んすかえ。

一角　ハテ、御氣に叶ふ様に報謝さへすればよいでないか。

数善　其方は何者ぢや。

一角　當家の家老多度津一角と申す者で御座りまする。

数善　中々そちは一方の役にも立ちさうな器量者ぢや。

一角　いやもう、餘りすつぱりとした施物、施主に付いてきつと映立ちまする。

敷浪　（思入れ。）申し、其御挨拶ではどうも。

一角　（思入れ。）ハテ扨、控へて居よさ。

数善　義満跡目に立つ上は、まるで天下も報謝も成るまい。

一角　ハテ檀家の儀なれば、御寺樣の勸化少々は獻上いたし、國で上げるか、米で上げるかは施主人の心まかせに仕りませう。皆はならずとも、少々は獻上も御座らうかい。

敎善　もし一建立を思立ち、手强う諸國に勸化すれば、天下分目の責め念佛。蓮臺を爭ふよりハテ無事に立てるが大檀那。愚僧も强ち、まるで報謝にあづからうといふでもない。

一角　左樣で御座りまする。

敎善　シテ换事は何をする。

一角　イヤもう矢張地面を報謝仕りませう。

敎善　シテ何處を呉れる。

(ト一角こなし有つて、)

一角　いつそ日本の地を離れて、八丈ケ島か鬼界ケ島か、何れなりとも御望み次第に報謝仕りませう。其中、御出家の事なれば鬼界ケ島で干死なさるゝも、さつぱりよからうかい。

敎善　そりや嘲弄するか。

一角　ハテ换物報謝致すのさ。

敎善　陪臣の身を持ちながら、天下の伯父に向つて。

一角　天下の伯父とはどこへ。こなた御出家なされたれば、三界に家なし。身に付く物は傘一本。

敎善　何がなんと。

一角　まだこなた性根が直らぬの。武將の弟御、我々風情が斯樣に申すも恐多い身を持ち、比叡山へ逐上されたは、曲りくねる性根から。知るまいと思召すか。山を下つて處々へあぶれ込み、旗本大名はいふに及ばず、町人百姓に無心を云ひかけ、金銀おし取る。何をいうても將軍の弟御、人が指さゝぬをよい事にして、我儘の有條、一寺の主になつても伴僧一人もつれぬは、寺中も愛想つかしたに違ひはない。

(ト腹立てる。)

何ともない。サア本心に立戻らつしやれば、今鎌倉の御殿を御勤めなされうとまゝ。それに若年の甥御を見かけ、天下を報謝して呉れいとは、よういはしやつた。日本の替りに鬼界ケ島を進上いたし、流人になつて一生を送るがこなたの相應ぢや。是より外に云ふ事はない。早く御歸りなされい。

敎善　一角。われや餘りであらうぞよ。

一角　力量が有つてもわが身體をわが手には上げる事はならぬものぢや。

敎善　エヽ口惜しいなア。

(トいふ所へ山中辰五郎衣裳裃にて出る。)

辰五郎　一角殿。御勅使おつつけ御入りで御座るぞ。

敷浪　これは山中辰五郎樣。お前は義

滿公の名代に、京都の首尾御繕ひに御出でなされたか。シテ、御首尾はな。

辰五郎　禁庭の御首尾上々吉で御座る。追付け御勅使、これへ御出の先觸で御座る故、早速、御知らせ申しまする。

一角　御勅使御出でと有る。荒治郎樣。こなたも言白けにもなるまい。一角思案して返事致さう。マア奥へ御座れ。

敎善　望みかゝつた報謝、請けにやならぬ。

一角　繼目の妨げなさるゝと、一角が腰にたばさむ刄金を報謝致すぞ。

敷浪　申し、さう仰しやつては武士の意地。マア奥へ御出でなされて御休息なされませい。

敎善　よい。然らば奥で休息致さう。一角、報謝の爲やうが悪いと義滿へ直に逢ふ。きつと詞つがうたぞよ。

一角　どうぞ願ひも有らう。マア、奥へ御座れ。

敷浪　マア御休息遊ばされませいなア。

（向うより）勅使。

（ト樂に成り、敎善立腹して奥へはひる。向うより梅園中納言束帶笠持ち沓、駕籠仕丁大勢付き出る。門より義滿烏帽子長劔指貫、將監敷浪一角出迎へ、權太は侍と一緒に橋懸りに並ぶ。）

義滿　これは梅園中納言には御苦勞。

（ト殘らず並よく並ぶ。）

梅園中納言　勅使なれば罷り通りまする。

將監　先づ以て御勅使樣には遠路の所御下向下されます段、何程か有難う存じ奉りまする。拙者當國の主高丸龜次郎が親、高丸將監で御座りまする。即ち、それなるが跡目の將軍義滿公。

一角　拙者龜次郎が口眞似をも仕りまする多度津一角で御座りまする。

辰五郎　其他、家中の者共。

義滿　勅命謹んで承知致したう存じまする。

將監　一通り仰付けられ下されませうならば。

皆々　有難う存じまする。

梅園　勅使の趣き餘の儀にあらず。足利高氏天下を治めてよりこのかた、國民も豐かに靡き、大内の守護怠りなく、戸鎖さぬ御代。吉例に委せ三代の將軍義滿公、繼目の神事行はるゝ事。上にも甚だ御滿悅に思召す。彌々當月十日の神事は相濟んだか。

一角　ハア。（ト出る。）高家の御座近く恐れ奉りまする。（ト辭儀する。）

梅園　シテ高丸龜次郎は十日の御神事相勤めたか。

一角　成程首尾よく相勤めまして御座りまする。

梅園　確とさうぢやな。

一角　何しに僞り申上げませう。

梅園　然らば龜次郎に對面致さう。早く呼べ。

一角　いや龜次郎儀、それより所勞によつて打伏し居りまする。さるによつて隱居の身ながら、親將監罷出で相勤めまする。

（思入れ。）

將監　倅龜次郎が名代、老人の不調法。萬事、家老一角に仰付けられませう。

梅園　ムウ。さも有るべき事なれども、思ふ仔細もあれば龜次郎に對面致さう。一角これへ呼べ。

一角　イヤ、恐乍ら罷出でまする程なれば、將監名代も相勤めさせませぬ。大病故に恐れをも顧みませず、右の仕合せで御座りまする。御賢慮を廻らされ下されませうならば、千萬有難う存じ奉ります。

辰五郎　イヤ一角殿。身共は禁庭の御首尾五攝家への付屆け、彼此に京都へ登り、歸ると其儘國中の巡見致す樣にと、こなたの指圖、館に足を溜める間も無く、御自分にお目に懸つたも十日の御神事の時。若殿と雖も御目にかゝらぬが、いよ／＼館に御座るかな。

敷浪　これは／＼辰五郎樣。御勅使樣の御前といひ、義滿公又は親殿樣にもこれに御座る。何とやら味な仰しやり樣。若殿樣が何となされたといふのぢやえ。

辰五郎　イヤ、なんとも申さぬ。若殿樣は國に御座るまいがや。

將監　一角。龜次郎病氣と有る故、七五三の配膳長柄の神酒までそち達夫婦が取計らふ。身も未だ對面致さぬが、何とやら心許ない。仔細はどうぢや。

一角　何しに僞り申しませう。御病氣に相違御座りませぬ。

辰五郎　御病氣に相違なくば、疊に乘せてなりともお目見えさせ召され。

敷浪　ハテ、味な事を。好い言樣。お目見えのなる御病氣なら、いふ事はないわいな。

辰五郎　イヤ拙者は呑込めぬて。

敷浪　そりや又どうして。（トせり合ひ繰上げ。）

梅園　待て／＼。

將監　兩人共に騷がしい。控へい。

梅園　一角、禁庭にも龜次郎儀は種々の噂もあれど、其儀は格別。差當つて今日の饗應、病氣というては相濟まぬ。というて、人間は病の器物。義滿公若年の事なり、其他は皆一家中。梅園一人承知すれば事濟むと思うであらうが、後日に露顯しては義滿公迄その罰かゝる。こゝが其方との相談、大内の御評定

は傳奏の役五攝家より他にない。事を無事に濟ますは、此銘々へ贈物。コリヤ、其方が計ひにて萬事は足りさうなもの。黄金吹く吉備の中山帶にせり、細谷川の音のさやけき。こがね花咲く遠き東はいざ知らず、吉備の中山だに黄金吹くといへば、大内もしたはしく歌に詠じて心を寄する。たとへ後日に如何なる事が知れても。

一角　黄金花さく吉備の中山といふ歌を差上げまして。

梅園　イヤサ。龜次郎病氣ならば、後日の御咎め、其儀が宜かりさうなものかと思ふ。

（ト一角、梅園中納言顔を見て思入れ。）

一角　へゝゝ、成程御勅使樣、御差配謹んで承知仕りましたと申上げたいが、其名歌を送りましたる事がまた後日に相知れましたる時は、如何仕りませう。

梅園　なんといふぞ。

一角　イヤサ。左樣仕りましては、それが知れうかというては又贈物。其贈物の儀が知れてはと、段々に御取次を賴みましては、一向大名はそれに打掛りませねばならぬ。先づ此儀は御用捨に預りませう。

辰五郎　然らば、若殿をこれへ出しやれ。

一角　ハテ、主人の事を喧しく、そちや、一物有つていふと見える。

辰五郎　一物も二物もない。親辰右衞門が相勤めをれば貴殿と相役。相果てゝから若殿の放埓無茶苦茶と共謀になつて、身を踏潰すか。胸の惡い。木は木、竹は竹と御前ぢや申す。鎌倉の遊女に打込み、龜次郎はこの國には御座らぬてや。

象潟姫 豐姫　龜次郎樣。それへ御出でで御座りまする。

（ト二人腰元の態にて、龜次郎病氣漫氣の態。兩人して連立ち出る。）

敷浪　オヽ、御兩人。よう連れまして出やしやんした。

辰五郎　コリャ龜次郎樣。若殿樣。コリャどうぢや。

梅園　禁庭の噂では、よもやと思ひをつたが、ハテ龜次郎は病氣で有つたか。

一角　辰五郎、それへ出やれ。

辰五郎　拙者にや。

一角　いかにも。

（ト向うへ兩人出る。）

辰五郎　御用かな。

（ト一角物いはずに、背打にする。刀振上げる。）

將監　イヤ一角、待て。重々不屆きな奴なれど、大切な御神事、此場は了簡せよ。

一角　命冥加な二才めが。
辰五郎　御宥されませい。（ト逃げてはひる。）
龜次郎　檜垣、々々。
（ト立たうとするを、兩人取付き押へ、）
登姬　イヤ、病氣ながらに相勤めませうと申して御座りまするわいな。
象潟姬　アイ、隨分御勤めなされまする御心で御座りまする。
將監　腰元共。隨分心を付けて粗末のない樣に引添うて居い。
兩人　畏りました。
梅園　義滿殿。イザ、寶請取りませう。
一角　イヤ、暫く御待ち下されませう。憚りながら御勅使樣一寸御目にかゝりませう。
梅園　何事か、許す。それからいへ。
一角　イヤ窃かに申上げたい儀が御座りまする。近頃憚りながら、ちよとこれへ御出で下されませう。
梅園　武家の無骨なは今に始めぬ事ながら、梅園を呼出した仔細は。
一角　サア、足元の明い中、早くお歸りなされい。
梅園　何がなんと。
一角　イヤサ、もう始めから一切會得致さぬ御勅使。今時にかやうの騙りは埃が立つ。出直して御座れ。
梅園　何。梅園中納言を騙りといふナ。
一角　騙りも騙り、大騙りぢや。
將監　成程。其方が存じ當りと身共が胸はしつくり。最前よりの詞の端、如何にしても呑込めぬ。押切つて詮議致せ。
權太　さては、おれが騙りならおのれらも同類ぢや。
仕丁　アヽこれ粗相召されな。
（ト仕丁極付ける。仕丁皆々こなし有り。）
梅園　梅園を騙りとは何を以ていふぞ。
一角　はて、まが〳〵しい事ぢや。大方手の見えた事ぢやて。若殿國へ歸られぬといふ噂を聞いて、勅使と成つて入込み、若殿に對面せうとこじ付けて、つゝまる所は、カノ吉備の中山黃金吹く、はて、よい歌を覺え居るなア。大名の中にも夫々に家老が有つて、其樣なおざとい手では行かぬ。詞の柔かな中に早く歸れ。
梅園　そりや餘りなる過言で有らうぞよ。
一角　じたばたすると爲にならぬぞよ。
將監　大切なる節故、其儘に差許す。早く歸れ。大騙りめが。
數浪　それとも、往にくば家來に言付け引出さうか。
權太　おれが手をかけて撮み出してこまさうか。

梅　園　それは。

敷浪
將監　サア〳〵どうぢや。

（橋懸りより、）勅使。

權　太　そりやこそな。（トそこらをねめ付ける。）

豐　姬　そんならこの勅使は騙りで御座んすかいなア。

權　太　騙りも騙り、大盗人の骨張で御座りまする。

豐　姬　恰好といひ物腰、とんと本のお公卿樣、誰に見せても嵌らにやならぬわいなア。

敷　浪　サア、騙りは皆此樣な仁體なので御座りますわいなア。

權　太　エよい恰好をして、何なりと他に賣買も有らうのに、太い奴ではある。

（ト梅園思入れして、）

梅　園　地下は土民も同前の詳無き口の端。それも厭はねど此儘歸らば禁中の沙汰。はてなア、さはいへ、梅園中納言これに有るに、又候や勅使とは、何にもせよ仔細なうては叶ふまい。一旦歸京して、實否は追ての事。

權　太　アノ云うた樣は、胴より肝の太い奴ぢや。

梅　園　義滿殿。最早御暇申さう。將監一角。（トそろ〳〵と歩む。）

權　太　扨、騙りといふ者はどうやら氣味惡い樣なものぢやなア。

梅　園　仕丁共。供せい。（ト向うへ靜々と歩む。）

仕　丁　ハア、。

權　太　仕丁共、供せい。（ト同じ樣に口眞似する。この中、仕丁一人々々向うへ行くを捉へ、）わいらは、はい〳〵ぢやな。こいつらを御覽じませ。僅かの割前で雇はれてうせた奴ぢや。

（ト捉へ、突倒し、又行くを捉へ、鼻を舐らし、突飛ばす。仕丁皆々起きて怖々梅園中納言に付いて入る。）

テモ、けち太い奴ではある。

敷　浪　あれ〳〵。周章る氣色は微塵も御座んせぬ。あんな奴は重ねて又意趣を含んで、又參じませうぞえ。

權　太　よい〳〵。いつそ御門前で打投げて、脛も腰も立たぬ樣にしてこまさう。

一　角　こりや〳〵。痛めてよければ最前そちに申付ける。大切の御神事。態と無事に助けて歸した。マア控へて居いさ。

權　太　エ、殘り多い。

一　角　改めて勅使の御迎ひ。

（ト神樂になる。ト將監其他皆々出迎ふ。第二の梅園中納言、束帶にて仕丁大勢連出て、ずつと上座へ通り、床几に掛かる。）

將　監　これは御勅使には遠路の所、御

苦勞に存じ奉る。即ちこれが將軍義滿で御座りまする。

梅　園　吉例の念なれば新に申すに及ばず。高丸龜次郎とは何れの人ぞ。

一　角　ハア。即ちこれに居りまするが、高丸龜次郎で御座りまする。

梅　園　見れば病氣の態ぢやが、シテ、七五三の配膳神拜の神酒は誰人が勤める。

一　角　ハア、即ち拙者家老一角と申す者。女房に三七日物忌清淨に配膳相勤めまする。

敷　浪　それ故に龜次郎儀はお目見え仕りまするばかりで御座りまする。

梅　園　一入念の入つたる事。病氣とあれば、神事の場へ立合はぬと有つても苦しからぬ事。梅園が宜しく奏聞致さう。氣遣ひ有るな。

象潟姫
豐　姫　（思入れ。）有難う御座りまする。

敷　浪　（思入れ。）なんとマア有難い、やはらかな事ぢやないかいなア。

象潟姫
豐　姫　（思入れ。）さればいな。

梅　園　薄墨の御綸旨。（ト懷中より出し。）

義　滿　ハア。（ト辭儀する。）

將　監　鎌倉の義詮、願によつて息千代丸儀足利の正統を繼ぐべし。征夷大將軍從二位太政大臣源氏の長者に給はる如件。

貞治元年三月日　　辨之中將承之

足利義滿へ。

（ト讀み義滿へ渡す。謹んで頂戴して、）

將　監
義　滿　この上ともに天機宜しく御推擧の程希ひ奉りまする。

梅　園　そなたは龜次郎が父將監よな。

將　監　左樣で御座りまする。

梅　園　子息の病氣取混ぜて心遣ひ、察し入る。一角とやら、吉例なれば改めるも尤もなれど、畢竟は義滿繼目參內さへ納まりたれば事は濟む。神は見通し、餘り心遣ひのない樣にしやれ。

一　角　身に餘りまして有難い御詞、何事も宜しく御奏聞を希ひ奉りまする。

義　滿　當家に預り置く天下の寶、御勅使へ差上げてよからう。

將　監　ハア。一角。

一　角　畏つて御座ります。（ト奥へ入る。）

龜次郎　ありや／＼、檜垣が來ぬわいやい。なぜ、雲に乘つて居ずと、此處へおぢや。何ぢやおれが傍へ寄る事は嫌ぢや、なぜにぢやぞいやい。オヽオヽ。車に乘せて、ヤアコリヤ鬼共、檜垣を返せ／＼。ハヽヽヽ。

象潟姫　其樣に正體無い。いつまで物思うて御出でなされまする。

豐　姫　妾等が此樣に思ふのを、ちつと

は氣にも通ぜぬかいなァ。
龜次郎　いや／＼。いつまでも會はぬ中は、おれが心は天竺へ宿替ぢや。ハア、ヱをかしいわろが居るは。これこなたにもの問はう。
（トいふ中、一角臺の上に、白旗、勘合の印、白峯の太刀、三種載せ、此所にて眞中へはひり、龜次郎を睨む、ちり／＼と龜次郎後へ寄る。女方、皆々介抱する、一角三ツの寶を梅園中納言の前に置く。）
一角　二ツ引兩の旗、勘合の印、白峯の太刀、三品とも當家預り奉る所、天下の重寶御受取下されませう。
梅園　ムウ。
將監　（ト龜次郎の方を見て）いやいや眼中といひ、一角、悴は狂氣に相違ないな。
敷浪　イエヽ、全く殿樣は。
一角　いかにも狂氣に相違御座りませぬ。
將監　そりや、どうして狂氣致した。
敷浪　ハツ、御病氣の上で。
將監　コリヤ／＼いふな。知るまいと思ふか。此狂氣の始りなくては叶はぬ。一角。そちがよく知つて居よう。サアいへ。どうぢや。
梅園　イヤ／＼將監。御身は隱居の身、此國の主といふは高丸龜次郎ではないか。又今日より義滿殿は最早將軍も同前、その將軍の前で國の守が狂氣したといへば武家の掟、家國沒取せねばならぬぞよ。
將監皆々　エヽ。
梅園　一角、見た所が陰性の時疫の樣子に見える。中々大病ぢや。
一角　この大病故、御神事も遲參の不屆。其段眞平。
梅園　イヤもう、少しも苦しからぬ事ぢや。日を追つて養生致したがよい。即ちこれに義滿公、病氣の次第梅園もろ共直に見屆けたれば、誰憚る事はない。來年の參勤怠らう共、某、京都よりその段直に天子の命を以て申遣はす。鎌倉の評定に指の差手はない。落ついたがよい。
一角
將監　重々御志。
一角　何と御禮申し樣もない。
皆々　エヽ有難う御座ります。
梅園　改めての勅諚。
皆々　ハツ。
梅園　高丸の家には歌仙の色紙を重寶する由、此色紙は後醍醐天皇身に替へ給ふ御祕藏。先帝惜しみ給ふ色紙、武家の重寶と定まるも本意ならず、急いで差上げよとの勅諚。
一角　すりや歌仙の色紙差上げよとな。
梅園　いかにも。

將監　早く差上けい。
一角　畏つて御座ります。
（ト思入れして、龜次郎の懐中より守符を出し、梅園中納言の前に置く。少々どろ〳〵にて、龜次郎の後へ檜垣すつと立つ。）
一角　即ち、それが歌仙の色紙で御座りまする。
（ト將監改め。）
將監　コリヤ象頭山の守符、之を色紙とは。
一角　もと此色紙は後醍醐天皇の御所持、高時入道懇望して申受けんといふ。下されぬを憤り、勿體無くも押込め奉り、暴惡天之を示し、終に高時入道亡び失せ、今天下は足利の一統と成る。
將監　拙者が兄の高丸左京、一番に高時が首を取り。
一角　其功に、歌仙の色紙を下されんとの儀なれども、灰燼の中色紙は燒失せましたる故、高氏公仰せには、此度の軍の勝利は全く金比羅大權現の御加護、我身に附きたる此守符を今より歌仙の色紙と名付け與ふる間、家の規模とせよと下し給はつたる當家の重寶は、其守符で御座りまする。
梅園　ムウ、承つて驚入つた。歌仙の色紙といふは權現の守符で有つたなア。
（ト龜次郎立つて、ずつと行かうとするを、敷浪押さへる。象潟姫豐姫も取付き押さへる。）
龜次郎　其方達は、こりや手籠にするか。
三人　何のお前。
龜次郎　ありや、親人。上にお渡りなさるゝは何方ぢや。
敷浪 豐姫　御勅使樣。
敷浪 象潟姫　其次は將軍樣。
龜次郎　ハツ〳〵。（ト辭儀する。）
敷浪　嬉しや。そりや御本性におなりなされましたかいなア。
兩人　（思入れ。）嬉しや〳〵。
（ト一角思入れ。）
一角　若殿本性か。
龜次郎　オヽ、本性ぢや、一角いかに忠義といひながら氣強い事をしたなア。
（ト泣く。篳篥樂太鼓の音する。）
將監　悴が病氣本腹と見える。是も偏へに大權現の御加護、エヽ、忝い。
義満　もはや神事の刻限。奥の御殿へ御入り下されませう。
梅園　此寶は將監持参され、義満殿と立合ひ、神前にて改めて受取らう。
將監　畏りまして御座りまする。
一角　女房ども、七五三の用意致してよからう。
敷浪　（思入れ。）嚴重に堅めまして、認めましたれば、何時でも差上ける樣に

致して御座りまする。

一角　身も參つて改めう。

敷浪　左様なされませ、申し御二人様、今日迄腰元姿、御勅使様の御捌きといひ、御本性に見えれば隠さいでも大事ない。淡路の大領様の御息女様。

一角　ハテ親殿様も御存じ、そなたは早く御案内。

梅園　龜次郎は立合ひに及ばぬ。それにてゆるりと介抱召され。

義滿　皆々も參れ。

皆々　まづ御入りあられませう。

（ト唄になり、梅園中納言、義滿、將監は豐姫、象潟姫を揃へて奥へはひる。後に一角、龜次郎、豐姫、象潟姫殘る。）

豐姫　ほんにどうした張合で本性におなりなされましたぞいなア。

象潟姫　それいなア。

（ト一角思入れして、）

一角　如何なる古狼野狐の障碍も大權現の守符にて立去るが利生。それに守符を懸ける中は心も亂れ、守符を取れば本性になるとは。（ト檜垣を見て、びつくりして、）扨こそ、エヽ、立去らぬ故、殿の狂氣。いひたい事もたんと有らう。いかう附纏うたら、却つて大切に思ふ殿の御身にあやまち有れば、そりや未來迄の不心中。どうぞ又仕様も。

豐姫
象潟姫　妾等かへ。

一角　イヤサ。マアかういふ奴が有らうとも關はずに、御介抱の儀を頼みまする。

兩人　アイ。

（ト唄になり、一角はひる。）

豐姫　扨も今日迄は人に知らすなというて、氣の詰まる介抱。申し、龜次郎様。ちつと本性におなりなされたら、もう檜垣殿の事はふつつりと思切つて下さんせいなア。

象潟姫　ほんに、姉さんもわしも、遠い淡路から此處へ來て、遙々鎌倉三界迄往た者を、ちつとは可愛ゆいことぢやと思うて下さんせいなア。

（ト龜次郎檜垣を見て、）

龜次郎　ヤア。そなたは無事でゐやつたか。

兩人　エヽ。

檜垣　何の妾が死なう。矢張達者でお前に會ひに來たわいなア。

龜次郎　ムウ、すりや達者で。そんなら、一角がおれに思切らさうと思うてか。

豐姫　滅相な。一角殿が思切らさうといふ心は微塵もないわいなア。

龜次郎　何にもせよ、アノ大海をどうして早うおぢやつたぞいの。

（ト檜垣にいふ。二人は見えぬ心にて、）

豐姫
象潟姫
檜垣　ハテ、舟で來たわいなア。（ト三

人一緒に云ふ。）

亀次郎　ムウ、そんならおれが乗つた舟と一ッ所ぢやの。

三　人　一緒でなうてわいなア。

亀次郎　たとへ一角がどの様にいはうとも、それならそれというたがよい。よう人が病者にしたなア。

豊　姫　お前が焦れて病はしやんすによつて、國へも往かず、介抱してゐるわいなア。

檜　垣　殿様御座んせ。往て寢よう。

亀次郎　寢んというても寢いでわやい。

（ト檜垣は傍へ寄るを、豊姫が傍へ寄ると思ひ、象潟姫跳退き、）

象潟姫　姉さん。餘り厚かましい。お前も妾も同じ様に並んで同じ介抱。それにまんがちな。サア御座んせ／＼。

（ト亀次郎手を取る、檜垣振放し亀次郎手を取る。）

亀次郎　あれ見や。あんな事ぢやわいなう。（ト檜垣にいふ。）

象潟姫　姉さん。人の手を叩除けて。あた、好かん。（トぴんとする。）

豊　姫　滅多に腹立て、人に言掛けばつかりして、その手は喰はぬ。さう出やるともう兄弟の見境は無い。サアごんせ／＼。

（ト亀次郎が手を取る、檜垣叩除ける。）

豊　姫　ア痛た。こりや、わしを叩いて何するのぢや。

象潟姫　誰が叩いた。面々が叩いて置いてから。

亀次郎　アヽ、こりや二人ながら俄かに目が見えぬな。

豊姫 象潟姫　サア殿様、ござんせ。

（ト一緒に手を引く、檜垣兩方の手を叩落す。）

豊姫 象潟姫　又叩かんしたぞや。

豊　姫　サア殿さん。どちらなりと。

象潟姫　お前の心次第にさしやんせいなア。

（ト亀次郎が前へ背中を向け、身體を突付け坐る。檜垣叩く。）

豊　姫　手ばかりは勘忍する。人の顔を叩いてから、聞かぬぞや。

象潟姫　ハヽヽヽ。言掛けも餘ほどな事いうたがよい。強請ぢやぞ。

（トこちら向く。檜垣又叩く。）

象潟姫　ア痛たゝ。姉さんぢやと思うて堪へて居れば髪の亂れる程叩かんした。

豊　姫　誰が叩いた。強い氣違ひぢや程にの。

象潟姫　何ぢや氣違ひ。

（ト檜垣叩く。）

豊　姫　ア痛たゝゝ。又叩いたの。

象潟姫　誰がいの。

（ト又叩く。）

象潟姫　イヤもう勘忍がならぬぞや。
豊姫　そなたを。
（ト二人摑合ふ。龜次郎眞中へはひり、）
龜次郎　マアよいわいやい〳〵。
（トいふ中、連理引きになつて、三人共に引摺られ、皆々奥へはひる。檜垣後より靜かにはひる。少しどろ〳〵にて皆々奥へはひる。ト橋懸りより德藏どてら布子に一柱飛の權太連立ち出る。）
權太　サア御座れいなう〳〵。
德藏　おりやもう、許して呉れ〳〵。
權太　ハテ扨、それでも醉へというてぢやわいの。
德藏　おのれはマア何ぢややら小仔細らしい。一膳きめくさつて、今でも御用の舟ぢやといふ時は、おのれ其姿でどう働かれるもので。あんだらめが。
權太　サア舟へ乘りや、何時でも丸裸ぢや。マア追掛けて見やしやれ。大抵どつさりとしてよいものぢやない。一杯飯がよけ喰へるぞいの。
德藏　何をぬかすやら、おりやこの前横根病んだ時に、大抵難儀した事ぢやない。そんなものさすと直に横根ぢや。
權太　ハテマアさういはずと目見えしたがよいわいの。
（ト奥より敷浪臺の物小性に持たせ出る。）
德藏　それやこそな。
權太　それ出た〳〵。
敷浪　船頭德藏とはそちか。
德藏　ハイそちで御座りまする。
敷浪　この度は大切なる御用承り、首尾よう十日の着船、間に合はした故、御家の疵も付かず、今日饗應の終り迄が、芽出度う饒なさるゝはそちが大功。いはゞ一國の柱ともいふべき忠臣。改めて手を突いて禮をいふ。忝いぞや。
德藏　イヤ、もうその樣にいうて下さりますと、結句帆柱が横たはつた樣な。早綿で大廻は、德藏が船といふは、時化でおらうが、疾風でおらうが、怪俄なしに乘切るが得物ぢやと、日本國へ名の賣れたといふが、皆金比羅樣の蔭。こゝの親方は命の親、大事にせねばならぬといふ理由は、汝も聞け、まだよう呑込めぬ間ぢや。何か夜走りに磁石見損うて、山へ差いて乘りかけた。そりやといふと、觀念して叶はぬ時の神叩、南無金比羅大權現、此舟無事に越させて下さりませと、粘い油を出して拜む。他の者はいつそ目を閉いで性根は無かつた時、暫くすると、じやり〳〵じやりどさりと、舟が躍つた時、目を開けて見たればその山は後になつて、着いた所が船底は赤土だらけ。其時信心怠るなといふ聲が耳に突拔ける樣に覺えたが、これは正しく金比羅樣ぢや。

權太　それで、こなんが一代金比羅樣を信仰するはそれぢやの。
德藏　まだある。其船が御用の米船で、阿波の鳴戸を落した舟ぢやてや。
權太　滅法な事の齋賴ぢやの。
德藏　扨、御罰責の鳴戸を御用船が越したといふと、直に牢へ入れた。とんと首の座へ直つた所を爰の若殿樣がまだ前髪の時に、一旦金比羅の利生で助かつた者を詮で殺す筈はない。身上に代へて助けてやれ、といひ出した。それから此處の家老殿が早飛脚で鎌倉へ行き、天下の科人を大名が國に代へて無理貰ひにさつしやつた。大方内方の身上も半分変つたぢやらう。僅かな船頭風情を金比羅樣といふ一言で、此處の殿樣に首繼いで貰らうたのぢや。それから親方にしてもう十年の餘も奉公する。其時の大恩は忘れませぬ。たかが此命は私がのぢやない。親方から預つて居る命ぢや。天地の間に大事にするは、此處の親方ばつかり。何のあれしけな事したとて御禮仰しやる事は御座りませぬ。
敷浪　成程。其心ゆゑ、日本に德藏船といふと誰知らぬ者もない。恩を恩と知る所は、天晴武士も及ばぬ。又殿少年乍ら、其方に恩を見せて御使ひなさる、御主人樣も、天晴の手柄ぢやわいの。
權太　さうして十年も家へ往なずに、後はどうなつた。
德藏　どうなつたやらいけ〳〵ぢや。
權太　滅相な。女子妻子は何になるものぞ。
德藏　アヽおのれは、それでは船にはエヽ乘るまい。
權太　なぜよ。
德藏　いでさらばといふと南部で買物して、北國へ往て賣つて、直に北國の買廻して長崎へ行く。縱橫十文字に海の上が家ぢやによつて、かゝりさうな湊には、女房を拵へておれが家が有る。一年に一度行く家も有り、三年も五年も風まんで、エヽ十年も見え會はぬ女房が有る。それを屈託にして居て乘れるものかい。
權太　こなんの樣に、金が廻れば一代さうして暮したいものぢやて。
（ト小性臺のものを德藏傍へ直す。）
敷浪　他見を恐れ、當分は格別に御取立はなされぬ。追つて加增も有るであらう。當座のしるし、侍分に御取立なされ、知行を遣はされる。有難う頂戴しや。
德藏　ハイ〳〵。サア、おれがこれが嫌さに出まいといふものを、いえ〳〵、

もう私は矢張此儘で置かしやつて下さりませい。

敷浪　辭退は尤もなれど、これもお上の御意、違背ならぬ。

權太　これを着ぬと奉公を背くといふものぢやといなう。

徳蔵　そんなら着にやならぬで御座りまするか。

敷浪　御意ぢや。

徳蔵　これは又情ない事ではある。嫌といへば不忠になるといへばせう事がない。そんなら着ますで御座ります。われも手傳へ。

權太　ヲイ〳〵。

(ト着物を脱がし、熨斗目を着せる。其上へ素袍着る。半袴也。此中わや〳〵いうて着替へる。)

徳蔵　こりや、正月に舟へ來る萬歳ぢやないか。

權太　ヲヽ萬歳ぢや〳〵。

徳蔵　生きながら萬歳に生れ替るのぢやな。これでは手が出ぬわい。

權太　エヽ後でどうなとなるわいの。

徳蔵　テモ、飯喰ふ時にどうもならぬ。

權太　エヽ喧しい和郎ぢや。

徳蔵　こりや〳〵。一足も歩かれぬは。どうでもこれは子供の着たのぢやさうな。

權太　エヽ滅相な。それ一ツの穴へ兩足入れて、それが動くものか。モ一ツ穴が有るわいの。

徳蔵　ヲヽほんになア。エヽ目や耳の樣に二ツ有るなら有るというたがよい。下へ穿くものぢやによつて、おりや尻の格で、穴は一ツはかないと思うた。

權太　じこんぢ云はずと、紐をせうてい。

徳蔵　こりや前に堅い板が附いて有る。こりや喰物でも乘せるのか。

權太　エヽそれや腰板ぢやわいの。

徳蔵　こりや腰板なら其下が割つて有るか見てくれ。

權太　なんの爲に割つてあらう。

徳蔵　南無三、一代、泊木へ行く事はならぬわ。

權太　もし、此烏に紐の附いたのはなんで御座りまする。

敷浪　そりや、かけ烏帽子。頭へ被るものぢやわいの。

權太　ムウ、烏帽子ぢやな。サアこれ被るのぢや。

徳蔵　まだ被るか。こりや頭痛病になりさうなものぢや。いつそかうせうかい。前と後を袋張して、こいつを毬の代りにしては。

權太　エヽ滅相な和郎ぢや、サア被よ〳〵。

（ト被せる。徳藏顏もが〳〵して。）

徳藏　エヽ引ぱる〳〵。はい、どうやらかうやら世に出られまして御座りもする。

敷浪　ヲヽ、天晴な侍ぢや。今から詞も直して、徳藏殿。此上ともに隨分忠義を勵まつしやれや。

徳藏　隨分勵みまする。扨、腰がいかうはけみまする。

（ト時計のきつかけ。小性燭臺持ち出る。）

敷浪　もはや七五三の配膳の刻限。徳藏殿。後刻お目に掛りませう。（ト小性連れはひる。）

徳藏　こりや〳〵。おれは恥かしうてどうもならぬ。何ぞよい顏隱す物はないか。

權太　エヽのつし〳〵と歩かつしやれ。

徳藏　イヤかうせう。（ト手拭で頬被して。）

權太　エ、侍が手拭で頬被するものか

徳藏　なんぢや知らぬが頭へ喰入るやいの。うな、どうぞこれに頂付けてくれぬか。

徳藏　デモ元日には皆するぞよ。

權太　待たしやれ〳〵。腰に熊の毛の胴亂が有る。これはり込んでやらう。

權太　そりや、矢張萬歲ぢや。

（ト胴亂を脇差て切りほどき、熊の毛を頭へ當てる。其上へ烏帽子着せる。）

權太　サア、醫梅はどうぢや。

德藏　ムヽ、もが〳〵と暖かでよい〳〵。

權太　サ、これからは長家々々へ往て口上を云はにやならぬ。

德藏　阿呆盡くせ。誰が行くもので。

權太　それでも長家廻りせにやならぬわいの。

德藏　種々のけちまんざいな事ぢや。そして往てなんといふのぢや、敎へてくれ。

權太　おれがいふ通りの返答さへ打てばよい。侍の癖といふものを覺えにやならぬ。

德藏　まづ〳〵萬歲で行かう。

權太　それもよからう。

德藏　德藏には御萬歲。

（トこれより萬歲の眞似をして、燭臺の火を消す。）

權太　オヽ火を消したりや、叱りをらうぞや。

德藏　よい〳〵せう事がない。暗うしたらもうこちのものぢや。サア何なといへ、返答うつは。

權太　皮の薄い和郎ぢや。拙は其許が新參の滅法德藏左衞門で御座るか。某事は水夫山權太兵衞と申しまする。以後はお互に別懇に談じませう。

德藏　成程。いかにも權太兵衞殿。先づ暖簾をきましてよい春で御座る。此上は取舵面舵ともに萬事御引廻し走らかして下さりませう。

權太　拙者其許を連れ長家廻りが致したう御座れども。

德藏　なか〳〵。

權太　先程丁半を組みかけまして。

德藏　なか〳〵。

權太　よつ程、してやられましたによつて。

德藏　なか〳〵。

權太　此刀を一本貰ひませう〳〵。

德藏　なか〳〵。

權太　この下地の着物も貰ひまして。

德藏　なか〳〵。

權太　打殺しますでござりませう。

德藏　なか〳〵。

權太　よう御座りました。

（ト德藏着替へと帶刀共に權太擔げ、言捨てにしてすつとはひる。德藏矢張なか〳〵といふて餘念なう踊り居て、音がせぬ故、ふつと仰いで見て、權太居ぬ故慟りして。）

德藏　こりや、權太よ〳〵。何處へうせた。もう外しくさつたか。アヽどうぞ氣骨折らずと歩きたいが。エヽ、火

を消さなんだら宜かつたものを。ずるずると致し躓いて轉るであらう。ぢやが、これも侍の着る物ぢやによつて、萬更理窟の悪い事はしてあるまい。どうぞ素直に小便をする工夫が有りさうなものぢやが。

(ト合方になり、手を組み思案する。數善法師奥より出で、思入れして徳藏を見つけ、二重舞臺の上より、コト〳〵。)

數善　山。

徳藏　權太よ。

數善　シイ、、、。(トそろ〳〵徳藏が傍へ出で、ぢつと顔見る。)五郎。

徳藏　なんぢや。(ト尋ねる音聲。)

數善　早かつた。身も先達つて入込んだれど、中々一角めは手にあふ奴ではない。其方も隨分働け。事成就の上はコリヤ。(ト囁き。)

徳藏　何の事ぢや。ねつから譯が知れぬ。

數善　サア。わが性根では國の五ヶ國や十ヶ國では相手になるまい。何で有らうと日本半國。

(ト囁く。徳藏おづ〳〵合點して思入れにて、)

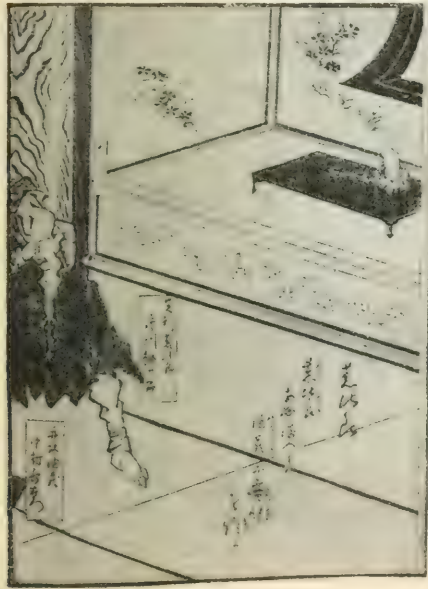
徳藏　ヤアア。(ト驚く。)

數善　シイイ、、。コリヤ。

(ト又囁く。この内に徳藏面體替り仰天して、委細の譯を呑込まん意氣にて、)

數善　ぢやによつて、今宵夜明には皆殺し。コリヤ、お身が指圖でないか。

徳藏　時に又その徳藏が。

數善　イヤサ徳藏めが事は氣遣ひするな。カノ、そちが兼々吟味せいと言付

けたによつて、身が寺にて祈禱を初め、徳蔵船安全の祈をふづくり、どうやらかうやら徳蔵が臍の緒は此方へ取上げた。其方が合はして見よというた此臍の緒と合はしてみれば同年同筆、いよいよ雙子に違ひはないてや。

（ト守符二ツ渡す。徳蔵大きに肝を潰し、）

徳蔵　ハテナア。

敎善　雙子の徳蔵。右の儀を申し聞かさば、違背せう樣がない。アノ船の水夫の者共は此方の味方。徳蔵もしも味方をせずば、直に打殺す手筈。ぬかるまいぞ。

（ト徳蔵うなづく。）

敎善　必ず。（ト囁く。）

徳蔵　合點ぢや。

（トいうて透見て奥へはひる。徳蔵思入れして思案の中、どろどろ、檜垣出る。矢張合方。）

徳蔵　スリヤ謀叛人というはおれと雙子。捨てられた實のおれが親といふは。

檜垣　主が重いか親が重いか、それ聞かう。

（ト徳蔵合點して、）

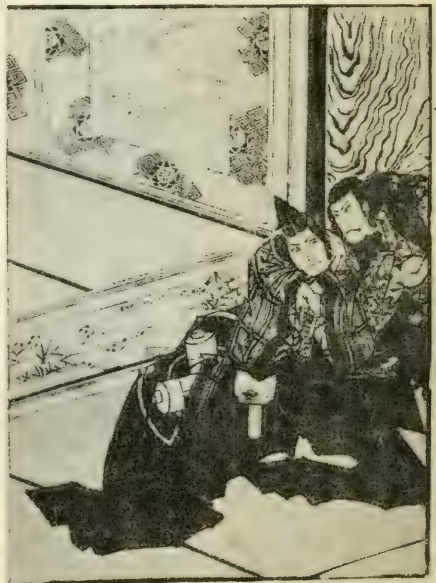
徳蔵　今よめた。船でも陸でも徳蔵が魂は金鐵。

檜垣　オヽ嬉しう御座る。

徳蔵　幽靈殿、後に會ひませう。

（ト唄になり、徳蔵言捨てにして橋懸りへついとはひる。奥より敎善法師出る。）

敎善　何でも今宵の中、相模五郎と言合はした通り、皆殺しにして。先づ何はともあれアノ三ツの寶を奪ひ取るが肝腎。さうぢや。

（ト奥へ行かうとする。檜垣二重舞臺の上より、敎善法師を道理引きにて、どろどろ

にて奥へ引きずりはひる。）

（向うより）御上使〳〵〳〵。

（ト過急にいふ。權太向うより出る。）

權太　申し〳〵。早打ちの御上使で御座りまする。

（ト殘らず奥より出る。大勢何事ぢやといふ。）

一角　あはたゞしい過急の御上使とは、シテ鎌倉よりか。

權太　何處からぢや知らぬが、早駕籠でお家の一大事ぢやというて、もうもうそれへ見えまする。

（ト向うより乘物大勢細引付きて、）

乘物大勢　エイ〳〵〳〵。（ト舁き出る。）

將監　何事にもせよ。それ、氣を付けい。（ト藥はふる。）

一角　ハッ。

（ト一角印籠舐つて見る中、敦浪水注銀の茶碗持ち運ぎ、乘物の傍へ行く。）

敦浪　用意いたしました。

（トいふ中、乘物より呉服衣裳裲襠にて、御書を持ちずつと出る。皆々恟りし。）

辰五郎　呉服樣。只今御出でなされて御座りまするか。

呉服　舟番所よりの早駕籠なれば、さのみ息切れはせぬ。騷ぐな〳〵。

將監　何者かと思へば、石堂帶刀殿へ遣はしたる娘の呉服。

龜次郎　思ひもよらぬ呉服樣。

敦浪　シテ御上意の。

皆々　趣はな。

呉服　鎌倉より仰せ渡されたる御上意の趣は、弟龜次郎への事。差當つて將軍義滿公へ過急と申上げまする一大事故、急がしまして御座りまする。

義滿　身に過急の一大事とは、心許ない。早う〳〵。

呉服　最前御勅使の御立ちなされました時、其御勅使樣は如何遊ばしましたな。

一角　心得ませぬ儀で御座つた故、詮議致す中、眞の御勅使御入りなされましたる故、直樣ぼつ歸へしまして御座りまする。

將監　命冥加な大騙りめ。シテ、それがどう致した。

呉服　ムウ。すれや眞の御勅使樣はお入りなされましたかな。

敦浪　卽ち奥に御出でなされます。

龜次郎　私は病氣で委細は覺えませね共、只今の御勅使樣には奥でお目見え致しました。

義滿　呉服。シテ其儀が如何致した。

呉服　（ト義滿に向ひ、）憚りながら、夫帶刀は伊豫守、國並び故龜次郎への御不審の御書到來仕りまして、國に殘り居る私へ鎌倉の御上使の役目申し參り

ました。濱邊にて御勅使都へ御立腹の御歸り、心許なさに樣子を尋ねましたれば、「理不盡に騙ると言ひかけ追返へした。此通り奏聞して、將軍義滿は後日のお咎め思ひ知らさうと、居丈高の御詞。仔細存じませね共、差當つて義滿公の一大事と存じまして、直に駈けつけまして御座りまする。いよ〳〵奧に御勅使樣御入りとあれば、こちらが眞か。ハテ合點の行かぬ。

（ト奧よりばた〳〵にて豐姫出で、）

豐姬　申し〳〵。今の御勅使樣が高塀を乘越え、いづくへやら逃げたわいなア。

皆々　なんと。

（ト象潟姬同じく走り出て、思入れ。）

象潟姬　今の勅使は贋者。水門の番人を切つてどつちへやら行きまして御座んす。

權太　（ト思入れ。）そりや、どうもならぬ。

龜次郎　家來共、吟味致せい。

將監　それ、追々に追駈けい。

（ト兩人急ぎはひる。）

一角　こりや、そちや、かのものに氣をつけい。（トはひろ。）

敷浪　合點で御座んす。

龜次郎　贋者勅使なれば。

吳服　弟待ちや。其方には鎌倉より姉が承はつた御上意。一寸も動く事はなるまいぞ。

（ト權太走り出る。）

權太　水門の番人を眞二ツにして濱の方へ逃失せましたれば、もう役には立ちませぬ。

（ト辰五郎出る。）

辰五郎　追々家來を追駈けさせますれ共、影も形も見えませぬ。

將監　手溫い／＼。一角遠見の者に方角見せて、追々追駈けさせい。

一角　ハツ。

吳服　スリヤ追返へしたのが眞の御勅使。

義滿　將監、龜次郎、思案せい／＼。

（ト急いていふ。）

一角　最前の如く申したれば。

權太　取戻しはなりませぬ。

辰五郎　最早船は出たで有らう。

將監　ぢやというて將軍の御身の上。

義滿　此まゝ捨置くと義滿言譯に切腹する。（ト刀に手を懸ける。）

皆々　イヤお待ち下されい。（ト留める。）

龜次郎　一角どうせうぞ。

一角　どうというて、お詫ひ申さうより他はなけれど、餘程の隙取り。

吳服　そりや、氣遣ひない。わしが段々御詫び申し、船番所に入れまして置いた。一時も早うお迎ひに／＼。

將監　然らば私直に參りませう。一角も來い。

一角　ハア。

義満　皆も早う〳〵。

權太　餓鬼も人數ぢや。私も參じませう。

呉服　辰五郎も急げ。

權太
辰五郎　畏りました。

（ト將監　一角　辰五郎　權太向うへ入る。）

豐姫　妾も行かうわいなア。

亀次郎　一人でも多いがよい。早う〳〵。

（ト豐姫はひろ。）

象潟姫　妾も參じませうかい。

亀次郎　早う〳〵。

（ト兩人向うへはひろ。亀次郎　呉服殘り居る。）

亀次郎　申し鎌倉の御上使樣。御不審とは心許なう存じまする。何事で御座ります。

呉服　そりや御勅使樣御歸りなされ、御機嫌直つた上の事。たとへどの樣な事あらうとも、其身の過失なれば、家に疵の着かぬやうに必ず未練を出すまいぞ。

亀次郎　ハッ。

義満　エ、首尾の程心許ない。

呉服　私が大概御機嫌は直しました故、あれ程の人數がお詫び申すに、お聞き入れないといふ事は御座りますまい。御氣遣ひなされますな。

（ト教善法師出る。）

教善　義滿。ハテきつい失敗樣な。

義満　叔父樣。共々お詫びなされて下さりませい。

呉服　お向は荒次郎樣。叡山へお登りなされたと承りましたが何故此讃岐へは。

教善　甥に托鉢乞ひに來れ共、慘うあ

しらうた罰が當つて、御勅使への無禮。品に寄つたら鎌倉を棒に振らうも知れぬ。アヽ笑止々々。
吳服　御親切なお詞。其心入ではまだ御還俗はさせられませぬわいなア。
致善　さらば流を見物致さうかい。
（ト豐姬出る。）
豐姬　申し〳〵、お喜びなされませ。どうやらかうやら御機嫌直りまして御座りまする。
龜次郎　ヲヽ。それは重疊々々。
（ト象潟姬走り出る。）
象潟姬　申し〳〵、お喜びなされませ。もう此處へ御歸りなされて御座ります。
龜次郎　スリヤ御歸りなさるゝか。
吳服　嬉しや〳〵。隨分御機嫌を取らうぞ。
龜次郎　ハッ。
（ト龜次郎吳服出迎ふ。義滿致善法師上に坐る。すると向うより第一の梅園中納言、元の公家仕丁を連出る。梅園中納言次に將監、一角、辰五郎何れも手をついて花道にて銘々云ひかかり詫事の臺詞、仕丁の後には、權太、三人に面白をかしくいうて出る。仕丁袖を拂ふ。權太仕丁が袖引き詫する。）
一角　不調法と申しませうか、失禮慮外とも、あなたへどの面さげてお詫び仕りませう。
將監　差當つて義滿が難儀、私ども鎌倉へ何と申譯仕りませう。
龜次郎　大勢の難儀を思召し分けられまして。
豐姬・象潟姬　どうぞ御堪忍なされて下さりませい。
義滿　家來の過言は皆私の科。申上げませう詞も御座りませぬ。
吳服　最前も申します通り、兎角公の御了簡、民を不便と思召す天子の御口眞似をなさるれば、何事も圓う御了簡の程を希ひ奉りまする。
權太　私は酒にたべ醉ひまして、何を喋りましたかとんと存じませぬ。お腹に入るなら、私が顏を踩躙らしやつて下さりませ。申し、コレ、拜みまする。お前はどうやら柔和さうなお顏ぢやわいの。
龜次郎　それ〳〵あなた樣がいつち腹立ちせぬと仰しやつてぢや。二人の者もソレ共々にお詫び〳〵。
豐姬・象潟姬　（思入れ。）結句喧しいとお腹が立ちませうけれ共、そこをどうぞ偏へに御賴み申しまする。
（ト兩人仕丁に手をつかへ詫言する。）
一角　大地へ身體がにえ込みたう存じまする。一向お詫と申せば、猶御立腹が強う御座りまする。此上は義滿公龜

次郎親子の者へ憐愍づくで御座りまする。長袖の慈悲と申すは斯樣の時より外は御座りませぬ。何卒御赦免下さりませうならば、生々世々の御恩と。

皆々　有難う存じまする。

梅園　衆人皆醉へり、我獨り覺めたりと、屈原が言ひし述懷を思合せば、只此身さへ清くなれば天の上覽に任すこそ肝要なれ、彼は憎し、此は至しといふも愚昧の至り、左程手を摺つて詫びるに、一人にても罪人は拵へまじ。神事も收り、繼目も整へ、此後別心ない程に皆心よく思うてよからう。

一角　すりや御赦免下さりますか。

義滿
將監　寬仁大度の御了簡。

皆々　エヽ有難う御座りまする。

吳服　まづ／＼あれへ御通り下されませう。

（ト皆々招請して、梅園中納言、義滿二重舞臺の上へ上がる。敎善法師二重舞臺に居る。吳服は下座の方へ床几にかゝりゐる。其他は次第に並ぶ。）

梅園　仕丁共。嘸苦勞致したであらう。次へ往て休息せい。

權太　機嫌直しに私の部屋で御酒あがりませう。サア／＼御出でなされませい。（ト仕丁を連れ、橋懸りはひる。）

吳服　かやうの時は善は急げ、一時も早く御神事御勤め遊ばされませい。

將監　誠に斯樣の時は寸善尺魔とやら、御神事早く取行ひたう存じまする。

梅園　まづ御神事の始めは、吉例の通り、三品の寶受取らう。義滿、寶御渡しなされい。

義滿
將監
龜次郎　（思入れ。）その寶は。

吳服
辰五郎　（思入れ。）寶はなんとなされました。

將監　其寶は最前の勅使に、義滿公がお渡しなされた。

皆々　ヤアヽ。

敎善　寶が無くば義滿が科。腹切つて言譯せい。

一角　女房、三品の寶これへ持て。

敷浪　畏りました。（ト白臺に寶載せ、梅園中納言が前に置く。）三品の寶御受取り下されませう。

敎善　すりや、三品ともに。

皆々　寶はどうして。

一角　豫て斯樣の事も有らんかと、拵へ置きたる贋物、奪ひ取つて立退いた。この贋勅使の拵へ手も大方。

敎善　なんと。

梅園　盗人を捕へて見ればの譬の節でがなあらう。

吳服　流石は一國を取捌く家老程あり、此忠臣にて今こそ別心ない。和歌三神を誓ひにかけ賴もしう思ふ。ハテ、龜

次郎はよき家來を持たれたよなァ。
呉服　最早將軍家に曇り霞の無いからは、これより鎌倉の嚴命御上使。
皆々　ハアヽ。
辰五郎　家來。龜次郎を取卷け。
侍　やらぬ。
一角　待つた。何故主人を取卷かせた。
辰五郎　龜次郎殿へ御不審の一件。先達て御內詮ありたる故、遠卷にいたし置いた。一件殘らず出ませい。
大勢　ハアヽ。
（ト住持百姓二三人、亭主喜作、親方德兵衛出る。）
呉服　用捨ならぬ鎌倉の御書、辰五郎へ內意申し遣はした。龜次郎、最前いうたは爰の事。家國には代へられぬ。此度の饗應、龜次郎は國には居らぬと、とり〲の噂。夫は東の御勤め、國並びに留守を預る此身、とやせんかくやと胸を痛めたが、一角が計ひにて三月十日の間に合うたと聞いた時の嬉しさ。二度悔りの時は御書判、放埒其儘に一家の誼みにて石堂帯刀が依怙贔負との御評定故、早飛脚到來して、女房の此呉服に弟が詮議させ、若し贔負の沙汰あらば、夫帯刀殿迄同罪の御書。未練な心持たずとも、龜次郎早く言譯しや。
（ト龜次郎俯向きゐる。）
敎善　最早將軍も同前の義滿。叔父の身共も立合ひ聞いてくれう。
辰五郎　屛風が浦の寺僧。願書持參れい。
僧　ハア。
（ト持出る。將監うろ〱、思入れ。）
敎善　どれ此處へおこせ。（ト取つて讀む。）
「乍恐願ひ奉る口上書
去年三月、殿樣私寺へ御越しなされ、御用金として五百兩仰付られ、御斷り申候はゞ寺御取上げの氣色にて候間、是非なく差上げ申候處御返濟なく剩へ村中人別に金百疋御集めなされ候故、相伺ひ申候へば、右五百兩返濟の爲との儀、是さへ道ならぬ儀に存候處、右百疋の數都合五百兩に相成候ても御返し無之、右の金子無之候ては、大師御建立、天下御存じの屛風が浦退轉仕候間、右御返濟下され候樣に仰付けさせられ下され候はば奉難有存候。以上。
四十八ヶ所の內屛風が浦
天江寺判
呉服　龜次郎。覺え有るか。
龜次郎　これ迄ぢや。
（ト腹切らうとする。豐姫象潟姫留めて、）
一角　イヤ右の金子は龜次郎樣の名を騙つて拙者が費ひまして御座る。
住持　この若殿樣が直に御出でなされ

まして。
一角　若殿が直に御出でなされうが、身がお國の爲に費うたといふに他にあらうか。
辰五郎 敬善　國の爲とは。
一角　住持。そちが金は貧なる者へ利息を掛けて廻すであらう。
住持　金を廻して、其利を以て立ち行く寺で御座りまする。
一角　五百兩を五年廻せば五百兩に成る程の高利。其高利を知つて借るは、借る者の横着、貸す者の横道、果は金公事、遠國の願ひ御大法の捌き仰付けられても、己がなせし過失は云はず、國主を恨み役人を憎む。自然とこの沙汰他國へ聞えてはお國の名折れと、外へ聞えぬ樣に此方へ借り上げたは事の隱便を好む故さ。
百姓　そんなら人別に金一歩づつなぜ御取りなされた。
一角　そりや、其方共が不便さ故。
百姓　どうしてな。
一角　近年、日和打續き、不作なれば年貢も納めず、咎むれば其者の難儀、それ故千五百枚の富を興行して落札は百兩又は五十兩。出すはわづか百疋。目に見えぬ僅かの金。突當れば莫大の金に取付き、勝手の宜しい樣に致し呉れたのさ。當つた奴等は口を閉ぢ、當らぬ過言を吐く横道者めが。
百姓　（思入れ）エヽ、聞けば尤もぢや。
住持　（思入れ）それでも一の富取つたといふ者は聞かぬぞや。
吳服　去年八月十四日國境、天下の御用と言立て、一萬五千本の竹を切り、又千三十荷の石を探り。
辰五郎　象頭山白峰山の杉丸太八千本、百性を虐け取つて、翌十六日直に賣拂ひ、其まゝ。
吳服　鎌倉へ參勤した。龜次郎これは。
龜次郎　申譯には。
（ト腹切らうとする、兩人留める。）
一角　イヤそれも拙者が計ひ。
吳服　何故の計ひ。
一角　近年、丸龜多度津廻船の着場惡しく、御祈願所象頭山へ參詣の舟過失あつては、第一御國の名折れ。八月十四日、明くれば二百十日の風、着場を崩さず柵にて丈夫に堅めん爲、足利の御祈願所象頭山へ御奉公。
辰五郎　しからば、其柵に竹木を使はず、なぜ十六日に賣拂つた。
一角　入札を遲くすれば町人の十露盤づくめ、早くすれば言合はさず、銘々の入れ勝手、それ故早速賣拂うた。
辰五郎　國境は天下の領地。なぜにお上へ伺はぬ。

百　姓　（思入れ。）オヽなぜ其まゝにさつしやつた。

一　角　コレ、合點の行く樣にいうて聞かさう。マア大病人の所へ醫者が來て、受合うて他の醫者に見せなというて往んだ後で、其病人に變の來た時、最前かういうて往んだと、藥も飲まさずほつて置いたら、其病人は死ぬるぞや。それでは看病人の手ぬかり、誤り、大雨大風で着場の崩れる時、コレ風故お上へ窺ひにやつた返事のある迄、風待つてくれ、心得たと、打寄せる浪が打たずには居そむないものぢやぞや。

皆　々　サアそれは。

一　角　火急の用事に法を破る軍配。なんとこれにも言分有るか。

皆　々　サアそれは。

一　角　ぐつとでもぬかして見をらう。

百　姓　（思入れ。）ぐつとも御座りませぬ。

数　善　凡そ二千兩餘りの金。シテ其金は何に費うた。

一角 敷浪　その金は。

敷　浪　アイ其金は私が借受けまして御座んす。

辰五郎　アノ二千兩餘りの金をや。

敷浪 象潟姫　淡路の大領より姉妹の娘。嫁入前の化粧料に千兩づつは父さんが借らしやんしたので御座んす。

敷浪 豐姫　アイ借主は淡路の大領、國守同士の無心、隣國の誼み、お返し申せばよいぢや御座んせぬか。

呉　服　（思入れ。）ハテ氣味よう名乘つて出たなう。（くり上がる。）

喜　作　（思入れ。）イヤこちの者は被られぬてや。

一　角　そちや、吉原の揚屋喜作。

德兵衞　またも一人御座りまする。

一　角　わりや親方、ホイ。（ト當惑する。）

喜　作　龜次郎樣、お前が下されました揚代三百兩。千金のお居所でア、難儀致しまする。

德兵衞　身請の七百兩にもカノ松といふ極印の事で、よう替へて與れうぞ。どうやら首が飛びさうな。肝腎の其時の二人がふけつたといふもので、無證據に成つて罪はお前一人に落ちた。それといふも一體はつこりともせぬ金の取り樣ぢや。何であらうと都合の千兩。お金をもらひまするで御座りませう。

喜　作　質物に入れなされました歌仙の色紙も、アノ呉服樣が出金下されます筈で取上げられました。サア金下さりませ。

龜次郎　サア其金は。

德兵衞　無くば連れて戻らつしやつた檜垣を戻して下さりませ。それもならに

や引摺つて廓の法に行ひまする。
龜次郎　サアそれは。
三人　サア／＼／＼。
德兵衛　どうで御座りまする。
將監　（思入れ。）スリヤ誠の色紙は質物に置いたとな。
吳服　（思入れ。）かく志は厚けれ共、縱令布留那の辨舌でも、是ばつかりは遁れないわいなう。
（ト將監、龜次郎を引付け、扇子にて叩く。寢鳥にて火の玉後へ出る。龜次郎の目に檜垣見えて、）
龜次郎　アヽ、コレ、出まいぞ／＼。親人のお腹立、二人の手前、此處へ出ては直に親方に、サア直に親方に金が出れば渡さにやならぬ。人々に難儀を懸けるも皆私が放埓故、親人樣、御了簡なされて下さりませ。
將監　エヽ、うぬなア。知るまいと思ふか、此年月の己が放埓、長々云うて及ばぬ。一角、段々のそちが志今死んでも忘れ置かぬ。町人百姓に今の樣な騙り事、あれが大名の身持か、二人の者の志。
（ト切らうとする。豐姬象潟姬止める。）
吳服　お待ちなされませ。御詞のかゝつた科人も同前、我儘に御成敗は叶ひますまい。
將監　御上使如何仕りませう。
吳服　御追放。
（ト將監思入れして。）
將監　勘當ぢや、うせう。
辰五郎　御追放ならばお定まりの割竹、家來共褞袍持つて。サア立たつしやれ。
（ト手を懸ける。一角取つて投げ、）
一角　御追放とあればお供は叶ひませぬ。落ちつく處を。
龜次郎　一角、そなたには何と禮いはうぞ。人目も有れば何にもいはぬ。あの事を賴むぞや。（ト萎れる。）
一角　アノ事を賴むとは。
（ト寢鳥、火の玉を見て一角きつとする。）
龜次郎　サア今迄つれない人ぢやと思うて居たが、よう助けて置いてたもつた。
（ト泣く。）
一角　よう助けて置いてとは、（ト思入れして、）そんなら、矢張。（ト火の玉を見て）ハテなア。
梅園　（思入れ。）はや七五三神酒の刻限
（ト篳篥樂になる。）
義滿　誰か有る。配膳出せ。
將監　一角女夫。神事配膳仕れ。
一角 敷浪　畏つて御座りまする。
（ト思入れ有つて、奥へはひる。龜次郎そろ／＼行く。）
豐姬 象潟姬　龜次郎樣。（ト取付き泣く。）
（ト教書法師下りて、）

敎善　國境より敲き拂へ。

（ト山中辰五郎高丸龜次郎に手をかけ、吳服立廻り。）

吳服　（思入れ。）承つた上使の役目。追放は此方から、叔父御樣は內證事。御出家の要らぬお構ひ。

（ト辰五郎力む。）

吳服　妨げすると、どなたこなたの用捨はないぞ。（ト突飛ばす。）

吳服　二人の娘。大領殿へはわしが送らす。ナ、追放なれば國境よりわしが送らす程に、確かに思うて引添うておぢや。何時でも色紙。サア引添うて。

豐姬 象潟姬　（思入れ。）エヽ有難う御座りまする。

敎善　追放の仕樣、國境で見物せうわい。

（ト此中、笙篳篥にて一角數浪七五三の三寶を梅園中納言將軍義滿に据ゑる。長柄の銚子小姓持出で、義滿が前に置く。）

吳服　（思入れ。）町人共、金子は此方より遣はさう、旅宿へ參れ。

百姓・住持 德兵衞・喜作　有難う御座りまする。

龜次郎　親人樣。

一角　隨分〳〵、御無事で。

（ト將監言消し思入れ。）

將監　將軍宣下の御祝賀。千鶴萬龜。

辰五郎　たゞ〳〵。

皆々　お芽出度う存じ奉りまする。

（ト始終笙篳篥。）

吳服　科人歩め。

（ト龜次郎が傍へ豐姬象潟姬をつきやる。三人連立ち萎れて向うへはひる。吳服後より靜に行く。敎善法師、後より、のさ〳〵はひる。百姓 住持 喜作 德兵衞はひる。此間皆々舞臺より見送る。思入れ。始終笙篳篥樂太鼓なり。梅園中納言此間、一寸、笏にて配膳に心入れ有つて、三寶を眺め居る。）

將監　褒似一度笑んで幽王國を傾け。

一角　玉妃傍に媚びて玄宗代を失ふ。

數浪　御心根の程が思ひやられて。

（トしつぼりとする。ト件侍鐵砲を持ち、大勢出並ぶ。）

皆々　（思入れ。）將軍御出立、御舟の御迎ひ。

（ト皆々辭儀する。）

梅園　イザ、神拜の七五三頂戴仕らう。

（ト蓋取り、箸とり上げうとする。）アヽぞは〳〵と。ハレ、思合うたる刻限かな。フン、金比羅大權現といふは兜率の內院より天下り、天部にて偉しき事、切るが如く研ぐが如し、三月廿五日丸龜の城內配膳に毒有るべし、必ず服すべからずと、まざ〳〵しき夢の告。夢は五臟のわづらひ、取るに足らずと打捨て置いたるが、次の夜一人の天童來つ

て、三月廿五日丸龜の城內配膳に大毒有り、汝も將軍も甚だ危し、我はこれ大權現の使なりと、消えるが如くに失せ給ふ。次の夜も又其夢、三日續けて靈夢を蒙り、心迷ひの今日今宵、此膳の湯氣の中、赤白の色をなし、我が心肝を驚かすは極めて毒に極まつた。ハテ恐しや、不思議やなァ。

將監　スリヤ配膳が。

一角 辰五郎　大毒とな。

義滿　將監一角。何と思ふ。

一角　女房と只二人、一間に御錠をおろし、不淨をよけて每度の試み。

敷浪　何によらず二種づつ、一種づつは試みますれば左樣の事は。

梅園　將軍に毒を盛るは、扨永々いたし來るが今に止まぬな。ハテ久しいものな。

一角　女房お目通りで喰べて見よ。

敷浪　畏りました。

（ト三寶取り來つて何らかも移しかへ、汁椀平一つにして敷浪汁を吸ひて、あれこれちよつ〳〵と箸を付けて、長柄の銚子もあけて飲む。）

將監 一角　どうぢや〳〵。

敷浪　イヤもうなんの仔細も御座りませぬ。

一角　さうあらう。至極大切に念を入れて。

（ト此のうち敷浪色變り、種々苦む。皆々悔り、樣々血を吐き死する。）

辰五郎　ヤァ、こりや立處に血を吐いたは。

將監　からだはそのまゝ紫色。

義滿　すりや毒に極まつたか。

一角　こりや〳〵女房〳〵。（思入れ。）最早息は切れたか。ホイ。

義滿　將監をかこへ。

皆々　動くな。（ト欄懸りにて鐵砲かまへる。）

梅園　正しく謀反の企てか、天の網ぢや、將監、日の本の地を踏む中はいつかな叶はぬぞよ。

辰五郎　サァ言譯は御座らぬか。

將監　サァ言譯は。

辰五郎　サァ。

將監　サァ〳〵〳〵。

辰五郎　ナント。

（ト將監、一角を振廻はし、）

將監　コリヤ逆磔ぢやが言譯はないか

一角　微塵毛頭。

辰五郎　敷浪はなぜ死んだ。

（ト一角又あちこち思入れして、）

一角　エヽ、武運にも盡きはてたか。

（ト地蹈鞴踏んで泣く。）

辰五郎　ハテ、恐しい巧ぢやな。

（ト將監向うへ出て、手を廻はし）

将監　サア縄打つてお引きなされい。
義滿　それ縄打て。
辰五郎　主從の見境はない。
（ト縄かける。一角行くを辰五郎當てる。
　義滿寶篋を持つて。）
義滿　かゝる時節、寶は肌身放されませぬ。
梅園　御尤もゝゝ。
（ト義滿下へおり。）
義滿　舟の用意。
皆々　御座舟、引舟、御供に相待ち居ります　る。
義滿　勅使は後より御下向。
梅園　御座らうか。
義滿　將監を引立てい。
辰五郎　ハア、。
（ト鐵砲持ち將監を双方より四人して圍ひ、一角取付くを振切り、侍大勢付いて義滿殘らず橋懸りへはひる。これまで笙草葉。梅園はぢつと立つて居る。一角後を見てうろうろする。梅園が傍へ坐り。）
一角　御勅使樣、御主人は勿論私に限り、日本大小の神祇をかけ毛頭存ぜぬ事。主人をあの態に致し私がどうも、（思入れ。）どうもどうもどうも、立ちませぬわいの、どうどう。（ト大泣き。）
梅園　蛇は鱗を見て大小を知り、黄金は火を以て窺ふ。無實の罪とは知れて有りながら、女房が即死割符を合はしたれば、とても逃れぬ事ぢやぞよ。
（ト一角、梅園に詰めかけ。）
一角　主人を助くべき筋有れば、御慈悲ぢやお情にどうぞ。
梅園　サア、主人を助くべき筋は、（ト思案して、花活の櫻を取り、一角を見て。）即ちこの花。（トはふる。）

一角　此櫻で主人の命が救はれるとはな。

梅園　散ればこそいと〻櫻はめでたけれ、殘る枯木は人も折るまじ。

一角　散ればこそいと〻櫻はめでたけれ。

梅園　殘る枯木は人も折るまじ。

一角　花さへ散らば。

梅園　眺めもなし。

一角　枯木も無事に。

梅園　よし、手折ては有りそむないものぢやぞよ。

（ト一角、思案して肌脱ぎ、刀を抜き、紙巻いて、）

一角　散ればこそいと〻櫻はめでたけれ。（ト腹へ突込む。）

梅園　ハテ惜しい櫻を散らすなア。

一角　とかく枯木の折れませぬ樣。（ト苦しむ。）

梅園　左近の櫻に代へてなりとも、大内の花守、梅園宜しく取計はん。

一角　エ、忝い。御勅使。とてもの御願ひ、拙者が弟に多度津新藏と申す者、是も若殿の御爲に金子引負ひ出奔いたしした。何卒御尋ねなされ、兄より忠義の魂を忘れなと、御傳へなされて下されい。

梅園　氣遣ひせずと淨土の往生。

（ト灘六（第二の梅園中納言）走り出て、）

灘六　コレ旦那殿。此處にごんすか。

梅園（實は五郎時行）　シテ、將軍義滿が船は。

灘六　引船はいふに及ばず、元船も何もかも此濱から出てしまうた。コレおれが盗んだ寶のむきは。

梅園　皆、贋物で有らうがな。

灘六　エ、しけない奴ぢやて。

梅園　シテ船の手つがひは。

灘六　水夫の奴等が皆味方。風に任せて鳴戸へしかけ、岩に當つて打砕いてしまふ工面。

梅園　義滿其外の奴輩皆殺し。三品の寶を所持して居る。沈まぬ中に奪ひ取れといへ。

灘六　合點ぢや。

梅園　早く行け。

灘六　ハッ。（ト少々走り出て戻り、）コレ、一寸尋ねう。こなんとアノ德藏は双生兒ぢやげなの。

梅園　こりや。何にも云はずと早く。

灘六　イヤサ、双生兒強みに行く仕事。

梅園　こりや。（ト顏見て教へる。）

灘六　合點ぢや。

（ト向うへ走り入る。多度津一角聞いて、）

一角　ありや最前の贋勅使。

（ト梅園中納言、一角顏を見て、）

梅園　アヽ、味方に有れば一方のよい片腕、殘念には思へ共、生けて置いては妨け、人は最後の一念によつて性を引く。今の鴆毒も此笏に仕込み、身が配膳に入れし事も某が計らひぢやわやい。

一角　や、なんと。

梅園　梅園中納言勅使に來ると聞きしより、路に待受け打殺し、勅使となつて入込んだ。我を誰とか思ふ。相模入道高時が悴五郎時行とは某なるわい。

一角　ヤヽヽヽ。ナント。

五郎時行　父の仇高氏は逝去し、其子義詮の早引込み、義滿に天下を讓る。某これへ入込んだは、汝に誠の寶を出させ、腹切らしたる上、義滿を始め皆殺しにする舟の上、そちが主人も追付け、死骸は魚の餌食にする、悦べ〳〵。

一角　エヽさういふ事とは露知らず、むざ〳〵と腹切つたが口惜しやなア。

（ト大泣き。）

五郎　もがくな〳〵。義滿が舟は沖へ出で、あれ〳〵家中の引舟、順風と心得、おのれが身を消すとも知らず、ハア、行くわ〳〵。

（ト此臺詞の切れにて、破風の正面より二間の御座舟、幕打ち、武具共綺麗に飾り、宙乘にて子供大小をさし、近習が手の者大名舟百八丁押し切る體。南方棧敷の高欄浪幕になつて眞中の舟を引持ち、東西棧敷の幕、帆掛舟五艘づつ行く。此間場の上天井にて大勢の聲にて舟歌うたふ。二重舞臺の後へ筋違に上がる。懸りの塀浪板となる。一角跪いて、）

一角　（思入れ。）南無金比羅大權現、翼が有ればアノ舟へ乘せてたべ、其舟迄、船よなう。

五郎　（思入れ。）何ほう叫いても、もう叶はぬ。ハテ心よやなア。

（ト辰五郎走り出る。）

辰五郎　五郎殿〳〵、

五郎　あわたゞしい。何事ぢや。

辰五郎　イヤもう船頭の徳藏めが。

五郎　徳藏が何とした。

辰五郎　イヤもう、ねから亂騷ぎぢや。

（ト走りはひる。）

五郎　徳藏めがと言ひさして走つたは。

（ト遠攻になる。二人種々思入れ。）

兩人　あれは。

（トいふ所へ權太、思入れ、走り出て、）

權太　注進々々。（ト元の船頭のなりにて、）

五郎　注進とは。

權太　これ徳藏がいはれまする。聞けば五郎殿とは双生兒ぢやげな、折角お頼みなされたが、氣の毒なは、徳藏が船は一代破損するといふ事は無い。双生兒強味に頼みやつても、そつちは、こつちの邪魔をする水夫の奴等は皆海へさでこんで、ゆらり〳〵と將軍の舟は上方へ上します。舟のわれるを樂しむ人に傳言いうてやる。隨分舟はゆるやかに上方へ上すが、ようしたものか、おりや徳藏が手飼の水夫、柱舵の權太と云ふ者ぢや。コレよう顏見知つて置けよ。

（ト五郎ぎつくりと無念がる。）

權太　何ぢやい〳〵。（ト少し逃げるこなしにて、）これ、そこからにらましやましても、都の方へはとゞきませぬとけつかるわい。ハヽヽヽ。

（ト又無念のこなし。）

權太　こりや、徳藏が舟ぢや、破損さしてよいものか。あれ見よ、武將の舟はゆらり〳〵と上方へ上るわいやい。いかい阿房ぢやわやい。失敗をつた。わアイ〳〵〳〵。（ト指さし向うへはひる。）

一角　エヽ忝い、徳藏一人が千人力、是も偏へに權現の加護、エヽ有難い。

五郎　ハテ、殘念やなア。

（ト捕手大勢後へ出る。）

捕手　御上意。

（ト取卷く。多度津一角、五郎時行に切りつける。立廻り有つて、兩人見えになる。

ト前一面の浪幕假屋臺かくれる。）

（洲崎の體。此間やはり遠攻め、法螺貝太鼓すさまじく。ト灘六、敎善法師、辰五郎三方より出て、行きあたる。）

灘六　叔父御樣。

敎善　灘六。

辰五郎　何とマア、徳藏といふ奴は偉い奴ぢやないか。

敎善　こつちへ味方の水夫の奴等はすつきり、皆海へさでこんでしまひをつ

た。
灘　六　おれも買物摑んで勅使一ッ棒にふつた。
辰五郎　アノ太鼓鉦では。
灘　六　親方には逃げたかいなア。
敎　善　あのしぶとい奴が、めつたに手延びはせぬ。こりや灘六、われは水練の名人、あの舟の着場を見かけ、寶を奪取つて、直に海へ飛込め。落つく處は淡路島大領が館へ。（ト囁き、）
灘　六　合點ぢや。
辰五郎　又失敗らさ、えいが。
敎　善　水の底は彼奴が得物。何ほう徳藏でも、海へ入つては石佛。氣遣ひない。
辰五郎　何を、私が徳藏は偉い奴ぢやというて置くのに。いや又、此やうに蛤な事はない。
敎　善　サアおれもそれで思出した。昨夜屋敷で相模五郎ぢやと云うて、何もかも打明けて、手つがひをいうて聞かしたが、今で思へばそれが徳藏であつたかい。
辰五郎　それでなうて、此様に物事がくづれるものぢやない、エヽ埒もない。
（ト象潟姫逃げ出る。）
象潟姫　龜次郎様いなア〳〵。
（ト敎善法師取卷く。）
敎　善　こりや、してやつたわ。
象潟姫　ヤアお前は叔父御様。（ト振切り〳〵）
敎　善　どつこい。惚れぬいて居るによつて、大領へ貰ひにやつたれども、はね廻りて從はぬ。これからおれが引擔げ、いんで女房にする。サア來い。
（ト豐姫走り出で、象潟姫をかこふ。）
豐　姫　寄りやつたら、爲にならぬぞ。
辰五郎　ヤア、拙者が喰物がちやつと到來いたした。序でに引擔げう。
敎善 辰五郎　サア。
（ト豐姫象潟姫二人を兩人して連れて行かうとするところへ、權太向うより走り出で、二人を取つて投げ、）
權　太　これ、殿様なら大方此道ぢや、早う〳〵。
豐姫 象潟姫　合點ぢや。
（ト兩人向うへ走り行く。敎善法師辰五郎行かうとする。權太立塞がり、）
權　太　どつこい。さうはさせぬわ。伯父でも侍でも何でも十九文ぢや。覺悟ひろけ。
辰五郎　伯父御、こいつは徳藏が水夫の奴。大抵の奴ぢやない。ぬからぬ様に、これ、こいつからしまうて取らう。
敎　善　如何にも、出かした。おれは思ふ仔細も有れば、身共は逃げる。われ一人働け〳〵。
（トいひ〳〵橋懸りへ逃げてはひろ。これ

これと辰五郎行くを權太引きのけ、)

權太　どつこい、きやつは後へ廻して、おのれからしまうてやる。覺悟ひろげ。

辰五郎　さうぬかしや、もう。

(ト切つてかゝる。是より兩人樣々面白き立種々有つて、詰まり、向うへ逃げてはひる。權太追へはひる。やはり攻太鼓。向うより山名巴之丞大館勘解由追放なり、舟上りの態にて行くべし。わやくいうて出て、本舞臺へ來て、)

巴之丞　なんで上げをつたいなァ。

勘解由　舟番所の切手がなかつたか知らぬ。

巴之丞　さうして、あの鉦太鼓はなんぢやいなァ。

勘解由　鹿狩でもなし、龍宮で迷ひ子を尋ねるのかいなァ。

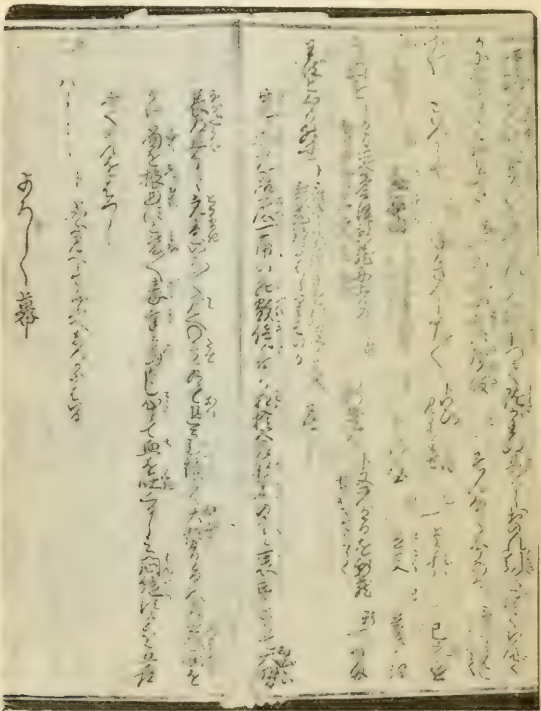
巴之丞　今逃げをつたやつは、確かにさうぢやと思うたが。

勘解由　さればいなァ。

巴之丞　此處が讃岐の丸龜ぢや。

兩人　マァ一服せうかい。

(ト兩人火打つところへ、橋懸りより龜次郎走り出て兩人に行當り、三人悔りする。檜垣せり上げにて出る。アイタ、、、と云うて、)

兩人　ヤアわれは。

龜次郎　巴之丞。
勘解由　龜次郎か。
巴之丞　檜垣。
龜次郎　勘解由。
（ト此うち多度津新藏、船頭のなりにて一升徳利をさげ、かくし出づ。）
新藏　龜次郎樣。
龜次郎　新藏か。（ト顔見合せ。）
檜垣　殿さん。
龜次郎　太夫。
勘解由 巴之丞　檜垣か。うぬ。
（ト龜次郎にかゝるを、新藏立廻りにて留まり、）
檜垣　龜さん。
龜次郎　太夫。おぢや。
（ト手を引き二人はひる。それをと行かうとする。新藏立廻りあつて、徳利にて兩人の頭を割る。）
新藏　こゝかまはずと御座りませい。
（ト檜垣、龜次郎向うへ走りはひる。兩人行かうとする。新藏引留め、立廻り種々有つて、兩人を當て、向うへ走りはひる。兩人起きて腰をさすり〳〵、向うを見て、）
巴之丞　檜垣やい。アイタヽヽ。
勘解由　龜やい。イタヽヽ。
巴之丞　檜垣やい。アイタヽヽ。
（ト兩人をかしき身ぶりにて、腰抱へ向うへはひる。）
（ト道具元へ戻る。浪幕切落す。段々に屋臺二重舞臺前へ下りる。橋懸り塀に成る。棧敷の前も元の通りとなる。二重舞臺にて立居る。捕手大勢長道具にて取卷き居る見え。）
大勢　やらんぞ。
（トこれより皆々下へおり、これより大勢長柄の立有つて、皆々橋懸りへ追込み、身つくろひして向うへそろ〳〵行かうとする。ト橋懸りより中通四人捕手凜々しき形にて十手持ち出る。舞臺に忍び居る。ト五郎向うへ行かうとする。捕手後より行かうとする。五郎が後へ心付ける。捕手驚き控へる。五郎が裝束の白き所を引下げ切つて、鴆毒の口へかゝらぬ樣に頬冠して、そろ〳〵行かうとする。捕手一人つか〳〵と行く。）
捕手　やらんぞ。
（トかゝる。五郎ふりかへり、笏を上げる。捕手たぢ〳〵と本舞臺にこける。）
捕手大勢　やらんぞ。
（ト大勢行く。五郎笏振上げる。ト、ウンさ皆々舞臺へ戻り、一時に血を吐きこける。）
五郎　ハヽヽヽ。
（ト五郎、皆々こけるを見て大笑ひにて、拍子よく、）
幕

三段目

一家主鹽太
一桶底の市本名安來市平　傳藏
一山名郡領　勘左衛門
一六郎兵衛孫おでん　新之介
一飛脚早助本名浪助　金才
一鐵火の七兵衛本名巴之丞　岩五郎
一白子の六兵衛　彦四郎
一すかし庄六　吉治
一德藏女房小汐　大吉
一船頭德藏本名多度津新藏　大五郎
一相模五郎時行　歌右衛門
一仕出し　大勢
一駕籠　二挺
一侍　大勢

造り物。濱邊づたひ、向う遙かに浪幕、前蘆原にて並木の森。在郷唄にて幕引く。

（主人桶底の市富屋の形にて富の箱を振つて居る。鐵火の七兵衛古き編笠着て蜜柑籠二ツ三ツ重ね、其上にて獨樂の胴を取つて居る見え、旅人仕出し大勢出る。）

侍　サア歌右衛門に大五郎ぢや。

鐵火の七兵衛　ヤア欲の慰み壽命の藥。簑よ笠よ〱。

仕出し一　おりや、久米太郎にせう。

侍　サア、マア一枚ぢや。小川吉太郎はどうぢや。

仕出し二　玉と鍵ぢやぞ。

皆々　サア勝負ぢや〱。

桶底の市　鼠、やんわりと銜へてごんせ。

（ト鼠札を銜へ出る。）

仕出し一　そりや久米太郎ぢやわ。

（ト喜び菓子を銜へはひる。）

仕出し二　よいか。サア手を離したり〱。勝負〱。（ト獨樂を廻はす。）

七兵衛　槌が明いたり。

仕出し二　アヽマアあつたら錢をせしめられた。

仕出し一　まん直しに上燗なと引つかけて往なう。

皆々　サア御座れ〱。（ト皆々連立ちはひる。）

桶底の市　サア買はんせ。姉川大吉に市川吉太郎ぢや。

七兵衛　玉よ鍵よ簑よ笠よ。（トいひ、あたりを見廻し、）皆散つてしまうた。

桶底の市實は市平　若旦那。

七兵衛實は巴之丞　市平。（ト向うへ出る。）

市平　これ程の人立の中にも居りませんで。

巴之丞　この様に毎日姿をやつし、人を寄せる商賣の思付きも、何卒檜垣めを

手に入れんため。此間噂を聞けば、龜次郎もろとも、この邊りへ入込みしと聞いたる故。

市平　毎日出かけても、似た人にも會はぬといふは、どこぞへ埋んだに極まりました。

巴之丞　サア早う檜垣に會ひたいわいやい。

市平　御尤もながら、龜次郎と一所なれば、所詮尋出してからが、めつたに從ひは致しますまい。

巴之丞　イヤ會うた時には、ついとてしみますやうの工夫は身が胸中に有るてや。

（ト此うち、親、山名郡領黑裝束にて侍大勢出る。）

郡領　忰色紙は手に入つたか。

巴之丞　ヤア親人樣。御覽の如く主從共身をやつして詮議致しますれ共、龜次郎も未だ手に入りませんてや。

郡領　ヤアまだるい／＼。先達て當處へ入込んだとの訴人故、間者を入れ聞合せたる所、當國の村端、德藏と云ふ船頭めが方に隱れ忍ぶ由。篤と處の庄屋に申付け置いたれば、追付け兩人共籠中の鳥。先づ何よりは色紙を奪ひ取る思案ないか。

(ト相模五郎浪人の形にて後へ出で聞いて居る。)

巴之丞　イヤ、其儀は御氣遣ひなされな。色紙の儀は鎌倉へ差上げるとの風聞。拙者が存よりも御座れば奪取つて差上けませう。其代りに傾城檜垣めは私に。

郡領　又馬鹿を盡す。それ故に鎌倉にて不覺を取つても、懲りもせずたわけを盡くす。合點が行かぬ。

市平　若旦那。檜垣は後の事。先づ色紙が肝腎で御座りますぞえ。

巴之丞　ちと存寄りが御座れば、アノ松蔭の茶店に暫く御待ち下さりませう。

郡領　又碌な思案では有るまい。

巴之丞　いえ〳〵、きつと吉左右申上げませう。

郡領　シテ軍用の金子は。

巴之丞　これに御座りまする。(ト財布を出し見せる。)

郡領　まだしもの心掛。待つて居るぞよ。家來供せい。

巴之丞　追付けで御座りまする。

(と侍つれ橋懸りへはひる。)

巴之丞　市平、船頭徳藏方の婆めは。

市平　れその友達で御座りますて。

巴之丞　よし〳〵、其方は徳藏が方へ、なア。(ト囁き。)

市平　ハア。

巴之丞　いけ。

(ト唄になりはひる。相模五郎後を慕ひ、巴之丞思案して隱れ、向うより早助飛脚の形、刀の鞘に箱を括付け、走り出る。)

早助　エイサツサ〳〵。コリヤ渡守渡守。

(ト呼ぶ。茶屋店より男一人出る。)

男　もしこの渡しは七ッ限で、もう渡守は居りません。

早助　なんだ、この渡しは七ッ限ぢや。イヤ憎つくい奴の。大切なる方の色紙を持つて通るに七ッ限ぢやというて、明日迄こゝに待つて居らるゝものか。刻限が延びるが最後、痛い腹切らにやならん。渡守がをらざ、うぬ渡せ。

男　これは迷惑。なんぼ御用ぢやというて、渡守がをらぬのに私が渡す事はなりませぬ。

早助　そんなら早く渡守を呼んできろ〳〵。

(ト喧しういふ。この中、船頭徳藏褞袍に一本さし、顏かくし聞いて居る。)

男　それでも渡守の處迄半道ばかりも御座りまする。

早助　半道でも一里でも早く呼んできろ。遅いと御用の妨げ、手はみせぬぞ。

(トそり打つ。)

男　そんなら呼んで參りましよ。

(トはひる。巴之丞出て聞いてゐる。)

早助　アヽせう事がない。一服せうか。
（ト火を打ち、煙草のむ。此間船頭徳藏そつと出て箱を取り逃げうとする。早助見付け。）
早助　ヤイ〳〵。そりや何する。
徳藏　イヤ、それやこれは。（トもぢもぢする。）
早助　胡散な奴の。うぬ、此箱に手をさへてなんとひろぐ。
徳藏　イヤなんとも致しませぬ。
早助　それになんで手をかける。
徳藏　サ、これは、ハヽ、何で御座りまする。今承りますれば、何やら大事の物ぢやと仰しやるによつてそれで一寸。（ト又箱へ手を掛ける。）
早助　ハテ、さてはわいらが見ては胡椒丸呑み、合點の行かぬことだ。大切な物を、手さすな〳〵。（トいひ〳〵片付ける。）
徳藏　へヽヽ、サアわたしも今でこそこの様な姿でこそあれ、往古は京家の武士と、サ申しますれば其身の恥で御座りますれど、堂上方にをりまして、不斷名筆名歌の類を見覺えでをりまする故、かく大切な色紙や短册などの類は見たう御座りますてや。
早助　なんだ。おぬしも以前は堂上方の公卿侍であつたか。
徳藏　さやうの者で御座りまする。
早助　成程、見た所が良い恰幅だ。大方若氣の至り、祇園縄手宮川町へ打込んだといふやうな事か。
徳藏　面目次第も御座りません。
早助　それは幸ひぢや。（ト傍りを見廻し。）幸ひあたりに人もなし。云うて聞かさう。何を隱さう、身が旦那は。
（トいふうち、徳藏右の箱をそつと取り、いかうとする。）
早助　待て、最前より其色紙に手をかけるは合點の行かぬ。うぬ、こりや盜賊物取だなア。
徳藏　良い推量。仔細あつてかやうかやうの身とは成つたれ共、以前は東國に由有る者、何卒立身出世の手掛りをと、諸國を徘徊する時しも、此色紙の樣子を聞いたるこそ天の與へ、身が手より鎌倉へ差上げ、立身出世の種とする。此方へ渡せ。
早助　イヤのぶとい奴。己れが立身するうち、身が此手は遊んで居ようか。妨げすると打放すぞ。
徳藏　へヽヽ。ヤヽうぬが打放すうち、此手は何をしてゐよう。早くこつちへ渡せ。
（ト箱を引合ふ。此間巴之丞種々あせる。）
早助　さうぬかしや、もう。
（ト切掛かる。立廻り有つて早助を切殺

し、前なる泥へ打込み、上るを留めさし。）
徳藏　不思議に手に入りし色紙。（ト見て）忝い。
（ト懷中。往かうとする所へ、家主町人棒を持ち出る。）
家主　ヤア此處にをるわ。逃すな〳〵。
（ト取卷く。）
徳藏　これは御家主樣、なんで私を手籠めになされる。
家主　なんでもこりや、やい、お主が此村へ來てから、喧嘩口論の立引役の臺詞、何をさしても四も五もくはぬ天晴な男と見込んで、内外の世話をして懇にした。そこを付込んで百兩の無心。幸ひ御代官所樣へ納まる年貢の金を百兩取替へて貸したぞや。
町人　ソレ〳〵、日限になつても戻さぬによつて、催促をすれば明日の、晩の、と云延ばして、擧句の程に諸道具賣拂つて家出しやつたでないか。
家主　ヲヽ、さうぢや、これは慘いと呆れ、何處をあてなしといふて代官所の年貢を納めぬと村中は入牢。サア言譯の爲ぢや、われを代官所へ引摺つて行くのぢや。おぢや〳〵。
徳藏　段々御尤もで御座ります。といふて此處に金はなし、代官所へ連れて行かしてからが、ほんの腹癒やするといふ分の事、何の役にも立ちませぬ。幸ひ今ちつと金の手掛りに取付いた事もあれば、永うとはいはぬ。明後日迄。
町人　其口上、古い〳〵。
家主　明後日迄出來るが本の事なら、その斷り代官所へ云や。
徳藏　ぢやというて代官所へはどうも。
町人　貴樣も美事怖い事は知つて居るの。
家主　往かれざ、百兩今請取らう。
徳藏　サア、それは。
家主　サア、なくば代官所へ。
町人　いつそ棒責めにして連れていけ〳〵。
（ト口々喧しういふ所へ巴之丞出る。）
巴之丞　イヤ皆の衆、待たつしやれ。
家主　なんぢや、挨拶ならきかんぞきかんぞ。
巴之丞　イヤ挨拶でも詫るでもない。
町人　そんならなんで御座る。
巴之丞　さつきにから聞いてゐるところが、段々貴樣達のが尤もぢや。男づく、貴樣は埒もない。代官所の年貢と云や大切な事ぢや。きり〳〵濟ましてしまやいの。
徳藏　こな樣は誰ぢや。其濟ます金があれば、此斷りは云ひませんわいの。
巴之丞　その持つてゐる金で濟ましてし

まやいの。

町人　今、そんならあいつは金持つてゐまするか。

家主　金持つてゐながら濟ますまいとは横着者めが。

徳蔵　ア丶これ〳〵、マア待たんせ。イヤ、こな和郎は要らざる横合から出て、かけもかまはぬ事を、樣々の小水いやる。おれがこの姿でゐて、なに金があるもので。

巴之丞　イヤずんと金がある。

徳蔵　そりやまたどうして。

巴之丞　立替へてやらう。それ百兩。

徳蔵　これは。

巴之丞　急な所ぢや、難儀を見かけて立替へるは。男づく、マア濟ましてしまはつしやれ。

徳蔵　忝い、そんならちつとの間借り替へさ。御家主様、受取らつしやれ。

（ト財布に手をかけろ。巴之丞ぢつとおさへ、）

巴之丞　待ちや、此金の質おこしや。

徳蔵　此金の質とは。

巴之丞　それ、たつた今飛脚をすつぱり、どつさり。

（ト徳蔵思入れ、巴之丞仕方し、）

巴之丞　ナア着服しやつた物を、其質が、預いたい。

徳蔵　すりや今のを。

巴之丞　いかにも。

徳蔵　知つてゐるからは是非に及ばん。といふもの丶、此質ばつかりは。

巴之丞　ならぬか。

徳蔵　これぱかりはどうも。

巴之丞　あのこれ、貴様前先の見えぬ和

郎ぢやぞや。百兩の金がなければたつた今、代官所へ往かにやならんでないか。其故、御用の飛脚をすつぱりどつさり、知れるが最期、れそが飛ぶぞや。但し西向に成つても其質は放さぬか。マア、とつくりと思案して見やいなう。

德　德　成程此質預けう。

巴之丞　合點がいたか。

德　藏　その代りに、金が調ひ次第此質が。

巴之丞　戻さいでわいの。

德　藏　必ずさうぢやぞや。

巴之丞　呑込んで居る。諸事胸中にあり〳〵。

德　藏　そんなら望みの質物。

巴之丞　金と引替へに。

（ト双方取りかはし、）

德　藏　サア御家主。金戻します。

家　主　金さへ請取りやよい。

町　人　嬉しや。取り惡い金が手に入つたわ。

家　主　皆大儀ぢや。サア御座れ〳〵。

（トわやわやいうて橋懸りへはひる。）

德　藏　終に會うた事もないに忝うごんす。したが今もいふ通り、金さへ出來たら、必ず其質は。

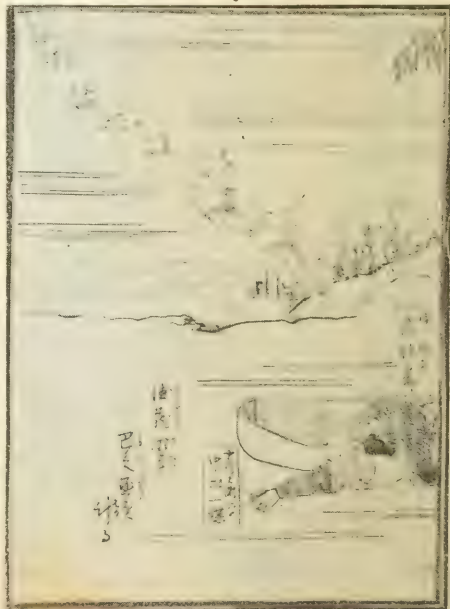
巴之丞　ハテ、念に及ばぬ。こつちにあつて要らぬ物。

德　藏　シテ、こなた樣の名は。

巴之丞　鐵火の七。

德　藏　坊は。

巴之丞　此松原の出ばなれ。貴樣の名は。

德　藏　柿の木金助と尋ねれば、隱はごんせぬ。

巴之丞　柿の木金助。
德藏　鐵火の七兵衞。
（ト兩人思入れあつて、）
兩人　そのうち會ひませう。
（ト相模五郞、德藏はひる。暮六ツの鐘うつ。）
巴之丞　まんまと首尾よう。
郡領　約束の暮六ツ。
巴之丞　御望みの歌仙の色紙。（ト右の箱を出す。）
郡領　でかした。（ト開き見て不審の態。）
巴之丞　相違御座りませんか。
郡領　これが歌仙の色紙か。
（ト巴之丞取り見て、）
巴之丞　なんぢや。女の腰氣、月瀲、桐の臺の紋。コリヤなんぢや。（ト恟り。）
郡領　たわけめが。碌な事は仕出かさぬ。おのれにかゝり餘程の暇いり。面を見るも無益しい。七生迄の勘當ぢや。
巴之丞　それは又。（ト引きとめる。）
郡領　きり〳〵、立つてうせう。
（ト蹴飛す。巴之丞ヘツトうつむく。）
郡領　これより直に庄屋が方へ。家來參れ。（ト侍連れはひる。）
巴之丞　ア、これ、申し。
（ト唄になり、巴之丞右の書付見て、）
巴之丞　女腰氣、月瀲、えらい胴脈をつかましをつた。せめて手掛の所書でも、（見て、）所は高津高井の內、（尻からげ、）あんまり阿房らしいわい。
（ト唄になり、向うへはひる。船頭德藏そろ〳〵戻り、右の町人家主後より附き出る、皆々顏見る。）
皆々　德藏殿。
德藏　シイ。（トあたりを見て、）皆大儀であつた。それ酒代。（ト一兩宛はふる。）
皆々　エ、忝い。又よい仕事が有れば知らせて下さんせ。（ト連立ちはひる。）
德藏　まんまと百兩忝い。（ト頂き、泥舟の底へ行き、）奴浪助。
早助 實は浪助　ナイ。（ト泥舟より上り、）お旦那。飛脚の仕內は。
德藏　出來た〳〵。
浪助　大方それで。
德藏　九百兩。
浪助　追付け千兩の都合。
德藏　又よい事があらば。
浪助　おしらせ申しませう。
德藏　網をはれ。
浪助　合點ぢや。
（ト双方へ別れる。在鄕唄になる。向うより白子の六兵衞在鄕親爺のなり、駕籠につき出る。下座の方より駕籠を出し本舞臺にて駕籠ども行き合ふ。）
駕籠　庄六。替へんかい。
すかし庄六　なんぼうつぞ。
駕籠　やみぢや。

庄　六　滅相な。たかでまたけの仕事に
やみ打つてたまるもんかい。
駕　籠　そんならはり打て〳〵。
庄　六　えいは、おろせ。
（ト双方おろし。）
駕　籠　親方、替へましてごんす。
白子の六兵衛　通しの約束を變へるかいの。
駕　籠　暮方の仕事。かへぬと勝手が悪うごんす。
六兵衛　ハテ、得手勝手な事ぢやの。サア姉よ乘替へ〳〵。
（ト駕籠のたれ上がると、六兵衛孫おでん在所娘のなりにて出る。）
おでん　祖父さん、又乘替へるのかえ。
六兵衛　ヲイやい。
おでん　お前もしんどかろ。ちつと乘らしやんかいなア。
六兵衛　イヤ〳〵。おりやまだ三里や四里は確かぢや。最早日が暮れる。氣が急くによつてわれをそろ〳〵をらかしては、埒が明かぬ。サァちやつと乘替へ乘替へ。
庄　六　これは親方寝てぢやさうな。申し、旦那〳〵。駕籠替へまして御座りまする。乘替へさしやつて下さりませい。
（ト起す。侍も欠伸しながら、駕籠より出る。）
侍　よう寝てゐる所を起しをつた。どれへ乘るぢや。（ト欠伸しながら。）
庄　六　ハイ、あの駕籠へお召しなされませい。
侍　急ぎの用だ。早くやれ〳〵。（ト現のやうに乘替へる。）
駕　籠　オゝ、あけるぞ。
（ト舁き、急ぎはひろ。後におでん駕籠へ乘らうとして刀をみつけ、）
おでん　これ祖父様、駕籠の中にこんな物があるぞえ。
六兵衛　オゝそれや刀ぢや。エゝそんなら今の御侍が夢中で忘れていかれたのぢや。目が覺めたら尋ねう。命と釣替への扶持方棒を忘れたとは、粗相な和郎ぢや。
おでん　どうぞ早う戻して進ぜさんせいなア。
六兵衛　合點ぢや〳〵。これ侍殿。何といふやら名を知らんによつて、コリヤ、ヤイ〳〵、雲霞に舁いて行きをる。いか様、蜘蛛とはよう付けたぞ。とんと蜘蛛の子を散らすやうな。雲助といふ者はエゝ達者なもんぢや、オこりや、許しやれ〳〵。
おでん　祖父様、父様の處はまだ遠いかえ。
六兵衛　イヤもう一里ばかりはかない。

サア駕籠の衆。早うやつて下され。
庄六　アイ〳〵、サア棒組、上げるぞ。
（ト上げ、思入れあつて、）オヽしまなもんぢや。
駕籠　ホンになア、この筈ではないか。
庄六　オヽ確かに有るぞ〳〵。
駕籠　マア、おろせ〳〵。もう日も暮れるし、親方、ナント一杯飲まして下んせんかいの。
六兵衛　又かいやい。
庄六　わしや、たつた今かへやんした。
六兵衛　ほんにさうぢや。ハイ、呑込んでゐる。早うやらつしやれ。
庄六　いえ〳〵、今貰ひたい。
六兵衛　今か、酒代を先取りとは。よいは、どうなとせい。それ〳〵六文づつ十二文か、そんだい早うやつてもらうぞ。
庄六　アノ、たつた十二文かい。
六兵衛　高が六十の駕籠代に十二文は過ぎ位ぢや。
庄六　棒組、聞いたか。
駕籠　笑止やな。
庄六　幸ひ傍りに人もなし、いつそ、手短かに消して仕舞うかい。
駕籠　さうせい、〳〵。
庄六　これ、親仁どの。
六兵衛　なんぢや。
庄六　これ、二人して息せきはつて、たつた十二文等のめくさり銭貰ふ柄かい。
六兵衛　そんなら、なんぼ程欲しい。
庄六　なんぼ程とて、こつちから値はせぬわ。これでよささうなものぢやと思ふ程欲しい。
駕籠　ヲヽ貰へ〳〵。

(トきつといふ。六兵衛思入れ。)

六兵衛　こりや足弱を連れたと思うて强請るのか。十二文の錢ぢやとてたゞは出ぬぞよ。よつぽと此間は錢も出たによつて一歩八九厘あるぞよ。

庄　六　ヲ、それほど欲しか和御料にこまさう。(ト打付ける。)

六兵衛　もう堪忍ならぬぞよ。

庄　六　堪忍ならぬとてどうする。

駕　籠　いつそ、こちから。

(トかゝる。少々立廻り有つて、)

おでん　祖父樣怖いわいなう。

六兵衛　だんない。何も怖い事はない。總體うぬらは女子足弱と見ると强請りて取るけな。年寄ぢやと思うて見るのか。年は寄つても白子の六兵衛ぢや。おのれら一人二人、こりやお茶の子でけつかるわいやい。(ト足ふみ。)

庄　六　こりや棒組。此處に構はずと、女郎めを片付けい。

駕　籠　合點ぢや。

(トおでんにかかる。)

おでん　アレ〳〵。

(ト逃げるを無理に引付ける。)

六兵衛　こりや、何しをる。

(ト引退ける。おでんが財布を引出し、)

庄　六　ヤアしつかりと有るぞ。

(ト取らうとする。六兵衛引のけ、)

六兵衛　どつこい。それやつてたまるものかい。

庄　六　見かけに似合はぬ大枚の金。所詮素直に渡すまい。いつそかたづけてしまへ。

駕　籠　合點ぢや。

(ト息杖にて打ちかける。六兵衛立廻りのうち、おでんを駕籠に入れ種々ぜゝて手

に餘る故刀を拔くと、兩人逃げる。六兵衞追つて行く。おでん駕籠より出て、うろ〱として。)

おでん　祖父様いなう〱〱。

(ト尋ねる所へ、庄六引返へして出る。)

庄　六　こりや、してやつたぞ。(トおでんを捕へる。)

おでん　あれ〱。

(トいふを口をおさへ、財布を引出さうとする所へ、船頭德藏出る。庄六を見事に投げる。)

庄　六　アイタヽヽヽ。どいつぢやい。(ト起きて、德藏を見て、)ヤイ、うぬはかけもかまはぬ所へ出さばつて何ひろぐのぢや。

德　藏　イヤ、何もせぬ、可憐さうに小さい子を惨いめに合はすによつて、一寸引退けたがなんだ。

庄　六　すりや、何もかも聞いたか。

德　藏　あちらからこちらへ突拔けだ。

庄　六　それ聞いたら、もう是非に及ばん。

(トかゝるを、さんざ〲投げ、脇差拔くと逃げてはひる。)

おでん　どなたかは存じませぬがいかいお世話。忝う御座んす。

德　藏　ヲヽ利巧な事よういやつたなう。さうしてわが身はつれはないか。さうして日も暮れたのにどこへ行くのぢや。處をいや、送つてやるわいなう。

おでん　サア私が行く處はな。

德　藏　なんといふ處ぢや。

おでん　あつちぢやわいな。

德　藏　あつちというては知れぬわいなう。

おでん　此處に一里ほどある處ぢやといな。

德　藏　なんぢや。あつちぢや。わが身の行かうと思ふ方へ行きや、おれが送つてやるわいなう。ぢや若し懐に處書でもないか。

(ト懐に手を入れ財布を引出し、)

德　藏　こりやなんぢや。

(トおでん恟りし、懐へ入れる。震うて居る。)

おでん　これや金でもなんでも御座んせぬ。

德　藏　アヽ今の奴らがこれでぢや。(ト思案して、)これもう、日も暮れる。そんな物持つてゐると、また今のやうな奴が來て怖いぞや。おれに預け置くと。

(ト取らうとする。)

おでん　いえ〱。もう送つて貰はいでも大事御座んせぬ。

德　藏　ハテ悪い合點ぢや。(ト取らうとする。)

おでん　あれ〱。

（ト逃げるを徳藏種々あつて追ひかける。此間に蘆原を引出す。女房小汐やつしの形、小提燈さげ出る。此間徳藏おでんを追へ立廻りにて、一刀に伏せて取付く。）

おでん　どうぞ堪忍して下さんせいなう。

徳藏　これ、こゝを聞いてたも、お主の爲に定る金。ちつとの間ぢや、貸して呉れいよ。

（ト立廻り有つて、おでんに止刺す。財布を取り、女房小汐後よりずつと出る。）

小汐　ヤアこちの人。

徳藏　女房どもか。

小汐　又かいなう／＼。（トいひ／＼小提燈を落しふるひて）

徳藏　これ、マ、誰ぞ來るか、傍りへ氣をつけい。

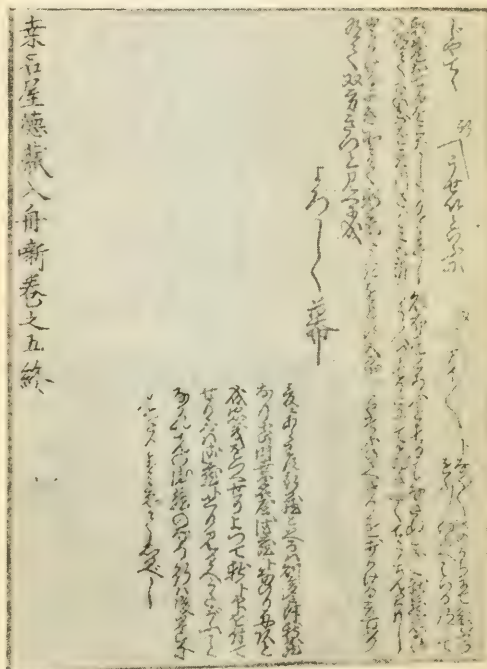
小汐　來るやら來ぬやら、眞暗うてなんにも見える事ぢや御座んせぬわいなア。

徳藏　南無阿彌陀佛。（ト抉ぐる。）

小汐　いかにお主の爲ぢやとて、毎晩毎晩幾人ともなう、むごたらしい。ど

こゝでは、此身に報はうかと思へば。（ト泣く。）

徳藏　何をぐづ／＼。わりや早う往んで茶でもわかしておけ。

桑名屋徳藏入舟噺巻之五終

小汐　いやもう茶も水も呑むもんぢやない。可憐(かわい)さうに。

徳藏　きり〳〵うせぬか。

小汐　いかに忠義ぢやというて、毎晩毎晩、幾人ともなう。誰あらう多度津新藏ともいはれる武士が。

徳藏　こりや、おのりや夫の訴人(そにん)するか。人が聞くがや。

小汐　アイ、そんならお前もサア一所に。

徳藏　早う往かうてや。おのりや後から行く。

小汐　アイ。（ト後向き、手を合せて拜(をが)み、暗き思入れにて向うへ走りはひる。）

（ト相模五郎小提燈提げ出る。徳藏死骸片付け、腰の鞘を尋ねる。無き故抜身にてそこらを尋ねる。暗い思入れ、相模五郎提燈さしつける。徳藏切落し行かうとする。相模五郎蛇爪(じやきう)の鎖を打ちかける。徳藏切る。半分肩に殘る。相模五郎反(そ)り打つ。徳藏片手にて尻からげる。兩人件(くだ)りの見えにて。

幕

四段目

一姑お苫　久五郎
一山名郡領　勘左衛門
一桶底の市本名安來市平　傳藏
一梶川主水　又太郎
一奴浪助　金才
一白子の六兵衛　彦四郎
一傾城檜垣　粂太郎
一徳藏女房小汐　大吉
一船頭徳藏本名相模五郎　歌右衛門
一船頭徳藏本名多度津新藏　大五郎
一桑名のお濱　吉太郎
一高丸龜次郎　吉太郎
一雇人　二人
一あるき　一人
一黒裝束　六人
一侍　大勢
一捕手

造り物。一面に平舞臺。赤壁、納戸に正面に小さき金比羅の神棚。橋懸り門口、幕のうちより男二人煤拂ひの形にて疊たゝき居る。姑お苫婆の形にて、徳藏女房小汐と長持を拭いて居る見えにて幕引く。

お苫　これ〳〵、もう二階の疊はよいか。

二人　イヤまだでごんす。

お苫　呑み喰ひするばかりで、たつた四五疊の疊をば、何してべらつくのぢや。

二人　ソリヤ又起つたぞ。

小汐　これは母様の、その様にいはしやんすな。あの衆は舟の上は自由にするけれど、家の事は氣轉が利かぬさかい。思ふやうに果がゆかぬわいなア。

お苫　同じやうに贔負するわい。アヽそれもさうかい。家内の煤掃きに雇人して、ぐつすりと裏の座敷に臥さつてゐる聟殿も有るものを。

小汐　徳藏殿は今朝から鹽梅が悪いというて寢てで御座んす。あの衆の手前も有り、あんまり其樣に喧しう云はさんすないなう。

お苫　イヤいはうわいの。あの徳藏は船へ乘るが大名人ぢやの。イヤ理窟よい者ぢやというて聟に取つた所が、こいつは先から先へ船で商ひに行くというて、一年に一度戻つたり二度戻つたり、それでも相應に金置いて行くによつて了簡して置いたが、到頭戻らぬ。聞きや、遠江灘で帆足に打たれたとやら、下の關で死んだとやら、そこで今の徳藏を聟に取つたのも、家がいけぬからぢや。

小汐　コレ、喧しい。いはしやんすな。それも私が、淫で入れたものぢやなし、お前が無理に入れさしやんしたぢやないか。

お苫　ヲヽ仲人する奴が今の徳藏を木に餅のなるやうにいうたによつて、われが後家立てる氣でゐるものを、無理にこじ付けた。一ト月立ち、一年立ち、がよかつたのか、つい孕んだぢやないか。十年の上も戻らぬ男を見越して、早う聟取つて、われが　甘い物を頰張らしたのは親の恩ぢや。

小汐　なに親の恩話。其子も家で育てさしたがよい。その氣ぢやによつて、父樣が引取つて在所へ往なんしたぢやないか。

お苫　そりや知れた事。喰潰しは家に置かぬが倹約ぢや。

小汐　サア、そんならそれはよござんすわいの。

お苫　ようないわいやい。聟に喰付いてわれが仲ようなるとそれからのさば

つて、船とては乘りに行かず、夜歩ばかりさらして、宵い中から離座敷に居て、内から錠　さぬばかり。何を喰ふか、物入　うて一切呑込めぬ。同じ樣に踊狂うて、極道めが。

小汐　何となといはしやんせ。連添ふからは男のいふ樣にせにやならぬ。

お苫　ヲヽわいら夫婦が勝手にせい。此煤掃を幸ひに離座敷を掃出して呉れう。サア來てくれよ。(ト行かうとする。)

小汐　待たんせ。面妖。此間は、離座敷〱と、ヤリヤ徳藏殿の居間ぢや、構はしやんすな。

お苫　船宿すりやこそ離座敷もあれ、わいらが寢る所に拵らやせぬ。皆來て下されく。

(ト小汐を突きのけ奥へ行かうとする。船頭徳藏納戸口より煙草盆提げ欠伸しながら出かける。)

徳藏　扨も〱よう寢た事。女房共、もう煤拂ひはしまひか。

小汐　アイ、大方片付きまして御座んす。

徳藏　皆大儀でえす。疊も片付けて下され。

二人　はい〱。

(ト片付ける。お苫氣味惡き思入れ。)

徳藏　女房共。離座敷は我身とおれと煤拂ひして置きや濟む事ぢや。

小汐　サア、わしもさう思うて居りますで御座んす。

徳藏　おりや一體煤掃は嫌ひぢやによつて離座敷へすつこんで居るが、母ぢや人、それを無理に離座敷へ行かうという奴は誰でごんすぞいの。

お苫　サアそれは。

徳藏　敷金を持つて十年の餘も家内を養うて居りや、どこからも小水は有り、そもないものぢやがなア、母ぢや人。

お苫　なんと御座るか。

男　サア、しやんとやけがとまつた。もうこちらも、往なうぢやないか。

徳藏　マア酒でも呑んで往なんせぬか。

男　イヤ〱さつきの握飯も、喧しいので咽喉に立つやうに御座ります。サア來い〱。

(ト門口へ出る。桶底の市と行違ひ、)

桶底の市　婆樣家にか。

男　ヲヽ家にぢや。

(ト云ひながら橋懸りへはひる。ト桶底の市外から顏を出し、小手招き、お苫ちやつと外へ走り出て、後を鎖す。徳藏　小汐思入れして戸口より覗く。)

桶底の市　これ、今の二人の奴の事に付いて。

お苫　これ。

（トいふなといふ思入れ、囁き合ひ、兩人連立ち橋懸りにはひる。德藏戸を明け、後を見送る。）
德藏　どうでも氣塞いな。マア奥へ御供しや。
小汐　アイ〳〵。
（ト奥へはひる。ト歩き一人出る。）
歩き　德藏樣。家にか。
德藏　三六か。なんぢや。
歩き　庄屋からお前に一寸來いといふてぢや。早う御座りませ。
德藏　なんぢや。又難船を救へといふ言渡しぢやらう。
男　早う御座りませ。待つてぢやぞえ。
（ト云捨てはひる。ト德藏表を鎖すと、どろ〳〵にて小汐、高丸龜次郎と傾城檜垣を連れ出る。）
小汐　今日は煤掃で、定めてお喧しう御座りませう。
檜垣　イヤ煤掃は喧しうもないが、お袋の喧しいので、それはびく〳〵とするによつて、おれ迄が氣が上るわいの。
德藏　何の氣の弱い。其樣な埒の明かぬ心で大名の奥樣になれるものか。私が居りまする。大船に乘つたと思うてゐたがよう御座りまする。
小汐　さうしてちつと檜垣樣の氣色はよう御座りますかえ。
檜垣　アイ〳〵。段々の御介抱で今日は大分心よう御座ります。
龜次郎　結句、おれはさうもないが、兎角あのやうに色が惡うてぐにや〳〵して居るわいの。
德藏　何を。大方あの病も、ようならうとすれば引戻し〳〵、お前の業であらう。
龜次郎　イヤ〳〵、さういやんな。おれも昨夜こつちから一寸も手を觸やせぬ。
小汐　昨夜迄は惡かつたぢやな。
龜次郎　イヤさうではないけれど。（ト頭かく。）
小汐　こちの人、聞かしやんせ。
德藏　いや、あの氣ぢやによつて、流浪のうち病が出ぬやうなものぢや。したが骸も身のうちぢや。お嗜みなされませ。
龜次郎　サアわしも今迄の事を思出して見ると、骸を金でしてもよう續いた。館の金を費ひ過してほんに今が懺悔ぢや。惡い事は覺え易い。アイ、辰五郎めがかうなされば金が出來る。かう工夫すれば金が取れると、あいつに半分づつ取られるといふ事は知らずに、厚顏しう百姓の家へ往たり、寺へ鳴込んだり、無理借に金を借つた。おれがでに、ようあんな事をした事ぢやと思ふ。何よりは金比羅御造營の千兩を費ひな

くしてそなたに罪をぬつた。皆檜垣の罪ぢやわいなう。

檜垣　それは皆私故にして下さんした科ぢやと思へば苦しさを推量して下さんせ。

徳藏　何を有つて過ぎし事をくど／＼と、これからは千兩の金を費ひなくなされたを償ひ、色紙を持つて歸京なさるやうに致しますてや。

龜次郎　サア、千兩といふ金が大抵や大方で調ふものかいなう。

徳藏　御氣遣ひなされますな。大方調ひました。

龜次郎　ヤア調うたか。

徳藏　女房昨夜ので、大方調うた。都合したわいやい。

小汐　夫婦の者が鬼になつて居るもの、調はいでなんとせうぞいの。

龜次郎　姉の呉羽樣が追放の時、そつと下された歌仙の色紙。之を以て家を立ていと、いはぬばかりの志。親は泣き寄りとよういうたものぢや。

徳藏　さて今日迄は離座敷に置きましたが、ちと仔細御座ります。御窮屈に御座りませうが、此長持へはひつて御座りませ。今日中には、又よい所へ置替へませう。

龜次郎　イヤもうどこに居ても大事ない。そなた衆の氣の休まるやうにしてたも。

（ト右の男走り出て、）

歩き　徳藏樣／＼。これはしたり、もう表を鎖いたかいなう。

（トいふ間にちやつと小汐は二人を長持へ隱くす。）

徳藏　おい／＼。（ト戸を開けて、）エヽ忙しない、何ぢやぞいやい。

あるき　なんぢやどころか。庄屋殿が遲いというて、大抵喧しい事ぢやない。サア今御座りませ。

徳藏　サア今行かうと思つて居る所ぢや。こりや、女房。其長持は煤拂ひでひつくり返へしたものぢやによつて婆樣はだんない、離座敷も見せて、又其後へ。イヤその間にや、おれが戻つて。

小汐　留守の事は氣遣ひさしやんすな。早う戻らしやんせ。

歩き　これ、待つてぢやわいなう。

徳藏　サア行くわいやい。

歩き　喧しいわいの。

（トいひ／＼、徳藏を連立ち橋懸りへはひる。）

小汐　どうぢややら今日はそは／＼と胸騷のする日ではある。こんな時は金比羅樣へ御燈明あけて氣を確かにせにやならぬ。

（ト神棚へ燈明をあげる。ト向うより相模

五郎船頭の形、頬冠りして、櫓柄に仕込みし刀を差し出で、花道に立止まり。）

徳藏（五郎）　榎から三軒め。此處ぢやな。

（ト本舞臺へ來て戸を叩く。）

小　汐　誰ぢや〳〵。

徳藏（五）　誰でもない。おれぢや。徳藏ぢや。

小　汐　こちの人か、早う戻らしやんしたなう。（ト戸を開ける。）

徳藏（五）　女房共。今戻つた。

小　汐　女房今戻つたとは。（ト合點の行かぬ態。）

徳藏（五）　男の顏を見忘れたか。わが男の徳藏ぢやわいやい。

（ト小汐顏をよく〳〵見て、）

小　汐　オヽほんにこなたは徳藏殿。

徳藏（五）　久しぶりで戻つたが、變る事はないか。

小　汐　どうしてお前は戻らしやんしたえ。

徳藏（五）　いやどうしてとは。行先き〳〵に、荷物が上が上へ成つて、此方へ來る日和はなし、北國廻り計りしてゐたてや。（トはひる。小汐思入れにて、）

小　汐　帆足に蹴られたの、死んだのといふ噂ばかりしたが、達者で居さんしたのぢやの。

徳藏（五）　そんな事もあらう。徳藏船といへば、荷主の心が丈夫なといふて、我一に積みかけるを外の船頭共が嫉妬にて樣々の噂をする。徳藏が船に破損が有つてよいものかいやい。

小汐　そんなら達者で戻らしやんして、今の徳藏殿は。

徳藏(五)　イヤもう、今の徳藏は荷主の受が、(ト表を眺め、思入れにて、)好いによつて、湊々には待つて居る。オヽ、十年餘も戻らぬが何も矢張その儘で有るわ。煙草盆寄こせ。

(ト小汐種々思入れあつて、煙草盆持ち行き、)

小汐　徳藏殿。さうしてお前、直に乘らしやんすかえ。

徳藏(五)　イヤ/\、ちつと用が有る。今度はゆつくりと家に居る心ぢや。汝も今度はゆつくりと抱いて寢る。悦んで居よ。

(ト小汐うろ/\と心の迷ふこなし。)

小汐　こりや、なんとしたものぢやらう。

徳藏(五)　いやその樣にうろつく程馳走せうと思ふな。一寸戻つたのぢやない。長う逗留する程に、馳走なら止めにせい/\。

(ト小汐うろ/\する。)

小汐　何の、お前、わが家へ戻らしやんしたのぢやもの、誰が分に馳走するものでいなア。(ト濟まぬ態にていふ。)

徳藏(五)　女房共。こりや近年に普請をしたな。

小汐　アイちつとばかり。

徳藏(五)　さうか。してどこもかも綺麗になつたよな。(ト方々見廻す。)ハテナアおれが綺麗好きぢやと思うて、ハテどこもかも味ようなつた。

(トいひ/\見廻し、思はず知らず、長持の傍へ寄るを、小汐恟りして前に立ち、)

小汐　その樣に思はんす程どこも普請しやせぬ。船宿するによつて、裏の離れをいらうたばかり。此所は前の通りぢやわいな。

徳藏(五)　ほんになア。見りや矢張前の通りぢや。十年の餘も戻らぬと、とんと住居が變つた樣に思ふ。おれとした事が。

(ト舞臺へ坐る所へ、梶川主水袴にて家來に臺の物持たせ、)

主水　船頭徳藏とはこれか。

小汐　徳藏とは此所で御座ります。何の御用で御座ります。

主水　然らば御免なされ。(ト中へはひる。)シテ徳藏殿はどれに居らるゝ。

徳藏(五)　徳藏、これに居りまする。

主水　其許が徳藏殿。

徳藏(五)　お前はどなたで御座りまする。

主水　イヤ、拙者石堂帶刀が家來梶川主水と申す者。其許へ仰せ渡さるゝ儀有つて遙々と伺候致した。

徳藏(五)　マア、お通りなされませ。

主水　御免なれ。（ト上座へ通り。）こなたの本名は讃州丸龜の家中多度津一角殿の弟。同名新藏殿で御座らうがの。

小汐　いえ〳〵、申しその德藏殿はこちらに。

德藏(五)　イヤ、成程。手前多度津新藏で御座る。女房、今迄そちにも本名は隱して置いた。身共が本名は多度津新藏といふ浪人ぢやわいやい。

小汐　お前も、ヤアみす〳〵な事を。

德藏(五)　みす〳〵とは。

小汐　それでもお前。

德藏(五)　われと夫婦にならぬ先の本名は多度津新藏サ。

（トいふ所へ、桑名のお濱子役のいやらしき女形、抱帶して。）

お濱　大きな榎から三軒目。一イ二ゥ三イ。此處ぢや〳〵。やれ〳〵、嬉しや。船頭德藏樣はこれかナ。

小汐　今日程人の來る日はない。誰さんぢや。

お濱　イヤ德藏樣に會へば知れる。桑名の者ぢやというて下さんせ。

小汐　德藏殿は今出られましたが、何の用で御座んす。

德藏(五)　ハテおりや家にをるわいやい。

小汐　サア、お前は家に居やしやんすわいな。

德藏(五)　それにマア留守ぢやとは。

小汐　イエサ、それは、マアちつと。

お濱　今の聲は確かにさうぢや。（トいひ〳〵中へはひる。）ヤア德藏殿。此所に居やんすか。會ひたかつたわいなア。

德藏(五)　われや誰ぢや。

お濱　われや誰ぢや。アノ女房を捕へて誰ぢやとは。

德藏(五)　何の事ぢや。

お濱　何の事ぢやとあのしら〴〵しい、わが身は〳〵ようそんな事がいはれるなう。（ト胸座持つて搖り突きはなし。）

德藏(五)　こいつは氣違ひか。なんぢや。

お濱　オヽ、氣違ひにしたからう。顏見てはちつと悔りであらう。こな樣が、アノ性惡の女房が、此處の湊に隱して有るお妾ぢやの。（ト胸座持つて又振廻す。）

小汐　これ　譯もいはずになんで御座んす。

お濱　何ともせぬ。わしや腹が立つわいの〳〵。

小汐　そんならお前は此德藏さんの女房か。

お濱　女房でなうちや、アノやうに白白しういはれると猶腹が立つ。そんな事でつい去られるやうな仲ぢやない。見りや御侍樣も居てぢや。芽藻屑云うて、わしが無理か尤もか、聞いて貰を。

小汐　その様に腹ばかり立てずと譯をいはしやんせいなア。

お濱　譯を聞いたら、こな様も、よもや他の男を寢取りやせまい。これ男。いふぞや〳〵。わしや幼さい時から桑名の在所に育つても、とゝ様やかゝ様が獨り娘ぢやと可愛がつて大事にかけ、十六の春迄も嫁入もさゝず、夜はとゝ様やかゝ様の眞中に寢さして、寢冷えせぬやうに袷を逆にはかして寢さしやんすによつて、身體の熱は強く、皮膚はさかんと成り、飯はよう喰ふ、蒸ては來る。こちの方では、わじを香々というて鼻つまむのは、あんまり〳〵好い香がするによつてぢやけな。わしが鼻へは餘り良い香のやうにも思はね共、人が惚れるはよく〳〵の事ぢや。それで餘り蒸立てるによつて、いやかう蒸せては、ひよつと　腐つて納豆になつたら好き嫌ひがあらうと思うて、濱へ出て風塡して居たれば、これからが戀の最中ぢや。なんぢやらわしが山犬が握飯見付けたやうに、船から上つて來て、乳見せいの、腹さすらうのと、擧句には耳の垢取つてやらうと、しなだれくつさる。わしや終に取つて貰らう事がない。いやぢや〳〵といふものを押へつけて耳の垢取られた。其痛さ、ひり〳〵するのを辛棒して居たれば、それからそろ〳〵

、　　　　、

、さらへて〳〵、というたりや、それ覺えてゐやんすか、こなんがいふには

。そなたの眞鍮の簪でそろ〳〵あしらうてやらうと、その一言が身に染々と愛くなつて、それから毎晩耳の垢をさらへて貰ふ。其氣味のよさ、身が縮み寄つてそこらぢうが一處へ寄る程可愛うなつて、とゝ様やかゝ様にいうて、すぐに入聟にして、一年立ち二年立つうち、ふつと船へ往て戻らず、待つ程に〳〵、たうとう下地の納豆になりさうな。コリヤ、どこぞの女の耳の垢をさらへて居らるゝぢやあらうと思へば、ほんに〳〵嗔恚の炎で　焦けつくわいの。丹後屋船の水夫の衆に問へば、其德藏は方々に女房がある。そりや、どこ〳〵の湊か掛場ぢやと委しく聞いて、マア一番に此處へ來たのぢや、案の定、よう此樣な可愛いらしい女房の處へはひつて居やるなう。これ程迄に戀慕ふわしを知らぬ顏して、いなさうとはそりやあんまり胴慾ぢや〳〵わいなう。(ト泣く、此臺詞の中、德藏(五郎)を振廻し、いやらしきこなし)

德藏(五)　聞けば聞くほど外聞の惡い。

（ト氣の毒なる態。）

小　汐　段々の樣子を聞けばお前のが皆尤もぢや。徳藏さん、あゝしたしだらなら、あの子を知らぬ樣にいはしやんしたのは惡かつたぞえ。

徳藏（五）こつちに大切なお客もある。人目を思うての事ぢや。おれが惡かつた。まだ恨みがあらば聞いてやらう程に、マア／＼控へてをれ／＼。

お　濱　なんぢや。あだ仔細らしい、控へてをれ。ちつとの間會はぬ中にいかう横柄になりやつたなう。

徳藏（五）彼らに構ひなく共、樣子仰聞けられませう。

主　水　家來共、持參のものこれへもて。

家　來　ハア。（ト挾箱を直し、大小載せてあり。）

主　水　イザ御受納あられませう。

徳藏（五）見ますれば衣服大小。

主　水　讃州の屋敷は龜次郎身持放埓故御追放、其後にて謀叛人相模五郎と申す者の爲に御舍兄一角殿には敢無い御最期。

小　汐　エヽ兄御樣には御果てなされましたかえ。

主　水　謀叛人の仕業にて將軍御召の船あやふき場所、船頭徳藏が計ひによつて、船は首尾よく上せし所、何者とも知らず、御船へ忍入り二ツ引兩の旌、勘合の印、白峯の太刀共奪ひ取つて海へ飛入りしとあつて、草を分けての御詮議。

小　汐　すりや寶も奪はれ、讃岐の館も散々で御座りますか。

主　水　それにつき、義滿公、徳藏といふ船頭を召抱へよと仰出され、されども、舟乘故、住所知れず、此所が住家の由。聞合せば、以前は多度津新藏殿というて丸龜の御家中、一角殿の御舍弟とあり、其通り鎌倉へ申遣したる所に、扨こそ、それ故これ迄の忠義、併し一角存命の中、船頭にして召使ひ置きたるには仔細もあるか、又一說に徳藏は生拔の船頭、一角殿の御舍弟とは違ふとも申す。又徳藏といふが多度津新藏殿とも申す。此儀が篤と相解りませぬ故、此地に參り實否を伺ひましたる所に、徳藏といふはいよ／＼多度津新藏に紛れないと申す儀承り伺候致した。相模五郎當へ入込みたる風聞、其許の爲にも兄の敵、謀叛人を搦め捕つて出さるれば、莫大の手柄、古主の家も立つと申すもの、油斷なく御詮議なされば、これより御直人。當座の印の衣服大小、有難う頂戴なされたがよう御座らう。

徳藏（五）これは有難い御上意。かくあさましき姿とは成りましたれども、以前

を忘れぬ多度津新藏、御上意承知仕つて御座ります。

主水　いよ〳〵御得心か。

德藏(五)　古主のお家騷動と聞くより、エヽ口惜しや、某御家にあるならば、やみ〳〵と兄は討たすまい。重寶は奪はれ、無念骨髓に徹する折柄、御直の奉公。此上は屹度曲者詮議仕つて差上げませう。

主水　我々も人數を以て此邊りは取卷かせる。隨分油斷なされな。

德藏(五)　畏つて御座ります。

主水　もはや御暇申さう。(卜立つ。)

德藏(五)　改めて參上仕りませう。して御旅宿は。

主水　此町はづれ、役人が方。

德藏(五)　吉左右御知らせ申しませう。

主水　そりや、互に知らせ合ひませう。

德藏(五)　御座りませうか。

主水　おさらばで御座りまする。(卜家來をつれて橋懸りへはひる。)

お濱　何の事ぢや。人に腹一杯喋らしてちんぷんかん唐人の寢言の樣な事ばかりいうて、エテあんな事で紛を喰はされるものぢや。オヽ其手は喰はぬぞや〳〵。

德藏(五)　マア〳〵悅べ。出世の綱に取付いた。サアこれからはわれも侍の女房ぢやぞよ。(卜小汐にいふ。)

お濱　ムウ、わしも侍の女房かえ。

德藏(五)　エヽ厚顏しい者が來たことではある。

お濱　侍でも船頭でも、わしや耳の垢さへ取つて貰や言分はない。サア女房に持つ氣か、返事聞きませう。返事次第で思案がある。こちの人どうで御座んすえ。

德藏(五)　サア〳〵、よいわ、汝がいふところも聞えてある。高が女房に持ちさへすりやよいでないか。

お濱　アイ、女房に持つてさへ貰や言分はない。どなたが御座らうが、どなた樣の前でも思合うた相惚れの夫婦、慮外ながら妹脊の中とは私が事で御座んすぞえ。(卜小汐に當てぴんとして云ふ。)

小汐　德藏樣、お前はどういふ心で多度津新藏ぢやと名乘らしやんした。

德藏(五)　ハテおれが本名ぢやによつていうたがなんとした。

小汐　お前そりやあんまりな虛言ぢやぞえ。

德藏(五)　つれ添ふ女房にさへ隱した本名。虛言ぢやといふ何ぞ又そつちに心當りでもあるか。

小汐　それはな。

德藏(五)　それは。

小汐　サア、何も心當りのある事は無

いけれど。
德藏（五）久しぶりで男の戻つたのに、濟ぬ顏するわいやい。
小汐　いえさ、悅んで居るわいな。
お濱　いや悅んでもらうまい。かう來るからぢや、わし獨り悅ばにやならぬ。何でも三日四日も何にも喰はずに悅ぶぞえ。（ト德藏にしなだれる。）
德藏（五）サア〳〵。よいてや。何やかや合點の行くやうに緩りと話さう程に、マア奧へいいて待つてゐや。
お濱　さういはしやんす詞が直に誠ぢや。そんなら奧へいいて寢所して待つて居るぞえ。早う御座んせえ。わしやもう　あるによつて、いかう隙がいると　。ハヽヽヽ。女中樣、定めてなめ過ぎた者ぢやと思はさんせうが、姬御前といふものは、殿御の事に掛けては、目面のあくものぢやないわいな。お前も腹が立たうけれども、今迄每晚抱かれて寢さしやんした代り、これからは又ちつと妾へ廻して下さんせ。妾は本妻、お前は妾。客氣はせぬが、大事の殿御の　、よその　でおろすかと思へば、惜しうて〳〵、どうもならぬ。先へ往て待つて居る程に、早う來て下さんせや。
德藏（五）アヽどうなとするわいやい。
（トおとましきこなし。）
お濱　かう廻り逢うたも夫婦の緣の盡きぬところぢや。女中樣。どうぞ二三日はお喧しう御座りませうが、お前も覺えがあらう。
まいと思うても、思はずそこら傍りをなア。（ト思入れして。）いふ程する。オヽ恥かし。（ト走りはひる。）
德藏（五）テも妙な者が來た事ではある。女房、こりや女房ども。
小汐　アイ〳〵。
德藏（五）ハテ拐濟ぬ顏する者ぢや。コリヤ。
小汐　アイ〳〵。
德藏（五）女女子の事はほんのおれがてんがうのかは。正になることはない。氣にかけるなヤイ。
小汐　氣にかけはせぬわいな。
德藏（五）ドレ〳〵ちつと寢ころばう。裾に蒲團置いてたも。
（トころぶ。小汐被せる。）
小汐　こちの人。お前は死なしやんしたと云うて、出やしやんした日を命日にして弔うた位ぢやによつて、近所の衆へも急に知らしては何のかのと喧しい。マア二三日はこちの客ぢやといふて置かしやんせぬか。
德藏（五）いか樣。久しぶりで戻つたが、定んで近所の近附も變つたであらう。

小汐　みんな變つて、大方知らぬ衆ぢやわいな。

徳藏(五)　そんなら、何のかのと挨拶するがめんどい。そりやそなたのいふ通り、風待に舟より上つてゐる客ぢやといふておきや。おれも客になつてゐよう。

小汐　そんなら誰が來うと客に成つてゐやしやんせ。

(ト云ふところへ徳藏(新藏)山名郡領付廻し、桶庭の市　姑お苫、侍連れ出る。)

郡領　いよ〳〵夜半の鐘を相圖に龜次郎が首打つて渡すか。

徳藏(新藏)　相違は御座りませぬ。

桶庭の市　それ迄は風をくらはぬやうに。

お苫　出口々々は私が案內致します。

郡領　家來參れ。

(ト山名郡領　桶庭の市　姑お苫、侍はひる。ト徳藏(新藏)見送り思案して家へはひらうとする。小汐見付け、ちやつと表へ出ながら戸をしめ。)

小汐　アノコレ、マア〳〵、家へはひつて下さんすな。

徳(新)　はひるなとはなんぢや。

小汐　ちつとお前に會はされぬ人が來てるわいな。

徳(新)　會はされぬ人とは。ムウ、こちらのやつがもし間者を入れて、(ト思案して、)長持に別條はないか。

小汐　そりや氣遣ひさしやんすな。

徳(新)　會はされぬ人とは。

小汐　サア、それはな。

徳(新)　大方婆が廻し者か、探りにうせた樣なやつか。さうであらう。

小汐　アイ。マア、そのやうなもの。マア何やかやぢやによつて、徳藏殿は留守で四五日も戻られませぬというて置いた程に、マア、どこへなと往てゐやしやんせ。

徳(新)　もし家へ番にうせたやつなら、なほこつちにしかゝせにやならぬ。急な事でお二人を。(トはひらうとする。)

小汐　コレイナア。それでお前を留守ぢやといふた。口が違ふと又むつかしうなるわいな。

徳(新)　そんならおれは近所の者ぢやというて、そいつがどうぬかすぞ。五音を聞かう。

小汐　サアそれもよけれど。

徳(新)　イヤサ、急な事が有るといふのに。(ト戸を明け、ずつとはひる。)

徳(五)　誰ぢや。人の家へ喧しい。

小汐　いえ。これは近所の衆で御座んす。近所の衆で。(ト徳藏(新藏)にいふ。)

五郎　ムウ近所のなら、はひらつしやれ。

新藏　はひりませいぢや。見りや我家かなんぞの樣に梟股打つて、一體貴樣

は何者ぢや。
五郎　おりや此家の。
小汐　アヽ。これ。（ト思入れ。）
五郎　舟から上つて來た客でえす。
新藏　アノ舟から上つた客か。
五郎　アヽ。
新藏　ハテ。客ぢやよなア。
五郎　近所の衆ぢやよなア。
新藏　御客一寸會ひませうかい。
五郎　アノ、おれに。
新藏　いかにも。
（ト兩人向うへ出る。小汐樣々思入れ。）
五郎　おれに用とは何の用ぢや。
新藏　別の事でもないが、こちの家へ。
（トいひ／＼兩人顏眺め、）
五郎　どうやら見たやうな。
新藏　おれもどうやら見たやうな。
五郎　ソレ、浪打ち際で。
新藏　思ひもよらぬ旅人。
五郎　其時のばつさり、びり／＼、ひい／＼。
新藏　すりや、其時の提燈は。
五郎　其時のばつさりは。
新藏　お客。
五郎　近所の。
新藏　ハテなア。
（ト兩人じつとなる。）
小汐　どうやら近附の樣な云ひ樣、もしや昨夜の。
新藏　御客。貴樣の名はなんといふ。
五郎　おれが名か。
新藏　ヲヽ。
五郎　おれが名は桑名屋德藏。
新藏　なんぢや、桑名屋德藏。
五郎　ヲヽ。
新藏　ハテなア。
五郎　近所の汝樣の名は。
新藏　おれが名か。
五郎　ヲヽ。
新藏　おれが名は桑名屋德藏。
五郎　アノ德藏。
新藏　ヲヽ。
五郎　ハテなア。
新藏　德藏といふとは。
五郎　十年以前に家を出た其女房の男。
小汐　エヽそれを。
五郎　此處の主ぢや。
小汐　ハッ。
五郎　又そちの德藏といふは。
新藏　十年このかた入家して、子中迄なしたその小汐が男。
五郎　アヽそれなら。
新藏　此處のあるじぢや。
五郎　今の德藏。
新藏　前の德藏。
五郎　舟乘といふ者は。

新藏　いつ何時戻らうやら。
五郎　留守の間に男を持つても。
新藏　十年も便りせにや。
五郎　間男ぢやと云はれもせず。
新藏　追ひ出されもせまい。
五郎　小汐、大事ない。
新藏　小汐、大事ない。
五郎　これからゆるりつと。
新藏　近附になつて。
五郎　ともかせぎにしませうかい。
新藏　徳藏殿。貴樣の本名があらう。
それ聞きたい。
五郎　おれが本名か。
新藏　いかにも。
五郎　おれが本名は多度津新藏といふ
浪人ぢや。
小汐　鎌倉から抱へに來てな。
五郎　マア知行には有り付いた。
新藏　多度津新藏てや。

小汐　アイ。
新藏　ハテ。かはつた事の。
五郎　どれ、久しぶりで奥へ往て、ふ
んぞらかさう。女房ども。
小汐　エヽエヽ。
五郎　來て、これ、もんでくれ。
新藏　今日はいかう草臥れた。女房ど
も。
小汐　アイ。
新藏　此處で肩もんでくれ。
五郎　昨夜の闇。
新藏　貴樣の本名。
五郎　いはぬが祕密。
新藏　尋ねたい事が。
五郎　おれも尋ねたい事が。
新藏　徳藏殿。
五郎　徳藏殿。
新藏五郎　後に會ひませう。
（ト唄になり、五郎の徳藏奥へはひる。ト
新藏の徳藏種々思入れ。小汐も心の思入
れ、樣子あり。）
新藏　女房／＼。
小汐　エヽ。
新藏　アノ徳藏殿といふはそなたの前
の男徳藏か。
小汐　アイさうぢやさうに御座んす。
新藏　わが連添うた男を、さうぢやさ
うなとは、たわいもない者ではある。
小汐　サア。餘り思ひがけがないの
と、お前の手前が氣毒なとて、うろ／＼
して居たわいなア。
新藏　十年會はねば舟乘は鹽風で相好
が違ふと高をくゝると、結句粹方だふ
れといふ者ぢや。ありや、徳藏か、とつ
くりと見や。よもや徳藏ぢやあるまい。
小汐　サア、さう云はしやんすりや、
前よりちつと色も白し、尋常な樣にも
あるが、顏かたちは寸分違はぬ徳藏殿。

新藏　徳藏といふ船頭は律義全うなす事格別の人間。其正直の頭に宿る金比羅大權現の利生にて、海上は飛鳥のごとく、舟に乘つては韋駄天の走るが如く、左程正直な徳藏と、あの徳藏が詞のたくみ。

小汐　成程。あんな人ではなかつたが、お前の名を騙るといひ。

新藏　昨夜取つた、これ。（ト我が懷中を思入れして、）ハテなア。

（ト唄になる。と白子六兵衛在所親爺の形にて蟇皮柄袋かけし一腰差し、風呂敷包を背負ひ、泣き〳〵出る。）

六兵衛　姉、家に居るか。

小汐　誰ぢや〳〵。

六兵衛　イヤ、おれぢや。六兵衛ぢや。

（トうちへはひる。）

小汐　マア、とつさん。よう來さんしたなア。

新藏　これは親仁樣。遠い處をよう御座りました。

小汐　サア〳〵。マア上らしやんせ。

新藏　よう御座りました。女房ども御茶上げませい。

小汐　アイ〳〵。便りせうと思うても、とんと隙が御座んせなんだ。よう御座んしたなう。

新藏　マア陸に御座りませい。脚絆もとらつしやりませい。ドレ取つて上げませうか。

（ト此臺詞の中、兩人ほた〳〵と挨拶する。白子の六兵衛憂心にてきよろつき。）

六兵衛　マア〳〵、その樣にいうて下さんな。咽につまつて挨拶の仕樣が御座らぬわいの。

新藏　何から申しませうやら、小さいをいかいお世話で御座りませう。

小汐　世話な段かいな。音信の無沙汰は若いによつてぢやと、叱つて居さしやんすであらう。定んで大きうなりやつたで御座んせうなア。

新藏　流行まするが、疱瘡はどうで御座ります。

（ト六兵衛うろ〳〵する。）

小汐　初手は並が惡かつたによつて案じましたが、此間は並もよし、いつそ輕うしまへばよう御座りますがな。

新藏　輕ういたしましたか。

小汐　連れて來て下さんしたぢやらう。どこにをりますな。久しぶりで門口を忘りやつたか。これ入りやいなう。

新藏　ちやつと、はひれいやい。

（ト小汐門口へ行く。）

六兵衛　アこれ、二人の衆。孫めはそこにはゐませぬわいの。

小汐　路で冗談でもしてゐるもので御

座んせう。

新藏　いか樣。かうつ、丁度今年で七年見ませぬで御座りますてや。（ト樣々嬉しがる。）

小汐　（思入れ。）わたしや、一昨々年、在所へ往て會うて來たわいな。

新藏　（思入れ。）ほんにわが身は見覺えて居やらう。おりや、これ丈な芥子坊主の時見たまゝぢや。

小汐　どこにをります。呼びに參じませうかいな。

六兵衛　いかにも孫めに會はしませう。

（ト風呂敷包より血の付いたる着物を出し。）それ、孫のおでんめぢや。

（ト種々見る。新藏も種々思入れ。）

小汐　とゝ樣。こりやどうで御座んす。

六兵衛　サアその樣子はの。

新藏
小汐　樣子とは。

（ト六兵衛立つたりゐたりして、）

六兵衛　昨夜二軒の湊で。

新藏
小汐　湊で。

六兵衛　殺されて死にましたわいの。

二人　エヽ。そりやどうして／＼。（トたぐりかけいふ。）

六兵衛　尤もぢや／＼。七年前にこなた衆から預つた大事の孫。おのれやれ、早う大きうして物も縫はさうし、手書きにして京大阪のよい衆も恥かしからぬやうに育てゝ見せうと、在所の御寺を頼んで手習さした。（ト清書を出し、）凡そ商賣持扱ふ文字。なんと美事で有らうが。この兒は手筋がよいによつて、今度は天晴な手書きになると、お住持が譽めて下さつた。その嬉しさ、お寺の商賣に持扱ふ戒名の文字に成りをつて、清書へ水手向け、施餓鬼せにやならぬ樣になつたわいの。

（ト小汐、六兵衛を振廻し、）

小汐　そんな事は要らぬ。殺された譯をいはしやんせいな。

六兵衛　サア／＼。いふわいの。前置きにちつと泣かしてから云はしてたもいの。

新藏　二軒の湊で、（ト思入れして、）何時で、どうした死にやうで御座ります。

六兵衛　世界に金が敵とは誰が云ひ初めたぞ。庄屋殿から明神樣の富を無理無體に押付けられ、錢方盡きて布子一つ曲げて入れたれば、おれが念が通じたのか孫めが肩のよいのか、一の富が當つてころり百兩。ハア忝い。おんのれやれ、此金で嫁入り道具や着る物をしたゝかさして呉れうと、舌打ちして悅んだりや、あれがいふ事聞いて下され。いや／＼、わしや嫁入りによい所へ行

かいでも大事ない。聞けば、とゝ様かゝ様は大分金が要るけな。一昨々年もかか様が來て金が欲しいと言はしやんした。どうぞ其金を持つてとゝ様やかゝ様の處へ往て悦ばつしやる顏が見たう御座る。連れて往て呉れいとせがみをる。其賢いのを聞くに付け、アヽ、おれは身慾ばかり思ふいかい業人ぢや。負うた子に教へられて慈悲善根の導きして貰ふのぢやと、直に拵へて來る道、惡者共が持つて居る金を見付けて喧嘩しかける。おのれぶち投げて呉れうと組んず轉んずせり合ふ中に、孫めを見失うた。それからうろ／＼氣違ひの樣になつて尋ねたれば、磯邊の芦原にお傳は可愛いや、血みどろちんがいに成つて、これこの鞘を持つて死んでゐたわいなう。

小汐　エヽ。

（ト新藏小汐顏見合せ。）

小汐　そんなら昨夜。（ト云はうとする。新藏いふなと睨む。）ぢやというてこれが。

（ト又睨付ける。兩方喰ひしばる。思入れ。小汐袖をくひちぎり泣く。）

六兵衞　悲しからう。血を分けたそなた衆より手鹽にかけた此ぢいは、いつそ骨も皮もちぎれる樣に御座るわいの。

（ト泣く。）

小汐　何と／＼。（思入れ。）わしが常から云はぬか。（思入れ。）どこぞでは報はう／＼と。

（ト新藏いふなといふ顏付にて睨み、種々思入れあり。）

小汐　因果は廻る針の先、現在の。

新藏　（ト又睨む。）

小汐　ハア。（ト大泣き。）

六兵衞　此鞘を握詰めてゐたのは、敵を取つて下されいといふお傳が心ぢや。サ聟殿。どうぞ敵を詮議して下され。詮議して下されなう。

新藏　老少不定とはいへど、お年寄に歎きをかけ、さきだつた娘が不孝。皆前生よりの定まり事。お氣遣ひなされますな。其敵どこにをらうとも金輪際詮議して。（ト小汐と顏見合せ睨みつけ。）サア敵は私が討つてお目にかけませう。女房共、泣くな、親の爲に死んだ娘が、イヤサ親に金やらうと思うて死んだりや、どうもせう事がない。泣くな／＼。

小汐　何をしかる。こな樣の目には涙が一杯。

新藏　その樣にいふと親仁樣が尚泣かつしやるわい。

六兵衞　いつそ疱瘡で死にをればよいに。なんの因果で輕うしまうたぞいや

い。
新　藏　親仁樣。日頃のお氣に似合はぬ歎き、泣けば娘が戻りまするか。かうなるのもあれが壽命。ヤイ女房、われも吠える手間で佛壇へ燈明でも上げて親仁樣を連れて行かうといふ事はせいで、めろ〳〵と吠える事はないわ。
小　汐　アイ。
新　藏　早う連れまして行け。
六兵衞　イヤ、もう、聟殿は男氣で思切りがよいによつて、どうでまんじりと泣かしては下さるまい。娘、奥へ往て汝も存分泣け。おれも大聲で泣かして呉れ。
小　汐　そんなら奥の佛間へ連れましてさんじませう。
新　藏　その着る物が位牌の代り。
(ト六兵衞着る物を抱へ、鞘を差し、)
六兵衞　おでんよ。追付け、とゝに敵を取つて貰うてやろぞよ。
小　汐　あれ、敵を取つて貰うといな。
新　藏　ハテ、役にも立たぬ言ばかり。
六兵衞　しかも、今日は誕生日。
新　藏　生は死のもと。
小　汐　七難九厄といふ物を。
新　藏　たつた九ツ。
(ト顏見合はせ、)
三　人　南無阿彌陀佛。
(ト唄になる。と六兵衞小汐奥へはひる。このめりやすの中、新藏神棚へ紙をはる。一ツ鉦鳴る。ふつと思出したる思入れ。)
新　藏　娘が廻向の一ツ鉦で思出した。こちらは夜半の鐘限り。(ト長持を見て、)御兩所を。(ト長持へかゝり思入れして、)此場を去つては奥の德藏が詮議が、(ト思入れ、)背中に腹。いつそ檜垣を、(ト切らうかといふ思入れして、頭振り、)なまなかな事しては、一も取らず二も取らず。といふて此處を御供する事もならず。ハテどうせうな。
(ト思案する所へ桑名のお濱、右の女形にて出る。)
お　濱　德藏さん〳〵。
(トいひ〳〵向うへ出る。新藏の德藏顏ふつと上げ、)
德藏(新藏)　誰ぢや。何ぢや。
お　濱　なんぢやどころか。ようわしを寢所に待たして置いてごんせぬなう。わしや粉吹きになつたわいな。どうでもこなはアノお妾に心がのかぬのぢや〳〵。(ト振廻す。)
德(新)　これ、マア待て。何をいふのぢや。わりやマア誰ぢや。
(トお濱、新藏の德藏を見て、)
お　濱　オヽ違うた。德藏さんはどこへぢやえ。
德(新)　德藏はおれぢやが。
お　濱　なアに虚言を。わしが男の德藏

さんはどこへぢやいなァ。
徳(新)　わしが男の徳藏とは。ムウ、奥に居るアノ徳藏が女房か。
お濱　アイ桑名屋のお濱といふ女房で御座んす。わしを置きざりにしくさつたによつて尋ねて來たのぢやわいな。
徳(新)　小汐といひ、此女といひ、徳藏といふからはよもや。(ト思入れ。)それに又最前の。(ト思案する。)
お濱　こちの惡性男はどこに居ますで御座んすの。
徳(新)　お濱とやら、いよ／＼そなたの言交した徳藏に違ひはないか。
お濱　ヲヽくど。互に變るな變るまいと起請迄取交した仲ぢやもの、違ひがあるのないのといふ事がある、(思入れ。)かいな。これ見て下さんせ。アノ人の起請は、わしが守符袋へ入れてゆもじの紐にくゝり付けて置く。常住へ入れて置く心ぢやわいな。
(ト右の中に出し見せるを、新藏の徳藏守袋を引とり見る。)
徳(新)　壽寶二年正月五日の誕生の女子。こりや龜の御判。
お濱　そりやわしが守符ぢや。かゝ樣はよいところへお湯殿奉公して居さんしたけなが、先の旦那殿のすばやい人で、風呂場で　　たが折込んで、私を産まんしたれば、お內儀樣が殺せの切れのと云はんすが怖さに、赤子をひつさけて在所へ逃げて戻らしやんしたけな。よい人のへり殘しぢやによつて、どこぞでよい事が有らう。大事にかけて育てねばならぬというて、こちや在所では錦手の茶碗ふく樣にしられた者を、到頭あの男に破られたわいな。
(ト新藏の徳藏、お濱をねじかへし見て、)
徳(新)　かねて話のお湯殿腹。面體格好。
(ト思入れ。)エ、忝い。
お濱　(思入れ。)大事の起請を紙屑か何ぞの樣に、勿體ない。(ト拾うて、)熊野のお山で三羽づつ烏が死ぬるといふ事も僞りならぬ。恐ろしや。
(ト懷へ入れると、四ツの鐘なる。)
徳(新)　ありやもう四ッ。
お濱　(思入れ。)徳藏さんはどこにぢやぞいな。徳藏さん／＼。
(ト新藏の徳藏、引き抱へ物いはさぬこなし。ト奴浪助橋懸りより孛屑頭巾にて出で、中を覗き、)
浪助　旦那、今夜はもう仕事は御座りませぬか。
徳(新)　シイ、(ト小手招きして、)コリヤ。
(ト囁く。)
浪助　心得ました。
徳(新)　來い。

（ト唄になり、お濱を抱へながら德藏（新藏）浪助連れ奥へはひると五郎の德藏一間より出で、うろ／＼見廻し。）

德（五） 確かに此家に。

（ト長持を見付け、思入れして居る。小汐出かけ蓋をちやつと押へ。）

小　汐　こちの人。風呂が涌いたぞえ。

德（五） イヤ、おりやもうよしにせうわい。

小　汐　ハテ、草臥休めぢや。入らしやんせいな。

德（五） イヤ／＼、こんな時、風呂へ入ると後で風邪ひくものぢや。よしに致さう。（ト坐りゐる。）

小　汐　こちの人。さつきにはさぞお前も、アヽ小汐といふ者はおれが暇の状もやらぬ先に男を持ちをつたと、腹が立つたであらうが堪忍して下さんせ。十年も便り音信のないのに母さんは喧しゝ、もう、これはほんの爲う事なしぢやが、今になつては私もつまらぬ者になつて來たが、どうしたらよからうぞいな。

德（五） どうというて十年の餘も便りせぬのはおれが過失。古いなと新しいなとそなたの好いた方にしたがよい。

小　汐　そりやもう、稚馴染程大切なものはないわいな。

德（五） そりやどうなりと。

小　汐　アイタ／＼／＼。

德（五） 何とした／＼。

小　汐　痞がおこつて。（ト術ながる。）

德（五） エヽ種々の事を苦にするによつてぢや。藥やらう。

小　汐　イエ／＼、こゝを摩りおろして下さんせ。

德（五） どれ／＼。（ト懐へ手を入れ。）ここか／＼。

小　汐　イエ／＼。取楫の方ぢやわいな。

德（五） 取楫とはこゝか／＼。

小　汐　いえいなア。取楫の方ぢやといふのに。

德（五） 取楫とはこちらか。

小　汐　そりや面舵ぢやわいな。

德（五） こちらか／＼。

小　汐　アイ。よう、そろ／＼と。

德（五） 扨も仰山な痞ぢや。

小　汐　こちの人。それ、お前がこの前乘つて行かしやんした舟は何百石やらで、帆は何反やらであつたな。

德（五） 其時の舟か。

小　汐　アイ。

德（五） その時の舟は五百石。

小　汐　エヽ。

德（五） 確か六百石か七八百石かであつたか。

小　汐　檜垣の船は皆八百石以上。荷を

積めば千二三百石。

徳(五) ヲヽ八百石であつた。しかも新造で舟おろしは賑やかな事であつた。

小汐 そして、八百石の舟の帆は何反で御座んした。

徳(五) ヤ。

小汐 イヤサ、帆は何反で有つたぞいな。

徳(五) されば其時水夫の者共が倹約をしをつて、おれは十反にせうといふ。あいつらは五反にせうといふ。中取つて八反にしたが。八反とはいふもの丶、地面にして見れば太きなものぢやてや。

小汐 アノ八百石積の船に、たつた八反の帆をかけて行くのかえ。

徳(五) ヤ。(ト息の詰まりしこなし、よろしく有るべし。)

小汐 わづか三十石か五十石の帆で、八百石の船が動くといふは。ハテ奇妙な事で御座んすなう。

徳(五) そこが徳藏ぢや。五反の帆で千石舟を走らすといふがおれが妙ぢや。

小汐 面舵、取蛇の方角も知らず、それで大廻しのおも船頭をさしやんすぢやまで。

徳(五) ヤ。

小汐 ハテ間に合はぬ舟乘ぢやな。

徳(五) 間にあふがあふまいが、商買さへ精出しや言分はないぢやないか。

白子六兵衞 イヤ間に合はぬ聟殿は、此親がえ丶取るまいわい。(ト奥より出る。)

徳(五) 間に合はぬ聟殿はえ丶取るまいとは、こなたは舅殿か。

六兵衞 舅殿かとは、入聟してゐた親を今更知らぬか。

徳(五) イヤ見違へた。

六兵衞 ハテ目角のわるい。

徳(五) そんなら、舟の事が無功者ぢやによつて出て行けか。

六兵衞 日本に知られた桑名屋徳藏が、舵の取り樣知らぬでは、けんほうかしにろぬけか。商買の間に合はぬ者家に置いてどうしませうぞいの。

徳(五) はて、氣に入らぬ處に長居しても要らぬものぢや。女房暇やつた。屋財家財もおれがのなれど置いて行く。その代りに此長持を。

(ト手をかける。小汐止める。六兵衞は煙草盆控へ居る。)

小汐 コリヤ何さしやんす。

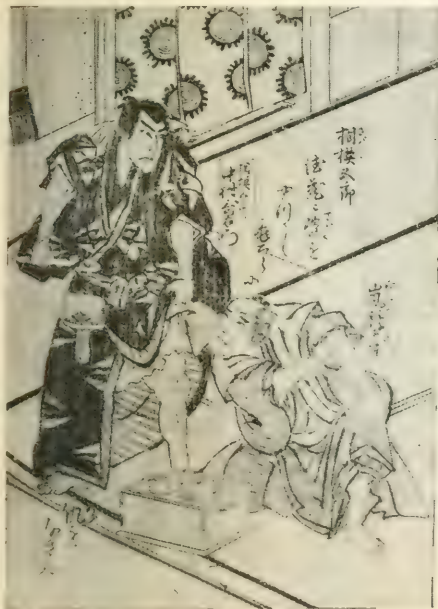
徳(五) ハテ屋財家財残してわれにやる代り、おれが着替へを。

小汐 イヤそれは。

(ト小汐立廻りに少しあやしき所へ新藏の徳藏飛んで出て、長持へ上がる。)

徳(五) 新參の徳藏。なぜ邪魔する。

徳(新) 女房さつて出て行く聟殿。金の

下の灰迄今の主の物。箸かたしやる事ならぬ。
德(五) イヤおれも敷金持つて來た聟ぢや。これ程の物は持つて出にやならぬ。それとも、たつていやと云や他にも着せぬ樣に、いつそ突破つて。
(ト長持へかゝる。新藏の德藏立廻りにて兩人腰かくる。)
德(五) イヤ大事の着替。疵つけてよいものか。
六兵衛 高の知れた木綿物。それ程欲しくばやりもせうが。
德(五) イヤ他の木綿物には目はかけぬ。色紙が欲い。
德(新) なんと。
德(五) サア船頭の分際、羽織縫ひつゝくつた色紙が欲しい。
新藏 イヤこりや味なものぢや。品によつて遣るまいものでもないが、德藏、貴樣の本名が聞きたい。
五郎 おれが本名は多度津新藏。
新藏 すりやいつまで尋ねても。
五郎 船頭の名は德藏。
新藏 親仁樣。お前はお老人の事ぢや。かの北條崩れの軍の事、よう知つて御座りませうな。
六兵衛 ヲヽ知つて居る段ぢやない。おれがいか樣、十ばかりの時ぢやによつて確かと覺えて居る。
新藏 此間講釋場で承りましたが、小汐も聞け、相模入道といふ奴は偉い奴な。
六兵衛 イヤもう偉いの偉ろないといふどころか、おいらが小耳に聞きこんで

居る。ねから天下は藥袋ぢや。

新藏　榮耀に誇つて、三十で坊主になつて、天子も蔑に我儘八百。擧句の果には犬を飼うて犬の喰合はせをしたといやい。

六兵衞　イヤもう其時は侍は何ともなかつたが、ソリヤお犬樣のお通りぢやといへば、橫切りは切捨、犬の御典藥が出來るとか、針立が後には犬の按摩取りが出來て、雪駄に皮付けて履く者はお犬樣へ恐れとて皆牢へはひつたわいの。

新藏　それといふが、かの木菟入めが性根玉が犬ぢやによつて畜生仲間を集める斑入道宗閑。（思入れ。）とサアいうた事ぢやげに御座ります。

小汐　そんな時にゐたら嫌な事で御座んせう。

六兵衞　イヤもう、犬扶持に運上は呑む程取られる。かゝつた事ぢやなかつた。

新藏　其犬めを狩出したのが、新田足利ぢや。偉い者ぢや。何が、諸大名があくたい打つて居る所へ、相模入道を亡ぼせといふ院宣が下つたものぢやによつて日本國が一つになつてどつと押しかけたところが、俄かに胴震ひしをつて、かかつた樣ぢやなかつたげな。

（ト五郎が方を見ることなし。）

六兵衞　そこはおれは知らぬが、何か新田殿と足利殿が攻むるといふと脆う城は落ちた。

新藏　落ちませいぢや。根が犬、四ツ足が軍してたまるものか。やうくと

丸裸になつて寺へ逃込んだら助けても
貰をかと思うて、イヤもう卑怯な奴と
いふは、いつそ縄にも蔓にもかゝらぬ。
それにマア五大院左衛門といふ家來が
足利へ相談したによつて、はた〳〵と
寄せ手が往たれば、大聲上げて吠えた
けな。ハヽ、マアおいらでもそんな場
所になつて泣くといふ事はないのに泣
いたとは。ハヽヽ。（ト五郎を見る。）

六兵衛　泣かいぢやいの。直に首切られ
獄門にかゝつた。イヤもう其時は皆世
界は夜が明けた樣に御座つたわいの。
ハヽヽ。

新　藏　其高時の悴どもが又謀叛を工む
けに御座りますけな。

六兵衛　ハアヽヽ。身知らずぢやの。

新　藏　世界の爲にする軍でも理窟が惡
るけりや新田が樣にしまはにやなら
ぬ。まして大惡人の高時が悴づれが。
（ト五郎へあてゝ、）身に徳もなく天命も
なく、斑の悴の狗めが、尾を逆立てゝ
もがいたというて、斯く萬代不易の平
天下、畜生のちよつかいで草もゆるぐ
ものぢや御座りませぬ。

（ト最前より五郎の徳藏面體種々に變り、
口惜しき態にて思はず煙草盆摑み碎き、
此時ウント呻き、煙草盆打ちつけると、）

新　藏　とマア此處ら邊りを講釋師め。
面白う言ひをるてや。

小　汐　イヤもう聞いてゐてさへ勇しい
咄で御座んすわいな。

（ト九ツ半鐘鳴る。山名郡領と姑お苫　桶
底の市侍連れ出る。）

郡　領　そりや。

桶底の市　動くな。

六兵衛 小汐　コリヤ、なんで御座ります。

郡　領　約束の夜半の鐘。かくまい置い
た龜次郎が首打つて渡せ。

小　汐　滅相な。そんな御方をかくまう
た覺えは御座りませぬ。

桶底の市　こりやもう叶はぬ。先達て訴
人が有つて徳藏を呼寄せ、白狀させて
置いた。

六兵衛　そんな事を誰が訴人した。

姑お苫　おれが訴人した。

六兵衛　エヽ婆め。まだおのれ性根が直
らぬな。

お　濱　何の直らう。吾御料が身上持つ
て退いたによつて、おりや何になとか
かつて金儲けせにやならぬ。

郡　領　サア龜次郎を出せ。

小汐 六兵衛　サアそれは。

郡　領　異議に及ぶと討取らうか。

小汐 六兵衛　サアそれは。

皆　々　サア〳〵〳〵。

郡領 桶底の市 お苫　どうぢや。

（ト奥よりお濱、頭は元服にて形女形な

り。逃出る。奴浪助追駈け出て、中より）

奴浪助　卑怯な、龜次郎殿。どこ迄逃げるぞ。

（トお濱うろ〳〵する。）

小　汐　ヤア龜次郎樣。

六兵衞　（思入れ。）そなたは長持にぢやといやつたぢやないか。

小　汐　どうして奥に。

お　濱　無理におれを縛付けて置いて、

（ト頭を探り見て、）オヽ〳〵〳〵〳〵。こりやなんぢや〳〵。

浪　助　衣類を着替へ此場を落ちんとはのぶとい事を。

お　濱　こりや又餘り胴慾な目に遭はしたぞや。どうマアこれが、（ト五郎の德藏を見て、）ヤアそこにか。

（ト新藏の德藏、拔打ちにお濱が首を切り、六兵衞小汐悔り。）

六兵衞　ヤア娘よ。首打つたわい。やい〳〵。

小　汐　德藏殿。首打たしやつたか。オオ〳〵〳〵。

（ト新藏の德藏、中腰にて左に拔身を持ち居る。）

浪　助　高丸龜次郎が首お渡し申さう。

（ト山名郡領見て、）

桶底市
お　苫　違ひは御座りませぬか。

郡　領　相違ない。確かに受取つた。龜次郎が首差上る上は、親將監が命はお助けなさるゝ。兩人參れ。

（ト兩人の侍連れ、山名郡領橋懸りへはひる。此間、六兵衞右の鞘を新藏の德藏が拔刀へ合はすと、小汐舞臺をたゝき、）

小　汐　これ、こな樣はマア何とした。天魔が見入つたぞいな。

六兵衞　ヤアこりや、娘よ。鞘がしつくりと合うたは。

（ト新藏の德藏刀を離し、浪助に囁やく。浪助橋懸りへはひる。新藏の德藏、五郎の德藏へ詰めかけ、蛇爪の鎖を出し、）

德（新）　德藏。これ、覺えて居るか。

德（五）　イヽヤ知らぬ。

新　藏　アノ知らぬか。

五　郎　ヲヽ。

（ト此間梶川主水、捕手の心にて橋懸りよりそろ〳〵出て、駈け向ふ。）

新　藏　龍の爪に鎖を付け、忍びの術に用ゆるは北條家の大事。コリヤ北條の先祖江の島辨天より授かつた龍の爪。蛇爪の鎖ともてはやす。他に使ふ者はない。

五　郎　ハテむつかしい物ぢやなア。

新　藏　詮議しぬかにや置かぬ。

梶川主水　お尋ねの相模五郎。（トつか〳〵とはひり　繩かゝれと新藏の德藏を取りまく。）

新　藏　なんと。

（ト橋懸りに奴浪助鐵砲持ち出向ふ。）

主水　蛇爪の鎖を所持するからは相模五郎であるまいか。

新藏　身を相模五郎とな。

主水　證據は則ち蛇爪の鎖。これでも爭ふか。

小汐 六兵衞　スリヤ、その鎖で。

主水　サア。

小汐 六兵衞 主水　サア〳〵〳〵。

主水　どうぢや。多度津新藏仰渡されたる通り、相模五郎が詮議せい。

德（五）　畏りて御座ります。相模五郎。おのれ天下の重寶を奪ひ、忍び〳〵に軍用の手あて、切取り强盜に金を貯へる事明白。多度津新藏が繩打つ。腕廻せ。

德（新）　うぬ。その。

（ト掛からうとする。六兵衞、新藏の德藏が胸を持つて引倒し、捩ぢつける。小汐も新藏の德藏が胸座を持つて、）

小汐　エヽ口惜しい。騙された。夫婦の恩愛に絆されて、お主の御恩を忘れたわいの。

六兵衞　段々の證據の出る上に、龜次郎殿の首打つたからは、いよ〳〵おのれは相模五郎ぢやな。さうとも知らずおのれが多度津新藏と、アノお人の借名して、おいら親子を一杯喰はしたな。此年月溜た金は軍用金ぢやな。昨夜の鞘が刀の身へしつくりと合うたは、孫のおでんもおのれが殺したな。今も奧で先の德藏が詮議、斯樣々々とこちら親子に呑込ませ、長持の若殿をそつと出して討殺し、其褒美も軍用金ぢやな。相模五郎であらうが、謀叛人であらうが、舅は親、聟は子、相模入道もおれも同じ事ぢや。孫のおでんを戾しをれやい〳〵。エヽおのれは大惡人といはうか、何として呉れうぞいやい。

小汐　十年前に入聟して御座つた時、相模五郎ぢやというて下さると、何の緣を結ばうぞ。丸龜の御家へ由緒の我我。あらぬ名を云うて騙されたので、多くの人を剝ぎ取り、剩へ、我子迄を。

六兵衞　もう親子でもくいでもない。思へば〳〵、胴慾な人ぢやなう。

小汐　他人になつてこれまでの恨みを報うが、せめてもお主へ申譯。

六兵衞　さうぢや。娘。

（ト小汐六兵衞切つてかゝる。新藏の德藏立廻り有つて、）

德（新）　待て。（ト兩肌ぬぐ。千兩の金、肌にかけ居る。）

六兵衞　殺さば殺せ。大惡人めが。

德（新）　肌に千兩の金をまき付けたが相模五郎でないといふ確かな證據。

六兵衛
小汐
主水　なんと。

徳(新)　若殿放埓、象頭山造營の千兩の金の償ひ、再び歸參せんと辻切追剝晝強盜。樣々に心を碎き、九百兩迄手に入れて、もはや百兩。ほしや〳〵の目の先へ、昨夜幼少なるもの百兩持つて濱邊に迷ふを、天の與へと情なくも刺し殺し、千兩の都合。やれ嬉しやと思ひの外、庄屋方にて山名郡領龜次郎樣の首討たねば高丸將監樣の御命危ふしといふ。仔細を聞けばお家は沒落、兄一角も敢無い最期、若殿にも御存じなく、千兩さへ都合せば歸參すると今日まで思うたは鵰の嘴と云はうか、現在わが子を親の手で殺す程の業因。相模五郎とも謀叛人とも無實を被る程の條。我子を殺した此金は無駄事であつたか犬死であつたか。エヽ口惜しい。(ト泣く。)

主水　シテ又謀叛人でないと云ふ確かな證據は。

徳(新)　若殿をかくまひ置くに多度津新藏と御存じなくてかくまはれて御座らうか。馬鹿な事を。

六兵衛　いかさま。下種の知恵は後から、ほんに若殿が確かな證據。

小汐　その若殿樣を首討つてやつたのは。

徳(新) 身替りの正體。(ト守袋をはふる。)

小汐 壽寶二年正月三日誕生の女子。龜の御判のすわつたは。

徳(新) 今日桑名より來た女は親殿の外戚腹。

六兵衛 アノそれを元服さして。

徳(新) これでも疑ひが有るか。

主水 扨は多度津新藏といふは其許であつたよなう。

徳(新) おのれが夜前くらまぎれに打ちかけた蛇爪の鎖。

主水 すりや紛ひなき相模五郎。

徳(新) さしあたる兄の敵。覺悟せい。

浪助 相模五郎。二ッ彈丸ぢやぞ。

徳(五) 始より知れてある事。知らぬはうぬらが愚昧故。船頭徳藏によう似たるを幸ひ、双生兒の事を聞くよりも徳藏となつて入込んだは、蝗のやうな毛二才め。何の爲に心がつかうぞ。歌仙の色紙は父高時望をかけられたれば奪取るが親への追善。色紙さへ取返へせばおのれらが命は助けてくれる。

徳(新) エヽ何をいうても若殿を人質に取られたれば、エヽうぬをなア、それ。

浪助 いつそ胴腹ェ。

(ト鐵砲うつ 相模五郎身をかはす。長持へ鐵砲あたり、焰硝燃える。)

皆々 ヤア、これは。

徳(新) 若殿を。

五郎 歌仙の色紙。

(ト新藏立廻りの中、長持の蓋明ける。)

新藏 これは。

(トどろ／＼にて、檜垣龜次郎を連れ、立ち出る。六兵衛ウンとこける。)

龜次郎 おりや此處にゐるわいな。

皆々 ヤア、龜次郎樣。

龜次郎 國の一件現の樣に聞いて居た。家國の敵。天下の仇。

檜垣 業通を以て長持の中は、お助け申しました。

龜次郎 太夫。おりやいつの間に此處へ出た。

新藏 サア。兄の敵。

龜次郎 家の敵。

皆々 覺悟せい。

五郎 面倒な奴らぢや。

(ト腰より筒を出し投げる。ト狼煙あがる。ト向うより黒裝束四人鐵砲を持出で、花道へ並び銃口を揃へる。新藏、龜次郎を圍ふ。皆々木蔭へよる。)

五郎 みな殺しにせずば、どうで色紙は渡すまい。そりや打殺せ。

(トどろ／＼にて六兵衛起きる。花道將棋倒しにこける。小汐、主水皆々こける。檜垣おそれる。小宮がたつく。)

檜垣 アヽ歸ります。尊き天部に穢れたる此身は立去りまする／＼。

亀次郎　何としたく。
新藏　眼中血走り髪逆様に立つたるは。
六兵衛　我はこれ汝等が信仰する讃州象頭山金比羅大權現にてあるぞ。
新藏
亀次郎　ヤアヽ。
六兵衛　汝等、我國の龜次郎、多度津新藏が忠義にめんじ、老いたる者が骸を借り、詞をかはす。敵いかなる謀をなすとも少しも驚くことなかれ。
新藏　スリヤ大權現の守護なし給ふか、エヽ有難い。
檜垣　今迄は愛着の絆に引かれ、付添ひましたが、天部の光にもう二度來る事はなりませぬ。殿さん。私はいつぞや殺されたわいな。
亀次郎　ヤアヽ。
檜垣　未來は必ず夫婦で御座んす。もはや出よと責め給ふ。名殘は盡きぬ。殿様さらば。
（トどろく\にて檜垣せり下げ消える。）
亀次郎　そんなら太夫は死んだか。可愛いやく。（ト泣く。）
新藏　サアこれからは兄の敵。一分だめしぢや。覺悟せい。
五郎　ハアヽ、さては金比羅めが肩を持つな。面白い金比羅ぐるめにひねり殺すぞ。
新藏　サア、尋常に勝負せい。（ト詰めよる。）
六兵衛　おろか、おろか。惡運つよき相模五郎。二ツ引兩の旗、白峰の太刀、勘合の印、三品の寶は一味の大名へ預け、徒黨をかたらふ眞最中。相模五郎討たれしと聞かば、三品の寶は灰となし永く根をたつべしとの彼等が連判。此場を無事に歸しおく。寶の詮議が肝要々々。
新藏　とてもの事に寶の在所。神力應護を加はへ給へ。
六兵衛　それこそは淡路の大領、謀叛徒黨の總大將。
新藏　スリヤ、寶は淡路の大領が館に。
六兵衛　相模五郎。とても叶はぬ大望。此場を許すは神の慈悲。
（トどろく\にて、一面に起る。花道もぎしむ。こなたもぎしむ。）

新藏　權現の御告なるぞ。此場は無事に立返す。必ず聊爾すな。
皆々　エヽ。殘り多い。
五郎　家來ども待て〳〵。ハテ金比羅めは中々精を出す奴だなァ。志を無下にもなるまい。家來どもひけ〳〵。
（ト黒裝束はハツトみな〳〵向うへはひる。）
金比羅が世話をやくならば、どうで思ふ様にはさせまい。よいわ、此場は此まゝ立歸らずばなるまい。ハテ金比羅めはしをらしい神めだ。天下を掌握してもあらうならば、庭の小隅に鎭守とも鎭ひ込んで呉れる。思へば〳〵命冥加なやつばらぢや。（ト花道へのつさ〳〵と行く。）
新藏　時行待て。
五郎　用があるか。
新藏　船頭徳藏と双生兒の兄弟。重ねて顔を見違へぬ様に蛇爪の極印。
（ト手裏劍うつ。右の蛇が爪の鎖なり。五郎顔に龍の爪の疵、血流れる。）
五郎　時行が面體に疵を付けんず者。凡そ日本には覺えぬが、汝は中々をこの者ぢや。時行が返禮はまつかう。
（ト九寸五分を出し手裏劍にうつ。六兵衛中にて取る。）
六兵衛　一角が腹切り刀。
新藏　何。一角が。（ト刀をとらへ、エとうつむく。）
五郎　金比羅權現へ奉納の賜物。
新藏　寶をとるか。
五郎　色紙をとるか。
新藏　まづそれ迄は。
五郎新藏　さらば。
（トみな〳〵りきむ見え、五郎しづ〳〵向うへはひる。）

幕

五段目

一千鳥　新之助
一幾代　初藏
一通路　君助
一須磨　林之助
一なべしこ本名權太　金才
一ひけのゐ本名五郎太　新五郎
一岩淵平太本名荒次郎　又太郎
一くれなゐ　三勝
一常陸本名吳服　大吉
一こゆるぎ　粂太郎
一石堂帶刀　彦四郎
一糸姫　大五郎
一多度津新藏　大五郎
一髙ノ備前守　東九郎
一菊池肥後守　友ト郎
一木村土佐守　勘左衛門

一和田筑後守　吉次
一豐竹佐渡守　傳藏
一市ノ瀬和十郎　助五郎
一豐姫　豐松
一象潟姫　市川吉太郎
一淡路大領　岩五郎
一船頭德藏　歌右衞門
一相模五郎　歌右衞門
一奴駒藏本名龜次郎　小川吉太郎
一捕手　大勢
宮薗淺太夫
一道行　宮薗節金太夫
玉川太吉

造り物。結構なる屋敷の體(てい)。向う金襖、二重舞臺、眞中に大きなる時計、鎧櫃直し有り、下座の方に桃の木の仕かけ、手水鉢直し有り、琴唄にて幕あく。

(ト向うより豐姫象潟姫、姫の形(なり)にて雛の道具を持ち出る。後より腰元二人これも同じく雛の道具。其後より常陸腰元にて花活(いけ)に桃の花を活け持ち、くれなゐ雛の道具持ち、なべしこ、ひげのゐ振袖腰元の形(なり)にて提重(さげぢう)持ち、雛の祭(まつり)、右の見えにていづれも本舞臺へ出並ぶ。)

腰元一　申し〱お姫樣、ちつと築山の桃の盛りでお遊びなされませいなア。

腰元二　折角遊んで居るものを、くれなゐ殿や常陸殿が呼びに來て、糸姫樣の雛祭より、ちと前裁でまゝ事したがよう御座りまする。

象潟姫　姉さん、聞かしやんせ。銘々の勝手な事ばかりいふぢやないかいな。

豐姫　常陸、くれなゐ、姉さんは淋しがつてゞ有らう。早う行かうぢや有るまいかいなう。

常陸　ハイ左樣で御座りまする。いつそ一處で、お三人共一緒に雛祭りなされるとよけれど、大座敷と白書院とへお別れなされ、銘々の御雛樣で、いとどお氣苦勞で御座りませう。

腰元一　その代りに糸姫樣の雛樣へ豐姫樣が呼ばれて御出でなされます。象潟樣の雛樣へ姉姫樣を呼んだり、兩座敷へ御出でなされまする。いつそ樂しみぢやわいなう。

くれなゐ　いやればそんなものぢや。同じ屋敷の中で、兩方へ呼ばれ合ふは、イヤもう雛樣程嬉しいものはない。

象潟姫　さうして駒藏はまだ戻りやらぬかや。

常陸　サア、せめて駒藏殿が居られますれば糸姫樣もその樣に淋しがりもなされませぬけれど、御上屋敷へ大領樣をお迎ひに行かれまして遲い戻り樣。したが私らがおまへ樣方を白書院へお

迎ひに行た其後で、此大座敷へ戻られましたかも存じませぬ。

豐　姬　ほんにわしが來る迄駒藏を留めて置いたがよいに。

象潟姬　もし戻つてゐやればよいがの。

くれなゐ　わたしらもお慰め申さうと存じをりましても物言はずのお姬樣に小ゆるぎ殿が、早う迎ひに行け、疾う行けと、せはしう申されますによつて、二人ながらとつばかはとお遣ひに往たので御座りまする。

(トこゆるぎ、この中奧より裲襠衣裳にて出る。)

こゆるぎ　これは豐姬樣、象潟樣。只今お出でなされましたか。

豐　姬　こゆるぎ。姉さんは待ちかねてかや。

こゆるぎ　イヤもう大抵なお待ちなされ樣ぢや御座りませぬ。よく〳〵の事で御座りまする。あの物言はずの御方が、くれなゐや常陸を迎ひにやつたのに、なぜに遲い事ぢや知らぬ。同じ屋敷の中でなんぼ程間のある事で。いつそこゆるぎおぢや。直に迎ひに行かうてゝいうて、もう其段はまだ子供の樣なわいな。

常　陸　それで大抵せきました事ぢやないけれど、お手づからの組重、それにこれ桃の花をお持たせの旆へぢやわいなア。(ト置く。)

くれなゐ　此お雛樣は一對は象潟樣の進上で御座んす。これ二人のお衆、それ此所へ持つて御座んせ。

なべしこ
ひげのゐ　アイ〳〵。

(ト兩人こゆるぎが傍へ提重を、走り持ち行く。)

豐　姬　其桃は姉樣のお雛樣へ供へてたも。

こゆるぎ　これはマア數々のお持たせ。糸姬樣の嘸お悅びで御座りませう。

ひげのゐ　今朝、姉姬樣から來た組重は皆上げてしまうた。ほんに同じ屋敷の中で、あちらへ呼ばれたりこちらへ呼ばれたり、今日は潮干ぢやに、ちつと海へ往たがよい。雛祭程草臥るものはない、とても草臥るなら、よい男と抱かれて　、貰ひたいわいの。

なべしこ　すりやそなたもさう思やるか。姉姬樣は酒はお嫌ひぢやといふて酒盛も入らぬのと、男法度ぢやというて姬御前ばつかり居るのでそか〳〵してどこやら淋しい。酒なりとも男なりとも片一方は許して貰ひたい。このなべしこやそなたはいかう色が悪いぞや。

ひげのゐ　オヽ、そんな事もあらうわいの。

なべしこ　もし昨夜の色話で　したの

ぢやないかや。
ひげのゐ　話位で應へるものか。わしや
戀煩ひぢやわいの。
なべしこ　なに、戀煩ひか。
ひげのゐ　チイなう。
常陸　コリヤをかしいわいの。そなた
の戀煩ひの其男は誰ぢやの。
ひげのゐ　名をいうたとて所詮叶はぬ事
ぢや。わしや恥かしいわいの。
くれなゐ　ホヽそなたも恥かしいという
事知つてゐるか。名をいやつたら品に
よつて叶うまいものでもないわいの。
ひげのゐ　そんならいはうかや。
皆々　サア誰に惚れやつたや。
ひげのゐ　わしか戀煩ひは。
皆々　戀煩ひは。
ひげのゐ　だアれでも大事ないわいの。
皆々　そりやどうして。
ひげのゐ　男に選みはない。誰ぞ抱いて
寢てさへくれたら、此色の青いのはな
ほる。たかは水道の詰つたのぢやわい
の。
皆々　阿房ばかり。
（向うより。）大領樣の御入り。
豐姫　父樣のお出でなされた。ちよつ
と姉さんへそれ持つて往てたも。私ら
は父樣のお供して追付けそれへ參じま
せうというてたも。
常陸
くれなゐ　畏りまして御座りまする。
（ト花手桶を持つて兩人奧へはひる。と向
うより淡路大領白髮散髮長袴羽織にて、
侍連れ出る。）
豐姫　とゝ樣、只今お出でなされまし
たか。
大領　ヲヽ娘、今日は雛祭でいかい造
作で有らう。
皆々　マア／＼お通りなされませい。
（ト大領上へ通る。皆々次第に並ぶ。）
大領　姉の糸姫がゐぬが奥にゐるか。
こゆるぎ　ハイ今日は豐姫樣象潟樣御兩
所の御部屋で雛祭なされまして、たつ
た今お迎ひ遣しましたので御座ります
る。
大領　もそつと早う來うと思うたれ
ど、今日は三月三日の潮干、この淡路、
この間から攝州住吉の邊迄は潮が干て
陸で行かれる。海の景色イヤもうどう
もいへたものではないて。雛祭もよけ
れど、餘り潮干の景色がよさに路草に
つい隙を入れたてや。
豐姫　もし駒藏が迎ひに行きやつた
が、なぜに戻らぬえ。
大領　イヤもう、それに付いて話が有
る。今日は何ぞ一趣向と思うて、駒藏
に五升樽を持たした。何が生白けた奴
が五升樽をかたげた所は、とんと雛の
人形ぢやというて、路々も人が指をさ

す。彼奴も恥かしいかして、主をほつて置いて方々へ拔けをつて、眞赤いな顏で恥かしがり、道に遲れたが追付け戻るで有らう。

象潟姬　エヽ雛の人形ぢやというて人だかりがする位なら女子がたんと惚れるであらう。早う戻つたがよいに。

こゆるぎ　イヤ申し、姉姬樣はきつい御酒がお嫌ひで、ゑひのするのも氣色惡るがりなされるのに、なぜ酒をお持たせなされましたぞいな。

大　領　サア常は禁酒申付け、酒の吟味は腰元の常陸くれなゐ嚴しく申し置いた故、定めて女共が氣を詰めるであらう。今日は節句の祝ひ、糸姬をよけて臺所へ打寄り少々は酒事も許して吳れうと、駒藏に樽を持たせたは、わいらが一年中の氣延ばし、今日の雛の作り物ぢやてや。

ひげのゐ　テモ親旦那樣は粹な御方ぢやの。後にぐつと熱燗にして、なう、なべしこや。

なべしこ　ヲヽひげのゐのいやる通り、酒という聲を聞いたら戀煩ひがなほつたさうな。それ、色の青いが止まうがの。

こゆるぎ　又いかう酒々と喧しういうたら糸姬の癪が起らうぞや。第一酒奉行のくれなゐ殿や常陸殿が叱らうぞや。

なべしこ
ひげのゐ　ほんに毛虫には沙汰無し〳〵。

（トくれなゐ出る。）

くれなゐ　親旦那樣へ糸姬樣が御意なされまするには、ようこそお出でなされました。雛樣のお客に退屈致してをりまする。皆連立つて奥へお出でなされませいとのお口上で御座りまする。

大　領　ヲヽ辭儀のない呼ばれ衆ぢや。それへ行かう。

くれなゐ　こゆるぎさん、駒藏は戻らしやつたかえ。

こゆるぎ　アイなう、大領樣の御供して、路ではぐれて、まだ戻らしやれぬわいなう。

くれなゐ　エヽづつとそれではまた氣色惡るがりなされるわいの。

豐　姬　姉樣よりわしが待ちかねるなれば、迎ひにやつてたもひなう。

象潟姬　いつそわしが迎ひにいかう。

（ト立たうとする。）

大　領　これはしたり。家來が遲いというて主が迎ひに行かれるものか。アレ聞いてくれかし。

くれなゐ　イヤもう、駒藏殿はお三人のお姬樣に大概なお氣に入りぢやによつて、あちらへ引きづられ、こちらへとられして、あの人も大抵の事ぢや御座りませぬ。

こゆるぎ　それなればこそ、男法度のお

屋敷で、あの人ばかり御奉公がお許しぢや。なア親旦那様。

大　領　サアそちは才溌な者故、此屋敷の人数預りの役目を申付け置いた。その心は、どうぞ三人の娘共、どれからなりと嫁入りしてくれるやうにすゝめさゝうと思うての事ぢや。ちつと口はにごつたか。

こゆるぎ　イエ〱、御縁の事は一向御取上げは御座りませぬ。

大　領　どうして縁組を嫌がるぞいやい。

象潟姫　イヤ〱姉様達の縁組さへ片付かぬのに、わたしや嫁入りは許して下さんせ。

大　領　象潟もその通りか。

象潟姫　何のマア姉さんの片付くも見ずに、どう嫁入りがなるもので。わたしや嫌で御座んす。

大　領　何をいうても姉の糸姫が虚性者ぢやによつて、強くいへば癪を起す。三人とも男持たずにゐて何時楽をさせる事ぢやぞいやい。

腰元一　ほんに、方々の大名衆は嫁に呉れい〱というて来ても、嫁入りがお嫌ひぢやは、どうした事ぢやいなア。

腰元二　申し豊姫様。姉御様は放つて置いて、マアお前から殿御を持つてお廻しなされませいなア。

なべしこ　こちらは　　切つてゐるのに、どうでもお姫様は不仁身かしらぬ。

ひげのゐ　わしや此頃は蘞いもの付いたかして寝られぬわいの。

なべしこ　西を見ても、東を見ても。

くれなゐ　又阿房つくすのか。

なべしこ　ムウ、その様にいうてもわしが持つてゐる横本を見ると、　　彌忘うなつてそろ〱〱と。

くれなゐ　阿房盡しやるかや。親旦那様もこゝに御座るのに、何云やらうもしれぬ。そなたは奥へ往て、糸姫様に、追付けそれへ御出でなされますというておぢや。

なべしこ　チヽ、参じませうとも。こんな話聞くと心氣がおこる。どれ〱奥へ往て菱の餅焼いて食はうか。（トはひる。）

こゆるぎ　アノマアひつしよなさわいの。

くれなゐ　イヤモウどうもなる事ぢや御座んせぬ。

（ト岩淵平太本名荒次郎顔に痣を付け、衣裳袴にて出る。）

平　太　大領様に御直談が申したい。御取次を頼みます。

（トこゆるぎ、つか〱と平太が傍へ往て、）

こゆるぎ　イヤ〱お待ちなされませ。此屋敷は女中ばかりで男は一人も叶ひませぬ。早うお帰りなされませ。

平太　イヤ苦しからぬ。拙者は大領の御家來で御座る。

こゆるぎ　イヽヤ、大領樣の御家來、存じませぬ。早う往なしやんせ。

平太　イヤサ、家來に相違ないてや。

くれなゐ　强つて出やしやんせぬと、手をかけまするぞえ。

ひげのゐ　女子ばかりと侮らんすと、首筋持つて撮み出すぞや。

大領　待て〳〵、そりや新參の家來岩淵平太ぢやないか。

平太　大領樣。

大領　イヤサコリヤ、平太。サア身が家來の岩淵平太、此處は女ばかりで、男の出入りを禁め置いた故、女預りのこゆるぎ、咎むるも尤も。今日は節句の祝儀、此屋敷の體を見たいと願ふ故、家來は門前に待たせ置いたれば、彼一人は許してこれへ參れと申渡した。ハテ用事でも有つて參つたか、どうぢや〳〵。

平太　イヤ、その、備前守菊地肥後守同道仕つて。

大領　サア〳〵よいてや。何、娘皆の者。兩人の大名參つたは、もし娘を吳れいなどといふ樣な、何のかのと變改もしにくい。これで物語りして直に歸さう、皆奧へ往て待つてゐい。

こゆるぎ　大領樣のお許しで御出なされたればよう御座んす。お預り申してゐれば、一旦は咎めねばならぬ。御許しなされませい。

平太　御念の入つた御挨拶。

豐姬　そんならお先へ參じます。駒藏が戻つたら早うおこして下さんせえ。

大領　追付け歸るであらう。

象潟姬　そんなら父さん。

皆々　先づ御入りなされませい。

（ト唄になる。皆々はひる。大領平太兩人殘り、）

大領　新參の女子共も有り、やはり、家來になつて御座るがよいて。

平太（實は荒次郎）　何、大領。西國一味の大名はそちが心を疑ひをる故、徒黨の旗頭備前守肥後守同道で參つた。

（ト高ノ備前守衣裳袴にて出る。）

備前守　荒次郎樣。これに御座りまするか。大領殿。ちと談じたい樣子有つて伯父樣と同道で參つた。

大領　今承れば西國一味の大名、身が性根を疑ひ居らるとは。

備前守　イヤサ、かねてこれなる荒次郎樣、相模五郎、貴殿合體して西國大名は殘らず一味連判。

大領　シイ、ヽヽヽ。壁に耳。窃かに〳〵。

平太　イヤサ大望に一味するより、此方よりの出陣を今や〳〵と心掛けると

ある。それに何の沙汰もせぬと云つて我々迄も疑ふはさ。

備前守　そりや、尤も。軍用の手當も見えず。軍勢催促もなく、寶も貴殿が隱し置いたばかり、延引の內を事露顯せば皆心許なう存ずる故、拙者と肥後守兩人請合ひ、事の實否を正しに參つた。肥後守は表に待つて拙者一人罷り通つたは、他見を憚り、窃かに貴殿の胸中を承らんとあつての事。

平太　アノ通り故、同道して參つた。コリャ皆疑ふも尤も故。そちをそちと思ふ故、寶を殘らず預け置く。何事も心底次第。相模五郎も萬事任せて置いたぢやないか。シテ何處に隱して置くとも、出陣はいかゞするとも、上屋敷に隱まはれをるおれさへ知らぬもの。まして一國々々今味方の者は疑ふ筈。サア身も汝が性根が早く聞きたい。

大領　ハヽヽ。氣の急くは尤も。荒次郎樣相模五郎兩人は一國を押領せんといふ謀反人の看板打つて、鵜の目鷹の目の詮議。又此大領は此事に合體してゐるといふ事は鎌倉の奴輩は夢にも知らぬ。此度武將義詮殿は鎌倉を京都へ移し歸る。此不意を窺ひゐるは、かの安否もそこ／＼なる新普請の東山へ攻登り、義詮さへ討取れば、東山の大名は手も濡らさず味方に付く。其上で武將の悴義滿は高が小童自滅するは知れた事。今迄は伯父御を隱まひてじつとしてゐる故、相模五郎が詮議ばかりどさめく故、寶の有處は一向知れぬといふもの。コリャ身共が手を出さぬ故の事。もう出陣に程はない。それ迄は一味の者へも知らさぬが隱密にする謀といふもの。

平太　シテ又預り置いたる寶は一々隱し置いたか。

大領　女ばかりで男を禁制するといふが、石の唐櫃より丈夫な此下屋敷。備前守殿、其具足櫃これへ。

備前守　心得ました。

（ト小具足櫃を大領前に出し。）

大領　これ、此手水鉢の下に軍用金を仕込み置いた。勘合の印も一緒に入れて有るわいの。

平太　すりや勘合の印はその手水鉢の下に。

備前守　シテ又この具足櫃は。

（ト大領鍵出し錠を開け。）

大領　これ、西國大名の他は忍び／＼に諸國の浪人を語らひ、味方させた廻文、お身達の書狀一通外へは散らさぬ。皆この具足櫃の中に斯くの通り。

備前守　ムヽサ。

大領　まだ有る。もし鎌倉より隱密の

間者などを入れ置くまいものでもない。一味連判狀は。(ト小聲になり、)アレアノ一萬度の祓の中へ込め置いた。

平太　ムウ祓の中に連判狀が有らうといふ事は、狼狽へた神も知らぬ事ぢや。シテ白峯の太刀は。

大領　これ、その桃の木の中に。

平太　スリヤ、あの中にや。

大領　幹を割たる中へ押込め、接合はしても金氣の勢にて、花も咲く、常の通り、何んと、ハ見えまいが。

平太　ハテ思ひがけもない。例へ、味方より間者を入れ、一種見出しても、中々殘りの寶揃うといふ事はない。

大領　それで方々へ隱したものさ。

平太　シテ、二ツ引兩の旌は。

大領　そりや又いつち大事の寶。孔明が知恵にも及ばぬ處に隱し置きました。

平太　シテ又今にも出陣の刻限來らば軍勢を集める相圖でも致し召さるか。

備前守　そりや、兼て大領殿より觸れ、此家より狼煙の上れば西國の大小名殘らず軍勢引き具し、此處へ集る手筈に致して御座る。いよ／＼狼煙が相圖で御座る。

大領　ソリヤ申合はせの通り。

平太　其狼煙は何れに。

大領　アレ、あの時計の中にしかけ置いた。今にてもすはといふ時、時計の中より狼煙を上げる。

平太　西國勢を引卒し、打つて登らば一ひしぎ。

備前守　さて驚き入つた。肥後守、拙者兩人手わけの早飛脚を以て一味の大名へ追々告げ知らしませう。

(ト菊地肥後守出る。)

肥後守　これに御座るか。

備前守　肥後守殿。

肥後守　シテ大領殿の心底は。

備前守　滯りなく承つて安堵いたした。委細お話し申さん。

肥後守　イヤ拙者は二心なけれど、大勢の事故疑ひを晴らさん爲に同道致したれば、歸る路にて承らう。先づ申さうは、只今表へ相模五郎と僞り大領殿に直にお目に懸らうと申す者、身は顏を知らぬ取次の態にてこれへ參つた。相模五郎これへ參るは心許ない儀では御座らぬか。

大領　相模五郎は京都東山に隱れ、武將の不意を行ひ相圖いたす筈。卽ち荒次郎樣、こなた對面して歸らつしやつたではないか。

平太　いかにも兵庫の築嶋にて密かに對面し、東山の安否を窺ひ此方へ知ら

す計略にて別れたはやう〳〵翌日。引返して參らう筈はない。シテ格好面體はいか樣な者ぢや。

肥後守　人にすぐれて脊高く、瘠肉に見えて眼の鋭さ。格好の良い男で御座るてや。

平　太　又聲がらは。

肥後守　うそがれた樣で、後からおし出す樣で、うなりの有る聲ぢやてや。

大　領　そりや相模五郎に違ひはないが。

平　太　面體に疵が有るか。

肥後守　イヤ面體に疵は少しも御座らぬ。

平　太　ム、その五郎は、多度津新藏といふ奴に出會ひ手裏劍を受けて面體を損ひしとて、疵を受けたとて見せた。扨は疵がなくば極めて贋物。

大　領　ム、よめた。こりやかの話のある德藏めぢやわいやい。

平　太　眞に日外、身共も讃岐にて德藏めが衣類の素袍を相模五郎が勅使の裝束と取違へた薄闇、大事を打明け謀の裏をかゝれたが、そりや極めて双子の德藏めぢやわいやい。

備前守　スリヤ相模五郎が德藏になつて事を謀るといふ事を聞いて、德藏めが相模五郎となつて此屋敷を伺ひにうせたか。

肥後守　しかし德藏といふ奴は金比羅の守護で偉い奴ぢやげな。

大　領　イヤサ楫柄で世を渡る海とんばうめ、針を棒にいふ世間の噂。なんで有らうとかう致さう。（ト囁く。）

平　太　よし〳〵、こりや。

（ト又二人囁く。）

肥後守　アレ、もうこれへうせる。アノ面を見さつしやれ。

備前守　太い奴の。（ト囁き居る。）

（ト桑名屋德藏、裃大小鈍なる姿にて仔細らしく向うより花道に居る。）

德　藏　誰ぞ取次が頼みたい。

（ト皆々せゝら笑ひ、囁く。）

備前守　シテ其許はどなたで御座る（ト出向ふ。）

德　藏　淡路の大領殿に直にお目にかゝりたい。

備前守　左樣仰せらるゝ其許はどなたで御座る。

德　藏　遠き者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。今、日本に隱れない相模時行なるわやい。

備前守　ヤア、。（ト悔りの態をする。）

德　藏　大領殿に申し談ずる仔細有つて參つた。早く取次がつしやれ。

備前守　ハテ怪しや、瞳に龍の昇る勢ひ有つて音聲天を貫くは、天晴、大將のきざし、ハレ奥床しやなア。

德　藏　ちつとそんな事も有らう。ハテ

こなたはきつい目高ぢやの。
大領　珍しや五郎。大領はこれにゐる。シテ、何用有つて參られた
徳藏　それへ出ませうか。
大領　苦しうない。サア近う〳〵。
（ト徳藏、本舞臺へ來て、）
徳藏　此處でいうても大事御座らぬか。
肥後守　イヤ皆大領が家來で御座る。少しも苦しう御座らぬ。
徳藏　イヤ別儀もない。兼て貴公と申合せ、拙者謀反使になつて寶を盜人致したが、それからおればかりが詮議が強くてどうもならぬによつて、禁中へ驅込みました。禁中といふで別にきんが由につつてあるものでも御座らぬ。內裏樣の事で御座る。
肥後守　內裏へ往て何と御意なされた。
徳藏　身共がいふのには、武將義詮、義滿二人ながら寶もなくてこちらと睨合ひになつて埒が明きませぬ。なんであらうと寶を持つて來ませう程に、國家の主にして下さるかと申したれば、當今の勅諚には、イヤ當今といふて現當に銀出す事では御座らぬ。王樣の事で、王樣が關白殿にいはつしやる事には、オヽよきかな相模五郎、こちらはどこからでも寶さへ持つてくれば武將にして、國家の政道を讓る程に、早う寶を持參せい、とあつて、この如く綸旨を下された。（ト出し、）畢竟問屋の書證文か仕切同然の確かな事故、直に是へ參つたは、かの預け置いた寶を持つて、王樣の處へ往て、直に日本國を鹽漬にして丸呑みに致す。すりや御自分にも半分すゝはき致すといふもの。サア、うまい事ぢや程に急いで寶を受取りませう。
大領　これ〳〵、相模五郎。最前から聞いて居れば身共が寶を預り居るといふが、身は寶を預つた覺えはないぞ。
徳藏　大領。貴殿は氣が違うたか。預つて置いた寶を今更預らぬといふは謀反使に砂打つのか。さうはならぬ。相模五郎ぢや。日本國中を磁石一つで飛廻る男ぢや。老耄に喰はされたといはれては顏が潰れる。サアおこしや。
平太　マア、お待ちなされ。
徳藏　イヤサ證文のない事ぢやと思うて横倒しに出るのか。
平太　サア、よう御座るて。
徳藏　イヤサ、目安付けても取らにや置かぬて。
平太　ハテ扨貴殿の樣にいたすわさ、ノウ御兩人。
肥後守 備前守　左樣で御座る。
徳藏　サア立つて下され。謀反の一つや二つ欲しかやります。喰されたとい

うては、重ねて押が利ませぬ。
平太　尤もぢや。寶渡さう程に、ちよつとそれへ出さつしやれ。
德藏　身共に。
平太　いかにも。
（ト向うへ出る。肥後守備前守引き挾み、）
德藏　出たがなんの用ぢや。
平太　いよ〳〵寶を持つて行けば武將の位になられるぢやまで。
德藏　違ひない。證據の綸旨。
肥後守備前守　あの此綸旨で。
德藏　輕々しう思はぬがよい。綸旨というて別に小便の替りに膿の出るものぢやない。そりや王樣の書かしやつた注文ぢやぞ。
（ト平太、首筋打つて引き下げ、）
德藏　コリヤ、相模五郎をなんとする。
平太　なんとするとは大盜人め。
肥後守　大盜人め。薄墨の綸旨といへば薄い墨で書くと思うてをるか。
備前守　大鷹檀紙薄墨色の紙を用ゐるものぢやわい。
肥後守　サア何者に書いて貰うた。眞直にぬかせ。
平太　コリヤ、うぬは身を見忘れたであらう。身はうぬをよう知つてゐるぞよ。
德藏　そんなら俺を何ぢやと思ふ。
肥後守　ヲヽ德藏といふ事はよく知れてある。
德藏　そんなら德藏ぢやという事は知つてゐるか。
平太　知つてゐるかとは。ようぅぬは丸龜で相模五郎と取違へさせ、此方の裏をかいたなァ。此館へ寶を奪返しに來るとは胴より肝の太い奴の。どうして腹を癒よう。うぬ。かう〳〵。
德藏　アイタヽヽ。
肥後守備前守　大泥棒め。（ト背打にする。）
德藏　アイタヽヽ。
平太　サア。うぬがこれへ入込んだには同類が有らう。他に入込んだ奴を有樣にぬかせ。
肥後守備前守　ぬかさぬと胴切りぢやぞ。（ト振上げる。）
德藏　アヽ云ひます〳〵。なる程、おりや德藏ぢや。こなん達が謀反使うて寶を隱してゐるによつて取返へす智謀計略の思付きは、双子で顏のよう似たを目當に、俺が久しう戻らぬ留守の中、伊勢の湊の女房の處へ相模五郎が俺になつて往たげな。そこで俺はまた相模五郎になつて來たものぢや。もう勘忍して下されいの。
（ト往かうとするを、引戾し。）

平太　聞けば聞くほど太い奴、脛腰の立たぬ程ぶちのめせ〳〵。

（ト備前守叩き、後で引連れ、花道の眞中へ突飛し、德藏隔り居る。）

備前守　うぬが様な奴はいつそ打殺して。（ト振上げる。）

大領　イヤ〳〵お待ちなされ。いはゞ相模五郎が兄弟といひ、同じくば味方にするもよし、差當つて寶の詮議する奴を吟味の爲白狀させておいて、後はどうせうと儘ぢやて。

兩人　それも尤も。

平太　イヤ肝腎の事を失念した。此屋敷に奉公して居る駒藏といふ奴は、ありや高丸龜次郎ぢやて。

大領　スリヤ、駒藏めは高丸龜次郎とな。

平太　讃岐でとくと見覺えて置いた。確かに龜次郎ぢや。

肥後守　すりや、寶の事を嗅いで入込んだと見えまする。

大領　すりや、他に入込んで居る奴があるかいやい。

肥後守　左様なれば却つて事の破れで御座る。

大領　道理で娘共が素振、合點のいかぬ奴ぢやとは睨み置いた。よい〳〵、駒藏めは追付け歸る。何氣なき態に娘の糸姫に和讒いうて自滅する工夫が有る。よい人質。あの海とんばうめを屋敷に留置き、彼奴めを猿にして紛れ者の詮議いたさう。ハテよい奴が手に入つたなア。

（ト德藏四ツ這に這うて向うへ行かうとする。）

肥後守備前守　ヤイ〳〵どこへうせる。

德藏　ハイどつこいも行きや致しませぬ。

大領　ヤイ用が有る。これへ戻れ。

德藏　エヽ。

平太　イヤサ、用事が有る。これへ戻れ。

德藏　身體が痛うてどうも歸られませぬ。

兩人　何とぬかす。

德藏　腰骨が痛うてどうも歸られませぬ。

肥後守　サア、去にたくば去なしてやらう程にマア此處へ戻れ。

德藏　イヤサ、どうも歸りにくう御座る。

肥後守　何んとぬかす。

德藏　拙者騙りを失敗りました。どうぞ歸さつしやつて下されい。（トこなし有り。）

肥後守備前守　そりや何をぬかす。

德藏　前にこんな事いうた役者が有つ

た。

肥後守 備前守　なに馬鹿を盡くす。

（ト備前守つか〳〵と行き、德藏を本舞臺へ引摺り來る。）

大　領　ヤイ。うぬ今打殺す奴なれど、命は助けてくれる。此屋敷に奉公するか。

德　藏　ハイ、此樣に痛うてはどうも去なれませぬ。とうぞ此處で日和待ちさして下さりませい。

平　太　申付ける仔細が有る。違背すると首が飛ぶぞ。

德　藏　ハイ何なりともきゝませう。したが、海の上では飛廻るが岡へ上つては石佛ぢやて。

備前守　イヤ拙者共はもうお暇申しませう。

肥後守　大領殿の心底路々承らう。

平　太　必ず出陣は狼煙が相圖。その手筈違へまいぞ。

兩　人　心得ました。

大　領　矢張こなた樣は家來平太となつて此處に御座れ。兩人して今宵中に怪しい奴を見出すが肝要。

平　太　こいつは囮。やはり放飼ひに致さう。

大　領　それが肝腎。

兩　人　しからばいよ〳〵狼煙が相圖。

平　太　御座らうか。

兩　人　おさらば。

大　領　平太、具足櫃持つて參れ。

平　太　畏つて御座ります。

（ト唄になり、橋懸りへはひる。平太は大領に付き、具足櫃を持つて入る。）

德　藏　俺ばつかりを殘して置いて、なんぢや、放飼ひぢや。人を家鴨の樣に思うてゐるさうな。折角來たのにもう埒が明かぬ。どうぞ去にたいものぢや。

（ト立つて見て、）アイタヽヽ。偉うとづきをつた。

（トなべしこ、ひげのゐわや〳〵と奥より出る。）

なべしこ　隱居樣が盜人を捕まへて置いた程に、部屋へ引摺つて來いと仰しやるが、怖い奴かいの。

ひげのゐ　何の怖い奴ぢやてゝ、高が大領樣に捕まへられる程の奴、二人して引提げて行くわいの。

なべしこ　オヽ爰に居る。われが盜人か。

德　藏　さつきにから聞いて居れば、むごい事いふ和郎ぢや。ついに盜みなどした事はない。此所の親爺殿が匿うてやらうといはれるによつて、二三日掛つてゐるのぢや。マア、ひだるい程に飯喰はして下され。

なべしこ　テモ太い奴ではある。姫御前ぢやと思うて輕蔑たら面へ喰り付くぞ

よ。
ひげのゐ　御託はるなら頬桁引きさいてこましやいの。
德藏　扨も女に似合はぬ偉い膽ぢや。さういや俺も。
なべしこ　何であらうと引提げて往きや。
ひげのゐ　さうせう〳〵。
（ト三人顔見合せ、）
兩人　ヤアこなたは。
德藏　わいらは。
なべしこ　思ひがけもない。
ひげのゐ　諸事は部屋で。
德藏　女中。
兩人　ごんせ。
德藏　シテこいな。
（ト中二階の障子取り、道行、太夫並び居て三重ひきかける。これにて三人奥へはひる。トこれより大夫道行の文句にかゝる。）

〽三千年の桃に契りを較べ來し、花の下紐解きたがる、盛りも仇し物思ひ、好いた殿御に淡路島、幾夜寢覺の關守や、須磨ぬ心の結ぼほれ、しかも結ばぬ糸姬が、そつと座敷を忍び出で、
（ト此淨瑠璃の文句にて、糸姬廣袖衣裳褊襠にて、姬のなりにて奥より可愛らしき裸人形持ち出る。）
〽心の手綱駒藏を、繫ぎ留めんと種々に、思はれたがるなりふりや、會うてどうしてかういうて、それを寄るべに抱付いて、思ひのたけは寢てからと、所體造らう身躾。
糸姬　この駒藏はなぜ遲い。早う戻つて給ひなう。
〽やつせばやつす下郎姿の優男。昔ゆかしの駒藏が、巻樽かたげ花の下、足を早めて歸りけり。

（トこの文句にて駒藏奴の形にて五升樽をかたげ出る。）
〽飛立つばかり糸姬が、抱付きたさも禁酒の酒の、匂ひに隔たれて辛氣閰を撫下し。
腰元皆々　申し〳〵、御隱居樣が呼びまじてぢや、サア早う御出でなされませいなア。
（ト皆々無理に姬を連れ奥へはひる。）
〽腰元共の口々に、サア〳〵お出でと引立てられ、心は此所に沖の石、濡れの小口を無理無體、連れて奥にぞ入りにける。
象潟姬　これ駒藏、今戻りやつたかや。
（ト奥より姬の形にて出る。）
〽象潟涙押留め、今更言ふぢやなけれども、會ふ度毎に口固め、あの移氣な姉樣の、尻目使ひが氣に懸り、二世も三世も變らじと、起請誓紙の代り

には、寶の旗と仰しやんした、其言の薬を力草。雛によそへた下心、祝うて桃の盃は 二世を固めのさゞめ言。女雛男雛の睦言も、わたしばかりが獨言。女のなづむ風俗の、人目は九分十分の、夫婦にならにや何時までも、わしが悶はなほりやせぬ。それに振捨て胴慾な、遣瀬涙の恨み泣き。後に立聞く豐姫が走出て引分けて。

豐姫 これ、姉には辭儀の有るものぢや。

〽いたづらな、自體お前の浮氣から、にくてらしいと思ふ程、可愛いらしいが玉に疵。ならう事ならどうぞまた、其殿振りはそのまゝに、他の人目に怪我な事。みぢん惚人のない様な、殿御に見せて給はれと、常から祈る神樣も、わしが願ひの間違へ、他迄もない兄弟に、寢取られそうで片時も、油斷遣瀬がないわいな。たんと口陰のます花に、移り變るは男の習、知れぬは疾うからお前の惡性、現うか〳〵心の底に、引きや煩ふ燕子花、何時がねやはな花菖蒲、思初めしは深川で、これ見よがしの一踊り、面白い事嬉しい事、盡した〳〵夫婦中。言交したはわしが先。そりや象潟も同じ事、その踊場で忍寢の、心の底は深川の、深い淺いを調べたりや、お前に負けも劣りやせぬ。いとし可愛いに後先や、早い遲いが要る事か。これ、おいてたも、行過ぎた、姉の殿御を寢取る程、不幸な事が有るものか。イヤ〳〵〳〵、何の不幸もいとやせぬ。妹の色を寢取るのが姉の操かいたづらな。たとへ何國の浦迄も、離れはせじと姉妹が、隔てぬ仲も色故に、顏は互に花曇り、涙果しは泣くばかり。男も今は持扱ひ、岩木ならねば返答も、何と障子を押明けて、思ひはいとゞ糸姫が、見合す顏に三人は、悄りうろ〳〵姉妹が、そつと外せば逃げそぐれて手持なく、うそに事かぐ風情也。

駒藏 これはしたり、御花畑の掃除をとんと忘れた。どりや奥へいて精出さう。

糸姫 駒藏待ちや。

駒藏 ハイ、御用で御座りますか。

糸姫 口說いても〳〵嫌がりやるこそ道理なれ、こなたは二人の妹と念比してゐやるの。

駒藏 イヤ、全く。

糸姫 さつきにからよう見てゐたわいの。

駒藏 エヽ。

糸姫 高丸龜次郎樣。

駒蔵　エヽ、これそれいうては。

糸姫　エヽ、お前はなう。（ト胸座とり。）

〽其沒義道かしやんとして、可愛いらしさに取紛れ、恨みいう氣もないわいな。癒い手習ひ不行儀な、譯さへ知らぬわしなれば、お氣に入らぬも無理ならず、ふつつり思ひ留まらうと、躾んで見てもなさけなや。このマア閭は何がなる。月の夕べや花の春、雪の朝も目につかず、お前の顔がちら〳〵と、裸人形のこの兒も、龜といふ字の紋所、二人が中にまうけたい、心盡しの數々を可愛いと思うて哭れもせず、姉々に見替へられ、わしやなんとせうどうせうと、我身をとんと駒蔵が膝に打臥し泣きゐたる。馳走過ぎたる据膳の返事に困る逃げ仕度、突退けて逆ねだり。エヽ氣の惡いお姫様、面白をかしういうたのは二人を騙す口車。おりや可愛いゝのぢやない憎いのぢや。誠眞實可愛いはお前一人。

糸姫　それは本ほに定かいなう。（ト乗せかける。）

駒蔵　何の偽り申しませう。お前は大黒、私は恵比須。〽いか様これがよい口合ひ、拍子に乗つて機嫌顔、川端に[illegible]山雀と、しまひには身を起上小法師振鼓、口へ出るまゝ惡口し、逃げんと袂にしがみ付き、人を縛つて[illegible]、是非にかなへて〳〵と、抱付き吸ひつく嫌らしさ。忍ぶ二人の娘が、見

兼ねてさゝゆる其ひまに、もうしてやつたと駒藏が、愛想盡かしの出放題、戀がしたくば一二　、身體のをぬいて來て、お惚れなされて下されと、駈出す駒藏とゞむる姉妹、隔てる姫、急く妹、悋氣々々の沸返り二ツ巴や三ツ巴、ともに紛るゝ糸姫が、問と擴に正態も泣きしづむこそ便なけれ。

(ト皆々奥へはひる。)

糸姫　これ〳〵駒藏さん、それ程わしがうるさくば、なぜ一思ひに殺して下さんせぬ。エヽ胴慾な。わしや云ひたい事が有つても、妹の樣にえゝ云はぬ、心で思うて焦死に死にますわいなア。

(ト淡路大領、岩淵平太出て、)

大領　娘、妹に戀をし負けて悲しいか。

糸姫　エヽ。

平太　イヤサぞつこん思込んだる男を寢取られて腹が立ちまするか。

糸姫　父樣口惜しう御座んすわいな。

大領　虚性に生れて正直者、嫁入を嫌ふも無理ではない。そちも大領が娘でないか。なぜ思詰めた事一心には通さぬ。

糸姫　どの樣にいうても、死なしやんした母樣が聞えませぬ。なぜ此樣に不束に産付けて下さんしたぞいなア。

平太　夫婦は二世、此世で添はれずばなぜ未來で添はうとは思召さぬ。

大領　なんぼどの樣に思うても、妹が喰付いては放れぬ〳〵。

平太　アリヤ相惚といふものぢやて。

大領　相惚の役か、糸姫か修羅燃やす

程、一倍あちらが可愛ゆうなるといやい。
糸姫　ナント。
大領　われを誑つては抱付き笑ひ、惡ういうてはすい付き、何處もかも引付く樣にあるであらう。
平太　エヽ、うまい事ぢやなア。
（と糸姫、腹の立つ思入れ。）
糸姫　エヽ。死なれぬものかいなう。
（ト泣く。）
大領　こりや平太。そちや道成寺の話知つてゐるか。
平太　それは、かのまなごの庄司が、娘を山伏が女房にせうと騙して、夜ぬけしたを、道成寺へ追ひかけ蛇になつて憑殺した話で。
大領　それ〱、思込んだ男がうるさがらば、此世は鬼とも成つて、憑殺してなりとも、未來で添ふが女の誠といふもの。
（ト糸姫、きつとなつて、）
糸姫　日高川を、蛇身となつて泳ぎ渡り、釣鐘を七卷纏ひ、かの客僧を憑殺した例もある。
大領　さうぢや〱。可愛いさが餘つて憎さが百倍といふ事知つてゐるか。
平太　胸がくら〱致さうがや。
糸姫　と〻樣、平太。（ト奥をきつと見て、）
兩人　サア〱。
糸姫　可愛いさが餘つて。
兩人　さうぢや。
糸姫　やつぱり可愛ゆう御座んすわいなア。（トぐんにやりする。）
大領　エヽ極道め、氣の弱いもよい加減がよい。
平太　コレ、思ふ男を人に抱かして見てゐる氣か。
糸姫　サア、それでも。
平太　心中とは、こりやよからう。
大領　惚れた男を人の花とながめさう樣はない。
平太　切らざなりますまい。
（ト糸姫、取上げ、思入れしてきつとなる。）
糸姫　エヽ、腹が立つて〱。
兩人　殺す氣か。
糸姫　腹が立つ程猶かわゆうて、わしやどうもならぬわいな。
（ト刄物を下に置き、兩人顏見合して、）
平太　大領、これでは行かぬわい。
大領　一向とらまへ所がない。
（ト糸姫、目を見詰む。）
平太　南無三。癪がおこつた。
大領　糸姫が癪がおこつた。皆參れ〱。
平太　早く〱。

（ト象潟姫、豐姫、腰元皆々出る。）

象潟姫　申し、氣が付きましたかえ〳〵。

（ト介抱する。）

平太　駒藏はをらぬか。駒藏〳〵。

駒藏　ハア。（ト出て介抱する。）

平太　それ、水。

駒藏　ハツ。

（ト駒藏、手水鉢の水杓にて汲み來つて、銜み、口から飲まさうとする。妹姉さゝへるこなし。）

糸姫　ウン。（ト氣を付ける。）

皆々　氣が付きましたかえ。

糸姫　今の水はそなたがたもつたかや。（ト駒藏にとり付く。）

駒藏　左樣で御座りまする。

糸姫　エヽ、なぜ見殺しにしてはたもらぬ。

大領　よい〳〵。その虛性な生れ付きでは、どうで、身が代つていうてやらざなるまい。それ、介抱せい。こりや腰元共。糸姫を、

皆々　アイ〳〵。

（ト皆々糸姫を片脇へ連れ行き介抱する。大領駒藏を上座へ直し、）

大領　高丸龜次郎殿。

駒藏　イヤ、粗相御意なされな。

平太　イヤサ、お隱しなされな。大領はよく存じて居ります。

大領　こなたの事は、傾城狂ひに身持放埒勘當受け、其後にて謀反人の爲に預りの寶紛失、將監殿は捕はれ、家も沒落いたしたと、娘共が立歸つての物語り、一家の端のこの大領、何卒寶詮議して再び家を引興さんと存じ居る所へ、こなたが仲間奉公。女ばかりのこの屋敷に知らぬ態にてこなたを置くは、ゆつくりと足を留めさゝうばかり。氣遣ひなしに、サアお名乘なされい。

駒藏　これは思ひも寄りませぬ。私は生れ立てからの徒中間、高丸とやら龜次郎とやら、微塵も覺えは御座りませぬ。

平太　なぜにさう御意なさるゝ。エヽ聞えた。承ればこなた樣の身代りを差上げ、將監樣の命を助けたとの風說。今名乘つては、身代りの事露顯致し、親御のお身の上如何なると御疑ひ、全く他言致す者一人も御座らぬ。

大領　但し、又世間の惡說には、此大領謀反人に味方なんどとの雜談、身にとつて覺えない。こなたの爲に私兩人申合せ、土を分けてなりとも、寶は詮議致さうと存じをる。なぜにお疑ひなさるゝぞいの。

駒藏　更々覺えは御座りませぬ。

平太　スリヤ、この樣に申しても。

駒藏　徒中間の駒藏めで御座りまする。

大領　ハテ、亀次郎でなくば、うぬをかうするわい。（ト柄にて叩く。）
象潟姫　アヽこれ、申し。
（ト寄るを、平太、両人を引付く。腰元寄らうとすると、）
平太　皆寄つたらねじ殺すぞ。
大領　うぬは、なぜ又不義働いた。
駒蔵　イヤ、全く。
大領　どこへ、知るまいと思ふか。淡路の大領が娘、縁組むまでは男禁制と申付けたこの屋敷へ、さへぎつて奉公を望む。合點行かずと思ふうちに、女誑にとり入り、娘共がたつて返へさぬこそ道理なれ、うぬは娘に疵を付けたな。大領が館をつぶしにうせたか、ここな渦虫めが。
（ト捻付ける。象潟姫、豊姫、寄らうとする。）
駒蔵　アヽこれ寄るまい〳〵。イヤお腹立は御尤もで御座りまする。謝り奉りまして御座ります。
大領　うぬは大事の娘に疵を付けて、謝りと云うて事が濟まうと思ふか。
平太　サア、かういふ中にも亀次郎殿なりや一廉大名、此方の聟に取つて不足はない。なう、大領殿。
大領　ヲヽサ、亀次郎殿か。
駒蔵　イヤ、全く。
大領　亀次郎でなくば打殺さうか。
駒蔵　サアそれは。
三人　サア〳〵〳〵〳〵。
大領　エヽ生白けたしやつ面ぢやて。
（ト頭を柄にて割る。）
象潟姫　申し、あなたは。（ト大領に詰めかけ云はうとする。）
駒蔵　エヽこれ〳〵。粗相仰しやるな。私は中間の駒蔵。ハテ何事もいうてよければ直にいふ。たとへどの様な目にあふとても、サア、かの事が叶ふ迄は知らぬ事はいつ迄も知らぬ。いか様とも存分になされませ。
（ト平太、駒蔵を捻付く。）
大領　おのれ。此館へ入り込んだには仔細があらう。娘に疵付けたがよいか、これがよいか〳〵。
（ト薪ざつぱにて叩く。皆々腰元怖がる。大領は駒蔵を叩きのめす。平太、豊姫象潟姫を薪ざつぱにて叩く。右種々模様の中、糸姫傍へ寄らうとしては退き、せんかたなく五升樽の鏡を刀にてこじはなし、杓にてすくひ飲みに飲む。こちらは叩きのめす。腰元皆々叩かれ逃げてはひる。象潟姫、豊姫、叩かれる。）
大領　邪魔になる女郎めは打殺しても大事ない。
平太　いつそ叩き殺してしまへ。
大領　いつそ、うぬを。

（ト振上げる。糸姫、大領が手をしつかと取る。）
糸姫　待たしやんせ。（ト酒に醉ふ心にて。）
大領　邪魔しをるとおのれもぶつぞ。
糸姫　さうしてどうさんす。
大領　こいつを叩き殺せ。
糸姫　イヤ、それより先へお前を。
（ト大領が棒をもぎとり打据ゑる。平太これはとかゝるを投げて、二人をきびしく叩く。）
大領　こりや、うぬ、親をぶつたぞよ。
糸姫　たゝいたがなんとした。
大領　ヤア、わりや酒飲んだか。
糸姫　わしが惚れてゐる大事の駒藏。指もさゝす事はアノならぬ。親とはいはさぬ。たゝき殺すぞ。
兩人　ヤアヽ。
平太　こりや、最前奥で聞いたかの酒ぢやの。
大領　こりや、たまるまいわいやい。
糸姫　恨めしい嫉ましいと思ふわしさへ、ぢつとしてゐるのに、かけも鬪はぬ横合から、どうして杖棒三昧するのぢや。平太、われは家來ぢやないか。主の大事にかける人を何の爲に打擲する。
平太　イヤ、それは。
糸姫　なんの爲に打擲するぞいやい。
（ト叩く。）
大領　娘、そちが嫌はれたが不便さに、汝に代つて。
糸姫　誰が頼んで。口說いてよければわしが口說く。お前をわしは頼みはせぬわいなア。（ト叩く。）
大領　アイタヽヽヽ。
糸姫　形は不束なれ共、心は人に負けまいと、思込んだ心、人に負けぬと思うたに口惜しい。腹が立つて、胸が張裂ける樣なわいなう。
（ト兩人、顏見合せ、ふるひ〳〵。）
大領　アヽ由無い事に腰骨を折ろとした。足下の明いうちに、平太、奥へ行かう。
平太　かのまなごの庄司が娘は、嘸男が憎かつたであらうなア。
大領　ソレイヤイ。娘を連れて逃げをつたといふ所は。
（ト糸姫、きつとなつて兩人を睨み付ける。）
大領　平太、來い。
平太　ハア。
（ト大領腰叩き、兩人奥へ逃げてはひる。）
豐姫　オヽ姉樣、出かさんした。常は氣の細い生れ付きぢやと思うたにならマア。
象潟姫　それ〳〵出かさしやんした〳〵。
（ト兩人して悅ぶ。糸姫きつと相を變へ、

兩人を付廻す。兩人ふるひ／＼、逃廻るを引付け兩人を縛り。）

兩　人　これ／＼姉さん、こりやなんとさしやんす。

（ト糸姫かまはず、駒藏が傍へ往て。）

糸　姫　年月思ひ焦れた戀ぢや。サア返事聞きませう。

駒　藏　サア、お志は嬉しけれど、願ひ叶はぬうちはどうも。

糸　姫　さういはんすりや、（ト引付け。）サア、否であらうが應であらうが、夫婦にならにやおかぬ。これといふも二人の妹。よう、惚れた男をこの樣な腑慾者にしたなア。

豐　姫　これ申し、姉樣、お前は氣が違ひはせぬかいなア。

象潟姫　常とは變つて、こりや唯事では御座んすまい。

兩　人　どうさしやんすのぢやいなア。

糸　姫　どうもせぬ。殺すのぢや。

（ト駒藏をつき放す。）

三　人　エヽ。

糸　姫　この世で添うて呉れぬ男、殺して置いて未來で添ふ。マアさし當る戀の仇、豐姫を切らうか、象潟を殺さうか、いつそ手短かに。

（ト駒藏が傍へ寄る。豐姫象潟姫縛られながら立ちふさがる。立廻り有つて當てる。ウンとのる。駒藏逃げうとする。）

糸　姫　これ動くまい。逃がしやせぬぞ／＼。

（ト駒藏をした／＼と追ひすくめる所へこゆるぎ出て、糸姫をつきのけ、そり打つを留めて。）

こゆるぎ　マア／＼お待ちなされませ。

糸　姫　こゆるぎ、退け。

こゆるぎ　腰元共の知らせで恂りして馳付けて見れば、成程、常のお氣とは違うて、お目の中といひ、こりやマアどうで御座りますえ。

（ト常陸くれなゐ奥より出て、兩方より糸姫を引きはさみ。）

常　陸　情なや糸姫樣、こりや又御酒あがりましたの。

こゆるぎ　糸姫樣は酒をあがると何とするぞ。

くれなゐ　常は虚性なお生付きなれど、酒をあがると力が強う成り、人を殺したがるのが病で御座りますわいなう。

皆　々　ヤアヽ。（ト怖がる。）

常　陸　この事を大領樣も深う包み、その身も病に恥ぢての禁酒、常は下戸、飲み出すと大酒の惡者、もし酒のあるまいものでもないと、わしら二人は酒留める役目に仰付けられたによつて、この病の事知つてゐるわいなう。

こゆるぎ　隨分酒の病の事、吟味するの

に、今日の酒樽が絶體絶命、酒の醉の醒める迄此處に動きはいたしませぬ。
常陸　サア本性にお成りなされませい。
糸姫　嫌ぢや。銚子もて。
こゆるぎ　呼出し酒の上塗、なりませぬ。
糸姫　すりやならぬな。
（ト糸姫、五升樽を引付け吸はうとする。常陸その手をぢつと取り、刀取る手をくれなゐぢつと取る。思入れにて三人見えになる。）
糸姫　こゆるぎ。言付ける。用がある。
こゆるぎ　御用で御座りまするか。
（ト傍へ寄る。中二階より大領平太見てゐる。）
糸姫　主の言付け、背きはせまいな。
こゆるぎ　御主様の御意、天逆な事でも背きは致しませぬ。
糸姫　背かぬな。
こゆるぎ　なんのお前。
糸姫　妹を殺せ。
こゆるぎ　エヽ。
糸姫　目の前で、二人とも殺せ。
こゆるぎ　アノお二人のお姫様を。
糸姫　憎うて〳〵。この身をさかるゝ樣なわいやい。
常陸
くれなゐ　そりや餘り。
（ト兩人掛り立廻り有つて、）
糸姫　こりや二人ともに手向ひか。
くれなゐ　戀が叶はぬというて女の情を忘れ、妹御を殺せとは、それが姉の行作か。
常陸　酒機嫌であらうが悋氣であらうが、二人はそれをしづめるが役目、いつ迄も意見申さにやなりませぬ。
くれなゐ　この戀はふつつり思切つて、本性におなりなされませ。
常陸　たつて仰しやると、縛つておいて御意見いたします。酒の醉の醒める迄は、主從のみさかひはない。手をかけまするぞ。
糸姫　妹が肩持つは、扨は、この戀の仲人したは、わいらぢやな。
くれなゐ　イヤ千も萬もない。醉を醒まして思切らさにや置きませぬ。
糸姫　スリヤ、わしを縛るか。
兩人　知れたこと。
糸姫　わいらは命が二つあるか。
兩人　さう仰しやりや。
（ト兩人掛り、立廻り有つて、糸姫兩人を當てる。兩人倒れる。ト駒藏逃げうとするを、糸姫きつとなり、）
糸姫　これ龜次郎さん。逃がしやしませぬ。
駒藏　ハイ。
糸姫　かう一人々々小口から酒の肴に試しもの、龜次郎さん。これ、なぜに

ものをいはしやんせぬ。
（ト寄る。こゆるぎ枷になり。）
こゆるぎ　イヤ〱、申し、餘りあなたの思召しが厚いによつて、何と返事をせうと案じての事で御座ります。
糸姫　まなごの庄司が娘が容體の寢間で、そなたより他に女房は持たぬ。連れて往なうと騙して置いて逃げをつた時には、嚥腹が立つたであらう。
こゆるぎ　なんのマアそれも女の心の取置きで、腹立ていでも濟みさうな事ぢやと、マア私は存じまする。
糸姫　イヽヤわしは濟まぬ。云ひたい事もえゝ云はずに、女の情を造るのは僞り者、嘘つきぢや。一ぱい悋氣して憎い奴は切りさいなむが、男を思ふ心の眞實。正直に現はすのぢや。
こゆるぎ　心で思ふ通りを正直に現はせば、男は皆愛想盡かす。氣に入るやうに繕へば嘘つきになる。姫御前といふ者は情ないものでござりますてや。
糸姫　妹を切りさいなんで思ふ男と夫婦になるが、この糸姫はそちが目からは貞女と見えるか、惡女と見えるか。
こゆるぎ　わしが目からは天晴貞女樣と見えまする。
糸姫　アヽ貞女と見えるか。
こゆるぎ　ハイ。
糸姫　ハテ命は惜しいものぢやなア。
こゆるぎ　イヤもう命程大事のものは御座りませぬ。既に御意見申した二人はアノ通り、わたしが貞女と申しましたは人の知らぬ味ない所で申しましたわいなア。
糸姫　そりや又どうして。
こゆるぎ　ハテもう、虚性なものいはずといふはしれた姫御前の常。それを一段打越して大酒を飲み、女の行儀を忘れ、現在妹御の戀を偏執して、その男迄殺さうといふは女の風上にも置かれぬ。それにマア肥え太つたその身體や顏を、男が好くか好かぬか、マア鏡でなりと見たがよい。（トきつと云ふ。）
糸姫　なんと。（トこなし。）
こゆるぎ　どこ一ツ取り所のない女の癈物。顏の皮の厚う、男に惚れさへすりや、かなふものぢやと他の女と同じ樣に、正直に思召す所が、お前一人前の心の實、お前の手でお前の心を見れば、アヽ天晴貞女樣ぢやと申す事で御座りまするわいなア。
（ト糸姫ぎしむ。こゆるぎ腰据ゑる態にて目をつける。糸姫も思入れあり。）
糸姫　こゆるぎ。刀冷やす水汲め。
こゆるぎ　ハイ。
（ト行かうとする。糸姫駒藏へかゝらうとする。こゆるぎふさがる。）

糸姫　サア水汲め。
こゆるぎ　ハイ。
(ト行かうとする。切掛けうとする。ちやつと見え。)
糸姫　汲めいやい。
こゆるぎ　ハイ。
(ト付け廻しあつて、水を汲む。間引張りにて、糸姫が刀へ水かける。)
糸姫　モ一ツ汲め。
こゆるぎ　エ。
糸姫　サア、また汲め。(ト見えあり。)
こゆるぎ　ハイ。
(ト汲みにかゝる所を、切付ける。釣瓶にてあしらひ留める。)
こゆるぎ　糸姫様。コリヤなんとなされます。
糸姫　妹をかばふおのれ、殺してしまふ。
こゆるぎ　さうして、どうなされます。

(ト此うちより、常陸くれなゐ起きてゐる。)
糸　思ふ男と添ふのぢや。
こゆるぎ　亀次郎様は大名。こなたの様に肥え太つた悪女に添うてたまるものかいの。
(トぢつと、立廻りにて又留り。)
糸姫　なんといふ。
こゆるぎ　それ、お二人の縄解いた。(ト又思入れあり。)
常陸くれなゐ　合點ぢや。(ト象潟姫豊姫の縄を解く。)
糸姫　それは。(ト少々立廻り有つて、留める。)
こゆるぎ　こゝ鬮はずと、早う／＼。
(ト糸姫こゆるぎ立廻りの有るうち、皆々橋懸りへ行きかゝる。所へ、大領平太賓人出て立ちふさがり、)
大領　高丸亀次郎。そこ動くな。

糸姫　惚れてゐる大事の男、人には鬮はさぬ。指でもさすと許さぬぞ。
(トこゆるぎを拂ひ、大領、駒藏を橋懸りへ追込む。皆々亂れて付いてはひる。引返して、大領、平太賓は荒次郎走り出る。)
大領　荒次郎様。
荒次郎　大領、これはけしからぬ騷動に成つたが、どうせうと思ふぞ。
大領　亀次郎めを殺さすつもりでしかけたのに、酒くらうて思ひの外、此様になつたて。
荒次郎　エヽ、つい殺せばよいに、餘り魂膽過ぎるによつてぢや。
大領　デモどういう奴が傍にをらうも知れぬ。マア／＼、兎に角怪我せぬ様にさつしやれ。
(ト大領、吐息つく所へ、駒藏走り出て、行きあたる。)
大領　ヤア亀次郎。シテやつた。

(ト立廻りにておさへる。荒次郎は拔いて切らうとする所へ、徳藏奥より鉢卷にて出て、支へ〳〵)

徳　藏　イヤ、さうはさせぬわ。(ト睨む。)

駒　藏　ヤアそちや徳藏ぢやないか。

徳　藏　これ、旦那。油斷さつしやるな。そこにゐる痣の有る奴は、いつやらの毬栗坊主奴ぢやぞえ。

駒藏實は龜次郎　ヤア。扨は荒次郎ぢやよな。

大　領　ヤイ、海蜻蛉め。

荒次郎　龜次郎、覺悟せよ。

徳　藏　ヤイ、無頼奴、さつきにはわざと動かれぬ顏をしたは、此處に居て寶を詮議せう爲ぢや。いつそおのれら引つ縛つたら、樣子が知りよ。コリヤ桑名屋の徳藏ぢや。おのいら、一人や二人苦にする樣な舟頭ぢやない。鉾が有るわい〳〵。

大　領　憎つくい下郎め。

荒次郎　此奴ぐるみに打殺せ。

(トかゝる。徳藏棒を振り廻す所へ、糸姫走り出て、大領荒次郎徳藏を取つてはふり、龜次郎逃げうとする。時計の陰へかがむを糸姫あちこちと追廻る。この間、三人の可笑みの立有り。上には龜次郎を追はへかけ廻る。)

糸　姫　エヽ面倒な。

(ト時計を叩き碎く。中より狼煙上る。)

大領・荒次郎　南無三寶。

(ト恟りする。龜次郎逃げる。糸姫追はへはひる。徳藏留めるを、突倒し追うてはひるを、徳藏も追かけはひる。鉦太鼓法螺遠攻めになる。大領荒次郎きよろりと時計を眺めゐる。)

荒次郎　大領。この狼煙を上げると西國の大名、味方を追々引卒し、此處へ詰懸けるが、コリヤ、どうしたものであらう。

大　領　折角仕掛け置いたものを。おれぢやてゝ、どうせうぞい。

荒次郎　それいうてゐる隙に、徳藏めが連退くまいものでもない。身は徳藏めを打殺す。そちは龜次郎を引出せ。

(トいうて走りはひる。大領、時計を眺め居る。)

大　領　この狼煙を上げては。アヽ、詰らぬものになつたわやい。

(トうろ付いてゐる所へ、糸姫荒れ出る。大領を引きこかす。)

大　領　ヤア、汝は。

糸　姫　大事の男をどこへ逃した。

大　領　おりや、知らぬわいやい。

糸　姫　サア男を出しや。(ト付廻る。)

大　領　こりや〳〵、腰元共〳〵。糸姫を縛れやい。

腰元共　ハアヽ。

(トひげゐる、なべしこ腰元大勢、襷鉢卷

にて渡金、火熨斗物指、何にても把手の代り、銘々差出し、糸姫を取巻く。）

皆々　糸姫様。動くまい。

糸姫　わいらは取巻いて何とするぞ。

皆々　組留めまするぞ。

大領　さうぢや〳〵。縛し上げい。

皆々　やらんぞ。

（ト四人かゝる。糸姫立廻りあつて傍なる桃の幹へかゝる。それはと、大領皆々かかる。糸姫、桃の木を抜き差上ぐ。皆々驚き追つかける。）

大領　こりや、桃の木をなんとしをる。

（ト留めにかゝる。）

糸姫　こなさんを。

（ト打付ける。大木割れて中より袋入りの刀出る。大頭、それをとかゝる。糸姫木の折にて、大領追ひかけはひる。こゆるぎうちより出て、あたりを見て、太刀を出し、篤と見て頂き隠し、橋懸りへ逃げてはひる。早遠攻め。と向うより高ノ備前守本鎧兜指物して出て、花道の眞中に立留り。）

備前守　ヤア〳〵、淡路大領はいづくに有る。高ノ備前守で御座る。相圖の狼煙が上つたる故、味方の軍勢引連れ門前迄参つたり。最早出陣の刻限で御座るかな。

（ト大領、奥より出る。）

大領　エヽなに云はれるやら。そこ所ぢや御座らぬわいの。

備前守　これ〳〵、そこ所ぢやないとは、なんの事ぢや。

大領　これ、聞いて下され。龜次郎めを見付け出し、手を濡らさず仕舞うて取らうと思うた所に、娘が酒にくらひどれて暴れ出し、時計を此通りに打破いでしまひをつた。こりや、怪我に上つた狼煙ぢやわいの。

備前守　なんぢや。怪我に上つた狼煙ぢや。そんな不埒な事が一味の大名へどう云はれるもので。門前にはもう軍兵が二三百もたまつてゐる。どうしませうぞいの。

大領　マア今はいかう取込んでゐる。後におれが斷り云はう。一味の大名が來るならば、先繰に表の桝形へためて置いて下されいの。

備前守　さうなとせざなるまい。エヽ、埒もない。備前守ともあらうものが火消の人足に雇はれた様な。

大領　ヲヽ尤もぢや。高は狼煙の手あやまちぢやと思はつしやれ。

備前守　阿房らしい。

（トぼやき〳〵、向うへはひる。大領は尤もぢや〳〵というてゐる所へ、龜次郎走出て、大領に行當たる。）

大領　ヤア龜次郎か。うぬを。

(ト捕まへる。立廻りある所へ、糸姫走り
出る。大領を引退け。)
糸姫　どこへもやりやせぬ。男にする
ぞ。
(ト龜次郎、手水鉢の後にかゞむ。大領と
どまらうとする。糸姫と三人ぐる／＼廻
る。このうちに、)
糸姫　エヽ、面倒な。
(ト手水鉢をはふり、下より千兩箱大分ば
ふり出す。この間に龜次郎は逃げてはひ
る。仕舞ひに蒔繪の箱をほり出す。)
大領　コリヤその勘合の印を。
(ト取らうとする。糸姫、箱持ち叩く。大
領逃げはひる。糸姫箱を打付けて追うて
はひる。後へ奥より、こゆるぎ過りを見、
そつと出て、勘合の印をあらため頂き、
懐へ入れ、橋懸りへ走りはひる。向うより
菊地肥後守、木村土佐守、和田筑後守、豐
竹佐渡守皆々、本鎧頬當指物にて出て、
花道に並ぶ。)
肥後守　大領殿／＼。菊地肥後守で御座
る。
土佐守　木村土佐守で御座る。
筑後守　和田筑後守で御座る。
佐渡守　豐竹佐渡守で御座る。
肥後守　相圖の狼煙が上りましたる故、
手次々に狼煙を上げ、暫時の中に、西
國一味の大名殘らず詰めかけました。
シテ出陣の刻限はな。
四人　只今で御座る。
(ト大領、奥より氣のもめる心にて出る。)
大領　アヽ皆遠方御苦勞／＼、折角御
座つたが怪我ぢや／＼。
四人　なに。怪我ぢやとは。
大領　これ見さつしやれ。軍用金もそ
こらだらけ、龜次郎めが入込みしに、
幸ひ娘が惚れてゐるを嫉妬にこと寄
せ、殺さうとおだて過ごして、娘が酒
くらうて最中を打破ぐうち、時計の
中にしかけて置いた狼煙を、あの通り
打砕いてしまひ、怪我に上つた狼煙ぢ
やわいの。
土佐守　エヽ、なんの事ぢや。それとも
知らいで、皆詰めかけた。コリヤどう
したものであらう。
筑後守　アノ大勢の軍兵が、怪我ぢやに
往ねというたとても、大抵の事ぢやな
い。
佐渡守　御器皿洗ふ樣に、つい怪我ぢや
とは、輕はづみな和郎ぢやわいの。
皆々　コリヤマア、どうぢやぞいの
／＼。(ト口々やかましくいふ。)
大領　エヽ、人の氣のもめてあるのに
その樣にじやわ／＼いうて下さるな。
とつと、氣がもや／＼してあるわいの。
(トしかたにて、顏塑めいふ。)
皆々　ぢやとてこちの身にもなつて見

やしやれ。
大　領　サア〳〵、たかが廿四五人の大名ぢやないか、銘々の家來に、一口づつ云へば、つい事の濟む事ぢや。マア皆表へ行て、ひとつに溜つてゐて下され。ちと此處が片付いたら、おれが往て斷り云ひませう。早う往て下され〳〵。
肥後守　そんなら表へ引かざなるまい。
皆　々　阿房らしい。
（ト四人、ぼやき〳〵はひる。後へ糸姫、具足櫃を抱へ出す。荒次郎後より出る。）
大　領　それ〳〵、アノ大名に加勢を頼んで。
糸　姫　サア、男はどつちへやつた。
大　領、こりや、この具足櫃をどうしをる。
糸　姫　サア男を出しや。（ト具足櫃を打付ける。割れて、廻文數多出る。）
兩　人　ヤアそれは。
（ト拾ひ逃げる。糸姫蓋にて兩人を打廻はす。くらはされながら、逃げてはひる。糸姫追つかけはひる。後へこゆるぎ奥より出で、廻文を殘らず懷へ捻じ込み逃げてはひる。象潟姫豐姫走り出で、行きあたり、顏見合せ。）
豐　姫　ヤア象潟か。
象潟姫　豐姫さん。
豐　姫　どうぞ表へ出ようと思うて、外へ出て見たれば、皆鎧兜にて詰めかけてゐる。どうぞ築山からお伴はなるまいか。
糸　姫　なんぢや。築山ぢや。（ト奥よりいひ〳〵出る。）
兩　人　ヤア、。
糸　姫　築山はおろか、奈落の底へはひつても追ひかけて添はいでおかうか。
（ト欄間の一萬度の祓を下す。所へ大領出で、それはといふ心にて、あせりゐる。）
大　領　ヤイ〳〵、その一萬度の祓をなんとするのぢや。
糸　姫　わし一人を酒の醉人にして、よう戀しい男を逃すなア。（ト祓をごじ割る。中より連判狀出る。）
大　領　ヤア、それを。
（トかゝるを、ありあふ長刀にて追廻る。皆々逃げてはひる。奥よりこゆるぎ出で邊りを見て、連判狀を拾ひあげて見て、頂き懷へ入れ、橋懸りへはひる。遠攻め、アリヤ〳〵の聲。ト向う棧敷の櫻の枝の上に、石堂帶刀黑裝束にて、遠眼鏡を見てゐる。）
帶　刀　市ノ瀨和十郎。矢立を持て。
和十郎　ハツ。（ト場の中より、梯子を櫻の枝へかけ、帳面矢立を持ち、梯子へ上る。）
帶　刀　大かた寶も揃うたさうな、一ツ書にせい。

和十郎　ハッ。（ト帳につける思入れ。）
帶　刀　西國一味の大名は、殘らず門前に詰寄せたと見える。
和十郎　左樣相見えまする。
帶　刀　今日は三月三日。汐干の時節、淡路島住吉其間は凡そ八里、干潟となつて、往來自由なる程の汐干。
和十郎　この櫻が岬は住吉と淡路島の眞中への出島。兩方共に手に取るやうに見えまする。
帶　刀　住吉にて多度津新藏が相模五郎を付出し、役人共が取卷いたとの知らせ。海の上を徒歩にて自在。大領が館の騷動。口面を見れば、相模五郎を取卷き居る住吉の大騷ぎ。今日が、國家安全の固まり口、ハテ心よい景色ぢやなア。
（トばた／＼にて、糸姬、髮をさばき大荒れにて、常陸、くれなゐ、なべしこ、ひげのゐ象潟姬豐姬いづれも鉢卷にて取卷き出る。糸姬、長刀にて其他の者は梯子の大立の見え。日傘など種々のものにて、樣々大立、よろしくあつて、皆々二重舞臺の上にて七人ながら見えになり留る。）
（ト廻り道具。眞の神樂になり、住吉神前にて、相模五郎白丁烏帽子傘下駄にて金燈籠を持ち、きつと立つてゐる。）
五　郎　淡路の方に、狼煙焔々と燃え上るといなや、常にたなびきし紫の虹。龍の形の雲も散亂して一天霞み、燒金のごとき光りものわが眼を貫くは、扨は大領に預け置いたる寶、敵方の謀に奪はれしか。今の光りものは、易にては亡運とて、人の運命亡ぶる凶事。わが瞳を貫きしは、最早天命爰に歸するか。ハテ口惜しやなア。
（トきつと見えする。ト橋懸りより、捕手大勢、弓張十手にてばら／＼と出る。）
捕手大勢　相模五郎。腕廻せ。
五　郎　スリヤ身共を相模五郎と見たか。
皆　々　おんでもない事。
五　郎　ハ、、、。たとへ運命は盡きたりとも、唐土の高三鐵は拳を持つて怒れる虎の頭を割る。日本國を打碎く一本立ちの相模五郎。一々に捻首ぢや。覺悟ひろがう。
（ト見えになる。皆々十手振上げ。）
皆　々　やらぬぞ。
（トこの儘にて道具元の通りに廻り。）
（ト糸姬、元の人數梯子の立して居る見えにて、これよりまた／＼と皆々大勢立有つて、糸姬皆々を橋懸りへ追込む。ト橋懸りより大領荒次郎兩人して龜次郎を引立て出る。）
荒次郎　サア覺悟せい。

（トおさへると、奥より徳藏飛んで出て、
兩人を引きのけ。）
徳藏　さうはさゝぬわ。
荒次郎　又邪魔ひろぐな。
徳藏　旦那殿。徳藏が大船に乘つたと
思はつしやれ、ようそろ〳〵。
荒次郎　うぬ。
（ト切つてかゝる所へ、向うより帶刀走り
出て、徳藏立廻りにて、荒次郎を突飛ば
す。帶刀、直に取つておさへ繩掛ける。徳
藏、大領を突飛ばす。同く繩かける。）
龜次郎　ヤアヽ、こなたは石堂帶刀殿。
（ト帶刀、徳藏に向ひ、）
帶刀　船頭徳藏。そちや表へ廻りて軍
勢共を召取る加勢の致せ。
徳藏　ハツ、シテ來いな。（ト橋懸りへ
走りはひる。）
帶刀　龜次郎、シテ、寳は大方相知れ
たか。
龜次郎　ハツ相揃ひまして御座りまする。
常陸　帶刀樣。
帶刀　女房呉服、シテ寳は。
常陸實は呉服　弟龜次郎が身の言譯（いひわけ）。
（トこゆるぎ、奥より出る。）
こゆるぎ　白峯の太刀、勘合の印、諸國の
廻文、連判狀、相揃ひまして御座りま
する。
（ト皆々を白臺に乘せ、帶刀前に置く。）
くれなゐ　これで龜次郎樣のお身の明り
は立ちまするかな。
帶刀　シテ二ツ引兩の旌は。
（ト糸姬、小さき鎭守の小宮をだかへ、象
潟姬豐姬付きて出る。）
糸姬　申し〳〵龜次郎樣。天井下屋迄
探して見ても知れぬ筈、この鎭守の中
に御座りました。お渡し申しまする。
龜次郎　エヽ忝い。御旌差上げまする。
（ト帶刀に渡す。）
帶刀　寳は殘らず相揃うた。
呉服　この寳が手に入るからは。
こゆるぎ　糸姬樣。お前の戀は叶ひまし
たぞえ。
糸姬　どうぞ父（とゝ）樣の命乞ひを。
くれなゐ　そりやお氣遣ひなされまする
な。
荒次郎　待て〳〵。石堂帶刀迄入り込み、
其上に寳の有りか。女め迄が一つに
なつて、大領。コリヤどうぢや。
大領　ヤイ、おのれや酒の醉は醒めた
のか。
（ト糸姬、大領の胸座（ぐら）とつて、）
糸姬　コレおまへの命が助けたいばか
りぢやわいの。（ト泣く。）
大領　何をぬかす。とんと合點が行か
ぬ。
豐姬　姉さん、お前は。
象潟姬　本性かいなア。

龜次郎　この寶を詮議せうばつかりに。

呉服　酒が病と言立てにして。

くれなゐ　この館の家探しぢやわいな。

象潟姫 豐姫　エヽ。

こゆるぎ　龜次郎樣の姉御樣と言合はして、毎日吟味しても知れぬこそ道理なれ。ようも〳〵あそこや此處へきめこまやかに隱しておきやつたなう。

帶刀　サア叔父御、荒次郎樣。ようも相模五郎と加擔なされたなう。ヤイ大領。そちが棟梁となつて、盜み取つた寶を預り、西國の大名を一味させたる事、龜次郎が密かの訴へ。糸姫が親の命乞ひ、孝心を聞屆けてくれる。女房の呉服、德藏が水夫の者の女房共を入込ませ、館の次第は櫻の岬より遠眼鏡にて毎日檢分。誤つて狼煙を上げ、徒黨の大名を門前へ集めたるは天の網。飛道具にて取卷まかせ、一人も殘らず締め上げさせたわやい。

大領　スリヤ味方の大名は殘らず締め上げたか。

帶刀　ヤア〳〵市ノ瀬和十郎。繩付き殘らずこれへ引け。

ひげのゐ なべしこ　やんざ〳〵。

(ト右の鎧武者に繩をかけその繩の先を長うして、なべしこ、ひげのゐ、頭は女形大肌ぬぎ尻からげ、引舟の樣に體にまとひ、和十郎先に立つて引いて出る。高ノ備前守、菊地肥後守、木村土佐守、和田筑後守、豐竹佐渡守他に一兩人も引かれ出る。又殘りの人象は樂屋に餘りある心にて、橋懸りへ皆々並ぶ。)

荒次郎　こりやどうぢや。

和十郎　船頭徳藏は、門前に張番致し、繩付の數改めをりまする。

龜次郎　市ノ瀨和十郎か。

和十郎　若殿。先づは御堅固で悦び奉りまする。

なべしこ實ハ權太　おれは徳藏が水夫の者柱舵の權太ぢや。叔父御、久しいの。

ひげのゐ實ハ五郎太　徳藏が手飼の水夫の者五郎太といふ靑二才ぢや。

皆々　何と、ようした者であらうがの。

大領　エヽ無念なア。

備前守　ヤイ大領の大だわけめ。埒もない狼煙を上げて、我々も此樣な繩目の恥に及んだわいやい。

肥後守　石堂帶刀樣へ申上げまする。皆一統に心を改め謝り奉りまして御座ります。何卒御赦免下されませうならば。

皆々　有難う御座りまする。

帶刀　改めて謝るに憚る事なし。この上ともに忠勤をはげんでよからう。

皆々　エヽ忝い。

帶刀　寳を尋ね出したる功によつて、龜次郎は先知相違なう仰付けらるゝぞ。

龜次郎　エヽ忝い。

糸姫　妹、樣子を聞いて腹が立たう。堪忍してたも。

豐姫　勿體ない。これ程の心中立てさしやんしたもの。

象潟姫　微塵も恨みは致しませぬ。

糸姫　この不束な上に、酒の病を顯は

しては恥かしいわいの。
亀次郎　女房糸姫。二世かけての夫婦ぢやぞや。
こゆるぎ　後の二人はお妾ぢやわいな。
呉服・豐姫・象潟姫　エヽ忝い。
（ト遠攻め近付く。）
亀次郎　アノ遠攻めの近付いたは。
帯刀　相模五郎は住吉にて多度津新藏が付出し、潮の干たる海邊に追出し、汐干の海が捕手の場處。
荒次郎・大領　ヤアヽ。
帯刀　和十郎、早く見て参れ。
和十郎　畏りて御座りまする。
（ト橋懸りへはひる。帯刀、荒次郎傍へ寄り。）
帯刀　サア叔父御荒次郎殿。ようも相模五郎と加擔なされたなう。最早かくなるからは是非に及ばぬと諦めて、まこと足利の正統なる御覺悟が見たい〳〵。
（ト縄を解き、荒次郎、無念の思入れあつて、身ごしらへして、）
荒次郎　引寄せて結べば柴の庵かな。解くれば元の金糸なりけり。（ト腹へ突込む。）
帯刀　オヽ天晴〳〵。（ト介錯する。）
亀次郎　叔父御がお果てなさるからは。
帯刀　まだしもの事。オヽ重疊々々。
（ト和十郎、走り出で。）
和十郎　申し上げまする。相模五郎を多度津新藏が付出して、ひどく働きましたる所に、相模五郎廿尋餘りの大蛇と成つて、海へ飛込み泳ぎ渡り、この屋敷の裏門より築山へ駈込みまして御座りまする。
帯刀　この屋敷の築山へ駈込んだとは、飛んで火になる夏の蟲。北條が先祖、江の島辨天より龍の爪を授かり、これに鎖を付け、蛇爪の鎖ともてはやす。一大事に及ばん時、北條の餘類たる者、蛇爪の鎖を以て惣身に血をあやせば、忽ち蛇形を顯はすと聞き及ぶ。何ぞ怖るゝに足らん。命を助けし諸大名。味方始めに働き召され。
土佐守・筑後守・佐渡守　畏つて御座ります。
帯刀　それ、縄を解け。
（ト皆々の縄を解く。）
亀次郎　して大領が身の上は。
（帯刀、刀を抜き、側へ寄る。糸姫取付き、）
糸姫　もし、お約束の願ひの通り。
こゆるぎ　孝行の心に免じて。
皆々　どうぞ、
（ト帯刀、大領が髮を切り。）
皆々　これは。（ト皆々悔り。）
帯刀　大領が首はとつたぞ。
大領　スリヤ命は。
帯刀　死骸は呉れた。勝手に葬れ。

皆々　エ、忝い。

帶刀　皆、築山へ廻れ。

皆々　ハア、。

（ト皆々續いて奥へはひる。）

（ト道具廻り、裏座敷の體、櫻の盛り、前に捕手大勢取巻く。やはり遠攻めにて。ト相模五郎鯱形の衣裳蹴込にて捕手人形を差上げゐる。捕手大勢。）

皆々　やらんぞ。

（トこれより高提燈、松明にて向うへ出る。右の鎧武者は橋懸りより出かけ取巻く。本舞臺へ上ると、多度津新藏捕手の姿、十手にて奥より出る。）

新藏　とつた。

（ト立廻り有つて、方々へ行かうとする。いづれも先々より鑓ふすまにて取巻き、橋懸りへ行かうとする。帶刀、金比羅の大きなる金の幣を持ち出で、相模五郎に差付ける。五郎たぢ〳〵と後へ寄る。）

帶刀　サア相模五郎。最早叶はぬ。尋常に腕廻せ。

五郎　エ、無念なァ。

新藏　國家の盗賊。兄一家が讐。

五郎　日外よりこの五郎に。

新藏　會はう。

五郎　會はうと。

新藏　思うてゐたに。

五郎　ハテ悦ばしい。

兩人　見參ぢやよなァ。

（ト兩人見えになる。）

いまだ狂言も御座りますけれども、殊の外夜に入りますれば、直に衆太郎所作事を御意に入れまする。御神妙に御見物の程を願ひ奉りまする。

（トみな〳〵辭儀する。）

幕

天満宮菜種御供

役人替名

役	役者
一 菅秀才	尾上丑之助
一 腰元如月	小川八蔵
一 同 彌生	三桝若松
一 同 皐月	嵐八重八
一 同 水瀬	花桐淺二郎
一 官女松の局	澤村雛鳥
一 下役太助	三名川庄蔵
一 官女花の局	嵐萬三郎
一 奴早助	中田善右衛門
一 小姓求馬	中村万蔵
一 物かは宰相	嵐十五郎
一 若黨良助	嵐十五郎
一 百姓頓兵衛	三桝傳蔵
一 舎人たくら丸	三桝傳蔵
一 藤原宿禰	芳川乙五郎
一 笠見藏人	芳川乙五郎
一 辨の宰相	豐松半三郎
一 腰元青柳	豐松半三郎
一 奴宅内	花桐伊三郎
一 百姓太郎兵衛	山科文三郎
一 藤の定國	山下東九郎
一 ねぶかの九助	山下東九郎
一 曾根村みどり	三桝松之丞
一 官女柳の局	嵐雛二郎
一 腰元あやめ	嵐雛二郎
一 在所娘およね	小川千菊
一 三善清貫	三桝他人
一 白太夫悴荒藤太	三桝他人
一 つなし家又右衛門	藤川十郎兵衛
一 唐使天蘭慶	藤川十郎兵衛
一 伴の仲友	中村友十郎
一 安楽寺住持	中村友十郎

一 齋世親王　澤村千鳥
一 御台久方御前　中村玉柏
一 蘭の中將　三桝松五郎
一 春藤玄蕃　三桝松五郎
一 白太夫娘小磯　山科甚吉
一 紅梅姫　山科甚吉
一 腰元勝野　嵐雛治
一 左中辨希世　坂東岩五郎
一 松月尼　澤村國太郎
一 腰元十六夜　澤村國太郎
一 源藏女房戸浪　澤村國太郎
一 土師の兵衞　三桝大五郎
一 白太夫　三桝大五郎
一 法性坊　三桝大五郎
一 紀の長谷雄　三桝大五郎
一 宿禰女房小櫻　三桝德治郎
一 長谷雄女房渚　三桝德治郎
一 判官代輝國　藤川柳藏

一 伯母御覺壽　嵐雛助
一 左大臣時平　嵐雛助
一 武部源藏　尾上菊五郎
一 菅丞相　尾上菊五郎
一 宿禰太郎　小川吉太郎
一 舍人造酒王丸　小川吉太郎

天満宮菜種御供

一つ目

加茂神社の場
内裏紫宸殿の場
内裏紫宸殿廊下の場
内裏門前の場

造り物　一面の玉垣。間に並木の松あり、隨神門に石の鳥居、東の方に車一輛あり。庭神樂にて幕明く。

（ト向うより、紅梅姫、姫の形、かつぎにて出る。あとより腰元、勝野、一、二、三、お百度參り。此うち春藤玄蕃、非人の形、頬冠りして、向うに立ち、道の邪魔する。一人一人に行當り、とゞ紅梅姫が袖を控へる。勝野、中へ入り、玄蕃を突き退け、）

勝野　最前から見苦しい形をして、後になり、先になり、コリヤ、女子ばかりぢやと思うて、狼藉をしやるのか。

玄蕃　イヽヤ、狼藉ぢやござりませぬ。どうぞとらして下さりませ。

勝野　ムヽ、さてはそなたは袖乞ひか。さうならさうと、とうからいやつたがよいわいの。（ト懷の服紗包みより金を取出し）これやらう。

（トはふる。玄蕃取つて、）

玄蕃　こりやなんぢや。此やうな目くさり金、貰ふとて附けては來ぬ。馬鹿つくすない。

腰元二　オヽ、をかし。乞食が金を嫌うてよいものか。

腰元三　ホンニ、變つた物貰ひ。金が嫌なら、そなたは何が欲しいぞいなう。

玄蕃　おれが欲しいは、情が欲しい。

皆々　ヤ、何といやる。

玄蕃　イヤサ、お姫様の色よい返事、どうぞお聞かせなされて下さりませい。

勝野　慮外な奴の。色よい返事の、情のと、むさい姿をして穢らはしい。あなたをどなた樣ぢやと思うて。

玄蕃　イヤ、菅原の姫君、紅梅姫といふこと知つて、この願ひ。

勝野　ヤ、なんと。

玄蕃　どうぞ色よい返事、聞かして下さりませ。

（ト頬冠りを取る。皆々見て、）

皆々　ヤア、お前は

玄蕃　大内の官人、春藤玄蕃。

勝野　其玄蕃樣が、何故窶を召したに。

玄蕃　此玄蕃が仲立ちにて、度々送る時平公の艶書は、高位の爲憚り有りとのお返事。それ故、此玄蕃が此姿は、時平公の戀を叶へん爲。姫君。非人なれば高位の恐れもあるまい。色よい返事をお聞かしなされて下さりませ。

腰元二　スリヤ、時平公の戀を叶へん爲。

腰元三　非人となつて、姫君の返事をお聞きなさるゝのか。

勝野　ホンニ、思ひがけもない戀の取持ち。

腰元一　殊に、日頃から惚れてござる時平樣。

勝野　コリヤマア、お姫樣。お返事を、

皆々　どうなされますえ。

紅梅姫　ふつゝかな自らを、さ程まで思うて給はる時平公。さりながら、父上、母樣のお許しもなきに自らが、すぐにお返事は免して下されいなう。

玄蕃　スリヤ、どうあつても時平公を、お嫌ひなさるゝのか。

勝野　イヤ／＼、申し、玄蕃樣。何のさやうな事でござりませうぞ。時平公は今の世の美男。何のお嫌ひなされうぞ。親御樣への御遠慮か。結ぶの神樣の御氣相か。御緣の無いのと思召し、ふッつりと。

玄蕃　だまれ。勝野。今飛ぶ鳥も落つる時平公の御威勢。得心なければ無理やりに、館へ連れ歸つてお取持ち。

勝野　詞が過ぎる。玄蕃樣。事を分けて仰しやるに、無體に取持たうとは。そちらは武官、こちらは大納言。權威をもつて、得心は致しませぬ。

玄蕃　面白い。大納言でも、武官でも、戀に上下の位があらうか。面倒な。そこ退かうてや。

（ト勝野を突き退け、紅梅姫にかゝる。橋懸りより判官代輝國出で玄蕃を投げる。）

勝野　ヤア、おまへは輝國樣。

輝國　これは菅家の姫君。當社へ御參詣でござりますか。

（ト玄蕃起き、）

玄蕃　ヤア、輝國。此玄蕃をなぜ投げた。

輝國　當日は齋世の親王樣、此加茂の社へ御參詣。路次の警固は貴殿と某。宮には先達て御參詣なされた所、遲參といひ、其姿は。

玄蕃　イヤサ、其儀は。

輝國　武官は、襤褸を身に纏うても、苦しうないか。

玄蕃　サ、それは。

輝國　其通り、記錄所へ申し上げうか。

玄蕃　サア。

輝國　サア／＼／＼。何とぢや。

玄蕃　段々拙者が不調法。衣服を改め、親王のお目にかゝらう。

〽此場をくろめる口車、ぬらりくらりの二股武士。尾を振立てゝ逃げて行く。あと見送りて女中達。

勝野　よい所へ輝國樣が、お出でなされて今の難儀を。

紅梅姫　それ〳〵。自らはどうなる事と案じてゐました。段々の心遣ひ、嬉しうござるぞや。

輝國　イヤ、モウ、武士に有るまじき主の戀の取持ち。其馬鹿者に出合ひがしら、各々の御難儀見兼ねまして、一寸支へましてござります。

勝野　申し、お姫様。迚ものお世話ついで、輝國様をお頼みなされて、今のお方の事を。

紅梅姫　ホンニなう。イヤ、コレ、輝國殿。此上ながら自らが願ひ、どうぞ聞いては下さるまいか。

輝國　姫君のお頼みとは、大かた御神事を拜みたいとの儀でござりませう。拙者はこれより神主釆女が方に休息致します。いづれも方も、御神事の始まる迄は、神職方へお越しなされ、御休息なされませう。

（ト紅梅姫、色々心遣ひ、）

紅梅姫　ムウ、そんなら、まだ宮様は。

勝野　イエ、さア、アノ、宮様へ參るのは、後になされて、マア、輝國様と御一緒に、暫く神主方へお越しなされて。ナア、宮様に。ナア、宮様へ御參詣遊ばされ、暫く御休息なされませ。

紅梅姫　そんなら勝野。暫しのうちは。

輝國　神職方へ、御同道申しませう。

勝野　左様ならば、輝國様。

輝國　勝野殿。姫君様。

皆々　サア、お越しなされませう。

〽いざ此方へと輝國が、案内につれて女中達、神主方へ急ぎ行く。

（ト輝國、紅梅姫、腰元、皆々、臆病口へ入る。）

〽始終の様子とくと見て。

（ト並松の間より玄蕃、たくら丸出る。）

たくら丸　玄蕃様。

玄蕃　たくら丸。

たくら　今勝野と紅梅姫と、申すを聞けば、今日此處にて、齋世の宮と紅梅姫と、密かに不義の出合ひ。

玄蕃　扨こそ。いつぞや、時平公が、紅梅姫を御覽なされて、ハテ、なよやかな女と仰せありしは、惚れてござるに相違ない。道を守る時平公。口へ出しては仰しやらぬ。そこを見込んで、此方から口説き落して差上げさへしたら、身共が働き。

たくら　サア、拙者も左様に存ずれど、何をいうても、齋世の宮と腐りあうて。

玄蕃　コリヤ、其方は此處に忍び居て、齋世の宮と紅梅姫が、不義の様子をとくと見屆け、早速身共に相知らせよ。合點か。

たくら　畏りました。此事御注進申さば、定めてずつしりと御褒美下されま

すか。
玄蕃　ヲヽ、其時は一かどの恩賞くれるわ。
たくら　うまい〳〵。
玄蕃　必ずぬかるな。
たくら　合點ぢや。
〽喋し合はせて兩人は、東西へこそ。
(ト玄蕃、たくら丸、兩方へ別れ入る。ト神樂になる。ト松が枝郡代の娘の形、抱へ帶、菅笠持ち出る。あとより腰元五、六、七、八、抱へ帶、菅笠にて出る。)
腰元八　オヽイ〳〵、皆の衆。もそつと待合はしてくれたがよいわいなア。(ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。)
腰元七　若菜殿。お前もちつと早う歩いたがよいわいなう。
腰元五　なんで後へさがつてゐやしやんしたぞいなう。
腰元八　さいなア。あまり加茂川の水が綺麗にあつたによつて、堤を河原へおりて、口をすゝいでゐたうちに、ほいと先へ來てから、とんとわしに汗をかかしたわいなう。
腰元六　そのやうな事なら、さういうたがよいわいなう。
腰元八　何を。人をほつたらかして置いてから。イヤ、申し、松が枝樣。ちつと向うの山の景色を御覽じませ。なんと、いづくでも春の山路は一入詠めのよいものでござります。とりわけて、都の東山は、名高い程あつて、どこやらがしをらしい。のどやかに見えますわいなア。
松が枝　さればいなう。河内の内にも生駒山、まだ其外にたんと名高い山は有りながら、此都の東山は、おのづと長閑に、花の盛りも一入の詠めぢやわいなう。
腰元六　さやうでござります。蒲團着て寢たる姿や東山、と發句とやらによんだ通り。ソレ、あの山の姿は、とんと蒲團着て寢てゐるやうにござります。
腰元五　ホンニ、さう見えるわいな。思ふ男と寢ながら、あの山を詠めたら、面白からうわいなア。
腰元八　オヽ、こゝな子わいなう。アノ、まだ、じつぽりと寢て、面白いやら、をかしいやら、知れやしまいが。但し知つてゐやるか。
腰元七　これいなう。そんな事いはずと、ちやつと加茂へ參らしやんせぬかいなう。
腰元八　もう此處が加茂樣ぢやわいなう。
腰元六　コレ、若菜殿。もう此處とはどこぢやぞいなう。
腰元八　アレ、あの石の鳥居の在る所が、

加茂ぢやわいなう。

松が枝　ム、そんならあそこが加茂様かや。

腰元八　左様でござります。

松が枝　思ひの外、早う來た事ぢやなう。

腰元八　其筈でござります。春の野づらの道草で、思はず近う覺えます。あの鳥居の方が加茂。それから斯う左の方に高う見えますが、都の富士と名高い比叡の山。それから、こちらが百萬遍眞如堂、黑谷永觀堂、それから祇園、清水。あの大きな屋根が今朝參りました大佛。それからこちらが、（ト方々指さし、数へるうち、花道の方を見て）ハテ、來るわ／＼。

皆々　何が來るぞいなう。

腰元八　申し、松が枝様。御覽じませ。この加茂堤を眞直に、アレ／＼、赤い傘を差掛けて來るのは。どこぞの長老、お寺參りか、但しは、お公家様の御參詣かいなア。

腰元七　ホンニなア。しかも大勢連れて來るわいなア。

腰元五　松が枝様、ご覽じませ。ありや、邃物ぢやないかいなア。

松が枝　ホンニ、珍しい事を見る事ぢや。したが、こゝにゐたら叱りはせまいかいなう。

腰元八　何のいなア。叱つたら、こちらは田舍者でござります。お公家様を拜ましておくれと申しますわいな。

腰元六　アレ／＼、もう向うへ見えるわいなア。

腰元八　ホンニ、やつぱりお公家様の御參詣ぢやわいなう。

腰元七　お公家様といふものは、器量のよいものぢやけな。こゝに居て見やうわいなう。

腰元五　松が枝様。ちつとの間、此床几にお掛けなされませ。

〽わしも見ようと口々に、笑ひさゞめき女中どし、これ幸ひと木蔭なる床几にやすらひ待ちゐたる。

（ト皆々床几に腰掛けると、對島がかりの囃子になる。ト向うより、半素袍、股立取り、鉄棒二人、舍人峯丸、白臺に丹塗の矢一筋載せ、持ち出る。齋世の宮、指貫、壺折にて、中啓を持ち出る。あとより仕丁、朱の日傘さしかけ、供の仕丁、太刀をかたげ、仕丁、大勢附き出で本舞臺に並ぶ。神主臆病口より出向ひ）

神主　これは、恐れ多い、徒步路の御參詣でござります。先達て仰せ越されました通り、當今の御心儀御祈りの爲、心しづめの御神事執行致しましてござります。

齋世の宮　ヲヽ、大儀々々。郎ちこれへ

持たせし丹塗の此矢、神前に供へ、愈
愈丹精を抽んでてよからう。
（ト此中、松が枝、齋世の宮にこなし。）
神主　畏り奉りました。即ち御内意に
從ひ、向うなる林の中に別殿をしつら
ひ置きましてござります。あれへお入
りあられまして、御休息あつて然るべ
う存じ奉ります。
齋世宮　ヲヽ、何かと、いかい心遣ひで
あらう。とかく宜しう計らひを頼む。
峯丸　ナニ、釆女殿。然らば此矢を相
渡し申します。猶々御祈念頼み存じま
す。
神主　畏りましてござります。
齋世宮　峯丸、參れ。
峯丸　ハツ。
神主　イザ、御案内致しませう。
（ト神樂になり、齋世の宮、峯丸、神主、仕
丁、殘らず橋懸りへ入る。松が枝こなし。）
腰元八　なんと、皆の衆。今のお公家樣は
美しい御器量なお方ぢや有つたなァ。
腰元七　さいなう。とんと姫御前のやう
にあつたわいなう。
腰元六　したが、ちよつと、とつくりと
見ようと思うてゐるうち、つい。
腰元五　わしも、とつくりと見ようと思
うたに、殘り多い事ぢやわいなァ。あ
りや何といふお公家樣であらうぞい
の。
腰元八　ヲヽ、何といはうと儘よ、所詮、
こちらの口へは入らぬ。やつぱりこち
らが口へ入る、燒餅なと可愛がらう。
イヤ、申し、松が枝樣。ちやつと參らう
ではござりませぬか。（思入れ。）申し。
松が枝樣。
（ト松が枝、橋懸りの方を見て、うつかり
として居る。）
コレ、申し。松が枝樣。
松が枝　なんぢやいなう。
腰元八　加茂へ參らうぢやござりませぬ
か。
松が枝　參らう／＼。ちやつとおぢや。
（ト橋懸りへ行かうとする。腰元八。留
めて。）
腰元八　申し／＼。こりやどれへお出で
なされますぞいの。
松が枝　ハテ、加茂へ參るわいなう。
腰元八　ハテ、滅相な。加茂はそつちぢ
やござりませぬ。こちらでござります
わいなァ。
松が枝　それでも、こちらへ行かしやん
したもの。
腰元八　誰がいなァ。
松が枝　今のお方が。
腰元八　それはこちらがかまふ事かいな
ァ。
皆々　加茂はこちらでござりますわい

なァ。

松が枝　それでもわしや、こちらへ行きたいわいなう。

腰元八　ハテ、わつけもない。コレ皆の衆、連れまして行きやいなう。

皆々　サア、お出でなされませ〳〵。

（ト松が枝が橋懸りへ行かうとするを無理に引張り、）サア、お出でなされませ〳〵。

へイザ御越しとさゞめけど、姫は心も空蟬の、名殘をし鳥いはぬ氣も、しらぬ腰元附添ひて、宮居のうちへ急ぎ行く。またも鳥居の内よりも、姫に從ふ勝野が采配。

勝野　コレ〳〵、皆の衆。此やうに遲い宮様は、どうした事であらう。わしが案じるより、姫君様は百倍。コレ皆の衆は、此堤を往て見てござんせ。

皆々　アイ〳〵。畏りました。

へ皆打連れて出で迎ふ。出合ひがしらに峯丸を、見るより勝野は走り寄り。

勝野　オヽ、峯丸殿。待ちかねたわいなう。コレ、峯丸殿、今のお方のお首尾はどうでござりますえ。

峯丸　お氣遣ひなされな。上首尾〳〵。お姫様にも、嘸お待兼ねと、私も最前から心が急きました。

勝野　お待兼ねどころか。お姫様は、最前から飛び立つやうに。

峯丸　お道理〳〵。そんならお供仕りませう。

勝野　サア〳〵、早うこれへ、連れまして下さんせ。

峯丸　合點でござります。

〽言葉の中へうづ高き、人目忍びの御參詣。

勝野　これは恐れ多い宮樣。これへ御供申しましたは、ちつと申上げたい事がござります故。

齊世宮　勝野。シテ、そなたの云ひたいといやるは、何事ぢや。

勝野　サア、其樣子はつつとモウ、妾が口から申しにくい。コレ、申し、姫君樣。お前が直々に仰しやりませ。

〽押しやられて姫君は、我身もともに紅梅の、色香も恥づるその風情。

紅梅姫　申し、宮樣。たび〳〵送る玉章のお返事、その中に首尾あらばと遊ばしたは、よもやお僞りではあるまいと、思ひながらも疑ふは、姫御前の常と堪忍して、必ず變つて給はるなえ。

齊世宮　それなる勝野が、いかい世話。嬉しい文の數々も、もしや戲れ、され事かと、疑うてゐましたわいなう。

紅梅姫　その詞に僞りなくば、いつ迄も淺からぬお情を

齊世宮　僞りならぬ證據は、コレ、そもじより送られしこの短册。

紅梅姫　成程。これは自らが送りし筆すさみのこの下の句。

齊世宮　わがよみかけし上の句は、春くれば柳の色も解けにけり。

紅梅姫　結ぼほれたる君が心も。そんならこの短册は。

齊世宮　そもじへの返事。

紅梅姫　エヽ、お嬉しうござります。（ト短册を抱きしめる。）

峯丸　さうぢや、姫君樣。たんとお悦びなされませ。戀の叶うた印の短册。春くれば柳の絲の解けにけり、と書いてはあれど、この儘では、姫君の心が解けまい〳〵。アヽどうぞして。オヽそれ〳〵。今日はマア、お歸りなされませ。

勝野　アヽ、コレ〳〵、滅相な。それでは折角。

峯丸　イヤ〳〵、大事ござりませぬ。何事も私が胸にござります。何ぢや有らうと、あの車に召してお歸り、姫君樣もあの御車へ。

紅梅姫　滅相な。そのやうな恥かしい。

勝野　成程。こりや峯丸殿のいはしやんす通り、あの御車へ御一緒に、お召しなされてお歸り遊ばしませ。

紅梅姫　それでも。（トうぢ〳〵する。）

勝野　エヽ、初心な。皆の衆。何をう

つかり、早うお二人を。

皆々　アイ〳〵。マア、お越しなされませ。

〽サア〳〵お出でと勸められ、流石にそれと恥かしの、森の木の葉の夕づく日、面まばゆき御風情。

サア〳〵、お越しなされませ。

〽嬉しいやら、怖いやら、今更なんと岩橋の、渡りかけたる初戀路。誘ひ乗せる御車の、内やゆかしき縁なり。勝野はほつと吐息つき。

勝野　アヽ、しんどやの。マア、どうやらかうやら、御神事を渡すやうになつた。コレ、皆様。こゝに居てはお二人のお氣が張る。暫しのうち向うの森へ往て、待合はしてゐやしやんせ。

腰元二　いかさま、まだお暇もいらう。そんなら妾らは參りますぞえ。

峯丸　私もあれへ參り、お歸りを待ちませう。

勝野　さうさしやんせ。

腰元二　サア、皆様。ござんせ。

（ト腰元皆々橋懸りへ、峯丸は臆病口へ入る。）

〽皆打連れて入るあとへ、こなたの蔭よりたくら丸、宮人、仕丁、引連れて、始終立ち聞き、しすまし顔。

（トたくら丸、仕丁、大勢出る。）

たくら　コリヤ、勝野。齋世の宮、紅梅姫、二人の不義を取持ちする其方。宮様はどれへ連れて往た。

勝野　コレ〳〵、たくら丸殿。そりや何いはんす。妾が宮様のこと知らうかいな。其上、此方の姫君、宮様と不義などとは、何を證據。何を見付けていはしやんす。ひよんな事いひ出して、あとで後悔せまいぞえ。

たくら　いかさま。こなたは菅原の腰元、宮様の事は知らぬ筈。よい〳〵、宮様のござる處はこれから身が詮議せうかい。

（ト車へかゝる。勝野さゝへる。所へ峯丸走り出で、車を閉うて、）

峯丸　イヤ、この御車のうち、詮議さす事はならぬ。

たくら　そりやなんで。

峯丸　この御車は宮様の御車。お歸りに召させて、この峯丸がお供する。そち達に指をさゝす事はならぬ。

勝野　オヽ、さうでござんす。必ず内を見せて下さんすな。

たくら　イヽヤ、その様に見とむながる程、猶見たい。ソレ、仕丁達。詮議さつしやれ。

仕丁　合點ぢや。

（トこれより神樂になる。仕丁車へかゝる。峯丸、勝野、たくら丸、みた〳〵立

廻り宜しくあつて、勝野、峯丸、仕丁を左手に皆々橋懸りへ追込む。ト車の内より齋世の宮、紅梅姫、飛び下り。）

齋世宮　コレ、紅梅姫。人が知つては、互ひの身の上。密かに此場を。

紅梅姫　そんなら、どうでも。

齋世宮　所詮、御所へは歸られぬ此身。

紅梅姫　自らも一緒に。

齋世宮　紅梅姫。

紅梅姫　宮樣。

齋世宮　サア、おぢや。

〽互ひに手に手を鳥居さき、行方も知らず落ち給ふ。斯くと聞くより春藤玄蕃、車のもとへ馳せむかひ。

（ト齋世の宮、紅梅姫、向うへ走り入る。玄蕃つかつかと出て車の内を見て。）

玄蕃　扨は兩人とも、はや落ち失せたか。（ト以前の短册を取つて。）ムウ、齋世樣まゐる、紅梅より。これこそ、紅梅姫と齋世の親王が不義の證據、さうぢや。

〽逸足出だして馳けり行く。

（ト玄蕃向うへ入る。）

〽あとへかけ來る峯丸は。

（ト峯丸車の内を見て。）

峯丸　扨はお二方とも、はや落ち給ふか。ホイ。

（ト仕丁取卷き。）

仕丁　やらぬぞ。

（トこれよりさまざま大立有つて、仕丁殘らず逃げて入る。たくら丸かゝるをポンと當て。）

〽心ならずも峯丸は、御跡慕ひ走り行く。

（ト峯丸向うへ走り入る。）

〽あとへ勝野がいつき急き、車の内を見るよりも、はつと驚き、胸は板、立つたり、居たり、狂氣の如く。

勝野　ヤア、扨はお二方ともに落退き。（思入れ。）道の程が心許ない。さうぢや。

（ト行かうとする、たくら丸起きて。）

たくら　さうはならぬ。われより先へ記錄所へ注進する。そこ退け。

（ト勝野、たくら丸立廻りにて、ちよいと勝野をあて、たくら丸向うへ走り入る。）

〽イデ御供と馳行く向うへ　たくら丸、立ちふさがり、馳行くをやらじと留める女の念力、あとを慕うて。

返し

三間の間。小高うして、御殿の見付き、一面に御簾。東西は御殿の渡殿にて、前は殘らず黒塗の高欄。正面に階段。階下に右近の橘、左近の櫻。舞臺先、三尺程高き卓に金の香爐載せ有る。御殿の上に伴の仲友、藤原の宿禰、頭の中將、物淵の宰相。いづれも冠、裝束にて兩方へ二

人づつ別れ居る。其下渡殿に、並び公家大勢並び居る。櫻の下に三好清貫、冠、裝束、床几にかゝり、橘の下に平の希世、冠、裝束、床几にかゝり居る。官女、一、二、三、此三人、天冠、舞ひ絹、緋の袴にて、梅が枝を持ち、踏歌の舞を舞うて居る。本管絃、琴入りにて、双方此見得にて、右の道具一面に突き出す。

（三人種々振有りて舞ひ納むる。後向きに辭儀する。清貫、希世、正笏して、）

清貫　今日の踏歌の節會、首尾よく相勤めましてござります。

（ト管絃止んで、樂になり、皆々シイ〳〵と警蹕の聲。花道より左大臣時平、冠、裝束にて笏を持ち出て、本舞臺へ來て、御殿の方へ頭を下げ、正面に直り、香爐に香をつぎ、天拜する事有つて、靜々と階を上り、おつと辭儀する。ト東西より公家二人出て、右の卓を舁いで臆病口へ入る。時平正面に直り、こなしあつて、）

時平　宣風坊の北、新に栽うる所千金の吟二葉より薫しく、君幼稚にましませども、世は巍々たるかな、君たる事唐堯に準らへ、民又舜の民の門。豐かに治まる秋津洲のけふの節會の幸ひ。いづれも拜賀を唱へてよからう。

皆々　ハア、君の寶算萬々歳。お目出たう存じ奉ります。

（ト皆々辭儀する。ト橋懸りより官人出て、）

官人　申上げます。唐土照宗皇帝の使、天蘭敬といふ者、隣國會盟の悦びを奏せんと、來朝仕りましてござります。

清貫　左中辨。聞かれよ。君の仁德、四海の外まで惠み、唐使來朝は、日本の外までの譽れ。時平公。いかゞ計らひませうな。

時平　長の波濤を越し、來朝せし唐使、むげに歸すは本意ならず。何にもせよ、此方へ通してよからう。

希世　官人。唐使をこれへ通せ。

官人　ハツ。唐使天蘭敬、此方へ通りませい。（トいひ捨て入る。）

天蘭敬　ハヽア。（ト唐人の姿にて、異風なる石臺に、梅の苔を植ゑ持ち出て、清貫、希世が間に直し、下へ直りて辭儀する。）

清貫　唐土の使、天蘭敬とは汝よな。

天蘭敬　ハツ。

希世　見れば梅の一本の鉢植ゑを持參したるは、唐土よりの獻上なるか。

天蘭敬　ハツ〳〵、恐れながら、臣此土へ渡りしは、卽ち其梅の不思議によつて、はる〴〵來朝仕りましてござります。

希世　梅の不思議によつて來朝とは。

天蘭敬　ハツ。抑々この梅は、唐土皇帝の

御宇、天下文學盛んにて、萬民泰平を唱へし時、諸木にすぐれ、花の色香をましたる故、好文木と號す。それより、國家に文學起る世には、花も色よく匂ひも深く、まつた文學すたる時は、色香を失ひ、博學の人の殖ゆる時は芽を出だし、不學の人の殖ゆる程は、土の底に朽ち果つる。君子の徳を備へし名木。然るに日本の大臣、和漢の學に通じ、この梅を深く所望の由、わが帝これを感じ、臣を使に來朝は、卽ち大臣に獻上申さん爲、臣、來朝仕りましてござります。

清貫　ムウ。日本の大臣とは、卽ち本院の左大臣藤原の時平公。唐土へあの梅御所望の覺え、ござりますかな。

時平　イヤ、臣、拙くも不學なれば、今、唐使の物語、希代の梅の好文木、所望せし覺え、更になし。

希世　でも、日本の大臣とは、時平公より外になし。わが師匠と賴む菅原の道眞卿は、いまだ大納言なれば、猶以て覺えはござるまい。

仲友　イヤ〳〵。希世卿。日本の大臣とは、やはり時平公。左大臣の御仁德は、四海の外迄なびき隨ふ。

物淵　いかにも、仲友卿の仰せの通り、時平卿は正しく照定公の御種。氏は正しき藤原氏。

宿禰　唐使、天蘭敬。日本の大臣とはこれなる時平公。尊顏を拜し、早く梅を獻上仕れ。

頭中將　智仁兼備の時平公。拜顏の致し、唐土への土産に致せ。

清貫　天蘭敬、許す。

天蘭敬　ハッ。（ト天蘭敬差寄る。）

皆々　近う〳〵。

時平　先づ〳〵。いづれも靜まられよ。全く覺えなき時平。僞りを述べ、後日に顯はれなば、唐土までも日本の恥辱。イヤ、ナニ、天蘭敬とやら。此土より望みし其梅、定めて其方に覺え有らう。日本の大臣とは、この時平に於ては、梅を乞ひし覺えない。しかし、唐土の使、其儘に歸朝もなるまい。臣が面を見て思慮をめぐらせ、天蘭敬。

天蘭敬　ハッ〳〵。有難き仰せ。流石は日本の大臣の威風。お詞に從ひ、御免を受け、（ト摺寄り、時平をとくと見て、）ハアヽ。恐れながら、拜顏仕りましたる所、君にてはましまさず。スリヤ、君より外に。

仲友 物淵　右大臣は、三歳以前、御他界有り。

清貫　それより左右兼帶の時平公。

希世　外に大臣とてはましまさぬ。

天蘭敬　でも、折角此土へ渡りし天蘭敬。

すご〳〵と歸朝もならず。ハテ、何と
がな。
時平　イヤ、ナニ、天蘭敬。主は知らねど、日の本より望み、唐帝に契約せし好文木なれば、何ぞ外にこれぞといふ證據ばし覺えぬか。
天蘭敬　ハア丶。貴君のお詞にて、思ひ出だせし確かな證據。去年の春、唐土へ渡り、好文木を望まれしを、宮中より召し、詩文を詠じ、卽ち我國の裝束を給はりしは、確かな證據。
時平　ぢやといふて、去春、渡唐せし公卿、覺えなし。
皆々　スリヤ、やはり時平公か。
時平　ハテ、何人ぢやよなア。
（ト皆々こなし有る。橋懸りより、）
道眞　アイヤ、其好文木を望みしは、菅原の道眞。それへ參つて、唐使に對面致しませう。
（ト唐樂になり、道眞、綸巾、涼衣の唐裝束にて靜々出る。）
淸貫
希世　ヤア、道眞卿。そのお姿は。
道眞　われ常々好文木を慕ひ、幾春過ぎし思ひ寢の、夢路は遠き唐土の王宮に到り、天蘭敬といふ臣下に筆談して、長篇の詩を奏し、裝束を賜ひて着すると思へば、夢覺めて、枕を見れば此裝束。誰が置きしとも、不思議とも、人にも語らず過ぎつるに、只今參內し、仁壽殿の渡殿にて、唐使の來朝と承り、取寄せ着せしこの裝束。夢にまみえし天蘭敬。其方に覺え有りや。
（トこのうち天蘭敬、道眞をとつくりと見て、）
天蘭敬　ハア丶。誠や、この君に違ひはあらじ。
希世
淸貫　スリヤ、道眞卿には、夢に渡唐ありしとな。
道眞　いかにも。枕に殘る此裝束。天蘭敬來朝といひ、旁々思合はすれば、疑ひもなき正夢なりしか。
天蘭敬　扨は夢に魂の、我國へ渡り、詩を作り給ひしか。只人ならぬ其雅ひ。拜顏致して蘭敬が、國への規模、此上の悅びなし。エ丶有難や。
淸貫　ハテ、夢に魂が通ふなどとは、女童の俗說。莊子が夢中に胡蝶となつて牡丹に戲ぶれしとは皆虛說。それに、道眞卿の渡唐を正夢とは、珍說を承はるではござらぬか。
物淵　成程、道眞卿を今の世の聖人ぢやと申すが、大きな僞りでござります。
皆々　そりや又、なぜに。
物淵　ハテ、聖人に夢無しと申しますてや。
皆々　いかさま、さやう。ハ丶丶丶。

（ト皆々笑ふ。）

時平　イヤ〳〵、さにあらず。大聖人孔子も、夢にだに周公を見ず、と宣へり、スリヤ、聖人に夢なしとも申されまじ。道眞渡唐ありしは正夢。文學書跡に秀でし德、即ち日本の譽れ。嘸、帝にも御喜悅ならん。

道眞　これは〳〵、時平公。有難きお詞。道眞が大慶、家の面目、此上がござりませうか。

天蘭敬　イザ、道眞卿。獻上の好文木の一枝を手折り、宿の枯木に接木して、咲くや咲かずや、試みん。

（ト道眞右の石臺の傍へ來て、振よき枝を手折り、袖くるめに持ちて渡唐の天神の見えあると、大どろ〳〵にて、右の梅の花はつと開く。時平思入れあつて、）

時平　ハヽア、奇なるかな、妙なるかな。花物云はねど主を知り、開けし花は天蘭敬が、詞に違はぬ好文木。これにて、道眞卿が文學に秀でし事を思はれよ。

希世　まことに、師匠ながら稀代の不思議。

淸貫　淸貫も言語を絕しました。

皆々　ハテ、天晴の道眞卿ぢやよなア。

（ト皆々なじるやうにいふ。ト內より。）

官女　勅諚。

（ト官女四、白臺に冠、裝束を載せ、持ち出る。官女五、同じく白臺に宣命を載せ持ち出る。）

官女四　菅原の道眞卿へ勅諚。

道眞　ハツ。（ト平伏する。）

官女五　唐使の趣き、梅の不思議、帝樣の御叡聞に達し、それ故昇進、則ち宣命。淸貫卿、急いで拜聽。

淸貫　ハツ。

（ト官女五、宣命を差し出す。淸貫うや〳〵しく開き。）

従二位大納言、菅原道眞、先帝大政公以來、師範たる規模有るの上に、文學の譽れ唐土に達し、好文木の不思議を感ず。是によつて正二位右大臣近衞の大將、兼ねて御內覽の宣旨を奉るものなり。延喜元年酉の正月。三善淸貫承る。

（ト皆々顏見合はせ、）

希世　ヤア。スリヤ、道眞卿を右大臣とは。

皆々　こりやどうぢや。

官女　道眞卿。違背はあるまい。

道眞　ハツ〳〵。こは畏れ多き勅命。從二位大納言に昇進せしは臣が規模。それに、又候や、上もなき右大臣とは氏を知らぬ其身のくわつけい。勅命に背くにはあらねども、臣が身を顧みて御辭退。何卒勅許希ひ奉りまする。

時平　イヤ〳〵、道眞卿。當今の覺えめでたき其許。臣、左大臣は司れど、未だ三十路に足らぬ時平。今日より左右に連綿して、政務萬事取計らひませう。

道眞　イヤ〳〵、時平公。君は正しく藤原氏、照宣公の御公達。臣は菅原。其職にあらざるに、官を穢すは天の照覽勿體なし。

希世　さやうでござります。お師匠。官位も子供が愛する凧と同じ事。何ほう用ゐがよければとて、餘り上へ上り過ぎては、糸が切れて落ちて怪我を致す。ナア、清貫公。

清貫　いかにも、月天子さへ、滿つれば缺くる高上り、怪我の元。

仲友
物淵　道眞卿。コリヤ、いつ迄も、御辭退あられよ。

道眞　成程。各々の仰せの通り、公の政務は時平公、兩大臣を御兼帶にて。

時平　イヤ〳〵。天下は一人の天下にあらず。自他とも時平指圖をうけん。

清貫　イヤ、時平公。大納言の道眞卿を、常から餘りお用ゐが過ぎますゆゑ。

時平　だまれ、清貫。希世も共に、師たる道眞卿を嘲ける過言。まつた公卿の面々もその通り。この時平は父の命、たとへ地臣、匹夫たりとも、德有る者を敬ふ教へ。まして文學の司、道眞卿を敬ふが不思議なか。今日只今より右大臣道眞卿とこの時平、甲乙があらんや。出世を妬む偏執の方々、心外に思はば、其道に秀でて、官位昇進召され。餘りといへば、法外至極。

（ト皆々を睨め廻はす。ト皆々冠を下げる。）

此後、道眞卿を除にても惡否あらば、きつと曲事たるべきぞ。

（ト皆々あやまり平伏する。天蘭敬こなしあつて、）

天蘭敬　ハヽア、時平卿といひ、道眞卿といひ、いづれ劣らぬ聖賢の道、羨ましき神國の不思議。わが國廣しとはいへども、御兩君程の聖人なし。かゝる君にまみゆるは、來朝の德。此上は臣も退出致さん。

時平　待つた。唐土よりの使、天蘭敬。暫く都に留まつて、右近の馬場の花盛り。饗應は清貫、希世、兩人。彼をもてなされよ。

希世　ハツ。これより直にわが館へ。天蘭敬を誘引仕りませう。

天蘭敬　こは有難き和國の馳走、辭退致さずお受け申すが、國への土産。

官女　此上は道眞卿。帝樣へ。

道眞　でも、餘り冥加の程も。

時平　ハテ、たつて辭退は違勅の罪。
道眞　ぢやと申して。
時平　勅命は背かれまじ。局達。道眞卿を装束の間へ。天蘭敬は兩人と共に歸館。イザ、道眞卿。装束を改め、共に御盃を頂戴致さん。
道眞　スリヤ、詞を盡して申しても。
時平　四海安全、諸民の爲。
道眞　ハツ。
官女　イザ、装束の間へ。
時平　いづれも退出。
皆々　ハツ。シイ丶丶。
（ト唐樂になる。皆々辭儀する。ト二重舞臺殘らず御簾下りる。ト清貫、希世目まぜある。清貫先へ希世、天蘭敬を連れ、橋懸りへ入る。）

返　し

（右の道具、段々東へ引込み、平舞臺の御殿を引き出す。常の管絃になり、時平靜靜向うへ行きかゝる。向うより官女三、二、一、銘々白臺の織物、絹布、黄金を載せ持ち出て、一人々々行き違ふ事あり。三人時平を取廻して、）
官女／皆々　時平公。只今御歸館でござりますか。
時平　ホウ。釆女司の小督達。其獻上は。
官女三　ハツ。菅原の道眞卿へ　今日右大臣昇進の賀を祝して、女院樣よりお贈り物。仰せを蒙る我々三人。
官女二　此黄金は親王家より道眞卿へ。
官女一　これも道眞卿へ、后町より下され物でござります。
時平　スリヤ、上樣より道眞卿へ。
官女／皆々　時平公。定めてお羨しうござりませう。
時平　ハヽヽヽ。女童の何をいふやら、道眞卿も追付け退出であらう。早う行け／＼。
官女一　サア、二人とも、ござれ／＼。
（ト官女三人、右の臺を持ちて橋懸り入る。時平こなしあり。又段々行く。此中始終管絃。臆病口より、公家の形にて二人、銘々獻上物を持つて出る。時平を見て思入れある。）
公家一　これは最早御退參でござりますか。暫く。
（ト時平、上の方にぢつと留まり、右臺の物を前へ並べて、）
公家二　今日、君の幸賀を祝し、一院より下され物。有難う拜領あられませう。
時平　ムウ、扨は臣と道眞卿と、見まがへたのぢやな。
公家二　エヽ。（トあふのき、顏を見て、）まことに貴君は時平公。
公家一　お装束が變りしと思ひ、道眞卿

と見まがへたる、我々が不調法。眞平御赦免下されませう。

時平　何の／＼。赦す／＼。（ト何氣なうい ふ。）

公家一　エヽ、有難う存じ奉ります。

（ト兩人こは／＼右の臺を取り上げ。）

公家二　ハテ、足下の麁相。

公家一　イヤ、貴公の不調法。

（ト兩人せり合ひながら、橋懸りへ入る。ト此中、御簾の間々より希世、淸貫、伴の仲友、頭の中將、物淵の宰相、藤原の菅根窺うて出て來て。）

希世 淸貫　時平公。暫く。

（ト時平立ち留る。皆々 時平を眞中につつみ。）

皆々　噫、御心外にござりませう。

時平　いづれも、心外なとは、何が心外。

淸貫　菅原の道眞。

時平　ヤ。

淸貫　イヤ、お包みあられな、時平公。從三位より大納言に經上り、今日又、右大臣と、君と同席する道眞。

仲友　外戚の位を以て、なぜ追ひ退けなされぬぞ。

淸貫　われは顏なる道眞が權威におされて君の御威勢、日向の朝顏。

希世　菅原氏は日の本の繁昌。道眞一家、殿中に威を振るはん現在。希世は師匠なれども、君の心を押計り、

淸貫　道眞をぼつ下す御企てあらば、

仲友　及ばずながら、われ／＼も合體して、

物淵　共に道眞を追退けん。

希世　サア、時平公。

皆々　御賢慮はな。

時平　我を思うて、何れもの志。時平も滿足。然しながら盛んなる時には制し、衰ふる時には制せらるゝ。世の盛衰は天の歸する所。他の榮ゆるを見ても、さのみは羨ましからず。我は我なり、人は人なり。

淸貫　スリヤ、現在お位を乘り越されても。

皆々　君には、何とも覺さずや。

時平　いかにせん玉の臺も八重葎、茂らん宿に二人こそ寢め。（思入れ。）官職の高下はあれども、仕へる君は只一人。

皆々　スリヤ、どのやうにお勸め申しても。

時平　世は常闇ならず、日月は明か。アヽ、恐るべし／＼。

皆々　ムヽ。（ト皆々顏見合せ。）ハテ、是非に及ばぬ。

（ト皆々こなしあつて、御簾の內へ入る。時平直垂の袖を拂ひ。）

時平　ア、、穢らはしや。我に勸むる逆意の程、巣父にならひ、瀧あらば耳を清めんに。

（トこなしある所へ、辨の宰相、公家にて出て、橋懸りへ向ひ、）

辨宰相　求女司。内膳司。八省院。典藥寮。菅原の道眞卿今日より右大臣に任ずべきとの勅諚。きつと其旨心得られよ。

（ト方々の内より、）

内より　千秋萬歳おめでたう存じます。

（ト大勢の聲する。時平あとへ戻り、）

時平　辨の宰相。大切なる勅諚。とくと觸れたがよい。

辨宰相　ハツ、畏りましてござります。

（ト御簾の中へ入る。清貫、希世、つか／＼と出る。）

希世　御隨身立番より、君への取次ぎ。

（ト返し前の短册を差し出す。時平取つて、）

時平　春くれば、柳の糸も解けにけり、結ぼほれたる君が心を。（思入れ。）『齋世樣まへる、紅梅姬。』これは。

清貫　君兼ねて御賞美ありし、菅原の紅梅姬は道に背く不義密通。

希世　確かに、時平公は紅梅姬に惚れてござらうと、家來立番が岡目の推量。そこで立番が、折にふれて口說くといへども、得心をせぬ筈。齋世の宮と忍び逢ひ、時平公を忌み嫌ふは、これも大方、道眞の言付け、ナア、清貫公。

清貫　いかにも／＼。立番が話、陰では時平公のざんげざさら。イヤ、モウ、都度々々には申し上げ難い。

希世　戀といひ、位といひ、始終道眞が君の仇。いつそ、我々に仰付けられたらば。

清貫　この戀は、ずる／＼。

希世　道眞が位は、べた／＼。

清貫　其時は下地の威勢に又百倍。

時平　だまれ。

希世　イヤモウ、なんにもむづかしい事ではござりませぬ。

清貫　つい時平公の、舌を揮ふばかりで。

時平　だまれ。

希世　道眞が官を引ッ剝ぎ。

時平　だまれ。

希世　紅梅姬を抱いて寢る。

時平　だまれといふに。（ト大聲にていふ。）

清貫 希世　ハイ。

時平　佞人の詞、劍より速かに人を斬ると。清貫、希世、この時平を魔道へ引入れんと、手を盡し、品を變へての逆意の勸め。言語道斷。使の廳の詮議に掛け、きつと刑に行ふべき兩人なれど、

人を害(そこな)はぬがわが情。その儘に差し許
す。此以後、無益(むやく)の舌を動すこと勿
れ。
清貫 希世　いつかな變ぜぬ。
(ト行かうとする。希世、時平の袖を控ふ
る。清貫右の短册を見せる。)
時平　エヽ、穢らはしい。
(ト直垂の袖にてさばき、靜々と臆病口へ
入る。兩人、時平を見送り、がつくりと
して。)
希世　清貫卿。
清貫　希世殿。
(ト立ち上る。物淵の宰相、藤原の宿禰、
頭の中將、伴の仲友、皆々出る。ト向う
より玄蕃出る。)
玄蕃　御兩所樣。シテ、我君。
皆々　時平公のお心はな。
清貫　イヤモ、矢ツ張り善心。讒言な
どとは思ひも寄らず。
希世　惡う勸めたら、我々が首が飛ば
うも知れぬ。
玄蕃　スリヤ、お渡し申した短册で
も。
清貫　中々。こつちに思うた事は、鵙(いすか)
の嘴(はし)、
皆々　喰ひ違うたる時平公の御心底。
玄蕃　シテ、此上は、
清貫　云ひ合はした通り、
希世　道眞を仕舞ふ手段(てだて)。
皆々　そんなら、密かに、
清貫 希世　いづれもござれ。
(ト皆々御簾の内へ入る。)

返し

(右の道具、東へ引込む。樂士の塀、眞
中石段、公家門、飾り附けにて、前へ突
き出す。ト橋懸りより御所車を引出し、
仕丁、隨身、青侍、皆々形を正し、出て
控へ居る。ト臆病口へも同じく御所車を
引出し、仕丁、隨身、皆々出る。門の内
にて。)
時平　先づ〳〵。右大臣より。
道眞　先づ〳〵。時平公より。
時平　ハテ、サテ。
道眞　先づ〳〵。
時平　然らば御一緒に。
(ト門の内より出る。道眞、冠、裝束改め
出ると、左右の供、一時に警蹕。時平こ
なしあり。)
アイヤ、右大臣。今日、俄かの任官、
若し供廻りも、先格なくば、同じ官位
の時平が隨身、仕丁、御車舍人(みくるまとねり)。
道眞　ハツ〳〵。重ね〴〵の御懇志。
道眞いかゞ謝すべき。有難くも、法皇
より御車(みくるま)勅許。
時平　ハテ、何かに付けて、御覺えめ
でたき道眞公。

道眞　公とは餘り。
時平　いや／＼、今日よりは右大臣。きつと正すも官位の禮儀。
道眞　まことに、それ程までに有難き御賢君。
時平　唐土の樊噲が韓信を敬ひしも、高祖へ忠義。
道眞　其韓信は匹夫なれども、後には漢の大元帥。させる功なき此道眞。
時平　イヽヤ、彼は武官。
道眞　これは文官。
時平　忠義は和漢相劣らず。
道眞　時平公。
時平　道眞公。
兩人　イザ／＼。（トこなしある。）
皆々　還御。シイヽヽヽ。
（ト唐樂になる。時平、道眞、目禮。）

幕

二つ目

菅丞相花園の場
內裏金樓閣の場
內裏記錄所の場

造り物。向う一面網代垣。臆病口、一間四面、御簾かけて有り。舞臺眞中に見事なる紅梅の木飾り有り。西の方に射垜、的掛けて有り。紅梅の下に椅子あり。菅秀才、壺折りにて、半弓、的矢を射てゐる。腰元勝野、傍らに矢取りしてゐる。腰元一、二、銀の團扇にて菅秀才をあふぎゐる。腰元三、太刀をかたげ居る。腰元四、そばに金の采持ちて居る。此見得。琴歌にて幕明く。
腰元四　當り／＼。（ト采を上げる。）
腰元三　ほんにきついものぢや。一本もあだ矢はないわいなう。
腰元一　常々、稽古遊ばす程あつて、又分なものぢやわいなう。
勝野　そりや其筈ぢやわいの。平常何にても、氣を詰めて稽古遊ばす故ぢやわいの。イヤ、申し。ちとお休みなされませ。其樣に遊ばしたら、お手が痛みませうぞえ。
腰元四　左樣でござります。ちつとお休みなされて、梅の盛りでもお詠め遊ばしませいなァ。
菅秀才　成程。そなた衆のいやる通り、最前よりよほどの間。ちつと休息しませうわいの。
皆々　左樣遊ばしませい。
（ト床几にかゝる。所へ侍一人出る。）
侍　申上げます。左中辨希世樣。何か御臺樣へ密々御相談致したいとの儀、もはやこれへお出でござります。
勝野　そんなら、其樣子、奧へお知らせ申しませう。

久方御前　イヤ、勝野、聞いた〱。

（ト御簾の内より、久方御前出る。）

ソレ希世卿を、こなたへお通し申しや。

侍　ハツ。

（トいふうち、希世橋懸りより侍連れ出で來る。久方御前こなしあつて出で迎へ。）

久方　オヽ、これは希世卿。

希世　御臺所。菅秀才殿。此程は打絶えましてござります。

久方　イヤ、モウ、此方も何かと取りまぎれ、お尋ねも申しませぬ。只今承りますれば、何か密々にお逢ひなされたいとの仰せ。どうやら案じられます。マア、其樣子をお聞かせなされて下さりませ。

希世　イヤ、密々と申しますでもござらぬ。御息女紅梅姫殿。齋世の宮と譯あるとの取沙汰。行方が知れぬとやら、見えぬとやら、餘り合點が行かぬゆゑ、親王の御所へ寄れば、御病氣とて御對面かなはず、まつたこなたの館へ參り、樣子を見れば、いつに變らぬ館の體。殊に、斯樣に花見ぢやの、的矢などと、優美の遊び。此希世、とんと合點が參りませぬ。紅梅姫のお身の上は、まことの事でござりますか。

久方　成程、御不審御尤も。齋世の宮樣と忍び〱の戀中とは、滿更な僞り。殊更二人とも行方知れぬの見えぬのと、ホンニそれが惡名と申すもの。宮樣の御病氣も僞りならず。まして紅梅姫は、お前にも御存じの通り、まことの母御は河内の土師村にござる覺壽樣。久しう便り音信もなし、それ故お見舞がてらに紅梅も、河内の館へ參りましてござります。

希世　ムウ、すりや、親王の御病氣も違ひなく、紅梅姫は河内の館へ。

久方　いかにも。

希世　ハテナア。

久方　ホヽヽヽ。希世樣。とつけもない事のお尋ね。何事かと存じまして、胸を抱きましてござりますわいなア。

希世　イヤモウ。この希世もお師匠の御息女、若しやと存じ、それ故、密々にてお尋ね申したのでござります。

久方　そりや御親切に忝う存じまする。幸ひ今日のお出で、此花園の梅の盛り、一入の詠め故、小筒を持たせました。希世樣にも、暮れかゝるまで御酒宴なされませ。

希世　これは忝う存じます。

菅秀才　イヤ、申し。希世樣。私が腕の的矢を御覽なされて、御批判頼み上げます。

希世　これは〱、菅秀才殿。文武を

忘れぬ心掛け、末頼もしう存じます。

久　方　これは、マア、希世様の御挨拶、忝う存じます。ナニ、菅秀才。そなたも暫く休息のため、奥庭へ御同道申し、御酒宴をお勧め申しや。勝野。御案内申せ。

勝　野　サア、希世様。

希　世　然らば御臺。菅秀才殿。いづれも案内。

皆　々　先づ、お入りなされませい。

へ然らば後刻と左中辨、奥殿にこそ入りにける。あとはなまめく女中どし。色づく梅の木のもとに。

腰元四　アレ／＼、梅のもとに、赤子が泣くわいなう。

勝　野　ホンニ、何やら見える。（ト見て、）ホンニ、やつぱり赤子ぢやわいなう。

腰元二　こりや、捨子とやらぢやわいなう。

久　方　ハテ。慈悲を守る世の中に、捨子するとは邪見の者の心ぢやなア。

腰元四　申し／＼。アレ、向うへ十八九な女中がこゝへ來る。捨子の親であらう。

勝　野　ホンニ、それ／＼。確かに此子の母親。申し、御臺様。暫く様子を、ひかへて見ようではござりますまいか。

久　方　いかさま。勝野のいやる通り、子を捨てる親心、どうするぞ、試して見ん。皆も密かに。合點か。

へ皆打ちつれて入り澤の、木蔭に様子を窺ひ居る。かくとも知らず取り姿も、廿歳にはまだうら若き、子を捨てる身のうき思ひ、梅の露やら涙やら、かわく間もなき十六夜は、やうやうに走り寄り。

（ト此淨瑠璃にて、十六夜、御所女中にて、しほ／＼と出て、梅のもとに寄り、）

十六夜　子を捨つる藪はあれども身を捨つる藪はないとは、ホンニ、よう云うた譬へ。よしないお腹を、假初ならぬ、宮仕への身の上。御所の人目を憚りて、そなたをこゝに捨てゝ置く、わしが心の悲しさ、つらさ。思ふやうなら守り育て、蝶よ花よと撫でさすり、いたいけ盛りを樂しまうものを、それさへ叶はぬ御所の勤め。せまじきものは宮仕へ。捨てるわしより、捨てらるゝそなたも因果。わしとても、因果と因果が寄り合つて、假に親子となつたかいなう。可愛や／＼なア。

（ト抱き上げる。赤子泣くを、ちやっと抱きしめ、）

へ乳房をふくめて我身をも、子持ち縫の添へ乳して、撫でさするこそ哀

れなり。

（ト乳を飲まして、梅のもとへ置くと、赤子泣く。）

〽そつと退けばわつと泣く、また立寄りて抱き上げ。

オヽ、泣きやんな〳〵。泣かずと直にねゝしや。ねんねこせい〳〵。ねんねが守はどこへいた。愛兒を見捨てゝ、これがマア、なんと此儘去なれうぞ。

〽離れがたなや、可愛やと、名残り盡きせぬ紅梅の、花降りしきる血の涙、ふらせばぬれじ、ぬらさじと、小袖につゝみ、梅の木陰にそつと置き、立上がらんとする折柄、腰元ばら〳〵と立出で。

（ト十六夜、種々こなしあつて、赤子を下に置き、立たうとする。腰元一時にばらばらと立出でて。）

腰元四　コレ、待ちや。捨てる程なら、生まぬがよいわいの。

腰元二　子が嫌なら、男に逢ふ時、其差引きしたがよいわいなう。

腰元一　あと先なしに、こゝをどこぢやと思うてゐやる。

腰元四　コレ、菅丞相様の御花園。てゝなし子を捨てる處ぢやないわいなう。

（ト御簾の內より久方御前出る。勝野附き出る。）

久方　詳しい譯は知らねども、捨子の樣子は聞き届けた。コレ、そこな女中、慈悲萬行の世の中にも、現在產みの子を捨てる邪見の母が身の上にも、よく〳〵深い樣子があらう。品によつたら幼な子の爲にも、惡しうはあるまい。譯を包まず、明かしてよからう。

十六夜　これはマア、お情あるお詞といひ、お咎めは御尤もなれども、お情厚き菅丞相樣、木陰を賴むは可愛さ餘つて捨てる此子。妾はもと女院の御所にお末の奉公。十六夜と申すもの。院の廳の武士、判官代輝國と申す御隨身の侍と人知れず馴染み、忍び逢ふ夜の數重なり、身の重るほど、傍輩の手前、御所の人目をやう〳〵に產み落し、身二つになつたれど、殊に夫の名が出ては、互ひに宮仕への妨げ。產まぬ先の氣遣ひより、產み落しての心の苦しさ。せんかたなさの思付き、御慈悲深い菅丞相樣、何卒お目にかゝれかし、鳥類畜類はいふに及ばず、有情非情の草木まで、御憐みをかけ給ふ。まして生ある稚子、よもや酷うはなされまいと、押付け業な此願ひ。拾ひ育てゝ下さりませうならば、生々世々の御厚恩と、有難う存じます。

〽淚にくれて賴みける。御臺所も共淚。

久　方　オヽ、切なるそもじの物語。自らも子を持つて、いとしさを思ひ知る。殊に、我夫菅丞相樣は、もと父もなく、母もなく、是善卿の庭前、梅の下へ下り給ふと聞く。其因緣もあるなれば、必ず氣遣ひしやんな。拾ひ取り、乳を附けて育て上げ、菅原のみばえとなし、菅秀才が末の賴りとするわいなう。

十六夜　エヽ、重々深き此御恩。いつのよにかは忘れませうぞ。

久　方　オヽ、悅びは道理々々。コレ、此梅は、道眞公の御祕藏、殊に、あの南へ咲いた好文木は、白梅の繼ぎ穗。其子を此木の下で拾ひ取りしは、南枝花始めて開く此子の榮え。行末長う悅んだがよいわいなう。

十六夜　エヽ、有難いお情。あの子一人と申しながら、いはゞ夫婦三人の命の親の御臺樣。お禮は詞に盡されぬ。さりながら、こゝに長居は人目あり。もう妾はお暇申しませう。

久　方　いかさま、人目にかゝらば、却つてそなたの爲にもならぬ。御所の暇を見合せて、又折々は此子の顏見におぢやいなう。

十六夜　さやうならば、御臺樣。皆樣、宜しくお賴み申上げます。

勝　野　必ず氣遣ひさしやんすな。此勝野が抱きかゝへて、やんがて大きう育て上げ、無事な顏を見せませう。

十六夜　とかくお前がたの、いかいお世話。お禮は重ねて。

勝　野　十六夜樣。

十六夜　勝野樣。

久　方　必ず無事で。

十六夜　あなたも御息もじで。

久　方　もう行きやるか。

十六夜　おさらば。

〽さらば〳〵と久方の、光のどけき花見の御所、玉だれ深く入り給ふ。

（ト久方御前、右の子を抱き、勝野皆々、御簾の内へ入る。）

〽あと見送りて十六夜が、御臺の影を伏拜み〳〵、悅び歎く後の方、樹木の蔭に最前より、樣子うかゞふ判官代輝國、始終立聞き走り出で。

（ト輝國、垣の間より出て、）

輝　國　十六夜。

十六夜　エヽ、輝國殿。

輝　國　大内の聞えを憚り、胴慾にも捨てうとした、忰は却つて大きな仕合せ。

十六夜　さいなア。一方ならぬ菅原家のお情。

輝　國　其方や身共が爲には、命の親、道眞公。

十六夜　此御恩をどうぞして下さんせ。

輝　國　せめてはちよつと御臺樣へ、一

總を。

（トいふうち御簾の内にて）

希世　イヤ〳〵、おかまひなされな。ちよつと梅の下へ參つて。

（トいふ聲に兩人こなしあつて）

十六夜　あの聲は希世様。

輝國　顔を合はしては。

十六夜　殊に日頃の意地わる。

輝國　不義の様子、沙汰せられては互ひの爲。

十六夜　そんなら輝國殿。

輝國　十六夜來い。

〽打連れてこそかけり行く。御簾の隙より洩れ來る希世、いやがる勝野を無理やりに、梅の木の下へ引つぱり出て。

希世　ハテ、來いといふたら、マア、おぢやいなう。

勝野　申し、希世様。あなたは御酒宴の、酒機嫌かは存じませぬが、若し人が見ましたら、てんがうとは申しますまい。物事堅い菅原のお家。不義がましい取沙汰があつては、妾よりあなたのお名が。

希世　ヲヽ、名が出ようが、不義の名が立たうが、大事ない。さほど物堅い勝野が、なぜ造酒之進と不義はしてゐるぞ。

勝野　ア、イヤ、申し、それは。

希世　それとは。こりや隠しても隠されぬ。何もかも知つてゐて口説くこの希世。をゝというて叶へると道西之進が事も話してしまふ。又、嫌ぢやといふと戀の敵。二人ながら道眞殿へ沙汰して、屹度した目に逢はしてやるぞ。

勝野　サア、それは。

希世　いやか。

勝野　サア。

希世　應か。

勝野　サア。

希世　サア／＼／＼。どうぢやぞいやい。

〽ほうど抱き付き、きめ往生。責め念佛の其ところへ、瀧口の官人、あわたゞしく馳り出で。

官人　希世樣。これにお渡りなさるゝか。只今記錄所へ、參內遊ばされよとの儀でござります。

希世　ヤア、ナニ、只今記錄所へ參れとな。

（ト勝野逃げて入る。）

官人　イヤ、菅原の道眞公へも、只今參內遊ばされよと、お使ひが相立ちましてござります。

希世　ハテ、心得ぬ。何にもせよ、大內の騷動に極まつたわい。

（トいふ中、奥より久方御前、菅秀才が手を引き、勝野、腰元三人、皆々附き出る。）

久方　イヤ、申し、希世樣。あなたと申し、道眞卿まで、火急の參內致せよとは、心許ないと存じます。自らはこれより館へ歸り、道眞公も、早速參內なさるゝやう申しませう。お前はこれより御所へお出でなされても、若し氣遣はしい事ならば、早速お知らせなされて下さりませ。

希世　成程。其儀は心得ました。かういふ中も心が急く。おさらば。

〽さらばとばかり左中辨、夢中になつてかけ出だす。久方御前は若君を、伴ひ立つや春霞、大內山へと。

（ト希世は橋懸りへ、久方御前は菅秀才、勝野、腰元三人をつれ、向うへ入る。）

返し

（此道具引き、始終管絃なり。一面の御殿。向う一面に無地の金襖、半御簾、欄間に殿上の札掛けて有る。橋懸り、渡殿の體。管絃にて道具止まる、ト奥御殿より辨の宰相、裝束、冠にて靜々と出る。

ト橋懸りより希世靜々と出る。）

辨宰相　ホウ、これは左中辨希世殿。

希世　これは辨の宰相殿。何か火急のお召ゆゑ、希世すぐさま參內致してござる。

辨宰相　シテ、菅原の道眞公はな。

希世　これも追付け參内でござる。シテ、お召の仔細はな。

辨宰相　イヤ、何か委細は存じませぬ。先づ記錄所へお詰めなされ。

希世　然らば記錄所へ相詰めませう。

（ト管絃にて、希世靜々奧御殿へ入る。ト引違うて、物淵の宰相、公家の形にて、奧より出て、）

物淵　宰相殿、いまだ道眞卿は參内召されぬか。

辨宰相　只今、希世卿參内召され、道眞公も最早參内あるとの事でござります。

物淵　然らば、白洲に控へし宿直の武士に用事あり。これへ呼び寄せ召されい。

辨宰相　ハツ。ヤア〳〵、次に控へし武士、早々これへ參れ。

玄蕃 輝國　ハアヽ。（ト兩人納豆烏帽子、半素袍、龍頭卷にて、橋懸りより出て、手をつかへ。）

玄蕃　藤原の時平公の隨身、春藤玄蕃。

輝國　院の廳の武士、判官代輝國。

兩人　參上仕つてござります。

物淵　汝等を召す事、餘の儀にあらず。菅原の道眞公、參内あらば、共に記錄所へ相詰めよとある勅命。

兩人　ハツ。委細畏り奉りましてござります。

内より　道眞公參内。

物淵　もはや道眞公參内とある。

辨宰相　此趣き記錄所へ知らせませう。

物淵　左樣致さう。

（ト物淵の宰相、辨の宰相、奧殿へ入る。始終管絃なり。道眞、橋懸りの渡殿より靜々出て、上手の間、金樓閣へ來る。掛けて有る札どろ〳〵にて落ちる。道眞、此體を見て不思議の思入れ。輝國に札を取れといふこなし。輝國取つて渡す。道眞受取り、）

道眞　ハテ、心得ぬ。故なくして殿上の札、右大臣道眞としるせし文字の失せしは、まさしく凶事。ハテ、心掛りや。

（ト小首傾けこなしある。玄蕃、輝國も不思議のこなし。此うち辨の宰相、奧より出て、）

辨宰相　道眞公參内を相待ち居ります。イザ記錄所へお詰めなされ。

道眞　いかさま參内延引致す。先づ先づ記錄所へ相詰めませう。

（ト管絃になり、道眞、辨の宰相、御殿の上を歩む。玄蕃、輝國、平舞臺の下を歩む。）

返し

（右の金樓閣、渡殿、段々東へ引いて取る。向う半御簾、下は木連格子、階段、高欄

附き、道眞留まる。

(ト舞臺の上に三好清貫、平の希世、伴の仲友、頭の定岡、藤原の宿禰、物淵の宰相、皆々冠、裝束にて並び居る。ト橋懸りより道眞しづ／＼出る。辨の宰相も附き出る。輝國、玄蕃も出で、よき所にすわる。)

辨宰相　道眞公參內。

(ト伴の仲友、頭の定岡、物淵の宰相、藤原の宿禰、道眞を取卷き、)

四　人　謀反人の道眞公。そこ動き召さるな。

道　眞　ハテ、仰々しき謀反呼ばはり。何を以てこの道眞を謀反人とは。

(ト清貫、道眞に向ひ、)

清　貫　ヤア、何を以てとは白々しい。いかに、道眞卿。汝は天の穗日の尊の嫡孫、累代學問をもつて家業として、帝七歳の御時より物讀みを敎への博士なれば、師匠は親と尊み給ひ、右大臣まで昇進せしに、何の恨み、何不足有つて、我國を傾けんとたくんだぞ。

道　眞　ヤア、奇怪なり、清貫。この道眞、朝廷を恨み奉り、逆意を企つるなどとは、穢らはしい言葉。但し確かなる證據ありや。

仲　友　ヤア、いはれざる證據呼ばはり。(ト口あけの短册を懷より出し、)證據といふはこの短册。先達て齋世の宮の召されたる車の內に落ち散る短册。汝が娘紅梅姬齋世親王、不義の證據。わが娘を后に立て、威を振るはんといふ、其方がたくみであらうがな。

物　淵　殊に、齋世の親王、紅梅姬、加茂堤より行方知れず。察する所、兩人とも、汝が館へ隱し置き、帝を討ち奉り、親王を位に卽けん底企みであらうがな。

頭の定岡　まだ其上、洛中の公家、武家はいふに及ばず、下人、土民の子供まで手習ひ學問に事寄せ、懷け親しみ、子に迷ふは親心と、すわといふ時、勅命は背くとも、道眞が爲には命惜しまぬ一味徒黨を企つるからは、謀反といふに違ひはあるまい。

宿　禰　かゝる叛逆の道眞、右大臣などとは中々もつて恐れあり。

清　貫　叛逆の罪ある道眞、今日より殿上の交りは叶ふまい。官位を召上げるが僻事か。ヤア、守護の武士、立寄つて道眞が裝束召し上げい。早く／＼。

玄　蕃　ハッ、畏つてござります。

(ト玄蕃つか／＼と寄るを、輝國立廻りあり、玄蕃を引戾し、)

輝　國　春藤玄蕃。待ちやれ。

玄　蕃　清貫公の御意を受け、謀反人の道眞が官位を剝ぐに、輝國、お身はな

んで留める。
輝國　さればさ。誰かある守護の武士、參れと御意を下されしを、お身一人が守護の武士か。春藤玄蕃仕れと、お指圖があつたか。
玄蕃　イヤサ、其儀は。
輝國　院の廳の武士、判官代輝國が控へ罷りあり。玄蕃。ちと無禮でござらうぞ。
玄蕃　いかさま。其許へ御挨拶も申さぬ、こりや拙者が無禮。眞平御免なされ。併し道眞殿。申譯は、ア、立つまい〳〵。
輝國　イヽヤ、齊世の宮樣。紅梅姫。互ひに不義の惡名ありといへども、これ以て道眞公の御存じない事。其上、御兩所の行方知れざるは、彼の不義の樣子、加茂堤にて餘人に見咎められ、面目ないと思召し、姫を伴ひ其場より、行方無うおなりなされたを、道眞公のお館へ引込みあるなどとは、正眞の惡舌と申すもの。まつた、洛中の童共、道眞公を戀ひ慕ふも、これまさしく筆の徳。わが子の眼を、明かに致し貰ひし其恩を思ひ、道眞公を主とも親とも尊むは無理ならず。大業に云ひふらすは愚人の取沙汰。天下の政事に似合はざる、御評議かと存じ奉ります。
玄蕃　成程、さう利口にいへば言譯は立つやうに聞ゆれど、さう利口に言譯叶はぬ。肝腎の證據を先達て引捕へ置いた。
輝國　ナニ、確かな證據を捕へありとは面白い。其證據、これへ出しやれ。
玄蕃　ヲヽ、只今こゝへ引出して見せう。ヤア〳〵、玄蕃が家來、道眞が一味の科人、早うこれへ引ッ立てい。
侍　ハアヽ。うせう。
（ト侍大勢、天蘭敬を繩附きにして、つか〳〵と引立て出る。道眞見て悔り。）
道眞　ヤア、唐土の使、天蘭敬。其いましめは何事ぞ。
清貫　ヤア、其驚きは喰はぬ〳〵。其天蘭敬が謀反の證據。ヤア、玄蕃。今一度道眞の目の前で白狀させい。
玄蕃　ハッ。天蘭敬。もはや遁れぬ所ぢや。最前白狀せし通り、今一度この處にて白狀せよ。異議に及ぶと、又々糺命さするぞ。
天蘭敬　ア、、申します〳〵。コレ、道眞卿。エヽ、口惜しうござるわいなう。先達て喋し合はせし通り、夢の内に唐土へ通ひしとは跡方もなき僞り、かねて我國の大王へ通達し、當今延喜帝を討ち亡し、此日本を唐土に隨へんとの契約。一味徒黨の手合はせに好文木に事寄せ、某が來朝。かの大王より送ら

れし内通の書翰を、無念や、奪ひ取られ、此通りの繩目。もはや遁れぬ道眞公。何もかも白狀してしまはつしやれいなう。

玄蕃　サア、何とかゝる確かな證據があるからは、動きは取れまい。道眞殿。判官代。返答あるか。

輝國　スリヤ、唐土より渡つたる天蘭敬が内通にて確かな證據が手に入りしとな。

清貫　ヲヽ、其一通はこれにあり。(ト出して見せる。)

輝國　スリヤ、其一通が。

玄蕃　謀反の證據。

輝國　スリヤ、アノ、それが。(ト種々あつて、)ホイ。(トうつむく。)

道眞　いやとよ、判官代。さのみ心を苦しめられな。いかほど重き證據ありとも、此身に知らぬ無實の難。察する所、逆心の輩あつて、天蘭敬を引入れ、我を追ひ失はんと計りしに疑ひなし。

清貫　イヽヤ、何ほど口利口に言廻はしても、もはや叶はぬ。さしあたる確かな證據は、天蘭敬が自身の白狀。これに上越す證據はない。君、甚だ逆鱗ましく〳〵、かゝる惡逆不道の道眞とはゆめ〳〵知らず、これまで過ぎしは朕が誤り、急ぎ道眞が官祿を取上げ、殿上の札をけづり、太宰府へ遠島させよとの勅諚。

輝國　ナニ、スリヤ道眞公を、筑紫へ遠島とな。

清貫　朝廷に弓引く道眞。たとへ命を召さるゝとても、違背がならうや。

仲友　洛中を引渡し、いかなる刑にも行ふべき叛逆人。

物淵　命を助け、遠流とはまだ此上の御憐み。

頭定岡　従三位より右大臣まで昇進せし道眞。下々でいふ實がいると仰向くとは其方の事。

清貫　身の程知らぬうつけ者。この日の本を異國へ随へんとは、水の月取る猿猴が望み同前。

宿禰　いかさま。あのまじ〳〵した顔わい。しつかい猿同前。天が下を盗まうとする手長猿。

玄蕃　今といふ今、木から落ちた道眞。なんと天命、

四人　思ひ知つたか。

(ト皆々取巻きいふ。道眞ちつとなる。輝國種々思入れある。ト内より、)

希世　宣命。(ト臺に宣命を載せ、恭しく持つて出る。)菅原の道眞へ宣命。伴の仲友卿、讀み上げ召されい。

仲友　ハツ。(ト仲友受取り恭しく開き、)

右大臣菅原の道眞。此度叛逆の沙汰分明なるによつて、位階をとゞめ、太宰の權の帥に下し、筑紫へ流罪せしむる者なり。內裏より宣命。伴の仲友承る。依つて執達件の如し。延喜元年辛酉正月二十五日。

（ト道眞の傍へ置く。道眞宣命を取つて見て、種々ありて泣く。）

清貫　叛逆の罪、道眞公、今より殿上の交り相叶ふまい。綸旨を承りし三好清貫が政務は、まッ此通り。

（ト道眞が着たる冠を笏にて打落す。輝國見て驚く。道眞ハツとうつむく。希世手を打ち。）

希世　ハヽア、知らなんだ〳〵。かゝる謀反人とは夢にだにも知らず、今日が日までもお師匠の、イヤ、先生のと敬うたがくやしい。もうこつちから弟子師匠の因を切つて、こなたと一つでない希世が、身の言譯せねばならぬ。テモ、サテモこなたは、顏に似合はぬ恐しい和郎ぢやわいなう。

輝國　道眞公。御身に覺えなき無實の御難儀。嘸、口惜しう思召されう。

道眞　われ、初冠の始より、天恩を思ひ、禮を以て上に仕へ、仁を以て下を惠み、朝廷に私無しとは思へども、譬へば晝の螢の如く、身に有る非をば知り難し。君は天なり。罪を天に得たれば、祈るべき天もなし。最前參內せし折から、殿上の板にしるされし、右大臣と書いたる板の、自然と落ちたるは、かゝる無實の罪に沈むべき天の知らせ。文宣王は陽虎なりとて捕はれ、周の文王は、羑里の獄屋に入り給ふ。それは對する敵あり。菅丞相は敵もなし。身に犯せる罪もなし。只讒言の輩ゆゑ、あはれ、法皇の御代ならば、讒言の舌はたるゝとも、よも聞濟みはあるまじきに、淺ましの時世ぢやなア。

希世　ヤア、わが大望、事顯はれしを憤り、帝を恨み奉り、其上、公卿の面面を讒者などとの惡言。よい〳〵。これから弟子師匠、一つでないといふ申譯に、この希世が繩打つて、謀反徒黨の白狀さす。サア、謀反人殿。腕まはした。

（ト道眞が手を取り引附ける。輝國それをと寄るを、玄蕃、引退ける。）

皆々　勅諚ぢやぞ。

（ト輝國控へる。）

時平　ヤア、諸卿の方々。先づ待たれよ。

（ト奧殿より聲掛け、つか〳〵と走り出て、希世を突退け、道眞をかこふ。清貫、希世、皆々時平を取卷き、）

希世　ヤア、時平公、何ゆゑ罪有る道

眞をかばひ召さるゝ。
清　貫　留め立てして、共に朝敵の名を取り給ふか。
皆　々　時平公。何とでござる。
時　平　ヤア、こと〴〵しい事。道眞帝(みかど)より蒙りし罪の次第、時平くはしく聞き屆けた。さりながら其詮議は、少し分らぬ〳〵。
希　世　イヤ、時平公。みす〳〵知れた謀反人。それを詮議が分らぬとはな。
時　平　オヽ、菅原の道眞は、從三位より段々昇進して、右大臣に任官せられ、今この時平と肩をならぶる兩官。何が不足で謀反すべきいはれなし。差當つて詮議のあるは、唐土(もろこし)の使、天蘭敬。彼をきつと拷問せば、事明白に相知れん。其沙汰もなきうち、道眞を糺命せんとは、近頃麁忽の評議であらうぞ。
清　貫　イヽヤ、麁忽でござらぬ。差當る道眞が科をさしおき、天蘭敬を糺命せられんは、異國へ聞え、事を好むに似たり。まして遁れぬ確かな證據は、コレこの異國より送りし密書。何と遁れはござるまい。(ト件の密書を時平へ差出す。)
仲　友　其上、娘紅梅姫、齋世の宮に戀をさせ、底の企みは親王を位に卽け、われ一天の外戚とならん謀。卽ち、不義の證據は此短册。(ト短册を差附ける。)
頭定岡　殊に、公家、武家、町人に至るまで、子供を憐み、其親々を懷け、一味徒黨を集むるは、疑ひもなき謀反人。反逆のきざしで有るまいか。
物　淵　何は格別帝(みかど)より一旦遠流(をんる)させよとの詔(みことのり)。それを背くは違勅の科。
宿　禰　綸言は汗の如し、出でて再び歸らぬ。道眞殿虛名。
清　貫　かゝる罪人(つみんど)をかばひだて。
希　世　共に違勅の科を蒙り給ふか。
皆　々　時平公。
時　平　サア。
(ト清貫は密書、仲友は短册を時平に突附ける。)
皆　々　サア〳〵〳〵、なんと。
(ト時平ぢつと控へて、短册を取り、)
時　平　ハヽア、是非もなき世の成行き。後(のち)にかゝる證據とならば、とくにも取捨つべきに、此短册は遁るべきが、遁れぬ證據は此密書、唐土(もろこし)の大王よりの內通。殊更、使に立ちし天蘭敬が自身の白狀。かれこれ以て重(かさ)なる證據。其上、君が逆鱗强ければ、先づ一旦は、君命に隨うて、天の理に隨ふも、同じ事。さりながら、三十路(みそぢ)に足らぬ此時平、道眞は右大臣に昇進して、一天四海の政事(まつりごと)、この時平、道眞、執り行はば、一天四海泰平。御齢(おんよはひ)は萬々歲(ぜい)と祝ひし

甲斐もなう、道眞虚名蒙つて、右左に泣ぶ兩臣、今より貴公左遷あらば、日月二つ片々に、片羽をもがれし翼の如く、いつか雲井の御歎き。時平が心の悲しさ、推量あれ、道眞公。

道眞　こは惠みある時平のお歎き。道眞虚名蒙つて、身は荒磯の島守と朽ち果つるとも、わが忠臣の魂は都に通ひ、帝都を守護し奉らん。此後、道眞席は同じからずとも、貴公、某、兩臣の如く心を働かし、帝の守護頼み入る。

時平　其儀は氣遣ひあるな。帝の守護は、時平が少しも麁略はあるまじ。われ天下の政事に私を執り行ふものならば、和歌三神の御罰を受け、再び冠を着せざらん法もあらん。さら〳〵不忠はあらじ。其儀に於て、必ず心を苦しめられな。

道眞　ハ、ア、あつぱれ涼しき貴殿の御心底。承つた道眞が安堵。又の歸洛は盲龜の浮木。これ今生の名殘とも、思へば果敢なき身の成り果て。

時平　道眞公。

道眞　時平公。

時平　エヽ、是非もなき。

兩人　世の有樣ぢやなァ。

（ト互ひに手を取交し泣く。ト橋懸りより官人走り出て、）

官人　ハッ、菅丞相の門弟と申し、京中のわらんべ、まつた、其親共、御門前へ參り、丞相左遷の樣子を聞き、何卒暇乞ひ、又は船場まで見送りの儀を願ひ奉ります。いかゞ仕りませう。

清貫　ヤア、ならぬ〳〵。科極まつた道眞。見送りなどは思ひもよらぬ。妻子眷屬に至るまで、別々に引離し、五畿内を追ひ拂へよとの勅諚。菅丞相が弟子とはいへど、いはゞ謀反一味のかたうど同前。暇乞ひとはのぶとい奴。其者共、親子ぐるめ獄屋へぶち込み、糺命させよ。ヤア、玄蕃、早く〳〵。

玄蕃　ハッ、畏つてござります。（ト行かうとする。）

時平　ヤア、騷がしい。暫く待て。

（ト玄蕃ハッと控へる。）

師の恩を思ひ、暇乞ひを願ふはしほらしきわらんべ。親たるものは門前に留め置き、せめては暫しの暇乞ひ。少人なれば恐れも有るまい。こなたへ通し得させよ。

皆々　イヤ、それは。

時平　左大臣時平が許すといふに。

皆々　ぢやと申して

時平　但し、時平が詞用ゐられぬか。

皆々　イヤ。全く。

時平　さもなくば、控へられよ。

皆々　ハッ。

時平　急いで其わらんべども、これへ通せ。
官人　畏つてござります。
（ト官人橋懸りへ入る。希世思入れ。）
希世　ハヽア、負うた子に敎へられ、淺瀨の格で、今わらんべどもが、師匠へ暇乞ひを願ふので思合せた。師匠の恩は須彌山より高く、蒼海よりも深しといへども、中々比べがたき筆の道。この希世も、師の恩を報ぜんため、今日より平の希世、菅原の氏を顯はし、道眞の館を申しうけ、大内の筆道となりたき願ひ。情ある時平公。天機宜しくお執り成し頼み上げます。
時平　ヤア、師匠の恩を繼がんなどとは横道者。まこと師を思ふ希世ならば、最前道眞に繩を打ち、糺命させんと、なぜ師匠に手向ひ致した。
希世　イヤサ、それは。
時平　殊更、妻子はもとより眷屬まで五畿内を追ひ拂へと、きびしき勅諚。其方は道眞の弟子ならずや。其上、弟子の身をもつて、師に敵たふ人非人。官位裝束を召し離し、五畿内をほつぱらふが、此時平が政事。ヤア、判官代。苦しうない、立寄つて政法を行うてよからう。
輝國　ハツ、畏つてござります。サア、希世卿。お立ちなされ。官人達、早く〱。
官人　ハツ。
希世　これは又迷惑な。
官人　ハテ、こまごと仰せられな。
（ト官人立寄る。輝國下知して希世が裝束、着類を剝ぎ取り、丸裸にして、向うへ突出す。希世、皆々と顏見合せ、面目なきこなし。輝國、希世が首筋とらへ。）
輝國　祠冠に刃向ふ天罰思ひ知らつしやつたか。（ト突倒す。）
希世　ハアヽ。有爲轉變の世の中ぢやよなア。昨日は玉垂れの内に晝寢したり、けふは素肌に叩き出され、此有様は何事ぞ。
官人　ハテ、こまごと云はずと、ござりませい。
希世　其やうに荒々しう致すな〱。
官人　早うござりませい。
（ト割竹にて叩き引ッ立てゝ行く。眞中程にて希世、官人を鞠蹴るやうに蹴る。種種をかしき仕打にて向うへ入る。ト橋懸りより子供大勢出る。）
官人　ハツ。仰せの如く童共召連れましてござります。
時平　これへ許して、暇乞ひ致させよ。
官人　ハアヽ。サア、皆の者、菅丞相樣へ暇乞ひ。
子供　ハアヽ。

（トおよそ二十人ばかり、めい〳〵手に梅の折枝、若松、手本、草紙やうの物を持ち、菅丞相を見て、皆々辭儀する。）

道眞　オヽ。しをらしや皆の者。此道眞が一樣に敎へし者ならねど、わが手風を學ぶ故、師匠と思ひ慕ふやさしさ。さりながら、たとひ配所に身まかりても、魂は留まつて、手習ひ學問の守り神と成るべきぞ。われ亡きあとにて、われ賴む人は無實の難をのがるべき一首は卽ちわが記念。（思入れ。）流れゆく我はみづくとなりぬとも、君柵となりてとゞめよ。（思入れ。）賴りもあらば、法皇へ時平公。よきに名殘を賴み入る。

時平　追附け、君の逆鱗申しなだめ、歸洛の勅命。この時平が申し請け、再び歸りを松が枝に、梅は諸木に魁けて、やがてめでたく春に逢ふ、帝の勅諚相待たれよ。

道眞　龍の腮の驪龍の玉、得るが如きのお心付け、忝い。（ト道眞行かうとする。時平袂を控へ。）

時平　仰せ殘されん事もあらば。

道眞　たゞ何事も天命。

（ト兩人顏見合はせ、愁ひのこなしあつて。）

兩人　おさらば。

淸貫　ヤア、追立ての役人、輝國、玄

蕃。時刻が移るぞ。

輝國 玄蕃 ハア、。

官人 イザ お立ちなされ。

(トかすめて管絃になる。忍び三重の様な合方、しめやかにあつて、菅丞相しづ〱向うへ行かうとする。子供皆々袂にすがり泣く〱附いて行く。あとより清貫、仲友、物淵、定岡、藤原の宿禰、辨の宰相、しづ〱附いて行く。輝國、玄蕃あとより附き、時平、中程まで行き、こなしあつて、あと打眺め、ほろりとして本舞臺へ戻り、よき所に立つ。向うよりバタ〱にて玄蕃走り出て、)

玄蕃 ハツ、菅丞相。只今牢輿に入れ、檢非違使へ渡し、時を移さず、船場まで追立つるやう、しかと申付けましてござります。

時平 玄蕃。路次を、隨分いたはれ。

玄蕃 ハツ。

(ト向うへ入る。あと見送り、ほろりとして見廻し、天蘭敬が繩を解き、)

時平 黄金千兩。予が御所にて請取り、立歸れ。

天蘭敬 エヽ忝い。然らば、おさらば。

時平 早う〱。

(トハツと天蘭敬走り入る。時平、始終向うを見て、懷中より短册を出し、ちつと見て、)

春來れば柳の糸も解けにけり、結ぼほれたる君が心を。齋世樣參る。紅梅より。(ト少し腹立つる思入れありて、)ほてくろしい。(ト短册を打付ける。)われ若年なれど重代の攝家。左大臣の左大將の任官。道眞、纔か儒臣の家にありながら、右大臣の右大將に昇進。剩へ內覽を許され、この時平より官位は右にありながら、唐の關白の位に准じ、菅丞相と敬はれ、萬機の政務を彼が心に取納め、この時平はなきもの同前。帝、法皇の覺えよきまゝ、後には攝政關白に登らんは目のあたり。見るに忍びぬわが奇怪。それ故、黄金に心迷ひし毛唐人一人をわが心服に取込め、希世めをぼつぱらひ、玄蕃はもとより淸貫はじめ諸卿めら、一々たばかりし故、今日只今遠島。(ト思入れ。)わが本懷を達し、ハテ、心よやなア。とは知らずして諸卿めら、われに道眞を見落せよと口々に罵れど、なに己れらに此一大事を明さうか。馬鹿めらが。(思入れ。)道眞は猶大馬鹿。時平が涙を誠と思ひ、帝の守護をくれ〲と涙を流し頼みしは、アヽ淺はか〱。道眞だにほいまくれば、大內は心の儘。天皇、親王、院の御所。かたつぱしから夜のおとゞに押込め、われに敵する靑公家ばら、一々に蹴殺し、大望成就の血祭

り。元老智多の道眞、かねて心が置かれしに、計れば安くわが謀の網に落ちたか。(思入れ。)ハテ(思入れ。)心よやなア。ム丶丶丶丶。ハ丶丶丶丶。(ト大笑ひ。階段の高欄にもたれ、)テモ、道眞はいかい阿房ぢやなア。

幕

三つ目

京都廣小路の場

造り物。臆病口、竹の木戸、向う一面の土手。橋懸り、築地塀。幕の内より京中の子供、親のぢい、ばゞ、大勢往來に莚を敷き、皆々坐り居る。此見得にて幕明く。

〽行き集ふ京極通りの廣小路、丞相流され給ふと聞き、老若男女の別ちなく、名殘を惜しむきり／＼す、築地の蔭に聲立てゝ、泣く音おさふる金棒の音、嚴重に見えにける。

皆々 ハイ／＼。どうぞお暇乞ひをさせて下さりませ。

〽程なく官人列を正し、見る目いぶせき牢輿の、前後をかこみ警固の役人、時平の隨身、春藤玄蕃、院の廳の仕へ司、判官代輝國、衣紋正しく立出づる。

皆々 申し、どうぞお顔なりと、暫く拜ませて下さりませ。お慈悲、お情でござります。(ト銘々願ふ。)

玄蕃 ヤイ／＼、かしましい、蠅蟲めら。うぬらそれほど、菅丞相に名殘が惜しくば、共に太宰府へ流し者にしてくれうか。ソレ、官人共。きやつらを打ちすゑい。

官人 ハア丶。

輝國 イヤ／＼、いづれも先づ待たれよ。先程も時平公の仰せの如く、彼等が爲には師匠たる道眞公、暇乞ひ願ふは無理ならず。門前に留め置き、暫しの暇乞ひさせよとの御意。ナニ、官人共。輿をおろせ。

官人 ハ丶ア。(ト輿をおろす。)

〽聞くよりハッと御臺、若君、勝野も共にまろび出で、牢輿を見奉り、ソレマアいかなる御有樣と、聲を揃へて亂れ泣き。

久方 ナウ、此有樣は何事ぞ。科の樣子は知らねども、島流しとは情ない。何ゆゑ、かゝる咎めを蒙り給ふ。樣子は。

(ト輝國、久方御前を見て、)

輝國 さては、道眞公の北の方、若君。(思入れ。)ハテナア。

玄蕃 ム丶。道眞が御臺、菅秀才とな。菅丞相の科の次第。王位を望む朝敵、逃れぬ證據は、娘紅梅姫と齋世親王、

まつた異國への內通の書翰。此二品言譯立たず、謀反人に相極り、洛中を引渡し、重き刑に行はるべき筈なれども、一旦帝の師匠たる故、師弟の禮儀を重んじ、命を助け遠島とはまだしもの御政道。有難いと三拜さつしやれ。

久方　ナニ、親王と紅梅姬とが不義を身に引受けて、かゝる難儀に逢ひ給ふか。覺えなき身を流され給ふは何事ぞ。なぜ仰せ分けを遊ばして下さりませぬ。科なき御身をやみ〳〵とさすらへとは曲がない。此儘お別れ申して、この菅秀才や自らは、なんと致しませうぞいなア。

菅秀才　申し、父上樣。とても仰せ分けの立ちませぬ中ならば、私も島へ一緒にお連れなされて下さりませ。コレ、警固の者共。わしも一緒に流してくれいやい。

勝野　オヽ、若君樣。よう仰しやつた。荒い風をも御存じないお身を、なんとおひとりやられませう。せめてお召使に私なりと、お願ひなされて下さりませ。

久方　勝野のいやる通り、さも恐しき荒島に、なんとおひとり置かれうぞ。たとへ死すとも親子一緒に。慈悲ぢや、情ぢや。武士は物の哀れを知るぞかし。どうぞ一緒にやつてくれいやい。

玄蕃　ヤア、ごくにも立たぬよまい言。とかういふうち時刻が移る。殊更、罪人の餘類の者共、五畿內をほつぱらへとの勅諚。抱いて居る小悴めは、菅秀才の弟と見える。此方へ渡せ。ソレ、官人共引ッ立てい。

久方　アヽ、待つて下され。此子はまことにわらはが子にあらず。丞相樣を賴みに、處も多い花園に捨て置きしは義理ある子。自らや菅秀才は召さるゝとも、此子ばかりは、助けて下されいなう。

〽くどき立てゝ泣き給へば、輝國さては十六夜とわが仲の子なりしかと思へば御臺の御身にかへ、いたはり給ふ情の程、有難しと一禮も、奉公の身のはかなやと、氣はくらやみとなりにけり。佞人邪智の春藤玄蕃。

玄蕃　エヽ、耳やかましいよまひ言。ソレ、官人共、打ちすゑい。

官人　ハアヽ。

（ト叩く。輝國、引きのけ。）

輝國　御身にかへて、此幼子をいたはり、まことの親が洩れ聞かば、嘸嬉しうござりませう。併し科人の餘類は、たとへ親子兄弟たりとも引き分けて、五畿內を追ひ拂へとは、私ならぬ君の御諚。其幼子は、いづれへなりともお

捨てなされて、早々お立退きなされませう。

久方　イヤナウ、輝國殿。自らが願ひ、どうぞ情に我君のお顔を、此菅秀才に今一度、暇乞ひがさせたうござるわいなう。

輝國　成程、お名殘を惜しまるゝも御尤も。お心置きなうお暇乞ひなされませう。

玄蕃　ヤア。ならぬ〳〵。謀反人の餘類、暇乞ひは叶はぬ事。

輝國　道眞公の牢輿は、門前に留め置き、暇乞ひさせよとは、貴殿の主人時平公の仰せ。但し、主人の御意を背くか。

玄蕃　サア、それは。

輝國　サア〳〵。なんとでござる。

玄蕃　ム、。

輝國　ハツ、御臺所。丞相へ、とくと御暇乞ひあられませう。

〽御臺所御親子は、牢輿に、こは淺ましのお姿やと、取付き歎くを制し給ひ。

（ト久方御前、菅秀才、勝野、輿に取り付く。）

久方　ヤア、わがつまか。

菅秀才　父上樣。

勝野　御主人樣。

菅丞相　最前から、おことらが、歎きは道理。道眞虛名蒙れども、君を恨み奉らず。きのふ迄は叡慮にかなひ、けふは逆鱗ましますも、皆天命のなすところ。今更悔む事にあらず。さりながら殘念なるは武部源藏。彼能書なれば捨てがたし。道眞かくなりしと聞かば、一度は尋ね參らん。其時は、コレ、此卷。菅原の流心を傳ふる神道口傳。菅秀才、其方に渡し置く。御臺は此一書を源藏へ相渡し、わが心を察せよと、くれ〴〵も傳へられよ。申し置く事こればかり。必ず〳〵歎かれな。

（ト一卷を菅秀才、書物を久方御前に渡す。久方御前取りて、こなしあり。）

久方　御傳授の一卷、お渡しあるからは、御勘當もお許しなされて遣はさるるか。

丞相　いやとよ。傳授は傳授。勘當は勘當。今此身にて勘當許せば上への恐れ。

菅秀才　仰せ殘されました趣き、つどつど申しませうが、今お別れ申しまして、いつか御歸洛のある事やら。これ今生のお別れかと、思へば之を形見かと、いと悲しう存じますわいなア。

（ト大泣き。四つの太鼓を打つ。玄蕃かぞへ〳〵）

玄蕃　最早四つの太鼓、時刻が移る。

官人共、輿を舁ぎ上げい。
官　人　ハア、。
（ト久方御前、菅秀才、勝野、取付くを、
官人共、引退ける。）
久　方　情に、今暫し。
玄　蕃　ヤア、面倒な。もはや輿の傍へ
は叶はぬぞ。
三　人　そんなら、もう叶はぬかい。ハ
ア、。
玄　蕃　ヤア、耳かしましい、とこぼえ
聲。官人共、引きすゑい。
官　人　ハア、。
へ情を知らぬ官人共、ばら〱と立
ちかゝれば、輝國すかさず拂ひ退
け、人々かこうて突立てば、春藤玄
蕃ぐつと詰め寄り、
玄　蕃　ヤア、輝國。科人の餘類をかば
ふは、所存ばしあるか。
輝　國　ハテ、たかゞ、女、子供の事。
玄　蕃　ム、。謀反人の肩持つは、そち
も謀反人の餘類か。
輝　國　左樣ではなけれども、
玄　蕃　左樣でなくば、控へてゐよ。
輝　國　サ、それは。
玄　蕃　サア〱〱。なんと。
へ我慢の反太刀抜きかくる。輝國無
念の忍びの鍔元、抜かば切らんと詰
めよる有樣、輿の内より御聲高く。
菅丞相　ヤア、兩人。無益の爭ひ致され
な。丞相これに有る故に、妻子の歎き、
方々の爭ひ。名殘を惜しみ猶豫あれば、
却つて恐れ。早々都を追ひ立てられ
よ。官人達。片時も輿を急がれよ。
玄　蕃　オ、、さすがは道眞。よい覺悟。
輝國殿。爭ひは私事、大切の囚人、猶
豫はならぬ。官人共、早くぼつ立てい。
久方 菅秀才　ナウ、われ〱も。
官　人　叶はぬ〱。
へ役目の角びし、心の情、身に知る
雨やさめ〲と、御臺の歎きやるか
たなく、師匠を送るをさな子も、又
もや歸洛を松が枝に、くもる涙や梅
の雨、官人共に追ひ立てられ、うき
身をつくしの浪の末、しほれ出でさ
せ給ひける、御有樣ぞいたはしき。
（ト此淨瑠璃にて、官人輿を舁き上げる
と、勝野、久方御前、菅秀才、取附くを
くらはす。輝國さゝへる。三人又輿の方
へ行かうとする。輝國留める。輿を臆病
口へ舁いて行く。子供、親々も皆附いて
入る。ト玄蕃輿の方へ入る、輝國、菅秀
才をいたはる思入れあつて、臆病口へ入
る。三人あと見送り、矢來の傍へ行かう
とする。）
官　人　叶はぬ事でござる。（ト割竹振り
上げるこなしにて入る。）
久　方　もはやお輿の影も見えぬわいな

う。

菅秀才　申し母樣。どうぞ、ま一度父上のお顔が拜みたいわいなア。

勝野　チヽヽ、お道理でござります。お名殘惜しいは、御尤もでござりますれど、こんな悲しい事は、嘸姫君樣は御存じあるまい。

久方　ホンニヽ、可愛や、紅梅姫が聞きやつたら、嘸悲しう思ふであらう。

勝野　申し、御臺樣。

久方　勝野。

菅秀才　母樣。

三人　エヽヽ、情ないうき世ぢやなア。

（ト三人泣く。）

〽歎き沈みし折からに、武部源藏おッ取り卷きし固めの役人、かなたこなたと打つ杖の、下を廻つて。

（ト花道より源藏（早替り）、着附け破れ、風呂敷に麻上下、扇を包み、腰にくゝり附け、官人二人、割竹引きづつて出る。）

源藏　ハイ〳〵、お免されませ〳〵。

官人一　ヤア憎いやつ。菅丞相、都を追立つる間、辻々の固め。

官人二　往來をとゞめ置くに、なぜ矢來を押破り、理不盡に往來致す。

源藏　イヤ、モウ、それは私が誤り。何卒御赦免下さりませう。

（ト兩人散々に打つ。源藏二人を投げ退け、本舞臺へ走り來る。兩人追つかけ來て、散々に打つ。源藏打倒されながら、久方御前を見て、）

ヤア、御臺樣。

久方　武部源藏か。わが夫は、御流罪にお會ひなされたわいなう。

源藏　承りました〳〵。

勝野　源藏樣。丞相樣は、今輿に召してお越し遊ばしたわいなア。

源藏　最早お出でなされましたか。シテ、其道筋は。

勝野　京橋を南へさして。

源藏　ソレ、お暇乞ひ。

〽イデお暇乞ひと、はやり雄の、武部源藏矢來へかゝれば、そりや狼藉者打ちすゑよと、手手に割竹振上げて、脊骨も腰も、さゝらになれと、ぶつてかゝれば、ナウ悲しやと菅秀才、御臺も倶に取付くを、こなたは足弱、かなたこなたと支へる源藏、兩三人の上を、覆ひ重なる忠臣も、情を知らぬ官人共、矢來、木戸口、門も打連れて、急ぎ行く。

（ト官人叩き立てる。久方御前、勝野、菅秀才を打たせじと、三人の上へ源藏乘り懸り、わが脊中にて三人を叩かさぬやうにして種々ある。官人打据ゑ、木戸口へ入る。門を締める。源藏こなしあり。）

源藏　お怪我はござりませなんだ

かく〳〵。

久方　イヤ〳〵、怪我はないわいなう。

源藏　何はともあれお暇乞ひを。

（トかけ出す。久方御前、袂を控へ。）

久方　コレ、源藏、假令後より追付きやつても、警固の役人、官人、仕丁が押隔て、中々御對面は叶はぬわいなう。

源藏　そんなら、もう叶ひませぬか。

久方　叶はぬわいなう。

源藏　叶はぬ。（思入れ。）叶ひませぬか。

〽いかなる運の盡き弓ぞ。やたけ心の弦切れて、どうと泣き伏し涙ぐむ。若君、源藏が側近く。

菅秀才　コレ、源藏。それほど父上に會ひたくば、配所とやらへわしも倶に、連れて往てくれい。母樣、參りたうござります。（ト臆病口の方を見て。）父上樣。私もお連れなされて下さりませ。母樣。會ひたうござります。源藏、父上樣に會はしてくれいやい。

久方　オヽ、道理ぢや〳〵。

源藏　お道理でござります〳〵。

（ト合方になり。）

勝野殿。アヽ、殘念にござります。私が、かういふ事とは露知らず、わが君樣には、從三位より大納言にお成りなされたと承り、殊には唐の丞相の宣旨まで下りしとの事、此上もなき御大慶、私、お悅びにとは存じますれど、御勘當の身の上、殊に永々の素浪人。イヤ〳〵、かゝるめでたき折柄、お悅びによつたら、御勘當を免される事もあらうと、十三里飛ぶが如く、鳥羽のほとりへ參りましたれば、大勢の人々が、アヽ、菅丞相樣、おいとしやといふを、ふと承り、申し〳〵、菅丞相樣が、何と致しました、と尋ねますれば、イヤ何やら誤りがあつて、御閉門とやら、御流罪とやら、聞いたる時は膝もがつくり。イヤ〳〵、これは惡舌、高きは風に破らるゝと、寸善尺魔、何分御殿へと、大宮通りを五條へ參りましたる所、はや御殿は青竹を以て犇と戸締め、出入りというては一人も叶はず。何はともあれ禁裏の樣子をと、烏丸通りを二條へ參りますれば、大勢の人立ち。こゝやかしこに、菅丞相樣の身の上、覺えのない事ぢやと、とり〴〵の噂。イヤ〳〵、一時も早うお輿へお暇乞ひと、息を切つて參りますれば、年の頃七十餘りの老人、孫と覺しき者の手を引いて、申し、お侍、と私が袂を控へ、菅丞相樣は遠い島へお出でなされまして、あの納まりはどうなる事でござりますと、問はるゝ人も、問ふ人も、目と目を見合はせ、（思入れ。）アヽ、ようこそお尋ね下さるゝ。

しかし私は所縁のない者、追ッ附け御歸洛でござりませう、と別れて、何のかけかまはぬ他人でさへ、あの如く、ましてや御勘當は受けたれども、一旦は主從、せめてお輿になりとお暇乞ひ、と參りますれば、ヤレ、狼藉者、ぶてよ、叩けよと、[illegible]、此如く打ち打擲にあひまする[illegible]お輿の[illegible]で[illegible]まい拜まぬとは、よく〳〵主從の縁の薄い、（思入れあって）始の程はお悦びにと、御覽下さりませ。破れ熨斗目に、（ト風呂敷ほどき思入れ。）破れ袴、破れ扇子も、御勘當の身の上、お玄關へはとても叶はぬ。せめてお臺所。イヤ〳〵、御門番の軒下にて。

〽差出して御祝儀をと、思ふ願ひもあとの祭り。

神ならぬ身は、（ト扇子を箱ともに打付け。）

〽殘念さよとはがみをなし。

誰が爲に袴、肩衣。

〽持ちたる肩衣、喰ひさき〳〵、涙も布も縱横に身を投げすて〳〵泣き沈む。主從互ひに顔見合はせ、そもマアいかなる因果ぞと、暫し歎かせ給ひける。

（ト色々身をもがき、袴又は書物を喰ひさき髪を掻き亂し、色々あろ。）

久方　オヽ、源藏、そなたの歎きは、道理々々。さりながら歎きの中の悦びとは、そなたの身の上。菅原の家の秘書を傳授なされんと、自らにお渡しなされた。そなたに渡し、道眞が心を推量せよとの、くれ〴〵のお言葉。

菅秀才　コレ、源藏。此一巻をそなたに遣る程に、どうぞ父上樣の御座なさる、配所とやらへ連れて往てくれい。頼むわいやい。

源藏　アヽ、申し〳〵。そりや御傳授の一巻でござりますか。

久方　さうぢやわいなう。

源藏　菅原の御傳授の秘書を下さるゝからは、昔に變らぬ主從。御勘當はお赦しでござりますか。

久方　さればいの。傳授は傳授、勘當は勘當と事を分けたるお言葉。マア、何にもせよ、その書物を披見しやいなう。

源藏　ハア。然らば。

〽源藏は頭を下げ、あたりに有りあふ高提燈、照すは君の御情、我身は扇の幸ひと、打ちひらき、臺に載せ、ちり手水してへり下り、恭しくも押しひらき。

（ト高提燈をおろし、扇の封を切り、右の書物をひろげ、懐より塵紙を出し、口にあて。）

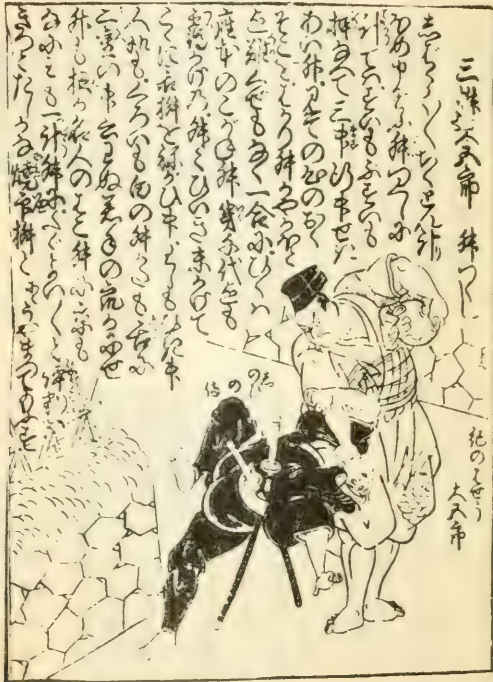
砂を切る草只三分ばかり、木に誇る霞

僅か半段餘り。これは御前樣の唐歌。昨日こそ年は暮れけれ春霞、春日の山にはや立ちにけり。(思入れ。)これは人丸の詠歌。何れも早春の心を詠み叶へ、此傳授の卷を我に與へ、道實公の御心底を察せよと。ムウ、眞名と假名を認め、源藏へ下されしは。(思入れ。)君は罪なくして、配所へ赴き、砂を切つて此芽出しの若君。覺えなき無實の難は木にほころ霞に似たり。其霧霞を裁ち切りて菅原のお家、春日の山に出づる如く、此源藏に恐れ多くも若君を、守り奉り、菅原の筆法傳授、普く世上に流布せよと、我君の心を籠め給ひし此一書、此一卷も傳授の卷。エヽ、有難や、忝や。

ト須彌より高き御高恩、傳授の卷に御書取つて、押戴き〳〵、はるか退つて有難涙。

久方　オヽ、さすがは源藏、我君の御安心。御心底を察せし上は、いよ〳〵菅秀才が事を賴むぞや。

源藏　お氣遣ひ遊ばされますな。都の中は人目あれば、拙者が隱れ家、津の國難波入江へ、お供仕りませう。

(ト此うち物淵の宰相、侍大勢連れ、窺ひ出て、)

物淵　御臺所。菅秀才。ソリヤ。

侍　やらぬ。

（ト此時、右の提燈の火を消す。これより皆々闇がりのこなし。源藏、菅秀才を負ひ、久方御前が手を引き、物淵と一寸立廻りあつて、橋懸りへ入る。あとに勝野、物淵と立廻り、物淵橋懸りへ入る。あとに勝野、侍と段々立廻り、皆々を當てる。ト久方御前、橋懸りより走り出る。あとより物淵附き出る。）

勝野　ヤア、御臺樣。

物淵　その御臺、こつちへ渡せ。

勝野　寄つたら爲にならぬぞ。

（ト勝野、物淵と立廻りあつて、勝野にあてる。勝野こける。此うち物淵、久方御前を小脇にかゝへ、向うへ入る。勝野起きて行かうとする。侍一人かゝるをぽんと切倒し、向うへ走り入る。ト橋懸りより又五郎仕丁の形にて出る。）

〽切結ぶ、すぐに其日も暮れ過ぎて、築地の屋根をめつき〳〵、ひらりと飛んだる黒裝束、大政官の御正印難なく奪ひ仕濟し顏。

（ト頭の定岡、築地の屋根より飛下りる。又五郎ちやつと提燈の火を消す。）

定岡　大政官の御正印、まんまとしてやつた。エヽ、忝い。

〽悅ぶうしろへ窺ふ仕丁、御正印を引つたくり、逃げんとするを遁さじと、引拔いて切りかけるを、さしつたりと手利きの仕丁、もぎ取る刄、曲者は、ウンとのつけにそりかへる。其隙に不敵の仕丁、後に窺ふ源藏、曲者待てと取附くを、振切る手先、手錬のさそく、はずみに引取る仕丁の片袖、遁れ行くへは白砂の、あとをしたうて。

（ト三重にて、）

幕

四つ目　長柄堤の場

造り物。長柄堤の體。向う一面の土手。上に並木松あり。眞中よき處に稻村有り。舞臺先、菜種畑、但し、青菜の生えて有る見得。在鄕唄にて幕あく。

（ト七つ半の鐘打つ。向うより勝野、抱へ帶、旅姿にて出る。あとより仲間、了助、半合羽、一腰さし、弓張提灯、三度笠にて出る。）

勝野　コレ、了助。もう夜が明けさうなものぢやが。

了助　イヤ〳〵。只今、七つを打ちましてござりまする。

勝野　そなたも滅相な。そんなら夜が明けてから立つたら、よかつたもの。

了助　サア、私も時を取違へましてござりまする。

勝野　さうして、これから浪花入江とやらへは、なんぼ程あらうぞいなう。
了助　されば、私もとくと存じませぬ。大方一里の上もござりませう。
勝野　そんなら、夜道を歩かねばならぬなう。
了助　左樣でござりませう。
勝野　ついぞ夜に入つて歩いた事もなし、殊に、此樣な堤ばかり歩いて居ると、どうやら心のおくれるものぢやわいなう。どうぞ早う、町つゞきの所へ行きたいものぢやが。
了助　イヤ、まだもそつと、堤を參らずばなりますまいてや。
勝野　それはどうやら氣味のわるい。怖い事ぢやなう。
了助　なんの怖い事はござりませぬ。お供には拙者が附いて居りまする。それとも怖いと思召すなら、お肌の守をしつかりと胸に當てゝござりませい。
勝野　成程、それがよいわいの。（ト懐中を見て、）アヽ、ひよんな事をしたわいの。
了助　何となされました。
勝野　さつきの渡し場で、帶を締め直したが、守を船の中で。
了助　お忘れなさりましたか。エヽ、面倒な。というて捨てゝも置かれず。わしが一走り往て取つて參りませう。
勝野　そんなら、さうしてたも。どうぞ早う戻つてたもや。
了助　畏りました。あの稻叢の中へ入つてござりませ。今の間に戻つて歸ります。
勝野　隨分早う戻つてや。
了助　合點でござります。
（ト了助、向うへ走り入る。勝野稻叢へ入る。ト在郷唄になり、橋懸りよりねぶかの九助、鯰の兵六、雲助にて、希世、破れ布子にてくも駕籠に乗り出る。よき處へおろす。希世眠つて居る。）
九助　鯰よ。こゝでおろせ〳〵。
兵六　オツト合點ぢや。何とよう眠る和郎ぢやないかい。
九助　サイヤイ、駕籠舁き上げるとすぐにせぶりかけたが、やつぱり寢てゐらるゝ。これで一倍重たい。コレ、申し、親方。起きさつしやりませ。コレ、親方々々。
（ト駕籠の傍にてやかましういふ。希世目の醒めたるこなし。）
希世　ムヽヽヽ。なんぢや〳〵。
九助　なんぢや所ぢやござりませぬ。もう參りました。
希世　參つたとは、どこへ參つた。
兵六　ハイ、定の處まで參りました。
希世　ムヽ、定の處まで來たか。

兵六　ハイ。
希世　さうして、こゝはどこぢや。
九助　テモ滅相な。これが定の長柄堤でござります。
希世　何をいふぞい。誰が長柄堤まで定めたぞい。おれが宿に泊つてゐるを、わいらが來て駕籠借らぬか、長柄堤まで行きませう〳〵と、あんまり往きたさうにいふによつて、アヽこりや連れがなうて淋しいさうな、おれを誘うて連れて行くのぢやと思うたによつて、いかにも往てやらうというて乘つて來たが、何とした。
九助　エヽ、親方。じやら〳〵と、何をいはしやりますぞい。コレ、もう夜が明けますわいの。わしらも歸りたうござります。どうぞ駕籠賃を下さりませ。
希世　なんぢや。駕籠賃おこせ。シテ、駕籠賃は何程ぢや。
九助　ハテ、物覺えの惡い。駕籠賃は二百五十でござりまする。
希世　アノ、それを今おこせか。
九助　ハイ。どうぞ早う往なして下さりませ。
希世　イヤ、ないわい。
兩人　エヽ。
希世　わいらはおれを知らぬか。
兩人　イヽエ、存じませぬ。
希世　こりやならぬわ。おれは大内から出たものぢや。
兩人　これはしたり。
希世　ぢやによつて、其樣なさもしい物は手に觸れた事がないわい。
兵六　そんなら駕籠賃はないかい。
九助　駕籠賃もなしに、なんで貴樣、駕籠に乘つた。
希世　こいつ澤山に物をいふわいやい。それほど駕籠賃が欲しくば、もそつと駕籠をやれ〳〵。
九助　駕籠を遣れとは、どこまでやるのでござりまする。
希世　難波まで遣れ。
九助　難波はどこへ行くのでござりまする。
希世　そりやおれも知らぬ。
兵六　難波何町の、何屋何がしが所へ行くのぢやと仰しやりませ。
希世　それを知つてよいものか。
兩人　エヽ。
希世　それを知つてゐる位なら駕籠は借らぬ。おれ獨り歩いて行くわい。その難波には、おれが由縁の者がある。その處は知らぬが、知るまでは幾日でも逗留して探す。廻り逢うた時に、駕籠賃はやらう。
九助　イヤ、こいつが〳〵。あんまり

ぢやがな。さてはおのれ、おいらをかたりをつたのぢやなア。さては、よい〳〵。駕籠賃の代りに、うぬが着て居るおかいこ引ッ剝ぐわ。サア、出やアがれいやい。出をらぬかいヤイ。

（ト兩人して希世を駕籠よりはふり出す。希世ころ〳〵と轉げる。）

希世　ヤイ、わいらの一時の主を、なぜ打ちあけた。

兵六　こいつが〳〵。樣々の事をぬかす。根深よ。どうせうぞい。

九助　どうのかゝのはない。引ッぱけ〳〵。

兵六　テヽ、合點ぢや。（ト兵六、希世にかゝる）。

希世　何をさらすのぢや。（トしめ上げる）。

九助　こいつが〳〵。ほてがきいてある。うぬを。

（トかゝるを、兩人を投げ、息杖にて打ちすゑる。）

アヽ、お免されませ。もう駕籠賃は取りませぬ。

希世　おのれ、取つてたまるものか。こゝな大盗人めが。

（ト又くらはす。兩人逃げて入る。）

アヽ、惡い奴等ぢや。サヽ、何も構ふ事はない。駕籠やれ〳〵。

（ト希世又駕籠へ入る。勝野稻叢の間より出で、）

勝野　イヤ、申し。最前から承りますれば、あなたは大内と仰しやつた。大内と仰しやれば。お懷かしうござります。シテ、大内では、どなた樣でござります。

希世　イヤ、それがしは大内では、ちと樣子あつて。（ト互ひに顏見合せ、）

勝野　ヤア、希世樣。

希世　そちは勝野か。

（ト勝野逃げうとする。希世つかまへて、）

どこへ。逃さぬ〳〵。ハテ變つた所で逢うたなア。われがこゝに居るからは、定めて伴うた者があらうなア。サア、それをいへ。

勝野　さればでござります。我君樣流罪の時より、お主樣も、妾らも、散々ばら〳〵となりました。妾は心が急きますれば。

（ト逃げうとする。希世ちやつとつかまへ、）

希世　われ一人とは忝い。是迄心を掛けた勝野。こゝで逢うたは盡きせぬ緣。マア一寸、アノ松蔭へ。（ト挑むを振切り、）

勝野　アヽ、惡い事なされまするわいなア。

希世　なんの惡い事せう。よい事するのぢや。

(トこれより鶏籠のふちを追廻す。勝野逃廻る。よき所にて、鶏籠の中より引ツ捕へ、)
してやつた／＼。
(ト又挑む。勝野、希世の手を噛む。)
アイタヽヽヽ。わりやァ噛んだな。
勝野　悪い事をなされますと、其やうに噛みますぞえ。
(ト希世嗅いで見て、)
希世　アヽ、蘭奢待の香がするわい。そんならどのやうにいうても嫌か。
勝野　たとへどのやうになされても、嫌でござりますわいなァ。
希世　よいわ。そんなら、もう抱いて寝ぬわ。(思入れ。)が、われに尋ねる事がある。われがこゝに居るからは、源蔵が處を知つて居るであらう。サア、有りやうにいへ。
勝野　ハテ、變つた事をお尋ねなさる。源蔵を尋ねて何となされます。
希世　チヽ、菅秀才が詮議するのぢや。
勝野　エヽ。
希世　サア、源蔵が住家をいへ。
勝野　イエ、存じませぬ。
希世　知らぬといやァ、かう。
(ト喉を締めかゝる。立廻りに、勝野が懐中より財布を引出し、見て、)
ハテ、よい物を持つてゐるなァ。
勝野　エヽ。(トびつくりして、財布を引つたくり、懐へ入れる)。
希世　おれも此程は、甚だ不自由な。それ、こつちへおこせ。
勝野　イヽヤ、此金は大切なお主様の御用に立てる大事の金。渡す事はなりませぬ。
希世　ムゥ、お主の用に立てるといふからは、御臺、菅秀才が在家、そらや知つてゐるな。
勝野　イヽヤ、御臺様、若君様のお在家は知らぬわいなう。
希世　スリヤ、どのやうにいうても、知らぬか。
勝野　知らぬわいなう。
希世　ぬかさにや、われ、此棒でぶち据ゑても、云はさにや置かぬ。
勝野　サア。
希世　云はぬか。
勝野　サア。
希世　ぬかさにや、かう／＼／＼。
(ト散々にくらはす。勝野うんと切當する。希世種々あり、池の水を汲んで来て、口から口へ飲ませてやる。勝野心付き希世を見て振放し、逃げうとするを引戻し、)
サア、有りやうに云へ。
勝野　たとへ此身は、どのやうになつても、知らぬわいの。

希世　エヽ、しぶとい。ぬかさにや、また、かう〳〵。
（ト又散々打つ。此うち兵六、九助、外に雲助五六人、めい〳〵竹杖を持ち、出かけてゐて、）
雲助　どいつぢや〳〵。
九助　うぬ。駕籠賃の代りに。
（ト雲助大勢、皆々希世を竹杖にて叩きかかる。希世、あちこち逃げ廻る。とゞ希世、橋懸りへ逃げて入る。皆々追ひかけ入る。勝野あとより追ツかけ走り入る。ト雨車になると、方々にて蛙鳴く。橋懸りより百姓太次兵衛、百姓の形にて、外に百姓四五人、皆々簑、笠にて出て、）
太次兵　なんと、今の物音は、畑盗人ではないか。
△　ヲヽ、今宵はつかまへて、棒縛りにしてくれう。
○　イヤ〳〵、土の中へ埋んで仕まはつしやれ。
□　皆の衆。すわといふたら出やつしやれや。
皆々　合點ぢや〳〵。
（ト皆々方々の松の木、稻叢などの間々へ隱れる。ト合方になり、向ふより、源藏、菅笠、簑を着て、畚をかたげ出る。花道にて、）
源藏　アヽ、嬉しや。雨もやんだ。まだ里人も起きはせまい。今の雨で、往來もあるまい。（思入れ。）さりながら、いかに浪苦の身なればとて、菅原のお家普代の侍、武部源藏ともいはるゝ者が、御主人の御流罪のあとにまします若君を、夫婦の者がお預り申しての御養育、貧苦の住居をお目にかけまいと女房にまで隱し包み、人の作りたる穀を盗み取つて、其日の煙を立てるとは、野末に住む非人にも劣つたる身の上かと思へば、口惜しいやら、無念なやら、（思入れ。）アヽ、おれとした事が、何の思ひ出さいでもよい事を、くど〳〵と、假令人が聞かねばこそよけれ。ハテサテぐちな。ハヽヽヽ。（ト思はず高聲にて笑ひ、ちやつと口を閉ぎ、）明けぬうちに、さうぢや。
（ト又あたりを見廻りて畑の青菜を引きぬいて、菜種などを鎌にて刈り、畚へ入れる。ト並木の蔭より太次兵衛、百姓皆皆出る。）
百姓皆々　畑盗人め。
（ト銘々、鋤、鍬を持つて、源藏を追ひ廻る。源藏、あちこち逃げるうち、太次兵衛、源藏が笠をつかまへる。源藏笠を脱ぎ、種々逃げ廻る事あつて、つまり、臆病口へ逃げて入る。あとに皆々寄りこぞり、）
○　折角、見付けたのに、テモ足の早い

奴。

太次兵　皆待たつしやれ。笠を取つたが、何やら書いてあるが、暗うて見えぬ。内へ往んで見ようわいの。

百姓皆々　さうせう〳〵。ござれ〳〵。

（ト皆々、橋懸りへ入る。明六つの鐘鳴る。在鄕唄になり、橋懸りより馬糞拾ひ、手籠あまかひにて拾ひ〳〵出る。臆病口より馬方、馬を ひ出て、行きあふ。）

馬士　六兵衞か。精が出るなア。

馬糞拾ひ　貴樣も早いなア。どこへ行く。

馬士　長柄に荷があるさかいで、早う行かうと思うて。

馬糞拾ひ　それは精が出るなア。

（ト此うち希世、最前の勝野が金を口にくはへて走り出で、馬に行き當る。馬跳ね出し、馬士を引きずり橋懸りへ駈けて入る。ト馬糞拾ひ、逃げて入る。希世そこらを探り、源藏が畚の中へ右の金を入れる。橋懸りに大勢人音する。希世種々うろたへて、臆病口へ走り入る。ト橋懸りより百姓大勢出て、臆病口へ皆々入る。源藏引き違へ出て、又菜種を取つて畚へねぢ込み、向うへ走り入る。始終ばたばたにて、希世そろ〳〵と出で、右の畚を尋ねる。百姓あとより附き出で、）

百姓皆々　こゝにをる〳〵。

（ト皆々希世を捕まへようとする。希世うろたへ、馬糞の籠を畚かと思ひ、戴いて向うへ走る。百姓皆々、そいつぢや〳〵というて、あとより追うて入る。をかしみの。）

幕

五つ目

難波武部源藏内の場

造り物。二重舞臺。見附け赤壁、納戸口、西の方、折廻り反古張障子屋臺。橋懸り、迯垂。よき所に門口、「眞草行指南」といふ表札有る。臆病口、大木の松、幹枝葉茂り有り。戸浪、前垂れ、襷にて釜の下へ差しくべてゐる。百姓、三人、腰掛け、茶を飲んで居る。在鄕唄にて幕明く。

百姓　おか樣。毎日々々、こりや世話になりますなう。

戸浪　なんのお世話な事はござんせぬ。常住お前方のお世話になつてゐる妾ら夫婦。せめて畑の休みになと、澁い出端をあけますのでござんすわいなア。

□　それは忝い。ほんに、此源藏殿が、此村へござつてから、イヤ證文ぢやの、むづかしい手紙ぢやのというて、書いてもらふので、村中が大抵悅んで居る事ぢやござらぬ。

戸浪　イヤモウ、ぬしの拙い筆が、間におひませうなら、何なりとも遠慮な

う、お使ひなされて下さりませ。
△ イヤモウ、いとしいはこなんたち夫婦の衆。もとは都で由ある人ぢやさうな。この難波の里へござつてから、しつけもさつしやれぬこの世帶。見る目が笑止なと、こちの嬶が、こなんの事を、常住屈托にして居るが、お内儀、水汲む釣瓶が、どうぢや、よう返りますかの。
戸浪 ハイ〳〵。あなたがたのお世話で、習はうより馴れいで、今は釣瓶もよう返ります。水もよう汲みます。打巻も漸しますわいなア。
○ 待つたり。その打巻とは何の事ぢやの。
□ ハテ、太郎兵衞。知れた事、五月の節句の事ぢやわいの。
△ 何を。そりや打巻かすのぢやない。粽巻くのぢやわいの。
□ ハヽヽ。さうかいなア。時にお内儀。不思議なは、アレあの松ぢや。此間一夜の中に、こゝな庭に生えたが、源藏殿が朝も晩も掃除して、大事にかけさつしやるは、どうぢやの。
戸浪 サア、あの松に就いて、不思議がござんす。妾ら女夫が大切な御主人様、此たび不慮な事ゆゑ、筑紫へ御流罪のお身。ところに、あの松はお主様の御祕藏。それゆゑ卽ち御主人様と思うて、妾ら女夫がお宮仕へ致しますのでござんすわいなア。
○ ハアヽ、聞えた。それでこなた衆女夫が、大事にかけるとは、こりや尤もぢやわいの。
□ 今、お内儀の話で合點がいた。それで、へ女夫を松と號けしは、此時よりぞ知られけり。（ト淨瑠璃語る。）
△ エヽ、あほらしい。何の事ぢやぞいの。
□ ハテ、松の謂れを語つて、聞かすのぢやわいの。
○ イヤ、松の謂れで日が闌けた。何と、畑へ行きませうか。
△ ヲヽ、行きませう〳〵。
戸浪 皆様。マア、ようござります。マア、お茶お上りなされませ。
○ イヤ〳〵、御馳走におひました。
△ 源藏殿が歸られたら、よろしういうて下されい。
（ト在郷唄になり、百姓しか〴〵いうて、橋懸りへ入る。ト戸浪、障子屋臺を開く。菅秀才、机にかゝり、學問の態。戸浪手をつかへ。）
戸浪 若君樣。其樣に學問にお凝りなされたら、お氣も結ぼれませう。お煩ひでも出れば、惡しうござります。マア〳〵、これへお越しなされ、お氣晴

しなされませいなア。
菅秀才　イヤ／＼、戸浪。一日に一字學べば三百六十字との教へぢやわいなう。
（ト在郷唄になり、源藏向うより刈手の形にて頰冠りして、畚に菜種や菜の葉を入れ走り出て、つか／＼と内へ入り、戸をぴつしやりさして、ほつと吐息つく。戸浪、恟りして）
戸浪　オヽ、こちの人。戻らしやんしたか。
源藏　女房共。アヽ、嬉しんや。
菅秀才　源藏。今戻りやつたか。
源藏　ハツ。これは若君様。只今歸りましてござります。（ト畚を片付けて、）これはしたり。女房共、心の附かぬ。大切な若君様、なぜ端近へ出しますぞいの。今にても時平方より。（思入れ。）ハテサテ、心の附かぬ。どうしたものぢやぞいなう。
戸浪　アイ。イエ／＼。あんまりお學問に心を委ねてござる故、もしお氣も結ぼれませうかと思うて、今こゝへ出しましたわいなア。イヤ、申し、こちの人え。お前は此間より、七つ前／＼に出やしやんすが、何處へいかしやんすえ。
（ト源藏恟りして）
源藏　イヤ、こりや何ぢやわいの。オヽ、御臺様を見失うたは、おれが誤り、それ故晝もお尋ねと思へども、何をいうても、此様な見苦しい形。それ故に、夜の内に尋ねに出るのぢやわいなう。
戸浪　それはマア、さうであらうが、お前の顔付き。戻りのけたゝましいは、常の様子では。
（トいろ／＼いふ。源藏びつくり、思入れ。）
源藏　イヤ、寒かつた。
戸浪　エ。
菅秀才　コレ、源藏。どうぞしやつたか。
源藏　戻る道で震ひ付きました。（思入れ。）イヤ／＼、もうよい／＼。案じやんな／＼。イヤ、若君様。お案じ下されな、源藏めはめつたに煩ふ事ぢやござりませぬ。
菅秀才　源藏。館の騒動より、そなた夫婦の心遣ひ、隨分煩はぬやうにして、此上ながら、父上の歸洛あるやうに頼むぞや。
源藏　アレ、聞きやつたか。
戸浪　こちの人。
源藏　チエヽ、有難い仰せ。煩はぬやうにとは、冥加ないお言葉。これに就いても、口惜しいは時平が計ひ。讒者の讒、罪なき君をさすらへと、濁る

浮世の有様ながら、御一家はちり／＼に、勿體なくも、菅原の若君を、軒漏の埴生の御住居、思ひ廻せば、おいたはしうて／＼。（ト泣かうとして、思入れ。）ハヽヽヽ。おれとした事が、しれた事を。定めて若君様の愚痴な奴ぢやとお笑ひ遊ばしませう。ナウ、女房共、さうぢやなう。ハヽヽヽ。イヤ／＼。思ふまい／＼。有爲轉變の世の中、日月とても蝕の愛ひ。（思入れ。）イヤ、女房共。けさの朝嵐、庭の松が枝に障りもなかつたか。

戸浪　イエ／＼。お前の言附け、随分大切に、そよとの風の落葉さへ、大事に取つて置いてござんすわいなア。

源藏　ヲヽ、それがよい。随分心を付けてたも。夫婦の爲には、大切な御主人同前。若君様。お聞き遊ばせ。父君丞相様の御祕藏、不思議に生えたこの幹。追附け君の歸洛を、松の榮えを菅原氏、常盤の色に緑の我君、神の示顯に、君の御愛樹は、即ち父君。我々夫婦も諸共に、せめては畑の出來初穗。女房共。片木、土盃。

戸浪　アイ／＼。

（ト合方になり、戸浪片木、土盃を取つて來る。源藏、畚より菜種を取出し、水に滌め、へぎに載せ、火を打ちかけ、松の木へ供へ、下へさがつて辭儀する。戸浪見て。）

滅相なこちの人。菜種の花を。

源藏　ハテ、故人の詩に、菜種の詩に、花の色は蒸したる粟の如しと賦したれば、心ばかりの粟の飯。源藏が貧苦に迫り、島にござる丞相様へ、心ばかりのおもてなし。

戸浪　成程、さうでござんす。鐵丸を食するといへども、心汚れたる人の物を受けずとは、八幡様の御託宣とやら。忠義を忘れぬこちの人、菜種の御供は百味の飲食。

菅秀才　源藏夫婦が淺からぬ忠節。父、丞相様にもさぞ御満足にあらうぞいの。

源藏　エヽ、有難いお言葉でございます。若君様には、奥にてお好きの横笛を遊ばされませう。

戸浪　父君にも追付け御歸洛、めでたうお逢ひなされませ。

（ト右のせりふの内より、橋懸りより、つなしや又右衛門、男二三人に鋤、鍬、斧を持たせ出て、戸を叩き、）

又右衛門　源藏内にか。開けてもらはう／＼。

（トやかましういふ。源藏、戸浪に菅秀才を奥へやれといふ。戸浪、一間へ菅秀才を入れる。此うち始終やかましういふ。）

（戸浪開けて、）

戸浪　エヽ、せはしない。誰ぢやぞいの。

又右衛　誰でもない、おれぢや。此村の請負ひ人、つなしや又右衛門ぢや。約束の地代を取りに來たのぢやわいの。

源藏　コレハ〳〵、又右衛門樣。御苦勞にようお出で下されました。サヽこれへ。女房共。エヽ、氣の付かぬ。お煙草盆を、ちやつとあなたへ。

戸浪　アイ〳〵。（ト煙草盆と茶を持ち行く。）

又右衛　アヽ、コレ、茶も煙草も飲みたうない。おれや地代の金を取りに來たのぢや。サア、受取つて去にませう。

源藏　これは毎度御苦勞樣でござります。段々延引仕りまして、甚だお氣の毒にござります。どうぞ明後日までお待ちなされて下さりませ。明後日にはきつと上げます。

又右衛　アヽ、コレ〳〵。その明後日、久しいものぢや。もうなりませぬ。一寸も待つ事はならぬわいなう。

源藏　成程。御立腹は御尤もでござります。イヤモウ、貧しい世帶で、書き物や又寫し物の代物を集めまして上げますのでござりますさかいに、此やうに遲なはります。イヤ、併し、私が懇ろやひに無心申しまして、明後日はきつと貸して貰ひます。どうぞお待ちなされて下さりませ。

又右衛　アヽ、コレ〳〵。そのもう、人だましはいかぬわいなう。とんと合點がいかぬ。貴樣も醉狂な。今日、家に養ふ物は有るか無いかといふ風體にて、あの松を買ふとは、全體、呑込めぬ。先度の大風の擧句に、あの樣に一時にぬつと生えたぢや。テモ不思議なと思うても、見世物にはならず、隣り屋敷へかまふにいつて、いつそ打切つて焚附になとせうと思うて、掘り起しに來た所が貴樣がとめた。此松を、どうぞわしに賣つてくれいと段々の頼み、松の木ばかりならよけれど、あれだけ地面が塞がる故、賣る事はならぬといふを、袖褄にすがつて、涙をこぼしての頼みぢや。あゝしてあれば、隣り屋敷へかまうて邪魔にはなれど、それほど頼ましやる事、賣つてやらうと、地代から松の木を、僅か金三十兩に賣つたぞや。其金を取りにくりや、晩ぢやの、翌日ぢやのと、一寸延ばしに埓が明かぬ。いかに松の木の金ぢやとて、下り藤にしては、此請負ひ人、つらいぢや。此樣に來てゐる事はなりませぬわいなう。

源藏　サア、さう仰しやるは段々御尤

もでござりますが、私もいらぬ酔狂なれど、あの松を求めますは、ちつと仔細がござります。こりや申しても御存じない儀。どうぞ明後日までお待ちなされて下さりませ。

又右衛　アヽ、コレ〳〵源藏殿。金の出來んものを、無理に買ふ事はない。こちはあゝして置いては邪魔になる故、ぶち切つて、焚附にしてしまふ積りぢや。

源藏　イヤ、又右衛門様。そりやどうしたお言葉でござります。さうさせます程ならば、此やうにお頼みは申しませぬわいなア。(ト急いていふ。)

又右衛　ハア、、御立腹か。御立腹お尤もぢや。コレ、皆の衆。アレ、あの松の木、掘りかけて下され。

男　オイ〳〵、合點ぢや。(ト皆々松の木の傍へ行かうとする。)

源藏　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

又右衛　イヤ、構ふ事はない。掘つて下され〳〵。

戸浪　コレ、申し。其やうに仰しやらずと、どうぞ。

(ト源藏皆々を留める。男うぢ〳〵する。)

又右衛　コレイなう。こなた衆は何をしに來たのぢや。早う掘らつしやれぬかいなう。

源藏　サア、段々御尤もでござります。此上は、長うとも申しませぬ。どうぞ今宵中、お待ちなされて下さりませ。あの松を切らせます事は、私が御主人の祕藏の松。不思議に此所へ生えたは三世の奇縁。身の誤りに御主人様と思ひ、朝夕夫婦が大切に落葉一つ散らさぬやうに致しますも、今、日陰の私が忠義。こゝの所を聞分けて下さりませうならば、たとへ此身はどのやうになつても、金の探測致して差上げませう程に、どうぞコレ慈悲ぢや。昔は堂上に仕へて錆刀も差したる身、兩手を突き、頭を下げてのお頼み。コレ申し、どうぞ今宵の所を、お待ちなされて下さりませ。

戸浪　ハイ〳〵。今主の申されます通り、違ひはござりませぬ。御主人同前のあの松、切倒されては夫婦の者が悲しみ、どうぞお待ちなされて下さりませ。あなたのお心一つで、こちの人の忠義も不忠となる、大事のあの松。今宵の所を、コレ、申し。

源藏　夫婦が一生のお願ひ。

戸浪　どうぞお聞屆けなされて下さりませう。

源藏 戸浪　又右衛門様。

（ト兩方より又右衞門に取附き、いろ〳〵
頼む。又右衞門も思入れありて、）

又右衞　ハテ、それほど夫婦の衆が涙を
流しての頼み、違ひもあるまい。おれ
もつなしや又右衞門。男ぢや。よいわ。
待つてやらう。

源　藏　ナニ、御用捨なされて下さりま
すか。

源藏
戸浪　エヽ、有難うござります。

又右衞　アヽ、コレ〳〵。待つてはやら
うが、翌日までは待たぬ。今宵の夜半
まで。

源　藏　そんなら、今宵の夜半まで。

又右衞　夜半の鐘がゴンと鳴ると、取り
に來るぞや。それまで金が出來ぬと、
夜中とは云はさぬ。切つてしまふぞ
や。

源　藏　成程、きつと拵へませう。

又右衞　必ず違へまいぞや。

源　藏　そりやモウ、違ふ事もござりま
すまい。

又右衞　そんならお内儀。源藏殿。きつ
と言葉を番うたぞや。

源　藏　ようお出でなされました。

（ト唄になり、又右衞門、「男共、サア〳〵」
と連れて橋懸りへ入る。あとに兩人思入
れある。）

戸　浪　申し、こちの人。お前、今のや
うに請合はしやんして、金の心當りが
ござんすかえ。

源　藏　身の誤りに、永々の浪人。夫婦
の者が朝夕の煙も細い挊世帶。

戸　浪　以前は僅か、今では大枚の金の
才覺。

源　藏　おかくまひ申す若君に、御不自
由をさせますまい爲、道ならぬ事。

戸　浪　エ。

源　藏　長柄の事も。

戸　浪　長柄の事とはえ。

源　藏　サア、昔は色變へる松の地代の
金探測。（思入れ）ムウ。

（ト手を組み思案する、ト向うより下役、
急がしさうに走り出て、）

下　役　申し〳〵、源藏樣。お宿にござ
りますか。何やらお前にお尋ねがある
といふて、代官所へどれやらお歷々樣
がお出でなされてござります。サア
〳〵、今、お出でなされませ。

源　藏　ムウ。ナニ、わしに尋ねたい事
があるといふて、お代官所から召しま
すとな。

戸　浪　申し、こちの人。何ぞ氣遣ひな
事ぢやござんせぬかえ。

源　藏　サア、何も覺えはないが、若し
又昨夜の。

戸　浪　エ、昨夜のとは、何でござんす
え。

源藏　イヤ、言付ける事があるのか。コレ、こな樣。何も樣子知らぬか。

下役　イエ〳〵、私は存じませぬ。今、急に呼んで來いとの事でござります。サア、お出でなされませぬか。

源藏　サア、參ります。コレ、女房共。木にも萱にも心を置く時節なれば、あの一間の、ナア、必ず合點か。

戸浪　成程。心得ましてござんす。

下役　サア、お出でなされませぬか。

源藏　サア、參ります。ソレ、羽織たも。

戸浪　アイ〳〵。（ト羽織着せる。）

下役　申し。羽織は着いでも大事ない。急な事でござります。

源藏　隨分氣を付けや。

戸浪　アイ〳〵。

下役　サア、お出でなされませ。

源藏　ドレ、參りませう。

（ト唄になり、源藏下役を連れ向うへ入る。戸浪あとに案じる事しか〳〵あると、向うより、希世、冠、下地の髮にて、黒羽二重の隨分破れたのを着て、門口に立ち、）

希世　お勅使。

戸浪　エヽ。

（ト悔りする。希世しづ〳〵内へ入る。戸浪見て、）

お前は左中辨希世樣。

希世　勅使なれば罷り通る。

（ト仔細らしうずつと通る。）

戸浪　見れば、見苦しい形で、勅使とはえ。

希世　戸浪。其後は打絶えたなう。シテ、そちが夫、武部源藏は。

戸浪　ハイ、こちの人は、今ちつと用があつて。

希世　すりや、他出よの。どうぞ、そちが夫源藏にまみえたいものぢやが。

戸浪　都の噂を承りますれば、あなた樣も御追放とやら承りましたが、エヽ、そんなら、希世樣、御追放ゆゑ其お姿でござりますか。

希世　すりや、都の樣子を知つてゐるとな。

戸浪　アイ、あなたのお身の上、承りました。

希世　ハテ、天なる哉、命なる哉。昨日は雲井に膝を連ね、今日は人の軒端にて貰ひ喰ひ、店屋物にて露の命をつなぐといふは、味氣なき浮世ぢやなア。皆師匠の謀反ゆゑ、かく淺ましき姿となる。卽ち希世が今の身の上を、三十一文字のよみ歌に、「へればこそ腹はひもじき蟲の音に、きなこあづきの餅もほしけれ。」

戸浪　オヽ笑止。そりやなんの事でござりますぞいなア。

希世　有樣は、都を拂はれて佇む所も
なく、むらぐひの左中辨、前の由縁源
藏夫婦が、この難波に居ると聞いた故、
二三日喰はしてもらはうと思うて、尋
ねて來たのぢやわいなう。

戸浪　それはマアく、お笑止な事な
がら、ほんに恥かしながら、妾ら夫婦
も、

希世　サア、薄い事を知つて尋ねて來
たも、これ同氣相求むといふものぢや。
どうぞ不承ながら茶粥でも大事ない。
二三日養うてたも。

戸浪　おやと申して、夫の留守に妾が
あなたを。

希世　イヤ、大事ない。源藏には外に
用もあれば、戻りを待つて、すぐに頼
みませう。

戸浪　そりや、いかやうともお勝手次
第に遊ばせ。

希世　そんなら暫く奥へ往て待つてゐ
る。源藏が歸らば、知らしてたも。コ
レ、戸浪。シテ、飯櫃はどこにある。

戸浪　アヽ、さもしい事ばかり。なん
ぼう其お姿でも、以前は。

希世　ハテ、内裏男も喰はにや立たん。
戸浪。後に逢はう。

（ト唄になり、希世、障子屋臺へ入らうと
するを、戸浪留めて、）

戸浪　ア、イヤく、かうお出でなさ
れませ。

（ト納戸へ連れて入る。橋懸りより太次
兵衛、百姓三人連れて出て、）

太次兵　サア、こゝぢやく。皆入らつ
しやれく。

皆々　源藏に逢はう。源藏を出せく
く。

（トロ々にやかましういふ、戸浪奥より出
て、）

戸浪　アヽコレ。お前方はつひに見た
事もないお方々。こちの人を出せとは、
聲高にいはしやんすは、何ぞ御用でご
ざんすかえ。

太次兵　ヲヽ、用がある。こゝな源藏は、
大それた大盗人ぢや。

皆々　ヲヽ、盗人ぢやく。（トロ々や
かましういふ。）

戸浪　イヤ、申し。お前方はいふ事と
いはぬ事があるぞえ。こちの人を盗人
々々といはしやんすは、何を盗んでマ
ア、盗人呼ばはりなされます。一體お
前方は、どこの人でござんすえ。

太次兵　ヲヽ、おいらは長柄村の百姓ぢ
や。

戸浪　その長柄村のお衆なら、こちの
人を、なんで盗人といはしやんす。

太次兵　云やんないの。コレ、朝は星を
戴いて出で、畑仕事に身の油絞つて、

作つて置いた三月大根、又萵苣の葉。

皆々　冬から圍うて置いた獨活もある。

太次兵　そればかりぢやない。金目な菜種まで引抜いた大盗人。先度から畑が荒れると氣を付けて、皆番をしてゐた所が、昨夜といふ昨夜、手目は上つた。連れて往んで法に行ふ。

皆々　サア、盗人の源藏を、出しや出しや。

太次兵　但し奥に隱れてゐるか。引きづり出して棒縛りにするのぢや。サア、ござれ〱。

皆々　合點ぢや〱。

（ト奥へ行かうとする。戸浪皆々を引戻し、取逆せ、急いてものゝいはれぬこなしあつて、無理に引留め、下に置き、）

戸浪　コレ、申し。こちの人に限つて、そんな道ならぬ大それた事を。ほんに、女房のわしが口からいふは、味なものぢやけれど、それは〱律義な、侍質氣な。

太次兵　イヤ、侍質氣ぢやない。侍偏りぢや。ナウ、皆の衆。

皆々　ヲヽ、さうぢや〱。

太次兵　おいらが作つて置いた物を、夜夜盗みに來るといふ横道者。大盗人。

戸浪　イヤ、申し〱。最前から默つてゐれば、モウ〱、こたへられぬがな。こちの人を盗人ぢやといはしやんすには、何ぞ確かな。

太次兵　ヲヽ、證據といふのはこの菅笠ぢや。（ト出す。）

戸浪　この菅笠を、證據とはえ。

太次兵　其頂きは狀の封じ紙。書附がある。それを見たがよい。

戸浪　ナニ、これが。（ト菅笠を取り、頂きを見て、）難波入江武部源藏殿。同戸浪殿。都より。こりやコレ、いつぞや、酒造樣より來た文の封じ紙。

太次兵　サア、それが證據ぢやあるまいか。

戸浪　すりや、これが。

太次兵　昨夜畑へ落して逃げたはこの源藏。それで盗人の正銘。

皆々　なんと連れていなうといふが、おいらの誤りか。

戸浪　そんなら此笠が有る故、夫が。（ト最前の菜種にて心の附きたる思入れ。）すりや、若君樣のお爲に、さもしい貧の盗み。（思入れ。）ハアヽ。

太次兵　サア、かういふ確かな證據が出るからは、源藏を連れていんで、處の法に行ふ。

皆々　サア、源藏を、こゝへ出しや〱。

戸浪　成程。かういふ確かな證據が有

るからは、こちの人に違ひもござんすまいが、どうぞお前方の御料簡で穩便に濟みますやうに、御思案はござりませぬかいなア。

太次兵　思案といふは、連れていんで、畑へ埋むるより仕樣はない。

戸浪　サア、さうしられましては、諸人に面をさらし。

太次兵　ヲヽ、恥をかゝすが、畑盜人の掟ぢや。

戸浪　サア、そこをどうぞあなたがたの、お慈悲を持ちまして、何事も丸う納まりますやう。

太次兵　納まらうが、納まるまいが、おいらが一存では濟まぬ。村には庄屋、名主といふ束ねがある。そこへ連れて往て指圖を受けねばならぬ。

皆々　ヲヽ、さうぢや〳〵。庄屋殿へ、連れて行くぞ〳〵。

戸浪　サア、其樣に仰しやつても、こちの人、源藏は、只今は。

太次兵　ヲヽ、留守なら、こなたを代りに連れて往て、指圖を受けう。

皆々　サア、ござれ〳〵。（ト戸浪にかかる。）

戸浪　そんなら、妾が往かねばなりませぬか。

太次兵　なんでも庄屋の指圖次第ぢや。

戸浪　デモ、此樣子を一寸。

太次兵　イヤ、ならぬ〳〵。ソレ、引きずつてござれいなう。

皆々　サア、うせう〳〵。

戸浪　でも。

太次兵　ハテ、ならぬわいの。

皆々　サア、うせう〳〵。

（ト戸浪を無理やりに引立て、橋懸りへ入る。ト奥より希世出で、あたりを見廻し、机の書物を持つて身構へして、尻からげうとする。ト橋懸りバタ〳〵。希世ちやつと奥へ入る。ト七ツの半鐘を打つ。合方になり、向うより笠見藏人、素袍、頭巻にて、源藏を侍四人、矢にて囲ひ出る。あとより乘物舁き、若黨附いて出る。花道にて源藏立廻つてきつと見え。）

藏人　ソリヤ。

侍　サア、源藏。歩め。

源藏　聊爾なされますな。

藏人　ヤア、默らう。今、代官方にて申付けし通り、菅秀才が首討つか。

源藏　イヤ、先程も申す通り、若君をかくまひし覺え、夢以てござりませぬ。

藏人　ヤア、かくまひし樣子は、とくより顯れある。それを、是非かくまはぬとあらがへば、うぬ、爲にならぬぞ。

源藏　爲にならうがなるまいが、存じませぬぞ。

藏人　知らぬといへば、そちに繩かけ

拷問する。ソリヤ。

侍　ハッ。

（ト源藏にかゝる。千鳥に投げる。）

皆々　こりや、手向ひか。

（ト取巻く。乗物の内より。）

長谷雄　藏人。暫く待ちやれ。

（ト乗物の戸を開き、紀の長谷雄、ざんはつ、長袴にて出る。）

藏人　長谷雄公。菅秀才をかくまはぬと申す故、繩打ち拷問せん爲。

長谷雄　イヤ、科の疑はしきは輕くせよといへば、苦しうない。源藏。其方。菅秀才をかくまひし事、先達て顯れあるわい。

源藏　イヤ、全く以て、源藏、若君を。

長谷雄　かくまはぬとはいはれまい。此難波入江に蟄居の源藏、菅秀才を養育する様子、兵庫司の訴人ゆゑ、其役ならねど、遺恨ある菅原家、檢使の役を乞請け、立越えたそがれしは、今、文章の博士、紀の長谷雄。

源藏　すりや、こなた様が。

長谷雄　いかにも、當時發行の此長谷雄。

源藏　君、さすらへの後、禁中に於て筆道の覺えよきと承つたは、ハテ、こなた様ぢやよな。

長谷雄　源藏。菅秀才かくまひし事爭ふと、わが爲にならぬぞ。

藏人　但し、勅命を背くか。源藏。

源藏　草も木も、わが大君の國なれば、何しに勅命は背きませぬ。何をいうても、若君菅秀才を。

希世　イヽヤ、此家に菅秀才はかくまひある。（ト納戸より出て、）其證據は、コレ、菅秀才が書物。

源藏　こなたは希世。

希世　源藏。いつぞや筆法傳授、其遺恨ある汝。それで、遙々尋ねて來たわいやい。

源藏　すりや、身共が、留守の間に來て、若君を。

希世　かくまうたか、かくまはぬか。犬に入つたこの希世。

藏人　卽ち主人時平公の仰せ。源藏。爭はずと、菅秀才が首を渡せ。

源藏　すりや、さほどまで菅原の根を絶たん、時平公の逆意か。

長谷雄　イヽヤ、逆意ぢやない。天皇の勅命。菅丞相は齋世の宮を位に卽けんとの企み。娘紅梅姫を囮に謀反の根組。其枝葉を絶つは天下の政道。

希世　源藏。菅秀才が首討つて、そちが受けた筆法傳授の卷を希世に渡せ。異議に及ぶと、逆磔けぢやぞ。

源藏　ハテしみしつこう心をかける傳授の一卷。心こゝにあらざれば、食へども其味を知らすとやら。木石同前の

者が、傳授を受けてせんない事。

希世　ヤ、何と。

源藏　筆法は世の寶。菅丞相は御さすらへ、後にまします若君といひ、菅原の根を絶やすは、天下の鑑を失ふ同前。

長谷雄　源藏。たとひ菅原の筆道を失うても、この長谷雄、天が下に在るうちは、日本の寶は朽ちぬわサ。

源藏　いかさま、文章の博士とある、紀の長谷雄樣。及ばずながら拙者めも菅原のお家に育つた一德、筆道のお尋ね申したいが、苦しうござりますまいかな。

長谷雄　ハテ、しをらしい源藏。其方も、菅原の傳授を受けたとあれば、苦しうない。許す。尋ねて見よ。

源藏　近頃以て有難い仕合せ。高位に向つて過言は、これも傳はる筆の冥加。然らば慮外も顧みず、お尋ね申しませう。長谷雄樣。筆の法はな。

長谷雄　文字は蒼頡より始まり、張融、伯英、世に秀でしなれども、わが筆道は二王の法を用ふるわサ。

源藏　二王とは、かの王羲之、王献之。これ晉の世の能書と聞く。シテ筆劃の傳へはな。

長谷雄　七十二點を體とする。シテ又、菅原の傳授を受けた源藏、そちにも問はう。彼の永字の八法といふは、眞の筆道、極意は何と。

源藏　側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔、此八點は七十二點へ分れ、八劃を以て色讀す。

長谷雄　イヽヤ、下世話にもいふ、鋸屑も、云へば云はるゝ口先の筆法、合點がいかぬ。まこと傳授を極めしならば、席書が見たい／＼。

源藏　成程、お望みなら、書いてお目にかけませう。

長谷雄　面白い。早う認めい。

源藏　ハツ。

（ト合方になり、源藏立つて、机、硯を取り出し、直る。）

希世　ヤイ、源藏。いかに長谷雄公の、お指圖ぢやとて、見事書くかよ。

源藏　御意でござるもい。ほんのこれが盲人の垣覗き。

希世　ハテ、しやらくさい。在所住ひの武部源藏。臭墨に三文筆、書出や、手紙書くとは違ふ。似合うたやうに、恥と頭の、席書ひろがう。

（ト此うち源藏、白紙に一の字を書く。）

源藏　憚りながら、拙者が筆立て、御覽下さりませう。

（ト見せる。長谷雄とつくりと見て、）

長谷雄　ハヽア、あつぱれ一の字。劃は陰陽、春より起りて冬に納まる、四季

の墨色。菅原の妙手。ハテ見事々々。

源　藏　今、文章の博士、長谷雄公の筆法、恐れながら、拜見致したうござります。

長谷雄　望みなら、見せてくれう。長谷雄か筆法、とくと見て、手本にせい。

源　藏　それは有難う存じます。

長谷雄　希世。其筆紙を、これへ。

（ト右の机を長谷雄が前へ持ち行く。長谷雄、筆を濕し、大の字を書く。此うち始終合方。長谷雄書きしまひ、）

何と、源藏。身が筆法は此通り。とくと見て、批判があらば、打つて見よ。

源　藏　さらば、拜見仕りませう。

（ト希世見て、）

希　世　ハアヽ、見事。其職に任ぜられし長谷雄様は、筆法に肉を持つたところ、イヤ、中々言葉には盡されませぬ。何と、源藏。さうは、思はぬか。

源　藏　イヤ、私は存じませぬ事ながら、ハレ、見事さうにござります。

長谷雄　源藏。菅原の筆法とは、又格別に見えようが。

源　藏　成程、又格別。

希　世　見事でないか。

源　藏　成程、あつぱれ御筆勢。シテ、此讀みはな。

長谷雄　ハテ、知れた事、「大」の字、卽ち遊惰。

源　藏　イヤ、こりや「大」の字ではござりませぬ。

長谷雄　ヤ。

源　藏　こりやコレ卽ち「火」の字。「大」の字とは大きな誤り。

長谷雄　何がなんと。

源　藏　弘仁の御宇、殿門の額を改めらるゝに、勅命によつて、空海これを承る。すなはち大極殿としるす。小野の篁これを難じて、これ大極殿にあらず、火極殿なり。「大」の一の字、横の一文字に納まるべきに、下へ撥ねたるは、大極殿にあらず、火極殿といふ。果して貞觀の頃燒失する。空海でさへ斯くの誤り。まして長谷雄卿たるは、「大」の字と申したが、此源藏が誤りでござりますか。

長谷雄　サ、それは。

源　藏　其差別もなき長谷雄樣。今文章の博士とは、ちと心許なう存じます。

長谷雄　サ、それは。

源　藏　但し、「火」の字を「大」と讀みますかな。

長谷雄　サア。

源　藏　サア〳〵。何とでござりまするな。

（ト繰り上げ、長谷雄、源藏を扇にて、りう〳〵と叩き、）

長谷雄　源蔵、無念なか。
源　蔵　長谷雄様。此源蔵には、何誤りあつて、打ち打擲なされますな。
長谷雄　ヲヽ、ぶつてぶつてぶちのめし、叩き殺しても大事ない。
源　蔵　大事ないとは。
長谷雄　菅原道眞は、儒の家より出でて、右大臣まで經登り、謀反の企てある故、官を引剝いで、今筑紫へさすらへ、勅勘の菅原の筆法、許しもなきに、猥りになぜ筆を取つた。
源　蔵　サア、それは。
長谷雄　殊に、文章の博士紀の長谷雄は、禁廷の勅筆、官位の司、其前にて勅勘の由縁の者、許しもなきに筆を取つたる越度、今打ちのめしたが、身が誤りか。
源　蔵　サア、それは。
長谷雄　それのみならず、此長谷雄が筆をさみした。
（ト打据ゑる。源蔵無念のこなし。）
源　蔵　これは又あんまり。
長谷雄　何があんまり。慮外が重なると、博士の權威をもつて眞二つ。利法權の差別も知らぬ、こゝなうつけ者めが。
源　蔵　チエヽ。（トむつと思入れある。）
蔵　人　サア、源蔵。菅秀才が首打つて渡すか。
希　世　但し、此希世が引出して、首打たうか。
長谷雄　好事門を出でず、
希　世　惡事千里。
蔵　人　家探しせうか。
長谷雄　首打つか。
源　蔵　サア。
皆　々　サア〳〵。
長谷雄　源蔵。返答はどうぢや。
源　蔵　ハアヽ。
希　世　源蔵。菅秀才が首打たずば、此希世が奥へ往て。
（ト行かうとする。源蔵留め。）
蔵　人　妨げする源蔵を縛へ。
侍　ハツ。動くな。
源　蔵　エヽ、是非に及ばぬ。此上は、若君の御首打つて渡しませう。
希　世　すりや首打つか。
源　蔵　若君のお命を助けんと、千變萬化に心を碎けども、もはや叶はぬ御運の末。人手に掛けんよりは此源蔵めが御首を賜はり、差上げませう。
希　世　源蔵。其根性なら、菅秀才が首、早く打つて渡せ。
源　蔵　いかにも、首打つて渡しませうが、假初ならぬ右大臣の若君、つい、掻き首ねぢ首にも致されず、せめては御最期を勸め、死を清く致さする間。暫くの御用捨を。

希世　ヤア、其手はくはぬ。暫しの用捨と暇どらせ、逃げ仕度するのであらう。

藏人　覺悟もへちまもいらぬ。早く首打つて渡せ。

長谷雄　イヤ〱、兩人。かゝる手詰めの場所、首打つといふに相違はあるまい。それがしが情を以て、暫くの猶豫致しくれう。ナニ、藏人。其方は暫く代官の方に控へ、後ほど首受取りに參られよ。

藏人　ハツ、然らばさやう仕らう。希世殿には、あとに殘りて、萬事に心を付け召されい。

希世　いかにも、あとに殘り、何なりと一つの功を立て、時平公にお目に懸け、御所へ歸る所存なれば、滅多に油斷は仕らぬ。が、長谷雄殿。暫しの猶豫の其うちに、もし彼奴らが。

長谷雄　ハテ、逃げ仕度しても、裏道には、數百人を附け置き、蟻の這ひ出る所もない。コリヤ、源藏。そちが願ひに任せ、それがしが情を以て、暫しの用捨を致しくれるが、生顏と死顏とは相の變るなどと、身替りの贋首、古手な事して、後悔致すなよ。

源藏　いらざる御念。一旦首打つと、いうた言葉は違はぬ武部源藏。

長谷雄　アノ見事、其方が。

源藏　いかにも。

長谷雄　見るぞよ。

源藏　お目にかけう。

（ト兩人睨み合ふ。源藏肩脱ぎ、きつとなる。此襦袢、口幕にちぎりし片袖、縫合はせある。長谷雄見て、）

長谷雄　其片袖は確かに。

源藏　御存じでござるか。

長谷雄　これを持つてゐるからは。

源藏　これを知つてござるからは。

長谷雄　いつぞや京極通りの廣小路。

源藏　其時の暗まぎれ。

長谷雄　出逢つたはそちであつたか。

源藏　引きちぎつた片袖。

長谷雄　定紋は三蓋松。

源藏　そちには詮議がある。

長谷雄　コリヤ、大事の前の小事。此片袖の。

源藏　繼ぎ手を合はす。

長谷雄　時節が有らう。

源藏　マア、それまでは。

長谷雄　源藏。

源藏　長谷雄樣。

（ト唄になり、長谷雄、藏人、皆々橋懸りへこなしあつて入る。源藏、希世は奥へ入る。ト幕六つの半鐘鳴る。引きながしの合方にて、橋懸りより戸浪、しほ〱として、門口にて、）

戸浪　こちの人の難儀、畑の物を盗んだ科、長柄の里へ連れ行かれ、代りにわしなと、段々願うても聞き入れず、漸く金であつかひ、戻つては來たものの、夜分までに金が出來ねば、源藏殿を連れに來る。どうぞ金の才覺を、と思へど大枚二十兩といふ物、下地の貧苦、なんの出來ようぞ。松の地代の金といひ、今宵おうに五十兩といふ金。アヽ、どうしたらよからうなア。

（ト門口に立ち、ちつと思案する。奥より源藏、角行燈に火をともして出る。こなしあつて、）

源藏　のッ引きならぬ若君の手詰め、御首打つて渡すと、請合ひしは當座逃れ。差當つたお身替りとてもなし。こりやマア、何としたものであらう。

（ト戸浪、空を眺めて、）

戸浪　今暮れても春の短夜。どうぞ長柄の里人の來ぬうちに、金の才覺。

（ト源藏内にて、）

源藏　若君のお身替り、女房戸浪に。

（ト門口にて、）

戸浪　こちの人に此樣子を。

（ト此間、内と外にて、一時にいうて、兩人門をあけ、互ひに顔を見合せ、）

源藏　女房共。そなたは奥にと思うたが、どこへ往きやつた。

戸浪　アイ。わしはちつと用があつて、ついそこまで。こちの人、お前又、どこぞへ行かうと思うてか。

源藏　サア、どこというたら、當はなけれど。

戸浪　アノ、松の地代の金才覺かえ。

源藏　サア、それも手詰め、こちらも大事。

戸浪　エ。

源藏　イヤ、女房共。おれやそなたに、ちつと云はねばならぬ事がある。

戸浪　妾もお前に、ちつと云はねばならぬ事が、ござんすわいな。

源藏　そんならわが身も。

戸浪　お前も常から、何かに心を盡してゐやしやんす。お前に相談したら、どの樣にでもなりさうな事。必ず聞いて、悔りして下さんすなえ。

源藏　ムウ。悔りすなら、しよまいが、おれもわが身に云うて相談せねばならぬ。譬への通り、三人寄れば文珠の智慧。おれも思案に能はぬ事。云うて聞かす程に、必ず驚きやんな。

戸浪　驚くなとは、どうやら氣遣ひ。

源藏　悔りすなとは、おれも心ならぬ。

戸浪　思ふ事、いはで心の止みぬべしとの歌もあれば。

源藏　互ひに云うたり、聞いたりするが談合。

戸浪　そんなら妾も。

源藏　おれも。

（ト兩人一時に、源藏は最前の首桶、戸浪は菅笠を持つて出て、）

戸浪　これ覺えてゐやしやんすか。

（ト見せる。源藏恟りして、）

源藏　さては長柄へ盗みに往た事を。

（ト戸浪、源藏が胸ぐらを取る。）

戸浪　コレイナア、いかに貧苦に迫ればとて、道ならぬ事。いつの間に其やうな、さもしい心にならしやんしたぞいなア。

源藏　若君様に御不自由させますまいと、道ならぬ畑盗人。此やうに心を碎き、御介抱申す若君様も、今日が手詰めとなつて。（ト首桶を見せる）。

戸浪　あの若君様を、かくまうた様子が。

源藏　最前、村の役人、われを呼び寄せしは、時平が家來笠見藏人、今一人は紀の長谷雄。平の希世などが犬に入つて若君の御身の上、かくまふ由明白と、退ッ引きならぬ手詰めの場所。

戸浪　エヽ、すりや、時平が家來が若君の討手とは、さては希世が最前來たのも、若君の實否を糺すのであつたか。

源藏　一寸逃れに事を延ばさばと、若君の御首打つと、請合ひし此首桶。

戸浪　そんならお前、若君様を。

源藏　なんの討たう。身替りとても心當りはなし。いつそ一か、八か。奥に居る希世めを打殺し、かねてお賴み申せし河内の伯母御の方へ、若君をば其方御供。

戸浪　サア、そりや常々の覺悟、若君は御供致しませうが、手詰めになつた松の地代に、長柄の百姓が追ッ付け來れッ

源藏　ハテ、毒食はば皿。土民めらを切捨て、それがしも切腹。

戸浪　エヽヽ。

（ト恟り、源藏思入れあつて、）

源藏　イヤサ、切腹すれば思案はいらぬが、若君の御先途を見屆ける此源藏。氣遣ひしやんな。死ぬる事ではない。コリヤ、道に背くも若君が御大切。

戸浪　成程。さうでござんす。氣が弱うては仕損ずる。鬼になつて。

源藏　若君様の御供せよ。

戸浪　成程。何をするも若君のお爲。こちの人。

源藏　女房共。

戸浪　必ず共に。

源藏　破るは易し。

戸浪　ならう事なら。

源藏　事ゆゑなう納まるやう。

戸浪　叶はぬ時は是非なけれど。

源藏　とかくは辛抱。

戸浪　マア、それまでは若君を。

源藏　奧にてお伽。

戸浪　アイ、もしさうなつたら、これ今生の。

源藏　ハテ、未練な。

戸浪　合點でござんす。（トきつといふ。）

源藏　でかした。行け。

（ト唄になり、兩人こなしあつて、戸浪奧へ入る。ト源藏殘り、種々あつて、）

もう夜半というても間はあるまい。地代の金といひ、昨夜の仕儀に長柄の扱ひ。源藏が忠義、天も納受あつて、お助け申す手段を授けてたべ。觀音でも、黄金佛でも、身替りに立つてたべ。（ト種々あつて思入つて、表へ出ようとして、橋懸りを見て、）アレ〱。あの提燈、人影は、出口を固める長谷雄が家來。（ト內へ入り、奧を見て、）奧には希世。外にはあまた。エヽ、口惜しや、籠中の鳥の、雲井を焦るゝ身の上になつたか。

〽目釘を濕めして窺ひゐる、折から奧には冴え渡る、心耳を澄す笛の音の。

（ト種々こなしあつて、下にゐる。トこれより奧にて笛の音、合方入り。源藏、笛の音を聞いて、思入れあつて、）

あの笛の音は、若君樣。最前お好きの笛を御遊樂と申せしが、何にも御存じなく、御遊樂か。エヽ、忝い。

〽悅ぶうちにも若君の、お身の上を案じ詫び、手をこまぬいて屈托顏。夜もはや更けて子に移り、空吹く風は梢に殘り、落ち來る松葉春雨の、降りしきるかと疑はる。怪しや化したる女の形、松の小蔭に顯はれ出で。

（ト此淨瑠にて、笛をかりて松の下の柴垣より、常盤木、萌葱繻子の着附け、同じく萌葱繻子の抱へ帶、但し金絲にて松の落葉の縫ひ、其形にて顯はれ出で、そろ〱源藏が傍へ來て、）

常盤木　武部源藏殿。菅秀才のお身替りのお役に立ちませう。

源藏　なんと。（ト常盤木を見る。）

常盤木　今宵こなたの手詰め、非情の身にも忍び難く、お身替りの一子を奧へんため。

〽かりに姿をまみえしぞや。

源藏　ハテ、合點のゆかぬ。異なる女の顯はれ出で、お身替りの一子を奧へんといふ。そちは何者。

常盤木　イヽヤ、われは實は人間にあらず。丞相樣に御秘藏に預り、年月經へし甲斐もなう、我君は讒者の僞に、筑紫へさすらへ。お別れの名殘を惜しみ、心なき草木なれど、これまでお後を追

ひ、松の緑の若君、助けんと御夫婦のお心遣ひ、君御秘藏の庭木ゆゑ、其許御夫婦の、われをいたはり大切に、御恩を報ぜんため、假に姿を顯はしましてござんすわいなア。

源　藏　ムヽ、さては君の寵愛に後を慕ひし此松の精靈とな。いかにも〳〵其方が切なる志を感じて、源藏がお役に立てう。

へかなへてやらうと源藏が、切つてかゝるを女もしれ者、支へ留むる其折節。

（ト切掛け、兩人立廻りのうち、夜半の鐘鳴る。橋懸りより太次兵衞、又右衞門出て、門口にて。）

又右衞　サア、源藏殿。約束の夜半ぢや。金受取らうか。

太次兵　サア、御内儀。長柄の百姓ぢや。扱ひ金受取らうか。

（ト常盤木、源藏、搆はず立廻りにて、最前の脊にて受け留める。ト內より亂れ小判ばら〳〵と出る。）

又右衞
太次兵　ヤア、こりや金。

又右衞　地代の三十兩。

太次兵　畑の扱ひ二十兩。

又右衞
太次兵　確かに受取つた。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。

（ト兩人しか〴〵有つて、橋懸りへ入る。）

常盤木　何にもせよ、思ひ懸けない金の出所。

源　藏　何にもせよ、そちを。

へ又切附くるを身をかはし、ぬけつくゞりつ、上段下段、武部が鋭き太刀先に、さしもの女もあしらひかね、逃げ行く松の木の下に、すつくと立ちし幼子に、はやり切つたる源藏も、呆れて暫し言葉なし。

（ト立廻り段々ある。よき處にて、常盤木、子役を連れて出て、）

常盤木　菅秀才樣のお身替り、お役に立てゝ下さんせ。

へ云ひつゝ姿は失せにけり。

源　藏　此忰は。すりや、まことの松の精靈か。（ト子役を見て、）年恰好も若君に其儘。エヽ忝い。

（ト悦ぶ。奧より長谷雄つか〳〵と出て、源藏を突退け、子役の首をぽんと切る。）

ヤア、それは。

長谷雄　身替りの根を絶ちたれば、まことの菅秀才が首受取らう。

源　藏　エヽ、そちを。

（ト切りかける所へ、藏人、侍連れて出る。）

藏　人　サア、源藏。菅秀才の首受取らう。

（ト奧ばた〳〵にて、希世、戸浪、菅秀才を追ひ出る。）

戸浪　コレ、こちの人。希世が若君様
な。
源藏　もう此上は、逃れぬ。コリヤ、
若君を早う。
戸浪　心得ました。
（ト菅秀才を連れ、中二階へ逃げて上がる。長谷雄、追ツかけ上がる。源藏「それをと」と行かうとするを、希世支へる。源藏立廻りにて、希世をあて、長谷雄の方へ行くを、藏人支へるうち、長谷雄、中二階にて菅秀才が首討つ。戸浪を當て、下へおりて。）
長谷雄　まことの菅秀才が首。藏人、時平公へ早く。
藏人　ハツ、さやう仕らう。家來、參れ。
（ト首桶を持ち、藏人楼懸りへ入る。戸浪起き上がる。）
源藏　若君を手に掛けた長谷雄、源藏が死物狂ひ。女房。
戸浪　合點でござんす。
（ト兩人長谷雄へ切懸る。少し立廻りのうち、勝野、走り出て、）
勝野　源藏様御夫婦。道にて聞いた、若君の事。
戸浪　勝野様。遲かつた。若君様を長谷雄が手にかけたわいなア。
勝野　エヽヽヽ。
源藏　若君の仇。うぬ。
（ト皆々立ちかゝり、種々ある。長谷雄、大小を投げ出して、）
長谷雄　コリヤ、手向ひせぬ。必ず早まるな。
源藏　なんと。
（ト詰めかける。奥より菅秀才出て、）
菅秀才　皆早まりやんな。これに居るわいの。
勝野　ヤヽ、若君様。
源藏　すりや、御安體か。さては。
長谷雄　二度くはした身替りの首。
戸浪　エヽ。
（ト皆々驚く。長谷雄こなしあつて、どつかと眞中へ座り、）
長谷雄　流れゆく我はみくずとなりぬとも、君柵となりてとゞめよ。（思入れ。）女房、倅はお役に立つた。これへ參れ。
常盤木　すりや、わが子はお役に立ちましたかえ。（ト垣の間より出る。）
源藏　ヤア、こなたは今の松の精靈。
長谷雄　いかにも姿を變へさせ、裏道より、女房、倅を入り込ませ、松の精と僞りしも、源藏の手詰めの場所、難儀を救ふ手段でござるわいなう。
源藏　ハテ、心得ぬ。さほど仁心の其許が。
長谷雄　筆法をわざと書き誤りしも、時

平が家來、藏人、希世を欺かんため。

皆々　ソテ〳〵、其仔細は。

長谷雄　法皇より院使。

皆々　エヽ。

長谷雄　菅原の道眞は、われも親しき朋友。わけて法皇のお覺えめでたく、當今の師範と定め給ひ、從三位より大納言、右大臣まで昇進あり、果報いみじき道眞公。菅丞相と人尊敬。まことに高木は風に破らるゝと、讒者の計ひ、罪なき丞相、謀反の汚名、官を引ッ剝ぎ、筑紫へさすらへ、其折から、法皇へ悲しみの歌を連ね給ひし其歌に、「流れゆく我はみくづとなりぬとも、君柵となりてとゞめよ」と出で行き給ふ御詠歌を、法皇御叡覽ましますと、夜中ながらも御車にて、美福門まで御幸ありし所、はや門を打つて出入を禁ずる。法皇にも、東雲まで築地の外に御落涙にて明かし給ふ。其後は我を召されて、何卒菅丞相歸洛の奏聞遂げ、菅原の家を引起しくれよと、法皇の院宣。當今には讒者の讒舌を振へば、中々歸洛の奏聞は叶はず。心を碎いて、わざと惡人の中に交はり、菅秀才の檢使を乞ひ請け、これへ引越すそれがしが心底は、わが子を身替りにして、菅秀才を助けん爲。表は惡に内心は、法皇へ紀の長谷雄が皆忠義。忰なくば、これ程の、君に忠義は立てられまじきに、持つべき物は子でござるわいなう。

（ト此うち常盤木、始終泣いてゐて、）

常盤木　申し、わが夫。草葉の蔭にて、花若が、聞いて嬉しう思ひませう。持つべき物は子なりとは、あの子の爲にはよい手向け。昨日、館を出る時に、申し母樣、父上諸共難波へ行くは、名所御覽か、歌枕かと、尋ねた事を思ひ出せば、可愛や、冥途の旅の歌枕。子を殺しに連れて來る、妾が心、推量して下さりませ。せめて、死顏なりと今一度、見たいわいな〳〵。（ト泣く）。

戸浪　オヽ、お道理でござります。御尤もぢや。他人の妾さへ、お心を察して悲しいもの。まして親御のお身では、嘸やさぞ。

長谷雄　イヤ、コレ、内室。コリヤ、女房共。なんで吠える。覺悟して斬つた身替り。館で存分吠えたぢやないか。源藏夫婦の手前もある。

常盤木　アイ〳〵。（ト泣いじやくりする。）

長谷雄　とはいふものゝ、無得心に、たつた一打。

常盤木　アノ、逃げも隱れもせず。

長谷雄　首さし延べて。

常盤木　エヽ、かはいや〳〵。

〽可愛の者やとばかりにて、正體

もなく歎き伏す、女房も歎きに源藏も、二人の心察しやり。

源　藏　ハヽッ、あつぱれの長谷雄公の御賢慮。御幼稚ながら健氣の御最期。八つや九つで親の仰せを背かぬとは、廿四孝の郭巨にもまさりたる御孝行。然しながら、合點の參らぬは、最前の春より出でたる五十兩の金は。

戸　浪　こちの人。最前の金とはえ。

源　藏　サア、松の地代、長柄の百姓に渡した金。合點のゆかぬ、此春より。

（ト春を出し、打ちあける。内より財布出る。勝野取上げ、）

勝　野　こりや、コレ、覺えある妾が財布。昨夜長柄の堤にて、狼藉者に出あひ、取られた路用の五十兩。

戸　浪　そんならそれが、廻り廻つてお役に立つたか。こちの人。

源　藏　ハテ、思はず手に入る勝野樣の路用金。ハテナァ。

勝　野　盗賊に取られたお金が、お役に立つた妾が悅び。

源　藏　皆、若君のお爲。それよりは長谷雄公の御心底、承つて安堵仕つた。

菅秀才　覺悟極めたわが最期、とくにもそれと知るならば、親々達に歎きはかけまいものを。いとしやなう。（ト泣く）。

長谷雄　ハテ、しをらしい菅秀才。其お言葉が倅の爲の經陀羅尼。ナニ、源藏殿。それがしが賜物、菅原の家を引起す一品。

源　藏　ヤア、こりや太政官の御正印。すりや、いつぞや廣小路にて。

長谷雄　時平が家來、奪ひ取りしをそれがしが、手に入つたる御正印。

源　藏　其時、拙者も居り合はし、最前の片袖。今こそ繼手を離し、源藏が此三蓋松の定紋に、御免を受けるまいつまでも、御恩を忘れぬ卽ち證據。

常盤木　此上は我子のなきがら。

（トしを〳〵立つて女房が、抱き上げたる我子の死骸。

長谷雄　ソレ〳〵。野邊の送りを營まん。

源　藏　野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦が代り申さん。

長谷雄　イヤ〳〵、これはわが子にあらず。アレ、あの松の精靈なれば、すなはち堀川松福寺へ送らん。

源　藏　ハツア、松の奇瑞と奧方の操、最前の言葉といひ、此ところを老松町と名づけ、君御歸洛の後はお願ひ申し拜借して、軒を並べて、繁榮の地となさん。

長谷雄　ホヽウ、それまでは我はやはり讒者の徒黨に交り、時平の大臣をはかるが肝要。（ト希世出て、）

希　世　[illegible]

注進する。
（ト駈け出す。源蔵引廻す。長谷雄抜打ちに切る。）

皆々　これは。

長谷雄　忰が追善。

皆々　讒者の一味。

源蔵　お役目御苦勞。

長谷雄　いづれもさらば。

〽はやお暇と立出づる。君も歸洛を松が枝に、我は小松を切捨てゝ、忠義を立つるも松の名の、末世にそれと生ひ茂る、老松町と名のみして、伴ひてこそ出でて行く。

（ト宜しくありて、）

幕

六つ目

河内宿禰太郎館の場

造り物。一面の二重舞臺。西の方に、高うして神前の心。七五三繩引廻しあり。前、池、蛇籠。臆病口の方、鶏の鳥屋。橋懸りに柴折門。よき所に手水鉢あり。幕の中より奴、早助、宅内、掃除してゐる。小姓求馬、腰元如月、彌生、塗盆に挽飯を干してゐる。此見得、白囃子にて幕開く。

早助　何と宅内。今日は後室様、お連合ひの殿様の御命日とやらいうて、お二人の娘御を連れて、お寺參り、追ッ付けお下向であらう。

宅内　オヽサ、命日とやらで寺參り。昨日までは流し者のお客人で、屋敷はもてかへす。イヤモウ、泣く程留めたいお客でも、去ねば嬉しいとやらで、菅丞相様御流罪、潮待ちの間御逗留。イヤモウやう〳〵昨日、お立ちの節、後室覺壽様や娘御達のお歎きなれど、おいらは使はれるが嫌さに、早う去なしたく思うたてや。

早助　オヽさうだ。流人の逗留に、イヤモウ、ほつとして草臥れた。

求馬　コレ〳〵、宅内。早助。大切なお客人のお噂、後室様のお聞きなされたらお叱りであらうぞや。

宅内　イヤモウ、菅丞相様の儀わるう申すのではござりませぬ。

早助　昨日お立ちあつて、助かつたと申すのでござります。

彌生　アレ、まだいの。菅丞相様は、後室様の御大切な甥御様。今度島へござる故、潮待ちの間にお暇乞ひの御逗留。それを陰で誹りやつたら、小櫻様や松月様に告げるぞや。

宅内　滅相な。それを仰しやつてたまるものでござりますか。

早助　それはさうと、お前方は、毎日毎日、米を挽いては、其やうに干すと

は、何にマアなる事でござりますな。

如月　サア、これは挽飯というて、後室様の言附け。挽飯を白湯に掻き立て、あがるのぢやわいなう。

宅内　エヽ、糗の格でござりますな。

求馬　イヤ／＼、糗は麨なれど、こりや米で製法したものぢやわいの。

早助　ハテ、むづかしいものでござりますな。

如月　わしらも、ちやつと此挽飯を片付けて置かうわいの。

彌生　ソレ／＼。ちやつと片付けたがよからう。

求馬　お下向に間もあるまい。二人の衆も次へ立ちや。

宅内
早助　ネエ。

如月
求馬
彌生　サア、こちらも奥へ行かうわいの。

（ト唄になり、早助、宅内は橋懸りへ、腰元三人は挽飯を持ちて奥へ入る。ト橋懸りより紅梅姫、振袖、さゝき附き、斎流しにて出る。）

紅梅姫　確かに此お館が、實の母様覺壽様。アヽどうぞお目に懸つて、自らが身の上の事をお頼み申し、共々に宮様の。（思入れ。）イヤ／＼、此身の越度。常から物堅い母様。御機嫌の程も計られず。母様のお目に懸らぬうちに、姉様小櫻様や、松月様に會うて、此身の上の事をお頼み申さうか。アヽ、どうしたらよからうぞ。

（ト色々思案のうち、向うより、）

内にて　後室様のお下向。

（ト紅梅姫、向うを見て、柴垣の後へ隠れようとして思入れありて、）

紅梅姫　母様のお下向とは、さていづれへぞ御參詣なされしか。幸ひお歸りを待つて、さうぢや。

（ト唄になり、こなしあつて、柴垣の蔭へ忍ぶ。ト向うより徒歩侍、乗物に附き、求馬、小姓にて杖をかたげ、あとより小櫻、衣裳、裲襠にて、提げ手桶に櫻の折枝を入れ、松月尼、尼の形にて、これも提げ手桶に松の枝を入れ、銘々に持ち、其外、家來大勢附いて出る。皆々本舞臺へ來る。先備への侍、紅梅姫を見付け、）

侍　何奴ぢや／＼。

求馬　コレ／＼、侍衆。何事ぢやぞいなう。

侍　イヤ、此柴垣に何者やら忍んで居ります。

求馬　そんなら、きつと吟味さつしやれ／＼。

侍　何者ぢや。これへ、出をらう／＼／＼。（トロ々にいふ。）

紅梅姫　イヤ／＼、大事ない者ぢや。騒がしういふな。

小櫻
松月尼　ヤア、お前は紅梅樣。

紅梅姫　松月樣。小櫻樣。お二人共、御無事にござりましたか。

小　櫻　ホンニ、マア〳〵、思ひがけない紅梅樣。

松月尼　いつ都よりお越しなされしぞ。そして供廻りも見えず。何ゆゑ垣根に忍んでござるぞいなア。

紅梅姫　サア、自らが身の上は。（ト言ひ兼ぬるこなしあつて、）イヤ、申し、お二人樣。この乘り物は母樣ではござりませぬか。

小　櫻
松月尼　成程、母樣。此樣子を母樣へ。

（ト乘物の傍へ行き、）

覺　壽　ヲヽ、聞いた〳〵。

（トいひ〳〵覺壽、着附け、裲襠にて乘物より出る。求馬、杖を出す。）

紅梅姫　ヤア、母樣。お懷かしうござりますわいなア。

（ト取付く。覺壽こなしあり。）

覺　壽　母樣とは誰が事。こゝな不孝者めが。（ト振退け、杖を振上げる。）

小　櫻
松月尼　アヽコレ。（ト紅梅姫をかこうて、）

松月尼　申し、母樣。こりや何故紅梅を御打擲。

小　櫻　どういふ譯でお腹立ち。折角都から遙々見えて、まだしみ〳〵とお言葉さへお交しなされぬその先、打ち叩きなさるゝは、マア、何事でござります。

松月尼　殊に、常々のお言葉、人に遣ればわが子でないと仰しやらぬか。それにお腹立ちは母樣とも覺えませぬ。菅丞相樣の御秘藏娘。

小　櫻　紅梅樣を打ち打擲。此杖を當てゝよいものでござりますかいなア。

覺　壽　イヽヤ。小櫻。松月。おりや人の娘は打たぬ。養子に遣つた丞相樣は、自らが爲には甥の殿、子にやつた紅梅姫は甥孫。親も許さぬ不義して、大事の〳〵甥の殿、流され給ふ。其罪は皆あの紅梅ゆゑ。それを思へば、憎うて〳〵、此杖が折れる程叩かねば、丞相樣へ言譯がないわいなう。

紅梅姫　申し、母樣。御尤もでござります。父上のさすらへも、自ら故と世の風說、聞くに忍びず。ホンニ、身も世もあられうか。此身の戀に後先の辨へもなく、顯はれしが恐しさ。宮樣もろとも都を立退き、實の母樣あなたを便りに、遙々と河內の國を志し尋ねて來る道すがら、宮樣には紛れ、悲しいやら怖いやら、方々とさまようて、賤の軒端や野もせの蔭に泣き明かし、やう〳〵こゝへ參りましたも、人の噂に父上樣も、潮待ちとやらで御滯留。母樣にお目に懸つて、お詫びを願ひ、此身は捨

てるかねての覺悟。さりながら、道ではぐれし宮樣に、輪廻がひかされ、未練が起りました。蓮ひの情に母樣の、お手に懸つて死ぬれば本望。どうぞお慈悲に殺してたべ。申し、お二人の姉樣。共々、母樣へお願ひなされて下されませいなア。(ト取附き泣く。)

松月尼　ヲヽ、いとしや紅梅樣。自らも都の噂、聞く度々に案じてゐました。母御に會うて身を捨てるとは、お心根が思ひやられて、ナア、小櫻樣。

小櫻　左樣でござります。此歎きが、せめて昨日ならば、丞相樣にお逢はせ申し、共にお詫びをせんものを、思へば殘り多い、紅梅樣。

紅梅姫　エヽ、そんなら、父上、丞相樣は。

小櫻
松月尼　昨日お立ちなされたわいなア。

紅梅姫　すりやモウお目に懸る事も叶はぬか。ハアヽヽ。(ト泣く。)

小櫻　オヽ、お道理でござります。悲しい筈。心を盡して折角こゝまで見えたもの。

松月尼　いとしや、徒歩や跣足で、習はぬ旅路。裙は血潮に、袖は涙の此姿。

紅梅姫　都を出でゝ日數は積れど。

小櫻　お髮もみだれてあるからは、したゝめとても。

紅梅姫　なんのいなア。晝はひねもす、夜もすがら、泣いてばつかり。

(ト顏を上げる。松月尼、小櫻こなし。)

松月尼
小櫻　申し、母樣。お聞きなされましたか。

(ト泣く。覺壽こなし。)

覺壽　檜山の火、刃の鏽。其身より出でて其身の苦痛。(ト紅梅姫の姿を見て、)菅原の御先祖は、垂仁天皇の穗日の尊の御字、野見の宿禰、當麻蹶速と力を合はせ結び勝つ。こは角力の始りとかや。又、帝崩御の時、近臣官女、殉死となぞらへ、御墓に埋む。これを憂へて埴輪を以て人形を拵へ、これに換ふる。土の司を取つて土師と稱ふ。神策の長刀と此河内一國を賜はり、御先祖連公より連合ひ郡領まで、連綿として由緒正しき菅原一家。

(ト松月尼、小櫻、紅梅姫を前へ並べ、提げ手桶に梅の折枝入りしを、紅梅姫が前に置き、これにて松、梅、櫻の手桶を、三人の女の前にならべ、)

小櫻。

小櫻　エ。

覺壽　松月。

松月尼　アイ。

覺壽　紅梅。

紅梅姫　エヽ。

覺壽　夫部領世に在りし時、白鷄千

羽飼へば、其家より高位になるべき娘出世するとの世の諺。子を思ふ親の心は、闇にはあらねど、アレあの如く、白き鷄を飼ひ育てゝ、稚なう自らが懷妊。月も重なり、產み落せしは、世に稀れな三つ子の娘。成人に隨ひ、姉小櫻に宿禰太郎といふ聟を取り、土師の家を相續させ、妹の松が枝は、日外より心願の事あつて緣組を嫌ひ、尼となり松月尼。乙の紅梅は卽ち道眞殿へ養子。都の住居と鄙の育ちも、子の可愛さにいづれ分け隔てがあらうか。なければこそ此紅梅、松、櫻を佛の前へ供へ、三人の娘の無事。わけて紅梅が身の上の事のみ、亡き夫に願はん爲の三つの枝。產屋の內より、ホンニ荒い風にも當てず、お乳や乳母が宿直して、育て上げし身を、其淺ましい姿にてさまよふとは、思へば〳〵、淚がこぼれて、憎うて〳〵、ならぬわいなう。

松月尼　御尤もでござりますが、申し、母樣。妾ら姉妹がお願ひ、どうぞ紅梅樣を。

小櫻　お前の居間に叶はずば、妾が部屋になりと。

覺壽　イヽヤ、ならぬわいの。不孝者め。館に叶はぬ。言葉は交さぬ。顏も見とむない。此上は、どうならうと構やせぬ。死んで言譯が立つならば、死んで見せい。コリヤ、丞相樣はそち故筑紫へさすらへ、昨日大物の浦へござつたぞよ。

紅梅姬　サア、それぢやによつて。

覺壽　身を捨てゝ、養父へ孝が立つか。淺ましい最期をせば、菅丞相と人もかしづく日本の聖人、其息女の紅梅が死樣と、父御の名まで下して不孝に不孝重ぬるか。

紅梅姬　そんなら、どうぞ、母樣のお情に。

覺壽　イヽヤ、知らぬ。言葉も交さぬ。

松月尼
小櫻　すりや、あの子は不孝の罪で。

覺壽　子で子にならぬ時鳥、谷の戶出づる鶯と、梅に育てゝ鳴く聲は、月と日星の三光たる、右大臣家へ立てる義理。言葉交さぬ。そこ立つて行け。

紅梅姬　エヽヽ。

松月尼
小櫻　申し、母樣。せめては館の內へ。

覺壽　イヽヤ、ならぬ。小櫻。松月。不孝者めに構はずと、二人共、マア、おぢや。

（ト唄になり、皆々を連れて內へ入る。紅梅姬「コレ申し」と寄る。松月尼、小櫻「どうぞ」といふこなし。覺壽隔て、柴折門をぴつしやり締め、二人が手を引き、皆々紅梅姬が方へ見返りながら、こなしあつて奧へ入る。ト紅梅姬、門の外にこ

なしあり。)

紅梅姫　母様のお言葉、皆御尤も。宮様にはお別れ申し、どうぞ父上のお目に懸り、お詫び申さんとお尋ね申した甲斐もなう、父上は最早お越し遊ばす。どうで生き存らへぬ此身。今際に父上様のお顔が拝みたい逢ひたいわいなア。

(ト泣く。始終合方。ト奥より小櫻、彌生、皐月、白湯注ぎ、塗盥を持たせ出て、二人に囁く。奥へ入らす。)

小櫻　紅梅様。やつぱりそこに居やしやんすか。

紅梅姫　さう仰しやるは姉様、小櫻様。

小櫻　アヽ、コレ。(ト戸を開き、盥に湯をさし、)せめて湯なと遣はさうと思うて。サア、ちやつと。(ト盥を傍へ持ち行く。)

紅梅姫　ほんに、血筋なればこそ、勿體ない、姉様のお志。

小櫻　なんのいなア。姉妹ぢやもの。物堅い母様、お腹立ちは御尤も。間を見合はして、松月様と共に詫言して、内へ入れますわいなア。これに付けても夫、宿禰太郎様は、折わるい、日外よりの病氣。

紅梅姫　エヽ。そんなら、宿禰太郎様は御病氣でござりますかえ。

小櫻　サア、日外より健忘とやらで、今の事は後に忘れ、今日の事は明日覺えぬ。子供同前の御病氣でござんすわいなア。(ト此うち松月尼、小袖を持ち出で、奥を見い／＼、門の傍へ來て、)

松月尼　申し、紅梅様／＼。(ト小櫻に行き當り、顔見合せ悔り。)

小櫻　エヽ、松月様。

松月尼　小櫻様。

小櫻　そんならお前も。

松月尼　サア、なんぼう母様が最前のやうに仰しやつても、いとしや紅梅様に着換への小袖を。

小櫻　妾も此湯を。

松月尼　そんなら互ひに。

小櫻　母様のお叱り受けても。

松月尼　大事ござんせぬ。そつと内へ入れまして置きませうわいなア。

紅梅姫　それ程までに自らが事を、御不便に思うて下さります、姉様がたのお志。ニヽ。

(ト拝まうとする。兩人ちやつと、)

松月尼
小櫻　コレ、申し、奥へ聞えては悪い。密かに／＼。

(ト話の所へ、覺壽、佛の膳高盛を持つて出て、門を開ける。皆々顔見合せ、悔りして、)

覺壽　ヤア、小櫻。松月。そこに何してゐやる。

小櫻　エヽ、妾は、アノ。それ／＼。父上の御命日。それでナア松月様。

松月尼　アイ〳〵。月を拜してお看經申して居ります。見れば、母樣。あなたにも佛器を持つて、これへ何しにお出でなされましたえ。

覺壽　サア、これはなう。今日は連合ひ郡領樣の命日。佛に供へた此靈供を、せめては無緣法界の人になりとも、戴かして、暫しの飢えを助けうと思うて。

(ト靈供を差出す。紅梅姬つか〳〵往こ、靈供に手をかけ、戴く。皆々顏見合せ、おつと泣く。)

松月尼／小櫻　エヽ、そんなら。

(ト向うより。)

內より　勅使。(ト皆々こなし。)

松月尼／小櫻　ハテ思ひがけない、お勅使とは。

覺壽　菅丞相には昨日お立ち。暇乞ひの滯留は、潮待ちの間、輝國殿の情。それに禁廷より勅使下るは。(思入れ。)丞相殿の謀反の汚名は、齋世の親王と紅梅姬が不義。其紅梅は自らが生みの娘。すりや、血筋の由緣で詮義の爲か。

(ト向うを見る。紅梅姬、懷劍を出し、)

紅梅姬　母樣。姉樣。おさらば。

(ト死なうとする。小櫻、松月尼留めて、)

松月尼／小櫻　コレ、待つて下さんせ。

紅梅姬　イヽヤ、離して下さんせ。思ひ廻せば廻す程。(ト死なうとするを、)

覺壽　コリヤ、待て。

紅梅姬　それでも。

覺壽　ハテ、待ちをらぬか。(思入れ。)イヤ、小櫻。松月。アレ、梅に鶯、巢をくうて燈火の影に驚き、時も來ぬに音を出たし、我と名乘るうつけ鳥。まだ勅使の趣きも知れぬに。(思入れ。)冥途の鳥はまだ早い。それより、鳶や烏に取られぬうち、早う飛び去れ。逃げてくれいやい。

(ト此っち小櫻、松月尼、懷劍を取って、)

松月尼　申し、母樣。そんなら此紅梅、イヤ、小鳥を妄らに暫しが間。ナア、小櫻樣。

小櫻　ソレ〳〵。まだ雛鳥の片翼。ここを飛ばしては、命の程も心許ない。思へば、殺生な事でもあり。どうぞ、申し。

覺壽　ハテ、二人の賴みなら、どうなりと。今日は卽ち佛の日。生けるを放つ慈悲心も、松月尼、小櫻もろとも、御經をとつくりと讀んで、放してやりや。

松月尼／小櫻　エヽ、すりや、館へ入れても。

覺壽　サア、小鳥でも目立つてはならぬ。奥の庭籠、小桶の內。

松月尼／小櫻　エヽ、忝うござんす。

紅梅姬　デモ、自らは。

覺壽　小鳥に構ひはない。二人ともに早う。腰元共。ソレ、お勅使を早うお

出迎ひ申せ。

（ト内より皐月、如月、彌生）

三人　ハア、。

（ト唄になり、松月尼、小櫻こなしあつて紅梅姫を連れ、奥へ入る。ト奥より彌生皐月出で、出迎ふ。ト蘭の兼政、冠、裝束にて出る。あとより土師の兵衛、着附け、袴にて、家來、仕丁、皆々本舞臺へ來る。覺壽も出迎へて）

覺壽　お勅使樣には、遠路のお下向、御苦勞に存じます。

兼政　勅使なれば罷り通る。

（トずつと通る。兵衛も通る。）

覺壽　これは〱、あいやけ兵衛殿にも、定めてお勅使お出迎ひでござりませう。御苦勞に存じます。

兵衛　成程、お勅使御下向と先觸れがござつたゆゑ、お出迎ひ、誘引仕つたが、ナニ、後室。此間は流人菅丞相の御滯留。何かとお取込みでござらう。拙者もお手傳ひに參らうと存じても、年寄は却つて邪魔と差し控へましたが、承れば丞相には、昨日お立ちとやら。

覺壽　成程、仰せの通り丞相殿には、昨日お見立て申しました。イヤ、これは内證。先つはお勅使樣。憚りながら勅使の趣き、仰せ聞かされ下されませうならば、有難う存じます。

兼政　勅使の趣き、餘の儀にあらず。此たび菅丞相左遷の上は、左大臣時平公、外戚に立たせ給ひ、即ち太政大臣に任官ある。殊に、内覽を許され給へば、四海の事は時平公のお心の儘。御政道を改め給はんと、延喜式を撰ばれ、公卿、殿上、平官、地下に至るまで、物資を改め、右の書に加へられんとの物定。承つたる蘭の中將兼政。此土師の家にも、先祖宿禰角力の砌り、恩賞に預りし家の重寶、内見せん爲、遙々と罷り越した。

覺壽　ハツ。勅使のお下向、いかゞと案じをりましたが、さては時平公の思召し立ちにて、延喜式を御調作とは、あつぱれの御賢慮。成程、此土師の家にも、先祖より傳はる御綸旨、まつた神策の長刀、取り傳へたる家の重寶。幸ひ今日夫の忌日。佛前に飾りあれば、聟、宿禰太郎に申し付け御内覽に供へ奉りませう。

兵衛　イヤ〱、後室。悴太郎は健忘にて、物忘れするうつけ病ひ。それに大切な役目を云附けるとは。

覺壽　ハテ、健忘であらうが、うつけであらうが、自らは女の事。河内一國を取計らうは聟が役。宿禰太郎に申付けねば、面が立ちませぬ。

兵衛　そりや尤もでもござらうが、シテ、太郎はいづれに居ります。

覺壽　聟は、今日、他出仕つた。

兵衛　ヤア、童同前の病ひ者を。

（ト内より）

小櫻　イヤ、そりや苦しうござりませぬ。（ト出る）。

兵衛　嫁、小櫻。何事も皆目覺えぬ健忘病み。他出したとあれば、心元ない。大方、歸りにはどでもない所へ行くであらう。

小櫻　イヤ、それはお氣遣ひ下さりますな。唐土の管仲とやらは、雪の道にて方角を失ひしも、飼ひ馴れし徳、馬に導かれて、追付け歸られませう。ナア、母樣。

覺壽　それ〳〵。太郎が乘り換へは名馬なれば、追付け聟殿を乘せて戻りませう。兵衛殿。お案じ下されますな。

兵衛　ハテ、後室や嫁女の才覺。むづかしい馬の講釋承つて、兵衛も一つの徳を得ました。ハヽヽヽ。

（ト此うち向うより宿禰太郎、着附け裃にて馬に乘り、出て來る。馬、内へ入る。小櫻見て、）

小櫻　ヤア、太郎樣。只今お歸りなされたか。

（ト宿禰太郎あたりを見て、）

宿禰太　申し、女中樣。こゝはどなたのお屋敷でござりまする。

小櫻　是はしたり。あなたのお屋敷でござりまする。

（ト馬よりおろす。馬は橋懸りへ入る。）

コレ、申し。あれに母も、お前の親御兵衛樣もござるわいなア。殊に、お勅使樣の御前。ちやつと御挨拶を。

（ト種々心遣ひある。宿禰太郎こなしあつて、そこらあたりをうろ〳〵見廻し、小櫻が顏をぢつと見て、）

宿禰太　ハテ、思ひがけもない、見馴れぬ女中、馴々しう云はつしやるは、マアこなたはどなたでござります。

（ト小櫻こなしあつて、）

小櫻　ハテ、お前に連添ふ女房小櫻でござりますわいなア。

宿禰太　なんぢや、小櫻。アヽ、小櫻といふ名は、どうやら聞いたやうな名ぢやが。（ト懷より手帳を出して見て、）ム、、小櫻はおれが女房とある。オヽ、それそれ。さてはわがみは、おれが女房ぢやの。

小櫻　ハテ、知れた事ばつかりを、仰しやるわいなア。

兵衛　悴太郎歸つたか。

宿禰太　コレ〳〵、あの親仁樣は誰やらぢやの。

兵衛　ハテ、現在そちが親の兵衛ぢや

わい。

宿禰太　ナニ、兵衛とは。（ト又手帳を出し見て、）ナヽ、兵衛とはおれが親仁様に違ひはないぞ。そんなら、あれにござるは。

小櫻　母様、覺壽様。

宿禰太　オット、覺壽様とは母様と書いてある。

小櫻　そんなら、ちやつと御挨拶。

宿禰太　申し、母様。親仁様。ア、私はどこぞへ參りまして、今歸りました。

覺壽　ハテ、聟殿とした事が、小櫻が勸めて、其病ひの願籠に、譽田の八幡様へ參詣。

（ト此内太郎帳を拵へゐて、）

宿禰太　ホンニ、私病ひの願籠に、參詣とござります。

小櫻　ホンニ、病ひとは云ひながら、しどけない夫の有様。申し、母様。こりやマア、どうぞ仕様はござりませぬかいなア。

覺壽　醫療手を盡せども、本腹のないといふは。

兵衛　ハテ、物怪なものでござるなう。

兼政　覺壽。シテ、寶の内見は。

覺壽　聟太郎立歸りし上は、身を清めて御上覽に供へませうす間、暫しのうち休息の序でに御用捨を。

兼政　いかにも。船路の疲れ。願によつて、暫く休息致しくれうが、其間に覺壽。そちが取計らうて内見させい。

覺壽　ハッ、委細畏りました。お勅使の御饗應は、小櫻、申附けてよからう。兵衛殿にもマア奥へ。

兵衛　イヤ、拙者は老人の事。自由ながら、暫くこれにて疲れを晴らしたう存ずる。

覺壽　そりやいか様とも、御勝手次第に遊ばせ。サア、聟殿。

宿禰太　ハイ／＼、お暇申しませうかな。

小櫻　何を仰しやるやら。サア、奥へ。

覺壽　サア、お勅使様には。

皆々　先づ、お入りあられませう。

（ト唄になり、皆々こなしあつて、奥へ入る。あとに兵衛、小櫻殘り、こなしあつて、）

小櫻　申し、舅御様。お疲れならば、わたしが部屋へ。まだ春ながら餘寒も烈しい。腰元共に申付け、せめては火鉢で膚を溫め、酒をお一つ。

兵衛　それは心の附いた孝行な嫁女。日頃からの志、過分な。兵衛が老の入前、仕合せと悅ぶに、悅ばれぬ倅が病氣。ありや、マア、何としたものであらうぞいなう。

小櫻　サア、わたしも連添ふ夫の事。ほんに、祈らぬ神も佛も、ござりませ

ぬわいなア。
兵衛　さうであらう。親の思ひは又百倍。推量して下されい。イヤナニ、嫁女。それに附き此兵衛が一生の頼みがある。何と、聞き屆けておくりやるか。
小櫻　ハテ、何なりと背きますまい。
兵衛　とてもの事に、誓言が。
小櫻　わたしが母樣覺壽樣を、奈落へ落す法もあれ。
兵衛　オヽ、祝着々々。嫁女。そなたに頼むといふは、外の事でもない。此土師の家に傳はる、河内一國宛行ふ薄墨の御綸旨、まつた神策の長刀が、密かに盜んで欲しい。
小櫻　エヽ。
兵衛　ヲヽ、驚は尤も。かの二種を盜み出すは、更々身の慾ではない、皆悴がため。其仔細は悴があの病ひ。此間より試し見るに、健忘といふは卽ち業病。若し何その障碍ではあるまいかと思ふは、親の迷かは知らねども、天子の宸筆の綸旨、名代の金氣、神策の長刀を密かに戴かし、試し見て、物の化ならば卽座に立退け、病ひ本腹さすれば、身共が大慶。そなたの悦び。此譯を後室に云うてからが、物堅い覺壽殿、アッというて大切な家の重寶、迂濶に貸しはさつしやるまい。最前聞けば、郡領殿の今日は忌日、佛間に飾りあるとやら。願うてもない幸ひ、どうぞ密かに悴に戴かすやうの魂膽はないか。コレ、嫁女。兵衛がお頼み申す。
小櫻　成程。仰しやる通り、物堅い母樣、なんぼう太郎樣の爲ぢやというても、迂濶にお貸しはなさるまい。
兵衛　ぢやによつて、密かにそなたを頼むのさ。
小櫻　でも、母樣のお目を掠め、盜み出すとは。
兵衛　サア、さういへば仰山な。ついちよつと悴に戴かすばかり。病ひが直つたら、又元へ戻して置く分の事。夫を思ふ貞女は、七尺の屛風も越ゆるとやら、いふではないか。コレ、嫁女。兵衛が頼み、夫の爲ぢや。悴の病ひを直すのぢやわいなう。
小櫻　其樣に事を分けておつしやる事なれば。
兵衛　コレ、皆悴がため、病ひの直る事。そなたの爲にも現在夫の事。
小櫻　成程。盜み出しませう。
兵衛　すりや、得心して。
小櫻　夫の病氣本腹すれば、たとへ此身は、どうなつても厭ひはない。
兵衛　ヲヽ、さうとも〳〵。それが貞女、賢女といふもの。
小櫻　サア、盜み出してお渡し申しま

せうが、かの長刀は佛間に飾り、又御綸旨は恐多いとあつて、奥庭の寶藏に。

兵衛　シテ、其鍵は。

小櫻　夫の預り、妾が居間。

兵衛　身共は綸旨を。

小櫻　必ず、夫の病氣本腹せば。

兵衛　ハテ、返すといふに相違はないわい。

小櫻　そんなら舅御樣。

兵衛　嫁女。

小櫻　密かに。

兵衛　ござれ。

(ト唄になり兵衛、小櫻は奥へ入る。ト暮れ六つの半鐘鳴る。皐月、彌生、如月、求馬、燭臺を持つて出る。ト松月尼、菓子盆に挽飯を入れ、持つて出る。ト紅梅姫も附いて出る。)

紅梅姫　申し、姉樣。お前のお世話で母樣の御機嫌が直つて、此樣な嬉しい事はござりませぬ。

松月尼　母樣の御機嫌が直つて、妾も嬉しうござります。

紅梅姫　イヤ、申し、腰元衆を始め、あなたまでが其やうに、挽飯を遊ばすは何故でござります。

松月尼　奥でも申しました通り、母樣の仰せにて、腰元共や自らが製法したる此挽飯は、朝な夕なにあの一間へ、お供へ申しますのでござりますわいなア。

紅梅姫　シテ、其樣子はえ。

(ト内より)

覺壽　イヤ、其樣子は、自らが直に云はう。(ト出る。)

松月尼
紅梅姫　エヽ、母樣。

覺壽　紅梅。最前つれなう生の親が、打ち打擲は養ひ親へ立てる義理。丞相殿、昨日船に召すまでも、紅梅が事をくれ〲と、わらはへ執成し。その滯留のうち、自らが望み、主の形を繪でなりと、作つてなりと、伯母が形見に下されと頼んだれば、其日から取りかかり、初めて出來たは打割りすて、二度目に作立てられしも、同じくこれも打碎き、三度目に、木像を、作上げて仰しやるには、前の二つは形ばかり、精魂もなき木偶人。これは父丞相が魂殘す形見とて下されし、主の姿の木像を、アレ、あの一間に請待し、不淨を入れぬあの一間。木とな思ひそ、紅梅姫。父御丞相殿に會はしてやらう。

紅梅姫　エヽ、母樣のお志。父上樣は島へお出でなされた上は、せめて木像になりと、お目に懸つて此身のお詫び。

松月尼　ソレ〲。申し、母樣。どうぞ紅梅樣の願ひの通り。

覺壽　ヲヽ、會はさいで何とせう。會はしてやりませう。

（トいひ〳〵、一間の海老錠を鍵にて開く。ト内に齋世親王、指貫、壺折にて立つてゐる。紅梅姫見て、）

紅梅姫　ヤア、あなたは宮樣。

齋世宮　紅梅姫。

紅梅姫　おなつかしうござりましたわいなア。

（ト取付く。松月尼恟り。）

松月尼　申し、母樣。あなたはえ。

覺壽　勿體なくも當今の弟宮、齋世の親王樣。

松月尼　エヽ。（トとつくりと見て、）ヤア、いつぞや加茂の社で自らが見初めた。

覺壽　ヤア。

松月尼　ても思懸けもない。

覺壽　オヽ、驚きは道理。そなたや小櫻にも隱し、木像と御一緒に此間にお忍ばせ申したは、都への聞え。

松月尼　そんなら、アノ、紅梅樣の。

紅梅姫　云交した此宮樣。道にてはぐれ、今又お目に懸かるも盡せぬ緣も、母樣のお情。

齋世宮　麿とても、覺壽の劬り淺からで憂きを凌ぐも、そなたに今一度、逢ひたいばつかりでござるわいなう。

覺壽　いつぞや玉手のほとりにて、宮樣のお目にかゝり、密かに御供してこの一間に御座なさるを、現在、娘にも云はねば、召使の者は猶更。朝夕の供御までも人目を憚り、勿體なくも思ひ附いたる此挽飯は、卽ち宮樣の供物ぢやわいなう。

紅梅姫　ホンニ、何から何まで、母樣のお心遣ひ。

齋世宮　姬。覺壽によいやうに禮を云うてたも。志の程は、言葉には盡くされぬわいなう。

（ト此うち橋懸りより、兵衞見てゐる。）

覺壽　こは勿體ない仰せ。君をかしづく道眞殿のわらはへ頼み。さりながらこゝに御座あつては、讒者の舌頭止む時なければ、姬もろとも、今宵八聲の鷄を合圖に、叡山の座主法性坊は、坂本の庵に閑居あれば、此ところに落し參らせんと、先達てより交通。それまでは姬もろとも、夜もすがらのお物語りを。なう、松月。

（ト松月尼、うつとりと齋世親王の顏を見て見とれる。）

コレ、松月。

（ト大きな聲にていふ。松月尼恟りして、）

松月尼　アイ、母樣。何ぞ仰しやつたかえ。

覺壽　ハテ、今宵宮樣を姬もろとも、八聲の鷄を合圖に、こゝを落します先達ての契約ゆゑ、あの方より宮樣をお迎ひに來るわいなう。

松月尼　エヽ、滅相な。母樣とした事が。アノ宮樣を、よそへやりましてよいものでござりますかいなア。

覺壽　なんのいなう。あの法性坊の阿闍梨は、丞相殿の由緣、何の粗略があらうぞいの。

松月尼　イエ〳〵、それでは惡うござんすわいなア。

覺壽　ヤア、何で惡いぞいなう。

松月尼　サア、折角今宵お目に懸つて、すぐに別れるといふやうな、本意ない事があるものでござんすかいなア。せめて三月と五月と、但し、十年も、二十年も、百年も、盡きせぬやうに附添うて、二世も三世も、離れる事は嫌でござんすわいなア。

覺壽　サア、國を隔てゝ育つたそなたの爲には、妹の紅梅に名殘の惜しいは道理なれども、今宵落さねば、却つて宮樣のお爲にならぬわいの。

松月尼　それでもお別れ申すと思へば、悲しうて〳〵なりませぬわいなア。

覺壽　ハテ、血筋は爭はれぬ。同胞思ひな人ぢやなう。

紅梅姬　申し、姉樣。それ程までに自らが事思うて下されまする。エヽ、嬉しうござります。

松月尼　何のマア、自らはアノ。(ト云はうとして思入れあり。紅梅姬が方を見て、)かういふ事と知つたりや、母樣にお詫びせずと、よそへやつたらよかつたもの。(トむつとして、あちら向く。)

覺壽　何を云やるぞいの。申し、宮樣。奥には勅使の下向。殊には、心善からぬ兵衞殿。覺られてはお身の大事。紅梅と諸共に、やはり其一間へ。

(ト紅梅姬が手を取り、一間へ入る。松月尼もこなしあり。)

松月尼　自らも一緒に一間へ。

(ト行かうとするを、覺壽とめて、)

覺壽　ハテ、そなたは尼の身。父御の忌日。いつものやうに、佛間で御經讀誦。

松月尼　エヽ。(ト思入れあつて、わが姿に心付き、ぢつとなつてこなし。)

齋世宮　そんなら、覺壽。

紅梅姬　母樣。

覺壽　暫しの御睡眠。(ト障子さす。)

松月尼　せめてお顏なりと。

(ト寄るをひんと錠をおろす。松月尼こなし。)

覺壽　サア、松月。おぢや。

(ト合方になり、松月尼が手を引き、こなしあつて、松月尼を連れて入る。ト奥より小櫻、長刀の箱を持つて出る。)

小櫻　舅御樣にお約束の、此長刀。

(ト箱の蓋をあけ、思案して、長刀の刃を

手水鉢の手拭にて卷き、疊の下へ隱す。此うち橋懸りの障子の內より、蘭の兼政見てゐる。小櫻、右の箱の紐を元の樣にして、こなしある。此うち奧より、)

早月　申し〳〵、小櫻樣〳〵。後室樣のお呼びなさるゝ。早うお越しなされませい。

(ト頻りに呼ぶ。兼政、障子を閉める。)

小櫻　ハテ、そこへ行くわいなう。

(ト箱を持つて、奧へ入る。始終合方。ト兵衞、綸旨の袋を持ち出で、袋の內より出し、口の內にて讀み。)

兵衞　エヽ忝い。河內一國の御綸旨。嫁をだまして、まんまとしてやつた。

(ト內より、)

兼政　兵衞〳〵。兵衞はどれに居る〳〵。

兵衞　ハツ〳〵。これに居ります。

(ト種々こなしあるうち、綸旨を袖へ入れたり、懷へ入れたり、思案して刀の鞘へ入れて、差さうとして入らぬ思入れ。手水鉢の角にて、刀の切先を折り、刀の鞘へ納める。又刀の切先の置き所に困つたこなし。疊を上げ、右の折れを疊の裏へ刺さうとして、長刀を見附け、手拭を取り、よく〳〵見て、)

こりやコレ、確かに神策の長刀。面妖な。嫁に盜みくれよと言付けしに。何にもせよ。

(ト右の劍を取り、折れを手拭に卷き、やがてやはり疊の裏へ刺し込み、元のやうにして、行かうとして、持つてゐる長刀の置き所にいろ〳〵困る態。)

如月 彌生　申し、兵衞樣〳〵。御勅使が召します。どれへお出でなされました。

(ト頻りに呼ぶ。)

兵衞　ヲイ〳〵。これに居る〳〵。

(ト右の長刀を、池の端の蛇籠へ隱す所へ、兼政、覺壽、宿禰太郎、小櫻、求馬、如月、彌生、皆々附いて出る。)

覺壽　兵衞殿。これにござりますか。

兵衞　これはお勅使。後室。すりや、ハヤ。

兼政　二種の寶、內見致さん。

覺壽　成程。健忘なれども、聟太郎も立合ひの上は、御內見に供へ奉りませう。

小櫻　エヽ。すりや二種の寶、只今內見に供へねばなりませぬか。

兵衞　ハテ、薄墨の御綸旨、神策の長刀、御內見のため、お勅使樣には遙々とのお下向さ。

小櫻　サア、それでも最前。

兵衞　嫁女。何が何とした。

小櫻　エヽ。(トこなしあり。)

兼政　サア、覺壽。二種の寶、早う見せう。

覺壽　ハツ。ソレ、求馬。佛間に飾りある長刀の箱をこれへ。

求馬　ハツ、畏りました。（ト求馬奧へ入る）。

覺壽　御綸旨は寶藏に納め、卽ち鍵は聟殿に先達て預け置いたれば、小櫻、とくと尋ねて、そなたが寶藏へ往て、綸旨をこれへ。

小櫻　サア、其鍵は。

覺壽　ハテ、何をうち〳〵。ちやつと。

（ト兵衞の顏を見る。兵衞、脇見してゐる。）

小櫻　サア、それでも。（トうぢ〳〵する。）

覺壽　ハテ、埒のあかぬ。コレ〳〵、聟殿。大切な寶藏の鍵は。

宿禰太　寶藏の鍵とは、何の事でござります。

覺壽　ソレ、先達てこなたに預け置いた、寶藏の鍵はいなう。

宿禰太　イヤ、私はそんな事は存じませぬ。とんと覺えませぬ。

覺壽　ハテ、辛氣な健忘病みではあるぞ。

（ト此うち求馬、以前の長刀の箱を持つて出で、覺壽が前に直し、）

求馬　お長刀の箱、持參仕りましてござります。

覺壽　オヽ、先づ御綸旨は後の事。聟殿。此長刀の箱を開いて、お勅使樣へ。

（ト宿禰太郞が前へやる。宿禰太郞見て、）

宿禰太　申し、こりやどうするのぢや。

覺壽　箱を開いてお勅使樣へ、御內見に供へるのぢや。（ト敎へる。）

宿禰太　エヽ、合點でござります。

（ト紐を解き、蓋を明けうとする。小櫻始終心遣ひあつて、「それは」と行かうとするを、兵衞、一寸支へ、）

兵衞　ハテ、嫁女。大切な御內見、ちつとして居召されい。

（ト小櫻ハイ〳〵とこなし。此うち宿禰太郞蓋を取り、內を見て、）

宿禰太　申し、中には何がござりますいなア。

覺壽　ハテ、大切な長刀が。（ト內を見て驚く。）こりやコレ、大切な神寶の長刀が。

兵衞　後室、長刀が、ナヽ何と致したな。

覺壽　コレ、小櫻、今朝佛前へ飾らせたに、そなた、此箱の內には、どうして無いぞ。

小櫻　サア、それはナ。

兵衞　嫁女、大切な長刀はどうしてないぞ。

小櫻　サア、最前。

兵衞　お身が盗んだか。

小櫻　エヽ。

兼政　オヽ、盗んだ小櫻。確かに見屆けた。兵衛、其疊をまくつて詮議せい。

兵衛　アヽコレ、お勅使。そりや何を仰しやる。

兼政　疊の下へ隱したと確かに見屆けた。

兵衛　滅相な。此疊をまくつてたまるものでござるか。

覺壽　ハテ、合點のゆかぬ。お勅使樣の仰せに、確かに見屆けたとあるからは、兵衛殿、其疊を除けて。

兵衛　コレ、後室。こなたの爲に現在の娘、拙者が爲には嫁の小櫻。何の長刀を盗んでよいものでござるか。

覺壽　でも、お勅使樣が見屆けたとあれば、娘でも用捨は致さぬ。マア、疊を除けて詮議の上。ソレ、小姓共。

皆々　ハツ。

（ト疊を上げにかゝる。兵衛留める。覺壽支へ、とゞ立廻りにて、疊を上げ、以前の刀の折れを出し、）

かやうなものでござりました。

（ト渡す。覺壽取り、兵衛こなしある。覺壽手拭をほどき、）

覺壽　こりや、コレ、刀の折れ。

（ト兼政も見て、）

兼政　面妖な。正しくこれへ入れたと確かに見屆けたが、こりやどうぢや。

小櫻　母樣、堪忍して下さりませ。成程、長刀は妾が盗みました。

覺壽　ムヽ、すりや、そなたが何故盗んだ。其仔細は。

小櫻　サア、それは。

（ト兵衛が顏を見る。兵衛睨む。小櫻種種こなしあつて、）

覺壽　ヤ。

小櫻　サア、太郎樣の健忘の病ひは、物の化の所爲と思ひ、家に傳はる大切な長刀は、帝樣の重寶、神代の寶なれば、夫に戴かせて本腹もあらうかと、盗み出して、此疊の下へ、隱して置きましたが。

覺壽　そんなら、太郎が病ひを直さんと、盗出し、此疊の下へ入置いたが、今、切先の折れになつてあるのぢやの。

小櫻　アイ。

覺壽　扨はそなたが入置いたあとへ、何者ぞが來て、其長刀を盗取り、この切先と入替へ置いたもの。スリヤこの折れの主が、長刀は持つてゐるわいの。

兼政　いかさま。その折れの主を詮議したら、知れさうなもの。

覺壽　コリヤ、銘々の腰の物を吟味せにやならぬ。ソレ、求馬。侍たる者を

これへ呼べ。

兵衛　アヽ、コレ〱、後室。何の、誰が、疊の下へ、心が付きませうぞ。コリヤモウ、吟味せずと止しにさつしやれ。

覺壽　イエ〱、大切な家の重寶、神策の長刀、きつと吟味を遂げねばなりませぬ。侍分の者は外樣。これはよもや。（思入れ。）コリヤ後での事。マア、兵衛殿。こなたは一家の事なり、お勅使の御前も御苦勞ながら、腰の物を拔いて見せて下され。

兵衛　ハテ、滅相ナ。この兵衛は何者。こなたとは合家。すりや近しい一家。何の疑ひがあらう。身共が此家の家來を一々捕へ、一々詮議致して進ぜう。

覺壽　イヤサ、近しいこなた樣ゆゑ猶の事。どうぞ吟味させて下され。

兵衛　すりや、身共が腰の物を是非見るとな。

覺壽　ハテ、わらはが疑ひ晴らし、お勅使樣への申譯。

兵衛　よくござる、せう事がない。見せませう。（ト小を拔き、）ソレ、見さつしやれ。別條はないぞや。

覺壽　成程。それには別條はござりませぬ。とてもの事に、刀も拔いて見せて下さりませ。

兵衛　アノ、刀も見せいか。武士が刀を吟味しられては立ちませぬ。

覺壽　たつて見せまいとあると、長刀の詮議はこなたにあるわいの。

兵衛　ハテ、それは迷惑。

輝政　コリヤ〱、兵衛。刀を見せぬとそちに疑ひが立つ。早う拔いて見せい。

兵衛　何を樣々の事をいひ出して置いて。（思入れ。）成程、刀、見せませう。が、覺壽殿。御苦勞ながら、一寸あれへ。

（ト覺壽、兵衛こなしあつて向うへ出る。）

覺壽　御用かな。

兵衛　こなたも知る通り、この兵衛は鄕士でござれば、知行などもござらず、僅かな田地の主、それ故身上も拂底、腰の物なども用意も心に任せず。面目ないが、ホンノ人目おどしの見せ掛け、どうも人に見せられぬ一腰なれば、たつて見ようとあれば、せう事がない。恥を捨てゝお目にかけるぢや。其代り、直に身共は切腹致す。それとも拔いてお目にかけうかな。

覺壽　イヤ、見ますまい。よういひにくい事を、一家なればこそ、いはしやれた。何のこなたに疑ひはなけれども、ほんの御勅使樣の手前を思うての事。もう見るには及ばぬ。

兵衛　すりや、お得心か。それでは身も大慶。

覺壽　シタガ、兵衛殿。ちつと不嗜みでござりますぞえ。武士の身で、何時どのやうな事があらうも知れぬ。人にも見せられぬやうな刀、差してゐるといふ事があるものかいなア。アヽ、わけもない。（思入れ。）ナニ、求馬。過ぎ行かれた郡領殿の差添持て。

求馬　ハツ。（ト刀を持ち出て、覺壽へ差出す。）

覺壽　此刀は過行かれし夫の差添、太郎に讓りあれど、暫しが間でも心がおくれては惡い。これ差いてござれ。

兵衛　スリヤ此一腰を下さるぢやな。忝い。申受けう。（ト取つて大小の上へ差し、三本差しながら立たうとする。）

覺壽　アヽ、コレ〳〵。其やうな人にも見せられぬやうな見苦しい刀、差してゐるものぢやない。こつちへおこさつしやれい。（ト差いてゐるのを引拔き、取る。）

兵衛　イヤ、それは。

覺壽　人目に掛けては武士が立つまい。一家の恥辱。コリヤわらはが預りませう。

兵衛　でも。

覺壽　但し此刀拔いて詮議せうか。

兵衛　サア、それは。

覺壽　どうでござる。

兵衛　然らばいかやうとも。刀の詮議でも、知れかぬる長刀の行方、覺壽殿、どうでござる。

覺壽　サア、此上は、とくと思案し、詮議致して御內見に供へ奉ります。

兵衛　ハテ、ぺん〳〵といつまでも御勅使を待たせて置くのでござるぞ。

覺壽　イヤモウ、長うとは申しませぬ。今宵のうちに。

兵衛　二品を內見せずば。

兼政　ハテ、河內一國に土師の家を差上げます。

兵衛　面白い。今宵中とおれば、お勅使樣、御猶豫なされて遣はされい。

兼政　それで、若し。

兵衛　ハテ、苦しうござらぬ。長刀が出ぬ時は、家國は沒收。其時は、かねて、イヤサ、一家の誼み執成し仕ります。

兼政　ムヽ、成程。暫しの猶豫は長袖の情、詮議の間は待つて得させん。

覺壽　すりや、詮議のうち御用捨なされて下されうとな、これといふも、兵衛殿のお執成し。エヽ、忝う存じます。

兵衛　イヤモウ、一家の誼み、惡しう思はぬがようござる。

小櫻　申し、母樣。長刀の行方の知れぬも、一旦盜み出した妾が誤りなれば。

覺壽　詮議するか。

小櫻　アイ、ちつと思當つた事もござりますれば。

覺壽　オヽ、出かす〳〵。併しながら、一旦越度あるそち、娘でも用捨はならぬ。兵衛殿、こなたにお頼み申しませう。

兵衛　ナニ、すりやあの小櫻を。

覺壽　連添ふ太郎は健忘、わらはは產みの緣あれば、さしづめこなた。嫁は子といへば、長刀の吟味をとくと指圖をしてやつて下され。頼みます。

兵衛　ハテ、掛りや繋がる悴が嫁。指圖してよい事なれば、どうなりと仕らう。

覺壽　それは御深切。此上は、お勅使樣。

兼政　今宵は滯留。覺壽。奥へ。

覺壽　腰元共。ソレ、御誘引申せ。兵衛殿。後に。

（ト唄になり、兼政、腰元、皆々附いて覺壽、兵衛が刀を持ちて入る。兵衛、小櫻殘る。宿禰太郎はきよろりとしてゐる。あと合方。）

小櫻　申し、舅御樣。

兵衛　嫁女。

小櫻　最前あなたのお指圖の通り、寶藏の鍵はあなたへお渡し申したれば、かの長刀は。

兵衛　コレ〳〵、嫁女。そりや何云ひ召さる。

小櫻　サア、鍵はお渡し申したからは、定めて綸旨はあなたが。

兵衛　イヤサ、綸旨とは何の事。身はその樣な事は知らぬ。

小櫻　イヽエイナア。ソレ、夫太郎殿の病ひ、本腹のため二種の寶を盗出してくれいとのお頼み。

兵衛　ハテサテ、そりや何云ひ召さる。神寶の長刀に、綸旨は此家の重寶。それを兵衛がどうしたぞ。かの長刀は身が最前盗んで、此疊の下へ入れて置いたといふぢやないか。

小櫻　サア、それもお前樣が、母樣に隱して盗んでくれいとのお頼み故。

兵衛　まだ〳〵。身共は知らぬ。馬鹿云ひ召さるな。

小櫻　アノ、現在妾を。

兵衛　頼んだ覺えはない。エヽ、何か、こりやそちも健忘か。

小櫻　エ。

兵衛　サア、物覺えの惡い。覺えもない事をいふからは、こりや、そちも健忘か。夫婦とも健忘病みになつたか。ハテ、氣の毒なものぢやなア。（ト煙草飲んで居る。）

小櫻　申し、舅御樣。覺えないとはお

胴欲でござります。たとへお前の指圖でも、夫の爲に、一旦盗み出した妾も、盗賊の越度で殺さるゝとも、お前のお名を出しませうかいなア。折角盗んだ長刀を取られし不覺。共々に吟味して、綸旨を共に戴かし、夫を本腹させんため。

兵衛　アヽ、イヤ〳〵、嫁女。さては綸旨や長刀を盗んで、本腹させうと思ふか。さすがは女の淺はか。其樣なもの戴かして、心安う病氣が直るなら。天子や法皇は無病息災。生き通しにせねばならぬ。ハヽヽヽヽ。

（ト煙草飲みながら、あざ笑ふ。小櫻こなし。）

小櫻　そんなら最前仰しやつたは、皆妾をお騙しなされて、二品の寶を。

兵衛　盗んだは其方。身は頼んだ覺えはないぞ。

小櫻　舅御樣。そりやお前、お胴欲でござりますぞえ。

（ト取附き泣くを、振放し、空うそぶく。小櫻うろ〳〵して、宿禰太郎に取附き。）

コレ、申し、わが夫太郎樣。何をうつかりとして居て下さんす。お前の病氣本腹の爲とあつて、舅御樣のお指圖で、折角盗んで長刀は又紛失。その行方も、舅御樣をお頼み申しても、覺えないと仰しやつて、御機嫌が損ねた程に、どうぞお前がお詫びして、綸旨の行方も、長刀の所在も、ちやつと尋ねて下さんせいナ。

（ト宿禰太郎に取附き泣く。宿禰太郎、始終構はず。）

宿禰太　アリヤそんな事は知らぬ。とんと何にも覺えぬもの。

小櫻　エヽ、つッとお前が其病氣ゆゑ、かういふ難儀。（トこなしあつて、また兵衛が傍へ行き。）申し、舅御樣。何ぞ妾が申した事が、お氣に障つてお腹が立つなら、堪忍して、どうぞ申し。

（ト兵衛顔をそむける。又あちらへ廻つて。）

コレ、申し。（ト又こちらへ廻り、又宿禰太郎が傍へ行き。）コレ、申し、太郎樣。どうぞ舅御樣へお詫びして下さんせいなア。

宿禰太　エヽ、此人は知らぬといふに。

（ト突き退ける。小櫻種々ある。）

小櫻　何をいうても、夫の病ひで此通り。舅御樣。

（ト兵衛が傍へ行く。煙を吹きかける。）

寶が出ねば、母樣の御難儀。こりや、マア、何とせうぞいなア。

（ト大泣き。兵衛、思案して、ずつと立上がり、小櫻が首筋持つて、宿禰太郎に突

きつけ、）

兵衛　こりや、悴。この女は大盗人。早く成敗せい。

宿禰太　悴々と、貴様は誰ぢや。

兵衛　馬鹿め。おのれが親の兵衛ぢやわい。

宿禰太　オヽ、兵衛とはおれが親仁様ぢや。

兵衛　此女は大盗人ぢや。成敗せい。

宿禰太　そりやどうして。

兵衛　ハテ、其脇差をかう抜いて、かう。

（ト手に持添へ、宿禰太郎が脇差を抜き、振上げる。小櫻、飛び退き、）

小櫻　コレ、こちの人。早まつて下さんすな。

兵源　コリヤ、悴。ちやつと斬殺せ。

宿禰太　ヲヽ、斬るぞ、女子め。こゝへ直れ。

小櫻　オヽ、滅相な。粗相さしやんすな。

小櫻　ア、何を数へなさるぞいなア。

兵衛　オヽ、斬れといふに、斬らぬか。

兵衛　ちやつと斬れ。

宿禰太　こゝへ直れ。

兵衛　サア、斬れ。

かう斬れ。

（ト手を持添へ、一刀斬らす。小櫻倒れながら、宿禰太郎に取附き、）

小櫻　コレ、こちの人。お前まで胴欲な。

宿禰太　おりや知らぬ。盜人ぢやによつて斬るのぢや。

兵衛　ヲヽ、さうぢや。其女は大盜人。憎い奴ぢや。忰、盜人を助けるな。なぜ斬らぬ。斬れ〳〵。

宿禰太　ヲヽ、斬る〳〵。

（ト又振上げる。小櫻、取附き、）

小櫻　コレ、待つて下さんせ。せめてお前が病氣でなくば、

兵衛　ソレ、こま言いはさず、斬らぬか、忰。

宿禰太　ヲヽ、こま言いふな。盜人ぢやによつて、かう斬る。

（ト宿禰太郎種々こなしあり、小櫻を又斬る。小櫻、斬られながら、又縋り、）

小櫻　さては舅御樣。大事を知つた妾ゆゑ、健忘を幸ひ、夫に云附けて、こりや、殺さすのぢやな。

兵衛　コリヤ〳〵、忰。其女めがわれを殺さうといふ。ちやつと殺されぬうち、殺してしまへ。

宿禰太　何ぢや。おれを殺すとは、憎い女め。おのれは、マア、どこの奴ぢやぞい。

（ト又斬る。小櫻、苦しむ。）

小櫻　そんなら妾を。現在の女房ぢやとも知らずに。

宿禰太　太い女め。おれが女房ぢやないわい。

（ト又斬る。兵衛、始終二重舞臺に煙草のんで居るこなし。兼政出る。）

兼政　兵衛樣。云ひ合した通り、彌々宿禰殿は。

兵衛　忰が病ひ、實否はあの通り。現在の女房を盜人と思ひ、手に掛けるからは、眞の健忘。うつけに相違はない。

兼政　まことに、これを見るからは、先達て云附けし、菅丞相を助け返した疑ひは晴れた。

兵衛　此上は、八聲を合圖に、かの兩人も。

兼政　アイヤ、其儀は。

兵衛　ハテ、大事ない。性根のある女はくたばる。忰は健忘。何をいうても氣遣ひないてや。

兼政　左樣ならば、私もちつと寛ぎませう。（トぐつと伸びをして、）ヤレ〳〵、仕附けもせぬ勅使で、窮屈で窮屈でなりませぬ。頭は、冠で頭痛はする。軆は、むり〳〵と引張るやうな。

小櫻　エヽ、そんならアノ、お勅使樣は。

兵衛　身共が家來。荒島主税。

主税　人の知らぬを幸ひに、勅使となつて入込んだも、兵衛樣の言附け。

兵衛　時平公に取入り、立身する身共が手段、何でも首尾ようやりつけ、追附け、攝河泉の主となつて見せう。
小櫻　エヽ、さうとは知らず、最前やみ〳〵とお前に騙され、寶藏の鍵まで渡したが悔しい。せめて此事を母様に。（ト立上がらうとする。）
兵衛　コリヤ。伜。盗人の其女、早くとゞめ刺せ。
宿禰太　とゞめとはどうするのぢや。
兵衛太　ハテ、咽へ刀を突込み、ゑぐるのぢや。
宿禰　ナヽ、さうぢや。（ト引付け、とどめ刺す。）なんと、かうか。
兵衛太　ヲヽ、さうぢや。ぐつとゑぐれ〳〵。
宿禰太　かう〳〵〳〵。
（トゑぐる。小櫻もがき、死ぬる。兵衛とつくりと見て、）
兵衛　もう大方とまつたであらう。コリヤ、伜、其死骸を、アレ、あの池へ打込め。
宿禰太　ムヽ、合點ぢや。（ト小櫻が死骸を轉ばして、池へ入れる。）アヽ、しんどやの。（トこなしある。）
主税　此上は、兵衛様。かの二人の迎ひを。
兵衛　奥にて密かに。
宿禰太　奥とはどつちぢや。連れて往て下され。
兵衛　ハテ、うつけめ。うせう。
（ト唄になり、主税、兵衛、宿禰太郎を手を引き、奥へ入る。ト皐月、彌生、鏡臺、櫛箱を持つて出直し、）
皐月　何と、彌生殿。いつにない、夜に入つて、鏡臺、櫛笥を持てと仰しやるのはどうした事ぢやざいなう。
彌生　さればなう。今宵はお勅使様のお入りといひ、かてゝ加へて、身仕舞ひなさるゝは、とんと合點がゆかぬわいなう。
（ト唄になり、松月尼、随分によき衣裳と着替へ出て、鏡臺の前に直り、恨めしさうに鏡に向ひ、こなし。）
皐月　申し、松月様。俄かにお小袖をお召替へなされて、派手なお姿といひ。
彌生　お髪までなさるゝやら、櫛笥を持てと仰しやる故、これへ持つて参りましたが。
皐月　こりやマア、どういふ事でござりますえ。
（ト松月尼こなしあつて、）
松月尼　君をのみ思ひかけごの玉櫛笥、所詮叶はぬ戀路とあきらめて、切捨てしこの黒髪。
（トつむりへ手を上げ、）

彌生　どうぞもとの樣に取上げられぬか。腰元共。仕樣はないかいやい。
彌生　オヽ、笑止。松月樣とした事が、其髮が元の樣にならぬかとのおむづかり。あんまり短かうお切りなされたゆゑ、髢も入れられず、取上げる事もなりますまい。
皐月　どうぞ今の間に、長うなる髮生え藥でもあらうかいなう。
彌生　そりや、金魚の黑燒がよからうわいなう。
皐月　オヽ、その金魚の黑燒より、後宮樣の仰せには、今宵ひそかにお立ちのお客があるげな。それで提重、酒筒を云付けよとの仰せ。
彌生　それ〳〵。隨分密かにと仰しやつた。忘れぬうちに云付けて置かう。サア、ござれ。
彌生皐月　申し、松月樣。私共は奧へ參ります。
（ト唄になり、兩人奧へ入る。あとしつぼりしたる合方にて、松月一間の傍へ行て、種々こなしあつて、）
松月　ホンニ、いつぞや、京內詣での其時、加茂の社でふつと見染めたお公家樣。テモ可愛らしいと思うても、お名も知らず、高位と思ひ、及ばぬ戀と思切つて、尼になつて居るもの。今宵思懸けなう、お目にかゝつた齋世の宮樣。此家にござるといふ事を、母樣もなぜとうに知らしては下さりませぬ。ホンニ知つたりや是迄に、自らが思ひの遣瀨なさ、心のたけを。（思入れ。）さはいへ尼の身、何と仰しやらうやら。殊に紅梅樣と云交して、都を立退きなさる程の仲の宮樣。不束な自ら、お氣には入るまいと思へども、焦れ慕うて、尼になつたも宮樣ゆゑ。エヽ、羨ましい。あの一間には、紅梅樣と宮樣が睦じうお話しやら。（思入れ。）何やら、かやらであらうなア。それを思へばいつそ。（ト行かうとして思入れあり。）イヤ〳〵、自らは得道した尼の身。思ふは妄執。さうぢや。（ト觀音經を讀み、又こなしあつて、）今宵宮樣のお立ちは八聲。もう追付け紅梅樣と宮樣とお二人、延曆寺へお越しなさるゝであらう。（思入れ。）せめて戀は叶はずとも、お側に居たら宮樣と、お詞交す事もあらうに、この年月焦れ慕うて、漸く今宵お目に懸つて、ぢきに別れると思へば、本意ない事ではある。さはいへ、こちらは思へども、宮樣は何とも思うてはござるまい。鮑の貝の片々に、いはで焦るゝ澤邊の螢、思ひは消えぬ埋火の、いつかは閨に焚きしむる、香のすがりの尼の身で、戀ゆゑ胸を、焦しますわ

いなアく。

（ト長崎の鳥の唄になり、鳥屋の内より四鷄一羽飛下り、鏡に向ひ毛を立てる。仕掛けにて鏡と蹴合ふ。松月悔りして、飛退き、思入れあつて、ぢつと見る。ト合方になり。）

ハテ、思ひがけもない。鷄の鏡をわが友と思ひ爭ふは。ムウ。（トこなしあつて。）それ、唐土の函谷關とやらの、關の戸を開きしは鳥の空音、今宵宮樣のお立ちは八聲を合圖。それ、今宵の内に鷄の時を作らねば、お立ちもあるまい。さすれば、自らが戀も叶ふ。（トきつとなつて、鏡の下の書物を出し。）今迄は及ばぬ戀と思ひしが、紅梅樣も自らも、同じ血筋の姉妹なれば、などかは戀を仕負けうか。戀に上下の隔てはない。（ト右の書物を讀み。）しんし物うし、鷄鳴を憎んで君と枕を同じうす。此唐歌は、鷄の鳴く音を憎んで、いつまでも君と添寢をせんと、戀路の慾につまされし歌。それは變らぬ契り。自らは今宵が初戀、叶ふか、叶はぬか、戀の敵、鷄の鳴く音をとめて、宮樣を口説き落し、二世の契りを結ばいでおかうか。（ト鷄を抱締め。）コレ、鷄。今宵は必ず鳴いてたもなんや。わがみが鳴きやると、自らが戀が叶はぬ程に、よい鳥ぢや、必ず鳴きやんなや。や。

（トこのうち方々の鳥屋の内より羽ばたきする。）

アレく、羽ばたきするは、もう時をつくるのかいなう。必ず鳴いてたもんなや。わがみが鳴きやると戀が叶はぬ程に、必ず鳴きやんなや。や。

（トやつぱり羽ばたきする。）

アレく、聞分けのない。そちたちも、女夫番ひの妹背鳥。わしか戀路を思ひやつて、鳴かずにくれい。自らが頼みぢや。鳴いてくれなよ。（ト傍にある珠數と袈裟を取上げ。）それ、自らが日頃念じ込んだる觀世音、大悲の誓ひには、枯れたる木にも花咲かすとの御誓願。自らが切なる戀路を納受あつて、佛力應護を添へ給ひ、今宵の鳥の音をとめてたべ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。（ト種々ある。）戀ひ焦れし齋世樣。今宵ぞ稀にあふ坂の、鳥の啼を吹く風に、鳴く音をとぢる關の杉の戸。

（ト思入れあつて、右の珠數と袈裟を火鉢へ投込む。焼酎火あがると、松月下へおり、空を眺める仕掛けにて、月じりくと西へ入る。）

今宵はきさらぎ十二日。西に傾く月代は、はや七つ。鳥の八聲を上げぬは、さては自らが念力、佛の示現で、鳥の鳴く音をとめ給ふか。エヽ、嬉しやな

ア。
（トどろ〳〵にて、火鉢より掛煙硝ぱつと上がる。松月ウンとのる。松月肩ぬぐ。白き毛色の肌ぬぎになる。是より激しき合方になる。櫻の花多く散る。松月、鳥のこなしにて、方々の鷄と蹴合ふ事面白く、種々あつて、トヾ鳥を皆々蹴殺し、奥へ行かうとする。此時、覺壽出かけ。）

覺壽　コリヤ、待て、松月。

松月尼　イヽヤ、母様、そこ退いて下さんせ。日頃戀ひ焦れた齋世の宮様。あの一間へ往て妹背の語らひ。

（ト突退け、行かうとする。覺壽引き戻し。）

覺壽　コリヤ、そちは尼の身ぢやないか。それに妹背の語らひとは。

松月尼　サア、都で見そめた親王様。尼になつたもあなた故でござんすわいなア。

覺壽　イヽヤ、待ちや。コレ、松月。

松月尼　イヤ、母様。日頃焦れた齋世の宮様。そこ退いて下さんせ。

覺壽　イヽヤ、待ちや。遣る事はならぬ。コレ、松月。よう物を辨へて見や。あの齋世様には、現在妹の紅梅が。

松月尼　サア、云交したが妬ましい。申し、母様。おとめなさるゝは、妹をかばうて自らを捨てるお心か。

（ト覺壽こなしあつて、ちつと松月を引据ゑ。）

覺壽　焼野の雉、夜の鶴、子を憐れまぬ親はないぞよ。紅梅をかばふも、そちが不便さゆゑ。

松月尼　自らが可愛くば、あの一間へやつて、宮様と妹背のかたらひさせてたべ。

（ト又行くを引きとめ、立廻りあつて。）

覺壽　エヽ、情なや。その姿に心が附かぬか。

松月尼　なんと。

覺壽　コレ。（ト傍にある鏡を突きつける。）此姿をとつくり見て、思ひきれ。

（ト松月、鏡をきつと見て。）

松月尼　ヤア、此姿は、母様。

覺壽　そちや鳥になつたわいやい。コリヤ、一旦得道した尼の身、今又、宮様に心を掛けるは、煩惱の犬ではなうて、生きながら鳥になつたは、嫉妬の念。これでも、そちや、思切らぬか。

松月尼　イヽヤ、思切らぬ。

（ト行かうとする。立廻りあり。）

覺壽　コリヤ、耻かしいとは思はぬか。最前も紅梅にいふ通り、白鷄を千羽飼ひ育てしは、我子の果報を祈りの爲。それに、この如く鷄になれとは、過ぎ行かれし夫が、何の、飼ひ育てゝ置かうぞ。佛の爲、母の爲ぢや程に、

宮樣を思切り、元の通りの道心堅固に
なつてくれい。さすれば、未來の父御
への菩提。此世の母へは孝行ぢや。心
を改めたらば、佛の功力で元の姿に
もならう。コレ、松月。日頃から聞分
けのよい子ぢや。ちやつと得心しや。
得心しや。得心して思切つてたもいな
う。
松月尼　イヽヤ、思切りませぬ。尼とな
り、鳥となるも、宮樣ゆゑ。紅梅樣を
引分け、自らが二世の結び。意見も聞
かぬ。不孝になつてもかまひはせぬ。
母樣。退いて下さんせ。
（ト行くを又引戻し、）
覺壽　すりや、母が此樣に云うても。
松月尼　イヽヤ、きかぬ。
覺壽　どういうても。
松月尼　思切られぬ。
覺壽　其姿になつても。
松月尼　鳥はおろか、生きながら蛇身と
なつたる例もある。
覺壽　コリヤ、外面如菩薩、内心如夜
叉。そちも常々法華經を讀誦したでは
ないか。
松月尼　イヽヤ、法華經、嫌ぢや。惚れ
たが因果。
覺壽　すりや、此樣に云うても。
松月尼　思切らぬ。
覺壽　思切らぬか。
松月尼　イヽヤ。
覺壽　サア。
松月尼　サア。
覺壽　サア〳〵〳〵。
（ト鏡臺の鏡突きつけ、種々面白き立廻
りあつて詰め寄る。松月、覺壽を突退
け行かうとする、覺壽後より松月を斬
る。）
覺壽　もう、是非に及ばぬ。
松月尼　エヽ、母樣。そんなら、自らを
殺すのか。
覺壽　アヽ、此身になつて戀爭ひ。大
切なる宮樣の、お身の上には替へられ
ぬ。不便ながらも母が手に掛けるわい
やい。ほんに、世の中に、何萬人もあ
る殿御。妹の紅梅が云交した宮樣に、
惚れたが其身の因果とあきらめて、た
とへ今際になりと得道して、元の姿に
なつてくれやい。
松月尼　エヽ、胴欲な母樣。此年月、焦
れ慕うた宮樣。添はさうとは仰しやら
ず、思ひきれとは情ない。いつ迄も
存へて、宮樣のお側に暮したい。死に
ともないわいなア。
（ト泣く。覺壽こなしあつて、）
覺壽　すりや、泣く聲までが、母が耳
へは鳥と聞えるか。エヽ、淺ましい。
松月尼　さては多くの鳥の鳴く音をとめ

たが、此身に報うてか。エヽ、浅まし
い。
（ト橋懸りよりばた〳〵にて、侍大勢。）
侍　ハツ、覺壽様。これにござります
か。我々は延暦寺法性坊の家來。先達
て契約の通り、八聲を合圖に宮のお迎
ひ。
覺壽　ヲヽ、時を違へぬ延暦寺の迎
ひ。急いで宮様を。
宿禰太　ヤア〳〵、母人。其迎ひは贋者。
宮様は渡されませぬぞ。（ト云ひ〳〵宿
禰太郎出る。）
覺壽　ヤア、こなたは聟殿。
宿禰太　今こそ健忘病みの本腹時。延暦
寺の贋迎ひ、迂濶に宮様は渡されませ
ぬ。
覺壽　すりや、此家來は。
宿禰太　皆贋者。
侍　それ知られたら。
（ト宿禰太郎に切つて懸るを、立廻りに
て、皆々を殺す。）
覺壽　テモ、ひやいな事の。コレ、聟
殿。今の迎ひを贋者とは。
宿禰太　知つたも健忘病みの德。
（ト此うち主税駈け出で、）
主税　さては太郎めに化され、大事を
うか〳〵と云ひ聞かしたか。此上は齋
世の宮、姫もろとも、兵衛様へ、さう
ぢや。

（ト一間の錠をねぢ切り捨てる。宿禰太郎、後より主税を見事に斬る。覺壽驚き。）

覺壽　コレ、輩殿。お物使を手に掛けては、鄒への聞え。

宿禰太　こいつも贋せ者、荒川主税。

覺壽　ヤア、なんと。

宿禰太　其仔細は斯う。

（ト腹へ突込む。覺壽驚く。）

覺壽　ヤア／＼。さては輩殿。親、兵衛の惡事に、一つでないとの言譯の切腹か。

宿禰太　ハッ、御推量の通り、親、兵衛が積惡邪見、勿體なくも、菅丞相御滯留のうち、我に云附け害せんと企み。親の惡事と後室の恩義、取れば叛し、取らねば辛き武士の、捨てる命と思へども強敵邪見の親人。われ亡きあとも心許なく、思ひ附いたる健忘のうつけ病み。それを疑ひ最前も、女房小櫻を手に掛けさせ、實否を糺す親の惡意。

覺壽　ヤア／＼。そんなら、娘小櫻は。

宿禰太　わが手に掛けて、死骸はあの池。

覺壽　ヤア／＼／＼。

宿禰太　不便や最期の今までも、眞の病ひと心得て、恨み喞ちて死んだもの。譯も云はずに、刺し殺す無得心。それゆゑ我を眞の健忘と思ひ、あの主税と親人の惡事の段々、贋迎ひの樣子知つたも、可愛や小櫻を殺せし故。申し、母人。わが切腹に免じ、何卒親人の命。なんぼう惡でも、親は親。（思入れ。）最前もな、苦痛を見せず、只一思ひと思へども、現在の女房を、手も鈍つて、なぶり殺しも同前。死ぬる今までも、わが病ひを眞と思ひ、樣々の心遣ひ。其誠ある女房を、無得心に胴慾な事。したわいやい／＼。

（ト覺壽奥を見て、）

覺壽　エヽ、につくい奴。切り刻んでも飽きのない兵衛。なれども、こなたの孝心にめでて、兵衛は助ける。

宿禰太　どうぞあなたのお情、偏へに賴み上げまする。

覺壽　聞けば聞く程、心許ない宮樣のお身の上。

宿禰太　イヤ、お氣遣ひなされな。御兩所とも御安泰。イザ、宮樣。これへお出であらせられませう。

（ト奥より齋世の宮、紅梅姫出て。）

紅梅姫　申し、母樣。姉樣の御最期の樣子。

齋世　宿禰太郎が切腹も、聞いてこれへ出られぬは、すなはち太郎が敎へ。

（ト紅梅姫、松月尼に取附き。）

紅梅姫　申し、松月樣。宮樣を焦れての此最期。とくにもそれと知るならば、自らはどうなりとも、共に宮樣をお勸

め申し、お前と二世の固めをさせませうもの。

齋世　コレ、松月。知らぬ事とて、憂き目を見せて、殘念なわいなう。

覺壽　アレ〳〵、聞いたか。有難い宮樣のお言葉。

（ト松月尼こなしあつて、）

松月尼　母樣。申し、宮樣に此姿を、お目に掛けるが恥かしい。（ト身をふるはして泣く。）

覺壽　オヽ不便や。口ではつれなう云ふものゝ、其心根が思ひやらるゝ。聟殿が最期といひ、娘二人が淺ましい此死樣。アヽ、有爲轉變の世の習、三つ子を産んで幸ひと、人も羨む此覺壽。老の入前、悦びは見ず、一時に憂き目を見る、わらはが心を推量して下されいなう。

（ト宿禰太郎、覺壽が傍へ這ひより、）

松月尼 宿禰太　申し、母樣。（ト兩方より、）

松月尼　どうぞ未來の緣を。

齋世　太郎が最期は、親へ孝。

紅梅姬　松月樣は宮樣ゆゑ。

齋世　コレ、松月。此世の緣は紅梅姬。未來の緣は後々萬劫。必ず半座を分けて待つて居や。

松月尼　エヽ、忝い。

宿禰太　申し、母人。親人の事ゝ

覺壽　氣遣ひしやんな。兵衞は助ける。

宿禰太　エヽ、忝い。

覺壽　さはいへ、不便や、娘が最期。

松月尼　鳥になつたる自らは。

覺壽　此世からなる畜生道。

松月尼　申し、母樣。

覺壽　娘。

松月尼 覺壽　エヽ、淺ましい。

（ト泣く。一間の內より、）

丞相　なければこそ、別れを急げ鳥の音の、聞えぬ里の曉もがな。

覺壽　ヤア、あれは。

紅梅姬　確かに父上のお聲。

（ト戶を開く。ト木像飾りある。）

松月尼　今の御詠歌は。

覺壽　ホヽウ、菅丞相の、三度まで作り直せし物なれば、木にも魂備はつて、今の御詠歌。

（ト松月尼が姿を見る。仕掛けにて羽根とれる。）

松明尼　申し、母樣。自らが姿が元の樣に。

紅梅姬 齋世　すりや、木像の威德にて。

覺壽　オヽ、たとへ末世に至りても、此河內の土師村に、鷄鳴かぬは娘が一念。菅丞相の歌の德。

松月尼　申し、母樣。紅梅樣。（ト苦しみながら、齋世の宮の側へ行く。）宮樣。

（ト手水鉢の水を汲み取り、）

皆々　南無阿彌陀佛〳〵。

(トどろ〳〵にて、前の池より吹き水上がる。)

宿禰太　ハテ、心得ぬ。此池より水氣卷上るは、最前小櫻が血潮、今また松月が血潮と流れ寄つて合體し、水氣立ち上るは、陰にして又陰なり。

覺壽　時は丑三つ、極陰の時刻。三陰の司るは月の象。すりや、此池のもとに、月の形の長刀が隱しあるに極まつた。ハテナア。

(トどろ〳〵にて、小櫻が死骸、長刀を抱へ、せり上がる。)

宿禰太　ヤア、女房、小櫻が死骸。

覺壽　ナニ、娘。(ト池の傍へ往つて、長刀を見て、)是こそ、家の重寶、神策の長刀。

(ト此うち兵衛出かけてゐて、此時、)

兵衛　それを。

(ト懸るを宿禰太郎支へて、)

宿禰太　コレ、親人。こなたの惡心ゆゑ拙者が切腹。コレ、申し、どうぞ本心になつて。

兵衛　ヤア、親の惡事を訴人する、不孝者め。

(ト蹴飛ばし、覺壽にかゝる。最前の鞘にて立廻りあつて、程よく受ける。ト鞘切れ割れて、内より綸旨出る。)

覺壽　それこそ御綸旨。

兵衛　それを。

(ト切掛ける。宿禰太郎立廻りにて刀を取り、兵衛を押へ、覺壽に其刀をやり、)

宿禰太　コレ、申し、親人の命を。

覺壽　助ける證據は此白髮。

(ト髻を切る。宿禰太郎取上げ、)

宿禰太　これは。

覺壽　こなたの切腹、娘が最期。こゝに一字を建立し、木像を安置し、末世末代、道明寺と名づけ、逆まながら弔ふ此尼。種々因緣佛道。南無阿彌陀佛。サア、兵衛。こなたも覺壽と共に、佛の道にいらつしやれ。

宿禰太　コレ、親仁樣。どうぞ心を取り直し、姑御と御一緒に。

兵衛　佛は嫌ひぢや。

覺壽　發心さつしやれ。

兵衛　嫌ぢや。

覺壽　現在わが子の最期を見ても。

兵衛　いつかな心は變ぜぬわい。

(ト兵衛手を組み、立ち身になつて、覺壽こなしあつて、)

覺壽　エヽ、こなたはなう。

(ト覺壽、宿禰太郎も一緒によろしく詰めかける。)

幕

七つ目

播州曾根の濱邊の場
同　海　上　の　場

造り物。向う淺葱幕。眞中に大木の松、この松の下に茶屋有り。みどり、茶屋の娘の形にてゐる。在郷唄にて幕開く。

(ト仕出し大勢、茶店に腰掛けて居る。)

○　サテ、かう出端な飲んで、向うの海面を眺めた所は、どうもいへぬ景色ぢやぞや。

△　イヤモウ、向うの景色より、娘の姿の景色は、どうもいへぬわいの。(ト尻を叩く。)

みどり　オヽ、何をさしやんす。戯言ばつかり。妾がやうな松の荒皮育ち、却つてお手がそこねますわいなア。

△　こりやきついわ。曾根の松の下にゐるおむす、松に譬へてお斷りはけうといものぢや。

○　さうして、こなたの名は。

みどり　アイ、みどりと申します。

△　したり。松の緣でみどりは、叶うた名ぢや。

みどり　イヤモウ、みどりといへば、どうやらしをらしう聞えますれど、ほんの赤松のやうな、不束な者でござんすわいなア。

△　イヤ〳〵、赤松ぢやない、姫小松め。しつぽりと臥松を待つてゐるわい。

みどり　アヽコレ、惡い事さしやんすないなア。

○　何の。それがわるい事。イヤ、その惡い事の序でに、こんど菅丞相樣とやらが、惡い事をさつしやれて、流し者ぢやと、此間から、此濱邊で潮待ち。今日は日和がよい。大方船で出るであらう。

□　聞けば、何にも覺えのない事ぢやけな。それに流さるゝとは、いとしい事ではないかいの。

△　サイナウ、今日はお船が出るなら、こちらもちよつと、どんなお人ぢや、見たいものぢやが。

〽噂なかばへ櫓をかたけ、この濱先で名うての船頭、帆柱辰藏、のつか〳〵と歩み出で。

辰藏　ホウ、皆許さつしやれい。コリヤ、妹よ。もう茶店もしまうて、早う内へ去ね。

みどり　チヽ、兄樣とした事が、まだ八つ過ぎ。日の暮れまでは二時餘り。今からしまうてよいものかいなア。

辰藏　サイヤイ、今日は日和がよいによつて、あの流人船が、もう追付け出るさうな。其事に就いてお役人衆が皆

曾根へ來る故、それでしまへといふ事ぢや。

□　そんなら、もう流人船が出ますか。

○　お役人衆がこゝへ見えるなら、こちらもこゝには居られまい。

□　ソレ〳〵。片寄れ〳〵と叱られぬうち、もう去にませう。

△　ヲヽ、さうしませう。アイ、おむす、忝うごんす。

みどり　ようござんした。

（ト在鄕唄になり、皆入る。）

〽かゝる所へ春藤玄蕃、あとに續いて判官代輝國、菅丞相を見送りて、暫し疲れを松蔭に、腰打掛くる折も折、處の代官、入江の宇平太、兩使の前に手をつかへ。

宇平太　先づ以て、御兩所樣には、此程より汐待ち、定めし御退屈にござりませう。今日は天氣もよく丞相の船も恙なく、此地を出船仕り、拙者も安堵仕りました。御挨拶のため入江の宇平太、これまで伺候仕つてござります。

輝國　これは〳〵、御念の入られし御挨拶。成程、逗留の內は、何かと御心配。流人船も只今出船仕り、我々が役目も相濟み、互ひに安堵仕る。何さま此程より段々のお心遣ひ、千萬祝着に存じます。

宇平太　これは〳〵、結構なるお言葉。もはや御兩所とも、お役目も相濟み、苦しからずば、一兩日御逗留遊ばされて、この處の名所舊蹟、憚りながら、拙者御案內仕りませう。

輝國　イヤ〳〵、大切なる禁廷の御用、恙なく相濟みたれば、一刻も早く立歸り、事の樣子を言上致さねばなりませぬ。イヤナニ、玄蕃殿。御同道仕らう。

玄蕃　イヤ、拙者はちと用事あれば、明日早々相立ち、夜を日について上京仕らう。貴殿は先づお先へお立ち下されい。

輝國　そりや又なぜに。

玄蕃　ヤ。

輝國　イヤサ、私ならぬ大切な御用。貴殿一人引殘り、何御用がござるぞ。樣子承らう。

玄蕃　イヤサ、そりや何、物でござる。ォヽそれよ、拙者は此播州に所緣の者ござる故、それへ立寄り、明日早々立歸ります。

輝國　ハテナア。

（トいふうち、辰藏出る。）

辰藏　玄蕃樣。これにござりますか。最前より待兼ねて居りました。仰付けられた早船の用意、即ち此裏手へ。

玄蕃　コリヤ〳〵。邊りほとりへ心を

付けい。何にもいふな。

輝國　玄蕃樣、見ますれば、船乘さうにござる。ハテ、異な者と御懇意になされますの。

玄蕃　イヤナニ、あれは何でござる。拙者が用事を勤めた上、一時も早く貴殿に追附くやう、それ故早船を申付けたのでござります。

輝國　ハテ、それはお心の付きました。拙者も急きますれば、お指圖に隨ひ、お先へ參ります。

玄蕃　然らばお先へ。

輝國　お別れ申す。

宇平太　輝國樣。拙者も村はづれまで見送りませう。

輝國　イヽヤ、それは却つてお心遣ひ。

宇平太　イヤ〱、平にお先へ。

輝國　左樣ならば、ナニ、玄蕃殿。

玄蕃　輝國殿。

輝國　萬事は都で。

玄蕃 輝國　＼お目にかゝらう。

＼互ひに目禮、判官代、入江と共に濱傳ひ、都の空へと立歸る。

玄蕃　イヤ、うろたへ者め、邊りほとりへ目かりをきかせ、大切なる密事、輝國が聞く前で、既の事に。エヽ、あつたら膽を菜種にさしをつた。

辰藏　サア、わしもお前が目玉をむかしやつたではつと存じました。

みどり　申し、兄樣。もう店も片付けました。早う去なうぢやござんすまいか。

辰藏　コリヤ、妹。今宵はあなたを、こちの内へお泊め申し、明日早々船に乘せまし、兵庫までお見送り申す約束ざや。われは内へいんで、取片付けて、掃除しておけ。

みどり　アイ〱、合點でござんす。

辰藏　早う行け〱。

＼アイとみどりは甲斐しよげに、わが家をさして急ぎ行く、あと見送りて兩人は、浪打ち際に聲をひそめ。

辰藏　申し、玄蕃樣。此間よりお頼みの通り、わしが手下の船頭を、菅丞相が船に附置き、沖中で船をとゞめよと申付け置きましたが、シテ、此上は、どうなさるゝお心でござります。

玄蕃　チヽ、其仔細も、とんと其方に申し聞かさうと思へども、何をいうても、相役の輝國めが、邪魔になる故、きやつを先へ歸したは、深き思案があつての事。流人船が沖に漂ふうち、手船にて追附き、飛び道具をもつて丞相めをしまうて取れと、主人時平公の仰せ。併し身が面體を見知られては、後日の詮議むづかしい。それ故われも船頭と姿を變へ、あとよりぼッ附き、討つて取る、手船の用意ぢやわいや

い。
辰藏　成程。そりやお氣遣ひなされますな。この濱邊から乘出せば、人目に立つと存じまして、この松の裏手へ手船を繋ぎ置きました。身拵へはわしが內で。
玄蕃　ナヽサ、菅丞相を打殺して、船を遙かに脇へ漕ぎ付け、陸地を密かに立歸る積りぢやて。
辰藏　海の上はこつちの得物。たとへ二里三里違うても、ほッ附いて首尾させます。
玄蕃　でかした。何かの用意は。
辰藏　船の內で。
玄蕃　辰藏、參れ。
辰藏　ハッ。
〽慾と惡とのいさご道、踏み立てゝこそ走り行く、二人が談合、物蔭より窺ひ聞いたる判官代。
（ト玄蕃、辰藏、橋懸りへ入る。ト松蔭より輝國出て、）
輝國　始めて聞いたる時平が逆心。丞相のお身に凶事あつては、法皇の御所へ申譯もなし。殊に恩ある道眞公。きやつより先へ廻つて、お助け申すが恩返し。さうぢや。
〽胸に一物、二筋道。
（ト花道の眞中まで行き、こなし有つて、）
この姿では人目に立つ。姿を變へて。きやつらが船は此裏手。さうぢや。
〽行き違うてぞ急ぎ行く。御臺所は此世の名殘、言葉なりとも交さんと、悲しき中に拾ひ子を、肌に抱きしめ、只一人、はや御船は出潮と、聞くに心も碎れ近く、曾根の濱邊にたどりつき。
久方　ハアヽ、悲しや里人の噂の通り、もう御船は二三里も行き過ぎたか。せめて、此世のお名殘に、お目に懸らうと思うて、こゝまで來た甲斐もなう。
〽濱邊にかつぱと打伏して、流涕焦れ泣き給ふ。みどりは內を取片付け、立戻る床几の陰、それと御臺は近寄り給ひ。
コレ、娘御。今、聞けば、菅丞相のお船は、はや二三里も行き過ぎたとの噂。いよ〳〵それに違ひはござらぬか。
みどり　もそつと先に、アレ、あの向うの濱から、お船が出ましてござんす。流人船をお尋ねなさるゝからは、さては菅丞相樣の由緣のお方でござりますろか。
久方　成程、自らは、丞相樣の妻、久方といふ者。せめて此世のお名殘に、一目會はうと、遙々と、こゝまで尋ねて來ましたわいなう。

〽語るうちより春藤玄蕃、辰藏もろとも立出でて、御臺と見るより引ッ掴み。

玄蕃　菅丞相の御臺、見付けた〳〵。先達て仰せの通り、流人の餘類は、たとへ妻子眷屬でも、別に引離せよとの御意。その餓鬼めも、菅丞相が小悴。こつちへ受取り、時平公への土産にする。渡せ。

久方　ナウ、情ない。いつぞやもいふ通り、此幼子は、實は自らが子にあらず。花園にて拾ひし義理ある子。こればつかりは免して下されいなう。

玄蕃　ヤア、拾ひ子というたら、赦免せうと思うて。よい手をぬかす僞り女。コリヤ、辰藏。こいつはわれ引ッ立てい。餓鬼めは身共がひねり殺す。

辰藏　合點でござります。

(ト久方御前にかゝるを、みどり、辰藏に取附き、)

みどり　兄樣。そんなむごい事があるものか。惡に組して其身が立たうか。エエ、こな樣はなう。

辰藏　エヽ、うぬが知つた事ぢやない。こゝ離せ。

みどり　イヽヤ、なんぼうでも、離さぬ〳〵。(トしがみつく。)

辰藏　申し、玄蕃樣。こいつが邪魔でどうもなりませぬ。内へはふり込んでから、船を廻します。お前は其女を。

玄蕃　ヲヽ、合點ぢや。

辰藏　妹め、うせう。

みどり　そんなら、どうでも頼まれさしやんすか。

辰藏　兄が出世の妨げひろぐか。こま言ぬかさずと、うせてや。

〽傍若無人の帆柱辰藏、妹引きつれ走り行く。

玄蕃　サア、その小悴渡せ。

久方　どうぞ免して下されい。

玄蕃　渡せ。(ト久方御前を抑へ、立廻りて、子を引ったくり、)　この餓鬼めは干ぼしになつてくたばれ。(ト打付け、)サア女め。うせう。

〽後の方より輝國は、宙を飛びくる身輕の打扮、玄蕃をのめし、御臺をかこひ、幼子奪取り突立ちしは、心地よくこそ見えにけり。

アイタヽヽ。(思入れ。)何奴なれば、(思入れ。)ヤア、うぬは土民め。何故妨げする。

(ト輝國、簑笠を取る。玄蕃見て、)

ヤア、わりや輝國。こゝへはどうして。

輝國　最前歸る態に見せかけ、あとへ廻つてうぬらが企み、時平が言付けにて、丞相樣を船中にて殺す企み、皆聞いた。それ故かく姿を變へ、丞相樣を

助けんと思ふうち、御臺の難儀。うぬらにやみ／＼渡さうかい。

玄蕃　ムウ、企みを開いた輝國、生けて置いては後日の仇。者共、參れ。

侍　ハア、。

〽隱し置いたる玄蕃が家來、ばらばらとおッ取り卷き、

輝國やらぬ。

輝國　ヤア、こしやくなる人畜めら、わるく寄つたら、蹴つて／＼、蹴殺すぞ。

玄蕃　こま言いはすな。ソリヤ。

〽ハッと一度に拔き連れて、つばなの穗先、ゑい／＼聲、沖にはどう／＼浪の音。打立て、切立て。

（ト輝國、侍大勢を相手に、タテ種々ある。玄蕃、辰藏、侍大勢を輝國追つて入る。）

久方　コレ、長追ひして怪我あるな。

輝國殿／＼。

〽かくと遠目に十六夜が、走りつまづくいさご道、こけつまろびつ浦傳ひ、やう／＼に走り着き、

十六夜　輝國殿いなう／＼。（ト久方御前に行き當る。）お免されませい／＼。（ト顏見合せ。）ヤア、お前は御臺樣。

久方　そもじは十六夜。

十六夜　何ゆゑこの處にましますぞ。

久方　さればいなう。丞相樣この處にて、潮待ちと聞き傳へたる故、お暇乞ひと、はる／＼來た甲斐もなく、お船ははや二三里も過ぎ行き、剩へ、追ッ手の者に出遭うたわいなう。

十六夜　それは危い所へ駈附けましてござります。イヤ、申し、御臺樣。見れば、幼き子を抱いてござるが、さては菅秀才樣の乙の若君樣でござりますか。

久方　イヤナウ、此子は日外花園にてそなたに預りし幼子。果報拙ない子ぢわいなう。

十六夜　その身になつても、やつぱり御介抱。なぜに捨てゝは下さりませぬぞいなァ。何はともあれ、お身の上が危い。蜑の苫屋になりと、お忍び申させませう。

（ト此うち、辰藏出る。）

辰藏　ヤア、菅丞相の御臺。こつちへ渡せ。渡さぬと此だんびらが、胴腹へお見舞ひ申すぞ。

十六夜　寄つたら爲にならぬぞ。

（ト切り掛ける。十六夜少々立廻りあるうち、輝國磯より出て、辰藏を見事に投げる。侍二人切つてかゝるを立廻りありて、見事に斬倒す。）

ヤア、輝國殿。

輝國　コリヤ、女房。うろたへる所で

ない。時平が下知に隨ひて　玄蕃が早船にて追附き、丞相樣を討ち奉る企みそれがしは御臺所をお忍ばせ申し、あとより追附かん。其方は裏手なる小船に乘り、丞相樣に御油斷あるなと、お知らせ申せ。

十六夜　合點でござんす。わが子を育て給はりし、大恩を送らねば、お前も妾も人でなし。たとへ身は捨つるとも、少しも厭ひは致しませぬ。

輝國　出かした。我とても、命に代へてお助け申さん。

十六夜　さうでござんす、輝國殿。（ト久方御前が抱いて居る子を取り、）

輝國　コリヤ。此子も序でに片付けて。

十六夜　そんなら、此子も。

輝國　早う行け。

十六夜　合點でござんす。

〽わが子と御臺を取分けて、忠と恩義を身二つに、東西へこそ、

（ト十六夜、子を抱き、向うへ入る。輝國。久方御前を連れ、橋懸りへ別れ入る。）

返し

一セイにて、右の松、上へ引き上げる。淺葱幕切り落す。向う、操りの本手摺。一面浪に成る。下手より二の手、三の手せり上がる。臆病口、橋懸り、浪幕。下より花道せり下げ、鳥屋際まで浪せり上る。鳥屋の根に大岩、人登る體。橋懸り、二の手摺内より大岩出る。ト本舞臺は、西の方より人形にて、船に乘り、遣うて出る。

〽別れゆく、月代もはや出で潮の、あとを追來る十六夜は、岩角に馳上り、見れば向うに小船一艘、玄蕃が舳先に立上り、辰藏がエイ〳〵聲。しどろ拍子に浪押切り、十町ばかり漕ぎ出だす。

（ト船は段々東の方へ遣うて行く。十六夜、花道の岩の上に登り。）

十六夜　ナウ、情なや。玄蕃が船は、もう向うへ行くわいの。輝國殿はなぜ遅い。丞相樣をやみ〳〵と討たせては、夫婦の者が義理が立たぬわいなう。輝國殿いなう〳〵。オヽ、さうぢや。たとへ千尋の底の藻屑となるとても、女の念力、玄蕃に追附き、丞相樣をお助け申さいではおかうか。

〽かよわき女の念力に、心も太き抱へ帶、わが子を脊にしつかと止め、蚤のかく繩、夕だすき、小太刀を拔いて差しかざし、岩角に突立ち上り。

八大龍王、恒河の魚。忠義に凝つたる十六夜が、誠を感じ給ひ、力を添へてたび給へ〳〵。

〽劍をくはへ、磯打つ浪、ざんぶと

こそは飛び入つたり。

(ト一セイにて、十六夜海へ飛込む「花道段々と泳ぎ、二の手を樣々泳ぐ事ある。これは介錯人浪子にて遣ふなり。西の方へ泳ぎ入る。ト十六夜の人形遣うて出る。)

へ泳ぎ來る、さしも女の念力の、やたけ心のたゆみなく、勇みて泳ぐ白浪は、花を分け行く如くにて、玄蕃が乘つたる早船に、三段ばかり泳ぎ着く。

(ト十六夜、橋懸りの岩の上へ泳ぎ上る。此うち輝國向うの岩の上へ出る。)

輝國　ヤア、あれは十六夜。危い〳〵。

玄蕃　ヤイ、皆の者。向うの岩の端に居るは、確かに輝國めではないか。

侍　左樣でござります。

辰藏　イヤ、申し、玄蕃樣。此船を目掛けて泳ぎ來るのは、確かに女でござります。

玄蕃　いかにも。此船を目掛け泳ぎ來るは、われに敵たふ不敵の女。目に物見せん。

へ弓矢番うて、きり〳〵と引き絞り、かつきと放せば過たず、十六夜が咽笛を、脊中をかけて、貫ひたる子まで、胸板にすつぱと立ち、ウンとばかりに苦しみの、泣聲さへも磯千鳥の、磯邊の方をなつかしげに、わが夫なうと泣きさけぶ。聲を幽かに輝國が、斯くと見るより、齒がみをなし。

(ト玄蕃矢を放す。十六夜に當り、種々苦しみ、東方へ流れ行く。輝國あせり。)

輝國　さては遠矢に討たれしか。チエエ、殘念やなア。(ト後より侍一人、かかるを切倒し。) 目前に妻子の仇敵。いつまで生けて置くべきぞや。

へいで追附かんと輝國も、海へざんぶと飛び入つたり。折から吹き來る嵐につれ、さら〳〵さつと逆卷く浪に、散るは水玉、水煙、一段ばかり泳ぎしが、底を潜つて追附かんと、浪間にかつぱと沈みにけり。

(ト輝國、花道中程まで泳ぎ、沈む。玄蕃、辰藏見て、)

辰藏　玄蕃樣。ごらうじませ、水心も知らず、海へ飛込み、沈みありました。鵜の眞似をする烏侍、うろたへ者ではござりませぬか。

玄蕃　いかにも、輝國といひ、十六夜まで、水を喰うて死んだのは、命はいふ身投げ心中。皆も、笑へ〳〵。

皆々　ハヽヽヽヽ。

玄蕃　此間に、櫓を押せ〳〵。

辰藏　合點でござります。ヤッシッシ〳〵。

へ腕限りに押切り押切る、水底く

つて輝國が、舳先にすつくと立上がる、
ヤア、輝國めが。
（ト立廻りにて、辰藏、侍、櫂にて叩きかける。皆々を散々に打ちすゑる。）
玄　蕃　うぬ輝國。
（ト輝國、思入れ。）
輝　國　よくも妻子を手に掛けたな。目前に敵を取る。覺悟せい。
玄　蕃　面倒な。ソリヤ。
〽ハッと一度に左右より、取つてかかるを輝國が、もんどり打たせて海へどんぶり、又打ちかける辰藏が、櫓柄しつかり輝國が、其身を沈めば帆柱は、腰を折られて輝國が、刀の難風、其身の破船、玄蕃はすかさず切込む刀、ひつぱづして、かいくゞり、ひらりとかはす身のひねり、難なく刀もぎとられ、一かせ切込み、起しも立てず、船梁に差し、通し。
輝　國　目前の妻子の敵、思ひ知つたか。
（ト種々立廻りて、とゞ摸ち付け、斬り殺し。）
〽ゑいと差上げ、渦巻く浪の眞中へ、ざんぶとこそは投込んだり。
（ト輝國、玄蕃を海へ斬り込む。玄蕃見事に海へはまる。ト玄蕃死骸、介錯人、浪子にて遣ふ。輝國思入れあつて、）
今一足早くば、斯くやみ／＼と殺しはせまい。現在妻や子を、鮫や鯨の餌食となしたか。せめて死骸を尋ねて見ん。
〽船押し廻し、十六夜が、死骸はいづくと尋ぬれど、はや引潮にさそはれて、其行き方はなかりけり。舳板にかつぱと伏しまろび、譯も涙に沈みしが。
（ト輝國種々尋ねる事あつて、泣き倒れ、又氣を換へ、）
ハア、過つたり／＼。傳へ聞く。魯國の吳起は、妻子を殺して義を立つる。われも妻子を殺し、恩を謝して、義を立つる。さうぢや。
〽心ひとつに納むれど、猶逆立つや沖津波、わが一心の早手船、かばねは浪に曝さばさらせ、命は天に奉る。
〽感應納受の誓ひの船。
八大龍王、天龍八部。
（ト侍一人、海より上り、切り掛くる。立廻りにて首を切る。仕掛けにて船の舳先へ首出る。）
〽龍女が成佛海に在り、風神、水神、力を合せ、菅丞相のおはします、筑紫の浦へ漕ぎ寄せ／＼、寄せ來る浪に舵取り直し、君を慕うて行く船は、あと白浪と。
（ト三重にて、）
幕

八つ目

筑紫白太夫隠居所の場

造り物。三間の間、二重舞臺、向う赤壁、納戸口、但し廻り壁あり。西の方、折れ廻り、障子屋臺。前に白梅の盛りの木立あり。橋懸り、塗垂、よき處に門口。正面に荒菰の上に八つ足の机。一萬度のお祓ひ飾りあり。三方に、御酒德利、洗ひ米など据ゑてある。幕の内より小磯、振袖、神子。およね、詰め袖、千早掛け、神子の姿にて舞つてゐる。白太夫、下袴、木綿襷。荒藤太、荒縞のやつしにて、白太夫に摑みかゝつてゐる。安樂寺住僧、花の帽子、僧衣。禰宜、主計、太郎太夫、木綿やつし、白の差貫、木綿襷にて、荒藤太をとめてゐる。此見得、庭神樂にて幕開く。

荒藤太　サア、親仁。どうするのぢや。讓り狀渡さにや、踏殺すぞよ。

皆々　コレ〱、藤太。今日は大事の太々神樂。料簡して去なつしやれ。

白太夫　申し、皆樣。あゝいふ不孝者に構はずと、ほつて置いて下さりませ。

荒藤太　ヤイ〱、死ぞこないの茶袋親仁め。一體、この太々がいま〱しい。妹めもおきやがらぬか。どいつもこいつも止めをらんか。

（ト叩きにかゝる。皆々マア〱と云つて、荒藤太に取付き、下に擱く。）

白太夫　ヤイ、不孝者め。今日の太々を何で邪魔しをるのぢや。

荒藤太　ヲヽ、おれが云ふ事聞かさらさぬ故、邪魔するがなんとした。

白太夫　エヽ、おのれ、親に向うて其頰桁を。

皆々　マア〱、ようござるわいなう〱。

（ト留める。荒藤太「何ぢや〱」と尻をまくり、のツかゝるを、安樂寺住僧留めて。）

住僧　アヽ、コレ〱、藤太。貴樣もどうしたものぢやぞいの。此筑紫の安樂寺は、兩部ぢやによつて白太夫殿を頭にして、神道を守る。又、愚僧が半分社務にして、神樂所の被物も勝れてあがる故、皆相應にして行くのに、こなた一人が、又しても〱、白太夫殿をせたけに來る。マア、今日は一年に一度の太々神樂、兩部立合ひの祈禱ぢやないか。愚僧は格別、禰宜衆の手前も、ちつとは恥ぢたがよいわいの。皆の衆さうぢやないか。

皆々　左樣でござります。

（ト此うち輝國、着流しにて橋懸りより出で、門口に聞いて居る。）

主計　コレ〱、藤太。皆が挨拶ぢや

程に、マア〳〵、今日の所は、お住持の言葉について。

荒藤太　嫌ぢやわいの。今日の神樂を幸ひに、坊主と禰宜の眞中でいふのぢや。ヤイ、老いぼれめ。此隱居屋敷の讓り狀は、もう渡さぬか。惣領なれば本家を讓り、妹めを連れてこゝへ隱居したと思うたが、わごりよは金持つてゐやるの。オヽ、その證據は、この島へ來てゐる菅丞相とやら、寒雀とやらいふ流人を、朝も晩も見舞うて、イヤお成りで候の、お出でぢやのと、内も俄かに此樣に普請して、疊の表替へして、結構にするは、ぬつくりと金持つてゐるのぢやないか。コレ、おれはの、胴に直りや、腐る。側張りや負ける。丁乘りや半が出る。田地も賣れば家も賣る。米屋はせがむ。歩錢はおッだてる。一向今はひらいこばかりで、小歩き同前に暮してゐる、御子息の難儀は見向きもせず、流人の菅丞相を育むとは、日本一の無得心者の惡者とは、親仁、貴樣の事ぢや。エヽ、親といふのも腹が立つ。なんと、コン、お住持。おれがいふのは無理か。尤もか。尤もであらうがの。云うて見や。

住僧　サア、マア、無理は無理ぢやが、またさう事を分けて、とつくりと云はつしやると、やつぱり無理ぢや。

荒藤太　エヽ、鈍な和郎ぢやわい。（ト突飛ばし、主計の傍へ行き、）コレ、貴樣は、物の嚙み分けがよい。お住持と二人判斷して見や。お住持もとつくりと聞かつしやれい。

住僧　サア〳〵、聞いてや。

主計　シテ、どうぢやの。

荒藤太　マア、世間の大法にも、親の物は子の物ぢや。

住僧　よいわ。

荒藤太　惣領のおれに讓るが道ぢや。

住僧　よいわ。

荒藤太　時に、今、親仁がいふには、惡者ぢやによつてならぬと云ふわ。

住僧　ヲヽ、さうぢや。

荒藤太　どこにおれが惡者ぢや。

住僧　さアれば。

荒藤太　コレ、マア、云ひ立てゝ見せう。札事といや、あはせまんぐわん、讀金五、かるたの吹替へは綺麗にやるわ。

住僧　よいわ。

荒藤太　さて、四つほは一から六まで、四通りのかたみ見たまで覺えてゐるわ。

住僧　よいわ。

荒藤太　丁半は達者に、組み前には一足をこぼし、たてほうは掠つて、手味噌いくわ。

住僧　器用な事の。
荒藤太　サア、誰が聞いても器用なといふ。さて又、小盗みは何でもする。
住僧　よいわ。
荒藤太　喧嘩好きぢやによつて愚圖るわ。
住僧　よいわ。
荒藤太　娘から小女郎まで、孕ますによつて、間男するわ。
住僧　するわ。
荒藤太　ちつとの間もぢつとしてゐぬわ。
住僧　ゐぬわ。
荒藤太　夜歩きするわ。
住僧　するわ。
荒藤太　家尻切るわ。
住僧　切るわ。
荒藤太　それ見たがよい。何がわるい。云ひ並べるうち、一つもひツついな事は、徹塵もないわ。皆只する事ばつかりぢや。かういふ息子が外にあるか。
住僧　イヤ、無い〳〵。
荒藤太　よう思うて見たがよい。
住僧　成程、さういうた所は、譯が立つてある。
主計　イヤモウ、殘る所もない多藝な人ぢや。
住僧　サア、あれ程藝能が達者にあらうとは思はなんだ。アヽ、白太夫ぐらゐの息子にするは惜しいもんぢや。
荒藤太　誰もさういうてぢや。
住僧　いつそ、斯うもさつしやれぬか。
荒藤太　どうしませう。
住僧　かうもよからう。
荒藤太　どうでござる。
住僧　ハテ、どうなとさつしやれ。
荒藤太　エヽ、人をふづくるのかい。
主計　イヤ〳〵、お住持では判斷がなしにくい。また一つ、かうして見さつしやれ。
荒藤太　どうぢやの。
主計　いつそ、まそつと藝能に精を出すぢや。
荒藤太　面白いわ。
主計　とんと魔者になるわ。
荒藤太　なるわ。
主計　捕へられるわ。
荒藤太　られるわ。
主計　牢へ入るわ。
荒藤太　入るわ。
主計　引廻されるわ。首切らるゝわ。獄門に上がるわ。犬が喰うてしまふわ。これで止み切るといふものぢや。
住僧　これはよい。コレ〳〵、此思案がいつち上分別ぢや。
荒藤太　エヽ。（ト皆々を踏み飛ばし、）ろくな事はひツとつも云はぬ。よい〳〵、直に見知らさう。（ト白太夫が傍へ行く。）

皆々留めるを踏み飛ばし、）どいつであらうが、寄つたら踏み殺すぞ。（トぐつと尻まくり、どつと坐り。）コレ、親仁。此隱居屋敷の家財、かざい、釜の下の灰まで讓るといふ、判をしておこせばよし、いやといふが最後、骨も脚も、ほつき〳〵と折つてしまふ。サア、嫌か、應か、一口に返事さらせ。

白太夫　イヤ、おのれは〳〵。日本の阿闍世太子といふのは、おのれが事ぢや。此隱居屋敷は、牛と身とで退いて、本家は皆おのれに讓つた事は、これにござる衆が證據。八町といふ田地に、山ばかりが一里四方、鹽燒場から、網引場、二年たゝぬ内に、棒に振つてしまひをつた。此隱居屋敷はな、京におれが妹もある。三番目のこの小磯、おのれにかゝつて、年たけるまで男も持たず、やもめ暮し。もう追ひ〳〵に聟を入れねばならぬ。末で、ともかうもするならば、まんざらおのれにも、孤かづけては置くまいと、あと〳〵まで心を配る親の慈悲。それにマア罰當りの業人め。

荒藤太　コリヤ、老いぼれめ。其談義聞きたうない。どうあつても、此隱居屋敷は、おれには讓らぬのか。

白太夫　ヲヽ、讓らぬ。おのれがやうな不孝者に、何の讓ろぞいやい。

荒藤太　エヽ、固意地な死損ひめ。さういやモウ、あご引ッ裂かにやならぬやうになつたぞよ。

（ト立上がるを、小磯留めて、）

小磯　コレ、兄樣。もうお前も、ちやつと料簡して去んで下さんせ。

荒藤太　イヽヤ、ならぬ。此跡式、讓り狀取らにや、去にやせぬぞ。

白太夫　エヽ、これに付けても、コリヤ、小磯。常から、早う男を持て〳〵といふは、こゝの事ぢや。聟がありや、あいつをぐッとくゝし上げて置くわい。

荒藤太　ヲヽ、くゝし上げて貰はうわい。

（ト小磯を引退け、白太夫を蹴飛ばす。小磯ちやつと留め、）

小磯　アヽ、コレ、勿體ない。兄樣。お前は氣が違うたか。お前。現在の親を蹴るとは、足がちぎれませうぞえ。

荒藤太　エヽ、構ひくさんない。コレ、親仁。おれがいふ事聞かぬからは、もう親でも、子でもない。貴樣は勘當ぢや。

小磯　エヽ。

荒藤太　イヤ、親を勘當するからは、おりや他人ぢや。へヽ、けうといか。

白太夫　アレ〳〵。あんな事をぬかしをるわい。コリヤ、小磯。早う男を持つてくれいやい。

小磯　さいなア。常からお前の言付けなれど、男を持てば、おのづと不孝にならうと思ひましたが、今日の今では男が欲しい。

およね　コレ、小磯様。お前も早う男を持つて、あの荒藤太様を、きつい目にあはして貰はしやんせいなア。

小磯　サア、わしもさう思うてゐるわいなア。（ト住僧を見て、）コレ、申し、お住持様。お前どうぞ妾が聟になつて下さんせんかいなア。

住僧　ハレ、滅相な。愚僧は精進でござるわいなう。

小磯　ほんにさうぢやなア。アヽ、どうぞよい男が欲しいなア。

およね　エヽ、わしが男なら、聟になるけれど。

荒藤太　やかましいわい。

（ト小磯、主計が傍へ行き、）

小磯　主計様。お前、聟になつて下さんせいなア。

主計　ムヽ、それは、ほんにおれを聟にする氣かいの。

小磯　見てゐるやしやんす通りの譯。父様の難儀には替へられませぬ。一生連添うて、いとしほがるわいなう。

主計　こりや忝い。常からこなたに惚れてゐるけれど、有様は云兼ねてゐました。又、時節も待てば、結構な二汁五菜の据膳、戴いて賞翫する。今からは聟ぢや。ドレ、ちよつと手付けに。

荒藤太　コリヤヤイ、俄かに聟穿鑿したとて、滅多に我儘にはさゝぬわいやい。

（ト蹴る。）

白太夫　エヽ、聟が欲しいやい〳〵。

小磯　オヽ、それ〳〵。コレ、申し、太郎太夫様。常からお前と懇ろしたは、こゝの事でござんすわいなア。

（ト太郎太夫の傍へ行く。）

太郎太夫　どこにおれが、ねんごろを。

小磯　アヽ、コレ、申し。父様の難儀になる。コレイナア、云交した太夫様いなア。コレ、申し。（ト手を合はせ、存込ます。）

太郎　ナヽ、成程。云交した事を、とんと失念した。

小磯　互ひに變るな、變るまいと、約束した仲ぢやないかいなア。親の難儀に見捨てゝはゐられまいがな。コレ、こちの人。

太郎　ヲヽ、いかにも〳〵。懇ろしてゐるからは、女夫ぢや。女夫ならば、あの兄の惡者めを。

（ト手を振上げる。荒藤太睨む。）

何ぢやい〳〵。（トあとへ寄る。）

荒藤太　其やうに握り拳を振上げて、おれを相手にするか。べら作めが。サア、

親仁。縁切つたからは、構ひがない。譲り状おこさぬと、踏み殺すぞ。

白太夫　エヽ、まだぬかすか。おのれはく。皆の衆の手前もある。現在親に其頬げた。エヽ口惜しいな。マア年が十若けりや、おのれをばさうして置かうかい。

荒藤太　イヤ、まだ頤をたゝき止まぬか。胴骨をへし折つて、仕舞ひをつけてこまさう。

へずんど立つて引き廻し、脊骨も砕けと薪ざつぱ、なぐる情も荒藤太、始終を窺ふ判官代輝國、見兼ねてつつと走り入り、藤太が腕首引ツ摑み、庭へどつさり投飛ばし、親子を引ッ立て、後に圍ひ立つたるは、心地よかりし有様なり。藤太砂まぶれになりて起き上り。

荒藤太　ヤア、うぬはどこからうせた。毛野郎め。かけも構はぬ喧嘩の仲裁人。うぬはマア何奴ぢや。

輝國　オヽ、聟ぢや。

小磯　エヽ。

荒藤太　何ぢや、聟ぢや。

輝國　ヲヽ、聟ぢや。色を見て惡を察す。醫は脈を取つて藥を盛る。歌人は居ながら名所を知る。通懸つて、一々喧嘩の様子、とつくりあれにて聞いた故、ちよつと仲裁人に出た。間に合は

せの聟ぢや。

荒藤太　わりや仲裁人ぢやない、きつい左平次ぢやなア。親の物は子の物、殊におれは惣領の息子ぢや。親の跡式取らうといふが、誤りか。

輝国　オヽ、誤りぢや。

荒藤太　何で誤りぢや。

輝国　わりや他人ぢや。

荒藤太　ヤ。

輝国　わりや親を勘当したりや、他人ぢや。

およれ　ヲヽ、さうぢや。さつきに親子の縁を切れば、他人ぢや。縁を切ると云はんした。なア、皆様。

皆々　ヲヽ、さうぢや〳〵。

荒藤太　猪口才な。それをうぬらがぬかす事かい。イヤ、コレ。他人なら、此跡式取る事はならぬか。

輝国　ハテ、それが天下の大法ぢや。かけも構はぬ他人が、跡式は取られまいわい。

荒藤太　ムヽ、よい。親仁、勘当免した。元の親子ぢや。何と、これで跡式は取られうが。

輝国　すりや、勘当免したか。

荒藤太　ヲヽ、勘当免したから、もとの親子ぢや。

輝国　ハレ、料簡づよい御子息ぢやなア。勘当免せば、もとの親子ぢやぞよ。其親をなぜぶつた。

荒藤太　ヤ。

輝国　子の身として親を打つ不孝者。通懸つて聞に合はせの聟が、マアさうはさすまいわい。

（ト突き放す。小磯、嬉しきこなし。）

小磯　アイ〳〵、さうでござんす。天から降つた大事の客が、男ぢや〳〵。こちの人でござんす。

白太夫　オヽ、聟殿ぢや〳〵。思掛けない、よい所へ、よう来て下さつた聟殿ぢや。

荒藤太　コリヤ〳〵、待て〳〵。あの、振売りの聟を、二人とも得心か。

白太夫　ヲヽ、得心の段か。願うてもない幸ひの聟殿。

輝国　舅や女房を打擲するを、聟の身で何とだまつてゐられうぞ。妹聟の初見参、近付きの為に、かう〳〵〳〵。

（ト[illegible]にて、かう〳〵〳〵と打ちすゑる。）

およれ　チモ、えらい聟殿がわいて来た。

主計太郎　よい気味ぢや〳〵。

住僧　コレ〳〵、藤太。日頃から不孝の罪、きつと嗜んだがよい。

荒藤太　エヽ、やかましいわい。もう百年目ぢや。（ト輝国にかゝる。）

輝国　これは〳〵段々の御挨拶、以後

は別懇に申し談じませう。(ト投げる。)
荒藤太　何をさらすぞい。
(ト又かゝる。立廻りあつて、)
輝　國　舅殿の喧嘩を申受け、舅の物ご
小舅殿をもてなすのぢや。
〽かゝれば投げられ、起きればぶた
れ、脚腰立たず、ふぬけの藤太、目
鼻も分かぬ砂まぶれ、漸くに起き上
り。
荒藤太　聟入りの振舞ひは痛い御馳走。
小舅、腰骨にこたへて痛み入るぢや。
此お禮は後程きつと。
輝　國　念には及ばぬ。何時なりと。
荒藤太　おのれ、待つてをれよ。
〽達者な物よ口ばかり。
アイタヽヽヽ。
〽あいた／＼としかみ面、すね引き
ずりて逃げかへる。
住　僧　テモ、よいざまでござるなう。
主　計　イヤモウ、よい氣味の段か、日
頃からの憎さ。
白太夫　今の心地よさといふものは、あ
つたものではなかつた。
およれ　荒藤太ではなうて、海鼠をくゝ
つた藁藤太ぢや。
皆　々　ハヽヽヽヽ。
白太夫　サテモ／＼、よい所へよい人が
來て下さつた。親仁の仕合せ、お禮も
とつくり申したい。マア／＼これへ。
小　磯　申し、父様。
白太夫　ヤア／＼。
小　磯　あなたの今仰しやつた通り、ど
うぞなア。
白太夫　どうぞなアとは。
小　磯　エヽ、つんとモウ兄様に、あな
たが仰しやつた通りになア。(思入れ。)
わたしになア。
白太夫　なア／＼と云うては、何ぢや、
譯が知れぬわいやい。
およれ　イヤ／＼、こりや小磯様の云は
しやるは、大方あのお侍様を、殿御に
持ちたいとの事であらう。ナア小磯様。
さうかえ。
小　磯　アイ。
白太夫　エヽ、さうならさうと云へばよ
いわい。此上は遠慮も瓢簞もいらぬ。
今のお世話といひ、われが氣に入つた
事なら、聟にせいで何とせう。(ト輝國
と顔見合せ、)ハヽヽヽ。これは／＼、
マア、思ひ掛けもない、只今のお世話。
迚ものお世話序でに、アノ、妹の小磯
も、どうぞこなたのお世話で、近頃押
附けがましいけれど、聟になつて下さ
れうなら、ナウ、申し、お住持様。皆
の衆。
住　僧　さうとも。どうぞ聟になつて進
ぜて下されうなら、親仁白太夫の滿足

でござらう。
主計　イヤモウ、總々がたつての願ひでござる。
太郎　どうぞ聟になつて下さりませ。
輝國　これは〳〵、何れもの御挨拶、忝う存じますが、私は上方の浪人、身上稼ぎの爲に、この國へ下りましたれど、それと知る邊の無い身の上、殊に只今の仕儀も見兼ねて、入つてちよつぼりと。
白太夫　サア、嘘の聟を、ほんまの聟にしたい娘が願ひ。
輝國　ぢやと申して、餘り早脚な。
仕僧　兎角は善は急げ、上方から遥々ござつて、此筑紫で聟になるとは、即ちこれが緣といふもの。なう白太夫殿。
白太夫　さうでござる。こちらも幸ひ。定めて上方のお方とあれば、お連れ合ひもござらうが、何をいうても只今のしだら。一人の兄めはあの通りの不孝者。近頃不承ながら、得心して。
輝國　成程。故鄕には妻子も、（思入れ。）イヤサ、妻子もござつたなれども、ちと望あつて、私一人參りまして、頼む知る邊とても。
白太夫　サア、無ければ猶の事、めんどしと、此妹、名は小磯といひます。外に姉もござれど、京へ上つてゐます故、今ではほんの一人娘。
小磯　どうぞ、申し、妾が樣な不束な者でも、御不便をかけて下さりませうなら、マア、第一父樣への孝行にも。
白太夫　なるとも。なるとも。どうぞ親子の頼みでござる。
輝國　さやう仰しやる事、辭退も異なものなれば、お言葉に隨ひませうが、不調法者でござります。此上は御憐愍を。
白太夫　何の憐愍どころか、此妹さへ可愛がつて下さるれば、今日からは、おれが聟殿。聟は子と云うではないか。
輝國　いかにも、然らば先づ、舅殿。
白太夫　聟殿。
輝國　女房共。
小磯　こちの人〳〵
白太夫　ハヽヽヽ。めでたい〳〵。すぐにこれから奥へ往て、盃しませう。
仕僧　サア、さらりと埒があいた。
主計太郎　こちらが手傳ひませう。
およれ　小磯樣。さぞ嬉しからう。
白太夫　オヽ、嬉しい〳〵。聟殿ござれ、祝言の盃さゝう。オヽ、めでたい〳〵。
仕僧　太々神樂の御利生で。
皆々　鈴をいたゞくあやかり娘。
〽あやかりものと囃し立て、神樂の當夜が忽ちに、祝言振舞ひ、酒になる、喧嘩の支人聟になる、後の緣ぞ。

（ト送りになつて、白太夫、輝國、小磯こなしあつて、皆々引連れ奥へ入る。あと合方になり、荒藤太、橋懸りよりそろそろ出て、窺ひ、内へ入る。奥を見て、）

荒藤太　さては、もう最前の奴が、いよ〳〵聟になりをつたわい。もう此上は、親仁めに一服。

（ト懐より毒の包みを出して、又隱し、奥を窺ひ、神前の三寳を取つて來て、徳利の中へ右の毒藥を仕込む。此うち、およね出かけ、）

およね　荒藤太樣。そりや何さんす。

（ト荒藤太悔りし、）

荒藤太　ヤア。（思入れ。）イヤ、こりや何ぢや。毎年の太々、祈禱の爲、おれも戴かうと思うて。

およね　嘘をつく人樣ぢや。わしやさつきにから見てゐた。お前。其徳利へ毒を入れて、親仁樣へ飲ますと云はしやんした。滅相な。親に毒を飲ましてよいものかいなア。よい〳〵。おりや奥へいて、親仁樣に云はう。

（ト行かうとするを捕へ、口を押へ、）

荒藤太　それ云うてたまるものか。うぬ。もう命はねぐさつたわい。幸ひの毒見ぢや。此酒くらへ。

およね　エヽ、滅相な。それ飲んだら死ぬるわいなア。

（ト逃げうとするを、種々あつて引ツ捕へ、あふのけにして毒酒を飲まして、振り廻す。此うち、およね苦しむ。）

荒藤太　よう〳〵。思入れ〳〵。

（トおよね種々あつて、血を吐き、死ぬる。）

テモ、毒の廻りは早いの。（ト死骸を引ツかたげ、蹴込み、右の三寳を神前へ直し置き、）親仁めをあれで殺せば、跡式はおれが物。マアそれよりは菅丞相が肝心。

（ト尻からげる。奥にて、）

皆々　三國一ぢや。聟に成り濟した。シヤン〳〵。（ト手を打つ。）

〽祝うて三度土器の燈火よりも蠟燭の、火影ちらめく風に連れ、此世の緣は盡き弓の、矢先に命を失ひし、十六夜が亡魂とは、誰かそれぞと門の口。しよんぼりと立つ夜の鶴。親子のきづな古鄕の、軒端に聲も細々と。

（ト寐鳥になつて、十六夜せりふにて出て、）

十六夜　妹。小磯々々。

〽小磯〳〵と呼ぶ聲も、涙はら〳〵はらからの、血筋にこたへ、思はずも、小磯はふつと門の口。

（ト小磯、不思議さうに奥より出て、）

小磯　確かに今のは京の姉樣の聲ぢや

が。（ト十六夜を見て、）ヤア、お前は姉樣。よう戾らしやんしたなア。おまめで嬉しうござんす。とゝ樣も隨分達者で、明け暮れ懷かしい〳〵と云うてゞござんすわいなア。さうして、マア、いかうお顏の色もわるし、いかうやつれも見えます。氣合ひでも惡うござんすかえ。

十六夜　さいなう。長の船路を潮風に吹かれて、何の色がよからう。聞けば、奥にお客もあるさうな。ちよつと父樣をこゝへ呼び出してたもいなう。

小磯　オヽ、改まつた。何の事ぢやいなア。久振りでといひ、何の遠慮。マア〳〵、お入りなされませいなア。

十六夜　イヤ、マア、呼びましてたもいなう。

小磯　アイ、そんならこゝへ呼びます。申し、父樣。京の姉樣が見えましたわいなア。

白太夫　ヤア〳〵、何ぢや。京の姉が戾つたか。

小磯　アイ、こゝにゐやしやんすわいなア。

白太夫　姉とした事が、なぜ内へ入らぬぞ。ドレ〳〵。（ト門口へ出て、）ほんに姉か。よう戾つたなア。マア〳〵、内へ入りや。

（ト皆々内へ入る。）

ほんに、今日は嬉しい事だらけ。オヽ、袖も詰めたな。今は名も變つて、出世の奉公するげな。さうして徒步なれば草臥れであらう。但しは船か。さうして輕々しい。連れでもあるか。供もあるであらう。親の内へ戾るに、遠慮はない。ソレ妹。ちやつとこゝへ呼べ。

小磯　アイ。（ト立たうとする。）

十六夜　アヽ、コレ、妹。外に連れはないわいなう。

小磯　アノ、長の旅路を、たつたお前一人かえ。

十六夜　ヲイナウ。

（トうつむく。太夫ほた〳〵して、）

白太夫　マア、何でも、よう戾つて來た〳〵。さうして器量も上つた。色もくつきり白うなつた。とう〳〵麥の粉と娘の子は、里へ出せとの世の譬へ。シタガ、此頃は何とやら、夢見が續いて惡い故、それで今日は、おれが處で神樂を飾り、太々を打つた。隨分無事なやうに。ナア、妹。

小磯　それ〳〵。父樣が、夢見がわるいといはしやんした故、妾も氣にかゝつて、海山隔てた姉樣の身の上、祈禱の爲というて、安樂寺のお住持樣や禰宜樣達も、奥で酒盛りしてござんすわいなア。

白太夫　オヽ、それよりは、肝腎の事をとんと忘れた。姉　悦んでくれ。妹の小磯に聟を取つて、今祝言の最中ぢや。

十六夜　それは嬉しうござんす。コレ、妹。隨分夫婦仲ようして、父様に孝行にしてたも。頼むぞや。

白太夫　イヤモウ、そりや氣遣ひしてくれな。兄の悪者めと違うて、それはそれは孝行にしてくれる。それ故の今宵の祝言ぢやわいの。

小磯　申し、姉様。これからは妾も、今までとは百倍。殿御を持てば、猶、孝行にせねばなりませぬ。それはさうと、姉様、父様のいはしやんす通り、いかうお顔の色がわるいが、氣合ひでもわるいかえ。

白太夫　サア、おれもそれが氣に懸かる。姉。何とぞしやせぬか。

十六夜　イエ〳〵、何ともしや致しませぬわいなア。

白太夫　なんともせぬか。マア、落付いた。

十六夜　イヤ申し、父様。お前にお頼み申したい事がござります。

白太夫　ムウ、頼みたいとは。

十六夜　アイ、外の事でもござんせぬ。今、此濱邊を通つて參りましたが、年の頃は二十歳あまりの女の死骸。背に產子を負ひながら、雁股の大矢にて喉笛を射通され、負うたる子まで貫かれ、髪は藻屑に搔亂れ、骸は浪に漂うて、潮引く時は日に照らされ、さし潮には浮み出て、浮きぬ、沈みぬ、ゆられ來て、今、此濱の岩波に打寄せられたを見ますれば、妾が顔に生寫し、小袖の模様、帶の色、若しもお前が見やしやんして、姉が死んだと力を落し、泣かしやんせうかと思うて、(思入れ。)それでお話します。

小磯　オヽ、姉様の、何のマア。生き〳〵してゐやしやんすお前。誰がそんな事、思ひませうぞいなア。

白太夫　それ〳〵。わつけもない事いふものぢや。久振りで戻つた姉、聟殿にも引合はさうし、馳走もせねばならぬ。

十六夜　申し、父様。妾への御馳走は經陀羅尼、一遍の念佛。

小磯　アレ、まだ忌まはしい事云うてぢや。そんな事をいはずと、ちやつと奥へござんせいなア。

(トこのうち、始終寝鳥。)

十六夜　サア、奥へも行かうが、只心に懸かるはかの死骸。どうぞ早う引上げて、矢柄も拔いて、負うた子を引分けて、二筋の煙となして、跡弔うてやつて下さんせ。其功德は皆妾が爲になります。どうぞ願ひを叶へて下さんせい

なア。

白太夫　ハテ、それ程に心に懸ける事なら、奥の衆を頼んで見よう。

皆々　アヽ、殊の外醉ひました〳〵。

(ト皆々出る。)

白太夫　オヽ、コリヤ、皆の衆。もう去なつしやるか。

太郎　去にます〳〵。今日のやうな賑かな太々神樂はないなう。

主計　それ〳〵。其上、俄かの祝言でめでたうござる。白太夫殿。

住僧　愚僧もすぐに歸りませう。祝言の座敷で僧衣を掛けてゐるは、珍しい婚禮。

主計　葬禮と取違へはせぬか。

太郎　コレ、滅相な。(ト白太夫の方を見て。)

住僧　ア、イヤ〳〵、これも果行がして、目出度い〳〵。ハヽヽヽヽ。

白太夫　イヤ、まだ目出度い事がござる。コレ、皆も見て下され。京から姉が戻りましたわいの。

太郎　ほんに、姉御ぢや。まア、達者で、重ね〳〵。

主計
太郎　めでたい〳〵。

住僧　時に、白太夫殿。何か取紛れて忘れてゐたが、今宵菅丞相が御宿願の仔細によつて、これへお成りの筈ぢやぞや。

白太夫　成程。其用意で、どこもかしこも綺麗に掃除して置きましたが、不思議なは、あの向うに在る梅、いつの間に生えたやら知れぬが、此隱居屋敷の普請の時、庇の方へ枝がふつて有つた故、邪魔になるによつて、明日早う枝をおろさうというて居た明る日、不思議な事の。南へさした枝が、北の方へ枝が振り替つた。なにが、悔りせまいか。テモ奇妙なと聞き傳へて、この筑紫は愚か、壹岐、對馬から拝み參りのやうに見に來ました。

住僧　イヤ、こゝな梅が枝が振り變つた事は、上方まで、きつい噂であつたわいなう。

白太夫　それはさうと、幸ひのお住持樣。ちとお頼み申したい事がござります。

住僧　ムウ、頼みたいとは、何の事でござるの。

白太夫　サア、この濱先、女子の死骸が流れ寄つたげにござる。それをどうぞ引上げて、こゝまで持たしておこして下さるまいか。

太郎　それは不淨な頼みぢやが、神道の我々、お住持の頭役、弟子衆連れて往てやらしやれ。

住僧　ハテ、神佛は水波の如く、殊に、兩部習合なれば、別に不淨とも申され

まい。愚僧が參りて宜しく計ひませう。

白太夫　そんなら、そこへ賴みます。

住　僧　心得ました。

皆　々　もう歸りませう。いかい御馳走にあひました。

白太夫　これは皆御苦勞でございました。

（ト白太夫しか〴〵ある。皆々橋懸りへ入る。）

姉聞いたか。追ッ附けこゝへ來るぞ。其間奥へ去て草臥れを休みやいの。

小　礒　父様があの様に世話やかしやんす程に、ちやつと奥へござんせいなア。

十六夜　ヲヽ、いかいで何とせうぞいの。

白太夫　小礒。ソレ、案內せい。

小　礒　アイ〳〵、さア、姉様、かうござんせ。

（ト小礒、十六夜先に立つ。白太夫こなしあつて、）

白太夫　テモ、よい女房になりをつた。

〽伴ふ親子同胞が、今は此世になき人とも、白髪頭を打振つて、いそいそ奥へ入りにけり。

（ト暮六つの鐘打つ。）

〽暮れゆく鐘に輝國も、心ならず一間を立出で。

輝　國　現在連添ふ、妻子の最期をよそに見て、聟入りの、祝言のと。（思入れ。）アヽ、いかさま、緣といふものは變つたもの。筑紫の涯へ來て、夫婦の約束。これ前世の約束事。

〽心で心取りなほす、折柄いそ〳〵娘の小礒。まだうら若き初戀の、いうて見たさも恥かしながら。

（ト小礒、行燈を持ち出で、輝國を見て、種々恥かしき思入れ。）

小　礒　こちの人。

輝　國　オヽ、これはお娘御。

小　礒　妾やお前の女房。

輝　國　ヤ。

小　礒　たつた今、奥で祝言したぢやないかいなア。

輝　國　オヽ、成程。盃したら、そなたはおれが女房。オヽ、あんまり早脚ゆゑ、とんと忘れた。

小　礒　お前は都のお方。妾は筑紫育ちの不束者。お前の氣に入るまいかと、妾や案じてゐるわいなア。

輝　國　ハテ、京と筑紫と、今、盃をしたら二世までも變らぬ夫婦。

小　礒　それがほんとなら、嬉しいけれど、（思入れ。）イヤ、申し、こちの人。悅んで下さんせ、さつきに、父様がお前にも話さしやんした京の姉様、お潮様が戻つてぢや有つたわいなア。

輝　國　オヽ、それはめでたい。京とあれば懐かしい。定めて、奉公でもして

ゐるといふやうな事か。

小磯　アイ、しかも內裏樣に。

輝國　アノ、內裏にか。

小磯　何とけうといものであらうがな。

輝國　大內では、おはしたでは有るまいが、但しは女院方か。大內でお潮といふ名は聞き馴れぬが。

小磯　サア、小さい時の名はお潮というたけれど、京へ行かしやんして、今の名は變つて、十六夜といふわいなア。

輝國　ヤ。

（ト恟りする。小磯飛退き、恟り。）

アノ幼少の時はお潮というて、今の名は十六夜といふか。

小磯　アイ。（トふるへていふ。）

輝國　その十六夜が來てゐるか。

小磯　アイ。奥の一間にゐやしやんすわいなア。

輝國　アノ十六夜が。

小磯　アイ。

輝國　奥にゐるか。

小磯　アイ。

（ト障子屋臺に十六夜影坊師寫る。輝國見て種々思入れある。）

輝國　ムウ。

〽ムウと、とつおいつ。

（トうつむく。小磯、輝國が顏を見て、）

小磯　お前。何ぞさしやんしたかえ。

輝國　そんなら迷うてゐるか。

小磯　迷うてゐるかとわえ。

（ト輝國こなしあつて、）

輝國　オヽ、おれが迷うて。

小磯　エヽ。

輝國　サア、おれが迷うて來て、こゝの聟になつたれば、そなたはおれが女房。

小磯　アイ。

（ト輝國、障子の內を見て、）

輝國　現在の女房が。

小磯　アイ、何ぢやえ。

輝國　イヤ、いかう夜が更けた。

小磯　滅相な。今、日が暮れたさかいに、火をともしに來たわいなア。（ト門口へ出て見て、種々あり。寢ようといふ思入れ。）アヽ、ほんに、きつう夜が更けたなア。（ト目をすり、）夜が更けた。もう寢ようかいなア。

輝國　ヲヽ、寢よう。奥へ往て寢所も拵へておきや。

小磯　アイ、妾や奥へ往て、蒲團をしいて置くによつて、お前もあとからお出でなされませ。

（ト奥へ行かうとして、輝國を見る。輝國は障子の方を見るこなしにて、顏見合せ、兩人、思入れある。）

〽笑を殘して入りにけり。

（ト小磯嬉しきこなしあつて奥へ入る。）

〽共間遲しと駈入つて、一間を見れば、影も形もかけろふの、姿搔消し失せにけり。輝國は茫然と。

(ト淨瑠璃にて、障子屋臺をあける。影繪消える。掛煙硝上がる。輝國種々ある。)

輝國　たつた今まで有りつる十六夜。もはや形を隱したか。この輝國に、何恨みがあつて、言葉を交はしてくれぬ。親子のきづながあればこそ、親兄弟には名殘を惜しみ、こゝまでは來たではないかいやい。たつた一言輝國かと、言葉を交してくれ、女房共。せめて稻妻、石打つ火の、暫しなりとも姿を顯はし、夫に言葉を交してくれい。十六夜ヤアイ。女房共。

〽露と消えなば、葉末に殘れと、草を押分け、搔分けて。

(ト門口へ出て、)

十六夜ヤアイ。女房共。

〽塵芥の中までも、さがし泣くこそ果敢なけれ。夫の歎きに亡き魂の、あこがれ出でし俤の。

(トドロ〳〵にて十六夜をせり上げる。)

十六夜　輝國殿〳〵。

輝國　ヤア、さういふは十六夜。

〽十六夜なるかと走り寄り、すがらんとするに便りなく、有るか無きかに手にさはらず、只茫然とばかりなり。(ト十六夜、輝國よろしくある。)

十六夜　コレ〳〵、輝國殿。目には見ゆれど、形はなく、影にひとしきこの身なれば、寄添うて下さんな。夫戀しう思ふのは、親兄弟より百倍なれど、妾が死んだと仰しやると、父樣や妹が歎き。それで暫しは隱れたが、幽靈といふことを、必ず〳〵隱してたべ。女の身の矢先にかゝり、産子諸共死したるは、持篭りも同じ事。八寒地獄の苦しみ。今にも親子の死骸をば、こゝへ運びなば、水に晒され、色變り、髮も飾りもあるにこそ、淺ましい姿にて、戀し床しは引替へて、嘸や愛想が盡きようかと、それが悲しうござんすわいなア。

(ト泣く。輝國、種々あつて、)

輝國　ヲヽ、道理ぢや〳〵。さりながら、愛想が盡きようかとは、曲がない。いかなる姿にもならばなれ。一度魂立返り、夫よ、妻よというてくれい、女房共。

十六夜　イエ〳〵、二十四時過ぎぬれば、守本尊の壽命の札を削られて、閻魔の帳に載る故に、再び娑婆へは歸られませぬ。もしや歎きの聲が聞えて、この譯が父樣に知れては、親子のきづなにからまれて、影も形も消失せて、言葉交す事もなりませぬ。必ず聲ばし立て

およし　サア御座んせいなア。

（ト唄になる。要助およし連れてはひる。庄八おくみ殘り、合方になる。庄八こなしあつて種々をかしみある。）

庄八　おくみ樣や、お前要助に百兩貸してやつたが嬉しいかえ。

おくみ　嬉しいわいなう。

庄八　お前が嬉しけりや、わしも猶嬉しいわえ。

おくみ　この上永うそなたを賴む程に、どうぞ要助と早う夫婦になる樣にしてたもや。

庄八　エヽ何ぢやしてたも。　〳〵た　。　。、大事　。又　古いぞえ。かえ、　。

（　。おくみびつくりして、）

おくみ　これ庄八殿、何しやるぞいの、こゝ放しやいなう。

庄八　イエ〳〵放さぬ〳〵。

おくみ　アレエ〳〵〳〵。

庄八　それ〳〵アレエは古いと云ふのに。

おくみ　夫でもわが身惡い事ばつかり。

庄八　シイ〳〵大きな聲して何ぢやいなア。恩のある庄八ぢやぞえ。惡い事はせぬ、よい事をするのぢやわいなア。お前マアよう物を思うて見たがよい。大枚百兩と云ふ金を要助に貸してやつたも、お前にこのお禮を受けうと思ふばかりぢやぞえ。それに何ぢややら、ひんしやん〳〵と、要助ぢやとて別に男ぶりに優り劣りはなし、ちつと、か　、がするといふ分の事ぢやわいなア。　ずつとわしが方に風味があるぞえ。おくみ樣、何うぢやいなア〳〵。

おくみ　エヽつつともう惡い事しやると嚙みつくぞや。

庄八　嚙付いてお呉れ、心中に齒形入れてお呉れ、紅粉付けてお呉れ。

おくみ　エヽしつこい。アレエ〳〵。

（ト逃げ廻る。法界坊奥より庄八さん〳〵と呼んで出る。庄八取違へ、法界坊に抱付き無理に口を吸ひ、顏見合せゑつく。）

庄八　今の口はわれかいやい。エヽ、エヽ。

法界坊　ちつと嗽もしたがよい。人に得心も爲さず、無理無體に口々と。でも強い熱ぢや。エヽ、、、。

庄八　何ぬかす。うぬが口が、千兩やる程に吸つてくれと云うても吸はるものか。種々の處へうせて、思ひ掛けなう。そしてわりや葱汁吸うてうせたな。

法界坊　違ひ無し〳〵。今のを思ひ出しや出すほど。エヽ、、、。

庄八　エヽ忌々しい、大事の處へ。早う奥へうせう。
法界坊　イヤお前を勘十郎樣が尋ねてぢやぞえ。そして彼の件の。
庄八　エヽづけ〳〵と何ぬかす。
法界坊　それでも、とつくりと談合して置かにや。
庄八　ハテきよろ〳〵と。サアよい、今奥へ行く。エヽとつくりと惡い處へうせやがつた。あつたら處をエヽ忌々しい。
(ト唄になり、奥へはひる。法界坊おくみを見てにつこりと笑ふこなし。)
おくみ　エヽつつと氣味のわるい庄八、これわしも一所に行くわいなう。
法界坊　チツト待つたり、おくみの君。一處に行くわいなうとは、コリヤチ、嬉しい。
おくみ　アレエ〳〵。

へ　　。法界坊
、又　　としり、い
やらしきこなし種々あり。)
おくみ　エヽ穢い、とつともう坊主だてら、あた嫌らしい、何のこつちやいなう。
(ト種々腹立ち逃げうとする。留めて立ちふさがり、)
法界坊　どつこい〳〵、逃がさぬ〳〵。何ぢや、嫌らしい、穢いとは胴慾ぢや〳〵。何時やらであつたが、鉢開きに出た時、お前の門へ立つた時、折しもお前の表の格子から覗いて居て、御出家樣ぢや、法施入れてたもと云うて、ツイと內へ入らんした、其美しさ。念佛が、ふつと見染めてから、阿彌陀樣の顏も閻魔樣の顏も、皆お前の顏に見えて、戻ると夢にお前が來て、嬉しやと

ば、　氣味のわるい程
事ぢやないぞえ。これ出家に施す事ぢやえ。何にも云はぬ。
し、マアわしが心のたけを書いて置いた此文を、これ見てお呉れ。
おくみ　エヽこんな物は知らぬわいなア。
(ト文をほる。又其文を無理に懷へ捩込むと又取つてほる。)
法界坊　何ぢや、知らぬ知らぬとは胴慾な、知らぬ合浦外ヶ濱、鬼住む里の勤めでもお前樣ならするわいなア。
おくみ　アレモウしつこい。わるい事しやると父樣に告げるぞや。
法界坊　何ぢや告げる、告げるとは胴慾な、告げる合浦外ヶ濱鬼住む里の勤めでも。
(ト云ひ〳〵付廻しになる。おくみ逃げし

手もふるひ、腕も力もなまりしが、歎きにくらむ目をふさぎ。

輝國　利劍即是彌陀佛。一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀佛と引拔けば、親子の骸さつと別れ、ふくみし潮、疵の口より流るゝは、何にたとへん秋の田の、井出の切れたる濁り水、涙は懸樋の如くにて、目も當てられず哀れなり。輝國包むに包まれず、二人の死骸に抱き附き。

今は何を隱しませう。此死骸は拙者が女房でござるわいなう。

白太夫
小磯　ヤア。

輝國　それがしは院の廳の官人、判官代輝國と申す者。女房は大内にてお末の奉公。忍び〳〵の假枕に此子を設け、もしや不義顯はれては、互ひの大事と存ずるところ、丞相北の方のお情を以て養育給はる御厚恩。其丞相をさすらへの道で害せんと、敵の者共早船にて追ッかくる。甲斐々々しくも此女、此姿にて海へ飛入り、遁さじやらじと追ッかくる。放逸無慚の敵の者共、よッぴいてはたと射る。矢の根は即ち此通り、矢柄も體も、目に見れども、心は人目に憚らぬか。

〽無慚や、可愛や、心の内、いかばかり悲しかりつらんと、涙にくれて幽靈の、顏を泣く〳〵見上ぐれば。

十六夜　ナウ、其時の苦しさはいとはねども、共に射られし子のいとしさ。名殘惜しさは取分けて、一人は父樣。ひとりは夫。せめて最期の念佛も。

〽潮にむせび、絶入つて、海は三途の川波と、漂　からだも、かういふも。

今は此世にない十六夜。名殘惜しいわいの。

白太夫　ヤア〳〵、コレ、そんなら娘は死んだかいやい。

小磯　そんなら、これが、姉樣の死骸かいなア。

白太夫　コリヤ、小磯よ。姉はこゝに居るわいやい。

〽抱き付けば、目に見えず。ぱつと消えて後にあり。夫がすがればこゝに消え、父が寄ればかしこに立ち、見えつ隱れつ、妄執は、雲に隱れて失せければ、舅も妹も、敢なき死骸にひし〳〵と、抱きつき〳〵。

小磯　最前お前が見えた時、お顏の色が悪いと思うた。そんなら姉樣は幽靈であつたかいなア。申し姉樣、妹かと、ま一度ものいうて下さんせいなア。

〽妹が歎けば、白太夫は足摺して。

白太夫　可愛や妹よ。蕾の花を先立てゝ、

この七十や八十の長生きは何事ぞ。めでたい壽命ぢや、あやかりたいと、人のいふは皆僞り。年寄つて子を先立て、あとに殘るおりや業人。兩部習合の安樂寺。神樣も佛樣も、聞えませぬ。なぜ此親仁を殺して、娘を助けては下さりませぬぞいなう。

へ聲を限りに叫び泣き、物の哀れをとゞめけり。かゝる歎きの隙を窺ふ荒藤太、輝國やらぬと打ちかくる。鍬の柄しつかと判官代。

(ト此淨瑠璃にて荒藤太、鍬を持つてそろ／＼來て、思掛けなう鍬にて打つて懸るを、輝國留めて)

輝國　うぬは荒藤太。

荒藤太　ヲヽ、最前からの樣子は聞いた。京の姉めもてこねたら、おのれも親仁も妹めも、皆殺しにしておれ一人、何もかもせしめてこます。

小磯　申し、兄上。姉樣の最期の上は、心を直して、父樣へ孝行盡して下さんせ。

荒藤太　うぬが構ふ事はない。すつこんでけつからう。

輝國　親に刄向ふ極重惡人。覺悟ひろがう。

へ打込む鍬に身をかはし、上段下段の鋤と鍬。我慢の藤太に、手錬の輝國、附入り附込む身のひねり。打てば開き、なぐれば拂ひ、たゞ一打ちと藤太が無法、鍬も落され荒藤太、こは叶はじと逃げて行く。いづく迄もと駈出す輝國。

菅丞相　ヤア／＼、輝國。無法の愚人を追ふ事なかれ。暫く待て。

へ御聲高く菅丞相、一間より出で給ふ。

白太夫　ヤア丞相樣。いつの間に、御來臨ましました。

菅丞相　ヲヽ、今宵設けた裏道より來り、十六夜が最期の樣子。輝國が報恩に心を盡す事、白太夫がこれ迄の介抱、われ臨終に神とならば、其方共は末社として、末の世までも祀はせんに、ハレ、不便の有樣ぢやよなア。

白太夫　コレ／＼、聟殿。丞相樣が、勿體ないあのお言葉が未來の土産。モウ／＼、おれは泣かぬ／＼。こなたも、妹も、歎くまい。

輝國　それ／＼。歎くは愚痴。丞相樣の冥加ない今のお言葉。御恩報じも十六夜が蔭。

白太夫　白太夫つれが娘には、生れまさつた十六夜。とかくは丞相樣。暫しの隙も血潮の汚れ。

へ何がな淸めの御座所をと、白太夫は立上り、船の碇の大綱を、たぐり

まろめて圓座となし。恐れながら、イザ、これへ。（ト白太夫大圓をまろめて、菅丞相を其上に直し置き。）

へあふぎ請じ奉る。末世に至つて網（つな）敷の天神とは、このお姿を寫すなり。かゝる所へ荒藤太、厄神の荒れたる如く、宿禰、宰相、手の者引連れ、取つて返し。

荒藤太　ヤア、輝國。一度ならず二度、三度、手ひどい目にあはしたなァ。其報いは菅丞相を殺してしまへと、時平公の御内意。先達て通路して、宿禰様と宰相様、たつた今、船がついた。うぬらも命の出船（でふね）ぢや。覺悟せい。

物　淵　ヤァ〳〵、菅丞相。とても歸路は叶はぬ。手短かにくたばつてしまへ。

宿　禰　首は宿禰が打落して、冥途へ歸路をさしてくれう。

物　淵　覺悟せい。

輝　國　ヤア、極重惡人。よい所へうせた。一々首を並べる。覺悟せい。

荒藤太　ヤア、猪口才な。ソレ、何（いづ）れも。

侍　共　やらぬ。

へ心得、小磯もかひ〴〵しく、輝國もろとも割つて入り、火水（ひみづ）になつて戰へば、眞向（まつかう）碎かれ、小鬢を切られ、こりやかなはぬと逃げゆくを、いづく迄もと。

（ト三重にて、輝國、小磯、立廻り、追つて入る。白太夫こなしあり。）

白太夫　コレ〳〵、長追ひして怪我せまい。（ト鋤を持ち、種々ある。）シユッシユッシユッ、シユラシユッシユ。

菅丞相　白太夫〳〵。

白太夫　ハイ〳〵〳〵。（トうろ〳〵する。）

菅丞相　此梅は此家（こや）の梅。

白太夫　ハイ、不思議なは此梅。一夜の内に、まッこのやうに、生ひ立ちましてござります。アレ〳〵。とかういふうち、又追ッ手が參じます。早くこゝを立退（たちの）いて下さりませ。

菅丞相　東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花、主（あるじ）なしとて春な忘れそ。（思入れ。）一首の詠歌にて、寵愛の都の梅、我を慕ひ、このところへ飛び來りしな。花をものいはぬ非情とは何事。人こそものを知らぬよなァ。

白太夫　アヽ、申し。歌どころぢやござりませぬ。ちやつとこゝを立退（たちの）いて下さりませ。今にも追手が取つて返し、お前のお身にお怪我があつたら、何と致しませう。アレ〳〵、もう參じますわいの。

（ト此うち橋懸りより荒藤太逃げて出て、へたばり。）

荒藤太　テモ、あの輝國めはえらい奴（やつ）ぢや。

白太夫　悴め。うぬを。

（ト鋤にて叩きかゝるを、引ツたくり、白太夫をあて、菅丞相を見て、）

荒藤太　ヤア、貴樣。菅丞相ぢやの。われが望みの首が、えらい大金になる。今、首打落す。覺悟せい。

〽抜身振上げ、立ちかゝるを、不思議や庭の白梅の、枝をはね來て藤太を飛ばし、菅丞相の御姿埋むが如く消え給ふ。藤太は呆れて口あんごり。

（ト梅、仕掛けにて菅丞相を隱す。）

荒藤太　ヤア、こりやどうぢや。さては邪法を遣ひをるな。

（ト白太夫起きて、）

白太夫　おのれを。

（ト懸かるを白太夫を引きつけ、）

荒藤太　婆婆ふさげの老いぼれめ。ひねり殺すは易けれど、親といふ字があるゆゑ、獨り自滅ささうと拵へておいた物がある。（ト神酒德利を取つて來て、）サア、これくらへ。

白太夫　こりやお神酒ぢやないか。

荒藤太　ヲヽ、神酒ぢや。われが日頃信心する此神酒を戴かさうと、氣をつけてやるのぢや。サア、くらへ。

白太夫　エヽ、酒機嫌ぢやないわい。

荒藤太　くらへといふに。

（ト引きつけて、口から口へ神酒を飲ます。小磯悔り。）

小磯　ヤア、こりや、父樣を何とするのぢや。

荒藤太　何ともせぬ。毒くらはして殺すのぢや。

小磯　エヽ。滅相な。

（ト退けにかゝるを引きつけ。）

荒藤太　エヽ、やかましい。おのれにも戴かしてやる。（ト兩人に無理に飲まして、）これからうぬらが煩死を見物せうわい。

白太夫　エヽ、おのれはなア。親に毒を飲ます不孝者。

荒藤太　コリヤ、もがくな。せめては念佛でも申してやるわ。南無阿彌陀佛。

白太夫　起きやがらいでな。おのれが念佛で佛に成るものかいやい。

小磯　あんまりぢやわいなア。

荒藤太　面妖な。もう廻る筈ぢやが、どうでも年寄りは血性が枯れてあるゆゑ遅いかしらぬ。よい〳〵。毒がきかねば、この毒でいつそ。

〽刀追取り切掛くる、腕なまつて神變不思議、われとわが眞向すつかり、七轉八倒、のたくりかへすぞ心地よき。

こりや、おのれ切つたぞよ。

白太夫　誰がいやい。

荒藤太　うぬ、もう。
（ト白太夫に切つてかゝる、小磯、荒藤太に取付き、刀を取る。）
白太夫　危い〳〵。（ト種々ある。）
〽輝國は敵を追つて、立歸り、藤太を見るより襟上摑んで引据ゑ、捻ぢすゑ、これはと見やる白梅は、元の如くに安然と、姿顯はれ菅丞相、悠悠として立出で給ふ。
（ト輝國、荒藤太立廻りありて、あてる。荒藤太ウンとのる。ドロ〳〵にて、梅が枝戻る。菅丞相出る。此時丞相、顏薄肉になり。）
ヤア、丞相樣。御安泰。
小磯　常に變りし御顏色。
菅丞相　オヽ、わが多年念じ奉る成德明王の法力にて、二人に與へし毒藥の、神酒殘らず飲干して、そち達が命を救ひ得させしぞ。
白太夫　エヽ、すりや、この神酒をあがつた故、そのお顏。私をお助けあるは有難けれど、毒酒をあがつて丞相樣、もしお命が。
菅丞相　佛力擁護の我なれば、少しも氣遣ふ事なかれ。
（ト荒藤太、起上り「われを」と菅丞相の方へ行くを、輝國引戻し、立廻りあつて、留り。）
輝國　アイヤ、申し、丞相樣。都には時平の大臣、謀反を企て君を害せん企み、それゆゑ宰相、宿禰を討手におこすも。
菅丞相　イヽヤ、輝國。道を守る時平の大臣。謀反の企て何しにあらんや。都を出づる時、禁廷の守護を契約せし後、何しに野心のあるべきぞ。
輝國　憚りながら、それは君の御惑ひ。都には專ら時平我意を振ひ、一味を招くは謀反の根組。其證據は最前の密書。
（ト立廻つて密書を取る。）サア、時平に頼まれた樣子、一々に白狀せい。
荒藤太　ヲヽ、かうなつたからは云うて聞かさう。輝國がいふ通り、時平公には王位の望み、邪魔になる菅丞相を流さんため、忠心と見せかけたも、天蘭敬との言合せ、天皇、親王、院の御所、かたつぱしから片付けて、四海を一呑み、おれも筑紫の主とならんと、樂しんでゐる其墨附き。
（ト取りにかゝる。立廻り。）
〽ずんと立つを、首筋摑んでずでんどう、ウンとばかりに倒れ伏す。
（ト荒藤太を當てる。ウンとこける。）
輝國　時平が惡事の墨附き、御覽あられませう。
（ト菅丞相に渡す。取り、開き見て、）
〽菅丞相は件の墨附き、押開き、惡

事の段々讀み下し。

菅丞相　こりやコレ、左大臣の手跡なれど、仁義正しき時平の大臣、反逆とは心得ず。

〽ハテ不思議、いぶかしさよ、と御心も惑はせ給ひおはします。時に不思議や今宵の星、分野忽ち散亂して、大星一つ落星する。丞相怪み、空打詠め。

ハテ心得ぬ。

（ト床にて、靜かにノリ地彈く。）

臺星紫微宮を犯すは、三公の、國に權強くして、天子を亡ふ兆。又降官臺星に向ふは、文武の百官、三公の權威に恐れ、附き隨ふ。北辰は南面して動かず、衆星北面して手拱す。今の落星は、わが命數終るところ。（トきつとなる。）諸々の星、時として南面するは、時平、叛逆相違なき星の分野。さは知らずして計られしか。エヽ、殘念や。

〽御まなじりに朱を注ぎ、眉毛逆立ち御怒り、都の方を睨付け、物狂はしく立ち給ふ。

白太夫　アヽ、コレ、申し、丞相樣。時平が企みお聞きなされて、怖いお顏。こゝから睨ましやりましても都の方へは届きませぬわいの。

輝　國　申し〳〵、丞相樣。

（ト皆々取付く。ト床にてノリ地しづめて彈く。）

菅丞相　ヤオレ、輝國、白太夫、今の天變、時平の大臣、反逆の企て、聞き捨てられぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず。王位を望む朝敵と、知ろし召されぬ玉體危ふし。

〽臣が忠義も徒らに、此處に朽果つる。骸は虚名蒙むるとも、死したる後は憚りなし。人に知らさぬわが大願。天拜山にて三百三日、斷食荒行、天を祈り、

〽今日滿ずるわが命。飛び梅の花充滿して、我を包みしそのうちに、はや天帝も受納あり。

梵天、帝釋、閻羅王、三天に對面して、鳴雷となつたるぞ。

三　人　エヽ。

菅丞相　必ず歎くな。十六萬八千の、眷屬引連れ、都へ登り、時平を始め謀反の奴原、引裂き捨てん。現世の對面、これまで〳〵。

〽いざうれヤツと御聲も、ザヽ激しき疾風、吹きたて〳〵、戸障子も、欄間たわんでばた〳〵〳〵。納戸、外壁、木の葉の如く、庭の立木も、飛び梅も、花も砂も吹き捲くる。かかる所へ宰相、宿禰、取つて返し。

（ト此淨瑠璃にて、菅丞相種々思入れあ

る。たゝき屋根まくれると、花と一つに散る。大風すさまじく種々。始終ドロ〱なり。ト藤原の宿禰、物淵の宰相、侍大勢連れ出る。）

菅丞相　エイ、荒藤太。其面は何ぢや。

荒藤太　イヤモ、魔法を遣うてどうもならぬぞ。皆寄つて打据ゑさつしやれ。

物淵 宿禰　合點ぢや。者共。ソリヤ。

皆々　やらぬぞ。

（トこれより菅丞相は二重舞臺、侍皆々下にて、連理引の樣なる立廻りの模樣。このうち始終ドロ〱。）

菅丞相　如是我聞、一時佛在須彌大王、八萬四千寶藏金剛。

〽般若はらみつに裂け、臟腑出でて失せにけり。續いて懸かる力者共。

侍　やらぬぞ。

〽第一菩提王、第二帝釋王、第三摩天、おう〱と、喚き苦しみ逃げけんとする。うんらい、うげ〱、てび〱、うげ〱、うんらいそわか。

荒藤太　もう、破れかぶれぢや。

〽荒藤太が狂ひ死。中にひら〱、ころ〱〱。骨も砕け、身も砕け、よろめく上にはたゝがみ、鴨居より猛火の丸かせ、頭徹塵に燒けたゞれ、どうとのめれば、身體は二つ、兩腕拔けて首に凹み、眞向二つに乳の下まで柘榴を割つたる如くなり。

眞黑になつて死んでんけり。齒の根がたく\宿禰、宰相、逃げんとすれば白梅が、枝を伸して引摺り戻し、逃げる先きく\地雷。命お助けく\と、泣き詫ぶるこそ氣味よけれ。

輝國　これより拙者は都へ上り。

白太夫　謀反の輩を、一々奏聞あれ、聟殿。

(ト藤原宿禰、「うぬ」と輝國に懸かるを、仕掛けにて首飛ぶ。)

輝國・小磯・白太夫　これは。

菅丞相　敵退治の手始めよし。

(ト物淵の宰相、「うぬ」と輝國に懸かるところへ、雷落つる。物淵の宰相が骸二つになる。)

門出の血祭り。

輝國・小磯・白太夫　丞相樣。

菅丞相　早く行け。

輝國　おさらば。

(ト始終ドロく\。がたく\激しく、菅丞相、廻り壁へ消える。白き御幣顯はるる。掛煙硝にて御幣空へ上がる。小磯、白太夫、輝國、向うへ入る。)

九つ目

京都延曆寺法性坊の庵室の場
內裏紫宸殿の場
天滿宮の場

造り物。二重舞臺。見附け金襖。西の方折り廻り緣附、仕切に妻戸あり。橋懸り柴折門。大雷にて幕あく。

〽九識の窓の前、十乘の床の邊、瑜珈の法水を湛へて三密の月明らけく、西坂本の法性坊の阿闍梨、佛力擁護の眼尻に、聖澄ましておはします。やゝ更け渡る時しもあれ、又も戸ぼそに人音するは、窓打つ雨の音にもあらず。阿闍梨は耳をそばだて給ひ。

(ト淨瑠璃にて、法性坊、阿闍梨の姿にて、御經讀誦してゐる。橋懸り柴折門の傍へ、菅丞相の神靈せり上げ、戸を叩く。)

法性坊　ハテ、心得ぬ。夜更けて頻りに叩く戸ぼそは何者。

神靈　月光地に敷いて、拂へども又生ず。

〽槇の板戸を押開けば、過ぎにし更衣末の五日に筑紫太宰府にて世を早う去り給ふ菅丞相にておはします。

法性坊　こは、思ひがけなき菅丞相。イザ、こなたへ。

〽怪しみながら、こなたへと請じ入れ奉り。

丞相には、深夜に及び、何故に御來光。腐草生じて、深々と、月は冴ゆれど、法の庵。何をがな、もてなす物もなし。

（ト思入れありて、菓子盆に柘榴を取出し。）
これは時ならぬ柘榴、麁末ながらも愚僧がもてなし。丞相。きこし召されい。

神霊　こは有難き師の坊のもてなし。臣、夜陰に及び參りしは、君暗からずと申せども、濁る世に生れて無實の讒言力なし。讒者の輩、君を覘ひ奉るゆゑ、臣鳴る雷となり、内裏に飛入り讒者の輩を蹴殺し捨てん。僧正。其時、召しの勅諚あらんが、たとへ勅使立つとても、構へて／＼、參內候ふな。此事頼み申すなり。

法性坊　こは、御頼み切なれば、たとへ宣旨下さるとも、二度までは參り候ふまじ。

神霊　イヤ。度々の宣旨あるとても、構へて參內ましますな。

法性坊　こは仰せとも覺えぬ。いかなる勅使參るとも、二度までは參るまじ。勅使三度に及びなば。

神霊　參內あるか。

法性坊　普天の下、率土の內、王土にあらずといふ事なし。

〽さのみはいかゞとの給へば、菅丞相は怒りの顔色。

神霊　ハテ、是非もなき師の坊の仰せ。師弟の緣もこれ限り、未來の引導受け難し。

〽傍にありあふ柘榴をおッ取り、口に含んで、ばら／＼と嚙み碎き、妻戸にばつと吐きかけ給へば、柘榴忽ち火焰となつて、三尺ばかり燃え上がる。

（ト神霊柘榴を口に含んで、妻戸に吐きかける。ドロ／＼にて、掛煙硝燃え上がる。）

〽僧正騒がず、洒水の印を結んで、鑁字の呪を修し給へば、火焰は其儘消えてんげり。

（ト法性坊、印を結ぶ。ドロ／＼にて、火焰消える。神霊こなしあつて、）

神霊　もはや此上は佛敵となり。

法性坊　讐をなす御所存か。

神霊　おんでもない事。

法性坊　怒りを鎭めたび給へ。

神霊　イヽヤ、恨みは盡きぬ。

法性坊　愚僧が行力。

神霊　參內あるか。

法性坊　勅命ならば。

神霊　參內あるな。

兩人　サア／＼／＼／＼。

〽師弟のよしみも是迄と、怒りの眼尻、猶も心を鎭めんと、すがれば拂ひ、立寄れば千手陀羅尼に祈るは法性、さらぬは丞相、繰りかけ／＼。

（ト三重ドロ／＼、大雷、稻妻、掛煙硝。此道具、東へ引込む。）

返し

西の方より紫宸殿の館引出す。時平の大臣、辨の宰相、三好清貫、伴の仲友、其他公家大勢並び居る。やはり大雷、稻妻、雨車。

公家大勢　桑原〳〵。

辨宰相　申し、清貫卿。仲友卿。こりやマア、どういふ事でござります。

仲友　菅丞相雷となつて、我々に恨をなさんと祟りますのぢや。

清貫　申し、時平公。我々に仇を報いんと、菅丞相の死靈が、大雷になりました。

時平　馬鹿盡すな。雷は陰陽の激する所。菅丞相が死靈雷となつても、生ある時さへほッ下したこの時平。死靈などと猪口才な。

皆々　デモ、アレ、鳴りますわいなう〳〵。

（ト時平に取付く。ドロ〳〵にて、方々に掛煙硝、大雷、稻妻、車軸の音。時平、太刀を拔き、方々切り廻る。ト公家皆々取附き、種々あつて、臆病口へ入る。公家皆々附いて入る。清貫殘り、種々あつて、）

清貫　此上は、法性坊を賴まねばならぬ。

〽駈け出す向うへ、顯はれ出づる十六夜が。

十六夜　わが君を讒言せし三好清貫。仇を報いん。思ひ知つたか。

〽神罰は目の前に、虛空を摑んで煽死、心地よくこそ見えにけり。なほ此上は、左大臣に目に物見せん。

〽十六夜が駈け出す向うへ法性坊、紫宸殿より駈け出で給ひ。

（ト此淨瑠璃にて、十六夜奧へ行かうとする所へ、法性坊出て、）

十六夜　エヽ、恨めしや、僧正。參內あるなと賴みしに、何故參內ましますぞ。

法性坊　一旦の契約、二度の勅使は追ッ歸せど、三度に及び、是非なく參內。大臣といひ、讒者の輩に恨みはあらんが、帝に何の恨がある。

十六夜　イヽヤ。たとへ讒者の輩舌を振ふとも、帝の勅命なきならば、君さすらへの恨みはない。

法性坊　邪正一如といひ、罪なき其身も天の禍。

十六夜　その禍の根を斷たん。

法性坊　早く立去れ。

十六夜　イヽヤ、去らぬ。此上は佛敵とならん。

法性坊　わが法力で、祈り鎭めで置くべきか。

（ト太鼓、走舞ひの樣な模樣にて、法性

坊、十六夜、花道の鳥屋際まで行き、種種あつて、時ト出で死ぬる。菅丞相神靈せり上がる。）

ハテ、殘念な。怒りを鎭め、時平を救はんと思ひしに、其身の罪業増長して、法力にも叶はぬか。

神靈　今こそ恨みは晴れたり。本望やな。

（ト橋懸りより、辨の宰相、伴の仲友、逃げ出る。輝國赦し文を竹に附け、追ツかける。齋世親王、菅秀才紅梅姫もあとより出る。）

辨宰相
仲友　輝國。われを。（ト輝國にかゝる。）

輝國　謀反の殘黨。思ひ知れ。

（ト斬り倒す。辨の宰相、伴の仲友死ぬる。）

齋世宮　只今、法皇の院宣にて、菅秀才には、菅原の遺跡を立てさせんと、有難き父法皇の勅命。

輝國　すなはち阿闍梨へ御綸旨。

（ト綸旨を法性坊へ渡す。法性坊開き、）

法性坊　エヽ、有難い。菅丞相には正一位贈官、天滿大自在天神と崇めかしづき、世々の守護たるべしとの宣旨なり。

神靈　ホヽウ、有難き詔。此後はわれ守護し、手跡を守り、わが頼む人を空しくなすならば、天が下にて名をや流さん。（トドロ／＼にて、神靈消える。）

法性坊　めでたい／＼。惡人退治の上は、此通り奏聞せん。

〽榮え榮ゆる御神徳、此御神の著るき、筆の冥加ぞありがたき。

返し

（向うの揚幕引きぬく。天滿宮の社壇を飾り、金燈籠夥だしく掛けある。菅秀才、紅梅姫、齋世親王、上段へ上がり拜する。神樂になりて、いづれもよろしく。）

打出し

都鳥の時代事
吾妻の世話事

隅田川續俤（すみだかはごにちのおもかげ）

都鳥の時代事　深川之段
吾妻の世話事　吉原之段

隅田川續俤　口明

一　山崎屋勘十郎　中村治郎三
一　仲居おかん　山下龜之丞
一　道具屋甚三　藤川八藏
一　法界坊　市川團藏
一　藝子おきく　座本　藤川菊松
尼二三人
家來一人
ばゞ二人
町人一人
一　藝子お幾　山下金三郎
一　同じくお崎　山下菊松
一　下女おかね　芳澤五郎市
一　葱賣おこの　淺尾正藏
一　同じくおため　藤川重三郎
一　仲居およし　嵐萬三郎
一　道具屋市兵衛　山下平九郎
一　下人太郎作　龜谷仲藏
一　永樂屋權左衛門　今村七三郎
一　澤田彌九郎　市川友藏
一　野分姫　嵐村治郎
一　手代庄八　三桝松五郎
一　手代要助　染松七三郎
一　權左衛門娘おくみ　芳澤いろは

造り物。二重舞臺、中葭襖、上手床の間掛物かけ、臆病口欄間に半簾宮本と云ふ紅ずりの提灯一面に掛け、橋懸りの端に宮本屋といふ掛行燈、床机三つ程出しあり。江戸騒ぎにて幕開く。

（ト内よりお幾お崎、衣裳羽織江戸藝子のなりにて、後よりおよし仲居にて出る。）

お幾　モウ〳〵飲めぬ。堪忍して下さんせいなア。

お崎　お幾殿、ちと此處で醉を醒まさうぢやないかいなア。

およし　お崎殿までがあの樣にいうてぢや。奥からはお前方を尋ねて連れてこいと、大抵やかましい事ぢやないわいなア。

お幾　アヽおよし殿、よいわいなア。あの五平殿や里遊殿程せはしなう云ふお客はない。アノ師走の生れぢやあらうぞいなア。

お崎　その辭來るから往ぬるまで、彈かしづめ、酒は無理いひづめぢや。

およし　それがなア、お前方が云うてぢやに依つて云ふぢやないが、醉顔がにくいなア。

お幾　何ぢややら、大通ぢやの意氣ちよんのと、我ばかり合點して。

お崎　人を貶したり、悪口いうて手柄の樣に。

およし　ほんに嫌味の親玉ぢやわいなア。

（ト又江戸騒ぎになる。おかん仲居のなりにて奥より出る。）

天明四年五月書卸の繪番附

おかん　これはしたり、幾殿崎殿、およし殿も同じ様に、奥からはお前方を呼んで來いと、えらはんこぢやぞえ、ちやつと往き〳〵。
お幾　アレ又おかん殿までせつらしい。わしらも最前から彈き通して。
お崎　さゝは過ぎる。ちつと此處で息休めようと。
おかん　オツト野暮はならぬ〳〵。早う呼んでこいとのお託宣。およし殿も一所に早う〳〵。
およし　テヽせはしない。行くわいなう。
お崎　サアそんならお幾殿。
お幾　また責めに逢うて來うか。
およし　おかん殿、後から。サア往かしやんせ。
（ト江戸騷ぎにて三人奥へはひる。）
おかん　およし殿賴むぞや。テヽあつ。けうたう飲んだわいなア。ほんに水の流れと人の身の上は樣々。これが吉田の少將殿の家老淡路の七郎增象が女房姿か。いかに時世なればとて、良人七郎は隅田川の渡し守、私はこの宮本屋の傭はれ仲居となつて、辛苦をするも、再度寶を取戾し、若殿樣を御代に出しましたいとばかり。良人が此度の大病も、おこたらいで何とせう。アヽまゝよ。こんな事云はうより、ドリヤ奧へ行かうか。
（ト又江戸騷ぎになつて奧へはひる。戸中にて、）
おため
おこの　葱賣らしやんせんかいなア。
（ト在所唄にておため、おこの○□四人葱賣のなりにて葱籠載せ出る。）
おこの　これ、おせんおはつ、お姫樣や文治樣が見えぬぞや。（ト向うを見る。）アレ〳〵向うへ見えるわいなう。
□○　オヽイ〳〵。
（ト在所唄にて野分姬振袖葱賣の姿、文治同じく葱賣の籠をかたげ出る。）
文治　オヽイ〳〵。扨々各々を見はづしたかと存じて一遍尋ねました。
おこの　私らもはぐれたかと大抵案じた事では御座りませぬわいなア。
野分姬　皆の衆の志、路々の介抱忘れは置かぬ。うれしいぞや。
文治　左樣で御座りまする。イヤモウ難無く當國へ參りましたも、皆の衆のお蔭、これより刀の御行方を尋ぬる一件。これと云ふもそこ達の志、千萬祝着に存ずる。
おため　これはマア結構な御家老樣の御挨拶、私共は殿樣の御領分八瀨や大原に住まひまする者共。
○　此江戸に葱の問屋が出來て、時々下る事を御聞きなされ。
□　わしも連れていてくれと勿體ないお

姫様や御家老様まで同じ様に。
おかね　私らが手業をなさるゝも、こがれて御座る殿御をお尋ねなさる爲の御辛抱、おいとしい事ぢやないかいなう。
おため　どうぞこちらも共々に尋ねてお逢はせ申しませう程に、必ずお氣遣ひなされますな。
野分姫　兎角そなた達を賴むぞや。
（トいふ中、奥よりお幾お崎およし出る。）
お幾　これ〳〵、珍しい京の葱賣。皆様アレ。
お崎　葱は皆買ふ程に奥へ來て、酒一つ呑ましやんせ。
およし　お客さん方が呼んでぢや程に、早う御座んせいなア。
おこの　サア結構な買人が出來た。その上座敷へいて酒呑むのぢや。
おため　サア早ういて賣り付けう。おこのおはつおせんもおぢや〳〵。
お幾　これ、そつちの姫の葱賣さん。お客の望みはお前ぢや程に、早う御座んせいなア。
野分姫　イヤみづからは。
文治　イヤサ娘、ハテさて娘なア。來いと仰しやるならマア往たがよいわいなう。今の人を尋ねる綱にもならう程に、マアあいというてゆきやいなう。
野分姫　そんなら、あいで御座んす。
お崎　どれ私が手をとらう。（ト野分姫が手を取つて。）サア皆様、御座んせいなア。
（ト江戸騒ぎになる。この一件、皆々奥へはひる。ト向うより永樂屋權左衛門襟卷羽織、おくみ帽子振袖抱帶、おかね下女のなり、太郎作下男阿呆にて辨當を背中に負ひて、この見えすべて野暮の態にて出る。始終騒ぎ唄なり。）
權左衛門　ほんに娘は思ひの外ようあるいたわいなう。
おくみ　わたしよりあなたが御しんどうには御座りませぬかいなア。
權左　イヤモウおくみや、杖ともに三本であるく故、しんどいとはないわい。
太郎作　こちや二本ある上、眞中の前巾着がぶら〳〵と邪魔になつて、歩かれるこつちやない。チト旦那さん、休みなさんせんかいなア。
權左　今日はこのおくみに叶はぬ用がある故、深川の二軒茶屋まで行く道も、おれは嬉しさに任せとつぱかつぱと歩くに依つて、阿呆めが近付き兼ねるのぢや。なア、おくみ。
おくみ　左様で御座りまする。さうして今日はマア何やら芽出度い事があるに依つて、二軒茶屋へ行く程に、サア早う拵へと、兼々おつしやりましたが、芽出度いとは何が芽出度う御座ります

え。

權左　サア、その芽出度いといふは。(ト權左衞門いひ兼ねる思入れ。)

おくみ　芽出度いと仰つしやつたは。

權左　サア、それはマア庄八や要助が來てから話さう。

おくみ　ムヽ、そんなら、あの要助が爰へ參じますかえ。

太郎作　旦那さん、今日爰へ來るのは深川の二軒茶屋へ遊ぶのかえ。そんならアノうまい物をたんと喰ふのであらうなア。

權左　サア〳〵お向うがもう宮本屋ぢや。早うおぢや〳〵。

(ト騷ぎ唄になる。本舞臺へ來る。太郎作先へ立つて、)

太郎作　物まう〳〵。(トやかましう云ふ。)

およし　アレ表に案内があるぞえ。誰も居ぬかいなア。(トいひ〳〵奧よりおよし出る。)ヲヽ、權左衞門樣か。お寮人樣を連れて、ようマア御出でなされましたなア。サアこれでお茶をお上りなされませ。(ト茶を出す。)

權左　ヲヽ、およし女郎、よい色で御座るの。さて早速申さうが、此處へ山崎屋勘十郎は見えませなんだか。

およし　イエまだお出でなされませなんだ。お約束なされたのなら、もう追付けお出でなされませう。その間奧座敷で御酒でもおあがりなされませ。

權左　イヤ〳〵奧へ行て若し間違うてはならぬ。暫く此處で見合はせませう。

太郎作　アヽ奧へ行て遊ぶがよいに、口果報のない旦那めではある。

權左　サア娘こゝへ掛けや。

(ト皆々床几に掛ける。向うの戸屋にて、)

法界坊　江戸淺草寺中龍泉寺へ納め奉る釣鐘の建立、お志は御座りませぬか。

(ト(半三郎)婆のなり、其他尼婆四五人、鉦を叩き先へ出る。後より法界坊破衣、汚き着物がつそうにて釣鐘のかきたる幟を持ち、片手釣鐘を臺にのせ、婆皆々綱を引張りて出る。婆皆々念佛申して出る。)

法界坊　淺草寺中龍泉寺へ釣鐘の建立、お志は御座りませぬかな。(ト云ひ〳〵、本舞臺へ來る。)

婆　これ〳〵法界坊殿、モウ此處が深川の二軒茶屋ぢや。ちと休んで茶でものんで行かうわいなう。

法界坊　エヽ、滅相な。やう〳〵聖天町から此處までの間に米が四升程に錢が三百位ほかない。こんな事で釣鐘の建立はならぬ。まちつと辛抱して歩みなさい〳〵。

尼婆一　何をよい口な事ばかり。此鐘も久しい物ぢや。毎晩〳〵一斗ばかりの米と壹貫餘りの錢はあがるぞや。なア

おくの樣。

尼婆二　それにこちらは信心一通りで、文字半錢とりはせず、三四年も掛つて此釣鐘はいつ龍泉寺へあけるのぢやぞえなう。

法界坊　アヽ流石凡夫、迷うたの。これよう物を思うて見さつしやれ。今の壹貫の錢、銀に直して八匁七分、米は壹斗で六百廿四文はかせぬわいなう。なれども愚僧が行法修行の達したる處とは見やしやれ。釣鐘も大方出來たれども、鐘鑄の方へうめる借金と鼻の下頤三椀宛でも賄はねばならず。間には蛸の足八ツあるかと云うてはとられ、護持院ケ原で化他をしては引つたくられ、こな樣方の思ふ樣に溜まる物ぢやござんせぬわいの。

婆　イヤモウ聞けば聞く程興の醒めた道樂坊主。おいらが日がな一日休みもせぬ樣に精を出さして、賭博や女形狂に遣ひ果たすことはならぬぞや。

尼婆一　それ〳〵、そんなことで鐘の供養は出來るものか。あんまりな道樂坊主。もう〳〵こちらは構やせん。此處から往なうわいなう。

尼婆二　さうぢや〳〵。あんな坊主に構はと往なしや〳〵。

法界坊　アヽ婆樣達、待つておくれ。錢や米のたまるのもお前方が思つてくれる故で御座んす。おればかりでは入れる者はない。これ謝まつた〳〵。

婆　ハテその樣に云はつしやるなら、堪忍せうが、休みたい處で休ましやるか。

法界坊　ハテ知れた事。

尼婆一　中食も煮賣屋で喰ふ程に、その拂ひは奉加の中で賴むぞや。

法界坊　ハテ知れた事ぢや。

尼婆二　酒も飲みたい處で、飲みたい時に、飲むが合點か。

法界坊　合點〳〵。

婆　そんなら、了簡して此處で休んでやらう。妙貞殿も掛けさんせ。

尼婆一　アイ〳〵。

（ト皆々床几に腰掛ける。法界坊おくみを見てこなし。おくみも種々思入れあつて）

おくみ　マア要助はなぜおぢやらぬぞいなア。

權　左　イヤ要助は、おれが云付けた掛物を持つて來るので、隙が要ることもあるが、此マア勘十郎殿や庄八は何故遲いことぢや。

おくみ　こちや他の者は何ぼ來いでも大事ない、要助が遲いのが氣にかゝる。早う來てはくれいで。

（トいふ中、法界坊おくみの床几に腰掛け

る。)

法界坊　淺草龍泉寺へ奉納釣鐘の建立、お志は御座りませぬかな。

(ト云ひ／＼傍よる。おくみ嫌がり、あちらの床几に腰掛ける。權左衞門合點の行かぬ思入れ、おくみを連れてこちらの方へ來る。同じく法界坊付けて來る。權左衞門おくみ今度は一時にのく。法界坊床几より落ちて種々思入れあり。)

法界坊　お痛／＼。汝らマァこの尊い名僧知識長老をちよろけんな目にあはせをつた。腰骨が痛うてならぬ。とんだ事だ／＼、どうも動かれない、あ痛／＼。

(ト云うてやかましうしやべる。權左衞門皆々圍うて。)

權左　これ／＼、坊樣、これ程遊んである床几が澤山あるのに、おれの娘が掛けて居る床几に無理に腰を掛けさつしやるに依つて、娘が嫌がり、あちらの床几へ行けばあちらへ付いて行かしやる。こちらへ來れば又御座る故、一所にのいたれば床几が傾いて、こな樣が一人でにこけたのぢや。謂はゞ怪我と云ふ物ぢや。了簡さつしやれ／＼。

法界坊　嫌ぢや。この尊い知識長老をむごい目にあはした娘、了簡せいと云うても事が濟まぬ。何でもおれが相手はわれぢや。おれが腰打たせた程、打つて／＼打ちのめし、腰拔にせにや腹がいぬ。誰が挨拶でも聞かぬ／＼。

權左　はて扨無法な人もあるものぢや。聞かんと云うて何とするのぢや。

法界坊　ヲヽ聞かんというたら金輪際、おれが又存分にするのぢや。

權左　存分というてどうしやる。

法界坊　ヲヽかうするのぢや。

(トおくみに抱付く。おくみ嫌がり、アレ／＼／＼と云ふ。權左衞門引き放す。立廻りごちやになり、およしおかね太郎作は權左衞門を留め、「マア／＼よう御座りまする」と云ひ、おくみを連れ奥へはひる。法界坊聞かん／＼というて居うごく。皆々留めてわや／＼云うて居る所へ、下に居やつしやれというて町人一人出て。)

町人　お代官樣のお通りぢや。下に居やつしやれ／＼。

(ト喧しう云ふ。これにて法界坊皆々鎮まる。下に居る所へ澤田彌九郎羽織野袴大勢連れ出る。後より町人四五人付いて出る。)

彌九郎　町人共、先達て其方共へ相觸れ置いたる、吉田宿位之助久春が在處は相知れたかどうぢや。

(ト庄八手代にて出懸け覗ふ。)

法界坊　澤田彌九郎樣ぢや御座りませぬか。

彌九郎　法界坊、かねてそちに申付け置

いた宿位之助が詮議はどうぢや。
法界坊　お氣遣ひなされますな。大方詮議の網に取付いては置きましたが委細の様子は。(トさゝやく。)
彌九郎　出かした〳〵。この上にも随分心を付け、ぬかるな。町人共、宿位之助は主人常陸の大掾様の仇なれば、其御下に住む汝等、お上の奉公見付け次第注進致せ。きつと申渡したぞ。次の町へ案内致せ。
法界坊　左様ならば彌九郎様。
彌九郎　法界坊。
法界坊　ようお出でなされました。
彌九郎　きつと申渡したぞ。
(ト彌九郎町人はひると、唄になる。)
法界坊　うまい〳〵。イヤなに婆様達、今聞かんす通りおれもちつと急な用が出來たによつて、今日は休みませう。こなさん達も休まんせ。
婆　そんなら今日は休みにせう。もうそんなら往にませうわいの。
法界坊　これ往なんすなら、その釣鐘を聖天町まで引いて往んで下さんせ。
婆　合點ぢや〳〵。法界坊殿、後から戻らしやれ。サア皆様御座れ〳〵。
(ト婆釣鐘を引いてはひる。法界坊後見送り。)
法界坊　靜かに往なんせや。ようごんした。こけたら起きて往なしやれ。さて斯うぢや。宿位之助さへ見付け出したら、約束通り褒美の金存分にせしめうし、又おれが好物の鰻玉子の暴喰、惚れたお娘を手に入れて、色事はなされ次第、どうやら拍子間が直つてきた。
(トひとり悦ぶ。)
庄八　法界坊、うまい事があるなア。
法界坊　庄八殿、そんなら最前からの様子を。
庄八　あそこから皆聞いた。うまい仕事があるなア。夫に付けてちとおれもわれに相談がある。
法界坊　イヤモウ〇になることなら、なんなりと相談に乗ることさ。
庄八　ハテ慾の深い面憎ではあるぞ。
法界坊　ハテ當世で御座んすわいの。
庄八　併し何を云はうも此處は端近。
法界坊　久振で一丁キウと立てなんせ。
庄八　よう呑みたがるぜえ。
法界坊　呑みたい〳〵。
庄八　サア來い。
法界坊　行かんせ。南無あみだ佛。
(ト騒ぎ唄になる。兩人はひると踊、三味線にて、要助手代の形にて掛物の箱を持ち、向うより出て來て花道よき處にて、)
要助　オヽ騒ぐわ〳〵。確にあそこは宮本屋。旦那が御座る處も宮本屋と仰しやつたが。

（ト云ひ〳〵、本舞臺へ來る中、おかん奥より出る。）

おかん　モウ飲めぬわいなア。許して下さんせ。ちよつとあそこへ行てくるわいなア。

（ト出る。要助と顏見合せ。）

要　助　ヤアそなたは濱路ノ七郎が女房早枝ぢやないか。

おかん　宿位之助樣、此間はお目にも掛りませぬが、まづ御變りもない樣子、お嬉しう存じまする。

要　助　これ早枝悦んでたも。大切な家の重寶鯉魚の一軸、在處が知れたわいなう。

おかん　エヽそれはまあお嬉しう存じまする。してその一軸はどうなされましたえ。

要　助　イヤまだわしが手へはひらぬが、追付け手に入る。其譯はマアゆるりと話さう。して七郎が病氣は快き方かいなう。

（トこの中、野分姫文治出かけ立聞する。）

おかん　イエもうさして變らぬ樣子で御座りまする。あなた樣も御存じの通り、サア何時頃、御家の騷動の砌、梅君樣は人買人の手に渡りお果て遊ばし、御家中も散々、御家は伯父御常陸大掾樣に押領せられ、私が兄軍之助も行方なく、又先年お家を立ち退きました中兄甚平、今は當地に道具屋甚三と名を變へ、あなたのお世話、その私が緣で良人七郎殿も、隅田川の船頭にやつし居りまするも、折を見合せ吉田家のお家を、再び取立てたいばかりで御座りますわいなア。

要　助　七郎と云ひそなた衆兄弟の忠義、忘れは置かぬ嬉しいぞや。

（ト云ふ中、野分姫さうぢや〳〵と思入れあつて、）

野分姫　ヤア松若樣、逢ひたかつた〳〵〳〵、會ひたう御座りましたわいなア。

（ト取付き泣く。）

要　助　さういふそなたは。

文　治　アイヤ御不審は御尤。それなるは御主人花園中納言秀利卿の御娘野分姫、かく申す拙者花園家の執權山上文治と申す者で御座りまする。

要　助　さては幼少で許婚ありし、花園中納言秀利卿の姫野分姫殿であつたか。（ト思入れ。）と云うてとんと合點がゆかぬわいなう。

野分姫　木にも萱にもお心を置き、お疑ひなさるゝも御道理で御座りまする。許婚の野分ぢやと云ふ證據は、自らより貴方にある筈。小さい時にお別れ申し、後の形見と書いて上げました私が歌。

（ト要助懷より袱紗を出し、）

要助　成程形見の袱紗、これ此處に。
「又と唯思はぬ仲のわかれ路は。」
野分姫　「言葉殘りて猶や恨みん。」
要助　そんならそなたが許婚の、姫であつたか。
野分姫　松若樣、御懐しう御座りましたわいなア。（ト取付き泣く。）
要助　ハテ思ひもよらぬ女の身で、遙遙とこの東路まで、何用あつて。
野分姫　何用とは聞えませぬ、松若樣。小さい時からの許婚、一生連添ふ殿御、吉田家の騷動から御行方を、方々と尋ね求めた效あつて、この東路まで聞いたを便に、山上文治の介抱にて、やうやうお目にかゝりその上に、何用とはよそ／＼しい。御胴慾で御座りまする／＼。
（ト泣く。この間おくみ出掛けびつくりして、いろ／＼悋氣の思入れ。ふつと顔見合せ、）
要助　アヽ惡い／＼。惡いぞ／＼。
（ト種々仕方する。おくみ隱れて、）
文治　まうし久春樣、お許婚の操を立てゝ、慕ひこがるゝお姫樣を、惡い／＼とは、何が惡う御座りまするぞいなア。
要助　イヤサ今おれが惡い／＼と云うたは、ありやそれ何ぢやわいなう。ヲヽ夫々大切なる鯉魚の一軸、尋ね求めるまでは日影の身。中納言家の御息女と、たとひ許婚あるにもせよ、かう云ふ處で言葉を交すと、惡い／＼と云うたのぢやわい。
野分姫　そんならこれ程までに心を盡しましても、夫婦におなりなされては下さりませぬか。
要助　サアマア緣と月日を待たつしやれいなう。
（トおくみ腹立て出ようとする。）
要助　アヽこれ／＼出まい／＼。これ文治樣、男の差出る處ぢや御座りませぬ。此處は私に委せて、マアぢつとして居やしやんせいなア。
（ト奧へ掛けて云ふ。おくみ思入れあつて。）
彌九郎　イヤ拙者は差出は仕らん程に、姫君をしつかりとお留め下されい。
野分姫　イヤ／＼放して殺してたもいなう。
おかん　イヤ殺しませぬ。姫君樣、このおかんが請合つて添はしてあげまするが、それでもお果てなされますか。
野分姫　ヤアそんならそなたが、松若樣と祝言さしてたもるかや。
要助　イヽヤ、なうそれでは。
おかん　ハテ何にも御意なされますな。マア私にお委せなされませ。
（ト奧よりおよし出る。）

およし　まうし〳〵要助樣、御寮人樣が急にお呼びなされます。奥へお出でなされませ。
要　助　何ぢや、御寮人樣がお呼びなさるゝ。
およし　今連れて來いと云ひなすつた。早うお出でなされませいなア。
（ト要助を無理に引立て奥へはひる。）
野分姬　アヽまうし宿位之助樣。
（ト行かうとする。おかん留めて、）
おかん　サアよう御座りまする。私が一旦添はしませうというたら、たとへ日蔭の宿位之助樣の御身の上でも、お許婚あるからは誰憚からず御祝言さしませう。が、今はアレ御奉公先の御用で、奥へお出でなされては却つて御互に、御身の爲にもなりませぬ。こゝは一旦お旅宿へ。
（トいふ。野分姬頭振り泣く。）
おかん　とは云ふものゝ、折角廻りお逢ひなされたもの、離れ惜しう思召すは無理ではない。よう御座りまする。イヤ文治樣からわたしが預り、折よくばツイ內祝言なりとも、お姬樣の憂晴らし、さして上げたう存じまする。さう云ふ場所に結句殿御は邪魔なもの、あなたはマアお先へ御旅宿まで、お歸りなされたが宜からうと、私は存じまするわいなア。
文　治　段々の御親切、御尤の御取捌、然らば拙者はお詞に隨ひ、大切なる姬君を、こなた樣にきつとお預け申しまする。萬事御得心の參る樣にお願ひ申しまする。
おかん　その段はちつともお氣遣ひなされますな。してあなたの御旅宿は。
文　治　石町借座敷丸に井筒の模樣が旅宿の目印。
おかん　後程わたしがお送り申しませう。マアそれまでは。
文　治　早枝殿。
おかん　文治樣。
文　治　お別れ申しませう。
おかん　ようお出でなされました。
（ト唄になる。文治橋懸りへはひる。野分姬おかん奥へはひる。後合方になる。奥より要助おくみ、せり合ひながら出て、）
おくみ　もう堪忍してたもいなう。
要　助　イエ〳〵存じませぬ〳〵。
おくみ　モウこちらへてたもいなう〳〵。
要　助　アヽまうし、あんまり傍へよつて下さりますな。何ぢややら阿呆らしい。いかにわたしが根が騙しよい者ぢやと云うて、あんまりいゝ樣になぶり物にして下さりますな。何ぢややら、あた〳〵〳〵阿呆らしい、あた忌々しい、あたとんくさい、腹が立つて〳〵、

なるこつちやない。(ト種々腹立てる。)

おくみ　これ要助いなう。

要　助　何で御座りまする。

おくみ　誰がわが身をなぶるぞいなう。

要　助　誰であらうと銘々の心に問うたがよい。イヤそなたより他に可愛いゝ者はない、末は夫婦になつてくれいの、何のかのと、ほんにようアノ可愛いらしい口元から、大きな嘘が言はれたことぢや。あたとんくさい。この煙草盆の煙管は一ッも通るのはない。ほんにどこやらの、いたづら娘のど根性と同じことで、エヽあたけたいのわるい。阿呆らしい。(ト腹立てながら煙草盆引きよせ飲む。)

おくみ　とつともう何ぢややら、めんめたつたひとり腹立てゝ、エヽ何かいなう。アノ山崎屋勘十郎様と今日、祝言さすと云ふこと聞いたに依つて。

(トこの中法界坊立聞きして種々腹立てる。)

要　助　ソレ、な、問ふに落ちずと云へば語りに落つると。夫程よう祝言の事を知つて、何故今まで私に隠しては御座りました。

おくみ　サイナウ、わしも漸々今日聞き始め、父様にそれを聞くとびつくりして、そなたがおぢやつたらちやつと知らさうと思うて、これこの様に文まで書いて持つて居る。マア疑ひ晴らしにこれを一寸讀んでたもいなう。

(ト渡す。法界坊色々思入れあつて。)

要　助　知りませぬわいな。又これで私を釣るのかえ。この様なわなに掛かる事は、マアよしに致しませう。

(ト文をほる。法界坊拾ひ、懐へ入れる。)

おくみ　要助、そりやあんまりぢや〳〵〳〵。あんまりぢやわいなう。(ト取付き泣く。)

要　助　何があんまりで御座りまする。今旦那さんの仰しやるには、そちを今呼びにやつたは娘おくみを勘十郎と、爰で後に内祝言さゝねばならぬ。それに付いて祝言の印に來た細刷毛目といふ茶碗の代りに、此方からも又鯉引出として、此鯉魚の一軸をやらねばならぬ故、持つてこいと云付けて持つて來たかと仰しやる。道理こそ此掛物を持つて來いと仰しやつたは、祝言の座敷に掛ける床掛の、此一軸で御座りましたかな。

(ト法界坊うまい〳〵と云ふこなしあり。)

おくみ　さいなう。それぢやに依つてそなたがおぢやつたら、こんな事を談合せうと待つて居るのに、よその美しい娘をとらまへて、そして此様にあちらこちらに、エヽそつとモウそりやわが身、胴慾ぢや〳〵わいなう。

要　助　そりやお前、よい拔句といふものので御座りまする。內祝言のあるといふ事、お前が知らぬと云ふ様な事があるものか。それに、美しう髮結うて仕廻ひして、悦び勇んで祝言しに來るといふは、あた、お好様な。其おすき様に私は、髄抜きに會ひましたわいな。

おくみ　それでもと〻様がわしに隱して、何やら芽出度い事があるとばかり云うて。

要　助　イエ〻、何にも云うて下さりますな。

おくみ　これ誓文神かけて。

要　助　存じませぬ〳〵。

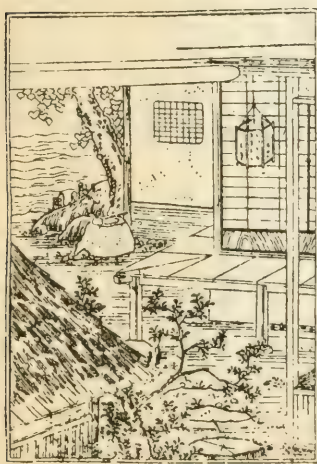
(トこの中、法界坊そつと掛物の箱をとり、釣鐘の幟をはづし、箱へ入れ、戴いて懷へ入れツイとはひる。)

おくみ　これ、本眞ぢやわいなう。誓文、今日の事は眞實。

要　助　ヲツトその眞實もモウ喰べませぬ。知りませぬぞえ。云うて下さりますな。腹が立ちまするると云うたはお前の心を引いて見ようばかり、逢うから疑心は晴れましたわいなァ。

おくみ　ヤアそんなら疑心は晴れたかや。

要　助　お前の心は逢うから存じて居まするもの、疑うてよいもの

文化五年繪入根本春景河原茅所載大七の場面

で御座りますかいなァ。
おくみ　アノ眞實疑ひ晴れたかや。
要助　とんと日本晴で御座りまする。
おくみ　ヲヽ嬉し。
（ト抱付き、野分姫膽病口の葭簾の中より覗き見て腹立てる。おかん種々なだめ留めて居る。山崎屋勘十郎よい衆の旦那のなりにて出る。後より甲斐絹の風呂敷包持つて男一人付いて出る。この態を見てびつくりする。男に囁き、先へはひらせ立聞きして居る。）
要助　時にまうし御寮人様、お前様にも兼てお話し申しました此鯉魚の一軸は、私が種々尋ね求めまする家の重寶。又勘十郎様のお手に入つては何かの障り、どうぞこつちへ受戻しまする様、旦那様へ宜しう御願ひなされて下さりませい。
おくみ　そりや合點ぢやわいなう。
要助　その代りに此恩は、一生忘れは致しませぬ。これで御座りまする。
おくみ　これ、勿體ない、女房のわしに何の禮云ふ事があるぞいなう。
要助　何仰しやるやら、それが勿體なう御座りまする。あなたはお主様、私は家來で御座りまする。
おくみ　又主ぢやの何のかのと、こちや疾うから女房ぢやと思うて居るのに。エヽさつきの娘御様へ心中立てゝ、それで女房ぢやといやらぬのぢやな。
（トこの内勘十郎腹の立つ思入れあつて、床の間の掛物をはづし、箱の掛物と摩替へ、ツイと奥へはひる。）
要助　何のマア滅相な。
おくみ　そんなら女房と云うてたもいなう。
要助　サアそんなら女房どものおくみ様。
おくみ　こちの旦那さん。
要助　女房ども。
おくみ　旦那さん。
（ト顔見合せ、一寸抱付き、庄八をかしき身振りする。）
おくみ　さうして、アノ要助の掛地を受けやるには百兩といふ金が要るが、そなた其金があるかや。
要助　エヽ。
おくみ　その金を拵へる心當があるかいなう。
要助　サアその金の心當は。（ト當惑の態。）
庄八　それ百兩。（ト財布共百兩取り出す。）
おくみ　ヤアそなたは。
要助　庄八殿。
おくみ　此百兩の金を貸して給るかや。
庄八　要助、わりや御寮人様をいぢめ

たな。

おくみ
要助　アヽこれ。

（トおくみも思入れあり。庄八小聲にて。）

庄八　コリャ御寮人樣をいぢめたなア。ハテ大事ないわい、隱すことはないぞ。こゝらは番頭ぢやわいの。二人が素振り、呂律でも一寸睨んだらさす物ぢやない。誰ぢやと思やる、番頭ぢやわいの。一體今日の內祝言、マア此番頭が不得心ぢや。あの勘十郞樣というてあんまり心の善い人でもない。コリヤこれ未だ御寮人樣の難義ぢやと思ふ矢先、此金は尾張町の兩替屋から、爲替の百兩、マア當分見合して、其鯉魚の一軸を質受すりや、聟引出が間違うて、今日の內祝言も延引すると云ふ物ぢや。すりや兩方よしの鎹思案ぢやと見た故、番頭の情と云ふもの。

要助　何にも云はぬ。忝い。そんなら此金を暫く貸してたもるか。

庄八　ヲヽ知れた事いなう。遣や、遣はしやれ。だが念の爲一本書いてたも。

要助　書けとは何を。

庄八　ハテ大枚の百兩と云ふ金、預けたと云ふ貸手形を書いてたも。

要助　エヽ成程〳〵。（ト硯取つて書きかける。）

庄八　必竟これには及ばぬ事ぢやけれども、此金はわが身も知つて居やる通り、旦那の金ぢやに依つて、おれが自由にすると思はれては濟まぬに依つて、さう云ふ證文があれば親方への言譯天道への潔白。これといふも根が正直なこの庄八ぢやに依つて、かうして置いては氣が濟まぬ。イヤモウ一寸書いてさへたもれば、直に後は引破つて捨てるに依つて、わが身も氣遣ひはなし。

（トこんな事しやべつて居る間に書いてしまふ。）

要助　これでよいか見て下され。（ト渡す。庄八取つて、）

庄八　ヲヽこれでよい〳〵。かうして置けば互の念ぢやてなう。

要助　イヤモウ、此恩は一生忘れぬぞや。

庄八　なんのいやい。（ト云うて居る中およし出て、）

およし　まうし〳〵、要助樣、旦那さんがお呼びなされてで御座りまする。早うお出でなされませいなア。

庄八　それ要助、旦那殿が呼ばしやる。早う奥へ行つて右の事もナウ合點か。

要助　そんならわしや奥へ行くぞや。おくみ樣庄八殿後に。

庄八　ハテマアいきやいなう。

およし　サア御座んせいなア。
(ト唄になる。要助およし連れてはひる。庄八おくみ殘り、合方になる。庄八こなしあつて種々をかしみある。)
庄　八　おくみ様や、お前要助に百兩貸してやつたが嬉しいかえ。
おくみ　嬉しいわいなう。
庄　八　お前が嬉しけりや、わしも猶嬉しいわえ。
おくみ　この上永うそなたを賴む程に、どうぞ要助と早う夫婦になる樣にしてたもや。
庄　八　エ丶何ぢやしてたも。
。　〳〵た
。　、大事
。又　古いぞえ。
かえ、　。
(　。おくみびつくりして、)
おくみ　これ庄八殿、何しやるぞいの、
こゝ放しやいなう。
庄　八　イエ〳〵放さぬ〳〵。
おくみ　アレエ〳〵〳〵。
庄　八　それ〳〵アレエは古いと云ふのに。
おくみ　夫でもわが身惡い事ばつかり。
庄　八　シイ〳〵大きな聲して何ぢやいなア。恩のある庄八ぢやぞえ。惡い事はせぬ、よい事をするのぢやわいなア。
お前マアよう物を思うて見たがよい。大枚百兩と云ふ金を要助に貸してやつたも、お前にこのお禮を受けうと思ふばかりぢやぞえ。それに何ぢややら、ひんしやん〳〵と、要助ぢやとて別に男ぶりに優り劣りはなし、ちつと、か
、　がするといふ分の事
ぢやわいなア。　ずつとわしが
方に風味があるぞえ。おくみ樣、何う
ぢやいなア〳〵。
おくみ　エ丶つつともう惡い事しやると噛みつくぞや。
庄　八　噛付いてお呉れ、心中に歯形入れてお呉れ、紅粉付けてお呉れ。
おくみ　エ丶しつこい。アレエ〳〵。
(ト逃げ廻る。法界坊奥より庄八さん〳〵と呼んで出る。庄八取違へ、法界坊に抱付き無理に口を吸ひ、顔見合せゑつく。)
庄　八　今の口はわれかいやい。エ丶、エ丶。
法界坊　ちつと嗽もしたがよい。人に得心も爲さず、無理無體に口々と。ても強い熱ぢや。エ丶丶丶。
庄　八　何ぬかす。うぬが口が、千兩やる程に吸つてくれと云うても吸はるものか。種々の處へうせて、思ひ掛けなう。そしてわりや葱汁吸うてうせたな。
法界坊　違ひ無し〳〵。今のを思ひ出しや出すほど。エ丶丶丶丶。

庄八　エヽ忌々しい、大事の處へ。早
う奥へうせう。
法界坊　イヤお前を勘十郎樣が尋ねてぢ
やぞえ。そして彼の件の。
庄八　エヽづけ〳〵と何ぬかす。
法界坊　それでも、とつくりと談合して
置かにや。
庄八　ハテきよろ〳〵と。サアよい、
今奥へ行く。エヽとつくりと惡い處へ
うせやがつた。あつたら處をエヽ忌々
しい。
（ト唄になり、奥へはひる。法界坊おくみ
を見てにつこりと笑ふこなし。）
おくみ　エヽつつと氣味のわるい庄八、
これわしも一所に行くわいなう。
法界坊　ヲツト待つたり、おくみの君。
一處に行くわいなうとは、コリヤヲヽ
嬉しい。
おくみ　アレエ〳〵。

へ　　。法界坊
、又　　とし　り、い
やらしきこなし種々あり。）
おくみ　エヽ穢い、とつともう坊主だて
ら、あた嫌らしい、何のこつちやいな
う。
（ト種々腹立ち逃げうとする。留めて立ち
ふさがり、）
法界坊　どつこい〳〵、逃がさぬ〳〵。何
ぢや、嫌らしい、穢いとは胴慾ぢや
〳〵。何時やらであつたが、鉢開きに
出た時、お前の門へ立つた時、折しも
お前の表の格子から覗いて居て、御出
家樣ぢや、法施入れてたもと云うて、
ツイと内へ入らんした、其美しさ。念
佛が、ふつと見染めてから、阿彌陀樣
の顔も閻魔樣の顔も、皆お前の顔に見
えて、戻ると夢にお前が來て、嬉しやと

ば、　　氣味のわるい程
事ぢやないぞえ。これ出家に施
す事ぢやえ。何にも云はぬ。
し、マアわしが心の
たけを書いて置いた此文を、これ見て
お呉れ。
おくみ　エヽこんな物は知らぬわいなア。
（ト文をほる。又其文を無理に懷へ捩込む
と又取つてほる。）
法界坊　何ぢや、知らぬ知らぬとは胴慾
な、知らぬ合浦外ヶ濱、鬼住む里の勤
めでもお前樣ならするわいなア。
おくみ　アレモウしつこい。わるい事し
やると父樣に告げるぞや。
法界坊　何ぢや告げる、告げるとは胴慾
な、告げる合浦外ヶ濱鬼住む里の勤め
でも。
（ト云ひ〳〵付廻しになる。おくみ逃げし

なに煙草盆の灰を撒く。法界坊に掛かる。掛けられながら付廻す。よき處へ甚三市兵衞道具屋の拵にて、釜を繩にて括り出る。)

甚　三　今日の仕廻物は儲物であつたなう。

市兵衞　イヤモウ近年の掘出し物で御座りました。

(ト葛籠を背負ひ、古道具持ち出る。)

甚　三　一軒茶屋ぢや。ちと休まうかい。

(ト云うて居る中、おくみ漸々奥へ逃げこむ。法界坊うろたへ甚三に抱き付く。)

コリヤ何ぢやいなう。

(トびつくりする。法界坊もびつくりして奥へ逃込む。)

今のは何ぢや。

市兵衞　狸ぢやなかつたか知らぬ。

甚　三　イヤ人は人ぢやが、日暮紛に抱付いたのでびつくりした。

市兵衞　私も又何ぢやと思うてびつくりした。

甚　三　とつと膽を茶種にした。時に市兵衞殿、こなたも重たからう。何さんせ、この中のがらくたや笠や下駄は、此處な端の道具場へ、おれが云ふというて預けて、葛籠ばかり持つて戻らんせ。わしや此處にちと用があるに依つて、閑が要つても大事ない。ゆるりと居て下んせ。

市兵衞　左樣ならさう致しませう。ヤレ〳〵それは助かつた。(ト云ひ〳〵、はひる。)

甚　三　ゆるりと休んで御座んせや。だんないぞや。(ト後見送り、)ア、今日は大分いゝ儲けがあつた。時に今の狸は何であつた知らぬ。(ト云ひ〳〵、法界坊が落して置いた文を拾ひ、)何ぢや。「おくみの君樣參る。法界坊より。」ハヽヽヽハヽ、今のは狸坊主めが色事ぢや。あの樣なものに相手になる女子があるとは、何樣色の世の中ぢやなア。(ト奥ばた〳〵する故隱れる。)

勘十郎　イヤ濟まぬぞや〳〵。サア譯立てゝ貰ひたい〳〵。

(トわめき出る。後より權左衞門庄八太郎作付いて出る。)

權　左　ハテ扨、其樣に聲高に云はしやるな、おれも永樂屋權左衞門ぢや。逃げも走りもしやせぬ。譯立てる品なら立てる程に、靜かに云うたがよい。

庄　八　左樣で御座りまする。御家中の勘十郎樣なり旦那樣なり、私は何にも存じませぬ事ながら、靜かに仰しやつても譯の立ちさうな事で御座りまする。

勘十郎　イヤ立たぬぞや。ヲヽ立たぬ〳〵。ずんと立たぬのぢやぞ。

太郎作　番頭さん、お前何にも知らんせぬか。

庄　八　何にも知らぬ。

太郎作　高がかうぢやわいな。祝言するを勘十郎樣が立たぬ〳〵と云はんす譯は、御寮人樣が祝言を嫌がつて、寄付きさんせぬに依つて、

。そこで立たぬ〳〵と云はんすのぢやわいの。

庄　八　何をおのれ、すつこんでけつかれ。

太郎作　すつこんだら猶立つまいぞえ。

庄　八　又うぬが。

（ト太郎作ちやつとすつこむ。）

勘十郎　庄八、おれが無理か尤か一通り聞いて貰はう。短うい へば權左衞門殿の娘おくみには、おれは逢うから惚れて居るわ。これが他家と云ふではなし、權左衞門殿に後取りと云ふではなし、一人娘のおくみ、殊におれとは從弟同士、互の緣ぢやと、仲人入つて聟に行てなり、貰ふなりと、約束した賴みの印細刷毛目と云ふ茶碗を遣つたわ。その代りには聟引出に、梁の武帝の書かれた鯉魚の一軸を、貰ふ筈に極めてあるからは、祝言を段々と催促すれど、イヤ今日の明日の明後日の、イヤ一昨日のと、人を蜘蛛か何ぞの樣に釣掛けて、今日祝言ささうと云うて此深川三界へ呼び付け廻つて、擧句の果には肝腎のおくみが腹が痛むの何のかのと、引摺りたい程引摺るわ。エヽ何かコリヤ一軸が惜しうなつたに依つて、聟入を變改の下拵へぢやな。この聟入を變改しては、山崎屋勘十郎が男が立たぬ。ほんにいふぢやないが、今吉原で市子屋の花里から五十兩の無心、多寡が一夜流れの傾城にさへ、言掛けられてはあとへ引かぬ氣質、此通りぢや。（ト云ひ〳〵懷より金財布を出し、）勘十郎贅はいはぬ、此通りの心底ぢや。おやまにさへも此通り。惚れて居るおくみ、女房に持つたらどの樣な心中立てうも知れぬ。かういふ眞實のある、男氣のあるおれを嫌がつて、親子ともに惡い出樣、可愛さが餘つて憎さが百倍、細刷毛目の茶碗も失ふとやら聞いたが、其茶碗も取返へす。サア茶碗なりと娘なりと、どちらへなりと、われが物さへ手に入りやよい。權左衞門殿、返事はどうぢやいなう。

庄　八　イヤもう承りますれば、勘十郎樣のが皆御尤で御座りまする。旦那樣コリヤどうで御座りまする。

權　左　イヤモウ段々勘十郎殿が御尤ぢやに依つて、せめて内祝言なりともささうと思うて、それで娘を連れて來た。

しかも掛地も持たせて來たは、全くこの權左衞門に如才は。

勘十郎　あるぞえ、ずんとあるぞえ。おれが目からは如才だらけぢや。

權　左　何でこの權左衞門に如才があるぞ。

勘十郎　これ、女房に貰うたおくみは、間男して居るわいなう。

權　左　ヤア丶。何といはしやる。

庄　八　ア丶勘十郎樣、いかに御一家の旦那樣ぢやと云うて、云はして置けばすはら〱と、何ぢや、御寮人樣が間男なされて御座る、滅相な。まうし、お姫御が何のその樣な、大それた事があつてたまるものか。但し夫には、何ぞ確な證據でも御座りまするか。

法界坊　ヲ丶その證據はこ丶にある。サアうせう〱。

（ト內より要助おくみを引立て出る。）

、一丁

れば、　、

、　、

、

。

引つかまへて來た。何とこれが證據にはなるまいかい。

權　左　スリヤ娘と要助が。（ト云ひさし、當惑のこなし。）

勘十郎　權左衞門殿、イヤ權左衞門、確な證據が出たぞや。假令この證據が出いでも、最前おれが來しなに抱付き、遂うに責は舉がつてあるのぢや。賴みを取替せば、おくみはおれが女房ぢやぞや。サア權左衞門殿、この勘十郎が世間へ顏が立たぬ。思案付けて貰はうかい。

（ト烟草盆引寄せのむ。庄八要助を引付け。）

庄　八　ヤイ二才め、知らなんだわい〱。ヤイうぬが御寮人樣をそ丶なかしたばかりで、旦那樣の御顏が立たぬ。おりやマア最前から勘十郎樣の手前、面目なうて〱。エ丶顏を上げぬわい。この正直な實義のある番頭庄八は、かう云ふ不埒な惡者とは今まで知らなんだ。今までは蔭へなり日向へなり、女郎狂ひ引負から、大賭博打つ事までも隱して居たが、腹が立つわい。モウ傍輩の誼も、御內方の難儀御家の瑕には代へられぬ。さういふ畜生の樣なわれに大枚の百兩、取替へて置く事はない。最前貸した百兩の金子を返せ。

要　助　ヤア。

庄　八　ヤアとは。最前の金返へせいやい。

要　助　サアそりやあの掛物を。

庄　八　ハテ掛物も化物も要らぬわい。この百兩を。（ト懷へ手を入れ、財布を引

き出し、）これ程持つて居りながら、太い奴ではあるわい。待て〳〵、中を一寸改めて、（ト云ひ〳〵、財布の紐を解いて中を改め見て、）こりやそこな〳〵、この百兩は一兩もいけぬ。皆胴脈ぢや。

法界坊　どれ〳〵。ほんにコリヤ皆若衆の小判で眞鍮ぢや。

要助　ヤア〳〵、コリヤこれ最前誠らしう云うてこの樣な贋金を。

庄八　何ぢや贋金を、どゞどうした。

要助　こなた樣に借つた金を皆この樣な。

庄八　貸つた金は尾張町の封の儘ぢや。これ見い、封も違うてあるわ。コリヤ何ぢやな、正の金はそつちへしこためて、贋金をおれにおこし、旦那の手前をしくじらさうといふわれが惡工。そりやわれ聞えぬ、胴脈ぢやわい。われが事といふと惡い事も善い樣にして取做するこの番頭を、しくじらさうとは怖い者ぢや。サア千も萬もないわ、出さいでも出さす。サア足元の明るいうちにきり〳〵と出せ。

おくみ　庄八、そなた、モウ餘り。

庄八　ハテ、われがさし出る所ぢやない、默つて居い。サ出さぬか、われや出さぬと痛い目するぞよ。

要助　これ庄八殿、そりや胴慾ぢや。わしやこの樣な事した覺えはない。知らぬ〳〵。

庄八　知らぬ者が、借る時に改めもせず、今になつて百兩の金をなぜ此樣な胴脈になした。

要助　サアそれは。

庄八　それはとは、爰な大盜人め。大事な御寮人をせしめやがつて、また大それた騙り事。うぬが樣な奴は。（ト割木を下げ、）此まきさつぱで、かう〳〵かう。

（ト打据ゑる。太郎作出て留める。）

太郎作　マア〳〵〳〵待たんせ。其金借とは要助樣ぢやない。

庄八　何を馬鹿め。要助でなうて金を借つた者が他に在るか。

太郎作　チヽ在る。

庄八　そりや誰ぢや。

太郎作　チ、おれぢや。

庄八　何ぢや、おれぢや。さうして、うぬ大枚の百兩といふ金を何にした。

太郎作　サアそれは。

庄八　それは。

太郎作　そりや、アノ、何々それ、その百兩は。

庄八　その百兩は。

太郎作　饅頭買うて仕舞うた。

庄八　大たはけめ。

（ト割木にて毆る。太郎作アイタヽヽヽ

と逃げてはひる。)
勘十郎　エヽ手ぬるい。庄八、間男ひろいだ毛二才め、ぶち殺して仕舞やいなう。
庄八　合點で御座る。
法界坊　どれ、愚僧も手傳うてやらうわい。(ト踏みのめす。)
庄八　サアその金の在處ぬかせ。
要助　何の〳〵誓文。
庄八　盗まぬ者がなぜあの胴脈と摩替へた。
要助　ぢやと云うて。
法界坊　惚手の多い此娘
つた。
要助　何のマア、そんな事を。
庄八　贋金の言譯あるか。
要助　サアその金は。
勘十郎　間男の言譯があるか。
要助　サア。

勘十郎
法界坊　サア〳〵〳〵。
勘十郎　言譯なくば踏殺せ。
庄八
法界坊　合點ぢや。
(ト法界坊庄八打擲する。この間要助が着物所々引裂く。よき處にて甚三出て、要助を囲ひ法界坊を取つて投げ、庄八を捩上げる。)
庄八　アイタヽヽヽ。コリヤ息がはずむが、どうするのぢや。
甚三　イヤどいつでもごんせぬ。要助が請立てた道具屋の甚三、道具甚でごんすわいの。(ト取つて投ぐる。)
要助　ヲヽ甚三殿、よい處へよう來てたもつた〳〵。(ト取付き泣く。)
甚三　サア〳〵よう御座りまする。こな樣は何にも構ふ事はない、樣子はあらまし聞きました。もう出ようか〳〵と思うて居たのぢや。マア後へよつて御座りませ。

(ト介抱する。法界坊する〳〵起きて、)
法界坊　アイタヽヽヽ。ヤイ爰な馬の骨め。かけも構はぬ處へ出さらして、此尊い名僧知識長老をすんこんころりよいさと、斷りなしになぜこんな目に合はした。(ト起上がり、甚三を見てびつくり。)コリヤ途方もない男が出たな。
庄八　甚三、わりや卑怯な者ぢやぞよ。投げるなら投げると、なぜあたまから斷りはいはぬ。うつかりとして居る者を、すんころりとなぜ投げたのぢや。
甚三　ハテやかましう云はんすな。今のはお前方を投げたのぢやない。裁人に入つたのぢやわいの。
庄八　何ぢや裁人ぢや。
甚三　番頭さん、要助はわしが請人に立つて、權左衛門樣の處へ奉公におこした。又惡い事があるなら、請人の役、マア一番にわしに答がありさうなも

の。それに又何ぢや、若い人を人中で打つたり踏んだり、目でも廻したらこな様ざうする。

庄八
法界坊　ヤア。

甚三　わしが一走り、恐れながらと喰(くら)はしたら、こな様達は下手人。

庄八
法界坊　ムヽ、サそれは。

甚三　それぢやに依つて、一寸裁人にはひつたのでごんすわいの。

庄八　ハテ裁人にしては、痛い裁人ではあるわいの。

法界坊　イヤ裁人、面白ないぞよ。裁人なら又この名僧知識長老を、なぜ狗(えのころ)見る様に、首筋つかまへて取つて投げた。

甚三　うぬは取つて投げたばかりぢやない、叩殺しても大事ない。

法界坊　殿方様もお聞きなさい、こいつ途方もない事を申しまする。(ト見物へ云ふ。)何で又この名僧知識を叩殺しても大事ない。

甚三　コリヤ、御寮人様と要助の、間男の證人ぢやないか。

法界坊　ヲヽ證人ぢや。

甚三　さうして、何を見付けて證人に立つたのぢや。

法界坊　ハテこいら二人、　　　、これこの
て、　　　　　　たに依つて、
證人に立つたが何とした。

甚三　御寮人様が要助に何ぢややら御用があつて、園で其用を云付けて御座つたが不義間男か。

法界坊　ヤ。

甚三　御寮人様、要助にあなたは何ぞ御用があつてナ、園(かこひ)の間で其用を云付けて御座つたで、御座りませうがな。さうで御座りませう。ムヽさうであらう。それ見さつしやれ、云付けて居たと仰しやりますか。何と又、主(しう)が家來に物を云付けて居るを間男なら、世界に女房や娘のある家(うち)へ、手代奉公に行く者は一人も御座りますまいかと、慮外ながらこの甚三、ハイ左樣かと存じまする。

勘十郎　テモこりやみす／＼。

甚三　サアたつて間男ぢやと仰しやりますと、聟樣お前のお顔が立ちませぬ。お前のお顔が立たにや親旦那のお顔も立たぬ。どう廻つて、御緣の妨げになりますまいものでも御座りませぬ程に、あなたはマア、默つて御座るがよう御座りまするかと存じまする。

勘十郎　エヽこれ、おくみと緣が切れるが悲しさに何にも云はぬぞよ。命冥加な毛二才め。

甚三　イヤモウ間男の曇晴れたら淸淨潔白なおくみ樣、要助にも科はないぞ

ゑ。いかに番頭の高下ぢやとて、請人にも答へず打擲するとは、ちと出來過ぎかと存じまする。

庄　八　ム丶、そりやアノ。（ト庄八氣味わるがる。）

甚　三　まだ云ひ分が御座りまするか。坊樣、貴樣名僧知識の身を持つて間男の證人に立つて、手傳うて要助を打ち打擲しても大事ないか。

法界坊　サアそりやアノ。

甚　三　そこで叩殺しても大事ないというたが、この甚三が誤りか。

法界坊　御尤。

甚　三　よもや言分はあるまいがな。

法界坊　ム丶、おつと思ひ出したぞ。まだ證據がある。

甚　三　ヲ丶、ぐつと上手の證據があります山の松茸ぢや。庄八さん。

庄　八　エ丶そんなら證據を最前から、きり／＼出せばよい。

法界坊　今のまごつきでとんと忘れた。（ト最前の文を出す。）「思ひ忘れぬ君樣參る。焦るゝ身より。」

（ト要助おくみびつくりして取らうとする。）

何と動きはとれまいがな。「思ひ忘れぬ君樣參る。焦るゝ身より。」コリヤおくみから要助へやる文、最前ちやんといがめて置いたが、ようしたものか。何とこれでもよい男、證據にはならぬかい。サア大きな聲して讀んで貰ふ。サアどうぢや／＼。（ト甚三に渡す。）

甚　三　そんならこの樣な確な證據が出るからは、いよ／＼間男に違ひないわい。エ丶これ見下げ果てた不義惡戯。（ト法界坊が落せし文と摩替へる。）私さへ腹が立つて／＼ならぬもの、聟樣は猶で御座りませうなア。

勘十郎　猶の段か、猶から上だわい。

甚　三　左樣で御座りませう。何と此處で讀んで御覽じませぬか。

勘十郎　憎さも憎し、讀んで見よう。（ト文を受取る。）

法界坊　隨分高聲に、大音上げて讀んで御覽じませ。

勘十郎　何ぢや、きたない手ぢや。エ丶、「雲に掛橋霞に千鳥、及びないとて惚れたが因果にて御座候。」

庄　八　エ丶ほてくらしい、あた忌々しい。

勘十郎　ヲ丶さうとも／＼、忌々しい。エ何ぢや。「因果にて候。貴女樣のお姿を見る度毎に、思の種寢ても覺めても戻つても、唯忘れぬ面影は宗玄が庵室の場もあきれ果て／＼。」

法界坊　ヤア丶丶。

（トびつくりして、懷を探し、種々あがく

こなし。甚三をかしがる。)
勘十郎「あはれ不便と思召し
お志、後の　　し、出家に
　悪うは報い候まじ。何も後生と思
召し叶へてくれの鐘〳〵しめしり〳〵。」
(ト法界坊術ながる。種々あつて、)
庄　八　ハテ扨これで無うてつまる物
か、黙つて聞いて居やいの。
法界坊　途方もない。これが黙つて聞い
て居られうものか。
庄　八　ハテ扨よいといふのに。
(ト種々術ながる。)
勘十郎　何を知つても知らいでも、讀ま
にや譯が知れぬわい。
(ト法界坊種々こなし。)
「たつた一度のお情が廣き無漏の御慈
悲と、觀音樣掛けて祈り〳〵。めでた
く〳〵。おくみの君樣參る。法界坊よ
り。」ヤアヽヽ。

庄　八　何事ぢや。どれ〳〵。(ト文を取
り、)「めでたく〳〵。おくみ樣參る。
法界坊より。」ヤアヽヽ。
(ト法界坊そろ〳〵向うへ逃げうとする。)
甚　三　これ〳〵坊さんどこへ。
法界坊　イヽエ一寸。
甚　三　一寸とは何處へ。
法界坊　ツイ小便しに。
(トころ〳〵這ひて行くを、甚三法界坊が
足取り、)
甚　三　可愛と思うてくれの鐘、どつこ
い〳〵、お前逃してよいものか、ぐつ
と上の證人ぢやないかいなう。
法界坊　マヽマアよいわいの。
甚　三　思うてくれの鐘。
法界坊　マヽマアよいわいの。
甚　三　おくみの君樣參る。こがるゝ法
界坊より。時にその法界坊とは誰やら
の事ぢやが。

法界坊　サレバ、わたしもどうやら聞い
た樣な名ぢやが。
甚　三　法界坊。
法界坊　法界坊。
甚　三　法界坊。
法界坊　ヲイ。
甚　三　アヽ此處に居る名僧知識ぢや。
法界坊　何のマア。
甚　三　名僧知識の身を以て、觀音樣掛
けてとは、ヲヽ出來まする。
法界坊　何の其樣な事を。(ト術ながるこ
なし。)
勘十郎　そんならこちらの肩持顔で、お
のれもおくみに惚れてけつかるな。
法界坊　ちつとばかりサ。
勘十郎　忌々しいづく入めぢやわい。
(ト突き飛ばす。庄八にこけ掛かる。)
庄　八　エヽ極道めが。
(ト又突きこかされ、眞面目になる。)

甚三　サア、おくみ樣と要助殿と不義
法界坊　間男か。
甚三　おくみ樣と要助とは間男ぢやな
いぞ。
法界坊　その通り〱。
甚三　何方も申分は御座りませぬか。
坊主め言分は無いか。
法界坊　エヽ奇體の惡い、いつそ、うぬ。
（ト割木にて叩きに掛かる。甚三引つた
くり法界坊を打据ゑる。花道へちやつと
逃げ）
何ぢやい、礫柱め。人を張子か何ぞの
樣に滅多無性に打喰はし、あた忌々し
い、あた痛い。この儘で濟まぬぞ。忌
忌しい。奇體の惡いぞ。高言が口惜し
くば、此處へうせう。ヤイ蜻蛉笹め、
アノ大たくら大馬鹿め、大泥坊よ、べ
ら坊よ、阿呆よ、うんつくめ、うせぬか。
腰拔けめ。（ト云ひ〱逃げてはひる。）
甚三　腕無の癖にようしやべる奴、口
から先へ生れ出たか知らぬ。サアこれ
から番頭さんぢや。要助さんに不義は
無いぞえ。間男では御座んせぬぞや。
庄八　イヤ間男のあかりは立つたが、
要助は大騙りぢや。
甚三　ヤ。
庄八　騙りも騙り大騙りぢや。
甚三　何ぢや。要助殿を大騙りとは。
庄八　尾張町の僞替の金百兩といふ
物、かういふ胴脈と摩替つたからは。
甚三　そんなら騙りの金百兩が、胴脈
になつてある故。
庄八　詮議するは番頭の役ぢやぞえ。
ヲヽ番頭のお役目ぢや。盜人の名が付
きやどいつでもどなたでも、叩殺して
なりとも、吟味するが、言分があるか
いやい。言分があるなら金出して置い
て云へ。サア要助、出せ。出さぬか。
出さぬぢや此まきざつぱで、うぬをぶ
ち殺して出さして見るぢや。
（ト行かうとする。權左衛門とめて、）
權左　庄八待て。
庄八　イヤ大枚の百兩の金の詮議を。
權左　その大枚の百兩の金は、どこか
ら出た金ぢや。
庄八　ハイ尾張町の紀伊國屋から僞替
の金。
權左　ぢや、親方の大枚の百兩といふ
金、おれにも斷らず、コリヤ內證でな
ぜ要助に貸した。
庄八　エヽ。
權左　サア詮議と云ふは爰らが詮議ぢ
や。尾張町から戻つた金が質物であら
う筈もなし、持つて戻つて貸したはわ
が身。そんなら庄八、そなたにも疑ひか
かるまい物ぢやないコリヤ懸合と云ふ

ものぢや程に、マア其樣にわれ一人騷がずと待てと云はば、マア〳〵待てやい。
庄 八 そこで御座りまする。さうおつしやらうと思うたことぢや。そこらをぬかるものかいナ。番頭ぢやわいナア。最前要助が云ふには、急に金の入用がある程にどうぞ其爲替の金を其儘で貸してくれと、血程な涙をはらり〳〵とこぼして頼む故、不便と思ふ傍輩のよしみ、然し此百兩は親方の金ぢや、おれが自由に貸しては天道が恐しいと云うたら、若し旦那がやかましけりやこれで言譯してくれと、確に借りたと云ふ要助が自筆の證文を取つて置いた、ハイ證文取つて置きました。則ち是で御座りまする。(ト懷より最前の一札を出し、)
甚 三 どれ。
(ト庄八が證文取りに掛かる。一寸取直し、)
庄 八 どつこいそれから御覽じませ。何と動きは取れまいがな。かういふ證文なして、後で胴脈になつた事はおれや知らぬ。親方の金を我儘に遣はぬと云ふ證據は、此證據文ぢや。何ぢやおくみ樣、手を合はしておがまんすは、此證文がほしいかえ。どつこい取らうとは横着な。われつらければ人又われにつらし。何とようした物か最前な、それ禮をおつしやらぬ故此通り、ナア魚心あれば水心あり、水心あれば魚心。
(トこんな事しやべり居る內に、おかん出て釣提燈を放し中の蠟燭を出し、證文を燒く。)
アツヽヽヽアヽヽヽ南無三證文が燒けたハテ面妖な。
(ト種々うろたへる。甚三笑ひ思入れあり。)
甚 三 番頭さん、要助に貸したと云ふ確かな證據はどこに御座りまする。
庄 八 サア其證文は。
甚 三 其證文は。
庄 八 燒けたわいの。
甚 三 燒けたと云うて事が濟ますか。
庄 八 サアそれは。
甚 三 確かな證據は。
庄 八 サア。
甚 三 どうぢやいな。
庄 八 ヲヽある。證據がある。
甚 三 何ぢや。まだ證據あるか。
庄 八 やけどが證據ぢや。
甚 三 何を馬鹿な。
庄 八 テモ面妖ぢや。
(トあきれる。勘十郎おくみが手を取る。)
勘十郎 サアおくみ來い。
おくみ エヽ。
勘十郎 みす〳〵知れた不義間男もないと云や、ないにしてやるも祝言がした

いばかりぢや。徒らかわかにや約束の通りおれが女房、奥へいて祝言する。サアおぢや。

（ト引立てやうとする。權左衞門とめて、）

權 左　ハテ錺殿、急く事はない。娘に徒らがないからは、祝言さゝいで何とせうぞいの。

おくみ　イヽエヽ、ナアとゝ樣。

權 左　ハテマア何にも云やんないの。

勘十郎　間男の言譯は立つにもぜよ、此樣な奴をおくみが傍に置くは、正眞の猫に鰹節。

庄 八　さうで御座りまする。證文がなうても、何がなうても、爲替の金が矢餅百兩は、要助が引負も同前。

勘十郎　權左衞門殿、そして其仕廻りはどう付くのぢやナ。

權 左　甚三殿、聞かつしやる通りぢや。最前からの樣子、何もかも白い黑いはよう知つて居るけれど、何分百兩の金が失うたれば、差し當つて誤りは要助、請人なれば當分そなたに預けませう程に、さう思うて下され。

甚 三　成程御寮人樣の內祝言をまじまじと見ても居にくからう。若し短氣な事があつては。（ト思入れ。）左樣なら要助殿は預りまして御座りまする。又金子の事は私がきつと埒明けまして、あなた樣に御損は掛けませぬ程に、左樣思召して下さりませ。サア要助殿、立つた立つた。

要 助　イヤ／＼百兩の金はかたられ、その上この樣に打擲にあひ、何と此場が。

甚 三　ハテ扨大事ない、大事御座んせぬ。おれが居る。追付け何もかも譯立たして見せませう。（ト思入れ。）とは云ふもの。そしてマア着物を此樣にエヽ打擲するとは。（トわが着物を脫ぎ襦袢一つになる。）サア是を着替へさつしやれ。（ト着替へさし、）左樣なら、もう連れて參じまする。

權 左　もう行かしやるか、必ず短氣の出ぬ樣に、（ト思入れ。）氣を付けてやつて下され。

甚 三　お情深い旦那樣の御一言。サ泣くことはない、お禮を申した／＼。

要 助　エヽ有難う御座りまする。（ト泣く。）

勘十郎　エヽうぬ、助けて行なす奴ぢやなけれど、內祝言の悅びに助けてこます。命冥加な泥坊め。

權 左　ハテよいわいの。サア娘庄八來い。

庄 八　甚三、金の濟まぬ內、おれが毎日催促ぢや。さう思へ。

要 助　エヽおのれを。

（ト行かうとする。甚三留め、せゝら笑ひ

する。)

おくみ　これ要助。

(ト呼ばうとする。權左衞門引き廻はしとめ、双方一時に、)

甚三　旦那樣。

權左　甚三殿。

甚三　おさらばで御座りまする。

權左　よう御座つた。

勘十郎　どりや奥へ行て祝言せうか。

(ト唄になる。この一件皆々はひる。甚三要助殘る。おかん出る。)

おかん　兄樣。

甚三　妹。

おかん　危うい難儀の證文を。

甚三　そなたの氣轉、出かしやつた〳〵。が何やかや氣味のわるい事だらけ、若し要助殿を宿位之助と云ふ事が知れて、常陸の大掾より討手來らば、兼て七郎樣と申合せし通り、隅田川から舟にてすいとコリヤ。(トさゝやく。)

おかん　そりや合點で御座んす。そしてアノこれ。(トさゝやく。)

甚三　こんなら姫君が、これは又かてて加へて、(ト思入れ。)そりやこれ。(トさゝやく。)

おかん　合點で御座んす。

甚三　早う行きや。

おかん　アイ。(ト走りはひる。)

要助　思へば〳〵。(ト奥へ行かうとする。)

甚三　ハテ扨マア御座りませ。

(ト緇からげの釜を提げ、繻袢の上に帶して要助連れはひる。)

返し道具

造り物、一面の松になる。向う黒幕石燈籠のあしらひ、火ともしあり。庄八駕籠舁二人かごをかゝせ出る。

庄八　二人共に道々話した通り合點か。

かごかき　そりやのみ込んでをりまする。

庄八　お娘を盗んで來るまで、待遠にあらうが、あの鳥居の前で待つて居て下さんせ。

かごかき　合點で御座りまする。(ト二人はひる。)

庄八　そりやと云うたら直ぐぢやぞよ。よいか。うまい〳〵、何でもマア素直では行かぬ。娘を連れて、ツイ盗んで置いた爲替の百兩で、おくみと二人世帶して、水もくませよ手鍋も提げようし、夏も火鉢で鳥かけ山の時鳥、さらば君の初音を聞いて來う。

(ト唄になり、悦び〳〵はひる。法界坊そろ〳〵出て來る。)

法界坊　エヽいま〳〵しい。惜つたら處へ、あの甚三めとやらが出やがつて、ちやつちやむちやにしやがつた。時にお

くみにおくみ、コリヤ一ツ事ぢや。何でもおくみを得しめる事、手のびにして置く間も聟めが居るは定よ。何でも今夜中にかたけてのきたい物ぢやが。

（ト云ふ内、野分姫をおかん連れ出る。）

野分姫　自らをどこへ連れて行きやるぞいなう。

おかん　サア、折角要助樣にお會はし申さうと存じまする内、最前の騷動、マア一旦文治樣にお渡し申し、又重ねてお會はし申しませう。私が思案が御座りまする、マア今宵はお歸り遊ばされませいなア。

野分姫　イヤ〳〵たとへ此身はどうなつても、松若樣と離れはせぬ。内へ連れてなう。

おかん　サアさう思召すはお道理なれど、要助樣は日蔭の身、あなたと一所に置きましては、まさかの時に足手まとひ、マア一旦旅宿まで。

野分姫　イヤ〳〵往ぬる事はいやぢや〳〵わいなう。（ト泣く。）

法界坊　これ〳〵姉樣、お前方は最前あの二軒茶屋で、要助殿と話して居た衆であらう。要助殿を尋ねるのかえ。

野分姫　アイ其要助殿を尋ねる者で御座んす。こなさん會うてぢやあつたかえ。

法界坊　會うた段か、たつた今、アレ〳〵あそこの辻をかうまがつて。

野分姫　あそこの辻を。（ト行かうとする。）

法界坊　ヲツト待つたり。行て會ふと思うても埒あかぬ〳〵。

野分姫　そりや又なぜえ。

法界坊　要助はあの永樂屋の娘と念比して、互に死ね死なうといふ深い中ぢや。今も手に手を取つて歩き〳〵云ふ事を聞けば、イヤもう舌たるうて煩うてけながうて、一向目當てゝ見らうゝ物ぢやない。エヽ、話したいなア聞かしたいなア。

野分姫　これイなう要助樣が何と仰しやつた。早う云うて聞かしやれなう。

法界坊　云ふまいと思へば、お前が其樣に尋ねるのを、隱せば罪になるがいやさに話して聞かすぞえ。今爰を二人連で、手を引合うて歩き〳〵、おくみが云ふには、お前は國から美しい許婚の娘御が尋ねて御座んしたに依つて、もうわしは秋風ぢやあらうと云へば、要助答へて、イヤあの許婚の娘は確にくさい。

野分姫　エヽ。

法界坊　イヤサ遠い所から來た故に、ひなたくさい。日本はおろか唐天竺を尋ねても、女房に持つ女はそなた一人ぢやわいなうと云ひさま、背中をほんと叩けば、娘はよだれをたら〳〵と出して、そりや要助樣ほんの事かえ。何の嘘を云ふものかと云ひさま抱付き、そ

のしつこさあつかましさ、
、愚僧が
ず、　、　りる
十。
法界坊　猿猴の梢渡りか、三百度
知らず。
野分姫　ヤア〳〵。
法界坊　本かいなう木曾街なう、江戸街なうではあるまいし、愚僧が嘘を付くものかいなア。
（ト野分姫種々腹立てる。）
野分姫　そりや、マアほんかいなう。
おかん　ハテ扨、マアお姫様、人も尋ねぬ問はず語り、悋氣から付けこんで、要助様の御身の上を聞き出さうと、敵よりの廻し者。
法界坊　ヤア。
おかん　構はずとサアお出でなされませ。
（ト合方になり野分姫を連れはひる。）
法界坊　これ〳〵姐様、まだ云うて聞かす事がある。ヲヽイ。これ〳〵、殘り多い、要助が身の上聞き出すあつたら鳥を取逃がした。時に氣にかゝるはおくみぢや。どうぞ、そつと盗み出す魂膽がありさうな物ぢやが。
（ト内ばた〳〵する故に隱れる。庄八おくみを引立て出る。）
おくみ　これ庄八、わしをどこへ連れて行きやるぞいなう。
庄　八　どこへは何、それヲ、さうぢや。お前今宵聟勘十郎樣と祝言しては、要助へ立つまいがな。
おくみ　さうぢやわいなア。
庄　八　それぢやに依つて、お前を連れて駈落するぢやわいなア。
おくみ　イヤそなたと駈落する事はいやぢやわいなあ。エヽそなたはなう。
庄　八　そんならどの様に云うても、おれが云ふ事は聞かぬのぢやな。
おくみ　知らぬ〳〵、知らぬわいなう。
庄　八　エヽしぶとい、さうぢや。（ト荒繩を出し縛る。）
おくみ　アレエ〳〵。（ト泣立てる。）
庄　八　やかましい〳〵。
（ト手拭を猿轡にして、無理に駕籠へ乘せ、荒繩にてくる〳〵と卷く。）
六兵衞〳〵、太助〳〵。エヽ又酒くらうてどぶさつたさうな。どれ一走り呼んで來う。これその間、手が痛からう、辛抱してちいとの間待つて居や。どりや駕籠舁め呼んでこうか。
（ト走りはひる。法界坊後見送り、うま〳〵とかごをほどき、おくみを出し、手拭の輪をほどく。おくみ聲を立て。）
おくみ　アレ又かいなア。
法界坊　又かいなアとは何ぢやぞいなア。愚僧は又あの樣な荒い事はせぬ。

眞實可愛いゝがな。爰で會うたのは福徳の三年め、　　　　　　。

（ト種々よろあふ中、市兵衛葛籠を背負ひ出て。）

市兵衛　エヽぐつたりと寢た中、この甚三樣は宮木屋にても無し、先へ往なつしやれたか知らぬ。甚三樣〳〵。

（ト云ひ〳〵來て、おくみと法界坊がもみ合う中へウント倒れる。おくみ法界坊びつくりして、おくみ逃げようとするを、捕へながら思案して、おくみを件のつゞらへ入れ紐をしめ、市兵衛を葛籠へ乘せ、最前の樣にぐる〳〵と卷き、葛籠を擔げうとする。奧ばた〳〵する故びつくりして樹隱れする。中より勘十郎、要助が一腰さして居るを捕へ、うせう〳〵と引きずり出る。）

勘十郎　ヤイ青二才め、うぬは最前請人に預けられた身をもつて、侍らしう脇差を差し、この邊りをうろつくは、エヽ何か、言交したおくみと、今宵祝言するに依つて、おれをどうぞせうと思うてうせたか、但し、おくみを擔げにうせたのか。エヽ何であらうと、おれが懷に金が五十兩ある故、嫌味を付けて、病付きしてうせたのぢやあらう。あの大盜人めが。（ト蹴る。）

要助　勿體ない、何のさういふ心で御座りませう。あなた樣も御存じの通り、覺えもない買金の惡名、その上、踏み打擲にあひ、何とおめ〳〵生きて居られませう。私も腹からの町人でも御座りませぬ。覺えない無實の難、庄八に逢うたら、たゞ一打恨み云はうと、差いて來たこの脇差、何のマアあなた樣を。

勘十郎　云ふないやい。そんな手練喰ふのぢやない。今宵祝言したら、腹が立つか。又腹が立つなら、此脇差を拔けやい。相手になつてやるわい。拔かぬかい。（ト足にて脇差を蹴る。）拔かぬか〳〵。何として〳〵めつたに拔けるもんぢやない。今わりや腹からの町人ぢやないと云うたが、そんなら以前は武士ぢやな。武士は何ぶしぢや。鰹節か辛夷の粉か、煙管の潰の雁首二才め。聞きや、うぬ百兩の金を盜んだも、此鯉魚の一軸を受け出さう爲とやら。コリヤ聟引出に貰うた。コリヤ見い。（ト以前の掛地を出し見せる。）此鯉魚の掛物は都吉田家の重寶。それを欲しがるおのれが素性、詮議のある奴なれど、今宵は赦してこます。何ぢや、ほ手を出してもじ〳〵と、この掛物が欲しいか。やりたいなア〳〵。

要助　まうし、其一軸を。

勘十郎　欲しいか。欲しか遣ろ。畢竟、おくみさへ手に入りや、此一軸はあつても無うてもぢや。品によつたら遣りもせうが、要助この掛物の替り、われをおれが存分にするが合點なら、いかにも此一軸をわれにやろ。

要　助　イヤモウ一軸さへ下さりますならば、私が身はどの様になりましても、大事御座りませぬ。御存分になされてどうぞ、其一軸を。

要　助　よい。その様に頼むなら、此一軸はやらうが、その替りにはうぬをかうするわい。（ト付廻し引付く。）ヤイとほん笹め、ようおれが　　を、此聟様にも斷らず、うまい事ひろいだな。手入らずの箱娘を、おほこ〳〵と油斷して居る中に、手入らず所か、　　程に、　　したなア。その替りにうぬをかうして〳〵、腹の休まる程に喰はすのぢや。見れば見る程澁皮のむけた客なしやつ面、此顏をかう〳〵。男ひろいだ罪には、これがよいか〳〵。（ト種々惨い目にあはす。要助種々思入れあつて、男泣に始終泣く。）

要　助　サア〳〵、お腹立は御尤ぢや〳〵。がもうこの様になつた上は、どうぞ御了簡遊ばして、其一軸を私めに、御情で御座りまする、お慈悲で御座りまする。まうし〳〵勘十郎様〳〵、まうし〳〵。

勘十郎　よいわ、その様にとこ吠えて頼むなら、存分にした上、いかにも遣らう程にわんと云へ。

要　助　エヽ。

勘十郎　犬つら這ひになつて、わんと云うて此一軸を頂け。

要　助　左様なら。わん。（ト思入れ。）かう様で御座りまするか。

勘十郎　また云へ。

要　助　わん。

勘十郎　また。

要　助　わん〳〵。

勘十郎　また云へ、まだ〳〵〳〵。

要　助　わん〳〵〳〵〳〵。（トいひ泣く。）

勘十郎　ハヽヽヽヽヽ。大分よいわい、よういうた。とても の事に云ひ序でに、今度は笑うて見せい。

要　助　エヽ。

勘十郎　笑へやい、遣るわい、笑へやい。アノ笑つたら遣るぞ〳〵。

要　助　ハヽヽヽヽ、ハヽヽヽヽ。

（ト泣く笑ひ。）

勘十郎　よう笑うた。イヤ中々よう笑うた。偉いもんぢや。けうといもんぢや。

その褒美はこの一軸を、かう〳〵して遣ろわい。

(ト云ひながら、最前の釣鐘の縮圖を破る。要助は之を知らず、引裂くを見てびつくりし、思入れあつて。)

要　助　ア、これ、ア、。ヤ、、、、コリヤこなた大切な一軸を。

勘十郎　破つてしまうた。破つたが何ぢや。おれが物でおれが破つたのぢや。その面何ぢや。血相變へて反打つたは、われおれを何うするぞ。イヤサ、掛物を破つたら、おれをどうぞせうと思うてひこつくか。アノ大泥棒め。(ト踏倒す。)

要　助　もうこれまでぢや。

(ト拔いて切り掛かる。手早く留めて。)

勘十郎　コリヤ何さらすのぢや。悪心流の印可まで取つた勘十郎ぢや。わいらが手にあふ物かいやい。

(トこれより合方早めに、闇の立種々あり。兩人切合ひ、法界坊最前より覗ひ居て。)

法界坊　戀の敵の要助め、思ひ知つたか。

(ト勘十郎が刀を取り、間違ひにて勘十郎を切り、この立廻り種々。要助は我切つたかと思ひ、留めをし、勘十郎際立てる故、袖を口へ當てる。勘十郎袖を喰ひ破る。この中庄

繪入根本春景河原茅所載白髭の場影繪

八、六兵衛太助を連れ出る。）

庄八　要助か。

要助　庄八か。

法界坊　要助は抜いてをるぞ。

庄八　合點ぢや。そりや兩人ともぬかるな。

（ト闇にて叩合ひ、皆々を切立て要助はひる。法界坊出て、）

法界坊　この間にちやつと葛籠を。（ト思入れ。）エヽ又提燈がうせる。

（ト樹隱れる。甚三弓張を持ち、すた／＼と出て、）

甚三　エヽ折角連立つて戻つたに、脇差をさして、又出やしやつた。確かにこゝへ御座つたに極つた。

（トいふ中、要助出て、）

要助　エヽ庄八を討洩らした。殘念ながらとても逃れぬこの宿位之助、さうぢや。

（ト腹へ突込まうとする。甚三出て、）

甚三　要助樣待つた。

要助　甚三殿。南無阿彌陀佛。

（ト切腹しようとする。甚三留めて、）

甚三　これ待つた。コリヤマア何事ぢや。

要助　甚三殿、遲かつた／＼。これ鯉魚の一軸を、勘十郎がこの樣に引裂いてしまうたわいなう。

甚三　ヤアどれ。

（ト種々うろたへ、引裂いた掛物を取り、石燈籠の火にてとつくりと見て、）

何を仰しやりますやら。ほんまに引裂いたかと思うて、南無三御家の斷絕と思ひ、びつくりした。コリヤこれ釣鐘の繪圖でコリヤ幟で御座りまする。

要助　ヤア、どれ。（ト思入れ。）オヽほんにコリヤ釣鐘の繪圖。そんなら今破つたのは鯉魚の一軸ではなかつたか。ホイ。

（ト甚三びつくりして、）

甚三　何ぢややら、若い人と云ふは。

要助　これ甚三、ひよんな事したわいの／＼。（ト泣く。）

甚三　ナニ、ひよんな事とは、どんな事なされました。

要助　鯉魚の一軸を破つたと思うて、勘十郎を思はず知らず。

甚三　ばらさつしやりましたか。

要助　おいなう。

甚三　ホイ。

要助　南無阿彌陀佛。

（ト死なうとする。甚三とめて、）

甚三　これ待つた、早まるまい。大事ない、大事御座りませぬ。見た者はわたし一人。お前の命ばかりは吉田家の浮き沈み、幾千人の命に關はつて御座りまするが、高が町人の勘十郎風情、

大事御座りませぬ。何もかも私にお任せなされませ。シテ其死骸は。

要　助　此處にあるわいの。

（ト甚三種々探り廻して、死骸を見て思入れあり。）

甚　三　だんない〱。幸ひの此葛籠、死骸をこつそりお前は渡りに。

要　助　合點ぢや〱。

（ト邊りに氣を付け居る中、甚三つゞらをほどきあける。中よりおくみ出る。）

甚　三　ワアイ。

（トびつくりする、おくみ驚き、要助を見て。）

おくみ　要助ぢやないか。

要　助　御寮人樣。

おくみ　會ひたかつた〱。

（ト取付き泣く。甚三この間に死骸を葛籠へ入れる。種々あり。）

要　助　合點の行かぬ。アノ中にはマアどうして。

おくみ　さいなう、庄八が無理無體にわしを連れ、駈落すると云うてなう、最前アノ。

甚　三　シイ〱、その長い事は何もかも。マア私が内へ行んで。

要　助　あの連れて行んでも。（トこなしあつていふ。）

おくみ　大事ないかえ。

甚　三　大事があつても無うても、モウ無茶苦茶ぢや。

要　助　そんなら早うおくみ樣。

おくみ　要助。

甚　三　マア御座りませ。

（ト三人向うへ走りはひる。庄八後へ出て葛籠を見付けて、してやつたといふこなし。）

庄　八　六兵衛〱、太助〱。

（ト呼び〱、葛籠舁來ぬ故、先肩舁いて見たり後をかづいて見たり、種々をかしき身振あつて、葛籠をゆすると中より市兵衛こけ出づる。それなりに庄八かたげはひる。市兵衛心付いて。）

市兵衛　誰ぢや、甚三樣か、ヲ、イ甚三樣、〱〱。

（ト法界坊出て後見送り、こなし樣々あつて、葛籠を見て種々悦び、葛籠を抱き葛籠の前に仕方したり種々あり。度々擔ぎ置いて、重い態にて、不思議なるこなしにてかたげ、向うを見て笑ひ、きつとなつて。）

法界坊　いかいたはけの。

（ト舌を出し、葛籠を背負ひ、向うへはひる。）

幕

都鳥の時代事
吾妻の世話事

隅田川續俤　二ツ目　扇幕之段

庄屋與次兵衛	山科文三郎
平田藤藏	藤川仲藏
澤田彌九郎	市川友藏
手代庄八	三枡松五郎
甚三女房おさく	山下金作
淺山主膳	市川團藏
百姓大勢	
旅人大勢	
家來大勢	

造り物。向う淺黄幕、處々に稻叢、淵崎領といふ札傍に立てゝあり。此處に男の死骸あり。本釣鐘虫の音蛙の聲にて、庄屋百姓竹箒、床机より棒を持ち、わやわや云うて居る。在所唄にて幕開く。

與次　サア／＼夜が明けた。百姓衆、御檢分の掃除をせにやならぬ。

百姓皆々　ヲイ／＼、合點ぢや／＼。

與次　庄屋の無念になつてはならぬ。御檢分の御座らぬ先に、床机直して置かつしやれ。

皆　ヲイ心得ました。

△　これ／＼、爰に誰やら寢て居るさな。

（ト床机を直す。掃除しながら死骸を見て、）

○　滅相な、御檢分がお出でなされる。起きしやしやれ／＼。

（ト傍より口々に喧しういうて、死骸を

見てびつくりする。)
△ ヤアコリヤ、死んで居るさうなぞや。
與　次　ヤア滅相なこと云はしやる。(ト死骸をとつくりと見て、)ほんに人が切つてあるわ。
○ 此通り申上げずばなるまい、何と皆の衆。
與　次　サア〳〵大抵の事ぢやない。百姓衆御座れ〳〵。
(トロ々に喧ういうて花道へかゝる。向うより淺山主膳平田藤藏皆々、野袴大小ぶつ先羽織。其他侍二人付き出る。)
主　膳　ヤア百姓共、騒々しい、何事ぢや。
與　次　ハイ切つて御座りまする。然も私が畑で人が切殺して御座りまする。
主　膳　なに、人が切り殺してある。エイワ、案内致せ。
與　次　ハイ〳〵かうお出でなされませう。(トうろ〳〵本舞臺へ來る。)ハイ是で御座りまする。
(ト主膳死骸を見て、)
主　膳　澤田彌九郎殿、平岡藤藏殿、御聞きの通りで御座りまする。其死骸檢分なされませい。
(ト兩人死骸を改め思案する。東西より旅人五六人通らうとする。)
△ アヽこれ〳〵、通すことはならぬぞ。
○ 人が切つてあるに依つて、通す事はならぬぞ〳〵。
旅　人　私共は旅の者、どうぞ通して下さりませ。(トロ々に云ふ。)
△ ならぬわいなう。
旅　人　これはまたひよんなことぢや。
(ト兩方に坐り居る。)
主　膳　死骸はまだ間もない事と見える。若し喧嘩口論などは無かつたか。
與　次　イエ〳〵私共が參つた折は、左樣な事は御座りませんが。
藤　藏　少しでも僞りあらば、後日にうぬら現はるゝと身の上ぢやぞ。
與　次　ハイ僞りは申上げませぬ。
主　膳　百姓共、少しでも心當りあらば包まずとも申したがよいぞ。此度主人の御領地御加增に付いて、此邊も御知行所故、檢分に參つた我々、思ひ寄らぬ此場の檢死、さぞ難儀に思はうが、所の難儀にやせぬ程に安堵致してをれ。
皆　ハイ有難う御座りまする。
(ト在所唄になる。橋懸りよりおさく菅笠、抱帶にて風呂敷包に刀を包み、何心なく通らうとする。)
與　次　アヽこれ女中、通ることはならぬぞ。

百姓　通ることはならぬぞ〳〵。

（トおさくびつくりして、風呂敷包を後へ隱し、こなしあつて、）

おさく　ハイなぜ通られませぬな。

與作　此處に人が切つてある故、御詮議の最中ぢやに依つて、通すことはなりませぬ。

おさく　ハア、夫はひよんなことで御座りまするな。私はちつと急な用事あつて參る者で御座りまする程に、お通しなされて下されませ。（ト行かうとする。）

皆　アヽこれ、通すことはならぬわいの。

おさく　さうでは御座りませうけれど、私は叶はぬ用事で氣の急く者で御座りまする。昨日から遠い處へ參りまして、今朝五ツまでの内に歸りませねば、どうもなりませぬ樣に御座りまする。女の事で御座りまする。御了簡なされて下さりませ。

與次　ハテ聞分のない、通すことはならぬわいの。

おさく　どうでも通ることはなりませぬかえ。

皆　ならぬ〳〵。

おさく　（ト又刀を後へ隱し、）是は又難儀な處へ來かゝつたことではあるぞ。どうぞ通られぬことかいなア。

（トよき處へ坐り、氣の毒なるこなしにて坐り居る。）

主膳　彌九郎殿、是は確かに意趣切と見えまする。かう見ました所が、此者大抵の奴ではないと見えまする。先の者の一分がすたつたといつて、數ケ所切つたと見えまする。こりや侍の仕業で御座らう。

彌九郎　イヤ〳〵武士の仕業では御座らぬ。こりや盜賊の仕業で御座らう。

藤藏　未だ年若な男の死骸、町人體と相見え、旅人とは相見えませぬ。口に男の片袖を啣へ居りまする。

（ト主膳取つて、）

主膳　紋は石持に桐の薹。後日の證據、取納められい。（ト彌九郎に渡す。）

彌九郎　庄屋百姓、此村の者ではないか、とくと見い。

皆々　ハイ〳〵畏りました。

（ト皆々死骸を改め見て、）

與次　イエ〳〵此村の者では御座りませぬ。え知らぬ者で御座りまする。

彌九郎　見知つた者ではないか。

與次　ハイ左樣で御座りまする。

藤藏　とくと吟味を遂ぐる間、暫く往來を止めい。

與次　ハイ〳〵畏りました。これ百姓衆、往來を止めさつしやれ。

皆々　ハイ〳〵畏りました。

（ト一人宛棒を突き、東西に分れとまる。
主膳死骸の側へ寄り、）
主　膳　家來共、死骸を俯向け、右の手を上げい。
侍　ハア。（ト死骸を俯向け手を上げる。）
主　膳　ム、肩先より一刀。（ト思入れ）脇腹一箇所。（ト死骸を改め、宜しく）掠りて共に瑕七箇所。懐中を改めさつしやれ。
藤　藏　ハ。（ト懐中を改め金を出し、）これに金子が一包み、書付に五十兩と御座る。
主　膳　處書は御座らぬか。
（ト彌九郎包をほどき改める。女の狀出る。彌九郎見る。）
彌九郎　女の狀が御座れども、名宛の處は破つて御座る。
（ト主膳に渡す。狀を見て、）
主　膳　コリヤ女よりの無心狀、（ト思入れ。）ハテナア狼藉者の仕業にては此金子を取りさうな者を。（ト思入れ。）ハテ。
彌九郎　人音に驚き狼狽へて逃げたと見えまする。
（ト此の中おさく、右の臺詞の内こなしあつて、又心に急く思入れにて、日脚を見たり種々ありて、風呂敷を持ち立たうとして、主膳を見てさやつと後へ隠し、）
おさく　イヤ申し、お百姓様、五ツまでに歸りませねば、大勢の難儀になることで御座りまする。どうぞお斷り仰しやつてお通しなされて下さりませ。
與　次　ハテこなたはかりぢやない。通りの衆も皆待つておぢや。アレ／＼あれが目に掛からぬかいの。
おさく　成程さうでは御座りまする。けれど、刻限が延びますると、生涯にも及びまする事で御座りまする。心が心なりませぬ。どうぞお斷りを仰しやつてお通しなされて下さいませ。
（ト此の中主膳煙草を喫みながら始終おさくに氣を付けこなし。）
與　次　ハテ扨まだ云はつしやるわいなう。それ程急く道なら道を變へて行かつしやれ。
おさく　その道を變へますれば日の長けるのが氣の毒さに、斯樣申すので御座りまする。
與　次　それでもどうもならぬ。
おさく　そこをどうぞ仰しやつて。
與　次　ならぬわいなう／＼。
（トおさく百姓とせり合ひ、おさく思はず風呂敷を取り上げて百姓とせり合ふ。この中主膳おさくに目を付け、藤藏に煙管にて教へる。藤藏呑込み、侍二人へ囁き、この中矢張せり合うて居る。）
與　次　ハテ扨、どの樣にいはつしやつても、こちらのまゝにならぬわいの。

おさく　これは又雛儀な事ではあるぞ。
（ト風呂敷包刀を下へ突き俯向く。）
侍二人　渡せ。
（ト取りに掛かる。おさく見えよくつき退き、刀を膝の下に敷く。）
おさく　コリヤ何となされますな。
侍二人　その風呂敷包渡せ。
（ト掛かるを立廻りありて投げる見え。）
藤　蔵　女め、うぬ狼藉ひろぐな。
おさく　イヤ私は狼藉は致しませぬが、コリヤお前方が狼藉で御座りまする。
藤　蔵　だまり居らう、役目で詮議する此方、狼藉とは慮外な奴め。
おさく　その詮議とは何の詮議で御座りまする。
藤　蔵　われが持つて居る風呂敷包吟味致す。此方へ渡せ。
（ト掛かる。立廻りあつて風呂敷包取りにかゝる。見えよく留る。）
侍　女め渡さぬか。（ト十手構へる。）
主　膳　ハテ仰々しい、控へ召されい。
彌九郎　でも女めが。
主　膳　ハテ高が女の儀、控へさつしやれ。（ト皆々控へる。）女、驚く事はない、その刀を見せやれ。
おさく　ハイそりや何故で御座りまする。
彌九郎　何故とは猪口才な女め、人が切つてある故の詮議、其方が刀を隠し持つ故、怪しう思ふ故、其方を改め見るわさ。
おさく　エヽ。（トびつくりする。）
彌九郎　サア其刀を此方へ渡せ。
おさく　サアそれは。
彌九郎　サア／＼／＼。どうぢや。
おさく　ハイそりや止しになされませ。刀を持つて居りますれば、私も侍の女房、アイ浪人しても武士の妻、御詮議なされて此刀に、血でも滴うてあるならば、御役目は立ちませうが、若し刀に氣もじの御座らぬ時は、何となされうと思召しまするぞ。
彌九郎　ハヽヽヽ。利口ばる女め、疑心晴らしたら通して呉れるわさ。
おさく　イヤさうばかり仰しやつては御役目は立ちませうが、どうも私が濟みませぬ。なぜと仰しやれ、業物やら、なまくらやら知れませぬ良人の魂、是非是非見ようと思召さば、氣もじのない時のお裁きを、御思案なされてから御覽じませ。滅多に刀は御見せ申さぬ。
彌九郎　見せぬは曲者、打つ据ゑて引立て／＼。
侍　渡さぬか。（ト取巻く。）
主　膳　ハテ騒がしい。控へい、ハテ控へと云へば控へて居れ。
皆　々　ハッ。（ト皆々控へる。）
主　膳　女、苦しうない、近う來やれ。

おさく　ハイ。(ト刀を持ち油斷せぬこなしにて主膳が前へ出る。)

主　膳　誠に武家の育ちと見え鯱き入つた其方の一言。功にきぬとは思へども、權威の借るは役目の處外、コリャ此方の不調法。處外の段は身共がお詫び申す。何卒御了簡に預りたい。

おさく　これは御懇懃のお詞。其樣に仰しやると、ほんに却つて私が迷惑に存じまする。私も氣の急く儘に、あられもないはしたない事、處外の段は私も御免なされて下さりませ。

主　膳　イヤ此方が不調法。

おさく　イヤ私が。

主　膳　イヤ此方が、ムヽ。

おさく　ホヽヽヽ。

主　膳　ハヽヽヽ。

二　人　ホヽヽヽ。ハヽヽヽ。(ト笑ひながらこなし。)

おさく　イヤもうお疑ひさへ晴れましたれば私の仕合せ、強う心が急きますれば、もう參じまするで、緣あらば又お目に掛りませう。(トこなしあつて、花道へ行かうとする。)

主　膳　女中待ちやれ。

おさく　ハイ御用でも御座りますか。

主　膳　此方の無禮は手をついてお詫び申した。改めてその刀を身が吟味致すが、此方から手は掛けぬ、サア刀の身を見しやれ。

(トおさく胸に應へし思入れ。)

おさく　スリヤどうあつても此刀の身を。

主　膳　改めて通さねば、疑ひ掛けた役目が立たぬ。

(ト思案して、橋懸りへ行かうとする。主膳見て又呼戻し、二人こなし。)

主　膳　女中待ちやれ。

おさく　なぜお留めなさるゝ。

主　膳　そちやどれへ行きやる。

おさく　サア此處を通らうとすれば刀を改めると仰しやる、そこを存じて、元の道へ歸りまする。

主　膳　イヤさうは拔けさせぬ、是非とも刀を改めます。

彌九郎　主膳殿の詞を背くと、打据ゑても改めるぞ。

おさく　エヽ。

主　膳　たつて見せまいと云やれば是非に及ばぬ。刀の役目、どう難しうならうも知れぬ。そこを存じて、身が改める。

おさく　サアそれは。

主　膳　刀を見せるか。

おさく　サア。

主　膳　サア。

おさく　サア。

主　膳　サア。

おさく　サア。

主膳　サア／＼／＼。

おさく　サア。

皆々　どうぢや。

おさく　ハヽヽ。（ト俯向くこなしあつて）成程、得心致しました、此刀の身を御目に掛けませう。が、お侍樣、あなた一人これへ御出でなされて、御苦勞ながら、御改め下さりませ。

主膳　ムヽスリヤ身共一人に。

おさく　ハイ他見は、お許しされて下さりませ。

主膳　聞き届けた。御兩所控へ下されい。皆の者控へてをれ。

皆々　ハアヽ。

（ト彌九郎藤藏床机に掛かる、皆々引く。主膳しづ／＼とおさくが側へ行き、）

主膳　サアお身が拔いて見せるか、身共が手を掛けうか。

おさく　イヤ私がお目に掛けませう。

主膳　勝手次第。

（トおさく當りへ心を付け、見せとむない思入れにて、）

おさく　只今お目に掛けまする。

主膳　早く／＼。

（トおさくこなしあつて刀を拔く。木太刀なり。主膳悄りして他へ見せぬこなし。）

おさく　良人の魂御改め下さりませう。

（ト差し出す。面目なき體にて云ふ。主膳改めるこなしにて、）

主膳　ハテ思ひ寄らぬ。（ト云はうとして、外へ隱すこなし。）天晴業物。のりもしたはず、刄もこぼれず。疑心晴れた、ハテ珍らしい業物。他の手前も。

（ト思入れ。）先々お納められい。

おさく　お疑ひは晴れましたかな。

主膳　疑ひ晴れました。

（ト兩人他へ見せぬこなし。おさく刀を納め、ちやつと下に置く。見せぬこなしあつて、主膳床机に掛かる。）

藤藏　主膳殿、怪しい儀は御座らぬか。

主膳　少しも怪しい儀は御座らぬ。女中が見せまいと申すも斷り、ハテ天晴の業物。女中珍らしい銘の物、どうして所持召されたぞ。

おさく　お尋ねに預りまして御恥かしう存じまする。私が良人は不慮の浪人、しつけぬ世渡り、尾羽打枯らし、長々の憂き艱難、積り積つての大病、人參ずくめのその中に、お國より歸參を願へとある傍輩衆の內意。聞きますると心は張り弓、今一度本快して、武士の交りして死にたいと、氣はあせつてゝ因果な大病、餘り見る目が悲しさに、私が兄樣さる方に居られますを頼んで金の才覺。出來ぬ物は金づく、どうも致し方なさに人參代に此一腰、良人の刀

隱して知邊の方へ持つて參り、段々の入譯いうて此刀の身を廿兩の質に。(ト云はうとして廿兩包を出し、)サア廿兩に賣りまして、持つて參りまする所、貴方方の思召しにも、國へ歸參するならば刀は放さぬ筈の事と、御笑ひもなされるで御座りませう。どうぞ本腹致されたら其時には受け戻し。

(ト云はうとする。主膳咳拂ひする。)

サア其時には買戻しまする。相對なれば仕樣も樣もあらうものと、心一つに兎や角と、思付いたは此刀。外廻りさへかうしてあれば、良人の尋ぬる間は合はうものと、思付きまして御座ります。どうぞして、大病を、本快させたさ、元の武士に致したさ、良人の恥を隱したさ、最前からのお詞を背きましたので御座りまする。必ず〱かうした、サア、かうした話は、此場きりにお賴み申上げまする。刄金もならず、知行取も、浪人しての身程、口惜しい悲しいものは御座りませぬわいなア。(ト泣く。)

主膳　ハテ、サア、誰しも浪人の身の上ならば、さうした事も御座らう。歸參とあれば本快が第一。役目でなくば御用立つ品もあらうが、何をいうても役目先。して宿所はどれに御座りまするぞ。

おさく　ハイ小石川富坂に居りまする。

主膳　ムヽシテ宿名は。

おさく　ハイ岩木氏と申しまする。

主膳　岩木氏。故意と御名は問ひ申すまい。由無い者が殺され、思はず隙取り氣の毒に存ずる。女中とてやがてお尋ね申すことも御座らう。サア〱〱、早く通り召されい。アヽおいとしい事で御座る。

おさく　左樣ならば御暇申しませう。

(ト行かうとする。西の方にて、)

旅人　アヽ由無い男が殺してあるに依つて、これは又迷惑な。

同　あの男は、どいつめが殺したことではあらうぞ。(ト東の方にて云ふ。)

皆々　早う通して欲しいことぢや。

(ト口々に云ふ、男殺してあると云ふこと喧しう云ふ。おさく氣の付いたこなしにて、立歸り、こなしあつて後へ戻り、)

おさく　まうし、最前から氣の急く儘に上の空に聞いて居りましたが、唯今も承りますれば、殺されて居るも若い男ぢやげに御座りまするが、ちよつと見られますまいかな。

主膳　安い事、心掛りの儀あらば、立寄つて見やれ〱。

皆々　サア〱、見さつしやれ。

(ト薦をまくり見せる。おさくびつくりして、)

おさく　ヤア〱〱、コリヤ誰が殺し

た、〳〵ぞいなア。
（ト泣く。皆々びつくりして、）
主　膳　コリヤ女、死骸はそつちが知邊の者か。
おさく　知邊の段ぢや御座りませぬ、コリヤ私が兄さまぢや。〳〵〳〵わいなア。
主　膳　ム、其方の兄は、何ぞ殺される覺えがあるか。
おさく　イエ〳〵殺される覺えは御座りませぬが、良人は私が家へ養子。譯あつて兄さんは小さい時から町家の住居、此度の入用も、呉々頼んで置きまするを強う氣に掛けて居られましたが、昨日までも夕までも便りもなく、良人の大病さへあるに兄様まで此様に殺されさしやんすといふは、コリヤ何の因果ぢやぞいなア。コリヤどうしたらよからうぞいなア〳〵。

（ト大いに泣く。この中、主膳最前の金を出し、狀を開き讀み、割符合ふと云ふこなし。）
主　膳　シテ兄御への無心の金高は。
おさく　ハイ五十兩で御座りまする。
藤　藏　スリヤ最前の五十兩。
主　膳　頼みの此狀。（ト思入れ。）女中、兄御の才覺召された金五十兩に、無心狀取つて置きやれ。
（ト二品投げ出す。おさく取つて、）
おさく　そりや私が文。（ト思入れ。）フウ此金。（ト思入れ。）そんなら此金を拵へて下さんしたを、取らうとて殺したのか、但し意趣切か。浪人なぞすれ、兄も私も武士の種、まうし、どうぞ敵を打つて下さりませ。
彌九郎　我等が主人の知行處、此方よりも役所へ訴へよう。女中、此死骸は如何思召さるゝぞ。

おさく　家も強う案じられますれば、ちよつと宿へ歸りまして、駕籠を持つて迎ひに參りませう。暫くの間、處の衆にお預けなされて下されませ。
主　膳　ヲヽそれは安い事。迎ひの駕籠の參るまで、百姓共番をして居い。
百　姓　ハイ〳〵畏りました。
主　膳　此方よりも其方の、處家主町人を呼びに遣はす。代官所へ召し連れ歸る。シテ、處の名は。
おさく　小石川富坂岩木玄蕃と申して、只今の世渡りは醫者。
主　膳　武士は相見互ひの難儀、病人へ早く其金を。
おさく　ハアイ〳〵、段々の御志忝う御座りまする。いとしや兄様が此金故。
主　膳　早く行きやれ。
おさく　アイ〳〵、家へ歸りましても、何と良人へ申しませうぞ。いとしや。

（ト合方になる。泣き〳〵花道へ行く。鳥屋の際にてきつと氣を變へ、五十兩の金を出し、ツイとはひる。）

藤藏　コリヤ庄屋年寄、死骸の筋相立つ上は、往來を通れと云へ。

百姓年寄　ハイ〳〵畏りました。（ト思入れ。）サア皆通つたり〳〵。

皆々　ヤレ〳〵、えらい目に遭うたことぢや。サア御座れ〳〵。

（ト旅人口々に云ひ、分れはひる。花道より庄八手代のなりにて、その外二三人付き出る。）

庄八　今の噂はほんの事かいなう。

手代　サアそれでなけねばよいが。

（ト此様なこと云ひ〳〵出て、本舞臺へ來る。死骸を見付けて。）

庄八　ヤア切つてあるぞ、大方これぢや。皆の衆見さつしやれ。

手代　ライ〳〵。

（ト皆々死骸をとつくり見て。）

庄八　ヤア〳〵、コリヤ聟様ぢや、勘十郎様ぢや、どいつが切つたぞ、エヽ惨いことしたな。（ト喧しう云うて立ち歩く。）

手代　サア〳〵〳〵、かういふ事があらうかと尋ねて來たらば、大事ぢや〳〵〳〵。

彌九郎　ヤイ〳〵うぬら何奴ぢや。詮議の濟んだ此死骸、コリヤ身共が上役もこれに御座るが、きよろ〳〵と狼狽者めが。

庄八　イエサア、狼狽者ぢや御座りませぬ。此お人は私が旦那の御一門、御家老衆の山崎屋勘十郎様というて、歴とした町人、昨日から五十兩といふ金を持つて、家へ居なれませぬ故、家内は上を下へと亂騷ぎで御座りまする。常から、きよろ〳〵としたお人なれば、若し狐にでも抓まれはさつしやれぬかと、この近邊を大勢が大變尋ねて居りまする所に、人殺しの噂を聞いて、來て見れば勘十郎様で御座りまする故、びつくり致して御座りまする。

彌九郎
藤藏　ヤア、、、。

（ト靜かに主膳もびつくりして。）

手代　盜賊の業か、何者の仕業ぢや、えらい事をしをつた。

主膳　シテ其方達は何者ぢや。

庄八　ハイ、私は永樂屋權左衞門が手代、庄八と申す者で御座りまする。

主膳　然らば、切られてある其者の身の上は主人の一家とあるからは、詳しく知つて居るであらうが、その勘十郎は侍の種か、武家の種か、武家の一門があるか。

庄八　イエ〳〵、何の、山崎屋勘十郎様は親代々町人の生拔。武士に一家は御座りませぬ。

主膳　ム。シテ女の兄弟といふ樣なものがおらうな。

庄八　イエ〳〵、一人息子で、女の兄弟は御座りませぬ。

彌九郎　ヤア、、、、。

（ト兩人びつくり、主膳びつくりする。庄八、他の手代も合點の行かぬこなし。主膳が側へ行き、）

庄八　まうし御代官樣。

彌九郎
藤藏　主膳殿。

庄八　何とぞ。

手代皆　なされましたかな。

（トこの中主膳つか〳〵と向うへ出る。花道鳥屋の方をきつと見詰め、思はず扇を落す。皆々主膳に目を付け居る。）

主膳　スリヤ今の女は。（ト思入れ。）ムム。

（ト落したる扇を見る、此途端宜しく。）

幕

隅田川續俤

三ツ目
同返し

都鳥時代事　甚三内之段

吾妻世話事　三圍明神之段

役	役者
甚三娘お糸	とら吉
道具屋市兵衛	平九郎
肝入左兵衛	正藏
永樂屋權左衛門	今村七三郎
野分姫	嵐村治郎
おくみ	芳澤いろは
道具屋甚三	藤川八藏
代官彌九郎	市川友藏
要助本名宿位之助	染松七三郎
手代庄八	三桝松五郎
甚三女房おさく	山下金作
淺山主膳	市川團藏
法界坊	市川團藏

あるき一人　惣實二三人

家來大勢　○□△三人

造り物、平舞臺三間の間、赤壁、納戸口、折廻し障子屋臺、よき所に門口、此傍に古道具の書附、非人、莨蓙に巻かれて居る、中にて要助おくみは競合うて居る。この模様、在所唄にて、幕開く。

市兵衛　サア何程〳〵。

□　三百〳〵。

△　三百五十〳〵。

市兵衛　三百五十〳〵。

○　四百に買はう。

市兵衛　チット、四百。六間堀の庄兵衛。

おくみ　どの様に云はしやんしても、こちや知らぬ〳〵。

要助　ハテまあ、わしが云ふ事を聞いたがよいわいなう。

おくみ　イエ〳〵聞かぬ〳〵。どうでわしが様な者と許婚の御姫とは違ひますわいなア。

要助　種々の事を云ひやるわいなう。何ぞといふと許婚〳〵と、其許婚も古いわいなう。

おくみ　アレ又許婚の事を、エヽ嫌ぢやわいなア。

文化十二年二月道頓堀角の芝居市川市郎座

隅田川續俤

市兵衛　サア、古い六枚屏風かたし〳〵。何程〳〵。

要助　マアとつくりと聞きやいなう。

おくみ　嫌ぢや〳〵。

市兵衛　嫌ぢや〳〵。
（ト市兵衛市止める。）
△○□　これ市兵衛殿、そりや何を云はしやるぞいなう。
市兵衛　これはしたり、中の競合とごつちやになつた。サア何程〳〵。
○　六百。
□　六百五十。
要助　マア、わしが云ふことを聞きやいなう。
おくみ　エヽ、何を云はしやんしても皆嘘ぢやわいなァ。
市兵衛　嘘なら八百〳〵。
□　エヽ八百文かえ。
市兵衛　嘘八百、鐡砲屋太郎四郎。
要助　白い黒いを立てゝ見せう。
おくみ　見るぞえ。
要助　見せるぞえ。
（ト互に兩人競合ひ。奥よりおさく出て、）
おさく　これはしたり、要助様、おくみ様、何を其様に競合はしやんすいなァ。
（ト分け止める。矢張、表に道具羅市立つて居る。）
要助　サイなう、おりや大人しう奥で本を讀んで居たれば、傍からおくみ様が邪魔をして、何ぞといふと許婚〳〵と滅多無性に疑うて、それでの競合ぢやわいなう。
おくみ　何のマァ、銘々の方からお姫様のこと云ひ出して、わしに腹立てさして置きながら、皆あなたから起つたことぢやわいなァ。
要助　イヤ其方から起つたことぢやわいなう。
おくみ　イエあなたが。
要助　イヤ〳〵。
おくみ　イエ〳〵。
おさく　これは、又競合はしやんすかいな。イヤ市兵衛さん、もうこちの人も戻らしやんせう。市を仕舞うて、お前も休んで下さんせ。
市兵衛　ハイ〳〵。いやなう、内のせり合と表の羅市と一つになつて、諸事夢中に立てゝ居ました。
△　それ〳〵。美しい娘子の腹立たしやるので、市よりはひよんなつて、大きに買被したわいの。
○　おいらも往んで、家　市を立てう。サア、皆往なうぢやないか。
市兵衛　そんなら私もお暇申しませう。サア皆往なうか。
皆々　サア御座れ〳〵。
（ト皆々しか〳〵云うてはひると、おさく種々挨拶することあつて、）
おさく　何方もようお出でなされました。
（ト思入れ、）それはさうと、要助様、いかに主が留守ぢやとて端近くへ出て、

はしたない今の競合ひ。おくみ樣もたしなんだがよいぞえ。サア機嫌直して奥へお出でなされませ。

要　助　さうせう〳〵。何、おさく、そなたも知つての通り、無實とは云ひ乍ら、引負の百兩、今日中に譯立ていと番頭の庄八が催促。百兩の金を立て、二度永樂屋の家へ歸らねば、鯉魚の一軸も手に入らず、吉田の家の埋木とならうと案じ過しがするわいなう。

おさく　お道理で御座りまする。然し、お案じなされますな。其金の心當もあると云うて、姫を連れてこちの人が出やしやんした。追付け吉左右が知れまする。日頃男氣な甚三殿、此譯を立てないで何と致しませうぞいなア。

おくみ　どうぞ早う金が調うて、要助が家へ戻らしやんす樣にして下さんせえ。

おさく　それに如才が御座りませうかいなア。

（トいふ中、橋懸りより權左衞門出て、表の戸を見て、）

權　左　一寸此處を明けて貰ひませう。

おさく　アイどなた樣ぢや〳〵。

權　左　イヤ大事ない者で御座る。甚三殿家にならば會はうと思うて來た。一寸此處を明けて下されませいなう。

（トこの中、要助おくみ權左衞門が聲を聞付け、びつくりして、おさくに囁き、おさくもびつくりして、）

おさく　サアそりや大抵の事ぢやない、マアお前方は押入の中へはひつて隱れて。

（ト要助おくみうろたへ押入へはひる。）

權　左　これはしたり、晝日中に表を差いて。一寸此處を明けて貰ひませう。

（ト表を忙しく叩く。）

おさく　アイ〳〵今明けませうわいなう。

（ト狼狽へ表の戸を明ける、權左衞門躓き乍らはひる。おさくもびつくりして、）

權　左　ものも。（ト大きな聲にて云ふ。）

おさく　どうれ。（ト顏見合せ、）

權　左　ハヽヽヽヽヽ。

おさく　ホヽヽヽヽ、私とした事が。さうして貴方は何方樣で御座りまする。何處から御出でなされました。

（トこの中權左衞門簪を拾ふ。）

權　左　イヤわしや永樂屋權左衞門といふ者で御座る。

おさく　そんなら、要助樣の親方樣で御座りまするか。これは〳〵ようマア御出でなされました。

（トこの中、甚三戻り覗うて居る。）

權　左　イヤようは來ませぬ。此方が甚三殿の御内室ぢやの、サア、こつちの娘を戻して下され、サア出して下され

出して下され。
おさく　マヽア、權左衛門樣〳〵、滅多無性に戻せ〳〵と仰しやるが、貴方の御寮人は私が方に隱れては御出でなされませんが。
權　左　イヤ云はつしやんな。要助ととつ狂うて駈落した惡戯者、此處に居いで詰まるものか。さうしてこの甚三殿は何處にぢや。マア甚三殿に會ひませう、サア早う出して下され、甚三殿は。
おさく　ハイ留守で御座りまする。
權　左　そんならこな樣、早う娘おくみを戻して下され。
おさく　ハテ、おくみ樣の事は知りませぬわいなア。
權　左　イヽヤ、知つて居やしやる筈ぢや。こつちには確かな證據がある。
おさく　なに證據とはえ。
權　左　（ト最前の簪を出して、）コレ此簪の模樣は、稻の丸七目の酉とは好んであれが誂へて、買うてやつた此簪。それが此處には、マアどうして落ちてあつた。
おさく　サア、それは。
權　左　サア〳〵〳〵。早う娘を出して下されいなう。
甚　三　證據があつても何があつても、御寮人樣の事は存じませぬ。
おさく　こつちの人。
（トこの中甚三中へはひる。おさくこなしあつて、顏見合せ、）
權　左　甚三殿、是非確かな證據があつても。
甚　三　サア、其の確な證據があるに依つて、御娘御はこつちの内には御座らぬ。
權　左　そりや又なぜで御座りまする。
甚　三　此簪の紋は稻の丸、この稻の穗に出た今度の色事、これを早稻に苅りたくれば却つて稻に藥が出る。まうし、折角貴方の程を下して苗代時に引分けて、男日照付けたら、二人ともについ枯れ果てまする。そこを思うて此百姓が年貢未進も取込んで、首尾よう貴方の米藏へ納めて御目に掛けう程に、マア〳〵此處に匿はぬと云はば匿はぬにして、一旦お歸りなされたが、憚り乍ら權左衛門樣、宜らうと存じまする。なう、嬶。
おさく　さうで御座りまする。今主の申されまする通り、離れぬ仲を引分けて、結句、サア怪我でもあつては、案じ通しも要助樣が大切。
權　左　成程、聞分けました。己も年寄りて此樣に、あたふたというて來るも、ひよつと娘に、サア、若しもの事があつてはと思ふも、あいつが不便さ

故。要助が爪端れ卑しからぬ素性とは、始からよう知つて居まする。ハテ聟の勘十郎が死に、若後家になつた娘が好いた男を入れてやるは、家の相續。何もかも、其入譯はよう嚙分けて居ますわいなう。

甚三　サア、其心なら私に頂けてと、サア、こちに御座るなら申しませう。居ぬ人に違ひもなし。

權左　そんならあなたを男と見懸けて、娘が事を此處に居るなら頼まうものを。

おさく　御氣遣ひなされますな。女子は相互ひ、私が隨分心を付けて、と云ふに云はれぬ此場の仕儀。

權左　何にも云はぬ、甚三殿、何事も貴方を頼む。わしや、もう往にませうわいの。

おさく　そんなら御得心で御歸りなされますな。

權左　ユヽ、始めて來て御内儀喧しう云ひました。

おさく　何マア、まうし、又後に夜に入つてから御出でなされませ、御機嫌な御顏を見せませうわいなァ。

權左　それは忝う御座る。詞に甘えた事乍ら、後に會ひに來る程に、どうぞあなた樣の世話で頼みますぞや。これはあなづりがましけれど、わしが始めて來た手土產、取つて置いて下され。

（ト一軸の質札をおさくに渡す。）

おさく　これは。

權左　あなた衆の欲しがる掛物の質札、要助にというては遣らぬ。勿論、甚三殿にと表向き、マ、そりや、こな樣に遣る程に、要助が今度の難儀、元の起りは此掛物、引負の百兩さへ出來たれば此質札を持つて、御內儀、こな樣取つて置いてお吳りやれ、即ち要助が持參の掛物を渡す。の、合點か。甚三殿、もう歸りまする。

甚三 おさく　段々の御志、お情の此質札。（ト拜む。）

權左　イヤ、御暇申しませう。

（ト唄になる。權左衞門はひる。後合方になる。）

甚三　お靜かにお歸りなされませ。アア、年寄つてあたふたと、子故の闇路やなァ。そのあたふたで思ひ出した、女房どももお二人樣は。

おさく　ほんに私も忘れて居た。權左衞門樣が御出でなされたので、びつくりして押入へ隱して置いた。ほんに息が詰りはせぬか知らぬ。

（トおさく押入明ける。中より要助おくみ出る。）

要助　甚三殿、最前から會はなんだ。

どこへ行きやつた。

甚三　イヤもう、昨日今日は、あの鯉魚の一軸の質受の工面で、夫婦の者は一向譯は御座りませぬ。マア、聞いたわい、女房ども、昨日そなたに預けたあの代物は。

おさく　そりや氣遣ひなしやさんすな、首尾よう廿兩に。

甚三　これでよし。

要助　これ、甚三、引負の百兩、後八十兩の金は。

甚三　御氣遣ひなされますな。其後金も大方調うて爰に三十兩持つて居りまする。

要助　ヤア、そんなら五十兩の金が調うたか。マアうれしい〱。

甚三　調はいで何と致しませう。私が兄は軍助と申しまして、吉田の御家にて舊功のお草履取。

要助　あの鯉魚の一軸といふは唐土の梁の武帝の御筆、暗夜に開けば鱗より光を放つ稀代の掛物、わが心に松君と云ひし時、弟梅君誤つて締絹の鯉に眼を入れしかば、忽ち拔出し、庭前の池へ入りしを、兄軍助抱き留めて掛物へ戻せし忠義の者。

甚三　その弟に生ぜし效もなう、身の徒らよりお國を立ち退き、方々と流浪の身の中、お家の騒動、掛地は紛失、少將殿も敢無き御最後と、聞いた時はびつくりせまいか。直ぐ樣お國へ馳付けまして御座りますれど、はやお家は伯父御常陸の大掾樣が押領して、御一門御一家中は散り〱ばら〱。

要助　サ、松君も既に危き難儀を家老山内權二が計略に依つて、天狗に取られしと僞り、密かに今宿位之助久春と改名して、寶の一軸詮議の爲姿をやつし手代奉公。憂き艱難のその中に、不思議に知れた寶の在處、請出さうにも引負の金の才覺。諸事萬事其方衆の志、忘れは置かぬ、忝いぞや。

甚三　これは又有難い御詞に預りまして御座りまする。三代相恩の御主ぢやもの、御世話致さいで何と致しませう。

おさく　さうで御座りまする。こちの人へ、其卅兩の金はどうして調うたえ。

甚三　サア、これはあの何。(ト思入れ。)聞きや。出家といふ者は賴母しい者ぢや。靈岸寺の御隱居へ、此度の主筋の御方を歸参させませうと、何のかのと譯を話したれば、成程と呑み込んで、祠堂金の内卅兩貸して貰うたのぢや。

おさく　ハテ、それは親切な事ぢやなア。さうして娘のお糸は何處へ連れて行かしやんしたえ。

おくみ　ほんに、昨日からお糸樣は見え

ぬ。何處へ行かしやんしたことぢやぞ
いなア。
（トこの中甚三行き詰ることなしあつて、）
甚　三　サア娘のお糸は。
おさく　お糸は何處へ遣らしやんしたえ
（トいふ中、左兵衞お糸を連れ出る。）
左兵衞　甚三様、お内に御座りまするか。
（ト云ひ内へはひる。）オヽ、甚三様は爰
ぢや。娘御を親方に見せました所が、
えら登り、えら惚れぢや。
（ト云ふを打消し、甚三こなしあつて、）
甚　三　アヽ、これは／＼、靈岸寺の御使、
娘を連れてよう御出でなされました。
サア、靈岸寺の御使、ナア、サ、お使。
（と種々仕かたして、呑込ます。左兵衞他
の事云ふなと心得て、矢張云うて居る。）
左兵衞　イヤもう、卅兩の金は、お渡し
申す。早う件の證文を。
甚　三　サア其金。（ト思入れ。）サア、か
ね〴〵娘を貸して呉れいと仰しやつ
て、なア、仰しやつたに依つて、送つ
て御出でなされたのであらう。彼方様
で御座りまするなア。
（ト漸々左兵衞呑込む。）
左兵衞　エヽ、成程。送つて參りました
ので御座りまする。
甚　三　とつと、お糸を靈岸寺へ茶の給
仕に遣つて置き乍ら、己もとんと忘れ
て居た。ハヽヽヽヽ。なア、娘よ、茶
の給仕に行て居たなア。
（トお糸に呑込ます。）
お　糸　アイ、給仕に行て居りました。
母様、わたしが留主の中は嘸淋しかつ
たで御座んせうなア。
（トおさくこなしあつて、）
おさく　こちの人、あの娘は二人が仲に
出來た子ぢやないかえ。
甚　三　ハテ、それが何としたぞいなう。
おさく　サア、それぢやに依つて、給仕
に遣らしやんすならわしにも相談づく
で。（ト思入れ。）靈岸寺で金借ろ事は止
めにして下さんせいなア。（ト泣く。）
甚　三　妙な事を云ふものぢや。そんな
ら、靈岸寺で金貸らいでも何處ぞで金
の工面が。
おさく　サア其金の心當は。（ト云ふを止
め、）
甚　三　心當があるか。
おさく　そりやないとも。（ト行詰る。）
甚　三　何をきな／＼とぬかすやら。こ
れ靈岸寺のお使、きよろ／＼して居ず
と、もうお歸りなされませぬか。
左兵衞　サア、扨、マア證文さへ出來た
ら。
甚　三　ハテ、扨、マアお歸りなされま
せ。晩程までにな、マア、ようお出で
なされました。

左兵衞　エヽ、成程、其間に兩國橋の綿屋まで行つて參りませう。暮までに駕籠を持たせて、（ト思入れ。）又お糸樣を茶の給仕に借りに參りませう。

（ト左兵衞はひる。と又あるき出て。）

あるき　甚三殿、内にか。人殺しの御詮議ぢや、會所までお出でなされませ。今ぢや〳〵。

（トこの中、要助を抑へ、甚三ぎつくり。要助いろ〳〵あつて。）

甚三　アヽ、おりや強う腹が痛むが、女房ども大儀ながら我身。

おさく　アイ〳〵、わしが往て來う。序に尋ねて來たい事もある。そんなら往て來うわいなア。

（トあるき、サア〳〵御座りませと云ひて連立ち、表へ出て、おさく思入れあり。）

おさく　兩國橋の綿屋。大方。（ト思入れ。）どりや行て來うか。

（ト唄になる。あるきを連れ立ち、おさく橋懸りへはひると、甚三殘り、思入れあつて。）

甚三　ヤア、お二方樣、此處は惡う御座ります。マア奥へ御座りませ。

要助　そんなら甚三殿。

甚三　サア〳〵、お出でなされませ。

（ト唄になる、兩人はひると、左兵衞思入れあつて、後、合方。）

甚三　マア、質札は手に入り金子の事もよし。（ト思入れ。）差當つての難儀は要助樣。お若いとて世を忍ぶ身で勘十郎を。（ト思入れ。）人を殺せば下手人。まさかの時は御身代りと。（ト思入れ。）コリヤ、お糸よ、最前いうた通り、御主の爲親の爲、白拍子屋へ賣られてくれよ。

お糸　お前や母樣の爲なら、私が身はどの樣になつても大事御座んせぬ。白拍子屋へなりとも傾城屋なりとも、賣つて下さんせいなア。

（ト甚三泣く。）

甚三　ヲヽ、出かした。賢い事よう云うてくれた。コリヤ嬶に何にも云ふなよ。

（ト甚三可愛いや〳〵と泣く。）

お糸　ソリヤ合點で御座んす。

甚三　勤めと云ふものは、もう〳〵大抵辛いものぢやが、辛抱して往て呉れ。

お糸　お前や母樣の爲なら、どんな辛抱でもするわいなア。

甚三　ヲヽよう云うてくれた。可愛いや〳〵〳〵。

（ト靜かなる合方にて、淺山主膳衣裳羽織袴大小侍にて、家來を連れ花道より出て。）

主膳　さて〳〵國許とは違うて賑はしい事ぢや。誠に花のお江戸ぢやてなア。

家來　左樣で御座りますな。

（トいひ〳〵、舞臺へ來る。）

主膳　確かに此處と聞いた。案内致せ。
家來　頼みませう。道具屋甚三殿といふはこれで御座るか。
甚三　甚三はこれで御座るが、どれから御出でなされました。
主膳　イヤ苦しうない者で御座る。甚三殿は御在宿かな。
甚三　ハイ卽ち私が甚三で御座りまするが、ついに御見受けませぬお侍様。してあなたは。
主膳　吉田家の家老山田權之頭武國が悴、主計之介武季。
甚三　スリヤ、あなた様が主計之助様。
（トはつと當惑の態。）
主膳　イヤ驚かしやる事はない。ちと御意得たい事があつて、わざ／＼尋ねて參つた。苦しうなくば通りませうか。
甚三　先づ／＼、お通り下されませう。
主膳　其方共は旅宿へ歸れ。
家來　ハツ、畏まりました。
（トはひる。主膳上座へ通る。）
甚三　扨はあなたが、承り及びました主計之介様で御座りまするか。面目もない御對面を仕ります。
主膳　軍助が弟糸平、今の名は甚三郎とやら、まづは御別儀無い態にて、珍重／＼。
甚三　貴方様の御妹おさく様を不義密通、剩へ、連立ち退きました不屆、嘸お腹立ちで御座りませう。
主膳　幼少で引別れた妹、其方と密通せしとて、藥の上より養子に參つて他門となる某、何の腹立てよう。手前其義には參らぬ。
甚三　左様なれば、何ぞ他に御用事でも。
主膳　如何にも。拙者其許に頼みたい仔細といふは、騙りの女詮議で御座る。
甚三　何、騙りの女詮議とは、な。
主膳　仔細御座つて詮議仕るが、何と申しても當所不案内の某、幸ひかな、其許當所に住居といひ、此詮議をなし下さらばそれを功に。（ト思入れ。）
甚三　浪人して御座れども、實父武國殿へ存生の勘當の詫の綱、此義御承知下されうか。
主膳　首尾よく仕了ふせなば、夫婦共勘當の儀は拙者が胸に御座る。氣遣ひ召さるな。
甚三　エヽ有難たう存じまする。何が扨、望みまする所で御座りまする。お氣遣ひなされまするな、其女めが詮議、私が命に掛けて尋出して、御目に掛けませう。コリヤ／＼お糸、用がある。一寸來い／＼。
お糸　アイ／＼、最前から様子は聞きました。そんならあなたが伯父様で御

座りまするか。ようマアお出でなされ
ましたなア。
甚　三　ちよつぼりと御挨拶で御座りま
する。
主　膳　ハアヽ、これは妹めとお手前の
仲に出來ました娘で御座るかな。サア
サア、爰へ來い〳〵。
(ト招く。アイ〳〵と云ひ寄る。)
中々よい器量かな。コリヤ隨分と二親
のいふ事を聞いて、利口者になれよ。
シテ母は何處へ往たぞ。
お　糸　母樣は留主で御座りまする。も
う追付け戻つてで御座りませう。
甚　三　アヽこれ、早う戻りはせいで、
何處へ寄つて居る事ぢや知らぬ。
主　膳　イヤ、其樣に御世話召されな。
もう歸るで御座らう。拙者も奥で休足
致し、妹が歸りを相待ちませう。
甚　三　左樣ならば、お賴みの樣子も。
主　膳　奥にて委しうお話し申さう。甚
三殿。
甚　三　サア、かうお出でなされませう。
(ト唄になり、皆々はひる。ト後合方、お
さく左兵衞を連れ戻りて家へはひる。)
おさく　夫に違ひは御座りませぬかえ。
左兵衞　何の噓をいはうぞいなア。
おさく　マアこつちへ通つて下さんせえ。
左兵衞　さうして、路々、立てる〳〵と、
まあどうして譯が立ちまする。
おさく　ハテ、甚三殿が合點しても、此
妾が合點せぬ。奉公人高で卅兩の金さ
へ返してさへすればよいぢやないか
え。
左兵衞　金さへ戻りやよう御座りまする
が、其金が御座りますかえ。
おさく　サア、其金は爰にあるさかいで。
(トいふ中、奥より甚三お糸を連出る。)
甚　三　オヽ女房ども、今戻りやつたか。
(ト云ふ。おさくむつとして、)
おさく　アイ、今戻つたさうに御座んす。
(ト甚三左兵衞を見て、)
甚　三　そつちやに居る人は誰ぢや。
(ト左兵衞まぢ〳〵として居る。)
おさく　ハイ、靈岸寺の御隱居から、金を
返へして呉れいとて御座りまする。(ト
むつとして云ふ。)
甚　三　ハテなう。
(ト空ことづけ。おさくつか〳〵往て、甚
三が胸倉を取つて、)
おさく　これ、こちの人、エヽこなたは
なう。
甚　三　コリヤ、恨があるならば、後で
聞かう。マア悅ばす事がある。
おさく　というて、良いこつちやあるま
いわいなア。
甚　三　國から御兄御樣が見えた。
おさく　エヽ兄御とはえ。

甚三　そなたの兄御、主計之助武季様が見えた。
おさく　エヽ。（トおさくびつくりする。）
甚三　びつくりしやんな。叱る處へは行かいで、そなたやわしが勘當を許すと云うてぢや。よい詫の種を拵へて奥に待つて。
お糸　私もお目に掛かりました。お前もちやつと會はしやんせいなア。
おさく　小さい時に別れた兄御、それが見えたに依つて、お前やわしが不義の科を、何とぞ云うて見えたかと思や、父様に御頼み申して、お前やわしが勘當を許さうと云うてかえ。
甚三　イヤもう主も會ひたがつて、大抵や大方待つてぢやないわいの。
おさく　ヲヽうれしや〱、日頃わたしが神佛様を祈る効ありて、コレ悦びや、お糸。そなたを國へ連れて往んで、侍の聟取つて遣るぞや。もう〱こんな嬉しい事はない。（ト悦ぶ。）
甚三　ハテ强い悦びやうなア。
おさく　これをマア悦ばいで、何をマア悦ばうぞいなア。
甚三　大抵に悦んで、ちやつと御目に掛かりやいなう。
おさく　イエ〱久振で會ふ兄様、一寸櫛も入れたし、洗濯袷など着替へうわいなア。
甚三　贅なことばつかり云やんないなう。
おさく　イエノ〱、何をするも敬拜と云ふわいなア。
左兵衛　時に私はどう致しませう。
おさく　イエノ〱、娘はもう賣るこつちや御座りませぬ。
左兵衛　サア、そんなら卅兩の金、今戻して下さりませ。
おさく　サア、その金は今。（ト甚三にこなしありて。）今聞いての通り、兄様に會うて其上には、つい五十兩や百兩は貰うて、お前に返す。マア暫くの中、納戸へなりとも往て待つて下さんせ。
左兵衛　いか樣、最前からのお話では。（ト思入れ。）如何にも納戸へ行きませうわいの。
甚三　コリヤ女房卅兩の心當は。
おさく　御座んす〱。其金は爰にアノ。（ト出さうとしてこなし。）マア私に任せて置いて下さんせ。（ト思入れ。）サア肝入さん、娘もおぢや、こんな嬉しい事はないわいなう。
（ト三人奥へはひる。甚三こなしあつて、合方。）
甚三　エヽ肝入としたことが、何もかも打明けて。（ト思入れ。）それはさうと

主計之助樣、嘸ぞ御待ち兼ねで御座りませう。主計樣、それにお出でなされますか。

主　膳　イヤそれへ參りませう。(ト思入れ。奧より出る。)　一寸餘所ながら承れば、妹が戻つたさうに御座る。どれに居りまする。

甚　三　只今これへ參りまする。何はなくとも女房ども、お盃を持つておぢや。お糸よ、お煙草盆お茶も持つて來い。

(トやかましう云うて居る。奧より、)

おさく　あい〳〵、何もないけれど祝うて御盃なりとも。

(トお糸盃を持つて向うへ出す。銚子を持ち恥かしさうにうつむいて居る。主膳宜しく。左兵衞出てはひり、外に覗うて居る。)

甚　三　ハイこれへ出られましたが私が女房、あなた樣の御妹御で御座ります。埒もない不調法の段お許しなされて下さりませ。

主　膳　イヤたつて通つたことなれば是非がない。この上ながら夫婦仲よう添ひ遂げたがよい。

おさく　アイお許しなされて下さりませ。小さい時からあなたは養子に御出でなされて、父樣の傍に育ちまして大人しうして居りましたが、ついひよつとした事で主と夫婦の樣な物で、父樣を捨てゝ置いて、マアこつちから勘當をした樣なもので御座りまする。こりやもうひよつとした拍子で御座りました程に、兄樣御許しなされて下さりませえ。(ト恥かしさうに俯向いて居る。)

主　膳　イヤもう褒められた事でもなけれど、戀は心の外とやら、何事も緣であらう。小さい時に別れたが、まあ成人して我も滿足。ヤ何、甚三殿、斯樣な不束な妹めで御座るから、末永う添ひ遂げてやつて下され。

甚　三　イヤもうくどう云ふ程屑が出るとやらで、勘當の御詫の手掛りに、お盃を頂きや。

おさく　アイ左樣ならば兎角兄樣の御慈悲で、とゝ樣へ御詫申して勘當のゆりまする樣に、お願ひ申しまする。

甚　三　それに御如才はないわいなう。(ト思入れ。)サア一ッお上り下されまして、おさしなされて下さりませ。(ト銚子を持つて。)

主　膳　然らば左樣致さう。イヤこれは慮外で御座る。

(ト受ける、甚藏酌する。主膳飲みて思入れ。)

サア妹、改めて兄弟の盃一つ飲みやれ。

おさく　アイ〳〵御戴き申しませう。この上ながら勘當の儀を。

主　膳　とかう夫婦仲よくして。
甚　三　一つ飲んで、あなたへ戻しや。
（ト此臺詞二三度、二人口々に云ふ。主膳臺詞の内おさく主膳顔見合せ、）
おさく　ヤアお前は。
主　膳　そちは。
おさく　ハアヽヽヽ。
（ト合方になる。）
甚　三　久し振りで會ふことで、きつい驚きやうではある。コレ主計樣の御座つたは、わが身を尋ねて會ふと思召してのお出でぢやわいの。
おさく　そんならわたしを尋ねん爲に。
主　膳　そちを妹とも知らず。
おさく　お前を兄樣とも知らず、顏を知らねば名も違ひ、昨日は確かに主計樣。
主　膳　常陸大掾殿の家臣淺山隼人が養子となり、只今にては淺山主膳。
おさく　お顏を見知らぬその上に、御主も違うて。（ト思入れ。）ハアヽヽヽ。
（ト泣く。主膳繩捌きしておさく方へ行く。甚三留めて、）
甚　三　アヽいや／＼、主計樣。血相してこりやまアどうで御座りまする。
おさく　こちの人、わたしや繩掛かる覺えが御座んす。
甚　三　繩掛かる覺えがあるとは。
おさく　騙りの科で。
甚　三　ムヽ、そんなら奧で主計樣の仰しやつた、騙りの女と云ふは。
主　膳　現在の妹とも知らず、血を分けた兄とも知らず、五十兩の騙り事。
（トおさく五十兩の金を出し、主膳の前へ直し、）
おさく　人殺しの場で、お前を騙つた五十兩の金、お返し申しまする。
甚　三　スリヤその金が。
（ト甚三びつくりして、おさくを捕へて向うへ打ち付ける。）
お　糸　アヽこれ父樣。
（トとりさへるを構はず、甚三おさくをおつかぶせ、）
甚　三　構ふな、退いて居らう。ヤイ面汚しめ、貧乏しても甚三は男ぢや。血に以前は大小も差した者ぢや。身がなんぼう零落ても、文字半錢、歪んだ事して、此面は立たうと思ふか。假初ながら五十兩といふ金、この甚三がいひ付ける樣に思召す。主計樣の手前、他人の千萬人の苦よりも恥かしうて、この面が上がらぬ。さア何の爲に騙りあがつた。おのれが内證事にする金であらう。おれがかゝぢやを可愛とぬかすお糸まで、面恥かしがらす人外め、何の爲に騙りしたのぢや、ぬかさぬか、アノ大盗人めが。（ト甚三腹立てるこなし。）

おさく　こちの人、内證遣ひに要つたかとは、そりやあんまり胴慾で御座んすわいなう。

（ト泣き付くを飛ばして、甚三こなし。）

甚　三　何が胴慾、ヤイおのれが爲にせぬ金を、今までなんで隱して居つた。

おさく　こちの人。

甚　三　ナヽヽ何ぢや。

おさく　宿位之助樣を世に立てたい、吉田の跡目を立てたいと、日頃からお前の願ひ。少將樣に拜領の刀をば質屋へ持つて行つて、預けさしやんした其後金はと問ひたれば、おれが心當があると、苦も無う云うて居やしやんすけれど、心に懸かる金の出所、漸々質に入れて居る折から、金持の他の男が殺されて居るもの。噂を聞けば五十兩。アヽ内ぢやなアと、思ひながら氣の急く儘に通り掛かつて、刀の詮議。現在の兄樣とは顏をも見知らず名も違うて、主膳樣という御侍樣。御情深いお詞に甘え過ぎて出來心、殺されたは私が兄樣、五十兩の金は私が無理に遣はしましたと、騙り了ふせた昨日の金。嬉しやお前の用に立て、悅ばせませうと、とつぱかはと戻つて閾を越せば、そつと怖さも身にしみて、騙つた金とは云ひにくさ、何うか斯うか出し遲れ、案じる内に最前の肝入付ける詞の顚々、お前の素振も合點が行かぬと、會所へ行つたも上の空、直ぐに兩國へ行つて問へば娘は傾城奉公。はつと思うて胸を痛め、暮相までに譯立てようと肝入殿を連れて戻つて、お前に何かの相談せうと、思ふ間もなう此仕合せ。なぜあの子を賣るならば相談しては遣らしやんせぬ。いかに御主のお爲ぢやとて子を賣るを、うかうかと見て居るやうな女房ぢやと思うて、今まで添うて居やしやんすか。内證事の身のよしに盜み騙りをするやうな、わたしが心と思うてか。大事の御主と云ひ、いとし可愛いゝ夫や子を、身を捨てゝの騙り事。内證にする金かとは、ようむごい事云はしやんした。そりやお前、胴慾ぢやぢや。胴慾ぢやわいなア。

（トいろいろあつて、おさく泣くと、甚三こなしあつて、主膳に顏見合せ、又顏をそむける。）

甚　三　女房ども、日頃の心はよう知りながら、恨みを云うたは面目ない。堪へてたもたも。

（ト泣く、主膳も始終泣く。）

主　膳　せめて山田主計之助と名乘れば、其場に於いてかういふ事も出來まい。流石は實父武國殿の種程あつて主夫への騙り事、ホヽ出かしたと賞めら

れもせう此場の有樣。
甚　三　せめて仕損じでもする事か。
おさく　騙り了ふせた身の因果。
主　膳　見逃しならぬも慈悲の因果。
二　人　因果同志の。
三　人　寄合ぢやなア。
（トじやん／＼の鐘なる。おさく胸に應へるの思入れ。左兵衞つぃとはひる。）
主　膳　始めての役目、許し置かれぬ女、覺悟せい。
おさく　サア繩お掛けなされませ。
主　膳　覺悟よくば。
（ト主膳おさくに繩掛けうとする。甚三留めて、）
甚　三　待つた主計樣。女房そちや繩掛くる事なるまい。
おさく　繩掛くる事ならぬとえ。
甚　三　權左衞門殿の最前のお詞、主ならでは鯉魚の一軸渡さぬとの事。今繩掛かつて何者か掛物の質受するぞ。
おさく　エヽ。
甚　三　一人の娘を勤め奉公、拜領の刀まで心を盡した忠義も水。そちが騙りの功も空しく犬死するか、狼狽者。
おさく　成程、わたしが行かねば渡らぬ掛地。
甚　三　受け出したその上で。
おさく　繩掛かるとも言譯するとも。
甚　三　忠義を立てヽ後の事。
おさく　どうぞ暫しの。
二　人　御猶豫を。
主　膳　イヤそりやならぬ。養父淺山隼人が主君を頼む反逆。公の怨敵たる吉田一家、宿位之助を世に立てんとする鯉魚の一軸、手に入るを見逃しては武士道が相立たぬ。
甚　三　スリヤ暫しの内の御用捨は。
主　膳　叶はぬ／＼。
（ト甚三おさく顏見合せ、つぃと當惑する。）
甚三殿／＼妹めはまだ歸りませぬかな。
甚　三　何んとおつしやりまする。
（ト主膳鳥目のこなしにて云ひて、）
主　膳　主膳のこの程は眼病に御座る。この病が出ますると何か遮りが何があるやら、妹が居りまするやら、とんとわかりませぬ。妹が戻るまでかうしてもゐられまい、この間に刀と一軸を受戻し、イヤサ、妹が戻るまでこれにて休足致さうか。
甚　三　有難い今の御言葉。
おさく　これこちの人、昨日の質の廿兩。
甚　三　娘が身の代卅兩。
おさく　都合合はせて五十兩。
甚　三　後の五十兩の心當は。
（ト當惑のこなし、主膳以前の五十兩の金をやる。）

二人　スリヤこの金を我々に。
主膳　エヽもう何時(なんどき)であらうなア。
二人　エヽ。
(ト拜む。甚三こなしあつて、)
甚三　早う行きや。
おさく　アイ。
(ト唄になる。おさく向うへはひる。ト橋懸りより彌九郎庄八を連れ、家來大勢出る。)
彌九郎　そりや。
(ト家來ばら〱とはひる。甚三立廻りにて引退け、)
甚三　待つた狼藉、コリヤ何となされますなア。
彌九郎　慮外者、うぬ手向ひするな。
甚三　イヤ手向ひは致しませぬが、あなたは。
主膳　コリヤ身共が相役。必ず粗相するな。
甚三　スリヤお役人様。ハツ〱〱。
(ト控へる。)
彌九郎　主膳殿、科人の女に繩打たしやつたか。
主膳　彌九郎殿、科人の女これに居る事、貴殿はどうしてお知りなされた。
庄八　その注進はこの庄八、勘十郎が持つて居た金子騙(かた)つた女が恰好、彌九郎樣のお話で思ひ合はせば甚三が女房、なり恰好合ふからは、引負(おひ)の金催促がてら來かゝつて、何もかも注進したのぢや。
彌九郎　主膳殿、妹の血筋に引かれお詮議が手ぬるく見えます。
(ト奥より左兵衞出て、)
左兵衞　最前から始終の樣子は聞いた。こりやマアおれを遣(や)つたのぢやな。サア卅兩の金、立金するか、娘を渡すか、どうするのぢや。
甚三　それ卅兩の奉公人。(ト子役をつき出す。)
彌九郎　科人の女めは。
(ト主膳、左兵衞甚三をつき退け、)
主膳　科人とつた。(ト子役に繩かける。)
皆々　これは。
主膳　騙(かた)りの女逐電したれば、親子は一體。科人の出るまではこの娘は人質さ。
左兵衞　アヽイヤその娘は卅兩の。
主膳　卅兩が何と致した。人を買はば人買ぢやな。先年梅君殿を害し、仕置に逢うた惣太とやらが一類か。
左兵衞　イエ左樣では。
主膳　但しこの度の娘を庇(かば)ふは、この騙りの腰押しか。
左兵衞　サアそれは。
主膳　いづれにもせよ怪しい奴、それ家來共。

家來　ハッ。（ト寄らうとする。）

左兵衞　アヽ〳〵イヤ〳〵イヤ〳〵、人買ぢや御座りませぬ。これは又迷惑な。

主膳　左樣でなくば控へて居らう。

彌九郎　ハヽヽヽヽ、金で買つた娘に繩掛け、この場を助ける情の間に合ひ。盜賊は甚三が女房、こなたの妹、みすみすの身代り立て、人違ひされては御役目が立ちますまい。

主膳　ハテ拗要らざる御世話、騙られうが、人違ひ致さうが、手前の誤り。申譯は拙者一人腹切る分の事、餘人の御腹は貸り申さぬわい。

彌九郎　口でばかりはら〳〵と、貴殿は腹のかけ替へでも御座るか。腹と思へど切れば痛いもので御座る。ムヽヽヽ

ホヽヽヽヽ。

甚三　主膳樣、何も申しませぬ、奉公代りの情の取りなり、エヽ。

（ト拜み泣き、主膳氣味合あつて、）

主膳　騙りの女取る上は、彌九郎殿もはや歸りませう。

彌九郎　イヤ歸りますまい。騙りの女の詮議は落著しても、人殺しの詮議が濟まぬ。（ト懷中より片袖を出し、思入れ。）勘十郎らが殺された場所に、殘つてあつたこの片袖。

庄八　御獄人の事を根に持つて、勘十郎殿を殺したは、要助めに違ひは御座りませぬ。

彌九郎　その要助こそ家寶尋ぬる松若丸、今元服して吉田宿位之助久春と名乘る由、引出して詮議して面縛させん。それ家來ども。

家來　ハアヽヽヽ。

（トかゝる。甚三立廻りあつて投げのけ、庄八かゝるをあてる。）

彌九郎　コリヤ、うぬ慮外をするか。

甚三　止めまするはあなたのお爲で御座りまする。

彌九郎　何、身共が爲とは。

甚三　下手人が違ひました。

彌九郎　デモこの片袖。

甚三　サア片袖の紋は石持に桐の臺、私の定紋、即ちこの袷の紋と同じ事。要助が紋は確か三升に川の字とやら。

彌九郎　ヤアヽヽヽ。（トびつくりする。）

主膳　何、彌九郎殿、どうかお詮議が甚だ相違致すが、貴殿それでもお役目が立ちますか。後日に殿より御咎め御座らば何と召さるゝ。但し其時は腹でも召さるゝか。腹と申すは切れば中々痛いもので御座る。ハヽヽヽ。

（ト彌九郎まじめになる。此間庄八種々思案して、）

庄八　ヲヽさうぢや、今思ひ出した。いかにもその片袖はわが物ぢや。この

間深川の八幡で、要助に着替へさした事見て置いた。人殺しは要助ぢや。何と動きは取られまい。今要助めを引出して、何もかも糺して見せう。まだ人殺しばかりぢやない、鯉魚の一軸を欲しがるので、大方素性も知れてある。要助が本名は、大掾様よりのお尋ねのある吉田宿位之助、今おれが引摺り出して。

（ト庄八行かうとする。主膳ぼんとあてる。）

彌九郎　コリヤ町人を。

主膳　殺しても大事御座らぬ。

彌九郎　そりや又なぜに。

主膳　人殺しの詮議致すは、拙者と其許。采配する町人め、以後の見せしめ、役目先の慮外は切捨てサ。

彌九郎　ムヽ。（ト思入れ）御尤。

主膳　家來共、死骸片付けい。

主膳の家來　ハッ。（ト云うて死骸片付けはひる。）

彌九郎の家來　どうやら雲行がわるなつた。藥の出ぬ中、どりやお暇申さうか。（ト逃げてはひる。）

彌九郎　主膳殿、何ぼ科人の肩持つても、要助は松若丸、成人の名は宿位之助久春。

主膳　シテ宿位之助久春と云ふには何ぞ證據があるか。

彌九郎　その證據はこれなる庄八。（ト邊りを見て、）何をいうても死人に文言。エヽいまく／＼しい。

主膳　證據もない詮議呼ばはり。マアマア控へさつしやれ。

彌九郎　イヽや控へますまい。宿位之助でないにもせよ、要助は人殺し。

主膳　イヤ人殺しはこの家の主。

甚三　自身の白狀致す上は、下手人に相違御座りますまい。

主膳　天晴の白狀、勘十郎が下手人甚三腕廻はせ。

（ト主膳甚三に繩掛ける。）

お糸　アヽこれ。

（ト寄らうとする。彌九郎引据ゑる。奥より要助おくみ出ようとする。）

主膳　アヽイヤこれさ、出まいぞ、イヤサ娘さし出るな。たとへ古主にもせよ、今は主君の仇敵、目にさへぎつては許されぬぞ。人殺しの甚三、騙りの女諸共に、淺山主膳が召捕つた。旅宿ならばツイとく、サアとくと、詮議を糺すのさ。

彌九郎　スリヤ貴殿がとくと詮議を。

主膳　糺してお目に掛けう。

彌九郎　ハテなア。

甚三　お糸、われや嘸ぞ手が痛からうなア。

お糸　手の痛い事はいとひはせねど

な、母様が戻らしやんすなら、嘸ぞ泣かしやんすであらうなア。

甚　三　可愛いや。（ト泣かうとする。）氣遣ひすな、われもおれも言譯立つて、ツイ戻る。ちつとの間ぢやと思うて。

彌九郎　何を馬鹿な。サア主膳殿、歸りませう。

主　膳　御同道仕らう。家來共、繩付を引立てい。

家　來　科人立たう。

（ト奥より要助おくみ出ようとする。彌九郎見ようとするを主膳引返し、要助おくみ障子びつしやりさす。）

主　膳　家來、供せい。

（ト唄になり、甚三子役を引立て、主膳彌九郎向うへはひる。ト後合方、おくみ要助奥よりせり合つて出る。）

要　助　イヤ〱、放しや〱〱。

おくみ　マア待つて下さんせ、お前は何で死なしやんすぞいなア。

要　助　これが死なずに居られうか、人殺しの科を身に引受け、繩掛つた甚三が志、お糸が難儀も皆わし故。最前の時、もう名乘つて出ようかと思うても、情ある主膳が詞、一軸も手に入らぬ、早まつては甚三夫婦が苦勞も無駄と控へたが、たとへ寶が手に入つても、親子が難儀をのめ〱と見すてゝ家が立てられうか、何と生きて居られうぞいなう。

おくみ　さうで御座んす、道理で御座んす。サアそんならとてもの事に私から先へ殺して下さんせいなア。

要　助　何といやる。

おくみ　死なば一所と言交はした、仲では御座んせんかいなア。

要　助　そんならそなたも死んでたもるか。

おくみ　お前を先立てゝ、何樂しみに。

要　助　三途川も手に手を取りて。

おくみ　必らず渡して下さんせえ。

（ト唄になる。兩人種々死用意する。行燈に書置をつける。この中人音して、權左衞門おさく出てくる。）

おさく　權左衞門樣、段々のお志、お嬉しう存じまする。

權　左　イヤもうあの百兩には及ばねども、大勢の人を使ふ永樂屋權左衞門、他の手代の手前もあれば、店の代物只やつたといふては濟まぬ。最前の百兩で一軸の質受引負も濟んだれば、早う要助を連れて往にたう御座るわいなう。

（ト云ひ〱、一軸をおさくに渡す。）

おさく　段々のお志、この一軸の手に入つた事を早う要助樣に。

權　左　コレ、序に娘にも會はせて下されや。

おさく　お會はせ申さいで何と致しませ

う。
（トはひる。要助おくみこれを聞いて火を消しさぐり出る。兩人内へはひる。）
ヤア火が消えて御座りまする。
權　左　ほんに火が消えて、闇ぢや。
おさく　どうして火が消えた知らぬ。
（ト云ひ〳〵、おさく火打箱を出して火を打つ。この間に要助おくみが手を取り危き仕組にて表へ出て、向うへ走り入る。）
權　左　どうぢや、火がつきましたか。
おさく　急しう仰しやるな。この間の雨氣で、火口が濕つてつくことぢや御座りませぬ。
權　左　娘よ、おくみはどこに居る。ねつから聲がせぬぞや。
おさく　よう戻つて御座るか知らぬ。要助樣、こちの人、お糸や。
權　左　マア早う火を點して下され。
（トおさく行燈を見て、火を點し、）
おさく　何ぢややら、ちよつと御覽じませ。
權　左　ほんに何ぢややら書いてある。（ト思入れ。）「書置の事」ヤ、、、、ヤ。
おさく　これ〳〵表にも、要助樣の手で書置が御座りまする。
權　左　「涙の隙に書殘しまゐらせ候。」
おさく　「我事より事起り、甚三親子が思はぬ牢舍。」
權　左　「生きながらへては義理立たず、先立つ不孝の程。」
おさく　「科なき人に科掛けんより、所詮この身は無きものと覺悟極めまゐらせ候。」
權　左　「隅田川の藻屑とならば一遍の御回向賴み上げまゐらせ候。」
おさく　「一軸も手に入り候へば、如何なる者にも世を讓り、吉田の後目相續賴入り候。」
權　左　「返す〴〵もお許し、これのみ迷の種に候。」
おさく　「南無阿彌陀佛〳〵。」
權　左　「めでたくかしこ。」これが何の芽出度い事。
おさく　そんなら娘お糸はわしが身替りに。
權　左　娘は死に行つたかいやい。
おさく　權左衞門樣。
權　左　お内儀。
おさく　こりやマア何とせうぞいなア。
（ト泣く。じやん〳〵と鐘なる。表の非人起きて、）
非　人　そんならおくみは隅田川へ。（ト思入れ、）要助といふは宿位之助。（ト思入れ。）先へ廻つて。（ト思入れ。）さうぢや。（ト走りはひる。）
權　左　これ〳〵、泣いて居る所ぢやない。隅田川の藻屑となると書いてある

からは、一時も早う追付いて。（ト尻からげる。）
おさく　さうで御座んす。マア何より大切な鯉魚の一軸。ヤアまつかいな贋物。（開き見てびつくり。）
權　左　ヤアほんにコリヤ贋物。こりや庄八がすりかへたか。
おさく　これ、それ云うて居る間に、お二人の命が危ふい。
權　左　隅田川へ追付いて。
おさく　行かしやんせ。
權　左　合點ぢや。
（ト權左衛門向うへ走りはひる。おさくも行かうとする。彌九郎出て、）
彌九郎　そりや家來共。
家　來　やらぬぞ。
（トおさくを取り卷く。）
おさく　コリヤ狼藉な、何をさしやんす。
彌九郎　ぬかすな、要助といふは吉田宿位之助、主人常陸の大掾殿が心腹の病、討殺して手柄にする。スリヤ家來共、家探し致せ。
家　來　ハハ、、、、。
（ト皆々奥へはひる。おさく行かうとする。）
彌九郎　待て。
おさく　それ所ぢや御座んせぬ。
（トふり切り種々立廻りあつて、兩人見えになると、奥より家來ばら／＼と出て、「動くな」とおさくを取り卷く。ト、チヨン／＼。）

返し道具

造り物。眞中に大いなる鳥居、兩方玉垣。すべて三圍の稻荷の體。兩方に大稻叢隨分物凄き景色。舞臺前砂場になる。橋懸り泥船。大ドロ／＼にて道具留まる。
（ト向うより、序の葱賣三四人出る。）
○　この三圍の中の鄉へ、京の問屋から葱が來ると云うて來た故、早う取つて行かうと思うて出たが、もう何時であらうなア。
△　まだ、八ツ過時分であらう。神鳴がごろ／＼と、氣味のわるいことではある。
□　さうしてお姬樣はどこへ行かしやつたやら。
○　お姬樣はあとの三人連が近付きぢやと云うて殘り、話してぢやわいなア。
○△□　あゝ又光つた、鳴らぬ内に中の鄉へ行かうか。
（ト大ドロ／＼になる。皆々あわてゝ桑原／＼と云うて、葱のかごを持つてはひる。ト向うより要助おくみ野分姬權左衛門出る。）
野分姬　宿位之助樣、よい處でお目に掛かりました。

權左　娘、よい處で會うたなァ。
おくみ　どの樣に云はしやんしても、わしや往ぬる氣はないぞえ。
權左　サア〳〵よいてや。最前からの話で、要助殿の身の上聞いてびつくりした。さういふ事ならこれまで仕樣もあらうもの。マア〳〵三人連でこちの內へ御座りませ。
（ト此臺詞の內にト〻本舞臺へ來る。）
要助　權左衞門樣のお志、お嬉しけれど、所詮この身は助からぬ人殺しの科人、他人に難儀を掛けんより潔よう死ぬる覺悟。野分姫殿、わしが事は思ひ切りそなたは國へ往んで下されいなう。
野分姫　又胴慾な事仰しやります。親の許した妹背の中、あなたが死ぬると仰しやるを見捨て何と歸られませう。どこまでもお供致しませうわいなァ。
おくみ　イエ〳〵要助樣はわたしが付いて居りまする。お前は構はずと國へお歸りなされませいなァ。
權左　コリャ娘、あなたは御大身のお姫樣、滅多な事云ふな。
おくみ　イエ〳〵大事御座んせぬ一戀に上下の隔ては御座んせんわいなァ。
權左　こりや親の前で一向藥袋ぢや。
野分姫　そつちに大事がなうても、こつちにある。自らが親の許し許婚の殿御、いはばそもじは假の妻。
おくみ　イヽエ假妻でも江戶妻でも、先にいひ替はした妾ぢやわいなァ。
野分姫　千でも萬でも、そなたを殿御に添はす事はならぬわいなう。
おくみ　イヽエわたしが添うて見せるわいなァ。
野分姫　イエ〳〵さうはならぬわいなう
おくみ　イエ〳〵なりまする。
野分姫　ハテ扨、ならぬわいなう。
おくみ　イエ〳〵なりまする〳〵。
（ト兩人せり合ふ中、大神鳴しきりに鳴る。と皆々耳をふさぎうつむいて居る。）
權左　オヽ今の音はひどい音ぢやあつた。サア〳〵其樣に夜がな夜つぴてせり合うて居ても果てしがない、マァマアこちの內へ來て、ゆるりとせり合うたがよいわいなう。
おくみ　アイ〳〵、そんならこちの內へ御座んせ。
（トおくみ要助の手を取る。野分姫振り放し、）
野分姫　エヽ厚かましい。お供してよくば自らが旅宿へお供するわいの。
（ト手を取り引据ゑる。おくみ振放し、）
おくみ　イエ〳〵わたしが連れまして往ぬるわいなァ。
野分姫　イエ〳〵自らがお供するわいな

う。
おくみ　イエわたしが。
（ト兩方へ要助を引張る。）
要　助　アヽこれは又二人ながらはしたない。サア妾を放しや〳〵。
權　左　マア〳〵妾を放せいやい。
（ト要助おくみが手を放す。おくみ取違ひて權左衞門が手を取つて、）
おくみ　イエ〳〵わたしが、（ト權左衞門と顏見合せ、）エヽお前ぢやないわいなア。
（ト突き飛す。この間に野分姫要助に取付き、お胴慾ぢや〳〵と云うて居る。この模樣の内に大神鳴鳴り、野分姫要助にしがみ付き、おくみ權左衞門に取付いて居ると、稍叢より剛藏法界坊にて出る。）
法界坊　アヽぐつたりと寢入つて居るものを、今の神鳴めが起しをつた。さうして耳の端で何ぢやほい〳〵と、エヽ業腹な、煙草なと吞んでこまさう。
（トすり火打を出し、四人顏見合せ氣味惡るさうなこなし。）
權　左　雷ばかりと思へば何ぢや氣味のわるい。どうやら雨も降つて來さうな。サアお二人ながら、こんな暗でお話しなされうより、マア私が所へお出でなされませ。サア娘もおぢや。
（ト皆々立つを法界坊見て、）
法界坊　ハハヽ、うまい〳〵。二人にびつくりおてまい心中かと思や、内へ行なうとけつかる。わいらはぼんやがもう寢たか、どこまで行にや、送つてやらうかい。
權　左　イヤそれには及びませぬ。サア彼此の無い中に、お二人樣おくみもおぢや。
（ト手を引き行かうとする。法界坊立塞がり、）
法界坊　何ぢや、おくみ、おくみとは耳より。（トおくみを見て。）
權　左　さういふこなたは。
法界坊　南無地藏の法界坊だ。
皆　々　ヤア。
法界坊　お前はこの間會うた爺樣ぢや、よい處で會うた。何と物は相談ぢやが、お前の娘わしにお呉れんか、さうすると可愛いがるぞえ、お前をおれが舅にして大切がる、どうぢや〳〵。
權　左　イヤ志は嬉しいが、緣組の事は親の儘にもならぬもの、たとひおれが得心しても、ならぬ娘。
おくみ　さうで御座んす。誰が又あの樣な乞食坊主と夫婦になるものか。嫌で御座んす、嫌ぢやぞえ。
權　左　あれあの通りにいふに依つて、マア緣がないと思うて。
法界坊　置きやがれ、長々と云うて居れ

ばつけあがりのした。乞食坊主ぢやないぞ。今に元服してお侍樣におなりなさるゝ。テモうまいかざがするなァ。こりやぢつとして居い、われにも用がある。

（トこの中權左衞門尻引からげ身拵する。）

野分姫　自らには何の用がある。

法界坊　ハヽヽ、此奴は昆布の樣な名ぢやな。コリヤ自らよ、悦べ、われにも惚れてやるわ。是で、嬉しいか〳〵。

權　左　エヽおのれは、團藏が法界坊とやらにその儘ぢや。（ト摑み付く。）

法界坊　ひんこめ、何さらすのぢや。

（ト突きこかす。權左衞門起きて又掛かるを、法界坊ねぢ付ける。要助掛からうとするを。）

權　左　これ要助、此處に構はずと二人を連れてこの間に。

（ト三人逃げうとする。）

法界坊　吉田宿位之助待て。

要　助　ヤヽなんと。

法界坊　うぬが本名は宿位之助と云ふか。

要　助　ヤ。

法界坊　しれた。常陸の大掾樣よりお賴みの松若丸、引括つて連れて行て、褒美には還俗して侍になる約束。何とこれから鰻卵の暴れ喰ひ、おくみは本妻、自らめは妾、どうだ、嬉しいか〳〵。

野分姫　イヤぢや、〳〵〳〵わいなう。

法界坊　エヽしぶとい引つさかれめ、コリヤ慘い目せにやならぬわいの。

（ト要助こなしあつて、）

要　助　扨は伯父大掾よりの廻し者よな。宿位之助と知つたわが身を。

（ト脇差を拔き法界坊に切りつける。法界坊かいくゞり要助が手を捕へ、）

法界坊　コリヤ何さらす。わいらが樣な手にあふ坊主ぢやないわいやい。わりやマア一體誰を切らうと思うてびこつきやがる。おれ樣を切らうと思うてひこ付くか、アノおれ樣を。

（トこれなりにてふり廻す、要助手の痛むこなしあつて、）

切れまい。わたしや切れぬぞえ。まつかう切りたか切らしてやらう。誰がよからう、誠切りたかうぬにせうか。（ト野分姫を切らうとする。）

要　助　これ野分姫殿、早う逃げて下されいなう。

野分姫　おやと云うて、あなたを置いて、

權　左　うぬ髮を放さぬか。

（トかゝる。法界坊笑ふ。）

法界坊　うぬから先へくたばり居らう。

（ト權左衞門を持たぞへたる刀にて切る。權左衞門ウンとこける。）

おくみ　ヤアとゝ様を。

（ト寄るを、法界坊おくみを當てる。野分姬是はと寄るを同じく當てる。權左衛門種々あつて。）

權左　ヤアおのれ、おれを切つたな。

法界坊　御意の通り、御年寄の最前からの御苦勞、餘り見る目がお笑止さに、私が慈悲、よう、お殺し申した。

權左　エヽおのれはなア。おれが命は惜まねど、定めておれが死んだ後で娘も殺すであらう、おくみちやつと逃げて吳れいやい。

（ト權左衛門起きる處を右の腕を打落す。權左衛門ウンとこけるを、要助振拔し、又切つてかゝるを、手早く繩掛ける。）

要助　コリヤおれを何とする。

法界坊　騷ぐな〳〵、悪い樣にはせぬ。ぢつとして居い〳〵。

權左　コリヤ要助殿を。

（ト權左衛門苦しみながら起きる。）

法界坊　コリヤ御丁寧にお縛り申して置いて、これから二人の娘達を　つ

この法界坊様が惚れなされたら、鯨に鯱。思入つたと得心して、應と云へ。否とぬかしや、引挾んで一　のち

剝いでお目に掛けまする。これを未來　や。

の土産に果報いみじき名僧ちやぞ。ヤイおくみ、何ほ否の應のとぬかしても、

（トこの中權左衛門苦々に目配せして行けと云ふこなし。要助おくみ野分姬連れ、

偉磯川田淵

權左衛門後よりそろ〳〵と花道へ行かうとする。法界坊しやべつて居てよき所にて皆を見る。)

法界坊　こりや。

(ト皆々ハイと云うて坐る。)

どこへうせさらすのぢや。

三　人　イヽヤちよつと。

(ト逃げようとする。大神鳴鳴り一皆々動かれぬこなしあつて。)

法界坊　ハヽヽこいつはよいわい、神鳴樣おれを贔屓ぢやさうな。隨分あいつらが動かれぬ樣に精出してお鳴りなされ〳〵。

(ト拍子付いて居るおくみ野分姫の手を取り引張り、無理に本舞臺へ連れ來る。要助權左衛門が腰に付き戾る。法界坊、野分姫おくみ二人を引摺る、權左衛門寄らうとするを法界坊睨みかける。法界坊野分姫を見て)

いつの間にこの樣な美しい物をせしめ上げる青二才め。こいつも美しい物ぢや。そんなら最前はい〳〵と云うたはわれらぢやなア、エヽけたいの惡い、うぬ二才め、うまい事ひろぐな。どうぢやおくみ、ウンと云やいなう。あの二才ぢやとておれぢやとて、ちつと白い黑いでこそあれ、黑い方には風味がある、ちよつと賞翫さする氣はないか。(トおくみにしなだれる。)

おくみ　エヽ汚ない、嫌ぢやわいなう。

(ト野分姫そろ〳〵と逃げる。)

法界坊　姉さん待つた。どこへ行かんす。

野分姫　わたしはちよつと。

(ト逃げようとする、　　　　、

野分姫　　　　云ふ。)

法界坊　心よう死になされ〳〵。(ト思入れ。)サア是からぢや。ヤイあざの隣の青二才め、二人の女の幻妻を付け廻して取りさらしたなア。サア宿位之助と有樣にぬかせ。

要　助　エヽ人非人め、知らぬわいやい。

法界坊　早うぬかせ。ヤイ早う宿位之助とこつき出せ。ぬかさぬか。ぬかさにや、いつそかう〳〵。(トむね打に打据ゑる。)

要　助　エヽ覺えない身を非道の責め、知らぬ事はいつまでも知らぬ。

法界坊　エヽしぶとい毛野郎め。よいわ、ツイや一寸ではぬかすまい。どりやどりや。(ト縄の端を稻叢へ括り付ける。)又聲立てあがるな、あゝしやべり居りやわるい。

(ト襤褸の袖をちぎり、猿轡を口々にはませ、こゝに居る野分姫おくみを見てにつこりと笑ひ、)

こがるゝ君　　　、これがしみかけうか。どちらにせうぞ、日頃の

思ひで　に。（
り。）さらば洞庭の秋の月
、（　き。）エヽ
やなア、かうし
て居る處はとんと本得心の姿。
。お辭儀
。どなたも御免下されませう。（
。）待つたり、えてかうい
ふ處へは、よう肥えた白いいゝ男が來
て、おれを泥へ投げ込み、こいつらを
連れて、此處構はずと御座りませとチ
ヨン／＼の幕ぢや。それでは狂言は詰
でもおれが詰まぬ。甚三めがうせたら、
よいわ／＼。
（トこれより砂場を鮑貝にて落穴を掘り
拵へることなし。權左衞門よろ／＼として
起きる。）
權左　早う娘逃げてくれいやい、おく
みやい。要助殿いなう。

法界坊　こいつまだ死なぬか、ハテ根の
よい親爺めなア。ヤァ德利子は見たが
德利親爺は今が見始め、とつくりと御
覽じませ、見るも浮世見らるゝも後生、
アノ親爺ぢや／＼。
（ト云ひ／＼穴を掘る。宜しく砂を掘出し
足を入れて見る。これでいゝと云ふこな
し。權左衞門よろぼひたから。）
權左　エヽおのれを喰付いてなりと。
法界坊　苦しくば早う死ね、南無妙法蓮
陀佛／＼。
（ト切り倒す。權左衞門死す。）
この自らめも美しい顔ぢや、こいつか
らいがめうか。おくみにせうか。イヤ
／＼これは閣にせう。（ト思入れ。）一に
二にだるまる殿は夜も晝も、赤い頭巾
かづき通した。ハヽ、自らめに當つた。
こいつも捨てられぬわいの。おくみの
君はとつて置きにせう、ちよつと自ら

めに。
（　。大神鳴にて野分
姫　。）
野分姫　エヽ穢らはしい、何するのぢや
ざいなう。
法界坊　何するとは　門の五
の云はずと　い。
野分姫　そんな事は知らぬわいの。
法界坊　エヽおのれも因果報のない、
い、
野分姫　さうして宿位之助樣はどうしや
つたざいなう。
法界坊　われ　る故
引括つて置いたわいやい。
野分姫　さういや其方を。
（ト懷劍を持ち突きかゝる。たゝき落し野
分姫を切る。野分姫切られながら種々あ
つて。）

コリヤ自らを殺すのか、今死んではどうも宿位之助様と夫婦になれぬ。死にとむないわいなう。

法界坊　ヲヽ道理ぢや〳〵。コリヤ自らよ、わが不便さにほんまの事を云うて聞かすわ。有樣はわれが惚れて居る毛二才めが、おくみと夫婦になる邪魔になるわれぢやに依つて、殺してくれいとおらは頼まれたのぢや。

(ト要助かぶり振り物云はれぬこなし。)

コリヤ恨みがあるなら宿位之助に云へ。おらは知らぬ〳〵ぞ。南無あみだ佛〳〵。

(ト抉る。大神鳴。雨車靜かに鳴る。)

野分姫　エヽ恨めしい久存樣、これ程思ふこの野分を、ようも〳〵殺さしやんす。これも誰故おくみ故。生き替り死に替り二人共安穩で添はさうか。

法界坊　ヲヽ可愛いや〳〵。その通りに恨みを云へよ。

野分姫　エヽ恨めしい。

法界坊　ヲヽ道理ぢや〳〵。

(ト抉り殺して雨車しきりに鳴る。)

降つて來た。オヽ寒なつた。からだがしいわりとなつた。着物を着替へたい物ぢやが、幸ひ〳〵。

(ト野分姫が上着を脫ぎ法界坊襤褸の上へ着る。)

オヽまたおかいこは溫かな。扨これからおくみが番ぢや。どうだ〳〵、心持はどうだ。

(トおくみこの中、雨にて心付くこなし。)

おくみ　エヽけがらはしい。要助樣をどこへ連れて往たぞいやい。

法界坊　要助事は稻叢と相住居〳〵。

(トおくみ寄らうとする。)

まだそればかりぢやない。これエイおれが云ふ事を聞かぬ故、自らめもこの通りぢや。

(トおくみ野分姫の死骸を見て、)

おくみ　ヤアお姫樣を。

法界坊　なんと見たか、おれがいふ事を聞かぬと、なんでもこの通りぢや、よい樣か。是に掛らせ給ふは、手向終りてばらされた德利親爺で御座る。近う寄つて御拜あらせませう。

(トおくみ樋左衛門が死骸を見てびつくりして、)

おくみ　ヤアとゝ樣を誰が切つた〳〵。

法界坊　腕だてさらす故おれが切つた。

おくみ　ヤア。(トふるふ。)

法界坊　うぬもひんしやんすりや、何でもこの通りぢや。

おくみ　サアそれは。

法界坊　いやとぬかしや要助めを。

おくみ　アヽこれ。

法界坊

おくみ　サアそれは。

法界坊　殺さうか。

おくみ　サア。

法界坊　サア。

おくみ　サア。

法界坊　サア／＼＼。

（トおくみを付け廻す。おくみしか／＼あつて落穴の傍へ寄るを、）

コリヤ／＼そこは穴ぢやわいやい。その　　　　で、　　　　ヤイ。

（ト云ふ中、法界坊　　　　、　　。向うばた／＼にておさく俵をかぶり走り出て、法界坊に行當る。）

おくみ　アレエ／＼。

法界坊　エヽどいつぢや／＼。

おさく　お許されて下さりませ／＼。氣の急く者で御座りまする。お許しなされて下さりませ。（ト思入れ。）おくみさんぢや御座んせぬかいなア。

おくみ　ヤアお作様か。遅かつた／＼／＼わいなア。（ト取り付き泣く。）

おさく　シテ要助はどこに御座りまする。

おくみ　要助は口を括つて稲叢に括り付けてあるわいなア。

おさく　エヽ。

おくみ　まだそればかりで御座んせぬ。と丶様が私らに追つ付いて、連れて往ぬると云はしやんしたを、あの法界坊がと丶様を切つたわいなア。

おさく　エヽ。（トびつくりして野分姫の死骸を見て、）コリヤお姫様も殺してある。そんなら、アノ。

おくみ　法界坊が殺しくさつたわいなう。

おさく　エヽ憎い奴で御座んすなア。さうしてその法界坊とやらはどこにをりまする。私がまた参じましたからは、喰ひ付いてなりとも其坊主めを。（ト云ひ／＼法界坊に行き當り、）こなたは誰ぢや。

法界坊　おれはわれが望みの法界坊ぢや。

おさく　エヽ。（ト大いにびつくりしておくみを圍うて顫うて居る。）

法界坊　ヤア偉い奴がうせたかと思うたら女郎才か、こいつも又一疋殺さにやならぬわい。ア丶殺生せにやなるまい。コリヤ見い、邪魔になる親爺めもこの通り、次に自ら姫もこの通り、また此上に要助めも打殺して。イヤこいつは殺されぬわい。白状させて金儲けぢや。おれが云ふ事聞かぬとおくみめも打殺す。うぬも怖か、ちやつと逃げい、邪魔すると、こいつらがよい手本ぢや。マアざつと筋はこんなものぢや。

おさく　エヽ聞けば聞く程大悪人、エヽ

こんな時にこちの人が居やんすりや。(ト思入れ。)よう御座りまする、私が一走り呼んで參りませう。

おくみ　それでも甚三は牢へ。

おさく　シイ〳〵。(ト目配せする。)

法界坊　何ぢや、甚三が牢へはひつた。ハヽ、よい手つがひぢや。この間深川でおれをどえらい目に逢はした罰、うまいものぢやナ。甚三が牢へはひつたからは、さらば一服下されう。

おさく　何よりは要助樣を。

(ト要助が繩を解く。要助猿轡を取つて、)

要　助　おさく、よう來てたもつた〳〵。これ姫は殺されたわいなう。

おさく　エヽ刀が欲しい〳〵。(ト身をもみ泣く。)

法界坊　よう〳〵泣樣〳〵。サア二才め、宿位之助と有樣にぬかせ。

要　助　知らぬわいやい。

おさく　そんなお方ぢやない、早うそなたは往にやいなう。

法界坊　嫌ぢやわいやい。

おさく　往んで下されいなう。

法界坊　ならぬわいやい。

おさく　どうぞ行んで下されいなう。

法界坊　退けいやい。

おさく　アレエ〳〵。(ト思入れ。)この間に早う。

(ト兩人が手を取り、逃がさうとする。)

法界坊引戻し要助おくみを一所に引き付け、おさくを拔上げる。）

法界坊　コナどち女郎め、太い奴の。金になる毛二才を逃がさうとしたうぬは、これがよいか〳〵。（トおさくをむがうねち付ける。）

おさく　サア〳〵腹が立つならわしをどの様になりともして、どうぞお二人を助けて下さんせ。法界坊とやら、これぢや、慈悲ぢや、拜むわいの〳〵。

法界坊　やかましいわい〳〵、頭は坊主でも佛は嫌ひぢや。うぬに拜まれて三文にもならぬ。それより褒美のすつしり、マアその二才めを。

（トかゝる、立廻りにておさくを引きつける。法界坊懷より一軸を落す。ちやつと取り三人見えにて、）

これこそうぬらが欲しがる鯉魚の一軸だ。

要助
おさく　拐こそな。

法界坊　拐こそな。（ト思入れ。）

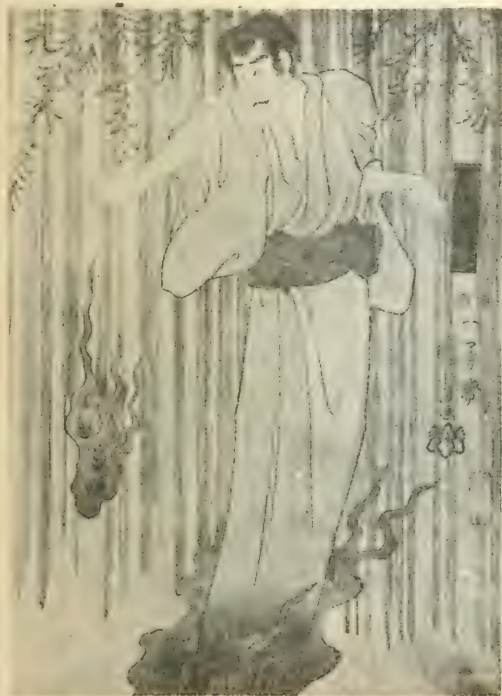
要助
おさく　それを。

法界坊　寄つたら引裂くぞ。

二人　アヽこれ。

法界坊　サア宿位之助と有樣に云へ。

二人　サアそれは。

（ト是より付け廻しになる。）

法界坊　サアそれとは何ぢや。
か。
おくみ　いや〱。
法界坊　いやと云や引裂かうか。
三　人　サア。
法界坊　サア〱〱。
（ト付け廻す。よき處にて法界坊最前掘つたる落し穴へふみかぶる。おさく法界坊が持つて居る一軸を引つたくり、最前の刀にて無性に切る。法界坊苦しむ。此間に要助おくみ悦ぶ。おさく無性に切つて、）
おさく　これ、お二人様、伏見の船場には主の妹おかん様が先へ行つて待つて御座る、この間にちやつとお出でなされませ。
要　助　でも大掾殿の討手の者に逢はば。
（トおさくあたりを見て、）
おさく　幸ひ、（ト思入れ。）忍のかご、忍賣と姿をやつし、伏見の船場へ早う。
要　助　合點ぢや、とはいふものゝ、野分姫が不便の最期。
おくみ　とゝ様のはかないお姿。
おさく　これ、うろたへて居る場所ではないぞえ。
要　助　そんならおさく。
おさく　お二人様。
要　助　おくみおぢや。

(ト要助おくみへ向うへ行かうとする。と戻りドロ〳〵にて、野分姫付聲(つけごゑ)にて、)

野分姫　宿位之助待つた、おくみも待ちや。エヽ恨めしい二人連れ、妻と定める自らをよう胴慾に殺したなア。恨みの數々、安穩で添はさうかいなう〳〵。

おさく　お二人樣。

(トドロ〳〵にて兩人苦しむ。とはつたりとこける。)

要　助　サア野分姫の聲で呼ぶ樣で。

おくみ　一寸も行かれぬわいなう。

おさく　さうぢや。吉田の家の鯉魚の一軸、闇夜に光を增し陰邪を拂ふ稀代の掛物。

(ト開く。チヨン〳〵にて後の鳥居兩方の玉垣皆々絹張にて火を入れる、燈籠明るうなるしかけ。)

要　助　ヤア俄に光明赫々と身心共に自由になるわ。

おさく　掛地の奇特。

(トこの明るうなつたので、法界坊心付き、)

法界坊　その掛地を。

(トかゝる。おさくほんと切り、見事にこける。)

おさく　この間に早う。

要　助　合點ぢや。

(ト向うへはひる。一軸を納める。後の燈籠明うなり、要助おくみが後へ野分姫の打掛け追掛けはひる。)

法界坊　ヤア、おくみと云ひ要助めを取り逃がした幻妻(げんさい)め、うぬむごう切つたなア。

おさく　ようお姫樣や權左衞門樣を切つたなア。

法界坊　惚れて居るおくみを逃がした代り、うぬ打殺す覺悟せい。

おさく　さう云ふそなたを。

(ト切り掛かる。法界坊刀を引つたくり。)

おさく　アレエ〳〵。

法界坊　アヽ此處へうせい、ぶち殺す。

おさく　あぶないわいの。

法界坊　此處へこいやい。

(ト色々立廻りある内、おさく野分姫が懷劍につまづき、懷劍を取るより、法界坊おさくを引き付ける。直ぐに法界坊が胴腹を抉る。)

こりや身共を殺すな。

(ト法界坊苦しむ。此立廻りの中、チヨン〳〵にて本舞臺へ雨しきりに降る。兩人びたぬれの身、種々あつて法界坊死ぬる。とおさく宜しくあつて、)

おさく　お姫樣の敵權左衞門樣の仇、思ひ知つたか。

(ト切倒す。傘を着て向うへ行かうとすると、法界坊むつくと起きて、)

法界坊　女め待て。

（ト大ドロ〳〵。大雨しかけ本水にて降る。おさく連理引にて種々ある。よき處へ坐り）

おさく　ヤア法界坊、まだ死なずかいなう。

法界坊　ヲヽ死なぬ〳〵。魂は冥途へ赴くとも、魄はこの世に留まつて、戀しと思ふおくみに附纏はで置かうか。ヲヲ迷うた〳〵、迷うたわいやい。

（トおさくこなしあつて、）

おさく　掛地の奇特。

（ト一軸を開く。チヨン〳〵にて後の堂バツト明るうなる。法界坊泥船へばつたりこける。とおさく向うへはひる。この途端にて、宜しく。）

幕。

都鳥の時代事
吾妻の世話事　隅田川續俤　四ツ目　大切景事

吉田宿位之助　染松七三郎
おくみ　芳澤いろは
道具屋甚三　藤川八藏
女房おさく　山下金作
法界坊
野分姫　市川團藏
鱗の捕手　大勢
長唄　鈴木萬里

遣り物。本舞臺三間の間、隅田川の土手。正面に太夫囃子方殘らず出語りにて並び居る。上手に松の大樹あり、釣鐘据ゑあり、随分綺麗なる道具にて幕開く、

(ト仕出し花道より大勢出て本舞臺へ來る。)

仕出し　扨々春といふ物は野駈ばかりでもない、水邊もよう御座る。何と皆の衆さうぢやないかいの。

△　ムヽさうぢや。時にこの釣鐘はなんでかうして置いたの。

○　サアその釣鐘は聖天町の法界坊といふ坊主が、龍泉寺へ納めるとの事ぢやといなう。

□　それを又なんでこゝに引据えて置いた知らん。

×　サア一昨日わしが會ひましたが、觀音の講が引摺つて來たが、此處へ持つて來たものであらう。

皆々　成程よう御座らう。サア御座れ〱。

○　それはさうと、もう行かうぢやないかいの。

(ト皆々上手へはひる。トよき所へ出て口上、役割付を讀み、左様にと口上云ひ切る」と淨瑠璃三味線にて彈さにかゝる。宜しくあつて。)

両顔月姿繪

常磐津文字太夫直傳

増補木村えんぬ述

へ名にし負ふ、武藏の國と下總の、中に流るゝ隅田川、瀬々の白浪激くして、霞を分くる春の日に、由なき人の事問ひは、有のまに〳〵都鳥、これはそれには引換へて、心からなる身の馴れ棹は、これも世渡る習かや。

（トこの文句の切れになると、面白き太鼓入の三味線合方になる。おさく練の鉢巻、渡し守のなり。笘船綺麗なる仕掛けにておし出す。よき所にて、）

おさく　「わが想ふ人に見せばや諸共に隅田川原の夕暮の雲」と一首の歌は、實にも理、ハテ面白の詠めぢやなあ。これにつけてもお二人樣、何で遲いことぢや。お二人さんの見えるまで、かうしてもゐられまい、さらば一服致さうか。

（ト是にて淨瑠璃合方になる。向うより要助おくみ荵賣の姿にて、籠を持つて出で來り、花道よき所にて、）

へ戀に心をやつせというた、その言の葉を忍ぶには、よきかち跣人目の關を、荵賣る身はかうもあらうかと、小褄をしやんと、とり〴〵さま〴〵、荵召さんか、川千鳥千鳥鷗の名所なる隅田川原に着きにける。

（ト本舞臺へ來る。前の造にておさく出る。）

おさく　待ち兼ねました、お二人樣。サア〳〵この船へちやつとお乘りなされませいなア。

要　助　チヽ待ち兼ねやつたであらう。イヤナニおさく殿、この宿位之助はそなたの言葉に從ひ、かく身をやつし爰までは來たれども、どうもあの船へは乘られんわいなう。

おさく　そりや又なぜで御座りまする。

要　助　おくみ殿故。

おくみ　まうし何でわたくし故、あの船へは乘られませぬえ。

要　助　そなたは今此處へ來る道すがら、この宿位之助になんと云やつた。野分姫がこの遺品、是を持つて居る故に、水臭いのなんのかのと。さういふ疑ひ深いそなたと、一處になられぬわいなう。さうして、いつそ川へ身を投げるのなんのと云うて、わしを困らしたぢやないかいなう。

おくみ　イエ〳〵遺品にもせよ、何にもせよ、その樣にいはしやんすのが、わたしやそれが腹が立つわいなア。

（ト要助おくみ兩人せりあふ。おさく中へはひる。）

おさく　これはしたり、その樣に譯もない事せり合うても大事ないか。おくみ樣も子供の樣に。殊に野分姫樣は法界坊が手にかゝり、あへない御最後。すり

や宿位之助様の奥様と申すは、お前様より外に御座りませぬ。さりながら此袱紗がある故、お二人のせり合ひの出來るもこの香包。遺品こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙もありなんと詠みし、歌の心の却つて思ひ增鏡、煙となして悋氣を晴らさん。誠に思はぬ仲の別れ路も、言葉殘して猶や恨みん。南無阿彌陀佛／＼。

（ト火にくべる。掛焰硝ドロ／＼にて、三人圍繞する。花道へ上より火の玉出る。花道中程にて落す。これにてドロ／＼。）

〽白浪の雲かあらぬか妄執の、姿を爰にあり／＼と、同じ出立の優さ姿。合

（トこれにてチヨン／＼入る。花道中程より法界坊慈童女形にてせり上る。）

〽わしが在所は京の田舍の片邊り、八瀨や小原や芹生の里、世を忍ぶ故姫御前の身で褄からげ、慈要らしやんせんかいなア。買はんせんかいなア、世を忍ぶ戀の亂れ限りなき、恨の刄に情なや。恨もやらず、その人に連れ添ふ事の恨めしく、うつら／＼と遊び來て、小船間近く立寄れば。

（ト要助起き、あたりを見て、ふつと法界坊を見る。）

要助　ヤアそなたはおくみぢやないか。

野分姫附聲　おくみぢやわいなア。

要助　ハテ心得ぬ。思はず悶絶せしと思ひしに、心付いてよく見れば、合點の行かぬそなたの素振り。何にもせよ。（トおさくが側へ寄り思入れ。）これ／＼おさく／＼。（思入れ。）おくみ／＼。

（ト兩人氣の付くこなし。）

おくみ　宿位之助様、恐しき事で御座んしたわいなア。

要助　これおくみ、悲しいとはそなたのことぢやわいなう。

おくみ　なんで其様に云はしやんすぞいなア。

要助　云はしやんせいでかいなう。これおさく、そなた來てあれを見やいな

う。

おさく　あれとは何で御座りまする。(ト思入れ。)どれ。(ト法界坊を見て、)ありやおくみ樣ぢや御座りませぬか。(トおくみを見て、)ヤアお前もおくみ樣。コリヤマアどうで御座りまする。

おくみ　エヽつつともう、何ぢやぞいなア。わたしを除けて、他におくみがあつてよいものかいなア。

付犀　何ぢやマア、わたしを除けて、他におくみがあつてよいものかいなア。

おさく　コリヤどちらがどうも判けられぬ。いづれ一人は變化のものか、コリヤまあどうで御座りまする。

要助　おりやどうも、しかたがないわいなう。

おさく　よいよい、よう御座りまする。思ひ付いた事が御座りまする。もうしお前の名は何と申しますえ。

(ト法界坊傍へ行きいふ。)

付犀　おくみと云ふわいなア。

おさく　ハテこゝへは何にしにお出でだえ。

付犀　ヲヽくど、わたしや觀音樣の練物に出た、葱賣ぢやわいなア。

おさく　テモマア顔なら恰好なら、物腰まで。

要助　是程に似るものかいなう。

(トおさく思入れあつて、傍へ寄り、)

おさく　そんなら何といはしやんす、觀音

様の纏物に出た蒸賣なら、おくみさんの小さい時敎へて置いた、蒸賣の踊が見たい。それよう覺えてかえ。

付　草　それ忘れてよいものかいなア。

おさく　そんなら其の振りが所望ぢや／＼。

法界坊　サアそれは。

要助
おくみ
おさく　疑ひ晴らし、どうぢやいなア。

付　草　ちよつと小褄をかう取つて。

〽わしが在所は京の田舍の片邊り、八瀨や小原や芹生の里、世を忍ぶ故姬御前の身で褄からげ、蒸賣らしやんせんかいなア、買はんせんかいなア。

（ト淨瑠璃とまた、おさく思入れあつて）

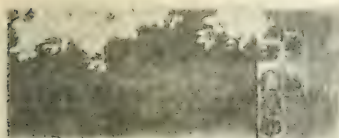
おさく　テモマアこの樣な事もあらうか、又かうも似るものか。そんならそちのおくみさん、宿位之助樣となれ染の睦事を、ちよつと愛で聞かうかいなア。

要　助　ほんにこりやよからうわいの。わしが相手になつてまりし昔、その夜の睦事をさらば聞かうか。

おくみ　そんなら御話し申さうかいなア

おさく　さらば承りませうか。

おくみ　恥しい事ながら。

〽恥しい事ながら、過ぎし彌生の月始、目見え初めと手をついて、ふつと見合す顏と顏、いとしらしうて可愛ゆうて、またも會ひたい殿御振り、心と心何時しかに桃と櫻と品競べ、雛の遊ひの酒事に、私がさいた盃に紅がついたと戴いて、あじやら交りの妹背仲、こんな緣が唐にもあらうか、派手な浮名が嬉しくて、人の誹も世の義理も、厭ひはせじと取付いて、あなたへ引けばこなたへと、縺れつ縺れつ絲柳、風に揉まるゝ風情なり。おさくはそれと見るよりも、中を隔て立寄つて、こちらも／＼蕾の花、梅の若木の香に愛でて、めんない千鳥。

（トこれにて四人追廻しになり、互に廻る。要助上手おくみ下手、眞中へ法界坊はひるゝ二人なから氣味わるいこなして

兩人が袂々をとらへ、三人ぢつとなる(宜しくあつて。)

付廓　まうし宿位之助樣。

法界坊　おくみ殿。

〽恨めしの心やな、人の恨の深くして、刄にかゝりし身の因果、生きてこの世にあるならば、いとし殿御に添ひもせう、(思入れ。)可愛いゝ女と寢んものを、なま中出家を遂げし身は、苦患に誘はれ法心の、遂げし中立を忘れしも、皆誰故ぞおくみ故、台わたしが思ひは松君さん、幼な馴染の許婚、末を頼みの甲斐もなう、思はぬ人に三瀬川、胸に漲る思ひの淵、淺いは緣、深いは恨、恨は人をも世をも思ひ思はじ、只其人こそ、憎し辛し情ないぞと、かこち泣き、かつぱと臥して泣き居たる。

おさく　聞けばきく程、どうも合點の行かぬ二人のおくみ樣。この上は。(ト思入れ。)ム、それ〳〵思ひ出した。去年秋神明樣の祭に、稽古なされた踊の振り、それを今爰で見ようぢやないかいナア。

要助　ほんにこれはよからうわいの。二人のおくみ早う踊が見たい〳〵。

おくみ　サア其日踊は。

おさく　それ。

要助　それ。

おくみ
法界坊　それへやつとせい。

(トこれにて身拵へする。この間三絃合方よろしくあつて。)

〽いつしかに君を待乳の山々越ゆる。
合 通ふ庵崎駒形や、千鳥鷗の心があらば、白髭樣へ願掛けてちよつとお顏をみめぐりならば、それこそほんに首尾の松、それ〲それもかうかいなア。
返シ〽衣紋坂、今宵廓の逢ふ瀨の首尾も　橋場の雨にしつぽりと、君を山谷の三日月さんへ、眞實心から願掛けて、二つ枕に樂しむならば、嬉しの森であろぞいなア。
トメ〽深い縁の仲ぢやもの。
おさく　この上は邪正をたゞさん。(ト思入れ。)障礙を顯はす鯉の一軸、影は二人のおくみさん、この一軸の奇特、まづこの通り。
(ト卷物を開き法界坊に差し付ける。法界坊ふるふ。)
サア姿顯はすまいか、〲〲〲。
(トつけ廻す。法界坊きつとなる。)

〽あら恐しや苦しやな、娑婆の業因深き故、思はぬこの身に苦患の受け、共に奈落の底までも、引立て行かんとせしが、龍神薩埵の誓ひに恐れ、我と我身を、責めに責めくる冥途の使、合 陰もよしなやはづかしの、もりてよそにや白露を、飮みつ隱れつ姿消えて、面影のありとは見えじ春風に。
(ト淨瑠璃の中、四人つけ廻りの所に、法界坊釣鐘の中へはひる。懸半鐘じやん〲〲〲と打つ。)
おさく　おくみ樣、宿位之助樣、お心確かに。
おくみ 要助　テモ恐しい、事であつたわいなう。
おさく　正しく今のは法界坊と野分姬の亡魂。その難を遁れたもこの一軸の御蔭、御二人樣。
三　人　エヽ有難やなア。

(ト云ふ内どん〲の太鼓鳴る。この中花道の方にて人音する。)
おさく　アノ寄太鼓は確かに敵方、スリヤ我々を逃さじとて取り卷きしか。何にもせよ、コリヤかうしては居られぬわいなア。
要　助　なんといやる、あの人音は討手の者とナ。
おくみ　コリヤマアどうせうぞいなア。
おさく　もうし、うろたへる所ではない、見咎められては一大事で御座りまする、暫しの中この釣鐘の後へ。
(ト兩人釣鐘のうしろへ隱れる。花道より取手大勢鱗形の半纏小手臑當にて出て、おさくを皆々取り卷く。)
捕　手　動くな。
皆　々　捕つた。
捕　手　確かに見付けた常陸大掾樣より御尋ねのある、吉田宿位之助久春、何

瀧へ落した、尋常に白狀致せい。

皆々　なんとぢや。

おさく　なに、宿位之助樣とやらは、わたしが何しに知るもので、そんな事は知らぬわいなア。

捕手　ぬかすな。何でも怪しいあの釣鐘、あの後を詮議せい。

皆々　御座れ〳〵。

（ト皆々鐘にかゝらうとする。おさく千鳥に分けて障へる。）

おさく　これ待つて、お前方、疑ひ晴らし、誓言を見せうわいなア。

皆々　なに誓言とは。

おさく　サア覺えない誓言を見せうわいなア。

皆々　シテその誓言は。

おさく　偽りならぬ、（ト立廻りあつて思入れ。）誓言とは。〳〵拂ひ清め奉る。セリフ　神は梵天〳〵てんのてれんの。セリフ　たい〳〵しやくの種。セリフ　下はしたいに身上るの〳〵内外清淨護神も外に、惡性は荒れます神のその神々にそやされて、嘘と誠の二葉山、通ふ神の神託に、戀といふ字は戀といふ、ことの葉草も岩本の、神掛けてぞ誓ひける。

（トこの内皆々宜しく立ち廻りあつて、所作立見えになり宜しく。）

皆々　見せともながる此釣鐘、そりや。

（ト皆皆總掛りになると、八藏大童甚三にて出て、皆々を投げ、是より立種種總見えになる。）

おさく　こちの人。

甚三　女房ども。シテお二人樣は。

（ト要助おくみ出る。）

要助　甚三よい所へ、よう來てたもつたなう。

甚三　お氣遣ひなされますな、鯉魚の一軸手に入るからは、御身のおかりはこの甚三が胸に御座りまする。さりながら大切の御身、此處に御座つては惡い、わたくしに打任せて、御兩所を御供致せ、女房ども。

おさく　合點で御座んす。

甚三　早う／＼。

皆々　そりや逃すな／＼。

甚三　イヤ猪口才な。

（トこれより三絃笛太鼓大小入の合方、大立になり、よろしくあつて皆々を追うてはひる。又鱗捕手立戻り、）

捕手　合點の行かぬ此釣鐘、者共ぬかるな。

（ト捕手皆々よき見えになる。これより「東方には軍荼利夜叉明王」と道成寺の謠になる。鐘の段の謠宜しくあつて、うすは／＼動くぞ、いざ／＼今の蛇身の祈る上は、何の恨みの有明の、撞鐘こそは上りたり」と、謠の切れにて、ジヤン／＼にて釣鐘上げると、法界坊般若にて撞木を持ち薄衣を着て出る。この間始終大小。橋懸りの方を向くと、鱗捕手見え、この間ドロ／＼よろしくあつて、鼓歌になる。）

〽なう恨めしの仇人や、六趣死生を出でやらず、人間不淨芭蕉葉の、消えてはかなき身の果を。

（ト是にて花道へ行く。兩方より鱗捕手つき出る。花道眞中にて見えになる。笛ヒシギ、これより笛大小太鼓囃にて二三度あつて、太鼓流しにて、本舞臺へくる。笛ヒシギにてとまる。）

〽謹請東方青龍、淸淨謹請西方白龍白體、一大三千世界の恆沙の龍王、哀愍納受哀愍自謹の砌なれは、いづくの鬼のあるべきぞと、祈り祈られかつぱと浪間に入るよと見えしが、猶怨念の舊跡は日高にあらぬ隅田川、鐘の淵とて今も名を、傳へてその名を殘しけり。

（ト般若釣鐘の上へ上がる。鱗捕手並ぶ。甚三要助おくみおさく皆々出て、なみよく並ぶ。トロ上出て宜しく。）

打出し　幕

千穐萬歳樂叶

助六廓の花見時

あけまき 助六 廓の花見時　二番目

役人替名

役	役者
助六	市川團十郎
白酒賣	坂東簑助
かんぺら門兵衛	大谷德治
遣手	中村助五郎
女郎屋息子	市川染五郎
茶屋若者	市川富藏
朝顔せん平	嵐七藏
福山かつぎ	花井才三郎
女郎一	瀨川吉太郎
同二	中川瀧次
同三	市川辰之助
同四	中村七三郎
女郎五	中村千之助
地廻り一	坂東辰藏
同二	中村助治
同三	市川百右衛門
同四	市川利根藏
同五	市川三名藏
同六	市川團兵衛
揚卷	岩井久米三郎
白玉	岩井喜代太郎
髯の意休	市川高麗藏
伊藤祐清	松本幸四郎

廓の花見時

本舞臺。正面三間の仲の町の景色。茶屋の軒を見せ、家名に暖簾青簾、西の方へよせて辻行燈に仕掛けあり。天水桶、その上に番手桶大分重ねてあり。雨桟敷、茶屋の暖簾青簾、家名を書いたる掛行燈、その前に造り物の櫻。揚幕に大門口を飾付け、床几五脚、手摺をたて、煙草盆を並べ、地廻りの四人、皆床几に腰をかけ、煙草をのんで居る。すがゞきにて、幕あく。

(ト、東よりも西よりも、女郎買の仕出し、侍、町人、按摩、飴賣、玉子賣、茶屋の提燈灯せし男等、種々入違ひ行き交ふ。此人の中へ伊達衛清、大小羽織、編笠、風呂敷を頭へ卷き、小提燈を提げて、行き交ふ提燈の紋を種々見る。賑かに仕出しはひると、花道より箱提燈、若者に拵へにてこれを提げて出る。後より白玉出る。禿二人。助五郎、遣手の拵へ、粂五郎、女郎屋の息子の拵へにて出る。衛清、傍へ寄り、息子の袖を控へ)

衛清　もうし〳〵、粗忽ながら、今の提燈の紋をとくと見せて下さりませえ。

息子　このお侍とした事は、道中の後や前について、こなさんに何を尋ねるのぢや。

禿一　ほんに嫌らしいお侍さんではあるわえな。女郎さん方の紋所を種々見て、合點のゆかぬ顔をしてゐるさんすは、なんぞ面白い事が御座んすか。

禿二　何をうろ〳〵さんすぞえな。

衛清　イヤ私は尋ねまする紋所が御座りまするによつて、不躾ながら尋ねまする。

白玉　これは變つた事を云はさんす。お侍さん、わたしらが紋をなにしに尋ねさんすぞ。お前の尋ねさんすは、マアどの樣な紋所で御座んすぞえ。

衛清　杏葉牡丹と、揚卷と、この二ッの紋を付けて御座る女郎衆を尋ねまする。

白玉　ハテなア。その二種の紋所は、揚卷さんの紋所ぢやな。

(ト云ひながら上の床几に腰を掛ける)

息子　これ、揚卷さんは三浦の太夫さんで御座んすが、なんぞ用でもあるので御座んすかえ。

衛清　アイ。ちと御目にかゝりたい用が御座ります。

地廻一　なんと見たか。アノ侍は揚卷に會へたいとよ。コウ。見た所が折助にしては勿體がよし。

地廻二　成程、飯炊き親仁にしては器量がよし。

地廻四　糊賣爺にしては綺羅がよし。

地廻三　後の風呂敷を見ても、針賣爺と

も見えず。

地廻一　花賣爺ともつかず。

四人　とんとよめぬ侍だわえ。

地廻二　ほんにそれはさうと、コレお辰や、今日は淺草へ參つたけなが、早い御歸りぢやな。

遣手　さいなア。今日は、どつちも物日ぢやによつて、早う歸らうと思ひしたが、アノ子供等が、ヤレかわさの豆藏のと、方々見て歩きやした。それからアノ豆屋の手拭を買つて來やした。アノ松茸といふものは、いつ見ても心よいものぢやなア。

息子　イヤ皆さん、聞えて下さりまし。砂利場で今日お辰さんを褒めました。

遣手　ほんにわたしを褒めたわえなア。

四人　なんと云つて褒めた。

息子　いよう鮫ケ橋とさ。

遣手　ほんに鮫ケ橋といふ處には、いかなる美人があるかして。ホヽヽヽ。

地廻四　おきやアがれ。しつかへ、面は累のやうだ。

地廻一　鮫の横飛び。あんまり動くな。乾鰯の匂ひがする。

遣手　なんぢや。姫御前を捕へて鮫ぢやの乾鰯ぢやのと、もう了簡がならぬぞえ。

地廻一　ならぬと云うてどうしやがる。

白玉　わしが相手になるわいの。

四人　イヤ、こいつが／＼。

（ト皆々立騒ぐ、息子兩方を留めて、種種をかしみの中、すぶどきになり、花道より、德治、かんぺら門兵衛の拵へ、後より七藏、朝顔せん平の拵へ、出て來て、直に本舞臺に來り、皆々の中へ割つてはひり、皆々捨白あるべし。）

かんぺら門兵衛　よいさ／＼默れ。エヽ遣手も騷ぐ事はないわ。女の身持はいつとても惡い癖だ。そしてどう見てもうめえ面だ。

遣手　うまくば一口振舞はうかえ。

門兵衛　エイ、いま／＼しい。

遣手　すりや。

息子　コレお辰。かんぺらさんはなんだか強う腹を立てゝ御座りまするやうだ。滅多に云つて叱られまいぞ。

白玉　イヤかんぺらさんの腹立たさんすは、色事ぢやわいな。ほんに、門兵衛さんは、なんぼ惚れても口說えても、先は染々好かんと云ふ、鮑の貝の片思ひ。若しかに懸つてうか／＼と、うつかりくかんぺら門兵衛さん。強い通り者ぢやわいな。（ト笑ふ。）

朝顔せん平　ハテ能く喋る女郎だ。あいつはなんといふ女郎だ。

遣手　アイ、忝くも三浦屋の太夫さん、

白玉さんと云ふわえなア。
門兵衛　成程、聞き及んだお名でえす。したが、貴様たちが綿帽子で眉毛を隠して、淺草へ參つたり、芝居へ見物に行つたり、後帶で藪入と來て、人をちよろまかすとは違つて、この門兵衛は背が大い。食はれないぞ。置かつせい。揚卷といふ楊貴妃樣に迷ふ煩惱の犬櫻、どうで叶はぬ戀ならば、思ひ切つて身を墨染櫻とやつし、諸國修業の西行櫻と出かけべえと思つても、流石畜生の悲しさは、若しかにて今日もまた、花車を轟かしたのさ。コリヤ尼め。
遣手　尼とはわつちかえ。
門兵衛　うぬが事だわえ。
遣手　コハ馬鹿らしい。
權次　なんと門兵衛の金ぢやァ吉原の女郎は買へねえか。二才め。賣らねえのかよ。
息子　モシ／＼門兵衛さん。野暮頭。ソリヤなんの事で御座ります。
せん平　なんの事とは知れた事だ。門兵衛殿が腹を立たつしやるは、揚卷が事よ。いかさま、揚卷といふ賣女めは、よほど味噌な奴だ。關白殿の落胤子ぢやアあるめえし、勿體をつけやァがらずと、かんぺら殿に會つたがいゝ。この朝顔せん平が、其戀の取持ちにかゝつて、毎日毎晩廓通ひ。誓文、この朝顔が布子の裾も、萎れ果てるわい。
白玉　もし／＼、そりやお前ともないぞえ。揚卷さんは全盛の女郎花、今夜といふて今夜會はれるものぢやないわえなア。
遣手　ほんに揚卷さんの閑といふては師走の大晦日ばかりぢやわえなア。
白玉　ほんに今年ももう三月、師走になるには間もあるまえ。それまで氣を長う持たしやんせえなア。
門兵衛　何を。
息子　もし／＼、門兵衛さん。揚卷さんに色身で會ふとは、能々思付きの惡え了簡。アノ揚卷さんには深え。
白玉　これ／＼。なんの役にもたゝぬ事を云はぬものぢやぞえ。
門兵衛　いや／＼、それも合點だ。揚卷にや蟲がある。然も、白繪に貧といふ蟲だ。その蟲に身代を喰倒され、內證は火の車だけな。
白玉　お前が會ふといはしやんす揚卷さんには、お前の親分髯の意休さんも惚れてゐさんすに、またお前が惚れるとは、コリヤ意氣地が惡えぢやなえかい。
門兵衛　成程、意休殿の事はあれども、アノ人の廓通ひは當座の慰み、それに頓着はなえ。兎角胸の惡えは助六めだ。

何處ぞで何奴に會うたらば、止めろと云へ。俺が云ふ事を反えて、揚巻にくつつえてゐれば、アノ俺が殺してしまふわ。

祐清　エヽ、（ト悔りする。）

門兵衛　この侍はさつきに、二丁目で見かけた。杏葉牡丹の紋所を付けた女郎を尋ぬるとは、揚巻に用でもあるのか。

祐清　成程左樣。

門兵衛　ハヽア、成程。會へたくば會はせてやりませう。

祐清　それは近頃忝う御座ります。

門兵衛　その代りに、こなさんに頼みたえ事があるが、ちと頼まれて下さるまえかな。

祐清　私の身相應な事で御座らば。

門兵衛　先づは承知で忝い。俺が頼みといふは、どうぞこなたの、（思入れ。）どうも聞合ひが惡くて云はれぬ。コレせん平。この侍に呑込ませてくれろ。

せん平　チツト皆まで宣ふな。承知だ承知だ。（ト祐清の傍へ寄り、）もうし、お侍殿。俺が親分が何やら麁相致したさうで御座る。眞平。

門兵衛　これ、置きやァがれ。そんな事ではなえわい。

せん平　そしてなんだ。

門兵衛　ハテ、麁相な。揚巻が兄かなんぞであらうによつて、揚巻が事を呑込ませて呉れろと云ふ事よ。

せん平　ハヽア、俺は又なんぞお侍に謝まるのかと思つた。

門兵衛　忌々しい。

せん平　これは大きな間違ひだ。時に、お侍。御身殿はよい妹持つて浮み上る。揚巻は今、廓一番の女郎。したが、疵には慾を知らなえ。かんぺら殿のやうな金遣まん〳〵たる大盡を嫌がつて、助六といふ貧乏神を深間に持つて、身代をすつきり助六に入れ上げるは、こなさん、揚巻に會つて助六を長平にして、俺がかんぺら殿に乘替へるやうに意見して下せえ。かんぺら殿の方へ靡けば一家一門浮み上るといふものだ。

祐清　イヽヤ、拙者は揚巻の兄ぢやァねえ。

せん平　そんなら揚巻の兄ぢやァねえか。

祐清　左樣。

せん平　又間違へた。

門兵衛　待て〳〵。さつきには揚巻の兄のやうに云つて、今俺が頼むと云ふ事を聞いて、兄でなえとは、こいつ聞えた。女郎の紋所を見て歩く振りをして、櫛笄をしてやる、此奴巾着切だな。

祐清　アヽコレ、麁相云ふまえぞ。

門兵衛　いや、俺も度々鼻紙入を抜かれ

たが、うぬだなく\。
紬清　そのやうな覺えは御座らぬ。
せん平　そんなら揚巻の兄だとぬかして、親分の色事を取持つか。
紬清　サアそれは。
門兵衛　そんなら、われは巾着切か。
紬清　全くもつて。
門兵衛　揚巻の兄か。
紬清　サア。
二人　サアく\く\。どうだ、面倒な、會所へ引摺つて行くべい。
（ト紬清の手拭をとる。白玉中へはひる。）
白玉　待たさんせ。門兵衛さん。可愛なけにお侍さんを捕へて、仰山な。なんちやぞえなア。揚巻さんとは仲のよいこの白玉、云ふ事があるなら云はんせ。喧しい聲ではあるぞ。
門兵衛　面白え。われが侍の腰を押すか。
白玉　アイ、強う物を云はんすりや、何處までも腰を押し、又美しう頼まんしたらば。
門兵衛　揚巻に會はせてくれるか。
白玉　そりや會はせまえものでも御座んせぬ。
門兵衛　そんなら會はせてくんなよ。
皆々　親分。なんだか氣が知れないわえ。
門兵衛　白玉さん。頼みやすぞえ。
白玉　さう美しう云はしやんすりや、妾たちが捕へて見まえものでも御座んせんが、マアお前が此處に居ては惡え程に、會ひたがらしやんす揚巻さんには、妾が後に會はせませうほどに、ちつと

寶暦五年春市村座
寳愛護曾我の折市村龜義坂東又太郎の掛合ひ台詞

も早う御座んせ。

(ト祐清にかけて云ふ。祐清呑込んで下坐へはひる。)

それ〳〵、それがよい。なア門兵衞さん。何處ぞ廻つて御座んせ。

門兵衞　エヽ有難い。そもじがさう呑込んで呉れゝば、俺アまア行つて來よう。(思入れ。)オヽせん平。侍は何處へ行つた〳〵。

白玉　ハテ、お侍に用はあるまえし、妾を頼んでおいて、また侍を頼むのかえ。

門兵衞　なにさ、お前ひとへに結ぶの神。

白玉　そんなら早う往て御座んせ。

門兵衞　合點だ〳〵。時に若者共、おしつけ、意休どんが見えよう。傍から氣を付けてくれ。せん平。來い。

せん平　白玉さん。

白玉　門兵衞さん。

二人　さばえ。

(トすがゞきになり、兩人下坐へはひる。)

地廻一　ヤレ〳〵、いつもながら門兵衞樣の色事は喧しいぢやなえか。

地廻二　俺等は色氣より喰氣。どうやら口が淋しくなつて來た。

地廻一　成程。なんぞ呑むか喰ふかしたえものだ。

地廻四　ホンニ、酒でも飲まうぢやアあるまえか。

遣手　もし〳〵、酒の噂をすれば影がさすと、いつもの白酒屋さんが。

四人　どれ〳〵。おゝい〳〵。

(ト揚幕にて、)

寶曆七年春市村座
染手綱初午曾我の折市川海老藏の台詞

白酒賣　白酒〳〵。

（トてんつゝになり、白酒賣、やつし胸前垂、淺黄頭巾にて、白酒の荷を擔ぎ出て來て、花道の中に留まる。）

遣手　こりやいつもの白酒屋さん。早う御座んしたなう。

地廻三　いつもの通り、白酒の言立が。

皆々　所望ぢや〳〵。

白酒賣　ハヽア何も變らぬ此白酒。臺詞といふも烏滸がましいが。皆樣御所望とあるならば、さらば一くさり御意に備へませうかな。（ト身繕ひして咳拂へして、これより白酒賣台詞になる。）そもそも、富士の白酒といつぱ、昔駿河の國三保の浦に、伯龍といふ漁夫、天人と夫婦になり、その天つ少女の乳房より、流れ落つる色を見て、造り初めし酒なれば、第一壽命の藥なり。されば厄拂の親方東方朔も、此酒を八盃飲んで、八千歳の齡を保ち、浦島太郎は三盃呑んで三千年、三浦の大助下戸なれば、一寸ちやうつけしたばかりで、つえ、百六ッまで生き延びたり。先づ正月は屠蘇の酒、彌生は雛の白酒に、女中の顏も麗しく、もゝの媚ある桃の酒。端午の節句は菖蒲酒、七夕は一夜酒。重陽は菊の酒、さて佛法にいたつては、釋迦牟尼如來の宣はく、如露亦如電を肴にして呑む時は、一升は夢の如し、上戸菩提と說かれたり。されば、酒の上の是呑が、なに上々の上の字の上戸をば、下々の下の字の下戸が誹りて、これ、大和歌にも載せられたぞ。されば我々が白酒は、事も愚かや、ホヽヽホ、敬つて白酒〳〵。（ト本舞臺へ來る。）

皆々　ヤンヤ〳〵。

白玉　新兵衛さん。御座んしたかえ。

白酒賣　これは〳〵とばかり、鼻の先には、の意輪觀音の御來臨。見付けぬ所は大凡俗の白酒賣。御免なされて下さりませえ。

白玉　なんぢややら、人を嬉しがらせる樣な事が強い好きさ、マア此處へ來て話さんせいなア。

白酒賣　エヽ有難い。さやうなら御內陣へ通りませうか。

地廻一　待ちやアがれ。うぬらが腰を掛ける床几ぢやアねえぞ。

地廻三　白玉さん。白酒賣と役にも立たぬ話をしようより、先づ親分の頼んだ事をどうする。埒が明けてもらひたい。

地廻四　野暮な奴ぢやアねえか。他の事より手前勝手と、白酒を飲みたさうな顏付き。いけねえ女郎めだ。

地廻一　女は女とも思ふが。

白酒賣　白酒賣は千枚張とも思召さうが、そこが又至りませぬぞえ。滅多に強い

事ばかり云うては、女郎が可愛がるものではないでえす。ちつと、可愛がられうと思はゞ、ちつと工風をなさりまし。

地廻四　こえつも、面白え事を云ふ。その又、可愛がられる工風を習ひたい。

地廻一　俺も工風を習へたい。教ひやうが悪えと許さぬぞよ。

地廻三　うぬ、目をおつ開えて見ろ。安い野郎ぢやなえぞ。

白酒賣　如何樣。〆て三百位な。四百とはもう出されぬわえ。

四　人　おきやァがれ。うぬは大分安くするな。

白酒賣　何の安く致しませう。お前方の樣な通りものがなければ、商ひが御座りませぬ。お前方の傍に居ると、三百や四百位はつい賣れると申す事で御座りまする。

四　人　うぬは俺を嬲るな。

白酒賣　なに勿體なえ。旦那を嬲つてよいもので御座りまするか。

白　玉　成程〳〵。なんの白酒屋さんがお前方を嬲るものぢやないぞえ。そんな事云はずと機嫌直して、此處ひ來て遊ばんせいなァ。

地廻一　エ、有難てえ。生れて始めて可愛らしいお言葉に預つたぜえ。

地廻三　それ〳〵。時に白酒屋。どうすれば女郎に可愛がられるの。

白酒賣　女郎衆に可愛がられる元はと云へば、この白酒で御座りまする。

地廻四　なんだ。この白酒が可愛がられる元とはな。

（ト四人、立ちかゝる。白酒賣一寸上の方へ直り、）

白酒賣　この白酒の奇妙なる事を。コレ〳〵、これを一口あがると女の惚れる事、恰も世之助業平は跣足で逃げる。どのやうな色男でも、そこのけと云ふ妙あるでえす。さるによつて、毎年正月三日には、わいが店で女郎買ひ衆が飲み初めまするぢや。

四　人　はてなァ。

白酒賣　或ひは、茶碗、鉢、なんでもかでも大きなもので飲む程、戀が叶ふぢやわいなァ。

遣　手　もし〳〵新兵衛さん。男に惚れたわしも、その白酒が利きやすかえ。

白酒賣　男とは愚か、若衆でも坊主でも撫付でも、御座れ〳〵ぢや。

遣　手　そりや、もう嬉しいわいの。飲まぬ先から身中が炎えるやうな。エヽ好ましい酒ぢやなァ。

地廻一　ものは試しだ。一杯飲んで見よう。

地廻三　それがよからう。

地廻二　一杯宛。

地廻四　飲んで見よう。

四　人　さあ〳〵。注いだ〳〵。（ト皆々、口々に云ふ。）

白酒賣　チツト待つたり。時に申さぬ事は惡い。この白酒、現金掛直なし。一升にて代金百疋。それでも惚れたくばお飲みなさるかな。

地廻一　まあ〳〵、試みだ。一杯賣りやれサ。

（ト茶碗を出す。白酒を注ぐ。）

皆　々　どうだ〳〵。

地廻一　いかさま常の酒とは違ふやうだわえ。

地廻三　どれ、俺にも呉れろえ、前錢だ〳〵。（ト懷中より錢を出して遣る。白酒賣注ぐと飲んで、）やア、どうやら身がぞく〳〵するやうだわえ。

白酒賣　そこが戀の汲み濟る所ぢや。ちよつと立つたり。

地廻三　かうか。

（ト立ち、白酒賣、腹をあちこちと撫ぜ廻し。）

アヽこれ。こそごつたえ〳〵。何をするのだ〳〵。

白酒賣　かうせねば白酒が廻る所へ落付かぬぢや。

地廻三　そんなら白酒が落付くと。

白酒賣　惚れられるが一時。

地廻二　どれ俺もちつと摩つてくれべえ。

（ト地廻二腹を撫でて見て、）

白酒賣　オヽ、これは餘程、喧嘩で腹が揉めてゐるわえ。

地廻二　明日から喧嘩を控へませう。

地廻四　俺も一分切り飲まう。

皆　々　俺にも、もつと飲ませろ〳〵。

（ト皆々。白酒賣注いで廻る。此うち、遣手、酒桶より德利を出し、下の方へ來て、無性に茶碗にて飲んでゐる。皆々、醉倒れて種々捨白あるべし。）

白　玉　もし見さんせ。新兵衞さんの白酒。奇妙ぢや。見やしやんせ。男振りがどうやら、可愛らしうなつたわえなア。

地廻一　新兵衞は出す事はならぬものだ。一兩が飲まう。

三　人　それがいゝ〳〵。

白酒賣　隨分しんの取つて飲まつしやえ〳〵。（ト遣手を見付け、）どつこい〳〵。こりや大切なる白酒。盜んで飲むとはどうだ。こつちへ寄こした〳〵。

遣　手　まあ〳〵、待つて下さんせ。惚れられると聞いて、これが呑まずにゐられうかいな。新兵衞さん。それ一分。

（ト巾着を出してやる。）

白酒賣　金さへあれば言分なし。飲みなさい〳〵。

遣手　新兵衛さん。どうやら、わたしや皆さんが可愛らしいやうになつた。

白酒賣　えへん〳〵。

遣手　エヽ、これ、誰ぞ好い男が、(思入れ。)大分に身體に暖まりが來たに、アア知らぬ事なら仕樣事がなし。

地廻一　かう飲んでは、助六でもなんでも續きアしまい。もう惚れる時分だがなア。

地廻三　まだ飲み樣が足らぬさうだ。腹を振り〳〵飲みやれさ。

白酒賣　イヤ、助六と云へば、助六は揚巻さんと今に仲善う御座りますかね。

白玉　いやもう強いもので御座んす。あんまり仲が善い故に、皆さんが傍輩悋氣で、かけ構はぬわたしらまで、取持つてくれえ、口說いてくれえと賴まれるのに困るわいなア。

白酒賣　ハテ、困つた男ぢや。コレ、どうぞ助六に會ひたいものぢやが。

地廻二　助六に會ひたいと云ふは聞く所だ。待て〳〵。

地廻四　成程、助六に會ひたいとぬかすうぬは助六の爲にはなんだ。

地廻一　ハテ、味な男だわえ。うぬはマア助六の爲には。

四人　何だ。エヽ。

白酒賣　イエ、何でも御座りませぬ。

地廻一　それに會ひたいとぬかしたは、何故だ。

白酒賣　サア會ひたいと申したは。

皆々　何で會ひたいよ。

白酒賣　酒の貸が御座ります。それで貸が取りたさに、會ひたえと申しましたが、その樣に仰山に物を仰しやると、腹の中で白酒がだぶつきます。只一向一心に酒をあがれ。なア太夫さん。左樣ぢや御座りませぬか。

白玉　ほんに新兵衛さんのお蔭でよえ樂みをしたわいなア。モシ、わしが會ひたがらしやんすお人に會はせませう程に、此處に待つてゐさんせえ。

白酒賣　それは有難う御座る。そんなら行廻つて參りませう。

(ト此中、遣手、白酒に醉つたる思入れ。がた〳〵ふるへながら、延鏡を出し、髮を直し、無性に白酒を顏へ塗る白酒賣荷を片付けて行かうとする。)

地廻一　怪しい白酒賣、待ちやアがれ。

(ト遣手おづ〳〵後より地廻一に抱付く。)

エヽ、これ。何を爲やアがるのだ。

遣手　いつぞ、わたしがこなさんに、云はう〳〵と思つてゐた。一夜ばかりは抱いて寢ても大事あるまいがな。オオ恥かし。

地廻三　味な所へ白酒が効いたわえ。

地廻一　おきやァがれ。
（ト突倒す。遣手起上り、又取付く。）
河童め。放しやがれ。
遣　手　なんぢやゝ。姫御前を河童とは。
もう女子の一分立たぬわいなァ〳〵。
もしわたしを立てゝ下さんせ。（ト無性に抱付く。）
地廻一　氣が違つたか木兎め。退きやァがれ。（ト突退ける。）
遣　手　そんならこなさん。
地廻三　鳶め。うるせえわえ。
（ト突退ける。又こちらへ抱付く。）
地廻四　牡丹餅め。退きやァがれ。
（トこれより遣手、皆々を相手に追つて廻る。とゞ皆々遣手を直裸にする。遣手裸にて追廻る。）
白酒賣　野伏間の生捕り。錢は戻り〳〵。
（ト此中をかしみ。皆々遣手を突出し、蹂みのめして、花道へ逃げはひる。遣手起上り着物抱へ。）
遣　手　男畜生、情知らずかいなう。オイ〳〵。ヨシ〳〵。この上は天へ上らば續いて上り、地に入つては鼴鼠となつても、さうぢや。
（ト宜しくあつて、後を追うて花道へはひる。白酒賣しやんと見送つて、）
白酒賣　ハヽア、いかいたわけの。白玉さん。そんならどうぞ助六が參りましたなら、お會はせなされて下さりませ。
白　玉　そりやわしが合點ぢやわいなァ。
（ト云ふ中、若い者提燈を提げて出て、）
若　者　もうし白玉さんへ。意休さんが何やらお前を呼びまして來いと。一寸御出でなさりませ。
白　玉　そんなら新兵衞さん。わたしや一寸行て來るほどに、まつてゐやしやんせえ。
白酒賣　畏りました。白玉さん。
白　玉　新兵衞さん。
若　者　サァ御出でなさりませ。
白　玉　オヽ忙しない。子供來や。
禿　アイ〳〵。
（ト白玉、禿兩人連れ、花道へはひる。）
白酒賣　ア、優しい女郎衆だ。
（ト此所にて、白酒賣、半太夫節中淨瑠璃[illegible]あつて、荷を擔ぎ、）
ほんに、なんとも思へもせぬ助六殿に、このやうな苦勞をする。これが正眞の白酒ではなくて苦勞酒々々々。
（トすがゞきになり、白酒賣下座へはひると、直に半太夫節中淨瑠璃にかゝる。）
〽春霞たてるや何處み吉野の、山口三浦うら若く、花に移ろふ色見えて、水に蛙の歌袋、ほどけぬ文の謎々も、筆のすさみの心當、店淸搔の賑くなる。鐘は上野か淺草か、その淺から

ぬ契をも、祈るは通ふ神かけて。
（ト此文句の中、花道より女郎一、二、三、四、五、銘々の紋所の付いた提燈を灯させ、各々、女郎の拵へ。本舞臺へ並ぶ。）
女郎一　なんと皆さん、見やしやんしたか、仲の町の櫻の盛り、美事な事で御座んすわえなう。
女郎二　さいなア。又今年も植ゑ初めし、この吉原の花見月。また來る春が待たるゝわいなア。
女郎三　さうぢやわいなア。妾らまでが珍しうて、仲の町へ出たうなつたわいなア。
女郎四　それ〳〵、早いと云へば揚巻さん。なぜに遲い事ぢやぞえなア。
女郎五　さう云はんすりや、揚巻さんは、ほんに遲え事ぢやぞえなア。
女郎一　それ〳〵今日は早う出やしやんす筈が、このやうに遲いといふは。（ト向うを見て。）アレ〳〵、アノ提灯は杏葉牡丹。確かに揚巻さんぢやわえなア。
皆々　ほんに揚巻さんぢやわいなア。
（ト摺鐘音入り賑かなる出の唄になる。若者揚巻と、杏葉牡丹の紋所の付いたる箱提燈を灯して出て來る。後より助五郎、遣手の拵へ、此肩に久米三郎、揚巻の拵へ、裲襠衣裳にて醉ひしこなし。禿二人煙管、煙草入と、茶碗、茶臺に載せて持つて出る。若者長柄の傘をしかけて出る。後より若者茶屋の形、家名の書きたる箱提燈を提げて、銀の香爐を持つて出る。花道の中程に留る。）
女郎一　皆さん、見さんせ。揚巻さんの道中はどうやら舟に乘つたやうなぞえ。
女郎二　ほんに、こりやよつぽどな機嫌と見ゆるわいな。
女郎三　さつきに松葉屋で出會うた時かゝら、よつぽど未練に見えたぞえ。
女郎四　お前の會うた時はまだな事。さつきに一寸會うた時は、大抵心遣へをしたわいなア。
女郎五　ほんに、妾も無理遣に飮ませられ、よつぽど醉うたが、その時よりは千鳥足。揚巻さん。なに何處でマアそのやうに。
皆々　醉はんしたぞえなア。
揚巻　これは〳〵お揃へなされて揚巻を、お待兼ねは有難い。妾がこの生醉を、何處でそのやうに醉うたと思召す。恥かしいけれど、仲の町の門並み、あそこからもこゝからも、呼びかけられて盃數々。松屋の客衆の男振り、惡洒落な侍が持餘したお盃、一寸揚巻さんといけぬ口合、憎さも憎しと、押へて三ツ飮ませ、こつちも一ツ、四ツ目屋で借りられて、一寸お近付に

とさした盃を、二ッ元詰の憎らしい男付。その上に捩ぢ上戸、その捩ぢやうとした事が、あんまり憎さにたうとうあつちを捻ぢつけて、遂にはそこに大鼾、いかな上戸もわしを見て、御免〳〵と逃げて行くぢや。ホヽヽヽ。それほどの酒盛にて、慮外ながら假初ながら、三浦屋の揚巻は醉はぬぢやて。

禿一　太夫さん。危う御座んす。

揚巻　ヲヽ、これは大きな奴さんの御意見、忝い。有難い。ぢやが、誓文より醉はぬ。醉はぬぞえ。

若者　さア子供や。この醉の醒める藥を上げ申しや。（ト藥を注ぐ。）

禿二　太夫さん。袖の梅を飲まんせいなア。

揚巻　なんぢや。袖の梅ぢや。誰が袖觸れし閨の梅とは、ハテよう詠んだ歌ぢやわいな。

禿二　いえ〳〵、いつも飲まんす醉の醒める藥、袖の梅ぢやわいなア。

揚巻　袖の梅とは面白い。

（ト茶碗を取つて飲む。すがゝきになり、下座より祐清出て、此提燈を見て、）

祐清　嬉しや、これぢや〳〵。

若者　この侍は何をいはつしやるな。

祐清　いかにもこれぢや。

遣手　ハテ此侍は氣味の悪い人ぢや。アンマリ傍へ寄らんすな。

若者　もし〳〵お侍さん。お前にはさつきにも會うたが、女郎衆に用でもあつて、提燈を尋ねさつしやるのかえ。

祐清　用がある。あるとも〳〵。これぢや。此提燈ぢや。コレお小袖にも杏葉牡丹の紋。これぢや〳〵。

禿一　なんぢや。ついに見た事もなえお侍さん。太夫さんの紋所を見て、それぢやのこれぢやのと、オヽ怖。

禿二　わしが太夫さんの紋所を、日附繪ぢやと思はんすか。

遣手　ほんに氣の知れぬお侍さん。麁相な事を云はしやんすな。

禿一　ほんに好きんせんえ。

揚巻　これ〳〵子供や。そのやうに云はぬものぢやぞ。ホンニこのお侍さんは、よう夜見世を見にござんしたの。子供や、又袖の梅を呉りや。

（トすがゞきになり、皆々本舞臺へ來り、祐清揚巻の袖を控へ。）

祐清　もし、粗忽ながら、その衆様は揚巻様とは申しませぬか。

揚巻　こは、わしの名を知つてさ。

祐清　そんならいよ〳〵揚巻様か。やれ〳〵嬉しや。揚巻様に會うたぞ〳〵。

揚巻　もし〳〵、終にお目にかゝつた事もないお前が。成程揚巻は妾で御座んすが、貴方は何處から御出でなされ

ましたえ。
祐清　サアわしは助六が。
揚巻　もし／＼。（ト思入れ。）
祐清　ほんに麁相申しました。
揚巻　ほんに麁相と云へば、わしも麁相があつたわえ。
禿一　太夫さん。
禿二　醉が醒めさんしたかい。
揚巻　ほんに袖の梅は奇妙な藥ぢや。酒の醉のさつぱり醒めた。イヤコレ次郎七殿。大儀ながら一寸松屋へ行て下さんせ。
若者　お前も癖の惡え。たつた今松屋の前を通つて來やした。
揚巻　ハテそれぢやによつて麁相ぢやと云ふわいな。行て云はうには、意休さんは愈々。今宵御座んすかと聞いて來て下さんせ。
若者　意休さんの事なら、捨てゝおかつしやりませ。
揚巻　ハテ早く行て下さんせ。往きは早う、復りは隨分遲うても大事ない。酒でも飲んでゆつくりと戻つて下さんせ。
若者　往きは早う、復りは遲うても大事ないとは合點のゆかぬ。
揚巻　これ／＼次郎七殿。こなさん煙

「敵討三國一」の番附
明和三年七月大阪角座興行

草入欲しいと云つたではないか。
若者　とうから御願へ申しました。
揚巻　これを遣りや。
（ト差出してやる。若者煙草入を受取り
捨白にて開けて見て、）
若者　　こりやお金。
揚巻　早う御座んせ。
若者　　アイ〳〵。
（ト「茶屋の若者」花道へはひる。揚巻
祐清の側へ寄らうとして思入れ。）
揚巻　オイ〳〵まだ頼む事があつたな
う。コレお辰どん。こなた大儀ながら
子供を連れてわしが座敷の違ひ棚に文
があるほどに、取つて来て下さんせ。
遣手　畏りました。子供、わしと一緒
におぢや。（ト子供両人を連れて暖簾へは
ひる。）
若者　もし〳〵女郎さん方。なにやら
揚巻さんがアノお侍さん方に話でもあ
るさうだ。コリヤかうしやせう。奥へ
行つて飲みかけませうか。
女郎一　成程さう見ゆるわえなア。
女郎二　皆さん。
若者　それがよう御座りませう。
女郎皆々　揚巻さん、これにえ。
若者　サアお出でなさりませえ。
（トすがゞきになり、皆々暖簾へはひる。）

（二人殘る。）

揚卷　サア〳〵、もうよう御座りまする。これへ御いでなされませい。

祐清　行ても大事御座りませぬかえ。

揚卷　大事ない段ぢや御座りませぬ。そんならお前は助六様の。

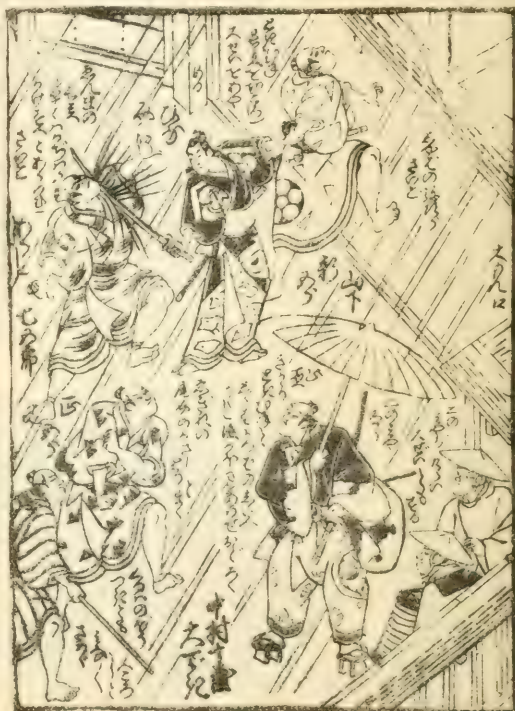
祐清　助六の伯父、伊藤九郎祐清で御座る。

揚卷　エヽ、よう御いでなさんしたなア。マア此處へ御いでなされませえ。

（ト上座へ据ゑる。）

祐清　もし〳〵そこに、盆があるなら貸して下さりませ。

揚卷　此處は門の中ぢやによつて。

祐清　ホンニ、これはしたり。これでよし〳〵。（ト腰より扇を出し、開け、背中の風呂敷より茶、一斤袋を取出して、ここへ置く。）ホヽヽ。これはをかしいもので御座んすが、この扇は友郎茶は高名がある事に花をして、御馳走申さつしやると聞きます。これはホンノ手上産。松の葉ぢやと思うて下さりませい。

揚卷　これは何よりのものを。お頂き申しますぞえ。

祐清　なんの〳〵、何からお禮申さうやら。アヽ身貧な助六を可愛がつて下さつて、今日は小袖を貰つた、結構な紫

た。印籠、巾着、草履、鼻紙、何から何まで、アノ小遣ひ。(思入れ。) ハヽヽハ。忝う御座る。他の噂に傾城と云ふものは、人を騙すのなんのと申しますが、こなさんのやうな實氣な人はありますまい。會つて禮をいひたし、又頼みたい事もあつて來ました。ほんにお傾城とは思はぬ。わしやよい娘を持つたと思つて居ます。ハヽヽヽ。

揚巻　これは〳〵、有難いお詞。アノ、助六さんが毎日々々廓へ御座んすは、元の起りはアノ女郎めと、お叱りもありさうな所を、娘ぢやと思ふとは、あんまりお詞に結構過ぎて、御挨拶に困りますわいなア。

祐清　ヲヽ優しいお人ぢや。ナウ揚巻どの。今日態々伯父が來たは、ちつと云ひ難い無心があつて來ました。

揚巻　アヽ、他人がましい。わたしやお前の娘ぢや御座んせぬか。何なりと御遠慮なう仰しやつたがよう御座りまするわいなア。

祐清　サアそのやうに眞實に云はつしやるほど、どうも云ひ難いが、わしが無心と云ふは。

揚巻　お前の御用は。

祐清　こなたひの頼みは、助六を。

揚巻　アノ助六さんを。

祐清　廓へ呼んで下さるな。

揚巻　エヽ。

祐清　サア〳〵、成程胸がつぶれようが、こなたに恨みは更々ない。アノ助六は、大切な親の敵。(思入れ。)サア、願ひのある身の上、その願へある身を持つて、毎日々々この廓へ入込んで、喧嘩ばつかりしますけな。その噂を聞いて、わしや毎晩案じて、寢た事は御座らぬわいなう。それといふも何故、此廓へ來る故、喧嘩する氣にもなる。廓ひさひ入込まずば、自然と心も直る道理と思ひ付いたるこなたへ願へ。アノ助六に、こなさんが廓へ來るなとさひ、云うたならば、廓通ひも止みそなもの。ひよつと意氣張りづくで、もしもの事があつたら、助六が願ひも叶はず、母が嘆きと思ひやり、どうぞ呼んで下さるな。そなたの眞實は、わしが合點なれど、助六が喧嘩故と思うて、暫らく遠離り下され。拜みます〳〵。

揚巻　なる程、御尤もで御座りまする。どうしてマア大人しえ助六さんが、いつのほどか喧嘩好きにならんしたやら、土手で切つたは助六、仲の町で切つたは助六と、相手變れど主變らず、わたしもその事ばつかり、これ御覽じて下さりませい。(ト祐清の手を取つて懐に入れる。)

祐清　こりや強い縮で御座りまする
の。
揚巻　サア、それ程迄に案じる助六さ
ん。一夜は愚か、一時會はねば戀しいと
は、因果な事で御座んすわいの。
祐清　よう御座る。助六を寄こしませ
う〳〵。
揚巻　そりや、ほんの事かえ。
祐清　此伯父が請合うて寄こす程に、
悦ばつしやりませ。ぢやが、喧嘩を止
めるやうに意見して下され。こなたの
これ程までの眞實を感心して、伯父が
許す程に、揚巻殿、喧嘩の止む法は御座
らぬかいの。
揚巻　そんなら、助六さんを呼びまし
ても大事ないかえ。
祐清　伯父が許します。
揚巻　エヽ嬉しう御座ります。また、
助六さんの喧嘩の事は、意見の仕樣も
御座ります。
（ト祐清へ囁く。暖簾口より遣手、禿出
て來て、花道より若者も出て來て、）
遣手　太夫さん。何處を探しても文は
ないわいなア。
若者　もうし。揚巻さん。今意休さん
がお出でなされます。
揚巻　なんぢや。意休さんが御座んす。
そんならこのお侍さんを妾が座敷へ連
れまして、御馳走申して下さんせ。
若者　畏りました。御侍樣、こつちへ
御いでなされませ。
祐清　そんなら行ても大事ありませぬ
かの。
揚巻　アイ、御遠慮なしに御いでなさ
れませいなア。
祐清　そんなら揚巻殿。後程に。
若者　サア御いでなされませ。
（トすがゝきになり、若者付いて、祐清
暖簾口へはひる。）
揚巻　アヽ、おいとしやな。アノ祐清
さんは助六さんの故の闇。わしは又戀
路の闇。何かにつけて女子ほど、はか
ないものはないわえの。
（ト此時半太夫連中淨瑠璃。）
〽百夜も通へ首尾の松、嬉しの森と云
ひ初めし、遠近人の仇言も、ついの
寄邊の託言なる、橋場、庵崎、待乳
山、稍古りゆく庭々に、朝に音して
夕ぞよく、その通ひ路の追風や。
（ト此淨瑠璃の中、最前の女形女郎一、二、
三、四、五、皆傾城の拵へ、襠衣裳にて出
て來る。床几に並ぶ。向うより白玉の紋の
付いたる提燈を下げて若者出る。後より
高麗藏、意休の拵へし白髪鬘、廣袖の羽織
衣裳、大小、大阪下駄、鳩の杖を突き、白玉
の肩へもたれ出る。後より地廻り六、一、
五、四、四人、脇息、褥、香爐、同家、手箱、銘

端女〳〵持つて出る、皆々船宿の家名の付いた提燈下げて出る。花道の中ほどまで來る。

意休　實にや、一双の屏風仙人の枕と雖も、渡つて、高枕つたるかの譬喩が力業、力づくでも腕づくでも、いかぬものは傾城の意氣地。今宵もふられる仲の町の花の雨、干しかたもなき袂と思ひば、ふられるも又樂しみ。若い者共、いつその事に、酒と討死はどうだ〳〵。

地廻六　さうして御座んす。おらが親分意休大盡樣の傾城遊びの尾について。

地廻一　此贅沢の樂しみを思へば、俺等も共々に、

地廻五　素見してゐらいで御座んす。

皆々　さうとも〳〵。

意休　若い者共。ヤイ、あそこに並んで居る二人が、話のあつた突出しか。

若者　はい、地者同前で御座りまする。

皆々　こりや耳よりな。一會出さずばなりますまい。

白玉　もうし意休さん。お前がその樣に心が多いによつて、揚卷さんが嫌がらしやんす。氣の多いお方ではあるぞ。

意休　チット謝り。不心中ぢやと云ふも尤も。コヽな心中ものめ。

白玉　心中ものとはえ。

意休　ハテ五丁町に名高い白玉。いつも〳〵揚詰なれど、その客の顏を見たものがない。他目を忍んでお會ひなさるによつて、心中ものと云ふことじや。

白玉　意休さん。何の世話にもならぬ人の客衆の詮議までせずと、よう御座んす。そんな事云はんすと、頼まんした事は嫌ぢやぞえ。

意休　そつと謝る。頼んだぞよ。

白玉　ちとたしなまさんせ。

意休　さらばあそこへ行て、お近付きにならうか。

皆々　さあおいでなされませえ。

（トこのうちよろしく、揚卷、白玉、上手の床几へ、意休腰を掛け、皆々後へ並ぶ。）

女郎皆々　意休さん、御座んしたかえ。

意休　これは有難い。われらが名を御存じか。

皆々　なんぼ突出しの妾らでも、今の世の意休さん知らいでよいものかいなア。

意休　これは耳よりな。何れもと會ひ申す事となりませうか。

皆々　今夜お馴染は障つてかえ。

揚卷　意休さんの馴染とは。

皆々　よう知つてゐるわいなア。

揚卷　エヽ。

皆々　揚卷さん、意休さんが御座んしたわえなア。

揚巻　仰山な。意休さんの御座んすを
さつきから待つてゐたわいなア。

意休　待つてゐたとは助六が事か。

白玉　コレ、意休さん。またしてもそのやうな憎まれ口をきかんすか。そのやうに意地惡う云はんすと構はぬぞえ。

意休　今となつてさう云づちや、佛造つて魂入れずだ。拜む〱。

白玉　さう大人しう云はんすりや、わたしも合點、揚巻さんとは、日頃から仲のよいこの白玉から頼み、意休さんに會うて下さんせ。定めてお前の思ひなんすお方に、立たぬと云ふやうな事もあらうが、ハテ、意休さんは富で客、お前のあのお方とは譯の違うた事、寢る事が嫌なら、座敷ばかり勤めて下さんせ。白玉が頼む事ぢやぞえ。

揚巻　成程、仲のよいお前の云はんす事、座敷ばかりは勤めまいものでもないが、それではな。

意休　心中が立たねえか。助六めに。

揚巻　助六とはえ。

意休　知るまいと思ふか。この意休が目を拔いて、助六にくつ付いてゐる事は能く知つて居るわえ。

揚巻　でも先度、助六さんに會うたのを、お前が見付けさんして、口說の上の詰開きで、許す會へと云はんしたぞえ。

意休　成程、さう云つた。

揚巻　それに又、なぜにせかんす。

意休　その時はさう云つたが、今ぢやア嫌だ。マア、わりやあの助六をなんだと思ふ。あいつは大きな盜人だわ。

揚巻　エヽ。

意休　あれが喧嘩の仕樣を見ろ。喧嘩とさへ云へば、人の腰の物へ手をかける。巾着切りもしをる。その泥坊と與しむが、それが聞きてえ。

揚巻　樂しみする身の上ではなけれども、どうした事か助六さんが。

意休　可愛いか。

揚巻　因果なこつちやわいなア。

意休　いゝや、それは因果と云ふものぢやねえ。魔王に見込まれたと云ふものだ。あのやうな者と心安くすると、つひにはわれは眞ッ裸。それが不便さに云ふのだわい。

揚巻　爲になる客を餘所にして、間夫に立てるは浮氣とも、阿房とも、わしが事なら云はんせ。ぢやが、助六は盜人ぢや、助六さんが盜みするであらうとは、意休さん、あんまりであらうぞえ。

意休　なにがあんまり。然しあのやうな貧乏人、盜みでもせずばなるまい。その泥坊を戀するとわれもいつぞは盜み氣が付いて、客の鼻紙袋へ手をつ

けるやうになり、とゞは二人が宿なし同前。そのやうな身になつても、わりや助六に會ひ通す心か。

揚巻　こりや、意休さんでもない。くどい事云はんす。お前の目を忍んで助六さんに會ふからは、客さん方の眞中で、惡態口をたた事、叩かれうが踩まれうが、手にかけて殺されうが、それが怖うて間夫狂ひがなるものかいなア。慮外ながら揚巻で御座んす。男を立てる助六が深間、鬼の女房に鬼神ぢや。これからは又揚巻が惡態の初音。お前と助六さんをかう並べて見た所が、こちらは立派な男振り、こちらは意地の惡さうな男付き、たとへていはば雪と墨、硯の海も鳴戸の海も、海と云ふ字は二ツはなえ。深い淺いは客と間夫、間夫がなければ女郎は闇。暗がりで見ても、お前と助六さん取違ひてよいものかいなア。茶屋舟宿の意見でも、親方さんの誂言でも、小刀針でも止めぬ揚巻が間夫狂ひ。サア切らんせ。わしにかう云はれて、よもや助けてはおかんすまいがなア。

意休　ウム。（ト切らうとして思入れ。）

揚巻　さあ切らんせ。

（ト意休思案して、揚巻を突退け、）

意休　失せう。

揚巻　そりや何處へ。

意休　助六が所へ。

揚巻　言分はないかえ。

（ト揚巻舞臺へ行く。）

白玉　揚巻さん。待たんせ。お前がそのやうに腹立たさんして、兩方ながら張合で、お前もそのやうに腹立てずと、機嫌直したがよいわいなア。揚巻さん。サアわしと一緒に奥へ御座んせ。仲のよい白玉が頼みぢやわいなア。

揚巻　可愛い男の所へ行くは、わたしが悦びなれど、仲のよいお前の詞、潰されもしやんすまい。（ト本舞臺へ戻る。）

揚巻　意休さん。此後お前の顏見る事も嫌ぢやぞえ。白玉さん。

白玉　揚巻さん。

揚巻　子供來や。

禿　アイ〳〵。

（トすがゞきになり、揚巻白玉禿奥へはひる。向う揚幕にて尺八の聲する。）

女郎四　アレ虚無僧が來やんしたわいな。

女郎二　なにを。ありや、虚無僧ぢやない。地廻りの若い衆ぢやわいなア。

三人　どれ〳〵。

皆々　ほんにありや助六さんぢやわいなア。

（ト前彈にかゝる。半太夫淨瑠璃。）

〽雨雲の晴れて會ふ夜を堰かれては、

東橋と謎かけて、思ひぞ渡る花川戸。〽人目の關の許しなく、傘の雫にそぼ濡れて、雨のく〜簑輪の冴いかへる。

(ト此文句にて、團十郎、助六の拵へ、定り通りの形にて出て、花道中に止まる。)

女郎五人　助六さん。その鉢巻わえ。

助六　この鉢巻の御不審か。

〽この鉢巻は過し頃、所縁の筋の紫の、初花結の巻初めや、初冠ぞ若松の松の刷毛先、透額、堤八丁草そよぐ、草に音せぬ塗鼻緒、一ツ印籠、一ツ前、二重廻りの雲の帶、富士と筑波を山間の、袖なり床し君床し。

君ならく〜。

〽しんぞ命を揚巻の、これ助六が前渡り、風情なりける次第なり。

(ト本舞臺へ助六來る。)

皆々　ヤンヤく〜。

女郎一
女郎二　助六さん。ちやつと此處ひ御座んせえなア。

女郎三
女郎四　誰やらが待つてゞあらうぞえ。

女郎五　早う此處へ御座んせいなア。

助六　どうですく〜。いつ見ても美くしいお顏。そんなら一服つけながら割込みませうか。

女郎皆々　サア御座んせいなア。

(ト床几へ腰を掛ける。女郎てんでに烟管を出す。)

助六　冷え者で御座りまする。免されませう。

女郎　サァ煙草、呑まんせいなァ。

（ト云ひ、とり〴〵に持つて煙管を助六に遣る。）

助六　このやうに銘々の御馳走に預りましては、火の用心が悪うごんせうぞえ。

女郎　何を。

意休　君達の吸付け烟草を、一服たべたえ。

女郎　お安い事で御座んすが、烟管が御座んせん。

意休　それ程ある烟管を無いとは。

女郎　この烟管には主があるわいな。

意休　その主は誰だ。

助六　わしでごんす。なんと強い者か。大門をぬつと面を出すやいな、仲の町の両側から近付きの女郎衆の吸付け煙草が雨の降るやう、吸付き取付く。昨夜も松屋の店へ一寸腰を掛けると、五丁町の吸付け烟草。これでなければ嬉しくないです。大盞なぞと味噌をあげても、かういふ事は金づくぢやァならないだて。撫付けどの。誰だか知らぬが烟管が用なら一本貸して進ぜませう。

意休　それは忝い。然らばその味噌な烟管を借りませう。

助六　それ。（ト烟管を足に挟み突出す。）それ、どうです〳〵。

意休　ハヽヽヽ。立派な男だが、可愛いや手棒さうな。足の能く働く奴だ。鼓屋の男か。そのやうな事で男伊達〳〵と人を脅すが、さうして男伊達といふものは、第一正道を守り、不義をせず、無禮をなさず、意氣地によつて心を磨く。これを裸の男伊達といふ。理非を辨へず、慮外を働く奴を勢と云ふ。兎角廓に絶えぬものが地廻りのぶう〳〵。耳の端の蚊も同前。悪く騒ぐと掌でぶち殺す。何を云つても馬の耳へ風。どりや蚊遣に伽羅でも焚かうか。

助六　變動常によらず、敵によつて變化すと、これ三略の詞。相手によつて相しらひやうが違うわ。来つて是非を説く人はこれ是非の人。大きな面をする奴はこれで相しらふわ。無禮咎めりや下駄で撲つぞ。撲たれてぎしやばりやァ、引つこ抜いて切る。これが男伊達の意氣地だわ。別に實の男伊達、嘘の男伊達の習ひも手傳ひも別にやァねえ。誰だと思ふ。ァヽつがもねえ。

意休　ドリャ一つたべようか。

（ト地廻二酌をする。酒を呑んでゐる。）

助六　女郎衆や。この頃この吉原へ蛇が出るよ。

女郎皆々　オヽ怖。

助六　いや怖い蛇ぢやァねえが、面は

カんでも惣髪で、その蛇めが長い髯があつて變つた蛇の。毎晩〳〵女郎に振られるのだ。それでも恥を恥とも思はず通ひつめる執着の蛇。こいつが時折節、伽羅を焚くが何の爲だと思つたら、そいつの髯に虱がたかる。伽羅は虱の大禁物。他目には至りと見せうと、伽羅くさい奴で御座るわえ。

門兵衞　嫌だぞ〳〵。

（ト德次、門兵衞の拵へ、湯上り形にて出て來る。これに息子、若者、遣手附いて取押へながら出る。）

おきやァがれ。かんぺら様が怒つちやァ矢も楯も只はおかぬ。女郎めらを出しやァがれ。

若者　もうし〳〵、どうしたもので御座りまする。野暮らしい。お靜まりなされませえ。

門兵衞　嫌だ〳〵。

意休　こりや、かんぺら。何を小言を云ふ。

門兵衞　イヤ親分でごんすか。聞へて下さい。憎い奴は遣手めだ。此處へうしやァがれ。うなァ、女郎の二重賣をしやァがるか。いけつ太い奴だ。これぢやァすまなえ〳〵。

遣手　もし〳〵。なんの事で御座んす。太いとか細いとか。オヽこは。

門兵衞　うぬは人を馬鹿にしやァがるか。コレヤイ、此かんぺら法王様が御酒宴の餘り、風呂に召さうとの御託宣だ。俺が思付きは女郎衆を取入れて、脊中を流させようと思ふ心。アツと御請け申した故、さつきから風呂に、俺一人待てど暮せど女郎共が一人もうしやァがらねえ。俺ァ湯の中で半分とけた。總仕舞ひをした大盡を、かう惡くしてもいいか。ふんはりめらを此處へ出せ。殘らず湯壺へ叩き込んで、女郎の白湯漬を搔つ込むわい。

女郎一　モシかんぺらさん。お前一人が客の端ではあるまいし、ふんはり呼ばはり、おいて下さんせ。

女郎二　腹は立たうとも横にしようともお前の腹ぢやによつて勝手にさんせ。ふんはり呼ばはりおいて貰はうぞえ。

女郎三　やめさんせんと、お前の口へ大戸を立てるぞい。

女郎四　あの憎らしい顏わいなァ。

女郎五　ほんに可愛らしい所は微塵もない。

女郎二　アレあの顏わいなァ。

皆々　オヽ笑止。

門兵衞　默りやァがれ、ふんはりめら。俺の口へ大戸を立てると、鼻の穴の潛りから出入りをするわえ。

女郎三　皆さん。聞かしやんしたか。ァ

ノ悪態わいなう。
女郎二　ほんに、あのやうに毒な事云はねば、強う見いぬと思うてかいなう。
女郎五　そんな事云はしやんす程、上かぶきがして、觸つたら向うへのめりさうな顔わいなう。
皆々　しみ／＼、オヽすかや。アノ下作な顔わいなう。
門兵衛　忌々しい奴らだ。亭主め。ソレふんはりめらを皆此處ひ連れて來い。胴つ腹へ細引を引つ通して、五丁町の眞中で百萬遍を繰るぞ。
女郎二　ほんに、自由さうに、女郎が珠數繋ぎになるものかいなア。
女郎四　あの腹ひ細引をどうといなア。
女郎一　愛敬のない事を見て笑はんせ。
皆々　わあい／＼。
門兵衛　うぬらは笑たな。いや笑ひ清め奉る。モウ免さぬぞ／＼。

（ト滅多無性に騒ぐ。皆々取り押へる。この騒ぎの中、花道より才三郎、饂飩屋の擔ぎにて、饂飩箱を擔ぎ、走り出て來て、門兵衛に突き當たる。）

オヽ、痛い／＼。野郎待ちやアがれ。
福山かつぎ　ハイ。お免されませ／＼。
門兵衛　なんだ。お免されませ。慳貪箱を突つかけて御免なさい。こゝなそばかす野郎奴。うなア目の玉へ俺つちがはひらねえのか、うぬはノ＼。（ト小突き廻す。）
かつぎ　御免なされて下さりませ。女郎さん方。お詫をなされて下さりませい。
女郎皆々　門兵衛さん。勘忍してやらんせいなア。
門兵衛　ならない／＼。
女郎　助六さん詫言してやらんせいなア。

（ト口々に云ふ。助六、門兵衛の手を捻上げる。）

門兵衛　おゝ痛い／＼。
助六　大事ない。早く行け／＼。
かつぎ　あい／＼。（ト花道へ行かうとする。）
門兵衛　待ちやアがれ／＼。
助六　ハテようごんす／＼。馬鹿な奴だ。早く行け／＼。

（ト行かうとする。）

門兵衛　動きやアがると打ち殺すぞ。
助六　ハテようごんす。勘忍してやるものだよ。
門兵衛　なんだやるものだよ。
助六　ハテ扨、勘忍してやるものだよ。
門兵衛　やるものだよが嫌だ。やりなさるまいがどうする。
助六　ハテ高が手に立つものぢやアねい。大人氣ない。勘忍してやりなさい

よ。

門兵衛　さつきから大分洒落れる奴だ。うなア俺を知らないか。

助六　これはどうでえす。こなたを知らぬ者があるものか。この吉原は云ふに及ばず、この江戸には隱れない。

門兵衛　知つてをるか。

助六　ナニ知るものだ。

門兵衛　いや、こいつは人を上げたり下したりするな。

助六　うぬのやうな安い奴を、誰が知るものだ。

門兵衛　こいつが恐れ多い事を申し上げたな。俺を知らぬとは。ムウ聞いた。この吉原は今日が宮參りか。こりや赤つ子。（思入れ。）小僧え。耳の穴をかつほじつて能く聞け。これに御座るは俺が親分通俗三國志の能者、關羽、字は雲長、その髯から思付いて髯の意休。その烏帽子子に關羽の關の字を取つてかんぺら門兵衛錢持だぞ。尊い寺は門兵衛から見えると、門兵衛樣は腹脹れだわえ。うぬがその鉢卷を取つて、三度禮拜ひろげ。エヽ。

助六　ハヽヽヽ。由來を聞けば有難い。然し貴樣の長白の中に、氣の毒ながら饂飩が延びる。馬鹿な奴だ。早く行け〳〵。

門兵衛　ならないぞ〳〵。

助六　先刻から詫をしても、遣らなえ〳〵とハヽア聞えた。貴樣ひだるえの。丁度よい時分に、擔ぎめが來たによつて、どさくさ紛れに饂飩をしてやらうとな、ハテ遠慮深い男だ。そんならさうと云つたが好い。ツイ濟む事です。俺が振舞ひませう。（ト饂飩を箱より出して、）錢は俺が遣らう。こりや精進か。

かつぎ　イエ、生臭う御座りまする。

助六　御精進かは知らねども、わしが給仕だ。一杯あがれ。

門兵衛　嫌だ。

助六　ハテ力まぬものでごんす。胡椒入れて。

（ト門兵衛の鼻の先へ出し、胡椒を振る。門兵衛嚔する。）

サア一ツあがれ。わしがくゝめて進ぜうか。

（ト門兵衛嚔する。）

門兵衛　なんだ。わしだ。

助六　ムウわしさ。

門兵衛　うぬがわしなら、俺ア熊鷹だ。

助六　熊鷹か。熊鷹の長範。貴樣手が長え。

門兵衛　おきやアがれ。俺ア嫌だわい〳〵。

助六　そんなら、これ程にいつても嫌か。

門兵衛　嫌だ〳〵。嫌だわ。エヽ。

助　六　好きにしやアがれ。

（ト門兵衛へ饂飩を浴びせる。）

門兵衛　斬つた〳〵〳〵。

（トこれにて、饂飩の擔ぎ花道へ逃げてはひる。下座より若者衆大勢、棒を持つて出る。此中へ白酒賣も交り、棒を持つて出る。せん平帶と脇差を持つて駈けて來て、）

せん平　親分〳〵。せん平が來ました。先づ帶をさつしやい〳〵。

（ト帶を締め、脇差を差させる。）

門兵衛　せん平か。口惜しい。不意を打たれた。疵は深いか淺いか、見て呉れろ〳〵〳〵。

せん平　コレ〳〵親分。疵は何處にも御座らぬぞや。

門兵衛　待てこれ程。（ト頭へ手を遣つて、）斬られたと思うたら、これは饂飩だ。

せん平　おかつせい。

門兵衛　打ちのめせ。

（ト皆々棒を振り上げる。）

助　六　なんだ。その棒を振り上げて、どうする。調子上がりめら。その棒が一寸でも觸ると、仲の町は死人の山を築くぞ。棒を引きやアがれ。

皆　々　アイヽヽ。（ト靜まる。）

せん平　ヤア、二才野郎め。三才野郎め。しさいらしい奴だ。俺が親分門兵衛殿に歯向ふ奴は覺えがない。それにマア親分の大頭へ饂飩をぶつ掛けたなア。せめて、二十四文盛なら了簡もしようが、よくも二八をぶつ掛けたな。この上

はこの奴が了簡ならぬ。俺が手に掛ける。俺の名を聞いて閻魔の小遣帳にくつ付けろ。こども愚かや、撥鬢は砂糖せん平が孫、薄雪せん平はおれが姉様、木の葉せん平とは行合ひ兄弟、鹽せん平が親分に、朝顔せん平といふ色奴だぞ。野郎め。うぬをかう。

（トせん平、助六に掛かる。助六、尺八にて叩き、せん平を投げる。）

門兵衛　せん平〳〵。どうした〳〵。

せん平　これなる木の根にけし飛んで、思はぬ負を致したり。

門兵衛　相撲の勝負は知らねども、木の根は正しく。

せん平　ヲイ。

門兵衛　此處にあり。

地廻皆々　置かつせえな。

門兵衛　重ね〳〵の曲手鞠。うなア、まア、何と云ふ。

皆々　野郎だ。エヽ。

助六　如何様。五丁町脛を踏ん込む野郎めらは、俺が名を聞いて置け。先づ第一瘧が落ちる。まだ好い事には大門をすつとはへると、俺の名を掌へ三遍書いて嘗めたがよい。一生女郎に振られるといふ事は無い。見かけは痩せた野郎だが、膽が大きい。遠くば八王寺の炭燒賣炭の齒つ缺け爺、近くは、三谷の古遣手。梅干婆アに至るまで、茶呑み話の喧嘩沙汰、男伊達の無盡の掛け捨て、ついに一度も敗を取つた事のない男だ。江戸紫の鉢巻に、髪は生じめ、刷毛先の間から覗いて見ろ。安房上總が浮繪のやうに霞んで見える。相手が増いれば龍に水。金龍山の客殿から目黒の御面相まで御存じの、お江戸八百八町に隠れなき、杏葉牡丹の紋所、櫻に匂ふ仲の町、花川戸の助六とも、揚巻の助六ともいふ若い者だ。間近く寄つて御面相を拜み奉れ。エヽ。

皆々　いやア。

助六　こゝな溝板野郎め。だれ味噌野郎め。出しがら野郎め。蕎麦滓野郎め。引つ込みやアがらないか。

（ト兩人切つてかゝる。立廻り、助六、この刀の寸をとる事あつて、抜身を投り出し、尺八にて散々に打つ。）

女郎皆々　助六さんの大當り。ヤンヤ〳〵。

（ト助六、意休の傍へ來る。）

助六　サア親仁殿。こなたの子分だのなんのと云つた奴らを、みんなあの通り。定めて、貴様、勘忍なるまい。斬らつせえ。どうだな。（思入れ。）何故物を云はぬ。エヽ、啞か聾か。抜きやアがれ。エヽ〳〵。（思入れ。）ハテ張合のない。猫に追はれた鼠のやうにチウの音も出

ねえ、可哀や、こいつ死んださうだ。俺が引導渡して遣らう。（ト意休の頭へ下駄を載せる。）如是畜生發菩提心往生安樂國。どんちやんぐわん。ハヽヽヽ。

イヨその食閻魔様め。

（ト休意、頭の下駄を取り、きつと見る。）

こりや、段々面白くなつて來たわえ。

（ト意休、拔かうとする。）

サア、拔け〳〵。拔かないか。

意休　いんにや拔くまい。（ト納める。）

門兵衛　コレ〳〵親分。こなたがさう弱くつては俺ア大分心細い。

せん平　日頃自慢の兵法は、何時役にたつのだね。

門兵衛　エヽみじめな人だぞ。

意休　大象とけいに遊ばす。鷄を割くになんぞ牛の刀を用ひんや。イヤ意休が相手になる奴でない。若者共。鼻紙袋の用心をしろ。

（と意休思入れ。助六脇差を拔き、脇息を斬り割りちやんと納めて。）

助六　先づ、此位なものさ。

意休　打ちのめせ。

（トすがゞきになり、大勢棒を持つて助六に掛かる。これを斬拂ふ。この中、意休門兵衛、せん平、女郎皆々はひる。大勢棒を持つて意休の後に附いて來り、此中白酒賣も天秤棒を持つて居る。）

皆々　遣らぬわ。

（ト棒を振り上げる、助六、脇差を拔く。皆々揚幕へ逃げてはひる。此事二三度あつて、助六惡態の捨白あるべし。皆々はひる。白酒賣は揚幕の脇に隱れて居る。）

助六　扨〳〵、弱い奴らだ。どりや、揚卷の蒲團の上で一杯呑まうか。

（ト肌を入れ、暖簾口へかゝる。この中白酒賣そろ〳〵と花道の中へ來り、）

白酒賣　兄さん〳〵。一寸、待つて貰はう。

助六　何だ、兄さんだ。洒落れた奴だわえ。今の奴らか。何御用がある。

（ト花道へかへす。白酒賣逃げて、木隱れする。）

誰もゐないが、太い奴らだ。俺を呼んだは誰だ。此處へ出やがれ。誰だと思ふ。江戸男伊達の惣本寺、揚卷の助六だぞ。かざつ引いた。

（ト又本舞臺へ來る。白酒賣花道へ來て。）

白酒賣　若し〳〵。男伊達の惣本寺殿。一寸御目に掛かりませう。

助六　又、呼びやがる。なんだ。

（トつか〳〵と花道へ來る。白酒賣、舞臺へべつたり引つ付く。）

助六　どいつだ。ワリヤア俺を馬鹿にするな。惡くそばへよると大溝へ滚ひ込むぞ。鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞよ。

口を引割くぞ。こりやまた何事だ。

白酒賣　若し〱、待つてくんなさいよ〱。

助　六　又呼びやがる。逃げるな。そこにゐろ。

（ト花道へ行く。白酒賣震ひながら立つてゐる。助六、傍へ行き、）

俺を呼んだはわれか。

白酒賣　あい。わたしでごんす。

助　六　なんだ、わたしだ。先づ、うぬがしやつ面を見てやらう。

（ト胸づくしを取つて、顔を見て、喫驚する。）

白酒賣　わしでごんす。

助　六　コリヤ兄ぢや人。祐成殿。

白酒賣は祐成　お前の目にも祐成と見えますか。

助　六　兄ぢや人。どうして此處へ御座りましたぞ。

白酒賣　何故え。わしは此處へは來ないものかえ。祐成は廓へは門留めかい。

助　六　イヤ、全くもつてさう云ふ事では御座らぬが、思ひがけない故。どうして此處へ御座りましたぞ。

祐　成　わしかえ。わしは大溝へ潑ひ込まれに來ました。口を引割かれに來ました。鼻の穴へ屋形船を蹴込まれに來ました。鼻の穴は右かえ左かえ、お望み次第〱。サア〱〱〱。蹴込んで貰ひたい。

（ト云ひながら、本舞臺へ來る。助六、氣の毒な思入れ。）

時致下にゐやれよ〱。

（ト助六下にゐる。祐成懷より錢を出し、）

忝う御座る。返しましたよ〱。

助　六　もし〱、返したとは、コリヤ何で御座る。

祐　成　他に物を貸して忘れるとは、よい御身代でえすの。

助　六　エヽ、そんなら、何時やら。

祐　成　上田嶋の小袖を拵へる時、金が足らないで貴樣に借りた、二分と二百文。返しましたよ〱。

助　六　もし〱、他人がましい。返すの返さぬのと云ふ事があるもので御座りまするか。マア〱そつちへお納めなされませい。

祐　成　イエ、人に物を借りといては、云ふ事が云はれませぬ。口がきかれませぬ。

助　六　これはどうで御座る。現在弟の物、こなさんの物はわしが物、こなさんがそんな事を云はしやつては。

祐　成　なんと云はつしやる。こなたとわしとは兄弟ぢやと云ふのかえ。

助　六　ハテ知れた事。兄ぢや人で御座

りまするわ。

祐成　成程、こなさん、箱根山で學問をして能く知つて御座らう。俺等がやうな者も、亦天下のお情でそれ位の事は知つてゐる。こなさんは天下の御制札を見たであらう。第一が親孝行、第二番に弟は兄を敬ひ、兄は弟を憐れめと、誰にもよめるやうに平假名で書いてある。わしはそれを守つて弟を憐れみますが、何時に役に立たぬ兄ぢやと云うて、大溝へ淺ひ込むとはあんまりな。

助六　これさ、あれはあなたと存ぜぬ故さ。

祐成　そんなら、わしと知らずに云はつしやつたか。

助六　お前と知つてどうして申しませう。

祐成　コレ闇の夜の礫。親の顔に當たらうか知れぬぞや。時致。マアどう心得てゐる。父上の敵を討ちたいと箱根山を下山なし、母人の勘氣を受けてさへ、此祐成とかけ並んで本望を遂ぎようと云うたぢやないか。鬼王夫婦が情にて、母人の御機嫌も直り、今に兄弟睦じく、五月下旬の待つではないか。それにこの程廓通ひ。毎日〱喧嘩ばつかりしやるげな。先刻もさつきと人の頭の上へ饂飩を掛けたり、下駄を載せたり、無法といはうか。コレ、母ぢや人はの、そなたの事ばつかり。祐成や。時致はどうした事ぢや。喧嘩ばつかりしをるげな。何故意見を云はぬぞと、そなたの事ばつかり。竹町で竹割にしたは誰ぢや。助六ぢや。馬道ではね倒したは誰ぢや。助六ぢや。餘りの事に、そりや雷門で臍をぬいたは誰ぢや。助六と、ホンニ鳥の啼かぬ日はあれど、そなたの喧嘩の噂を聞かぬ日はない。わしは、どうしても時致には魔が入代りしと、毎日噂をしてゐるわえな。そなたより強いものがあつて、命に障はる事ならば、この兄も言交した十八年の願ひも仇事、聞えぬぞや。助六、もうこの上は兄弟の緣は切つたぞ。見下げ果てたといはうか。兄を持つたと思ふな。弟を持つたと思はぬぞよ。あんまりぢやわいの。兄の罰ぢやというて當るまいものぢやないぞや。

助六　疊みかけての御意見は喧嘩の事かな。此喧嘩ははゞつて致しまする。

祐成　強いはゞさ。親兄弟に嘆きをかけ、喧嘩をはゞとは強い事ぢや。

助六　もし〱、勿體ない。何しに親兄弟に苦勞をさせて喧嘩を致しませうぞ。此喧嘩は義理ある喧嘩、祐信樣、滿江樣、未來に御座る河津樣に孝行の爲の喧嘩で御座る。

祐成　何を。俺にいはれてしやう事なしに孝行で喧嘩。喧嘩をすれば何が孝行ぢや。
助六　いつぞや箱根山に於て紛失せし友切丸、祐信樣の御難儀。百日の日延なるがその行衛が知れましたか。
祐成　それが知れぬ故に苦勞してゐるでは御座らぬか。
助六　さればさ。その友切丸無き時は、祐信樣のお命の程。まつた、敵祐經を討つには友切丸で討てよと箱根權現の靈夢。何とぞ友切丸詮議し出し、祐信樣の御難儀を救ひ申し。敵祐經を討たんと千々に心は碎けども、それと云ふ手掛りもなし、幸ひ思付いたが此喧嘩、廓は人の入込む所、無理に喧嘩をしかけ、拔かねばならぬやうにしかけ、それかこれかと白刄を檢め、心を盡す助六の心中、どのやうにあらうと思うて下されまするぞ。成程、一通りにお聞きなされては、御腹立ちも、御意見もありさうなもの。譯も御聞きなされずに見下げ果てた、兄弟の緣切つたとは胴慾な事仰しやります。よう御座ります。このやうに千變萬化に苦勞致しても、親兄弟に不孝になりまするなら、此うへ喧嘩もやめましたならば大方早速友切丸も出で、祐信樣の御難儀もお遁れ遊ばすで御座りませう。親兄弟に見限られては敵も討たれませぬ。皆樣への申譯には坊主になりまする。お免しなされて下さりませ。あゝ嫌の喧嘩。今迄の喧嘩は免させ給へ。諸佛薩埵南無阿彌陀佛〳〵。
祐成　俺もかうであらうと思つた。日頃發明なそなた、無法な喧嘩はせまい。これには定めて友切丸詮議故と思うてゐた。俺が何故今のやうな事をいうたか。ハア、、。口ぢや。やい口よ。何故に今のやうな事を云うた。たしなめ。謝まつたか、謝まりました。あれ〳〵謝まつたと云ふ程に、もう勘忍してくりやれ。これ、こなたがさう云ふ志ならば。
（ト助六下の方へ來て、）
助六　もう〳〵やめまする。お免しなされませ。南無阿彌陀佛〳〵。
祐成　これさ、こちらを向きやられ。俺とした事が他人がましい。この二分と二百は、イヤ返したの返さぬのと氣が違つたさうな。そなたの云やる通り、そなたの物はわしが物。俺が物はやつぱりわしの物ぢや。（ト金と錢を懷へ入れる。）
助六　南無阿彌陀佛〳〵。
祐成　これはどうだ、田甫から拜む觀音樣、後向とは曲がない。コレ時致。そなたをさう云ふ心と知つて、今のや

うな愛想盡かしを云ひませう。氣に當つたら勘忍して、兄弟なればこそ意見も云ふ。謝まつた〳〵。

助六　左樣なら、最前より申しました譯、御聞きなされて喧嘩致しましても大事御座りませぬか。

祐成　大事ないぞ〳〵。喧嘩を小紋に染めて着さつしやい。

助六　そんなら喧嘩をしますぞよ。

祐成　さつしやい〳〵。全體喧嘩が似合ふテ。喧嘩を茶漬にして、さら〳〵と搔つ込まつしやい。

助六　愈々喧嘩をしますぞよ。

祐成　ヤ、一杯かいて上りませい。

助六　これで落付いた。

祐成　俺も落付いた。時に何ぞ手掛りでもあるか。

助六　まだ、それとは知れませぬが、最前の奴の意体、刀を拔かうとして拔きませぬは、心憎う御座る。

祐成　成程、おいつが面魂が怪しい。もしや尋ねるかの刀を帶したかも知れぬ。

助六　今宵は待つて明日の。

祐成　と思はゞ今宵は一緒に歸らつしやりませぬか。

助六　又喧嘩の腰を折らつしやる。

祐成　ヲツト謝まり。さりながら、この樣に云ふもそなたを案じるからサ。かうしませう。今夜はわしも此處にゐて、そなたと一緒に詮議の爲、喧嘩をしやうではあるまいか。

助六　心許ないものだ。

祐成　これ〳〵、俺ばかりでは心許ないが、そなたといふ後立があれば、その意体と勢一杯、力んでみよう。

助六　そんならわしが喧嘩の仕樣は、足をかう蹈張つて、『野郎め。何故突き當つた。鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞ。こりやァ又なんのこつた』と、かうせねば先の奴が怖がりませぬ。

祐成　成程〳〵。違つたものだ。かうか。（ト種々をかしみの身振りあつて）好い〳〵、違うものではない。男伊達は足が肝腎たな。呑込んだ。

助六　あれ〳〵、と云ふ中に風つ吹き鳥が來るわ〳〵。

祐成　こりやァ又なんのこつた。

（トすがゞきになり、祐成足を種々にしてをかしみあり。臆病口より客の仕出し、四五人出る心。種々なる拵へ、この客の刀を一人々々に改め、股を潜れと云ふ事癖にして宜しく、仕組みあるべし。とゞ祐成客の頭を股に挾み、くる〳〵廻り突き飛ばす。客は向うへはひる。始終すががき、祐成も下坐の方を見て、）

祐成　あれ〳〵、揚卷が來るわ〳〵。

助六　あの女郎は身上がりで居るから

來いと云つて寄越したが、それは客を送るてい。こいつは云はずばなるまいわえ。

祐成　さうだ〳〵。云つてやれ〳〵。

(ト無性に騒ぐ。祐清一文字編笠を着てその手を揚卷引いて出る。)

揚卷　もうお前歸らしやんすか。お前に別れるは名殘惜しいわいなア。

(ト祐清領づく。舞臺の中程にて助六、揚卷を引退ける。祐成も同じく天秤棒を腰に差し、揚卷を退けめつたに力んで居る。助六、祐清の前に立ちふさがる。祐清通り違ひに、故意と助六の足を踏む。助六刀の鐺を取つて、)

助六　待ちやアがれ〳〵。

祐成　おつ留めろ〳〵。

揚卷　助六さん。粗相さんすなえ。

助六　おきやアがれ。齊女め。

揚卷　惡體云はんすな。

助六　云つたらどうする。

祐成　さうだ〳〵。云つたら大事かそつてくりよだ。

助六　待て。この廣い往來を歩くに、何故足を踏んだ。足袋が汚れたわな。紙を出して拭いて行きやれ。

祐成　拭かせろ〳〵。今拭かずば拭き返しませいぞ。

揚卷　これさ、さう云うて、後で謝まらしやんすなえ。

助六　うぬが知つた事ぢやねえ。だまつてゐやアがれ。

揚卷　あの憎らしい顔わいなア。

助六　へゝゝゝ、うぬにやア構はない。おさぶ。何故ものを云はない。足を拭きやアがれ。エヽ啞か聾か。

祐成　ぬつぺらぼうか。とつくりこかえ。もの云へ。

助六　第一、人の前で此笠が慮外だ。この蓮葉を取れ。われが脱がざア俺が脱がして遣らう。この蓮葉を。(ト編笠を取つて、祐清の顏を見合せて驚く。)

揚卷　サア助六さん。笠を取つてお顏を見さんしたら、存分にさんせ。ひよつとお顏ひ疵でも付いたらどうせうと思はんす。

(トこれより、助六ぢり〳〵と萎れる。祐成思入れ。)

祐成　どうだな〳〵。祭が支へたな。俺が出よう。どりや〳〵。

(ト祐成、助六と入替る。助六、祐成の袖を控へ、止せと云ふ。祐成これに心付かず、無性に力んで、)

弱いな〳〵。打遣つて置かつしやい〳〵。好いわな〳〵。コレこの足引の山烏の尾の左足、龜井戸の反足。ア痛タヽ。男伊達と云ふものは足の痛い物だ。その痛い所を辛抱して、なる辛抱

が辛抱か、家に傳はる天秤棒樣、山道やぶれた衣だ。おろかや白酒賣の粕兵衛といふ、揚卷の助六の兒分、襟卷の拔六ともいふ男だ。この天秤棒が左の鼻の穴へきう。（ト顏を見て、オ、〳〵と驚く。種々あつて花道の角で、）あゝ死んだ。
（トこける。福清思入れあつて、）

福清　いや助六。そなたは強いもんに成りやつたの。

助六　伯父ぢや人の手前、面目次第も御座りませぬ。定めし福清樣には拙者の身持放埓の御意見をなされんと、お出でなされましたか。

福清　なんの、意見所か、顏見世から打續いてのそなたの評判、蔭ながら聞いて悦ぶまいものか、嬉しがるまいか。實に市川團十郎と云ふ名跡が、お江戸の花、今を盛りの家櫻、揚卷の助六とまで出世すれば、男伊達の惣本寺、隨一の名前を汚さぬと云ふも、八百八町の御贔負あつて御取立てと、必ず御見物樣方の御恩を忘れませえぞ。

助六　えゝ有難う御座りまする。（ト東西々々、此所にて幸四郎口上。）

〔幸四郎〕高うは御座りますれども、御免

助六　市川團十郎
意久　市川小團次

嘉永三年三月中村座上演の際の鸚鵡石

を蒙りまして、これより一寸申上げまする。先づ以て當芝居御贔負と御座りまして相變らず、かやうに御歴々樣方、早朝〳〵より御賑々しく御見物に御出で下され候段、座元勘三郎儀は申上げるに及ばず、若太夫七三郎初め、惣座中大慶至極に存じ奉ります。扨わけて申上げまするは、二代目市川海老藏、戒名郭譽悟粒祖念法師、命日は三月朔日、當年二十三回忌に相當りまするに付き隱居白猿、私幸四郎に申しまするには、何卒貴方樣方へ親共の年忌の儀を申上げて、一篇の御回向を御願申さるゝならば悴團十郎が藝道の冥加にもかなひこれに增したる追善供養はあるまい。それのみならず、去る顏見世中の御禮をも乍憚申上げくれいと申しました故、イヤ〳〵、それはわしが口上では濟むまい。迚もの事に仕後れた追善狂言はなんぞあらうと打寄り相談仕りました所、さる御贔負の御方樣の御仰せ下されまするには、元祖伯莚が和曾我といふ狂言も助六、又二代目の海老藏も卯花の里といふ助六、殊に隱居白猿も、當芝居で助六を勤めて大繁昌した事があつた程に、なんと若者共ばかりで助六はどうであらうとお勸め下されましたを

幸ひに、成程これは皆々未熟な所や無調法な所は、却つて御慰めになるまえものでもなえと、強つて辭退をしましたれども、共々に勸めまして御覽に入れまするが、千偕萬部の功德にも勝りますれば、只惡い所も良い／＼との御評判の程偏へに希ひ奉りまする。

祐清　サア助六が身の上はあなた樣方ひ申上げたれば氣遣ひはないが、高木は風に折るゝ道理。御跡を愼しむが好いぞや。

助六　さやうまでに伯父ぢや人には、拙者の事を思召して下さりまするとは、えゝ有難う御座りまする。

祐成　さやう御座れば伯父ぢや人には兄弟が身持不埒を御承知で御座りまするか。

祐清　箱根にて紛失なしたる友切丸を尋ね出さいでは、祐信樣の御難儀故、

詮議の爲、廓ひ入り込み喧嘩口論。コリヤ度々助六に出會うて、其能く存じて居るわえ。

二人　ヤレ、それで落付きました。

祐清　時に揚卷樣。身共に追善の口上ばかりでも濟むませいと、持つて來た蒲江の此紙子は、助六に着せて吳りやれ。

揚巻　そんならこのお召物は、滿江樣の御召物で御座りまするか。

祐清　勇を尊まずして忍を尊ぶとは一字千金の軍法。兎角人といふ者は、勘忍せねば大願成就せぬ故、短氣を靜め此紙子。（思入れ。）これに付いて一首浮んだが、どうであらう。

揚巻　早う聞きたう御座んす。

祐清　癇癪も人の意見も破るなり、紙子さわりも荒事の部。

揚巻　こりや出來ましたわいなア。

祐清　母の意見のその紙子、隨分大切に。若し疵が付けば親の顔に疵付けるも同前ぢやぞ。

二人　エヽ有難う御座りまする。

（ト助六紙子を着る。）

祐清　最前より、揚巻殿の種々の心遣ひ、今宵一夜は助六を預けて歸りまするが、卽ち今晩の禮。夜が明けたら直に返して下されい。（思入れ。）サァ祐成。歸らうではないか。

祐成　お供致しませう。（ト杖を出し、祐清へ出す。）

祐清　此杖は何事ぢや。たとへのめつてしまへばとて、五丁町へ杖がつかれるものか。これを見ろ。ハヽヽヽ。

揚巻　そんなら御機嫌よう。

祐清　助六を願ひましたぞ。
揚巻　御氣遣ひなされまするな。
祐成　揚巻殿。
揚巻　お二人樣。
祐清　さらば。

（ト三重になり、祐清祐成花道へはひる。揚巻助六後見送り。直ぐに合方。）

揚巻　必ず、お氣遣ひなされますな。喧嘩はさせる事ぢや御座りませぬ程に、今宵はゆつくりとお休みなされまし。いかえ御苦勞なされまするな。（思入れ。）助六さん。たしなましやんせ。現在の伯父御樣を、打違へると云ふやうな事があるものかいな。
助六　馬鹿ァ云へ。編笠で顏を隱して御座つたものを、どうして知れるものか。よく言合して天井見せをつたな。
揚巻　お前、なんぼ喧嘩をやめさんせと妾が云うても聞かぬ故、伯父御さんのお出でなされたを幸ひに、あのやうにしたれば、侍役で蓮葉を取れとは、ァイ助六さん、さうも御座んすまい。
助六　なんだ。御座んすまい。こちら向きやァがれ。
揚巻　こりやどうさんす。
助六　エ、聞えた。伯父御をあのやうに拵ひたは、この助六に困らせて、こ

の廓へ来られぬやうにしたのか。こゝな嘘つき女郎め。

揚巻　なんぢや、嘘付き。何が嘘付きぢや。

助六　これやい。知るまいと思はうが、うなア、あの髯の意休と寝たな。あの親仁めが裾下に付いて、それで俺の足を留めようと思つて、今のやうにしたか。こゝな狐女郎め。狸女郎め。畜生女郎め。チイ〳〵。えゝ。

揚巻　なんぢや。わしが意休と寝た。こりやをかしい。ほんに寝耳に水で御座んすわいなア。

助六　よう寝耳に水であらうよ。あの髯面が、むしやくしやとした所を、うぬがどんな所へ入れたも知れねい。

揚巻　イヤいはせておけばあんまり。わしが意休と寝たといふ事、誰に聞かんした。言人があらう。何處で聞かんした。

助六　何處でも聞いたわえ。

揚巻　いや、何處で聞いたのぢや。

助六　さあ、此耳で聞いたわい。

揚巻　耳で聞いたら言人があらう。言人を此處へ出しや。

助六　言人はあるわ。

揚巻　サアその言人は。

助六　サァその言人(いひて)は。

揚巻　その言人(いひて)は。

助六　無い。

揚巻　それ見さんせ。なんの面白くもない事を、聞かぬぞえ。助六さん。先度(せんど)も二人寝て話すには、例へ裾を肩へ結んでなりと、お袋様を養ひませうと云うたれば、ほんにそなたのやうな眞實な者はない、一生忘れぬ、忝いと云やつたぢやないか。

助六　さう云うた。

揚巻　さう云ふのが嘘かいなく。コレ、わしぢやと云うて腹からの女郎でもないわえなア。ほんに、もう、神掛けて意休は嫌でならぬものを。それに今のやうな疑ひ。あんまりぢや。（思入れ。）えゝ聞えた、お前わしに倦(あ)きさんしたな。今更切れるには切れられず、せう事なしに意休が事をいはしやんす。これ、助六さん。さうはせぬもの。綺麗に何故いうて下さんせん。お前が嫌(いや)なら妾も嫌で御座んす。汚(きたな)い仕様で御座んすわいなア。

助六　成程く。これは尤もだ。これは謝まつた。こちら向けく。

（ト揚巻煙草盆を下へ持つて來る。）

揚巻　畜生めに、お構ひなされますな。

助六　これ、俺がかういふからは、そなたもそんなに腹を立てる事はない。意休と譯の無い事ならば。

（トこの臺詞の中、揚巻こちらへ來る。）

揚巻　嘘付き女郎にお構ひなされますな。

助六　これはどうだ。俺も他(ひと)になんの斯(か)のと云はれたによつて、意休の事をいつたものだ。よい加減にして呉れ。嫌かく〱。（思入れ。）おきやァがれ。さつきにから甘口にいやァ、つけ上りかして。もう歸るぞ。留めるな。歸るぞ〱。（ト思入れあつて。）ほんに歸るぞ。留めないか。留めるな〱〱。なんの事だ。さらば歸りませう。

揚巻　なんぢややら、ほんに、こんな事をいへば、未練らしうて恥えけれど、これぱつかりはいはにやならぬ。まァ下に居や。

助六　それ下に居た。

揚巻　コレ今日こなさんがさして御座んした、杏葉牡丹の紋の付いた傘は、何處の女郎から貰やつた。

助六　あれか。あれは茅場町ひ誂へた。

揚巻　默りや。

助六　おつと默つた。

揚巻　人が知るまいと思つて。よう知つて居るわいなァ。
助六　おぬし、何故そんな野暮を云ふえ。
揚巻　あい、わたし野暮さ。野暮ぢやによつてお前に欺されたわえなァ。
助六　そのやうに何もいふ事はない。そんなら俺が悪かつた。謝まつた〳〵〳〵。
揚巻　そんなら、先刻からの事は悪いによつて謝まらしやんしたか。
助六　大謝まり〳〵。
揚巻　ほんに謝まつたのか。
助六　大誓文。
揚巻　謝まつたが定なら、モそつとこつちへ寄りや。
助六　寄らねえでどうするもんだ。かう寄つたがどうする。
揚巻　オヽよう寄りやつた。あんまり憎いによつて斯うするわいの。（ト膝へ乗る。）
助六　俺もまた斯うするわ。（ト引寄せる。）
揚巻　先刻から、なんのかのと、えゝ憎らしい。
助六　えゝ可愛らしい。（ト抱き付く。）
揚巻　なんの事ぢやぞいなァ。
助六　可愛の者やな〳〵。
（ト奥にて、）
意休　揚巻や〳〵。
助六　ありや意休。
揚巻　コレ必ず紙子を忘れまいぞ。
（ト助六を無理に裲襠の下へ忍ばせ、床几に腰をかけて居る。「揚巻々々」と呼びながら意休出て來る。禿、香臺を持つて出る。）
意休　揚巻。此處に居たか。
揚巻　あい意休さんで御座んすか。
意休　そなたを先刻から尋ねて居た。愈々先刻奥で云つた通り、日頃の事を水にして、この意休と抱かれて寢ようと云つたはほんの事か。
揚巻　なんの寢るものお[illegible]えなァ。
意休　寢ぬものとは。
揚巻　さあお前と寢ようと云うたは嘘ぢや。
意休　ム。
揚巻　御座んせんわいなァ。
意休　そんなら寢よう。さあおちや。
揚巻　行きやせぬ。
意休　行かぬとは。
揚巻　さあ、わたしやあんまり醉うたによつて、風に吹かれて行きやんす。意休さん。お前こそお年寄、夜風は强い身の毒。早う行て寢て居さんせぬかい。
意休　いんにや、そなたが此處で風に

吹かれて居るなら、俺も此處に居よう
か。かう並んだ所を助六の貧乏神に見
せたら、さぞ氣を揉むであらう。なう
揚卷。
（ト揚卷に寄り添ふ。下より助六、意休
の足の毛を拔く。）
意休　オヽ痛い〳〵。誰だか俺の足の
毛を拔いた。
揚卷　なんぢや、お前の足の毛を拔い
た。ほんに惡え事ばつかり。また子供
か。惡洒落しやんな。
禿　いえ〳〵、妾らはしやァしません。
たつた今お前の裾から。
揚卷　また言譯しやるか。
禿　言譯ぢや御座りません。たつた今お
前の裾から。
揚卷　默らぬか、意休さん。見やしや
んせ。子供といふ者は言譯ばつかりす
るわいなァ。

意休　ほんに惡戲ばつかりして憎い奴
だ。俺の肩でも揉んでくれろ。
禿　アイ〳〵。
意休　時に揚卷。愈々助六の事は止め
にしてくれるか、どうも俺は欺される
やうだ。
（ト又助六出ようとする。）
揚卷　出まいぞ〳〵。
意休　なにが出まえ。
揚卷　サァ出まえではない、出たと云
ふ事さ。
意休　何が出た。
揚卷　あれ〳〵、お月さんが出たとい
ふ事いなァ。
意休　何を云ふ。今夜は闇だわ。
揚卷　いえ〳〵。それでもたしか、ほん
に折角出た月を雲が隱したわいなァ。
意休　成程、あの月を。
揚卷　雲が。

意休　隱して、へヽヽハヽヽヽ。（思
入れ。）雲めが隱したな。月に村雲花に
風。
（ト煙草喫まうとする。煙草盆を助六引
寄せる。）
やれ、烟草盆があつちへ歩いて行つた。
揚卷　これはしたり、また子供が。奥
へおぢや。
禿　アイヽヽ。
（ト禿兩人、奥へはひる。）
意休　いんにや、今のは子供ではない。
確かに。（ト寄らうとする。）
揚卷　これはしたり。アレ〳〵意休さ
ん。なんと申すマアたんとあるお星樣
ではないかいなァ。
意休　珍しくもない。毎晩出る星がど
うした。
揚卷　あんまりたんとあるが、なんと
アノお星さんを、幾つあるかお前、數

へて見やしやんせ。
意休　なんだ。俺に星を數ひろ。
揚卷　アイ。
意休　俺が星を數へる中、おぬしや俺の鼻毛を數へるか。數へよう〳〵。アンこちらの方に能く光るが夜中の明星、此處にあるのが七曜、アレ〳〵今飛んだ星が、あれを知つて居るか。
揚卷　いゝえ。
意休　あれは夜這星といふ。人の上けておく女郎を盜みに來る夜這星とも、てれん星ともいふぢや。あれが七夕。あの七夕めが會はう〳〵と思つても、意休と云ふ天の川がかうどつかりと坐つて居ては、會ふ事はなるまい。なう、揚卷。
（ト助六、又足の毛を拔く。）
おゝ痛い〳〵。又足の毛を拔いたわ。何奴だ〳〵。
揚卷　また子供かいなう。
意休　子供は奥へ行つて仕舞へ、その裾から。
揚卷　滅相な。どうしてマア、わたしの裾から。子供でなくば、それ〳〵鼠ぢやわいなう。
意休　なに鼠。
揚卷　アイ。
意休　成程、鼠だ。溝を走る溝鼠だ。それ揚卷。それ〳〵ほんの鼠が。
揚卷　えゝ氣味の惡い。何處にいなァ。
意休　そこにより。此處に居るわえ。
（ト助六を引出す。揚卷中へはひる。）
助六　意休か。
意休　助六か。
揚卷　コレ、必ず紙子を忘れまいぞ。
意休　揚卷といふ辻傾城の裾に、助六と云ふ溝鼠がしやつ踞んで居るといふ事は、意休といふ逸物の猫が賢松明で白眼んで置いた。助六。何故わりやァ盜みをする。そんな根性で大望が成就するものか。こゝな時致の腰拔め。
助六　待て、意休。某の本名を知り、腰拔とは。時致が何が腰拔だ。
意休　腰拔ではあるまいか。父祐泰が無念の最期、其仇を報はんといふ心も無く、傾城に本心を亂れたるうつけ者。コリヤ、敵左衞門祐經は、鎌倉山に名高く時めく大名。あゝ聞えた。所詮叶はぬと思ひ、色と酒とに身を崩すか。たとひその身が不器量たりとも、何故、念力の通じなば大望空しくならんや。兄弟離れ〳〵にして敵が討たれぬか。敵を討たねば腰拔武士。根性入れかへろ。意休が折檻の此扇。なんと骨身に應へたか。
（ト扇にて散々に叩く。其手を助六取つて）

助六　意休。わりやァあやかり者だな。汝が今申す如く我々兄弟、十八年つけ覗ふ親の敵、今もつて本意も遂げず。それに引換へ此助六は、そちが為には戀の敵、その敵を眼前、扇にて敵討つとは、羨ましい。われに教訓の扇と云ひ、母の紙子に手向ひならぬ時致。打て、叩け、打つて腹だに癒るならば、幾らも踏めよ。髯の意休。

揚巻　よう了簡して下さんした。

意休　ムヽ、母の紙子を母と思ひ大切になすからは、孝行の志がないでも無い。そちにはなんぞ譬へて、オヽ幸ひ〳〵。

（ト合方になり、香爐臺を出して。）

こりや、時致。大望あるものは、人の恨みを受けず、人の情を請けねば願ひは叶はぬ。此遊所ひ入り込み、喧嘩口論。まさかの時、なんの益。譬へて云はば此香爐臺、此くり足は曾我兄弟、祐俊時致祐成と三人兄弟合體して、先づこの如く力合はするものならば、祐經は愚か、大伯父伊東が敵たる頼朝殿も討たれるぞ。そち達が心より頼朝殿を恨むる所存もあらば、年寄りたれとも髯の意休、まさかの時は、共々に力になつてさすまいものでもない。此香爐臺の如く、兄弟心を合體なせば、千斤の鼎を置くとも倒れず崩れず、又兄弟離れ〳〵になる時は先づこの如く。

（ト刀を抜いて香爐臺を二ツに斬る。助六手ばしこく刀を見る。意休振放して、刀を納める。）

倒れるぞ。廓通ひをやめて人になれよ。

（ト又扇を振上げる。揚巻中へはひる。）

人多き人の中にも人ぞある。なき人になれ、人ひとにせよ。人目を忍んで時節を待て。助六さらばだ。

（ト唄になり、意休思入れあり、奥へはひる。揚巻種々あつて助六を見て。）

助六さん。紙子が破れたわいなァ。

助六　ナニ紙子が破れた。ホヽヽヽ、ホイ。この紙子を破るまいと、じつと無念を堪へたが、この紙子が破れてはもう勘忍がならぬわえの。

揚巻　コレ、短氣を出すまいぞ。

助六　いゝや、短氣は出さぬが、今抜き放つた意休が一腰、正しく尋ねる。

揚巻　友切丸かえ。

助六　こりや。（ト引寄せ囁く。）

揚巻　御座んせ。

助六　合點。

（ト助六花道へ一氣にはひる。揚巻暖簾口へはひる。時の鐘鳴る。暖簾を取つて大戸を閉てる。此幕より客の歸りの若衆種々の拵へにて歸る。遣手若衆揚口にて皆々向うにはひる。）

（砂舞臺になると向うより助六初々しき形にて窺ひ出で、本舞臺へ來て、影を隱す。潜より、七歳せん平にて提燈點し出る。意休、深編笠にて出る。これを女形大勢送つて出る。）

若い衆　意休さん。今宵はお早いお歸りで御座りまする。

女郎　毎晩〳〵御出でなさるが、何時も〳〵名代で御氣の毒で御座んす。

遣手　またこの頃に。

意休　夜が明けると直ぐに來るわえ。皆歸れ〳〵。

若者　土手まで送り申しませう。

意休　それには及ばぬ〳〵。

若者　でもあまりに夜更で御座りまする。

せん平　無用心だと云ふ事か。そりや氣遣ひはない。お傍には朝顔せん平と云ふ强者が控へてゐる。氣遣ひなしに休みやれ〳〵。

女郎　そんなら意休さん。明日御座んせえ。さばえ。

（ト皆々潜へはひる。）

意休　せん平何時であらう。

せん平　もう八ツでも御座りませうか。

意休　急げ。

（ト行かうとする。助六提燈を切落す。意休の編笠を掛けて眉間を斬る。意休身拵へする、三人きつと見え。）

意休　何者だ。聲をもかけず斬り付けたは。ハヽ。扨は盜人だな。

助六　盜賊ではないぞ。

意休　と云ふ聲は、助六。卑怯な待伏せひろいだな。

助六　いゝや卑怯で無い。最前某へ教訓の折から香爐臺を斬り割りし一腰こそ、曾我殿原が難儀となる友切丸、是を所持なす汝が本名無くて叶はぬ奴、姓名明かして友切丸を尋常に渡せ。

意休　最前情をもつて教訓せしこの意休へ刃向ふ人外。扨ては、汝ら兄弟、我味方になし、賴朝を亡ぼし、我平家の弔ひとなさんと思ひしが此有様、成程意休は假の名、本名は伊賀の平内左衛門長盛とは俺の事だ。

助六　扨こそなア。

長盛　大望成就に無くて叶はぬ友切丸。强て渡せとぬかせば命が無いぞ。

助六　小癪な。渡せ。

長盛　せん平ぬかるな。

せん平　心得ました。

（ト忍び三重、蛙の聲、三人立種々あつて、何れも手負ひ、助六せん平を仕とめる。後より長盛、助六を一刀斬る。これより種々あつて、とど長盛を仕止める。友切丸を改め取つて尻餅をつき息をつい

てゐると、臆病口より若者提燈を點し、
鼻唄にて出て、長盛の死骸につまづき。）

若　者　こりや意休樣ぢや。

（ト提燈を出す。助六この提燈を切る。
若者逃げながら。）

斬つた／＼。

（ト向うへはひる。これより東西へ行かうとして人聲に怖れ、水桶を見て手桶を下ろして水桶へはひる。手桶の底を抜き冠り、下に坐る。水こぼれる。花道より、大勢提燈と棒を持つて出て來り。）

息　子　人殺は何處ひ逃げた／＼。

皆　々　何處を探しても見えぬ／＼。

息　子　そんなら屋根ぢやないか。梯子／＼。

皆　々　合點だ／＼。

（ト大勢竹の大梯子をかの座敷の屋根へ掛け、これへ上つて尋ねる思入れ。）

若　者　屋根にもゐませぬ／＼。

皆　々　これから角町河岸を尋ねよう。

息　子　おらア揚屋町を尋ねよう。

（ト皆々捨白にて、三方へ引き違れてはひる。始終時の鐘。アリヤ／＼の聲にて思入れ。此事二三度あつて窺ひ出て、着物をしぼり、よろめきながら花道へ行き、アリヤ／＼にて三方へ行く。と氣を失ふ。三方より大勢出て助六を見付け。）

皆　々　此處に居た。打ちのめせ／＼。

（ト棒を振り上げる。揚卷走り出て、助

六を裲襠の裾へ隱し。）
揚巻　わしぢや〳〵粗相しやるな。揚巻ぢやぞ。
皆々　こりや太夫さん。危う御座ります。
若者　退かつしやい〳〵。
揚巻　これ〳〵。わしぢや。先刻にから此處にゐた。その人を殺した者は彼方へ行つた。
皆々　いえ〳〵、お前の裾に居ります。お出しなせえ〳〵。
揚巻　いや〳〵此處にはをらぬわいなア。
皆々　それでもたつた今見付けた。退かつしやい〳〵。
揚巻　待ちや〳〵。そんならこの揚巻が嘘付くと思はつしやるか。嘘いふやうな女郎ぢやない。そりやなんぢや。棒振り上げて。その棒の端が我身にちつとでも當ると、五丁町は暗闇ぢやぞ。
皆々　いやア。
揚巻　サア、わしが相手にならう。揚巻を相手にしや。
若者　コレ〳〵、皆の衆、揚巻さんがああ云はつしやるから違ひもあるまえ、これから方々手分けして尋ねよう。
皆々　それがよからう〳〵。
（ト皆々三方へはひる。種々あつて、助六に氣付を呑ませ、肌にて暖め、種々あつて助六氣の付いたる思入れ。）
揚巻　助六さん。心は確かなかいなア。
助六　揚巻。氣を失うたが殘念。
揚巻　シテ、尋ねる品は手に入りましたか。
助六　氣遣ひ致すな。手にはひつた。
揚巻　忝い。ちつとも早う。わしや西河岸ひ廻つてゐるほどに、屋根傳ひに田甫へ落ちさんせ。
助六　幸ひのこの様子。
揚巻　助六さん。
助六　揚巻。
二人　さらば。
先づ、今日はこれ切り打出し。
しやぎり

東海道四谷怪談

東海道四谷怪談

初日第一番目　役人替名

一小間物屋與七實ハ佐藤與茂七　尾上菊五郎
一伊右衛門女房お岩　尾上菊五郎
一中間小佛小兵衛　尾上菊五郎
一奥田庄三郎　尾上松助
一伊藤後家お弓　吾妻藤藏
一伊藤喜兵衛　市川宗三郎
一按摩宅悦　大谷門藏
一秋山長兵衛　坂東善次
一關口官藏　松本染五郎
一藥賣五文藤八　松本染五郎
一利倉屋茂兵衛　澤村川藏
一中間伴助　中村千代飛助
一地廻り猿寺の桃助　尾上梅五郎
一同　石利場(いしきりば)の石　尾上けい藏
一通人文嘉　市川市五郎
一かしはや彦兵衛　三桝勝藏
一非人づぶ六　市川銀藏
一同　運哲　市川子之助
一同　泥太　市川團次
一同　目太八　中村千代藏
一醫者市谷尾扇　尾上扇藏
一伊藤娘お梅　岩井春次
一宅悦女房おいろ　岩井長四郎
一水茶屋女房おたき　坂田半十郎
一灸てん女お大　松本虎藏
一乳母お槇　市川をのへ
一四ッ谷左門　尾上蟹十郎
一佛孫兵衛　澤村しやばく
一樽ひろひ升太　市川高麗藏
一お岩妹お袖　岩井粂三郎
一直助權兵衛　松本幸四郎
一民谷伊右衛門　市川團十郎

後日第二番目　役人替名

役	役者
一佐藤與茂七	尾上菊五郎
一お岩死靈	尾上菊五郎
一小佛小平	尾上菊五郎
一小汐田又之丞	三桝源之助
一孫兵衞女房お熊	市川宗三郎
一秋山長兵衞	坂東善次
一關口官藏	松本染五郎
一小林平內	鎌倉平九郎
一但馬屋手代庄七	鎌倉平九郎
一下部伴助	中村千代飛助
一檜木屋甚太	尾上梅五郎
一はみがき屋半六	市川銀兵衞
一肴屋三吉	澤村東藏
一船頭浪藏	市川市五郎
一庵主淨念	尾上扇藏
一小兵衞伜次郎吉	荻野藤十郎
一米屋長藏	市川好藏
一新藤源四郎	大谷門藏
一小兵衞女房お花	尾上菊次郎
一佛孫兵衞	澤村しやばく
一お岩妹お袖	岩井粂三郎
一直助權兵衞	松本幸四郎
一民谷伊右衞門	市川團十郎
一赤垣源藏	中村傳九郎

東海道四谷怪談

序幕

淺草觀世音境内の場
同　奥山の場
同　裏田圃の場

本舞臺。正面額堂、長押に座元の紋の付きたる團子提燈をかけ、茶店の道具よろしく、上の方に揚枝店。こゝにお袖、古き中形の浴衣を着て、揚枝を拵へてゐる。傍らに奥田庄三郎。菰かぶりにて、面桶を枕にして寢てゐる。額堂の内には文嘉通人の形、彦兵衛店者の拵へ。こちらの床几へ猿寺の桃助、石利場の石、地廻りの形にて茶を飲んでゐる。おたき茶屋の女房にて茶を汲んでゐる。双盤大拍子にて幕あく。

彦兵衛　かみさん、ま一ッおくれんかえ。
おたき　ハイ〱、だいぶお渇きなされまするな。
彦兵衛　えらう走つて來たさかい、渇きくさるわいの。
文嘉　かみさん、わたしやア、ゆるりとしやせう。
おたき　ハイ〱。(ト汲んで來る。)桃さん、もつとあけようか。
桃助　踵で踏んづけて呉んな。
石　これ、大けえに飲みやな。面が湯氣にあがるわ。かう氣をよくしてゐると、お飯を入れてくれろと云ふよ。いゝ加減にしやな、接待ちやアねえよ。
桃助　べら坊め。接待といふがあるものか。茶代は五節句に、水引で結はへて持つて來て置くのだ。
石　おつう云やがる。觀音樣の長芋ぢやアあるめえし。
(ト桃助、お袖の方を見て、)
桃助　カウ、おまさん、あの子は、何日から出た。石や、見や。剛敵なもんだぜ。
石　がうぎに、別嬪だな。おらア初めて見たぜ。
おたき　その筈さ。あの子は、昨日から替りに頼まれて出たが、揚枝店にア過ぎもんだぜ。
桃助　違えねえ。粂三にその儘だぜ。ヨ、大和屋〱〱。
石　よせえ、可哀さうに。まぜッ返すなえ。
(ト文嘉、彦兵衛見て、)
文嘉　成程、鮮かだの。カウありやア何か、月三兩の三月しばり、とでも云

はざア、話は解るまいの。
おたき　何さ、その辯さうでもねえさうでござりますよ。
彦兵衛　ほんに、けうといものぢやな。なんと、花三本ぐらゐで、話はよう出來まいか。
おたき　左樣さ、出來ないこともござりますまいよ。
石　そんなら地獄をするか。
おたき　どうして、そんな事はしめえわな。
石　風が悪いと思つて、おらッちには、隠すの〳〵。
おたき　オヤ、何隠すものかな。本當に堅いとよ。
石　白々しくお前のやうに嘘をつく者はねえぜ。
桃助　年中大筒の額の下で商賣をしてゐるから、鐵砲は當り前だらう。
石　ほんに、鐵砲と云へば奥州の狩人が、素敵な木兎を生捕つて來て、奥山で見せるさうだ。
桃助　さうさ、この繪圖がそれよ。(ト柱にかけてある繪圖を取つて見せる。)
彦兵衛　これぢや、ど偉いものぢやナ。
文嘉　なんだ、丈の高さが五尺六寸、胴の大きさが四尺二寸、こいつは大層な木兎だの。
(ト皆々立寄り見る。双盤、太鼓にて、向うより伊藤喜兵衛、袴、大小、老けたる拵へ。お梅、振袖娘。お槇、乳母の形。尾扇醫者にて若い衆の中間つきそひ出て來り。花道にて。)
喜兵衛　コリヤお梅。今日は、大分氣合もよささうなが、あまり又押して歩行致すにも及ばぬ事ぢや。駕籠なと申し遣はさうか。
お梅　イエ〳〵、私は矢張これがよろしうござりますれど、あなたが嘸お氣まだるう思召しませうと存じまして。
お槇　サア、何事もそのやうにお氣遣ひ遊ばすのが、それがやつぱりあなたの御持病。今日は御保養がてらの御參詣。お氣儘におひろひ遊ばし、御下向には、又なんぞお氣に入りましたお人形でも、大旦那さまへおねだり遊ばしませ。
尾扇　さやう〳〵。兎角にその御病症には、御鬱散が肝要でござります。チトあれにて御休息遊ばしますがよろしうござりませう。
喜兵衛　いかさま左樣いたさう。サヽ來やれ〳〵。
(ト皆々舞臺へ來り、床几へ掛ける。)
おたき　お出でなされませ。(ト茶、煙草盆を出す。)
お梅　御覧遊ばせ。この樣にも御參詣

の、絶えず群集致しまする觀音様はござりませぬ。今日は妾もとも〴〵に、お願がけ致しまする程に、あなたにもかのお方に早う。(思入れ。)サア、早う御利益にて、御本服遊ばすやうに御信心遊ばしませ。

お梅　こちらがこれ程思うてゐても、彼方がたの方には、よそ外に又どの様な。(思入れ。)お神籤など取つて見やいなう。(ト思入れ。)

お槇　畏りました。私が呑込んで居りまする。

尾扇　いゝや又、數多の醫書をも見開いたる尾扇なれども、娘ッ子の病症を見定めるは、乳母には如かずと、千金方にも論じてござるテ。全くこれは戀煩ひと見えまするテ。

(トお梅、恥かしき思入れ。)

お梅　また尾扇さんのその様な事を。

桃助　石や。聞いたか。あのお孃様は戀の煩ひだとよ。大方手前を思つてゐるのぢやねえか。

石　うさアねえ。戀の煩ひなら、瀧に打たせて見ればいゝ。

彦兵衛　大切な銭金を使うてさへ、容易に出來んものだが、女子の方から煩ふ程に慕ふとは、どこの和郎か。えゝ月日の下に生れくさつたなア。

文嘉　こつちでよければ、お寢間のお伽と行きてえね。

桃助　もし、おつう云ひなさるね。

喜兵衛　例へ戀病であらうとも、氣に入つた男なら、金にあかしても聟に致し遣はすが。ハテ、當時出頭の師直さまの御家來伊藤喜兵衛が一人の孫。(思入れ。)ナア、尾扇老、乳母もとも〴〵、お梅が胸中承つた上では、又いか様とも取計らうて遣はさう程に、さやう心得めされ。

お槇　畏りました。この儀は私が又追つて申上げまするでござりませう。

尾扇　それが宜しうござるテ。何事を仰せ出されうが、これが一ッ出來ぬと申す儀はござらぬテ。少し御不快とあれば、御保養の爲とござつて、四ッ谷町邊に御別莊をもおしつらひなされ、なんでもあなたの御意次第でござりまするテ。

喜兵衛　イヤモそれも全く御主人師直公の御發明と申し、御威勢によつて我々に至るまで、かく活計歡樂に年月をも送ると申すものぢや。見さつしやれ。わが君に敵對致せば、鹽谷殿のやうに、家國をも失ひ、家中の者共も、散々と罷りなるテ。さやうな狼狽へた主人へ、仕官致すもこれも因縁で、それを思へば、冥加至極の身の上ではないか。

尾扇　左様でござりまするテ。

（トこれを聞いて、お袖無念のこなし。孤をかぶりし奥田庄三郎も顔を上げて、同じく思入れ。やはり鳴物になり、向うより直助、藤八、五文薬賣りの姿にて、呼びながら出て來り、花道にて、）

藤八　コレ直助。手前、今日は本郷から板橋の方を流すと云つたぢやァねえか。それに又何故此處を流すのだ。

直助　わたしもちつと此方に用があるから、かう向けて來たのよ。

藤八　コレ隱すな。知つてゐるぜ。手前、此頃ぢやァ山の女に係つて、賣溜も親方の方へやらねえさうだが、そんな事があつちやァ、他の賣子へも外聞がわるいぜ。

直助　ナニサ。わたしやァ、後月から、大山道者を當てに、川崎の方へ流してゐたわ。その賣溜を谷中まで持つて行かれるものか。何時か一度は持つて行きやす。

藤八　おつう音締をきめてゐるな。きめると云へば、大三で一合きめよう。

直助　そいつもよからう。

藤八　サァ／＼、行くべえ／＼。（思入れ。）藤八五文。

直助　奇妙。

（ト呼びながら舞臺へ來る。おたき見て、）

おたき　一服のんでお出でな。

直助
藤八　ハイ／＼。

桃助　オイ／＼、一ッくんな。

直助　ハイ／＼。

石　オイ／＼、こゝへも一ッくんな。

藤八　ハイ／＼。

桃助　カウ、こりやァ何に效くの。

藤八　第一、癪、つかへ、頭痛、目暈。

直助　腎精を増し、脾胃を補ふ。岡村藤八、和蘭傳法でござります。

文嘉　腎精を増すとは耳よりだね。おれにも一ト包くんな。

直助　ハイ／＼。

彦兵衞　わしも求めようか。

藤八　ハイ／＼。

兩人　これは有難うござります。

おたき　掛けていきなゝ。

直助　今日はだいぶお取込みでござりますから、お紋さんの店で一服やりませう。

藤八　又びりに、からまりやァがる。そんならおらァ大三で待つてゐるぜ。

直助　氣前を見せて、いゝのを二合半とくらはせやせう。

藤八　そんなら早く來い。待つてゐるぜ。

直助　アイサ、今に行くわ。

（ト藤八、呼びながら下座へはひる。直助揚枝店の方へ來つて、）

直助　お袖さん。お前昨日から店へ出るさうだの。
お袖　それいなア、こゝのお紋さんといふのに頼まれて、それてわたしが名も、やつぱりお紋というて、昨日からこの店へ。
直助　ア、さうかえ。そんなら藤八お紋、奇妙、のがれぬ仲だ。まア一服やらかしやせう。一ッお貸し。（ト腰をかける。）
お袖　さあ、のみなさんせ。
（ト行火を出しやる。神楽になり、向うより宅悦按摩の形にて出て來り、直ぐ舞臺へ來て、）
宅悦　お内儀さん、今日はお賑かでござりますね。
おたき　オヤ宅悦さん、先刻から主を待つてお出でだよ。
文嘉　時に按摩、おつりきな奴があるなら、ちよつぴり行きてえの。
彦兵衛　こちにも格好な代物を、一ト切り頼みますぞや。
おたき　あるならお連れ申しなゝ。
宅悦　よいのがござりますとも。わたくしの所は、按摩と灸を据ゑるのが商賣で、その片手業に致しまするから、お出でなさいまして、年増が圍ひたければ大を据ゑる。中年増は中、娘は小をする。又ぐッと大年増は、袋芯をばすゑてくれろと仰しやりますれば、その積りで呼びます。
文嘉　成程、そいつあ奇妙。（ト手を打つ。）
直助　御用かね。
文嘉　ナニサ、内證の話よ。どうぞおいらは大にしよう。
彦兵衛　こつちは小にして欲しい。
宅悦　まづ見てからの御相談になされませ。
桃助　（トこれを聞き、）カウ、按摩さん、こんたの所では地獄をするの。
石　そんならおらつちも買ひにいくぜ。
桃助　道理で、又がそんな話をしたッけ。ずるい坊主だぜ。
宅悦　どう致しまして、私が宅でそのやうな事を。尤も灸點の看板は、女子が閻魔へ灸をすゑてゐる看板故、そこでお客方が、地獄へ行かう〳〵と仰しやりますテ。一ト月を十日づつに仕切つて、一分二朱ぐらゐでお出でなさるを、これを十日づつ地獄と申しております、割はお得でござります。又、大の方がお好きなら、熱い事は焦熱地獄、取分け大なぞはよう效きまするて。
文嘉　そんなら、ちよつと据ゑて貰はう。
彦兵衛　わしも腰の痛くなるやうに燒い

て來うか。
文　嘉　そんなら內儀さん、歸りに寄りやす。
おたき　お待ち申しまするよ。
宅　悦　サア〳〵、御案內致しませう。
（トやはり右の鳴物にて、宅悦さきに、文嘉、彥兵衞連れだち下座へはひる。桃助、石、殘き、）
桃　助　なんでもあいつが內で敵をするにやァ違えねえ。
石　行つて、ごたついてやるべい。
桃　助　サア〳〵、來や〳〵。
（ト兩人、後追うて下座へはひる。）
喜兵衞　サテ〳〵、何を申すやら。一圓に解らぬ事どもばかりぢやテ。
尾　扇　イヤモウ、がさつな儀で御座ります。
お　槇　ほんに私と致しましたことが、御親造樣から、お楊枝をお言づかり申して參つたに、とんと打忘れましてござりまする。幸ひ、あれにござりまするが、どのやうなのが宜しうござりまするか。お慰みにあなた、御覽なされて下さりまし。
お　梅　女子どもへも土產に、とゝのへて遣はしませうか。
喜兵衞　ヲヽ、さうしやれ〳〵。おのしも參つて見てやりやれ。
（ト皆々、楊枝店へ來て、）
お　槇　お土產は、斯樣致しませう。（思入れ。）福に羽根楊枝と房楊枝と。（思入れ。）御覽あそばせ、江戶香と申しまする齒磨にも、やはり、御贔屓の團十郞の似顏が書いてござりまする。
お　梅　尾扇さん、お前も齒磨なとお取りなさんせいなァ
尾　扇　いや〳〵、愚老はチト心願の儀がござつて、楊枝齒磨などは斷ちものでござりまする。あなたのお土產には、（思入れ。）あれ、あそこに御座る役者の紋どころを描きましたのはどうでござります。大方、梅幸か團十郞なぞが御意に入りましたらうな。
お　槇　ほんに、そのやうなのが宜しうござりませう。
喜兵衞　なんにせい、これ、女子。種々取揃へてこれへ出しや〳〵。
尾　扇　サヽ、早く御覽に入れさつしやい。
（ト此うち、お袖、素知らぬ顏をしてゐる故、）
喜兵衞　この女めは、何をうつかり致して居るぞ。早く出さぬか〳〵。
お　袖　もし、あなた方は、たしか高ノの御家中でござりまするナ。
喜兵衞　ハテ、この女は、商賣は致さず、異なことを聞く女子ではある。いかに

も師直公の藩中ぢやが。
お袖　サア、それならば賣られぬ故。
喜兵衞　高ノの家中へは賣られぬとは、そりや又何故。
お袖　あまり御威勢が強い故、お求めなされてその上で、御意に入らぬその時は、又、どのやうなお祟りを受けよいものでもない故に、それでどうも賣られませぬわいなア。
喜兵衞　ハヽア、さては鹽谷浪人の身寄りの者と見ゆる。えゝわ、賣らぬと申さば買ふまいわ。軒をならべていくらもあるわサ。
お袖　外でお求めなされませ。
尾扇　それをおのしに習はうか。こいつ出過ぎた女めでござるわえ。
（ト お袖、無念の思入れ。直助、中にはひる。）
直助　コレサ。どうしたものだ。そんな愛嬌のねえ（思入れ。）イエ、旦那、これは斯うでござりまする。この娘は昨日からこの店へ雇はれて、代りに出ました故、楊枝の値段も碌々存じませぬ故、それで只今のやうに申上げたのでござります。必ずお氣にさへられ下さりまするな。（ト詫びる。）
尾扇　イヤノヽ罷りならぬ。餘りと申せば失禮なやつ。
直助　そこを何卒御堪忍なされてつかはされませ。
尾扇　なんの、要らざるかばひ立て。われもよく五文と出る奴だ。
喜兵衞　打ッちやっておきめされ。たとへ鹽谷浪人が、どれほど御主人を恨まうとも、當時足利家にても格別のお取扱ひにて、新地御拜領なされてお屋敷替へ。かく御威勢のあなたへ對し、扶持離されの素浪人ども、いらざる我儘も貧からと、イヤハヤ、馬鹿な女めではあるナ。
（ト是を聞いて庄三郎も無念の思入れ。）
尾扇　おのれ、屋敷へ連れ行く奴なれども、今日はその儘にさしおくぞ。
お袖　折角の御參詣、もうあなたにも御了簡なされてつかはされませ。
喜兵衞　由ない事に參詣の妨げ、サヽ來やれノヽ。
直助　これは大きに有難うござります。
（ト大拍子になり、喜兵衞先に、お梅、お槇、尾扇、若い衆、付いて下座へはひる。）
直助　カウ、お袖さん。坊主が憎くけりや袈裟までと、お前の云ふのも尤もだが、アヽ云つて見た時にや、直きに敵へ氣取られるわな。しかし、かういふ私も、以前はお前の親御四ッ谷左門様とは、同じ家中の奥田將監が下部の直

助。御短慮とは云ひながら、御家中は皆ちり〴〵、僅か小者のわし迄も、藤八五文の藥賣り。おれはまだしも、左門樣のお娘子が、今では揚枝店の雇女。これも時世とあきらめて、貧しい暮しもとも〴〵に。

お袖　かけも構はぬ小者のそなた、それ程までにこの身を思うて。

直助　思うてどころか。屋敷にゐるその時から、附けつ廻しつ云つた事、まんざらお前も忘れはしまい。色になりと女房になりと、なつてくれる氣はねえか。

（トお袖に寄り添ふ。お袖つんとして、）

お袖　以前は其方は下部直助。わたしが父さん左門樣とは、將監樣は同じ格式、その小者の輕い身でゐながら、浪人じたとみくびつて、わたしを捕へてあだいやらしい。聞く耳は持たぬわいなう。

直助　なんだな。輕いの重いのと、燈籠佛樣へ願がけをしやァしめえし。元は小者にもしろよ、運が向きやァ賣藥賣でも、（思入れ。）コレ、二十や三十の元手は、これ、こゝにでも持つてゐるわ。（ト懷より金を出して見せる。）お前がウンとさへ云へば、おれも又、三度飛脚へ狐の附いたやうた姿をして、歩きもしねえわ。なんぞおつりきな商賣を見附けて、お前だつてこんな所へ出しちやァ置かねえ。どうだ〳〵。

（トしなだれよる。お袖立つて。）

お袖　たとへ有德に暮さうとも、そぐはぬ人に片時、片時。

直助　お前まだ、屋敷氣質が止まねえの。それぢやァおれに恥をかゝせるやうなものだ。お袖さん、カウ、どういふものだな。（トお袖の手を取り寄添ふ。）

お袖　エヽ、知らぬわいなァ。

（ト振放して下座へはひる。直助後を見送り。）

直助　あんな又強情な女もねえものだ。口が酸くなつた。（ト茶店の方へ來り。）一杯おくれな。

おたき　アイ。（思入れ。）カウ、藤八さん。今聞けば、お前の名は直助さんといふさうだが、どつちが本當だえ。

直助　何さ、藤八といふのは、この藥を賣る親方の名で、おれが名は直助サ。

おたき　さうかえ。さうして先刻から聞いてゐりやァ、あの子を口說いてゐるが、馬鹿〳〵しい。なんのあんなに口をすほめる事があるものかな。あの子は、あゝ見えても、えてに出るわな。

直助　なに、えてに出るとは。

おたき　これ。（ト思入れ。囁く。）

直助　そんなら眞面口に見せておい

て、矢張わかるか。それで出來りやァ、
奇妙。
おたき　口では立派な事を云つてゐても、內證が火の車ださうサ。
直助　そんならどうぞ今夜すぐに。
おたき　それだといつてその姿ぢやァ、藪ではくわなっ
直助　そりやあ、すつぱりと極めて來るのサ。
（トかすめたる大拍子、双盤太鼓になり、向うより升太、德利を提げ錢拾ひにて出で來り、）
升太　大三はえ。大三は宜しうござい〳〵。（ト呼びながら舞臺へ來る。）
おたき　カウ、直さん、行くならどうせいるから、五合やつて置かうかの。
直助　好いやうにしてくんねえな。
おたき　かう〳〵、御用さん。藪の按摩さんの所へ、いゝのを五合持つて行つてくんな。
升太　エヽ、あの地獄の看板の出てゐる所かえ。桂庵の按摩さんの所かえ。
直助　ナニ、按摩で桂庵もするのか。
おたき　左樣さ。
升太　丁度、お前のやうな、怖い顏の閻魔が灸を据ゑてゐるからサ。
おたき　なんだなこの子は、お客を捕めえて。
升太　ナニ、お客なものか。この人は藤八五文だ。
直助　馬鹿を云ふな。これでも晩にやァお客さんだ。
升太　アヽ、そんならお前、あそこの內へ行くのか。よい年をしてよせばいいに。
直助　此小僧、色消しな事をいふ奴だ。
おたき　そんな憎まれ口をきかずと、早く持つてきな。
升太　持つちやァ行くが、置いて行けはあやまるぜ。
おたき　好い加減に口をきゝな。人も聞いてゐるわな、小僧の癖に。
直助　こゝに一本あるから、肴も少し氣取つておいてくんな。
（ト錢四百文渡す。おたき取つて、）
おたき　これぢやァ、多いわな。
直助　あまりやァ茶代よ。（思入れ。）小僧や、早く持つてつてくれ。
升太　そんなら錢はこゝから取るのだ。
おたき　エヽしつつこい、早く行きな。番頭さんにいッつけるよ。
升太　いッつけて見な。味噌を買ひに來ても、まけてやりやァしねえ。
おたき　サァ、持つて行きな。（ト錢を數へてやる。）
升太　そんなら行つてこよう。（思入れ。）大三はよろしうござい〳〵。（ト呼びな

から下座へはひる。）

直　助　忌々しい餓鬼だ。どれ、おれも出直して來よう。ほんに、これもやつておかう。（ト懐から二朱一ッ出して、おたきに渡し、）うまく頼むぜ。あほりが肝腎だよ。

おたき　そこに如才があるものかな。おつに、お云やつて、手なづけて。

直　助　どうぞ今夜で病みつかせ。

おたき　色にするとも、女房に持つとも。

直　助　奇妙。どれ、行つて來ようか。

（ト下座へはひる。おたき後見送り、）

おたき　直さん。早く來なよ。（ト帶の間から以前の二朱と錢を出して、）口はきいて見ようものだ。酒の尻尾と、引手で三百。無えものにして下駄でも買はうか。（思入れ。）イヤ、矢張、米屋へ入れておかう。どれ、行つて來ようか。

（ト下座へはひる。双盤太鼓になり、向うよりづぶ六、運哲、目太八、非人の形、泥太乞食坊主の形にて、左門浪人者の親仁、編笠を持ち、皆々に引摺られて出で來る。少し後より民谷伊右衞門、黒羽織、大小をさして浪人者にて出て來る。非人皆々花道にて、）

皆　々　來やアがれ〳〵。

づぶ六　ふてえ老爺だ。こいつが、眞の、乞食の上前取りといふのだ。

皆　々　なんでも、引摺つて行け〳〵。

（ト皆々、左門を捕へ、舞臺へ來る。）

泥　太　コレ、わりやアどこの奴か知らねえが、おいらが仲間にも渡りひきがあるものだわ。

目太八　われも、只のくれぢやア有るめえ。いゝ年をしやアがつて、馬鹿な野郎ぢやアねえか。

運　哲　青天井に草蓆。一年中寢どころは行き當りばつた、蟋蟀にも合ひがあるわ。

づぶ六　まして土一升米十掴み、御繁昌の御地内で、敷石の上の住居だわ。サア、誰に渡つて、この御寺内で貰つたのだ。

泥　太　何も云ふことはねえ。頭のところへしよぴいて行け。

皆　々　それがいゝ〳〵。

（ト皆々寄つて左門をこづく。）

左　門　お手前達の中に、左樣の作法のあると申す事も存ぜず、この所にて物貰ひ致し居つたは、身が不念。何分にも容赦いたしやれ。

づぶ六　ナニ、容赦しろで濟むものか。マア、われが貰ひ溜めをこゝへ出せ〳〵。

左　門　イヤ、往來の合力受けうと存じたのみ、未だ一錢も手取りは致さぬ。

目太八　こんな奴を打ッちやつておく

と、仲間のきまりが惡いわ。
運哲　見せしめの爲に、着物も何もふんはいで。
泥太　筋骨を拔いてやれ。
皆々　それが好い〳〵。
（ト皆々寄つて左門を打擲する。この時伊右衞門、この中へはひり、皆々をよろしく隔てゝ、左門を圍ふ。よき時分より喜兵衞、お梅、尾扇、お槇出て窺ふ。）
伊右衞門　イヤ〳〵、ちと待ちやれ〳〵。
左門　（ト伊右衞門と顏を見合せ、）ヤ、こなたは。（ト左門思入れ。）
づぶ六　モシ〳〵あなた、お知る人かは存じませぬが、わし等が渡世の邪魔をするこの老爺を、なんで留め立てなさるのたえ。
泥太　仲間の法を破られちやア、
目太八　おいら達の世渡りが出來やせぬわ。
運哲　知る人でもなんでも、かまふ事はねえ。
皆々　ふんばけ〳〵。（ト立ちかゝる。）
伊右衞　マア〳〵待ちやれ〳〵。サア、身どもも敢へて、知る人と申すでもなけれども、（思入れ。）それ〳〵、身も今日はちと志あつて、當觀世音に參詣致す道すがら、詳しい樣子は存ぜねども、何か老人を捕へて手籠に致す樣子、勿論、當人にも心得違ひと存じ居らるればこそ、手出しも、えゝ致されぬと相見ゆる。然らば、これにて理非は解り居るやうなもの。老體のお人、見る目も氣の毒に存ずる故、このお人になり代り、武士たる者が、その方どもへ對して詫を致すほどに、このまゝに勘辨致してはくれまいか。
づぶ六　ナニ、勘辨しろえ。なんぼお侍樣でも、乞食の法は御存知ありやすまい。貰ひ溜めを出させた上、身ぐるみ脫がせて、持つて行かにア、
皆々　仲間の法が立ちやせぬわ。
伊右衞　成程、左樣な儀もあらうて。然らば斯樣致してつかはさう。これに少々金子貯へ致し居る間、その詫び代と致し遣はす程に、このまゝに料簡致してくりやれ。
（ト伊右衞門は、鼻紙袋より、一朱金を四ツ出してやる。左門、）
左門　イヤ、その金子借受けては。
伊右衞　ハテ、何事もこの場は拙者が。
（ト思入れ。）
づぶ六　ヤア、これこの旦那から一朱で四ツ。
皆々　それは、お有難うございます。
運哲　身ぐるみ剝いでも一本が物はねえ所へ、あなたがお出でなすつたばかり、老爺も仕合せ、こツちも仕合せ。

泥太　他の奴らの來ぬうちに、
日太八　辨天山で一ッ杯やろうか。
皆々　それが好い〳〵。エヽ、有難うございます。
（ト皆々下座へはいる。左門あたり見廻し思入れあつて、）
左門　御覧の通り尾羽うち枯らす今の身の上、御親切千萬忝う存ずる。只今の恩借、明日屹度返却致すでござらう。
（ト行きかゝるを、伊右衛門は袂を控へて、）
伊右衛　アイヤ、ちとお待ち下され。
（思入れ。合方、揚弓の音になり、伊右衛門手をつかへて、）
これはあなたのお言葉とも存じませぬ。舅は親なり、聟は忰。たとへお岩と別れ居つたとて、あなたは正しく實の親。
左門　サア、それ故にこそ今の金子、借りともなう存じゐたテ。
伊右衛　そりやまた何故さやうには。
左門　一旦聟舅の縁組は致したれども、最早娘のお岩をも此方へ引取るからは、聟でもなく舅でもござらぬ故。
伊右衛　左門様、何故又お岩めを返しては下さりませぬ。互に飽きも飽かれもせぬ仲、殊にはこの程懐妊いたし、子まで儲けし二人が仲、何があなたのお氣に入らいで。
左門　そりや御自分の心に問はつしやれ。尤も娘お岩めも、不所存にてころび合ひ、親の許さぬ夫婦仲、畢竟遣らう貰はうと、きッと致した仲人もなけれども、そりやこの道ばかりは別なものと、そのまゝに捨ておきたが、氣にはさえられな、聟のこなたの根性が、舅のおれの氣に入らぬ。
伊右衛　ヤ。
左門　と、サア申す譯は、いまだ御主人御繁昌のみぎり、お國許にて御用金紛失。その預りは、早野勘平が親三太夫。落度と相成り切腹致して相果てた。その盗人も、この左門よッく存じて罷りあれど、この詮議中お家の騷動。それ故たうとうそれなりけり。何も彼も云はずにゐるは身が情、それ故娘は添はされぬ。
（トこれにて伊右衛門むッとして、）
伊右衛　默らつしやい、左門殿。今、その許は、聟でもなく舅でもないとお云やつたぞよ。スリヤ、あかの他人でござるぞよ。すりやあかの伊右衛門に向つて、づか〳〵と物云はッしやるが、シテ又、なんぞ手前が盜んだと申す證據でもござるか。
左門　ハヽヽヽ、證據呼はりさつしやれば、自分の口から白狀致すやうなも

の。その以前、娘のところへ結納の帶代にと贈られたるその金子、一兩々々お家の極印。

伊右衞　ヤ。

左　門　それも云はぬが舅の寸志。そのまゝにして戻した事、貴樣覺えがござらうがな。

伊右衞　イヽヤ、アノ金は配分金。

左　門　云はつしやるな。まだ騷動にならぬ前、なんで配分おしやつた。

伊右衞　サア、そりやア。

左　門　後さき揃はぬ言葉のはし、それ故猶は、エヽ添はせぬ。

伊右衞　スリヤ、どうあつても。

左　門　今の恩借はきつと返す。お岩を返すこと罷りならぬ。

伊右衞　ならずばいゝわ。畢竟舅と思ふ故、言葉をつくし手を下げて、持つてうすれば付け上がり、往來の人に合力受けて、喰ふこともならねえ分際で、心が違ふの氣に入らぬと、瘦せ我慢も貧乏から、貢いで遣らうと存じたに、身の程知らぬ老ぼれめ。

左　門　身に錦繡を纏ふとも、不義の富貴は頼みにないわ。

伊右衞　なんと。

左　門　ドリヤ、歸宅致さうか。

（ト唄。うすめたる双盤になり、左門、向うへはひる。伊右衞門後を見送り。）

伊右衞　この身の惡事を氣取つた左門、露顯いたさば後日の妨げ、もはや生けては、（思入れ。）後追つかけて、さうぢや。

（ト早めたる双盤になり、伊右衞門、追つかけて向うへはひる。ト喜兵衞、お梅、お槇、尾扇、出て、伊右衞門を見送り、思入れあつて。）

喜兵衞　今のは確かに、鹽谷を思はぬ樣子。さすればどうぞ此方へ引きこみ、御主人へ推擧なし、何かの樣子を質さするには最屈強。

お槇　お梅樣の御病氣も。

尾扇　種はやつはり今の侍。

お梅　ほんにゆかしい。

喜兵衞　ヤ。

（ト思入れ。お梅顏を隱くす。この前より後に窺ふ奥田庄三郎、以前の形にて出かゝり居て、この時、喜兵衞の前に出て。）

庄三郎　御報謝お願ひ申しまする。（ト面桶をさし出す。）

喜兵衞　物參りの歸るさ、手の内を遣はせ。

（ト供の中間、錢一文出して。）

中　間　それ取らせろぞ。

庄三郎　ハイ、お有難うござります。御大身の旦那さま、益々御繁昌で、その

上お芽出度い事だらけでござります。

喜兵衛　何が芽出度い。

庄三郎　先程、よそながら一寸承りますれば、あなたのお主さまは、お屋敷替へがござりますると承りましたが、定めしお首尾のよいのでござりませう。いづれの邊へ御屋敷替へでござりまするか。

喜兵衛　ハテ、非人の癖に、それ聞いてどう致す。シテ身が主人を何人と存じてをる。

庄三郎　エ、（思入れ。）イエ、どなたさまやらその所は存じませぬが、あまり御出世のお芽出度さ、むさくろしい非人でも、せめてあなた方のお名でも承りますれば、私が身の守りにでもなりませうと存じまして。

喜兵衛　いかさま、主人の御出世をそれ程に芽出度いと悦ぶなら、非人とても萬更憎うはない。申して聞かさう。手前主人は、當時出頭第一の高ノ師直樣。この度御屋敷替へは鎌倉花水橋の向う川岸、葛飾郡と申す所に新地を下され、新たにお屋敷が建つぢやテ、家老用人は申すに及ばず、中間下々に至るまで御加增あつて、イヤモ殊の外の御物入。なんと御威勢はひどいものであらう。

庄三郎　エヽ、スリヤお屋敷は、花水橋の向う葛飾郡へ、新たにお屋敷、その所がお上屋敷でござりまするナ。

喜兵衛　ヲヽサ、卽ちそこがお上屋敷と定まるのサ。

（トうか／＼話してゐる。庄三郎一々に聞いて、思入れあつて、此うち、今貰うた面桶の中の錢を喜兵衛に見えぬ樣にあたりへ捨てる。尾扇、これを見つけて、）

尾扇　ヤイ／＼、このどう乞食め。折角旦那が合力なされた錢を、なんでおのれ捨てたのだ。冥加を知らぬ奴だわえ。

庄三郎　どう致してわたくしが。

尾扇　でも、たつた今愚老が見てをつた。

喜兵衛　なんぢや、合力した錢を捨てた。ハハア、分つた。道理こそ、詳しう屋敷の樣子を根問ひ致すと思つたが、察する所鹽谷家の浪人だな。非人になつて御主人をつけ覘らふとは、及ばぬ事だわ。

尾扇　左樣／＼。いらざる非人が刄向ひだて。屋敷へ引つたて拷問して、一味の奴らを白狀させう。

（トかゝる。庄三郎、ちよつと立廻つて、尾扇を見事に投げる。）

喜兵衛　ヤア、非人に似合はぬその手の内。

（ト刀を抜きかける。庄三郎面桶にてち

よつと留めて、)

庄三郎　イヤ、私も腹からの非人でもござりませぬが、小さい時から相撲好き、些とゝやつとゝ小力のあるが身の瑕。喧嘩より親の勘當。せうことなしに、非人をしても生きてゐたいが即ち人情。それを滅多にお侍。瓜や西瓜ぢやあるまいし、滅多に斬られちやなりませぬ。

(トふりほどいて立廻りの中、庄三郎、懐中より廻文狀を落す。尾扇、取上げ、)

尾扇　さてこそ一味のこの廻文。

庄三郎　南無三、それを。

(ト寄るを突きのけ、尾扇廻文を持つて花道へ駈け出す。庄三郎、追つかけて行かうとするを、喜兵衞留める。この時向うより、佐藤與茂七、小間物屋の形にて、荷をかつぎて出て、尾扇の持つてゐる廻文を引つたくり、懐へ入れて舞臺へ來る。尾扇追つかけ來り、)

尾扇　ヤイ、町人め。今の品を。

庄三郎　ヤア、こなたは佐藤。

與茂七　エヽ、(思入れ。)この氣違乞食が、何をいふやら。ハヽヽ。(思入れ。)モシ／＼旦那方。この非人が何を無禮致したかは存じませぬが、この邊にまごついて居りまする、アリヤ宿なしの氣違ひ／＼。氣違ひを捕へ理窟を仰しやる、不狂人の同じく狂ふ世のたとへ。何事も御勘辨なされてつかはされませ。

尾扇　イヤ／＼、氣違ひと申すは、其方が扱ひ嘘と申すもの。身共が主人の名を聞いて、屋敷の所帯へまで、根問ひを致したこの非人。鹽谷浪人に相違ない。それ故身共が。

與茂七　スリヤ、あなた方には。

尾扇　師直樣の御家老、伊藤喜兵衞樣。

與茂七　ハヽア、それ故こゝで。(ト思入れ。)

尾扇　鹽谷の浪人、屋敷へ引つたて拷問するわ。

與茂七　これはまた、怪しからぬことを承りまする。この乞食は、いつも／＼たはいない事申しまする氣違ひ。なんの鹽谷の浪人でござりませう。よしまた鹽谷の浪人でござりましたところが、何でお屋敷へ引立つて拷問なされまするな。

喜兵衞　ヤ。

與茂七　なんぼお家は斷絕でも、その家來の浪人まで引つ捕らへて、根葉を斷やさうといふやうな咎もござりますまい。何とそんなものぢやアござりませぬか。

喜兵衞　ムヽ。(ト思入れ。)

尾扇　それはそれにしてもやらうが、

今愚老が持つて駈出した物を、なぜ途中で引つたくつた。

與茂七　あなたの持つてお出でなさつたといふのは、これでござりまするか。(ト懐より鼻紙の三つ折りにしたるを出して、)私も粗相な。あなたが、藥の引札を配つてお出でなさるのだと存じまして取りました。これは大きに粗相、眞ッ平御免下さりませ。サアお返し申します。(ト返す。)

尾　扇　イヽヤ、身共が持つてゐたのはこれではない。この非人が懐中より落した廻文。

與茂七　イエ、そんな物は存じませぬ。私が取りましたはこの鼻紙。大方、あなたの覺え違ひでござりませう。(思入れ。)それとも氣違ひの非人、ほんたうに廻文とやらを落したか。

庄三郎　イヤ、鼻紙でござります。

與茂七　ソレ、御覽じませ。やつぱり、初手から鼻紙を廻文狀などとは、御醫者樣、あなたも少し氣違ひと見えまするな。

尾　扇　エヽ、馬鹿を云ふな。デモ、見す〳〵。

喜兵衛　よいわ〳〵、捨て置け。例へば、どのやうに浪人めらが羽根ばたきをしたとても、なんとして〳〵。

與茂七　イヤモウ氣遣ひの氣の字もある事ぢやアござりませぬ。殊にこんな氣違ひの非人、御料簡なされて遣はされまし。

尾　扇　無性に非人を庇ふ町人。われも大方。

與茂七　どうしましたえ。

喜兵衛　イヤサ、町人が挨拶。氣違ひとあれば料簡して遣はさう。

與茂七　それは有難うござります。(思入れ。)サア〳〵氣違ひの乞食、早く裏の田圃へ行つてナ。(思入れ。)サア、早く行け〳〵。

庄三郎　ハイ〳〵、これは旦那樣有難うござりまする。

(ト與茂七に思入れ。與茂七、おれが懐にあるといふこなし。庄三郎うなづいて下座へはひる。)

お　槇　ほんにもう、どうなる事と大てい案じましたわいなア。

お　梅　それいなう。(思入れ。)モウ行かうぢやござりませぬか。

喜兵衛　いかさま、さぞお梅も待遠であつたらう。そこらから駕籠に乗つて歸るがよからう。サア、尾扇老。

尾　扇　ちつと早く參りませう。

與茂七　左樣なら、モウお歸りでござりまするか。

尾　扇　確かに懐中。(ト思入れ。)

與茂七　お靜かにいらつしやりませ。(ト與茂七、こちら方の床几へ腰をかけて思入れ。)
喜兵衛　それはさうと、さつきの浪人。
お梅　ま一度一目。
喜兵衛　そちも見たいか。
お梅　アイ。
喜兵衛　おれも逢ひたい。
お梅　エヽ。
お槇　サアお出でなされませ。
(ト唄になり、喜兵衛、お梅、お槇、尾扇、中間、つき添ひ向うへはひる。與茂七殘り、こなしあつて。)
與茂七　すんでの事にこの廻文、(トあたりを見て思入れあつて。)こゝの內儀さんは、店をあけて何處へ行つてゐるか知らん。
(ト双盤になり、下座より、おいろ按摩の女房の形にて出て來り、)
おいろ　おまさん、この間は。オヤ〳〵居ないさうだ。
與茂七　男の茶店だが、流行らうかね。
おいろ　オヤ、與茂七さん。お前が茶店を出せば、山中の女は皆殺しだわな。
與茂七　有難いね。こつちが先へ死ぬであらう。時においろさん、常住山へ來て商ひをするが、小間物屋といふものは、是非女を相手にしてする商賣だが、うまい事を云はれては倒れ、横目で見たと云うては倒れ、引いて見ると餘ッ程割の惡い商賣だの。
おいろ　嘘ばッかり。山中の女が、お前の來るのを、毎日〳〵待つてゐるよ。
與茂七　氣をよく貸すからの事さ。大きな箆棒だ。
おいろ　時に素敵なものが出來たよ。
與茂七　さうだとの。この頃二三日山へ來ないが、大さう美しいのか。
おいろ　コレサ、この店だアな。(ト上手の揚枝店へ指をさす。)
與茂七　こゝはお前、お紋さんの出てゐた所で。
おいろ　そのお紋さんが病氣だといつて、一昨日から雇つて出した子だがの、內は餘ッ程苦しがりださうさ。
與茂七　ムヽ、粂三に似てゐると云ふ評判だが、ほんたうか。
おいろ　ずぶ大和屋ときてゐる。その癖おとなしくての、屋敷出だらうさ。
與茂七　そいつは尙いゝの。名はなんと云ふえ。
おいろ　先の名はなんと云ふか知らねえが、こゝの店へ出るからやつぱりお紋さんよ。
與茂七　名はお紋だの。(思入れ。)內は何處だえ。
おいろ　北新町だよ。

與茂七　宗旨はなんだ。
おいろ　法華だとよ。
與茂七　寺は何處だ。
おいろ　エ。
與茂七　葬は何時だ。
おいろ　何を云ふのだナ。
與茂七　ホイ、あんまり浮かれた奴サ。そいつはどうかなるまいかね。
おいろ　なるどころか、えて物に出るわな。
與茂七　それ妙法蓮華經。
おいろ　直ぐに法華で洒落れたの。
與茂七　ほつけの幸ひだ。今夜直ぐに出かけようが、出るだらうか。
おいろ　商賣だもの。出なくつてサ。
與茂七　サア／＼、行きやせう／＼。
おいろ　強氣に急くの。マア荷をどこぞへ預けて來ねえな。
與茂七　いかさま。（思入れ。）カウ、きつと晩には。
おいろ　よいと云ふ事さ。
與茂七　ちよつぴり酒で。
おいろ　さうさ。
與茂七　こいつは浮いて來たわえ。（ト思入れ。荷を背負ひ立上り、思入れあつて、）かうして騒げば騒ぐものゝ、同じ形をやつしても、奥田の子息は。
おいろ　ナニ、奥田より大三がいゝわナ。
與茂七　忠義故とて菰被りとは。
おいろ　そんなに飲めるものかな。五合でいゝわな。
與茂七　アヽさぞや苦患を。
おいろ　そこが地獄さ。
（ト與茂七氣を替へ、）
與茂七　こいつは大笑ひだ。
（ト兩人宜しく思入れ。双盤にてこの道具廻る。）

本舞臺三間の間、二重の世話屋臺、向う反古張付きの襖、上の方に破れ障子を立てたる一間の屋臺。よき所に小さき衝立、二枚折の張交ぜの屏風。いつもの所に門口、閻魔の灸をすゑてゐる看板と、奉公人口入と書きし看板を二枚並べてかけてあり。此處にお大、とやにつしき毛の拔けたる女にて、髮を島田に結ひ、白歯にて眉毛のなきこしらへ。文嘉、彦兵衞、以前の形にて、宅悦盆へ灸をほぐしてゐる。よき所に角行燈をつけ、あつらへのはやり唄にて道具納まる。
文嘉　カウ／＼、おらア素敵な大がいゝぜ。
宅悦　ハイ／＼、この位のがよくきゝます。
文嘉　コレサ／＼、本當の灸を据ゑられて堪るものか。かの年増の大の事だ。
宅悦　それは承知で御座ります。マア

〳〵表向き人前が惡う御座りますか
ら、灸をほぐして居りまする。
彦兵衛　わたしは又、一向年の行かぬ小
がよいぞや。至つて小兒がよい。なら
う事なら　　　　のナ。
宅悦　エヽ、番太郎で賣る灸で御座り
まするか。
お大　わたしが前で　　　　とは、ち
とさしあひだね。
宅悦　これサ、お前は身ごしらへても
しねえかナ。
（トやはり唄になり向うよりおたき、ぶら
提燈を點し後より直助羽織着ながしに着
替へて出て來り、花道にて、）
直助　カウ、おまさん、愈々あの揚枝
店のお袖を買はしてくれるか。
おたき　初手はお袖と云つたか知らねえ
が、今ではお紋さんと云ふよ。どうで
あゝいふ事に出るにやア、否應はない
のさ。
直助　そいつは奇妙。
おたき　コレサ、その奇妙がわるい。藤
八があらはれるから、お云ひでないよ。
直助　それは承知だよ。
おたき　さア、お出で。（ト思入れ。舞臺
へ來り、）宅悦さん、お客を連れて來た
がいゝかね。
宅悦　アイ、そりやア有難うござりま
す。サアおはひりなされませ。
（ト兩人内へ入る。）
直助　ハイ、御免なさい。
宅悦　あなたのお望みは、大か小かね。
直助　ナニサ、灸をすゑるのではござ
りやせん。かのお紋とやらを。
宅悦　エヽ、定紋をおすゑなさるのか。
直助　ナニサ、灸の事ぢやアねえ。
おたき　これサ、それは承知だがね、表
向き、灸のつもりにしておくのさ。そ
こで地獄の閻魔樣が灸をすゑてゐるの
サ。
直助　ハハア成程、こいつは奇妙。
おたき　これさ。（トおさへる。）
文嘉　今聞けば、お紋とやらはさつき
見た子ださうだが、おいらもそれを買
ひてえの。
彦兵衛　さうぢやわいな。とても金出し
て買ふ位なら、好いのがよい。わしも
それにしませう〳〵。
宅悦　さう大勢一人の子をめがけては
成りません。コリヤかう致しませう。
あなた方は大と小とのお望み、後から
お出でなされたのは、お紋さんのお望
み、恨みッこのないやうに籤取りがよ
うござります。
おたき　さやうさ。兩方の名を書いて緣
結びがようござります。
文嘉 彦兵衛　それがよい〳〵。

直助　おらア、外の子ぢやア嫌だ。
宅悦　まア〳〵運は天にまかせて。
（ト宅悦綵結びの鐵をこしらへる。おたき、これを結び、思入れあつて、）
おたき　サア〳〵、みんなしんを取つて、あけて御覽じませ。
文嘉　おれがのはなんだ、文嘉にお大。
宅悦　あなたのお望みの通りだ。
彦兵衛　わしは彦兵衛お小。
直助　どれ、そんならさしづめおれは、藤八お紋、奇妙。（ト浮かれていふ。）
宅悦　サア、かう誂へたやうにきまる事もないものだ。
直助　藤八お紋、奇妙。（ト無性に嬉しがつて、鐵を頭へ結はへる。）
おたき　お前は、お紋さんの來るまで、あの障子の内に寢ころんでお出で。
直助　さつきの小僧は、酒を持つて來さうなものだ。
おたき　わたしが、もう一ぺん行つて見ませう。
直助　そんなら頼むよ。
宅悦　そのついでに、かの。
おたき　承知だよ。
（トはやり唄になり、おたきは向うへ、直助は上手の障子屋臺へはひる。）
文嘉　サア、おいら達のはどうするのだ。
宅悦　お前は年増だね。
彦兵衛　わしは若いのぢやぞや。
宅悦　かしこまりました。マアちつと横におなりなされませ。
（ト宅悦、小さき衝立を眞中に置き、三を二ツ　、上の方へ二枚屏風を立て、其ところへ行燈を薄暗くして置き、文嘉、彦兵衛、此　の上に寢ころびゐる。宅悦お大を招きさゝやき宅悦奥へはひる。お大うたゞき、そばにある硯箱を引寄せ懐中鏡を出して、眉毛を引くこなしあつて、彦兵衛がそばへよる。）
お大　モシお休みなされましたかえ。
彦兵衛　お出でを待つてゐたのぢや。お前がおやまかえ。
お大　わたしやおやまさんといふ名ぢやア御座りません。
彦兵衛　ハハア、成程さうぢや。（ト思入れ。お大の顔を見て、）イヤアおやま所ぢやない。コリャ惣嫁ぢや。
お大　何だえ、お前、おやまだの惣嫁だのと、日光道中記を見たやうな事をお云ひだね。
彦兵衛　年はいくつぢや。
お大　アイ、とつて十。
彦兵衛　鶏の化物ぢやア木兎よりはやるであらう。然し、何ぼ若い者がよいと云うて、あんまり若過ぎるな。
お大　よしか、本當の年は

彦兵衛　六十八か。

お大　イエ〳〵、可哀相に、たつた十六サ。

彦兵衛　さかさまにすれば六十ぢや。

お大　エ、口のわるい。（トく。）

彦兵衛　南無阿彌陀佛。

（ト兩人よろしく　。合方になり、向うよりお袖、以前の形にて草履を穿き、爪だつて、ぬけ足にて出て來り、門口へ來て）

お袖　御免なされませ。今晩は。

（ト小聲にていふ。奧より宅悦出て來り）

宅悦　オイ〳〵、御苦勞〳〵。今夜はだいぶ遲かつたの。

お袖　ハイ。内の樣子が、ちつと出にくうござりました故。

宅悦　サア〳〵、あそこの障子の内へ。

お袖　ハイ、有難うござります。（トお袖、上の方の障子の内へはひる。）

文嘉　カウ〳〵、おいらの年增はどうしたのだ。

宅悦　ハイ〳〵、只今。（思入れ。）カウ〳〵、お大さん〳〵、もう來さうなものだい。

（ト思入れ。お大起きて來り紙にて眉毛をふく。宅悦お大に又囁き奧へはひる。お大、文嘉のそばへ來り）

お大　やつとこしよ。（ト思入れ。坐り）おやすみかえ。

文嘉　剛氣に待たしたの。

お大　アイ、年が寄ると歩くのが大儀だから。やう〳〵杖にすがつて。

文嘉　エ、（思入れ。）カウ、お前いくつだ。

お大　わたしァ年寄の七十九サ。

文嘉　箆棒な年增だの。年寄でなくつてもの事だ。あんまり年增すぎるなう。

お大　なにそれでも二人や三人位の客は何とも思やアしません。お前大年增が好いといふからわたしが來ました。この位の年增は、もう滅多にござりません。頭は黑いやうに見えても、殘らず白髮サ。こればかりは眞の事で御座ります。皆さんが、よう御存知でござります。

文嘉　オ、、丁寧に年のよつた人だな。

お大　サアちつとお休みナ。

文嘉　何たる因果だらう。

（トお大、いやがる文嘉を無理に　す。合方バタ〳〵になり、お袖、障子屋臺より驅けて出て來る。直助後追つかけ出て來り）

直助　どうして〳〵、逃がすものか。

お袖　それぢやと云うて、どうまアそなたと顔が。

直助　合はされぬのっ尤もだが、お袖

さん、ア、お前は孝行者だなう。
お袖　エヽ。
直助　まア下にゐな。おれが云ふこと、とつくりと聞きなせえ。(ト合方になり、)お前の親御もわしが主人も、不慮なお家の騒動にて今の流浪。親の艱苦を貢ぎのため、淺ましい此すぎはひ。外の人はともかくも、わしはそれを推量してゐる故、せめてちつとも手だすけになつて進せやうと、(思入れ。)かう云つても、わしが無理に口説く故、お前は得心もあるめえが、わしが云ふことさへ聞いてくれゝば、こんな商賣はさせねえ。親御をも過し、お前にも樂をさせるが、それともに、お前がすき好んで、さういふ勤めをしなさるのかえ。
お袖　何のまア、苦しいこの身の世渡りも、今云はしやんす通り親のため。
直助　親を思ふ心なら、わしが云ふことを聞くがよいではないか。又この事が親御に知れて見なせえ。昔かたぎの左門様、貧乏しても穢らはしい、武士の名を汚すと云ひ、樣子によればお主の名まで。
お袖　エヽ。
直助　サア、三方四方まんまるく、わたしが言葉につく方がよからうぜ。
お袖　サア、その親切はかたじけないが、どうも肌身をけがすことは。
直助　ならねえものが何故またこんな。
お袖　勤めといふは身過ばかり。床の内では譯云うて、頼めば人に鬼もなく。
直助　その代りにやアうめい事もねいといふものだ。ハテ、只惚れて口説くと思ふから、了簡が違ふわサ。ほんの以前の親切づく。マアこの金で親御にも、(ト思入れ。懐から金を取出して、)給でも買つて着せるが、いゝぢやアねえか。
お袖　そんなら以前のその誼み、大まいのその金を。
直助　浪人ならば大まいが、今は、十や廿の金、商人の身ではなんでもないのサ。
お袖　その親切な心なら、ちつとの間その金を。
直助　借すといふのは他人の事。ハテいくらでも。
お袖　嬉うござんす。(ト金を取りさうにする。)
直助　たゞ、嬉しうござんすとばかりでは、ちつとまづいな。
お袖　それぢやといふて。
直助　はともかくも、に位は。
お袖　エヽ。
(トこの時奥より宅悦出て、)

宅悦　お紋さん、何しにこゝへ出てゐるのだ。サア〳〵お客のところへ行きな〳〵。
お袖　ハイ〳〵。
直助　今ちつと凉みに出たのだ。サア、行つて寢よう。
お袖　どうぞそればかりは。
宅悦　そんな事を云つて濟むものか。
直助　ハテよいわナ。マア、來なせえ。
（ト直助、お袖をつれて上手の障子にはひる。彦兵衛目をさまし、）
彦兵衛　わしがけんさい奴が居らぬわい〳〵。
宅悦　さうで御座りますか。お小さん〳〵。
（トこれにて文嘉の　よりお大出て、又急に眉毛を引く。）
お大　今手水に行つたので御座ります。
彦兵衛　長い手水ナ。
お大　子供だから　を使つて來たのサ。
（ト文嘉目をさまし、）
文嘉　カウ〳〵、お大さん何處へ行つた〳〵。
宅悦　ハイ〳〵今參りまする。
（トお大うろたへ、眉毛ふき文嘉のそばへ來り、）
お大　ハイ、今手水に行つたのだわね。
文嘉　お前手水近いの。
お大　どうも年がよるとなりませんよ。
彦兵衛　お小さん〳〵。
宅悦　ハイ〳〵、今參りまする。
（ト氣を揉む。お大、手早く片々の眉毛を引く、眞中の衝立より半身出して、）
お大　今手水に行きましたよ。
彦兵衛　又手水か。
お大　年が寄ると手水近いのさ。
文嘉　これ〳〵、お大さん〳〵。
お大　あい〳〵。（ト思入れ。又眉毛の無い方を半身出して、）今　を使ひに行つたのサ。
文嘉　ばゞアの癖に　か。
彦兵衛　お小さん〳〵。
お大　アイサ。（ト思入れ。半身出して、）
彦兵衛　又手水か。
お大　てうつかの婆アさんだ、婆アさんだ〳〵。
文嘉　お大さん、　かの。
お大　アイ　娘サ。
文嘉　　娘に婿二人。
彦兵衛　こつちへ來なさい。
文嘉　こつちへよらつし。
（トお大を南方にて引張る。この時衝立倒れて文嘉、彦兵衛、お大と顏見合せ、）
文嘉　イヤア、眉毛が半分。
彦兵衛　頭が島田。

宅悦　面は猿に似て鳴く聲豚に似たり。丹波の國から生捕つた。代はお戻り〳〵。

文嘉　おきやァがれ。飛んだ者を一座廻し。

彦兵衞　新けふのお小さんも凄じいわいの。

文嘉　とやで毛が拔けたものを、お大さんも氣が強い。

お大　何故。お大さんだといつてやすくおしでない。この三月開帳があつたよ。

彦兵衞　お小さんはどうしたのぢや。

お大　大分損をしたとさ。

文嘉　エヽ惡く洒落れやァがる。（ト突き倒し、）

兩人　サア〳〵歸らう〳〵。

宅悦　歸るなら勤めを置いて行かつしやい〳〵。

文嘉　なに、勤め。押しのつよい。こんな者に二百でも置くものか。

彦兵衞　厚がましいも程があるわいナ。そつちから錢をとつても嫌ぢや。

お大　嫌ぢやも恐しい。二人ながらつつ。

宅悦　ヤァそんなら　ぶり勤めを置かつしやい。

文嘉 彦兵衞　眞平御免なさい。

お大　そんならお前方は食逃げだね。

文嘉 彦兵衞　エヽやかましいわえ。（ト突き倒す。）

宅悦　勤めがなければ歸す事はならぬぞ〳〵。

（ト爭ふ。はやり唄になり、向うよりおいろ先に、與茂七出て來り、後より升太、五合德利をさげ出て來り、）

おいろ　大三の升太、どこへ持つて行くのだ。

升太　お前のところさ。

おいろ　誰がさう云つた。

升太　額道の內儀さんがさう云つたから、持つて來やした。

おいろ　どれ〳〵、おれに渡した。

升太　イエ〳〵、誂へた人に渡しやせう。

おいろ　いゝわな。錢さへ拂つたらよからう。

升太　ナニ、錢は前錢に取りやした。それでなけりやァ、お前の所へ持つて來やァしねえ。顏が惡いものを。

おいろ　エヽ、この小僧は外聞のわるい。お客の聞いてゐる前で。

升太　人の聞いてゐる時でさへ拂はねえもの、誰も居ねえ時に猶拂はねえ筈だ。

與茂七　ハハア、こいつは違えねえ〳〵。マア〳〵內まで持つて行くがいゝ。

升太 （トこれにて三人舞臺へ來る。）

升太 代がすんであるから、置いて行きやせう。（ト酒を片脇へ置く。）

お大 サア〳〵、勸めをおくれ。勸めをおくれ。

文嘉彦兵衛 嫌だ〳〵。

宅悦 放すな〳〵。

（文嘉、彦兵衛、お大を突倒し、逸散に逃出る。）

お大 小僧どん、捕まへてくんな〳〵。

升太 オイ〳〵、合點だ〳〵。（ト升太兩人を捕へ）こいつ等は、泥坊か〳〵。

お大 イヤ〳〵、その人達は喰逃げだよ〳〵。

升太 ハハア、飛んだ奴等だ。サア、金を出しやアがれ。

文嘉彦兵衛 デモあんまりの面の奴、誰が金を出すものか。

升太 あんな面でも、初手から承知で寢たであらう。喰逃げをしたその報い。うぬ等二人は畜生道、これから山へ來るが最期、子供を集めて囃させるぞ。

文嘉 イヤ、それは恐れる。山で、それを囃されては。

升太 針の山をば棒程に、ふれて歩くぞ。

文嘉彦兵衛 そんなら出します〳〵。

（ト二人二朱づつ出す。升太、それを取り。）

升太 これさへ取りやア、許してやるわ。

文嘉彦兵衛 なんの事はねえ、三途の川で剝がれたやうだ。

升太 世迷言を、ぬかさずとも、手に手をとつて死出の山。つん〳〵連れ立ち、うしやアがれ。

文嘉彦兵衛 イヨ高麗屋の若旦那。

（ト兩人、はふ〳〵向うへはひる。）

お大 小僧どん、おかたじけ。サア、その金をおくれ。

升太 この金は、遣りは遣らうが、（思入れ。）アレ〳〵、あそこに。

お大 なんだえ。（ト振りかへる。）

升太 篦棒阿魔やあい〳〵。（ト逸散に逃げてはひる。）

お大 あの小僧め。泥棒〳〵。（ト同じく逸散にはひる。）

おいろ なんだかいけ騷々しい。

宅悦 騷々しいどころか、喰逃げに逢つた。

おいろ オヤ〳〵、閻魔の灸點へ來て、喰逃げとは、恐しい亡者だ。しかし、この埋草にい〻お客をお連れ申した。（思入れ。）モシ、こつちへおはひりなされませ。

與茂七 ハイ、御免なされませ。（ト内へはひる。）

宅　悦　ようお出でなさりました。
與茂七　ハイ〳〵、わしは急ぐから、早いがようござります。
おいろ　アノ、お紋さんはあるか知らん。
宅　悦　丁度こつちへ來てゐる。
おいろ　それは幸ひ、一寸頼んで。
宅　悦　デモ、一座廻しで喰逃げはあやまる。
おいろ　なに、そんな氣遣ひはない。
宅　悦　そんならおれが、呼んで來よう。
（ト宅悦奥へはひる。おいろ、行燈を屏風の後へ置く。暗くして置く。）
與茂七　何故眞ッ暗にした。
おいろ　こゝが地獄の名代所サ。
與茂七　なる程。
（ト上手の障子屋臺よりお袖出て來り、）
お　袖　のつぴきならぬ所へ呼出して下さんした故、まア〳〵、ひやいなところを。（ト思入れ。）
おいろ　お紋さん。隨分おとなしいお客だから、叮嚀に勤めなよ。
お　袖　ハイ、有難うござります。
おいろ　モシ、ゆるりとおしげりなされませ。
（ト與茂七の上へお袖を突きやり、おいろ、奥へはひる。お袖、與茂七のそばへおづ〳〵來り、）
お　袖　モシ、お休みなされましたかえ。
與茂七　どうして〳〵、一人寢る位なら家で寢てゐるのさ。（思入れ。）これサ、どうしたものだ。斟酌せずとこッちへはひりなせえ〳〵。
お　袖　ハイ。
與茂七　何故うぢ〳〵してゐるな。エヽ、眞ッ暗で顔が見えねえ。ちよつと明を持つて來よう。
お　袖　アヽ、モシ、明をお持ちなさらずとも。
與茂七　アヽ、恥かしいか。エヽ、畜生め。（ト手を取る。）
お　袖　モシ、妾はあなたにお願ひがござります。
與茂七　何だ〳〵。（思入れ。）どうで碌な事ぢやアあるめえ。
お　袖　サア、申しにくい御無心ながら、妾がかういふことに出まする譯、お聞きなされて不便と思召し、どうぞ一緒に臥りまする事は。
與茂七　何の事だか一向分らぬ。マアマア譯を云ひなさい。
お　袖　ハイ。お恥かしい事ながら、妾の内はもと武家の娘でござりまするが、樣子あつて父さんは浪人。又一人の姉さんもござりまするが、この前方に、さる屋敷へ縁つきましたが、懷妊してどういふ事にや、離別になり、一日の煙も立て兼ねまする程の貧苦の中

へ、かてゝ加へて病氣の姉を引取りました故、もうよんどころなく晝の間は、揚枝店へかはりに雇はれ、夜はこの様に淺ましいすぎはひを致しまするも、せめて少しのお金を貰ひ、父様姉様を過したいばつかりに、心にもない隱し勤め。買うて下さる情深いお客様に、この身のしがを打明けて、お願ひ申しまするも無理ながら、どうぞ切ない妾が身を、不便と思召しまして、一ッ寢致しまする事は、お許しなされて下さりませうなら、ハイ／＼、有難うござります。

與茂七　ム、成程。聞けば氣の毒な事だの。親のためにかうした勤め。しかし、こんな所に出ずとも、吉原へでも行つてよいおいらんになつたら、よささうなものだ。

お袖　イエ、この様な事致しまするも、親、姉の前は、一向沙汰なし。

與茂七　隱れて出るのか。ハテ、孝行なものだの。その孝行な心を聞いて、猶猶思ひが増した。（思入れ。）コレお前。よく積もつても見なせえ。中には腹を立つ客もあらう。又、とても孝行になる位なら、肌を汚してその譯を話して見なさい。どんなよい旦那がつかうも知れぬ。その上、つい通りの客でも、ツイ二朱や一分は遣る氣にもなるわさ。

お袖　それがなります程ならば、申しにくい事、お頼み申しは致しませぬ。

與茂七　肌を汚されぬとあるからは、ハハア、許嫁の男でもあるといふことか。

お袖　エ。いえ。サア、さういふ譯でも。

與茂七　そんなら何も　　　ものぢやなし、人に知れやァせず。いゝぢやァねえか。

お袖　デモ。どうぞ、こればかりは。

與茂七　ハテ、惡い合點だ。そんなに切ないものでもないわさ。（トお袖の手を取る。）

お袖　あれ、およしなさりませ。

（ト飛び退かうとする機に、屏風、倒れて、明くなる。兩人、顏を見合せ、）

與茂七　ヤ、ヤ、そちは女房。

お袖　お前は與茂七さん。

與茂七　これ（トおさへる。）

お袖　面目なうござんす。（ト顏を隱して、打伏し思入れ。）

與茂七　面目ない。イヤ、面目ないも、すさまじい。これ、お袖。手前は／＼。屋敷の騷動のそれよりして、互に、散散と別れたが、今まで便りをせぬ俺故、もう忘れ果てゝ、この様な勤めに出るのだな。現在亭主がありながら、男欲しさの惡戯か。あんまり呆れて、物が

云はれぬわえ〳〵。
（ト お袖いろ〳〵思入れあって、）
お袖　與茂七さん。様子を御存知ないからは、恨ましやんすも、腹立つも、尤もでござんすが、男欲しさの悪戯とは、あんまり酷い仰しやりやう。お屋敷の騒動より、皆、散々に御浪人。今もお話し申した通り、親のために、かうした勤め。いたづらな心があれば、何しに、親の恥まで打明けて、話しませう。これ迄一度の便りもなう、つれないお前に操を立て、切ない苦しい言譯を、聞きわける人は稀にして、大概みんな無得心。それをとやかう云ひぬけて、人一倍のこの苦勞。誰に立てうと樂しみに辛苦をすると思うてぞ。私がかうした勤めより、恨みはこちから何程もある。現在私といふ女房のある身でゐながら、かういふ所へ遊びに來て、女房と知らず、この私に、貞女を破らせ、ようも〳〵、抱いて寢ようとさしやんした。かういふ所に遊んでゐる間もありながら、女房の所へ一ト言の、便りする間はござんせぬか。ほんにほんに、あんまりな。お前の心に引較べ、逆捻な今の腹立ち。そりや、あんまりぢや、あんまりぢやわいなア。
與茂七　さう云はれて見れば、一言もないが、さぞかし、今までいかい苦勞。俺も折々、そなたの所へ、便りをしようと思うてゐれど。
お袖　イエ〳〵、その便りのない事は、實は恨みも致しませぬ。と、いふ譯は由良之助様の思召し立ち、御主人の敵討を。
與茂七　これさ、譯もない事を聞きはづッて、づばら〳〵と。外の浪人に、そんな噂があるか知らぬが、俺はちつともそんな氣はない。今は商人、小間物屋の與茂七。何しに敵討なぞとは。
お袖　サア、女は口のさがない者故、お隠しあるは御尤もながら、かうした所へ、うか〳〵と、遊び歩くも、敵へ油斷をさするため。
與茂七　これはしたり。又しても、敵々と、そんな時代な事は聞くも嫌。久しぶりで女房ども、今迄の事、腹が立つたらあやまる。行燈の明るくなつたが結ぶの神。
お袖　成程。うかつに大事も、（思入れ。）ほんに思へば久しぶり。ようまア、まめでゐて下さんしたなア。
與茂七　おぬしも無事で、芽出度い〳〵。
（ト奥よりおいろ出て來り、）
おいろ　もし。きまつたらお勤めを。
與茂七　ほんに、それ〳〵。（ト紙入より金を出し、）うぬが女房へ勤めを出すとは。

おいろ　エヽ。
與茂七　これも話の種だらうッ。コウ、さつきの酒があるだらう。
おいろ　そこにあるが、冷でござりますぞえ。
與茂七　冷でもかまはぬ。
おいろ　たんとお樂しみなされませ。
（トおいろ、奥へはひる。與茂七、德利と茶碗とを取り、）
與茂七　サア、喚一ッ飲まッし。
お袖　ほんにマァ何時の間に、そのやうなものいひに。
與茂七　ハテ、手前はやつぱり、古風なことをいつてゐるな。
（トこの時、上手の障子を明け、直助、この様子を聞いてゐる。）
お袖　お前。酒を深うは、あがらぬぢやないかえ。
與茂七　なんだ、酒をあがらぬ。お富士様の蛇ぢやアあるめえし。（思入れ。トいひ乍ら酒をのみ。）アヽ久しぶりで女房と二人、水入らずの酒盛り。
お袖　かういふ所へ遊びにござんすからは、定めし方々へも行かしやんしたでござんせうな。
與茂七　ナニ、行くものか。手前の所なればこそ。
お袖　そんなら、初手から知つてござんしたのかえ。
與茂七　ナニサ、知りもしねえがの。（思入れ）よく言葉咎めをするなア。さう咎めれば、おれもいはにやァならぬ。今まで多くの客に出た中ぢやア、自由になつたのがあるだらう。
お袖　イエ〳〵、神様かけて、そんな事はない。證據はお前にもあの通り。
與茂七　それこそ俺と知つてゐて。
お袖　イエ、知らねばこそあの様に。
與茂七　若し俺がやうに、無理やりにあしたらどうする。
お袖　そりやもう、お前、わたしが一心。人を見て法とやら、勇み肌のお客なら、馴れぬながらも職人の女房でござると嘘ついて、亭主の病氣に勤めはすれど、心は清き清鉋かけて往なして、また、あすの夜。坊さん客には、こつちから帯は解かいで、長々とお談議説いて詫び事も、御出家だけにおとなしう、緣なき衆生は度し難しと、得心して歸るわいなア。
與茂七　また、店向きの商人ならば。
お袖　宵を限りの四ッの鐘。これが別れのきぬ〴〵と、思へば遲う床へ往て歸らにやならぬ勘定も、つい算盤のたま〳〵は、あすの夜ごんせと、だましてやる。
與茂七　侍客の山さんなら、ぬける手

管もあるまいがな。

お袖　武家は元よりこつちのもの。手打ちにあはうが殺されやうが、忠義の爲とだらしこみ、賴めばぐつと武士冥利、せう事なしに讃めそやし、いなした後へ旅人の客は一としほあはれしう、年貢の替りに來ましたと云へば、涙のかた手には、小豆一升大根一把、貰う事もあるわいな。

與茂七　扨商賣に馴れるといふものゝ、あつぱれ嘘の上達。來世は必ず閻魔に舌をぬかるゝぞや。

お袖　イエ、その氣遣ひはござんせぬ。この世からなる地獄の責め。

與茂七　いかさま。云やればそんなもの。思はず今宵會うたのは。

お袖　ほんに地獄で佛とやら。

與茂七　地獄に知る人、盡きせぬ緣。

お袖　もうこれからは、奈落の底まで。

與茂七　離れぬ夫婦。女房ども。

お袖　こちの人。ほんに今宵は夢ではないか。

與茂七　夢なら覺めるな。

お袖　オヽ、うれし。

（ト　　。與茂七はお袖の懷の財布を出す。お袖、與茂七の懷の廻文狀を出す。）

與茂七　貧苦にせまるといひながら、この金は。

お袖　さてこそ、義士の廻文狀。

與茂七　（ト與茂七これを引つたくり、）これ見られては。

お袖　エヽ。

與茂七　女房なれども。（ト思入れあつて。）して、この金は。

お袖　サア、その金は、（思入れ。）まア寢て話さうわいなア。

（ト唄になり、お袖、二枚屛風を引廻す。）

直助、屛風の外へ來り、中の樣子を聞き、腹の立つ思入れ種々あつて、無性に手を叩く。奧より、宅悅、おいろ出て來り。）

宅悅　若し〳〵、お前。如才もなくつて、靜かになされまし。

おいろ　夜更早更、世間の前がありますわな。

直助　喧しいわえ。うぬらア、よく女の二重賣りをしやがるな。

宅悅　もし〳〵、聲高に仰しやりますな。いつ二重賣りを致しました。

直助　しねえものか。俺が買つた女はこの屛風の中にゐるわ。

おいろ　そりやアお前、一人買ふ子ではあるまいし。廻しといふ事もございます。

直助　ナニ、隱し賣女のくせに、廻しも氣が強い。あの女は、泥棒だ。大騙りだ。それを承知で買はせるからは、

うぬらも盗人の同類だぞ〳〵。

宅悦　もし〳〵、なんぼ出たらめの悪態でも、盗人泥棒と云はれては濟みませぬ。それには何ぞ證據がござりまするか。

直助　證據といふは、この屏風の中にねてゐる野郎も大泥棒だ〳〵。

（トわめく。この時、與茂七、お袖、屏風をあけ、思入れあつて、）

與茂七　これ。さきから聞いてゐれば、盗人の泥棒のと、そりやァ誰の事だ。

直助　外でもねえわ。うぬら二人の事だ。

與茂七　（ト與茂七、直助の顔を見て、）ヤ、さういふ、わりやァ見た樣な男だな。

直助　見た筈さ。以前は屋敷の同家中。奥田の家に、勤めた下部奉公。今は商人、藥賣、藤八五文で仕出した金。地獄の女に、おこわにかゝッちやァ、男が立たねえ。それ故騙り大泥棒だ。

與茂七　そんなら今のアノ金は。

直助　女が懐、財布の金。ほッかり渡して置いたのも、若しやにかゝッた其上で、夫婦呼はり、あまつさへ、たゞ喰つてのいちやつきが佛の樣な男でも、胸のほむらは地獄の廻し。うぬらは、盗人大騙りと、サア、云つてはあんまり有振れた、憎くまれ口も餘ッほど古風。どうで賣女に出るからは、一座廻しを合點で、俺が方へもすべよく出れば、金も遣らうし、この場も濟ます。洒落てしまふがいゝぢやァねえか。

（トお袖に、しなだれかゝる。與茂七隔てゝ、）

與茂七　いゝやならぬ。武士の女房。金銀づくで外の男に、添寝さすこと罷りならぬ。

直助　何だ。武士だ。（思入れ。）コレ以前は武士でも、今は浪人。町家の住居の小間物屋。それでも武士か。

與茂七　ヤ。

直助　女房〳〵と見栄らしく、どこで貰つて、誰が仲人。よしまた、相對の夫婦にもしろ、隠し賣女も同然だ。買ひに來た俺ァお客だ。まこと武士の浪人が、女房を稼がせても濟むか。

與茂七　サア。

直助　但し、女が親の貧苦を貢いでやる金があるか。

與茂七　サア、それは。

直助　それ、見ろ。俺ァ、畢竟親切づくで、親の難儀とある故に、金まで遣らうといふ男を、ぬつぺりだまして、一文の働きもねえ浪人を、亭主でござると嬉しがる。思へばやつはり、親不孝。金も要らずば、こつちへ返せ。どうで

貧乏神の取ッついたうぬらに金は授かられえ。きり〳〵こゝへ出してしまへ。

（トいろ〳〵云ふ。與茂七口惜しき思入れ。）

與茂七　エヽ。これ、貢ぎの金も少しは貯へあれど、義士の神文。他へ使はぬ配分金。

直助　ヤ。

與茂七　エヽ、瓦も同じ。

（トわが懐へ思入れ。これを聞きお袖思入れあつて、懐より以前の財布を出し）

お袖　それ、金。（ト投げだす。）

直助　すんでの事に、あぶない事の。

お袖　それ、返したら、言分は。

直助　あつても云はねえ。何、未練らしく。

お袖　最前種々親切に云うたこの金、その時も、底に針のある言葉の端。取るまいとは思うたれども、そこが卑しい世につれて親の難儀と、ついこの金、ちつとの間、懐へ入れて置いたがこつちの仕落ち。それを云ひたて、ぬす人の、やれ、騙りのと聲高に、僅かな金で腹立てる、ほんに貧乏な妾より、心のむさい直助どの。千金萬金積んだとて、何の心に從はう。浪人でも、妾が好いた心が金、日本中の寶をば、山に積んでも替へられぬ大事の男。この後妾が、どういふ苦艱、身を切り賣りにしてなりと、可愛い男のためと思へば、辛苦な事もござんせん。ほんに今迄あだ嫌らしい。附けつ廻しつ、無理口說。この後ふッつり、うるさい頭拂うたと思や、この樣な嬉しい事はないわいなア。

直助　エヽ、それ程までに惚れた男と。

お袖　嫌な男とくらべては、毒と藥の隣同志。目に見るさへも、嫌ぢやわいなア。

直助　ムヽ。

（ト思入れ。やはり唄になり、向うより藥賣り藤八、以前の形にて出て來り）

藤八　あの野郎め。何處へはまり込んでゐるか知らん。なんでもびりには待つてゐるに違ひはない。確か此處らだらう。（ト云ひながら舞臺へ來り。）御免なされませ。（ト門口をあけ。）ヤア、此處にゐたな〳〵。

直助　ヤア、お前は。（ト逃げようとする。）

藤八　どつこい〳〵。大方、こんな所にゐるであらうと思つた。道理でこの頃賣溜もよこさず、藥もかためて卸し賣り。親方への仕切りの金まで、皆なうぬが引きずり込むで、女狂ひとは太え奴だな。

直助　モシ〳〵、なに私がそんな事す

ゐものかな。賣溜も藥も代はあした親方へ持つてゆく所で御座りやす。

藤八　そんなら何しに此處へ來てゐるのだ。

直助　サア、此處へ來たのは、(思入れ。)ォヽ、それ〳〵。肩がつかへて、灸を据ゑに來たのさ。こゝの內は灸點だから、灸を据ゑに來たのさ。なうお內儀さん。(ト目くばせする。)

おいろ　左樣〳〵。今据ゑかゝる最中でござります。

宅悅　そこに艾が、ほぐしてある。早く据ゑて上げませぬか。

直助　これさ〳〵。ほんとに据ゑなくつてもよいわさ。

藤八　灸を据ゑるとは嘘つきめ。やつぱりぴりにかゝりやアがつて。

直助　どうして。今、灸を据ゑてゐるのさ。(ト肌をぬぐ。)

おいろ　それ、かはきりぢや。(ト灸を据ゑる。)

直助　アッヽ。これが、ほんの焦熱地獄。もうよい〳〵。

藤八　たつた一ッでよいとは。ハテ、よくきく灸だ。この灸は一ッで二朱か。も一ッ据ゑると、お直しになるだらう。なんでもかでも、賣溜と藥を持つて行かねばならぬ。サア〳〵、よこせ。

直助　あした、わしが、持つて行きますよ。

藤八　何を、うぬが。親方の所へ出入りは叶はぬ。おれに取つて來いといはつしやつた。サアよこせ〳〵。(ト直助が懷より金財布を引出す。)　そりやこそ〳〵。こゝに持つてゐる藥の代金。藥の代りに着物をよこせ。

直助　これまで取るのか。

藤八　みんな親方の仕着せだ。灸を据ゑに來るのに、羽織で極まつて來ずともの事だ。きり〳〵脫げ〳〵。(ト直助を裸にして、羽織着物を取り、金財布を取り上げ。)太え奴でござるわえ(ト藤八、これをかゝへ、門口へ出て。)どなたもお喧しうござります。

宅悅　かう丸裸にされてはこつちの勤めも。

おいろ　ちやアふうかえ。

直助　ふられたからは、やらずともよいわえ。

宅悅　ほんに今まで藥賣りの。

おいろ　藤八。

宅悅　ざまア。

藤八　奇妙。

(ト藤八、雜物を抱へ向うへはひる。與茂七、最初より此樣子を見て。)

與茂七　成程。金持の藥賣りは違つたものだな。一文無しの素浪人でも、親方の

物を引きずり込んで、着物までおひはがれる様な事はねえ。金持〱と、金びらを切つた商人が、立派ななりだ。(思入れ。)あの金は親方の金か。人の金を引きずり込んで、それで金持といいはうなら、お金蔵の番人は皆な金持。盗人騙りと、大聲でいつたその身が、今、目前、ほんの正銘大盗人。ハテ、サテ、氣の毒千萬な。

お袖　ほんに思へば、あの金を取らぬが仕合せ。盗人のすでに同類。怖い事。

(ト直助、しよげてゐる。思入れ。)

宅悦　コウ〱。裸でおらが内に、居つかれてはあやまるぜ。

おいろ　早く出て行きなせえ〱。

直助　今出て行くわえ。エヽ、いま〱しい。飛んだところで恥面を。

與茂七　恥と思はぬ逃げ仕度。思へば灸まで無駄にする。

お袖　山も見られぬあの姿。

與茂七　こつちは此處から夫婦連れ。

お袖　手に手を取つて。

宅悦　お歸りなら、提灯を借して上げませう。

與茂七　アイ。そんなら提灯。借用代。

(ト又懐から二朱出して遣る。)

おいろ・宅悦　これは有難うござります。

與茂七　コウ。あんなものが内にゐるから油斷しなさるな。

宅悦　今に叩き出しますよ。

おいろ　アイ、提灯。

(ト「藪の内」と書いた提灯を渡す。與茂七これを取る。)

お袖　サア。もし、こちの人。

與茂七　今宵は他でしつぽりと。

直助　うぬ。これ見よがしに。

與茂七　羨しいか。

直助　なんの、二人を。(思入れ。)どうで今夜は。

お袖　積る話を。

與茂七　道々、二人。

直助　目あては、提灯。

宅悦　早く出て行け。

(トかゝるを、直助宅悦を引据ゑる。與茂七、お袖、門口にて抱きつく。直助、ムムと行くを、おいろ門口をさす。木の頭。よろしく。)　拍子幕

禪の勤めにて、引返し。

本舞臺。向う一面、栗丸太の垣。土手板。上の方に稲叢、石地藏。すべて觀音裏田圃路の道具。こゝに、づぶ六、目太八、泥太、運哲、以前の非人の形、庄三郎、同じく菰被りにて、皆々、貧乏徳利にて酒を飲んでゐる。禪の勤めにて幕明く。

運哲　今日のやうな仕事が、毎日あればいゝな。

目太八　さうよ。一人前、二朱づつの立てまひだ。

庄三郎　好い仕事をしたな。おいらにも沙汰なしに。

づぶ六　それだから、こんなに奢るのさ。

泥太　手前の仲間入りの時も、やつぱりこんなに奢つたぜ。

づぶ六　これ見やっ。これが二升めの酒だ。素人でも、こんなに奢る者はあるめえ。

運哲　ナニ、あるものか。昔の紀文大盡でも、おいらにアかなはねえ。魚を見やな。

泥太　なんだ、鯛だな／＼。

運哲　鯛も、野暮に身ばかりはない。あらにだわ。

目太八　さうさ。素敵なあらにだな。あんまり叮嚀に身をとつてしまつたな。

づぶ六　その代り、どんな女がしやぶつた骨かも知れねえ、

庄三郎　そりやア、大方、富士屋のお餘りだらう。さつき見てゐたら、鼻のかけたかさつかきが、しやぶつてゐたッけ。

づぶ六　エヽ、汚ねえ事をいふと、直きに胸が惡くなる。

運哲　態を見ろ。手前のなりが綺麗の姿か。

づぶ六　それでも俺ア、綺麗好きだ。決して捨てゝある菰は着たことがない。しつけの掛かつた、新らしい菰ばかりさ。

目太八　菰にしつけがかゝつてゐるものか。

泥太　體にしつけがあるといふのだ。

庄三郎　こいつは違えねえ。大笑ひだ。

皆々　ハヽヽヽ。

づぶ六　大笑ひか、中笑ひか、知らねえが、何故みな俺を安くして笑ふよ。コレ太平樂ちやアねえがな、この仲間ぢやア、俺が一番古いわ。腹からの宿なしだ。憚り乍ら、田圃のづぶ六様といつちやア、人に知られた宿なし様だ。あんまりこめてくれるな。

皆々　ソリヤ、づぶが怒つた／＼。

づぶ六　なんだ。こいつ等は。（ト無精に腹を立つ。）

運哲　ヤア、小屋の始めの一ト踊り、づぶ六踊りが所望ぢやが、合點か。

皆々　ヲヽ、さて、合點だ。

（ト皆々、づぶ六の手を持ちそへ、踊りながら下座へ入る。）

庄三郎　ハテさう／＼しいやつらだ。（ト思入れ。あたりを見て、）今日のひるま、地内にて取落した廻文狀。その時、來合はした輿茂七殿。どうぞ安否が聞きたいものだが。

（ト時の鐘、合方になり、向うより、與

茂七以前の提灯をさげ、出て來り。）

與茂七　庄三郎がゐる所は、たしか此處らだ。

（ト探す。庄三郎すかし見て。）

庄三郎　さういふ聲は、與茂七どのか。

與茂七　庄三郎殿。（思入れ。）これさ、嗜み召され。いかに若いと云ひ乍ら、最前とても思案もなく、高ノの家の侍に、身の上を悟らるゝやうな事。畢竟、身どもが參り合はせたればこそよけれ、重ねてから、氣をつけさつしやるがようござる。

庄三郎　御厚志の御意見、忝うござる。しかし鬱憤忘れ兼ね、思はず知らず。

與茂七　それも尤も。御主人御無念の程、朝暮忘れぬ我々なれば、かゝる姿も皆忠義。

庄三郎　それにつけても、あの砌り、取落したる義士の廻文。

與茂七　その廻文も身どもが所持。これより直ぐに、某は鎌倉表へ立越え、それより、都山科へ通達して、思ひ〳〵に出立の、仕度を知らすこの廻文。

庄三郎　鎌倉へお出であらば、敵地の近邊。身の上を悟られぬやう、拙者が姿と。

與茂七　成程。非人の姿となり、貴殿は江戸に徘徊なす、一味の者へ。

庄三郎　最前聞いたる屋敷替への趣。花水橋の向う、葛飾郡へ引移るとあるこのむね、一々知らすでござらう。

與茂七　然らば姿を變へ〳〵に。

（ト手早く着類を脱ぎ、庄三郎の襤褸と着替へ、庄三郎も同じく與茂七の衣裳をきて。）

庄三郎　この提灯は。

與茂七　非人に提灯は要らぬもの。これも貴殿へ。

庄三郎　然らば、與茂七殿。

與茂七　後して面會。

庄三郎　隨分御無事で。

與茂七　お別れ申す。

（ト與茂七、菰をかぶつて、よろしく向うへはひる。庄三郎こなしあつて。）

庄三郎　これにて先づは一ツの安堵。然し、急に違つたこの姿、仲間の乞食どもが見付けたら又面倒。ちつとも早く今のうちに。さうぢや〳〵。

（ト宜しく點頭いて下座へはひる。直ぐに向うより四ツ谷左門出て、以前の形にて足早に出て來る。後より伊右衞門出て來り。）

伊右衞　アイヤ〳〵、左門どの。お待ちなされい。ひつこく申すやうでござるが、お岩事も身ごもつて居る仕儀でござる故、勘辨下されて、どうぞ此方へお歸しなされて下さりませい。

(ト左門振返り、伊右衞門を見て、知らぬ顔して又行きかゝる。)

伊右衞　待たつしやい。一言の挨拶もなく、近頃不禮でござらうぞ。

左　門　不禮といふ事、よく知つてゐさつしやるな。身共がものを申さぬは、一旦娘をやつたよしみ、親の氣に入らぬ聟故、取返したアノお岩、幾度云つても返す事はならぬといふより外はない。それ故無駄にものは申さぬ。こなたも若い者の樣にもない。女ひとりではあるまいし、ひつこく云はずと思ひ切つたがよいわさ。

伊右衞　スリヤ、どの樣に申しても。

左　門　君子二言なし。

伊右衞　貴殿が君子か。ハアヽ。君子はその罪をにくんでその人をにくまず。よしや手前に不始末な事がござらうともそこが親身。若い者故意見を云つて下さつてもよささうなものを。僅かな事を言立てに、娘をひきあげ、苦しいまぎれ、遊女ばいたに賣る心か、大概そこらでござらう。

左　門　ハヽヽヽ。成程、おのれが心に引きくらべ、大事の娘を添はして置いたら、おのれこそ夜鷹にがな賣りこくるであらう。それが不便さ。二つには盗人根性有る者を緣家にしてはこの身のけがれ。

伊右衞　なんと。

左　門　云へばいふほどその身の破滅。年寄は惡い事は云はぬほどに、あきらめてしまやれさ。

伊右衞　イヤ、あきらめられぬ。一旦武士が云出した事、刀にかけても。

左　門　刀にかけてどうするのだ。

伊右衞　最前といひ、今といひ、あくまで身共をさみするおいぼれ。女房の緣につながりやこそ、舅あしらひ。もうこれまで。娘を返さぬ上からは、他人の左門。討果たすのが武士の意地。

左　門　年は寄つても四ッ谷左門。何。やみ／＼とお身たちに。

伊右衞　その舌の根を。

(ト拔いて切つて掛かる。左門、拔き合はせ、立廻りの中、左門手ひどく切りつける。伊右衞門、受けかねて石地藏の後へまはる。左門及び腰に切らうとする。伊右衞門石地藏をつき倒す。此地藏、左門が腕に當たる。これにてどうと坐る。伊右衞門、すかさず左門を一トかせ切る事よろしく。立廻つて兩人見得。)

此道具ぶんまはす。

本舞臺。向う一面の槇垣、上の方、富士權現の賽錢箱。すべて、裏田圃の道具。こゝに直助、頬冠りにて、與茂七の衣裳

を着てゐる庄三郎を出刄にて刺し殺してゐる。時の鐘にて道具納る。

（ト一寸立廻つて、）

直　助　戀の敵の佐藤與茂七。宵の意趣を覺えたか。（ト留めを刺し、）後日に見咎められぬやう、面の皮を。（ト思入れ。持つたる出刄にて、）刄物があつては。

（ト思入れあつて、垣根の際へ出刄を隱す。バタ／＼にて、後の垣より、左門、血に染み、よろぼひ出る。後より伊右衞門、拔刀にて出て、一寸立廻りあつて、左門を斬倒し、留めを刺し、）

伊右衞　剛情ぬかした老ぼれめ。刀の錆は自業自得。ハテ、よい態だわえ。

（ト直助、伊右衞門の傍へより、透して見て、）

直　助　さういふ聲は、たしか民谷の。

伊右衞　（ト伊右衞門も同じく透し見て、）奥田の下部、直助か。どうしてこゝに。

直　助　戀の意趣ある佐藤與茂七。たうとうこゝで。

伊右衞　女房の親の四ツ谷左門。お岩を返さぬその上に、國で盜んだ用金を氣取つた老ぼれ、後日の障り、それ故是非なく。

直　助　丁度揃つた人殺し。一寸のがれに、知れぬやう、面の皮まで置けば、當分氣休め。

伊右衞　いかさま。そんなら身どもも。

（ト刀にて、左門が顏を切りさうにする。向うに、バタ／＼と人音する故、伊右衞門、直助一寸木隱れする。時の鐘。合方になり、向うより、菊五郎二役、女房お岩にて手拭を被り、安下駄、糸立てを抱へ出て來り、思入れあつて、）

お　岩　もう餘ッ程、夜更でもあらうに、このまア父さんは、何をして歸りの遲い事やら。お年の上といひ、宵からの胸騷ぎ。急に案じらるゝ故、お迎ひに出ても見たが、どこにお出でなさんすことやら。

（ト此樣な事、云ひながら本舞臺へ來る。下座よりお袖、以前の形にて、小提灯を持ち、小走りに出て來り、思はずお岩に行きあたり、）

お　袖　ハイ／＼、御免なされて下されませ。心の急くものでござります。

（トお岩、お袖を見て、）

お　岩　ヤ、そなたは妹。

お　袖　オヽ、姉さんかいなア。（思入れ。トお岩の姿を見て、）お前。まア、味な姿をしてゐなさんすが、殊に夜更といひ、たゞの身でもないのに、冷えてはわるいぢやござんせぬか。さうして、まア、なんぼ別れてゐればとて、夫のある身で、お前は賤しい辻君。

お岩　アヽこれ。(思入れ。)成程、朝夕貧しい暮しをする故、そのやうに思やるも、尤も。また、妾がこのやうな物を抱へてゐる故、猶更さう見ゆる筈ぢやが、さつきに内を出る時、少しはらついた故、傘はなし、それで、これを。(思入れ。)まアく、妾よりは、そなたの身の上。お屋敷にゐる時分、與茂七といふ許嫁がありながら、この頃聞けば、味な勤めとやらに出やるげなの。

お袖　エ。

お岩　なんぼ貧しい暮しをしても、武士の娘のあらうことか。(思入れ。)と、さあ、表向きでは云はれはならぬ。そこは云はれぬ妾が身も、有りやうは推量通り、卑しいわざを勤むるも、年よつた父さんが、貧苦の上に、妾らへ氣兼ね。現在娘の姉妹に隠して、毎日、淺草の觀音の地内に出て、一錢二錢の袖乞ひをなさるゝといなう。(思入れ。)お留め申すも知つては居れど、隠してお出でなさるゝところへ、その樣なこと云うたら、面目ないとて、若しひよつと。(思入れ。)ほんに日頃のお氣性故、そこで私が思ふには、内のことさへ相應に、手廻つたなら自ら父さんの御苦勞も止むであらうと、思ひついた辻君も、肌はふらねど譯を云うて、やつぱり袖乞ひ同前な、今の世渡り。

お袖　妾も同じその心で、父さんにもお前にも、隠してこの頃一二度は、恥かしいことに出ますれど、それがもつけの幸ひやら、今日許嫁の與茂七さんに、不思議にお目に懸つて、いろく話の其上にて、又どこへやら行かしやんした故、その後を慕うて、こゝまで來る道、何やら頻りに胸騷ぎ。

お岩　ムヽ、さう云やれば妾も、父さんの歸りが遲い故、殊にやつぱり胸騷ぎ。なんぞ凶事がなければよいが。

お袖　(あたりを見る。)エヽ、もう、氣にかゝる所へ、それく姉さん、お前のきはへも、血がこぼれてゐるわいなア。(ト提灯を出す。)

お岩　エヽ、氣味の悪い。(思入れ。)オオ、大そうなのりぢやわいなア。

(トあたりを見るうち、お岩は左門の死骸、お袖は與茂七の死骸を見つけ、思入れ。)

ヤアそりやこそ父さん。

お袖　オヽ、覺えの召物、印の提灯、與茂七さんもこの所で。

兩人　こりやまア、どうせうく。どうせうぞいなアく。

(ト兩人、宜しく泣き落す。この時、直助、伊右衛門、そつと死骸を見にて、兩花道にかゝり、窺ひゐる。お岩左門の死骸

を抱き起し。）

お岩　もし、父さんいなア〳〵。氣を確かに持つて下さんせ。敵は何者でござんす。これいなア。もの云うて下さんせいなア。

お袖　ほんにまア、父さんと云ひ、夫まで、一ツ所で敢へない御最期。

お岩　時が延びたか。もう死に切つて、今はの際の一ト言さへ、かなはぬ事か淺ましい。

お袖　ほんに、儚い。

兩人　別れぢやわいなア。

（直助、伊右衞門、バタ〳〵と足音させて駈け來り。）

伊右衞　夜陰に何やら、女の泣聲。（思入れ。）やア、わりや女房、お岩ぢやないか。

お岩　ヤア、お前は伊右衞門どの。父さんが殺されてゐますわいなア。

伊右衞　ヤヽヽ、こりや舅どの。ナ、ナ、何者が。エヽこれ、今一足早くば、なに、おめ〳〵とは討たせまいもの。エヽ、殘念千萬な。

直助　こちらにゐるのはお袖さんか。（思入れ。）ヤア〳〵〳〵。これはさつき、見覺えある提燈と云ひ、さては與茂七どのは。

お袖　父さんと同じ所でこの樣に。

直助　オヽ〳〵〳〵、これは大變々々。

伊右衞　すりやお岩が妹の許婚、佐藤與茂七もこの處で。察する所、舅殿の身の上、危い所へ駈けつけて、助太刀せんと思ひし與茂七、反つて共に討たれたに違ひあるまい。さすれば討ちし曲者は、餘程の手だれと見ゆるわえ。

（ト直助思入れあつて。）

直助　さうだ南無阿彌陀佛。

（ト伊右衞門の脇差にて腹を切らうとする。伊右衞門宜しく留めて。）

伊右衞　ヤア、そちは奥田の下部直助。何故切腹。

直助　サア、切らねばならぬこの身の言譯。安い奉公するものは、心も惡く現在の、御家中の娘御、これなるお袖どのに横戀慕。許婚の與茂七樣のあることまで知つてゐながら、金びら切つて、このお子を、無理に口說いた罰が當たり、宵に思はぬ私が恥。二言三言云ひ合つた、擧句に斬られた與茂七樣。私に疑ひ掛からにやならぬ。私も宵には與茂七樣を、恨んで見たが、よく〳〵思へば、忠義一途に凝りかたまり、二君に仕へず貧しい浪人してござる、各々樣をよいことにして、色にせうのなんのと、思へば〳〵勿體ないと、前非を悔いて、せめてもの、その言譯に來かゝるこの場。思ひがけない横死

の様子。それだによつて。
伊右衞　成程、さう聞いては、そちが身に、疑ひかゝると思ふも尤も。又疑ふまいものでもないが、其方は刄物帶した物も持たず、舅と云ひ、與茂七殿、二人の死骸。中間小者の其方の手で、やみ〳〵討たるゝやうな人たちでもない。そこを思へば其方の業でないは明白なれど、さほど本心に返り、前非を悔い、言譯致す所存なら、與茂七討つたるその敵、探し出してあのお袖に、討たしてやるが、其方の潔白。
直助　それは下郎が願ふ所。この身の面晴れ、二ツには、お袖どのへ今迄も、無理なじやらつき申した言譯。この身を粉にくだいても、敵の助太刀。
お岩　辛い貧苦のその内も、云ふに云はれぬ才覺して、一日送るも父さんを、少しは樂にさせましたいと思ふばかり。その父さんに敢へなく別れ、なに樂しみに世の中に、生きてゐらるゝものぞいなア。
お袖　さうでござんす。姉妹、互に隱しあうて、辛い苦しい恥かしい、苦勞をしたも、皆無駄こと。取分け戀しい與茂七さんに、會うて嬉しと思ふ間もなき別れとは、情ない。いつそ會はぬその前に、死んだと聞いたら諦らめられう。夢見たやうな女夫の緣。
お岩　親の死骸のこの場にて。
お袖　夫と共に、親子四人。
お岩　あの世へ一所に。
お袖　さうじや。
（トお岩死骸の持ちし刄物、お袖、伊右衞門の脇差にて、自害をせうとする。伊右衞門、直助、宜しく止めて。）
伊右衞　今、姉妹が自害して、親、夫の敵は誰が討つ。
兩人　エヽ。
伊右衞　妹お袖は親、夫、一度に別れしその悲しみ、死なうといふは尤もなれど、姉のお岩は現在の、夫を捨てゝ相果てなば、孝は立つても操は立つまい。
お岩　でも、別れたる夫婦中、今さらどうも。
伊右衞　サア、飽きも飽かれもせぬ仲にて、殊に懷姙。子まで身ごもりし女房を、何とて身どもは見捨てねど、舅の心にかなはぬ故、先づ逆らはず戻したが、死なれて見れば差當つて、去狀やらぬ女房の親。このまゝに捨て置かれず、身共が身にも舅の敵。
お岩　そんなら是から伊右衞門どの、便りになつて親の敵。
伊右衞　知れたこと。女房が親は、身共が親さ。
お岩　成程。相對で別れたとはいふも

の丶、去狀取らねば、やつぱり女房。
伊右衞　親の敵は身共が討たす。氣遣ひせずと是から一緒に。
お岩　嬉しうござんす。
お袖　飽かれぬ仲故、もと〳〵へ、お歸りなされて父さんの、敵の助太刀、力となつてやらうとは、お羨しいお二人さん。
直助　ハテサ、今も私が申す通り、與茂七樣を討つたる敵、尋ねてお前に討たせねば、この身の潔白濟みませぬ。どうぞそれまでお前の命、私にあづけて下さりませ。
お袖　それぢやと云うて、これまでに愛想つかしたこなさんを。
直助　サア、そこか前非を悔いたる直助、善心になるからは、是非ともお前のお力に。
伊右衞　直助が申す通り、とかく悲しい辛抱も、つゞまる所は夫の爲。首尾よく敵討つまでは、直助と假の夫婦。
お袖　エヽ。
伊右衞　サア、それが卽ち世を忍ぶ、世間の思はく、敵に油斷さするが手段。
お袖　でも、直助どのと假染にも、夫婦と呼んでは未來の夫へ。
直助　立たぬも道理。さりながら、夫婦といふは人目ばかり。夜は別々、寢所も、離れて寢るが私も潔白。
お袖　それでも、どうやら。
お岩　アイヤ、妹、うはべばかりの夫婦になりや、それは姉が願うても、結んでほしいこの縁組。（思入れ。）直助どのとやらのさつきの言葉。ナ。嘘か誠か、傍にゐて、とつくり敵を質したなら、敵もやつぱり。（思入れ。）ヤ。さア、つい一寸、知れる手掛りも、有るまいものでもない程に、姉が言葉に從うて、假に夫婦に、ナ、それ、なつたがよからう。（トのみこませる。）
お袖　成程。云はしやんすれば、わたしもどうやら。（ト直助へ目をつける。）
直助　エ。
お袖　うはべばかりの、そんなら夫婦。
伊右衞　これで互に。
お岩　力と賴り。
お袖　とは云ふものゝ、これがまア。
お岩　諦らめ兼ねるが、女氣の。
伊右衞　これも、尤も。
直助　しかし、いつまで云つたとて。
伊右衞　つきぬ名殘りと。
お岩　つきせぬ緣。
お袖　鴛鴦のふすまに引替へて。
お岩　こゝろの劍刄。
直助　やがて、本望。
（トにつたり思入れ。この時、以前の運哲、目太八窺ひ出る。）

運哲　人殺し。
日太八　さてはうぬらは。
（ト直助、伊右衞門にかゝるを、伊右衞門抜討ちに、日太八にあびせる。直助は運哲の腕をねぢ上げ。）
伊右衞　敵討と婚禮の、門出の血祭。
直助　假初ながら祝言の。
伊右衞　これが卽ち色直し。
お袖　涙の盃。
お岩　三々九度い。
お岩・お袖　繰言ながら。（ト死骸へ思入れ。）
伊右衞　どうやらかうやら。
（ト兩人顏を見合せ舌を出す。お岩、お袖又死骸へ取りつく。）
お岩・お袖　思へば傍い。
（ト直助、運哲を見事に投げる。伊右衞門お袖、死骸に手を合せ拜む。双方宜しく、木の頭。）
お岩・お袖　ハア、、、。
（ト泣き落す。伊右衞門、直助、指先にて、よい〳〵よいと〆る思入れ。これをきざみにて。）

拍子幕

二幕目

雜司ヶ谷四ッ谷町浪宅の場
同伊藤喜兵衞內の場

本舞臺、三間の間。平舞臺、正面、暖簾口。下手に杉戸の押入。よき所に床の間。上の方、障子內に蚊帳つりてあり。六枚屛風を立て、いつもの所に門口。一體造作そこねし家作。雜司ヶ谷、四ツ谷町、民谷伊右衞門、浪人住居の體。四ツ竹節の合方にて、幕あく。
（トこゝに伊右衞門、浪人の形にて、仕入れ提灯を張つてゐる。下の方に佛孫兵衞、木綿やつし、老けたる拵へにて、うづくまりゐるを、宅悅、件の按摩の形にて、取りなしてゐる體、よろしくあつて。）
宅悅　もし〳〵、伊右衞門樣、左樣でも御座りませうが、そこが御料簡ものでござりまする程に、もう、一兩日のところを。
伊右衞　いや〳〵、待つことはならぬぞ〳〵。いはば、あの小平めは、取逃げ駈落ち。捕へ次第に、身が手打ちにせねば、腹がいぬわえ。このやうな賃仕事を致し居るも、浪人暮しの、コリヤ慰みと申すものぢや。主人が榮えてゐらるれば、鹽冶の家中民谷伊右衞門、きつと致した武士ぢやぞ。なんと心得てをるのぢや。返答次第で年寄りとは云はさぬぞよ。（ト細工をしかけ、立

ちかゝる。)

孫兵衞　ヘイ〳〵、御尤もでございます〳〵。どのやうに仰しやりましても、この方に一言も申しやうはございませぬは、小平めが不屆。只今も仰しやりつける、その取逃げ致した代物は、まア〳〵何々でございまする。

伊右衞　何と申して、おのれらが存じた品ではないわ。この民谷の家に、先祖より持ちつたへ居る蘇氣精と申す唐藥。コリヤ外々には少けない藥種。腰膝拔けたる難病にも、忽ち眼前の不思議。浪人の身の不自由ながらも、外手へさへ渡たさぬ品。それを盗むで駈落ちひろぎ、コレ。(思入れ。ト拵へそこねし一腰を出し、) このがた〳〵丸を、忘れて失せたあいつが一腰。雜物といふはこればかりだ。近所の衆も氣の毒がつて、今朝早く小平めが行方の詮議。俺も常なら駈出すが、何をいふも折わるい女房の初産故、人手が欲しさ、雇つた小平め。却つて主に手をつかせる。思へば〳〵腹の立つ。捕へ次第に打ちばなすぞ。請人め、左樣心得うせ居らうぞ。

(ト叱りつける。孫兵衞、思入れ。)

宅悦　御尤もでございます〳〵。按摩とりの私が口入で、雇に抱へた小平が駈落ち。折惡いお內儀お岩樣の初産が

血が納らないで、後の御病氣、その中での斷落ち。まことに私も旦那へ言譯がござらぬ。老爺どの、こりやまア、貴樣、なんと思はつしやる。
孫兵衛　イヤもう、なんと申してようござりませうやら。併し、常から私が倅ながらも、正直者の、役に立たず。殊に取逃げ、斷落ちの、持つて參つたその品は、あなた樣の御先祖から、お家に傳はるその藥種。アヽ、何とも以て。
(ト思入れ。)
宅悦　サア、私もさう思ふ。錢金は取逃げの當り前。藥種を持つての斷落ちは。
孫兵衛　アヽ、そんならもしや古主の御病氣、彼方へ用ゆる心から、そのお藥を。
伊右衛門　どうしたと。
孫兵衛　ハイ／＼。憎い奴でござりまする。
伊右衛門　これ、老爺、今、申した蘇氣精は、往古な物と思はうが、世間に稀なる代物故、藥種問屋へ持つて行けば、十兩や十五兩には、直きになるわ。先祖よりの添書き、お醫者方の極めもあり、相違ない品物だわ。しかし、それ程に願ふ事なら、その方に免じて、一兩日の日延べは致しくれうわ。その中に行方が知れずば、取逃げの藥種の代り、代金を持參致して、その上に詫まして くれうぞ。左樣心得、歸れ／＼。
孫兵衛　ハイ／＼。それは有難うござりまする。只今から、きつと尋ね出しまして、その上お詫びを申しませう。(思入れ)これはお前、いかい苦勞をかけまするぞ。
宅悦　イヤ、もう、どうも迷惑ながら係合ひ。眞に人の世話は、こゝが怖い。
(ト此うち、孫兵衛、草鞋をはき、身ごしらへする。)
伊右衛門　シテ、老爺が宅は、どの邊であつたな。
孫兵衛　エヽ、深川の寺町邊でござりますれば、眞に遠方でござりまする。
宅悦　歸りがけにも、氣を付けて尋ねながら行かつしやいよ。
孫兵衛　イヤ、もう、その心掛でござりまする。(思入れ。)左樣なら旦那樣、お暇申しまする。
伊右衛門　一兩日中に、きつと詮議して參れ。さもないと、われもその分では差し置かぬぞ。
孫兵衛　ハイ／＼、かしこまりました。(思入れ。)お醫者樣、御厄介にござります。
宅悦　氣を付けてござれよ。
孫兵衛　ハイ／＼。(思入れ。ト門口へ出て思入れあつて、)常から正直な小平

め、取逃げをし居るとは、眞にこれが、子は三界の首枷とはこゝの事。（思入れ。）とはいふものゝ、藥とあれば、てつきりお主の。（思入れ。）

宅悦　まだござらぬか。

孫兵衞　ハイ、お喧しうござりました。

（ト唄になり、菅笠を持ち、思案しながら向うへはひる。）

宅悦　さう云うても、あの老爺も、氣が氣であるまい。（思入れ。トこの時、蚊帳の中にて手をうつ。）あい〳〵、お藥かな〳〵。

伊右衞　氣をつけて下さいよ。

宅悦　かしこまりました。

（ト屛風の中へはひる。伊右衞門思入れあつて、）

伊右衞　このなけなしのその中で、餓鬼まで産むとは氣のきかねえ。これだから素人を女房に持つと、こんな時に亭主の難儀だ。

（ト小言を云ひ乍ら仕事にかゝる。宅悦出て來り、）

伊右衞　お岩が藥か。生れ子の藥か。

宅悦　イエ〳〵、お岩樣のでござります。あのお子は、ぐつとも仰しやらぬ。應鷹なお子樣だ。その上、あれ程迄にお前樣に、よう似てござるとは、

宅悦　サア〳〵、藥だ〳〵。暖めて上けませう。（ト七輪へ土瓶をかけ火を煽ぐ。）

眞に種は爭はれぬものでございます
る。

伊右衞　ナニ、俺に似てゐるか。

宅悦　左樣でござります。

伊右衞　親に似たら、定めし思ひやらる
ゝ。

宅悦　ハヽヽヽ。

（ト思入れ。角兵衞獅子の合方になり、
向ふより秋山長兵衞、さんすいなる形、
大小にて、走り來り、門口より）

長兵衞　伊右衞門どの、お宅かな〳〵。小
平めを見つけて來た〳〵。

伊右衞　これは秋山氏、見當りましたか。

長兵衞　左樣〳〵。先づ心當ては、下町
邊と存じ付き、私が身寄りが築地にお
る故、あの邊まで參り、新堀通りへか
かる道にて、見當りました。なんでも
あいつは、深川邊へ參ると見えました。

伊右衞　左樣〳〵。深川はあいつが親の
内でござる。今まで老爺も呼びつけて
置きました。

長兵衞　エヽ、左樣か。（思入れ。）イヤ、
何よりは貴殿が苦勞にさしやつた、ソ
レ藥は、是でござらう。（ト木綿の小風呂
敷に包みし、藥包を渡し。）

伊右衞　これは忝い。眞に、これが返れ
ば安堵致す。シテ小平めは。

長兵衞　アレ〳〵、あそこへ官藏どのが。
もう見えさうなものだ。

（トまた、角兵衞獅子の鳴物になり、向
うより關口官藏、浪人、作り形、伴助、
中間にて、小平に宥左郎をぐる〳〵巻き
に縛り、髮も亂れ、着類も、破れし態な
るを、二人して、捨白にて手荒く引きず
つて來る。）

小平　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

官藏　御免というて、濟むものかえ。

官藏
伴助　うぬア、ふとい奴だなア。（ト此
樣な捨白いひ乍ら、連來り）サアはひり
やアがれ。（ト内へ引立てはひる。）

伊右衞　これは官藏どの、御苦勞千萬。
秋山氏に樣子を承はつてござる。何か
と忝う存ずる。（思入れ。）オヽ、伴助
か。大儀であつたなア。

伴助　ヘイ〳〵。もし旦那、御安堵で
ござりませう。

官藏　コレ伊右衞門どの、身共なぞが
出ますると直きに斯樣ぢやて。かの一
藥も持つてゐました。眞に見かけに似
合はぬ太い奴でござる。

宅悦　これ〳〵、手前故にな、俺まで
が難儀をするわ。コレ、今まで老爺も呼
びつけて置いたが。まア〳〵、手前、
どういふ心になつたのだ。

（ト云はれ、小平やう〳〵と顏をあげ、）

小平　口入して下すつたお前にまでも
御苦勞かけまするも、ふつと致した出

來心。モシ、左樣なら、老爺も參つて歸りましたか。ア丶、氣の毒や。嘸、案じませうに。(思入れ。)モシ旦那樣、持つて走りましたお藥も、長兵衞樣がお取り上げなさりました。もう／＼他に、何にも取りました品はござりませぬ。どうぞ御勘辨の上、穩便になされて下さりませ。ハイお願ひでござります／＼。(ト思入れ。)

伊右衞　何、穩便に致してくれろとか。イヤ、此奴、不屆なことをぬかすな。おのれが取逃げ駈落ちを、主の俺が、ナニ、穩便に致すものか。眞にこいつ呆れる程な太い奴だ。

官藏　左樣々々。殊に常から此奴が申すを聞けば、きやつが古主は、鹽谷の家中、お手前の同輩、小汐田又之丞が小者との事。老爺は勿論、女房子までござると申すが、眞に人は見かけによらぬものでござるテ。

作助　左樣でござりまする。聞けば、こいつが內に、その又之丞殿とやらも、居候にゐるとの話でござる。

伊右衞　ヤ丶、何といふ。同家中であつた又之丞が、こいつ小者か。(思入れ。)ヤイ、小平め、おのれ、いよ／＼左樣か。

小平　ハイ／＼、それに違ひはござりませぬ。私が親どもは、又之丞樣の御家來筋。御恩を受けしお主樣は、御浪人の上、この間の御難病。それを貢ぎに、私は雇奉公、女房、倅、老爺まで皆それ／＼に賃仕事やら商ひやら、身、貧な中へ主人の御病氣。その御用にも立たうと存じた故、盜みましたあのお藥。全く惡氣で致しませぬ。主人の爲と、忠義の盜み。捕へられたは眞に天命。旦那樣、どうぞお助けなされて下さりませ／＼。(ト、いろ／＼詫びるを聞いて、)

伊右衞　スリア何か。われが古主の又之丞が病氣につき、俺が家に持傳へた一藥を盜んで來いと、又之丞が、われに頼んだのか。

小平　イエ／＼、毛頭主人は存じませねど、こりや、私が出來心で。

伊右衞　出來心であらうが、忠義であらうが、人の物を盜まば。盜人。忠義で致す泥棒は、命は助けるといふ天下の掟があるか。たはけ面め。一藥も取返し、取替への金子さへ償はば、助けて遣らうが、その代りに、おのれが指は一本づつ折つて了ふわ。

長兵衞　これはよい慰みでござらう。然らば十本の指を殘らず折つて見ませうか。

官藏　命の代りに指十本。イヤハヤ、

安いものでござるな。

長兵衛　私も稽古の爲に、折つて見ませう。

伊右衛　サア〳〵、手傳へ〳〵。

（ト皆々、小平へ立ちかゝる。宅悦捨白にて留める。小平思入れ。）

小平　アヽ、モシ〳〵、この上指を折られては、手が不自由で、主親を育くみます事とても。

三人　それをおいらが、知るものか。

小平　お慈悲でござりまする。どうぞその儀を。

伊右衛　エヽ、喧ましい。猿轡でもはめさつしやい。

三人　合點だ〳〵。

（ト、三人、立掛かり、伴助、手ぬぐひを取つて、小平が口を結はへて、）

伴助　これで、ようござります。

官藏　指の試みに、鬢の毛から抜きませう。

長兵衛　こいつはよからう。

（ト皆々、立ちかゝつて、小平の小鬢の毛を皆々抜いて、煙草吹きかけ、種々さいなむ。唄になり向ふより、お槙、前幕の乳母にて、供の中間に、隅田川の卷樽と、重詰物の風呂敷包持たせて、出て來り、門口へ來つて、）

お槙　ハイ、お頼み申しませう〳〵。

三人　アヽ、誰か來たぞえ。

伊右衛　客があらば、その野郎、押入へなりと打ちこめ。

三人　合點だ〳〵。うしやアがれ。

（ト小平を引立てゝ、下の方、杉戸の押入をあけ、打込んで戸をさす。その中宅悦出迎ひ、）

宅悦　ハイ、どれからお出でなされました。

お槙　あの、妾は御近所の伊藤喜兵衛屋敷より參じました。お取次の儀を。

（トいふを長兵衛聞きつけ、）

長兵衛　アヽ伊藤殿よりのお使か。（思入れ。）オヽ乳母のお槙か。サア〳〵、こちらへ入りやれ〳〵。

お槙　ハイ〳〵。左様なら、御免なされませ。（ト内へ入り、）

長兵衛　伊右衛門殿、喜兵衛殿より使が來ました。

伊右衛　アヽ、左様か。これへ〳〵。眞に御近所にあつて、御疎遠に仕る。御主人にもお變りはないかな。

お槙　有難うござります。主人、喜兵衛初め、後家弓ことも、宜しうお言附け申されました。承りますれば、御内室お岩樣御事、御産ありしと、お芽出度いお噂。この品は、餘りお粗末にはござりますれど、お目にかけまする。又、御酒とお煮染はお夜伽遊ばされるお方

へ、お慰みのため、お目にかけますると、遣はしましてござりまする。宜しくお頼み申しまする。
(ト切溜に、煮染、卷鰑、二重の組重へ、切餅、白味噌、鰹節の類を詰めたるを差出す。伊右衛門思入れ。)
伊右衛　これは〳〵、いつもながら御叮嚀に、眞に痛み入りまする。忝なう存じまする。お入れ物は、この方より持たせ遣はしませう。宜しく申して下されい。
お槇　畏りました。(思入れ。)また一品のこの粉薬。これは即ち、手前隱居の家傳とござりまして、調合致されまする血の道の妙薬。お岩様におあげなされましても苦しうござりませぬと、態々遣はしましてござりまする。
(ト懐中より粉薬の包を出す。伊右衛門取って、)
伊右衛　これはお心附けられ、忝う存ずる。早速に用ゐませう。コレ、手前白湯をしかけてくれろ。
伴助　畏りました。
(ト七輪へ、別の土瓶へ水を入れてかけ置く。この時、屋臺の中にて赤子しきりに泣く。)
お槇　オヽ、やゝ様が、いかうおむづかり遊ばしまする。シテ、御男子でござりまするか。
伊右衛　左様〳〵。
お槇　それはお芽出度う存じまする。
(トこの中、やはり赤子、急はしく泣く。)
お槇　これはしたり、いかうおむづかり遊ばしますな。アヽ、大方蚤がせゝりまするも知れませぬ。私が見て上げませう。
伊右衛　それは、かたじけない。何分宜しく。
お槇　ハイ〳〵。(思入れ。)コレ、こなたは、先へ歸つて云はうには、妾は只今に歸りまするど、お上へ申上げて下され。
中間　ハイ、畏りました。左様ならば御免あそばされませう。
(ト唄になり、お槇、風呂敷包を持ち、屏風の内へ産婦見舞に入る。中間、向うへ入る。官藏、長兵衛、切溜を引出し、煙草を引寄せ、)
長兵衛　伊右衛門どの、始めさつせい〳〵。
伊右衛　ハテ、急はしない手合だ。
(ト云ひながら、打寄つて酒を始める。角兵衛獅子になり、向うより利倉屋茂助、大小風呂敷を肩へ掛け、質屋にて出て來り、づツと入り、)
茂助　伊右衛門様、お留守かな。

伊右衞　イヤ、宿に居る。

茂　助　これは、珍しうお宿ぢやな。こつちから、お宅かといふと、留守と云はつしやるから、お留守かと云つたらお宿とは、お珍しい儀でござりまする。もし、伊右衞門樣、この間から、お貸し申しました蚊帳に布團に掻卷まで、代りも來ぬのに上げましたが、あの代物の元利〆高、三分二朱。サ勘定なさるとも、品を返さつしやるとも、片付けて下さりませ。又その他に、去年中から不義理な借の五兩の一件。サヽ、片付けて貰ひませう。さもないと今日は、この地面のお屋敷へ斷つて出ねばなりませぬ。サヽ、どうでござりますな／＼。

（トせたげる。伊右衞門思入れあつて、）

伊右衞　これはしたり、この間も取込みがある故、挨拶も延引致すが、いづれ近々の中に。

茂　助　イエ／＼、待て／＼。イヤ待てませぬ／＼。左樣なら是非がない。お地面のお屋敷へお斷り申して。

（ト行かうとする。皆々留めて、）

長兵衞
伴　助　これさ、おいらが請合うたから、あの一件は。

茂　助　イエ／＼、お前樣方のお請合ひ、これまで一つもわかりませぬ。お構ひなされますな／＼。

（ト行かうとするを、伊右衞門思入れあつて、）

伊右衞　利倉屋、待ちやれ。

茂　助　エ。

伊右衞　五兩の勘定致して遣らう。

茂　助　エヽ、左樣ならあの五兩を。サア、受取りませうか。

伊右衞　イヤ、その金はないが、その代りにはこれを渡さう。

（ト藥の包、極め書き、殘らず付けて渡す。）

茂　助　もし、これは何やら藥の包。アノ、これが五兩のかたになりまするか。

伊右衞　その唐藥は、民谷の先祖より持ち傳へたる蘇氣精。賣買ならば二十兩、その餘計にもなる藥種。相違ないのはその添書。さる奧醫者の極めもある。不承であらうが、利倉屋茂助、五兩の代り、預かつてくりやれ。

（ト押しつけられ、茂助よく／＼見て、）

茂　助　成程、お醫者方の御判のすわつたこの唐藥、さう仰しやれば違ひもあるまい。併し、幸ひ私が、下質送るは深川の金子屋。亭主は以前藥種屋あがり、それへ見せたるその上にて。

伊右衞　僅か五兩た。預かつておきやれ。

茂　助　そんならこれは、まアこれで。

(ト懐へ捻込み、)サテ、これからは入替への代物、蚊帳と布團を持つて行きます。御免なされませ。(ト立ちかゝる。)

伊右衛　これはしたり、まだその他に借着の品を。

茂　助　あの、三分二朱の勘定がすまぬと、棚卸しが片付きませぬ。御免なされませ。

(ト屛風の中へかゝるを、お槇出て來り、茂助を留めて、)

お　槇　これ、町人どの、産婦のお居間へ、不躾な。聞けば何やら金子の掛りとな。コレ、これで大方。ナ、サ、その儘置いて。

(ト思入れして、紙に包みし小判一兩をづつと茂助に握らす。茂助思入れあつて、)

茂　助　ヤ、コリヤこれ、小判。

お　槇　サ、産所へ聞えて益なき事。それでは、こなさん。

茂　助　アイ、言分もござりませぬ。眞にこれは大きにお世話でござります。

伊右衛　何やら斯やら、度々のお心付け、申さう樣もござらぬ仕合せ。

お　槇　何しに、左樣な、御心配御無用に遊ばしませ。妾も、もうお暇仕りませう。(ト門口へ行き。)

茂　助　左樣なら、私も道までお供致しませう。伊右衛門樣、唐藥の儀は、下質へ見せた上にてその御返事を。

伊右衛　何分預かつて貰はう。(思入れ。)これは、お乳母どの、宜しう頼みます。大儀でござつた。

お　槇　ハイ／＼。あなた方もおゆるりと。サ、茂助さんとやら。

茂　助　ハイ、どりやお暇申しませうか。

(ト唄になり、お槇に、茂助付添ひ、向うへ入る。皆々殘つて思入れ。)

長兵衛　コレ／＼、民谷氏、アノまあ伊藤の屋敷からは、こなたの所へ叮嚀に度々の折見舞。一度は禮に行つたと云うて。

伊右衛　サ、さう思つても、あの屋敷へはどうも身どもは、世間の手前が。

官藏
長兵衛　そりやまた、なんで。

伊右衛　ハテ、伊藤喜兵衛は高ノの家中、今は町家のあの屋敷。この伊右衛門は鹽谷の浪人。それ故どうも、肩身がすぼまつて。

兩　人　成程、そこもあるわえ。

(トこの時屋臺にて赤子泣く。伊右衛門聞いて、)

伊右衛　よく泣く餓鬼だ。蚤でも喰ふのか。

(ト思入れ。障子をあける。この中に吊り掛けし蚊帳、屛風、木綿布團の上に、お岩産後の態。襟に麻を引つかけ、赤子を抱き、いぶりつけてゐる。此中合方。伊

右衛門見て、)

伊右衛　コレ、お岩、今日は快いか。どうだ。

長兵衛
官藏　見舞に來ました。

(トこれにてお岩思入れあつて、)

お岩　有難うござりまする。産後と申し、この間の不順な陽氣。その故かして、一倍氣持が。

(ト思入れ。此うち、抱き子の上へ、結構なる小裁の掛けてあるを伊右衛門見て、)

伊右衛　これ、お岩、その小裁は見馴れぬ着物。そりやア、おぬしが。

お岩　イエ／＼、こりや今、喜兵衛樣のお宅から、後家殿の内密で、妾が方へ心附け。どうぞ、お前、禮に行て下さんせ。

伊右衛　ア、さうか。ハテ、あの内からは、氣の毒な程、物を送るが、どうも俺は氣が知れぬて。

官藏
長兵衛　それだによつて、度々身どもが申すはこゝだ。以前は以前、今は浪人民谷伊右衛門。敵同志の義理を捨て、あの屋敷へ行くがよからう。

お岩　仰しやる通り、隣家のこと、どうぞお禮に行て下さんせ。

(ト伊右衛門思入れあつて、)

伊右衛　いかさま、お岩が云ふ通り、こりや一寸行かずばなるまいが、何ないふにも俺一人では。

お岩　お前、その心なら、お二人を連れにして、

長兵衛　さうさ／＼、おいらが一緒に、

官藏　行て進ぜう。

伊右衛　そんなら、直きに。思ひ立つ日を吉日と、行きませう／＼。

兩人　さうさつしやい／＼。

伴助　私がお供を致しませう。

宅悦　お留守は、私が居りまする。

寸お禮にお出でなさるがようござります。

(ト此うち、伊右衛門、大小を差し、古き羽織を着て、仕度する事あつて、)

伊右衛　イヤ行きは行かうが、まだ今日は飯を焚かずに置いた。これ、手前、飯を焚いてくれめえか。

宅悦　ハイ／＼、なんでも致しませう。

伊右衛　併し、あの押入の奴を逃すなよ。(思入れ。)これ、これがあいつの扶持方棒。(ト思入れ。件の一本差しを見せ。)ホンニこの粉藥は、今伊藤の屋敷から、お岩が所へ遣さしつた血の道の藥。これを飲むがよい。家傳ぢやといふことぢや。(ト粉藥を、お岩に渡す。)

お岩　左樣でござりまするか。今、お乳母どのが、その噂致されました。こゝへ下さりませ。白湯がわいたら下さりませうが。(思入れ。)モシ、お前は早

う戻つて下さりませえ。
伊右衛　直さに歸るわえ。サ、行きませう。コレ、飯を頼むぞよ。
宅悦　心得ました。
伊右衛　行くぞよ、お岩。
お岩　アイ、必ず早う。
伊右衛　何をしてゐるものか。（思入れ。）サア、行きませう。
（ト唄。時の鐘になり、長兵衛、官藏、伴助、伊右衛門につき、向うへ、宅悦は奥へ入る。後、合方。捨鐘。お岩後見送り、思入れあつて、）
お岩　常から邪慳な伊右衛門どの、男の子を産んだと云うて、さして喜ぶ樣子もなう、何ぞと云ふと、穀つぶし、足手纏な餓鬼産んでと、朝夕にあの惡口。それを耳にもかければこそ、針の蓆のこの家に、生疵さへも絶えばこそ、非道な男に添ひ遂げて、辛抱するも、父さんの敵を討つて貰ひたさ。（ト思入れ。この時頭にさしたる鼈甲の誂の櫛落ちる。取上げ見て、）コリヤ、これ、母樣のお遺品の三光のこの差櫛。物好きなされし菊重ね、胸に工風の銀細工。身、貧な中でも離さぬは、どうで産後のこの病氣。とても命も危い妾、死んだ後にて妹に、せめて遺品と贈るのは、母の讓りのこの差櫛。これより他に、この身についた。
（ト思入れ。また、赤子、しきりに泣くゆゑ、いぶりつけ／＼、産所を離れ、よき所へ來り、よろ／＼として、）
アヽ、また眩暈がする。血の道の故であらう。この粉藥、まア／＼、これなと、たべて。
（ト思入れ。合方。虫の音。時の鐘。お岩件の粉藥を茶碗へあけ、土瓶の白湯をつぎかけ、飲む事あつて、）
オヽこれで、ちッとは心持ち癒らう。どりや、大事の赤子を。（ト抱き取らんとして、又ぞろ俄かに病氣起りし態にて、苦痛の思入れ。）ヤヽヽ、今の藥を飲むと、しきりに常より氣持が。アヽ、こりや顔が熱氣して、一倍氣合ひが。アヽ、苦しや／＼。
（ト思入れ。宅悦、奥より何心なく出で來り、）
宅悦　もし／＼、お汁でもしかけませうかな。（ト、云ひさまお岩を見て、）これはしたり、どうなされた／＼、お前は。それ／＼、顔色が變つて、どうやら樣子が。
お岩　今の粉藥、飲むとその儘。（思入れ。）アヽ、苦しや／＼。
宅悦　ナニ、粉藥をあがつて苦しいとは、藥違ひではないか。まア／＼、風に當てゝは、サヽ、こちらへござつて。

(ト思入れ。種々介抱する。赤子泣く。お岩、苦しむ。宅悦、あちこちとしてゐるうち、押入の戸を漸々あけて、吹替の小平出ようとするを見付け。)

宅悦　どつこい〳〵、逃がしはせぬぞ〳〵。(ト思入れ。戸をたて、思入れあり。)一方防げば二方三方。いや、飛んだ留守を頼まれたわえ。

(ト思入れ。お岩、苦しむ。駈け寄つて介抱する。この見得、時の鐘にて、道具大やうに廻る。)

本舞臺三間の間。伊藤喜兵衛が宅、座敷の體。床の間、違棚、更紗態の暖簾、結構なる構へ。下の方生垣、柴折門、手水鉢宜しく飾りつけ、甚句の唄にて、道具、留る。

(ト伊右衛門、上座に坐り、お弓後家の形。件のお槇、銚子、盃、鉢肴、取り散らし、長兵衛、官藏、酒盛の體。伴助、甚句を踊りゐる。二重舞臺、よき所に喜兵衛、眼鏡をかけ、隱居の態にて、銅盥にて小判を洗ひ、手箱へしまうてゐる。思入れにて宜しく納る。伴助、踊り轉ぶ。皆々、笑ふ。)

長兵衛　イヤ、どうでも伴助は、越後生れゆゑ、甚句はきついものぢや。

お弓　とてもの事に、秋山様、あなたもなんぞ、お隱し藝を拜見致したうござりまする。

長兵衛　イヤ、それは迷惑。身ども藝と申しては、聲色ばかりでござるて。

喜兵衛　それは一興。聲色は誰をつかはッしやる。

長兵衛　やはり築地が聲色をさ。

官藏　イヤモ、貴公の築地も、あまり流行におくれました。ちと鐵砲洲へでも轉宅さつしやい。

長兵衛　その轉宅は、愛宕下ではござらぬか。

官藏　何を云はつしやる。

(ト笑ひになる。奥より若い衆、袴ばかりの若徒にて、吸物碗を三人前、用意して運ぶ。)

お槇　お吸物が宜しうござりますが、あなた方へ上げませうか。

お弓　さうしてたも〳〵。

(トお槇、三人へ膳を据ゑる。伊右衛門、喜兵衛へ目をつけ。)

伊右衛門　イヤ、御隱居、あなたのそれにて洗うておいでなさるゝは、目貫の類でござるかな。左樣かな〳〵。

喜兵衛　いえ〳〵、左樣な品ではござらぬ。これは親どもより、貯へまかりある小判小粒でござるが、折々、斯樣に洗ひませぬと、金銀と申しても何とや

ら錆が出まするゆゑ、斯様に洗ひまするが隠居の役でござるて。ハヽヽヽ。

お弓　マヽお粗末にはござりますれどお吸物にて御酒一献。

お槇　おすごし遊ばされませ。

長兵衛　それは、御ざうさ。（思入れ。）時に伊右衛門殿へ、膳が足らぬが、まア〳〵これなりと。（ト手前の膳を伊右衛門に据ゑにかゝる。）

お弓　いえ〳〵、伊右衛門どのへは、他に上げまするお吸物がござりまする。まア〳〵、あなた方、お粗末ながら。

三人　然らば、御馳走に相成りませう。

（ト銘々、蓋をあける。中には小粒、大分吸物にしてあり。三人、びツくりして。）

長兵衛　この吸物は、まことに珍物。

官蔵
伴助　いや、恐入りました。

お弓　常から願ふ伊右衛門様を、御同道なされて下されました、あなた様方。どの様に御馳走申しても、決して、いとひはござりませぬ。お心にかなひましたら。（思入れ。）槇や、お替へ申してあげや。

お槇　ハイ〳〵。サア〳〵、どなたもお替へなされませ。

三人　それは何より、よい御馳走でござります。（ト直ぐさま袂へ入れる。）

喜兵衛　いづれも方へ、御馳走は申せども、肝腎の伊右衛門殿へは、アヽ、何を御馳走に。

伊右衛　その御馳走が、拝見致したうござるて。

お槇　左様御意なさりまするなら、別けてあなたへ御馳走は。（トあたりへ思入れあつて、）お二人様は、少しの間この席を。（トこなし。兩人呑込み。）

三人　心得ました。然らばこの儘。

お弓　お付き申して。

お槇　サア、御案内仕りませう。

（ト合方になり、お槇を先へ、長兵衛、官蔵、伴助、引添ひ、奥へはひる。三人殘り、喜兵衛、洗うてゐる小判を手箱に載せ、伊右衛門の前へ差出し、）

喜兵衛　伊右衛門殿、不躾ながら此品、御受納なされて下さりまし。

伊右衛　見れば、多くの金銀を、拙者が前に差置いて、受納致せとお云やるは、何か仔細の。（ト思入れ。）

お弓　その儀は、妾が、只今これにて。

（ト思入れ。合方變つて、ずんと立ちて、奥より、振袖のお梅の手を取り、宜き所へおき、思入れあつて、）

これなる者は、病死致せし、妾が連合ひ、又市殿と二人が仲のお梅。

喜兵衛　これに居る身が娘、お弓が腹に設けましたる孫のお梅。どういふ緣にか、その許樣を見染めましたが病の起り。養生のため淺草へ同道致して、またぞろや、その日も又貴公を思はず。

お弓　お見受け申して、この子の悅び。サ、娘、常々思ふ心のたけを。

（トいはれて、お梅、恥かしき思入れあつて、）

お梅　母さんの其樣に、心をつけてのいつくしみ、何をお隱し申しませう。いつぞやより御近所へ、宅替へなされし民谷樣。どうした事やらお目もじの、その時、ふつと恥かしい、女心のひと筋に、思ひつめたるこの身の煩ひ。

お弓　明暮思ふが戀病の、枕に付かねど顏容、日に增し瘦せるその樣子。やう／＼問へば、あなたのこと、忘れ兼ねたる娘氣の。

お梅　奥樣のあるお前樣、思ひ切らうと思うても、因果な事は忘れ兼ね、せめてあなたの召使ひ、水仕奉公致しても、妾は大事でござりませぬ。どうぞお側でお使ひなされて下さりませ。（ト恥かしき思入れ。）

喜兵衛　サヽ、お聞きの通り。ならう事なら婿にも取り、梅が願ひが叶へてやりたさ。

お弓　あれ程までに思うても、娘が心根、町人の身で暮しなば、お岩樣の手廻りに、お使ひなされて下さるか、但し、あなたの妾にもと、遣はしたうは思うても、武士の家にて世間の聞え、殊に連合ひ病死の上は、位牌の手前、どうも左樣な。

（ト思入れ。伊右衛門こなしあつて、）

伊右衛　いかさま、樣子承り、申し樣なき娘御の心根。云はゞ拙者も民谷の家へは入聟の、義理ある女房お岩が手前、こればかりは氣の毒ながら。

喜兵衛　然らば孫めが、願ひもそれと。

お弓　かなひませぬも、みな尤も。この上わが身は、あなたの事を。

お梅　あい、思ひ切ります。きつと心を取直し、思切りますその證據は、ここでわたしは。（ト思入れ、帶の間より剃刀を取出し、）南無阿彌陀佛。

（ト自殺せんとする。皆々、押し留め、）

喜兵衛　こりや、尤もぢや。そちが願ひの。

お弓　かなはぬ時はと、差し詰めし、娘心も武士の種。可哀や、そなたの願ひもこれでは。

（ト思入れ。この時、長兵衛、出かけるて、）

長兵衛　これ、伊右衛門殿、こなたは大きな料簡違ひ。どうで死にかゝつてる

るあのお岩殿。そんなら、遲いか早いか死んだあとでは、女房を持つは今の間だ。お二人の氣休めに、こなたいつそ巣をかへる、その相談がよさゝうなものだぞよ。

伊右衞　イヤ〳〵、この上有德になるとても、お岩を捨てゝは世間の手前。こればつかりは出來ますまい。

（トこれを聞き、喜兵衞、思入れあつて、手箱の金を殘らず出し、伊右衞門の前へ又差出し。）

喜兵衞　さア、伊右衞門殿、殺して下され。この喜兵衞めを、殺して下さい〳〵。

（ト急いていふ。伊右衞門思入れあつて。）

伊右衞　お年寄りの突詰めた樣子、この相談がとゝのはねば、何故また殺せと仰せらるゝな。

喜兵衞　サヽ、そこでござる。孫めが事が不便に存じ、婿に取らうも女房持ち。アヽ、どうがなと工夫をこらし、お弓にも知らせず、身が覺えたる面體崩るる祕法の藥、お岩殿に飲ませなば、忽ち相好變るは治定。その時こそは、こなたの女房に愛想がつき、別れ引きにもなつたなら、後へ持たせるこの孫と、惡い心が出た故に、口外せねど、さつきこなたへ、血の道の藥と、乳母に持たせて遣はしたるは、面體變る毒藥同然。併し命に別條なし。それぱかりを取得にして、よもや罪にもなるまいと、お岩の所へやつたるが、事叶はねば、身の懺悔。それだによつて殺して下さい。

お弓　すりや、その樣な恐しい、企みの元も、この子故。

お梅　逆罰當たるは、そりや眼前。

喜兵衞　こなたが得心ある時は、家の有金、殘らずこなたへ。

長兵衞　その据膳を食はぬは、こなたの料簡違ひ。

喜兵衞　腹が立つなら、殺して下さい。

伊右衞　ぢやと申して、あなたを此處で。

お梅　いつそ、私が。

（ト死なうとする。お弓、留める。）

喜兵衞　承知はないか。

伊右衞　さア、それは。

お弓　死ぬるこの子をどうぞ助けて。

伊右衞　ぢやと申して。

喜兵衞　然らば身どもを。

伊右衞　さア、それは。

兩人　さア。

伊右衞　さア。

三人　さア〳〵〳〵。

喜兵衞　邪ながら。

お弓　お返事を、（トきつといふ。伊右衞門、思入れあつて。）

伊右衛　承知仕りました。お岩を去つても娘御を申し受けう。
喜兵衛　すりや、御得心下されて。
お弓　さすれば、この子の。
喜兵衛　願ひも、叶うて。
伊右衛　その代りには、拙者がお願ひ。
喜兵衛　して其許の願ひとは。
伊右　高ノのお家へ推擧の程を。
喜兵衛　承知致した。お頼みなうても、一家となれば。
伊右衛　御息女貰へば、聟舅。民谷の家名も、何時しか伊藤の。
お弓　思ひ立つ日の、今宵は吉日。
喜兵衛　内祝言も直ぐに今晩。承知でござるか。
伊右衛　いかにも致さう。(思入れ。)女房お岩と、出入りの按摩。何とも以て。
喜兵衛　そりや、何事を。
伊右衛　いや、その儀は只今、貴公へ委しう。
長兵衛　先づ、何よりは是にて盃。仲人は身どもが。これ、お梅殿。
お梅　今更どうやら。(ト思入れ。)
お弓　さすが、おぼこな。
お梅　エ。
喜兵衛　そりや、婿殿ぢや。
(ト伊右衛門へ突きやる。お梅、轉けかゝり恥かしき思入れ。伊右衛門氣をかへ。)
伊右衛　女房でござる。變ぜぬ金打。
(ト小柄を取つて金打の態。兩人見て、)
喜兵衛　エ、忝い。
(ト手を合はす。時の鐘、唄になり、この道具、廻る。)
本舞臺。元の伊右衛門の世話場に戻る。こゝにお岩面體見苦しく變り、苦しみ倒れゐる。宅悦、介抱してゐる體にて、道具留まる。
(トやはり虫の音の合方。時の鐘。宅悦いろ／＼介抱して、)
宅悦　イヤ、眞に飛んだ留守を頼まれた。モシ、お岩様、どうでござります。氣持は好うござりますか／＼。
お岩　アヽ、なんぢややら、喜兵衛様より下された、血の道の藥を飲むと、俄に顔が發熱して、アヽ、苦しう覺えたわいの。
宅悦　いや、モウ、大きに案じました。まア／＼、好いさうで、落ちつきました。(思入れ。)これはしたり、もう、日が暮れたな。燈もつけずばなるまい。ドリヤ／＼。(ト行燈を出し、燈をつけて、)しかし、今の藥で何故あのやうに、俄に苦痛を。(トいひさま、行燈の明りに、お岩の顔を見て、慟りして、)ヤア、お前は顔が。

お岩　ナニ、どうぞしたかいの。

宅悦　さア、ちつとの中に、まア、そのやうに。（ト思入れ。云はうとして、思入れ。）サ、そのやうに癒るとは、ア、大方、そこが家傳の、良藥でござりませう。（ト顔の事を云はぬ思入れ。）

お岩　妾も最前、俄の熱氣、あの、苦痛、少しは、癒つたやうぢやわいの。

宅悦　いや、お仕合せでござります。（思入れ。）イヤ、燈はついたが、油が無かつた。私は、ちよつと、買つて來て上げませう。

お岩　さうして下され。この樣子ではなか／＼妾は、歩行はかなはぬ。コレ、こゝにたしか、お錢が。（ト思入れ。あたりより、ほんの小錢五十ばかり通したるを探り取って。）これ持つて、早く頼みます。

宅悦　かしこまりました。（ト油注を取つて。）まだ／＼、歸つて來るまではござりませう。

お岩　早う頼むぞや。

宅悦　あい／＼。（ト思入れ。門口へ出て、思入れあつて。）ハテ、奇態なことだな。さつきまでは何ともなく、ちつとの中、苦しむと思つたら、あれほどまでにも。

（ト内へ思入れ。お岩これを聞きつけ。）

お岩　まだ、行かずかいの。

宅悦　ハイ、鼻緒が切れましたから。

（ト時の鐘。合方にて向うへ入る。お岩殘り、）

お岩　何ぢややら、伊藤樣から下されたお藥は、血の道には好いやうなれど、顔の熱氣は、今に癒らず、惡いお酒など、たべた氣持ぢや。（ト思入れ。この時、赤子、泣出す。）ア、また、せわるかいの。添寢して遣りませう。（ト赤子に添乳して。）サ、今父さんがお歸りぢや。こゝでは、蚊が螫しまする。まア／＼、蚊帳へはひつて。（ト思入れ。上の方、蚊帳の中へ入り、赤子をたゝきつけ。）ドリヤ、添乳して遣りませうか。

（ト唄。時の鐘。向うより伊右衛門、思案の態にて出で來り、花道にて思入れあつて。）

伊右衛　今の喜兵衛の話では、命に別條ない替り、相好變る良藥と申したが、もしや女房が、あの後で。（思入れ。）ものは試しだ。（ト門口へ來り、づツと内へ入り。）

お岩　油、買うて下されたか。（ト蚊帳の中より聲をかけて。）

伊右衛　いゝや、油は買ひに行かない。おれだ。

お岩　伊右衛門どのかえ。

伊右衛　どうだ。さつき貰うた藥は、血

の道に好いか。

お岩　アイ、血の道には好いやうなれど、飲むとその儘發熱して、わけて面體、俄の痛み。

伊右衛　熱氣が強くて、その顔が。

お岩　アイ痺れるやうに覺えたわいなア。

（ト蚊帳の中より出て來る。伊右衛門見て、恟りして、）

伊右衛　やア、變つた〳〵〳〵。ちつとの中に、その樣に。

お岩　何が、變つたぞいなア。

伊右衛　サ、變つたと云つたは、オヽそれ〳〵、おれが喜兵衛殿へ行つて來た中に、手前は大きに顔色が好くなつたが、それもさつきの、藥の加減でがなあらう。イヤ、顔つきが大きに癒つた。

（ト呆れ、思入れ。）

お岩　私が顔つき、好いか惡いか知らねども、氣持はやつぱり、同じこと。一日、あけしい閑も無う、どうせ死ぬるでござんせう。死ぬる命は惜しまねど、生れたあの子が一入不便に思うて、妾は迷ふでござんせう。モシ、こちの人、お前、妾が死んだなら、よもや當分。

伊右衛　持つて見せるの。

お岩　エヽヽ。

伊右衛　女房ならば直きに持つ。而も立派な女房を、俺ア、持つ氣だ。持つたらどうする。世間にいくらも手本があるわえ。

（トずつかりと云ふ。お岩呆れし思入れあつて、）

お岩　コレ、伊右衛門殿、常からお前は、情を知らぬ邪慳な生れ。さういふお方を合點で添うてゐるのも。

伊右衛　親仁の敵を頼む氣か。（思入れ。）コレ、嫌だの、今時分、親の敵もあんまり古風だ。止しにしやれよ。俺は嫌だ。助太刀しようと受合つたが、嫌になつたの。

お岩　エヽ、そんなら今更、アノお前は。

伊右衛　ヲヽ、嫌になつた。嫌ならどうする。それで氣に入らずば、この内を出て行けよ。他の亭主を持つて助太刀をして貰ふがよい。こればかりは嫌だの。

お岩　お前が嫌だと云はんしても、他へ頼む當て頼りもない、女の手一つ。さすれば、願ひもかなはぬ道理。さりながら、妾に此處を出て行けなら、成程出ても參りませうが、後でお前は繼母に、あの子をかける心かいの。

伊右衛　コレ〳〵、繼母にかけるが嫌なら、あの餓鬼も連れて行け。まだ水子

のあの餓鬼と、新規に入れる女房と、一口に云へるものかえ。

お岩　スリヤ、こなさんは、女には實の我が子も。

伊右衛　見替へねえで、どうするものだ。われも俺を見替えたから、俺もわれを見替えるが、それがどうした。

お岩　エヽ、なんで、妾がアノ、お前を誰に見替えましたぞいの。

伊右衛　サア、その見替えた男は、アノ。

お岩　誰でござんす〳〵。

伊右衛　オヽ、それ〳〵、あの按摩坊主に見替えた。わりやア、あいつと間男してゐるな〳〵。

お岩　エヽ、何を云はしやんす。いかに妾がやうな者ぢやというて、マア、不義間男をしようぞいなア。

伊右衛　わりやアしまいが、俺が又、外で色事をしたらどうする。

お岩　サア、そりやア、男の名聞。どの様な事さんせうが、願うて置いた敵討、力となつて下さらば、何の、どの様な事があつても。

伊右衛　構はぬと云ふ代りに、敵討を頼むのか。品によつたら、餓鬼まで出來た女房だから、助けてもやらうが、知つての通り、工面が悪い。コレ、何ぞ、貸してくれろよ。急に入る事がある。と云うて何も質草が。（ト思入れ。あたりを見廻し、落ちてある櫛を見つけ、）コレこれを借りよう。

（ト取上げる。その手に取りつき。）

お岩　アヽ、そりや、母さんの遺品の櫛。他へ遣つては。

伊右衛　ならねえのか。コレ、有樣はナ。俺が色の女が、平常挿す櫛がない。買つてくれと云ふから、これを遣らうと思ふが、悪いか。

お岩　こればかりは、どうぞ許して。

伊右衛　そんなら、櫛を買ふだけの物を貸せ。又、その上にナ、俺も今夜は身のまはりが入るから、入替物でも、工面せねばならぬ。なんぞ貸せ。サア、早く貸しやアがれ。

（ト手荒く突き飛ばす。お岩思入れあつて、）

お岩　何というても品もなし。いつぞ妾が。（ト思入れ。着る物を脱ぎ、下着ばかりになり、）病氣ながらもお前の賴み、これ、持つて行かしやんせ。

（ト差出す。伊右衛門、よく〳〵見て、）

伊右衛　これでは足りねえ。もつと貸してくれろ。何もねえか。（思入れ。）オヽ、あの蚊帳を持つて行かう。

（ト駈けよつて、吊りかけある蚊帳を引ツぱづし、持つて行かうとする。お岩とり縋つて、）

お岩　アヽ、モシ、この蚊帳がないとナ、あの子が夜一夜、蚊に責められて。
（ト蚊帳に取りつく。）

伊右衛　蚊が喰はば、親の役だ。逐つてやれサ。放せ〳〵。エヽ、放しやァがれよ。
（ト手荒く引つたくる。お岩、これに引かれて、たぢ〳〵となつて、蚊帳を離す。と、指の爪は蚊帳に殘り、手先は血になり、どうと倒るゝ。伊右衛門振返り、）

伊右衛　それ、見たか。エヽ、イケあたじけねえ。しかし、これでも不足であらうが。
（ト唄。時の鐘。蚊帳と小袖を抱へて向うへはひる。お岩やう〳〵起上つて、）

お岩　これ、伊右衛門殿、その蚊帳ばかりは。（ト思入れ。あたりを見て、）そんなら、もう、行かしやんしたか。あの蚊帳ばかりは遣るまいと、病みほうけても、子が可愛さ。放さじものと取りすがり、手荒いはずみに指さきの、爪は離れてこの樣に。（ト思入れ。指先、殘らず血のつきたる思入れにて、）かほど邪慳な、こなさんの、胤とはいへどいとゞ不便に。
（ト思入れ。赤子泣く。お岩、よろ〳〵として、あたりを尋ね、土火鉢を出し、蚊遣りを仕かける思入れ。此中、捨鐘の合方。向うより伊右衛門、件の品々肩にかけ宅悦を引捕へ、引返し出て來り、花道にて、）

宅悦　モシ〳〵、旦那、それは餘りお情ない。さう致したらお岩樣と私とが、惡い浮名が。

伊右衛　立てさせるのが、俺が仕事だ。首尾よく行けば、これ。（ト思入れ。囁く。）ナ。

宅悦　エヽ、左樣なら、あなたは今宵アノ、内祝言を。

伊右衛　コレ口外するな。（思入れ。）それ
（ト包み金一分やる。）

宅悦　エヽ、この金を下されて、アノ、私に。

伊右衛　遣損ふと、やらかすぞ。
（ト切つて了ふと仕方してみせる。）

宅悦　アヽモシ、呑込みました〳〵。
（思入れ。）
（ト伊右衛門、ふたゝび、又、引き返して入る。宅悦は、油注ぎを持ち、門口へ來り、）
お岩樣ノヽ、さぞ、お待遠樣でござりませう。サヽ、油々。
（ト行燈へつぐ。お岩やう〳〵と蚊遣を煽りゐて、）

お岩　ヲヽ、戻つてか。そなたの後へ、伊右衛門殿が戻つてござんして、吊つた蚊帳まで取上げて。

宅悦　アヽ、また、得手吉へやられましたか。ハテ、酷い心だ。アヽ、見ればお前は、大分薄着に。

お岩　冷えては惡いと云ふ病氣。それも貧せとてこの樣に。

宅悦　剝いでござつたか。アヽ、困つたものだ。お前もいかい苦勞性。その御苦勞をなさるより、いつそ亭主を持ちかへる、工面をなさるが。（ト思入れ。云ひながら、しなだれ寄つて、お岩の手を取り、）コリヤお前には、手の筋に惡い筋がござります。一體、これ〳〵、この筋が、女は亭主で苦勞の絕えぬ、これが筋ぢやて。そこでこの筋を切るがようござります。切るとはその男の緣を切る事でござります。

（トお岩の手を握る。思入れ。お岩惕りして飛びのき、）

お岩　コレ、そなたはまア、武士の女房に、何でその樣に淫ら千萬。重ねて左樣な不行跡なことしやると、今度は許さぬぞ。（トきつと云ふ。）

宅悦　モシ〳〵、お前樣ばかりがその樣に眞實をお盡しなされても、モシ、伊右衞門樣はとうから心が變つて居ります。それを知らずに亭主にかゝつて、後で難儀をなされませうぞえ。それよりお前樣、私どもにナ。

（トいはうとする。お岩腹立ち、）

お岩　ナニ、亭主で難儀しようより、私どもとは、そりや誰が事。サ、聞き事、それを申せ〳〵。云はぬとわが身は、不義云ひかける慮外な奴、女でこそあれ武士の娘、侍の妻ともいはるゝこの岩が、品によつては。

（ト有り合ふ小平が一腰を取つて、スラリと拔いて立ちかゝるゆゑ、宅悦狼狽へ、）

宅悦　これはしたり。あぶなうござります。

（ト此手を留めんとして、あちこちするうちはずみにて、白刃を誤つて、上の屋臺のうちへ打込む。宅悦うづくまつて、）

モシ〳〵、嘘でござります。嘘でござります。今のやうに申したは、まことに嘘でござります。お前の貞女を見ませうと、存じたからの皆いつはり。有り樣は、お腹をお立てなさるな。只今迄とは事變り、お前のやうな、そでない顏の女では、私が樣な者でも。アヽ、うとましや〳〵。何の罰にか、病氣の上に、その、まア、お顏は。ハテ、氣の毒千萬なものだ。

（ト此臺詞の中、お岩思入れあつて、）

お岩　ナニ、妾が、面が。（思入れ。）さつきの樣に、熱氣と共に俄の痛み。若しやあの時。

宅悦　サヽ、そこがお前は、さすが

は女氣。喜兵衞殿から參つたる、血の道の藥は、アリヤ皆噓。人の面を變へるの良藥。それをあがつてお前の顏は、世にも醜い惡女の面。それをお前は御存知ないか。疑はしくば、これ〳〵、こゝの、（ト思入れ。腰疊より鏡を出し、）これでお顏を御覽じませ。

（ト持ちそへて、鏡を見せる。お岩わが顏のうつるを見て、）

お岩　ヤヽ、着物の色合、つむりの樣子。こりや、これ、ほんまに妾が面が、この樣な惡女の顏に。何で、まア。こりや、妾かいの〳〵。妾が眞に顏かいなう。（ト種々思入れ。）

宅悅　サヽ、それにも外に、作者がござるわ。卽ち隣家の喜兵衞樣。手前の孫のお梅どの、あの子の婿に伊右衞門樣を貰ひたいにも女房持ち。さすがは向うは金持でも、ちつとはお前に義理もあり、斷らしつたを曲事と、血の道の藥と詐はつて、お前に飲ませて顏を變へ、亭主に愛想を盡かさす工面。さうとは知らいでうか〳〵と、一ぱい參つたお岩樣、近頃もつて氣の毒千萬。

（ト殘らず口走り、此中、お岩、だん〳〵に腹の立つ思入れにて、鏡にうつる顏をよく〳〵見て、）

お岩　さうとは知らず、隣家の伊藤、妾が所へ心づけ、日毎に贈る眞實は、忝ないと思ふから、乳母や端女へ最前も、この身を果す毒藥を、兩手を突いての一禮は、今々思へば恥かしい。さぞや笑はん。口惜しいわいの〳〵。

（ト泣き伏す。宅悅さし寄つて、）

宅悅　愛想を盡かして伊藤の婿樣。お前と手を切るその爲に、どうぞ手前は女房と、間男致せとお賴みを、ならぬと申せば、すつぱ拔き、よん所なう今の戯れ。お前の着類をその樣に、非道に剝いでござつたも、あの樣は直ぐに今宵が內祝言。婿の仕度の入替へに、持つてござつたお前の代物。その上、お前を私に、色を仕かけてくれろと、お賴みは、卽ち嫁をこの家へ、連れて來るにもお前が邪魔。それ故、私を賴んで間男。そのお顏では、どうして色に。イヤ、御免だ〳〵。

（トこれを聞き、お岩きつとなつて、）

お岩　もうこの上は、氣を揉死に、息ある中に喜兵衞殿、この禮いうて。

（ト蹌き〳〵、行かうとする。宅悅衝立にてとめて、）

宅悅　そのお姿でござつては、人が見たら狂人か。姿もそぼろなその上に、顏の構へもたゞならぬ。

（トお岩、鏡を取つて、よく〳〵見て、）

お岩　髮もおどろのこの姿。せめて女

の身躾み、鐵漿なとつけて、髮も梳き上げ。喜兵衛親子に詞の禮を。（思入れ。）お鐵漿道具、揃へてこゝへ。

宅悦　産婦のお前が鐵漿つけても。

お岩　大事ない。サヽ早う。

宅悦　スリヤどうあつても。

お岩　エヽ、持たぬかいの。

（ト思入れ。じれていふ。宅悦びつくりして。）

宅悦　ハイ。

（ト思入れ。これより獨吟になり、宅悦、鐵漿つけの道具を運ぶ事。蚊いぶし火鉢に、お鐵漿をかけ、爨炊なる半挿、粗末なる小道具、宜しく、鐵漿をつける事ありて、件の赤子泣くを、宅悦、駈寄りいぶりつける。此中、唄一つぱいに切れる。お岩、件の櫛を取つて、思入れあり。）

お岩　母の遺品のこの櫛も、妾が死んだら、どうぞ妹へ。（思入れ。）アヽ、さはさり乍らお遺品の、せめて櫛の歯を通し、もつれし髮を。オヽ、さうぢや、

（トまた、唄になり、件の櫛にて髮を梳く事。赤子泣く。宅悦抱いていぶりつける。此中、唄一つぱいに切れる。お岩、件の櫛をとつて、思入れあり。此中、お岩の梳上げし落毛、前へ山の如くに、溜りしを見て、櫛も一つに持つて。）

お岩　今をも知れぬこの岩が、死なば正しく、その娘、祝言さするは、これ眼前。たゞ、恨めしきは伊右衛門殿。喜兵衛一家の者どもゝ、ナニ、安穩に置くべきや。思へば／＼、エヽ恨めしい。

（ト持つたる落毛、櫛諸共、一ツに摑み、キツトねぢ切る。髮のうちより、血汐、タラ／＼と落ちて、前なる倒れし白地の衝立へその血かゝるを、宅悦見て。）

宅悦　ヤヽヽヽ、あの落毛から滴る生血は。（トふるへだす。）

お岩　一念、通さで置くべきか。

（トよろ／＼立上り、向うを見つめて、立ちながら宜しく、息を引取る思入れ。宅悦、子を抱き、駈けよつて、）

宅悦　コレ／＼お岩樣、モシ／＼。

（思入れ。ト思はずお岩の立身へ手をかけて、ゆすると、その體、よろ／＼して、上の屋臺へ、バツタリ倒るゝ。そのはずみ、最前投げたる白刄、程よきやうに立ち掛りゐて、お岩の喉のあたりを貫きし態にて、顏へ血はねかゝりし態にて、よろよろと屛風の間を踉き出て、よき所へ倒れ、呻いて落入る。宅悦、狼狽へ、すかし見て。）

宅悦　ヤア／＼、あの小平めが白刄があつて、思はず、とゞめも。こりや、大變／＼。

（トうろたへる。この中、凄き合方。捨

鐘。この時誂への猫、一匹出て、幕あきの切溜へかゝる。宅悦、見て、）
この畜生め、死人に猫は禁物だわ。シッ／＼／＼。
（ト思入れ。追廻す。猫逃げて、障子のうちへ駈けこむ。宅悦、追うて行く。此時、ドロ／＼にて、障子へ、タラ／＼と血かゝるを、とたんに欄間よりあたりへ、猫の大きさ位なる鼠一匹、件の猫をくはへ走り出て、猫は死んで落ちる。宅悦、慄へ／＼、見る事。此時鼠は、ドロ／＼にて、火となつて消ゆる。）
こりや、この内には居られぬ／＼。
（ト抱き子を捨てゝ、向うへ逃げて行く。揚幕より、伊右衛門、衣服を着替へ、奇麗にして出て来り、宅悦に行當り、見て、）
伊右衛　ヤ、われは按摩か。どうした。お岩は連れて逃げたか。首尾はよいか／＼。
宅悦　アヽ、モシ／＼、お前のお頼みだが、そこどころぢやござりませぬ／＼。
伊右衛　アヽそんならまだ、逃げないのか。エヽ埒のあかない奴だ。コレ、俺は伊藤の屋敷にて、内祝言をして来てな。大方あのお岩は、われが引出してくれたであらうと思つたから、今夜向うから花嫁を連れて来るが、お岩がうせては、サヽ大變だ／＼。
宅悦　左様さ。大變でござります。大きな鼠が。（思入れ。）いや、大變／＼。あの、まア、鼠が。
（ト慄へ／＼、向うへはひる。伊右衛門見送り、）
伊右衛　何だ、あいつは。鼠々と、後もぬかさず逃げて失せたが、それにしてもお岩を追出す、その相手は誰にしような。（ト思入れあつて、）オヽ、有るぞ有るぞ。あの中間の小平めを間男にして、あいつら二人をたゝき出し、いづれ今夜中に、お梅をこゝへ。（ト門口へ来り、）お岩、どこにゐる。お岩／＼。
（ト呼立つる。此時、足下にて赤子泣く。恟りして飛びのく。）
こりや、どうだ、この餓鬼を道傍へ。すんでのこと踏殺さうとした。お岩／＼。
（ト呼ぶ。思入れ。薄ドロ／＼にて大きなる鼠出て、赤子の着物を啣へて引く。又そろ鼠出て、件の鼠の尾を啣へて、だんだんと鼠連らなり、後すさりに赤子を引いて行くを見つけ、）
ヤヽヽ、こりや鼠が、この餓鬼を。エエ、とんだ畜生だ。シイ／＼。（ト思入れ。追ひ散らす。）うぬが餓鬼を、鼠が引くのも知らないか。コレ、お岩／＼。
（思入れ。ト赤子の泣くのをかゝへて、たづ

ね廻り、女の死骸を見付けて、)ヤ、、こりやこれ、お岩が死骸。喉に立つたは、小平めが赤鰯。そんなら、あいつが殺したか。それにしてもあの押入れ。(思入れ。ト踠けよつて下の押入をあけ、内より、件の小平を引出し思入れあつて、)こいつが縄目は、やはりその儘。そんなら、こいつが、よもやお岩を。(ト思入れして、)こいつを相手に。

(ト云ひざま、縄目をとく。小平急き込んで伊右衛門にすがり、)

小平　旦那様、エヽ、こなたはの〳〵。

伊右衛　何だ、こいつは。俺がどうした。

小平　いや〳〵〳〵。両手も口も、かなはねば、お岩様をこの様に、氣を揉死に殺したも、皆お前のさつしやる業。コレ、何もかも、あの按摩がお岩様に向ひ、隣屋敷の喜兵衛様と、云ひ合はせたる一部始終。殊に面體忽ちに相好替へたも、藥の業。現在女房を今更に、宿なしにして其身の出世。どうしてそれが榮えませう。エヽ、お前様は見下げ果てたお人だなう。

(トきつと云ふ。)

伊右衛　喧しいわえ、駄折助め。お岩が死んだもうぬが刄物。そんなら主の女房を、うぬ、殺したな〳〵。

小平　アヽ、滅相な。たつた今まで両手も口も結はへられ、どうして左様な。

伊右衛　それでも、それ〳〵、両手が動くわ。そんならお岩は、うぬが殺

した〳〵。

（トまくしかけて云ふ。小平、伊右衛門へ種々に云つてもきかぬ故、思入れあつて。）

小平　さう云はつしやりますなら、お岩様を殺したは、私が咎になつて人殺しになりませう。その替りには、もし、旦那様、どうぞ盗んで走りましたアノ唐薬の蘇気精。あのお薬を私に。

伊右衛　箆棒め。あの唐薬はさつき質屋へ、五両の質にやらかして、こゝには無いわ。

小平　そんなら薬は、あの質屋に。先さへ知るれば參つて願うて。

（ト門口へ行かうとする。伊右衛門、後より抜打ちに小平を斬る。その手に縋つて。）

こりや、お前、なんでまア、私を。

伊右衛　知れたこと。お岩が敵だ。殺しましたとたつた今、わりや人殺しになつたぞよ。殊に隣家の企みの様子、聞いたとあれば猶更に、生けておかれぬ、小佛小平。民谷が刀で往生ひろげ。

（トまた斬りつけ、立廻よろしく。小平、數ヶ所の疵を受け、伊右衛門にすがつて。）

小平　わつか一夜の雇でも、假の主故、手出しをすれば。

伊右衛　主に刄向ふ道理だわ。それだによつて嬲切り。お岩が敵だ。くたばれ〳〵。

（トずた〳〵に斬倒しゐる。此中、木魚入りの合方。向うより長兵衛、官蔵、出て來て、この様子を見て。）

長兵衛
官蔵　ヤ、こりや小平めを。伊右衛門殿。

伊右衛　何かを聞いたこの小者。殊に死んだるお岩が不義の。

長兵衛
官蔵　ヤ、そんなら内儀のお岩どの。

伊右衛　相好變つて、こいつと二人、この家を逃げんと、ひろいだ不義者。

長兵衛
官蔵　聞けば聞く程、野太い野郎め。シテこの死骸は。

伊右衛　世間へ見せしめ。二人の死骸、戸板へ打ち附け、姿見の川へ流して、直ぐに水葬。

（ト押入れの杉戸を引きぬき、小平の死骸を件の杉戸へひつぱつて、釘にて打ちつける。この時、薄ドロ〳〵。仰向けになりし小平太のひつぱられし兩手の指、蛇の形となり、うごめく。兩人見て。）

官蔵　あれ〳〵、兩手の指が殘らず。

長兵衛　どうやら、蛇に。

伊右衛　何をたはけた。

（トこの時向うより、伴助、走り來り門口より。）

伴　助　伊右衞門樣〳〵、喜兵衞樣より
花嫁御が、只今これへ御家內一緒に。

伊右衞　それは早急。然らば二人が死骸は奧へ。

長兵衞　心得ました。

伴　助　ヤ、小平が死骸に、お岩樣。そんなら二人は。

伊右衞　間男心中。二人を戸板で、直ぐにどんぶり。仕事は奧で。

三　人　呑込みました。

伊右衞　見られまいぞ。

ト、唄。時の鐘になり、長兵衞、官藏は、小平の死骸を杉戸のまゝ、さし擔ひ、伴助は、お岩の死骸をひつ抱へ、何れも奧へはひる。この唄を借り、向うより中間二人に箱提灯、喜兵衞の紋付にて出る。喜兵衞、袴羽織にて、お梅が手を引き、後より乳母お槇、中間二人、釣臺に絹地の夜具、六枚屛風などを、さし擔ひ、出て來る。門口へ來て）

喜兵衞　伊右衞門殿〳〵、喜兵衞が參つた。（ト醉うたる態。）

伊右衞　これは〳〵。御隱居には、早速にお梅を同道。サヽ、これへ〳〵。

お　梅　アヽ、モシ、只今も申しまする通り、最前致せし內祝言。それさへあるに、あなたのお宅へ。

喜兵衞　ハテ、大事ない。伊右衞門殿も、家內に間違ひ出來致し、內をまかなふ者なき故、緣者となつたを幸ひに、武家にあるまじい引越女房。夜具も屛風も、持たせて參つた。サ、大事ない〳〵。

お　槇　左樣ではござりませうが、何を申すも、お年のゆかぬお子樣を。

喜兵衞　ハテ大事ないといふに。

（思入れ。トお梅が手を無體に引ツぱり內へ入り、皆々、座につく。）

喜兵衞　時に伊右衞門殿、いよ〳〵貴公の申されし通り、お岩どのには。

伊右衞　先刻內祝言の砌り、お話し申した男と違ひ、手前の小者の小平と云ふもの、又ぞろ、きやつと不義間男。殊更露顯と存じつき、產婦の女を同道致し、乳呑を捨て置き家出致せし憎ツくき二人。さすれば直ぐにお梅どの、今晚よりして留めおきまする。舅御にも、左樣お心得なされて下さりませ。

喜兵衞　ア、又他に男がござつたか。イヤ、それは不埒千萬な儀でござるな。しかし此方がためには、誠にあうたり、かなうたり。

お　槇　先刻も左樣なお話。よもやとは存じましたれども、あの御病氣の御樣子で、どうして家出なされしやら。まア〳〵、それは格別。差當りまして御男子樣が。

伊右衞　イヤ、眞に小兒に弱りきるち

や。
喜兵衛　サ、それ故、身どもゝ今晩から、留守居がてらに、泊つて進ぜる。明日は早々、乳母を尋ねて進ぜよう。コリャ、槇よ、勝手よき所へ、おれが床を取つてくれい〳〵。
お槇　畏りました。（ト思入れ。下の方へ持參の夜具を敷く事。屏風を立ておき、）ハイ〳〵、御隠居様のお床を、これへ延べましてござりまする。
喜兵衛　シテ、婿殿と孫めが寝間はな。
伊右衛　只今まで、お岩がまかりあつた床の中。きやつへの面當、やはりあれへ臥りませう。
喜兵衛　成程、それもよくござらう。（思入れ。）コリヤ〳〵梅よ、これは、そちが守りぢや程に、大事にこれをかけて居ようぞ。（ト赤地の錦の守を渡す。）
お梅　左様なら、こりや離さずにかけませうが、心掛りは、アノお岩さんの事が。
お槇　左様ではござりますれど、まァ〳〵、それは格別。お寝間はかりは。
伊右衛　ハテ、大事ない。身がよいと申すに、誰が何と申すのぢや。（ト腹立ちの態。）
お槇　イエ〳〵、誰も左様は申しませぬ。左様ならお前様は。（トお梅が手を引き、上の方件の床の上へつれゆき、）今宵は此處で日頃のお願ひ。
お梅　それぢやと云うて、モシひよつと、私が事故お岩様。
お槇　ハテ、それを仰しやると、あなたの願ひが。
（ト屏風を引廻す。赤子泣く。）
伊右衛　ハテ、折惡い。あの乳呑み。
喜兵衛　身どもが今宵は乳のない乳母。かんがく致して、寝させて進ぜう。（ト赤子を抱き、下の方の床の上へあがる。）
伊右衛　然らば、舅御、何分宜しう。
お槇　して、私は。
喜兵衛　今宵の仕末を、娘にも話してくりやれ。
お槇　畏りました。そんなら私は、芽出度うお開き申しませう。
伊右衛　乳母も休みやれ。
お槇　ハイ、ゆるりとおしげりなさりませ。
（ト唄。時の鐘になり、提灯持ち先に、お槇供廻り、殘らず向うへ入る。喜兵衛も屏風引廻す。伊右衛門一人殘り、思入れあつて、）
伊右衛　ハテ物事もこれ程うまくゆくものか。
（ト思入れ。正面暖簾口より長兵衛、官藏顔を出し、）
長兵衛　伊右衛門殿、戸板の二人を。（ト

伊右衛　早稲田のあたりの、流れへ突き出し。

兩　人　不義の成敗。

伊右衛　これ。

（ト思入れ。兩人、顔を引く。）

サテ、これからが　　娘の手いらず。

ドリヤ、　　に掛らうか。

（思入れ。ト凄き合方になり、時の鐘。上の方の屏風へかゝり、）

お梅どの、さぞ待遠に。

（ト屏風引き開ける。床の上にお梅うつむいてゐる態。伊右衛門、近よつて、）

これ、花嫁御、うつむいてばかり居ることはない。恥かしくとも、顔をあげ、日頃の戀のかなうた今宵、そんなら芽出度く、こちの人、わが夫かいのと笑うて云やれな。（ト寄り添ふ。）

お　梅　アイ。（思入れ。）こちの人、わが夫かいの。

（ト顔を上げ、件の守を差出す。お岩の顔にて、伊右衛門を恨めしさうにきつと見つめてげら〳〵と笑ふ。伊右衛門はぞつとせし思入れにて、あたりなる刀引取り、抜討ちに、ぼんと首討つ。この首、前の縁へ見事に落ちると、お梅の本首出て、薄ドロ〳〵、首のあたりへ鼠出て、群がる。伊右衛門、首をよく〳〵見て、）

ヤヽヽ、やつぱりお梅だ。コリヤ、はやまつて。

（トつか〳〵と行き、邊の差添を尋ね、腰にぼツこみ、刀、引き下げ、つか〳〵と行く。屏風引きのける。喜兵衛、赤子を抱き、掻巻を着てゐる。伊右衛門近寄つてゆり起し、）

これ、舅殿、珍事がござる。アノ間違で。

（ト喜兵衛を引起す。その顔小平の顔にて、抱き子を喰ひ殺せし體にて、口は血だらけ。伊右衛門の顔を見つめて、）

小　平　旦那様、薬を下され。

伊右衛　ヤ、おのれア、小平か。現在小兒を。

（ト云ひさま、抜討に首打落す。よきところへ、喜兵衛の本首、血にそみて出る。蛇一疋本首に纒ひ、うごめく。伊右衛門よく〳〵見て、）

ヤヽヽ、切つたる首は、やつぱり舅。かゝる祟りに、うか〳〵こゝには。

（ト門口へ駈出す。戸は閉りある故、さらりと開けて、出んとする。又ぞろこの戸しやんと閉る。伊右衛門、びつくりしてたぢ〳〵と後ずさりに來り、ふつと息をする。ドロ〳〵にて、心火立上る。伊右衛門見て、ぎよつとして、）

伊右衛　ハテ、執念の。

（思入れ。ト撞つとなるを、木の頭。）

なまいだ〳〵。

（ト手を合はせ、回向する。これをきざみにて、）

拍子幕

三幕目

砂村隠亡堀の場

本舞臺。後、黒幕。高足の土手。上の方、土橋、その下に腐りし枯蘆、干潟の體。こゝに、お弓、お槇、非人の形、焚き火に刺股を立て、土瓶を吊し、舞臺は、流れ川の體。よき所に樋の口、石地藏、稻むら、松の大樹、吊り枝。水草腐り、すべて十萬坪隠亡堀の景色。禪の勤め、時の鐘にて、幕開く。

（ト お弓、病氣の態。乳母お槇介抱してゐる。）

お槇　若し、御新造様、只今の御様子は宜しい樣でござりまするか。

お弓　イヤなう、案じてたもんな。いつもよりは別して心よい程に、案じてたもるな。只、心に懸かるは行方の知れぬ民谷伊右衛門。何の遺恨に、親人様娘までも殺害なし、恩を仇なる人非人。わしや、腹が立つわいの／＼。

お槇　御尤もでござりまする。よしない者を聟がねとなされた故に、伊藤のお家は、師直様からお取上げ。非人となつてこの様に、伊右衛門様の行方を詮議。乳母の妾が付添ひましての御奉公。必ず／＼、きな／＼思召さぬが宜しうござりまする。

お弓　それ程までにも以前を忘れぬ志、召使とは思はぬわいの。（ト懐より件の守袋を出し）コレ、この守は、娘が横死の砌りまで、肌につけしお守なれど、あの様なる時節にも、守の奇特のないといふは、眞に死ぬる約束か。今々思へば、このお守、恨めしいわいの。

お槇　アヽ、もし、また愚痴な事仰しやりまするか。その様なお心をお出しなされては、あのお子様のお爲にもなりませぬ程に、いつもの様に、御回向なされてお上げなされませ。妾はお夜食のこしらへ致しませうか。

（ト木魚入りの合方になり、お槇は、布袋の中より米を出し、邊りより小さき小桶を出し、川水をすくひ、米を洗ふ。お弓、守を刺股の竹へ吊し、回向する思入れ。此鳴物にて、向うより、佛孫兵衛、卒塔婆を持ち、川の方を心づけ、死骸やなきかと尋ねる心にて出て來り、二人を見て、）

孫兵衛　アヽ、なんぢや。この衆は物貰ひにしては、さて人柄の好い女非人。コレ、此方衆は、この川端に居やるから

は、ひよつとこゝへ、あの杉戸に縫うたる、男と女の浮死骸が流れては來はせぬか。どうぢや〳〵。

（ト兩人聞いて、）

お弓　イヤ〳〵、見當りませぬが、その又死骸を、何でお前は、尋ねてござつたぞ。

孫兵衛　コレ、聞いて下され。私が伜がさる武家方へ奉公に行きをつたが、先から駈落、今に行方が知れませぬ。今日聞けば、女と男の浮死骸、戸板に打付け流るゝと、きつい評判。もしや、伜がそのやうな目に、遭ひはせぬかと心ならず、そのやうな事、內へ歸つて話しては、嫁や孫が案じ居らうと、云はれはせず、內密で、靈岸樣へ御參り申し、御回向願うて、この塔婆。息災で居をれと祈禱し、もし、死に居つたらと思ふから、戒名もつけて貰うて、出た日を命日。アヽ、うとましの娑婆世界。南無阿彌陀〳〵〳〵。（ト思入れ。お弓これを聞いて、）

お弓　アヽ、いづれを聞いても、悲しい話。世間にはまた、似たことも。

お槇　まゝあるものでござりまする。お前樣は、そのお守御覽の度に物おもひ。コリヤ、こう致しませう。妾が明日早々、靈岸寺へ持參いたして、納めて參りませうわいなア。

お弓　成程、その樣なものかいなう。持つてゐる程、淚の種。娘が事を忘れかね後生にもなるまい。そんなら納めて來やいの。

お槇　左樣いたしませう。晩程早々御參り申して參りませう。

（ト何心なう、守を取つて、臺詞の中、よき所へ置き、風の音して、蘆間、ざわざわと動めき、大きなる鼠、一匹出て件の守を喰へ行くを、二人見つけ、）

お弓　それ〳〵、鼠が守を。

お槇　これはしたり、どこから鼠が。

（思入れ。ト取返さんと、追廻す中、鼠は守を喰へしまゝ、川へ飛込む。お槇、うろたへ、）

アレ〳〵、鼠が。

（ト手を伸ばして、捕へんとして、干潟の沼故、ずる〳〵川へ落ちんとする故、お弓、うろたへ、お槇が帶の端を捕へ、）

お弓　アレ、危ないわいなう〳〵。

（トいへども及ばず。居合す孫兵衛、捨白にて、手傳うて、お弓の帶をとらへ、次になつて引戻す。この時、お槇の帶の端、切れて、お弓の手に殘り、お槇は川の中へ落つるを見て、お弓、件の干潟へ氣を失うて倒るゝ。孫兵衛駈寄り、介抱して、）

孫兵衛　コレ〳〵、物貰ひの女中。氣をつけさつしやれ。（ト思入れ、種々あつて、）

これはしたり、あの鼠が出た故、一人の女中は思はず川へ。殘つた女中も、氣を失うて。コリヤ、怪しからぬことぢや〳〵。（ト狼狽へ廻り、）いや〳〵〳〵、通りかゝりの袖乞女、俺もなまなか、係合になつては迷惑。と、いうて、捨てるも氣の毒。（ト思入れありて、）アヽいづくの女か、ハテ氣の毒な。（ト傍にありし赤合羽をとつて、お弓に打着せ、塔婆を持つて、）ヤレ氣の毒な。人の事見て、わが身の上。アヽ、伜めはどうし居つたぞ。

（ト思入れ。佃節になり、孫兵衞、氣をかへ、下座へはひる。此鳴物にて、向うより、直助權兵衞、鰻かきの拵へにて、あつらへのヤスをかつぎ、浮に使ふ樽をもつて川の邊を見やり〳〵出て來り、花道にて、）

直助　さて、今年のやうな、箆棒に、漁のないことは覺えぬ。したがこゝらはどうか。水の濁りが好ささうな。ドリヤ、こゝたやつて見ようか。

（ト舞臺へ來り、川の中へはひり、腰だけになつて、かく事。此うちかすめた佃節聞え、直助捨白よろしく、鰻かきに何やらかゝりし故、とり上げ見ると、前幕の落毛少々。此うちに件の鼈甲の櫛、からみ上がる。直助とつてよく〳〵見て、）

直助　何だ、毛が引ツかゝつて來たな。エヽ薄汚ない。（思入れ。ト捨てんとして櫛を見つけ、）ヤアこいつは鼈甲だ。滿更でもねえ。どれ、磨いて見ようか。

（ト土手へ上がり、石地藏のきはへ來り、稻叢の藁をとつて、櫛をふいて思入れ。煙草のみ付け、磨き居る。かすめし佃の鳴物にて、向うより孫兵衞女房お熊、木綿やつし、世話婆にて、これも塔婆を持ち、後より伊右衞門、深き竹の笠、浪人の形、大小をさし、魚籃をさげ、釣道具をかつぎ、出て來り、舞臺際まで來り、）

伊右衞　モシ、母ぢや人。お前も御健勝で、まア〳〵、お芽出度うござります。

お熊　イヤ、もう、妾も、そなたの惡い噂を案じてゐましたが、マア〳〵、息災の樣子を見て、安堵しました。知りやる通り、昔の連合ひ、近藤源四郎殿と離別してより、師直樣へお末奉公。その砌り顏世どのを、御前樣へ取持たうとかゝつて見たが、しぶとい顏世が剛情ゆゑに鹽谷の騷動。その節、師直樣の仰しやつたは、その方もしや、後々に難儀な身分となつたなら、これを證據に願うて來いと、コレ〳〵。（ト懷の風呂敷包より、書物を出し、伊右衞門へ渡して、）これは、アノ、御前樣の御判の据りし御書物、師直樣のお直筆。いはば、妾へのお墨付。幸ひ、わが身は浪人

の事。願うて出たなら、そなたの難儀を救はうとは思うても、今の亭主は、鹽谷の屋敷の又者ゆゑ、知られてはと思ふ中、民谷伊右衞門といふ浪人が、女房のお岩といふを殺し其上に、隣屋敷の親子を殺害して、立退いたといふ噂まち〳〵。それ故に、この樣に。(ト思入れ。卒塔婆を見せ、)これ見や。俗名民谷伊右衞門。そなたは死んだと、噂をさせるその爲の、此卒塔婆立てゝ置くのは、何と智慧者であらうがの。

伊右衞　これは〳〵、母ぢや人のお志、先づは大慶。併し隣家の喜兵衞、娘のお梅を、殺したるも死靈のわざ。それゆゑ工夫を廻らして、親子の者を害せしは、朋輩の官藏、彼が小者、兩人の者に塗りつけて置くからは、よもやこの身にかぶれも來まいが、マア〳〵お前の氣休め。そこらへ立つて置かつしやりませ。

お熊　合點ぢや〳〵。人目に立つやう、この土手の此處らへ立てゝ。(ト思入れ。よき所へ立て置き、)コレ伜、妾が住家を尋ねんと思はば、アノ深川の寺町で、佛孫兵衞と云ふ苦しがり、必ずともに尋ねて來や。

伊右衞　心得ました。この間に尋ねませう。私は當分、本所蛇山庵の坊主を賴み、暫く食客。

お熊　そんなら伜、こなたの在家へ。

伊右衞　尋ねさつしやりませ。

(ト木魚入りの合方になり、お熊、卒塔婆を殘し、とつかはとはひる。この中、直助、片傍にまじ〳〵聞いてゐる。伊右衞門川を見廻す。入相鳴る。)

アゝもう入相か。どりや、此處らへ下ろして。

(ト 釣竿二三本、川へ下ろして、煙管を出し、思入れあり。直助が煙草のみゐるを見て、)

火を借りませう。

直助　お點けなさりませ。

(ト思入れ。兩人吸ひつけるとて、直助、笠の中を伺ひ見て、)

若し、伊右衞門さん、お久しうござります。

伊右衞　ヤ、さういふ手前は直助か。

直助　アイ、その直助も今では改名、鰻かきの權兵衞。モシ、伊右衞門樣。いはばお前は、私が爲には姉の敵と云ふところだね。

(トいはれ、伊右衞門(恟りして、)

伊右衞　洒落か、無駄かは知らねえが、何で身どもが手前の敵。

直助　ハテ、忘れなすつたか。私が女房の姉と云ふのは、四ッ谷左門が娘のお岩。私が女房は妹のお袖。そんなら滿

更私とお前は敵同士。此處で逢うたが優曇華の、女房が姉のお岩の敵、民谷伊右衛門、イザ立上つて勝負なせ。といふところだが、そこを云はねえの。その代りには、わしが又、出世をする話が出來ると、今のお前の貰はしつた、師直樣の書物を、わしが借りに行きやす。その時必ず、知らねえ顏をなされまするなよ。

伊右衛　どうして／＼。その時はわれにも逢らうが、俺もあり樣は、出世の種を。

直助　種をまくなら、權兵衛が、ほちくり出してもからんで行きやす。

伊右衛　そりやァ承知サ。手前と俺が仲だもの。ナニ、その時に。

（ト話の中、釣の糸に、魚のつきし樣子にて、ひく／＼と引く。伊右衛門、手早くあげる。小鮒、かゝりゐる。直助見て）

直助　アヽ、出來たな。

（思入れ。トまた、ひく／＼と動く。）

直助　そりや又、かゝつたわ。

（思入れ。ト大きな聲で云ふ。伊右衛門、上げる。今度は、大きなる鯰上がる。伊右衛門、取らうとしてはね上る。）

直助　アヽ、それ／＼、逃げるわ／＼。

（ト側にて煽り、手傳うても、ぬらつく故、直助、立てゝある卒塔婆を取つて、鯰を押へんとして、やう／＼押へ、持つたる塔婆は邊りへ捨つる。此時、氣を失ひゐるお弓があたりへどうと落ちる。こゝ前よりお弓心つき、胸を押へ居たりしが、此時、思はず卒塔婆を取上げ、よく／＼見て）

お弓　ヤ、卒塔婆にしるせし戒名の、下には俗名民谷伊右衛門。そんなら、若しや父さんと、娘を殺せし民谷はこの世を。

（ト思入れ、この聲を伊右衛門聞いて、お弓を見つけ、扨はと笠にて顏を隱し、直助が袖を引き、土間へ煙管にて、何やら書いて見せる。直助呑込み、お弓これを知らず、思入れあつて）

お弓　モシ／＼貴方樣、ちとお聞き申したい事がござります。

直助　アヽ、何だえ。

お弓　外でもござりませぬが、こゝに立つてござりまする卒塔婆に、民谷伊右衛門とござりまするが、此人は病死でも致しましたのでござりまするか。

直助　ナニ、滅法界な。伊右衛門さんは死にはせぬ／＼。コレ、こゝに。

（トうか／＼云はうとする。伊右衛門、袖を引き、死んだといへ／＼といふ思入れ。直助心づき、）

ほんに、死んだ／＼。コレ、死んだに

よつて、塔婆を立てたのだ。生きてゐる者にナニ、卒塔婆を立てるものか。死んだ〳〵。
（ト無性にいふ。お弓こなしあつて、）
お弓　シテ、そりや何時頃の事でござりました。
直助　アヽ、そりや何よ。たしか今日が大方、それ〳〵四十九日だ。
お弓　エヽ、そりや相果てまして四十九日に。
（ト思入れ。無念泣きに、泣き入る、直助見て、）
直助　コレ〳〵、そのやうに泣くのは、こなたの兄弟か、亭主か。何だ〳〵。
お弓　イエ〳〵、私が親と娘を、この民谷伊右衛門と申す者が、殺害致して行方知れず。その敵たる伊右衛門、女なりとも、おのれやれ、一太刀なりとも恨みんと、かやうな姿になりまして尋ねまする。その敵が病死と聞いては、願ひの綱も切れ果てゝ。
（ト無念の思入れ。伊右衛門、聞いて、直助へ又書いて見せる。）
直助　コレ〳〵、非人の女中、よし又伊右衛門が生きてゐても、あの人は敵ぢやない〳〵。
お弓　エヽ、して、民谷をのけて、誰が敵でござりまする。
直助　コレ、眞、殺したその相手は、秋山長兵衛、關口官藏、家來が一人、こいらが、殺したのだ。ナニ、伊右衛門さんは殺しはせぬの。
お弓　そんなら、あの時仲人せし、あの兩人が仕業なるか。何の恨みで、父さん、娘。思へば〳〵口惜しい。
（トきつとなる。伊右衛門、よき時分よりそろ〳〵立つて覗ひ來り、此時壓にて、お弓を蹴る。思はず前なる川へ落ち、水音して姿深みへ落入る態。兩人、顏を見合せ、）
直助　伊右衛門さん、成程お前は。
伊右衛　此剛惡も見やう見眞似の。
直助　誰を見眞似に。
伊右衛　お主がしぐさを。
直助　アノわしが平常を。
伊右衛　見習つた爲よ。
直助　眞に感心。（思入れ。）奇妙。
（ト唄。時の鐘になり、直助、思入れあつて下座へはひる。）
伊右衛　いらざる所に、うせたばかり。おれも、殺生。（思入れ。ト此時、釣糸をぴく〳〵引く。手早く、引上げて、）南無三、餌を取られた、
（ト竿替へる思入れ。禪の勤めになり、向うより秋山長兵衛、頬冠りに面を隱し、キヨロ〳〵として、出て來り、伊右衛門を見つける。）
長兵衛　民谷氏、こゝにござつたか〳〵。

伊右衛　これさ、密かに〳〵。(ト思入れ。)

長兵衛　コレ〳〵、伊右衛門殿、こなたが、お岩と小平を殺し、又、その上に喜兵衛親子も、残らずこなたのしたこと。俺ら主従三人へ、思ひがけなき疑ひかゝり、もう此上は身はれと存し、此處から直ぐにお上へ訴へ、あの人殺しは民谷が業、伊右衛門でござりますると貴公の舊惡、一々云ひ上げ、俺らが身抜けをせねばならぬ。必ず後で恨まつしやるな。伊右衛門殿、斷りましたぞ〳〵。

伊右衛　コレ〳〵、そりやお手前、これまで懇に致した効がないと云ふもの。いはば、例へに云ふ如く、人の噂も七十五日。その中には又、どのやうな風が。

長兵衛　コレ〳〵、そのあらましを申出す、それをこなたのいはるゝが、定めて嫌であらうと存じ、當分我等は遠國へ、影を隠すつもり。それでよからう〳〵。

伊右衛　サヽ、さう致せば手前も安堵。

長兵衛　然らば、こなたの安堵の代り、路金を貸しやれ。

伊右衛　ナニ、路金を。コレ日頃から苦しがりの身ども、どうして、金が。

長兵衛　工面は出來まい。出來ずはこの儘訴へに。

伊右衛　アヽコレ、それをこなたが。

長兵衛　いはぬ代りに路金少々。

伊右衛　どうして金は。

長兵衛　貸さずば直ぐに。(ト行きかゝる。)

伊右衛　アヽコレそれ云はれては。

長兵衛　路金はどうだ。

伊右衛　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

長兵衛　路金の工面は出來ぬのか。

(トいはれ、伊右衛門思入れあり。此時、お熊が渡せし書物を出し、)

伊右衛　コレ　この書物は、師直様の御判のすわつた、墨附同然。おれが母から、かういふ廻りで。コレ。

(ト引寄せ、囁く。長兵衛、呑込み、)

長兵衛　成程、さう云ふ手堅い書物なら、路金の代りに當分身どもが。

伊右衛　預けるからは、金が出來たら、その時、引替へ。

長兵衛　承知した。民谷氏。(ト書物を懐中する。)

伊右衛　秋山殿。

長兵衛　氣を付けさつしやい。

(ト時の鐘、虫の音の合方。書物を持つて長兵衛、向うへ走り入る。伊右衛門、後を見送り、)

伊右衛　よしなき秋山うせたばつかり、口ふさぎに大事の墨附、あいつに渡し

てこの身の舊惡。ハテ要らざる所へうせずとよいに。(ト思入れあり。)南無三暮れたな。どりや、竿を上げようか。

(思入れ。ト淒き合方。薄ドロ〳〵。時の鐘。此時雨窓を下ろして暗くなり、伊右衞門、竿を上げてしまふ。此時、孤をかけし杉戸流れよる。伊右衞門、思はず引寄せて。)

覺えの杉戸は。

(ト引寄せて、孤をとる。こゝにお岩の死骸、肉脫せし拵へ。此時、薄ドロ〳〵にて、兩眼見開きゐて、鼠の喰へし最前の守を持つてゐる。伊右衞門、思入れあり。)

伊右衞　お岩〳〵、コレ女房、許してくれろ。往生しろよ。

(思入れ。トこの時、お岩、伊右衞門をきつと見つめ、守袋をさしつけ。)

お　岩　民谷の血筋、伊藤喜兵衞が、枝葉を枯さん、この身の恨み。

(ト守を差出し、手つまる故、伊右衞門怖毛立つて、手早く件の孤をかけて。)

伊右衞　まだ浮ばぬな。南無阿彌陀佛〳〵。この儘川へ突出したら、鳶や鴉の。(思入れ。)業が盡きたら、佛になれ。

(ト戸板を引返し見る。後には、藻を被りゐる小平の死骸、伊右衞門見定めんとする。)

「繪入根本いろは假名四谷怪談插繪」

薄ドロ／＼になり、顔にかゝりし藻はばら／＼と落ちて、小平の顔、兩眼を見ひらき片手をだし、)

小平　お主の難病、藥を下され。

(トヂロりと見やる。伊右衛門ぎよツとして。)

伊右衛　またも死靈の。

(ト拔打ちに死骸に斬りつける。ドロ／＼にて、この死骸、忽ち骨となつて、ばら／＼と水中へ落ちる。伊右衛門、ほつと溜息ついて、きつとなる。と此時、バツタリ音して、正面の稻叢押分け、直助權兵衛鰻かきを持つて、覗ひ居る。土手下の樋の口より、與茂七、序幕の非人の形になり、桐油に包みし廻文狀を襟にかけ、糸だてに卷きし一腰をかゝへ、覗ひ／＼高土手に上る。伊右衛門、覗ひ見て、件の廻文狀に手をかけ、直助權兵衛、この中へ入る。三人、一寸立廻り。これより鳴物暗闘になり、三人暗がりの立廻り。直助權兵衛、鰻かきにて打つてゆく。與茂七、拔打ちに切る。鰻かき切り折る。權兵衛と燒印ある柄の方、與茂七の手へ納まる。廻文狀は、直助權兵衛の手へ入る。三人、立廻りよろしく、足下に落ちありし魚籃を取つて三人手をかけ、取上げる。薄ドロ／＼になり、魚籃は忽ち人の面となり、籠の中より、心火、燃上がり、此あかりにて三人、顔を見合はせ、はツとする。心火消え、ドロ／＼打上げ、暗くなる。木の頭。三人、三方へ別つてホツト思入れ。これをきざみにて、三方見やつて宜しく。)

拍子幕

四幕目

深川三角屋敷の場
寺町孫兵衛内の場

本舞臺。三間の間。二重の世話屋臺。正面、暖簾口・鼠壁、一ツ竈、引窓。上の方、卒塔婆交りの生垣。此奥苔蒸したる五輪の塔の頭、塔婆などを見せ、爾塔婆の體。下の方、下座へ黒の冠木門をとりつけ、門口より軒面へ棹を渡し、前幕の小佛小平の着物が干してあり。門口、醬油樽に樒の花を入れ、すべて、深川三角屋敷、法乘院門前の掛り。

(此處に、古着屋、庄七、風呂敷包を持ち、米屋の若い衆長藏、升を持ち、煙草をのんでゐる門口には、蜆賣り次郎吉、蜆の荷をかつぎ、若い衆の仕出し、花を買うてゐる。お袖、世話女房にて、鉈を持ち、樒の根を廻してゐる。此見得、テンツヽ、葬式の鳴物にて、幕、開く。)

長藏　モシ、米を持つて參りました。

お袖　どうぞ、いつもの所へあけて下さんせ。

長藏　オツト、呑込みやした。

庄七　わしが賴んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん。

(ト干物をあちこち持ちあるく。ぼろ七は、押入をあけて、米櫃へ米を入れる。)

お袖　庄七さん、お前も忙しない。冬の日で、そのやうに早く干るものかいな。元の通りにして置きなさんせ。

庄七　成程、どうして見ても、こゝが一番、日當りがよいやつさ。(トまた元の所へ干して置く。)

仕出一　コレ〳〵、お内儀、こゝへも、花を十六文、賣つて下さい。

お袖　ハイ〳〵、只今上げまする。

長藏　モシ、今、入れた米の錢はどうなさりやす。まつてをりやせうか。

お袖　どうぞ、もそつと待つてゐて下さんせ。お前には話がござんす。

庄七　私も急に、頼みたい事があつて又來やした。何しろ、一寸お目にかゝりたいね〳〵。

お袖　エヽ、もう、忙しない。この様に手が塞がつてゐるものを。(思入れ。)サア、お持ちなされませ。

仕出二　アイ、錢はそこへ置きましたよ。

次郎吉　小母さん、蜆、買うて下されな〳〵。

お袖　ホヽヽ。今、買うてやるほどに、ちつとの間、あそこに遊んでゐやしやんせ。ほんに愛らしい。(思入れ。)サア、お前さん。お持ちなされませ。

(ト仕出しに花をわたす。)

仕出三　アイ〳〵。もし、今日はこの法乘院に葬式がござるかな。

庄七　しかも二ツあるが、イヤ、珍らしい亡者を持ち込んだな。

長藏　阿蘭陀からでも渡りはせまいし、亡者に珍しいといふ事があるものか。

庄七　コレ、こなたは、アノ萬年橋へ流れついた戸板の死骸の噂を、まだ聞かないのか。

長藏　その話は聞いたが、アヽ、そんなら今日の佛は、戸板を背負うた土左衛門に、お土左の葬式かね。

庄七　男と女を戸板の兩面に釘附けにして、どんぶりやらかすといふは、成程、世の中には、酷い奴もあるものさ。

お袖　どのやうな惡い事して、そのやうな目に會うたことやら、ほんに氣味の惡い話でござんすな。

仕出二　そりやアてつきり、間男出入りでござりませう。

長藏　それだから、お袖さんも、間男はまアしない事だ。

庄七　しかし、この庄七となら大事あるまい。

長藏　おきやアがれ。

仕出一　こなさんは、その葬式を見に行く氣はござらぬかな。
仕出二　どうで寺へ參りますから行つて見ませう。
仕出一　サア〳〵、行つて見ませう。そんならお内儀。
お袖　どなたも、參つてお出でなさりませ。（ト葬式の鳴物になり、仕出し兩人下座へ入る。）
庄七　時にお袖さん、お頼みと云ふは他でもないが、どうぞ又この着物を、ざつと振出して貰ひたいね。
（ト風呂敷包より、お岩の死骸の着てゐたる衣裳を出す。）
お袖　もう日暮ぢやに、洗うたと云うて干ることぢやござんすまいぞ。（ト手に取上げ、ふしんの思入れあつて、）この着る物は、どうやら見覺えのある。たしかにこりや、私が姉さんの。（思入れ）モシ庄七さん、こりやお前、どこから買うてござんしたえ。
庄七　こりやア、何さ。あそこに干してある着物と一緒に、戸板の土左に。
長藏　ハヽア、そんならお株で、湯灌場物だな。
お袖　エヽ、何ぢややら氣味の惡い。（トそこへ置く。）
庄七　これさ〳〵、ナニ、そんな物ぢやアない。コレ、お前も、野暮なことを云ふ物だ。たとへ湯灌場物だといふて、門前住居をしてゐて、香花を賣るお内儀が、それを嫌つてなるものかな。成程、まだお前も業染みないぞ。
お袖　ぢやというて、妾ア、そのやうな物なら御免ぢやわいなア。したが、モシ、お前、この着物を何處から借りて來やしやんしたえ。（ト聞きたがる思入れ。）
庄七　そりやア、何さ。俺らが店の流れだが、あんまり汚れてゐるから、ざつと振出して貰つて、糶にでも出さうと思つてさ。
長藏　おきやあがれ。見す〳〵知れた土左衛門の着物を。
庄七　コレサ、胸氣な事を云ふまい。お袖さん、この男のいふ事を、必ず眞にせまいよ。何しに俺が湯灌場まで買つて歩くものだ。それ程慾張りはしねえわさ。
長藏　あんまり、慾張らねえこともあるめえ。
庄七　成程、胸氣な事を云ふ男だ。（思入れ。ト門口にある、中盥の中へ、右の着物を入れ、）かうして置くから、どうぞお頼み申しやす。
長藏　ほんに胸氣と云へば、お袖さん、米の代は、どうしてくんなさる。一體

置替への積りだから、先頃の代のすまぬ内は、入れるではなかつたが、お前が度々さう云ふから、持つて來たが、今直ぐに代を拂つて下されまし。

お袖　サア、尤もでござんすが、こちの人が歸らんしたら、直きに持たして上げるほどに、後まで待つて下さんせ。

長藏　そりやア、迷惑なものだ。

（トこの中、次郎吉、樒の花を持ちてまゝ事して遊んでゐるを、庄七見付けて、）

庄七　この子は、小佛小平どのゝ子だが、ハヽア、蜆を賣りに來て遊んでゐるな。

長藏　よし／＼、俺らが家へ行つて、アノ婆アさんに云ひつけてやるぜ。

次郎吉　それでは私がたゝかれます。いやぢや／＼。（ト泣く。お袖駈けより、）

お袖　お前がたも、可哀いさうに、そのやうな事いうて泣かしてからに。

庄七　ハヽヽヽ。そんならどうぞ、お賴み申します。

長藏　モシ、親方へは、後程と云つて置きますぞえ。

お袖　ほんに憎らしい小父さんぢやなう。

（ト佃節、木魚の音になり、庄七、米屋、向うへ入る。お袖、次郎吉の顏をふいてやる。）

次郎吉　小母樣、蜆、買うて下され。

お袖　商ひせうと、さつきからこゝに遊んでゐたお前の物、買うてやりたいが、今日は大事の佛の日ぢやによつて。（思入れ。ト錢を取つて來り、）蜆は要らぬほどに、これ持つて行きなさんせ。（ト次郎吉に錢をやる。）

次郎吉　イエ／＼、蜆、買うて下さらねば、錢は取りませぬ。

お袖　ホヽヽヽ。ほんに正直な、おとなしい子ではある。コレ、そのやうに思ふなら、かうしなさんせ。私に賣るだけ、その蜆、川へ放して下さんせ。それではよからうがナ。

次郎吉　アイ／＼。そんならあの川の中へ逃がしてやりませう。

お袖　ヲヽ、さうして下さんせ。お前は怜悧な子ぢやな。

（ト思入れ。木魚の音合方にて、下座の中より、孫兵衛、老けたるこしらへにて出て來り、次郎吉を見て、）

孫兵衛　わりやア、次郎吉。又、今日も蜆賣りに出居つたな。アヽ何にも知らずに生物の。（ト干してある着物に目をつけ、）あすこに干してある着物は、伜が死骸に。

お袖　エヽ。

孫兵衛　南無阿彌陀佛／＼。

次郎吉　爺樣、今日は蜆が賣れぬ故、晩

には婆様にたかゝれるわいなく。
孫兵衛　オヽ、いとしぼなげに。年はもゆかぬ孫めに、このやうな商ひさせ。これ案じやんな。爺が錢遣らうて、これが今日の賣溜ぢやと、鬼婆アめに見せてやりやく。（ト懷より小錢を出して次郎吉にやる。）
次郎吉　あの小母様にも、只錢を貰つた。
孫兵衛　そんならなんといふ。この內の小母様にも、只錢貰うたといふのか。
（トこの中お袖、茶を汲んで來る。）
お袖　スリヤ、お前がこのお子のお爺さんかいな。まア、お茶一ッ上りなさんせ。モシ、こちらへお入りなさいませ。
孫兵衛　これはく、お手で下さりませ。ホンニ孫めに錢下されたさうにござります。忝うござりまするが、何故また、蜆取つては下されぬぞいの。
お袖　今日は大事の佛の百ヶ日ぢやによつて、それでの事でござんすが、ホンニいとしらしい子でござんすわいな。
孫兵衛　テモまア、若いに似合はぬおやさしい。それに引きかへ、聞いて下さりませ。この孫めが婆アめは、私が後添でござるが、それはく、邪慳な奴。ちつと商ひがたるいと、年はもゆかぬこの坊主めを打つたりつめつたり。それを見るのが不便でござるわいの。
お袖　それはまア、可哀さうに。其お婆様の代りに、お前いとしぼがつて上けなさんせ。シテお前は、この近所でござんすか。
孫兵衛　アイ、この二三町先でござるが、こなさんは、この頃こゝへ越してござつた樣子でござるの。
お袖　妾も段々不仕合せな事がござんして、先月こゝへ參りましてこの樣に香花を賣つたり、すゝぎ洗濯。艱難な暮しをしてお恥かしうござんすわいなア。
孫兵衛　ナニ、それが恥かしうござらう。コレ、艱難の暮しと云へば、この子の母親めを聞いて下され。それはく甲斐々々しい生れ。まだ、なき若い身の上で、正月の薺から始めて、嫁菜、たんぽゝ、菠薐草、または枝豆、ゆで玉子、ありとあらゆる出商賣。その艱難の中で舅の私らをば、よう孝行にしてくれまするて。
お袖　それはまア、奇特なお方でござんすな。そんならこの子の親御の衆は、夫婦養子とやらでござりますかえ。
孫兵衛　イエく。倅めは、私がためには血をわけた。（ト干してある着物へ目をつけ、こなし。）
お袖　それでは、賴もしうござんせ

う。モシ、必ず心細う思はしやんすなえ。これいなア、父さんが、もう待つてぢやあらう程に、もう商ひやめて、爺さんと歸つて、なんぞ好いものを父さんに買うて貰はしやんせえ。

次郎吉　コレ、爺樣、父樣に好いもの買つて貰うて下されや〳〵。

（トこれを聞き、孫兵衛堪りかね、）

孫兵衛　南無阿彌陀佛〳〵〳〵。（ト花道の方へ行きかゝるを、）

お袖　もしいなア、お前もまア、なんぢややら心細いやうなこと。可哀さうにこの子も一緒に、連れてゆかしやんせいなア。

孫兵衛　アイ〳〵。ホンニ年寄ると、何かにつけて、涙もろうて。サア、次郎吉、爺と一緒に。これは大きに厄介になりました。

お袖　もしまた、寺まゐりのついでには、必ずお寄り下さりませえ。

孫兵衛　ほんになア、袖のふり合はせも他生の縁とやら。伜が死骸、あの樣に。

お袖　エ。

孫兵衛　もう洗濯もの、取入れさつしやれ〳〵。

（ト唄。入相の鐘になり、孫兵衛、次郎吉を連れて向うへ入る。お袖殘り、思入れあつて、）

お袖　ホンニ、あのお人も、年寄つて何ぢややら、いかう物案じのある樣子。とかく苦勞の娑婆世界。（思入れ。）待たぬ月日は早いもの。今日は義理ある父さん、許嫁の夫與茂七殿の百ケ日。同じ場所にて同じ日に、親や夫を非業の刄に失なふと云ふは、よく〳〵因果な妾が身の上。またその上に、枕こそ交さねど、今の權兵衛殿を夫に持ちしも、何とぞお二人の仇敵。（思入れ。）モシ堪忍して下さりませ。（思入れ。）アヽもう、日が暮れるに、庄七さんに頼まれた洗濯もの。（ト門口の盥を取つて來り、手桶に本水を入れ、）こりや斯うして置いて、あすの朝のこと。（ト棹にかけてある着物を探り、）この着物は、まだ少し乾かぬ。こりや、もそつと、かうして置いて、ドリヤ、お燈明を上げようかいなア。

（ト四ツ竹節の合方。木魚の音。こなしあつて、お袖、佛壇へ燈明をつけ、行燈をともす。此時分、上の柾垣の奧の蘭塔場へ、白張の提灯へ明をつけ立てる。この鳴物をかりて、向うより直助權兵衛、前の幕の形、川魚を漁る簗を三ツ四ツさげて出て來り、門口にて、）

直助　コレ、日が暮れかゝつたに、干物が取りこまずにあるわ。（思入れ。ト内へ入る。）何だ。この盥のなかにも、

洗濯ものがあるな。イヤ、大層に稼ぐな。それに引替へ、俺ア今日は、あぶれて了つた。

お袖　あぶれたとはえ。

直助　隠亡堀へ三ッ四ッ、土を伏せて置いたに、めそつこにもお目にかゝらねえ。

お袖　そのやうな事も、ようござんせう。もう、あんまり、物の命を取ることは、よして下さんせ。

直助　馬鹿なことを云ふぞ。鰻かきが殺生をやめては、腮を吊るして居なけりやアならない。コウ、腮を吊るすと云へば、米はどうした。

お袖　最前、持つて来たことは来たけれど、後までと、堅くいうてし往たぞえ。

直助　それ、見たことか。早速、お差しつかへだ。コウと、たつた一枚の褞袍は、大家がたて催促に飛んで了ふし。(ト思入れありて、)オッと、あるぞ〱。天道、人を殺さず。何時やらから云ふ物を拾つた。(ト叺煙草入の中より、前幕の櫛を出し、)コレ、お袖、この櫛は、いくら位、貸すであらう。

(トお袖何心なく、手に取つて思入れありて、)

お袖　モシ、この櫛は、どこで拾はしやんしたえ。

直助　二三日後に、猿子橋の下で、鰻かきへ引ッかゝつて上がつたが、手前見覺えでもある櫛か。

お袖　ある段かいなア。この櫛は、私が姉のお岩さんの、母さんの遺品ぢやというて、大抵や大方、祕藏なさんしたことぢやござんせぬ。ゆく〱は、妾へ讓つて下さんす約束。それがどうして川の中に。それにまた、不思議なは、あの庄七さんが、洗うてくれいと、頼ましやんしたこの着物。姉さんの、夏中着てゐやしやんした單衣に、寸分違はぬ。

直助　コレ〱、手前も馬鹿な事を云ふものだ。着物の模樣や櫛の形は、世間に同じものはいくらもあるわ。

お袖　イエ〱、着る物はともかくも、この櫛はかりは、それに違ひはござんせぬ。

直助　そんなら、それにして置いて、俺が工面が直つたら、請けて手前に還らうから、一寸これをまけて米屋の拂ひを。

お袖　イエ〱、どうぞそればかりは、堪忍して下さんせ。姉さんが大事にさしたその櫛、妾が見ては、どうもそのやうな事はならぬ。コリヤ、あした、お隣の小父さんなと頼んで、四ッ谷まで屆けねばならぬわいなア。

直助　コレサ、手前が貰ふ約束の櫛だといふではないか。そんならそのやうな、無駄ことをせずとも、直ぐに手前の物にして置くがよいではないか。

お袖　いえ〳〵、實の姉妹なら、その様な事しても大事ござんすまいが、義理のある姉さんの櫛。この儘にして置いては妾の心が。

直助　成程、手前も馬鹿律義な。その心いきだものを、今時の女には似合はねえ。死んだ亭主へ義理立つて、かうして居ても、夫婦と云ふは、ほんの名ばかり。これ、俺ア、毎晩變な心持だ。

お袖　エヽ、お前も、妾が願ひのかなふまでは、その約束ぢやござんせぬか。それを承知でありながら、又しても〳〵その様な事を。

直助　オット、あやまつた。のろいやつだが、どうなりと、御意次第。（ト思入れありて、）時に御新造様、私めは、甚だ空腹。どうぞ夕飯を一膳お願ひ申しやす。

お袖　ホヽヽ。何を戯言。ホンニ、まだ夕飯前でござんすか。そんなら、飯、持つて來て上げるほどに、必ずその櫛は、どこへも遣つて下さんすなえ。

直助　ハイ〳〵、畏りました。

お袖　エヽ、なんぢやぞいなア。ホヽホヽ。ドリヤ、夕飯の支度しようかいなア。

（ト合方一ツ鉦になり、お袖、こなしあつて、暖簾口へはひる。直助思入れあつて、）

直助　へヽヽヽ。姉の櫛であらうが、阿母の足袋であらうが、俺が手へ渡つては安穩で置くものか。こいつ、質に遣るより、いつそ大家の內儀さんをだまくらかして、ばッたりに、賣つてしまはうわえ。それにしても女といふものは、親の遺品だの妹に讓るのと、大事にするといふは、成程、罪の深いものだぞ。

（思入れ。ト櫛をひねり乍ら、門口へ出ようとする、一ツ鉦。誂への合方。薄ドロ〳〵になり、よき時分より、行燈、佛壇の明、明るくなり、又暗くなる事。此時、幽の着物の袖の中より、細き手を出し、直助の足を捕へる。直助、心得ぬ思入れにてこれを見、恟りして、持つたる櫛を取落す。これにて細き手は、幽のなかへ引ッ込む。ドロ〳〵止む。直助ほつと思入れあつて、）

直助　ハテナ。今のは確かに女の手だが、何しても、こいつは、稀有だわえ。

（ト合方。思入れ。此時、暖簾口より、お袖、日光膳の上に、粗末なる燗徳利、猪

口をのせ、飯櫃と一緒に持ち出て來り。)

お袖　サア、夕飯にしようぢやないかえ。

直助　もう膳を持つて來たのか。コレ酒の買つたのはあるか。

お袖　アイ、取つて置いたわいなア。

直助　そんなら熱く、燗をして來て下ッし。

お袖　モシ、それに如才があるものかいな。(ト德利を見せながら、お袖、そこに落ちてある櫛を見つけ、取上げ見て、)あれ程、姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやと云ふに、この樣に捨てゝ置かしやんして、ほんに男と云ふものは。モシこりや、私が預つて置くぞえ。

(ト直助思入れあつて、)

直助　何も、借取りにすると云ふではあるまいし、明日は直ぐに持たして遣るがよい。畢竟俺が鰻かきへ引ッかゝつたから、手前の手へも渡ると云ふもの。さうでないと、水の底で腐つて了ふ代物だ。コレ、うぢ／＼してゐるうち、米屋の野郎が來ると、うるさいわ。野暮を云はずと、貸して下ッし。

お袖　成程。思うて見れば、云はしやんす通り。お前が見つけたりやこそ、姉さんの仕合。その上、榮耀に使ふと云ふではなし、細い暮しの煙の代。姉さん、ちつとの中、貸して下さんせ。(思入れ。ト櫛を戴き、)サア、持つて行かしやんせ。

直助　そんなら聞きわけて貸してくれるか。

(ト盥は眞ン中。お袖、上の方、直助下の方より及び腰に櫛を受取る。矢張、右の合方、又、薄ドロ／＼、盥の中より、以前の女の細き手出て、直助が櫛を持つたる手首を握る。これを直助見て又びつくりして、)

直助　アレ／＼、又、細い手が。(トぞつとして、櫛を盥の中へ取落し、)エヽ、無氣味な。

お袖　何をお前は、その樣に仰山な。櫛はどうしたのぢやえ。

直助　櫛か。櫛は盥の中へ。アヽ、そんなら手前は、今のは見ないか。

お袖　そりや、何を。

直助　こいつはいよ／＼稀有だわえ。

(ト思入れ。)

お袖　お前もまア、何を云はしやんすやら。そして、櫛は盥の中へ落したと云はしやんしたな。(思入れ。)エヽ、もう、氣味の悪い。そんならお前、探がして見やしやんせ。

直助　いやな事。もう／＼、あの櫛へ掛り合うた事は御免だ。手前、よく探して見るがよい。

お袖　それぢやと云うて、ありもせぬものを。
(トまた〳〵あちこちを探し見る。やはり一ツ鉦、以前の合方にて、お袖、櫛を探すとて、盥の中の着物を振つて見て水を絞る。始めのうちは本水にて、薄ドロ〳〵になり、この絞る水、自然と血汐に變じ滴る仕掛け。直助これを見つけ、)

直助　エヽ、それ〳〵、着物は血だらけだわ〳〵。

お袖　エヽ。
(ト悔りして、絞りあげた着物を盥の中へ取落す。薄ドロ〳〵、一ツ鉦。このとたん、盥の中より鼠一匹、櫛を啣へて飛出す。)

直助　それ〳〵、鼠が櫛を。
(ト思入れ。この後を追ふ。鼠は櫛を佛壇へ上げ置き消ゆる。直助、櫛を取り上げ、)

直助　何にしても、今夜は變ちきな晩だぞ。コレ、その盥の中から鼠が櫛を啣へて飛出し、佛壇へ置いて行つたわ。

お袖　そんなら、アノその櫛を鼠が佛壇へ。

直助　コレ、この櫛は、俺ア嫌だ。手前さしてゐて、明日早く姉御に屆けるがよい。(ト直助、お袖の頭へ櫛をさす。)

お袖　エヽ、モシ、その樣な所へさしては。(ト思入れ。櫛を直さうとして、自分の手を見て、)エヽ、氣味の惡い。どうせうぞいな〳〵。

直助　今の血が付いたのだ。ドレ〳〵俺が洗つてやらう。(ト手桶の本水にて、お袖が手を洗ふ。)

お袖　モシ、早う、その盥を外へかたづけて置かしやんせ。

直助　オツト、合點だ。いや、飛んだ洗濯ものを賴まれたぞ。(ト門口の外へ出す。)

お袖　妾や、モウ、怖さも怖し、氣にもかゝる。ひよつと、まア、姉さんの身の上に。

直助　ハテ、物は氣にかけると、法圖がないものだ。必ず案じないがよい。

お袖　それもさうかいな。どれ、そんなら妾や、夜延仕事にかゝらうかいなア。(ト針箱を出し、河岸揚げの肩當をさしにかゝる。)

直助　アヽ、なんだ。木場の河岸揚げの肩當だな。そいつをさし溜めて賣るといふ仕末か。素敵に稼ぐやつサ。
(ト思入れ。四ツ竹、木魚の音になり、下座の門の中より、宅悅、頭巾を被り、足力の杖をかつぎ、前幕の按摩にて、笛を吹き出て、花道の方へ行きかゝる。直助聞きつけ、)

直助　オイ、按摩さん〳〵。

(ト呼ぶ。これにて、宅悦、とつて返し、門口へ來り、)

宅悦　お呼びなされましたか。

直助　オツト、こちらへ、入らつしやい。

宅悦　ハイ〳〵御免なされませ。(ト中へはひり、頭巾をぬぐ。)

直助　ア丶足力だな。こいつは奇妙だ。そして按摩さん。お前、見えるの。

宅悦　さやうでござりまする。(ト行燈の火に直助をつく〴〵と見て、)ヤ丶、こなさんは、何時やら淺草で逢つた、藥賣りの藤八殿ぢやアないか。

直助　道理で、聞いたやうな聲だと思つたが、その時の灸點屋だな。イヤ、こいつは飛んだ人を呼込んだ。

(トお袖　宅悦を見て、)

お袖　お前は宅悦さん、どうして此處へ。

宅悦　ヤア、お紋さんか。俺よりお前は、どうしてこ丶に。ハ丶ア、そんならとう〳〵、この人を亭主に持つたのか。イヤ、蓼喰ふ蟲も好き〴〵だぞ。

直助　これは御挨拶だ。(思入れ。)時にこなたは、まだ、淺草にゐるのか。

宅悦　ちつと、あの邊には居難いことがあつて、この頃まで四ッ谷町の方に行つてゐやした。

お袖　モシ、四ッ谷は、どの邊に居やしやんしたえ。

宅悦　水道町の近所さ。ナニ、やうやう一ト月ばかりしかゐませぬテ。

直助　御坊もとかく、尻が据らない樣子だなア。

お袖　あんまり色事を稼がしやんすからのことさ。

宅悦　ナニ、稼がせぬ癖に。イヤ、またお前となら、夜晝寢ずに稼ぎたいが。イヤ、このやうなことを云つて、七兩二分の施主になつちやならぬ。ハハ丶丶。時に、療治をなされまするか。

直助　折角、呼込んだものを、只も返されまい。ざつと、やらかして貰ひませう。

お袖　モシ、一服呑ましやんせ。(ト煙草吸ひつけて出す。)

宅悦　お前の吸ひつけ煙草も久し振りだ。こいつは仕合せが直りませうよ。(思入れ。)サア、致しませう。

直助　どうぞ、きつく頼みやす。

(ト四ツ竹、誂への合方になり、宅悦、捨白にて直助が肩を揉みにかゝる。お袖、矢張り繼ぎ物をしてゐる。)

宅悦　イヤ、モシ、いつぞや中田圃の騷動は、眞に珍事てふやうな事でござりました。一體あの一件は。(トいひかかるを、)

直助　ア丶、痒い／＼。コウ、按摩、思ふしな頭を搔いて貰ひたいね。
宅悦　それでもお前、まだ昨日あたり結つた頭を。二十八文の出入りだ。お紋さん、ちよつと櫛をお貸しなさい。
お袖　そんなら待ちなさんせ。ちよつと黄楊の櫛を取つて來て。
宅悦　モシ／＼、お前の頭に、それほど差してゐるではないか。
お袖　デモ、この櫛で頭を搔いては堪らぬわいな。（ト奥へ行かうとするを、宅悦、櫛を無理にとつて、）
宅悦　此櫛はどうか見た樣な櫛だが。（ト思入れ。）さうだ／＼。イヤ、この櫛について、とんだ話がありますよ。
お袖　エ、この櫛について話があるとは、そりやどの樣な。
宅悦　その櫛は、お前、どこから買つて差して居なさるか知らないが、そりや山の手の四ツ谷町で、民谷伊右衛門と云ふ浪人の女房、お岩どのといふ女の、差してゐた櫛であつたが。
直助　コレ、こなたは、詳しい事を知つてゐるの。
宅悦　知らないではサ、あの邊は療治場でござりましたテ。
お袖　そして、モシ、そのお岩さんと云ふ女中は、どうぞしやさんしたかえ。
宅悦　どうした段か。イヤ、大騷動でござりやした。
お袖　エ丶、そりやまア、どうした譯で。
宅悦　モシ、世の中に怖いものと云ふは、嫉妬深い女と、人斬り庖丁を差してゐるお侍サ。その民谷伊右衛門と云ふ侍の女房お岩と云ふ女は、元が嫉妬から起つて、亭主に殺されやした。
お袖　エ丶。
直助　お袖、そりやまア大變だぜ。
宅悦　ハ丶ア、そんならお前方、由縁でもござるかね。
直助　由縁どころか、お岩と云ふは、お袖が姉だよ。
宅悦　エ丶。（ト思入れ。お袖、宅悦を捉へ、）
お袖　モシ、そりや、まア眞でござんすか。眞ンの事かいなア／＼。
宅悦　サア、眞ンの事は眞ンの事だが、私は又、そんな緣引きのある事は知らず、つい、うか／＼と飛んだ話をし出して。
お袖　イエ／＼、よういうて聞かして下さんした。して、まア姉さんには、何の科あつてそのやうに。
宅悦　サ、私もその一件に係りあつて。（思入れ。）イヤ／＼、係り合つたと云ふ譯でない故、詳しい譯は知らない

が、早く云ふと、その亭主の伊右衛門殿が、女房に飽きが來て、他の女を足にしようとしたのを、少し燒きかけたから起つた騷動だと云ふ話だ。それからその伊右衛門殿と云ふ人は、氣が違つたか、やけになつたか、その他に二三人を殺して、影を隱したが、いやもう、思出すとゾッとするほど、怖しいことが。(思入れ。)イヤ又、その筈の事かえ。さして科もないお岩殿を、それは〳〵むごい殺し樣。(思入れ。)イヤ〳〵、この話は止めませう。何だか目先きへ死骸がちらつくやうだ。何しても、その民谷伊右衛門殿と云ふ男は、劇惡な侍さ。

(ト思入れ。直助こなし。お袖思入れあつて、)

お袖　チエ、、いかに夫の高下ぢやというて、科もない姉さんを、その樣に酷たらしう殺すと云ふことが。妾が爲には義理ある姉さんの敵、その伊右衛門殿の在所をいうて聞かせて下さんせ。モシ、教へて下さんせ〳〵。(ト宅悦をこづき廻す。)

宅悦　コレサ〳〵、どうして私がそれを知るものか。コリヤマア、ひよんな話をし出して。

お袖　イエ〳〵、何ぼでも、お前から詳しく聞かねばならぬ。ナ、姉さんをどのやうに酷う殺したのぢや。サ、もつといふて聞かせて。

宅悦　イエサ、私ア、そんなに詳しくは。

(ト持餘ましたるこなしにて、段々、門口の方へ出る。お袖、擁ひ、)

お袖　サア、その伊右衛門殿の在所を。

宅悦　これは又迷惑な。あり樣は、私も人の話で聞いたが、何にしてもお力落しでござりやす。(思入れ。)私は、お暇申しますテ。

お袖　イエ〳〵、もつと聞きたい事がござんす。どうぞいうて聞かせて。

(ト、宅悦の袖を捉へる。)

宅悦　これはしたり、私は今夜、大事の出入り場の御隱居を療治せねばならぬ。マア、こゝを。

お袖　イエ〳〵、詳しく聞かぬそのうちは、なんぼでも放すことは。

直助　コレ、お袖、可哀さうに、歸してやるがよい。大抵譯は解つてゐるわ。

宅悦　左樣さ。いくら喋つてもこんなものさ。ヤレ〳〵、氣の毒な。(ト花道の方へこそ〳〵と行く。)

直助　コレ〳〵、療治代を持つて行かないか。

宅悦　成程、肝腎なものを。(ト歸りさうにして、)イヤ、こゝが按摩の辛抱ど

ころぢや。

直助　コレサ〳〵、足力の杖もあるよ。

宅悦　それも按摩の辛抱どころぢや。

直助　コレサ、道具が無くつては、商賣が出來まいが。

宅悦　それも按摩の辛抱どころだ。

（ト四ツ竹に木魚入りの合方になり、宅悦は足早に向うへ入る。直助、思入れありて、）

直助　コレ、お袖、俺も始めて聞いたが、さて〳〵飛んだ事になつたな。

（ト思入れ。お袖途方にくれし思入れありて、）

お袖　思ひがけない姉さんの、刄にかかつて果敢ない御最期。さういふこととは露知らず、明日はこれなる櫛に添へ、文に細々便りをと、思うてゐたのに今の噂。父さんと云ひ姉さんまで、非業にお果てなさんすと云ふは、モシ、妾や、どうせうぞいな、どうせうぞいな。

（ト泣き伏す。直助こなしあつて、）

直助　かう云ふ噂を聞く端か、種々樣樣な稀有なこと。コレ、その櫛も俺が拾つて來て、思はずおぬしが手へ渡るも、死んだ姉御が一念の。

お袖　私に屆けて下さんしたのか。それほどまでに妹を、思うて下さんす遺品のこの櫛、今は仇なる姉聟の。

直助　その伊右衛門も武士の浪人、舅、左門殿の仇讐、討たねばならぬ身を以て、却つてその身が敵となれば、これ親の敵、姉の仇。討つべき者は其方一人。何を云ふにも、か弱い女。エヽコレ、この直助も繋がる緣もあるなれば、ナニ、安穩に敵をば。左門殿も草葉の蔭で、口惜しからう、無念であらう。（ト宜しく、こなし。）

お袖　いかに甲斐ない女子ぢやとて、ナニ、安穩に仇讐を。（ト思入れ。）

直助　そんなら其方は、親左門、姉のお岩に、夫の與茂七、その三人の敵をば、美事、女の手一つで。その仇討覺束ない。俺も以前は武士奉公。二人や三人、相手にも、しかねぬ手節は持ちながら、赤の他人でゐる時は、醉狂らしく助太刀も。エヽ、コレ、腕がムヅ〳〵するなア。

（ト思入れ。合方、變つて、お袖、思入れあつて、燗德利と猪口を持ち出て來り、直助が側へ寄り、手酌にて一口飲んで、直助の前へ置き、）

お袖　サ、一ッ飲んで下さんせ。

直助　これは御馳走。そんなら一つ注いで貰はう。

（トお袖酌をして、直助、一杯引ツかけ、こなしあつて、）

直助　成程、女の狹い心では、ノ酒でも飲まずば立ちきれまい。話を聞いては この胸が、いはば他人の俺でさへ。

お袖　イエ〳〵、お前を他人にせまい爲、女の方から獻した盃。

直助　ヤ。

お袖　モシ、もう祝言は濟んだぞえ。

（ト思入れ。直助、こなし。）

親と夫の百ヶ日、今日が過ぎれば今宵から、約束通りお前と女夫に。

直助　そんならおぬしは、帶紐解いて。

お袖　アイ。（ト思入れ。）

直助　イヤ、そりや惡からう。俺もおぬしにあり樣は、のろけ切つた心から、女房になつたら力にならうと、約束はしたものゝ、よく〳〵思つて見る時は、草葉の蔭の與茂七へ、それでは其方の。

お袖　操を破つて操を立てる、妾が心。（思入れ。）モシ、その樣な事は捨てゝおいて。（トお袖、又手酌にて、ぐツと飲んで。）お前も、もう一ツ、飲ましやんせぬかえ。

直助　酒ならいくらでも、お辭儀なしサ。

（ト、お袖酌をして、直助飲みかける。）

お袖　酒はお辭儀は無しだと云はしやんすが、そして女子はえ。

直助　イヤ、女と云ふものは怖いものよ。

お袖　それで、お辭儀をしやしやんすのかえ。

直助　マア、ざつとそんなものさ。

お袖　そんなら妾ァ、もう一ッ飲まうわいな。（ト手酌にて飲む。）

直助　イヤ、こいつは素的。今夜は大分出來がよい。

お袖　妾やもう、氣が揉めてならぬによつて。（ト直助にしなだれるこなし。）

直助　成程、氣が揉めるも無理はない。たつた一人の姉貴が、ひよんな。

お袖　サ、それぢやによつて、どうぞ力に。

直助　そんなら、いよ〳〵直助と、夫婦になつたその上で。

お袖　一人ならず、二人三人、討たねばならぬ讐敵。

直助　助太刀しよう。

お袖　エ。

直助　討つてやらうわ。

お袖　エ、すりやアノ眞に。

直助　女房になるか。

お袖　必ず見捨てゝ、下さんすなえ。

直助　とう〳〵首尾よく。

お袖　エ。

直助　ア、、素的に醉つた。（ト脇の方へ向き舌を出して、につこり思入れ。）

お袖　そんならもう、　ようぢやござんせぬかえ。
直助　有難い　いそぎ。さア／＼　よう。（トこなし。）
お袖　アレ急しない。今　　　わいなア。
（ト押入より　　　を出し、よきところへ　。直助、二重より古き六枚屏風を持來り、　元へ立て、門口を閉め、思入れありて、）
直助　サア、婦ア、　ないか。
お袖　妾ア、もつと夜延をしようわいなア。
直助　そんなら勝手にするがよい。俺もあり樣は、赤の他人が勝手だ。
お袖　エヽ、モウ。　事は　るけれどな。
（ト思入れありて、佛壇へ手を合はして拜む事。直助見て、）
直助　コレ、今に敵を討たして遣るわ。
（トお袖が手をとり、こなし。唄になり、お袖思入れあつて、直助に手をひかれ、の上へあがり、屏風引廻し。此唄をかり、向うより與茂七、一腰差し、前幕の鰻かきを持ち出て來り、花道にて思入れあつて、）
與茂七　いつぞや、計らず大切なる、廻文狀を失ひし、その折手に入るこの品に、ありありと名前の彫りつけし、權兵衛といふ者こそ、法乘院の門前にて、香花商ふ家なりと、聞出だせしが詮議の手がかり、主にあうて廻文の、有無をたゞしたその上にて、すべに依つたら蟻の穴、包む大事にァ替へられぬ。不便ながらも。（トこなしあつて、）何はともあれ、この持主に會うた上。アヽ、さうぢや。
（ト思入れあつて、舞臺の方へ來かゝる。薄ドロ／＼になり、門口に干してある小平が着物の裾に、陰火燃えて、誂への蛇まとふ。與茂七、これに目をつけ、）
ヤヽ、陰火と共に蛇の、あれなる衣類につき纒ふは。ムヽ、非業の最期に世を去りし、まさしく死靈の。
（ト思入れあつて、ツカ／＼と舞臺に來る。ドロ／＼打上げ、陰火ともに消ゆる。與茂七、こなしあつて、）
さても、不思議な。ハテ、なア。（ト思入れあつて、門口をたゝく。）モシ／＼、お賴み申します。お賴み申します。
（トこの聲に直助おきかへつて、屏風をあけ。）
直助　オイ、誰だ／＼。
與茂七　どうぞ、線香を一把賣つて下さい。
直助　アヽ、お氣の毒だが、線香は切れ物でござりやす。

與茂七　そんなら、こゝにある樒を賣つて下さりませ。
直助　樒かえ。それァ滅法に高い。一本で百よりや廉くはまからない。そして、それは、賣れてある花だ。外へ行つて買はッしやるがよい。(ト屛風を引いて寢る。)
與茂七　まだ日が暮れて、間もないに、怪しからず早く寢たわえ。アヽ、コレどうぞ。(ト思入れあつて、)モシ〳〵、外に干してある洗濯物を、盜人が持つて行きます。アレ〳〵、盜人が洗濯物を持つて行くわ〳〵。
(トこなしにていふ。直助とつかはと起きて、三尺帶をしめながら、門口をあけ、)
直助　さつぱり、忘れて寢て了つた。お前、よく氣をつけて下さりやした。
(ト洗濯物を持つて、中に入らうとして、ふと、與茂七を見て、)こなたは、たしか。(ト思入れあつて、)ヤヽヽ。幽靈だ〳〵。(トとつかはと内へ入つて、門の戸をおさへてゐる。)
與茂七　ナニ、幽靈が。何處に〳〵。(トウロ〳〵する。)
直助　コレサ、幽靈が來た〳〵。
(この聲にお袖、起きて來り、直助へすがり。)
お袖　エヽ、氣味の惡い。どこにアノ幽靈が居るぞいなア。
直助　門口に立つてゐるわ〳〵。コレ〳〵。手前、幽靈除けは持たねえか〳〵。
お袖　妾や、その樣な藥は持たぬわいな。藤八五文は、幽靈には效かぬかいなア。
直助　コレ、近所の衆、幽靈が出た。來て下さい〳〵。(ト無性に騷ぐ。)
與茂七　無性に、幽靈々々といふが、俺が目には、さッぱり見えない。コレ、幽靈どん〳〵、どこにゐるのだ〳〵。
直助　エヽ、幽靈たけ〴〵しいとはこなたのことだ。
與茂七　ナニ、わしが幽靈だ。それァ人違ひだ。私ァ、そんな者ではない。まアこゝを明けて下さりませ。
直助　イヤ〳〵、滅多に明けることはならない。幽靈に近附は無いぞ〳〵。
與茂七　これはしたり、ちよつと、お目にかゝりたい事がござりやす。門の戸を明けて貰ひませう。
(トこの聲を聞き、お袖こなしあつて、)
お袖　モシ、今、物いはしやんしたは、以前の夫與茂七殿に、よう似た物腰。
直助　サ、それだによつて幽靈だと云ふのだ。
與茂七　モシ、幽靈か幽靈でないか、お目にかゝれば解ります。マア〳〵、こ

こを明けて、正體を見さつしやい。
(トこれにてお袖、直助をかきのけ、門口をあけて、與茂七を見て、)

お袖　ヤヽヽヽ、お前は眞ンの與茂七さんぢや〳〵。

(ト與茂七お袖を見て、)

與茂七　お袖か。コレ、おぬしが在所を探したが、變つたところで、ハテ面妖な。

お袖　エヽヽ、私よりお前が面妖な。そんならきつと、幽靈ぢやござんせぬな。さア〳〵此方へ、入りなさんせ。(ト與茂七を中へ入れる。種々こなしあつて、)眞ンに幽靈ぢやない。正眞正銘、寸分違はぬ與茂七さんぢや〳〵。(思入れ。)モシ、妾やお前が人手にかゝつて、死なしやんしたと思うたゆゑ。(ト直助の方を見てこなしあつて、)よう、まア達者でゐて下さんしたなア。

(ト思入れ。直助こなしあつて、)

直助　そんなら、いつぞや中田圃で、ばつさりやつたと思つたは。

與茂七　ヤ。

直助　いつも達者で、お芽出度うござりやす。

(ト與茂七、直助を、よく〳〵見て、)

與茂七　たしか、こなたは淺草で、見知り越しの藥賣。たしかその名も直助殿。ハテ、變つたところに。(ト思入れ。)コレ、お袖、こゝは、手前の內か。

お袖　アイ、まア、そのやうなものぢやわいなア。

與茂七　シテ、この人は、なんで今時分來てゐるのだ。

お袖　サア、あの人はな。(ト思入れあつて、そこにある宅悦が置いて行きし、足力の杖を取つて、)オヽ、それ〳〵、按摩ぢやわいな〳〵。

直助　ナニ、おれを按摩だと。

お袖　按摩ぢや〳〵。モシ、按摩さんになつてな。(思入れ。)按摩さんぢや〳〵、按摩さんぢやわいなア。

與茂七　ハヽア、藥賣が按摩と化けたか。

直助　さうさ、藥賣が按摩に化けるは、滿更緣がないでもないが、以前は赤穗の御家中も、小間物屋や袖乞と。

與茂七　どうしましたとえ。

直助　世の中といふものは、樣々なものさ。

與茂七　ハテ、思ひがけない女房の內へ、尋ね當つて、おれも安堵。その上、按摩まで呼んで置いてくれるといふは、ハテ氣のついた。(思入れ。)コレ、按摩さん、一つ療治やつて貰はうか。

直助　そんなら、とう〳〵按摩にするのか。

お袖　サア、按摩さんぢやによつて、

療治して上げなんせ。

直助　イヤ、按摩とは、あんまり、酷い。

與茂七　サア、揉んで下さい。

直助　私ア、足力療治で、無性やたらに踏みつけるが、それが承知なら、療治さつしやるがよい。

與茂七　その荒療治が、此方の望み。しかし、足力の道具は、私が貸して遣りませう。

直助　コリヤ珍らしい。そんなら道具を御持參で。

與茂七　私が持參の足力の、杖は即ちこの品だ。

（ト變つた合方になり、持ち來りし前幕の鰻かきを出す。直助、見て思入れ。）

直助　ヤ、こりやこれ、何時やら穴は鳥、隱亡堀で失ふた。

與茂七　そんなら、それは、こなさんの。

直助　商賣道具さ。

與茂七　その柄に、しつかり權兵衛と、あり〱彫り付けあるからは、そんならこなたの今の名は。

直助　以前は直助、中頃は、藤八五文の藥賣。今は深川三角屋敷、寺門前の借家住み。見世で商ふ代物は、三文花に線香の、煙も細き小商人。後生の種は賣りながら、片手仕事に殺生の、簗を伏せたり砂村の、隱亡堀で鰻掻き。ぬらりくらりと世を渡る、今のその名は權兵衛といふ、金箔の附いた貧乏人さ。

與茂七　そんならこなたは、この家の御亭主。シテ、お袖は、何故こゝに。

直助　この女かえ。これアわしが女房さ。

與茂七　ヤ。

お袖　ア、モシ、それを云うては。

直助　いゝわえ。以前の亭主に在所を知られ、いつが何時までその樣に、しらを切つても居られまい。與茂七殿とやら、この女は、私が嬶アさ。

與茂七　そりやハヤ。一旦、この與茂七と、夫婦別れをした女の、再縁するも往々あるならひ。しかしいまだに去狀は、渡さぬからは妻女のお袖。誰が許して再縁したのだ。

お袖　サア、さういはしやんすも、皆尤もの。譯を話せば長いこと、父さん始め、お前まで、人手にかゝつて。

直助　ヤイ〱、今となつては百萬だら、言譯するほど罪が深い。所詮穢れたおぬしの體、根性を据ゑて、俺の見る前、先の亭主と別れてしまへ。又、こなさんも薄のろく、心の腐つた女のあとを、追はへて歩くも恥の上塗り。未練を云はずとこの女は、私に下さい。

貰ひましたよ。

（ト思入れ。與茂七こなしあつて、）

與茂七　成程、こなたも横車、押し手も強くすつかりと、女房に呉れろとは、よくも云はれた。その大丈夫な氣性に免じ、長熨斗つけてこの女、進上しまいものでもないが、只は遣られぬ。望みがある。

直助　望みと云ふは、古風なお仕着せ、大概知れた紋切形、女の手切れは金と轉んで。

與茂七　いゝや、卑劣な。何しに金子を。

直助　ムヽ、して又、何をこなさんは。

與茂七　望みと云ふは、金でない。場所は、砂村六ば島、隱亡堀の闇の夜に、鳴かぬ烏のいどみ合ひ。その時、思はず失ひし、小間物仲間の符牒の書きつけ。拾つた人は、こなさんと、知つたはこれなる道具から。女房とその品替へ〳〵に。

直助　變つた物と女の引替へ。しかし、此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、その連名も四五十人、徒黨を集める廻状と、この權兵衛は睨んで置いた。

お袖　その書物なら淺草で、妾も一寸見たわいなア。

與茂七　ア、これ。（思入れ。）そんなら、いよ〳〵こなさんは。

直助　拾うて持つてゐるならば、握つてゐても益ない反古。返してやりたいものなれど、拾はぬものは是非がない。外を探すが、まア、近道でござりませう。

（ト思入れ。與茂七こなし。）

與茂七　成程、こなたも、なか〳〵以て一筋繩ではほぐれぬ氣性。かばひ立てする時は、見す〳〵間男密夫の權兵衛。以前の身たしに、て敵討ち、又、町人ならば、すべにより、耳鼻剝ぐか金銀を、ゆすつて取るも往々ある習ひ。その兩樣にかゝはらず、只管望むは、その書物。渡さぬ中は、外へは決して。この家の中に石かつて。

お袖　そんならお前は、この家の中に。

與茂七　片のつくまで、掛り人。

直助　腮をつるすのが承知なら、それア、こなたの勝手次第さ。

與茂七　一人の女房に、二人の男。

直助　ハテナ、どちらへ札は落ちるであらう。

與茂七　それア此方が先なれば。

お袖　蔓一筋に妾が心で。

直助　二人へ立てる心中を。

與茂七　見たいは、たしか懐中に。

（ト、寄るを、お袖、隔てゝ、）

お袖　モシ、只、何事も妾が胸に。

直助　上から見えぬ人心。
與茂七　鏡にうつるものならば。
お袖　さぞ恥かしい。
直助　昔の御亭主。
お袖　モシ。（ト思入れ。）
與茂七　今宵は、さぞかし。
直助　ヤ。
與茂七　おやかましうござりませう。
（トよろしくこなし。唄引き流し、與茂七お袖、奥へ入る。直助殘りこなしあって、）
直助　ハテ、面妖な。いつぞや、淺草中田圃で、殺らしてのけたと思つた與茂七、生きてゐるのも不思議の一つ。そんなら、あの時殺したは、何奴であつたか、よく／＼運の盡きた奴。それは兎もあれ、彼奴が欲しがる廻文狀。この書物を、師直樣の屋敷に持出し、恩賞受けたその上で、厄病神で戀の敵の、與茂七めを。（ト思入れあって、）イヤ／＼、それよりいつそ手短かに、この家のうちでぐつさりと。
（ト思入れあつて、そこにある出刄をとつて、奥へ行かうとする。よき時分よりお袖出掛り居て、）
お袖　マア／＼、待たしやんせ。こちの人。
直助　そんなら、われァ、今の樣子を。
お袖　モシ、與茂七殿も以前は武士。もしもお前に怪我あつては、誰を力に親姉の。
直助　ハヽヽヽ。お爲ごかしに、あやなして、以前の男の與茂七を、庇ひ立てする言葉の端々。
お袖　エヽ、モ、男の癖に廻り氣な。一旦お前に大事を頼み、枕交した上からは、金輪奈落、お前と女夫に。モシ與茂七を殺す手引きは。なァ。
（直助に、さゝやく。直助、呑込み、）
直助　そんなら其方が與茂七を、酒に醉はしてこの所へ。
お袖　屛風を引いて、寢入り端。
直助　合圖は、おぬしが行燈の。
お袖　明を消す折、忍びより。
直助　あの與茂七を、たつた一突き。
お袖　モシ。（ト思入れ。）
直助　必ず合圖を。
お袖　違へぬやうに。
直助　合點だ。
（トうなづき、合方、時の鐘になり、直助科あつて、下座の中へはひる。お袖、思入れ。與茂七思入れ。奥から窺ひ出て、）
與茂七　お袖、主の權兵衛いづくへ遣つた。
お袖　たしか、のがれぬ用事とやらで。
與茂七　他行なしたか。それぞ幸ひ、歸りを待受け。
（トつか／＼と門口の方へ行くを、お袖と

めて。)

お袖　モシ、待たしやんせ。あの直助も、以前は武士、殊に常から剛氣者。大事を抱へしお前の身に、若しもの過ちある時は、故主へ不忠になりませうがな。

與茂七　その心配もさる事ながら、今も奥にていふ通り、一味の廻文、彼奴に拾はれ、大事を知られし上からは、所詮生けては置かれぬ奴。

お袖　さう思はしやんすなら、仕樣模樣は。(思入れ。)ナ、モシ。(ト囁く。)

與茂七　ム、、すりや、いよ／＼其方が手引きして。

お袖　妾が親も、鹽谷の御家來なりや、妾がためにも、やつぱり御主人。お爲にならぬ直助殿、殺す手引きも御奉公。

與茂七　出かした、お袖。シテ又、合圖は。

お袖　寝酒すゝめに正體なき、折を窺ひ行燈の。

與茂七　明を消すを合圖に定め。

お袖　枕に立てし屏風越し。

與茂七　あの直助めを、たつた一討ち。

お袖　モシ。(トこなし。)

與茂七　コレ、必ずともに。

お袖　怪我せぬやうに。

與茂七　承知致した。

(ト兩人宜しくこなし。時の鐘、合方になり、此見得宜しく、道具、廻る。)

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う見壁。眞ン中、暖簾口。上の方、折廻し、一間の反古張りの障子屋臺。下の方、誂への黒板塀。門口。下座の口、同じく誂への。

(此處に、お熊前幕の姿にて蜆籠より錢を出しかぞへてゐる。孫兵衛、次郎吉をかばうて捨白、合方、禪の勤めにて、道具納る。)

お熊　コレ、この態アなんだ。今日一日擔いで歩いて、賣溜はこればかりか。うぬ、大方、錢をくすねたのだらう。サア、こゝへ出せ。

孫兵衛　コレ、婆ア殿、可哀さうに、子どもをその樣に叱らぬものぢや。シテ賣溜の錢は、何ほある。

お熊　エ、、見さつしやい。こればかりだわな。

(トそこへ、百三十の、つるべ錢を抛り出す。孫兵衛見て。)

孫兵衛　ハテ、五ツか六ツかの子供の商ひ、それ程あれば、よいではないか。コレ坊や、泣くなよ／＼。よく稼いだ。坊は、よい子ぢやぞ。

お熊　エ、、こなさんが、その樣に甘やかすによつて、とかく商ひに出して

も、錢をくすねて、買喰ひばかりしやアがる。サア、錢をどこへ隠して置く。出さねえか、この餓鬼は。出しやアがらないのか。(トつねる。)

次郎吉　どこへも隠しはしませぬ。婆様、堪忍して〳〵。(ト泣く。)

孫兵衛　これはしたり、可哀さうに。どうしたものだ。

お熊　こんたは、そんな結構人だによつて、世間で佛孫兵衛と云ひますわ。その子も同じ代物ゆゑ、小佛小平。私は身腹痛めぬ子のせいかして、一倍、間抜けに思はれます。そいつがこしらへた餓鬼だによつて、薄馬鹿の筋を引かぬやうに　根性をたゝき直さにやならぬ。エヽ、退かつしやい〳〵。

孫兵衛　ヤイ、おのれは、年端もゆかぬものを、常住三界、撲ち打擲。モウモウ、手荒な事は俺がさゝぬ。手筋かけると、聞くことぢやないぞ。

お熊　こなさんが庇ふだけ、猶、腹が立つ。うぬ、どうしてくれう。エヽ、小面の憎い餓鬼だ。(ト蜆籠を持つて立ちかゝる。)

孫兵衛　この鬼婆アめ、何をし居るのぢや。

お熊　何を、この提灯爺めが。

孫兵衛　おのれ、何と吐かし居る。

お熊　うぬ、餓鬼め、どうするか見やアがれ。

(ト笊をもつて撲ツてかゝる。孫兵衛お熊へ掴みかゝる。かすめたる禪の勤め、佃の合方、時の鐘になり、向うより、小平女房お花、世話女房の拵へ、手拭かぶり、前垂かけ、裾を高からげにて、ゆで玉子を賣る籠を提げ出來り、直ぐに内へ入り。)

お花　ハイ、今、歸りました。(トこの熊を見て、とつかはこの中へ入り。)コリヤ、何事でござりまする。マア〳〵、御料簡なされませ。(ト捨白にて、双方をなだめる。)

孫兵衛　お花や、聞きやれ。この婆が、又坊主めを窘めをるわいの。

お熊　コレ、其方のへり出したこの餓鬼、平常、私が可愛がつてやれば、よい事にして。

孫兵衛　ヤイ〳〵、うぬ、この坊主めをいつ可愛がつた。大福餅一つ、買うてやつたことはあるまい。

お花　ハテ、もう、ようござります。マア〳〵御料簡なされませ。コレ、次郎吉、何を其方は婆様の機嫌を背いたのぢや。

孫兵衛　また賣溜が、多いの少ないのというて、いぢめをるわいの。

お熊　コレ、老爺どの、何も商賣ぢやもの、賣溜の事云はいでかいの。こ

ればつかりは、憎まれても云はにァなりませぬ。コレ、お花。今夜、何ほど程商ひしやつた。

お花　ハイ、まだ、勘定は致しませぬが、ちよつと御覽じて下さりませ。

（ト、玉子の籠をお熊の前へ遣る。お熊、中を見て、）

お熊　こりや、まだ、賣切らずに持つて來やつたの。

お花　ハイ、三つ、あまりました。

孫兵衞　オヽ、よう賣りやつたの。サヽ、空腹からう。茶漬でも喰うたがよい。コレ、賣溜は、さぞ澤山あらうな。

（ト此中、お熊、籠の中の錢を見て、）

お熊　アイ。大方、四百五十か、五百ばかりもござりませうよ。

孫兵衞　ヤア、そりや大枚な商ひぢや。それで其方も機嫌が直つたであらう。オヽ、大儀であつたく。

お熊　また、この位商ひせねば、水も飲まれるものではない。何處の牛の骨か、馬の頭が知れもせぬ病人を內へ引きずり込んで、大抵物が要る事ではない。コレ、お花、とても事に、何故皆な賣つてごんせぬのぢや。

お花　ハイ、そりやお前の、明日の朝の茶うけにあけうと思ひまして。

お熊　ホヽヽ。そりやよう氣がついた。妾や玉子食うても、爺どのはあの樣なり、當てがござらぬ。イヤ馬鹿馬鹿しい。

お花　左樣なら、父樣に上げませうわいなア。

お熊　ナニ、玉子食うたとて、提燈がお役にたつものか。費な事ぢや。コレ、次郎吉、阿母が、野良かわいて賣り殘した玉子、疾う賣つて來い。

孫兵衞　可哀さうに、今日一日、蜆擔いで歩いて草臥れたであらう。もう料簡してやりやいの。

お熊　イエく、あのやうな病人の掛人がゐるもの。うつかりしてゐると、生きながら餓鬼道へ落ちにァならぬ。サア、よい子ぢや。ちやつと賣つて來やく。（ト猫撫聲を出して、次郎吉に玉子の籠を持たせ、二人に見えぬやうに次郎吉を抓る。）

次郎吉　アレ、痛いわいのく。

孫兵衞　オヽ、どうしやつたく。

次郎吉　婆樣が私をつめつて。

お花　エヽ、この子は、よう嘘を。あれ程平常いとしがつてゐやしやんすもの。ナニ、婆樣がその樣なこと。賣つて來やいの。

次郎吉　アイく。（ト泣きながら門口へ出る。）

孫兵衞　エヽうぬ、邪慳な。

お花　ア、モシ。さア、怪我せぬやう
に賣つて來やいの。
（ト思入れ。次郎吉、籠をさげながら、）
次郎吉　玉子〳〵、ゆで玉子〳〵。
（ト合方、時の鐘にて、呼びながら、向うへ
入る。）
お熊　成程、瓜の木に茄子のたとへ。
其方の亭主おやが、あの小平が、意氣
地のない所に、よう似てゐるわいの。
私が生んだ子を讃めるぢやないが、ソ
リヤ　こなさん達に見せたい。歷ツき
とした侍。それも、今は浪人して。（思
入れ。）ほんに浪人といへば、腰拔の病
人殿は、まだごねさうもないが、あれ
がほんの穀潰し。（ト上の方の障子の中へ
思入れあつて、）ドリヤ、賣溜の勘定で
もせうか。
（ト合方にて、お熊、籠の蓋へあけたる錢
を持ち、奥へ入る。孫兵衛、お花、顏見
合せて、思入れあつて、）
孫兵衛　成程、あの婆も、年寄るほど根
性が惡うなる。私も年寄つて、退きの
去りするも外聞が惡さに、捨てゝ置け
ば、よい事にして附け上り居る。コレ、
お花や、わが身も、さぞ、うとましか
らうが、マヽ辛抱してくりやれ。又、
仕樣もあるぢやあろ。
お花　エヽ、勿體ない。母樣は、甲斐
〳〵しいお生れゆゑ、妾どもや、連合
の致すことは、お氣に入らぬも尤もで
ござります。それはさうと、こちの人が
留守の中も、くれ〴〵氣をつけて進ぜ
ろと、いうて置かしやんした御病人樣。
今日は少しは、お心ようござんすかえ。
孫兵衛　今、スヤ〳〵と、寢てござつた
が、どうも捗らぬ御病氣。彼方へ對し
てもあの婆めが邪慳ゆゑ、わしや氣の
毒で。（思入れ。）ほんに、藥あけてもよ
い時分であらうぞや。
お花　ハイ〳〵、溫めてあげませう。
（トとつかはと立つて、七輪へ、土瓶をか
け煽いでゐる。）
又之丞　（障子屋臺にて、）お花は歸りやつ
たか。孫兵衛や〳〵。
（ト合方。）
孫兵衛　ハイ〳〵、若旦那、お目が覺め
ましたか。
（ト合方になり、上屋臺の障子をあける。
こゝに小汐田又之丞、病ひ鉢卷、搔卷に
凭りかゝり、木綿布子を肩に引ツかけ、
病みほうけし態。）
又之丞　今宵は、大分寒氣が强いが、雪
でもちらつきは致さぬのか。
孫兵衛　イエ〳〵、雪は降りませぬが、
この寒さでは、御病氣に障りませうか
と、大きにお案じ申しまするテ。
（トお花、茶碗へ藥を入れ、持來り、）

お花　ハイ、お薬をお上りなされませ。
（ト又之丞、薬を飲みながら、）
又之丞　お花、小平はまだ歸らぬか。
お花　もう、かれこれ三月餘りにもなりまする故、お暇を願つて、歸る時分でござりまするが。
又之丞　イヤ、大方今宵は歸るであらう。
孫兵衞　エ。
又之丞　お花、其方、さぞ待遠であらうな。
お花　ホヽヽ。あなた、何を戯言ばかり。
（ト思入れ。孫兵衞、小聲にて念佛を唱へることなし。）
又之丞　夫小平は、雇ひ奉公。妻の其方は、女の身として夜商ひ。その艱難の暮しの中へ、かやうに永々の病氣にての掛人。それを、うたてくも思はず、よう世話をしておくりやる親切。コレ、寢た間も、忘却は致さぬぢや。忝い〳〵。（ト思入れ。）
孫兵衞　何の、そのお禮に及びませう。この老爺めは、お前の御親父樣のお草履摑み。又、伜の小平めは、お前の御家來。お屋敷の騒動から、御家老由良之助樣始め、御家中も散々ばら〳〵。畢竟私風情を、御家來と思召せばこそ、便り寄つてお出でなされた若旦那。粗末に致すと罰が當ります。又、艱難の中と云はしやりまするが、この老爺は、すんと工面がようござりまするぢや。併し、金が内に有る振りを致すと、人が貸せ〳〵というてうるさし、第一はこの嫁などが、金の簪買うてくれいの、やれ、錦の振袖が欲しいのとねだりまする故、無い振りをして居りまする。ナニ、千兩箱の二ツや三ツ、神棚へも載せておきますテ。ハヽヽヽ。
お花　ホヽヽ。父さんの何いはしやんすやら、いつも〳〵、戯言ばつかり。
（ト思入れあつて、又之丞の引掛けて居る搔卷に目をつけ、）モシ、あなたのお召しなされました、この着る物は。
孫兵衞　ほんにコリヤ、おれが布子ぢやが、夏中質屋の藏へ。
お花　アヽモシ。（思入れ。）コリヤ、マア、誰が持つて參りましたぞいなア。
又之丞　こりや最前、あの次郎吉が持つて參つて、寒氣を防ぐため身共に着せるやうにというて、アノ小平が屆けたと申す事ぢやテ。
孫兵衞　エヽあの伜の小平が。（ト思入れ。）
又之丞　また、この搔卷も屆けたぢや。
孫兵衞　スリヤ、それ程までにお主樣を。伜、出かし居つた。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。
お花　ホヽヽヽ。父さんとしたことが、

何を云はしやんすぞいな。又、さういふ事なら、早う戻りやさんすがよいに。
(ト門口を覗いて見たり、いそ〳〵する。)
孫兵衛、思入れ。)
モシ〳〵若旦那様、おみ足擦つて上げませうかいなア、
又之丞　イヤ〳〵、今宵は大分快い。構やるな〳〵。
お花　ハテ、御遠慮には及びませぬわいなア。
(ト又之丞が足を擦つてやる。孫兵衛、口の中にて、念佛を唱へる。思入れ。靜かなる木魚の合方、禪の勤めになり、向うより、次郎吉、三布蒲團を繩にて縛り、これを引きずり出て、門口へ來り、戸をあける。これにてお花立つて來り、)
お花　小平殿、歸らしやんしたかえ。
(ト次郎吉を見て、)こちの人かと思うたら。次郎吉。そりや何ぢやぞいの。
次郎吉　父様がこれを、旦那樣に着せろというて、屆けさしやつたわいの。
(トお花、蒲團を内に入れて、)
お花　そんなら、これも若旦那へお着せ申せと、あの、父さんが。
孫兵衛　何と云ふ。これも伜が屆けやつたといふのか。
お花　アイ。(思入れ。)エヽ、何の事ぢやぞいの。年端もゆかぬ者に、この樣な重い物屆けずと、なぜに主が自身に持つて、早う歸つては下さんせぬぞいなア〳〵。
孫兵衛　南無。(思入れ。)エヘン〳〵〳〵。
(ト思入れ。)
又之丞　ヤレ〳〵、次郎吉、大儀であつた。此處へ來やれ。褒美を取らさう〳〵
(ト又之丞、傍にある袋の中より、菓子を出して、次郎吉にやる。)コレ、今に父が歸るであらう。おとなしうしませうぞ。ほんに賢い奴ではある。お花、賞めてやりやいの。
お花　ハイ〳〵。(思入れ。)コレ、久し振りで父樣と一緒に、寢々するのぢや。嬉しいかや。〳〵。
(トお花、恥かしき思入れ。)
又之丞　その子よりも、第一其方が。身共も嬉しい。ハヽヽヽ。
(ト思入れ。孫兵衛、ふつと心付いてゐる。唄になり、向うより赤垣傳藏、大小、ぶツ裂き羽織にて、小提灯をともして出て來り、門口へ來てこなしあつて、)
傳藏　賴みませう〳〵。
お花　ヤ、こちの人が歸らしやんしたさうな。(トとつかはと門口へ行き、戸を明けて、)小平どのかいなア〳〵。お前はまア。(ト傳藏を見て、)ホヽヽヽ。妾としたことが。(ト氣の毒なるこなし。)
傳藏　ナニ、人違ひかな。ハヽヽヽ。

イヤ、ナニ、女中、孫兵衞どのと申す
は此方かな。
お花　左樣でござりまする。あなたは
何方から。
傳藏　身共は、小汐田又之丞に用事あ
つて參つた者。ちと免しやれ。
（ト内へ入る。又之丞見て、）
又之丞　ヤ、貴殿は赤垣傳藏殿。
傳藏　小汐田氏、さて一別以來。
又之丞　コレハ〳〵、ようこそ御入來。
まづ〳〵これへ。
傳藏　然らば御用捨下されい。
（トよき處へすまふ。又之丞もよき處へい
ざり出て、）
又之丞　まづは御健勝にて。
傳藏　貴殿にも御無事と申したいが、
承れば、何か御病氣とのこと。
又之丞　さればでござる。痛疾とか申す
病にて、未だに歩行が心に委せぬやう
にござる。
傳藏　ハテサテ、それは御不自由でご
ざらう。イヤ、ナニ、孫兵衞殿とやら、
何かと又之丞殿の世話致さるゝと申す
こと。身共も古朋輩の事、祝着致す。
忝うござる。
孫兵衞　ハイ〳〵、若旦那も永々の御病
氣にて、この樣な穢苦しい内へ、おか
くまひ申して置くといふはほんの名ば
かり。ほんに心は矢竹に思ひまするが、
貧乏人のこと、思ふ樣に御介抱は廻ら
ず。それでも奇特に、この嫁女が手一
ツで、晝は人樣の濯ぎ洗濯、夜は鰑や
ゆで玉子。
（トお花、茶を汲みながら孫兵衞の袖をひ
き、）
お花　いゝえナア。（ト傳藏の前へ持ちて
行き、）ハイ、あなた、お茶一つ。
傳藏　イヤ〳〵、かまやるな〳〵。
（トお花、孫兵衞に囁く。）
孫兵衞　オゝ、よう氣がついた。二合半
取つて來やれ。これ、西橫町の西の宮
がよいぞや。そして、何ぞ、肴を見つ
くろつて。
（ト傳藏思入れあつて。門口へ出るを、
孫兵衞、こなしあつて、）
孫兵衞　コレ〳〵、お花や、酒買う
て歸りに、一寸法乘院へ寄つて、爺が
お願ひ申して置いた物を下されませ
と、其方、持つて來て下され。
お花　ハイそりや何でござりまするえ
孫兵衞　何であらうと、持つて來やれば
解るわ。コレ、必ず悔りせまいぞや。
お花　エヽ、なんぢややら、氣味の惡
い。（思入れ。）どりや、酒、買うて來よ
うかいなア。
（ト木魚入り合方にて、お花、德利をさげ
て、向うへ入る。又之丞思入れあつて、）

又之丞　コリヤ〱孫兵衞、その坊主が眠うなつた樣子ぢや。納戸へ連れていて、寢さしてやりやれ。
孫兵衞　ほんに、何にも知らず子供は佛。南無阿彌陀佛〱。左樣なら、あなた、ゆるりとお話しなされませ。
（ト木魚の合方になり、傳藏に會釋して、孫兵衞次郎吉を連れ、こなしあつて奥へ入る。兩人殘り、こなしあつて、）
傳藏　さて小汐田氏、身どもが今宵貴殿の隱家を尋ね、わざ〱參つたは餘の儀でござらぬ。兼ての一儀も、早近々のうち。
又之丞　スリヤ、敵の館へ亂入の。
傳藏　コリヤ。（トあたりを見廻し、懷より小判を出し、）此金子は由良之助殿、四十七人へ配分の金子。小汐田氏お請取りなされい。
又之丞　何か存じませぬが、大星殿のお志、忝う存じまするが、餘人は格別、拙者儀は、敵の門内へ踏込みますると、まづ生きて再び、歸らぬ所存でござれば、所持致しても不用の金子。
傳藏　さればでござる。拙者始め、皆左樣に思ひましたが、由良之助殿の申さるゝは、もし、敵地にて討死致すその砌り、死骸に金子所持なき時は、鹽谷浪人、活計に迫り、師直の館へ亂入なし、斬り取りなさん企てと、世の人口を防がん爲、これは銘々肌につけ持參あるやう、大星殿の指圖でござるテ。
又之丞　ハヽア、さすがは大星殿の御料簡は、又、格別。然らば受納致すでござりませう。（ト金子取り、そのまゝ前へ置き、）赤垣氏、して、その夜の手配りは、貴殿には御承知でござるかな。
傳藏　其儀も大星殿より、書物にして斯くの通り。密かに披見あるやうに。
（ト思入れあつて、懷中より書物を出す。又之丞こなしあつて、これを披き見る。）
又之丞　ム、成程。四十七人、二手となし、表門より二十四人、裏門より二十三人。伍々を略して、三人一組、三々九人を一手となし。
傳藏　大星殿の兼ての練磨、甲州山鹿の采配にて。
又之丞　序の太鼓にて、人數を繰り入れ。
傳藏　いかにも〱。破の太鼓には、人數を分ち。
又之丞　急の太鼓に、切り入つて。
傳藏　織部、大鷲、不破なんど、太刀槍術手練の荒者、三九、二十七人は、こゝに押し伏せ、彼所に攻め立て。
又之丞　殘りの人數は四方を固め、八方隈々眼を配り。
傳藏　目指す敵を取逃がさぬやう、或ひは矢襖槍襖。

又之丞　ハヽア、天晴〱。敵師直、天を騙け、大地を潛る術ありとも、首をあけんは瞬くうち。
傳藏　コレ。（思入れ。）密かに熟覽。
又之丞　ハテサテ、感心。
（ト兩人こなしあつて、これを見る。かすめたる佃の合方、時の鐘になり、向うより以前の古着屋の庄七と、米屋の長藏、弓張り提灯を持ち出來り。）
庄七　コレ〱長藏どの、貴樣はどこへ行くのだ。
長藏　わしやァ孫兵衞の所へ催促に行くが、お前はなぜあすこの家へ行くのだ。
庄七　聞かつせえ。おらが藏へ泥棒が入つて、二品三品、代物が紛失したが、調べて見れば、皆なあの孫兵衞がところから置いた質。そりやァ僅かな代物だが、四ッ谷の利倉屋から、下質に下つてゐる、（思入れ。）蘇氣精と云ふ唐藥。この置き主は、浪人者の民谷伊右衞門といふ者ださうだが、この一品が金目の代物さ。
長藏　何か、それで彼處の内が怪しいによつて、探りに行くのか。
庄七　マア、そんなものさ。
長藏　ハテ、とんだ事があるものだ。
（ト兩人本舞臺へ來り。）
庄七　孫兵衞どの、お内でござるかナ。
長藏　ハイ、御免なさい。
（ト門口をあくる。この聲に、傳藏、以前の書物を手早く懷中する。此聲を聞きつけ、奥より、お熊出て來り。）
お熊　ハイ〱、どつちからでござりました。（ト二人を見て。）こなた衆は、西横町の金子屋に、米屋の若い衆。大方、碌なことではござんすまい。
長藏　これは來がけからの御挨拶。さうはいはれては、猶の事だ。（ト懷より帳面を出し。）この間から書出しをあけて置きました米の代、一貫六百匁はどうさつしやります。是非とも今夜は拂つてやつて下さりませ。勘定して下さい〱。
お熊　サヽ、尤もでございますよ。命を繋ぐ米の代。永くとは云ふまい。もう二月か三月のところを。
長藏　イエ〱、どうして〱待たれませぬ。今夜は是非とも勘定して貰はにやなりませぬテ。
（トこの中、庄七、又之丞の引掛けてゐる布子や、側にある掻巻蒲團等に目をつけ。）
庄七　モシ、ちつと御免しなされませ。（ト提灯を持ちあちこち見て。）これだ〱。これに違ひない。店の符牒もまだその儘。モシ、お前さん、この品はど

こから持つてお出でなされましたえ。

又之丞　どれから持つて參つたやら、身どもゝ存ぜぬが、親の小平が屆けたと申して、アノ次郎吉と申すが持參致したテ。

庄　七　ヘイ、左樣ならアノ年端もゆかぬ次郎吉どのが、この品々を。モシお前さん、それは積りにも知れた事。イヤ、これは捨て置いて、この外に、蘇氣精と申す藥包みが、參つては居りませぬかな。

又之丞　待て〳〵、町人。何か合點の行かぬ物の云ひやう。その蘇氣精を身共に返へせとは。

庄　七　イヽエサ、モシ、私が和で申すうち、お返しなさるが、あなたのお爲でござりませうぞえ。モシ、お前も、見かけによらない盜みをさつしやりますな。

又之丞　ナニ。ど、ど、どう致したと。

(トきつとなる。)

庄　七　ハテ、腹をお立ちなされまするな。コレ、御覽じませ。お前の引掛けてござる布子、こゝにある搔卷蒲團、店の符牒がついてゐますぞえ。私共が倉へ泥棒が入つて、他の物には手を附けず、この三品と、只今申した蘇氣精。右の四品紛失しました。三品は早速、こゝで見當りましたが、モシ、とてもの事に藥もこゝへ、出さつしやるがようござります。

又之丞　こりやヤイ町人、こゝには身どもが古朋輩も聞いて居らるゝに、覺えない無實の難題。殊に大それた盜人なぞとは、おのれ、今一言いうて見やれ。許さぬぞ。(ト脇差を引寄せ、きつとなつて、思入れ。)

お　熊　モシ〳〵、その樣に威嚇しかけては、町人と云ふものはビク〳〵して、いふ事もいひませぬわな。モシ、あなたも聞いてお出でなされまするが、質屋が疑ぐるも無理ではござりませぬぞえ。その病氣には無くてはならぬと云ふ、蘇氣精とやら、帶星とやら云ふ藥を、お前が盜んたであらうといふ證據は、ソレ引掛けて居さつしやる、その布子搔卷の出處を詳しく云はつしやりませ。妾らも世間へは、どうか盜人を飼つて置くやうに思はれては、立ちませぬわな。サア、その品々は、何處から取つてござつた。それとも誰ぞ持つて來ましたか。それを有體に云はつしやりませ。イケふて〴〵しい。

又之丞　ハテ、合點のゆかぬ。スリヤ物の間違ひか。(思入れ。)コリヤ、この品品は、只今も申した通り、この家の倅次郎吉が。

お熊　ヘエイ。年端もゆかぬあの餓鬼が、そんならその品々を、お前もまァ、大概積りにも。ハヽヽヽ。（ト思入れあつて奥に向ひ）コレ〳〵、小僧や〳〵。爺殿、餓鬼を早く連れてござらつしやいな〳〵。

（ト合方。奥より次郎吉をつれて、孫兵衛出來り。）

孫兵衛　婆ァ、何をその樣にけたゝましく呼ぶぞいやい。

お熊　呼ばないでどうするものか。事によるとこゝの内の者は、殘らず盗人になる詮索でござるわいの。

孫兵衛　何と云ふぞいやい。そりや、マァ、どうした譯で。

長藏　これ、孫兵衛どの、妾も先刻から來て待つてゐるが、米の代はどうさつしやる。

お熊　エヽ、何をぐじ〳〵。その餓鬼を此方へよこさつしやい。（ト次郎吉を沒義道に引ツたくり。）コレ小僧よ、あの掻巻や着る物は、われが持つて來たのか。さア、有體に云へよ。

次郎吉　アイ、あれは、私が。

（トいはうとするを、お熊いふなといふ思入れして、抓りあげるゆゑ。）

イヽエ、私ぢやない。知らぬわいなァ〳〵。

又之丞　コレ、知らぬでは濟まぬ。サ有樣に申せといふに。サヽどうぢや〳〵。

（ト又お熊、次郎吉をにらむ。）

次郎吉　知らぬわいな〳〵。

又之丞　エヽ、それではこの場が。エヽ、鈍な奴ではあるわいやい。

（ト氣を揉むこなし。孫兵衛、思入れ。お熊、次郎吉を引取り。）

お熊　なんと、どうでござりまする。子供は正直、知らぬと云ひますぞえ。そんなら、誰が持つて來ませう。やつぱり、この盗人は。

孫兵衛　おれぢや、この老爺ぢや。

皆々　ヤヽ。

孫兵衛　その掻巻と蒲團を盗んで來たのは、南無阿彌陀佛〳〵。コレこの老爺ぢや。南無阿彌陀佛〳〵。（ト泪ながらに泣く。）

お熊　エヽ、この老爺どのは老碌して、埒はござらぬわいなァ。

庄七　この盗み人は、見す〳〵知れた浪人殿。それとも、盗人でないならば、ソレ、そこに金もあるではないか。業と共に四品、〆めて、元利六兩足らず。勘定すれば、盗人の。

又之丞　惡名拔けると、お云やつても、金輪奈落この金子は。

庄七　そんなら、こんたはやつぱり盗人。但し、その金此處へ出すか。

又之丞　サア、それは。

長藏　米の代を拂はないか。

孫兵衞　サア、それは。

皆々　さア〳〵〳〵。

長藏　エヽ、小じれッてえ。へぼくた老爺(おやぢ)め。

庄七　金を出さねば。

兩人　いつその事に。

(ト米屋は孫兵衞、庄七は又之丞を引ッとらへ〳〵)

これでも、いゝか〳〵。

(ト打据ゑる。最前より傳藏始終手を組み、この樣子を聞いて、この時、づツと立つて、庄七と、長藏を投げ退け、兩人はふ〳〵起上り、)

長藏　ア痛(いた)。このお侍は、なんでこのやうに。

庄七　コレ、盜人の肩を持つのか。

(ト立ちかゝるを、傳藏、懷(ふところ)より包金を出し、兩人へ投げ出す。)

兩人　ヤ、コリヤなんだ。

傳藏　それで其方達(たち)、言分はあるまいがな。

(ト兩人金を見て、)

庄七　ヤヽ。これは小判で、ゞ〳〵ちり六兩。

長藏　こゝへも一分。そんならこれは。

傳藏　おのれ等、商人(あきんど)の身を以て、病人と申し、老人を、手籠めに致す不法(ぶはふ)者(しや)。たゞ置く奴ではなけれども、其分に許し遣はす。きり〳〵、この家を歸り居らう。(トきつと云ふ。)

長藏　ハイ〳〵、歸ります〳〵。コレ庄七殿、長居(ながゐ)したなら、またどの樣なひどい目にあはうも知れぬ。

庄七　痛い目するは辛抱するが、罰が當つて立ち切れない。(ト立上るを、)

お熊　コレ、こなさん達、歸るなら、その提灯のあかりをかすり、妾(わし)も隣りの念佛講へ。

孫兵衞　ナニおのれが後生三昧。八萬地獄へ眞ッ逆さまに。

お熊　アイサ、それも承知サ。鬼の樣な亭主が欲しいよ。

(ト三人門口へ出かゝる。孫兵衞、次郎吉を抱上げ、)

孫兵衞　コレ、坊よ、わりやア眞(ほん)まに父(とゝ)に逢つたか。

次郎吉　アイ。

孫兵衞　南無阿彌陀佛、〳〵。

お熊　サア、行かないのかナ。

(ト寺鐘(てらがね)の合方になり、孫兵衞、次郎吉を連れ暖簾口へ入る。三人は行きさうにして囁き合ひ、お熊庄七は下座、長藏は向うへ提灯を消して入る。傳藏、こなしあつて、物をも云はず、づんと立つて行き掛るを、又之丞とめて。)

又之丞　ア、モシ、お待ち下され。傳藏殿。ものをも云はず立ち出でらるゝは、スリヤ拙者めを眞の盗人、と思召しての事でござるか。

傳藏　イヤ、其許が盗賊でない事、身どもよう存じて居る。ハテ、行歩かなはぬ身を以て、左樣な業がなり申さうか。

又之丞　シテ又、何故拙者めに、一言のお言葉もなくお歸りあるは。

傳藏　たとへその身は邪なくとも、四十餘人の義士の中、左樣の惡名受けられては、世の人口は防がれず。浪人の貧苦に迫り、盗賊夜盗なしたりと、噂あつては亡君への不忠。計らず汚名を受けられしは、その身の不運と諦め召されい。

又之丞　スリヤ拙者めは敵討の、一列に加はることは。

傳藏　相成りますまい。亡君伯州公の御家來多き中にも、この度の一儀は、由良之助殿の智略を以て、忠心無二の魂を見拔き、まツたその身の行狀まで、一分一點曇りなき、義士を選んで四十七人。その連判の人數のうち、左樣の惡名うけたる者は、中々以て大星殿、よも承引はござるまい。

又之丞　サ、御尤もなる赤垣氏の仰せではござれども、そこをひたすらお執成しを以て、是非ともお供致すやう。

傳藏　そりや一方ならぬ貴殿のこと。申しては見ませうが、十が九つ、列には叶ひますまい。その上、いつ全快も計られぬ貴殿の御病氣。お氣にはかけられな。亡君のお心にもかなはぬといふ、ハテサテ、氣の毒千萬な。

又之丞　スリヤどうあつても、拙者めは。

傳藏　小汐田氏、御緣もあらば、また重ねて。(ト立ちかゝるを、)

又之丞　モシ。

(ト留むるを振切つて、)

傳藏　隨分堅固で、保養めされい。

(トこなし。唄、時の鐘にて、傳藏、向うへ入る。あと、合方。又之丞、思入れあつて、)

又之丞　チエヽ、思へば〳〵、よく〳〵武運に盡きたる某。最早敵討の日限も近づく折に、かゝる難病。またその上に、計らずも、盗人なりと惡名受け、四十餘人の一列に外れ、おめ〳〵と生きながらへ、どの面さげて世の人に、武士の生き面會はされう。もうこの上は、是非におよばぬ。今日只今、腹搔ツさばき、未來に於て主君へ云ひ譯。オヽ、さうぢや。

(トいざり寄つて、脇差を取る。此邊より奥にて一ツ鉦、聞える。又之丞、脇差を

抜き、袖にて拭ひ、きつと見る。これより謡への合方、寢鳥、薄ドロ／＼になり、小佛小平、有り姿にて、藥包みを持ち、忽然と門口の外へ現れる。又之丞思入れあつて、）

又之丞　小汐田又之丞、武運に盡き、敵一人討ち留めず、四十餘人に先立つて生害致す、無念の心中。亡君尊靈、あはれみ給へ。

（ト腹へ突き立てうとする。此時又之丞、腕すくんで腹切れぬこなし。又思直して突き立てうとする、此時小平ふうわりと立つたるまゝ、門口を通抜け、又之丞の側へ坐る。又之丞種々、こなしあつて、）

又之丞　ハテ、心得ぬ。手先、痺れて、腹切ることのかなはぬは、こりやどうぢや。（トいひながら、小平を見つける。）ム丶、それに居るは小平ぢやないか。

（トやはり薄ドロ／＼、寢鳥、謡への合方、一ツ鉦。又之丞、こなしあつて、）

ヤ、ヤ、何と申す。今、切腹なしては犬死。手に入る良藥にて、難病全快なした上、敵討の一列に加はれと申すか。コリヤ、ヤイ、それを、おのれに習はうか。身どもはナ。おのれ故に盗賊の汚名を受け、一大事の人數をも省かれたわ。エ丶、こゝな不忠者めが。

（ト小平の襟髮を捉へるこなし。この時、ドロ／＼烈しく、小平の衣裳、鬘、引き

ぬき、誂への姿となる。)
何と申す。身どもを大切に思ふゆゑ、心にも思はぬ盗みを致し、良薬を取り得たれば、これを服して全快なせとか。エヽ、流石は下郎の淺ましい。おのれがその薬品を盗みし故、この又之丞はナ、身に覺えなき盗賊の悪名、敵討の供もかなはず。さすれば全快なしたとて、何の益ないこの體。留立て致すな。南無阿彌陀佛。

(トまた、腹へ突き立てようとする。此時ドロ〳〵、烈しくなり、小平これを留めることなし。又之丞じれて、)

又之丞　エヽ、聞きわけなく、まだ留めるか。下部ながらも、これまでの忠義に免じて宥し置けば、某に恥面かゝせしその上に、猶も武士道捨てさせるか。もうこの上は、おのれを手打に致した上、邪魔を拂うて潔く切腹致す。覺悟なせ。

(ト刀を取り直し、いざりながら、小平を追廻す。此時一ツ鉦の音。責念佛の鉦鳴る。小平よき所に、すツくと立ち、)

小平　あなたの願ひをかなへんと、苦しい悲しい恐しい、云ふに云はれぬ艱難にて、やう〳〵手に入るこの薬。それにて全快なした上、どうぞ首尾好く本望の、門出あるやう、旦那様。

又之丞　何をおのれが。覺悟なせ。

(ト摺り寄つて、烈しく斬る、これにて大ドロ〳〵になり、小平、柱の中へ消える。とたんに、又之丞、卒塔婆を斜にすツぱり切る。ドロ〳〵、寢鳥止む。やはり一ツ鉦、責念佛の音。又之丞ぎよつとして、)

又之丞　ヤヽヽ、小平を手討と思ひしに、姿は消えて、この卒塔婆。ムヽヽ俗名、小佛小平。ヤヽヽ、こりやどうぢや。

(と思ひ入れ。バタ〳〵になり、向うよりお花、白木の位牌をかゝへて、一散に走り出來り、門口へころげ込み、)

お花　舅御様、もし孫兵衛様、こりやまアどうせう、どうせうぞいなア。

(トうろ〳〵して泣く。奥より孫兵衛、松虫の鉦と撞木を持ち、よろめき出る。)

孫兵衛　オヽ、悲しからう。尤もぢや。俺ア間がな隙がな佛壇の前で、この、鉦撞木を杖柱。いつそ泣き死に死にたいにも、命めが自由にならず。よくよく業のつくばつた老爺の身の上。嫁女、推量してくれ〳〵。

お花　お前が最前、歸りには、お寺へ寄つて來るやうに云はしやんした故、何心なう法乘院様へ行て、親仁様が願ひました品をと云ふたれば、方丈様がお手づから、下さんした白木の位牌。不思議な事と手に取り見れば、コレ、俗

名小平。施主は親御のお前の名。びつくりせまいか、妾アもう、その場で死にたうございましたわいなア。
（ト泣く。又之丞こなしあつて。）
又之丞　スリヤ、倅の小平が、此世を去りし魂魄の、身どもが難病救はんと、寒氣を防ぐ衣類と云ひ、良藥までも業通にて取得て、予に與へしのみか、切腹までも止めしは、死んでも盡きぬ忠義の心底。忘れは置かぬ、忝い。さうとは知らず、われに惡名負はせし小平、憎さも憎しと、追ひつめて、手討になせしと思ひしに、姿は幻、消えうせて、斜に切つたはこの卒塔婆。
お花　そんなら、こちの人小平殿は、今迄の有りし姿を現はして、此處に居やしやんしたか。妻の妾や、次郎吉には、なぜに會うては下さんせぬ。妾や會ひたい、なつかしいわいなア。
（トしやくり上げてこなし。）
孫兵衛　オヽ、尤もぢや〳〵。ぢやが、コレ、嫁女、位牌になつたを見た其方より、現在倅が浮死骸、隠亡堀で見つけた時の悲しさは、コレどのやうにあらうと思やる。その上、何者の仕業やら、慘たらしい、目も當てられぬ殺し樣。涙のありたけ泣いた上、法乘院様へお願ひ申し、葬つたは今日の夕方。嫁や孫めに知らさぬのは、ちつとも遅う泣かさうため、この親仁が、心一ッに納めてゐた胸の中。嫁女、若旦那様も、御推量なされて下さりませ〳〵。
（トこなし。又之丞、思入れあつて。）
又之丞　聞けば聞く程、不便なは小平が成行き。さるにても、元より正直正路な生れ、非道を働く者でない。殺せし奴は何者か。
（ト、きツと思入れ。又誂への合方になり、寢鳥、薄ドロ〳〵になり、燒酎火もえ、奥より次郎吉走り出來り、すツくと立つ。）
次郎吉　わしを殺したは、民谷伊右衛門。
お花　ヤ、スリヤ、こちの人がこの稚子に、
孫兵衛　體を借りて、ものいふのか。
又之丞　その民谷伊右衛門こそ、不義士の隨一、近藤が倅にて、親にもまさる邪者。
お花　そんなら敵は、民谷伊右衛門。
（トきつとなる。）
次郎吉　イヤ〳〵、悪人なれども、一旦は主人と頼みし民谷殿、敵と思ふは道でない。この上は、若旦那様、少しも早うその藥を。
又之丞　心盡しのこの良藥。いかにも服せしその上にて、この一埒を大星殿へ演說なさば、わが惡名も晴れし上にて、大事の供に立たんは必定。氣遣ひ致す

な。忠義の小平。今ぞ良藥服用なさん。
(ト孫兵衞、とつかは水を汲んで來り、又之丞、紙包みの藥を飲むこなし、)

次郎吉　嬉しや、それにて未來の本望。

(ト、ドロ〳〵烈しく、又之丞放心する。次郎吉倒れる。ト鳴物打上る。陰火消ゆる。よき時分より、下座より庄七窺ひ出で、此時內へ走り入り、)

庄七　さてこそ、鹽谷の浪人者。師直樣を。

(ト又之丞へかゝる。又之丞、すツくと立上り、庄七を捻上げる。皆々見て、)

孫兵衞　ヤヽ、あなたはお足が。

又之丞　眞に。(思入れ。)さては難病、全快なしたか。

お花　草葉の陰にて、こちの人。

孫兵衞　さぞ悦んで。

又之丞　エヽ、忝い。

庄七　何を。

(トかゝるを、付廻して、ぼんと斬る。よき時分より、お熊窺ひ出て、)

お熊　ヤ、人殺し。

(ト聲たてるを、孫兵衞、引ツ捕へ、)

孫兵衞　エヽ、こゝな魔王めが。

(トよろしく押しつける。又之丞、刀の血を拭ひ、お花、右に位牌、左に子を抱き、泣きおとす。この見得よろしく時の鐘のおくりにて　此道具廻る。)

(本舞臺。元の道具に戻る。眞中に屛風を立てあり、やはり捨鐘、誂への合方にて道具、納る。

(ト屛風の中より、お袖、書置を片手に持ち、行燈を下げて出て、舞臺よき所へ行燈を直し、こなしあつて、)

お袖　水の流れと、人の身は、移り變ると世の譬へ。思へば因果な妾が身の上。眞の父さん、元宮三太夫樣、まだその上に一人の、兄さんありと聞いたばかりで、お顏も知らず。義理ある父さん姉さんは、非業にお果てなさんした。その敵を討ちたいばかり、女子の操を破りしからは、所詮この身は。

(ト思入れあつて、懷中の守袋より臍の緒の書物を出す。矢張、時の鐘、合方。下座の門の中より直助、出刄を手拭ひに包み拔き足にて、花道の方へ行き、內を窺ふ。)

此臍の緒の書物は、血を分けし親の遺品。せめてはこれを兄さんに、妾が死んだその後で、屆けて貰うて。(ト思入れあり。)これが、この世の。

(トこなしあつて深き思入れ。行燈を吹消す。此とたん捨鐘のかしらを打つ。忍三重に變り、花道の直助、出刄を口にくはへ、尻をからげ、きツと見得。此時、上の生垣を押分けて、與茂七出て、よろしくこな

しあつて、お袖、思入れあつて屛風の中へ忍ぶ。與茂七、直助、覗ひ〳〵、直助は内へ入り、すれ違ひ入りかはつて、互に思入れして屛風越しに、與茂七は一腰、直助は出刄にて、ぐつと貫く。内にてワツと一聲叫ぶ。兩人、仕濟ましたりとこなしあつて、屛風を引きのける。中にお袖、書置、臍の緒の書物を持ち手を負ひて苦痛の態。與茂七、直助、左右より手をかけ、お袖を引きおこし、貫かうとする。このとたん、チヨンときつかけにて、月出る。これにて、三人、顏を見合はせ、びつくりして、)

直　助　ヤ、正しく男と思ひしに。

與茂七　屛風の中なは、女房のお袖。

兩　人　ヤヽ、こりやどうだ。

(ト思入れ。これより本調子の合方、お袖こなしあつて、)

お　袖　同じ合圖に、二人の夫、手引きなしたは疾くよりも、妾が命を捨てる覺悟。只、耻かしいは與茂七殿、妾が操を破りし元は、義理ある父さん姉さんの、敵が討ちたさ一つには、お前が存へ居やしやんすとは、神ならぬ身の夢にも知らず、やはり何時ぞや淺草の、裏田圃にて父さんと、同じ其夜に人手に掛り、死なしやんしたと思うた故、お前の恨みも晴さうため、直助殿を力と頼み、枕交して面目ない。お前に顏が合はされうか。お手にかゝつて死ぬるのが、せめての言譯。又、直助殿には、約束の養父の敵、姉さんの、讐を討つたるその後は、この書置に添へてある、妾が一人の兒さんを、尋ねてこの譯、いうて聞かせて下さんせ。返す〳〵も與茂七殿、この世の緣は、薄くとも、未來は同じ蓮の上。夫婦になつて下さりませ。頼みますわいなア。

(ト双方よろしく。與茂七思入れあつて、)

與茂七　出かした、女房。そちが在所を尋せしも、いつぞや計らず淺草にて、この與茂七が所持なす密書、手に取り見たる女故、不便ながらも品により、命は身どもが貰はんと、思ひ居りしにかゝる成行き。さはさりながら、合點行かぬは、何を證據に其方が、裏田圃にて人手にかゝり、相果てしと。

お　袖　思ひつめしは死骸の顏、破れ損じてそれとは知れねど、着類は見覺えあるお前の定紋。それ故に。

與茂七　ヤヽ、それにて思ひ合はすれば、奥田將監が伜、庄三郎と仔細あつて、互に着類を脱替へしが、さては身どもに意恨ある奴、この與茂七と取り違へ欺し討ちに討つたるか。

直　助　ヤヽ、すりや中田圃にて殺したのは、奥田の伜、庄三郎殿であつたるか。ホヽヽホイ。(ト大きにびつくりする。)

與茂七　さては、おのれが庄三郎を。
（ト詰めよるを、）
お袖　モシ。（ト與茂七を留め、）この書置を兄さんに、會うたらどうぞ。
（ト差出す。直助取つて臍の緒の書物を見て、）
直助　元宮三太夫娘、袖。（トびつくりして、）ヤ、ヤ、すりや、お袖が親は元宮の。
お袖　あい。
（ト思入れするを、直助、手早く與茂七が捨てたる一腰を取つて、お袖が首を打落し、一腰を投出し、撞となる。）
與茂七　ヤヽ、女が首を。
直助　打たねばならぬ言譯は。（ト出刃を腹へ突込む。）
與茂七　所詮助けて置かれぬ權兵衞。さはさりながら、何ゆゑに。
直助　人の皮着た畜生が、往生際の懺悔話。聞いて下され、與茂七殿。
與茂七　ヤ、何と。
（トこれより、竹笛入りの合方。こなしあつて、）
直助　元、この直助は、奥田の家來。身性が惡さに、主人の勘當。因果の起りは、このお袖。附けつ廻しつ口說いても、得心せぬは夫があるゆゑ、與茂七殺したその上で、この身の願ひをかなへんと、裏田圃での闇まぎれ、欺し討ちに殺したは、故主の御子息、庄三殿と、聞いて知つたは、たつた今。親、姉、夫の仇敵、討つて遣らうと僞つて、抱寢をしたは情ない。この直助が血をわけた、妹と知つたはこの書物。槍一筋の親は侍。その子は、畜生、主殺し。末世に殘る直助權兵衞。
與茂七　すりやそれゆゑに、この切腹。まだしも惡念發起は奇特。
直助　地獄へ急ぐ置土產。いつぞや手に入る廻文狀。
（ト與茂七取つて、）
與茂七　たしかに落手。未來成佛。
（トよき時分より長藏、門口に覗ひゐて、此時、ツカ〳〵と內へ入り、）
長藏　さては、鹽谷の。
（ト廻文狀へ手をかけるを、與茂七手早く拔き身を取上げ、長藏を斬下げる。長藏立ち身にて苦しむ。）
與茂七　飛んで火に入る。
（ト刀を引拔く。これにて長藏宙返りするを與茂七、又美事に蹴かへす。これを木の頭。）
直助　南無阿彌陀佛。
（ト引廻す。與茂七、廻文狀を口にくはへ、後向きに長藏をとゞめ刺す。此見得よろしく、）
拍子幕

五幕目

蛇山庵室の場

口上觸れ済むと、ドロ／＼になり、幕の前より「心」の文字、上へ引いてとるとやはりドロ／＼にて幕あく。

本舞臺二間の間、正面、縁側つきの亭屋臺、伊豫簾かけあり。左右の柱に、七夕の短冊竹を立て、屋根より軒づらへ、唐茄子這ひまとひ、入口栗丸太の枝折戸引きたて、こゝへも唐茄子纏ひある。あたりは萩の盛り、百姓家秋の體。ドロ／＼打上る。

（ト唄浄瑠璃、トヒヨになり、鷹一羽、外れて來り、屋臺の内へ入りし體。唄一とくさりきれる。誂への合方。向うより伊右衛門、袴、着流し、大小、庭下駄にて、鷹の攣をさし、朝顔の絡みし、綺麗なる切子燈籠を持ち、後より長兵衛、これも綺麗なる中間の拵へにて、首玉つけし犬を曳いて出る。このとたんに正面の簾巻き上げる。中にお岩模様やつし、夏姿の振袖、在所娘の拵へ、置手拭にて前垂。五色の絲を巻きたる糸車にて、糸をひきゐる。よき所に、綺麗なる行燈をともしある。その上に件の鷹がとまりゐる體。南方見合つて、七夕の見得よろしく、空には月を引出す。舞臺には螢むらがる。）

伊右衛　天の川、淺瀬白浪、更くる夜を。

娘　恨みて渡る、鵲の橋。（思入れ。）鵲ならぬこの鷹の、外れてや、こゝへ羽を休め。

伊右衛　秘藏の獲物、いづれにと、尋ね來りし、あの庵。女竹に結ぶ短册は。

長兵衛　ほんに今宵は文月の、七夕祭り、星合の、その日に外れた小鷹は、天の川へ飛びはせまいか。

伊右衛　何を阿房な。（思入れ。）しかし、外れたる鷹は、たしかに、この邊りぢや。サヽ、尋ねてくれ／＼。

（ト思入れ。又唄浄瑠璃になり、兩人、門口へ來り、長兵衛、内を覗ひ見て、膽をつぶし、）

長兵衛　モシ、旦那々々、御覧じませ。あの様な美しい奴が、糸を採つて居りまする。

伊右衛　ナニ、美しい女が、糸を引いてゐるとか。

長兵衛　左様でござりまする。

伊右衛　どりや／＼。（思入れ。）成程、鄙の住居には珍しい女。そちは案内して、鷹のことを問うて見ぬか。

長兵衛　左様致しませう。（ト思入れ。内へ入り、）コレ／＼、姐え／＼、おらが旦那が、合はせさしつた鷹が外れて、行方が知れぬが、もし、こゝの家へ舞

込みはせなんだか。どうだ〳〵。

娘　ハイ、その鷹は、これ、御覧じませ。妾が傍へ來て、この樣に、とまつて居りまするわいな。

長兵衞　いやア、こいつは妙々。そんなら旦那を呼び申して來よう。（思入れ。）モシ〳〵旦那、鷹が居ります〳〵。

伊右衞　左樣か〳〵。然らば貰ひに參らうか。其方も參れ。（ト思入れ。門口へ來り、）女中免しやれ。（ト内へ入り、思入れあつて、）さて〳〵風雅な住居ぢやな。イヤ、手前ことは、このあたりに住ひ致す者ぢやが、今日小鷹狩に罷出で、手飼ひの鷹が外れたぢや。聞けば此家へ參つたとの事、申し受けて歸りたいが、身に渡してはくれまいか。

娘　これはまア、改まりましたお頼み。あなた樣の手飼ひのお鷹とあるなれば、御遠慮なう御持參遊ばしませいな。

伊右衞　それは忝い。然らば持ち參るでござらうが、アヽ、夜に入つて歩行致すは道の程。コレさぞ暗うて難儀な事であらうな。

長兵衞　モシ〳〵旦那、ナニ、暗い事がござりませう。今晩は七夕祭り、アレ〳〵、お月樣がお上りなされて、晝の樣でござります。殊にあなたには、お歸りの御用意とあつて、お手細工のその切子燈籠。それを灯して參れば、お提燈より明うござります。サヽ、お歸りなされ〳〵。

（トいひながら、切子燈籠を軒へかけ、心なく急き立てる。）

伊右衞　これはしたり〳〵。ハテ、おのれは氣のきかぬ奴ぢや。あれ程表は暗いではないか。暗いによつて歸らぬと申すに、おのればかり、月の夜ぢやと申すが。斯うしやれ。この鷹を据ゑて、その犬を曳いて、おのればかり先へ歸りをれ〳〵。たはけ面め。

（トこれにて、長兵衞むツとしたる態にて。）

長兵衞　コレ〳〵、あんまりそんな大風な事を云ふなえ。今でこそ、こなたの折助になつて、旦那々々と云ふが、以前はおれも、朋輩の秋山長兵衞。犬も朋輩、鷹も朋輩、引いて歸らば、サア貴樣が曳け。イヤ、手前曳いて行け〳〵。

（ト犬の綱を伊右衞門に投附ける。）

伊右衞　イヤ、こいつが〳〵。以前は以前、只今は予が折助ではないか。おのれ、曳いて歸りをれ〳〵。

長兵衞　ナニ、予が折助だ。コレ、あんまり大風をいふな。今でこそ出世して大祿取。以前は民谷伊右衞門とて、われも、ひツてんてれつくでナ、嫌がられた惡仲間。女房のお岩も斷落をして

行方なし。その一件でおいらもこの様。それといふのも、われがした事だわ。畜生を曳いて歸りやアがれ。

伊右衞　イヤ、おのれ。歸り居れ。

（ト兩方より犬を突きやり、）

長兵衞　オヽ、しき〳〵。

（トけしかける。犬は吠える。お岩、この中へ入つて、）

娘　これはしたり、マア〳〵、お待ちなされませ。その樣に仰しやらいでも、よいぢやござりませぬか。承りますれば、主、家來とは云ふものゝ、以前は御朋輩と仰しやるからは、お二人樣の其仲を、妾がお貰ひ申しませう。左樣なされて下さりませいな。

伊右衞　主の其方が左樣に申さば、身どもは隨分、この者と仲直りも致し遣はさうが。

長兵衞　相手の民谷が承知なら、此方にも言分無いが、コレ、お娘、そもじ仲人に入るか。

娘　アイ、妾が仲を結ぶわいなア。

長兵衞　そいつは面白い。（思入れ。）イヤこれ〳〵、こゝに用意して來た酒がある。此處で始めようか。（ト思入れ。腰に附けたる吸筒の瓢箪を差出し、）姐え、茶碗を貸さッし。

娘　アイ〳〵。（ト思入れ。湯呑を出し、）

何はなくとも、コレ〳〵こゝに、今日

大　阪　の

の節句を祝うた刺し鯖。これなと當座のお肴に。(ト刺鯖をとつて、鉢のまゝ出す。)

伊右衛　イヤ、刺鯖とは面白い。そなたとわしと、その刺鯖の樣に、二人、斷樣に引ッついてゐたいわい。(トしなだれかゝる。)

娘　これはしたり、妾がやうな在所女に、何のあなたが。

伊右衛　これは痛み入つたお言葉。只今にては、身どもは獨身。その證人はソレ〱、その折助ぢやテ。

長兵衛　さうさ〱。女房もあつたが、どうした事やら行方なし。まァ何しろ、亭主役に姐御、始めさッし。

娘　そんなら妾が、お始め申して。(ト思入れ。長兵衛酌して、伊右衛門飲む思入れにて。)

この盃は、どなたへお上げ申しませう。

伊右衛　差しづめ我等が、戴きませうか。

長兵衛　さうさ〱。この旦那面へ刺鯖々々。

娘　憚りながら。

伊右衛　戴きませうか。

(ト兩人、酒を飲むことより、いやらしく寄り添ふ。)

長兵衛　コレ〱、旦那の伊右衛門、朋輩の折助にも、飲ませてくれぬか〱。

伊右衛　成程、おのれへ献すわ〱。

長兵衛　イヤ有難いな。（吸筒引きよせ、引きうけ／＼無暗に飲む。）

伊右衛　コレ／＼、折助、ちと廻さぬか／＼。

長兵衛　ナニ、廻さぬかとは、おれが廻せば善次舞だ。今の流行は神事舞だな。

娘　その舞、舞うて見せなさんせ。

長兵衛　どうして／＼、あれは舞ふまい。

伊右衛　そこを我等が頼みぢや程に。

長兵衛　イヤ／＼、御免だ／＼。

伊右衛　コレ／＼、手傳うてくりやれ／＼。

娘　アイ／＼。舞はんせいなア／＼。

長兵衛　イヤ、これは迷惑。

（ト鳴物になり、お岩伊右衛門二人して、長兵衛をとらへ、目を押へて、グル／＼と廻して突き放す。長兵衛、ぐるり／＼と廻る。これを見て、犬は吠えかゝり、長兵衛は、廻り乍ら犬もついて、下座へ入る。兩人殘つて、合方。）

伊右衛　ハテ、たはけた奴ではないか。（思入れ。）イヤ、それはさうと、其方は此邊の百姓の娘なぞといふ事か。左樣か／＼。

娘　アイ、妾ア、このあたりの民家に育ちし、賤の女子にござりまする。

伊右衛　アヽ、其方は民家の娘か。民家の文字は變れども、いはば我等が家名にて、民家は民谷。

娘　スリヤ、あなたの御家名は、民谷樣と申しまするか。

伊右衛　いかにも民谷。して其方の名は何といふぞ。

娘　アイ。妾が其名は。

（ト思入れ。風の音して、竹に結びし七夕の短册。ヒラ／＼と落ちて來り、お岩の傍へ吹き下り來るを、手早く取つて思入れあり。）

卽ちこれが、妾の。

（ト差出す。伊右衛門取つて、その歌を見て。）

伊右衛　こりや、七夕へ捧げたる、百人一首の歌。〽瀬をはやみ、岩にせかるゝ瀧川の。

娘　われても末に逢はんとぞ思ふ。〽（思入れ。）われても末に、（ト思入れ、伊右衛門の顏を、ぢツと見て。）會うてたまはれ、民谷樣。

伊右衛　ヤ、さういふ其方は。

娘　岩にせかるゝその岩が、思ふ男は、お前ならでは。（ト膝にもたれて思入れ。）

伊右衛　岩によう似た賤の女の、振の姿は、以前に變らぬ妻のお岩に。

娘　岩にせかれし、妾が戀人。今日から妾を。

伊右衛　色にするのぢや。コレ、人の見ぬ間に。（ト娘の帶へ手をかける。）

娘　又、移り氣の。

伊右衞　ハテ、移り易きは。（ト帶の端を引張り、刀をさげて、つか〳〵と屋臺のうちへ引込み。）

娘　誰も見えねど、アレ〳〵鷹が。

伊右衞　下世話で云はば、夜鷹とも。

娘　そんなら妾や、夜鷹かえ。

伊右衞　明があつては。（ト短檠の明を消す。）

娘　ア、モシ。蚊遣りも無いに。

伊右衞　ホンに藪蚊が。（ト團扇を持つて煽る。殘らず螢ゆゑ思入れあつて、）ヤ、螢の虫が。

娘　身で身を焦す螢火も、露よりもろき果敢ない朝顏。日の目にあはば忽ちに。

（ト燈籠に目をつける。）

伊右衞　萎るゝ花も。

娘　露の命も。

伊右衞　咲く朝顏も。

娘　吹く秋風も、

伊右衞　ヤ、

娘　オヽ、寒む。

（ト伊右衞門へもたれかゝる。唄になり、知らせあつて簾下りる。合方になり、奧より長兵衞、件の犬を曳き出來り、）

長兵衞　アヽ、醉つたぞ〳〵。酒を飲んで善次舞をしたから、まことに目が廻つて。アレ〳〵〳〵、まだこの樣に、そこらぢうがグル〳〵〳〵〳〵と、とんで廻るわ。（思入れ。）併し、あの民谷めは、此處の娘をしめたか知らぬ。何だか娘めも、嫌みな目附きであつたが、大方あの座敷で、極つたであらう。エヽ、畜生め。

（ト思入れ。犬にだきつく。犬は吠えて、長兵衞が頭へ喰ひつき、踏み散らして、下座へ入る。長兵衞思入れあつて、）

オヽ、痛い〳〵。アノ畜生めは、長い頭を既に嚙らうとしをつた。コレ、民谷氏〳〵、どだ、極つたか〳〵。ア、羨しい。ドレ、ちと、覗うてやらう。

（ト思入れ。簾の隙間より、中を覗き、びつくりして、）ヤヽヽ、ありや何だ〳〵。今の娘のあの顏は、ありや人間ぢやあるまい〳〵。サア〳〵、こいつは、こゝには居られぬ。この燈籠でも提げて、早く逃げて行かうか。

（ト軒の切子へ、手をかける。ドロ〳〵になり、この燈籠へ、お岩のこはき顏、現はるゝ。長兵衞、わツと云つて、腰を拔かし、）

これはどうだ〳〵。とんだ物が。コレ民谷殿〳〵。

（ト思入れ。呼びあるき、思はず軒を見る。はひまとひし南瓜が、殘らずお岩の顏と見える。長兵衞わツというて、）

南無阿彌陀佛〳〵。こゝには居られぬ

／＼。

（ト薄ドロ／＼になり、こけつ、轉びつ、向うへ逃げてはひる。時の鐘、すごき合方にて、鐘が上がる。中に伊右衛門、鷹を据ゑ、刀を提げ、立ち身、娘、裾を控へてゐて、）

娘　こりやもう、お前、お歸りなさんすのかえ。

伊右衛　ヲヽ、夜の更けぬ間に歸宅致さう。左樣致して、又の御見を。（ト行くを引きとめ、）

娘　それ、見やしやんせ。お前さんは、可愛いお方お岩さんといふお內儀さんがある故に、いはば妾をお弄りなされて。

伊右衛　イヤ／＼、何の其方を弄らうぞ。併しお岩と申したる妻もあつたが、至つて惡女。殊に心もかたましい女ぢや故に、離別して。

（ト娘これを聞いて、）

娘　すりや先妻のお岩さん、それほど迄に愛想が盡きて、未來永劫、見捨てる心か。伊右衛門さん。（トきつと見詰める。伊右衛門怖氣だつて、）

伊右衛　さう云ふそなたの面ざしが、どうやらお岩に。

娘　似たと思うてござんすか。似し面影の冴え渡る、あの月影の映るが如く、月は一つ、影は二つも三つ汐の、岩にせかるゝ、あの世の苦艱を。

伊右衛　ヤヽヽヽ、何と。

お岩　恨めしいぞえ。伊右衛門殿。

伊右衛　ヤ。

（ト飛びのくはずみに、もつたる鷹は鼠となつて、伊右衛門を目がけ、飛びかゝる。此時冴え行く月へ、黑雲かゝり、薄ドロ／＼。黑幕落ちて、舞臺一面、闇の景色。このとたん、お岩引きぬき、怪しきお岩が死靈の拵へ。大ドロ／＼にて、兩人きツとなつて、）

伊右衛　扨こそお岩が執念の、鼠となつて妨げなすか。

お岩　共に奈落へ誘引せん。來れや、民谷。

伊右衛　愚かや、立ち去れ。

（ト拔いて、切つてかゝる。大ドロ／＼、燒酎火、幾多立昇る。伊右衛門、心火を切拂ひ／＼、精根疲れて苦しむ。よきキツカケに、糸車へ心火移り、忽ち火の車となつて、片輪車の火のつきしまゝ廻る。お岩、伊右衛門を通理引に引きつけて、きつと見得。ドロ／＼にて兩人をせり下ろす。此道具變る。「心」の字、下へ引下ろす。下座にて百萬遍の鉦の音、念佛の聲にて道具變る。日覆より直ぐに雪、降つて居る。）

本舞臺、庵室の體。すべて、上の方、障子屋臺。眞中に、紙帳を吊りて、中に伊右衛門、病氣にて寢てゐる體。丸太の門口。外は一面の雪積りの體にて、白布を敷き、よき所へ、流れ灌頂、手桶添へてあり。柳に、雪積りし景色。こゝに淨念黑衣の庵坊主にて、鉦を打つ。庭作りの勘太、齒磨屋の牛六、船頭の浪藏、魚賣りの三吉、珠數に取りつき、百萬遍の體。近藤源四郎、白絆纏、股引、世話六部にて、笈をおろし、足を洗うてゐる。すべて藪の內、蛇山草庵の道具。雪ふりにてよろしく道具納まる。

淨念　願以此功德、平等施一切、能發菩提心、南無阿彌陀佛〳〵。(思入れ。)これは、どなたも御苦勞でござります。

勘太　いやもう、私らは、同家中に勤めてゐる中から、懇な人ゆゑ、一倍氣の毒に思ふのサ。

牛六　さうでござる。殿樣の屋敷がだりむくつてから、この樣に齒磨賣つて世を渡つて、今ぢやァ町人の方が、はるかに增しでござるよ。

三吉　さう云へばお前方も、二本差で二百石も取つた衆だが、今では一日が又兵衛取りの職人とは、洒落れた身の上でござるの。

浪藏　それ〳〵。屋敷出の衆が、おいらの長屋へ引越して、庭仕事やら商人やら、よく早く覺えたものだ。おいらは武士になつたら、さぞ腰が重からうと思ふの。

淨念　いやもう合長屋だけ、親切な事でござります。時に六部どのは、今日は江戸へ着かしッたか。

源四郎　左樣でござります。生國は播州生れ。昨日お江戸へ着きまして、路々も聞いて來ましたが、六部宿をさつしやる庵室との事。逗留中お賴み申します。

淨念　イヤもう、ゆるりと江戸も見物さつしやるがよい。

源四郎　ハイ〳〵、左樣致して參りませう。

牛六　ア、そんなら、六部殿は播州はどの邊でござる。

源四　ハイ、赤穗でござりまする。

浪藏　アヽ、鹽谷殿の御城下だの。

源四郎　左樣でござりまする。

(トこの聲を聞き、勘太牛六は思入れあつて、)

二人　さういはつしやるは、源四郎殿ではござらぬか。

源四郎　これは眞壁、堀口の御兩所。ヤレ〳〵、久しうてお目にかゝりました。

勘太　先づは御健勝の段。

牛六　お互ひに大慶に存じます。
源四郎　イヤもう、達者で居ると申すのみの儀でござる。お互に浪人仕り、亡君御菩提の爲と存じ、廻國に出ましてござるが、各々方はそのお姿。未だよい主取りもござりませぬかな。
勘太　左樣〱。いやもう、僅かな知行を取らうより、その日暮しが増しでござりまする。
牛六　私なぞは、商ひにかゝりまして。
源四郎　アヽ、左樣か。シテ、見ますれば百萬遍の樣子。それも町家の附合とやら申す儀でござるかナ。
三吉　アヽ、これ六部さん、ぬし達は以前の朋輩だといつて、この庵に掛人の病人の、祈禱の爲の百萬遍でござる。
浪藏　幸ひ、お前も念佛を助けて下さりませ。
牛六　アヽ、コレ〱、さつぱり忘れてゐました。コレ、源四郎殿、この庵に掛人の病人は、其許の御子息。
勘太　民谷伊右衞門殿でござります。
源四郎　ヤヽヽ、離縁致した女房の實子。江戸屋敷に勤め居つた、伊右衞門でござりまするか。
二人　左樣でござる。
淨念　エヽ、左樣なら病人殿の親御でござりまするか。さう致せば、あの阿母の爲には、このお方はお連合かナ。
勘太　アヽ、モシ〱、その話は少し御遠慮〱。
（ト云ふなといふ思入れ。この時、紙帳の中で、バタ〱して病氣の態の伊右衞門にて、刀を引提げ、紙帳を切つて、熱にうかされ、正氣を失ひ走出て、）
伊右衞　おのれ、お岩め、立ち去らぬか〱。
（ト刀を拔かうとするを、居合す大勢、これを留めて、）
皆　又、起りましたか。氣を鎭めてござりませ。皆が居ますぞ〱。
（トとりすがつて留める。伊右衞門、皆皆の顏を見て、胸撫でおろし、）
伊右衞　アヽ、夢か。ハテ、サテ、恐しい。まだ死なぬ先に、この世からアノ火の車へ。南無阿彌陀佛〱。（ト思入れ。）
源四郎　こりや、ヤイ、伜、わりや、この親が目にかゝらぬか。
伊右衞　ヤ、まことにお前は親仁樣。どうしてこれへ。
源四郎　年寄つて浪人すりや、二君に仕へる所存もなく、後世を願うて廻國修行。
伊右衞　すりや親人には、主取りなさらぬお心がけとな。
勘太　我々とてもその通り、よしなき

企て致さうより。

牛六　其日暮しが眞に氣樂さ。

源四郎　シテ、其方が、病氣の起りは。

伊右衛　僅かな女の死靈の祟り。

源四郎　ハテ、サテ、それは難儀であらうに。何れも方の何かはとお世話。シテ、少しも。

伊右衛　ハイ、心よいやら惡いやら、折に觸れては熱の差引き。どうで此身は浪人の、有附きあるまで庵主のお世話。

源四郎　存ぜぬこととて、何かとあなたの。

淨念　イヤ、もう、御懇ゆゑ、愚僧が方に。

源四郎　然らば拙者も暫く御庵に。

伊右衛　どうでこの雪のやむまでは、親も伜も掛人。どなたも後かた。

皆々　また念佛を。

伊右衛　お頼み申します。

（ト唄、時の鐘になり、淨念、案内して、源四郎、その他、四人の人數、皆々奧へ入る。伊右衛門殘つて思入れ。上の方の障子をあけ、お熊、出來り。）

お熊　コレ、伊右衛門、緣の切れた親仁殿。思掛けなうこの庵へ。妾も離別のその後は、高ノの家へ取入つて、頂戴したる、あのかき物。今にでも持つて行きや、大なり小なり、御褒美ぢやが、そなたに渡したあの墨附、必ず共に。

伊右衛　どうで長らくこの庵に、掛つても居られぬ故、平內殿を賴込み、近々高ノへ有り附く手段。それもお前の下さつた、御判の据つた書物ゆゑ。

お熊　それは耳より。しかし、高ノへ奉公と聞いて、眞面目な親仁殿、妾が心にかなはぬ事を。

伊右衛　それも合點。いづれ近々この身の落付き。それは格別。シテ、母人はいつもの鼠が。

お熊　イヤもう、今日も數多の鼠。これも大方。

伊右衛　子年のお岩が、親子の者を苦しむる。思へば〳〵執念深い。

（ト思入れ。かすめたる禪の勤め。雪降つて來る。向うより小林平內、半合羽、大小、下駄傘にて、赤合羽の中間、挾箱をかつぎ、同じ侍一人、菅笠、合羽にて出來り、門口へ來り。）

平內　この庵室に同居のお方、伊右衛門殿に用事がござつて。

伊右衛　（トこれを聞き、）コレハ、小林平內殿。この大雪に。サヽ、これへ。

平內　発しめされい。

（ト思入れ。上座へ通る。お熊下に控へる。）

この程內談致せし通り、貴公御所持の殿の墨附き。拙者も披見のその上にて、

いよ／＼御判に相違なき事ならば、貴公を同道致せよとの仰せ。お目見得の節の用意の衣服、大小、相添へ。家來、その品。

中間　ハツ。

(ト衣服、大小を廣蓋に載せ、差出す。お熊、受取り、嬉しさうに持ち行き、)

お熊　これは／＼、あなた樣、このまア、雪に、御苦勞に存じまする。(トよき所へさしおく。)

平内　伊右衛門殿、殿よりの下され物。受納おしやれ。

伊右衛　忝う存じまする。然らばお目見得の儀は、貴殿方より。

平内　それも其許所持おしやる、殿の御判の据りし墨附き。披見致さう。

(トこれにて、伊右衛門思入れあつて、)

伊右衛　サア、その墨附の儀は、かゝる他人の入込む草庵。殊には病中。それ故外へ預け置きましたれば、後方迄に。

(トお熊心得ぬ思入れにて、)

お熊　コレ／＼伜、あれほど其方に渡した大事の。

伊右衛　ハテ、お氣遣ひなされまするな。いつれ後方、御披見あつて。

平内　然らば拙者は、又ぞろこれへ。必ずともに、その節は。

伊右衛　お目に掛けるでござりませう。御前宜しう。

平内　お暇致さう。

(ト合方、時の鐘にて、件の品は殘して家來を連れ、引返して入る。お熊差寄り、)

お熊　コレ、伜、あの大切な書物を、其方はなんで。

伊右衛　それもやつぱり、この身の爲に。訴人せうと申した秋山、あの品渡して少しの中を。

お熊　すりや、かの品で。

伊右衛　取返し參ります。お氣遣ひなされまするな。

(トお熊思入れ。此時、暮六つの鐘が鳴る。)

お熊　ありやもう、暮六ツ。

伊右衛　お前も私も、熱氣の時刻。冷えない樣になされませ。

お熊　わが身を大事に。

伊右衛　ドリヤ、明をつけませうか。

(ト思入れ。時の鐘。唄になり、お熊臥間の障子屋臺へ入る。伊右衛門、ありあふ行燈へ灯をともし、門口をあけて、)

ア、、積つたわ。眞白になつたな。

(ト思入れ。あたりを見廻す。門口に菰をかむり、雪を負うて、長兵衛寢てゐる。伊右衛門、よく／＼見て、)

ア、、この大雪に軒下の宿無し。初雪の樽拾ひよりも、みじめな態だ。(ト思入れ。臺詞いひながら流れ灌頂に向ひ、

卒塔婆を見て、）戒名つけても俗名は、やはりお岩としるし置くは、世上の人の回向なと、受けたらよもや浮かまうと、あとの祭りも、怖さが一倍。産後に死んだ女房子の、せめて未來を。

（ト思入れ。手桶の中の柄杓を取つて、立ちよる。こゝにて、寝鳥、薄ドロ／＼、一ツ鉦なる。伊右衛門、白布の上へ水をかける。この水、布の上にて、心火となる。伊右衛門、たじ／＼となる。ドロ／＼烈しく。雪しきりに降る。布の中より、お岩、産女の拵へにて、腰より下は血になりし體にて、子を抱いて、現はれ出る。伊右衛門、ふツと見て、慄ツとして、後へ退り、入替つてお岩、上の方へ行く。此時、お岩の足跡は、雪の上へ血にてつける事。伊右衛門、後退りに中へ入る。お岩、ついて入る。中には、引きちぎりし紙帳、よき所に散しある。その上を、お岩歩む。こゝへも血の足跡つき、よろしく。お熊が寝てゐる方をも、チロリと見やつて、恨めしげに立ち身。伊右衛門さし寄つて、）

伊右衛　ハテ、執念の深い女。コレ、亡者ながらも、よく聞けよ。喜兵衛が娘を嫁に取つたも、高ノが家に入込む心。義士の面々、手引きしようと、不義士と見せても心は忠義。それを、あざとい女の恨み。舅も嫁も俺が手に、かけさせたのも汝がなす業。その上、

伊藤の後家も乳母も、水死したのも死靈の祟り。殊に水子の男子まで横死させたも、根葉を斷やさん亡者の祟りか。エヽ、恐しい女めだな。

(トきつと云ふ。お岩、この時抱きたる赤子を見せる。伊右衞門、思入れあつて、)

ヤヽヽ、そんなら、あの子は亡者の手しほで。(ト思入れ。嬉しげに赤子を受取り、)まだしも女房、出かしたく。その心なら浮かんでくれろ。南無阿彌陀佛く。

(ト子を抱いて念佛申す。お岩、此時、兩手にて耳を押へて、聽入れぬ思入れ。この時、門口に伏したる野臥りの長兵衞、嗄はれ聲にて、上る。)

長兵衞　アヽ、また鼠が。畜生めく。

(ト跳ね起きて、追散らす。ドロくにて、鼠數多むらがり、障子の中へ入る。此とたん、お岩、美事に消ゆる。伊右衞門、悔りして抱きたる赤子を取落す。此子は忽ち石地藏となる。障子の中にて、お熊の叫り聲する。伊右衞門、こなしあつて、)

伊右衞　ハテ恐しい。

(ト思入れ。ドロく、打上る。長兵衞内を見て、)

長兵衞　コレ、そこに居るのは、伊右衞門殿か。

伊右衞　秋山殿。ヤレく、こなたを尋ねる最中。これ、貴樣に渡した書物にて、高ノの家にあり附けた。早くあの品、戻して下さいく。

長兵衞　サアく、戻すよく。俺もこなたに無心いうて、金の代りのあの書附き。持つて歸つた其夜から、どこからうせるか多くの鼠。髮の毛、爪まで嚙られて、眞に難儀だ。返してしまはうく。

伊右衞　スリヤ、こなたへも、鼠がついたか。アヽ、これもお岩が。(思入れ)南無阿彌陀佛く。(思入れ。)サ、返す氣ならば、あの書物を。

長兵衞　返しは返すが、貴樣の仕業で多くの人を殺したる、既にその科此方へ掛つた。殊に官藏伴助まで、皆卷添への人殺し。コレく、民谷、これには大方、譯があらうナく。

伊右衞　サアく、その譯といふは、元、俺が母が、高ノの家中の娘ゆゑ、師直樣へ手蔓がよさに、悴の俺が浪人の身を苦に病んで、高ノの家へ仕官の願ひ。それが此節、聞濟みあつて。

(ト件の話の中、よき時分より、長兵衞の頭の上へお岩の死靈、逆さまに下り來り、長兵衞の襟にかけゐたる手拭にて、長兵衞を縊り殺す。長兵衞、聲を立つる故、お岩長兵衞の口を押へて、長兵衞落入る。右の死骸を、お岩件の手拭にて、欄間

の中に引込む。伊右衞門、これを知らず、此時ふつと見つけて、悔りして立寄らんとする。此時、天井より血汐タラ〳〵と落ちる。伊右衞門、キツト見上げて、)

伊右衞　これ、お岩が。

(ト思入れ。此時、上より、長兵衞が預りし書物、落つる。伊右衞門、手早く取つて、)

こりや秋山へ預けし墨附き。これさへあれば。

(ト思入れ。此時、向うよりバタ〳〵になり、小林平内、身輕になり、捕手四人從へ走り出て、門口へ寄り、)

平内　伊右衞門殿〳〵、先刻の契約、披見のために早速これへ。

伊右衞　それは御苦勞。さりながら、貴公の出立ち、何とも以て。

平内　かゝる姿も高ノの家中、伊藤喜兵衞が親子の者共、殺害なせしは關口官藏、下部作助の二人が仕業と、早速召捕り、路にて預け、ついでに書物披見の爲。サヽ、少しも早う。

伊右衞　然らばこれにて、内見あつて、

(ト差出す。平内、受取る。此時、薄ドロ〳〵。件の墨附きを開く。いつの間にかこの書物、鼠喰にて、御判文言喰ひちらしある體。平内は悔りし、)

平内　ヤヽヽヽ、こりやコレ、御判も文言も、鼠の齒にて喰ひ裂きあれば、反古も同然。こりやどうぢや。

(ト呆れる。伊右衞門取つて、よく〳〵見て、)

伊右衞　眞に喰ひ裂く鼠の仕業。これもお岩が死靈の業か。ハテ、是非もない。

(ト思入れ。)

平内　役にも立たぬ暫時の隙入り。此旨、主人へ言上致さん。さすれば最前渡せし品々。家來ども、取上げい。

捕手　ハア。(ト件の廣蓋のまゝ、取上げる。)

伊右衞　スリヤ、下されし品々まで。

平内　持歸つて右のあらまし、披露致さん。餘りと申せばたはけた民谷。イヤ、馬鹿々々しい。

(トあざ笑ふ、時の太鼓になり、捕手を連れ、向うへ入る。伊右衞門見送りゐる。此時、源四郎出掛り覗ひゐる。)

伊右衞　折角、母の志、この身の出世のこの墨附き。鼠の仕業も、お岩めが死靈の祟り。モウ此上は立てた卒塔婆も。

(ト門口へ行かうとする。覗ひゐたる源四郎、走り寄つて伊右衞門を引留め、きつとなつて、)

源四郎　コリヤ伜、わりや腹立つて、あの卒塔婆を、蹴にもかけん心ぢやナ。

伊右衞　施餓鬼回向も聞き入れぬ、あの

亡者め。戒名なりと。
（ト行くを、引ツとらへて、）
源四郎　ヤイ、道わきまへぬ不忠者めが。
（ト思入れあつて、）コリヤ、ヤイ、聞き
わけのない亡者より、無得心な不義士
のおのれ。あの母親が縁につれ、敵高
ノの館へ取入り、奉公願ふ道知らず。
さすれば親の身共まで、不忠の汚名を
取るわいやい。エヽ見下げ果てたる畜
生め。
（ト思入れ。伊右衞門こなしあつて、）
伊右衞　親仁どの、敵の館へ諂らうも、
義士の輩手引きのために。
源四郎　まだ吐すか。何のおのれに其の
一言。この親は、エヽ聞くまい。かゝ
る未練な民谷の一族、武士の風上にも
置かれぬ奴。親が手にかけ。（ト腰刀抜
かんとする思入れあつて、刄物なきゆゑ、）
以前にあらぬ、今は出家も同然な、人
に物乞ふ修行の身。（ト思入れあつて、邊
りの伏せ鐘の撞木を取つて、伊右衞門をし
たゝか打つて、きつとなつて、）勘當ぢや。
親でも子でもない。おのれ。
伊右衞　エヽ、左樣なら親仁樣、アノ、
私を。
源四郎　親ではない。エヽ、勝手にしをれ。
（ト撞木打ちつける。唄、時の鐘になり、
源四郎、思入れあつて、奥へ入る。伊右
衞門殘つて、）
伊右衞　昔氣質の偏屈親仁。勘當された
も、やつぱりこれもお岩の死靈か。（思
入れ。）イヤ、呆れたものだ。
（ト思入れ。その時、障子の中、物音して
お熊、苦しむ態にて、）
お熊　アレ〳〵、鼠が〳〵。
（ト狂ひ出て、のた打ち廻る。所々に鼠群
がる。薄ドロ〳〵。伊右衞門、介抱して、）
伊右衞　コレ〳〵阿母、心を確かに、氣を
確かに。コレ阿母。コレ。エヽ、畜生め。
（ト思入れ。撞木を取つて鼠を逐散らし、）
モシ、又刻限た。お賴み申します〳〵。
（トこの聲に、淨念はじめ以前の四人が
出來り、）
淨念　起りましたか〳〵。ちつとも早
く、お念佛〳〵。
四人　心得ました〳〵。（ト苦しむお熊を
珠數の中に取りこめ、）サア、お念佛〳〵。
淨念　南無阿彌陀佛。
四人　南無阿彌陀ン佛〳〵。
（ト伊右衞門も珠數に取附き、百萬遍にな
る。お熊、矢張、苦しむ。薄ドロ〳〵。
よき時分にお熊が側へお岩、ホツと現は
れ、お熊を捕へて、惣身をゆすり〳〵、
種々と引廻す。お熊、これにて苦しむ。
皆々、これを知らず。）
伊右衞　サア〳〵、念佛々々。
（ト思入れ。皆々念佛申す。お岩、伊右衞

門が顔をきッと見つめながら、お熊を苦しめる。)
又も死靈の、眼前に。サ、、念佛々々。
(ト思入れ、皆々繰りかけ〳〵唱ふる中、お岩、お熊を捕へて、咽喉へ喰ひつき、喰ひ殺す。伊右衞門見つけて、)
ヤ、、、母ぢや人をこの樣に。
(ト思入れ。立ちかゝる。お熊が喉、糊紅にて皆々、わッといふて、珠數投捨て、奥へ走り入る。伊右衞門、刀を取つて、)
おのれ、死靈め。
(ト思入れ。拔いて斬りつける。お岩、ドロ〳〵にて、伊右衞門を苦しめ〳〵、下の方へ後ずさりに來り、壁のあたりへ寄る。伊右衞門これを見て、たじ〳〵として、上の方の障子へ、トンとこけかゝり、障子、倒るゝと、一度のとたん、この內に源四郎が首掛りして、下り、お岩美事に消ゆる。一度の仕組み。伊右衞門見つけ、)
ヤ、、、親仁樣にも首かゝり。二親ともに暫時の中に、エ、、淺ましきこの骸。これも誰ゆゑ、お岩めゆゑ。エ、口惜しい。
(ト無念のこなし。向うより、官藏伴助走り來り、內へ駈込むゆゑ、恂りして飛退く。後より平內、捕手を引き連れ、覗ひ〳〵、つけて來り、門口に覗ひ居る。)

官藏　伊右衞門殿〳〵、こなたの舊惡何もかも、拙者が業と云ひ立てゝ、伴助までも繩かゝり。

伴助　お前のお身に科もなく。いひ拔け立つて事納まり、油斷を見濟まし繩拔けして、こゝまで來ました。

官藏　ちつとも早くこの隙に、落ちさつしやい〳〵。
(ト兩人せりたつていふ。)

伊右衞　何かと貴公の心遣ひ。然らばひと先づ、此場を落ちのび。

二人　影を隱さつしやい〳〵。

伊右衞　合點だ。(思入れ。)しかし路銀を。

二人　捕つた。
(ト伊右衞門にかゝるを、拔討ちに二人を斬て捨てる。)

伊右衞　その手はくはぬ。俺もさうとは。

平內　そりや。

捕手　捕つた〳〵。
(ト伊右衞門へ掛かるを、すかさず、切り立て、美事に殘らず斬捨る。尤も、組子の後より赤合羽菅笠の中間態の者、此中へ交りゐて、門口に覗ひゐる。伊右衞門、身ごしらへして、)

伊右衞　死靈の祟りと人殺し。どうで遁れぬ天の網。しかし、一旦、遁れるだけは。
(ト門口へ出かける。菅笠の中間、外より雪を礫に打つ。心得て、刀を拔き放す。

此時合羽着笠脱ぎ捨てる。と與茂七、伊右衛門と一寸立廻つて、きつと留める。)

與茂七　民谷伊右衛門、こゝ動くな。

伊右衛　ヤ、われは與茂七。なんで身どもを。

與茂七　女房お袖が義理ある姉、お岩が敵の其方ゆゑ、この與茂七が助太刀して。

伊右衛　いらざる事を。そこ退け、佐藤。

與茂七　民谷は身どもが。

(ト思入れ。立廻つて、きツとなる。これより、薄ドロ／＼、心火立昇り、兩人立廻りの中、伊右衛門を苦しめる。思入れ。此時、鼠數多現はれ、伊右衛門が白刃に纏ひ、思はず白刃を取落す。すかさず與茂七、伊右衛門に斬りつける。立廻りよろしく、兩人きツとなつて。)

與茂七　これにて、成佛得脱の。

伊右衛　おのれ、與茂七。

(ト立ちかゝる。ドロ／＼、心火と共に、鼠むらがり、伊右衛門を苦しむる。與茂七、つけ入つて、きツと見得。ドロ／＼烈しく、雪しきりに降る。この見得にて。)

幕

このあと雪を用ゐて、十一段目、芽出度く夜討。

花街模樣薊色縫

花街模樣薊色縫

序幕

由井ヶ濱の場
稻瀨川の場

本舞臺。眞中に二間の菰張りの飾小屋。軒口に輪注進を釣してあり。上の方に橋の袂。下の方に番小屋。後に淺葱幕。よき所に柳の立木。總て鎌倉花水橋の體。こゝに足輕市介、木綿紋付の布子一本差しにて、棒の尖へ草鞋を下げたるを擔ぎ、中間權次、傳八の二人立つてゐる。この見得。通り神樂にて、幕明く。

權次　これ市介。今日はこの花水橋へ女犯の坊主が引かれて來て、追放にあふぢやァねえか。

傳八　それだから廣小路に、晒し者の小屋ができてゐらァ。

市介　べら棒め。こりやァ飾り小屋の居殘りだ。

權次　何で輪注進があると思つたが、それぢァ暮に賣れ殘つたのか。

傳八　さうして今日の女犯の坊主は、どこの寺の坊主だな。

市介　手前知らねえか。極樂寺の役僧で、清心といふ坊主だが、大磯の扇屋の内の十六夜といふ女郎に馴染んで、到頭終ひは追放だ。

傳八　然し、坊主だつて野郎だつて、元は同じ人間だから、女を嫌ふ筈がねえ。

權次　これから見りやァ、おらが宗旨の親鸞樣は通り者だ。肉食妻帶をお許しなされてあるとは、何と有難え宗旨ぢやァねえか。

市介　それから見ると、此方等は、遙かに勝つた名僧知識、楊枝を賣るか草鞋を賣らにやァ、鰯の餞で酒も呑めねえ。

傳八　そりやァ手前の云ふ通り、おれなどは後月から二月越しの名僧知識だ。

權次　何にしろおれが宗旨で、何處ぞで一ぺい飲まうぢやねえか。

市介　久しぶりだから付合ひてえが、何をいふにも一文無しだ。

傳八　そりやァ案じるな。あゝ云ふから、權次が錢を出すだらう。

權次　ナニおれがあるものか。錢がありやァ一人で飲まァ。

市介　それぢやァ手前、傳八が當か。

權次　いや、手前の草鞋が當だ。

市介　これを飲まれてたまるものか。やつとのことで作り溜めた、三百だけのこの草鞋。晩に寢酒に一合買ひ、夜鷹を百で引込む積りだ。

傳八　そいつァいめえましい話だ。

權次　何でもいゝから一合買へ。後はおれが呑込まア。
市介　その呑込みが險難だ。
傳八　ぐづ〳〵云はずに來いといふに。
市介　エヽ、惡い奴につかまつたな。
（ト傳八は市介を引張り、權次附いて、上手橋の方へはひる。ト花道より花賣り佐五兵衛、鼠の着附腰衣の小坊主教月の手を引き出で來り、花道にて、）
教月　これ佐五兵衛どの。清心樣のござるところは、まだよほどあるかいの。
佐五兵衛　いえ〳〵遠くはござりませぬ。ついそこに見える橋詰へ、今に引かれてござりませう。
教月　そんなら向うで待つてゐませう。
佐五兵　さア〳〵轉ばぬやうにござりませ。
（ト兩人舞臺へ來り、）
今後の番屋で聞けば、もう引かれてござるのにきつう間はないとのこと。獄屋へお出でなされてより久しうお目に懸らぬが、嘸お窶れなされたらう。これから何處へお出でなさるか、せめて御身の片付と思つた金も手に入らず、もしやと思つた悴が方も、今に沙汰がないからは、これも出來ぬと極まつた。ア、金は世間に無いと見える。
教月　これ佐五兵衛どの。お金はないがお錢ならこゝにお布施があるわいの。（ト懷より紙包みの錢を出す。）
佐五兵　ア、いや〳〵今何も要りませぬ。落さぬやうに持つてござれ。いやもう引かれてござりさうなものだが。（ト向うを見て、）噂をすれば影とやら、アレ〳〵向うへ。
教月　清心樣がござるかいの。
佐五兵　ア、お出でなされまする。邪魔になつたら叱られませう。片陰へ寄つてござりませ。
（ト兩人は下手番小屋の陰へはひる。時の太鼓に說教樣の合方になり、花道より菖蒲革の足輕二人一、二、六尺棒を持ちて先に立ち、後より清心、月代を延ばしたる坊主鬘淺葱の着附にて繩にかゝり、黑四天の捕手二人これを持ち、寺澤塔十郞、半纏打割羽織大小にて附き、その後より中間二人、陣笠床几を持ち附添ひ出で來り、直に本舞臺へ來り、捕手は眞中へ莚を敷き、）
捕手　下に居らう。
（トこれにて、清心莚の上へすまひ、繩取り後に控へる。寺澤、上手の床几へかかり、思入れあつて、）
塔十郞　極樂寺教善弟子清心。
清心　はッ。（ト辭儀をなす。）
塔十郞　『其方事、出家たる身を以て、大磯宿扇屋抱へ十六夜と申す遊女に馴染

み、酒色に多くの金銀を使ひ捨て候段重々不届きに就き刑に行ふべきを、格別のお慈悲を以て、鎌倉谷七郷お構ひにて、追放申しつくる者也。」

清心　はッ。

塔十郎　有難くお受けいだせ。

清心　一子出家なす時は九族天に生ずとて、亡き父母の菩提のため剃髪なせしこの清心。わが師教善の教を受け、これまで二十五年の間日夜勤行なしたるも、いまだ凡俗の輪廻放れず、色道に迷ひ入り、遂ひにお上のお仕置蒙むり、今ぞ本心に立返り、初めて眼覺めしわが心。重き刑罪御赦免あつて、追放仰せつけられし御仁惠の程、何程か有難う存じ奉りまする。（ト辭儀をなす。）

塔十郎　ソレ、縛を許し遣はせ。

捕手　はッ。

（ト清心の繩を解く。塔十郎思入れあつて、）

塔十郎　扨、これまでは役目の表。某事もその以前は極樂寺の教善老に、素讀の教へを受けたる者。申さば其方とは相弟子同然。それ故餘所には思はねど、何を云ふにも先達て極樂寺へ盗賊入つて、頼朝公より奉納ありし三千兩盗みし者の行方知れず。それ故汝に疑ひかかり一度拷問なしたれど、覺えなき言譯相立ち、女犯の罪にて則ち追放。常に汝が才智をば老師にも褒められて、二十五年がその間教諭なしたる甲斐もなく、嘸残念に思はれん。まだ年若なことなれば心を改め修行なし、老師の恥辱を雪がずば、眞の僧とは云はれまい。

清心　御親切の御教諭有難う存じまする。一先これより當所を立退き、いかなる深山幽谷の荒れたる寺も厭はずに、この身を寄せて修行なし、元の出家に立歸り、再びお目にかゝりませう。

塔十郎　その時こそは某が、谷七郷のお構ひ、上へ御免を願うた上、目出度く再會いたすであらう。

清心　先づそれまでは御機嫌宜しう。

塔十郎　汝も堅固に修行致しやれ。

清心　有難うござりまする。

塔十郎　最早役目相濟めば、上へこの由申上げん。

（ト立上る。清心思入れあつて、）

清心　左様なれば寺澤様。

塔十郎　清心。長居はならぬぞ。

清心　はッ。（ト辭儀をなす。）

塔十郎　家來參れ。

（ト時の太鼓になり、塔十郎先に、中間等附いて花道へはひる。ト、バタ／＼になり、下手より佐五兵衛、敎月、走り出で來りて、）

佐五兵　清心様。お達者でござりました

か。

兩人　お目出度うござりまする。（ト兩人清心に縋る。）

清心　オヽ、誰かと思へば十六夜が親父、新發意の數月か。よう訪ねて來てくれたなア。

（トこれより、しんみりとしたる合方になり、清心兩人を見て嬉しき思入れ。佐五兵衛は窶れし姿を見て淚をこぼして、手拭にて拭きながら、）

佐五兵　アヽ僅かお目にかゝらぬ中、この世の地獄といふ程な、獄屋の住居にこのお窶れ。思へば〳〵おいとしい。かかるお姿に致したも元の起りは皆娘。思案の外とは申せども、十六夜故に御追放。どうもそれが濟みませぬ。お許しなされて下さりませ。（ト手を合はせ拜む思入れ。）

清心　アヽその樣に云はれては、わしがそなたへ面目ない。なんの十六夜が科であらう。出家の身にてあるまじき色に迷ひしばつかりに、縄目の恥を受けたるは、誰を恨まんやうもなし。これ皆愚僧が心一つ。まさしく佛の御罰なり。必ず心にかけて呉りやるな。

佐五兵　それぢやというてこの樣な、見る影もないお姿に。

清心　ア、コレ〳〵、何事も歎くならぬ前。今更云うて返らぬことぢや。（ト氣を替へ、數月が頭を撫りながら、）これ數月。よう顏を見せて呉れたな。

數月　アイ、今日お前樣が御追放になり、遠い處へお出でと聞き、いつお目にかゝられるかこれ限りになるか知れぬ故、お經を教へてお貰ひ申した、お禮にこれまで參りました。

清心　それは〳〵感心な。よく尋ねて來てくれた。そなたは僅か一二年、これまで長の年月に久しう教へた者もあれど、扨々人は薄情にて、落目になれば誰一人尋ねて呉れる者もない。そなたばかりぢや。嬉しいぞよ。

佐五兵　イヤもう、年に似合はぬ數月どの、佐五兵衛そなたが行きやるなら一緒に連れて行てくれと、昨日からのお頼み。今朝も疾うから、さア行かうまだか〳〵と急りたてられ、わしが連れられて參りました。

（ト數月、懐より紙包みの布施を出して、）

數月　これは少しばかりでござりますが、此間から、葬式や法事のお布施の貰ひ溜を、お小遣ひに上げまする。お遣ひなされて下さりませ。

（ト出す。清心嬉しき思入れにて、）

清心　何にも云はぬ、忝い。僅か十か十一の幼い心にさ程まで追放に遭うて困らうと、わしを思うてこのお布施。

忝い〳〵。（トいたゞいて、）志は清心がこの通りいたゞくぞよ。然し一寺の住持たるわが兄弟子も多くあれば、何れへなりとも尋ね行き合力受けて旅立てば、このお布施には及ばぬ程に、これはそなた、持つて歸りや。
数月　イエ〳〵お前様に上げませうと、折角溜めたこのお布施。どうぞ受けて下さりませ。
清心　志は受ける程に、これはそなた持つて行て、好な本でも買ふがよい。
数月　イエ〳〵、假令何と仰しやつても、これは持つては歸りませぬ。
清心　それぢやというて、これを受けては。
（ト兩人お布施を突きやる。佐五兵衛思入れあつて、）
佐五兵　ア、もし〳〵清心様。折角あの様に云はしやるもの。数月どのゝ志、受けてお上げなされませ。所詮お返しなされても、受取らつしやることぢやござりませぬ。
清心　そんならそなたの志。
数月　お受けなされて下さりますか。
清心　忝く貰ひまする。
数月　エヽ有難うござりまする。
清心　（お布施を懐へ入れ、）佐五兵衛どの。見さつしやれ。年よりませた利口な数月。これに就けても思ひ出すは、わが來し方の物語。生れは下總舟橋在、漁夫の悴であつたれど、一人の兄が十歳の年、神隠しに遭ひ行方知れず。それを氣病に兩親とも引續いて果敢ない最期。世に頼り無いわしが身に、亡き兩親のそのために極樂寺の弟子となり、子供の折はよき出家になるであらうと師の坊が、明暮云はれしわが身がこの仕儀。そなたは利口な生れ故、成人なさば一筋の佛道修行に心を委ね、惡しき道に迷ふまいぞ。一度は知れまい二度はよいと度重なればその果ては、佛菩薩がお許しなされぬ。遂には上のお咎め受け、御恩になりし師の坊へ恥辱を與へその罰にて、その身も居所立所なく、これまで積みし勤行も一時に空しく、譬へに云ふ實に千日に刈つた茅。この清心がよい手本。どうぞその身を全うに、一ヶ寺をも持つやうに。必ず辛抱しませうぞ。
数月　有難いその御教諭。よう辛抱いたします。
佐五兵　今清心様が仰しやつたこと、大きうなつたらお守りなされ。よい御出家にならつしやりませ。オヽ数月どので忘れてゐたが、娘があなたに上げてくれと昨日寄したこの小袖。穢れし衣類を脱ぎすてゝ、清くお着替へなされ

ませ。（ト風呂敷より小袖を出す。）

清　心　すりやこの衣類を十六夜が、われにこしらへ呉れしとか。

佐五兵　はい。お小袖、襦袢、帶、手拭、草履までござりまする。

清　心　ア丶遊里に稀な志。忝く貰ひます。

佐五兵　さア、少しも早く、穢れし布子きれいにお着替へなされませ。

清　心　イヤ、このまゝ着るも穢い故、錢湯にて身を淨め、さつぱりと着るであらう。

佐五兵　いかさま。それが宜しうござります。シテ、あなたにはこれより何處へ。

清　心　人目にかゝるも面目なき故、今宵の内に當地を立退き一先京地へ足を留め、心を改め修行なし、まことの出家となる心、不實な者と思はうが、かかる仕儀故十六夜にも、唯何事もこれまでと思ひ諦らめくれるやう、そなたから云うてくりやれ。

佐五兵　ア丶それはよい思召し。實は出家の御身分にあるまじきことながら、濡れた袖故是非もなく、ア丶惡いことぢやと思つてをりましたが、雨降つて地固まると、これを幸ひふッつりと思ひ切らうと仰しやるは此上もない御分別。そりやもう娘もこれ限りに上方へお出でなされたと聞いたなら、嘸やさぞ本意なく思ひませうけれど、それもいとし可愛いと思ふみんなあなたのお爲故、假令何と申さうとも、親の高下でわしが彼女には思ひ切らせます、必ずお案じなされまするな。

清　心　實は一目會ひたけれど、會うたら未練が出ようと思ひ。

佐五兵　お會ひなされぬ方が宜しうござります。然しこの樣に申しましたら、極樂寺にゐる中は知らぬ顏で娘に會はし、今の身になつた故會はさぬなどと、清心樣、決して思うて下さりますな。如來樣掛けてこの佐五兵衛、そんな心はござりませぬ。

清　心　そなたの心は知つてゐる。何でわしが疑はう。（ト時の鐘鳴るに思入れあつて、）最早暮れるに間もあるまい。いつまで云うても名殘りは盡きぬ。少しも早く歸られよ。

佐五兵　もうお暇いたしませうが、どうやらこれぎり會はれぬ樣で、

数　月　お名殘り惜しう存じます。

清　心　いかさま。これが一年や二年で歸ることにも行かず。

佐五兵　長い月日のその中には。

数　月　老少不定の世の中に。

清　心　これが名殘りにならうやら。

(ト敎月の手を取り思入れ。)

佐五兵　アヽ忌はしいこと仰しやりませ。鶴龜々々。

淸心　そんなら目出度く。

佐五兵　その中お目に。

兩人　かゝりませう。(ト立上る。)

敎月　左樣なれば淸心樣。

淸心　よう經文を覺えませうぞ。

敎月　有難うござります。

佐五兵　さア、行きませう。

(ト唄、時の鐘にて佐五兵衞敎月の手を引き、思入れあつて花道へはひる。淸心見送り思入れあつて、)

淸心　アヽわが身に付けても、敎月が年よりませし志。あれにて行かば、行く行くは善い出家になられんが、愼み難きは色慾戒。アヽわしが樣にならねばよいが。(ト思入れあつて、)最早黃昏、暗きを幸ひ人の目褄にかゝらぬ中、少しも早く。(ト風呂敷包みを持ちて立上り、)とはいへ思ひ切つたれど、二年この方馴染みし十六夜、一目なりとも、(ト思入れあつて手にてあたりを拂ひ、)アヽ、煩惱の犬追へども去らず。南無阿彌陀佛〱。

(トぢつと思入れ。寺鐘にてこの道具廻る。)

本舞臺。三間の間。中足の二重、石垣の蹴込み。上手へ寄せて百本杭の波除。舞臺前一面に流れの心。二重上の方に辻堂の後ろを見せ、下の方は柵矢來。見越の松。總て百本杭の體。時の鐘、通り神樂にて、道具留る。

(ト、バタ〱にて、辻番より、夜鷹ふが〱のお金、逃出て來るを、以前の足輕市介追ひかけ來りて、)

市介　これ〱お八重、今の百を返してくれ。

お金　何であれを返すものか。昨夜もたゞで來たぢやァねえか。

市介　假令昨夜は借りにしても、二十四文の所を百取られてたまるものか、今夜はちつと錢が要るからどうかあれを返してくれ。

お金　そんなけちなことを云はずと遊んでお出でな。

市介　どうして〱。今も云ふ錢の要る事があるのだから、中々遊んではられねえ。

お金　遊んで行けずば、明日の晩お出でな。

(ト行きかゝるを市介捉へて、)

市介　人がこんなに頼むのに、手前は錢を返さねえか。

お金　何でお前に返すものか。

市介　うぬ。さうぬかしやァ。一寸か

うして。
（トお金は帶際を捜へるを、お金男の思入れにて、）
お金　何をこしやくな。
（ト兩人宜しくをかしみの立廻りあつて、百錢を奪ひ合ひて落す。）
おや／＼、大變お錢を落した。
市介　なに、落したと。
お金　半分上げるから捜しておくれ。
（ト兩人にて捜し、淨瑠璃の觸書と百錢とを拾ひ上げる。）
市介　錢もあつたがこんな物を拾つた。
お金　何ぞお錢になるものか、早く讀んでお見な。
市介　おれに首尾よく讀めりやァいゝが。（ト觸書を開きて、）「淨瑠璃名題——、淨瑠璃太夫清元——三絃清元——、相勤めまする役人岩井粂三郎、市川小團次。」
お金　何のことだ。そりやァ淨瑠璃の觸書だ。
市介　さァ約束だ。半分よこせ。
お金　何で半分やるものか。
市介　うぬ。取らねえで置くものか。
お金　いゝ加減に強情を云ひねえな。
市介　ォヽその強情で思ひだした。いよ／＼この所、淨瑠璃初り。
お金　そのため強情。
市介　おきやァがれ。
（ト波の音、通り神樂にて、お金上手へ逃げてはひるを、市介後より追ひかけてはひる。）
（これにて下手の摘矢來を打返し、山臺の上に清元連中居並び直に淨瑠璃になる。）
〽朧夜に星の影さへ二つ三つ四つか五つか鐘の音も、もしや我身の追手かと胸に時打つ思ひにて、廓を拔けし十六夜が、
（ト本釣鐘、合方にて、花道より十六夜、紗帶部屋着の女郎形にて、手拭を冠り走り出で來り、花道へ留り思入れあつて、）
〽落ちて行方も白魚の船の篝火に、網よりも人目厭うて後前に心置く霜、川端を風に追はれて來りける。
（ト十六夜花道にて振あつて本舞臺へ來り、思入れあつて、）
十六夜　嬉しや今の人聲は、追手ではなかつたさうな。父さん始め妾まで御恩になりし清心樣。今日御追放と聞いた故、ぬしに會ひたく廓を脫け、こゝまで來ごとは來れども、行先知れぬ夜の道。どうぞお目にかゝられゝばよいが。
〽暫し佇む上手より梅見歸りか船の唄、〽忍ぶなら／＼、闇の夜はおかしやんせ。月に雲の障りなく、しん

き待宵十六夜の、うちの首尾はえゝ
よいとの〳〵。〽聞く辻占にいそいそと
そと雲足早き雨空も、思ひがけなく
吹きつれて、見交す月の顏と顏。
（ト十六夜思入れあつて行かうとする。上草履の鼻緒切れ、これを直さうとして面倒だといふ思入れにて草履を流れへ打込み、上手へ行かうとする。この時上手より清心、色氣のある無地の着附に黒の頭巾を冠り出て來り、行違ひ、互ひに避け合ひ、月出で兩人顏を見合せ、）

清心　ヤ、十六夜ではないか。

十六夜　清心樣か。

清心　ア、惡い所へ。
（ト行かうとするを、捉へて、）

十六夜　會ひたかつたわいなア。

〽縋る袂もほころびて、色香こぼるる梅の花。さすがこなたも憎からで。
（ト十六夜清心に縋りつく、これにて清心是非なき思入れにて、）

清心　見ればそなたはたゞ一人。夜道厭はず今頃に、廓を脱けてどこへ行くのぢや。

十六夜　何處へとは、清心樣。昨日父さんのお話に御追放の上からは、もう廓へもこれまでの樣にお出でもなさんすまい。ひよつとしたなら其座から、何處へお出でなさらうやら知れぬと聞いて、なつかしく、長い別れにならうかと、思へば人の云ふことも、心にかゝる辻占ばつかり。いつその事と暮合に廓を脱けてやう〳〵に、お前に會ひたく來ましたわいな。

清心　（思入れあつて、）最早そなたに會はれまいと、思つてゐたに測らずも、こゝで會うたは盡きせぬ緣。如何なる過去の宿緣やら、見る影もない清心を、斯くまで慕ふそなたの親切、今日も今日とてこの小袖、送つてくれたばつかりに、身幅も廣き清心が、知邊の方へ行かれるわい。

十六夜　知邊の方と云はしやんすが、さうしてお前はこれから何處へ。

清心　サ、何處といふ當もなけれど、追放に會ふ上からは此處に足は留められず、一先當地を立退いて京に知邊の者あれば、それを賴つて行く心。

十六夜　そんならわたしも共々に、連れて行つて下さんせいな。

清心　未來をかけたそなた故、連れて行きたきものなれど、行かれぬわけはコレ十六夜、ふとした心の迷ひより、女犯の罪に追放の刑を受けたるこの清心。わが身ばかりか幼きより、御恩を受けし師の坊の名まで穢せし勿體なさ。
〽たゞ何事もこれまでは、夢と思うて清心は、今本心に立返り。

そなたのことを思切り、京へ登つて再行なし出家得道する心。そなたも廓へ立歸り、まだ年季さへ長いとやら、よい客見立て身を任せ、親へ孝行盡すが第一。

十六夜　そりや情ない清心樣。

〽今更云ふも愚痴ながら、悟る御身に迷ひしは、蓮の浮氣や一寸惚れ、浮いた心ぢやござんせぬ。彌陀を誓ひにあの世まで、かけて嬉しき袈裟衣、結びし緣の珠數の緒を、たまたま會ふに切れよとは、佛姿にありながら、お前は鬼か清心樣。聞えぬわいなと取縋り、恨み嘆くぞまことなる。

（トこの中、十六夜宜しくあつて清心に縋り泣く。清心もちつと思入れあつて、）

清心　この清心をさ程まで、思うてくれるは嬉しいが、これが似合ふといふではなし、わしは形さへ人並ならず、見る影もない所化上り。今大磯で評判のそなたを連れて行かれうぞ。他に男もないやうに、あの十六夜も物好と、何れも樣がお笑ひなさる。世の譬へにも云ふ通り、釣合はぬは不緣の元ぢや。

十六夜　そりやもう他の女郎衆は、苦界の勤めの樂しみに浮氣なこともござんせうが、妾や一生身を任す男といふは心一つ。この身ばかりか父さんまで、常常からのお心添へ。その御親切の清心樣。死なば一緒と思うてゐるに、お情ない今のお言葉。どうでもあなたは妾をば、連れて退いては下さんせぬか。

清心　さア、それとてもそなたのため。少しも早く廓へ歸り、勤めを大事にしやいの。

（トこれにて、十六夜思入れあつて、）

十六夜　そのお言葉が冥土の土產。

〽岸より覗く青柳の、枝もしだれて川の面。水に入りなん風情にて。

（ト十六夜清心を恨めしさうに見て、死ぬ覺悟をなし、）

南無阿彌陀佛。

〽すでに斯うよと見えければ、清心あわて抱き留め。

（ト十六夜、前の川へ身を投げようとするを、清心縋り留めて、）

清心　ア、これ待つた。早まるな。

十六夜　イエ／＼放して、殺して下さんせ。

清心　これはしたり。そなたを殺せば親父どの、また弟がわしを恨み、女犯の上に重なる罪。それを知りつゝそなたをば、どう見殺しにならうぞいの。

十六夜　さア、その後前を考へれば、猶猶生きてはゐられぬ此身。

清心　そりや又何故、どういふ譯で。

十六夜　勤めする身に恥かしい、妾やお前の。

清心　エ。（ト思入れあつて、）そんならもしや、愚僧が胤を。

十六夜　あい、二月(ふたつき)でござんすわいなア。

（ト恥かしきこなし。）

清心　ホイ。

（ト當惑の思入れ。竹笛入りの合方(あいかた)になる。）

十六夜　さア、それぢやによつて廓へ歸り、妾や勤めがならぬ故、淵川へこの身を投げて死ぬ覺悟。不便(ふびん)と思はば一遍の、御回向(ごゑかう)お願ひ申しまする。

（と思入れにて云ふ。清心是非なき思入れ。）

清心　このまゝ別れて行く時は、そなたばかりか胎(はら)の兒まで、闇から闇へやらずばならず。トあつて一緒に伴はゞ。〽廓を脱けしそなた故、捉へられなば誘拐(かどはかし)。再び繩目に會はねばならず。是非に及ばぬ今宵の仕儀(しぎ)。殺すも不便連れても行かれず。こりやもうおれも共々に。

十六夜　一緒に死んで下さんすか。

清心　他(ほか)に思案はないわいの。

〽ほんに思へば十六夜は、名よりも年は三つ増し。ちやうど十九の厄年(やくどし)に、我身も同じ二十五のこの曉が別れとは花を見捨てゝ歸る雁(かり)。〽そこは常世(とこよ)の北の國、〽これは淨土の西の國。頼むは彌陀の御誓ひ。〽なまいだ〳〵南無阿彌陀。〽これがこの世の別れかと、互ひに抱き月影も、おぼろに霞む雨催(あまもよ)ひ。

（トこの内、兩人名殘りの思入れにて死ぬ覺悟をなし、トゞ手を取交しぢつと顔を見て、手を取り寄添ふ淨瑠璃の切(きれ)。時の鐘にて兩人ほぐれて立上り、）

此世で添はれぬ二人の惡緣。

十六夜　死ぬと覺悟極(きは)めし上は。

清心　廓の追人(おつて)に遭はぬ中。

十六夜　手に手を取つてこの川へ。

清心　浮名を流す心中に。

十六夜　明日は浮世の話し草。

清心　斯くと噂を聞かれたら。

十六夜　嘸父(とゝ)さんが後(あと)での歎き。

清心　それも前世(ぜんせ)の約束と。

十六夜　先立つ不幸を。

清心　許して下され。

兩人　南無阿彌陀佛。

〽西へ向ひて合はす手も凍る餘寒(よさむ)の川淀(かはよど)へ、ざんぶと入るや水鳥の浮名を後(あと)に。

（ト兩人よろしく思入れあつて、河の中へ飛び込む。水の音激しく、水煙りぱつと立つ、三重波の音にて、この道具廻る。）

本舞臺。正面二間の水門。左右高き石垣、此上草土手。松の立木。舞臺は川中の模様、總て稲瀬川西河岸の體。眞中に白魚の篝火を焚きし網舟ありて、四つ手網を下し、船の中に俳諧師白蓮實は大寺庄兵衛、きめ頭巾縞の被布、山刀一本差にて、煙草を喫みゐる。船頭三次、棹をさし船を繋ひでゐる。この見得、船の騷ぎの端唄、波の音にて道具留る。

三次　もし旦那。どうか本降りになりさうだつたが、いゝ鹽梅にあがりやした。

白蓮　然し、まだ安心はならねえ。雲足が早いから、もう一降りかゝるだらう。この一潮で切り上げよう。かゝればかゝる程止められねえ。

三次　いゝ所を二三番受けたら、手を締めてお終ひなさい。もう四つに近うございます。

白蓮　オヽもう四つに近いか。夜はよつほど詰つたな。それぢやァ餌治の終はねえ中、野暮なやつだが飯とせう。

三次　そいつァ有難うございます。旦那は御酒がいけねえが、二枚がけ位な大きな奴へ、熱燗をぶつ掛けて、ぐつとやつた心持は、アヽたまらねえ。喉がぐび〳〵する。

白蓮　然し鰻は酒呑にやァ、ひつこくつていけめえ。

三次　なにさ。海鼠や洗えものを好んで食ふのは意氣がりさ。まァ早え話が肴でも女でも、あつさりとしちやァうまくねえ。何でもひつこくこつてりと噯に出にやァうまくございませぬ。

白蓮　それぢやァ三次が小塚原の馴染は、二枚がけの熱燗だな。

三次　當てられました。いつぞや旦那にお目にかけてえが、潮前河豚を踏んづぶしたやうな、ごくお粗末な御面相だが、又云ふに云はれぬ味がございます。

白蓮　コウ〳〵、受賃は何を喰はせる。

三次　エヽ、今餌治で鰻を上げます。

白蓮　そいつァ御馳走たの。

三次　さういふ旦那も遊び好きだが、あの扇屋の十六夜さんは、座敷はつんとしてゐなさるが、面白味はございますか。

白蓮　さうよ。面白味のないでもないが、もう少し愛敬が欲しいな。

三次　それぢやァちつとお口に合ひませんね。モシ旦那。もうようございますぜ。

白蓮　オヽ手前の話でさつぱり忘れた。（ト立上り、四つ手網の繩を引き思入れあつて、）こいつァ何か引掛かつたわえ。おれにやァ重くつて上らねえ。

三次　何ぞ芥でも掛かりやァしねえか。旦那お退きなせえ。（ト網を引き、）成程こいつァべらぼうに重い。

（トぐつと網を引上げる。トこれに以前の十六夜かゝりゐる。）

オヤ、何か引掛かつて居ますぜ。

白蓮　（十六夜を見て、）むゝ、こりや女だ。

三次　ナニ、土左だえ。

白蓮　イヤ、まだ身を投げて間もねえ様子。どうか助けてやりてえものだ。御苦労だが引上げてくれ。

三次　飛んだ者がかゝりやァがつた。

（ト両人して、十六夜を船へ上げ介抱して、）

成程、こりや、たつた今飛び込んだばかりだ。

白蓮　ホンニ顔の色澤も。（ト十六夜の顔をちつと見て、）ヤ、こりや扇屋の十六夜だ。

三次　ナニ、十六夜さんだえ。ほんに違えねえ。十六夜さんだ。

（ト白蓮、紙入より氣付薬を出し、十六夜の口へ入れる。三次柄杓にて川の水を汲み、十六夜の口へ入れ、白蓮は抱へて胸を押しながら、）

白蓮　これ十六夜。氣をしつかりと持て。

三次　十六夜さん／＼。

（ト呼び生ける。これにて十六夜うんと心付く。）

しめた／＼。息を吹返した。

白蓮　これ、心が付いたか。氣をたしかに持て。

（トきつといふ。十六夜心付きて、）

十六夜　あい、氣はたしかになりましたが、妾や死なねばならぬ者。どうぞ殺して下さんせいな。

白蓮　これ十六夜。何で死なにやァならねえのだ。

（トこれにて十六夜心付き、白蓮を見てびつくりなし、）

十六夜　ヤ、思ひがけない白蓮さん。そんならお前に。

白蓮　さァ、どういふ譯か白魚の折も四つ手にかゝつたは、神や佛のこりやお助け。まだ命數の盡きぬおぬし。この結構な世を捨てゝ死なうといふは悪い了簡。何故あつて死なねばならぬ。

十六夜　さァそれは。

白蓮　佛隱者の白蓮と人にも知られた施し好き。假令何處の誰ぢややら知らぬ者でもこの網へ、掛かつたからは助けにやおかぬ。ましてこれまで馴染のおぬし、死なねはならぬといふ譯を、どういふ譯か話して聞かしやれ。品によつたらおれも男、どこがどこまで引受

けておぬしが難儀を救つてやらう。

三次　モシ十六夜さん。旦那があのやうに仰しやるから、悪い裁きはなさらねえ。包まず譯をお話しなせえ。

十六夜　さア、その譯は。

白蓮　膝とも談合、話して聞かしやれ。

(ト端唄の合方になり、十六夜思入れあつて、)

十六夜　今更お話し申すのも恥かしうござんすが、此間から時候に當り、店を退いて居りましたを、內證の旦那お上さんお爪どんと三人して、ふて寢をするのなんのと云うて、妾を打つたりたゝいたり、なんぼ苦界の勤めでも寢てゐるほどの煩ひに、どうまアお客に出られませう。出ねば手酷い遣手の折檻。責殺されて死なうより、いつそのこと一思ひ、淵川へ身を投げて死ぬのがましと廓を脫け、稻瀨川へ身を投げて、死ぬる覺悟でござんしたわいな。

白蓮　ハテさてそれは詰らねえ。さりとは一途な狹い了簡。死なずとどうともならうのに。

十六夜　それぢやというて、勤めの身故。

白蓮　さア勤めの身故金を積み、身請をしたら濟むことだ。

十六夜　エ。(ト思入れ。)

白蓮　今もおれが云ふ通り、思ひがけなくこの網に、おぬしがかゝつて上つたは、おれに助けろと神や佛の、云はばお指圖。おぬしが身請をしてやるから、三日なりともおれに從へ。情人があるなら改めて兄弟分の盃して、里になつて添はしてやらう。聞きやア親父もあるぢやアねえか。この年まで育つたは誰がお蔭だと思つてゐる。おのれ一人で育つたやうな、死なうといふは第一不孝。まア死ぬことは止めにしやれ。

十六夜　何とお禮を申さうやら、御親切な今のお言葉。ほんに涙のこぼれるほど有難うござんすが、どうもわたしや生きてゐては。(ト腹の子がといふ思入れ。)

三次　コレサ〳〵十六夜さん。そりやアお前悪い了簡。今旦那が何と仰しやつた。由良之助の臺詞だが、情人があるなら添はしてやらうと、あれ程までに仰しやるに、死なにやアならねえといふからは、他に譯がなくちやアならねえ。

十六夜　いえ〳〵他に譯というては。

三次　さア、譯がなけりやアうんと云つて、まアこの船に乗んなせえな。

(ト十六夜思入れあつて、腹の子を産むまで生きてゐようといふ心の思入れあつて、)

十六夜　お前までが共々に有難うござんす。そんなら妾や身輕になるまで。

白蓮　エ。

十六夜　いえさ、身儘にならば父さんが、嘸や悦びなさんせう。

白蓮　得心ならば明日とも云はず、今夜の中に三次をやつて、廓の片は付けてやらう。

十六夜　然しお前に多くのお金を。

白蓮　なにさ。高の知れたおぬしが身請。何にしろづぶ濡れで、家まで行くが冷たからう。柳橋の若竹でお銀が着物を借りて着せよう。

三次　若竹の姐さんのなら、丁度ようござりませう。

白蓮　それぢやァ川岸へ附けてくりやれ。

三次　合點でござります。

（ト三次舫ひを解く。かすめて波の音、十六夜川の中へ思入れあつて、）

十六夜　たしかにぬしは。（ト清心へ思入れ。）

白蓮　どうしたと。

（ト十六夜氣を替へて、）

十六夜　さァ、ぬしにはたしか、お上さんが。

白蓮　あつてもいゝわえ。圍つておくわ。

十六夜　それが知れたら。

白蓮　はて氣の弱い。

三次　もし、出ますよ。

（ト棹を突張る。これにて船動く。）

十六夜　あれえ。

（トよろ〳〵として、白蓮にこけかゝる。白蓮、十六夜を抱留めて、）

白蓮　惡くねえな。

（ト三次これを見て、）

三次　とりかぢイ。

（ト大きく云ふ。波の音、賑やかな唄にて、この道具廻る。）

舞臺は元の百本杭の場に戻ると、床の淨瑠璃になる。

〽行く空も薄墨流す雨雲に、鐘は沈めど清心はなまじ覺えし水心、死ぬに死なれず波除の百本杭に縋り附き。

（トこゝに清心濡れたる形にて、百本杭に取附き、思入れあつて二重へ上り、）

清心　アゝ、いくら死なうと思つても身體が浮いて沈まれず。此身は下總行德生れ、幼い時より海邊に育ち習ふとなしに覺えた水練、それが今の害となり、死後れたか。アゝ情ない。

〽恨めしさうに川の面、清心つくづく打ちながめ。

それには引替へ十六夜は、水に溺れて

死んだであらう。いまだ形は定まらねど、腹に宿りしわが胤も。
〽共にはかなや冥土の旅。我も後より死出三途。手に手を取つて渡らんと、賽の河原で幼兒が、積む石ならで、清心は小石拾うて袂へ入れ、浮かぬ心に引替へて、浮きたつ囃子上手より、梅見戻りの遊山船。
(トこの中、清心石を拾ひて袂へ入れ、この身を投げようといふ思入れ。この時上手の揚幕へ丸物の屋根船を出し、内にて賑やかな騒ぎ唄する。清心これへ思入れ。)
せめてあの世は迷はぬやう、觀念なすに喧しい。三味線の音が耳に入り、邪魔になつてならぬわい。
〽兩手を合はせ西の空、曇る涙の春雨も、身にふりかゝる憂き事と、さすが求女は白浪の傘のしづくを打拂ひ。
(ト杭にもたれ向うへ船へ思入れ。花道より寺小姓求女、振袖一本差下駄がけにて、傘をさし出て來りて、)
求女　今打ちしは後夜の鐘。宵の中にと思うたに、俄かの雨に雨具はなし。傘を求めて思はぬ暇入り。
清心　(騒ぎの耳に入る思入れにて、)ア、人の歎きも知らず、面白さうな遊山船。死なうと覺悟しながらも、耳へ入つて黄泉の障り。
求女　昨日聞けば父様が今日につゞまるお金の入用。どうか調へ上げたいと、思へど甲斐ない小姓の身。
清心　人の盛衰貧福は、前生からの約束にて、力づくにも及ばぬもの。
求女　據なう大江家の主水様へお願ひ申し、疵養生のお手當金。
清心　アレあのやうに面白う藝者幇間を作うて、騒いで暮すも人の一生。
求女　少しも早う父様に、これを上げたらお悦び。
清心　その日の煙も立て兼ねて、襤褸を纏ひ門に立ち、手の内乞ふも一生にて。
求女　急ぐとすれど折悪しく、思はぬ雨に持病のなやみ。
清心　又このやうに身を投げて、死なうといふもこれも一生。
求女　頼む木蔭もなき故に、癪が痞は治まらず。
清心　死ぬに死なれぬ心の迷ひ。
求女　急げど道は捗らず。
清心　こりやどうしたら。
兩人　よからうなア。
〽心々のちぎれ雲、塞がる胸の晴れやらで、又もや雨となりふりも癪に惱るゝ求女が苦しみ。

（トこの中、清心杭にもたれ、船の騒ぎに聞きとれる思入れ。求女は苦しき思入れにて、漸う舞臺へ來り、胸を押へて、）

求女　もし〳〵。（ト清心の背中を叩くに、清心びつくりして、）

清心　誰だ〳〵。

求女　はい。私でござりまする。

清心　私とは誰だ。

求女　往來の者でござりまする。

清心　見れば年端も行かぬ若衆どの、どうさつしやつたのだ。

求女　持病の癪が起りまして、一足も歩けませぬ。御無心ながらお藥がござりますなら、お貰ひ申したうござりまする。

清心　うつかりとしてゐる所を呼ばれた故、迷ひの者かと思つた。然しまァそれは嘸難儀であらう。藥を持つてゐることなら進ぜたいものなれど、わしはたつた今川から、イヤさ、川向うまで二町も行かねば藥屋とてもない處。ハテ困つたものだなァ。

求女　あいたゝゝゝ。

清心　アこれ、その樣にさし込むなら、藥はないがその替り、胸を押して進ぜませう。

求女　それは有難うござりまする。

清心　ドレ、どこらがさし込みますな。

〽苦しむ求女が懷へさし込む手先に金財布。

（ト求女苦しむを清心抱き起し懷へ手を入れ、財布へ手の障りし思入れにて、）

これ若衆どの。こりや何でござる。

求女　そりや金でござります。

清心　よほどの嵩でござるの。

求女　はい、五十兩でござりまする。

清心　エヽ。

〽聞いて思はずゆるむ手に、うんとばかりに反り返れば。

（ト清心びつくりして手を放す。求女反り返り倒れる。）

アヽこれ、反つては惡い〳〵。氣をたしかに持たつしやれ。

〽手拭取つて、川水を汲んで氣付に飮ませんと。

（ト求女を介抱して、）

若衆どのいなう。若衆どのいなう。氣をたしかに持たつしやれ。

〽と呼生くれば。

（ト求女心付きて、）

求女　ハイ。大きによろしうござりまする。

清心　少しは胸が開きましたかな。

求女　御親切な御介抱、有難うござります。

清心　さうしてまァ、お前は大枚の金を持つて、夜夜中どこへ行くのだ。

求女　さア、この金はわしが親父が御恩になつたそのお人の、落目を貢ぐ大事の金、殊には今宵につゞまるせつぱ。それ故夜道も厭はずに參りましたが、折惡しう持病のなやみに思はぬ暇入り。さぞ待侘びてござりませう。

清心　ア、さうであつたかいな。然し金を持つて夜道は物騷。これから二町行くと、四角に辻駕籠があるによつて、駕籠に乘つて行かつしやれ。

求女　有難うござります。

〽會釋こぼして立上れば。

（ト辭儀をなし求女立上る。清心思入れあつて、）

清心　思ひがけなくこの樣に言葉交すも川添の、この青柳の一樹の蔭。

求女　一河の流れ汲合ふも、盡きぬ緣の稻瀨川。

清心　結ぶ氷も一夜さに。

求女　別れて末は白浪の。

清心　何處の誰やら。

求女　御緣があらば。

清心　又重ねて。

求女　おさらばでござります。（ト行かうとするを、）

清心　もし。（ト袖を引く、）

求女　何でござりまする。

清心　（思入れあつて、）氣を付けて行かつしやい。

〽本意なく放す求女の袖、振合ふ他生の因果同志、別れてこそは行過ぐる。後見送りて清心が、胸に思案のとつおいつ。

（ト求女思入れあつて下手へはひる。後に清心いろ〳〵思入れあつて、トヾ下手へ追ひかけはひる。ト、バタ〳〵になり、求女逃げて出るを清心追ひかけ出る。）

〽なんなく捉へ引出す財布。求女は其手に縋り付き、

（ト清心求女を捉へ、金財布を引出す。求女その手に縋りて、）

求女　ヤヽ、こりやこの金を取る氣ぢやな。

清心　さア、そのびつくりは尤もだが、癪に苦しむ胸先をさする拍子に金財布、手にさはつたが互ひの因果。惡いと知つてわれとわが、心に意見はしたれども、思ひ切れずこの無體。惡い者に見込まれたと無理なことだがあきらめて、どうぞその金貸して下され。

求女　エヽ。すりや親切な介抱は、情ごかしに此金を、取らう企であつたるか。

清心　さういふ心は少しもない。年の

行かない身の上に、たゞでもあるか雨上り、不便なことゝ思つた故介抱なしてやつたれど、金を持つたがこなたの不運。これさへなければわしも亦この惡心は起らねど、最前からの遊山船。人の榮耀が羨しく、道に缺けたる邪曲非道。嘸やこなたの心では、鬼坊主とは思はうが、あの世は無間地獄へ落ち、呵責の責を受けるとも、此世で榮耀榮華をして、娑婆の淨土で樂しむ心。理を非に枉げても借りねばならぬ。

求女　さう聞く上はやみ〳〵と、おのれにこの金渡さうか。

〽用意の一腰拔打ちに切つてかゝるを清心が、有合ふ傘にてちやうと受け、拔けつくゞりつ打合ふ折柄、又も聞ゆる騷ぎ唄。

（トこの中、求女脇差を拔き切つてかゝる。清心傘にて受ける立廻り。文句の切にて船の騷ぎ唄になり、清心上手へ逃げる。求女切らうとして杭を斜に切落す。又立廻つて脇差を打落し突く。求女たぢたぢとして件の杭にて咽喉を突き血紅になり、）

求女　人殺しぢや。人殺しぢや。

清心　もうかうなつたら、是非がない。

〽云へど應答も亡き人と知らぬ紲の財布の紐、首に絡みて斷末魔。蕾のまゝに散りて行く最期のほどぞ哀れなる。

（トこの内、財布を引合ひ、求女の頸に絡みてよろしく苦しみ落入り、ばつたり倒れる。）

これ若衆どの〳〵。ヤ、こりやことは切れたか。ヤヽヽヽ。

（トびつくりし、竹笛入りの合方になり。）

非業に死んだ十六夜が親にこの金惠みなば、問ひ弔ひも心の儘と思ひ付いたが、そなたをば殺して取つたこの金が、何の供養にならうぞい。（ト金を投げ捨て、求女の脇差を見て思入れ。）さうぢや、水で死なれぬわしが身體。この脇差で死ねといふ、草葉の蔭から十六夜が、やつぱりわしを導くのか。これ若衆どの。そなたを殺した言譯は、そなたの刀で自殺なし、水死なしたる十六夜や、そなたと共に死出三途。これぞ因果の罪ほろぼし、さうぢや〳〵。

（ト端唄になり、清心その刀にて腹を切らうとする。この時月出て清心氣の替りし思入れにて、）

然し、待てよ。今日十六夜が身を投げたも、又この若衆の金を取り、殺したことを知つたのは、お月樣とおればかり。人間僅か五十年。首尾よくいつて十年か二十年がせいきり。襤褸を纏ふ身の上でも、金さへあれば出來る樂しみ。

同じことならあの様に、騒いで暮すが人の徳。一人殺すも千人殺すも、取られる首はたつた一つ。とても悪事を仕出したからは、これから夜盗家尻切。人の物はわが物に榮耀榮華をするのが徳。こいつアめつたに、死なれぬわい。

〽忽ち替る清心が、これぞ惡事の双葉にて、後にはびこる鬼薊、話草とぞ、

(ト脇差を川の中へ打込み、求女を捉へ)

ソレ、水葬禮だ。

〽なりにける。

(ト求女を川の中へ入れる。これにて雨車になる。)

ア、又降つて來たか。

(ト時の鐘にて、上手より、以前の白蓮下駄がけにて、十六夜世話形同じく下駄がけにて、番傘を相合にさし、ぶら提燈を持ちて出で來り、清心に行當り提灯を消し、時の鐘忍び三重、清心びつくりして、財布を落す。)

白蓮　ヤ、今の音は。

清心　エ。

(ト兩人探り合ひの立廻り。後へ以前の船頭三次出て、この中へ入り、足に障る金財布を取上げ透し見て、)

三次　ヤ、こりや百錢と思ひのほか。

(トこれを聞き、清心三次を引捉へて財布を取る。三次それをと寄るを、肘にて當てる。この間に白蓮は十六夜の手を引き花道へ行く。清心財布を口に銜へ三次を轉す。これと一緒に白蓮傘を持ちかへるを木の頭。清心財布をいたゞき、につたり思入れ。兩人は花道へはひる。これをきざみ、浪の音、佃にて、)

拍子幕

三幕目

初瀬小路妾宅の場

本舞臺。三間の間。常足の二重。正面更紗の暖簾口。上下襖張の茶壁、三味線二挺かけてあり。上の方に障子屋臺。例の所門口。下の方路地口。總て初瀬小路白蓮妾宅次の間の體。こゝに下男杢助、俎板に鴨の骨を載せ包刀にてたゝきゐる。傍に船頭三次、煙草を喫みながら見てゐる。よき所に八百善形の燭臺を灯しあり。この見得、鞠唄、通り神樂にて、幕明く。

三次　杢助どん。御苦勞だの。

杢助　ナニ、こりやわしらが食ふのだから、御苦勞なことはねえ。旦那樣とお妾は笹身の附いた正身ばかり。骨と皮は、お下に出てお米どんと、わしが食ひ物さ。

三次　エヽ、畜生め。滋りッ皮のむけたお米どんと、つッつき合つて食ふのた

な。これがほんのちん／＼鴨。何にしろ一羽にしちやア、剛氣に骨が澤山あるの。

杢助　ナニサ。わしが食ふのだから、思入れ身を打ちこんで置いた。

三次　こいつアおれも突込みてえな。

（ト花道より俳諧師扇福道行振を着、木劔をさし、道具屋銀七同じく俳諧師の拵へにて出で來り）

銀七　ときに扁宗。おれが拵へは、俳諧師と見えようか。

扇福　大丈夫。おれが受合ふ。どこへ出しても俳諧師。棒になる氣遣ひはねえ。

銀七　長く話をしてゐる中に、道具屋にならにやいゝが。

扇福　そこは和尚が引受けて、ワキをつけるから案じなさんな。

銀七　何にしろ金滿で、いゝお妾のあるのが當だ。

扇福　隨分わかつたお人だから、出入をすれば損はない。

銀七　さア、ちつとも早く行きやせう。

（ト兩人本舞臺へ來りて）

扇福　御免なせえ。旦那はお家かね。

杢助　オヽ、誰かと思つたら扇福樣か。家にゐさつしやる。はひらつしやれ。

扇福　それは丁度よかつた。さア先生こちらへ。

銀七　御免なせえ。

（ト兩人内へはひる。三次見て）

三次　これは先生お出でなせえ。

扇福　オヽ、網船の三公か。この節は白魚はどうだね。

三次　この間の南風から、大分上手へ上りやした。

銀七　白魚も子持ちになつちやア話せやせぬね。（ト黄色な聲をする。）

杢助　もし扇福樣。そのをかしな聲をする人は、何だね。

扇福　これはわしが朋友で、當時名うての俳人故、そこで旦那へお近付に、今夜一寸同道したのさ。

銀七　早く御主人にもお目にかゝりたし、美しい代物も拜見したい。

扇福　これさ。あんまり口をきゝなさんな。

銀七　道具屋が出るかね。

扇福　えへん／＼。オヽこりや杢助どの。鴨のお料理だね。うまいやつだが冬季の物だテ。一夜明けては冷たくても、比良魚のお刺身が書抜きさ。

銀七　大きにさうでごッす。ツンと鼻を通されちやア、實に涙がこぼれやす。

杢助　ほんに、涙がこぼれるといやア、わしらが國などと違つて、べらぼうに鳥の高い處だ。直後の溝なぞに澤山ぎ

やァ／＼云つてゐるに、今日も魚屋の新公が、いかく高く賣りやァがつた。
三　次　おきやァがれ。そりやァ踵をねらふのだ。
銀　七　イヤ、そのうぶな所が妙でげッす。
扇　福　秀逸々々。
お　米　（奥より下女形にて皿を持ちて出で來り、）これは先生。ようお出でなされました。
扇　福　オヽお米どんか。よい春だの。
お　米　お目出度うござります。
杢　助　これお米どん、何ぞ用か。
お　米　骨がたゝけたらよこせと、旦那樣が仰しやいました。
杢　助　エ、（トびつくりして、）ナニ、骨をよこせ。いつも上つたこともねえに。
お　米　いつもは上らぬが、今日は上ると仰しやいました。
杢　助　拙は身を入れたのを見られたか。アヽ惡いことはしねえものだ。
三　次　こいつァ一番上壺を食つたな。
杢　助　エヽいまいましい。
お　米　又皆樣にも御遠慮なく奥へいらつしやいませと、旦那樣が仰しやいました。
三　人　それは有難うござります。
三　次　杢助どんの思ひのかゝつた、鴨の骨を御馳走にならうか。
杢　助　どうとも勝手にさつしやい。
銀　七　先づそれよりも、お妾の君を、
扇　福　エヽ、無駄な口をきゝなさんな。
お　米　さァ皆樣御一緒に。
三　次　そんなら先生。
扇　福　どれ、御同道致さうか。
（ト四人は奥へはひる。杢助殘りて、）
杢　助　折角うまくして喰はうと、身をどんと、入れておいたに、あの人數であらされては、わしが口へはむづかしい。俎板でもねぶつてやらうか。
（ト俎板を恨めしさうに見てゐる。ト花道より白蓮妻お藤、御新造の拵へにて、下女お虎付添ひ小田原提燈をさげて出で來り、）
お　藤　コレお虎。きつとそなたの推量の通り、旦那樣はおさよの所に、お出でになるに違ひない。
お　虎　ほんに結構な御新造樣を、毎晩巣守りにして憎らしい旦那樣。何でも寢所へ踏込んで、思入れ云つておやりなさりませ。全體あなたがお心好し故、こんな事が起ります。
お　藤　それ故今日はそなたといふ、加勢を連れて云ひに來たのぢや。
お　虎　わたくしが喋りましたら、どんな女でも負かします。さァ／＼早くお出でなさりませ。（ト本舞臺へ來り、門

口を明け、）杢助どん。／＼。

杢助　あい／＼誰だ。本宅のお虎どのか。

お虎　御新造様がいらつしやいましたよ。

杢助　ナニ、御新造様がお出でなされた。オヽ、これはよくいらつしやいました。

お藤　（内へはひりて、）杢助。旦那どのはおいでゞあらうの。

杢助　はい。イエ、おいでなざりませぬ。

お虎　何、おいでなされぬことがあるものか、一昨日から今日で三日、家へお帰りなされぬもの。他へおいでになる所はない。隠さずと云はしやんせいな。

杢助　いえ／＼、決して嘘は付きませぬ。此方へお出ではなさりませぬ。

お藤　（思入れあつて、）お出でなさらずばなさらぬでよいが。これ杢助。まことに旦那様にも困りますよ。年始も碌碌済むや済まぬに、幾日も／＼夜泊り日泊り。とんとお帰りなされぬ故、用は足らず家は淋しゝ。（ト杢助へ思入れあつて、）それに就けてもわしがそなたに頼みがあるが、何と聞いてはくれまいか。

杢助　はい、どんなことか知りませぬが、わしに頼みと仰しやりますは。

お藤　さア、その頼みといふは。（ト杢助の手を捉へる。杢助びつくりして振拂ひ、）

杢助　イエ、そのお頼みは聞かれませぬ。

お藤　何故わしが頼みは聞かれぬのぢや。

杢助　ハテ知れたこと。わしは一年二両二分の奉公人。まだ一年になるかならず、首尾よく三年勤めねば七両二分出來ませぬから、めつたに間男はなりませぬ。

お虎　エヽ押の強いことを云はしやんせ。何で御新造様がそんなことを。

杢助　はア、それぢやア間男ぢやアござりませぬか。そんなら頼みを聞きますべい。

お藤　（紙入より金包みを出し、）杢助。こりや少しばかりだが、わしが年玉、煙草でも買やいの。（ト遣る。）

杢助　（開き見て。）こりや一分でござりますね。こんなに煙草を買つてどうしますべい。わしが喫むのは一山八文。

お虎　ホンニお前も野暮な人。煙草を買ふとも買はぬとも、御新造様の思召し、お貰ひ申しておくがよいわね。

杢助　それぢや、郷里への土産にしますべい。然し燒金ぢやねえかな。

お虎　燒金をお前に上げるものかね。
杢助　あんまり氣前がいゝから油斷がならねえ。
お藤　（思入れあつて、）これ杢助。頼みといふは外でもない。旦那はいつからお出でなさつたか隱さずと云つて聞かしや。
杢助　はい、決して云ふなと云ひ付かりましたが、一分貰つちやァ云はずにやァゐられませぬ。實は一昨日からござつて、いやはやたまけたことさ。まだろく／＼日もくれねえ内から。
（ト云ひかけ、お藤を見て思入れあつて口をつぐむ。）
お虎　コレ何も遠慮するには及ばぬ。隱さずと云はしやんせ／＼。
杢助　毎晩々々酒盛だが、雜儀なものは杢助だ。やれ八百半へ行つて來い。やれ杢助、豆腐屋へ行つて來い。やれ杢助、三ッ割がなくなつたわいのと、いやもうわしは粉になります。
お虎　ホンニさう使はれてはたまるまい。さうして御酒を上つたあとで、嘸旦那樣と。
杢助　あい、お妾樣と。
お虎　エヽ、腹の立つ。お妾どのと云はしやんせ。
杢助　そのお妾どのと旦那樣と。
お虎　どうなされたえ。
杢助　先づ煙草にしますべい。（ト煙草を喫む。）
お虎　御新造樣。お聞きなされましたか。腹の立つことではござりませぬか。
お藤　そりやもう、それ者の果てぢや故、手事とやらがあらうわいの。
お虎　エヽ、聞くほど腹の立つ。これだから御新造樣。わたくしが御意見を申すのに、女子の嗜み／＼と、何にもあなたが仰しやらぬ故、こんな目にお逢ひなされまする。妾や悔しい、悔しいわいな。（杢助の胸倉を取りて振廻す。）
杢助　アヽ、これ／＼喉佛樣がつぶれる。放してくれ／＼。
お虎　さア、放してやるから今の先は。
杢助　もう先はありませぬ。
お虎　エヽこなたまで馬鹿にして、旦那樣も旦那樣だ。芝蝦の天ぷらぢやァあるまいし、さう引附けてばかりでござらずとも、好ささうなものだのに。
杢助　然し、それも無理ではあるまい。御新造樣に較べて見ると、泥龜にお月樣。
お虎　あい、わたしや泥龜さ。（ト腹の立つこなし。）
お藤　杢助なぞの目にさへも、較べて見れば泥龜とお月樣ほど違ふおさよ。

旦那どのゝ現をぬかし、家へお歸りなされぬも無理ではないが、家の爲よしやお氣に障らうとも、云はねばならぬ女房の役。
お虎　御遠慮なしに仰しやりませ。
お藤　とはいへ云うたらわしをば、悋氣深い女子ぢやと、陰で人が譏るであらう。
お虎　でも云はずにはなられませぬ。
お藤　(氣を替へて。)まア何事も後方に。杢助。そなたの部屋を貸してたも。
杢助　穢い所を御承知なら、隠れておいでなさりませ。
お藤　そんなら杢助。
杢助　御精進様。
(ト お藤奥へ思入れあつて。)
お藤　アヽ思へば〳〵、(ト氣を替へて。)案内してたもや。
(ト唄になり三人上手へはひる。これにてこの道具廻る。)

本舞臺三間の間。常足の二重。正面床の間。この上に文臺を載せあり。この下簞笥、黒縁の銀襖。上の方に障子屋臺。この前に石の手水鉢。續いて四つ目垣。春の下草、梅の立木。平常の所、枝折戸。上下建仁寺垣。總て妾宅奧座敷の體。ここに白蓮、靑流し白き毛繊の下半纏にてをり。以前の扁蝠、銀七、三次居並び、傍らに平鍋、鉢の物など取散しあり。お米酌をしてゐる。酒盛の體。端唄にて、道具留る。

扁蝠　ときに旦那、これは私の朋友で、大俳諧の執心故、今晩連れて上りました。
白蓮　これは〳〵ようこそお出でなされた。何分お心安う。
銀七　どうぞ扁蝠同様に、お引立てを願ひまする。
白蓮　して名は何と仰しやります。
銀七　へい、わたくしは、ナニ、寶井其角。
白蓮　あのお前様が。
扁蝠　いえ〳〵、その其角の弟子の又弟子で。
銀七　へい、寶井其角にならひまして、丸井四角と申します。
白蓮　それは面白いお名でござりますな。
三次　然し顔を見りやア丸くもなし、四角でもなし、たゞ散蓮華を見たやうで、眞中の凹んだ顔だ。
お米　ホンニあなたは、吉六のやうでござりますなア。
銀七　これは御挨拶。吉六と二幅對とは、ちとお鑑定が違ひますね。
扁蝠　これさ。無駄口をきかつしやん

な。

三次　そりやさうと、おさよさんはどうなさいました。

扇福　ほんに、先刻からお見えなさいませんな。

銀七　少しも早くお目見得がしたい。

白蓮　さつき本屋の彌三郎が封切を持つて來たが、大方それを見てゐませう。

お米　ハイ、左樣でござります。もう二三枚讀んでしまふと仰しやりました。

銀七　封切に見惚れてとは、もしや笑本の新版ではないか。ちと氣がもめの吉祥寺。

扇福　コレサ、そんな洒落は野暮やお七だ。

白蓮　イヤ、いつのまにか洒落は御上達だ。

扇福　面目次第もない。

（ト端唄になり、奥よりおさよ派手なる姿の拵へにて出て來り、）

おさよ　これはどなたも、ようお出でなされました。

扇福　イヤ、おさよ樣。いつもながらお見事〳〵。

おさよ　扇福さん。なぶつて下さんすな。

（ト云ひながら白蓮の側へすまふ。）

三次　もし、花魁ぢやァねえおさよ樣。この間仲見世で、扇屋の遣手に會ひましたが、二階中でお噂を申し暮してをりますと云ひました。いやよく喋る婆アさんで、逃げるにやァ逃げられず、まことに恐れ入りました。

おさよ　さうでござんしたか。今度お會ひなら、尋ねて來るやうに云うて下さんせ。

三次　ハイ、清正公樣へ參る時、お寄り申すと申しました。

扇福　ときにおさよの君へお引合せ申すは、私の朋友。

銀七　丸井四角と申します者、お心安う。

おさよ　ハイ、此方からお願ひ申します。

お米　さァ皆さん。お盃はどちらでござります。

扇福　イヤ、お盃はこゝにござりますが、もう澤山でござります。

おさよ　何もござりませぬが、お燗のよいので、も一つお上りなされませいな。

銀七　いえ〳〵、御遠慮いたしませぬテ。

白蓮　イヤ、御酒がお厭とあるならば、四角先生に何か一句お願ひ申したいものだ。

銀七　これは御主人のお言葉でござるが、今晩はちと胸が痞へて。

扇福　そんな勿體をつけずと、何ぞ一

何おやんなせえ。（ト文楽を持つて來てなほす。）
銀七　これは甚だ迷惑な。（ト云ひながら文楽をひねくりゐる。）
扇副　さア、四角先生、發句を早く。
銀七　承知しました。（ト考へる思入れあつて、）先づ目いつぱい銀二兩でげッす。
扇副　コレサ、十七文字だよ。（ト銀七の袖を引く。）
銀七　なに、十七匁え、さうはふめねえ、高い／＼。
白蓮　なに、高いとは。
扇副　いやさ。高いと云つたはこの間の短册、それ十哲が九枚まで。
三次　なに短册が九枚ぞろひ、そいつア豪勢だね。
扇副　イヤ、お前もなか／＼隅へはおけねえ。十哲を御存じとは御風流なことだ。
白蓮　先生。もうそろ／＼花の世界でございますな。
銀七　ときに、十哲先生。お盃はどうだね。（ト三次へ盃をさす。）
三次　盃とは有難え、こいつが來ちやアいよ／＼花見だ。
おさよ　もし旦那さん。今年は龜井戸の藤から、木下川の杜若を見せておくんなさいましな。
白蓮　チヽ、三次を連れて、一日行かう。
三次　なに、龜井戸かね、そいつア面白え。
銀七　それから天神の裏へ拔けの吾妻の森はどうだね。
三次　裏葭原と來ちやア獨じめだ。
扇副　兎角花時分は降りに困るテ。
三次　いや雨は眞平だ。坊主を消しやす。
扇副　これは御挨拶。
銀七　それから先は花菖蒲だね。
三次　花菖蒲ならお出でなせえ。ちよつと一めえ引きやせう。
扇副　モシ、船しう。お言葉の中だが、菖蒲に引くといふ緣語はいゝが、一めえとは何のことだね。
三次　はア、お前花をしながら一めえを知らねえのかえ。
扇副　花の座も月の定座も心得てゐるが、一めえばかりは。
銀七　何のことだか分りやせん。
白蓮　こりやア、お二人の花と三次が花とは違つた話だ。先づ蒔き直しにするがいゝ。
三次　それぢやア手八かね。
お米　三次さん。もうお飯かえ。
白蓮　また話が間違つた。ハヽヽヽ。
杢助　（奥より出で來りて、）もし旦那様。

おさよ様の親父様がお出でゞござります。
白蓮　オヽ、おさよの親父が來たか。
おさよ　杢助どの。妾の部屋へおいて下さんせ。
杢助　ヘイ、如才なくさうしました。
扇福銀七　お客様なら、お暇にいたしませう。
三次　わつちも御一緒に行きませう。
白蓮　マヽ、よいではござりませぬか。これ三次。手前何ぞ用ぢやァねえか。
三次　へい、ちとお借り申したうござります。
白蓮　ヲヽ、いくらばかり。
三次　お氣の毒でござりますが、五兩お借り申したうござります。
白蓮　何にするのだ。
三次　へい、この間化かされました狐の穴を塡めるのでござります。
おさよ　エヽ氣味の惡い。お前狐に化かされなさんしたか。
扇福　どんな狐だか知らないが、穴を塡めるに五兩とは。
銀七　よつほど大きな穴と見える。
三次　また話が間違つたかね。
白蓮　何でもいゝからこれを持つて行け。然しもういゝ加減にするがいゝ。
（ト紙入より五兩包んでやる。）
三次　こりやァ有難うござります。おさよ様。旦那へよろしく。
白蓮　（金を紙包みにして、）折角初めてのお出で故、穢くともお泊め申し、歌仙でも卷きたうござるが、今お聞きなさる通り、おさよの親父が參つたれば又後してのことに致しませう。どうぞ今夜は大磯で御一泊下され。これは少しばかりでござるが、お駕籠賃を呈します。
（ト扇福、銀七へ金包みを遣る。）
銀七　これは〳〵初めて上りまして、この様な御心配を受けましては。
扇福　殊に又私は、毎度お惠みに預りますに、これを頂戴いたしては、甚だ恐入りまする。
白蓮　いや、この頃にお點を願ひますから、朱料にお納め下され。
扇福　それは有難うござります。（ト金をいたゞき、）定めて拜見事でござりませう。先度の卷はどうでござりまする。
杢助　（前へ出て、）いやもう生のせるか、燃えなくて困りきりました。
銀七　これは怪しからぬ殺風景。こちらとはかまが違ひますな。
杢助　なに、いつもの釜で焚きました。
おさよ　又杢助どんが分からぬことを。
お米　分からぬ人でござりますな。
杢助　ナニ、をかしいことがあるもの

か。薪はどうだといふから、生で燃えねえと云つたのだ。

白蓮 ヲヽ、こりやァ手前の云ふのが尤もだから、そつちの方へ引込んでゐろ。

三次 そりやァさうと、先生達は大磯は何處へお出でなさるか、お送り申しませうか。

扁蝠 いや、大磯より小磯の彼女へ、兩吟で行く積りだ。

三次 大蕩か。畜生め。

銀七 たゞ恐れるのは、燒場の匂ひさ。

(トこの時杢助鍋の盃を取つて、)

杢助 嬉しや、鴨の骨が殘つた。(ト大きな聲をする。皆々びつくりして、)

皆々 エヽ、びつくりした。

白蓮 いやもうかれこれ四つでもあらう。小磯へお出でなら早いがお德だ。

扁蝠 左樣でござります。道が淋しうござりますから、早く參りませう。

銀七 大磯へ行くと違つて、田圃だけ難儀だ。

三次 然し先生方はお駕籠だらう。

扁蝠 どうして〳〵、小磯へ駕籠で行つてあふものか。

三次 それぢやァ駕籠賃をお貰ひ申して、やつぱり歩いて行くのかね。

銀七 君を思へば徒はだしさ。

杢助 いや、慾ばつた奴だ。

扁蝠 左樣なれば旦那樣。

銀七 おさよ樣。

おさよ 早くお出でなさんして、お樂しみなさんせ。

扁蝠 イヤ、こちらは苦しみでござりまする。

銀七 たゞ、先方を悅ばせますのさ。

白蓮 いかさま、さうでござりませう。

扁蝠 銀七 ハヽヽヽ。ドレお暇いたしませう。

三次 さァ、お出でなさい。

(ト端唄にて三人花道へはひる。杢助門口まで送り出て、)

杢助 一昨日來い。

お米 これはしたり。聞えるわいな。

杢助 ナニ、聞えたとて構ふものか。

白蓮 コレ杢助。無駄な口を聞かねえで、おさよが親父にござれと云やれ。

杢助 へい、畏りました。

おさよ お米はこゝを片付けておくれな。

お米 はい〳〵。

(ト酒肴を片付ける。杢助奥に向つて、)

杢助 さァ、西心樣。こちらへお出でなされませ。

(ト奥にて、今は西心となれる佐五兵衛の聲にて、)

西心 まつぴら御免下されませ。

(トしんみりとした端唄の合方にて、奥より佐五兵衛の西心、坊主形にて頭陀袋、

手甲、脚絆、網代笠を持ち、出て來り、下手へ出て笠をおきて、）旦那樣。よい春でござります。

白蓮　西心どの。ござつたか。さァ〱これへ〱。

西心　有難うござります。

おさよ　父さん、ようござんしたな。

西心　オヽ娘、替ることもなうて目出度い〱。

お米　お茶をお上りなさりませ。（ト茶を汲んで持つて來る。）

西心　必ず構うて下さりますな。（ト茶碗を取り思入れあつて、）扨旦那樣。年寄の癖でいつも同じ事を申すやうでござりますが、杖柱と思ふこのおさよ、親のための勤め奉公。苦界の辛さに思ひ詰め、廓を脫けて滅相な、稻瀨川へ身を投げて死なうとしたを、折よくも旦那樣の網船で、お救ひなされて下されたは、阿彌陀樣より有難いお慈悲深い思召し。苦界の勤めが辛ければ、樂にしてやらうとて、直に廓の身請をなされ、下男下女を使はせて、何不自由のない今の身の上。ァヽ娘は仕合せ者、果報やけで若しひよつと夭死でもせねばよいと、善いにつけ惡いにつけ案じられるは親心。その親までも緣に連れお貢ぎ下さる御親切。何とお禮を申さうやら、これこの通り明暮に阿彌陀樣より先づさきへ、あなたを拜んでをりまする。（ト珠數を出して泣く。）

白蓮　又親父どのゝ株の禮。もう〱その禮は云つて下さるな。知らぬ者でもかういふことは助けたいがおれが氣性。まして馴染のおさよが事、恩にきるわけはない。さうこなたが來る度々、そんなに禮を云はれては、おれが方で却つて迷惑。假にも親子の因みを結ぶは、前生からの緣づくだ。

おさよ　ほんに不思議な御緣にて、何から何まであなたのお世話。ようお禮を云うて下さんせ。

西心　いやもう、言葉でお禮は申し盡されませぬ。（ト嬉し涙にむせる思入れあつて、）ァヽ年寄と申しますものは、悲しいことでも嬉しいことでも、涙が先で困りまする。（ト涙を拭ふ。）

杢助　まだ涙より先へ、水ッ洟がでませうが。

お米　また口出しをしなさんすか。

西心　イヤ、これは杢助どのに當てられました。

白蓮　シテ、親父どのには何故剃髮いたされた。

西心　ハイ、ちと菩提を弔はねばならぬ者がござりまして。

おさよ　父さん。それは誰の菩提を。

西心　さア。そちが弟の。
およ　エ。
西心　いやさ。一昨年死んだ婆の菩提に、髮をおろして佛三昧。その日〱はお惠みで、何の苦勞もござりませぬ。朝から晩まで有難いところへお參りでもするのが役。安樂なことでござりまする。
およ　見れば父さん旅支度で、どこぞへお出でなさんすかえ。
西心　さア、追々暖かになつて來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晩お禮やらお暇乞ひに上つたのぢや。
白蓮　ナニ、善光寺へ行かつしやる。そりやアいゝことだが、然し彼地は名代の雪。三月にさつしやればいゝに。
西心　イエ、もう大概雪も片付きましたらう。
杢助　どうして〱。わしらが國の雪といふものは、五月でなくちやア解けはしねえ。今の樣に涙をこぼしたり、水洟をたらしたりすると、直に氷柱にぶらさがるテ。
白蓮　又杢助が御大そうに、嘘半分の國自慢か。ハヽヽヽ。
（トこの時四つの鐘鳴る。）
西心　ありやもう、四つでござりまする。ドレお暇いたしませうか。
およ　この頃は物騷なといふこと故、泊つてお出でなされませいな。
白蓮　ほんに、明日こつちから目出度く出立さつしやるがよい。
西心　左樣なら、御厄介になりませうか。
お米　それがよろしうござりますわいな。
西心　イヤ、物騷なと申しますれば、鬼薊とかいふ泥坊が、處々に入つたさうでござります。イヤそれで思出したが、去年極樂寺へ入りまして、賴朝樣から納めた祠堂金を、三千兩そつくり盜んだ泥坊が、今に行方が知れぬさうでござりますが、運のよい奴でござりますな。
（トこれにて白蓮ぎつくり思入れ。杢助白蓮へ眼を付ける。白蓮思入れあつて）
白蓮　そいつは大方上方か、九州筋へ逃げたであらう。
西心　何に致せ、こなた樣なぞはお金が澤山ござるから、御用心なされませ。
およ　ホンニ、氣味の惡いことでござんすな。
杢助　油斷のならぬは、泥坊ばかりは上邊からは知れぬもの。
白蓮　エ。
杢助　いや西心樣。臺所で一杯やりませうか。

西　心　それは何より有難い。旦那様の前よりも氣がつまらないで、却つてうまい。
杢　助　ときに鴨の骨は上りますか。
西　心　イエ、唯今では大精進。
杢　助　しめたり。それではおれ一人。
西　心　左樣なれば旦那樣。
白　蓮　ゆつくり休まつしやい。
西　心　ドレ、御馳走になりませうか。
（ト端唄にて西心先に、杢助鍋を持つて附き奥へはひる。）
お　米　もう四つを打ちましたから、お床を延べませうか。
おさよ　アイ、さうして下さんせ。旦那お片付にしませうから、こちらへお出でなさんせ。
白　蓮　だいぶ、床急ぎだの。
（トお米は上手の屋臺へ入る。おさよは煙草をつけて出す。白蓮呑みながら、）
今夜は寒いから着替へずに寢ようか。
おさよ　それがようござんす。
お　米　（上手より出て來りて、）ハイ、よろしうござります。
（ト白蓮おさよ上着を脱ぎ細帶をしめ、身支度をする。お米手をつきて、）
左樣なら、御機嫌よろしう。
（ト端唄の合方にてお米は奥へはひる。おさよ思入れあつて、）
おさよ　さア、お休みなされませいな。
（ト立上る。白蓮おさよの腹へ眼を付けて、）
白　蓮　コウ、氣のせゐか、手前腹が大きいぢやアねえか。
おさよ　（トびつくりして袖にてかくし、）妾のお腹の大きいのは、生れ付きでござんす。
（ト顔を背ける。白蓮腹へ眼を付けながら兩人上手の屋臺へはひる。ト奥より杢助あたりを窺ひながら出て來り、床の間の脇差をそつと持ち來り、拔放し灯にてとくと見、うなづきて鞘へをさめ、元の所へおき下手へ來り、）
杢　助　まだ酒が殘つてゐる筈だが。
（トあたりへ思入れあつて奥へはひる。時の鐘靜かなる端唄になり、屋臺よりおさよ出て下着の上へ上着を羽織り、手水鉢にて手水を遣ひ、簞笥の抽出より位牌珠數香爐を出し、文臺の上へ載せ、茶碗に水を汲み手を合はせて、）
おさよ　春譽清心信士成佛得脱。南無阿彌陀佛〳〵。
（トをがみ回向をなす。この中、上手障子屋臺を明けて白蓮窺ふ。ト奥よりはお藤窺ひゐる。白蓮思入れあつて、）
白　蓮　おさよ。何を拜むのだ。
おさよ　エ。（トびつくりして仕舞はうとするを、）

白蓮　アヽこれ、仕舞ふには及ばねえ。
おさよ　それぢやと云うて。
白蓮　ハテ、遠慮せずに拜むがいゝ。
（ト前へ出る。）
おさよ　旦那さん。堪忍して下さりませ。
（ト泣き伏す。白蓮思入れあつて、）
白蓮　毎晩おれが寢息を考へ、そつと床を脱けだして、位牌に向つて神妙に回向をなすは親兄弟か。但しは勤めをしてゐた中言交した男の爲か。包まずおれに話して聞かしやれ。
（ト白蓮煙草を喫みゐる。おさよ思入れあつて、）
おさよ　これまでお隱し申したなれど、お目立ちまする上からは何をか包み申しませう。果敢ないこの身の一通り、お聞きなされて下さりませ。
（ト胡弓入りの合方になりて、）
この位牌は二世までも言交したる我情人、名も清心と云はれまして佛の道に入つたお人。廓通ひの罪科に繩目の上に御追放。その折妾は清心どのゝ、胤を宿して身重になり、苦界の勤めも末々はならぬ我身に廓を脱け、後や前の考へ無う、どうせこの世で添はれずばと清心どのと諸共に、死なうと覺悟死出の山、三途の川も手に手を取り越えて行く氣に稻瀬川へ、この身は捨てても捨てられぬは、浮世の義理のあなたのお情。御介抱にて命も助かり廓の身請もして下され、まだその上に父さんまでお貢ぎ下さるお志し。世にも稀なる御親切に、身重も隱しお寢間のお伽。それがせめてもの御恩返し。多くのお金で廓から、身請をなされし妾故、身體はあなたにお任せ申せど、心の内はその時に入水なしたる清心どのへ、仕へる心の尼法師。いつぞはお暇お願ひ申し、菩提のために國々の尊き御寺拜まんと、拵へおきし袈裟衣。コレ御覽下さりませ。
（ト簞笥の抽出より白の着附墨の衣手甲脚絆を出し、白蓮に見せる。お藤もこれを聞いて涙を拭ひ、白蓮感心の思入れにて、手に持ちし煙管を捨て、）
白蓮　イヤ、感じ入つたそなたの貞節。傾城に眞實なしとは譯知らぬ、野暮な口から行過ぎたとは、新内節の名文句。アヽどんな人だか清心どのは、死んだあとまでこれ程に、思はれるとはその身の仕合せ。嘸これまでは義理故におれと寢るのが辛かつたらう。この貞節を見る上は、これから一つ夜着に寢ても、佛を抱いて寢るのも同じ。おれも男だ望みの通り、暇をやらう。
おさよ　エヽ、すりやお暇を下さんすとな。

白蓮　オヽ剃髪なして心のまゝに、夫と思ふ清心どのゝ、跡懇に弔ふがよい。

おさよ　エヽ有難うござりまする。

（ト奥より、西心涙を拭ひながら出て來りて、）

西心　旦那樣。始終の樣子は次の間で、涙ながらに承りました。命をお助け下された、まだその上に身請の御恩。それも碌々報いもせぬに、尼になりたく思ふなら、暇をやらうと仰しやります。結構過ぎたあなたの仰せ、何とお禮を申さうやら、エヽ有難うござりまする。

白蓮　何の〳〵。金は世界にいくらもあるもの。この貞節は十千萬兩金を積んでも買はれねえ。

西心　そのやうに仰しやつて下さりますほど、勿體なうてなりませぬ。コレおさよ。そちはおれが娘には、生れ優つた志し。嘸や草葉の蔭にても、入水なした清心どのが、悦んでござるであらう。

おさよ　旦那樣のお情で、世間晴れて清心どのゝ菩提もこれから訪はるゝ嬉しさ。善は急げといふからは、今宵直に髮をおろし、尼になりたうござりますわいな。

西心　オヽ幸ひ明日は月こそ替れ、清心どのゝ命日なれば、お經は知らねど出家の姿。おれが剃つてやりませう。

おさよ　どうぞさうして下さんせいなア。

白蓮　そんなら今夜剃髮なすか。

おさよ　ハイ、お許しの出た上からは。

西心　佛に仕ゆる日頃の願ひ。

白蓮　とはいへ惜しき綠の黑髮。

西心　剃らば明日より花もなく。

おさよ　身は靑柳の靑道心。

白蓮　出家堅固に。

おさよ　旦那樣。

白蓮　おさよ。

（ト兩人顏見合せ、ホロリと思入れ。）

西心　どりや、剃刀をあてゝやりませう。

（ト唄になり、西心涙ながらに、おさよの手を引立てる。おさよ、件の着附法衣を持ち奥へはひる。ト奥にてお藤わつと泣く。白蓮びつくりして奥を見て、）

白蓮　そこで泣くのは誰だ。

お藤　ハイ、わたくしでござりまする。

白蓮　そちはお藤か、どうしてこゝへ。

（トお藤出て來りて、）

お藤　あなたがお歸りなさらぬ故、忍んで今宵參りましたは、男を蕩す憎い女、恨みを云はうと存じましたに、思ひの外のおさよの貞節。まだ年若な身

を以て女子の操を立て通し、尼にならうといふ心に、恨みも晴れて眞實の姪か妹の様に思はれ、妾や可愛しうてなりませぬ。かういふ譯とは知らぬ故、これまであなたに御意見を云うたは、どうぞ旦那樣、お許しなされて下さりませ。

白蓮　日頃おぬしが兎や角と意見がましく悋氣をするも、尤もだとは思へども、今も聞いてゐる通り、賴り少ねえあれが身の上。かういふと言譯らしいが色氣ばかりといふではねえ　死なうとしたを助けた故、貢いでやらにやアならぬ仕儀。これからはおれも亦夜泊り日泊り止めにして、家にゐるから案じるな。

お虎（奥より出で來りて、）御新造樣。嘸お嬉しうござりませう。憎い〱と思うたお妾が坊主になつてしまふからは、これからはあなたの世界。妾までもとも〲に、嬉しうて〱ならぬわいな。

お藤　これはしたり。どうしたものだ。そのやうな事を云やつて、妾でも云はせるかと、おさよどのに聞えて見や。顏向がならぬわいの。ちとたしなんで口を聞きやいの。

お虎　オヤ〱御新造樣。そりや何を仰しやります。わしは氣が弱くて云へぬ故　そなた、思入れ云うてくれと、仰しやつたぢやござりませぬか。

お藤　まだ〱云やるか。だまらぬかいの。

お虎　それぢやと申して、あれほどあなたが。

お藤　まだ口答へをしやるのか。旦那樣。まことに口をきゝ過ぎますから、三月は暇をおやりなされませ。

お虎　こりやまア、どうしたといふのだらう。

（下奥より杢助とお米出で來りて、）

杢助　もし旦那樣〱。おさよ樣が髪を剃り、尼法師にならつしやりました。惜しいことぢやアござりませんか。ほんに廣い世界なれどあんなお方が又とあらうか。わしがこんな不器用者故常不斷旦那樣に叱られるのを、おさよ樣が蔭になり日向になりお詫をして下さるのみか、酒が殘つたこれを飲みやれ、肴が殘つたこれを喰べろと、お情深いお心立て。いかに菩提のためだとて、尼になるとは惜しいこと。

お米　杢助どのゝ云ふ通り、取分け足らぬわたくしを、お米かうせい、あゝせいと、目をかけて下されたおさよ樣が、お髪をおろし、諸國修行にお出でなされ、長いお別れになりますとは、悲し

いことでござりますわいな。
杢助　オヽこなたも悲しいか、おれも悲しい。
（ト兩人泣く。白蓮思入れあつて、）
白蓮　オヽ尤もだ〳〵。のろいやうだが手前達より涙をこぼさぬおれが心。獸な女に別れても三百落した心持。ましておさよは、（ト云ひかけお藤の顔を見て、）こりや御新造の前では差合ひであつた。ハヽヽ。
（ト笑ひに涙をまぎらす思入れ。奥にて西心の聲して、）
西心　さア〳〵、娘。早く來やいの。
（ト奥より、西心先に、おさよ墨の衣、手甲、脚絆、淺葱の帽子を冠り出て、恥かしさうに下手へ俯向きすまふ。西心思入れあつて、）
旦那様。西心めが剃刀で、目出度く剃髮いたさせました。
おさよ　願ひの通り尼となり、浮世を捨てるもあなたのお蔭。
西心
おさよ　有難うござります。
（ト皆々おさよを見て泣く。白蓮不便なといふ思入れあつて、）
白蓮　お藤。見やれ。僅かな中にさつぱりと、替り果てたる墨染姿。
お藤　爪繰る珠數の玉よりも、清いお前の貞節に、妾や感心しましたわいな。
おさよ　お恨みのあるわたくしに、有難いそのお言葉。
西心　とてものことに親父がお願ひ。ぶしつけなことながら、斯うなる上は娘をば、御新造様の妹にはなされては下さるまいか。
お藤　オヽそれは何より易いこと。思ひ立つたが吉日なれば、後とも云はず今こゝで、盃をしてやりませう。
西心
おさよ　すりや、お聞届け下さりますとか。
お藤　お虎。その盃をこれへ。
お虎　畏りました。
（ト盃、銚子を持つて來る。お藤盃を取上げる。）
お藤　妹なればわしから先へ。
（ト盃を出す。お虎酌をする。お藤呑んでおさよにさす。おさよ呑んで、）
おさよ　憚りながら。
（トお藤へさす。呑んで、）
お藤　これで今日から姉妹。
西心　親父が望みもかなひまして。
西心
おさよ　有難うござりまする。
（トおさよ思入れあつて、）
おさよ　もし皆さん。今までのお世話になつたお禮やら、また二つには妾が遺品。（ト懷より紙に包みし簪をお米に、櫛をお虎にやり、）古びたれど櫛、簪。

これをさして下さんせ。杢助どのは男のこと故、少しなれども置土産。（ト金包みを杢助にやる。）

お米　そんならこれをお遺品に。

お虎　妾にまで下さりますとか。

杢助　止さつしやればよいに、又お金。こりやァ煙草を買ひますのかね。

お米　何を買ふともお前の好き、おさよ様からそれはお遺品。

杢助　エヽ有難う。

三人　ござりまする。

おさよ　思ひ出す日があつたなら、お念佛を云うて下され。

三人　ハアヽヽヽ。（ト泣く。）

西心　サ、娘。お暇しようか。

白蓮　親父どの。ちよつと待つて下せえ。（ト紙入より金を出し、紙に包みて、）旨はゞ目出度き法の旅立、少しなれどもこれは餞別。

（ト金包み西心にやる。西心取上げて、）

西心　これをお貰ひ申しましては。

白蓮　ハテ、行く先とても定めなき、長の旅路のことなれば、頼みになるは路用の金。

西心　何から何まで。

西心
おさよ　有難うござりまする。

お藤　何はなくとも明日の朝、赤の御飯を炊かうから、祝うて出立して下され。

おさよ　お志ではござりまするが、この姿を他人様にお目にかけるも恥かしければ。

お藤　聞けばそなたは身重とやら。女子の大役、案じらるれば、どこへなりとも落付いたら、妾の所へ手紙でなりと。

おさよ　きつとお知らせ申します。

西心　左様なれば。

西心
おさよ　御機嫌よろしう。

白蓮　二人も無事で。

杢助　又鎌倉へお歸りを。

皆々　お待ち申してをりまする。

（ト西心おさよ平舞臺へ下り、門口へ出かける。時の鐘。思入あつて、）

西心　行方定めぬ長旅に。

おさよ　これが別れにならうやら。

白蓮　知れぬ浮世の仇櫻。

杢助　派手な姿の盛りの花も。

お藤　夜半の嵐にあらねども。

おさよ　散りて行く身は墨染に。

西心　替りし頭を旦那様に。

（ト西心おさよの頭巾を取り、青頭を見せる。白蓮これを見て、）

白蓮　扨も殊勝な。（トおさよと顔を見合はせる。）

おさよ　アレ。

（ト恥かしき思入れにて、傍にゐる西心

の網代笠を冠る。これを木の頭。）
お恥かしうござりまする。
（ト笠を冠りしまゝ白蓮を見る。白蓮はお藤に感心なことだといふ思入れ。皆々よろしく、本釣鐘の明六つ、烏笛、鳥追の合方にて、）

拍子幕

三幕目

雪の下白蓮本宅の場

本舞臺。三間の間。常足の二重。障子欄間、網代の蹴込。正面瓦燈口。太鼓張の襖。右手地袋戸棚。左手腰張の茶壁。上の方に障子屋臺。例の所屋根附の門口。下の方後へ下げて、九尺の玄關。間平棧の戸閉あり。三十郎（白蓮役）の替紋の高張提燈。總て鎌倉雪の下白蓮本宅の體。こゝに夜蕎麥賣り仁八、弓張提燈を前におき、この後に合長家のどん七、勘六、鉦と太鼓を傍へおき、すまひゐる。此見得物唄にて、幕明く。

仁八　お頼み申します。
どん七 勘六　お頼み申します。
仁八　此樣に呼ぶのに御返事のないは、どなたもお出でなさらぬか知らぬ。
どん七　こなたの娘のお虎どのが、一昨日の晩駈落をしたが、外に女中衆がないと見える。
仁八　お妾の方に一人あつたが、これはお虎と仲が惡くつて、下つたといふことだ。
勘六　それぢやア嘸こちら樣でも、御無人でお困りだらう。
仁八　何にしろ、もう一遍呼んで見やう。
三人　お頼み申します。
（ト奧にて「どうれ」といふ杢助の聲して、奧より杢助出で來りて、）
杢助　オヽ、誰だと思つたら、お虎どんの親父どのか。
仁八　これは杢助どのか。お前には禮を云はねばならぬ。お虎が駈落を致した故嘸御用が多からう。まことにお氣の毒でござります。
杢助　イヤもう、お虎どのではひどい目に遭ひます。朝むつくり起きて飯を炊くから、夜ごろりと寢るまでは、水も汲んだり米も磨いだり、買物もしたり使もしたり、何でもかでも杢助〳〵。賃に二人前の働きだが、給金でも喰物でも二人前はくれねえ。こんなつまらねえ事はねえ。
仁八　私がどうかしてをりますと、お禮の仕樣もござりまするが、何を申すも夜蕎麥賣り。その日〳〵の仕込みに追はれ、長じけでも喰ひますと、三文の錢にも困ります。
どん七　たゞ憎いのはお虎どの。父さん

にも難儀をかけねば、御主人様にも難儀をかけ。

杢助　またその上に長屋の者にも、鉦太鼓で歩くやうな、こんな難儀をかけまする。

勘六　さうして行方が知れたかな。

仁八　三日此方捜しますが、今に行方が知れませぬ。何でもこれは男があつて逃げましたと見えまする。

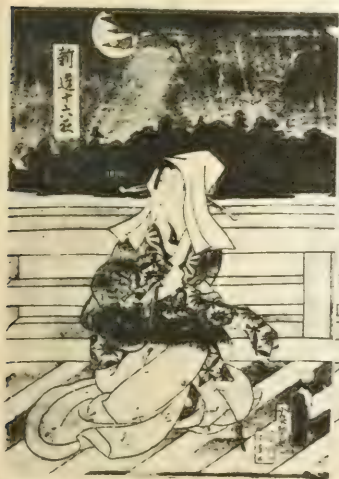
どん七　世間には物好きな人が多くあるかして。

勘六　あんなでゞふくを連れて逃げるとは、どんな男でござりませう。

仁八　杢助どのは朝夕に傍にござつたことなれば、何ぞ怪しいことはござりませなんだか。

杢助　何も怪しいことはなかつたが、旦那様のお妾であつたおさよどのゝ親父どのが、今では名越の無縁寺に墓守をしてゐるが、その寺の穴掘にべらぼうに浄瑠璃の好きな奴があるが、御新造様のお使にそこへ行つて歸つて來ると、浄瑠璃の噂をするが、もしその坊主が情人ぢやァねえか。無縁寺へ行つて聞いて見さつしやい。

仁八　そんなことかも知れませぬ。今云はしつたおさよどのは尼になつて、諸國修行に出られたと聞きましたが、歸られましてござりますか。

杢助　さア、親子連で出かけたが、聞けば箱

根の裏道で、惡者どもにおさよどのを連れて行かれて、親父どのは仕方なく〳〵歸つて來て、今いふ名越の無緣寺へ墓守に入つたのさ。

仁八　（思入れあつて、）ア丶わしも娘をなくしたので、思ひやらる丶その親父。嘸寢覺が惡からう。子は三界の首枷でござりまする。

（ト奥よりお藤、御新造の拵へにて出來りて、）

お藤　オ丶お虎が親父どの。ようござつたの。

仁八　これは〳〵御新造樣。まことに申譯もござりませぬが、今に行方が知れませぬ。お間をおか丶せ申しまして濟まぬことでござります。

お藤　イヤも、間のかけるは仕方がない。どうぞ早く知れ丶ばよいが、嘸そなた心配であらう。

仁八　御推量下さりませ。今日で三日駈歩き、商賣もいたさぬ上に小遣錢をつかひまして、これから又始めますに仕込みの元手で困ります。これといふのもお虎故、不孝な奴でござります。

（トこれを聞き、お藤思入れあつて、懐の巾着より金を出して紙に包み、）

お藤　それは嘸困るであらう。これは少しばかりぢやが、元手とやらにしたがよい。（ト遣る。）

仁八　これは〳〵有難うござりまするが、お間をおか丶せ申した上、これをお貰ひ申しましては。

お藤　少しばかりぢや、取つておいたがよい。

仁八　でも、勿體なうござります。

杢助　ハテ、御新造樣から下さるお金。煙草でも買ふがよい。

仁八　エ、有難うござります。

どん七　ときにもうお暇にして、向う川岸をぐるりと廻らう。

勘六　又お貰ひ申したお金を當に、どこぞで一ぱいやらうではないか。

杢助　エヽ如才ねえ。直に附込んだナ。
仁八　アヽこなた衆へお禮がてら、一合づつ買ひませう。
どん七　酒と聞いてはこたへられぬ。
勘六　もうお暇しようではないか。
杢助　エヽ呑みたがる奴等だな。
お藤　これはしたり、失禮千萬な。
仁八　左樣なれば御新造さま。
お藤　知れたら直に知らして下され。
仁八　畏りました。（ト三人門口へ出て）
どん七　迷兒の〳〵。
三人　お虎やアい。
杢助　エヽ、こゝで呼ばずともの事に。
三人　迷兒やアい。（ト鉦太鼓をたゝきながら花道へはひる。）
お藤　ほんにお虎もどこにゐやるか。親の苦勞をするにも構はず、困つたやつではあるわいの。それはさうと今しがた、誰か來たではなかつたかいの。
杢助　ハイ、伊勢屋の小次兵衞どのが、此間の五兩を書替へ、十兩にしてくれと頼んで參りました。
お藤　ヲヽ、さうであつたかいの。
杢助　それから芝居者だといふ奴が四五人連で參りまして、連印でお借り申した五十兩。初日まで待つてくれと、斷りに參りました。
お藤　アヽよし〳〵。旦那樣へさう申さうわいの。
杢助　イヤもう、利息も持たずにしやア〳〵と、お先煙草にわしが煙草を、いくら呑んだか知れませぬ。あんな奴が來ちやア、一分買つてもたまらねえ。
お藤　その樣なことを云ふものではない。無くばわしが買つてやらうわいの。
杢助　そりやァ有難うござりますが、今度からもうお貸しなされますな。芝居者くらゐ狡い者はござりましねえ。
お藤　そんな憎まれ口をきかずと、居睡りでもせぬやうにしやいの。
杢助　合點でござります。
（ト好みの端唄通り神樂になり、花道より、おさよ毬栗の延びし鬘、半纒がけ世話形。清心、今は鬼薊清吉、世話形、三尺帶、尻端折り。兩人とも頬冠りをして出て來り、花道にて、）
清吉　コウおさよ。手前が世話になつてゐた、白蓮の家は何處だ。
おさよ　大きな聲をしなさんな。向うだよ。
清吉　ムヽ、いゝ家だな。高張附の玄關構へ、名目金の貸付所だな。
おさよ　何だか知らねえが、大層金があるよ。
清吉　それが何よりこつちの付目だ。

おさよ　ほんに縁といふものはおつなものだの。死んだとばかり思切つて坊主にまでなつた妾が、髪を延ばして死んだお前と斯うして一つになるといふなア、どうしたといふのだらう。

清吉　これがほんの腐れ縁だ。おれも手前故にやア構を喰ひ、頭は段々延びて來るが、種はすつかり耗つてしまつた。其處からふつと氣が替り、惡いことは覺え易く、僅か一年經たねえ中に肩書の附く身體になつた。朱に交はりやア赤くなると、いつか手前も板の間稼ぎやら、強請やら、いゝ稼ぎ人になつたな。

おさよ　こんなことも妾の家ぢやア、株の樣になつてゐたが、意氣地がねえからしなかつたが、お前が、やれこれ勸めるから、怖々ながらするやうなもの、然しほんの附燒刄。さぞ皆さんのお心ぢやア、止せばいゝにと思召すだらう。それを思ふと氣恥かしいよ。

清吉　そりやアおれだつて同じことだ。強請かたりや盗人は、鼻が高いか眼が大きいか、凄みな所がなくちやアいけねえ。見る影もねえけちな小野郎、それせえもまだ一つ鼈、ほんの度胸でやる仕事だ。手前もおれも縁あつてかう一つになつたからにやア、互ひに力になり合つて、今年ア一番稼がうぜ。

おさよ　まア手始めに向うへ行つて、旦つくにぶッつかつて見よう。

清吉　おれも一緒に入らうか。

おさよ　お前は門に待つてゐねえ。妾が先へ仕掛けるから。

清吉　エヽ、黒人ッぽくなつて來たな。

（ト兩人本舞臺へ來る。この中、お藤は行燈の傍で本を見てゐる。杢助は居睡りをしてゐる。おさよ清吉に囁き、門口から、）

おさよ　ハイ、お頼み申します／＼。

お藤　コレ杢助。御案内があるぞよ。

杢助　ハイ。（トびつくりして飛起き、）どうれ。

（ト大きな聲をして、目をこすりながら門口を明ける。おさよ腰を屈め辭儀をする。杢助見て、）

手の內なら今日は出ねえ。明日が出日だから四つ前に來い。

おさよ　イエ、お手の內ではござりませぬ。旦那樣か御新造樣にお目に掛りたうござりまする。

杢助　旦那樣か御新造樣に會ひたい。途方もないことを云ふ奴だ。手の內はない。通れ／＼。

おさよ　どうぞ、さう仰しやらずと。

杢助　エヽしつこい。通れといふに。

（トおさよを突く。おさよ思入れあつて、）

おさよ　なんだね、杢助どん。餘まり手荒くしてお呉れでないよ。
杢助　ナニ杢助どんだ。杢助どんもよくできた。乞食に近付きがあるものか。
おさよ　無えことがあるものか。
（ト手拭を取る。杢助見てびつくりなし、）
杢助　ヤ、おさよどのか。モシ御新造様。おさよどのが參りました〳〵。
お藤　ナニ、おさよが來やつた。（ト立上り、）オヽよくたづねて來てくれた。さア〳〵、こつちへ入りや〳〵。
おさよ　御新造様。まつぴら御免なされませ。
（トおさよ、優しく辭儀をしながら内へはひり、下手へみすぼらしくすまふ。）
お藤　まア、どうしやつた。案じきつてゐた。あれぎり居所が知れぬ故、常不斷旦那様と噂ばかりしてゐたわいの。
おさよ　有難うござります。旅へ出まして父さんにはぐれ、それから悪い人の手にかゝり、まことに難儀を致しました。
お藤　オヽ、さうであつたか。道理こそ變り果てたるそなたの姿。
杢助　わしが見違へたのも無理ではあるまい。
お藤　さうしてあの折は身重であつたが、どこで身二つになりやつたぞいの。
おさよ　箱根山にをります中、首尾よう小兒を産みましてござりますが、乳が細うござります故、里に遣はしてござりますわいな。
お藤　それは仕合せなことであつた。シテ生れたその子は。
おさよ　ハイ、男の子でござります。
お藤　オヽそれは〳〵目出度いことぢや。そなたの親の西心どのが聞かれたなら、嘸悦び。早う知らしてやりたいものぢやわいな。
（トこれを聞き思入れあつて、）
おさよ　まだ父さんに會ひませぬが、そんならこちらへ上りますか。
杢助　この間から度々來なさる。
おさよ　左様でござりましたか、これも旅で別れたぎり故、どこに今はござんすやら、居所さへも存じませぬわいな。
杢助　今では名越の無縁寺といふ、千人塚のある寺に墓守をしてゐなさるよ。
おさよ　それは有難うござります、お蔭で居所が知れました。早速訪ねて參りませう。
お藤　オヽ早うたづねて行くがよい。親の身では、どのやうに案じてゐるか知れぬわいの。
おさよ　まことに考へて見まするど、不

孝なことでござりまする。
お藤　まだまア先も長い體。これから孝行にしやいの。
おさよ　有難うござります。さうして旦那様はお家でござりまするか。
お藤　オヽ、奥に樂寢をしてぢやわいの。
おさよ　左様なれば御新造様。ちとお願ひがござりますが、お聞きなされては下さりませぬか。
お藤　何だなおさよ。改まつてお願ひの何のと、姉妹分の盃をしたからは、そなたは妹わしは姉。遠慮なく云やいの。
おさよ　そのお願ひと申しまするは、鎌倉へ參りましても、頼ります所もござりませねば、どうぞお邪魔でも妾を、臺所の隅へなりとお置きなされて下さりませ。
お藤　オヽそれは何より易いこと。親父どのゝゐる所とてお寺の內のことなれば、女を置くわけにも行くまい。こちをそなたの家と思ひ、心置きなくゐるがよい。
おさよ　御親切に有難うござります。
お藤　然し以前が以前故、ちと妾の氣が揉めるわいの。ホヽヽヽ。
おさよ　御新造様の御常談ばかり。イエまだその上に、もう一人お願ひ申したうござりまする。
お藤　もう一人とは連のお人か。
おさよ　ハイ、左様でござります。
お藤　そりやどこにゐなさるのぢや。
おさよ　表にをりまする。
お藤　何故こちらへお連れ申さぬのぢや。杢助お呼び申して來や。
杢助　ハイ、畏りました。（ト門口へ出て、清吉を見て、）おさよどのゝお連はお前かえ。
清吉　アイ、わしでござります。
杢助　ハテ、わりい風な。さア、こつちへ入らつしやれ。
清吉　御免なせえ。
（ト手拭を取りて清吉內へはひる。お藤見てびつくりし、氣味の惡き思入れ。）
お藤　そんならお前が。
清吉　へイ、おさよが連の者でござります。
お藤　杢助。旦那様をお呼び申してくりや。
杢助　ハイ、畏りました。
（ト立ちかゝる。この時奥にて、）
白蓮　イヤ、來るにやア及ばぬ。今そこへ行かうよ。
（ト奥より白蓮、黑のきめ頭巾、被布釣瓶形の煙草盆、煙管の入りし煙草壺を持ち出で來り、）

オヽおさよ。来たか。久しぶりであつたな。
おさよ　これは〳〵、旦那様。いつもながら御機嫌よろしう、お目出度うござりまする。
白蓮　アイ〳〵。(ト云ひながらよき所へすまひて、)おぬしも達者で仕合せだ。
おさよ　有難うござりまする。唯今御新造様に承りますれば、又々親父が上りまして、御厄介になりますさうでござりまする。
白蓮　なんの。厄介といふ程の事でもない。
お藤　モシ旦那。今おさよが参りまして、此家へ置いてくれと申します故、泊めてやらうと思ひましたら、あの様な連のお方があるさうでござりますが、どう致しませうね。
杢助　喰ひつぶしは少ねえがいゝ。飯を炊くおれが難儀だ。
白蓮　やかましい。口出しをするな。(ト清吉に向ひ思入れあつて、)アヽそんならお前がおさよの連かえ。
清吉　ヘヽエ、左様ならあなたが旦那様でござりますか。これは初めましてお目にかゝります。どうぞお心易うお願ひ申します。
白蓮　コレおさよ。このお方は親戚の衆か。
おさよ　ハイ、これは妾の、(ト思入れあつて、)亭主でござります。
白蓮　エ、亭主だと。(ト思入れ。)
お藤　そんならおさよは、夫を持ちしか。
杢助　アヽ似た者は夫婦とて、坊主の亭主に坊主の女房。
白蓮　何にしろ、それはまア身が堅まつていゝことだ。
清吉　御迷惑でも旦那様、女房の縁で私もどうぞ置いて下さりませ。
白蓮　そりやア品によつたらば、置いて上げまいものでもないが、シテこなさんの名は何と。
(トこれにて清吉思入れあつて、)
清吉　御新造様とこのさよと姉妹分の上からは、旦那様と私も云はば兄弟。弟故、包み隠さず申しますが、(ト左りの腕を捲り、鬼薊の彫つてあるを見せて、)御覧の通り、この腕に鬼薊が彫つてあるので、鬼薊とも云ひますりやア、根が清心といつた坊主故、鬼坊主とも渾名をいふ、清吉といふ坊主がへりさ。
(トこれを聞き、皆々ぎよつと思入れ。)
白蓮　アそんならおさよが情人であつた、清心といふ御出家が、今名の高い鬼薊清吉どのであつたるか。

清吉　左様でござりまする。
お藤　さうしてお前の商賣は。
清吉　ナニ、商賣かえ。根が遊び人でござりますから、これが稼業といふこともござりませぬ。先づ强請かたりぶつたくり、俗に云ゃァ盗人さ。習ふよりやァ慣れろとやらで、わつちに連れて今ぢやァおさよも、板の間ぐらゐは稼ぎやす。（ト此邊より段々凄みにいふ。）
おさよ　あれサ。そんなことを姉さんの前で。案じなさるからお云ひでないよ。
清吉　ほんに、いゝ妹をお持ちなすつて、お仕合せなことだ。
杢助　そんなら二人は泥坊か。（ト大きな聲をする。）
清吉　エヽ、大きな聲をするなえ。盗人は云はねえでも知れた事だ。悪い人にでも聞かれて見ろ。直におれに縄がかゝらァ。さうなる日にはこゝは舗。手前達まで引合ひだぞ。
杢助　それだといつて泥坊だから。
白蓮　コレ杢助。又しても要らぬ口出し。默つてゐやれ。
杢助　へゝい。
（ト杢助、清吉に眼を付ける。おさよ思入れあつて、）
おさよ　姉さん。一服おくんなせえな。
お藤　ァ、煙管がこゝらに。（トあたりを搜す思入れ。）
おさよ　無けりやあ、旦那、お貸しなせえ。
白蓮　さァ、喫みやれ。
（ト煙管の入りし煙草壺を出す。おさよそれを喫みながら。）
おさよ　毎晩喫んだ旦那の煙管、久しぶりでの御馳走に、妾やァ往時を思ひ出すよ。（ト吸附けて出し、）旦那。一服上げようかえ。
清吉　コレ、亭主の前で吸附煙草。戯けた事をしやァがるな。
おさよ　七兩二分取つて上げらァ。默つておいでよ。
清吉　どうして〳〵。旦那にやァ御恩になつた手前の身體。口外ァお禮を申さうと、思ひ思つてやつと來やした。前後見ずの無分別に此奴を連れてどんぶりと、稲瀬川へ身を投げた、その時旦那の網へかゝり、助かつたのが此奴の仕合せ。直に廓の片を付け、親父の世話までして下すつたその親切に引替へて、初瀬小路の妾宅で毎晩々々伽をさして、腹散々なぐさんだ擧句の果てがお爲ごかしに、死んだ男の菩提を訪へと姉妹分の氣休めに、僅かな路用を手切にくれ、坊主にして突出すたァ隨分酷ひ仕方だね。きつとお禮は申します。
白蓮　（思入れあつて、）イヤ、その禮は

受け難い。おさよが何と云つたか知らぬが、こなたの菩提を弔ふため剃髪したいとおれへの頼み。死んだ男に操を立て、ア丶女郎には感心なと思つた故に望みをかなへ、高金出して請出したその身に暇をやつたのは、そつちは何と思ふか知らぬが、わしは隨分男の積りだ。
おさよ　なるほど、口は調法なものだ。さう聞くと尤もの樣だよ。
お藤　（これを聞き、むつとして、）コレおさよ。口は調法とは何のことだ。剃髪ばかりか、姉妹の盃したもそつちから親父どの丶頼み故、妾が妹にしてやつたを、よもや忘れはせまいがの。
幸助　オ丶それ〳〵。その時宵に御新造から煙草の錢と一分貰ひ、又こなたから遺品と云つて二分貰つたは忘れはせぬ。しめて三分今もつて褌に包んで持つてゐる。嘘なら出して見せようか。
（トこれに構はず、おさよお藤に向つて、）
おさよ　モシ姉さん。よくそんなことをお云ひだね。非業に死んだ男のため坊主になつて菩提を訪へと、往生づくめで剃らしてしまひ、妹分にしてやるから困つた時はいつでも來いと、情ごかしに突出したも元はと云やァお前の嫉妬。お蔭でそれからぐれ出して、どんな苦勞をしたか知れねえ。なんぼ妾がお心好しでも、さう云ひかけをなすつちやァ、姉さんとは云はさないよ。
お藤　エ丶まァそなたはいつの間に、そんな心になつたのぢや。なんで妾がそなたに剃髪、勸めさせよう譯がない。
おさよ　ナニ、ねえことがあるものか。嫉妬故にさせたのだ。
お藤　假令何といはうとも、妾やそなたに。
おさよ　イ丶、お前だ〳〵。お前に坊主にされたのだよ。（ト大きな聲をする。）
清吉　エ丶、コレやかましい。靜かにしねえか。強請かたりの樣で見つともねえ。大きな聲をするなえ。
白蓮　お藤。おぬしも默つてゐやれ。
お藤　それぢやというて。
白蓮　ハテ、云ふだけ無駄だわえ。
清吉　モシ姉さん。堪忍してやつておくんなせえ。つまらねえことを云ひ合ふのも姉妹だと思ふからの心安でござります。これから何年一緒にゐて、お世話になるか知れねえ身體。然し、唯喰ひつぶしてもゐられめえ。お玄關番でも勤めやせう。
おさよ　ホンニ、こんな頭にされたこの埋草にやァ、モシ旦那。可愛がつて貰はにやァ合はねえよ。（ト白蓮の顔

を見て思入れ。）なんだなお前。眞面目な顔をして。今でこそこんな姿に愛想が盡きたか知れねえが、これでもお妾でゐた時は、お伽をした仲ぢやァねえかな。そんな怖い顔をせずと、笑ひ顔をしてお見せな。

（ト肩にかけし手拭を取つて、白蓮の顔を打つ。お藤むつとして。）

お藤　アレ、まァ、あんなことを。（ト立ちかゝるを。）

杢助　ア、モシ、默つておいでなされませ。（ト留める。）

白蓮　ムヽ、そりやァ以前の恩により、二人ともこの家に置いてやるまいものでもないが、御宝の御所の貸付所。見る通りの玄關構へ、どうれといつて取次に毬栗頭で出られもしまい。一旦約束したからは、厭とは云はぬが、その頭が人並になつたなら、尋ねてござれ、置いてやらうわ。

清吉　へん、氣の長いことを云ひねえな。明日が日知れねえ二人が身の上。こゝに居候にゐてえからつて、この髪の延びるまで、まご／＼してゐられるものか。

おさよ　さういふ身性の妾ら故、家へ置くのが怖いのか。そんなに恐れることはねえ。姉妹分になつたからは、若しもの時は口一つで連れて行かうと行くめえと、そりやァ此方の了簡さ。氣まづいことをしなさりやァ、いやでも一緒に抱込むよ。

清吉　コレ／＼一緒に連れて行くの抱込むのと、そんな野暮なことを云ふなえ。今時は流行らねえ。行きやァ隠居と立てられて、見舞ひの初穂を喰ふ株だが、遁れるだけは行きたくねえ。これが地金だ。案じずと、家へ置いておくんなせえ。それともこんな頭故、玄關附にやァ不釣合ひなら、延びるまで旅へ行くから、路用を貸しておくんなせえ。

（ト清吉思入れ。白蓮こなしあつて。）

白蓮　ムヽ、その頭の延びるまで旅へ行くとあるならば、澤山のことは出來ないが草鞋錢ぐらゐなら、貸すといふのも面倒故、熨斗を附けて祝ひませう。

おさよ　それでこそ同胞の誼み、澤山祝つておくんなせえ。

白蓮　然し、當つて砕けろだ。いくら欲しいかその高を。

清吉　さうさ。これから何處といふ當もなけりやァ、草鞋錢も端で貰つちやァ足らねえから、熨斗を附けて百兩くんねえ。

お藤
杢助　エヽ。（トびつくりする。）

白蓮　ムヽ、たつた百兩でいゝのか。

清吉　エ。

白蓮　易いことだ。お藤。手箱を持つて來やれ。

お藤　ハイ。

（ト戸棚より手箱を持つて來る。白蓮、錠前を明け内より百兩包みを出し、）

白蓮　さア、望みの通り、百兩。

（ト清吉の前へ出す。清吉びつくりし、おさよと顔を見合せ、）

清吉　こりやア思ひがけねえ。（ト金を取る。）

杢助　やア、草鞋錢といふのは百兩か。テモ高い草鞋だな。煙草の錢に一分貰つたを、大層なことと思つたら、イヤハヤ、魂消たことだなア。

（トこの内、清吉とおさよは、よく呉れたといふ思入れ。清吉ふと百兩包みの封印を見て、合點の行かぬ思入れ。）

清吉　ヤ、この包みの封印は。

白蓮　エヽ。（トぎつくり思入れ。）

清吉　こりやア極樂寺の印形だが、この金は何處から出やしたね。

白蓮　さア、それは。

清吉　こいつア話が面白くなつて來たわえ。（ト思入れあつて、）この金があるからにやア、百兩ばかりの目腐れ金、草鞋錢にやア要らねえわえ。（ト白蓮の前へ投出す。）

白蓮　シテ何ほど欲しいといふのだ。

清吉　三千兩貰ひてえ。

白蓮　なんと。

清吉　まだこのおれが極樂寺で役僧をしてゐた時分、覆面頭巾に拔身で押込み、賴朝公から奉納の祠堂金の三千兩、盜んだ奴の行方が知れず。其疑ひでおれが縛られ、終にやア女犯が露はれて谷七郷を構への追放。いはば敵のその盜人。今日が日までも知れねえで惡事に運のいゝ奴と、思つてゐたが知れねえ筈だ。定紋附の高張に、玄關構への貸附所。御室の御所の家來分。帶刀をする旦那衆が大泥坊とは、御詮議なさる御代官でも御存じあるめえ。

（ト思入れにていふ。白蓮ちつと思入れ。）

おさよ　おやおや、それぢやア旦那が三千兩極樂寺で盜んだのかえ。人は見かけに寄らねえものだ。道理こそ金の遣ひぶりがいゝと思つた。然しこれから兄弟なり、又仲間なり妾らも、氣が置けなくつてとんだいゝ。男は男夜働き、女は女相應に、姉さん、これから連立つて、板の間稼ぎに歩かうね。

（ト思入れ。この中、杢助腹の立つ思入れにて、）

杢助　うぬこの坊主返りめ。云はしておけば樣々なことを。何處の國にか旦那樣を、三千兩取つた泥坊なぞと、何

を證據にぬかすのだ。
清吉　やかましいや。椋鳥め。證據のねえことをいふものか。
杢助　して／＼證據は何が證據だ。
清吉　證據といふは外でもねえ。賴朝公から納つた祠堂金の三千兩。封印捺したはおれが役。知らねえ者が見た日にやァぶつこぬきの三文判、字性も朧に分からねえが、寺にゐただけ鮮かに見えすく證據の三千兩。この封印があつたからにやァ目ぐしは拔けねえ大泥坊。睨んだ事ァ五分でもすかねえ。僅か七分か一寸のこの封印が確かな證據。印形捺して請合はう。
（トこれを聞き、杢助扨はといふ思入れあつて、わざと立ちかゝり）
杢助　まだ／＼そんな僞りごと。どこの判やら知れぬものを、云ひ掛けをして盜人呼ばはり、出る所へ出れば分かる事だ。うぬ、ふん縛つて連れて行くぞ。
清吉　面白え。縛るなら縛つて見ろ。おれを突出しやァ夫婦は元より汝等まで、珠數繋ぎにして引いて行くぞ。
お藤　テモまァ、あんな憎いこと。
杢助　うぬ。どうしてくれう。
（ト立ちかゝるを、白蓮留めて、）
白蓮　コレ／＼杢助。手前達の手に合ふやうな、そんな安い人ではない。然し何と云はうとも此方に覺えがないことなれば、惡い事も恐しい事もない。手前達は構はずと奥へ行つてくりやれ。
杢助　イエ／＼行きませぬ。旦那一人置いては、どんなことをしようもしれぬ。
白蓮　ハテ、惡い人は人だけに又分りのいゝものだ。案じずと行けよ。
杢助　それだといつて。
（ト云ふを白蓮留めて、）
白蓮　コレ／＼お藤。おぬしもこゝで話を聞くと、却つて案じられるから、杢助と一緒に奥へ行つて、こゝへ來ないやうに留めて置いてくれ。
お藤　でも、あなた一人こゝへ置いては。
白蓮　ちつと、おれが了簡があるから、案じずと行つてくれ。
お藤　どうやら、それでも。
白蓮　ハテ、行けといつたら行かねえのか。
（ト白蓮きつと云ふに、兩人是非なく、）
お藤　杢助。來や。
杢助　ハイ、（ト淸吉を見て、）いけ太え奴だなァ。
（ト唄になり、杢助、白蓮と淸吉へ眼を付け、思入れあつて、お藤と共に奥へはひる。時の鐘。白蓮立上り暖簾口より奥を

とつくと見て、上下へ思入れあつて、眞中へすまひ、）

白蓮　淸吉。惡いことはしねえものだなア。

淸吉　なんと。

白蓮　いかにも手前が推量の通り、頼朝公から極樂寺へ、佛のための祠堂金、三千兩納つたとちらりと聞いた地獄耳。その晩しかけておれが盗んだ。他の物は我物と濡手で安房から上總下總、常陸をかけて寺々へ仕事に入つて冐名に呼ばれ、然も大寺正兵衞といふ、おれも以前は盗人だ。

（ト白蓮頭巾を取り、五十日鬘になる。淸吉おさよ思入れ。）

淸吉　ム丶、そんならお前が噂に聞いた、大寺正兵衞といふ盗人かえ。

おさよ　ほんにお前が泥棒とは、妾アさつぱり知らなんだよ。

白蓮　そりやア素人にやア話せねえが、盗人一代一晩に三千兩は愚かなこと、千兩でもかためちやア滅多に盗めるものぢやアねえ。そこでこゝが止時と仲間の者にも分けてやり、足を洗つてその金から思付いての貸附會所。五兩十兩貸す金も難儀な者にやア利息も取らず、月限なしにして置く故、佛々と人にも云はれ、今ぢやア道に落ちたものせえ見向きもしねえ堅氣になり、誰一人疑ふものなく枕を高く寢てゐたが、天道樣が許さねえ。うつかり出したさつきの封金。他の者なら白を切り、どこがどこまで云ひ張るが、見咎められたは名にしおふ今で名うての鬼薊。遁れぬこと故明したが、譬へにもいふ壁に耳、もう浮々と此土地におれも足は留められねえ。旅へ出かけて元の盗人。かう打ちまけていふからにやア、隱しやアしねえが三千兩も、手元にゐるは二百か三百、殘らず手前にやらうから、娑婆にゐる中一日でも旨えものでも澤山喰ひ、してえ事をするがいゝ。必ず身にやア附かねえから、堅氣にならうと思ふなら、この正兵衞がいゝ手本だ。

（ト手箱より二百兩出し、以前の金と一つにして淸吉の前へ出す。淸吉、おさよ顏見合せて思入れ。）

さア、この金を持つて歸つてくれ。それともおれがどめてでも置くと思つて不承知なら、手前もおれもこれまでだ。手前が抱くかおれが抱くか。一緒に入つて末始終、板附に並んでかゝらう。

（ト思入れにていふ。兩人は感心の思入れにて、）

淸吉　おさよ。聞いたか。豪氣なものだな。遣ひ殘りの三百兩、殘らず出して持つて行けとは、さりとはいゝ膽ツ

玉だ。これから見るとけちな根性。おさよが縁から置いてくれと嫌がらせの擧句の果て、百と云つたら半分か少くつても二十や三十、取れる仕事と見込んで來たが、端金を當てにして強請に來たおれが腹とは、これ程にも違ふものか。ア丶面目ねえ〳〵。

おさよ　お前より、妾が尙正兵衞さんにやア面目ない。何にしろ此金も素人なら知らねえこと、いはば仲間の上からは、唯貰つちやア歸られめえよ。

淸吉　ヲヽさうだ〳〵違えねえ。今聞きやアこれから又旅へ出るといひなさりやア、先だつものは路用の金。志は貰ひました。(ト金をいたゞき、)金はお前に返します。(ト白蓮の前へ出す。)

白蓮　その遠慮にやア及ばねえ、旅をするに二百兩の三百兩のと邪魔な路銀を持たずとも、行く先々で仕事をすりやア、唐天竺まで行かれる身體。こりやアそつちへ持つて行つてくれ。

淸吉　そりやアわつちだつて同じこと。一人と違つて夫婦稼ぎ。決して困りやアしねえから、こりやアそつちへ納めてくんねえ。

白蓮　さうでもあらうがおれも正兵衞。一旦出したこの金を、どう引込ませられるものか。

淸吉　お前もさうならわつちも淸吉。この金は貰へねえ。

白蓮　ハテ、さう云はずと。

淸吉　イヤ〳〵こりやア斷りだ。

(ト兩人金を突合ふ。おさよ思入れあつて、)

おさよ　爭ふものは中よりと、こりやア妾が裁いて上げませう。正兵衞さんも、ア丶云ひ出しちやア、所詮止さうと云ひなさるめえ。これを貰ふとはいはねえのは知れてゐる故、こゝは妾が中を取つて、一旦貰ふと約束をした百兩を草鞋錢に此方へ貰ひ、殘りをお返し申さうぢやアねえか。

白蓮　ム丶流石は、おさよ。いゝ裁きだ。兎やかう云ふも面倒だから、二百兩はおれが取るから、恩には被せねえ百兩は淸くそつちへ受けてくりやれ。

(ト二百兩を取り百兩を淸吉の前へ出す。)

淸吉　折角お前の志、無足にするも濟まねえから、それぢやアこりやア貰ひやす。(ト百兩を取る。)

おさよ　これで互ひに心も濟み、中へ立つた妾が嬉しさ。

淸吉　然し、百兩、氣の毒だ。

白蓮　まだそんなことを云ふか。オヽ入物がなきやア胴卷を遣らうか。

(ト地袋戸棚から絹の胴卷を出す。淸吉思入れあつて、)

清吉　さうさ。胴巻にも及ばねえが、何ぞ入物が欲しいものだ。

おさよ　お前、腹帯にしてゐる、守の中へ入れねえな。

清吉　ホンニ、こいつァ三つ児に淺瀬だ。（ト懐より、鬱金木綿の守袋を出す。）

おさよ　いゝことを教へてやるに、負けをしみなことばかり。

白蓮　なるほど。こりやァいゝ思ひ付きだ。

清吉　エヽ、べらぼうに詰つてゐる。

（ト中より守をふるひながら出し、舞臺へ守ぱつと散る。）

おさよ　エヽ、勿體ねえ。お守をこぼした。

（トおさよ拾ふ。清吉は守袋の中へ金を入れる。白蓮守を見て。）

白蓮　清吉。手前は法華宗か。

清吉　親の代から法華さ。

白蓮　道理で經宗の守ばかりだ。中山の劍難除に、駒木の腹帶、柴又の一粒御符、下總のものが多いな。

清吉　アイ、わつちが生れは行德で、鹽濱の漁夫の伜。親讓りの堅法華だが、おつなもので信心も、生れ故鄕が懷しく、あの界隈のが多いのさ。

白蓮　（思入れあつて。）ムウ、それぢやァ生れは行德か。

清吉　七歳の年に兩親に別れ、鎌倉にゐる伯父の世話で菩提のために坊主にされ、極樂寺の弟子になつたが、これでもなつた一しきりやァ、名僧知識になる心だつた。

おさよ　ホンニこれまで正兵衛さんと、一つにゐたこともあつたが、お前の生れは何處だやら。

白蓮　おれもやつぱり船橋生れで、親父は漁夫が稼業だつた。

清吉　ハテ似たこともあるものだ。こんなことから印籠と守袋を證據にして、兄弟の名乘りをするなァ、狂言にあるこつた。

白蓮　同じ行德とありやァなつかしいが、手前の親父は何といつた。

清吉　コレ〳〵、こゝにあります。（ト取散せし守の中より、臍の緒書を取出し、開いて。）今は昔の臍の緒書、下總國行德、漁夫清次伜清吉。

白蓮　（これを聞き思入れあつて。）それぢやァ親父に三日月の、額に疵はなかつたか。

清吉　アヽありやした〳〵。大和田の宿と喧嘩の時、額に受けたといふことだ。

白蓮　そんなら手前はおれが弟だ。

清吉 おさよ　エ。（ト兩人びつくりして。）なんと云ひなさるえ。

白蓮　ア、思ひ出しやァ二十年前。然も手前が三歳の時、神隱しになつた、おりやァ惣領。(ト思入れあつて、) 臍の緒書を出すのも面倒。清太郎といつたはおれがことだ。
清吉　そんならお袋の話に聞いた、お前はおれが兄貴かえ。
おさよ　思ひがけねえことだねえ。
白蓮　假にもおさよと兄弟の緣を結んだこのおれが、やつぱり實の兄弟とは。
清吉　こいつァ兄貴。芝居の樣だ。
(ト三人よろしく思入れ。)
白蓮　ア、考へて見ると、浮世ほど分からねえものはねえ。二十年から別れてゐて不思議に邂り遭つたのも、その弟が二世までと言交してるこのおさよを、圍つておいたが緣の端。
おさよ　亭主に繫がる兄とも知らず、圍はれたのを種にして、置いてくれろと嫌がらせ、强請り取つたる金包み。
清吉　その百兩の封印から、極樂寺で盜んだる三千兩のもくが割れ。
白蓮　包み隱した盜人を明かせばあかの他人でなく、胤腹一つのおれが弟。
おさよ　それ故こゝに兄さんが居られぬ樣になつたのは、いはゞ訴人も同然なれど。
清吉　今更云つても仕方がねえ。かういふ羽目になるのも時節。
白蓮　思へば親父が殺生の、報いか知らぬが二人とも。
おさよ　どうで始終は天の網。
清吉　どちらが先へ切られるか。
白蓮　殘つた者が切首へ。
おさよ　手向ける水も缺茶碗。
清吉　罅の入つたる身體故。
白蓮　今日逢つたのが形見にて。
おさよ　娑婆の名殘にならうやら。
清吉　互ひに知らねえ危ふい身の上。
白蓮　とゞの終ひは刀の錆。
おさよ　疊の上ぢやァ。
清吉　兄貴。
白蓮　弟。
三人　ア、死なれねえなァ。
(ト三人よろしく思入れ。バタ／＼になり、奧より以前のお藤走り出で來りて、)
お藤　モシ旦那どの。今李助が湯へ行くと裏口から出て行きます故、拔けるのであらうと留めたれど、振拂つて行つた樣子。どうも合點が行きませぬわいな。
白蓮　ム、常から馬鹿げた其中に、見所のある彼奴の了簡。裏からこつそり拔けて出たは、もしや彼奴は廻し者か。
お藤　エ。
清吉　さう聞く上は油斷がならねえ。いつぞやおれが構への時、言渡しの役

人が、瓜を二つの彼奴が面付。こいつァ早くふけ仕度を。

白　蓮　イヤ、それよりやァ足弱連れ。手前ふけてくりやれ。

おさよ　イエ〳〵、かうなる上からは、どう見のがして行かれよう。

淸　吉　今にも捕手が來たならば、命限りに働いて、かなはぬ時ァ兄弟一緒に。

白　蓮　そりやァ手前惡い了簡。おれよりやァ先が長い。ふけろといつたら早くふけろ。

おさよ　まア、それよりやァ姉さんを。

（トこの內、お藤思入れあつて、）

お　藤　イエ〳〵、妾や、お前より先へこの場を。（ト行きかける。）

白　蓮　こりや女房。何處へ行く。

お　藤　奧で聞いた二人が身の上、この通りを代官所へ。

（ト行くを白蓮留めて、）

白　蓮　ム、扨は此身の訴人をする氣か。

お　藤　アイ、夫婦一つでない證據に。

（ト振拂つて行くを淸吉留める。白蓮、傍の一腰を取り直に拔いて、）

白　蓮　うぬ人でなしめ。

（トお藤を斬下げる。これにてどうとなる。）

おさよ　ヤ、こりや姉さんを。

淸　吉　ばらしたのか。

白　蓮　生けておかれず、ばらすのだ。

（トお藤、這ひ寄り苦しき思入れにて、）

お　藤　さア、足手纏ひの妾を殺さば、お前は捕手の來ぬうちに。

淸　吉　ヤヽ、そんなら姉御は切られる覺悟か。

お　藤　一緒に行けば道の邪魔。後に殘らば縄目を受け、お前の詮議にどのやうな憂き目に合ふも知れぬ故、訴人というて斷出したは、手にかゝつて死ぬ覺悟。妾がなければ身一つに、心殘りもござんすまい。少しも早う落延びて、命全う隱れ住み、逆ながら命日にはお前の手づから水一つ、どうぞ手向けて下さんせ。あの世で待つてをりますわいなァ。

白　蓮　ヲヽ出來した女房。よくおれが手にかゝつて死んでくれた。禮は冥土で會つて云ふぞよ。

おさよ　思へば果敢ない姉さんの、この最期をば女の鑑。

淸　吉　ア、素人にやァいゝ覺悟だ。

お　藤　さア、苦痛をするだけ思ひの種。少しも早う。

白　蓮　云ふにや及ぶ。（トお藤の胸先を取り、）南無阿彌陀佛。

（ト胸を突く。お藤手を合はせ落入る。おさよ見てハアと泣伏す。ト花道の揚幕にて、ドン〳〵と捕物の鳴物になる。）

清吉　ヤ、あの物音は。
白蓮　確かに捕手だ。
（トお藤を放す。おさよ介抱をなす。血を拭ひながら、）
さア、手前達も支度をしろ。
清吉　合點だ。
（ト門口へ掛金をかける。おさよ以前の二百兩を取つて、）
おさよ　兄さん。さつきの金が。
白蓮　ヲヽ、邪魔ながら持つて行かうか。
（ト以前の胴巻へ入れ懐へ入れる。この中、花道より杢助の寺澤塔十郎。野袴打割、大小、裸鉢巻、草鞋、十手をさして先に立ち、後より三階、黑四天の捕手六人一、二、三、四、五、六、附きて出て來り、門口にて内を窺ひ、捕手の三、四の二人は下手へはひる。）
おさよ。火鉢をこゝへ。
おさよ　あい。
（ト手焙の火鉢を持つて來る。白蓮手箱の内の證文を火鉢に入れる。これにてぱつと燃え、）
清吉　ヤ、火に打ちこんだ書物は。
白蓮　これこそ貸した金證文。後に殘らば人の難儀。
清吉　さすがは兄貴。
（トこの中後より廻りし捕手の三、四の兩人、白蓮、清吉を目がけて、）
兩人　捕つた。
（トかゝるを、身を交し一寸立廻り、兩人を一時に當て、白蓮、清吉に囁く。）
清吉　これから二人が落合ふ所は。
白蓮　小袋坂の地藏堂。
（ト表へ聞えるやうに云ふ。塔十郎思入れ。白蓮小聲にて、）
裏からこつそり。
おさよ　そんなら兄さん。
（ト捕手心付きて「捕つた」と兩人にかゝるを引付け、）
白蓮　ちつとも早く。
清吉　合點だ。
（ト捕手を投付け、おさよを連れ奥へ入る。この時門口の戸をぱら〳〵と毀し、塔十郎先に捕手内に入り白蓮を取卷き、）
捕手　動くな。
（ト白蓮、塔十郎を見て、）
白蓮　ムヽ、扨は下男の杢助は合點行かずと思ひしが、廻し者にてあつたるか。
塔十郎　いかにも。汝が身の素性不分明故下男となり、此家に入込む某は、盜賊詮議の役目を蒙むる、寺澤塔十郎といふ者なり。最早脱れぬ汝が惡事。さア尋常に繩にかゝれ。
白蓮　斯く露はれる上からは、幾人切つても兇狀はたつた一つのおれが命。片ッ端から覺悟なせ。
塔十　何を小癪な。ソレ、搦めとれ。

捕手　ムツ、捕つた。

(ト、ドンノヽにて、白蓮へ十手にて打つてかゝる。白蓮一腰を拔き切拂ひ、烈しき立廻りになり、トヾ捕手奧へ逃込む。塔十郎鎖を持ち白蓮へ打ちかけ、兩人鎖と刀にて面白き立廻りあつて、兩人よき見得。これにてこの道具廻る。)

・

本舞臺三間の間。眞中に一間中窓。左右窓下とも網代のしたみ。上下建仁寺垣、梅松の立木。總て奧座敷裏手の體。こゝに淸吉匕首を拔き、おさよを後に圍ひ立身にて、左右には捕手取卷きゐる。ドンノヽにて道具留る。

(ト捕手十手にて打つてかゝる。淸吉滅多切りに切散らして立廻り、おさよは竹箒にて捕手の顔を突く。よきほどにバタバタになり、上手より白蓮、拔身を持ちて出で來り、この中へはひり切散らす。これにて捕手上下へ逃げてはひる。三人顔を見合せて、)

淸吉　兄貴か。

白蓮　弟。首尾よくいつた。

(ト兩人血を拭ひ鞘へをさめる。)

おさよ　そんならこれから。

白蓮　道を違へて。

淸吉　合點だ。

(トこの時、捕手兩人、白蓮淸吉に「らぬ」とかゝるを立廻つて、どんと當て、淸吉おさよはつかノヽと花道へ行き、白蓮は東の歩みへ行く。この時、正面の中窓を打破り、塔十郎半身出し、)

塔十郎　取逃がしたか。

白蓮
淸吉　エイ。

(ト石を取つて打付ける。塔十郎ちよつと身を引くと、この石、當てられたる捕手に當り、一時に轉るを木の頭、)

この間に、さうだ。

(ト早めたる合方、時の鐘の送りにて、双方花道へ出る。塔十郎窓から見送る。ここ仕組よろしく、)　拍子幕

四幕目

名越無緣寺の場
同表門捕物の場

本舞臺、三間の間。上の方一間の灌濯場。正面は墓場入口の木戸、左右黒塀。下の方丸井戸。所々に石塔大分あり。よき所に柳の立木。總て名越無緣寺墓場の體。こゝに穴掘鍬藏、寺男の拵へにて居り、これを夜鷹蛇賣り仁八、合長屋のどん七、鋤六引付けゐる。これを下女お虎、留めてゐる。この見得、禪の勤めにて幕明く。

鍬藏　コレノヽ、こなた衆はおれを捉へてどうするのだ。

仁八　どうするものか。勾引だから、代官所へ連れて行くのだ。

勘六 どん七　歩びやがれ。
お虎　コレ父さん。腹の立つのも尤もだが、〳〵どうぞ許して下さんせと。
勘藏　〳〵手を合はせてぞ頼みける。
仁八　イヤ〳〵、いくら拜んでも堪忍ならねえ。どこの國にか穴掘のくせに人の娘を引攫ひ、渴灌場へ隱して置き、我物にするといふがあるものか。代官所へ連れて行かねばならぬ。
どん七　コレ〳〵、こなたのお蔭ぢやァ、長家の者も此間から、幾日暇をつぶすか知れねえ。
勘六　この返報にやァ代官所へ勾引と訴へて、暗い所へやらにやァならねえ。
兩人　さァ歩びやァがれ〳〵。
勘藏　ア、コレ〳〵二人の衆。待つてくれ。〳〵これが連出したといふ譯ではなし、わしが義太夫に惚れこんで斷込んで來たこのお虎。それを捕へて勾引とは聞えませぬとぞ歎きける。（ト淨瑠璃を語る。）
どん七　エヽ、何ぞといふとへぼ淨瑠璃。聞きたくもねえわえ。
勘六　これに又惚れたといふは、お虎もよつぽと物好きだ。
お虎　なに物好きな事があるものだ。そりやァもう淨瑠璃を語るものは、〳〵太夫を初め素人にも上手な者はいくらもあれど、太がい節が同じやう。この勘藏どのゝ淨瑠璃は、お寺に居ただけお經に似て三味線よりも銅鑼鐃鉢、磬や木魚によく合つて、類のない淨瑠璃故惚れたが無理ではあるまいと、親の頭を押へけり。
仁八　エヽ汝までが同じ樣に、出たらめ節のその淨瑠璃、親を馬鹿にしをるのだ。もう了簡がならぬわえ。
勘藏　〳〵もう了簡がと熱くなり、怒る親父が禿頭。
お虎　〳〵藥罐の煮え立つ如くなり。
仁八　まだそんな事をぬかしやがるか。
どん七　さァ、代官所へ。
三人　歩びやがれ〳〵。
（ト引立てにかゝる。葬禮の鳴物になり、花道より組頭三次、尻端折にて先に立ち、後より單衣をかけし早桶を、正兵衞の手下一、二草履にて擔ぎ、この後よりどら市、渴灌場買ひの形にて鐵砲笊を擔ぎ、附添ひ出て來り、直に本舞臺へ來り、この中へはひり。）
三次　これさ〳〵、何だか知らねえが、間違ひなら了簡しねえ。
手下一　腹も立たうがお寺のことだっ
手下二　佛に免じて往生しねえ。
三人　イヤ〳〵了簡ならねえ〳〵。
勘藏　〳〵了簡ならずばどうなりとも、打ちたゝかれる身の覺悟。

どら市　これさ〳〵勘藏どの。この衆が留めてゐるのに、まア待たつしやい〳〵。

勘藏　オヽ、こなたは湯灌場買ひのどら市どのか。

三次　どういふ譯か知らねえが、わつちもこゝへ來合はしたからにやア、默つちやアゐられねえ。

お虎　御親切は嬉しいが、云うても聞かぬあの親父。うつちやつておいて下さんせ。

三次　（顏を見て）オヽ、さういふお前はお虎さんか。

手下一　ほんに頭の所にゐた。

三次　アヽコレ、頭ぢやねえ貸附所にゐたのだ。さうしてこりやアどういふ譯だな。

どん七　モシ、この間違へはお虎どんが穴掘といゝ仲になつてゐて、父さんを置去りにして逃げて來たものだから、それでやかましく云ふのだ。

三次　それぢやア父さんが怒るのも尤もな譯だ。

どん七　然し、これも好き合つた仲なら仕方がない。

手下二　何にしろ、わつちらが仲人に入るから。

三人　了簡してやんなせえ。

仁八　そりや、世間にないことでもござりませんが、どこの國にか穴掘と。

手一　情事をする奴が。

三人　あるものでござりますか。

どら市　その腹立ちは尤もだが、そりや、父さん惡い了簡。わしも年中寺方の湯灌場を買つて歩くが、表店を立派に張つてゐる古着屋さんより錢になります。穴掘〳〵と安く云へど、大概の商賣より錢になるのはわしが請合ふ。お前。聟に取んなさりやいゝに。

勘藏　〽ほんにお前のいふ通り、お寺で三度の飯は食ひ、着物は死人の皮を剝ぎ、又小遣錢は穴掘賃、法事のお布施で澤山餘り。

お虎　〽まだその上に饅頭や强飯は年中喰べ放題。思へばこんな商賣は廣い世界に又無い故、惚れたが無理ではござんすまい。

（ト兩人節を附けて、口三味線にて云ふ。）

仁八　エヽ親の心子知らずと、穴掘を聟に取つたと長家中へ云はれるものか。

どら市　ハテ、穴掘だらうが隱亡だらうが、當時は慾の世の中だ。去年のやうにころりでも流行りやア錢金の置き所がねえ。それを當にやんなせえな。

仁八　エヽ緣起でもねえことを云はつしやい。又ころりが流行られてたまる

ものか。

三次　何にしろ、話し合ひでどうとも片のつくことだ。わつちも見なさる通り葬式を持込んで來て、いつがいつまで掛り合つてもゐられねえ。仲人の役だ、一升買ふから、一杯づつ呑みやつて話をしなせえな。

（ト三次、煙草入より一分出し、仁八に渡す。）

仁八　そりやァ有難うござりますが、見ず知らずのお前樣に。

三次　ナニ、お前にやァ初めてだが、お虎さんとは近付きだ。

どん七　コレ父さん。折角あの衆があゝ云ひなさるから、まァ一杯呑まうぢやねえか。

勘六　酒と云はれちやァ聞きのがしがならねえ。

三次　わつちが一緒に行きてえが、佛を置いても行かれねえから、二人を代りにやりますから、どこぞで笑つてくんなせえ。

勘藏　これは〳〵三次樣とやら、とんだ所へお出でなすつて、御厄介になりまする。へその代りにはその佛の穴は深く掘つて上げます。

三次　さァ〳〵無駄口はいゝ加減にして、わしらも一杯呑みてえ所だ。

手下二　機嫌を直して早く來ねえ。

三次　屑屋さん。お前も一緒に行きねえ。

どら市　イヤ、わしやァ喰氣より慾氣の方だ。お臺所へ行つて買物をしにやァならねえ。

三次　それぢやァ父さん。腹も立たうが兎角老いては子に從へだ。了簡してやんなせえ。

仁八　これは、御親切に有難うござります。

お虎　左樣なれば三次さん。

三次　少しも早く。

皆々　これから酒屋へ。

勘藏　へ打連れてこそ。

（ト禪の勤めになり、勘藏三重を語り、お虎口三味線にて、仁八、どん七、勘六、手下一、二、附いて下手へはひる。どら市は三次へ眼を付けて上手へはひる。時の鐘、合方になり、三次邊りを窺ひ思入れあつて、早桶の傍へ寄り、小聲にて。）

三次　モシ、頭々。嘸窮屈でござりませうが、晩までだから辛抱なせえ。人相書が廻つた故、晝の中はうつかりと駕籠にもお乘せ申されねえから、とんだ故人南北だが、そつからわつちが新狂言に、早桶といふ思付きさ。丁度上州から歸つて來た顏の知れねえ二人の奴等を、日雇取りにこしらへて擔が

せて歩くから、人の氣の付く氣遣ひはねえ。今夜の闇を幸ひに、暮れたらそつと擔ぎ出し、燒場まで行くと思はせて、夜通しにやツつけやせう。

（ト三次、早桶へ耳を寄せ、何か聞く思入れあつて、）

エヽ何かえ、頭の弟の清吉さんかえ。捕られたといふ噂も聞かねえから、旅へ出かけなすつたに違えねえ。ぬしの事だから如才なく山越しに逃げなすつたらうが、姉さんが一緒だから足が付かにやいゝが。（ト思入れあつて、）何にしろ湯灌場へ擔ぎ込んでおきてえものだ。

どら市　（後へ出て、）モシ、お困りなら、わつちが片棒擔いで上げようか。

三次　（思入れあつて、）そいつア有難い。お氣の毒だが、お頼み申します。

どら市　何の造作もねえことだ。

（ト兩人して早桶を擔ぎ湯灌場へ入れ、）

いや、べらぼうに重い佛だ。何でも立派な男と見えるね。

三次　ナニ、男ぢやアねえ女さ。

どら市　女といふ目方ぢやアねえが、それとも金でも入つちやゐねえか。

三次　エ。

（トぎつくりこなし。どら市思入れあつて、）

どら市　モシ、わしやアどら市といふ湯灌場買ひだが、値をよく買ひますが賣つちやアくんなさらねえか。

三次　ナニ、賣れとは何を。

どら市　この早桶の佛をさ。

三次　エ。

どら市　ものを云ふ死人は珍しいから、買つて行つて値賣りをする氣だ。

三次　なんと。

どら市　それとも賣らざア買ふめえが、一旦見込んだこの代物。利分をくんねえ、讓つてやらう。

三次　ナニ、この佛の利分をくれ。おつなことをお前云ひなさるの。寺の乞食や燒場の隱亡、出していゝ酒手なら云はねえでもくれてやらア。ちよつと片棒擔いだから、一杯呑ましてくれろと云やア、話を付けねえこともねえが、をかしなことを云はれちやア、三文でも出すものかえ。

どら市　そりやア眞の佛ならこんなことを云やアしねえが、ものを云ふ佛だから口塞げをくれといふのだ。ちよつと一肩擔いでも中は大方こんな玉と、秤の目よりおれの目で、ふんだらそれが定値段、三分五厘違やアしねえ。嘘なら佛を出して見せろ。

三次　さア、そりやア。

どら市　よもや佛は出せめえが。

三次　出せねえこともねえけれど、佛

を出してもつまらねえ。まァそれより
やァ不承でも、これで一杯呑んでくん
ねえ。(ト吹煙草入より一分出してやる。)
どら市　なんだえ、一分ばかりの目腐れ
金。こんなものは要らねえわえ。(トた
たきつける。)
三　次　うぬ。さうぬかしやァ了簡なら
ねえ。
どら市　了簡ならざァ、どうともしろえ。
三　次　しねえでどうするものか。
(ト有合ふ卒塔婆を取つて打つてかゝる。
どら市は秤の棒にて叩き合ひ、兩人立廻
つて、トゞどら市花道へ逃げて行くを、三
次追ひかけはひる。これにて道具廻る。)
本舞臺、三間の間。常足の二重。丸太の
柱、藁葺屋根、竹の本椽附。正面、鼠壁、
暖簾口。上手に佛壇、内に佛具よろしく
飾りあり。この前に白木の位牌、香爐、
花、供物など並べあり。上の方、一間、
湯灌場の後を見せ、下の方千人塚石塔。
此後卒塔婆を結込みし瓶疊。總て無縁寺
墓守庵室の體。こゝに西心、鼠の着附頭
巾を冠り、佛前へ灯を點けてゐる。この
見得木魚入りの合方にて道具をさまる。
西　心　アゝ年々年齢を取るにつけ、一
年經つは夢の樣だ。去年百本杭で殺さ
れた求女が明日は祥月命日。何者の仕
業やら今に於て殺し手も知れず、何で
あのやうな孝行者が非業な最期を遂げ
たかと、いくら諦めても諦められなん
だが、當で散つたも定業か。この春は
彼岸に當つて、團子でも拵へてやらず
ばなるまい。(ト思入れあつて上手を窺
ひ、)先刻から蘭塔場で、穴掘の鋤藏が
女子を連れて來たというて、やかまし
いことであつたが、濟んだと見えて靜
かになつた。ドレお念佛でも唱へてや
りませうか。
(ト西心、佛壇へ向ひ珠數を爪繰り回向
の思入れ。花道より清吉先に、おさよ抱
子を抱きて出で來り。)
清　吉　コウおさよ。坊主は寢たか。
おさよ　やうやくすや〳〵寢入つたよ。
(ト清吉、抱子を覗いて見て、)
清　吉　可哀さうに、この小僧も惡い親
を持つたので、生れた日から他人の手
ばかり。たま〳〵親の手へ歸りやァ、
何處を當と家もなく、夜夜中まで連れ
て歩かれ、嘸これが身でも難儀だらう。
おさよ　それに妾が初めて故、どうして
いゝやら樣子は知れず、いつそこのみ
じめを見せる位なら、どんな所でもい
いから遣つてしまひたいよ。
清　吉　いくら遣りてえと思つたとて、
里にせえ取手がねえもの、おれが子だ
といつて誰が貰ふものか。さういつて

捨てゝしまふのも可哀さうだ。

おさよ　まあ仕方がねえ。行く所までこの兒も一緒に連れて行き、一日でも妾の手で餘計に世話をしてやらうよ。

清吉　何でこんなに兒ばかりァ、可愛いものだか分からねえ。

おさよ　そこが親子の情合だね。

清吉　まァ、何にしろ父さんを訪ねて見よう。（ト本舞臺へ來り、中を窺ひ思入れあつて、）ハイ、御免なせえ。西心さんの家はこちらでござりますか。

西心　ハイ、これでござるが、どれからござつた。

おさよ　父さん。妾でござんす。（ト門を明け內へはひる。西心見てびつくりなし、）

西心　オゝこりや娘。清心樣。テモ思ひがけない。

清吉　（外へ思入れあつて、）イヤ、モ、こなたに會ふのも面目ねえ。

西心　何の面目ないことがござりませう。さァ／＼こつちへ上らつしやりませ。

（トこれにて清吉おさよ二重へ上る。西心捨ぜりふにて茶、煙草盆を出し、）

扨その後は、久々お目にかゝりませぬが、御機嫌ようてお目出度うござります。

清吉　こなたも達者で何よりだ。

おさよ　お前がこゝにゐなさんすも聞いたなれども、ついそれと尋ねて來られぬ身の上故。

西心　オゝその事は詳しう聞いた。娘は元より清心樣、どうしてそんなお心にならしやりました。今世の中に名の高い鬼薊といふ泥坊が、（ト云ひかけ、四邊を憚り小聲にて、）あなたと聞いたその時のこの西心の驚きは、どの樣でござりませう。いかなる事でお心からお姿まで、その樣に變り果てたことぢややら。アゝ情ないことでござります。

清吉　さうこなたに云はれると、穴へもおらァ入りてえ。たゞ何事も因緣づくと、父さんどうぞ許してくんねえ。

西心　勿體ないこと仰しやりませ。こんな身の上にならつしやつたも、元はといへば娘故。オゝ、娘といへばおさよには、箱根山で惡者に連れて行かれて別れたきり、あれからどこにどうしてゐて、この鎌倉へは歸つて來たぞ。

おさよ　さァ、箱根山から惡者に連れて行かれたその先は、小地獄谷といふ所で、一寸法師や鷄娘、片輪者を買込んで鎌倉へ賣る見世物師、地獄婆ァと名の高い何でも引込むぐれ宿さ。直に妾を山向うの宿場へ賣らうとしたとこ

ろ、身重なり坊主なり、値打のないのが妾が仕合せ。子を生むまでにはこの髮も延びるであらうと家へ置かれ、怖い〳〵と思つたもいつしか馴れて半年越し。到頭そこでこの子を生み、肥立つた故に折を見て、この鎌倉へ逃げて來ようと思ふ所へ折よくも、山神祭りの其晩に、ぬしに出逢つて其場から、故郷へ逃げて歸つて來たのさ。

西心　オヽさうであつたか。それはいかい難儀をしたであらう。おれもその折そなたを取られ、生きてゐても詮ない故、直に谷へ飛込んで死なうとは思つたが、志の佛もあり、どうかしたなら又そなたに逢はれることもあらうかと、死に後れて悄々とこの鎌倉へ歸つて來て、緣を求めて無緣寺の墓守とまでなつたわい。何は兎もあれその孫を、おれに一寸見せて呉りやれ。

おさよ　さア、初孫の顏を見て下さんせ。

（ト出すを、西心抱上げ見て、）

西心　オヽこれはよい子ぢや〳〵。おさよ。男か女か。

おさよ　アイ、男の子でござんす。

西心　オヽそれは何より手柄ぢや手柄ぢや。アヽ親子とて爭はれぬ。清心樣に生寫し。オヽ今會つたばかりのこの祖父に笑ひをる。可愛い奴ぢや。も一つ笑へ。

（ト西心、抱子をあやし、餘念なき思入れ。）

清吉　何の役にも立たねえものだが、孫は可愛いものだと見える。

西心　こりや又別の味でござる。アヽおさよ。ぐつすりやつたわえ。

おさよ　お祖父さんにとんだ御馳走だの。（ト抱子を取り、襁褓をあてかへる思入れ。）

清吉　そりやアさうと、早速に聞きてえはお前の身の上。おさよが世話になつてゐた白蓮とかいふ金貸は、おれが兄貴で、やつぱり盜人。緣につれてこの詮議を、こなたもされたに違ひないと、おさよと二人で案じてゐた。

西心　オヽお前方が逃げたといふ翌日直に、下男でゐた塔十郎樣へわしは呼ばれ御詮議に會つたので、白蓮樣やお前樣、おさよが變つた身の上を、聞いてびつくり致しました。したが、元より知らぬこと故、繩目の恥も身に受けず、そのまゝ許され歸つて來た。

清吉　そりやア何より仕合せだつた。さうでもねえ、どのやうな憂き目に逢つちやアゐねえかと、今日會ふまでは二人とも、どんなに案じてゐたか知れねえ。

西心　それは有難うござります。

おさよ　まァ何にしろこの様に、親子夫婦孫までも一つに寄つて一晩でも、話をするが互ひの仕合せ。
清吉　ほんにいつぞや手前もおれも、身を投げた時死んでしまやァ、今父さんには會はれぬわけだ。
西心　わしも箱根で死んだ日には、可愛い孫の顔も見られぬ。
清吉　假令どんな苦勞をしても、生きてゐにやァつまらねえ。
（トこれにて、西心求女を思出せし思入れにて、）
西心　成程お前様の仰しやる通り、死ぬ者貧乏でござります。同じ姉弟でありながら、はかなく死んだ弟が不便さ。
おさよ　エ、そんなら弟の佐之助は。
西心　今までそちにも隠してゐたが、明日が即ち一周忌。
おさよ　たつた二人の姉弟だのに、なぜ知らしては下さんせぬ。
西心　さァ、病み煩ひで死んだのなら、死目にも會はすけれど、非業な死をば遂げた故。
おさよ　どういふ譯で。
清吉　エヽ、そりやァ何處で。
西心　世にも哀れなあれが身の上。まァ一通り聞いて下され。
（ト一つ鉦の入りし合方になり、涙を拭ひながら、）
然も去年、清心様が御追放にならるゝ時、お身の片付きお手當に、お金をどうぞ上げたいと、思へど甲斐ない貧乏暮し。その才覺に歩きし折、稱名寺へ小姓にやつた求女にふつと道で出逢ひ、その話をしたところ、どうか都合しませうと云つたを力に待てど暮せど、來ぬのは金ができぬ故と思ふ所へ近所の衆が、求女の死骸が百本杭に浮いてゐると、聞いてびつくり足も空に行て見れば、むごたらしう切りをつて、川へ捨てたる浮死骸。是非もなく／＼引取つて葬りは葬りましたが、意趣斬りか物取りか今に様子が解りませぬ。何にいたせ年さへも十四か十五の蕾の花。殺しをつたは何者か。おのれ敵が知れたなら、むしやぶりついても殺してやらうと、その悔しさといふものは、今日で丁度一年經てど、寢た間も忘れはしませぬわいの。
（ト涙に咽せて咳き入る。おさよ泣きながら背中を撫る。この中、清吉術なき思入れあつて、）
清吉　そんならいつぞや、百本杭で。
西心　エヽ、あなた御存じでござりますか。
清吉　イヤ、サ、噂に聞いた若衆の死骸。ア、不便なことであつたなァ。（ト

思入れ。)

おさよ　いつぞやお前が妾宅で、菩提の爲に剃髮したと云はしやんしたのは、弟の菩提の爲でござんしたか。何故あの時にこの事を、妾に云つては下さんせぬ。

西心　サ、そちに隱して知らさぬは、この歎きを見まいため。(ト思入れあつて、)丁度幸ひ、清心樣へ、お願ひがござります。(ト臼の卒塔婆と硯箱を持つて來て、)お所化に書いて貰はうと、墨も磨つておきました。菩提の爲にこの卒塔婆を、お書きなされて下さりませ。

(ト清吉の前へ出す。清吉思入れあつて、)

清吉　イヤ、この卒塔婆はおれが書いては、却つて佛のためにならねえ。

西心　そりやまた、何故でござります。

清吉　さア、以前なれば兎も角も、鬼と名のつくおれが書いては、追善供養にならねえから、所化に書いて貰ふがいゝ。

西心　そんなことを仰しやらずと書いて下さればよいに。仕方がない。明日誰ぞ所化に書いて貰はう。

(ト卒塔婆を鼠壁へ立てかけておく。おさよは子を抱きしまゝ佛前へ線香を上げる。清吉、花道の方へ思入れあつて、)

清吉　ヤヽ、向うから、侍が確かに此處へ來る樣子。

おさよ　若しや妾ら二人が詮議か。

清吉　何にしろ險難だ。

西心　そんなら暫し奥に隱れて。

清吉　もし、詮議なら。

西心　裏からこつそり。

清吉　ア、コレ。

(ト四邊へ思入れ、時の鐘、清吉おさよは思入れあつて奥へ入り、西心は案じる思入れにて、花道の方を見てゐる。ト花道より、仁八五合德利を提げて出て來り、後より藥山紫之丞、打割羽織、大小荷にて忍び提燈を持ち出て來り花道にて、)

紫之丞　ちともの尋ねたいが、無緣寺と申すは、この寺でござるかな。

仁八　左樣にござりまする。

紫之丞　尋ねたい墓がござるが、して墓所はいづれでござるな。

仁八　墓所は右でござりますが、向うに墓守がござりますから、それでお聞きなされませ。

紫之丞　これは親切に忝い。

(ト兩人本舞臺へ來り、仁八直に内へはひりて、)

仁八　西心どの。最前は御地内を騷がしました。これは少しばかりだが一杯飲んで下され。

西心　アヽ、このやうな心配はよさつしやればよいに。

仁八　ほんの心ばかりだ。受けて下され。

西心　それは何より忝い。(ト徳利を取つて)モシ、そこにおいでなされまするは。

仁八　オヽ、あの旦那は、何か墓を尋ねたいと仰しやつた。

西心　左樣でござりますか。

(ト繁之丞内へはひりて、)

繁之丞　早速ながら、三日以前、當寺へ大江の屋敷より、葬りし者がござるかな。

西心　ハイ、一昨日の夜でござりました。

繁之丞　その墓所はいづれなるか。承りたく參つたテ。

西心　ハイ、御案内致しませう。

(トこの中、仁八、繁之丞の顔を見てゐて、)

仁八　憚りながらあなた樣も、大江の御藩中でござりますか。

繁之丞　いかにも、大江の藩中でござる。

仁八　私の僻目か存じませぬが、あなたは蔭山武太夫樣の、御子息樣ではござりませぬか。

繁之丞　どうしてそれを。

仁八　お提燈の紋所に見覺えのある旦那の面影。何をお隱し申しませう。私は元お家にゐた、又助といふ中間でござります。

繁之丞　はて扨、それは思ひがけない。

西心　イヤ、モシ、それなる旦那樣。至つて穢うはござりますが、まアこれへお上りなされませ。

繁之丞　然らば許しやれ。

(ト二重へ上り、飾りある位牌を見、思入れあつて上手へすまふ。仁八下手へすまひて、)

仁八　不奉公をいたしました故、その後御機嫌も伺ひませぬが、大旦那樣にはお變りはござりませぬか。

繁之丞　親共事は昨年中、不慮なることにてお過ぎなされた。

仁八　エ、左樣でござりますか。して

不慮なる事とは」

繁之丞　以前の家來故に申し聞かすが、下總結城の浪人にて八重垣紋三と申す者を、わが姉の聟となせしが、仔細あつて父を討ち一度逐電なしたれど、二度我に討たれんと、覺悟極めし甲斐もなく、お家の重寶綠丸がその夜紛失いたせし故、疑ひかゝつて終に切腹。汚名を受けしが殘念なと、死ぬる今際に我への遺言。敵同志といひながら、一旦因を結びし兄弟。それ故夜に入り人目を忍び當寺へ參詣致してござる。

仁八　それは〳〵、とんだ事。嘸お力落しにござりませう。

西心　イヤ、お話の中へ言葉を出すは失禮でござりますが、今仰しやりました紋三樣は、八重垣流の達人にて流を苗字にお呼びなさるゝ紋太夫樣の御子息にて、劍術の爭ひより朋輩を殺害なし、立退かれたお方でござりますが、御切腹なされましたとはテモお情ないことでござりましたな。

繁之丞　すりやその方は紋三どのゝ、知る人にてあつたるか。

西心　ハイ、私の女房が、お乳を上げたお子樣でござります。

繁之丞　はて扨、それは不思議な緣ぢやな。

西心　そんなら一昨日葬りしが、紋三樣でござりましたか。知らぬことゝて一遍の御回向さへしませ

なんだ。南無阿彌陀佛〳〵。

仁八　（ト此中、思ひ出せしこなしにて、）イヤ、いつぞやお屋敷の裏手をば蕎麥を擔いで來ました折、二十四五な侍が塀を破つて拔身で出たが。確かにあれが紋三樣。して又、短刀の紛失は。

紫之丞　矢張その夜のことであつた。

仁八　扨は、あの夜、蕎麥を食つた若い男が、短刀を腰にさしてをりましたが。

紫之丞　それぞまさしく尋ぬる盜賊。

仁八　もしや彼奴が鬼薊か。

西心　エ。

仁八　油斷のならぬことでござる。

紫之丞　それにつけて承りたいは、それなる位牌の俗名に、戀塚求女と記しござるは。

西心　ハイ、私の悴でござりまする。

紫之丞　ム、すりや我養生に五十兩、若殿より惠みを受けしは、そなたの悴であつたるか。

西心　エ、そんなら悴は五十兩大江樣から頂戴せしとか。それぞまさしくわが賴みし淸心樣へ上げる金。それ故命を取られしか。思へば不便なことを致したよなァ。

紫之丞　イヤ、思はぬ話に暫時の暇入り、夜更けぬ内に紋三殿の墓へまゐつて、本堂にて回向を賴んで立歸らん。

西心　左樣なれば私が、お墓をお敎へ申しませう。

紫之丞　氣の毒ながら、案內賴む。

仁八　ドレ、私めも御一緒に。

西心　かうお出でなされませ。

（ト唄、時の鐘にて西心先に提灯を持ち、紫之丞、仁八、下手へはひる。ト下手より勘藏、肩衣を引掛け、横板へ紙で張りし人相書を持ち、出て來り、）

勘藏　西心どの〳〵。代官所からこのやうな人相書のお觸が廻つた。門の柱へ掛けて置けと御住持から言付だ。なんぼ取らるゝ物が無いとて、明ッ放しは不用心な。買物にでも行つたか知らぬ。（ト云ひながら、觸書を見て、）何だ、大寺正兵衛人相書。アヽこりやァ極樂寺で三千兩祠堂金を盜んだ泥坊。何處に隱れてゐるか知らぬが、人相書で捜されては今に捉まるに違ひない。ヘヽ人の物をたゞ取つて長生きせうとは惡い了簡。天道樣がお許しなされぬ。

（ト勘藏節を附けて語る。下手より西心出て來り、）

西心　オヽ、勘藏どの。何ぞ用か。

勘藏　アイ、大寺正兵衛といふ泥坊の人相書、門へ出して置けとの言付。御苦勞ながら明日から出入れはこなたの役。

西心　それは用が殖えて迷惑なことぢや。見れば立派な肩衣かけ、又淨瑠璃かな。

勘藏　表の師匠にさらひがあつて、狐火を語る故、是非聞きに來て下され。師匠からも言傳ぢや。

西心　それは樂しみなことだ。後に行つて聞きませう。

勘藏　今夜中で聞事は戸和太夫市作で白木屋の引廻し。それに續いてはわしが狐火。一寸聞いて下され。へ回向せうとてお姿を、繪にはかゝせはせぬものを、田町で買つた反魂丹。

西心　ヤ、そりやちと文句が違つたやうだ。

勘藏　いや／＼決して違ひはせぬ。違はぬ證據は反魂丹が一包二十四孔だ。

西心　とんだ口上茶番だ。ハヽヽヽ。

勘藏　へそんなら今にござれやと、云ひ捨てゝこそ急ぎ行く。（淨瑠璃を語りながら、下手へはひる。）

西心　ハヽヽヽ。下手なくせに勘藏めが義太夫に凝り固り、傍目で見ると馬鹿げたものだ。（ト人相書を取上げ見て）ア、この人相書はおさよとおれがお世話になつた、白蓮樣。（ト邊りを見て）思ひがけないことぢやなア。

（ト合方になり、奥より淸吉とおさよ出で來る。西心見て）

オヽ無窮屈であつたらう。思ひがけない人が來て、碌々話もできぬわいの。

淸吉　どうで今夜は久しぶり、夜通し寢ながら話しませう。そりやアさうと今聞けば、八重垣紋三樣といふは、おさよのお袋が乳を上げた若旦那かえ。

西心　ヲヽ、此おさよの上に一人兒があつたが、水兒で死に、乳が澤山ある所から、乳母奉公に五年ほど行つてゐたが八重垣樣。その乳を上げた若旦那が、腹を切つて死なしやつたとは、アヽおいとしいことぢやわい。

淸吉　縁といふものは、どこにどう引張つてあるか知れねえ。まだ鎌倉にゐた時分、伯父の話で不斷聞いたが、淸次といつたおれが親父は、その八重垣樣にゐた若黨。酒の上で失敗つて漁夫になつたといふことだ。（ト思入れあつて）アヽ考へて見りやア見るほど、こいつア濟まねえことだらけだ。

おさよ　そんならお前の父さんも、八重垣樣にゐなさんしたのか。さうして見ると母さんと、いはゞ朋輩同然な。その子が二人夫婦になるとは、おつなものだね。

西心　かう入組んだ筋合ひを結び合はすとは、出雲の神樣も、芝居の作者と同じことだ。

清吉　違えねえ。芝居と云やァ狂言でも、人相書はよく出るものだ。(ト云ひながら人相書を取上げ見て、)おれが兄貴もこの様に、人相書で捜されちやァ、もう長いことはねえわえ。

おさよ　ほんに聞く事も見る事も、心に掛かる事ばかり。かうしてゐても、そは〳〵と、少しも氣が落付かない。

清吉　そりやァ此間から、逃けつ隱れつ、とつくりと夜の目も寢ねえ爲だ。

西心　今夜はゆつくりこの庵室で、枕を高く寢るがよい。おれは表の師匠どのに義太夫のさらひがある故、一寸顏を出して來る。酒もこゝに五合ばかり貰つたのがあれば、飲むがよい。どうで歸りは九つ時分。それまでしつぽり水入らず、寢るなら夜具はこゝにあるぞよ。(ト戸棚へ思入れ。)

おさよ　アイ〳〵、有難うござんす。

西心　そんなら、わしは行つて來ますぞ。

おさよ　ゆつくりと行つて來なさんせ。

西心　(門口へ出かけ思入れあつて、)然し用心。表はしつかり。

清吉　アイ、合點だ。

西心　ドリヤ、狐火でも聞いて來ませうか。

(ト唄になり、思入れあつて下手へはひる。時の鐘。清吉は竹簀戸へ掛金をかける。おさよ抱子を寢かし、有合ふ燗徳利へ酒をうつし、居爐裏の土瓶へ入れ、燗をする。)

清吉　又雲行が惡くなつて來たが、明日降らにやァいゝ。(ト云ひながら二重へ上り、机の上の位牌を見て、)草露月照童子。アヽこれが手前の弟か。知らねえこととて、南無阿彌陀佛〳〵。

(トこの中、おさよは有合ふ膳へ徳利、猪口、丼物などを載せ、)

おさよ　さア、お燗ができた。一つお飲みな。

(ト猪口を出す。清吉茶碗を取つて、)

清吉　面倒だ。大きいものがいゝ。

おさよ　まア、ゆつくりとお上りな。

(ト清吉ぐつと飲み、咽せる。)

アレサ、惜しみはしないよ。

清吉　もう一杯呉れ。(ト茶碗を出す。)

おさよ　いゝかえ。お前。そんなに飲んで。

清吉　何だかをかしな胸持だから、酒でも飲んだら開かうと思つて。(ト又ぐつと飲み、)さア、手前もこれでぐつとやれ。

おさよ　妾や弟のことを聞いたので、癪が起りさうだから、今夜は止さうよ。

清吉　それぢやア、これでお積にしよう。

（ト又一杯飲む。この時、抱子泣く。）

およ　オヽ泣くな〳〵。夢でも見たか。犬の子〳〵。

（ト清吉、抱子へ思入れあつて、）

清吉　ア、蟲が知らすか。

およ　エ。

清吉　イヤサ、蟲でもかぶりやァしねえか。

およ　又すや〳〵と寢てしまつた。此間に二人樂々と、ちつとの内でも寢ようぢやないか。

清吉　ムヽ、寢たけりやァ手前先へ寢ろ。おらァ寢られねえ。

およ　そりや又、何故でござんすえ。

清吉　（立つて、机の上の位牌を持つて來て、）その位牌へ對して。

およ　エ、そりや何故に。

清吉　手前の弟は、おれが殺した。

およ　エヽ。

（トどうとなり、この音に抱子泣出す。清吉は外を憚り窺ふ。およは抱子を叩きつける。）

清吉　去年手前と川へ飛込み、死なうとしたも、餓鬼の折覺えた泳ぎが邪魔になり、死ぬに死なれず上つた時、舟の騷ぎが耳に入り、同じ人に生れたら、榮耀榮華がその身の得。持つて生れた果報でも、盜みをすりやァ出來る樂しみ。ふつと浮んだ惡心に、現在おれが身を思ひ親父の所へ持つて行く金とも知らず殺した次第。おれが惡事のこれが初まり、知らねえ内は仕方もねえが、仇同志と知つた日にやァ、佛へ對して寢られねえ。

およ　そんなら弟を殺したは、つながる縁のお前であつたか。

（トびつくりする。又抱子泣く。）

オヽ、泣くな〳〵。（トいぶりつける。）

清吉　今父さんが悔しさは、一年經てども忘れぬと聞いた時のその苦しさ。濟まねえ事と思ふ矢先、おれが親父や手前のお袋、故主であつた八重垣の、その御子息の難儀となつた、綠丸の短刀を盜み取つたもおれが仕業。まだその上にこのやうに、人相書で兄貴が詮議、元はと云やァ強請に行つた、これもおれから露顯したのだ。

およ　それもこれも知らぬ先、今更いつても仕方がねえ。そんな弱い心ぢやァ、この兒の末が見られないよ。

清吉　どうで惡事に縮まる命。これまで非道の働きに、おれを恨んでゐる人は、今父さんのいふ通り、寢ても覺めても忘れやァしめえ。人の物を盜みながら長生きせうとは惡い了簡。天道樣が許さぬと穴掘めがぬかしたは、時に取つての辻占に、死なうと覺悟極めた

からにやア、おれを殺して敵を取り、紋三様や弟へ、首を手向けて父さんの、どうぞ恨みを晴らして呉りやれ。
（ト短刀を出し、おさよの前へ出す。）

おさよ　そりやアさうでもあらうけれど、今更お前が死んだとて褒める人は一人もねえ。あの心なら盗みをば止せばいゝにと笑はれ草。一旦鬼と云はれたからは、どこがどこまで鬼になつて、死なうなどといふやうな、未練なことをお云ひでないよ。（ト抱子をいぶりながら、）オヽたがよく〳〵。

清吉　手前が何と云はうとも、兇状持ちのおれが身體。生きてゐちやア父さんにまだこの上どのやうな難儀をかけめえものでもねえ。さうなる日にやア猶々濟まねえ。ちつとも早く死ぬのが言譯。おれより手前が鬼になり、弟の敵を殺してくれ。
（ト短刀を突附けるを振拂ひ、）

おさよ　エヽつまらねえことを云ひねえな。假令敵同志にしろ、夫婦となりやア二世三世、なんでお前が殺されよう。
（ト抱子泣く。）
オヽ泣くなく〳〵。手前の父は分からねえ。あんなことを云つて困らせる。さアたつて殺せと云ひなさりやア、妾が先へ行かにやアならねえ。知らねえ事とはいひながら、現在お前の兄さんと一つ枕に寢たからは、死なにやアならぬといふ事は、疾うから心は付いちやアゐれど、可愛さうにこの兒をば他人の手にかけにやアならねえ。そればつかりで死なずにゐるに、お前も不便と思ふなら、そんなことを云つておくれでないよ。
（ト抱子を清吉に突付け見せる。清吉も不便なといふ思入れ。）

清吉　そりやアおれだつて同じことだが、この小僧が不便につけ、嘸父さんが悔しからうと、子を持つて知る親心。どうも生きちやアゐられねえから、手前の手にかけ殺さにやア、一人で死ぬからその小僧を、おれと思つて育てゝくれ。

おさよ　お前が死んで何のつけ、後に殘つてゐられるものか。妾が先へ今死ぬから、お前この兒を育てゝおくれ。
（ト抱子を清吉の前へ突付け、短刀を取るを清吉留めて、）

清吉　エヽ、いゝ加減に馬鹿云へ。おれに餓鬼が育てられるものか。

おさよ　それだといつて男の子は、男に付くがあたりめえ。
（抱子頻りに泣く。）

清吉　エヽ可愛さうに。コレ、泣くな。
（ト抱上げる。この間におさよ短刀を拔き、）

おさよ　この間に早く。
（ト死なうとするを、淸吉片手で留めて、）
淸　吉　エヽこれ危ねえ。放さねえか。
おさよ　イエ〳〵、妾やァ死なにやならねえ。
（トおさよ死なうとする。淸吉抱子を下におき、泣くを兩人氣にしながら立廻り、機にておさよの肩先を切下げ、どうとなる。淸吉びつくりして、）
淸　吉　ヤヽ、こりや手が外れて肩先に。
おさよ　嬉しや。これで妾が先へ。
淸　吉　エヽ、短氣なことをしてくれたなァ。
（ト松蟲の入りし合方になる。）
おさよ　さァ、お前に先へ死なれたら、後に殘つてどのやうなみじめを見ようも知れぬ身の上。一度ならず二度までも親に苦勞をかけるのも、不幸と知れど存らへても、どうで始終は繩目に會ひ、歎きをかけねばならぬ故、いつそのことに親の家、こゝで死ぬのがまだしも孝行。お前はこれから逃げ延びて、その子をどうぞ育てゝおくれ。賴みといふはこればかり。
淸　吉　いくら手前の賴みでも、おれが先へ死なにやァならねえ。この身に罪を背負ひながら、何ぼ餓鬼が不便でも、まご〳〵してゐられるものか。おれも直に死なにやァならねえ。
おさよ　そんならお前も今こゝで、死ぬと覺悟を極めたら、その兒もどうぞ共共に。
淸　吉　そりやァ云はずと知れたこと、後へ殘して父さんに餘計な苦勞をかけるより、一緒に殺して連れて行くわ。
おさよ　思へばいつぞや稻瀨川へ、身を投げた時二人とも。
淸　吉　死んだらこんな憂き目も見めえ。なまじ命があつたばかり。
おさよ　横に車で世を渡り、この身に積みし惡の數々。
淸　吉　引くに引かれず今日明日と、廻る因果も丁度一年。
おさよ　非業に死んだ弟の。
淸　吉　然も逮夜に今こゝで。
おさよ　二人が死ぬも約束事。
淸　吉　思へば果敢ねえ。
兩　人　身の上ぢやなァ。
（トよろしく思入れ、抱子泣く。）
淸　吉　オヽ泣くな〳〵。（トたゝきつけながら、）コレ、とても死ぬならこの事を、書殘しておきてえから、苦しからうがちつとの內、辛抱して待つてくれ。（ト抱子の泣くをぢつと見て、）オヽ、澤山泣け。澤山泣け。手前も今殺してやるから、もうこの世の泣き終ひだ。
おさよ　アヽ苦しい〳〵。水を一つ飲ま

してくれ。
清吉　手負に水を飲ましちやァ、（ト思入れあつて、）然し、どうで死なにやァならねえ身體。この世の別れ水盃。（ト墓手桶の水を柄杓に汲みて、）心殘さず一ぱい飲みやれ。
おさよ　アヽ嬉しうござんす。
（ト柄杓に縋りぐつと飲み、うつとりとなる。清吉耳へ口を寄せて、）
清吉　これおさよ。今後から行くぞよ。
（トこれにておさよ心付き、）
おさよ　小僧は何處に。
清吉　コレ、こゝに。（ト見せる。）
おさよ　アヽもう、顔が見えねえよ。
（ト抱子の頭を探り、にったりと笑つてそのまゝ落入る。清吉どうとなり、子をたゝきつけながら泣く。この時隣家の二階にて、）
呼び　「東西々々。戀娘昔八丈鈴ヶ森引廻しの段。始り左樣。」
（ト呼ぶ。これにて床の淨瑠璃になる。）
〽人の身の捨所とや、名に古りし鈴ヶ森の仕置場所。青竹にて矢來を構へ、側にきらめく拔身の槍。この世からなる地獄の責め、忌はしくもまた恐しゝ。
（トこの中、清吉抱子を抱へ寢かし、おさよの死骸を二枚折の屏風で隱し、短刀をよき所へおき、思入れあつて、）
清吉　折も折、時も時。隣りで語る淨瑠璃は、白木屋お駒が引廻し、この身の果ては木の空と、思の外に今日こゝで、馬にも乘らず疊の上、身を捨札に罪科を、野末にさらさず死ぬのが仕合せ。たゞ不便なはこの小僧。いはば同類卷添に命を捨てるも同じこと。惡い親に抱込まれ、切られて死なにやならねえぞよ。（ト抱子へ思入れあつて、）人の來ぬ内惡事の次第を、せめて一筆西心どのへ。（ト人相書を取つて、）幸ひこゝに人相書、紙をへがしてこの板へ身の言譯を書殘さん。（ト抱子の泣くをたたきつけながら、）オヽちつとの間だ。泣いてくれるな〳〵。
〽子を思ふ闇より闇に日もわかず、たゞさへ暗き父親が。
（トこの内清吉抱子を寢付け、以前の硯箱を持つて來て筆を取り、抱子を見てこれを殺すのかといふ思入れ。ホロリとなし、紙をへがし書きかゝる。）
〽涙に見えぬ道筋を、現ともなく走るとも夢路を歩む心地して、やうやう彼處へたどりつき。
（ト書置を書きしまひ、思入れあつて卒塔婆を立てかけし上の鴨居の珠數を取つて首にかけ、その跡の釘へ札の紐をかけ、これにて捨札と見ゆる心。）

身の言譯のこの書置。後でとつくり讀んだ上、西心どのにも弟を殺した罪を水にして、紋三樣へこなたからお墓へ詫をして下せえ。(ト抱子の泣く故抱き上げ、)西も東も知らねえ小僧が、此頃にねえ泣聲は、產神樣が敎へるか。

〽今日が親子の一世の別れ。せめて最期の暇乞ひ。

(ト淸吉、抱子の顏へ頰をあて、頭を撫りなどして、)

生先長い手前をば、殺してえ氣は少しもねえが、兩親ともに死んだ後、祖父さんの手で育つとも、あれあの小僧は鬼薊淸吉といふ泥棒の子だと人に云はれたら、一生出世はできねえ身體。それ故殺してしまふのだ。當歲ながらおれが胤、未練に泣かずと往生しろ。

〽見れば嚴しき竹垣に、さも恐しき拔身の槍、これで我子を殺すかと、思へば胸も張裂く苦しみ。

(ト淸吉、抱子を片手に捉へ、短刀にて突かうとして突兼ねる思入れよろしくあつて、短刀を捨て、抱子をぢつと見て、)

今殺されるも知らずして、にこ〳〵笑ふ愛らしさ。

〽蝶よ花よと撫でし子を、科人にして殺すとは、よく〳〵深い前世の因果。

これにて思ひ當りしは、弟求女を初めとして、これまで多くの人を殺し、その親達の歎きをば今日といふ今日身に知つて、殺しともないこの小僧。手前勝手と笑はゞ笑へ、どうまァ刄があてられよう。

〽未來は奈落へ落つるとも、どうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げますと、愚に返りたる親心。

(トこの中淸吉抱子を遣ひ、よろしく思入れあつて、)

後に殘して死にますから、行末賴むは西心どの。

〽さァ〳〵こちらへと手を取つて、暫く傍へに介抱なす。

(ト淸吉抱子を下へ寢かし、ほつと歎息なせし思入れ。)

死ぬる覺悟も恩愛に、黃泉の障りはこの坊主。

〽思ふこと叶はねばこそ憂きことの戀と義理との後たづな、不便やお駒は夫のため斯かる憂き身の縛り繩。顏さし入るゝ懷を、もれて流るゝ淚橋。屠所の羊の步みより果敢なき身ぞと觀念し、力なく〳〵引かれ來る。

(トこの中、淸吉白木の机に香爐花立を載せ、側に置き、肌を脫ぎ、短刀を手拭にて卷き、腹を切らうといふ思入れ。)

いくら云つても返らぬ愚痴、どうで盜

みをしたからは。
〽果てはかうした浅ましい、この世からなる剣の山。
（ト清吉思入れあつて短刀を腹へ突立て、血紅になり、）
〽身を切裂かれ処き恥をさらすも定まる因縁づく。
（ト苦しきこなしにて、）
〽二世と契りしその人と、一世を限る親子の名残り。
（トおさよが死骸へ寄らうとする。拘子泣く故這ひ寄つて、苦しみながらたゝきつけ、延上りて屏風の中を見る。）
〽延上りても竹垣の隙間隠れの人群に、眼も泣き腫れて見え分かぬ。
（トこの中死骸と拘子へ思入れあつて、苦しきこなし。）
〽折もこそあれこなたなる群集押分け両親は、竹垣に縋り附き。
（トこの時、上手湯灌場の羽目を壊し、白蓮事大寺正兵衛、着流し一本差にて出る。下手より西心出て、両人清吉の傍へ寄りて、）
白蓮　ヤレ早まるな。弟清吉。
西心　こりや何故に、
両人　この生害。
清吉　仔細はそれなる書置に。
白蓮　ナニ、書置とは。
西心　確かに、それでござります。
（ト罪書の札へ思入れ、白蓮見て、）
白蓮　ムウ、下総の国行徳無宿鬼薊清吉書置の事。一、この清吉事いまだ清心といひし出家の折、遊里へ通ひ女犯の罪にて追放受けしその折柄、縁につながる弟と知らず、我身の為に才覚なしたる金子五十両盗み取り、過つて殺害に及び、その後大江の屋敷へ忍び、縁丸といふ短刀を奪ひ、故主八重垣紋三様へ盗賊の疑ひかけ、父兄正兵衛が旧悪露顕、女房おさよが敵同志故、わがなす業、その他悪事は数知れず、義理を立てゝの最期まで、元の起りは今といふ今先非を悔い、三方四方へ申訳に、たつた一つの命を捨て、町人ながら左より右の肋へ引廻し、千人塚に於て相果て候もの也。」（ト読み終りて、）
すりや清吉にはそれ故に、先非を悔いての生害なるか。
西心　死なすと仕様もあらうのに。
両人　早まつた事してくれたな。
〽縋り歎けば顔を上げ。
清吉　求女といひおさよといひ、非業な最期もみんなおれ故、腹も立たうが、これ父さん。（ト腹へ指さし、）これで堪忍して下せえ。
〽云ふに父親うろ〳〵と、娘が姿見るよりも前後不覚に取乱し。

(ト西心、二枚屏風の中を見て、はあと泣かうとし、よろしくあつて、)

西心　エヽ情ないこの姿。今更二人が死んだとて、求女が生きて返りはせぬ。何故それよりも包み隱し、心の内で不便と思ひ、後懇に菩提をば弔うてやつては下さらぬ。頼りに思ふ二人を先立て、よい年をして後に殘り、いかなる因果者のやうに後指をさゝるゝが、おりや口惜しい／＼。何故に死んでは下さつた。

清吉　アヽこれ／＼父さん。その歎きは尤もだが。

〽必ず／＼泣かずとも、娘でも何でもない。ありや前生の敵ぢやと歎きを止めて下さるが、少しは冥土の罪ほろぼし。

(ト清吉よろしく思入れあつて、)

たゞこの上のお頼みは、兩親のないこの坊主、どうぞお前の手しほにかけ、まことの人にして下せえ。(ト懐より金の入りし鬱金の守入れの胴卷を出し、)守に入れた百兩は、求女が金の五十兩、殘りは小僧が養育金。

(ト西心、抱子を抱き上げて、)

西心　オヽ孫がことは案じさつしやるな。わしが育てゝ行く／＼は、立派な人にしてやります。

白蓮　思ひがけなく我も亦、この湯灌場に隱れてゐて、端折りかゞみの弟が、末期の際に廻り逢ふその嬉しさも情なや。人相書にて行方をば津々浦々迄詮議さるれば、明日をも知れぬ身の上だが、一日なりとも娑婆にゐる中、云ひ置くことがあるならば、この正兵衛に云つて置きやれ。

清吉　云ひ置くことは何もねえが、この世の別れ兄の手で、介錯なしてこの首を、あの佛前へ供へて下せえ。

白蓮　いかにも、介錯なした上、望みに任せ佛前へ、そちが首を手向けてやらう。

清吉　又父さんは短刀を、陰山様へお渡し申し、紋三様の疑ひが、晴れるやうにして下せえ。

西心　オヽ、それはわしが呑込んだ。

清吉　これにて心殘りはねえが、たつた一目坊主めが、笑ひ顔を見て死にてえ。

〽今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを思ひやりつゝ兩親は、前後不覺に打倒れ、泣音濱參に打寄する波に波ます如くなり。

(トこの中、西心抱子を清吉に見せる。清吉、苦しさを怺へてあやす思入れ。これを見て白蓮西心愁ひのこなし。トヾわつと泣く。バタ／＼になり、下手より三次、繩

褌、尻端折り、非人と見える拵へ、手下の一、二、同じ拵へにて、竹槍を持ち出で來りて、）

三次　頭。こゝにゐなすつたか。

白蓮　ヤヽ、三次を始め、この態は。

三次　先刻頭を入れて來た早桶の內を、湯灌場買ひに見咎められて仕方なく、こゝを連出し、ばらしたが。

手下一　惡事千里と頭の噂。

手下二　はつとした故竹槍で。

三人　防ぐ積りでこの支度。

白蓮　それではうか／＼もうこゝに、足を留めてはゐられねえ。

清吉　少しも早く介錯なし、この鎌倉を落ちて下せえ。

白蓮　云ふにや及ぶ。

清吉　父さん。お前はこの短刀、陰山樣へ。

西心　オヽ合點だ。

（ト血を拭ひ鞘へをさめる。バタ／＼にて、下手より粂之丞出て來りて、）

粂之丞　持參に及ばぬその短刀。粂之丞が受取らん。

西心　いかにもお渡し申しませう。

（ト短刀を出す。粂之丞改め見て、）

粂之丞　ホヽオ。これぞまさしく綠丸。これにて紋三が汚名も晴れ、チエヽ忝い。

白蓮　いでこの上は弟が介錯。

（ト刀を持ち清吉の後へ廻る。清吉思入れ。）

三次　そんならこれが。

清吉　この世の別れ。

西心　せめては後世を安樂に。

（ト西心鉦を出し。片手に拍子を抱きいぶりつけながらたゝく。粂之丞は上手捨石へ腰をかけ、下手に手下の一、二、竹槍を持ち、三次は葛手桶を持ちて控へる。白蓮、刀を出すとこれへ水をかける、清吉苦痛を怺へ畏まる、これを皆々見て、）

白蓮　ア、惡に強きは善にもと。

粂之丞　武士も及ばぬ。

西心　この生害。

清吉　介錯したら、この首を。

白蓮　望みの通り佛前へ。

清吉　まッこのやうに。

白蓮　ムヽ。

（ト刀を振上げる。清吉は側にある白木の机を取つて、兩足を持ち机へ首を載せる。これを一時に木の頭。）

清吉　供へて下せえ。

（トよろしく思入れ。西心は鉦をたゝき念佛を唱へる。白蓮は名殘を惜しむ思入れ。本釣鐘にて、）

拍子幕

（ト幕引付けると、エイと太刀音し、後捕物の鳴物ドン／＼にてつなぎ、直に引返す。）

本舞臺、上の方冠木門。この下に潜り門。續いて門番所。左右は練塀、門番所の脇に小高き用水桶。總て無縁寺表門の體。上下に垂をおろせし四つ手駕籠二挺あり。駕籠舁二人〇△立つてゐる。禪の勤めにて幕明く。

〇　コウ相棒。八と權とはどうしやアがつたらう。

△　草鞋を買ひに行つたぎりだが、どこぞで片足上げちやアゐねえか。

〇　てつきりそれに違えねえ。(ト駕籠へ向ひ、)モシ旦那。相棒を呼んで來ますから、ちつとの中お待ち下さりませ。さア、お願ひ申したら捜して來よう。

△　いめえましい世話のやけた奴だ。

(ト兩人上手へはひる。ト潜り門より手下の一、二、早桶を擔ぎ出で來りて、)

手下一　なんでもこれから夜通しに、腰越から山手へ入らう。

手下二　それに今夜は宵闇だから、ふけるにや丁度いゝ。

手下一　ちつとも早く名越を越さう。

手下二　合點だ。

(トこの時上下より、黒四天の捕手四人出て、)

捕手一　捕つた。(ト十手にて打つてかゝる。)

手下一　こりや何となされまする。

捕手二　その早桶に隱れ忍ぶは、配符のまはつた大寺正兵衞。

手下二　それ知られたら。

(ト息杖にて打つてかゝる、禪の勤めになり、ちよつと立廻つて、手下の一、二花道へ逃げて入る。ト捕手は早桶を擔ぎ後を追つて入る。時の鐘、誂への合方になり、潜り門より白蓮鼠の着附墨の衣、網代笠、無縁寺といふ弓張提燈を持ち出で來り、捕手の後を見送り、思入れあつて、)

白蓮　寺といふ名に今日までは、死人と見せて早桶に隱れてゐたも底が拔け、四つにかゝつた繩よりも又菱結にからまれて、暗い所へ投込みに惡事は重いさし擔ひ、命を棒に振るところ、三次が施主の代りに立ち、首尾よく脫れた今夜の葬ひ。こいつアおれも浮まれるわい。

(ト時の鐘、左右の駕籠の垂を上げると、内に黒四天の捕手二人づつゐて白蓮を窺ふ。白蓮これを見てぎよつとなし、提燈の灯を吹き消す。捕手つか／＼と出て、捕つたと十手にて打つてかゝる。白蓮笠を投捨て、ちよつと立廻り、捕手組付き捕り押へる。白蓮はね返し、着附衣取れて以前の形になり、つか／＼と花道へ逃げて行く。ト花道の揚幕より、同じ捕手四人出て、そつと十手を振上げる。これにて是非なくぢり／＼と本舞臺へ來る。ト

以前の捕手と共に八人にて立廻り、門番所の屋根、四つ手駕籠を道ひ、捕物の立廻りあつて、トヾ捕手は花道へ逃げてはひる。白蓮思入れあつて、）

最早遁れぬ我命、この場に於て潔よく。

（ト腹を切らうとする。門の中より西心抱子を懐へ入れ、つか／＼と出てこれを留め。）

西心　ア、モシ、正兵衛様。待つて下さりませ。

白蓮　ヤ、そちは西心。何故我を。

西心　サ、お留め申すはこの坊主、私とても老の身に、明日をも知れず亡き後は、力と頼むはあなたばかり。

白蓮　ムヽ、我とても親もなく、兄弟もなく正兵衛が血筋は甥のこればかり。

西心　それ故死ぬる命を延はり、どうぞこの子の行末を。

白蓮　とは云へあたりを、捕手が圍めば。

西心　これから寺の裏手を越え。

白蓮　廓を横に火葬場へ。

西心　少しも早く。

白蓮　ムヽ、一先づ、この場を落ち延びん。

（トこの時、捕手四人出て取圍み、）

捕手　捕つた。

白蓮　何を。

（ト眞中に白蓮事大寺正兵衛。下手に西心。捕手棹に列び、よろしく。）

幕

役人替名

一吉良上野之介義央　關三十郎
一脇坂淡路守　同
一仕丁次郎又　同
一萱野三左衛門　同
一大高源吾忠雄　同
一大野郡右衛門　新十郎
一木下肥後守　同
一菱川良信實ハ間重次郎光興　同
一小林平八郎　同
一寺坂吉右衛門　登美三郎
一田村右京太夫　同
一齋藤源吾　同
一奥野將監　同
一貸座敷花岡屋長八　同
一利平一子力松　辨藏
一祇園町の鯉瀧辨次　同

一大野九郎兵衛　相藏
一下女おかめ　同
一田子久內　同
一左右田孫兵衛　紫尺
一おらち　同
一箱廻し小助　鶴治
一若い者喜助　同
一横川勘平　同
一中間有助　鯉宇藏
一大鼓持鯉八　同
一若い者島藏　秀造
一倉橋傳助　同
一ぐづ七　瀧三郎
一法印專學　同
一吉千代　杜紫松
一大三郎　市松
一岡部美濃守　片岡我童
一大石內藏之助良雄　同
一五郎兵衛實ハ神崎與五郎　同

一仕丁太郎又　片岡我童
一およし　門之助
一井筒屋おかぢ　同
一奥方おさだ　同
一女房おせん　同
一戸田局　同
一岡嶋八十右衛門　鶴助
一千壽院　同
一石塚傳五右衛門　同
一速見藤左衛門　同
一安井彦右衛門　同
一吉田の一子新次郎　猿次郎
一百姓田吾十　鷹八
一矢田五郎右衛門　同
一鳶の者半次　泉十郎
一奥田孫太夫　同
一鳶の者向ふ見す長藏　幡左右
一近松勘六　同
一山下甚吾　同

一百姓豐作　幡左右
一腰元あやめ　竹三郎
一仲居おまつ　同
一百姓久根作　現十郎
一庵主西念　同
一庄屋太郎兵衛　同
一杉野十平次　幡右衛門
一扇屋才助　同
一差配人吃右衛門　同
一鳥追お竹　竹之助
一唯七女房おその　同
一日比谷右近　鶴世
一藝子おつる　同
一腰元お梅　同
一奥田女房おさく　源之助
一藝子おけん　同
一仲居およし　同
一深川藝妓おかの　扇之
一遊女高篠　同

一三平許嫁お春　扇之
一お蘭實ハおせつ　同
一奥女中さつき　女寅
一内侍九重　同
一遊女高窓　同
一奥方夕浪　同
一與五郎妹お露　同
一淺野内匠頭長矩　權十郎
一萱野三平常興　同
一在五中將業平　同
一清水一角　同
一吉田忠左衛門　同
一天野屋利平　同
一大石主税　我當
一世話役秀吉　同
一船頭松藏　同
一伊吾助實ハ矢頭右衛門七　同
一其他大ぜい

忠臣藏年中行事

正月

富ヶ岡八幡の場

本舞臺、一面の平舞臺。正面、注連縄を張りし石の大鳥居。左右、石の玉垣。後、八幡宮社の遠見。處々に梅の立樹。日覆より同じく釣枝。下手に、葭簀張の出茶屋。床几二三脚並べ、上の方床几に左右田孫兵衛、粕谷平馬、山下甚吾、羽織着流し、大小雪踏にて腰を掛け、下手床几にお竹、お梅、編笠を被り、三味線を持ち、鳥追の形にて腰を掛け居る。この脇に新相中の小鰭の鮨屋、荷箱を下し、よき所に白酒の荷を下し、新相中の白酒賣控へ居る。茶店の娘、着流し前垂掛にて茶を運び居る。總て深川富岡八幡宮鳥居先の模樣。日覆より正月と記せし月附の板を下しあり。

通り神樂へ鳥追の合方を冠せ、幕あく。

茶屋女　モシ、鳥追さん。大きに御苦勞で御座んした。マアお茶をお上りなされませ。

お竹　これは憚りさま。お手で下さいましよ。(ト盆の上の茶碗を取り、茶を飲み居る。)

孫兵衛　イヤ兩人とも鳥追に致しては珍らしい別嬪ぢや。相成るべくは、これへ參つて、白酒の酌を致して貰ひたい。

平馬　左右田殿の仰せの如く、僕が目にも艶やかに見ゆれども、譬に申す夜目遠目笠の中と申しますれば。

甚吾　得て買被りのあるものゆゑ、間近く寄つて、御面相をとくと見屆け置きたいわい。

白酒屋　イエ、近寄つて御覽なさいませんでも、お竹とお梅といひましては、小屋仲間でも評判の別嬪で御座います。

鮨屋　それはさうと旦那、もう一段お語らせなされて、まア御寛りとなされませ。蘭蝶などは二人の御箱で御座ります。

孫兵衛　イヤ蘭蝶を聞いては、吾々の勘定つくに關はるから、もう寄らで、明けて遣はさう。

平馬　それとも、十二銅のお捻りで、今一段語るとあれば、何も商法。向うの隨意に致すがよい。

甚吾　また鮨屋も白酒屋も、新門を開いた禮だと思つて、會計の所を負けて與りやれ。

茶屋女　勘定高い事を仰しやらないで、初春の事で御座いますから、もう一つ

御散財なされませ。
孫兵衞　イヤ〳〵、散財筋は大嫌ひぢや。
お竹　サア〳〵、これから山を廻つて、自前でゆつくり遊ばうわいなア。
お梅　ホンニ、それがよいわいなア。
孫兵衞　ハテ、それではあんまり色氣がない。さういはずとも、もそつと此處に居つて呉りやれ。
お竹　イエ十二銅で、この樣に長く釣られて居りましては。
お梅　かき入れにする松の內が、一日無駄に。
兩人　なりますわいなア。
白酒屋 鮨屋　成程、それは尤もだ。
孫兵衞　然らば、僕が一口奮發致して、後を六文遣はす間、もう半段語つて呉りやれ。
お竹　イエ、切賣りは。
兩人　致しませぬわいな。

（ト兩人お竹にかゝる。袖を捕へて、）

孫兵衞　さうでもあらうが、賴む〳〵。
女兩人　エヽもうひつこい。知らぬわいなア。

（ト孫兵衞の手を拂ひ、通り神樂になり、鳥追兩人、上手鳥居の中へはひる。）

孫兵衞　エヽいましい。とう〳〵逃げて行きをつたわい。イヤ面は、大分小綺麗だが、さりとては因業な奴等だわい。
茶屋女　イエあの手合も、松の內は、忙がしう御座りますゆゑ、どうしても、氣が强う御座ります。
平馬　然しまだしも、白酒や鮨などを喰ひ倒されて行かれるよりは、ましであらうわい。
鮨屋　サテ〳〵、何れのお武家樣だか。
白酒屋　御勘定、高いお方だ。
孫兵衞　中々勘定高いといふ譯ではないが、一年の事は正月にあると、下世話に申せば、なるだけ此月は、無駄を致さず、大晦日の括日へ參つて、疲弊致さぬ心掛け。必ずともに笑うて呉りやるな。
平馬　ソリヤ、僕とてもその如く、喰ひ延ばしたる扶持米も、相場の上りし折を見て、出入りの者へ賣拂ひ、少々づつでも、費を省き、儉約を專ら致すも、治にゐて亂を忘れざる、武士たる者の心掛け。
甚吾　斯樣な麁服は纏へども、腰に帶せし兩刀の鍛へは、備前もの。もし又疑惑の者あらば、此處にて拔き放して見せ呉れうか。
鮨屋　イエ〳〵どう致しまして、決してそれには及びませぬ。成程、お武家樣と申すものは、お心掛けの又格別。
白酒屋　其日稼ぎの小商人、私共の鼻元思案に及ばぬ事。眞に感心致しました。
茶屋女　左樣なら、旦那方、御散財なし

でまア、ごゆつくりとなされませ。妾は、一寸、今のうちに八幡様へお参り申して來ますから、失禮ながら店をお賴み申します。

孫兵衛　然らば遠見を致しながら、店は見てゐて遣はすから、寛怒と、參つて來やれ。

茶屋女　それは有難う御座ります。（思入れ。）ドレ參つて來ませうわいなア。

（ト通り神樂になり、茶屋女、鳥居の中へ入る。）

孫兵衛　コリヤ／＼兩人。三名にて食したる會計は、何程に相成るぞ。

鮨屋　へイ。かうと。小鮨三つに玉子が二つ、海苔鮨が一つ御座りますから、丁度五十文になりまする。

孫兵衛　さすれば、鮨が一つ八文宛。白酒が一杯十六文宛ぢやな。

兩人　左樣でござります。

平馬　コリヤ。全體海苔は魚肉より廉價ゆゑ、六文宛でよい筈ぢやア。

甚香　魚肉の鮨と同値では、チト沸騰なる價であらうぞ。

鮨屋　イエ、魚は付けませぬ代りには、握りが大きう御座りますから、それゆゑ、同値で御座ります。

孫兵衛　然らば、それはそれにして、鮨と白酒の代を合して百五十銅ぢやナ。

兩人　へイ／＼、左樣に御座りまする。

平馬　さすれば一人前五十銅宛。

甚香　各々勘定支拂はう。

孫兵衛　イヤ／＼、今日は僕が散財致せば、御兩名、その御出錢には及ばぬこと。

平馬　それは近頃忝なけれど、それでは修理にうけ申す。平に會計は三つ割りに。

甚香　元より計算を立てる心底。それでは却つて、兩名とも恐縮の次第で御座る。（ト辭儀をする。）

孫兵衛　その斟酌には及ばぬ事。僕にお任せ下されい。（思入れ。懷中より錢を出し、）ソレ兩人とも、勘定を下けて遣はす。

兩人　へイ／＼、これは有難う存じます。

（ト兩人、錢を受取り、兩人共、茶碗と鮨の箱を片付け、荷を擔ぎ、捨白にて、禮をいひながら、花道へ行く。）

鮨屋　何の事だ。馬鹿らしい。大風な御託をついて、三人でたつた六つ。勘定を下けるもねえものだ。

白酒屋　こつちも白酒が六杯で、こんなに長く引張られ、擧句の果てが、筋つた捩つた。

鮨屋　ヤレ、儉約だなぞと道理をつけ、まご／＼すると鮪を讀まれる。しらば

つくれたいひ草は。
白酒屋　白酒では無うて、あれはしら化。
鮨屋　小旗本の家中の様子。小鰭の鮨では無うて、小旗の武士。
兩人　テモしみつたれな。
侍兩人　どう致して。
兩人　イエ、小旗の武士や〳〵。
白酒　しらばけや〳〵。
（ト通り神樂にて、兩人呼びながら、向うへ入る。）
孫兵衛　何と、御兩名。強ち、嚢中が乏しいと申して、左程苦勞には致さぬもの。二百に足らざる散財で、藝妓を上げて酒を呑み、五百で飯まで食しまするは、廉價の沙汰で御座らぬか。
平馬　左右田氏の仰せの如く、勅使御下向と相成る時は、御馳走役の大石より賄賂を取込みまして、愉快を盡すも度々なれど。
甚吾　役に當らぬその時は、高家の家來は位倒れ。餘計な金はさて置いて、鐚一文でも容易には。
孫兵衛　昨年の春、わが御主君日光御社參の御大禮に、指圖役を仰付けられ、岡部美濃守が賂を使はぬゆゑに、いぢめ散らし押へた罰で、餘程な金銀は取込んだに、根が惡錢ゆゑ身に付かず、娼妓はござれ藝妓はと、あまり愉快に身が入りて、どうやらかうやら費ひ無くし、まご〳〵致すと、所有物も抵當物に出さねばならぬ今の形勢。どうか勅使の御下向にて、主人に御用が當ればよいが。
平馬　その御下向も毎年三月、櫻の咲くのが樂みで御座る。
甚吾　何と御兩名。茶店の女の居らぬを幸ひ此儘に立歸り、茶代だけ掠うでは御座らぬか。
孫兵衛　いかさま、これはよい所へお心が付かれました。三人よれば文珠の智慧。
平馬　女の歸らぬそのうちに。
甚吾　片時も早く、出發致さう。
孫兵衛　然らば御兩所。
兩人　サヽ、參らう。
（ト孫兵衛先に、平馬、甚吾三人、花道へ掛り、通り神樂、端唄の合方になり、向うよりおかの、仲町の藝妓の拵へにて、小助、羽織着流し、箱廻しの拵へにて、供をして出て來り、花道にて行き逢ひ、孫兵衛、おかのを見て。）
孫兵衛　ヤアそれへ參つたのは、仲町のおかのではないか。
おかの　オヤ、何方かと思ひましたら、左右田さんで御座りましたか。ホンニお珍しう御座ります。
小助　これは左右田樣。先づ明けまし

てお目度う御座ります。相變りませず。

孫兵衛　オヽ、小助は何時もながら達者でいゝなア。

小助　有難う御座ります。

平馬　ハヽ、さてはこれなる別嬪は。

甚吾　左右田氏のお持ち者かな。

孫兵衛　イヤ馴染と申す譯でもないが、昨年の春、傳奏の折、かの割烹家の平清にて、その折出遇うたこれなる藝妓。其後、僕が兩三度、座敷へ呼んで內々に。

兩人　ヤア。

孫兵衛　イヤ、內々噂を承れは、淺野家の藩中とやらの持ち者と申すこと。

平馬　面會致すは始めてぢやが、左右田氏の同役たる粕谷平馬と申す者。

甚吾　身共事は、山下甚吉。爾今は見知つて。

兩人　貰ひたい。

おかの　これは〳〵、恐入りました其お詞。妾とても何れも樣へお目見えに失禮勝ちをお叱りなく、不束者とお見捨てなく、御餘光ゆゑに、末々は藝者の數にも入りませう。御贔負願ひたてまつる。（ト見物へ辭儀をする。）

侍三人　いよ、口上ウ。（トほめる。）

小助　モシおかのさん。お客樣が松本で、定めてお待兼ねて御座りませう。

おかの　ホンニお待ちどうであらうわいなア。（思入れ。）モシ、皆さん。眞に失禮では御座りますが、只今、お座敷へ出掛けゆゑ、これでお別れ申します。

孫兵衛　ハテ舊弊をいひ給ふな。今仲町で流行つ子のそちなれば、定めて座敷の出掛けであらうが、手間は取らさぬ、あれへ參つて一服しやれ。

おかの　イエ妾はさうしては。（ト逃げに掛かる。）

平馬　ハテ、マア。暮と事かはり、地內の梅も綻び掛る。

甚吾　春の事ゆゑ、取急がず。

孫兵衛　まア〳〵おれへ。

侍三人　行きやれ〳〵。

（ト三人して、おかのを無理に連れて舞臺へ歸り、おかのを床几へ掛けさせる。小助思入れあつて、）

小助　一寸、この間に、私は松本へ行つて、お客樣にお斷りを申して參りませう。

おかの　イエ〳〵それでは。

（ト行かうとするを、孫兵衛、おかのを引据ゑ、）

孫兵衛　ハテ、まア下に居やれ。（ト思入れ。懷中より二朱金出し、紙に包み、）コリヤ小助。其處をよいやうに、ナ、斷つて與りやれ。よいか。これは少しぢやが年玉ぢや。

（ト渡す。小助、押頂き、）

小　助　これは有難、山吹色、たんとお話しなされませ。（ト行きにかゝる。）

おかの　アヽ、モシ、小助どん。一寸お前にいふ事が。

小　助　イエ、直ぐにお迎ひに參ります。左樣なれば左右田樣。一寸行つて參ります。

（ト通り神樂になり、小助、鳥居の中へ入る。）

おかの　アレ、妾ばかり置きざりにして。モシ小助どん〳〵。

（ト跡を追ひかけ行かうとする、おかのをとらへ、）

孫兵衞　オットどつこい。逃がしてならうか。こゝへ掛けやれといふに。

（ト孫兵衞、おかのに見とれ、嫌らしき思入れあつて、可笑しみの合方になり、）

改めいふには及ばねど、忘れもやらぬ去年の三月、傳奏の見聞にて平清へ參つた折、ふつと出遇うたそもじの容貌。一目見るより、戀風が身にしみ〴〵と染み渡り、寢ても醒めてもそもじの顏、目先にちらつき、公用事も手につかず、思ひに堪へ兼ね、折々は非番の折を見合せて、度々僕も散財して、心の丈をいひ入れても、兎角心に隨はず。風の便りに承れば、淺野とやらの藩中に云交して居る男がある由。今にも御主人少將樣が傳奏の御指圖役を、公より仰せ付かれば分限と相成る此孫兵衞。未だ獨身の僕なれば、權妻等には決して致さぬ。本妻の御新造樣と致し置く。又お袋の一人位は、一緒に居たいと思ふなら、屋敷へ引

取り、樂隱居。惡い事は申さぬから、うんといやれ〳〵。(ト思はずいひながら、心付き、)これは御兩名の前を恥ぢず、面目も無き僕が至誠。大目に御覽下されい。

平馬　イヤ〳〵、武士は相身互ひ。その斟酌を致さずと、士籍を捨てゝ成功なし、藝妓おかのと協同致さば、隨從致す我々も鼻の高いと申すもの。

甚吾　人目を憚り、我儘を致すは、づんと昔の野暮な僻論。

平馬　何でも當今の形勢は、平ぶつつけが何より開化。

甚吾　惡い事はいはれまいから、左右田氏に隨從なし、藝妓をやめて半元服。

平馬　御新造樣に。

二人　なるがよいわサ。

おかの　不束な妾をば　その樣にあのゝものゝと仰しやつて、その親切は嬉しいけれど、その御挨拶を、今此處で致す譯には參りませぬわいなア。

孫兵衞　何さま、これはさうあらう。然らば我々三名にて二軒茶屋の松本樓へ立越えて、座敷の明くのを待つて居れば、そのうちとくと底意を定め、色よい報知を聞かして吳りやれ。

平馬　左右田氏には、松本で、アノ散財を。

兩人　なさるとか。

甚吾　小鰭の鮨に白酒で、百五十文とは打つて替り……。(トいひかけるを。)

孫兵衞　アヽコレ、(ト思入れ。)かく散財を致すのも。ナ、ソレ。(思入れ。)ハテ戀は思案の外で御座るテ。ハヽヽヽ。

(ト頭をかく。おかのこなしあつて、)

おかの　サア折角で御座りまするが、今日は晝夜のお客樣で、松本へ呼ばれますから、明日までは買はれた妾。お呼びなされて下さるなら、明日にして下さりませ。

孫兵衞　さういふ譯なら、明日まで待ちもしようが、シテ買切りの客といふは、士族か但しは商法人か。いづれ、何國の、何者だ。

おかの　サアそれは。

平馬　口ごもるのは、どうやら怪しい。

甚吾　さては、馴染の色客だナ。

おかの　イエ〳〵さうでは御座んせぬ。

孫兵衞　さうでなければ、曖昧なる事を申さず、何者か、これにて僕に聞かせて吳りやれ。

おかの　ハイそのお客は、淺野樣の御家中で、大野さんといふお方。

孫兵衞　さては噂に聞及ぶ、深い馴染の色客ぢやナ。

おかの　アイ、深い馴染でござんすわいなア。

孫兵衞　ヤア。

（ト恂り、思入れ。これより合方變つて、）

おかの　初春早々、お客樣にお日に掛つて、無躾なこんなお話致しますのは、失禮で御座りますゆゑ、今迄は申さずに居りましたが、それ程までに妾をお思ひなされて下さるゆゑ、餘計な御苦勞掛けましては、お氣の毒と存じまして、お話を致しますが、左右田さんのお察し通り、妾は淺野の御家中の、大野さんと云交し、二世まで掛けて變らぬ女夫。たとへどのやうに御裕福の左右田さんでも、さういふ譯ゆゑ、見返る譯にはなりませぬ。この廣い深川に藝者も澤山御座りますから、同じ御散財をなさるなら、どうか話になりさうな相手をお見立てなされませ。折角ながら妾は大野さんがあるゆゑに、お心には隨はれませぬわいなア。

（トずつけりいふ。侍三人、呆れし思入れにて、）

孫兵衞　スリヤ、それゆゑに不承知とか。手管で客を釣つて置き、隱し喰ひする藝妓もあらうに、商賣柄には似合はぬおかの、その斷りは承知致した。併し、身共も斯くまでに思込んだる戀の道。大野とやらが松本に參つて居るとあるならば、座敷へ參つて面謁なし、爾今面を覺ゆるため、どんな仁だか、見て置き申さう。

平　馬　なる程、それはよい御思慮。當今、巽で評判の、一といつて二と下らぬ、器量なら應接なら何一つ申分なき藝妓の隊長、一等官のこのおかのを、持ち者にするその侍。

甚　吾　あやかるために我々も酒を一獻酌交し、嫌味の一つも申してやらう。

おかの　それでは却つて、物いひの種になつては、妾の難儀、會ふのは止めて下さんせ。

孫兵衞　イヤ〳〵さうはぬけさせぬ。是非とも面會。

三　人　致しに參る。

（ト三人行きにかゝる。この時、鳥居の中にて、）

郡右衞門　イヤ、その御入來には及び申さぬ。それへ參つて御意得申さん。

（ト鳥居の中より、郡右衞門羽織着流し、大小雪踏にて出て來り、おかの、顏を見て、）

おかの　ヤ、お前は大野郡右衞門さん。

孫兵衞　さてはこの場の。

三　人　樣子をば。

郡右衞　承つて罷り出ました。

孫兵衞　聞いたとあれば丁度幸ひ、先づこれへお掛けなされ。

郡右衞　然らば、いづれも御免下され、

（ト眞中の床几へ掛ける。おかの氣の揉める思入れにて、）

おかの　モシ郡右衛門さん。たとへどの様な事があらうとも、必ず共に短氣を出して下さんすなえ。

郡右衛　ハテ、何事も胸にある。安心致して落着いて居るがよいわえ。

孫兵衛　シテ其許には、今日は御愉快で御座るかナ。

郡右衛　主用あつて、砂村邊りまで參りしところ、歸路に赴き、松本にて勤仕の欝を散ぜん爲に一獻催し、このおかのに口を掛けしが、來やうの遲さ、女子を相手に繋ぎしが、あまり退屈致すゆゑ、其處ら邊りを彷徨出して、山を廻つて鳥居先、見れば何れのお武家やら、おかのへ何やらお話し半ば、委細は後で承つたが、身共は淺野の藩中にて大野郡右衛門と申す者。お見知り置かれ下されい。

孫兵衛　これは〳〵御丁寧なる御挨拶。僕は吉良家の公用人、左右田孫兵衛と申す者。

平馬　左右田氏の同役にて、粕谷平馬と申す者。

甚吾　同朋輩の山本甚吾。

孫兵衛　以後はお見知り。

三人　下されい。

おかの　お武家同士といふものは、テモまァお堅い御挨拶。それはさうと、モシ大野さん。少しも早く松本の座敷へ行かうぢや御座んせぬか。

郡右衛　失敬ながら、各々方へお近付きのため、郡右衛門、どうか一獻差上げたし。何卒御同伴下されい。

孫兵衛　それは、千萬忝いが、その御酒よりもまだ外にお頼み申す儀が御座る。

郡右衛　シテ某へお頼みと仰せらるゝは如何なる譯。

孫兵衛　他でも御座らぬ、このおかの、承れば其許のお持ち者と申す事。恥かしながら、かくいふ孫兵衛、見かけは甚だでく〳〵致し、不體裁なる不男なれど、藝妓おかのにぞつこん執心。其許といふ好男子のあるを承知で、たつた一夜サ、枕の伽が致させたいが。ナニ物は相談なれば、某が償金を差出せば、何とお讓りは下されぬか。

郡右衛　ソリャ折角の頼みゆゑ、如何にも承引致したけれど、此儀ばかりは某の一存にも相成り兼ぬれば、とくとこれなる當人の心を聞いたる上にて。（トいふを、）

おかの　アヽモシ、大野さん。ソリヤあんまりで御座んすぞえ。藝者は賣物買物でも、三味線取つてお座敷のお取持ちなら知らぬもの。枕のお伽の抱寢の

と、傾城遊女ぢやあるまいし、濫りな事が出來ませうか。それとも廣い深川ゆゑ、枕の附いた藝者衆が多くの中には一人や二人あるまいともいはれねば、さういふ藝者を捜し當て、お買ひなさるが上分別。妾や當座のお慰みは、お斷り申しますぞえ。

孫兵衛　何さま、それはさうあらう。然らば當座の花でなく、僕の妻に申受けたい。武士の情ぢや、大野氏。何卒、君が說得なし、おかのの心に落ち入る樣、周旋の程お賴み申す。

郡右衛　イヤその一儀はお斷り申す。

孫兵衛　なんといはるゝ。

（ト合方、キツパリとなり。）

郡右衛　婦女子に心を奪はるゝは、武士たる身にとり赤面なれど、相手の女が得心なら、如何にも貴殿のお賴みに任せんものと致せしが、相手のおかのが不承知なれば、身不肖ながら身共も武士、一旦約定致せし女、まざ／＼余人に取られては、刀の手前が相立たぬ。とサア高が藝妓の買論から、鞘當めきし爭ひも、あまり野暮なる不開化の時代の臺詞を云ひ募り、初春早々角め立ち、左樣の事云ひたくなければ、野暮を云はれず、割烹家にて一獻廻らし、又他の藝妓を呼んでの御所望なら、躓く石も緣とやら、及ばずながら僕が周旋致すところ、先づ／＼此儀はおあきらめ下されい。

平馬　何さま、これは左右田氏。廣い世界におかの計りが女で御座るまいから、他へ宗旨を替へられて、大野氏も關係ゆゑ、只管君へ周旋をお賴みなさるがよく御座る。

茜吾　何はともあれ、我々は、犬も步けば棒とやら、甘い料理にありつくが

（ト思入れ。）イヤサ、甘い料理の口前に、お任せなさるがよく御座る。

孫兵衛　イヤ、おかのめが愛想盡かして解體致して心惡い。僕はこれより歸宅致す。

郡右衛　スリヤ其許にはお腹立ちにて。

孫兵衛　さうとは知らず、箱屋めに、むざ／＼祝儀を。

おかの　エヽ。

孫兵衛　主に仕へる身で無くば、白刃を飛ばしてなりと、貰ひ引きを致さんもの。返す／＼も殘念千萬。

おかの　藝者といへば、一樣に金に飽かして義理づくで、抱いて寢られるもののやうに、お顏に恥ぢぬ色好み。ちつと鏡を見やしやんせ。脊丈といつたらづんぐりむつくり、その上眼尻が下つてゐて、ホンニ好かない左右田さん。呆れて物がいはれぬわいなア。

孫兵衞　望みも叶へて呉れぬのみか、ようも〳〵僕の讒言。そのいけ口を。

（ト孫兵衞、おかのへむしやぶり付かうとするを、平馬、甚吾、隔てゝ）

平　馬　これさ〳〵、左右田氏。

甚　吾　ハテ、まア今日は。

兩　人　出直し召されい。

（ト下手へ行きにかゝる。こゝへ鳥居の中より茶屋女、出て來り、三人を見て）

茶屋女　モシお客樣。もうお歸りで御座りまするか。

孫兵衞　ヤア悪い所へ茶屋の女。エヽ茶代まで置かねばならぬか。馬鹿らしい。

（ト思入れ。懷より錢を出し、床几の上へ悔しさうに置き）この返報は重ねてきつと。

郡右衞　宿意が御座らば淺野の家來、大野郡右衞門が何時なりとも。

孫兵衞　ヲヽよくいつた。いつか意恨を。

（ト思入れ、キツトなるを、兩人孫兵衞の袖を引くゆゑ、氣をかへ、）

サア參らうか。

（ト通り神樂になり、振返り〳〵、平馬、甚吾に支へられ、向うへ入る。女、床几の上の茶代を取つて）

茶屋女　オヤ〳〵、お武家樣が三人で、何のかんのと威張り散らし、お茶代がたつた三十。テモ、まア吝嗇な山さんだねえ。（ト葭簀の蔭へ入る。）

郡右衞　コレおかの。おぬしのやうな流行つ子を持ち者だとか、色だとか、人に浮名を立てられて、思ひも寄らぬ敵を求め、こんな難儀な事はないわい。

おかの　ホンニお前も、大概な。妾が得心する時は、あの孫兵衞に讓るお心。ソリヤ水臭いぢや御座んせぬか。

郡右衞　さういふ心は無けれども、最前そなたに口をかけ、呼びに遣つたに來ぬゆゑに、退屈致して庭歩き。それから山を一廻り、廻り盡して思はずも、うか〳〵來かゝる鳥居先、面白さうなひそ〳〵話。出ては定めてお邪魔にならうと、遠くへ離れて聞いて居たゆゑ、もしや心が變りはせぬかと、內々樣子を探つて見たのサ。

おかの　アレまア、そんな疑り深い。それだから小助どんが一緒に居ればよい事を。お客を見ると世話をやき、直にお藏を建てる算段。

（トこの以前、鳥居の中より小助出掛りに居て、）

小　助　ハックション。

（ト嚔をする。おかの、小助を見て）

おかの　オ、小助どん、そこにお居でか。これは大きに失禮だつたね。

小　助　三人休んでこの茶店へ、茶代を

三十置く人から、南鐐一片せしめると は、これもおかのさんのみんな御利益。
成程、女は尊いものだ。
(トこの時、葭簀の蔭より茶屋女、出て來り。)
茶屋女　モシ小助さん。妾も女の端くれだが、妾はどうもなりませんが、どういふものだらうねえ。
小助　ソリヤアその筈、雁首が違ふからだ。お主の樣な雁首は、取替べいもお斷りだ。
茶屋女　オヤ、憚りで御座ります。
(ト腹の立つ思入れにて、つんとして居る。郡右衞門、紙入より二朱金を出し、紙に包み、)
郡右衞　その埋め草は身共がしてやる。
おかの、これを遣つて吳りやれ。
おかの　旦那から下さつたからお禮をいひなさんせい。(ト盆の上へ祝儀を置く。)
茶屋女　オヤマアお氣の毒樣。まア有難う御座ります。ドレお煮花でも入れませうか。
(ト盆を持ち、葭簀の蔭へ入る。通り神樂になり、鳥追の合方を交へ、鳥居の中より、暮明の鳥追兩人出て來る。)
お竹　先刻此處で白酒のお客に、たつた十二銅で、腹さんざ引張られ、それゆゑ歸りが遲くなつた。この入合せに明日は早く出かけよう。
お梅　平常ものやうに廻り場を廻る事も出來ぬゆゑ、今日は貰ひが少くないぞえ。
お竹　それも白酒のお客のお蔭。
お梅　ドレ〳〵早う、
兩人　歸らうわいなア。
(ト右の鳴物にて、兩人向うへ這入る。後、時の鐘鳴る。)
郡右衞　アリヤ、もう山の夕七つ。
おかの　御門切ゆゑ、暮六つまでにお歸りなさらにやならぬわいなア。
茶屋女　別れ忙しき後朝の、八幡鐘のそれならで。
郡右衞　春とはいへど短日に、暮れるに間なき黃昏時。
おかの　連立ち歸る鳥追の、三筋の霞遠山へ。
郡右衞　入る日に目立つ富士筑波。
おかの　その筑波根の追羽子も。
郡右衞　一イ二ウ御代も泰平に。
おかの　神の社も富ヶ岡。
郡右衞　飾る鳥居の注連繩も。
おかの　結ぶ誓ひの女夫松。
小助　變らぬ色のお二人さん。
郡右衞　こゝらが武士の。
(ト思入れ。おかのを引き寄せるを、道具變りの知らせ。)
正月ぢやなア。

（ト兩人思入れ、小助、二人を見ぬ顔をして居る模様。獅子舞の鳴物にて宜しく道具廻る。月附二月に替る。）

二月

岡部屋敷内の場
御城外堀端の場

本舞臺。眞中二間、常足の二重。正面、上の方、一間床の間。この下手、三尺の水屋。慳貪の袋戸棚。この下手、三尺太鼓張りの茶立口。上手の端、半窓。下手の端、突上戸の揚出した窓。双方共、障子を閉切り、平舞臺下手、遠州透しのある板塀。よき所に喜連格子の切戸口。梅の立樹、雪見形の石燈籠、蹲の手水鉢、飛石等宜しく。上手一面、奥庭の遠見、豐心に飾り、稲荷の社前の模様。石の鳥居、奉納の幟等宜しく。鳥居に太鼓を結び附け、總て、邸内稲荷祭りの體。眞中の二重の前面一面、障子閉切りある。こゝに子役大勢、家中の悴の拵へにて袴等をはいて居る。子役打寄り繪馬額を持ち摑合つて居る。岡部の臣田子久内、袴着流し、庭下駄を履き、用人にて、これを留めて居る。この見得、稲荷祭りの太鼓の音へ唄入りにて、道具留まる。

田子久内　コレ〳〵子供達。喧嘩を致しては相成らぬ。双方共に鎭まらぬか〳〵。

子役〇　それでも、稲荷講の集め錢で、彌太さんが團子を買うて食ひましたから、額をこつちへ取上げるのだ。

△　イヤ、この額はおいらの内からお稲荷様へ納めた額だ。その證據にはこゝに姓名が書いてあるぞ。

㊀　ナニ、名が書いてあつたつて、やつぱりお稲荷様の額だぜ。

久　内　これはしたり。どうしたものぢや。お屋敷内の稲荷祭りに前町へ出て、稲荷講などと、神を土臺に小錢を集め、買喰ひなどを致すとは、野鄙な了簡。その上、お上の外聞にも關はること。御家中内の子供達故、一度は許すが二度と再び左様な賤しい事を致すと、お上のお耳へ入れた上、銘々の親達へキツト嚴しい沙汰があるぞよ。

①　それ見た事か。それだから、前町へ出て貰つては惡いといふのに、彌太さんが出たから惡いのだ。

□　それだから、おいらは嫌だといふのに。

△　ナァニ、おいらは嫌だといつたけれど、金彌さんが先へ出たのだ。

久　内　ハテその爭ひをするには及ばぬ。日が暮れたれば、銘々に小屋へ引取り、明日が當日ゆゑ、又朝つから太鼓を叩いて遊ぶがよい。

□ あの伯父さんが明日來いといふから手習を休まして貰はうや。
○ サア〳〵、家へ歸らう〳〵。
△ んなら、みんなと一緒に行かう。
（ト子役皆々、花道へ行き、）
○ 稻荷萬年講。お稻荷さんのお初穗。
△ お十二銅お上げ。おおけに小おけ。
皆 小あけの上からおこつて、赤いちんほう擦りむいた。膏藥代をお呉れ〳〵お呉れ。
（トわや〳〵いひながら、子役、皆々向うへ入る。後、久内見送り、）
久内 ハテサテ、惡い弊ではある。どうか斯樣な弊をば止めさせて遣りたいものぢや。（思入れ。）それはさて置き、當お屋敷へ吉良公を御招待なし、書役より善美を盡して御饗應、我等もお相手に出ずばなるまい。
（ト此時、正面の障子を引拔く。眞中に吉良上野之介、袴着流し、褥の上にすまひ、前に美事なる酒肴の道具を取散らし、腰元兩人、酌をして居る。久内、この態を見て、平舞臺下手に居て、）
ハッ。吉良樣にはそれに渡らせられしか、宜しく召上り下さりませう。（ト辭儀をなす。）
上野介 先達て、當家へ參りし折柄、追々當家の繁榮に、よき御家臣も多く出來、當春などは取分けて御繁昌の御樣子を、蔭ながら承り悅び居りしに、慮らずも此度手前をお招きに預り、思ひ掛けなきお目見得は、枯木の花の咲いたる心地。この末共に御贔負を偏へに願ひ奉る。（ト一寸見物へ辭儀をなす。）
久内 手前なども、當家へはまだ始めての新參者。未熟ながらも、お待遇の蛸同樣に、御贔負を偏へに願ひ奉る。
上野介 存外なる待遇ゆゑ、上野之介、大慶に存ずると、御主人へ申し繼いで下されい。
久内 ハッ。恐入つたる其お詞、イヤもう御招待申上げれど、これぞと申す御風情もなく。
腰元○ お麁末には御座りますれど、例年のお稻荷祭りに、お屋敷内の無禮講。
△ 召上るものも御座りませねど、御寬りと御一獻お過ごし遊ばして。
兩人 下さりませ。
上野介 イヤ〳〵、腰元衆の愛想の善いのに、身も餘程熟醉致した。最早酒は澤山なれば、これにて納盃に致して呉りやれ。
久内 恐れながら、吉良樣には、御酒家と承り居りますれば、まだ〳〵御納盃にはお早う御座りませう。拙者お流れ頂戴せば、今一獻召上られ下さりませう。

○　妾共が。
兩人　お酌致しませう。
上野介　久内殿がすけるとあらば、今一獻進すで御座らう。
（ト思入れ。盃を取上げる。これにて、腰元酌をする。）
然らば、久内殿。さし申すぞ。
久内　お流れ、有難く頂戴致しまする。
（ト思入れ。盃を取り、腰元酌をする。久内呑み干し。）
恐れながら、御返盃致しまする。
上野介　イヤ／＼、手前はもういけぬ。勝手に重ねて呑んだがよい。
久内　然らば仰せに隨ひまして、重ね與右衛門と致しませう。
○　久内樣の何時もの駄洒落。
△　餘りお古う御座りますぞえ。
久内　ハテ、初午だけに、古い地口も新規張替へを致す積りぢや。
上野介　承れば久内殿には、蛸といはるる美名がある由。それは如何なる謂れで御座るナ。
久内　誰が申し初めましたか、斯樣な美男を捉まへて、顔が蛸に似て居るなどと、殿へ讒言を致せし故、それから手前を、蛸々と家中の者まで申すゆゑ、何時か渾名に呼ばれました。
○　御酒をお上りなされまして、段々赤くおなりなさると。
△　トント茹蛸のやうで御座りまする。
久内　エヽこなた衆まで左樣な惡口。今に吸付くからさう思はつしやい。
（ト宜しく酒盛ありて、）
上野介　最早、手前は十分なれば、膳部をお下げ下されい。
○　左樣なれば仰せに任せ。
△　御酒後のお茶を獻じませう。
（ト腰元兩人、酒肴の道具を持ち、茶立口へ入る。）
久内　イヤ腰元端女と申す者は、とかくに口の喧しく、失禮の段は御高免下さりませ。
上野介　最前、腰元衆に承れば、當家の御主人濃州殿には何か俄かの御腹痛とやら、御容態は如何ぢやな。
久内　さしたる儀にも御座りませねど、君にも御存ぜらるゝ通り、疳癖強き主人ゆゑ、先刻何か近習の者が不調法を致せしとて、疳を起して引籠り、それゆゑ尊き御客樣を御招待致しながら御挨拶にも罷り出ず、失敬の段は、幾重にも御宥免なし下されませう。
上野介　何の／＼、濃州殿には、日頃より聰明英智でおいであれど、未だお年が若いゆゑ、お疳癖も無くては叶はぬ。この上野なぞも、若年の頃は疳癖も起したなれど、追々老衰致すに隨ひ、勘

辨の付くと申すは、世俗に云へる短氣は損氣、腹を立てば必ず共に德は決して參らぬもの故、當今にては猶辯もさらりと廢して仕舞ひ申した。

久　內　その御勸辨強き其許樣ゆゑ、明ければ最早昨年なれど、日光御社參の御用に就き、手前主人美濃守、御供の御役を命ぜられ、かの地の首尾も如何やと、家中一統心配なせしが、其節萬事お指圖お引廻しが宜しきゆゑ、無念に堪へ兼ね、刄傷にも。

上野介　やア。

久　內　イエ、無念もなくして、大役を首尾よく勤めましたるは、吉良少將樣のお蔭ぞと、家中一統悅び居りまする。

上野介　何は然れ、美濃殿には御不快ゆゑ、お大事になされ、御藥用が何より肝腎。宜しく申し傳へられよ。最早手前は歸邸致す。

久　內　只今一服獻じますれば、暫時御猶豫下さりませ。

（ト思入れあつて、辭儀をなし、庭の切戶口へ久內入る。上野之介は邊りへ思入れあつて、）

上野介　勤役をせし折ですら、賄賂を使はぬ美濃守。昨年の春、日光にて種々難題を申し掛け、いぢめて遣りし事ありしが、仇を恩にて報ふ所存か。心得難き今日の待遇。合點行かざる事ぢやなア。

（ト思入れ。これを、下座の獨吟になり、）

〽春風の身にぞ覺ゆる仇緣、何の恨んで惡戲な、勿體なさの誓ひごと。

（トこの中、上野之介思入れあつて、）

上野介　さては、去年に手懲りをなし、又當春も勅使の御下向、御馳走役は美濃守が當る事もやあらんかと、この上野へそれとなしに、今日の待遇。左樣な趣意なら、馳走より目錄で遣はし呉れるが、此方にては勝手なるに、ハテ氣の利く家來はないと見える。

〽結び掛けたる戀草の、餘所に浮名の零梅。

（トこゝへ茶立口より、岡部右近、若衆鬘振袖形にて、紫の帛へ茶を載せ、持ち出て來り、上野之介の前へ茶碗を置き、下手へ下り、手をつかへ、）

右　近　不束な手前なれど、一服召上り下さりませ。

上野介　イヤ、御身は正しく淺野家の。

右　近　ハツ、久々お目見得致しませぬが、日比谷右近めに御座りまする。

上野介　ハテ思掛けなき面會ぢやなア。

（ト思入れ。）

〽結ぶ千歳の下上よ、まだ解けやらぬ春の雪。

（トこのうち、上野之介、茶を呑み、胸を

撫で下し、嬉しき思入れにて、）

上野介　扨は當家へ、御身には、今日主人淺野殿の使者にても參られしか。

右　近　イエ左様では御座りませぬ。

上野介　シテ〳〵、淺野の御家來が、如何致して當家へは。

右　近　其仔細と申しまするは、昨年の秋淺野家へ當家の主人が招待され、酒宴の席へ私めは御待遇を云ひ付かり、御手許廻りを勤めし所、當家の主人の目に留り、是非々々所望と望まれて、日頃水魚の交り爲す淺野岡部の兩家ゆゑ餘儀なき所望に、拙者めも當家へ貰はれ參りまして、小姓を勤め居りまする。

上野介　スリヤ、先年上野が淺野家へ參りし折、御身を懸想致せしゆゑ、內匠殿へ內々にて達して所望を致せし所、彼は兩親無き者ゆゑ、お手前方へ遣はす時は、日比谷の家が絶え果れば、此儀は承引成難しと斷りをいはれしが、それも祕藏のお小姓ゆゑ、手放し兼ぬるも無理ならずと、所望の沙汰はそれにて留まり、只殘念と思ひ居りしが、余人へ讓る御家來なら、この上野が先約ゆゑ、一應、答もあるべき筈。さりとては情無き仕方。高が高家の小身者と、內匠殿には侮つてか。

右　近　それも、當家へ再度まで斷りを立てしかど、客來あつて給仕役に借受けたいと、私を當家へ招き無理所望。わづか一人の家來ゆゑ、兩家の不和となりましてはと、內匠様も其儘に是非なく、承引致せし事。必ず貴方様を小身などとお見下げ申して侮る譯では御座りませぬ。

上野介　イヤ〳〵それは請取れぬ。引手數多の御身ゆゑ、定めて淺野內匠殿も、惜まれたるに相違は無い。併し、今日此處で面會せしも盡きせぬ緣、せめて情に右近殿、只一度の添伏を聞濟いて貰ひたい。

（ト上野之介、右近の袖を捕へるを、振拂ひ、）

右　近　これはしたり。惡い御戯談をなされまするナ。

上野介　イヤ〳〵戯談は致し申さぬ。吉良少將ともあらう者が、仁態捨てたるこの頼み。御身が美なる容貌にとくより憧れ慕ひ居つた。

右　近　スリヤ御酒機嫌と思ひの他、吉良様には眞實に、アノ御本性で仰しやりまするか。

上野介　いかにも、本性（思入れ。）面目無いが、大眞實。

右　近　コリヤこの席には。

（ト立たうとするを、上野介、袖を捕へ、）

上野介　コリヤ、否やの返事を聞かぬ中

は、逃げようとて逃がしはせぬぞ。
〽何時しか解けて、青柳の糸の亂れや寢亂れし、綠の髮の妻小櫛。
（トこの中、上野之介右近を追ひ廻し、トド右近を捕へ、無理に後より抱き付く。この時、後にて、）
美濃守　不義者見付けた。そこ動くな。
右近　ヤ、あの聲は御主人樣。
上野介　ナニ濃州殿に見咎められしか。
〽折に撞き出す鐘の聲〱。
（ト獨吟の掛け。茶立口より、美濃守袴の露をとり、下緒襷、短き手鎗を提げ、づかづかと出て來り、兩人を引分ける。これにて、右近は奧へ逃げて入る。美濃守、上野之介へ鎗をつき付け、）
美濃守　不義の成敗、覺悟致せ。
（トきつとなる。上野之介、悄りして、飛び退り、）
上野介　これは〱濃州殿。只今のは、上野之介酒興の上のほんの戯れ。何を申すも大酩酊。何事を致したやら、熟醉の仕れば、前後忘却の仕る。必ずともに、逸まり給ふな。
美濃守　默れ、上野。わが寵愛なる日比谷右近に不義をしかける不屆奴。かういふ事もあらんかと、とくより次の一間にて、先刻よりの此場の樣子、逐一に見屆けたり。たとへ、酒興の上たりとも、不義惡戯は武家一統、嚴しき掟はお手前もよも心得ざる事はあるまじ。
上野介　サ、それは。
美濃守　吉良少將、おのれよつく承れ。
（ト思入れ。合方になり、）
昨年、日光御社參の折、大役をも命ぜられしに、大禮の式心得ざる不案内者ゆゑ、某が只管汝に手を下げて問合せを致せしに、種々雜多なる虛言を構へ、若輩者と侮つて、よくも失策致せしよ

ナ。あまり無念と存ずるゆゑ、あの節、汝を一刀に討ち果さんとは存ぜしかど、私の宿意により神前を穢す大罪。其上ならず御下向ありし御勅使へ、不敬とならば京地への恐れ、將軍家へも憚りのありと無念を堪へ、ぢつと辛抱致せし[illegible]、如何なる趣意のこれあつて、無禮を働き申せしや。馳走にこと寄せ、今日、其方を屋敷へ招き、とくと底意を尋ねんものと存じ居りしに、かゝる仕儀の人非人への馳走の[illegible]、振舞ひくれん。但し、これにも言譯ありや。

上野介　サア、それは。

美濃守　何ゆゑ虚言を構へしぞ。

上野介　サア、それは。

美濃守　サア。

上野介　サア。

兩人　サア／＼／＼。

美濃守　覺悟極めて、それへ直れ。

（ト美濃守キツトなる。これにて付廻しになり、上野之介下手へ來り、刀を投げ出し、兩手をつき。）

上野介　サア、御腹立の段は御尤。失敬の儀は幾重にもお詫び申す。先づ／＼お待ち下されい。（思入れ。）イヤあの砌は上野も公用繁多に取紛れ、其許樣へも存外の失敬を致して御座るが、御若年とは申しながら、御勘辨強い其許樣ゆゑ、何事も無く大禮の式は相濟み、後にて段々心付き、役目とは申しながら、無禮過言を申したと、後悔致したこの上野。今日御意得た其上にて、お詫び申さんと存じ居り、腰元衆に承れば、御腹痛と申す事にて、お目に掛からぬ手前が殘念。そのお腹の立つは御尤。これを申すもこの上野が、皆越度。只今も申す如く、萬事の御用に心奪はれ、存外の無禮過言。全く遺恨のこれあつて、申せし覺えは嘗て御座らぬ。殊に手前は長袖の身分。犬猫同前の者て御座る。武を以て表とし給ふ尊公樣の、お相手に相成るべき者に非す。又御祕藏の右近殿に戯れを申せしも、酒興の上の、ホンノ戯談。先づ／＼お下においで下され。お腹も立たうが、この通り、犬の命を助けると思召されて、御勘辨。平に御用捨下されい。

美濃守　ムヽスリヤ、汝には犬同前、取るに足らざる者と云ひやる。犬同前の上野へ、馳走致すは餘計であつた。鮑の貝の器が相應。ハテ心づかぬ事を致した。

上野介　イヤもう人がましき者と思召しては、成程お腹も立つであらうが、犬を一匹助けたと思召されて、御用捨下され。命の親の岡部氏。御恩は忘却仕らぬ。

（トこれにて、美濃守思入れあつて、）

美濃守　犬同前の者とあれば、成敗致すも武門の穢れ。この美濃守は犬を切る刀は持たぬ。命計りは助けて呉れん。

上野介　スリヤお聞濟み下さるとか。（思入れ。）ヤレ、それにて安心致した。

（ト美濃守、下手へ向ひ、）

美濃守　ヤア〳〵者共。犬めを早く追ひ出せ。

（ト後にて、）

大　勢　ハヽヽ。（ト辟する。）

美濃守　コリヤ上野。當年も又御大禮ゆゑ、定めて當三月は、御勅使御下向もこれあらん。其節、台命承りし諸侯を惑はし、賄賂を貪ほる事は相成らぬぞ。左樣な沙汰を承はらば、其時こそは許さぬぞ。

上野介　中々以て、左樣な儀は、向後、決して仕らぬ。

美濃守　しかと左樣か。

上野介　ハッ。

美濃守　承知ぢやな。（思入れ。）忘るゝなよ。

（トキツト云つて、ついと立ち、早舞になり、上野之介を尻目に掛け、奥へ入る。後調べになり、上野之介、後を見送り、茫然と思入れ。下手の切戸口より、紺肩板の中間四人、竹箒を持ち出て來り、）

中間〇　イザ上野樣。

四　人　お歸りなされ。

（トこれにて上野之介刀を腰へ帶し乍ら、）

上野介　立歸るはよろしいが、併し迎ひの乘物は參らぬかナ。

〇　未だ迎ひの御家來が參らぬゆゑに、我々が。

□　竹箒にて警固なし、上野樣のお屋敷まで。

△　お送り申す積りで御座る。

四　人　お立ちなされい。

（トこれを聞きむつとなし二重より下り、恨めしさうに、奥を見込み、）

上野介　思へば〳〵。（ト思入れ、キツトなり、中間を見て、氣を替へ、）遲い迎ひぢや。

（ト時計の音になり、中間四人、ついて、下手の切戸口へ入る。奥より、以前の右近、刀を持ち出で來り、邊りへ思入れあつて、）

右　近　この身に覺えはなけれども、身に振掛かる濡衣も、無體の戀慕を云掛けられ、お咎め受ければもうこれ迄、不義の汚名を受けたる右近、この身の面晴、御主人への申譯、此場に於て。オヽ、さうぢや。

（ト刀の柄へ手を掛ける。こゝへ後より以前の美濃守羽織袴にて、久内袴を持ち、附添ひ、子役の小姓二人、刀を持ち出る。）

美濃守　ソレ久内、留めい。
久　内　ハッ。（ト右近の傍へ駈寄り、手を押へ、）君の御意ゆゑ、お待ちなされい。
（トこれにて、右近、美濃守を見て、）
右　近　ヤヽ、御前様。ハヽハッ。（ト平伏する。）
美濃守　コリヤ右近。自殺なすには及ばぬ事。そちが蔭にて、美濃守日頃の鬱憤晴らしたるぞ。
右　近　何と御意なされます。
（ト合方になり、）
美濃守　そも昨年の三月以來、折がなあらば、上野めを屋敷へ招き、馳走にこと寄せ、一刀に討つて捨てんと思ひしかど、彼も源家の流れ、假初ならぬ高家の出頭、名義も無くして討果たさば、當家の滅亡眼のあたり。深くも思慮を廻らす折柄、計らず昨年中の秋、淺野家へ招かれし月見の宴の其席へ、給仕に出でし日比谷右近、容よき美男と存ずるゆゑ、申受け度く、内匠殿にそちの身許を承れば、先つ頃、上野が淺野家へ入來の節、そちを懸望致せしと、戀慕の由を承り、これ幸ひのよき手段と、枉げて汝を内匠殿へ所望致して、當家へ貰ひ、今日稻荷の祭りにこと寄せ、吉良少將を招請なし、酒肴を勸め、酩酊させ、わざと余人の居らざる所へ、そちに運はせ薄茶の手前。策とも知らず、男色の餌に掛かりし彼めが不覺。その虚に付け入り成敗の鎗引提げて、美濃守積る鬱憤晴したり。これと申すもそちが蔭。適れ美男の徳なるぞ。この美濃守も過分に思ふぞ。
右　近　ハヽッ。こは有難き御懇ろの御意。かゝる御賢慮ありとも存ぜず、當家へ御所望下されしが、これぞと申す功もなく、二ケ年越しの御高恩、報ずる事も更になく、祿を穢せし其上にて、濡衣にては御座れ共、今日計らず上野殿が拙者を捕へ、無體の戯れ。御前の咎め蒙りしは、是非なき事ゆゑ生害を致さんものと存ぜしが、寛仁大度の御沙汰にて、身の面目を施しまして、有難う存じまする。
久　内　それのみならず、わが君より、御拜領の御贈物。有難く頂戴召され。
（ト久内、懷中より墨附を取出し、右近に渡す。右近開き見て、）
右　近　ヤヽコリヤ御加增の御墨附。
美濃守　オヽ、そち計りで無い。今日より、一統、加增を。
（ト思入れ、立つを、道具替りの知らせ。）
申付けるぞ。
（ト右近は御書をおし頂く。この模樣。時計の音にて、この道具廻る。）

本舞臺、一面の平舞臺。向ふ城外の堀端。稲荷祭りの心にて、處々へ地口行燈を立てあり。灯入りの遠見。上下所々へ灯入りの地口行燈、七八本立てゝあり。よき所に、松の立樹。日覆より、同じく釣枝。こゝに乘物を下ろし、幕明の孫兵衞、絹羽織、大小、袴股立にて控へ居る。上手に上野之介立掛かり、後に供廻りの中間、箱提灯を持ち、控へ居る。この見え。稲荷祭りの鳴物にて留る。

孫兵衞　ハツ、公用に付き、今日のお迎へ延引仕りし段、偏へにお許し下さりませう。

上野介　公用の儀にて延引せしとは、心得ず。如何なる譯ぢや、仔細を申せ。

孫兵衞　御前、お悦び遊ばせ。お目出たい儀に御座りまする。

上野介　ナニ、目出たい儀とは。

孫兵衞　先刻、御奉書出來なし、彌々來月、例年の通り、御勅使御下向にならせられ、即ち御馳走の御指圖役は、わが君樣へ命ぜられまして御座りまする。

上野介　ナニ、指圖役を命ぜられしとナ。

孫兵衞　それゆゑ、恐悦申上げまする。

（ト辭儀をする。上野、思入れあつて、）

上野介　ハテ惡い後はよいと申すが、下世話の譬へ爭はれぬ。

孫兵衞　何と御意なされまする。

上野介　イヤサ、身も昨年、傳奏この方、物入り多く續きしゆゑ、當今手許も疲弊なし、如何はせんと思ふ折、又役儀を命ぜらるれば、それにて息を吹返すと申すもの。

孫兵衞　御前につれて、我々も、ヤレ賂の進物のと、御馳走役の大名より、袖の下が澤山あれば、斯樣な悦ばしい儀は御座りませぬ。

上野介　シテ〳〵御馳走役は誰々なるぞ。

孫兵衞　即ち勅使御馳走役は播州の淺野殿。まつた御院使御馳走役は石州の龜井殿と仰せ渡しに御座りまする。

上野介　ナニ、播州の淺野とな。

孫兵衞　ハツ、御意に御座りまする。

上野介　ウヽ。（ト思入れあつて、）それにて思當りしは、よくも岡部と申合せ、この上野を懲せしよナ。つもる恨みの内匠の頭、おしつけ、意趣を晴らして呉れん。

孫兵衞　さては正月富ヶ岡にて、おかのに恥辱を受けたる一條、御前樣には御存じにて。

上野介　エヽ何を、たわけた事を申す。

孫兵衞　恐入りまして御座りまする。

上野介　何はともあれ、歸邸致し、御役を仰付けられたる目出たき酒宴を催さ

たも、いつぞやから話に聞いた開華亭。

○　コリヤア成程、さうだつけ。人の出るのを目的に開店したる寫眞師に、寫して貰ふ約束ゆゑ、丁度幸ひ、硝子へ一枚所望致さう。

□　成程これは思付き。さういふ事なら少しも早う。

△　併し、先刻の奮發ゆゑ、嚢中甚だ疲勞致した。

○　コレサ、野鄙なる事をのたまふな。會計の方は僕に任せて、サア〱早く來給へ〱。

（ト浪の音、騷ぎ唄になり、三人生醉のこなしにて、下手へ入る。後、流行唄になり、向うより、前幕の郡右衛門、羽織着流し、大小にて、おかの、藝妓着替の形にて、箱廻し小助、附添ひ出て來り、花道よき所へ立ちとまる。）

郡右衛　上野飛鳥とこそは變り、名に負ふ隅田の櫻の盛り、また一入の眺めであるわい。

おかの　白髭までは人混ゆゑ、船で廻つて、橋場から人目離れた木母寺は、ホンニ靜かで御座んすなア。

小助　それも明日は梅若で、人が群を致しませうが、今日は三月十四日、一日違ひで、植半も定めてすいて居りませう。

郡右衛　イヽヤ、すいて居ればとて、當時賣出しの植半ゆゑ、明いた座敷もあるまいが、そこが不斷の馴染がひ、大野が來たといひ入れて、いつもの座敷を借切るやう、世辭のよい御内儀に、掛合つて置いて呉りやれ。

おかの　柳畑へ植半の出張りが出來ては、魚十もさぞ閑で御座んせう。

小助　併し、魚十は又、格別魚の良いのを喰はせますから、これとても繁昌しませう。

郡右衛　いづれにしろ、小助は一足先へ往つて、觸れこんで置いてくれ。

小助　ドレお先へ參つて云ひ込みませう。

（トやはり右の鳴物にて、小助、駈拔け、上手門の中へ入る。）

おかの　モシ、大野さん。妾や、お前に内々でいはねばならぬ事が御座んす。

郡右衛　何の話か知らねども、植半へ行つて寛恕と呑みながら、聞かうではないか。

おかの　サア人に聞かれてならぬ事ゆゑ、かういふ時に、歩きながら、話さねばならぬわいなア。

郡右衛　ハテサテそれは變つた詞。一體そりやまアどういふ事ぢや。

おかの　幸ひ向うに、茶屋の床几の邊りに、丁度人もなし。あれへ行つて話さう

わいなア。
郡右衛・ドレいつて承はらうか。
（ト思入れ。矢張、右の唄にて、兩人舞臺へ來り、床几へ腰を掛け。）
さうして、そなたの話といふはどういふ譯ぢや。聞かして呉りやれ。
おかの　サア他の事でも御座んせぬが、はからずした事でいつぞやからお前とかうした譯になり、算へて見れば三年越し、今日は梅見の遊山船、明日は雪見の障子船と、その御散財も度重り、世の譬へにもいふ通り、遊里の金には詰るとやら。もし親御樣のお耳へ入り、どうの斯うのとむつかしく、遂には御身の詰りにも、なりはせぬかと案じられ、嬉しいにつけ考へれば、どうやら恐しく御座んすゆゑ、遣ふお金の出所も聞いて置かねばなりませぬ。どうぞ聞かせて下さんせ。
郡右衛　イヤ何事かと思つたら、改まつた物の言樣。取越し苦勞も事に寄る。そりやもう親のある身ゆゑ、その心配も無理ならねど、身不肖ながら、播州赤穗の城主と呼ばれし淺野の家臣五萬三千石の家に於て家老の上席、肩を並ぶるものも無き大野の子息、たとへ五百兩や千兩の遣ひ過しがあればとて、亡びる樣な己でもない。まア落着いてゐるがよいわサ。
おかの　それで少しは妾の心は落着いたが、只煩いのは、吉良家の用人孫兵衛面が、この程では金びら切つて、妾を呼び、あのゝものゝと嫌らしい、年にも恥ぢぬ色好み。氣障で氣障でならぬわいなア。
郡右衛　ハテあの手合は、傳奏で當今主人が金になり、それに連る家來ゆゑ、賂ひ賄賂で、懷中嘘々肥えて居るゆゑに譬へに云へる俄分限。條理に缺けたる金ゆゑに、長い正月もあるまいわい。
おかの　正月といへば、深川で此春會うた其時は、貧乏じみて居たれ共、此頃見れば大盡風の大きな事を云散し、聞けばお前の御主人樣、今度勅使の御下向に御大役を仰付けられ、その殿樣をしくじらさうと、首尾よく勤めさせようと、あの孫兵衛の主人とやらの心一つにある事と、憎てらしういひますが、そりや本當の事で御座んすかいなア。
郡右衛　何さま、彼が主人といふは、指圖役の筆頭ゆゑ、役目をかさに殿中では、上見ぬ鷲で力むであらうが、たとへ如何程、威を振ふとも、此方に越度があれば知らず、仕落もなきに、何で又しくじらせる事が出來るものか。
おかの　妾もさうとは思ひますが、お前のお主の御身分にも關はる事と聞いた

ゆゑ、心配をして居ましたわいなア。
（トこゝへ、上手より以前の小助、出て來り、）
小助　モシ〳〵、是非御同役の旦那樣が、あなたに何か御内談があるといつて、先刻から植半へお出でなされて、お待ち申して居るとの事、お約束でもなされましたか。
郡右衛　ナニ同役が待つて居るとナ。
小助　ヘイ、左樣に御座りまする。
郡右衛　合點のいかぬその待ちうけ。シテ姓名は何といふもの。仁態はどんな仁ぢや。
小助　その程は、私もお目に掛りは致しませぬゆゑ、どんな御仁か存じませぬが、お目に掛れば解る事だと、女中に云傳へなされたゆゑ、お顏さへも存じませぬ。
おかの　アレ氣の利かない。見ておいでならよい事に。
郡右衛　何に致せ、同役とあればお主と一緒ではバツが惡い。此處に暫らく、待つて居やれ。
小助　小助がしつかり守護致せば、御寛りとなされませ。
おかの　そんなら、お待ち申しますぞえ。
郡右衛　ドレ面談をして來ようか。
（ト流行唄になり、郡右衛門、合點のいかぬ思入れにて、門の中へ入る。おかの、心に掛かるこなし。）
おかの　傳奏の御馳走役にて、殿樣には此程より殿中へ日々の御登城。御用繁多のその中に、それに引替へ大野さん、いかにお樂な體ぢやとて、三日にあけぬ御愉快ゆゑ、もし重役の方々が、この植半へ來るのを悟り、先へ廻つて待合せ、大野さんの身の上を御意見でもする事か。テモ氣に掛かる事ぢやなア。
小助　モシおかのさん。下座敷こそ丁度幸ひ、そッとわたしが障子越しに、樣子を伺つて參りませう。
おかの　そんなら、人に知れぬやう、どうぞさうして下さんせ。
小助　ドレ鹽鯉をきめて來ようか。
（ト右の唄にて、小助、拔け足にて門の中へ入る。）
おかの　ホンニ、氣になる今の言傳。どんなお方か、差合ひのお人で無ければよいがなア。
（ト門の中より、前幕の孫兵衛、羽織着流しにて出て來り、）
孫兵衛　イヤその同役は僕ぢやわい。
（トこの聲を聞き、おかの、孫兵衛の顏を見て、）
おかの　ヤ、お前は左右田さん。
（ト逃げにかゝる帶を捕へ、）
孫兵衛　ハテ何にも怖い者ではない。逃

けるに及ばぬわい。先づ〳〵これへ掛け給へ。
（ト思入れ。可笑しみの合方になり、）
先刻、ちらりと深川で船に乗るのを見掛けたゆゑ、いづれ上手の木母寺と目的を付け、僕も亦猪牙で急がせ先廻り、先刻から待つて居たのだ。あの郷右衛も、この左右田も、互に主人は傳奏の御馳走役で、今日は殿中にての大事の勤。その又家來はかうやつて、櫻を愛し婦女子を愛し、愉快をするのも所謂ちよんの間、樂しみなくては叶はぬ事、こゝらが勤の憂さ晴し。いつぞやも申す通り、手前の主人の口先一つで、内匠頭が今度の役目を首尾よく勤めるも、しくじらせるも、好き自由。その淺野家の留守居役、郷右衛門と云交し、その色男の御主人の爲を思はゞ、コレおかの。身共に色よい返事をしやれ。さすれば、双方睦合ひ、僕が主人へ取りなして、惡いやうには致さぬが。おかの、返事はどうぢや〳〵。
（ト思入れ。孫兵衛夢中になり、口説いて居る。この前方門の中より、小助、傾城の目鬘を持ち出て來り、孫兵衛に知れぬやう、おかのへ囁く。それにておかのはそつと逃げて、門の中へ入る。小助、件の目鬘を冠り、床几へ腰を掛けて居る。孫兵衛これに心づかず、夢中になり、）
何ともいはぬは、さてはどうやら、得心ぢやナ。さういふ事なら、ツイ此處で。（ト思入れ。抱付かうとして、小助を見て、）エヽ、何をたはけめが。（思入れ。）おのれに用があるものか。
（ト小助を突倒し、孫兵衛、慌てゝ門の中へ入る。小助起き上り、そこらを探りながら、）
小助　あいたゝゝゝゝ。（ト腰の痛む思入れにて、邊りを見廻し、）エヽ、何處かへ行つて仕舞やがつた。（ト思入れ。）斯うして見りやァ、惡い事は出來ねえものだ。直に罰が報つて來るわい。ツイ供待へ引込んで、女中を頼んで、熱燗で一寸一杯、內風呂から暖らうと思ふところ、大野さんが私を呼び、小桶の家來の孫兵衛を喰留桶にして呉れと、一歩の仕切りで頼まれて、色瓜の殼と請合うて、おかのさんと入替り、鷺の代りの烏瓜、それで双方の木炭はしようが、輕石野郎に突倒され、シヤボンと川へ落ち損ひ、腰を痛めて釜が損じた。コリヤ早仕舞ひに。
（ト腰の痛む思入れ、尻を押へること、
道具替りの知らせ。）
せずばなるまい。
（ト可笑しみの模様。騒ぎ唄、浪の音にて、この道具廻る。）

本舞臺、一面の平舞臺。正面銀張りの松の繪の襖。日覆より、同じく銀張りの大欄間を下し、舞臺、雨落より黒塗り金物附きの高欄を出し、向う揚幕の所、杉戸の出入り、此處に新相中の茶坊主四人居並び、管絃にて道具留る。

坊主○ 今日は大切なる御大禮の式、どうか滯りなく濟ませたいもので御座る。

△ 左樣〳〵。御指圖役の吉良樣が、取込む家ゆゑ、御馳走役の淺野家から賂ひが少ないかして。

□ 此程よりの指圖の相違。手違ひ計り多くあるゆゑ。

◇ 淺野樣には御樣子だが、何しろ困つた事が出來ました。

○ 最早勅使お入りの刻限、ドレ〳〵詰所へ參りませうか。

（ト四人下手に入る。後、管絃打上げ、床の淨瑠璃になる。）

〽かけまくも何れ畏き、君が代や、今日元三の大禮に、習うて勅使饗應も、お入りを松の長廊下。しづ〳〵入り來る淺野長矩。

（トこれへ中の舞を冠せ、向うより淺野長矩、長袴小サ刀にて出て來り。）

〽折に出會ふ指圖役吉良少將も、暇なき役目を權に横柄面、長矩、ハッと頭を下げ。

（トこの中、上手より吉良少將、烏帽子大紋小サ刀、中啓を持つて出て來り、長矩を尻目に掛け、花道の方へ行かうとするを、内匠頭下に居て。）

内匠頭 ハッ少將殿には、よき折柄、御面會致して御座る。ちと伺ひ度き儀の候間、御用繁多も顧みず、お留め申すは失敬ながら、暫くお留まり下さりませう。

〽と平伏なせば、ぢろりと見遣り。

上野介 オヽ誰かと思へば内匠殿。公用繁多も知りながら。この上野に伺ひたいとは、何事で御座るな。

内匠頭 ハッ餘の儀にては候はず、最早程なく御三卿お入りの時刻に候はんが、其時に我等御石段まで御出迎へに下りませうや、但し御玄關の御箱段にて苦しからず候や、此儀御差圖に預りたし。

〽いと叮嚀に伺へば、上野之助は眼に角立て。

上野介 そりや、其儀をば御手前には、アノ只今御問合せなさるのか。

内匠頭 ハッ昨夜の中にも其許樣へ御問合せ致すべきが、御用繁多に取紛れ、失念の段は幾重にも御用捨願ひ奉る。

上野介 控へさつせえ。長矩殿。御用繁

多は御手前もこの上野も同じ事だ。出迎ひの儀は今日の大切なる式作法。それに何ぞや、失念召されて其大役が勤まらうか。只今これにて上野に出會ふたればこそ、よけれ。聞きもならうが、もし此席にて出會はずば貴殿には何と召さる。ハテサテ斯樣な麁忽者に公の大役を勤めさせるも、治國の御政事。實に太平は忝いわい。ムヽハヽヽ。

〽あざ笑うてぞ行過る。短慮の長矩、せき立てしが、こゝぞ大事と、胸撫で下し。

内匠頭　サヽ御教訓に預つて、面目も無き手前が麁忽。無念の段は幾重にも御用捨下され。少將殿。何卒、御差圖下さん樣、偏へに願ひ奉る。

上野介　それ程までにへり下り、越度の段を詫びるなら、御差圖せまいものでもないが、斯樣な事は聞かつしやらないでも、發明なお手前ゆゑ、差圖を受けるまでもなく、御存じで居られる筈だ。

内匠頭　中々以て短才なる、不調法な手前ゆゑ、何を存じて居りませう。

上野介　イヤ〳〵、左樣に仰しやるな。先立つて其許より勅使に馳走に出されたる、銀地の屛風に枯野の墨畫。あまり麁末と存ずるゆゑ、略儀ならんと咎めしに、小笠原佐渡殿より華美を盡すは宜しからずと内意があつて、金屛風は所持なし居れど、差控へしと物知り顏にいはれしが、左樣お心得のある其許なれば、出迎ひの儀も、佐渡殿に問ひ合されたがよく御座らう。

内匠頭　サヽ先達つての屛風の儀は、華美でこれ無きやうにと、小笠原佐渡殿よりの御内意が御座つたゆゑ。墨畫の屛風は飾りしかど、其餘の儀をば何故に、この長矩が心得ませうや。

上野介　イヤ〳〵さうは拔けさせぬ。何も心得ぬと御座るなら、然らば云つて聞かせ申さう。(ト上手へすまひ、)

〽しづ〳〵上座へ押直り。

長矩殿。これへ御座らつしやい。いやさ、ヅッとこれへ御座らしやい。

(ト思入れ。中の舞キッパリとなる。)

何も心得ぬといはつしやるが、先達つて獻上召された照月の御軸の講釋、上野之介感服致した。とかく目利きを鼻に掛け、小身者ゆゑ手前なぞは、手の下の罪人同樣に心得て御座るゆゑ、自然と役目が麁略に相成る。アノこゝな物知り樣め。

(ト思入れ。中啓にて内匠頭の胸を打つ。内匠頭キットなるゆゑ、)

それ〳〵、直ぐに鼻の先へ高慢顏がふらつき申す。これが所謂井の中の蛙、大海を知らぬ大だはけ。ハテサテ、小

癪な面だわい。ムヽヽ、ハヽヽヽヽ。

〽ト出放題。長矩胸に据ゑかねて。

内匠頭　スリヤ先日の議論をば、少將殿には根にもつて。

上野介　だまれ長矩。かばかりの事根にもつて依怙贔負をなす上野ならず。たゞ奇怪と存ずるは、高の知れたる外様大名、淺野彈兵衞末孫たる匹夫上りの身を以て、淸和源氏の正統たる吉良少將を侮りて、よくも岡部と、〽ト思入れ。〕イヤサ、外で指南を受けさつせえ。この上野には指圖はならぬ。たはけた事を。

〽無禮を後に、立らかゝれば。

内匠頭　サヽ尊き系圖の御身へ對し、無禮致せし覺えはなけれど、御意にもどらば幾重にも、お詫び仕れば、何卒お心和らげられ、役目首尾よく勤まるやう、お指圖願ひ奉る。

〽無念をこらへ、長矩は疊に頭を摺付けて詫びる心ぞいぢらしき。上野之介はせゝら笑ひ。

上野介　ムヽハヽヽヽ。さて〳〵笑止千萬な。十五萬五千石の主ともいはるものが、兩手を下げ淚をこぼし、詫びさつしやるからは、これで少しは先日の。

内匠頭　ヤ。

上野介　イヤサ煎じ延べたる藥より、また利のよい黃金湯。それさへ知らぬ大だはけ。石の上でも箱段でも、勝手な所で出迎へさつせえ。この上野も公用にて、寸暇の隙さへあらざるゆゑ、それ等の世話まで指圖は出來ぬ。馬鹿な事を。

〽傍若無人をいひ捨てゝ、行くを長矩こらへ兼ね。

内匠頭　もう此上は。

(ト刀の柄へ手を掛ける。上野之介見て、悔りなし。)

上野介　エヽ殿中だ。

(ト中啓にて、内匠頭を打つ。心付き、)

内匠頭　ハヽハッ。

(トぢつと思入れ。上野之介此態を見て、にったり思入れあつて、)

上野介　コリャ播州。鯉口三寸寛げたら忽ち家は斷絶なるぞよ。それ等の事さへ心得ぬ。アノこゝな大たはけめが。

(ト悠々に行きかゝる。内匠頭もうこれ迄といふ思入れあつて、)

内匠頭　上野、待て。

上野介　ヤア、いはゞ高家の出頭たる上野之介へ無禮な一言。

内匠頭　不禮は合點、承知の長矩。

上野介　不禮は承知といはるゝには、(思入れ。)扨は御身は。(ト悔りしてふり返る。)どうするのぢや。

内匠頭　どうも致さぬ。かうするわえ。

(ト抜討に、上野之介の眉間へ切付ける。これにて烏帽子落ちて、額へ疵付く。兩人一寸立廻つて、上野之介内匠頭の手を捕へ、)

上野介　狼藉者〳〵。

(ト大きく云ふ。これにて、上下より茶道大勢出て、)

皆々　喧嘩〳〵。

(ト呼びながら内匠頭を抱き留める。上野之介、下手にいつもの三段目の見え。早舞にて、この道具ぶんまはす。)

本舞臺、四間通し中足の二重。本緣附、大和葺の庇。正面上手、一間の床の間。この下手地袋戸棚。下の方一面、柳川唐紙の襖。出入りあり。上下、四ッ目垣、よき所に、櫻の立樹、同じく釣枝。總て植半下座敷の模様。酒肴の道具を取散らし、以前の郡右衛門、座蒲團の上に寝て居る。傍に、小助の箱廻し、中二階の茶屋女二人すまひ、狐拳を打つて居る見え。流行唄にて、道具留る。)

小助　サア〳〵二人とも。今度は是非とも、一杯宛呑まねばならぬぞ。

茶屋女　それでも、小助さんはずる拳ばつかり。本當の負では御座んせぬぞえ。

△　ずる拳なしに、もう一拳。今度、負けたら。

兩人　呑みませう。

小助　イヤ負けるといへば、左右田さんも、到頭〳〵色事の議論に負けて、先刻すご〳〵歸つた樣子。

○　又、あのお顔で、おかのさんをどうしようとは押が強い。

△　それはさうと、おかのさんも、お湯へ入つておいでゆゑ、膝でもお上げ申しませう。

○　旦那も、すや〳〵おしなる御様子。

播卷でもお上げ申しませう。
小助　それぢやア二人は、それをしほに負けたまんまに逃げるのか。
兩人　イエ勝負なしで御座んすわいなア。（ト兩人、奥へ入る。）
小助　これから手酌で吞まうと思ふと燗が微溫くてむまくねえ。ドレ一寸行つて、直して來ようか。
（ト德利を持つて、奥へ入る。後、バタ〳〵になり、向うより有助、紺看板の中間にて、走り出て來り、）
有助　オヽ旦那には此處に御座りましたか。モシ〳〵。旦那樣。大變で御座ります〳〵。
（ト二重の郡右衞門をゆすり起こす。郡右衞門、目を醒し、）
郡右衞　誰かと思へば、そちや有助。一醉なして思はずも、汐干に參りて蛤を捕らんと致して見た計り。（ト思入れ。）あわたゞしくも、夢を覺まして、その用事は何事なるぞ。
有助　何事どころでは御座りませぬ。先刻、殿中に於て、殿樣には吉良を刄傷に致し、網乘物にて田村樣へお預けにおなり遊ばし、直に御切腹と申すこと。
郡右衞　スリヤ先頃より御主君には指圖の手違ひにて、御立腹遊ばし、吉良少將を深く恨み、御無念の御樣子なりしが、はや刄傷に及ばれしか。ヤヽヽヤ。
有助　それゆゑお知らせ申さんと、深川へ參りし所、木母寺へと承り、宙を飛んで參りました。
郡右衞　シテ〳〵、屋敷の樣子は如何に。其方は存ぜぬか。
有助　片岡樣と磯貝樣が、早馬にての火急の注進。お國表の早打は、茅野樣と評定極まり、無論お屋敷は御閉門で

御座りまする。
郡右衞　スリヤ閉門と極まりしとナ。
有助　どうで、下郎もお屋敷へは歸る譯にもなりませぬ。いづれへなりと御一緒にお連れなされて下さりませ。
郡右衞　閉門とあらば、困るであらう。下郎なれども汝が赤心、如何にも不愍に存ずるゆゑ、一緒に連れていづれへなりと立退きたく存ずれど、主家の安危も覺束なければ、同伴の儀は其意に任せず。（ト思入れ。紙入より金子を出し、）この金子を遣はす間、いづれへなりとその身を賴めよ。
有助　そんなら、これを下郎めに。
郡右衞　只今迄は、大儀であつた。早く此場を退散致せ。
有助　それぢやと申して私一人。
郡右衞　エヽ、行けと申さば。
有助　ヘエヽヽヽ。
（ト有助、しを〳〵として揚幕へ入る。郡右衞門腕を組み、困つたといふ思入れ。この時奥より、おかの出て來り、）
おかの　モシ大野さん、ひよんな事になりましたなア。
（トこれより、しつとりとした合方になり、）
郡右衞　主家の大事を餘所になし、評議の席にも在合はさず、閉門となる上からは、最早屋敷へは歸られず。今からしては俄浪人。こりや如何致した、
（ト思入れ。寺の鐘。）
ものであらうわえ。
（トこの模樣。合方。時の鐘。）
おかの　それも誰ゆゑ、妾ゆゑ。御浪人となるからは、妾の家へ引取つて、何處が何處まで、お世話をすれば、必ず御案じなされまするな。
郡右衞　サアその親切は嬉しいが、町人となり藝妓の家へ圍はれるは、粹事なれど、まだ大小は捨てられぬ。
おかの　さうして、おまへの御思案はえ。
郡右衞　サア、一先づ赤穗へ立越えて、親九郎兵衞に會うた上、浪人するなら、商法の元手金でも貰つた上、奮發致すわしが心底。
おかの　何につけても、片時も別れて居られぬ妾の因果。どうぞ一緒に赤穗とやらへ、連れて退いて下さんせ。
郡右衞　それはもとより易けれど、一人の親を後へ置き、旅へ行くのも不孝の譯。
おかの　その母さんをば振捨てゝも、男につくが世間の習ひ。
郡右衞　それは義理に缺けては居れど、濡れぬ先こそ厭ふ身の。
おかの　露の命も男ゆゑ、無分別ともいへばいへ、捨てるも豫て覺悟の前。

郡右衛　さう又度胸がすわつて居れば、一緒に連れて退かうわえ。

おかの　それで、妾は落着いたわいなア。

(ト時の鐘、風の音になる。日覆より櫻の散り花。郡右衛門、目をつけ、)

郡右衛　思へば、花と眺めたる庭の櫻も何時しかに、風が邪魔して落花微塵。

おかの　散り行くものと夕暮の、あの鐘の音も身に泌みて。

郡右衛　今は無常の入相に。

おかの　塒に彷徨ふ旅烏。

郡右衛　ア、戀には身をも。

(ト兩人、憂ひの思入れにて、)

捨鐘ぢやなア。

(トこの摸様。合方、時の鐘、風の音にてこの道具廻る。)

本舞臺、一面の平舞臺。向ふ一面、隅田堤より今戸の川岸を見たる灯入りの遠見。所々に櫻の立樹。日覆より同じく釣枝。爰に以前の孫兵衛、着流し頬冠り、尻端より、大小にて立掛り、新相中の惡者四人、立掛り居る見え。浪の音にて道具留る。

若者○　お侍様、シテお頼みは。

四　人　どういふ筋で御座ります。

孫兵衛　頼みといふは外でもない。今植半から藝妓を連れて歸つて參る侍は、今日、殿中を騒がせた淺野家の我儘浪人。彼を其儘置く時は、天下の害になる事ゆゑ、疊んで、川へ、どんぶりと致して仕舞へば跡腹やめず。首尾よく行けば褒美の金、望み次第に遣はすから、一骨折つて貰ひたい。

○　イヤ金にさへなる事なら、命を限りの荒仕事。

□　なんでも御座れ、搔込むこちとら。

△　天下のお爲になつた上。

◇　褒美の金にありつく仕事。

○　一骨折つて。

四　人　あけやせう。

孫兵衛　それは何より。とかういふ中、土手傳ひ、向うから來る提灯は正しく彼奴に相違はない。櫻の蔭に忍んで居やれ。

四　人　承知しやした。

孫兵衛　ドレ待ち伏せを致さうか。

(ト皆々木蔭へ隱れる。上手より、小助先に、植半の提灯を提げ、郡右衛門おかの、出て來り、爰へ四人出て櫻の枝を持ち伺ひ、小助の持つて居る提灯を叩き落す。これに驚き、)

小　助　狼藉者〱。

(ト云ひながら下手へ逃げてはひる。郡右衛門、合點の行かぬ思入れにて、おかのの手を引き、逃れんと行違ふを、)

○　其處を行くのは怪しい奴、確かにおのれは。

(ト皆々木陰へ隱れる、向うより郡右衞門、先に立ち出て來り、花道よき所に留り、郡右衞門、思入れあつて、)

おかの　エヽ郡右衞門さん、さヽしておまへ、これから何處へ行く御思案で御座んすぞへ。

郡右衞　サア、先づ赤穗へ立越えて、親九郎兵衞に逢うた上、金でも貰ひ、商法立てるわしが心底。

おかの　そんなら、どうぞ妾も赤穗とやらへ、一所に連れて往て下さんせ。

郡右衞　それは素より易けれど、一人の親を後へ置き、旅へ行くのも不孝な譯。

おかの　その母さんを振り捨てゝも、男に付くが世の習ひ。

郡右衞　さう又度胸が据つたら、一緒に連れて退かうわい。

おかの　それで、妾も落着いたわいナ。

(ト此時、以前の惡者四人出て、郡右衞門おかのへ掛かる。)

○　其處へ行くのは怪しいやつ、確かにおのれは郡右衞門。(ト居る。)

四人　淺野浪人。

郡右衞　コリヤわいらは何と致す。

○　なんとするとは知れた事。

□　それなる女を。

△　こつちへ渡し。

◇　キット此處で。

四人　くたばつてしまへ。

郡右衞　サテハわいらは何者かに頼まれたのだナ。

○　オヽ左右田孫兵衞樣に。

四人　頼まれたのだ。

郡右衞　ちよこざいなその一言。うぬらが手にあふ郡右衞門でないわい。

○　細事いはずと。

四人　たゝんでしまへ。

郡右衞　何を小癪な。

(ト郡右衞門、刀を拔き四人を相手に、一寸立廻り、ドヾ四人下手へ逃げて入る。これを追ひ、一行かうとする。おかの見て、)

おかの　モシ大野さん、長追ひは止しになさんせいなア。

郡右衞　主におとらぬ卑怯な孫兵衞。

おかの　ホンニさうで御座んす。憎い奴ではあるわいなア。

兩人　ハヽヽヽヽヽ。

郡右衞　時にとかはる雲井の空、お家の大事も餘所になし　あだに暮せしこの身の不忠。

おかの　それも誰故、妾故。

郡右衞　馴染重ねし互ひの惡緣。

おかの　切るに切られぬ妾の操。

郡右衞　たつる心は嬉しいが、跡に殘りしお袋が。

おかの　嘸や怨んで居やしやんせう。

郡右衞　思ひ忘れし其報い。自然と此身に。

おかの　エヽ。
郡右衞　來るであらうわい。
(ト覺悟。)
(ト郡右衞門にかゝる。これを宜しく當る。この時五ツの鐘。)
おかの　アリヤもう五ツ。
郡右衞　夜の更けぬうち少しも早く。
おかの　郡右衞門樣。
郡右衞　行きやれ〳〵。
(トこの時、惡者、)
○　それをやつては。
(トかゝる。これを見事に投返す。兩人、花道へ逃れ行く。)
郡右衞　ちつとも早く。
(ト入替つて手を取るを木のかしら、)
行きやれ〳〵。

拍子幕

四月

赤穗城離散の場
同海岸出帆の場

(ト日覆の月附、四月に替る。)
本舞臺。四間の通し。高さの二重、本緣附、眞中、書院、階子正面沙綾形の襖。二重の上下、石垣の張物、軒口に丸に鷹の羽の紋の幕を張る。總て赤穗城内役所の體。此處に、杉野十平次、橫川太郎兵衞、裃衣裳にて白木の机を控へ、金札を算へ、帳面へ印し居る。傍に千兩箱五つ積み重ねあり。平舞臺に、新相中の庄屋四人、羽織袴にて控へ、書院階子の左右に、若い衆の下役侍、袴姿にて控へ居る。この模樣、時の太鼓にて、幕あく。
杉野　領分六十七ヶ村の總代として、名主四人、金札殘らず持參の上は、正しく金と引換へ遣はす。即ち二千九百兩。改めて持ち歸れ。
庄屋四人　へイ〳〵。有難う存じまする。
橫川　ソレ、下役の衆、金子を彼等へ渡されよ。
下役兩人　ハッ。
(ト二重へ上り、件の千兩箱を、名主四人の前へ一つ宛置く。これにて千兩箱一つ殘り、百兩包一つ、杉野の前の机の上へ置く事。名主四人、箱の蓋をあけ、金を改める事あつて、)
○　へイ〳〵。三千九百兩。
△　確かに頂戴致しまして。
□　有難い事で。
庄屋四人　御座りまする。
橫川　金子受取る上からは、一同の者、立ちませい。
へイ〳〵、お暇致しまする。何と、皆の衆。御領主樣も思ひ掛けない騷動

で、御城地を明け渡し、思ひ〳〵にお立退きになるとは、おいとしい事ではないか。

△　さうぢやとも〳〵、その取込みのある中で、領主が變ればこれ迄の通用札も規則が變り、反古同樣になるであらうと。

□　態々昨日、御領分へ御布告を廻し、金札取集めて持つて出ろ。正金と換へて遣ると、有難い思召し。

◇　たとへ金札が反古になり、こちとらが損をしようとも、五萬三千石の御領主樣の御家が斷絶するから見ると、何でもない事で御座るに。

○　下を憐む御領主樣。

△　これといふのも御城代の。

□　大石樣の、皆お指圖。

◇　小前の者さへ承知なら。

○　金子は此儘。

四　人　差上げたいわい。

杉　野　餘事を申さず、早く立て〳〵。

四　人　へイ〳〵、お暇申しまする。

（ト千兩箱を持ち立たうとする。バタ〳〵になり、向うより大野九郎兵衛、白髮鬘、袴大小にて出て來り、花道にて、）

大　野　コリヤ〳〵、百姓共。暫く待て。

○　ヤ、貴方は御家老。

四　人　大野樣。

杉　野　そこは端近。大野氏には。

横　川　先づ〳〵これへお出なされい。

大　野　然らば御兩所、許さつしやい。

（ト大野九郎兵衛、舞臺へ來り、二重へ上り、眞中へすまふ。）

○　シテ、暫くと私共を。

△　何故、お留め。

四　人　なされました。

大　野　留むる仔細は他ならず。詮議を遂げねば相成らぬ。

杉　野　ナニ御詮議と。

杉野横川　いはるゝは。

（トこれより合方になり、）

大　野　今般の騷動につき、御軍用の金子配分と事極まり、知行高にて割付けず、頭割にて大石が割付けるも是非がないが、その中から五千兩出し、反古同前の札と換へるは、何とも以て心得ず。所詮、奉行の岡島めが小刀細工で、大石と心を合はせ、虛妄致すと覺えたり。（思入れ。）コリヤ〳〵、百姓共。幾ら金子を請取りしか、それにて、とくと申上げい。

○　へイ、賀古郡加茂郡合せて六十二ケ村へ。

△　佐用郡の五ケ村を差加へまして、大札、小札。

□　都合三千九百兩、只今あれなる御役

人様から。
◇ 金子と引換へてお貰ひ申しました。
有難い事で。
四　人　御座ります。
大　野　然らば、三千九百兩とナ。
四　人　左様に御座りまする。
大　野　杉野氏、帳面これへ。
杉　野　ハツ。
(ト百兩包の載せある机を、大野の前へ出す。大野、帳面を調べ、控を算へることあつて、)
大　野　横川氏、十露盤これへ。
横　川　ハツ。
(ト大野の前へ置く。大野、十露盤をはぢき、よせて見ることあつて、)
大　野　ム丶〱相違ない。立て〱。
四　人　へイ〱。お暇致しまする。
(ト箱を一つ宛擔ぎ、花道へ行く。)
○ 又、やかましやの。
四　人　慾張りめが。
大　野　何ぢやと。
四　人　イエお暇致しまする。(ト向うへ入る。)
杉　野　シテ何ゆゑに、大野氏には。
横　川　かく御吟味を。
兩　人　なされまするナ。
大　野　さては、御兩所。チト商法氣にならつしやらぬか。
兩　人　何といはるゝ。
大　野　ハテ、籠城殉死を勸めても、内藏之助が臆病ゆゑ、所詮評議は一決致さず。所で手前は慾と出掛けた。ハテ、サ、今にも當地を引拂へば、いはずと知れた俄浪人。金が無ければ身が立たぬ。斯様な役目を云付かりしは、望む所のよき幸ひ。例へば今の名主共に、四千兩致しなば、筆先をもつて策を廻らし、五千兩と附けかけ致し、殘るこれなろ千兩は、三ツ割にして三百兩宛取つて、下役兩人へ百兩の割。餘りを五十兩づゝ遣はせば、互の嚢中ふくらみまするぢや。それもお家が安泰にて、治國の折なら横領とか盜賊とか、いふ名が付きまするが、今亂國も同前なるお家騷動の折からゆゑ、所謂これが分捕り高名。こゝらが武士の習ひで御座るテ。
杉　野　コハ御重役の仰せとも、近頃以て心得ず。
横　川　身不肖ながら、我々も大石氏より人選に預り。
杉　野　かゝる役儀を申付かれば。
横　川　左様な不義は。
兩　人　致されませぬ。
大　野　ハテサテ、それがいらぬ遠慮。名を取らうより慾の世の中。轉んでも只起きぬが、即ち手前の流儀で御座る。

（ト此時、後の襖を明け、岡島八十右衛門大小にて出て、）

岡島　不忠者の大野九郎兵衛。其處一寸も動くまいぞ。

（トキツトいふ。大野愕りして、岡島を見て、）

大野　ヤ、汝は岡島。何時の間に。

（ト机の上にある百兩包を手早く取つて、懐へ入れる。皆々これに心付かず。）

岡島　先日初度の評定の折、忠義顔して我々へ殉死を勧めおきながら、お金配分とこと極まれば、知行高にて割り渡せと、慾面かわく大野九郎兵衛。今日又候御領分の金札残らず正金に引換への場へ推參なし、おのれが心に引較べ、もし虚妄でもあらんかと、手入れを致すのみならず、これなる兩所を同意に引入れ、金子を掌握なさんとは、いはうやう無き人非人。大石氏の前へ引立て、成敗致さにや相成らぬ。きり／＼奥へ同道致せ。（トキツトいふ。）

大野　アヽ。コレ／＼待つて呉れ／＼。今のは嘘ぢや。アリヤ嘘ぢや。

岡島　何がなんと。

大野　ハテサ、お手前には日頃より忠義一途な侍ゆゑ、左樣な事もあるまいが、これなる二人は如何なるか、心得違ひな事あつては、内藏之助が折角の情も無足に相成る道理。そこを存じての九郎兵衛、心を引き見るその爲に、只今の樣に申出したが、全くあれは虚言で御座る。かく眞實な心底で、この九郎兵衛も祝着致す。

岡島　イヤ、日頃忠義なお手前なら、左樣な儀とも思はうが、強慾非道な大野九郎兵衛。殊更以て江戸表で、亡君御切腹のその日にも、汝が悴の郡右衛門は、女狂ひに外出なし、邸内に居らざりしとやら。親が親なら悴まで、不忠不義なる大野親子。詮議致さにや相成らぬ。

大野　イヤ／＼、悴は若氣の至り、色に迷うて不忠もなさんが、この九郎兵衛は忠義第一。左樣な事を致さうや。

岡島　忠義無類のお手前なら、これ迄の數度の評議に、籠城殉死と決心召されぬ。

大野　其儀は再三大石に、城を枕に討死せんと勸めしが、柔弱懦意の腰拔ゆゑ、餘儀なく離散と一決なしたわ。

岡島　左程、貴殿が大石氏を柔弱なりとお見拔いてあらば、何故貴殿の存知には、計ひ召されぬ。

大野　イヤ最早手前は老年ゆゑ、軍馬の驅引及ばぬと存せしゆゑに、壯年の大石氏へお任せ申した。

岡島　然らば、御子息郡右衛門は留守

居役を勤め居れば、親子心を一致なし、
一味の臍を固め召されぬ。
大野　サアそれは。
岡島　貴殿の行跡糺しませうや。
大野　サアそれは。
岡島　大石氏のお指圖に非を打ち召さるか。
兩人　サア／＼／＼。
岡島　同席叶はぬ。退り居らう。
（ト二重より下へ蹴落す。大野、起上り、腰の痛む思入れにて、花道へ逃げ行く。）
大野　おのれ、家老の上席たる重役の某を小身者の分際で、よくも縁より蹴落したナ。
岡島　ヲヽ、これまでは重役なれど、浪人なせば只の親仁。切捨てくれる奴なれども、刀の穢と存ずるゆゑ、命ばかりは助けてくれる。三拜ひろいで立ち歸れ。
大野　ヲヽ、歸らいで何と致さう。人並勝れた足澤山。二本や三本損しても掛替への足は幾等もある。併し、今のは落としはせぬか。（ト懷を探り、思入れあつて、）これでもこつちへ取るがまし。
岡島　なんと。
大野　覺えて居れ。（ト刀を杖に向うへ入る。）
岡島　ハテよい氣味であつたわい。（ト上手へすまふ。）
杉野　何は兎もあれ、領分の金札殘らず引換へました。
横川　それなる帳へ控へ御座れば、とくと御披見。
兩人　下されい。
岡島　それは何かと御苦勞千萬。（ト思入れ、机を引寄せ、帳面を調べ、札を改める事、宜しくあつて、金子を改め、）コリヤ、百兩金、端の出る筈ぢや。
杉野　ヤアそれなる控へ小包の百兩金を載せ置きしが。
横川　さては、只今九郎兵衛がそれに居つたるそのうちに。
下役　掌握致して。
四人　失せたるか。
岡島　然らば後を追つかけて。
（ト刀を持つて立掛かる。此時奥にて、）
およし　アイヤ、岡島樣。お待ちなされませ。
岡島　そのお聲は、大石氏の。
杉野　たしかに奥方。
横川　およし殿。
（ト合方になる。奥よりおよし、裲襠姿にて出て來り、岡島下手へすまひ、）
岡島　さては委細の樣子をば。
杉野　奥にてお聞き。
皆々　なされしか。

（トおよし、上手へすまひ。）

およし　委細は奥にて承りましたが、御家老の上席とも呼ばるゝ程の御身分にて、僅かな金子に心を掛ける、取るに足らざる九郎兵衛殿。御詮議立てをなされまするは、血で血を洗ふ當家の恥辱と存じますゆゑ、取敢えず、お留め申して御座ります。

岡島　手前も左樣心得ますれど、たとへ僅かな金子たりとも、帳の員数が合ひませねば、御城代へ濟まざる儀と心得まして、斯くの仕儀。奥方の御承知とあれば、差控へるで御座りませう。

およし　右の次第は妾より、夫へ告げるで御座りますれば、お役目濟みし上からは、イザ御休息なされませ。

岡島　左樣御座らば、およし樣。

およし　お役目御苦勞に存じまする。

（ト思入れ。岡島先に、杉野、横川帳面十露盤札なぞを持ち、下役の侍二人附いて千兩箱を持ち、奥へ入る。これより床淨瑠璃になる。）

〽いとゞさへ、花の名殘りに物淋し、卯月の空やしめりがち、顔に雨持つ奥方が、邊り憚り託ち言。

（トこれにて、床の合方。）

およし　云うて返らぬ事ながら、此度のお家の騒動。日頃仁者と呼ばれ給ふ寛仁大度のわが君樣が、御大禮の殿中にて御刄傷を遊ばすは、よく〳〵忍び堪へ難き事あればこそ、家を捨て、多くの家來の難儀をも顧み給はぬ事ならん。その御無念を汲みやれば、我々風情が命を捨て御公儀へ弓引く

とも、敵を引受け籠城なし死するは、冥府の亡君へ御恩を報ずる爲なるに、其評定もいつの間にか、籠城殉死の沙汰も止み、今日は上使の御入來あらば、速かに城地を渡し、直ぐに船にて泉州の天野屋方まで立越えると、夫の詞是非も無う、母君はじめ子供等にも、其用意はさせてあれど、忠義無類の大石殿、亡き殿樣の御無念を、受繼がずして易々と城地を渡し、引拂ふ心の底は分らねど、一先づ城地を引拂へば、此由一筆但馬なる石塚方へお知らせ申さん。

〽涙ににじむ薄墨に、書く玉章の細細と、勝手の用事取片付け、おづおづ出る寺坂が、それと見るよりひれ伏して。

（トおよし有合ふ硯箱を引寄せ、手紙を書く。下手より、寺坂吉右衞門、好みの拵へ、一本差にて出で來り。）

寺坂　ネイ〳〵。奥樣にはこれにお渡り遊はしますか。

およし　オヽ、吉右衞門。吉千代や大三郎は何をして居ますか。

寺坂　坊樣方は、お奥においでゞ御座りまする。

およし　子供等二人がそなたを氣に入りゆゑ、甘えてそちを、家來同樣慕ふのを、煩いとも思はずに、親切に世話して與りやる志、嬉しう思ひますわいなう。

〽他事なき詞に、吉右衞門これも訴訟のよき折と、打悅びて進み寄り。

（トおよしは又文を書き居る。吉右衞門、こなしあつて、）

寺坂　有難いそのお詞。吉田組の下郎めも坊樣方の御意に叶ひ、大石樣を御主人同樣御贔負になり居りましたが、承はりますれば、彌今日御退城遊ばすとの事。いづれへお出で遊ばすとも、何卒下郎をお供にお連れなされて下さるやう、偏へにお願ひ申しまする。

〽供を願へど、奥方は觸らぬ態にありければ。

（トこのうち、およし、こなしあつて、上手を向き書きかける。吉右衞門、又こちらへ來て、）

寺坂　お供をお許し下さりますれば、お荷物を擔いでなりと、お草履を摑んでなりと、何處が何處までお供なし、これ迄御恩になりました御恩報じが致し度う御座ります。モシ奥樣、あなたさまから、お旦那へお執成しをお願ひ申上げまする。

（トおよし、又脇を向き居るゆゑ、又こちらへ來て、）

これ程お願ひ申しましても取るに足らざる下郎めゆゑ、お供はお許し下さり

ませぬか。年一分の下郎でも、御大祿の旦那様でも、忠孝恩義は變りませぬ。お供をお許し下さらは、身は肉醬に碎かれましても、更々厭ひは御座りませぬ。お供にお連れ下さりませ。

〽取付く島も涙にくれ、供を願ふぞ便りなけれ。

(ト吉右衛門、思入れあつていふ。およし、こちらを向き、)

およし　吉右衛門、そちや本國離散なす供が左程致したいか。

寺坂　ネイ〱。何卒お供をお許し下さりませ。

(トおよし、ほろりと思入れあつて、)

およし　スリヤ、眞實供をしたいと云やるか。

寺坂　なに僞りを申しませう。

およし　ア、日頃忠義な其方の志、籠城殉死の沙汰を聞き、討死なすと悦びし忠義な心に引替へて、離散の供がしたいとは、見下けはてた心ぢやなう。殿の御恩を忘れしか。

〽忠義を忘れ、それ程に退城なすを慕ふのも、夫の心の甲斐なさを知らで、忠義をたて通す、涙それぞと汲みとりて。

(トおよし、宜しくこなしありて、)

〽思ひがけなき一言に、吉右衛門は座を進み。

寺坂　これは又奥様のお詞とも覺えませぬ。年一分でも殿樣の御扶持を頂戴致しますれば、數年受けたる御恩は一つ。何卒今度の騒動に、もし御籠城と極まらば、下郎ながらも討手を引受け、花々しく戰ひまして、手柄はならずと、敵方の素頭なりとも討落し、討死なして死ぬ覺悟。それも叶はずご〱と御開城と承り、下郎ながらも口惜しく、おのれ上野逃さじと心に思へど下郎の身で及はぬ事と存じまして、大石様の御退城、深き御思慮と下郎が推察。たつてお供を願ひまするも、再び花咲く會稽の、お供がしたう御座ります。

〽忠義面にあらはれて、無念の涙にくれければ。

(ト吉右衛門、本意なき思入れ、およし、こなしあつて、)

およし　僅か五兩に二人扶持の其方でさへも、その樣に無念と思うて居るものを、なんでムザ〱御領地を明け渡されしか。女子の姿さへ敵を引受け、叶はぬ時は討死と、覺悟極めし甲斐もなく、御開城遊ばすは、深き仔細があればとて、たゞ一言のお諭があるべきに、忠義を忘れ給ひしか。

〽恨む樣子を見て取りて、共に涙に暮れ居たる。
（トこれより合方、キツパリとなり、）

寺坂　見る影もない下郎めが、たとへ何を申しませうとも、天へ向つて唾を吐き礫を打つも同前にて、屆く譯では御座りませぬが、名に負ふ播州一と呼ばれたる、要害堅固の御名城。殊には軍師山鹿流の御極意にお渉りなされたる、大石樣が麾を取り、御籠城をなされましたら、たとへ隣國他國より、數萬の勢にて押來り取圍むとも、一年や二年は保つ兵粮軍用。其上これまで殿樣が御領分の百姓を惠んでお置きなされますれば、百姓一揆の起るは必定。諜し合せて敵方の後を取切り、前後から挾討にて戰はゞ、責めあぐむのは眼のあたり。それをむざ〳〵御上使へ明け渡しておしまひなさるは、どういふ深い思召で御座りますかは存じませぬが、不甲斐ないやら悔しいやらで、夜の目も碌々眠られませぬわえ。

〽勇氣も挫け、寺坂が打萎るれば、奥方も。

およし　吉右衛門、僅か五兩に二人扶持なれど、これ程にわが君の御恩を思ふ志、同じ家老の大野はじめ、表は忠義に見せかけて、不忠不義なる者の多く、中にも適れそちが赤心は、冥府に御座る殿樣も、さぞや御滿足に思召さん。さりながら。

〽小身者の悲しさは、物の數に入られねば、不便の者やと目に涙。

その心底を見る上は、わしが夫になり替り、いかにも供を許しませう。

寺坂　スリヤ、アノ、お供は叶ひまするか。ネイ〳〵有難う御座りまする。

およし　その悦びに引換へて、むざ〳〵城地を明け渡すは、他家へ對して弓矢の名折れ。無念の事ではあるわいなう。

寺坂　それも恨みのあるお人を、すつぱりおやりなされましたなら、たとへお家が斷絕して、その日のうちに殿樣が御切腹をなされませうとも、是非無い事と諦めますれど。

およし　みす〳〵、相手は薄手にて、命全うなせし上。

寺坂　場處柄、日柄を辨へて、手出しをせぬとて評判よく。

およし　お祟りもなく、殿樣には。

寺坂　重きお咎め、その日のうち。

およし　田村の邸にて御切腹。

寺坂　それも無慘や庭内にて。（ト大きく云ふ。）

およし　アヽコレ。（ト思入れ。押へる。）やがて恨みを晴らさで置かうか。
（ト向うを見詰めて、キツト思入れ。子供

兩人、二重より下りて、刀を拔き切つてかゝる。)

吉千代 大三郎 吉右衞門、觀念。

寺坂 (トかゝる。寺坂、キット留め、)コリヤ坊樣方。何となされますか。

吉千代 そちが手並を。

大三郎 試したのぢや。

寺坂 流石は、親御のお育てがら。

およし テモ大膽な、わる、さちやなう。

〽口に叱れど。

(トおよし、頼もしいといふ思入れ。吉千代、大三郎は刀を鞘へ納める。寺坂、感心の思入れ。この模樣、床の送りにて、道具廻る。)

本舞臺、一面の平舞臺、正面、上下共、三方折廻し、丸に剛の羽の散らしの銀襖。日覆より同じく紋散しの大欄間を下し、舞臺花道共、一面に薄縁を敷詰め、向う揚幕の所、板戸の出入り。總て城內大廣間の模樣宜しく。床の送り時計の音にて道具留る。

〽ゆゝしける。奧の廣間はかねてより、上使設けに行屆く。掃除も濟みし未刻、萱野三平常興は徒然の餘り立出でて、過ぎし事ども思ひやり。

(ト此うち、下手の襖を明け、三平着流しにて、宜しくすまふ。床の合方になり、)

三平 只今打ちしは、未の刻、最早今日御上使の入來も程なく、開城と事極りしは是非もなし。思ひ廻せば、某程、父母に不孝の者あらんや。

(ト思入れ。めりやす。)

豪家といへど、農民の家に生れて、武の道に心を寄せて、二年あと、國を立出で手蔓を求め、當家へ仕官の身となりしも、勤仕に閑あらざれば、故鄕に父母はありながら、音信さへも不通に打過ぎ、存亡とても知らざりしが、今般不意の騷動にて、江戶表よりこの地への早打に來る道すがら、故鄕攝州萱野村、わが家の門を通行なし、せめては父母に餘所ながら暇乞なし、この地にて籠城致して討死と、覺悟の前も母人には、而も去月の十四日、君御刃傷遊ばせし其日に、病死召されしとて、葬式を出す家の混雜。それと見るより父上には、わが早打の駕へ縋り、せめては母に今生の別れと思ひ、施主に立ち、野邊の送りを致しくれと、悲歎の頼みも、御主君の大事を告げる火急の場合、心ならずも振切つて、この地へ來り、籠城と思ひの外に、大石氏深き御所存あるゆゑか、先刻殉死の血判をお取りなされてありながら、城地を此儘速かに渡して、離散召さるゝとは、忠孝共に貫

かれぬこの身の薄命、如何ばかりか。
ハテ案外なる事どもぢやなァ。
〽不忠不孝は心にも、なくに泣かれぬ鵑の嘴、始終立聞く大石は、さあらぬ態に立出でて。
（トこのうち、上手襖を明け、大石裃形に出掛り、伺ひ居て、この時前へ出て。）
大石　萱野氏、これに居られしか。
〽聲に恟り、座を改め。
（ト三平、下手へすまひ。）
三平　これは〳〵、御城代には、長の間の御謹愼。さぞ、御氣欝に御座りませう。
（トこれより、合方キッパリとなり。）
大石　されば、去月の十七日、御身が當地へ早駕にて乗込まれたる其日より、城内一時に惑亂なし、既に昨今御上使へ城地を渡し退散と評議一決致すまで、評議の程も以上七度。或は籠城なさんと約し、又は殉死を致さん等と、種々混雑も致せしが、籠城殉死の沙汰も止み、愈々城地を明け渡すと決定致して、領分へ融通に渡せし金札まで、殘らず金子と引替へたれば、最早心も樂々と、御上使入來を相待つばかり。只退屈に思ひまする。
〽他事無き詞に、三平は、深き心を探らんと。
（ト三平思入れあつて。）
三平　シテ、御城代の御賢慮はこの末如何遊ばしまするナ。
大石　ハテ改まつたそのお尋ね。用金配分致せし上は、これより無祿の町人となり、身を安泰に致す心底。それゆゑ先日泉州の天野屋方へ申遣はし、今日當地の海岸まで、最早船が廻つて居れば、所持の道具を殘らず積込み、家内一統乗組みまして、一先づ堺の利平方まで立退きまする所存で御座る。
三平　スリヤ殉死を致さんと、我々先日差上げたるアノ連判も反故となし。
大石　血判取りし連判のその姓名は、かくの如く、切抜いてお返し申す。
〽帛紗包を押開き、切取る姓名差戻せば。
（ト大石、懷中より帛紗包の連判狀を出し、名前だけ切抜きあるを、三平の前へ出す。三平とり上げ見て、恟りなし。）
三平　ヤヽ、コリヤ、某が姓名を御城代には切取られ、血判誓詞をお返しあるとナ。
大石　それぞ即ち、條理の極意。とくと思案を致して見られよ。
三平　ナニ思案をせよと、云はるゝは。
（トこれより、合方變つて。）
大石　そも始めての評定には、名に負ふ五萬三千石の一家中ゆゑ、九百四人殉

死を望む者ありて、この城内へ集りしが、金子配分の其後にて、命捨つる覺悟にて大石方へ參られよと申し渡せば、その砌、集り來るは六十餘人。僅か半月たゝざるうち十分が一にも足らざる程徒黨の人數減じたれば、如何で籠城相成らうや。大野九郎兵衛、奥野將監、藤井、安井の輩さへ、早變心の色をなす。そこを存して速かに城地を易々明渡し一旦、有志の各々より血判取りし連判も、一人〳〵に名前を切取り、お返し申すが安堵の一つ。承れば御身には母を先立て、老後に及ぶ父ある由。兄弟とても御座らぬとやら。なまじ忠義を立てん等と思はれなば、親への孝が忘れば、忠孝共に立たざる道理。元の農家へ立歸り、身を安泰に致されよ。

〽心ありけに、大石が諭す詞に三平も、さては由なき繰言を聞かれしゆゑと、涙を浮かめ。

(ト三平思入れあって、)

三平　コハ御城代のお詞とも、近頃以て心得ず。親に心を引かされて、忠義を忘るゝ某とお見拔きあってのお諭しか。そりやお恨みに存じ申す。

(ト合方、キツパリとなり、)

尤も去月十七日、當地へ參る道すがら、わが故里の萱野村を通行致すその砌、母の病死に野邊送りを致す所へ出合ひしが、御家の大事、亡君へ仕へる身はゑと、慈悲も後に見なして取急ぎ、その夜當地へ着して御座るが、御城代には某が殉死をお庇ひにされて、在所へ歸り、老年の父に孝行盡せよと仰せあるのがお恨めしい。君の爲には、一命を塵芥よりも輕しと致せば、など君恩を忘却なし、命を延ばしに居られませうぞ。あはれ忠義の武士とも思召されて、大石氏、殉死へお加へ下さるやう、只管願ひ奉る。(ト思入れ。)

〽いへど大石默然と、さし俯いて詞なし。萱野は胸の浪立ちて、取付く島もあらざれば。

(トこのうち、三平思入れあって、)

スリヤ、其許には、三平を農民匹夫の生れゆゑ、未練の者とお見捨てありて、お取上げは御座らぬよな。アノ、其許には。(思入れ。)ムヽ。(思入れ。)

〽早、これ迄と胸に問ひ胸に答へて、肌くつろげ、既にかうよと見えければ。

(トこのうち、三平思入れあって、肌をくつろげ、刀の柄に手をかける。大石、思入れあって、)

大石　ヤレ、逸まられな、萱野氏。心底見えた。切腹無用。

三平　スリヤ某を、殉死の數にお差加

〽下さるよナ。

大石　如何にも同志に加へんが、それも死すべき時節あり。先づ自殺は相待たれよ。

三平　死すべき時節と仰せあるは、やはり拙者が胸中を。

大石　アイヤ、底意を明かさば、同意で御座らう。

〽洩らさぬ策意を、大石がなり行く、果を顯はせば、三平さこそと打悦び。

（ト大石、疊へ文字を書く。三平、見ろ事宜しく。）

三平　さては貴殿は、左程まで深き密計御座るゆゑ。

大石　それゆゑ、殉死を止め申した。

〽死を留めたるその所へ近習の侍走り出で。

（トこのうち三平、肌を入れ刀を鞘に納める。この留り、バタ〳〵になり、向うより、若い衆の近習一人出て、花道に居て。）

近習　ハツ、申上げます。城受取りの御上使として、脇坂淡路守樣、木下肥後守樣、御入來に御座ります る。

大石　ナニ、最早御上使御入來とナ。（思入れ。）此處へ御案内致せ。

近習　ハツ。

（ト引返して、向うへ入る。三平思入れあつて、）

三平　御上使御入來御座る上は、此所に在つては失敬ゆゑ、拙者は御次へ差控へるで御座りませう。

大石　最早御上使御入來なれば、異儀なく城を明け渡し、當城離散仕れば、貴殿は故郷菅野なる御親方へお越しあつて、父の愁傷亡き母の追善供養を營まれよ。

三平　忝き御詞なれど、そも早打のその日より、進退共に致さんと、心底決

せし某なれば、父母の恩義と君恩を較べますれば、些細な事。やはり拙者は貴殿と共に。

大石　その退出も多勢一度に離散なさば、黨を企つ淺野浪士と、暴なる流言ある時は、却つて後日の害とならん。只何事も穩便に、貴殿は此儘退出召され、後しての報知をお待ち下され。

三平　然らば、拙者は萱野なる、親里方へ立歸り、貴殿の御報知相待ち申さん。

大石　我もあとより離散なし、一味同志の赤心をとくと見拔きし其上にて、萬事委しく御談事申さん。

（ト三平、思入れあつて、）

三平　ア、返らぬ事に御座れども、殿御在世にましまさば。

大石　忠臣多き淺野家ゆゑ。

三平　益々御家は榮えんに。

大石　咫尺に變るは世の形勢。

三平　要害堅固の當城も。

大石　畫餅となりし御家の成行き。

三平　これ皆臣たる身の不德。

大石　是非も無き儀と萱野氏。

三平　最早退出致すで御座らう。（ト立上る。）

〽口には云へど心には、今日ぞ館の見納めと、萎るゝ心取直し、しをしを立つて入りにける。大石こなたに打向ひ。

（ト三平、花道へ行く。一寸思入れあつて向うへ入る。大石こなしあつて、）

大石　ヤア、主稅は、いづれに在る。御上使の御出迎ひ致せ。

（ト上手、襖の中にて、）

主稅　ハア、。

〽親子出向ふ間もなく案内につれて入り來るは、城受取りの兩諸侯。

（トこれへ時の太鼓を冠せ、向うより近習先に立ち、脇坂淡路守、裃大小にて立文を懷中なし、後より木下肥後守、同じく裃大小にて出て來り、花道に留り、近習に辭儀をなし、橋掛りへ入る。このうち、上手より主稅、若衆鬘、振袖裃形にて出て、大石と共に、出迎ふ事宜しくあつて、）

大石　これは〳〵、御兩侯には、計らざる事件により。

主稅　遠路の所、御上使の御役目。

大石　御苦勞千萬に存じ。

兩人　奉ります。

脇坂淡路之守　スリヤ其方が、聞き及ぶ城代、大石内藏之助か。

大石　御賢察の如く、大石内藏めに御座りまする。

木下肥後守　シテ前髮の一人は、主稅と云へる子息なるか。

主稅　若年の身を持ちまして、御出迎ひの儀は畏れあれど。

大石　大野九郎兵衛、煩ひに就き。
主税　名代として差添ひに。
大石　罷り出まして。
兩人　御座りまする。
脇坂　兩人出迎ひ。
脇坂木下　大儀なるぞ。
大石　イザ先づ、これへ。
主税　お通り下さりませう。
脇坂木下　許せよ。
〽權威も振らず兩諸侯、しづ〳〵上座へ打通る。
(ト脇坂、木下、舞臺へ來り、宜しく上手へすまふ。)
〽内藏之助は、愼んで。
(ト大石、前へ出て、)
大石　御懇情なる御内意により、略承知は致しますれど。
主税　如何なる仔細か御上使の趣。
大石　仰せ聞けられ。
兩人　下さりませう。
木下　我々とても役儀の表、淡州殿には御書の趣。
脇坂　如何にも、これにて讀み聞かせん。愼んで承はれ。
大石主税　ハッハア。
〽懷中より御書取出し、うや〳〵しく押開き。
(ト脇坂、件の立文を開き、)
脇坂　一、今般殿中に於て、内匠頭儀、吉良上野へ切付け候段、理不盡の致し方、時節場所等も辨へず候段、不屆に思召され、これに依りて、田村右京へ御預けに相成り、即ち、役宅に於て切腹仰付けられ候。家來の者共、右の趣會得致し、早速城中引渡し、騷動致さず候樣、相心得可く候也。
〽ト讀上ければ。
大石　ハッ御書の趣、家中一統。
主税　委細承知。
兩人　仕つて御座りまする。
〽立派に云へど、双眼に溢るゝ涙押隱し、伏したる頭、上げかぬれば、實にもと思ひ、兩諸侯わざと詞を和らげて。
(トこのうち、大石、主税、辭儀をせし儘、じつと思入れ。脇坂、木下、顏見合せ、不便だといふ思入れあつて、前へ進み、)
脇坂　さて内藏之助。心中の程察し入るぞよ。
(ト思入れ。これより本調子の合方になり。)
武士たる身には覺えあれど、殿中に於て内匠殿が刄傷に及ばれしも、よく〳〵止むを得ざる儀ゆゑ。然るに相手も討果さず、即日田村の邸宅にて、切腹仰付けられて、家斷絶に至りしは、さぞ殘念にありつらんと、家中の愁傷

木　下　推量り、嘆息致し居るわえ。且又、台命蒙りて、城請取りに向ひし我等、定めて血氣の者共が手出しにても致さんかと、軍馬の用意も整ひしが、さは無くして、速かに城中掃除行届き、禮儀正しく明け渡すは、汝の說諭に依る所と、身に於ても感服致したわえ。

大　石　コハ畏れ多き御懇の御意。短才不德の拙者めの為、家中の論も届き兼ね、麁忽の段をかくさせしに。

主　税　御賞譽に預りまするは、父は勿論、拙者めまで。

大　石　有難き仕合せに。

兩　人　存じまする。

脇　坂　シテ、其方たちには、この末如何致す所存なるぞ。

木　下　次第に依らば、力にも相成つて遣はさんが。

脇　坂　決して、他言は致さねば。

木　下　その心腹を。

兩　人　聞かせて呉りやれ。

大　石　何と御意なされまする。

脇　坂　かく速かに城地を渡し、當所を離散致すには、何か所存がなくては叶はぬ。

木　下　遺恨と思ふその相手は、御祟りもなく存生にて、本領安堵で居らるゝなり。

脇　坂　併し、治國に徒黨を結び、天下へ對して亂暴なさば、後日の御祟りは眼前なれば。

木　下　それらの邊を推量り、この末他家へ仕官をなし、二君に仕へる所存なるや。

脇　坂　但しは、深き心底なるや。

木　下　その心腹が。

兩　人　承りたい。

〽懇にこそ問ひかくる。内藏は主税とうち頷き。

（ト大石、主税、顔見合せ思入あつて、）

大　石　ハヽハッ。冥加なきその御尋ね。吾々親子が心腹を、只今これにて御覧に入れん。

主　税　失禮、御免下さりませう。

〽裃取つて、帯解き捨て、上着を脱げば、墨染の袈裟も掛けしや袖袂。

（トこのうち、大石、主税、上着を脱ぎ、下に鼠の着付、丸ぐけにて、袈裟を掛け居る。脇坂、木下、恟りなし。）

脇　坂　さては、其方たち兩人は、落髪なして佛に仕へ。

木　下　主人の菩提を懇に弔ふ所存に。

兩　人　決せしよナ。

大　石　恐れながら、御兩侯様。お聞取り下さりませう。

（トこれより、變つて床の合方になり。）

只今君の仰せの如く、主人の無念を晴らさんと、泰平の世に黨を結び、企てなさば御法を亂し、暴なる罪の輕からず。とあつて、臣たる身を以て、主君の無念を餘所になし、二君に仕官仕れば、忠義の道を忘れ、而も不忠の汚名は免れず。それゆゑ所存を決しまして、この地を立退き、落髪なし、樹下石上の身とならんと、疾くより下へ纒ひし佛衣。お尋ね故に、失敬ながら御覽に入れて、かくの仕合せ。

主税　只この上の願ひには、江府にまします主君の御舍弟、大學樣の御閉門。直ちに御赦免下されて、たとへ僅かな御知行たりとも、淺野の御家の絶えませぬやう。

大石　御兩侯樣のお執成し。

主税　偏へに願ひ。

兩人　奉りまする。

〽哀れ催ししを〲と、願ふ心ぞ健氣なる。上使も目と目見合せて、暫し詞もなかりしが。

（ト、このうち、大石、主税憂ひの思入れ。脇坂、思入れあつて、）

脇坂　オヽ、その願ひ承知致した。さはさりながら、かくまでにあたら忠義の其方たちを、むざ〲遁世致させる、その殘念は如何ばかり。

木下　仕官の望もこれあらば、濃州殿と申合せ、親子の者を一人宛召抱へんと存ぜしも、今は詮なき佛果の志願。

大石　その御厚志を承り、御請のならぬも、數年來淺野の祿を穢せし我等。

主税　弓矢取る身は是非もなしと、命に替へる袈裟衣。

脇坂　實に藥師寺が金言も思ひ當りし、武夫は。

木下　忠義を守り取るも憂し。

大石　取らねば物の數ならず。

主税　捨つべきものは弓矢とは。

脇坂　ハテ意味深さ。

兩人　秀詠ぢやなア。

〽冴えぬ思ひに閑談も數刻にあらで時計の音。

（トこの時、七つの時計鳴る。）

脇坂　あの時計こそ中の上刻。

木下　我々奥にて休息致せば。

脇坂　心靜かに。

木下　退城致せ。

大石　早速離散仕りますれば、暫時の御猶豫、願ひ奉る。

主税　左樣御座れば拙者めが、イザ御案內、致しませう。

（トこれにて、脇坂、木下立上りて、思入れあつて、）

脇坂　ア、惜しき家來を。

大石　エヽ。

木下　案内致せ。
主税　はい。
〽忠臣惜み兩諸侯、奥殿深く。
（ト主税、先に案内なし、脇坂、木下、上手へ入る。）
〽入る間遲しと忠義の武士、ばらばらと進み出で。
（ト下手襖を明け、以前の杉野十平次、横川太郎兵衛先に、諸士一、二、三、四、いづれも袴、大小にて出で、大石の左右より詰めかけ、下に居る。）
杉野　御城代。
横川　コリヤ何事で。
六人　御座ります。
大石　各々方には嚴めしく、何ゆゑこれへ出でられしぞ。
杉野　左樣御意ある其許こそ、殉死と決定召されながら。
横川　佛衣を下に人知れず、纏はられて居らるゝからは。
諸士一　遁世なして、命を延ばはり、誓詞を反故になさる御所存。
諸士二　御上使樣へ、心腹をお明かしありしはお次にて。
諸士三　逐一承知致せし我々。
諸士四　只今となり、一命が惜しくおなりなされしか。
諸士一　但し、これにも差當る。
諸士二　御家老樣の御心中。
杉野　深き御所存。
六人　御座るよナ。
〽詰寄るかたへの次の間にて。
（ト下手の後にて、）
岡野　いづれも、暫くお待ちなされい。
杉野　あれぞ正しく。
六人　岡島殿。
（ト下手の襖をあけ、以前の岡島出て來り、宜しくすまふ。）
杉野　シテ暫くと。
六人　お留めありしは。
岡島　各々、邊りへ心を。
六人　ハッ。
（ト立上り、正面の襖を明け拂ふ。これにて奥殿の遠見になる。皆々元の所にすまひ。）
岡島　御城代の御胸中、岡島推察致して御座る。
杉野　シテ御推察召されしとは。
横川　如何なる仔細で。
三人　御座るよナ。
岡島　各々の御所存にては、籠城召されて討死なすか、さなくば城地を明け渡し、御國の菩提所花岳寺へ一旦引取り切腹なし、殉死を召さるゝ御覺悟ならんが、御城代には日を延ばはり、時節を待つて、主君の御無念を晴らす御賢慮ならんと、先刻某推察致した。

大石　オヽよくぞ推察致されたり。兎にも角にも我々が恨む相手は、唯一人。
杉野　スリヤ御遁世召されんと。
横川　今御上使へ仰せられしも。
岡島　御計略にて。
六人　ありしよナ。
大石　敵へ油断を致さす流言。
六人　サテハそれゆゑ、（ト大きく云ふを、）
岡島　ア、これ。（ト制す。）
大石　奥には御上使、入來で御座るぞ。（思入れ。）
〽他聞を憚る折しもあれ、俄かに城外騷がしく。
（トこの留り、向う揚幕にて竹螺の音ドン〳〵になるゆゑ、皆々向うへ思入れあつて、）
ヤヽ、城明け渡しの際に臨み。
岡島　物騷がしきあの太皷。
杉野　さては不平の若侍。
横川　暴動なすと覺えたり。
岡島　我々參つて。
六人　取鎭めん。
大石　アイヤいづれもお騷ぎあるな。號令正しき一家中、暴動あるべき筈はなし。これぞ正しく百姓一揆。
岡島　何さま大皷螺の音も、武器の音色にあらざれば、百姓一揆と覺えたり。
杉野　何ゆゑ動搖。
六人　致し居るか。
〽不審立つたるその所へ、迎ひの船頭松藏が奥を目指して駈け來り。
（ト向うバタ〳〵になり、松藏筒袍形の船頭にて出て來り、花道下に居て、）
松藏　ハツ天野屋利平が抱への船頭、お荷物萬端積込みますれば、お迎ひに參りました。
大石　そちはいつぞや目通りせし、船頭の松藏なるか。
岡島　シテ〳〵城外騷がしき樣子を、そちは知らざるか。
松藏　只今私船場にて、委細くはしく聞糺し、承知して居りまする。
大石　然らば其處は手遠なり。
岡島　遠慮に及ばぬ。これへ參り。
杉野　樣子を話して。
皆々　聞かして呉りやれ。
松藏　そんならお許し下さりませ。
〽小腰を屈め打通れば。
（ト舞臺へ來り、下手下に居る。）
大石　シテ〳〵樣子は如何なる譯。
岡島　委細つぶさに。
皆々　云ひ聞かせよ。
松藏　譯と申すは八つ過より、七つ下りの今方まで、大津屋仁兵衛の船なりとて、追々積込む數多の荷物。（思入れ。）
〽すはやこれにて仕舞ぞと、乘込み

を待つ折しも、俄かに打立つ寄せ太
鼓、竹螺吹立つ多人數の、百姓一度
に押來り。

松藏　強欲非道で貪りし、大野九郎兵
衞がこの荷物、遣るな、逃すな、踏みこ
はせと。（思入れ。）

ヘ銘々鋤鍬携へて、船へ飛乗り我が
ちに、簞笥長持挾箱、見る間に碎く
粉微塵、支へる者は用捨なく、八月
八日の事なれば、お釋迦となして丸
裸、何でも甘茶を甜めさせろと、惡
口たら／＼碎いたる後はざんぶり海
の中。桐の簞笥は笹くれて、浪に漂
ひどんぶらこ。金の火鉢はいびつ形、
ひしやけた儘でぶく／＼／＼。

松藏　これぞ親父が禿頭、藥罐が凹ん
で目出度いと、しやん／＼手を打ち、
一同に。

ヘ勝鬨あげて引取つたり。

（トこのうち松藏注進模樣。諸士二、三、
傍へ寄つて、聞く心にて刀を持ちし儘、
左右より詰寄るを、相手にして、宜しく
あつて納り、）

松藏　されども、こちらのお船には、別
條とても御座りませねば、お迎へに參
りました。

ヘ汗を拭ひて控へ居る。

大石　サテハこれまで、領分の民を苛
めし大野九郎兵衞。今日敵を取られし
か。

岡島　それぞ卽ち大祿を貪り居たる不
忠の天罰。

松藏　ハテ心地よい。

皆々　事ぢやなァ。

大石　手前は直ぐさま支度を調へ、後
より出張致せば、其方は立歸り、船場
に相待ち居られよ。

松藏　左樣なら、私はお出でをお待ち
申しまする。

ヘ會釋ながらに、松藏は船場を指し
て立歸る。

（ト松藏向うへ入る。）

ヘ折柄立出る吉右衞門、席を下つて
手をつかへ。

（ト向うより、以前の吉右衞門出て、舞臺
下手へ來り、下に居て、）

吉右衞門　ハツ御母君樣を始めとして、
奥樣御親子四人とも、お支度萬端整ひ
ますれば、此段お知らせ申上げまする。

大石　然らば、主税諸共に、服を改め、
乗船なさん。

岡島　この八十右衞門も泉州まで、大
石氏と御同船。

松野　我々共は、海岸にて。

横川　思ひ／＼に。

六人　立別れん。

岡島　イザ／＼お支度。

吉右衛門　なされませう。
〽勸める用意、大石は館の門を見廻して。
（ト大石、思入れあつて、）
大石　アヽ、御先祖代々我々も。
岡島　晝夜詰めたる。
皆々　館の中。
〽名殘惜しげに見返りて、出で行く影を見る上使。
（トこの中、大石先に、岡島諸士六人ついて、後より吉右衛門、皆々花道へ掛る。此時、上手の襖を明け、以前の脇坂木下出てこれを見送る。岡島、大石の袂を控へ、）
岡島　アイヤ内藏之助殿。御上使樣へお暇乞を。
（トこれにて、皆々舞臺を見送り、下に居て、ヘツと辭儀をなす。）
脇坂　コリヤ内藏。只今奧にて主税にも申置きしが。
木下　用事もあらば、手許まで。
大石　ハツ。重ね〴〵の御厚情。
岡島　有難く存じ。
皆々　奉ります。
脇坂　行け〳〵。
皆々　ハツ。
（ト辭儀をなす。これより下座の送り三重になり、大石先に、皆々向うへ入る。脇坂、木下、これを見送り、兩人顔見合せ、）
脇坂　木下殿。
木下　脇坂殿。
脇坂　武運つたなき淺野家なれど。
木下　ハテよき家來を。
（ト兩人につたり思入れあつて頷くを木の頭、）
兩人　持ちましたなア。
（ト向うを見送る。この模樣時の太鼓にて、宜しく。）

拍子幕

（ト幕引付けると、浪の音にて、繋ぎ、道具出來次第に引返す。）
本舞臺、眞中に丸物の親船。後に廻る事。後へ墨幕を釣込みあり。日覆より、松の釣枝。舞臺裾通り、浪打ち際の布を張り、裃の大臣柱へ取附け、晝心に浪手摺。この上、同じく海上を見たる錣張りの遠見。總て、赤穗海岸の體。船の上に、前幕の松藏立掛かり、風待をして居る見え。浪の音にて幕あく。
松藏　もうそろ〳〵と汐が直つて來たから、支度をするがいゝ。風も變つて追風をうけ、ひらきを乘つて一走り。
○　なんだか雲が冠つて來たが、西の方が切れて居るから、大した降りはあるまいわえ。
□　とかう云ふうち、段々と雲は側へ流れてしまつた。
松藏　そろ〳〵船を直すから、帆綱廻

りを調べて呉りやれ。

○□　チイ、さう御座んす。

○　それはさうと、先刻の樣に、又亂暴をされねえうちに。

□　早く出船に。

兩人　してえものだ。

松藏　それア案じる事はねえ。こつちの船は、お慈悲深い御城代の荷物だから、百姓達がお見遁しすればとて、亂暴なんぞをする樣な、そんな氣遣ひは大丈夫だ。

□　成程なァ。強欲非道な大野面。船を働くこちとらより、色といつちや眞黒で、眼ばかりぴか／＼光らして、無慈悲の上に、知行取りの小前の者を苛め散らかし。

□　なんのかんのと名を付けて、無闇に運上取立て、殿樣にはちつとも納めず、自分の所へ手繰込み、酒色に皆な遣ひ込み。

○　擧句の果は、報つて來て、とう／＼仕舞はどんぶらこ。

□　惡い事は。

兩人　出來ねえものだ。

松藏　コレ／＼、惡い事は云はねえものだ。惡い人でも重役ゆゑ、餘り噂は止しにさんせよ。

兩人　チイ。

（ト留木にて、霞幕を切つて落とし、上手出語りの淨瑠璃になる。）

〽播磨潟、其名赤穗の汐待ち、月に明石や高砂の浦邊はあれど、日の影は、西へ落目に空さへも、晴れぬ八日の雨催ひ。急ぎて磯端を息せき驅來る、百姓共。

（ト浪の音。バタ／＼になり、向うより百姓一、二、先に三階總出の百姓。思ひ／＼の拵へにて出來り、花道にて、）

百姓一　その船出る事、待つて呉らつせえよ。

百姓二　あんでも、出船は。

皆々　待ちな／＼。

松藏　さては、さつきの船同前、亂暴をしにうせたのだな。

百姓一　イヤ／＼、あんで亂暴しべい。

百姓二　御城代樣に御目に掛り。

百姓三　御直談が。

皆々　してえのだ。

〽がなり立つれば、船底より八十右衛門、立出でて。

岡島　ヤア下賤の身にて、御城代に直談なそとは無禮であらう。某よしなに取次ぎ致せば、それにて演說致してよからう。

百姓一　そんなら、お前樣は御城代の。

百姓二　御家來樣で。

皆々　御座りますか。

岡島　手前は岡島八十右衛門と申す會計役の家臣なるわ。
百姓一　ハ、ア、そんだら今日お前様が、領地の者が難儀であらうと。
百姓二　札とお金と引換へて下された。
百姓二　有難いお方といふ事は、わしらも知つて。
皆々　居りまする。
岡島　幸ひ汐も引いてをれば、これへ參つて、何事の談合なるか、申し聞かせよ。
百姓一　それぢやァ、御免を蒙つて。
百姓二　手近な處まで。
皆々　參りますべい。
〽汐の引きしを幸ひと、百姓共は近寄りて。
（ト皆々舞臺へ來り、下に居て、これより下座の合方になり。）
百姓一　外の事でも御座りましねえが、思ひがけねえ御騷動で、殿樣には御切腹さつしやれ、江戸もお國もこんな鹽梅に皆お引拂ひになりまして、御城代樣にやァ、いづれへか行かつしやると聞きましたが、何たる事で御座りますべい。その御混雜のあらつしやるのに、小前の者が通用しねえ札を持つて居ては困るだんべいと、名主どんへ觸れを廻し、金と引換へて與らつしやるなどとは、テモ有難え御城代樣。
百姓二　それでなくても、不斷から下を憐むお慈悲の深い事は、凶年不作の其時は年貢もお取りなされいで、御領分への御救米。こんなお慈悲な御領内に住んで居るのは仕合せなこんだと、他領の者にも羨ましがられ、安穩にして居りましたが、その有難え御城代樣が、今日から何處へか行かつしやつて、後はどうなるこんぢややら。
百姓三　喰ひ潰しになりませぬやう、何でもして稼ぎまして、御恩送りがしたければ、一緒に船へ乘せて與らつしやれて、何處へなりとも、わしら一同お連れなされて與らつしやりませ。
百姓一　お前樣から、御城代樣へ。
百姓二　宜しくお頼み。
皆々　申しまする。
〽砂に頭を擦りつけて、願ふ心の健氣さに、岡島ハタと感じ入り。
（トこのうち、百姓皆々こなし、岡島、思入れあつて。）
岡島　ハテ、健氣なる百姓共。大石氏が、日頃より下を憐む御仁慈に、名殘を惜む眞心は尤もながら、其方たちを他國へ連れては行かれぬぞ。
百姓一　そんならお供は。
百姓二　叶ひませぬか。
（トこれより、床の合方。）

岡島　主君の爲ゆゑ、我々も一度籠城殉死なさんと決心は致せしかど、退いて考ふれは、領地は君の物ならず、また將軍家の物にもあらず。普天の下率土の濱とて、普く日本國中は、皆天朝の物なるに、鎌倉以來武將にて國の政事を執り行へば、わが物顔に銘々が領分なりと、境を爭ひ繩張り致し、貢を受くる。されば今般計らざる瓦解によつて、將軍家へ領地を殘らず返納なすとも、元より預かる地租にして耕す者のあらざるは、借りたる物を損じさせ、返濟なすも同然なり。爰の道理を辨へて、他國へ同船致すなぞと心得違ひは致すまいぞ。さはさりながら、これ迄の恩義を思ひ御城代を慕うて哭れる赤心は忘れは置かぬ、忝い。其儀はよしなに某より大石氏へ通じおけば、銘々自宅へ引取り、農業耕作油斷なく、お國を富まする手段を致せ。

百姓一　そんなら、わしらはどうあつても。

百姓二　お船のお供は。

皆々　叶ひませぬか。

岡島　同船なぞとは、叶はぬ儀ぢや。

ト云ひ諭されて本意なげに、さし俯けば松藏も、氣の毒顔に進み出で。

（ト松藏、前へ出て、）

松藏　人を思へば思はるゝと、大石様が不斷から、百姓を可愛がれば、又向うでも有難がり、子供が親を慕ふ樣に、かうして、大勢打連れだち、名殘りを惜みに出掛けて來るとは、ハテ正直なものだなア。

〇　これといふも、下を憐む御家老ゆゑ。

△　多くの衆が寄り合うて、名殘りを惜んで斯うやつて、同船したいと願ふのも。

松藏　人は不斷が肝心だなア。

百姓一　そんならどうあつても。

皆々　お供は出來ませぬか。

岡島　斯程迄も、其方たちが慕うて哭れる赤心を無下に致すは本意ならず。某よしなに執成して、大石氏へ面會させん。

百姓一　すんだら、お前様のお情で。

百姓二　御城代様のお目に掛かられますか。

皆々　へイ／＼、有難いこんで御座ります。

岡島　大石氏へ申入れん。（思入れ。）暫時、それにて相待たれよ。

ト八十右衞門は感服のあまりに立つて、胴の間へしづ／＼とこそ入りにける。

（ト岡島思入れあつて、船の下へ入る。）

百姓一　コレ／＼、皆の衆。悦ばつしや

れ。御城代様がお會ひになるぞ。
百姓二　お供のならねえのは、是非ねえこんだが。
百姓三　せめて、お目に懸つてお暇乞をすべいと。
百姓四　お願え申したら、岡島様のお執成しで。
百姓五　會はしてやらうと、有難いお詞。
皆　々　どうかお會ひになればいゝが。
（ト皆々、立ちかゝるを、）
百姓一　アコレ〳〵、皆の衆や、御城代様へ失禮があつては濟まぬぞ。氣を付けさつしやい〳〵。
〽出張る頭を押付る。折から船の胴の間より、始終の様子聞取りて、立出る大石内藏之助、それと見るより百姓共、砂に頭をめり込む程、低頭なすぞ殊勝なり。大石彼方を見下して。
（トこの中前幕の大石、ぶつさき野袴、大小にて、出て來り、是にて百姓一、先に、百姓の皆々平伏なす。大石思入れあつて、）
大　石　委細は具さに承りしが、百姓共の健氣な心底、内藏之助感服致す。
百姓一　コレ〳〵皆の衆、御城代様からお譽めのお詞。
百姓二　こんな嬉しい事はなけれど。
百姓三　とてもの事にわしら一同お供に連れて。
皆　々　呉らつしやりませ。
（ト皆々、思入れにていふ。大石、思入れあつて、）
大　石　實に領分の農民は國の寶に異らずと、日頃心に忘れねど、多くの事ゆゑ撫育さへ、行屆かざる政治向き。恨みし事もありなんに、かく退散の期に臨み、慕ひくれしは身の面目。母女房や子供等も、厚き信義を承り、涙に暮れて打悦び、共に同船致させ呉れよと、我に再三勸めしが、耕す者は國の寶、其儘殘して行かねばならず。さはさりながら、其方たちが斯程我を慕ひくれし其赤心は、内藏之助忘却は致さぬぞよ。
〽上と下との隔なき詞に、百姓有難がり。
（ト大石一寸手をつき、辭儀をなすゆゑ。）
百姓一　ア、勿體ない御挨拶。お供がならぬと仰しやれば、是非ないこんだと諦め申すが、どうぞ海上御無難に、泉州堺へお着きになつたら。
百姓二　安心するやう、手紙なりと名主どんまでお出しなされて。
百姓三　安心させて。
皆　々　呉らつしやりませ。
大　石　ヲヽ、いづれ、便宜を致すであらう。
〽しめる涙の汐風や、いつか上げ來る磯の浪。

（トこのうち、浪の音になり、百姓皆々に足下へ汐の來たこなしにて、）

百姓一　ヤ、コリヤもう汐が上げて來たか。

百姓二　エヽ、意地の悪い。

皆々　こんだなア。（ト花道の方へ、後退りに下がる。）

大石　最早、干潟に浪打ちて。

松藏　風も順風となる上は。

大石　出帆致せば、百姓共、名殘惜しくもこれ限り。

百姓一　そんならもう御出帆か。

百姓二　アヽおいとしい。

皆々　こんだなア。

〽差來る汐の磯端に、今は干潟のなく〳〵も、涙ながらに歸れども、かへらぬものはわが身ぞと、見遣る大石、見上ぐる百姓、何と詮方是非なくも、浪におされて歸り行く。

（トこのうち、浪の音烈しく、百姓皆々足下へ汐の來る思入れにて、段々後退りに押されたか、、向うへ入る。この留り、本釣鐘を打込む。これをきつかけに、後の黒幕切つて落す。）

後奥深に、海上。銀張りの遠見。灯入り、八日の月を取付けあり。これと一時に向う正面の所、城の遠見の書割宜しく。大石、百姓を見送り。このうち、船は正面になり、松藏城を見て、このうち、松藏船頭の兩人、碇を上げる事宜しく。

松藏　ヤ向うへお城が見えまする。（ト指さしをする。）

大石　ナニお城が見えしとか。（ト思入れ。大石、正面を見る、）

〽今までそれと見えざりし八日の月の空晴れて、一日に望む赤穂のお城。後に見なして難波路へ、浪に一夜を明石潟。

松藏　お胸の中がおいたはしいなア。

〽共に涙の出汐や、月諸共に遠近の名殘惜しげに伸上り、今日を限りの見納めと、打見遣れども、取揖に馴れし故郷も遠ざかり、今はあいろも分かざれば。

（トこのうち、大石正面の城へこなし、松藏揖を取る。このうち船は段々廻り、裏向きになる。）

大石　盛衰榮枯と云ひながら、數代恩顧の我々が一時に城中明け渡し、浪にさ迷ひ離散なす元の起りは吉良少將。（ト思入れ。）

〽義は磐石の大石が、双眼に涙を浮かめ。

冥府にまします我君の、その御無念は良雄が頓てお晴し申上げん。（思入れ。）

〽懷中より一腰取出し、鞘打拂ひ。

（ト懷より誂への九寸五分を出し、）

かゝる知らせの端なるか、殿御入國の其砌、計らず拜領致せしが、九寸五分ゆゑ心得難く、肌身に添へて所持なせしが、今さら思へば其頃より、扨は深き御賢慮なりしか。（ト思入れ。）

〽殿の片身を打守り〳〵。

世を去りし君が名殘りの涙こそ、打來る汐もわが袖の中。（ト思入れ。）

〽無念の涙はら〳〵と。胸に滿ち來る汐ざかへ、空に音を啼く時鳥、涙血を吐く如くなり。

（ト九寸五分を持ち、宜しく思入れ。此時、日覆にて、時鳥笛を遣ふ。）

やがて雲井へ名を揚ぐる、空に初音の時鳥、今にぞ敵を。

松藏　取揖イ。（ト大きくいふ。）

大石　ハテ、幸先の。

（ト思入れ。九寸五分を持變へるを、木の頭）

兩人　ムヽハヽヽヽ。

〽末世に美名ぞ。

（ト三重。浪の音にて宜しく、）　拍子幕

五月

淀川堤梵天の場
大津裏狼谷の場

（ト日覆の月附、五月に替る。）

本舞臺。一面に淺黄幕。下手に淀川堤と記したる傍に杭。此後藪疊、日覆より松の釣枝、上寄りに切穴、此前よりずつと

上へ浪板。此處に若者一、二、三、四、五、いづれも浴衣の揃ひにて三尺を締め、村の若い衆の拵へにて、梵天を持ち立掛り居る。この中へ專學・無地の着附、輪袈裟、ばつち、尻端より、法印の拵へ、掛螺の貝を持ち立掛り居る見え、馬士唄、水の音、螺の音にて、皆々懺悔をいひながら幕あく。

皆々　懺悔々々六根清淨々々。

專學　ヤレ〱御苦勞。これでこの淀川の水垢離も滯りなく濟んだといふもの。

若衆一　かう村中が打寄つて、毎年五月節句には、この淀川で垢離を取り、村中安全、田畑耕作の實のりを願ふのも、人の爲では御座らぬ。銘々の身の祈禱で御座る。

若衆三　ソリヤごなさんの云ふ通り、祈禱のお蔭には、去年諸方の百姓が出水で難儀をしたと聞いたが、この近邊は出水も無く、無事にして居られるも全く祈禱の皆お蔭。

若衆二　樂にかうして打寄つて、睦み合ふのが何よりだ。これから今日は村中廻り、今夜は悦びに呑み明かしとするがいゝ。

若衆四　その事。給もいらねえから、ぶち殺して大愉快とやらかさう。

若衆五　勝手な事をやらかして、機嫌よく稼ぐが第一。

專學　なんでも四海兄弟だから、下戸上戸の隔てなく、目出度く騷ぐが開化といふもの。

若衆一　噂をしても、咽がぐび〱するやうだ。

若衆三　エヽもう呑みたがるか。氣の早い男だ。

若衆二　晩にしつかり呑ませるから、少

しのうちだ、我慢しねえナ。
若衆一　どうして、我慢が出來るものか。向うの立場で一杯やつて、景氣を付けて出掛けよう。
專　學　なる程、それは結構なお捌きだが、あんまり醉うて祈禱を集めるのを必ず忘れて下さるな。
若衆三　それが何より肝腎だ。十二銅宛、集めても、百軒歩けば一貫二百だ。
若衆一　千軒歩いて十二貫だが、几帳面に寄こせばいゝが。
若衆三　三軒最後で、六文で追拂はれちやア、少々だ。
專　學　そんな相場があるものか。
若衆三　三軒〳〵六文少々。
專　學　エヽ何をいふのだ。
若衆三　サア、そろ〳〵と出掛けませう。
皆　々　懺悔〳〵六根清淨。
（ト右の鳴物にて、皆々、上手へ入る。やはり馬士唄にて、向うより、九郎兵衛、袢纏、ぶつさき野袴、大小にて、深い塗笠を被り、草鞋、旅人の形にて、杖を突き出で來り、後より、おらち、襤褸の姿、古びたる帶を前にして、破れたる扇を持ち、婆乞食にて出で來り、花道にて、）
乞　食　モシ〳〵。御旅人樣。長旅の難澁者。どうぞお手の中を戴かして下さいませ。
九郎兵衛　附くな〳〵。（ト構はず歩き居る。）
乞　食　その樣に仰しやらずと、どうぞ戴かして下さいませ。
九郎兵　エヽ五月蠅い、附くなと申すに。
乞　食　左樣でも御座りませうが、難澁な婆アめで御座ります。御合力を下さいませ。
九郎兵　エヽこ穢い。手の中は無いと申すに。
（ト九郎兵衛、むつとしていふ。耳にもかけず、乞食は九郎兵衛の袂を控へ、）
乞　食　御覽の通り、年寄りまして、長旅の路用に差支へ、難儀な者。お手元御面倒樣でも戴かして下さいませ。
九郎兵　エヽ强情な乞食婆め。手の中は無いと申すに。
（トむごく袂を拂ふ。女乞食はひよろ〳〵として、思はず笠の中を覗き見て、）
乞　食　ヤ、こなたは夫の九郎兵衛殿ぢやナ。
（ト九郎兵衛、女乞食を見て、）
九郎兵　ヤ、さういふそちは。
乞食實はおらち　こなたの妻のおらちで御座る。
九郎兵　南無三。しまつた。
おらち　エヽ情ない、九郎兵衛殿。逃げようとて逃がさうか。こなたはなう〳〵。（ト合方になり。）先月、赤穗離散の時、年寄つた妾を置き去りにして、ようもお前はのめ〳〵と、妾を騙して、

衣類は元より諸道具の金目のものを、長持で船へ運んで其上に、妾を迎へに來ると偽り、其處から直ぐに、隨德寺とやらつしやれた。さうとも知らず、長長と首を延ばして待つてゐたが、お前の行方はそれなりけり。どうしたものと、思ふうち、屋敷を明けよと追立てられ、涙ながらに立退いたが、おまへにどうぞ邂逅ひ、談合なさばどうがなと、行方定めぬ旅の空。路用も盡きて人様の、袖に縋つて合力うけ、飢を凌いで斯う此處で不思議に遇うたは神の助け、夫婦は二世といふからは、いづれ何國の果までも。一緒について行かねばならぬ。あの世へ行つて一つ蓮で、死水取つて貰ひませう。

九郎兵　エヽこ穢ねえ。そんな樣で此處へ連れて行かれるものか。この九郎兵衞もあの時に荷物を船へ積込んで、そちを迎へに遣はさうと、思ふ所へ、金奉行の岡島めに出つくわし、金子騙妄の目が割れ、詮議に會つたその上に、荷物は海へ打込まれ、命から〴〵立退く仕儀。どうして〳〵、一人でせえ路用の金に當惑致せば、手前なぞは連れては行かれぬ。夫婦の緣切り、鳥目の二百文も、其方に遣はすから、何處へなりとも、勝手に行きやれ。

（トおらち、むつとしたこなしにて、）

おらち　イヤ、二百や三百の端錢で、どうして緣が切れよう。郡右衞門といふれつきとした、子までなしたる二人が仲。まだそればかりか、この妾も今はかうした梅干婆アでも、花の盛りの若い時分は、色香も深く、鶯鳴かせた事もあるぞえ。それになんぞや、妾をとらへ、こ穢いの、手を切るのぞと。忘れもせぬ、四十年後、腰元勤めてゐた時分に、こなたに思ひ染められて、貰ひかけられ、花嫁御婚禮の夜に云つた事をこなたは忘れはさつしやれまい。なんぼ水氣がなくなつたとて、今更、捨てゝ行かうとは、そりや情ない。あんまりぢや〳〵。

（トおらち、九郎兵衞に縋り、しく〳〵泣きながら云ふ。九郎兵衞領き　こなしあつて、）

九郎兵　これといふもお家の成行。是非がない。今いふ通りの仕儀ゆゑに、この身一つの置き所さへ、持てあつかつて居る事なれば、金といつては更になく、いづれへなりと仕官せば、早速そなたを呼び迎へ、又もや夫婦一ッになり、今の苦勞を、昔語りに話す事もあらう程に、まアそれまでは、會はぬ昔とあきらめて、何地へなりと行つて呉りやれ。（ト、すかしていふ。）

おらち　エヽ知らぬわいナ。たとへ何といはしやんしても、妾やもう聞きませぬ。水臭いこなたゆゑ、見捨てられるは知れた事。どんな難儀をしようとも、こなたと一緒に行く程に、連れていつて下さりませ。

九郎兵　エヽ情ない。乞食婆め。その小穢い態ァ見やれ。こちを作ひ、ナニ面目に歩行がならうか。

おらち　アイ、たとへ身姿穢なうても、妾やあなたの女房ゆゑ、手に手を取つて睦しう、サァ連れて行かうわいの。

（トおらち立上り、九郎兵衛の手を取る。九郎兵衛、困りし思入れ。）

九郎兵　聞分のない業曝しめ。いづれへなりと勝手に參れ。

（ト振拂ふ。おらち、又袂へすがり。）

おらち　それなら、こなたはどうあつても、妾を見捨てゝ行くお心か。

九郎兵　エヽ人が見ると見つともない。こゝ放せ／＼。（ト振放さうとしても、おらち放れぬ故。）こゝ放さぬと切捨てるぞ。（トわざとキツトいふ。）

おらち　なんだ殺すえ。面白い。殺してお呉れ。妻が夫を慕ふのが、氣に障つたら、殺して見ろ。連れ添ふお前に殺されりやァ、直ぐに妾や化けて出て、こなたを取殺すぞ。

九郎兵　化けるなら化けて見ろ。頭の禿げた古猫婆ァめ。

おらち　なんだと。妾が古猫なら、お前は古狸。古狸ぢや／＼／＼狸爺ィめ。サァ殺せ／＼。

（トおらち、キツトなりて、體を九郎兵衛にさし付ける。九郎兵衛、威しに拔く心にて。）

九郎兵　チヽ聞分けなくば、切り下げ呉れん。

（トわざと大きくいふ。おらちは身を摺り付ける。是非なく刀を拔いて振廻す。おらちは恟りして飛退き、アレエ／＼と逃げ廻る。九郎兵衛は無性に振廻す。此時幕明の大勢、上手より出て、この體を見て、皆々恟りして、）

專學　ヤヽ、人殺しだ／＼。

若衆一　ソレ疊んで仕舞へ。

五人　合點だ／＼。

（ト皆々立掛る。九郎兵衛、留めて、）

九郎兵　イヤ／＼。左樣な者では御座らぬ。ホンノ威しに拔いたのぢや。

おらち　イエ／＼、嘘ぢや。妾を殺すのぢや。助けて下され／＼。

專學　何でも構はぬ。刀を取上げて、簀卷にさつすべい。

皆々　合點だ。

（ト思入れ。水の音、禪の勤になり、皆々在合ふ縄ぐるみにて打つて掛かる。ごつ

ちやの立廻りあつて、トヾ九郎兵衞を切穴へ突落し、ころ／＼して居るおらちを押倒し。）

この間に早く逃げろ／＼。

（ト專學先に、皆々逸散に向うへ逃げて入る。おらち、やう／＼起き上り。）

おらち　人殺し／＼。（トいひながら邊を見て。）危なく斬られてしまふ所、近所の衆が通り掛かり、この身に怪我は無かつたが、九郎兵衞殿がこの川へ辷り込んだる樣子だが。情無い人でも妾の夫。（ト思入れにて、川を覗き込み。）どうやら泳いで來る樣だ。陰に忍んで、深い樣子を。

（ト下手へ木隱れする。水の音にて、九郎兵衞、切穴より、襦袢一枚にてやう／＼道上り、水を吐き、襦袢の水を絞り、邊りを見て。）

九郎兵　エヽいま／＼しいめに會ふものだ。とんだ婆アに出遭うたばつかり、この淀川へ打込まれ、既に命も危い所。兎角命が物種と、衣類大小流して仕舞ひ、やう／＼陸へ這上つたが、胴卷にずつかりと肌身離さぬ五十兩。（ト思入れ。胴卷をほどき、戴き。）これさへあれば大丈夫だ。

（ト水を絞り居る。下手より、おらち伺ひ出て、胴卷を取り。）

おらち　この金、わしが貰つたぞ。

（トひつたくる。恟りして、九郎兵衞、その手を押へて。）

九郎兵　エヽ。それをやつてたまるものか。

（ト思入れ。九郎兵衞取らうとする。おらちに遣るまいと爭ふ。よき程に、雷の音、雨車になる。）

ヤヽ入梅の習ひか、忽ちに空も變つてこの大雨。

おらち　雷樣が鳴らうとも、この胴卷は放さぬ／＼。

九郎兵　うぬ。しぶとい婆アめ。放しやがれ／＼。

（トやはり雷雨の音にて、九郎兵衞は胴卷を取らうとする。おらちは胴卷を渡すまいと爭ふ。立廻り、よろしくあつて、九郎兵衞、胴卷を引つたくり、おらちを蹴飛ばし、上手へ逃げて入る。おらち後を追駈け入る。これにて、知らせにつき、正面の淺黄幕を切つて落す。）

本舞臺。一面に置舞臺を敷く。四間通しの中足の二重。草土手の蹴込み二重の角の所、左右共丸物の杉の立樹。欄間の所、松の釣枝。後一面、切破りの藪疊。二重の上下、杉林。すべて大津の裏手、狼谷の體。後に茶屋場の道具に替る事、宜しく誂へあり。雷の音、雨車にて、道具納る。

（トやはり、雷の音雨車バタ／＼になり、

向うより、以前の九郎兵衞先に、おらち追駈け出て來り、花道にて、一寸立廻り九郎兵衞、おらちを突退け、舞臺二重の上へ來り、兩人、キツト思入れ。〕

九郎兵　エヽ、退いて通しやァがれ。

おらち　イヤ〳〵、金を渡さぬそのうちは、滅多にこゝは通さぬ〳〵。

九郎兵　しみしつこい梅干婆ァめ。この金渡してたまるものか。

おらち　僅かな金なら知らぬ事。問はず語りの五十兩。渡さぬ中は通さぬ〳〵。

九郎兵　エヽ面倒な。もう此上は。

〔ト九郎兵衞、在り合ふ縫ひぐるみにて、おらちへ打つてかゝる。おらち金の入りたる胴巻を取らうといふ立廻り。雨車、雷、嚴しく。禪の勤をあしらひ、兩人立廻りの中、雷はげしく鳴り、九郎兵衞、おらちを引付け、キツト思入れ。此時、正面の藪の中より、白刃出て、九郎兵衞を貫く。九郎兵衞、胴巻持ちし儘、ドウとなる。おらち、悔りして〕

おらち　ヤヽ、人殺し〳〵。

〔ト逸散に下手へ逃げて入る。本釣鐘。凄き合方になり、郡右衞門、五十日鬘、着流し、大小、尻端よりにて、白刃を持ち出て、九郎兵衞と一寸立廻り、切倒して止をさし、刀の血を拭ひ、鞘に納め、九郎兵衞の懐より胴巻を出して、算へ見ることよろしくありて〕

郡右衞　頃も皐月の宵闇に、あやめもわかで入梅の雨、篠つく降りに、雷鳴の物騒がしく、耳の端、金と聞いちやァ退がせねえ。久振りでの五十兩。こいつァ様子が、直つて來たわえ。

〔トにつたり思入れあつて、九郎兵衞の死骸を藪蔭へ蹴込む。胴巻を懐中して、向うへ行掛かる。此時、上下の藪を押分け、上手より岡島八十右衞門、引廻し合羽

袢纏、割羽織、畦目脚半、小紋の股引、草鞋、塗笠をかざし、旅形の侍にて出る。下手より寺坂吉右衛門、赤合羽、饅頭笠、脚半、手甲、一本差、旅形の奴にて、双方より探り寄り、郡右衛門の手を取る。郡右衛門、振拂ひ、行掛かるを、吉右衛門郡右衛門の小鐺を取る。これを振拂ひ、三人思入れ。これより、双盤、竹笛の入りたる合方になり、三人、世話闇鬪の模様よろしくあつて、トヾ郡右衛門は逃れて、花道へ行く。岡島八十右衛門、寺坂吉右衛門、平舞臺せり穴の所へ來り花道を透かし見て、）

岡島　曲者。

（ト聲をかける。郡右衛門、手早く小柄を抜く。）

郡右衛　エイ。

（ト手裏劍を打つ。岡島八十右衛門これを受ける。郡右衛門は逸散に向うへ入る。八十右衛門はこれを透し見る。吉右衛門向うを見込む。知らせにつき兩人の體を舞臺へせり込む。此道具居所にて替る。）

六　月

祇園町祭典の場

日覆の月附、六月に替る。）

本舞臺、二重の蹴込に打返し、茶屋の緣先に替る。釣枝打返し、櫛形の欄間に替る。左右の杉の立樹、柾に替る。後、一面の長暖簾を振落し、軒口へ祇園守りの紋のついたる團子提燈を五つ程下げる仕掛。二重の上の松林、田樂にて、積物の張物に替る。裾通りに、井筒屋といふ雪洞を欄へ取付け、總て祇園町祭典の模樣よろしく。流行唄、囃子にて、この道具留る。

（ト祇園囃子にて、向うより家主、着附袴姿にて、觸書を持ち出で來り、直ぐに舞臺へ來り、）

家主　コレ〳〵主人は居ぬか、誰も居ぬか、お觸が來たぞ〳〵。

（トこれにて、奥より、若者着附着流し、若者、出て來り、）

若者　へイ〳〵。これはお家主樣。ようお出でなされました。まアこちらへお上りなされませ。

家主　イヤ〳〵。わしも祭りで忙しいから、落着いては居られぬが、今日は定めし祭りで忙しからうナ。

若者　へイ。有難う御座ります。今日は座敷はみんな貸切りで御座りますが奥の離室が明いて居ります。

家主　何時も〳〵、忙しいのは結構な事ぢや。一年ましに、この祇園町が盛大になるゆゑ、白朮祭りも立派に出來るといふもの。目出たい〳〵。（思入れ。）この祭りの目出たい中へ、野暮な話が湧いて來て、實に大家はてつばいだ。

若者　モシ、大家さん。野暮な話とは、そりやアどんな事で御座ります

六月

祇園御祭禮

ね。

家主　サ其譯といふのは、定めて噂に聞いたであらうが、先月大津の狼谷で人殺をした者が、この廓へ入込んで居るから、差當り次第に訴へて出ろといふ、茶屋仲間への廻狀だ。この人相書をとつくり讀んで、認印を捺しなせえ。

（ト若者、觸書開き見て、）

若者　淨瑠璃名題、右の役人殘らず、罷出で相勤めまする。（ト思入れ。淨瑠璃太夫、連名役人替名を讀み、心付き、）モシ大家さん。これが人相書で御座りますか。どうか違つて居るやうで御座りますぜ。

家主　觸書に相違無えが、そいつァ祭りの淨瑠璃觸だが、何處で取違へて持て來たか。

若者　大方、お神酒所か自身番で間違つたので御座りませう。

家主　とんだ麁相をしたわえ。あんまり忙がしいので、淨瑠璃觸と間違へたか。（ト思入れ。）イヤ淨瑠璃といへば、アレ〳〵向うへ底拔け家體が練込んで來た。

若者　それぢやァ奧のお客へ、その事をお知らせ申さう。

家主　ハテ何處で廻狀と間違つたか。よつ程、おれもゆるんだと見えるわえ。

（ト家主は向うへ、若者は奧へ入る。これにて渡り拍子になり、向うより業平、前茶筌、天鵞絨張り、錦の織物衣裳小松引の業平の拵へ。內侍九重、下げ髮、同じ織物衣裳の侍女にて出る。後より、太郎又、次郎又、すつぼり鬘、切下げ、綸子の石持、仕丁形、仕丁烏帽子、脫掛けにて、長柄の傘沓臺等を持ち、此中へ、世話役、好みの着付、裁着にて、大團扇を持ち、辯次、着付、肌脫ぎ裁着にてこれを手を引き、此後より、新相中、着附尻端折り、後見にて、祇園町と紅染にしたる揃ひの手拭を被り、一人宛、附添ひ、大きな團扇を持ち出る。此後より、淸元太夫、三味線、羽織袴にて、後見附添ひ出る。其後より、底拔け家體へ、囃子連中、袴着流しにて入る。囃子をしながら出る。ずつと後より、以前の家主、拍子木を持ち出て來り、この人數、舞臺へよろしく居並び、よき程に、家主拍子木を打つ。これにて鳴物打上げ、淸元の淨瑠璃になり、）

〽萬代をひく〳〵や小松の深綠、替らぬためし妹と脊の、睦まし月の古事を、今又こゝに新たなる、祇園祭りの神いさめ。

（トこれにて、業平、內侍、仕丁太郎又、次郎又、よろしく居並び、業平は中啓、內侍は小松を入れし燈籠、太郎又は沓臺、次郎又は長柄の傘を持つ。）

〽抑若菜を進むる事、天暦四つの御

代の春、女御安子の奉る七に數添ふ十二種の色競ぶなる若菜人。つれて來つれて春の野に、若菜摘むてふ袖袂、若紫の花衣、君の祝して一奏。

（トこのうち、四人よろしく納り、業平、前へ出て、）

〽いざさらば立舞ふ袖を飜へし、時の調子の越天樂。色も替らぬ老松や、紅梅殿の香に愛でて、舞樂の音色、春鶯囀の聲すみ渡る萬歳樂。妙なる調曲とかや。

（トこのうち、業平、舞の模樣の振事よろしくあつて、納まる。こゝへ太郎又、次郎又出て、）

〽今日の御幸の御供先、かの林間にあらねども、ぐつと一杯呑む酒に、顔もほのめく若紅葉。右と左に桃櫻。連なるわしもむくつけな。戀路の道は白張の、烏帽子も氣輕、仲間同士、飲めや歌へや、神をいさめの神樂歌。ちよつとお間の盃に、さいつさゝれつ千鳥足。一寸先は、闇の夜の、浮氣は色の仇競べ。中へひよつくり酒機嫌、割込み醉に浮かれ節。

（ト兩人よろしく振あつて留る。此中へ次郎又、辨次をつれ出て、）

〽男松一人で女松を引いて、やがて小松の手を引連れて、鈴や壺々風車、廻らば廻れ春の山、衞士の遊びの面白や。

（ト次郎又、辨次を相手に振あつて納まる。内侍、業平を連れて出て、口說の振になる。）

〽目見榮染めにしたびらこに、嬉しと心淸白の菘思ひを戀すてふ、心根芹を水莖の、跡に五行の筆菫に染めて土筆、處の蘩便りにも、いつ葵との豫言も君と子の日の假枕、夜半の契も十返るや、睦ましいではないかいな。

（ト業平、内侍、口說の振よろしく納まる。次郎又、太郎又、出て、）

〽今度、此度東の御供、だてを駿河の三保の松、やがて箱根の山坂。合點ぢや、危險ない。合點ぢや。小褄きりゝと引上げて、しとゝん／＼並よく揃ふお先みえ。

（ト太郎又次郎又、拍子の振よろしくあつて、こゝへ内侍業平出て、皆々居並び振になる。）

〽傘をさすなら春日の山よ。氣を紅葉傘、白菊を、雪と三ツ星月日傘。ソレ開いた。梅鉢傘の七ツ梅。人目せき傘。誰が袖傘え。鐘も撞木の當り傘。目出度さよ。

（ト此中、皆々、長柄の傘を使ひよろしくあつて、業平東下りの見えにて納まる。）

〽國も豐に、秋津洲の、千代に八千代
にさゞれ石の、春木を祝す御祭典。
榾の榮えぞ目出度けれ。
(トちらしの留り。家主出て、拍子木を
打つ。これにて又渡り拍子になり、この・
人數殘らず庭拔について上手へ入る。こ
の中奥より、前幕　郡右衞門、羽織着流し
にて、茶屋女房おかぢ、好みの着付にて、
附添ひ出て來り、お竹、おのぶ、茶屋女、
酒の肴の道具を持ち出て來て二重へ毛氈
を敷き此上へ宜しくすまひ、酒盛をしな
がら、捨白にて祭りを見る事よろしく。
流行唄の合方にて。)
郡右衞　イヤ流石は郡の祇園町。どれも
〳〵衣裳の張込み、中々立派に祭りが
出來たわえ。
おかぢ　それに、今年は、濱町の家元さ
んが來ましたゆゑ、猶賑かで御座りま
す。これから、追々地走りや俄も續い
て參りませうから、こゝで御見物なさ
れまして、ごゆつくりと上りませ。
お竹　隨分ともに種々な。
おのぶ　よい趣向も御座んせうわいな
ア。
郡右衞　奥と違つて店先で祭りを見なが
ら酒宴致すも、氣が變つてまた格別。
おかぢ　そのうちにお馴染のおかのさん
もお源やお鶴と手古舞にて、氏子廻り。
もうおしつけ、戻りませうわいなア。
郡右衞　イヤ〳〵、おかのは居らずとも、
別嬪のお竹やおのぶに酌をさせ、酒さ
へ呑めば、望みは無いわさ。
お竹　アレ又、大野さんの御戯談ばつ
かり。
(トこのうち、おのぶ向うへ思入れあつ
て。)
おのぶ　アレ〳〵向うへおかのさんが。
(トこれを聞き、お竹も向うを見て、)
お竹　ホンニ向うへ見えるわいなア。
郡右衞　ナニ、おかのが參りしとか。
おかぢ　早くこゝへ呼んでお上げ申し
ナ。
兩人　畏りました。(ト向うへ思入れあ
つて、)もしイ〳〵。
(ト呼ぶ。これにて、鳴物入りの、賑かな唄
にかはる。向うよりおかの、好みの着付け、
肌脱ぎにて、牡丹の花笠を、せなに掛け、
牡丹の花の扇を持ち、脊金組の草鞋にて、
襟子おつるお源、いづれも若衆髷形、扱
帶、肌脱ぎ、牡丹の花のついたる扇を持ち、
藝妓手古舞形にて出る。後より、踊の師
匠、出て來る。花道にて、)
師匠　モシおかのさん、不斷と違ひ、
お祭りゆゑ、群衆の中を連出して。
おつる　かうして氏子を廻るのも、氣が
晴れるぢや御座んせぬか。
お源　モシおかのさん。どうなさんし

た。ちつと浮き/\しなさんせ。

おかの　廓へ來てから、三月越し。座敷へ出ても碌々に馴染も薄い妾ゆゑ、お前方を頼りにして、若衆姿で手古舞に、怖々ながら出たもの丶、はねつ返りのお轉婆者。もしお叱りをうけようかと、それぱつかりが氣苦勞で、びつしより汗になつたわいなア。

師匠　似合はなければ兎も角も、お前が一番男顔ゆゑ、よく似合うたる手古舞姿。

おつる　さうした所を、大野さんに、早う見せて上げなさんせ。

お源　待兼ねて御座んせうわいナ。

おかの　アレ、嬲つてはいけぬわいなア。

（トこのうち、舞臺へ思入れあつて、）

師匠　モシ見なさんせ。おかのさん。井筒屋に御座んすのは。

おつる　大野さんで御座んすぞえ。

お源　早う行かうぢや御座んせぬか。

（トおかの、思入れあつて、）

おかの　若衆姿で主に逢ふのは、妾や何だか恥かしいわいなア。ア。

師匠　何はともあれ、おかのさん。

二人　井筒屋へ行かうわいなア。

おかの　ホンニさうしようわいなア。

（ト矢張、右の鳴物にて、四人舞臺へ來る。舞臺の皆々、四人を見て、）

お竹　よい所へおかのさん。最前から、大野さんが。

女兩人　お待兼で御座んすわいなア。

おかの　主が御座んしたと聞いた故、早う戻らうと心は急けど、氏子廻りに、手打があつて、思はず遲うなりました。

おかぢ　何はともあれ、大野さんのお傍へ、早う行くがよいぞや。

おかの　おかみさん、御免下さいまし。

（ト二重へ上り、郡右衞門の傍へ住ふ。おつるもお源も二重へ上り、始終合方。）

師匠　大野さん。

兩人　ようお出でなされました。

郡右衞　今年は都の祇園祭りも、立派に出來たといふ事ゆゑ、お源やおつるの若衆姿を見ようと思つて、出掛けて來たのぢや。

お源　それはお人が違ひませう。あなたの仰しやるのは。

おつる　おかのさんの若衆姿を見に、お出でので、御座りませう。

師匠　コリヤ、お二人に當てられなさつて。

おのぶ　序に手の筋で御座んせうぞえ。

お竹　ホンニさうでござんせうわいなア。

郡右衞　イヤ/\おかのの手古舞は、餘り色氣がないやうぢや。

おかの　アイ妾や色氣が薄いゆゑ、どう

でお氣には入りませぬわいなア。

（トおかの、むつとして傍を向く。おかぢ、こなしあつて、）

おかぢ　ハテ口でけなして心で譽めるは、そりや誰しも覺えのあること。大野さんとおかのさんとは、いはずと知れた深い仲ゆゑ、痴話や口說はお廢し〳〵。

おかの　あんまり、主が當付けて、妾を嬲らさんすゆゑ。

おかぢ　それが互の樂みぢやもの。お前も嬲つて上げなさんせ。

郡右衞　イヤもうおれなぞは無骨者ゆゑ參つても嫌味を聞いて歸るのみだ。

おかぢ　コリヤさうでござりませう。あなたが餘り浮氣ゆゑ、もし取られはせまいかと、それで妬くのでござんせう。

お源　ホンニおかみさんのお云ひの通り、大野さんは浮氣ゆゑ。

おつる　何時でも、おかのさんが案じてばかり居なさんすぞえ。

郡右衞　そなた衆まで同じ樣に、とかくおかのの贔負を致すが、此上は其方たちを酒の相手で降參させるぞ。

お竹　ホンニそれがよう御座ります。

おかぢ　こゝは店先。奥の離室へお座敷を變へて、わつさり。

郡右衞　呑み直しと致さうわえ。

おかぢ　そんならお前方も御一緒に。

師匠　併し、折角のお樂みを。

お源　妾らがお傍にゐては、大野さんやおかのさんの。

おつる　お邪魔をしては濟まぬわいナ。

おかの　イエ〳〵、邪魔では御座んせぬ。一緒にござんせいなア。

郡右衞　そんなら、御內儀。萬事よろしく。

おかぢ　サア、お出でなされませ。

（ト流行唄。祇園囃子になり、郡右衞門、おかの、おかぢ先に、この人數殘らず奥へ入る。やはり右の唄にて橋懸りより、前幕の岡島八十右衞門、野袴、ぶつさき羽織、大小にて、編笠を被り、寺坂吉右衞門、奴形、一本差にて、出て、八十右衞門、編笠を取り、邊へこなしあつて、）

岡島　只今あれより見受けし所、これに居りし侍こそ、正しく彼は大野郡右衞門。

寺坂　不忠不義の大野とあれば、奥へ踏込み、下郎めが引きずり出して御覽に入れん。

（トキットなつて立掛るを、八十右衞門、留めて、）

岡島　ア、イヤ、暫く待ちやれ。事荒立てゝ入込みなば、家內の者も動搖なし、迷惑を致すは必定。遊里の席ゆゑ、何事も穩便に致すがよい。

寺坂　でも、不義放埒の郡右衛門ゆゑ。

岡島　猥りに事を致しなば、無法に相成る。ハテ、控へいと申すに。

寺坂　見す〳〵知れし郡右衛門。エヽいま〳〵しい。

（ト無念のこなし。八十右衛門、こなしあつて、）

岡島　幸ひ當地の祭典なれば、客の積りで當家へ入込み、とくと實否を糺せし上。

寺坂　然らば下郎が申込みませう。（ト思入れ。こちらへ來り、）誰も居らぬか。亭主〳〵。

（ト奥より、以前の若者出て、八十右衛門吉右衛門を見て、手をつき、）

若者　ヘイ〳〵、お客様で御座りますか。

寺坂　これなるお旦那が、當家の座敷を暫時借受け、一獻召上りたいと仰しやれば、奥の座敷へ案内しやれ。

若者　それは有難う御座りますが、生憎昨日よりしけで、お肴が揃ひませぬが、それで御承知ならお上りなされませ。

（トこれを聞き、八十右衛門思入れあつて、）

岡島　イヤ〳〵別して肴に望はない。有合せにて一獻致せばよいのぢや。

若者　左様なら、お上りなされませ。

寺坂　下郎は店にて、お待ち受け致せば、岡島様には、先づ〳〵奥へ。

岡島　ハテサテ、それはいらぬ遠慮。遊里の場處に禮儀はいらぬ。そちも一緒に來やれ。

寺坂　左様なれば仰せに任せ、御免を蒙り、下郎もとも〴〵。

岡島　サ、案内しやれ。

（ト八十右衛門、二重へ上り、吉右衛門、八十右衛門の草履を持ち、自らの草履を一ツに懐中するを、若者見て、）

若者　お履物は、私がお預かり申しませう。

寺坂　どうやら、危ない預けもの。

岡島　ハテ、高が履物。氣遣ひないわい。

若者　サアかうお出でなされませ。

（ト祇園囃子になり、向うより鳶の者長吉祭りの絆纏紺の股引、腹掛、三尺にて、銀鎖の莨入れを下げ、花笠を持たせ、前幕のおらちの婆アを引連れて出る。これを半次、同じ拵へ、鳶の者にて、止めながら出て來り、）

半次　コレサ〳〵長吉。腹の立つのは尤もだが、野郎ならいゝが、高が年寄りだ。勘辨してやるがいゝ。

長吉　イヽヤ。誰が挨拶でも、どうして了簡がなるものか。祭りの場處でこい

つ等に蛭蜻蛉を働かれちやア、氏神様へ
言譯が無え。サアおれと一緒にうせア
がれ。
半次　ハテ、いゝぢやねえか。これが
物を取つたといふぢやなし、ホンノ手
を掛けたといふ分の事だけ。今日は助
けて遣れといふに。
長吉　嫌だ〳〵。こんな奴を見逃すと、
どんな事をするかも知れねえ。とても
の事に、叩込んで、突出してやらにや
腹が癒えねえ。
半次　こんな婆さんを相手にするは、
大人けねえ、了簡して助けてやれ。
長吉　嫌だ〳〵。了簡ならねえ〳〵。
（ト右の鳴物にて、長吉、おらちを引ずり
舞臺へ來る。この時奥より、おかぢ出で
來り、この態を見て、）
おかぢ　オヤ、長吉さんに半次さん。お
婆さんを捕へて、コリヤアどうするの
だえ。
長吉　お上さん、聞いておくんなさ
い。わつちの下げてゐる莨入れを、す
んでの事にこいつが攫はうと仕舞ひま
したから、叩き締めてやらうと思ひ、
引きずつて來やしたのサ。
半次　實は、損料で借物で御座ります
から、それで長吉が大腹立ちで御座り
ます。
おかぢ　オヤマア、それは大それた、と
んだお婆アさんだねえ。
長吉　全體、こんな奴が多いから、う
つかりすると、羽織まで脱がされるの
で御座りまする。とてもの事に、打つ
ちめてやらう。
半次　ハテ、待てといつたら、待ちね
えナ。もし、打ち所でも惡くつて、殺
したらどうする氣だ。
若者　コウ半次。何ぞといふと、手前
は人を庇やがるが、えてこんな奴が、
履物を盗んだり、ちよつくら持ちをす
るのだ。サア乞食婆アめ。うぬ、どう
するか見やアがれ。
（ト片肌ぬぎになり、立掛るを、半次留め
るを、長吉、突きのけ、立掛るを、おら
ち、長吉を留めて、）
おらち　そのお腹立は御尤で御座ります
が、まア〳〵待つて下さりませ。
（ト合方になり、おらち思入れあつて、）
何をお隠し申しませう。この婆アめも、
腹からの非人でも御座りませぬ。これ
でも元は、播州赤穂の淺野の家來で御
座りますが、當春の騷動より、殿樣に
は御切腹、御家は斷絕、城は上げられ、
浪人致すその上に、連合ひには見捨て
られ、泣きの涙で、都をさし、遙々參る
途中にて、淀川堤で夫に出遇ひ、悦ぶ
甲斐も情なや、狼谷で連合ひは人手に

掛り、胴巻の金まで取られ、敢無い最期。既に婆アめもその場にて切られる所を、漸く逃延び、この郡へ參りまして、所々方々袖乞ひして歩きましたが、困るにつけ、あれがあつたら路頭にも迷ふまいかと、出來心で盜まうとは致しましたが、馴れぬ事ゆゑ此しだら、これから心を改めますから、お情お慈悲にお上樣、お救けなされて下さりませ。

（トおらち、始終思入れにていふ。おかぢ、氣の毒にといふ思入れ。長吉、牛次こなし。このうち奧より、郡右衞門出かゝり、おらちを見て、こなし。暖簾の中へ密と入り、立聞きの事宜しく。）

長吉　涙交りに哀れつぽく、言譯するのは、こいつ等の通り相場だ。

牛次　以前は何處の士族だなぞと、こいつアちつと受取れねえ。

長吉　そんな言譯を聞くより、ぐるぐる巻にふんじばり、しよびいて行かにやアならねえのだ。

（ト又立掛るを、おかぢ留めて。）

おかぢ　まア〳〵、待たしやんせ。このお婆アさんの今の話、滿更嘘でもないやうな。仔細を聞いたその上で、どうなりと仕樣もあらうから、妾に預けておくんなさいナ。

長吉　そりやア、お上さんのお云ひなさる通り、そりやどうでもなりませうが、餘り人をコケにするから。

牛次　ハテ、いゝぢやねえか。お上さんの挨拶だ。お任せ申して置くがよい。

おかぢ　さうして、小母さん、お前には子供衆がないのかえ。

おらち　ハイ、そのくせ、當年廿九になりまする郡右衞門といふ伜が居つたら、妾もかうした難儀は致すまいと、明暮神や佛樣をお願ひ申して居りまするが生死の程も知れませぬが、どうか伜に邂逅ひ、顏見て死にたいと存じまして、うろ〳〵して歩きますが、世に便ない身の上を、お上さま。不便と思つて下さりませ。

（ト此うち始終思入れにていふ。おかぢこれを聞き、さてはといふ思入れありて。）

おかぢ　そんなら大野の。

おらち　エヽ。

（ト恟り、思入れ。おかぢ、氣を替へて、）

おかぢ　大方、今にそのお方に、おつつけめぐり遇はうから、短氣な心を出さないで、時節を待つて居なさんせ。

おらち　有難う御座りますが、所詮會ふ事も出來ますまいから、かうした難儀をしようより、早く死にたう御座ります。

おかぢ　そんなに力を落さないで、めぐり遇ふのを樂みに、氣を寛りと持つて

おゐでよ。（トおかぢ思入れあつて、長吉に向ひ、）モシ長さん。腹も立たうが、今聞く通り、年を取つて便りも無く、出來心でしたといふから、今日の所は妾に免じて、堪忍して遣つてお呉れナ。

長　吉　この面の憎い婆アのくせに晝鳶。只は置かねえ所だが、お上さんの挨拶ぢや、仕方がねえ。

牛　次　今日は見逭して、助けてやるから、此後きつと窘めよ。

おらち　イエ、もう此後は心を改めまする。

おかぢ　それで妾の顏も立ち、いはばお前の仕合せだァね。

長　吉　とんだ婆アに引懸り、お上さんの御厄介になつた。ドレ、一廻り、廻つて來ようか。

（ト立掛かるを、おかぢ留めて、）

おかぢ　まアいゝやァね。機嫌直しに一杯やつておいでナ。

牛　次　有難う御座りまする。今日は祭で騷がしいから、此頃に寛り上つて、馳走になりませう。（思入れ。）そんなら、長公。

長　吉　お上さん、大きにおやかましう御座りました。

牛　次　ドレ、一廻り、廻つて來ようか。

（ト入る。）

おらち　あなた様のお情所で助かりました。この御恩は、死んでも忘れは致しませぬ。

おかぢ　たとへ貧に迫ればとて、惡い心を持たぬやう氣を付けたがよいぞえ。

おらち　キット心を入替へまする。

（トこのうち、郡右衞門、暖簾を伺ひ居て、思はずおらちと顏見合はせ、郡右衞門悄りして、引込み、おらち、立上り、）

今のはどうやら、わが子の樣子。

（ト奥へ行かうとするを、おかぢ隔てゝ、）

おかぢ　ハテ、多くの人の入込み場所。廣い世界に似たお方は、幾等もある。滅多な事いはぬもの。

おらち　それでも、今のは。（ト又立掛るを。）

おかぢ　それはお前の心の迷ひ。氣を落着けて、勝手へ廻つて、出來合ひのお赤飯でも食べてお出でナ。

おらち　種々と御親切に有難う御座りまする。左樣なれば、お詞に甘へまして、御馳走になりまするで御座りませう。

（トおらち、嬉しさうに、下手の庭口へ入る。おかぢ、おらちを見送り、）

おかぢ　アヽ、嘘か實か知らねども、あのお婆さんの身の上話。聞けば、どうやら氣に懸かる。淺野樣の御家來で、大野さんのお連合ひにて、郡右衞門さんといふ伜があると、聞いて見れば、もし

や、奥に御座んす郡右衛門さんの母御さんではあるまいか。今の素振りは確かにそれと、（ト思入れあつて、氣をかへ。）ドレ、功徳をして遣りませうか。

（ト唄になり、おかち、奥へ入る。引違へて、以前の郡右衛門出て來り、邊へ思入れあつて。）

郡右衛　久しく酒を呑まねえせえか、餘り醉うて切ないから、祭を見ながら醒まさうと、出合ひ頭に思はずも、暖簾越しに様子を聞けば、おれを尋ねてお袋が、あんな婆アで彷徨ひ來て、他の物へ目を掛けて、身の言譯を長々と、話すを聞けば、而も五月五日の晩、金に眼も闇まぎれ、非業な刄に殺したは、現在己れが親仁であつたか。知らぬ事とて。（ト思入れ。邊へこなしあつて。）ム、。

（トちつと思入れ。この時、奥より以前の岡島八十右衛門、寺坂吉右衛門伺ひ居て、前へずつと出て。）

岡島　郡右衛門殿。久振にて面會致す。

（ト郡右衛門、八十右衛門を見て。）

郡右衛　貴殿は岡島八十右衛門殿。ハテ面目無き御面會。

寺坂　オヽ、人非人の御身でも、定めてこれは面目無からう。淺野の御家の高祿取り、御家老職の御子息ゆゑ、年若なれど江戸表で、御留守居とまで登用せし、殿の御恩も打忘れ、婬酒に魂奪はれて、殿御刄傷の其日にも、邸にとては在り合さず、藝妓狂ひに現を拔かし、回り回つて、都にて遊里へ立入り、女狂ひ。亡君の御無念を晴らさうとも思はず、酒に性根を奪はれて、不義放蕩の腰拔侍。

（ト吉右衛門、キツトいふ。郡右衛門、吉右衛門を見て。）

郡右衛　誰かと思へば、そちや吉右衛門。詞が過ぎる。殿の御鑑にて高祿を頂戴せし郡右衛門。足輕風情が口輕く、無禮過言の小身者。口出し致さず、控へて居れ。

寺坂　イヤ、控へませぬ。二言目には、足輕の、小祿者と仰しやれど、殿より御扶助頂戴せし、御恩に上下は御座らぬ。殿御最期の其日より、小身なれど吉右衛門、何卒殿の御無念を晴らさんと、小祿者の下郎でさへ、心を砕き、折がなあらばと、義は金鐵。それに何ぞや、其許が、大祿取りの御身分で、主君の御無念を晴らさうとも思はれず、戯け過ぎたこの行ひ。足輕なれど吉右衛門、忠義に凝つたる切先にて、不忠の成敗致して呉れん。

（ト郡右衛門、默つて俯向き居るゆゑ、吉右衛門、刀を持ち、キツトいふ。）

岡島　コリヤ吉右衛門。先づ〳〵、控へい。
寺坂　テモ、不忠不義の大野ゆゑ。
岡島　ハテ控へいと申すに。
（ト思入れ。八十右衛門キットいふ。吉右衛門是非なく、「ねイ」と控へる。八十右衛門郡右衛門の傍へ寄り思入れあつて）イヤなに、郡右衛門殿。ちと其許にお譲り申したい品が御座るが、何と求められぬか。
郡右衛　如何なる器物か存ぜぬが、身持不埒の手前ゆゑ、貯へとても御座らぬが、望む品なら、随分とも申受けまいものでも御座らぬ。
岡島　スリヤ、御懇望の品なれば、求めめさるか。
郡右衛　シテ手前へ、お譲り下されんと仰せられるその品は。
岡島　他でも御座らぬ。これで御座る。
（ト懐中より、前幕の小柄を出し、郡右衛門に見せる。郡右衛門 思はず、見て、恟りして、）
郡右衛　ヤ、この小柄は。
寺坂　なんと覚えがござらうがナ。
（ト吉右衛門、キットいふ。郡右衛門、思入れ。八十右衛門は小柄をさし付け、三人思入れ。合方、キッパリとなり、）
郡右衛　そんなら五月五日の夜。
岡島　降り出す雨もさみだれて。
寺坂　入梅明けなるか雷鳴に。
郡右衛　暫し一樹の雨宿り。
岡島　あやめも分かぬ、眞の闇。
寺坂　光る劒の稲妻に。
郡右衛　刃は其身にかゝるとも。
岡島　知らで白刃の人殺し。
寺坂　なんと覚えがあらうがナ。
郡右衛　ヲヽ。
（ト郡右衛門、術無き思入れ。八十右衛門郡右衛門の襟がみを取り、ぐつと引付けて、）
岡島　アノこゝな。人非人めが。
（ト八十右衛門、キット思入れにていふ。合方になり、）
コリヤやい。汝等親子は、御主君より数代高禄頂戴しながら、色慾に心迷ひ、不忠不義を働くゆゑ、その天罰の脱れなく、現在親を伜の身で、切害致すは自業自得。而も其折り某が通り掛かり、曲者待つたと聲を掛けしを、知るべと打ちし手裏劍こそ、君御在世でまします折、汝に拝領致させたる祐乗の作の狂ひ獅子、その彫なせし小柄の目印、わが手に入るも悪事の露顕、逃れはあるまい郡右衛門。不忠の成敗、かう〳〵。（ト思入れ、扇にて打据ゑる。）何と骨身に應へたか。
寺坂　コリヤ郡右衛門、よく聞かれよ、

この吉右衛門は吉田組の足輕なれど、亡君御在世の其砌より、受けし御恩の有難く、折がなあらば、上野めを討果さんと、(思入れ。)先頃まで、身に劍菱や七ッ梅の菰を纏つて、非人となり、橋の袂へ野宿して、敵の樣子を伺ひしが、用心嚴しく寄付けず、登城の折は人數を增し、迂濶に手出しもならぬゆゑ、及ばずながら下郎でさへ、艱難致すも忠義のため。それに御身は、功もなく數年君祿頂戴なし、榮燿榮華は致しながら、御恩を報ずる所存もなく、藝者狂ひに魂奪はれ、不忠の報い天罰の、忽ちその身に廻り來て、母は非人となり下り、袖乞ひなして露命をつなぎ、父は悴の手に掛かり、非業な最期を遂げたるは、これ皆天命、是非もなし。殘る悴は下郎めが刀の錆に致して呉れん。覺悟極めてそれへ直れ。

(ト吉右衛門、立上り刀の柄へ手を掛け、キツトなるを、八十右衛門制して、)

岡島　コリヤ吉右衛門、卒爾致すな。かゝるうつけな人非人を、武士の刀で成敗なさば、却つて穢れを受くるの道理。恥を思はば武士らしく、切腹なして果つるであらう。

寺坂　仰せでは御座りまするが、下衆下郎の小身者に、これ程迄も辱かしめられ、口惜しいとも思はずに、なに面目に居られませう。性根の腐つた此方ゆゑ、侍らしく潔よく、切腹なす所存はあるまい。臆病未練な根性ゆゑ、いつそ下郎が、たつた一討ち。

(ト又立ちかゝるを、八十右衛門、吉右衛門を留めて、)

岡島　ハテ成敗は、まア待ちやれ。

寺坂　イヤ、いま〳〵しい大腰抜けめ。

(ト吉右衛門、悔しさうに控へる。八十右衛門、思入れあつて、)

岡島　斯程迄に恥しめたれば、最早や旅宿へ立歸らう。

寺坂　でも、此奴めを。

岡島　犬に劣りし人非人。討果しては、刀の穢れ。此奴は此儘、打捨て置きやれ。

寺坂　何さま、斯樣な者と同席致すは御身の穢。これより直ぐさま貸座敷へ。

岡島　片時も早く立歸らん。

寺坂　コレ若い者は居らぬか。草履を出せ〳〵。

(ト奥より若者、草履を持ち、出て來り、)

若者　お客樣、もうお歸りで御座りまするか。

岡島　ヲヽ世話であつた。(思入れ。)代料は何程に相成るか。これにて拂ひを遣はすぞ。

若者　ヘイ〳〵、有難う御座ります。

只今これへ持參致しました。
(ト若者、懐より勘定の付けを出す。八十右衛門、取上げ見て、)
岡島　スリヤ代料は一兩でよいナ。
若者　ヘイ左樣で御座ります。
(ト吉右衛門、これを聞いて、)
寺坂　テモ高い勘定だ。
岡島　ハテ、遊里の酒はかうしたものだ。(ト思入れ。懐中より、金を出して若者に渡す。)然らば寺坂。
寺坂　岡島樣。(思入れ。)ア、とはいへ不忠の大野めを。
(ト行きにかゝるを、八十右衛門隔て、)
岡島　ア、斯樣な輩は馬耳東風。
寺坂　それぢやと申して、みす〳〵に。
岡島　ハテまア、一緒に參れと申すに。
若者　左樣なれば、お客樣。
岡島　若い者、世話であつた。
(ト唄になり、兩人、郡右衛門へ思入れあつて、向うへ入る。郡右衛門、見送り邊りを見廻し、以前の小柄を出し、ぢつとこなし。これより誂への合方になり、若者、思入れあつて、)
若者　妙な客もあるものだ。碌々料理も喰はず、代を拂つて歸るといふは、變つた衆もあるものだ。
(トこなしあつていふ。郡右衛門、さし俯いて居るゆゑ、若者、郡右衛門の傍へ來て、)
モシ旦那樣。おかのさんが、先刻からお待兼ねゆゑ、奥へお出でなされませぬか。
郡右衛　イヤ身共はこれに用事もあれば只今參るというてお吳りやれ。
若者　ヘイ〳〵畏りました。
(ト若者、奥へ入る。郡右衛門、邊りへ思入れあつてぢつとこなし、以前の小柄を取上げ、見て、)
郡右衛　若氣の至りといひながら、色欲ゆゑに非道をせし、其天罰が報い來て、なせる惡事も露顯なし、直な小柄も身の錆に、拔差しならぬ亂れ燒。彫の色畫も狂ひ獅子。元はといへばこれも何ゆゑ、亡君の御罰がこの身に報い來て、所もあらうに祇園會の祭の場處へ、身の恥を曝すがこの身の罪亡ぼし。人の見ぬ間に、さうぢや〳〵。
(ト頷づき、諸肌を脫ぎ、件の小柄を腹へ突立つる。バタ〳〵になり、暖簾の中よりおかの先に、おげん、おつる、お竹出て來り、)
おかの　ヤ、コリヤ何ゆゑに郡右衛門さん。
おげん　御自殺なされて、この苦痛。
おつる　どういふ譯で、御座りますか。
おかの　お前は、氣でも違はしやんしたかいなア。

郡右衞　氣も違はねば、心も確か。この郡右衞門が、切腹は不忠不孝の言譯だ。

三　人　何といはしやんす。

（ト竹笛入りのやうな合方になり。）

郡右衞　色に溺れて、御主人が當春の御馳走役、吉良家へ賂ひ遣ふべき金子を、途中で虛妄なし、遣ひ込んだるそれゆゑに、殿中の手違ひも、元はといへば身共が仕業。その天罰にて、現在の親とも知らず、殺したる處の名さへ狼谷。廻る因果は修羅道の、母は餓えて我鬼地獄、非人となつて此店へ彷徨ひ來り、先刻の話。せめて此身の罪亡ぼし、人立多き祇園町、祭の場處で切腹も、惡事をすればこの通りと、世の見せしめにする心。おかのも由なき身共に連れられ、京三界で藝子の勤め、定めて江戶でお袋が、路頭に迷うて居るであらう。心を改め江戶へ歸り、親に孝行盡して吳りやれ。思ひ出す日がおつたらば、只一遍の回向を賴む。云置く事は、はやこれまで、笛かき切つて、苦痛を遁れん。

（トこのうち、折々猿鷄の太鼓をあしらひ、郡右衞門、小柄へ手を掛ける。おかのその手を押へ。）

おかの　マア〳〵待つて下さりませ。其お身にさせたのも、みんな妾がなせる業。思へば先月月始め、六月の祭につき、少しお金が入用ゆゑ、どうか都合はなるまいかと、お前に相談を掛けし後、お節句の夜の九つ過ぎ、五十兩といふお金を拵へ、持つて來て下さんしたゆゑ、どうして都合をさしやんしたかと、不思議に思うて尋ねたれど、お國元の御同役から配分金を貰ひしと聞いて、少しは安堵の思ひ。その金ゆゑ、お祭の支度に苦勞も無かつたが、さうした譯で御座んすなら、妾も科は同罪ゆゑ、一緒に殺して下さんせ。

郡右衞　エヽおぬしを殺す位なら、この店で自殺はせぬわえ。

（ト郡右衞門、キツトいふ。こゝへ、奧より以前のおらち出て來り、郡右衞門に縋り。）

おらち　コレ、郡右衞門。早まつた事して吳れたなう。

（ト郡右衞門、おらちを見て、思入れあつて。）

郡右衞　ヤこなたはお袋。アヽ面目ない〳〵。

おらち　わしら夫婦は、數年來貪欲非道にした罰か、老年寄つてこの難儀。そなたと一緒に死にたいわい。思へば、今方强飯を咽喉へ支へたあの時に、いつそ死んだがましであつたか。

おげん　何はともあれ、この事を。

おつる　お上さんに、知らさうわいなア。

（ト立上る、暖簾の中にて、）

おかぢ　イヤ知らせるには、及ばぬわいなう。

（ト暖簾の中より、おかぢ、出て來り、郡右衛門、おかぢに向ひ、）

郡右衛　こなたは御內儀。店を穢して氣の毒だが、どうぞ了簡して下さい。

おかぢ　イエその言譯には及びませぬ。お前さんといふ色のあるのを承知で、この子を家へ抱へ、藝子に出して三月越し。店も繁昌しましたゆゑ、お禮と思つて、萬事を引受け、世に賴りなき親御さんは、妾がお世話を致しますから、心殘さす大野樣、御臨終をなされませ。

郡右衛　ハテ遊里には珍しき、おかぢ殿のその俠氣。それにて思ひ置く事なし。

おかぢ　思へば、これより、世の中の、神祇釋教戀無常。

郡右衛　祭の中で忌はしき、血汐に穢すこの自殺。

おかの　それも、無常の野邊送り。

おつる　よしない浮名鳥邊野の。

おかぢ　火屋の煙と夏の夜の。

おかの　いとゞ短かき。

皆　々　命ぢやなア。

（トこの時、揚幕にて、渡り拍子を打込む。皆々向うへ思入れあつて、）

おかの　又もや此處へ、踊の人數。

郡右衛　邪魔のなきうち最期を遂げん。

おげん　とはいへ、死骸を。

おらち　此儘には。

おかぢ　ハテ、店へ幕でも。

（ト立上るを木の頭、）

下さうわいなア。

（トこのうち、郡右衛門は笛を搔いて落入る。皆々これへ縋つて愁ひの思入れ。おかぢ暖簾の中より、祭の幕を出し、紐を下手の柱へ結ぶ。この模樣、よろしく、渡り拍子引取り、二重にて、）

拍子幕

七月

萱野村庵室の場
同　三平切腹の場

（ト日覆の月附、七月に替る。）

本舞臺、一面の平舞臺。眞中に九尺、常足の二重。丸木柱。藁葺屋根。正面、諸への魂棚を飾付け、これに位牌を飾り、精靈祭りの模樣宜しく。前に經机を置き、この上に水向け丼、蓮の葉、鼠の尾草など宜しく。軒口に向き盆提燈を提げ、左右の襖板羽目。前面一面、伊豫簾を下ろし

あり。上の方に誂への大ぶりなる石塔。此廻りにも種々なる石塔宜しく。下手に跳釣瓶の草井戸。此傍に墓場手桶等宜しく。よき所に柳の立樹。日覆より同じく釣枝を下し、後、黒幕、裾通り一面、卒塔婆を結込みし生垣。總べて茅野村庵室の體。こゝに寺男、着付尻端よりにて、上手の墓掃除をして樒を上げて居る。西念、坊主鬘、鼠の着附、丸絎、腰衣にて、紙張を疊みたるを持ち立掛かり居る。この見得。法界の鳴物、木魚の合方にて、幕あく。

西念　コレ〳〵杢助。墓掃除は出來たかナ。

寺男　ハア名主の小旦那どんのお頼みだから、毎日〳〵氣をつけて掃除をして花を上げ、これで役目が濟んだといふもの。さうして西念樣。紙帳を持つてこなたは何處へ行かつしやるのだ。

西念　ハテこの庵室に來て御座る名主の小旦那に貸して遣らうと、それで持つて來たのだが、見れば庵室に翠簾を下し、中に寢てでも居さつしやるのかナ。

寺男　どうして〳〵、寢るどころか。經を讀んで居さつしやるのだが、人に會ふのが煩いといつて、それで斯うして御座るのだ。

西念　ハヽアそれぢやア一寸訪れて行かう。

寺男　ドレ、掃除をしまつたから、臺所へいつて、一服やらう。

（ト寺男は、橋懸りへ入る。西念、庵へ思入れあつて、こちらへ來て、）

西念　コレ〳〵小旦那。西念が參つたぞや。

（トこれにて伊豫簀にて、）

三平　ナニ御庵主が參られしとナ。

（トこれより床の淨瑠璃になり、）

〽空山寂歷として、道心生ず。浮世離れし山寺の、日の目も見えぬ三昧に、見る目いぶせき草の庵。屋根も萱野が勤行は、奇特といふも愚なり。

（トこのうち、よき程に翠簾を上げる。中に三平、五十日鬘、黒の紋附、麻上下にてすまひ、經卷を讀み居る。）

西念　コレ〳〵、小旦那。なんで紙帳を返さつしやれた。晝も蚊の居る庵室ゆゑ、なぜ置いて吊らつしやらぬ。一圓合點が行かぬ故、態々持つて來ましたぞや。

三平　それは御親切に忝いが、最早今日盆明けゆゑ、歸宅を致す三平なれば、それゆゑ紙帳はお返し申した。

西念　ハヽア、それでは。當分庵室に御座らつしやるかと思つたら、盆が明ければ、歸らつしやるナ。

三平　永々お世話に相成りましたが、

今日こそは、歸宅致しまする。

西念　イヤ改めていふには及ばねども、去年の三月、此方の御主人淺野樣には、殿中にて大騷動を起さつしやれて、家來はみんな散り／＼ばら／＼。此方も浪人さつしやれて、四月半に歸らつしやれたが、五十日の其間、喪に入るといはつしやれて、この庵室を新に拵へ、五月一杯、六月の月初まで御座らつしやつたが、そのうち陰が明くと其儘、山科とやらへ行くといつて出て、それきり家へは歸らつしやらず。それなりけりに庵室を明家にもして置けぬゆゑ、わしが入つて居ましたが、四五日後にこなたが見えて、又庵室を貸して呉れと、いはつしやるゆゑ明け渡したが、元を糺せば此方の庵室。幾日なりとも、遠慮なく此處に泊つて居さつしやりませ。

三平　いはるゝ通り、某も主家を浪人致してより、故鄕へ歸り、庵を結び、五十日の喪に入りしが、のがれ方無き用事ありて、都の方へ罷越し、長らく寄留致したれど、又今年も盆中ゆゑ、母へ精進致さんと此庵室を借用致し、十分供養を致して御座る。

西念　イヤモウ去年といひ、今年といひ、その行儀にはたまげました。喪に入るとやらいふ事は、儒者の敎にあるさうだが、麻上下を着詰めにして、しやちこ張つて御座らしつて、其上三度の飯といつては別火で焚いた粥ばかり。イヤモウ一日も眞似は出來ぬ。常精進の愚僧でさへ折々里へ出た時は、鰻鱺魚の蒲燒煮拔玉子、少しは體の肥しせねば、腹持ちが堪らぬもの、それゆゑ坊主と蒟蒻は田舍がよいと世の諺。この山寺に生活するわしらでさへもその通り、繁華に住まふ和尚たちは猶以てぢやと、悟らつしやれ。さては小旦那、こなさんも内密で折々肴を食はつしやつたらうナ。

〽身に引受けて生臭き、口も心もひよこする坊主。

三平　イヤ／＼父母の喪に入る時は、口に甘きを食せず。樂みを聞いて樂まぬが、聖人の掟なり。必ず、左樣な懈怠な儀は、西念殿にはお止めなされい。

〽堅う出られて面目なく。

（ト西念、頭を撫でながら、）

西念　イヤ實はかうぢや。このうちから、庵室へ日毎仕掛ける娘御を、〆て居さつしやるかと思ひ、心を引いて見ましたのぢや。ハテ在家といふものは辛抱の強いものぢや。コリヤ還俗は止めに致さう。

三平　スリヤ、其許には還俗をなさ

る〻積りで御座つたが、

西念　イエ、所詮、出家の境界では覺束ないと思ふゆゑ、還俗しようと思つたが、又在家にもこなたの樣な、堅固な、御仁が御座つては、滅多に俗にもなれませぬ。

三平　ハテ不甲斐ない御出家の西念樣では御座らぬか。

西念　愚僧も、最早取る齡に先が近いと思ふゆゑ、兎角未練が起りまする。

〽何のたわいも西念は、一人つぶやき立歸る。

（ト西念、宜しくこなしあつて、向うへ入る。）

三平　ハテ扨、氣輕な御出家ぢやなァ。

〽三平は下立つて、墓へ手向の香花や、靈供の膳を目八分、石碑の前に備へ置き、遙々下つて兩手を突き、暫し涙にくれけるが、稍あつて顏を上げ。

（トめりやす、このうち三平頭棚にある折敷の膳を持ちて二重より下り、上手の墓の前へ備へ、下に居て、兩手をつかへ、愁ひの思入れあつて、）

三平　母人へ申上げまする。仕官の身とは申しながら、御病中の御看病、御葬式の御供にも間に合はざりし申譯。せめては靈魂慰めんと、寸志ばかりの御奉公。祭る事居ますが如しと、世の本文はありながら、變り果てたる石塔文字に殘る諡を、母と拜するばかりにて、お顏も拜まず、わが子かと只一聲のお詞を聞く事さへも、ならざるは、親に緣なき三平が、武運に盡きたる不孝の科、御赦免願ひ奉る。

〽生きたる人にいふ如く、石檀に兩手を掛け、悲嘆の泪に暮れ居たる心の中ぞ、便なけれ。折から此處へ女連れ。

（トこのうち三平宜しく愁ひの思入れこの留り、稽古唄、法界の鳴物になり、向うよりお春、振袖娘にて日傘をさし、後よりおかめ、二役下女の拵へにて、供をして出で來り、花道にて、）

おかめ　モシお孃樣。今日はなんでも厚かましくお持ちかけなされませ。

お春　それぢやというて、恥かしい。その樣な事がなるものかいなう。

おかめ　ハテさういふ不甲斐ないお心ゆゑ、去年もとう〲、三平樣を何處へか逃しておしまひなされ、後でくよ〲なされましたが、今年も盆に故鄕へお歸りなされたこそ、こつちの幸ひ。何でも庵室にお居での中に、お拵へなされにやいけませぬ。

お春　お目に掛らば腹一杯お恨みをいはうと思へど、お顏を見ると其儘に、妾や、口へは出ぬわいなう。

おかめ　アレそれだからいけませぬ。アレ〳〵向うのお墓の前で、御回向をしてお出でなされば、お口へ出ずば、後から、默つてお抱付きなされませ。
お春　そのやうな事が、なるものかいなう。
おかめ　ハテまア、あれへおいでなされませ。
(ト右の鳴物にて、お春先に、兩人舞臺へ來て、おかめ、お春の手を捕らへ、上手へ行けといふこなし、おかめ、ぢれ込み、三平の方へお春を突き遣る。これにて三平恟りして後を見返り。)
三平　オヽ誰かと思へば、そなたはお春。今日も又母人の墓詣りに參りしか。
お春　ハイ。
〽アイといふさへ、唇の動き兼ねるを年の功。お龜は傍からもどかしがり。
(トこのうち、三平は二重へ上り、宜しくすまふ。お春、恥かしきこなしよろしく、おかめ思入れあつて前へ出て、)
おかめ　エヽ、如何におぼこなお生れとて、知れた臺詞を埒の明かぬ。お春様の名代に、妾が替つて申しませう。
三平　ナニ替つていふとは、差當り何ぞ用事があるのかナ。
おかめ　ハイ用も用、大事の御用。マアお聞き下さりませ。
(ト思入れ。合方になり。)
モシ三平様。改めて申さずとも知れた事では御座りまするが、お果てなされたお袋様のためには、姪御のお春様。あなたとは從弟同志。惚れて御座るを幸ひにお留守の間に呼取つて、江戸表からお歸りを待つてござる其中に、お袋様には急の御病氣　遂にはお果てなされましたが、今はの際にも、コレお春三平が歸つたら精進も回向もいらぬ、一時も早う婚禮して玉の様な初孫を生んで呉れいと仰しやいましたは、親旦那様がよい證人。ホンニ手入らずの箱入娘。初物は七十五日、生き延びるとやら申しますぞえ。お留守の中から蔭膳据ゑ、待ちに待つたるお春様の蒸したての　高饅頭。貴方がお歸りなされたら、夜晝なしに引付けて、のお　入りで、お次に寢て居る妾共へも、雜儀が懸かると思ひのほか、金魚ではあるまいし、喪に入るとやら堅苦しい。この庵室に裃着けて、お參りのない開帳場の世話人か何ぞの様に、しやちこばつて、御座りますとは、さりとは惡いお物好き。その忌中も五十日お明けなされて、嬉しやと思ふと直ぐに、都とやらへお出でなされて、家には御座らず。四五日後に漸々とお歸り

なさると又庵室。かういふ事を、仔細らしう物の本に書き殘して、末世の女子を困らすとは、唐の孔子が氣が知れぬ。ホンニ開けない毛唐人だ。アヽあんまりしやべつて咽がひつ付く。後はお孃樣、仰しやりませ。

ヘ突きやられては、漸々に、恥かしいやら、怖いやら、だく付く胸を押鎭め。

(トこの中お春、宜しくこなしあつて、)

お 春　ホンニ浮世は味き無い。お留守のうちも心では、お歸りあつたらどうかうと、待ちに待つたる甲斐も無う、喪に入る日數も五十日。お墓參りの度毎に、つい一通りの御挨拶。情らしい、お詞のないは、妾が不束ゆゑ、お氣に入らぬかお嫌ひか、忌明濟むと其儘に。(思入れ。)

ヘ又も都の山科へ御座るとやらでお旅立ち。二年越しにて漸々とお歸りあると、この庵室。盆中なりとの精進は、お逃げなさるゝそのためか。その心とも露知らず、いつぞや見たる相性も。(思入れ。)

ヘお前は土性、妾は金。夫婦仲よく、子も多く、萬心の儘ならと、讀んで嬉しき三世相。よもや啌ではあるまいと、樂み居たも無駄事か。お果てなされた伯母樣が、この世に永へ御座つたなら、今まで捨てゝは置きやされぬ。いつ何時でも、お歸り次第婚禮さすと仰しやつたに違ひの無いに。このお墓、ならう事なら、たゞ一言、お詞添へて下さりませ。

ヘ伯母樣ならうと、石塔に縋り付いたるあどなさは、おほこにも、また可愛ゆらしゝ三平も心根を察しやつたか折柄に。

(トこの中、お春宜しくこなし、さわりあつて納まる。三平、宜しく思入れ。この留り、木魚入りの合方になり、向うより、以前の西念先に、矢頭右衛門七野半纏、ぶつ裂き、大小、草鞋にて、笠を持ち、出で來り、花道にて、)

矢 頭　コレハ御出家。御苦勞千萬。シテ茅野氏の庵室はナ。

西 念　向うに御座る草の家が三平樣のお庵で御座りまする。

矢 頭　然らば、案内お賴み申す。

西 念　サアかうお出でなされませ。(ト思入れ。右の合方にて、兩人、舞臺へ來り、)モシ／＼小旦那、お客人がお見えられましたぞ。

三 平　ナニ客來とナ。(ト思入れ。右衛門七を見て、)貴殿は矢頭右衛門七殿。

矢 頭　萱野氏、御壯健で御座つたよ

ナ。(思入れ。)
ヘ飛び立つ程の懐しさも、互に包む邊の人目。
(ト三平、思入れあつて、)
三　平　コリャ〳〵お春、様子あつてこの御仁と密々談ずる儀もあれば、そちは早く立歸れ。
お　春　ハア、。
ヘいひ殘したる數々を、殘り多けに立兼ぬれば。
(トお春、宜しくこなし。おかめ、前へ出て、)
おかめ　ソレ御覽じませ。鬼の來ぬ間に洗濯せぬと、何時でも邪魔が入ります。
西　念　コレ〳〵女中衆、どうしたものだ。今日は七月十四日、寺には鬼が居ぬ筈ぢや。
おかめ　サアお齋日になりますから、鬼が出ようと存じまして。
お　春　そんなら、どうでも歸るのかいなう。
おかめ　それも鬼めが。
(ト右衞門七、思入れあつて、)
矢　頭　ヤ。
おかめ　イエお暇致しませう。
ヘ打連れ立ちて。
(トおかめ、お春をせり立て、西念付いて向うへ入り、)
ヘ兩人邊を見廻して。
(ト三平、矢頭、邊へこなしあつて、)
三　平　手狹ながらも、先つ〳〵これへ。
矢　頭　然らば、御免下されい。
(ト合方になり、矢頭二重へ上り、上手へすまふ。)
三　平　さて、矢頭氏には豫て知らるゝ如く、母に後れし拙者が身の上。せめては後世の追善と月は替れど、今日が母の命日、亡君の御切腹の當日ゆゑ、盆會を行ひ、かくの仕儀。シテ、今日の御入來は、變りし事でも御座るよナ。
矢　頭　されば、某參りしは内藏之助殿の御内意にて、神崎與五郎、茅野三平、右御兩所と同道にて、江戸表へ罷り下り、吉良の邸の近邊へ、寓居を構へ、密々に敵地の樣子を探索致せと申しつかつて、今晩にもかの地へ發足仕れば、その前方に、其許にお知らせ申しに參つて御座る。
三　平　スリヤそれゆゑ、御入來とナ。侍中多き其中より、大石氏のお鑑にて、お選みに預りし段、武士の面目これに過ぎず。最早供養も終りますれば、早速仕度仕り、御旅宿まで參るで御座るが、シテ御兩所の御待合せは。
矢　頭　即ち、大阪難波新地、山田屋方に止宿致せば、今宵五ツの初更までに、何卒御入來下されい。

三平　シテ御兩所の出立はナ。

矢頭　浮世を憚かる我々ゆゑ、面體包む旅虛無僧。

三平　然らば、拙者もその心得。

矢頭　我等はこれより旅宿へ歸り、神崎氏へ申傳へ、急速調度に取掛り、支度萬端整ひなば、貴殿の宅の門邊まで、夜半に紛れて密かに立越え、尺八を吹きそうさん。それを合圖に貴殿には、家內の者に知れざるやう、密かに家を立出で召され。

三平　萬事のお指圖忝なし。

矢頭　さは、さりながら、其許には、どうやら容よき御家內が。

三平　ヤ。（ト思入れ。）

矢頭　イヤサ、御家內中へ內分にて。

三平　それは、勿論承知致す。

矢頭　然らば、手前はこれにてお暇仕る。

三平　ハテかゝる中ゆゑ、麁茶さへも。

矢頭　その御配慮には及び申さぬ。（ト二重より下る。）

三平　左樣御座らば矢頭氏。

矢頭　萱野氏、お待ち申すぞ。

〽詞つかうて、右衞門七は、暇を告げて出でて行く。

（ト右衞門七こなしあつて、向うへ入る。後見送つて、三平は、）

三平　身に潔白も折惡しく、お春がこれに居りしゆゑ、矢頭氏には、某が色に溺れて故鄕をば去り兼ぬるかと、今の素振り。疑念を晴らす其爲ゆゑ、暮れなば直ぐに發足なさん。（ト思入れ。）とはいふもの、我身の上、舊主の大義を抱きし事件、露はに、それと父上に語ることさへ、誓詞の契約。鄙土に育ちし頑ゆゑ、それとは無しに餘所ながら一世の際の暇乞。調度の用意なさうぢや〱。

〽心急しく。

（ト床の三重、時の鐘にて道具廻る。）

本舞臺、三間の間。高足の二重。本緣附き、眞中、白洲。階子。上手、塗り骨障子屋臺。いつもの所枝折戶。左右に土塀の張物。此外、正面白木の冠木門。二重正面上手、一間の床の間。此次、地袋戶棚。この下手、白地中形の襖。正面の長押に捕繩六尺棒等掛けてあり。總て萱野村名主の宅の體。床の間に、島臺鯛鰹節を載せし白木の臺角樽等を飾る。こゝに百姓一、二、三、いづれも庄屋の拵へ。羽織着流しにて控へる。以前のおかめ、襷掛にて、棕櫚箒を持ち掃除をして居る。この見え、在鄕唄にて、道具納る。）

おかめ　サア〱これで掃除も出來た。三平樣が庵室からお家へお歸りなされさへすれば、御婚禮は出來るといふもの。早く日が暮れゝばよいが。

百姓一　コレ／＼おかめ殿。どういふ譯で、早急に婚禮を思ひ立つたか、わしらも一向合點が行かぬ。
百姓二　左樣／＼。今方、廻狀の廻つて來たから、聞いて見たら、今夜の婚禮。
百姓三　庄屋仲間の交際ゆゑ、二人打寄り相談して、悅びに出掛けて來たが。
百姓一　今日は七月十四日。まだ盆明けといふでもないに。
百姓二　佛を立てさせぬ其うちに、婚禮するとは、どういふ譯。
百姓三　知つて居るなら、心得のため、譯を話して。
三　人　聞かせて吳りやれ。
おかめ　これは斯樣で御座ります。去年淺野家の騷動にて、三平樣にも御浪人なされ、お家へお歸りなさるとその儘、喪に入るとやら仰しやつて、五十日の御物忌。忌中が明けるとその儘に、都へ行くと仰しやつて、御家へとては寄り付かず。所で今度、盆中の御供養にお歸りなされて、又庵室へお入りなされたれど、今日は御供養が仕舞ゆゑ、お家へお歸りなさる積り。油斷をすれば、明日にも又何處へかお出掛けなさるゆゑ、足留のそのために、御婚禮と、急に大旦那が思ひつき、ヤレ島臺の獻立のと、妾一人が粉になりまする。御婚禮のいはれ因緣、かくの通りで、御座ります。
百姓一　それで樣子がカラリと分つた。
百姓二　何は格別、三人が。
百姓三　祝つて來たる此品を。
百姓一　どうぞ披露を。
三　人　して下さい。
おかめ　ドレ旦那樣へ申上げませう。
（トおかめ立掛る。この時、奧にて、）
三左衛　イヤ參るに及ばぬ。三左衛門、それへ行て、御禮を申さう。
おかめ　あのお聲は旦那樣。
百姓一　御主人、これへ。
三　人　お出でとナ。
（ト合方キツパリとなり、奧より萱野三左衛門、ふだんの拵へ、羽織着流しにて、出て來り、宜しくすまひ。）
三左衛　コレハ／＼仲間の衆。よくこそお出で下された。
百姓一　只今これにて御婚禮の樣子、委しく聞きましたが。
百姓二　御安心のため、俄かの獻立、お支度萬端整ひて。
百姓三　思ひ立つ日が最上吉日なれば、お目出度う。
三　人　御座ります。
（ト三人こなし、このうち、件の白木の臺を持つて出て、）
おかめ　お三人樣から、この品の御進物

で御座りよする。
三左衛　イヤモウ、火急の事ゆゑ廻狀にて、お招き申すも恐入るに、美事なる御進物、幾久しく祝納致しまする。
百姓一　イヤそれに付いて、三左衛門殿に、何時ぞはお尋ね申さうと思つて居たが、我等三人。
百姓二　去年御子息三平殿、在所へ歸ると其儘に墓所の脇へ庵を結び。
百姓三　永らく籠つて居さつしやれたが、どういふ理窟であの事を。
百姓一　喪に入るとやら。
三　人　云ひますの。
三左衛　イヤ、謂れを御存じないお方は、不審に思ふは御尤。まアかい抓んでお話し申さう。
おかめ　サア〱講釋の始まり〱。
三左衛　エヽ差出すと默つて居やれ。
おかめ　ハアイ。

（ト合方になり、三左衛門思入れあつて、）
三左衛　總て聖人の敎には、三年の喪は天下の通喪なり。人產れて三年の中は、父母の懷を放れずして抱擁の養育を忘れぬため、父母死すれば三年の間喪に入るが唐土の掟。我等はかゝる頑ゆゑ、仕官の望みは御座らねども、何卒悴は主人を見立て武家奉公を致させんと立歸りしを幸ひに、卽ち今宵が盆明なれば、死んだ婆めが遺言の賴みに任せ、許嫁の春と祝言致させまする。人間萬事塞翁が馬、善も惡も樣々に移り替るが習ひで御座る。
百姓一　イヤそれで謂れが、グワラリと知れました。デモ孝心な三平殿。
百姓二　廿四孝の數がふえ、二十五孝の光がさし。
百姓三　立身出世は、つい今の間。
百姓一　こなたもお樂みで。

三　人　御座りまするぞ。
三左衛　イヤお話に實が入つて、お茶さへも差上げなんだ。コリヤ〱、おかめ、奥の別間へ御案内申せ。
おかめ　ハイ〱、ドレ御案內致しませう。
百姓一　そんなら仰せに隨つて。
百姓二　奥で一服遣りませう。
百姓三　そんならこれに。
三　人　三左衛門殿。
三左衛　日出度く、一献お過ごし下され。
（トおかめ、先に庄屋の三人奥へ入る。これより淨瑠璃になる。）
〽立ちて行く川の流の絕えずして、然も元の水にあらず。昨日と變り今日と暮れ、つらき月日のたつか弓、矢竹心もしを〱と立歸る三平が、禮儀崩さぬ麻裃、それと見るよりお春は立出で。

(トこのうち向うより以前の三平、剃立鬘になり出て來り、花道にて思入れあつて、直ぐに舞臺へ來り、枝折の中へはひる。この時、上手の障子屋臺より、以前のお春出て、二重より下りて、出迎へ、)

お春 三平樣。ようお歸りなされましたなア。

ヘいそ／＼として出迎へば、三平しづ／＼座に直り、父が前に兩手をつき。

(トこの中三平は思入れあつて、二重へ上り、三左衛門の前へ手をつかへ思入れ。)

三平 昨年以來、父上の御傍にとても居らざれば、定めて懶惰の所行なりと、御腹立も御座りませうが、餘儀無き用事で、山科なる內藏之助殿方へ引止められ、先日漸く立歸り、母の靈魂慰さめんと、庵へ籠り今日まで、盆會の供養仕り、最早今宵が盆明ゆゑ、路にて月代仕り、立歸りまして御座りまする。

ヘ詫るに父も機嫌よく。

(ト三左衛門、思入れあつて、)

三左衛 オヽ月代も剃りをつたとは、この上もないよい手都合。

お春 その上ならずお裃まで、これでそつくりお聟樣。

三平 ヤ。

お春 イエ、ナニ、お髮がよく出來ました。

ヘ悦ぶ態に三平は、邊見廻し不審顏。

(ト三平、上手の床の間にある島臺を見て、)

三平 いづれにか御婚禮でも。

三左衛 オヽ餘所ではない。內にある。そちとお春を祝言さすのぢや。

三平 エヽ。(ト悔り思入れ。)

三左衛 何も驚く事はない。

(ト思入れ、合方になり、)

知つての通り、このお春、死んだ婆めが姪にして兩親もなき孤兒ゆゑ、兼々そちに娶合さんと、留守の中に呼取り置きしが、母が病氣の中たにも、此事はかり云續け、息ある中に三平と婚禮させて、初孫の顏が見たいと遺言の死ぬる臨終の際までも、明日にも三平戻りなば、祝言させて下されと、くれ／＼頼む遺言に、一周忌でも濟みしなら、婚禮させんと思ひしに、そちが旅行の留守中ゆゑ、思はず今日まで延引した。云合さねど途中にて月代なして歸りしとは、願ふところのよき吉辰。裃衣服も其儘に、ハテよい聟になり居つたなア。

ヘ他事なき詞に、三平はハッと吐息をつくねんと、誓し詞も無かりしが、心弱くて叶はじと。

(トこのうち、三平思入れあつて、氣を

かへ）

三　平　親人様。改めてあなた様へ、お願ひが御座りまする。

三左衞　ナニ、願ひとは、どういふ譯ぢや。

三　平　仕官の望みで御座りまする。

三左衞　何と云やる。

（ト合方キツパリとなり）

三　平　改め申すに及びませねど、御主人淺野内匠頭様御刄傷に及ばれしより家來一統散り〴〵ばら〳〵、かく浪人の身となりて餘儀なく在所へ歸りますれど、まだ私は一生涯土ほじりにて果てまする所存は更々ござりませぬ。それゆゑ、豫て朋友へ仕官の口を頼み置きしに、先刻計らず庵室へ故朋輩が訪ね來り、東國方の大身によき主取りの口あれば今宵俄かに同道せよと、以前の好みに誘ひくれ、忝しと發足の盟約なして御座りますれば、何卒これなる春殿と婚禮の儀は今暫く、お延ばしなされて下さりませ。

〽約束堅き密事の神文。それとは明けて、岩本の神に誓をかけまくも、忝い伯父様のお許しの出た今日の婚禮。振捨てゝ旅立ちとは、むごやつれなや胴慾と胸に餘れど、口へ出ぬ、娘心の内氣なる。心遣ひぞ遣瀨なき。父はほく〳〵打頷き。

（トこのうち、お春宜しくこなし。三左衞門、思入れあつて、）

三左衞　ム丶、若き時は血氣強く、人に負けまい劣るまいと、立身出世をかきたくれど、世俗にいへる榮耀果報富貴は求めて入らざるもの。さるによつて、昔より賢人君子も世に合ず、山林に遁れ市に隱る。仕官の望みは無用なるぞ。

〽ト止める詞を押返し。

三　平　コハ父上のお詞とも覺えませぬ。君に仕へて用ゐられず、その上隱遁致すは格別。我は時に會ふまいなぞと、始よりして見破るは、却つて異端、自暴自棄、思ひ立つたる念願なれば、是非とも願ひ奉る。

〽詞を盡し云ひ廻せば、ずんと立つて三左衞門、進物魚臺手に持つて、三平が前に並べ置き。

（ト床の合方になり）

三左衞　コリヤ三平、最前村の仲間の衆が今日の祝儀と持參せしは、三子も知つた鯛と鯉鮒。鯛は大海の洋中に育ち、鯉鮒は淵川に育ち、或は堀溝なんぞといふ泥の水にて成長なす。物に譬へて申しなば、堀溝はこの萱野村、江戸は即ち大海なり。その大洋に住馴れし大魚を見れば羨めるとも、貧福貴賤夫々造化の神の產分けて、此世へ運命具へ

譬へば、いか程廣き大海にて育てども、鱶は鱶なり。又溝の泥水に目高や鮒、同じやうに生ひたつ鯉も、時來らば龍門の瀧に逆昇り、龍と變じて天に至れば雲を起し雨を降らす。それゆゑ江戸の大都會に、分限もあれば乞食もあり、強(あなが)ち人の貧福は場合に依ると限るべからず。六十餘州の諸侯の中、選みに選んで仕へたる淺野の御家滅亡なし、母の最期に行違ひながら、供する事さへ叶はぬは、よく〳〵武運の甲斐無き者と思ひ諦め、仕官の儀は思ひ止まつて、在所にて老いたる親を養ふが現在の果を見て過去未來の宿業を知る佛の教。(思入れ。)サ合點がいたか、コリャ伜。

〽抜きさしならぬ理の當然。何といふべき詞も無く、さし俯(うつむ)いて思案顏。お春は側に氣を揉みて。

(トこの中三人宜しく思入れあつて、)

お春　コレ申し、三平樣。あれ程仰しやるお詞に、一つも無理は御座んせぬ。ツイ、あいと云うて下さりませ。

〽心あせれば、三左衞門、伜の心くみとりて。

(ト三左衞門、思入れあつて、)

三左衞　得心しても、一應で決心せぬが若氣の習ひ。これにてとくと思案せよ。我も奥にて客人へ饗應(もてなし)をして返事を待たん。サ、お春も奥へ一緒に來やれ。

お春　それぢやといふて、この儘に。

三左衞　ハテ、まア一緒に、來やれといふに。

〽詞に是非なく打連れて、奥の間さして。

(ト床の送りにて、三左衞門お春を連れて奥へ入る。思入れあつて、上手障子屋臺の中へ入る。百姓の拵へにて、畑作、田吾十、二人出て來り、)

畑作　ナント田吾十、今日は朝から立ちつきりで、がつかりした。まア一服やらかさう。

田吾十　ホンニそれがよかんべい。(ト煙草を喫みながら)それはさうと、こちの內の小旦那とお春樣と、急に婚禮をさせるといふは、どういふこんだべい。

畑作　委しい事はおらも知んねえが、急に婚禮をして仕舞はねと、小旦那殿がどつけへか、つッ走るといふて、大旦那が種々(いろいろ)と氣を揉んで、それで急になつたのだ。

田吾十　その癖、家のお春さんは、とうから惚れて、なんのかのと云つてゐるのを、小旦那殿は振付けてゐるが、あんな解らぬ事はない。ぬしやおらなら、向うで何といふとも、こつちで不承知は決していはぬが。なう畑作。

畑作　さうとも〳〵、こつちから不承知はいはぬが、みんな先から不承知だ。
田吾十　おきやがれ。ハヽヽヽヽ。
畑作　あんまり長話をしてゐると、大旦那がお目玉だ。サア〳〵仕殘した料理の手傳ひ。
田吾十　して仕舞うてから、寛りとしますべい。
畑作　それがいゝ〳〵。
（ト兩人入る。これにて時の鐘打上げ、出語りになる。）
〽入りにける。勝手は豫て言付の料理こしらへ、とつぱくさ。味噌擂る音も賑はしく、やゝ時移るばかりなり。梓弓引かば返さぬ武士の忠義一途に、三平は旅の用意もそこ〳〵に、一間をそつと忍び出で、邊見廻し、何處かは馳出たせしが立留り、取つ置いつの胸の中。
（トこのうち、よき程に上手、障子屋臺の中より三平、着流し大小にて、思入れあつて、二重より下り、花道へ行きかけ、行きつ戻りつのこなしよろしくあつて、舞臺へ戻る。床の合方。）
三平　主君の仇を討つ事は假初ならぬ大事ゆゑ、たとへ親子兄弟たりとも、口外せまいと誓を立て、誓詞に血判なしたれば、それと明かすに明かされず。と有つて、此程立退きなば、嘸親人の御立腹。不孝者の恩知らずと、そのお怒りは幾許ぞ。後の歎を餘所に見て、一人の親を振捨てゝ行かねば、君の舊恩を忘却致す不忠の大罪。（思入れ。）
〽須彌蒼海の親人を捨てゝ、この儘行く時は、忠は立つとも孝に缺け。又二つには、許嫁のお春も我を恨むであらう。
〽出でて、再び返らぬは、今こそ親子一世の別れ。生れ出でたる故郷の、これがわが家の見納めゆゑ、世になき母の顔までが、目先へちらつき、後髪引かるゝやうでならぬわえ。
〽勇氣もたゆみ、茫然と暫し泪に暮れ居たる。
（ト三平、枝折の所にて佇み居る。）
〽由良の戸を渡らぬ先に揖絶えて、行方も浪のうたかたや、會へばどうして斯ういうてと、尋ぬる目先に、お春は目早く、ちらと見るより。
（トこのうち、奥より以前のお春、行燈を持出て、邊へ思入れあつて、）
お春　ヤ、三平樣。そこに何して。
（ト思入れ。）
〽寄るを突退け逸散に、物をもいはずに馳出す袂に縋り。
（トこのうち三平向うへ行かうとするを、

（お春、二重より駈下り、引留める事、宜しくあつて、）

まア〳〵待つた。三平さま。妾を嫌うて、この家を立退く程のお心では、何をいうても空吹く風。むごいとも不慾なとも、思す心はあるまいが。妾が身にも成替り、まア、下に居て下さりませ。

（ト無理に下に坐らせる、これより床の合方になり、）

ソリヤもう、こんな草深い田舍と違うて江戸さんの東の空は色どころ、定めて深う云交したお女中さんもあろけれど。（ト思入れ。）

〽幼い時から妾とは、一つに育つた從兄妹同志。子供遊びのまゝごとに、何の譯なき女夫事、嫁入の事の戯れにも、他の者とは嫌々とお前も妾もいうたのは、結ぶの神、胸には挾うに記してありさうなと、智惠の付く程猶いろ〳〵に案じ過しの數々は、物の云ひやう素振でも、お前も覺えが御座んせう。それのみならず、三年越し、別れ程經て居る中も、花の都の美しいお嫁さんでも出來しかと、國を隔てし氣扱ひ。祈つた念が屆いてか、伯父上樣や伯母樣が添はせると仰しやつて、親の無い身に引取られ。

（ト思入れ。）

〽悦ぶ中に樣々な障りも出來て漸々に日數も經つて、今日婚禮と定まりて、嬉し悦ぶ甲斐も無う。

お春　嫌うて家出さしやんすは、御尤もではあらうけれど、妾が體は置去りの。（ト思入れ。）

〽谷の梢の木守りと、人に指さし笑はれて、何と永らへ居られうぞ。

いつそ殺して下さりませ。死んでもお前の手に掛かれば、わしや本望で御座んすわいなア。

〽積り〳〵し恨みの數々、口説き立て〳〵、どうと轉ひて泣き沈む。三平も諸共にしをるゝ心取直し。

（トこのうち、お春、さはり宜しくあつて、トゞ泣き沈む。三平、思入れあつて、）

三平　イヤ〳〵それは惡い合點。全くそなたを嫌ふなどと、左樣な所爲はあらざれども、一つは江戸へ行かざれば、朋友共と盟約した武士の面が立たざれば、ツイ、立歸りの道中にて、往つて參れば永うは掛からぬ。遲くとも二十日か三十日で戻つた上にて、寬々と目出度く婚禮する程に、必ず待つてゐて吳りやれ。サ、親人に見付けられては、この三平が門出の妨げ。留めだて致さず、其處退いた。

お春　イエ〳〵妾やなんぼでも、お前

は往なさぬ。放しはせぬ。行かで叶はぬ事ならば、さア〳〵殺して下さりませ。

三平　エ、これ程までに頼むに、聞入れぬか。

〽行くを、遣らじと爭ふは、戀の束緒情の罠。詮方盡きたる折柄に。

（トこのうち、兩人宜しく爭ふ。上手障子屋臺の中にて、）

三左衞　不幸者、いづれへ行く。其處一寸も動き居るな。

（トこれを聞く三平、恟りして、）

三平　ヤ、、あのお聲は。

お春　伯父上樣。

〽驚く隙に、三左衞門。一間を立出で、長押なる棒追取つて、てう〳〵〳〵、骨も折れよと打据ゑて、怒りに涙嚙み交ぜて。

（ト上手屋臺より、以前の三左衞門出て、正面長押に掛けてある六尺棒を取り、二重より三平を打据ゑて、キツトなつて、）

三左衞　コ、ナ、人でなしの畜生めが。（ト思入れ。）年寄つた親も捨てゝ、可哀さうにあれ程までに慕ふ

女房を振捨てゝ、おのれは。
（ト思入れ、ありやす。）
家出するからは、さては東の在番中、若傾城にたぶらかされ、末は夫婦にならうなぞと腐り合うた奴へ心中立て、親の添はせた女房の顔見る事も嫌になり、寺へ行くとは夢にも知らず、母に別れを悲しみて、佛事供養を營むとは若いに似合ぬ奇特者、學問させた甲斐があると、心で譽めて最前も仲間の衆へ褒に入る故事の講釋をして聞かせたが今では悔しい。面目ない。コリヤ、ヤイ。
〽忠孝二道は車の兩輪、親に孝なき不所存者は、必ず君に忠なき本文。
三左衛　その筈なるか、最前も、仕官がしたいと望みなるは、不忠不義なる腐つた性根。忠臣二君に仕へずとて、心ある侍は追腹切つて殉死をなすに、主君と頼んだ淺野樣、新參者の汝なれど、お目掛けられて下されしその大恩も打忘れ、赤穗離散の去年から丸二年にもならぬ中、主取りせうとは何事だ。同じ東の旅立ちでも、お主の敵が討ちたいと、願ふ事なら、貯へし。
〽田地、田畑、賣拂ひ、親は非人に落ちぶれても、貢いで敵は討たせてやる。
アヽこれにつけてもおいとしいは、汝の御主君、淺野樣。御短慮の爲とはいひながら、よく／＼なれば、殿中にて御刃傷を遊ばせし、その御鬱憤も晴らし給はず、敢ない御最期、御家の斷絶。目指す敵の吉良殿は、おめ／＼存命して居るに、うぬらは無念と思はぬか。
〽淺野の家來も數百人。
多年の御扶助を受けながら、去年の四月播州にて、城渡しの折柄も、よもや安々渡すまいと、思ひの外に大石始め、牛房程な尾を振つて、すご／＼領地を立退いたは、犬に劣つた蛆蟲めら。朱に交はれば赤くなると、おのれも人か、腐つたか。人でなしめを子に持つた年寄の、業曝すより、死んだ婆めは仕合者、思へば憎き人非人めが。
〽髻摑んでにじり付け、怒の顏色朱を注ぎ、こぼす涙は夕燒に、雹を降らす如くなり。三平の身は、搾木にて油抜かるゝ苦しさ、せつなさ。内藏殿と云合せし、敵討の計略を、明かして怒りをなだめうか。イヤ／＼イヤ。一旦武士が契約せし詞は、金鐵、金輪際、天が崩れ地が裂けても、密事は口へ出さじと、堪へてこらゆる辛抱は、丈夫にも又いぢらしき。
（トこのうち、三左衛門、三平、思入れ宜

しく。よき程に、本釣鐘を打込む。)

〽ハヤ刻限も二更を告げ、豫て約せし神崎と矢頭右衞門七、人目を忍び、虚無僧出立ち、枝折の外に佇みて、吹きそらす相圖の尺八。膽に應へて三平が斷出さんと身繕ひ。

(トこの中、向うより以前の矢頭先に神崎兩人、旅虚無僧の拵へにて天蓋を冠り、尺八を持ち出て來り、花道にて、兩人うなづき合ひ、舞臺枝折の所へ來り、尺八を吹き立つる。三平、これを聞き、愕りして立上るを、三左衞門、キット捕へ、)

三左衞　ヤア逃げようとて逃がさうか。おのれが意地を立て通せば、五十年來三左衞門云出した事變ぜぬ片意地。サア一寸でも動いて見よ。

〽せき立てゝ親棒おつとつて、奥齒を鳴らし詰め寄り〳〵、怒の涙。それと知らねば、表には猶吹き立つる尺八に、三平は堪り兼ね、差添拔く手を見せばこそ、腹にガバと突立つれば、あわてふためくお春が介抱。我強き父もハット顚倒。手負は屈せず聲張り上げ。

(トこのうち、三平刀を拔き、腹へ突き立て苦しむ。三左衞門、お春、愕りして、介抱する事宜しく、三平、枝折の外へ思入れあつて、)

三平　外に御座る御兩所。御入りあつて、三平が身のなり果てをお見屆け下さるべし。

〽いふ聲不審と兩人は、笠脱ぎ捨て家に入り、其場の樣子見て愕り。

(トこのうち、矢頭、神崎、天蓋を取つて内に入り、兩人、三平を見て、)

神崎　ヤヽ、コリヤ、何故に萱野氏。

矢頭　かゝる生害致されしぞ。

〽ずつと通れば、三平も手疵厭はず座を正し。

(ト神崎、矢頭上手へすまふ。三平、苦痛を堪へる思入れ。これより竹笛の入りし合方。)

三平　面目も無きこの面會。忠孝二道を貫かざるこの身の薄命、武運の末。今際の一言、兩名へ具さに報告仕らん。

(ト合方。)御存じの通り、拙者が身の上、しな、矢頭氏が御入來にて、今宵江戸表へ御發足。御同道仕らんと、先刻庵で堅い契約。あれなるは父なるが、許嫁の女房ながら、神文の密事なれば、聊か口外せざる故、それとは知らぬ父の怒り、主君の敵を討たうとせず、仕官を望む不所存者、親女房をも捨つると有つて、打ち打擲の強意見。密事を明かさば神文に背き、明かさねば江戸表へ出立ら叶はぬ身の切迫。一味徒黨の御兩所へ、

申譯のこの切腹。これにて御疑念お晴らし下され。

〽無念の涙はら〲〲。聞いて兩人、さてはと先非後悔なし。

（ト神崎思入れあつて、）

神崎　スリャそれゆゑの切腹とナ。實に亡君の仇討は假初ならぬ大義といひ譜代恩顧の家の子さへ、變心致すこの時節。況してや御身は新參にて、兄弟とても有らざれば實家を立つべき身分なりと、昨年赤穗離散の砌、隊長大石内藏殿が念に念を入れられしが、今となつては御身の害。

矢頭　併し、一旦約したる神文誓詞をお守りあつて、かゝる場合に望んでも、密事を明かさぬ大丈夫。此儀を大石内藏殿へ物語りなば嘸や殘念に思はれ。

神崎　返す〲も切腹は。

矢頭　惜しき一命。

兩人　捨てさせしよナ。

〽殘念至極と後悔涙、三左衛門飛びしさり。

（ト三左衛門、思入れあつて、）

三左衛　拙は忠義の各々方には、深きお望みの御座つたよナ。私事は三平が父と名乘るも面目なさ。只今の詞の端々、淺野の御家に人無き樣にこれまで存じて居りましたが、さては敵に油斷させ、一味の膽を固め置き、不意を討たんず御計略。かゝる大事は親子の中でも明かさぬ筈といふ所へ、氣のつかざりしは、わが誤り。片意地のみに云募り、倅に腹を切らせては、手は下さねど此親が、邪險の刄で殺したも同前。不調法とも誤りとも申譯なき老の命。せめての事に御兩所樣、憎いをお手に掛けられませ。

〽殺して呉れとかき口說く。三平、苦しき息をつかひ。

（ト三左衛門、覺悟の思入れ。三平、こなしあつて、）

三平　イヤそのお詫には及ばぬ事。親仁さまの御得心。今のお詞聞いたるは、此上もなき拙者が大慶。それにつけてもお春殿。我とても岩木ならねば、恭うてくれる志、嬉しうなうてなんとせう。さりながら大事を抱へし身なれば、執着心を殘すまじと、心で心を戒めて、わざと情なくもてなせしは、主君に仕へる武士の忠義の爲ぢやと、許してくれよ、お春殿。

〽許してくれいと詫入れば、お春は猶もしやくり上げ。

（トお春思入れあつて、）

お春　そのお詞を聞くからは、恨みは更々なけれども、何をいうてもこの深手。たとへ情ない、お心でも、おまめで御座ればどうぞして、添はれるやう

にもならうかと。（思入れ。）
〽心の頼み、佛神を祈る力もあるものを、嬉しいお詞今聞いて、今別れるとは何事ぞ。最前一間で立ち聞けば、お前の噂に村の衆が、親孝行な三平さま、廿四孝の數がふえ廿五孝のひかりがさすと、いうた詞が何とやら、佛臭うて氣になつたが。
〽今々思へば、前表の、あれが知らせであつたかと、譯も涙に取亂れ、身も浮く計りに見えにける。共に不愍と神崎は、手負の傍へさし寄つて。
（トこのうち、お春愁ひのこなし宜しく、神崎、三平の側へ寄り、）
矢頭　萱野氏。よつく聞かれよ。今其許の切腹は、高祿を穢したる奥野將監、大野九郎兵衞安井藤井の輩ですら、掌の裏かへす不忠不義。一命捨てゝ亡君の仇を討たんとなす者は、僅か殘りし四十餘人。首尾よく敵を討つまでの、艱難苦心に忍びかね、心替りもあらんかと、我々心安からざりしが、貴殿の義心を聞き傳へ、一味徒黨の人々が、望の臍を固めなば、氣を引立つる良薬妙劑。夜討の先駈高名にも、はるかに增さりし大手柄。
神崎　やがて隊長内藏殿へ、此由逐一申上げ、夜討の節は其許が、一番鎗を入れし上、かの邸宅にて討死の態にもてなし、引拂へば、それを冥途の土産となし。
矢頭　佛果を得られよ。
兩人　萱野氏。
〽いふに、三平、目を見開き。
三平　イヤ死なぬ。死にませぬ。たとへ此身は果つるとも、魂魄は東の方へ飛去つて、故主の怨敵吉良少將、果さいで置くべきか。
〽柔和の相貌引替り、眼尻裂けて髪逆立ち、腹一文字に搔切つて、臓腑一つに摑み出し、すつくと立ちし有樣は、目にこそ見えね、魂魄は虚空はるかに昇りけり。
（トこのうち、三平刀を引廻し、臓腑を摑出し、手に持ちし儘、すつと立ちて、向うを睨み、キツトなる。これにて薄ドロ〳〵のやうな風の音になり、ト、三平、どうとなり、うつとりとする事宜しく、）
〽父は人目を恥ぢらひて、泣かぬ顔する氣は暗闇。二人の義士は心根を思ひやつたる涙の熱湯。お春はあるにあられぬ思ひ。かたへの刄物とり直し、自害と見ゆるを押止め。
（トこのうち、皆々愁ひの思入れ宜しく、お春は有合ふ刀をとり上げ、死なうとするを三左衞門とめて、）

三左衛　コリヤ〳〵お春、早まるまいぞ。

お春　イエ〳〵放して下さりませ。せめて後から追付いて未來で夫婦になるが樂み。慈悲ぢや、情ぢや、伯父上さま。どうぞ死なして下さりませ。

〽死なせてたべと身をあせれば、三左衛門堪へ兼ね。

(ト三左衛門、思入れあつて、)

三左衛　ヲヽ、死にたいは尤もぢやわえ。日頃戀しい〳〵と待ちに待つたる三平が、たま〳〵歸つてさつきには、江戸へ行く旅立さへ、本意ながつて留めた身が、死んでのけたりや、猶更に附いて行きたう思やらうが、コリヤよう物を合點せよ。素直の樣でも、生れつき意地の張つた悴めゆゑ、今の詞の樣子では、死んでも未來へえゝ行くまい。ナリヤ、敵討が濟む迄は、この世を去らねば、早まつてそなたが死んでも、三途の川や死出の山路で連れも無く、一人うろ〳〵せにやならぬ。まア〳〵死ぬのはやめにして呉れよ。

〽思ひとまつて呉れかしと、強うはけつくむづ折れの、泣出しては留めどなく、涙淵なすばかりなり。見る目に堪へ兼ね、神崎は落ちたる刄物取上げて。

(トこのうち「三左衛門、お春の持ちし刄物をもぎとり、神崎思入れあつて、これを取上げ、)

神崎　誠や聖の教にも、長松の許に清風ありと、賢人義者のお育から、類稀なる烈女の龜鑑。せめて一人は永らへて、舅をはごくみ、亡き夫の跡懇ろに弔はれよ。

〽泣き居るお春が黑髮を、ぷつつと切つて、懐の金子を添へる一包み。

(ト神崎、お春の髮を切り、五十兩包を出し、切髮に添へて出す。)

三左衛 お春　これは。

(ト兩人悔り、思入れ。神崎思入れあつて、)

神崎　それぞ卽ち、御子息の野邊の送りの營み料。

三左衛　イヤ、この金子は其儘に。

(ト返さうとするを、矢頭、留めて、)

矢頭　アイヤ、隊長よりの旅中の手當、三平殿に遣はされよ。

お春　この世の名殘り、今一言。三平樣のお詞が。

神崎　笛をかゝねば呼吸の息、未だ止まらう筈もなし。

三左衛　御兩所樣へ呼び生けて、せめて一言御禮を。

(トこれにて矢頭、三平の傍へ來り、抱き起して、耳の端へ口を寄せ、)

神崎 矢頭　萱野氏、イデ〳〵東へ同道召さ

れ。
（ト大きういふ。これにて三平、はつきりとなり、）

三平　テヽ。

（ト頷く。これにて本釣鐘を打込む。）

〽哀れ果敢なや。

（ト床の引取り三重にて、三平手を素股に合はせるを、木の頭。皆々愁ひの思入れにて、泣き沈む。この模樣。本釣鐘の送りにて、）

幕

八　月

都嶋原扇屋の場

（ト日覆の月附、八月に替り、）

本舞臺、一面の平舞臺。正面上手、一間の床の間。この前に机を置き、上へ三方へ桝に團子を飾り、傍に花溜へ芒を入れてあり。この下手、違ひ棚、地袋戸棚。この下手、夜具棚、黒塗りの簞笥等、宜しく。この前に六枚折の屛風あり。よき所に衣桁掛、これに傾城の裲襠掛けてある事。上の方、櫺子窓、下の方、折廻し塗骨障子屋臺。總て、島原扇屋の二階、傾城部屋の模樣宜しく。こゝに谷坂伴吾、山坂安武內、羽織着流し侍にて立掛り居る。これを仲居一、二、三、四、太鼓一、二、三、四の太鼓持、皆と揃ひの着付にて留めて居る。この見得、踊り地にて幕あく。

山坂　サア、平內殿にはいづれに居らるゝ。

谷坂　これへ呼び出し、會はせて吳りやれ。

仲居一　イエ／＼平內樣は先刻お歸りになりまして、この二階にはおいでなされませぬ。

仲居二　貴方方には平內樣の御同役と申す事。

太鼓一　さういふ事なら、暫くお待ちなされませ。

仲居三　只今、お相方のよい太夫さんを。

仲居四　お取持ち致しますれば。

太鼓二　お二人共に、御持參の長いお刀は。

太鼓三　私共にお預けなされて、どうか陽氣に今晩は。

太鼓四　太鼓持の我々共をお座敷へお呼び下されまして。

仲居一　ゆる／＼お遊び。

皆々　下さりませ。

谷坂　イヤ／＼身共は、淸水殿に內談あつて參つたのぢや。榮耀らしく、この二階で遊ぶ譯には相成らぬ。

山坂　それゆゑ、刀は渡されぬわえ。

仲居一　お刀もお渡しなされず、お遊び

御座りませぬなら。
太鼓一　折角おいでなれど、私共も迷惑ゆゑ。
仲居二　お氣の毒では御座りますが、里の掟で、この二階へ。
仲居三　お置き申す譯には、出來ませぬわいなア。
仲居四　どうぞ下へお下りなされて。
太鼓一　お歸りなされて下さりませ。
太鼓二　併し折角の御來臨。
太鼓三　相成るべくは、この二階で。
太鼓四　お遊びなされて。
皆々　下さりませ。
谷坂　ヤア、遊びを勸める憎いやつめが。淸水殿がこの二階の高條の部屋にをる事を知つて參つた我々兩人。
山坂　居ぬといつても、その手は食はぬ。きり／＼こゝへ出し居らう。
仲居一　イエ／＼、先程御用が出來。
仲居四　お歸りなされまして。
皆々　御座りまする。
谷坂　ヤア左樣な噓を申しをると、キツト詮議を致せし上、もしこの二階に居る時は、その分には致さぬぞ。
山坂　刀の手前が相立たねば、その素首を打落して呉れん。
（トキツトいふ。これにて皆々氣味惡き思入れにて、）
仲居一　ホンニお歸りだと思ひましたが、それともどうで御座りましたか、確かな所は、なア皆さん。
仲居二　ホンニそれ／＼、この混雜の二階の事ゆゑ。
仲居三　出入りの多いお客ゆゑ。
仲居二　人違ひといふ事も。
仲居三　コリヤ無いとは、いはれぬわいなア。
仲居四　まア／＼、お待ちなされませ。
太鼓一　ドレ左樣なら、二階中を、よく搜して參りまして。
太鼓二　その上、御挨拶を致しませう。もし間違ひでも御座りましては。
太鼓三　この首が落ちては、歩くに見當が知れませぬ。
太鼓四　それもさうぢや。手分けをして、方々の部屋を搜して來ませう。
仲居一　ホンニそれがよいわいなア。
太鼓一　とはいへ野暮な。
皆々　お侍樣。
谷坂　どう致したと。
皆々　ドレ搜して來ませう。
（ト右の鳴物にて、皆々下手の障子屋臺へ入る。後、兩人思入れあつて、下に居て、合方になり、）
山坂　左右田氏。困つた儀が出來致した。
谷坂　左樣で御座る。人多き人の中に

も人ぞなし。人ある中にも人を選み、御主人のお鑑にて、當地へ探索にのぼらせたる間者の隊長、平内殿。淺野浪士の大石の底意を探らうと致さいで、此程にては浮女と兄妹同樣に入魂を結んでの廓通ひ。その上ならず、却つて彼めに肩を入れて、敵の手引を致さんなぞと、契約を致せし由。それゆゑ、今晩この二階で、つき止め參つて、平内殿に意見を加へ、聽入れなくば刺違へて死ぬ覺悟。

山坂　然るに、當人の平内殿をいづれへやら、隱してしまひ、我々共に會はせぬ樣子。

谷坂　コリヤ剛面に掛合はねば、埒が明かぬと申すもの。

山坂　いかさま。手前も左樣に存ずる。

谷坂　然らば、これより下へ參り。

山坂　亭主を呼び出し、談判なさん。

谷坂　伴吾殿、お出でなされい。

（ト立掛る。この時下手、障子屋臺にて、）

高篠　一角さんの御難儀なら、妾がお詫びをせうわいなア。

谷坂　ナニ、詫をして。

兩人　參るとは。

（トこれより、浮いた合方になり、下手より高篠、遊女、部屋着の形にて出て、宜しくすまひ、）

高篠　そんなら、あなたが清水さんの御朋輩の衆で御座んすか。

谷坂　如何にも。手前は清水殿の朋友谷坂伴吾と申すもの。

山坂　手前は山坂安武内と申す者。以後は見知つて。

兩人　貰ひたい。

高篠　妾や、この家の抱への遊女、高篠と申しますが、どうぞこの末御贔屓にお目掛けられて下さりませ。

（ト辭儀をなす。谷坂、高篠を見て、ぐんにやりとして思入れあつて、）

谷坂　さてはそもじが平内殿の相方、高篠殿でありしとか。ハテ美しい別嬪ぢやなア。

山坂　イヤ、ナニ、谷坂氏。かのによく似てゐるでは御座らぬか。

谷坂　左樣〳〵。承れば、藝妓のかのが、この京地へ大野めに連れられて上つたとやら。もしや、かのではあるまいか。

高篠　ナニ、かのと仰しやるは。

谷坂　ハテ面目も無い事ながら、身共江戸表に居る節に、馴染の藝者かのと申す者、仔細あつて、江戸を立退き、この京地へ參つた由。その女にそもじの顏があまりよく似てをるゆゑ、それで只今尋ねたのぢや。

（トこれにて、高篠、思入れあつて、）

高　篠　そのおかのとやらは、去年の六月、祇園祭のその時に、祇園町の井筒屋で、自殺をして死んだといふお侍の色ではないか。

谷　坂　ナニ、侍が自殺をしたとは。それは一體どういふ譯ぢや。

高　篠　サア、江戸から二人連立つて、この都へ逃げて來た色男のお侍が、人間違ひで親を殺し、言譯なさに、祇園町の井筒屋の店先で腹切つて死んだとやら。去年評判で御座んしたわいなア。

谷　坂　さては、大野郡右衛門が腹を切つたに相違ないか。その色男の離れた所で、どうか身共が手に入れて。コリヤかうしては居られぬわえ。(ト立上るゆゑ、)

山　坂　コレ／＼、谷坂氏。いづれへ御座る。

谷　坂　ハテ、祇園町の井筒屋へ參つて、かのの在家を求めねばならぬ。

山　坂　でも、お手前は清水殿に意見においでのでは御座らぬか。

谷　坂　ハテ、意見を致さうと存じたが、かういふ別嬪が惚れてゐては、現を拔かすも無理では御座らぬ。それゆゑ、手前も意見をやめた。

高　篠　そんなら、此儘お二人さんは。

谷　坂　ハテ、とかく、戀には遣はれがちぢや。

(トこの時、立ちあつて、下手へ入る。後見送り、)

高　篠　大石さんは、天井へ落書をしてゐなさんすが、一角さんは今の騷ぎで、何處へ隱れて居なさんすか。案じられた事ぢやなア。

(トこの時、正面の衣桁の裲襠をあげ、前野平内實は清水一角、着流しの侍にて、顏を出し、)

平　内　高篠、此處に居るぞよ。

高　篠　オヽ、平内さん。其處に居なさんしたか。

(トこれにて、平内、前へ出て、宜しくまひ、)

平　内　戀を知らざる朋友共も、そちが粹なる扱ひに、心が折れて、立歸つたは、全く高篠君の働き。忝い／＼。

高　篠　段々との樣子をば、妾も小蔭で聞いて居ましたが、そんならお前は、アノ、敵を。

平　内　アヽコレ。(ト思入れ。押へ、兩人顏へ思入れあつて、)聞くとあれば是非もないが、必ず他言は相成らぬぞ。

高　篠　ソリヤモウ、よう、合點して居りますが、不思議な御縁で、この樣に深うなつたる平内さん。もしもの事でも御座んしたら、もうそれきりに會はれまいかと、取越し苦勞をする故に、妾や

悲しう御座んすわいなア。

平　内　イヤ〱、其儀は氣遣ひ致すな。たとへ敵を討たばとて、身共は手引き致す計り。命に關はる事ではなく、武士の道をば立通し、天理に叶つた事なれば、やがて立身出世なし、その時こそはそちを請出し、誰憚らぬ身共が妻。

高　篠　さうなる時はどのやうにか、妾や嬉しう御座んすが、まだ安心はせぬわいなア。

平　内　ハテサテ女といふものは、疑ひ深いものだなア。

高　篠　さうして、アノ浮大盡さんは、敵を討つたその後は、どうなさるので御座んすえ。

平　内　大石殿は徒黨の棟梁。忠義の爲とはいひながら、御法を破りしその科で、十に九ツ、命は無きもの。然し必ず高窓にそんな事をいつてはならぬぞ。

高　篠　そんなら、あの大石さんは。（ト思入れあつて、）お氣の毒な事で御座んすなア。

（トこの時、下手障子の中にて、）

大　石　淸水氏。一角殿〱。

（ト踊り地になり、大石内藏之助、着流しにて、酒に醉ひしこなしにて出る。兩人これを見て、）

平　内　大石氏、何れへ行つて居られた。

高　篠　よう此處へ御座んしたなア。

大　石　イヤよく參つたとは、アノこゝな横着者めが。幸ひ邊りに人もなし。高篠、そちは前野氏と樂しんで居つたのであらうナ。

高　篠　アレ又、そんな戯言ばつかり。

平　内　イヤ左樣いはれる其許こそ、あの高窓としつぽりとお樂みをなされたで御座らう。

大　石　イヤ〱、それは大當違ひ。只今高窓が居らぬゆゑ、探しながらの廓下醉。コレ高篠、そちの働きで高窓を探して來て吳りやれ。

高　篠　そんなら呼んで參りますから、何處へも行く事はなりませぬぞえ。

大　石　イヤモウ寸の間も、動く事では無い。

高　篠　ドレ呼んで來ようわいナ。（ト下手へ入る。）

大　石　コリヤ、何分共に賴んだぞ。よいか〱。（ト思入れ。邊へこなし。見廻し、宜しくすまひ。）さて平内殿、委細の樣子は承つたが、其許の御心底、內藏之助祝着に存ずる。

平　内　スリヤ其許には、只今の樣子最早御存じで御座るよナ。

大　石　殘らず一間で聞いて居つたが、實はこれ迄其許が、手前に御助力下さると、仰せあれど誠とせず、內心疑惑

を致し居つたが、今晩といふ今晩は、貴殿の御厚志承り、誠に恐縮仕る。

平　内　かく御疑念の晴れたるは、手前に於ても大慶の至り。然らば心底打解けて、酒飲直さうでは御座らぬか。

大　石　それがよろしい。（ト思入れ。下手へ向ひ、）コリヤ、仲居ども、酒をもて。

（ト奥にて、）

皆　々　アイ〳〵。

（ト矢張、踊り地になり、以前の仲居四人、太鼓持、付いて出て来り、）

太鼓一　これは浮大盡様。こちらのお座敷へおなりで御座りまするか。

太鼓二　見れば、お相方もおいでなされず、男ばかりの差向ひ。

太鼓三　如何なる事の御内談か、太夫さん方がいらつしつたら。

太鼓四　さぞ廻り氣で、どのやうな口説が起るか知れませぬ。

仲居一　ホンニ前野様と大石様は、何時でもお仲は睦しく。

仲居二　其上、お酒を召上るのは、トント御神酒徳利の様ぢやわいなア。

仲居三　男同志で、きつい仕合せ。どちらか女子で御座りましたら。

仲居四　お相方の太夫さんが、大層氣の揉めるぢや御座んせぬか。

仲居三　それはさうと、お相方が。

仲居四　おいでなされぬぢや御座んせぬか。

太鼓一　殿方同志のお酒盛は。

太鼓二　とかく、お座敷が浮きませぬ。

太鼓三　聲を揃へて、仲居の衆。

太鼓四　呼んで見ちやアどうだらう。

仲居一　お呼び申して見ようわいなア。

（ト下手へ向ひ、）

仲居三人　太夫さん〳〵。

（ト下手にて、）

高　窓　アイ〳〵。今其處へ行くわいなア。

（ト右の鳴物キツパリとなり、高窓、遊女の拵へにて、以前の高篠付いて、出て来り、）

高　篠　モシ、大石さん。高窓さんを呼んで来ましたぞえ。

高　窓　妾も何處へ行かしやんしたかと氣を揉んで居りましたわいなア。

（ト高篠は平内の側、高窓、大石の傍へすまふ。）

平　内　ヨウ〳〵、アノこゝな、色男様め。（ト大石の背中を叩く。）

大　石　これはとんだ浮名儲けぢや。

高　窓　モシ大石さん。こゝは高篠さんの部屋で御座んす。妾の部屋へ御座んして少し、お休みなさんせぬか。

大　石　参れとあるからは、仰せに任せ、我等が陣所へ引取らうが、しかし、枕

の番は御免〳〵。それより、今宵は十五夜ゆゑ、こゝの部屋にて櫺子から差込む月を詠めながら、酒と討死致さうわえ。

高窓　その十五夜の月さへも、雲の障りが御座んすゆゑ、妾やかうして大石さんに、御贔屓になるにつけ様子を聞けば御家には御新造もあり、子供衆もあり、母御樣もあるといふこと。もし障りでもありはせぬかと、苦勞になつてならぬわいなア。

大石　ハテその心配には及ばぬ事。今にそもじを身請して、格子造りの圍ひ者。女房はあつても床の間の飾り物ゆゑ、障りは無いわえ。

高篠　ホンニ、どうやらお話が理に落ちた樣で御座んすぞえ。

平内　何ぞ陽氣に、皆の者。藝盡しでもやつて見せやれ。

仲居一　ホンニ先刻の踊は嫌つて、何ぞ趣向は御座んすまいか。

仲居二　古きをもつて新らしくと、よく口癖にいひますから。

仲居三　やつぱり、何時もの見立てをして。

仲居四　遊びませうぢや、御座んせぬか。

平内　イヤ〳〵見立も餘り古い。こゝらは一ッ氣を替へて、この平内と大石と、二人が鬼の目隱して、摑へた者に大盃で酒を呑ますとは、どうで御座らう。

大石　何さま。これはよい御趣向。

太鼓一　平内樣の御座敷で、浮大盡が鬼になるのも。

太鼓二　客が亭主になる樣で、をかしいと思ひましたが。

太鼓三　流石に粋な平内樣。

太鼓四　二人鬼とはよい御趣向。

高窓　コリヤ面白う。

高篠　御座んせうわいなア。

仲居　サア目隱しの。

皆々　始り〳〵。

（トこれより、駒鳥の合方になり、平内、大石、目隱しをする。皆々手を打ちながら。）

手の鳴る方へ。

大石　捕まへて酒呑みましよ。

（トこれにて、平内、大石皆々を追廻す。皆々は、下手障子屋臺の中へ逃げて入る。平内、大石、目隱しの儘、前に抱きつき、）

捕まへた〳〵。（トいひながら目隱しを取る。）

平内　大石氏か。

大石　清水氏か。

兩人　これはしたり。（ト思入れ。）アハハヽヽ。

平内　余人はともあれ、お相方の高窓

を呼んで參らう。(ト行きかけるを、)
大石　アイヤ清水氏、丁度誰も居らぬを幸ひ、貴殿にお詫び致す儀が御座る。
平内　何　改まつてお詫びとは。
大石　かく貴殿のお馴染の座敷へ參つて、大盡顔に大役を勤めますのも、何かお邪魔でも致す樣で甚だ濟まぬが、そこの所は御用捨に預りたい。
平内　イヤ／＼、それは大きな僻事。たとへ手前の座敷なりとも、申さば假の一夜つま。此處の主が大金をかけて建てたるこの座敷。殊に手前は無骨者。斯樣な遊びは不得手ゆゑ。いづれも樣のお目鏡に叶はぬ事は恐れありと、大盡株の大役は大石氏へお讓り申す故、決して、手前の座敷だなどと、御恩惠をなさらないで、水魚の交り、この末とも味方になつて下されい。
大石　イヤその御一言を聞きまして、手前安心致したゆゑか、大分目がたるんで參つた。
平内　手前も眠く相成つたが、何と一緒に、まどろみませうか。
大石　イヤ一緒に寢るとは忝い。然らば、お先へ御免下されい。(ト有合ふ莨盆を枕にして、横になる。)
平内　ドレ御一緒に邯鄲と致さう。
(ト莨盆を取つて、枕にして、大石の脇へ寢る事宜しく、時の鐘打上げ、下座の獨吟になる。)
〽更けて廓の粧ひ見れば、閨の燈火うちそむき、浮寢の床の夢の花。
(トこのうち、下手の障子屋臺より菱川良信實は間重次郎、羽織着流し、町人の拵へにて出て、邊を見廻し、大石の傍へ來て搖起し、下手へ來り控へる、これにて大石、ニツと起上り、平内を搖起しながら。)
大石　コレ清水氏。お起きなされぬか。平内殿／＼。
(トいへども、よく寢て居るゆゑ、こなたへ來り、間、大石を見て、)
間　大石樣。
大石　コレ。
〽散らす嵐の誘ひ來て、閨を呼出す連れ男、[illegible]所の騷ぎも高笑かとて。
(トこのうち、大石、下手に[illegible]、屏風を平内[illegible]へ立て廻し、[illegible]生醉のこなし。間、邊へ思入れあつて、兩人こちらへ來り、)
大石　シテ頼み置いたるかの品は。
間　漸々の事で寫し取り、即ちこれへ持參致しました。
(ト懷中より、畫卷物を出して、大石に渡す。これにて大石、開き見ることあつて、)
大石　ハヽア、流石は御親父程あつて、

よくぞ巨細にお寫し下された。誠に感
服仕つた。
間　イヤモウ、この所が寫し取れませぬ
ので、餘程日數を費しまして御座りま
する。
大石　定めて左樣で御座つたらう。(ト
懷中より金包を出し、)いづれ謝禮には大
石が罷出るとお傳へ下され。これは當
座のお禮の印。些少ながら御受納下さ
れ。(ト間に渡す。)
間　コリヤ、大枚の百兩金。
大石　ハテ、千金にも替へ難き、この一
品が手に入れば、僅かな金子、なに、厭
はん。
間　左樣御座らば、大石樣。
大石　お使、御苦勞。
間　これにて、お別れ申しまする。
〽塒も中戸を明けるしのゝめ。
(ト獨吟の上げにて、間、下手へ入る。
このうち、平内、屛風の蔭にて聽き耳立て
覗ふ事宜しくあつて、又元の如くに寢た
振りをして居る。大石、醉うたるこなし
にて、手を叩き、)
大石　コリヤ、仲居ども。水をもて參
れ〳〵。
仲居一　アイ〳〵。(ト下手より、仲居、盆
の上へ水呑をのせ、持ち出て來り、)オヤ、
お目醒めで御座りますか。
大石　誰やら、身共が寢て居る所へ、
屛風を立廻して呉れたが、起きたから
取退けて呉れ。
仲居一　畏りました。
(ト取りのける。平内起上り、)
平内　アヽよい心持に一睡致した。こ
れは大石氏には、何時の間にやら、お
目が醒めたナ。
大石　只今起きたばかりで御座るが。
平内殿、水は如何で御座る。
平内　イヤ醉醒めの水とは忝い。
大石　お初穗を獻じ申さう。
平内　然らば、半分頂戴致す。(ト水を
呑む事宜しくあつて、)醉醒めの水、下戸
知らず。アヽ甘露〳〵。(ト心づいて、)
これは皆呑んで仕舞つたわい。
仲居一　おかはりを持つて參りませうわ
いなア。
平内　大儀ながら、さうしてくりやれ。
仲居一　ドレお後を持つて參りませう。
(ト水呑を持ち、下手へ入る。平内、邊へ
思入れあつて、)
平内　イヤ、ナニ、大石氏。お見せな
されい。
大石　見せいとは、そりや何を。
平内　ハテ只今の一品を。
大石　ヤ。(ト惘りする。合方キツパリと
なり、)
平内　千金にも替へ難いと仰せあつた

る一品は、深き仔細こゝ、白紙へ寫し取つたる正しく繪圖面。拙者にお見せ下されい。

大石　扨は御酒の御機嫌にて、寝て御座ると思ひしが、何もかも御存じなるか。南無三、一大事に及んだり。

平内　計らずした事にて、此程より水魚の交り致せし某、次第に寄らば、間毎に様子違うて居るまいものでも御座らぬ。一覧致せし其上にて、猶も實地をお教へ申さん。それゆゑ、是非ともお見せなされい。

大石　折角のお頼なれど、此品計りは。

平内　ソリヤ見せられぬと仰せあるか。

大石　たとへ親子兄弟の中でも、憚る品で御座るゆゑ、かく出先の遊里にて、密かに請取る祕密の一品。これはかりは御用捨下されい。

（トこれにて、平内、思入れあつて、）

平内　左程大事の品なれば、お見せなさるな。見たく御座らぬ。かく迄水魚の交りなし、手前は信義を盡し居れども、二心ある侍にて密事を餘所へ洩らさんかと、御疑念あつてのお心ならん。只今よりして不和と相成り、昨日の味方は今日の敵と、敵討の企てあること、これより江戸へ立歸り、吉良の邸へ注進致す。

大石　アヽコレ、滅多な事を。

平内　然らば、一品お見せあるか。

大石　サアそれは。

平内　江戸へ注進致さうか。

大石　サア。

平内　サア。

兩人　サア〱〱。

平内　内藏殿、御挨拶承りたい。

（トきつといふ。これにて、大石是非なき思入れにて、）

大石　宜しう御座る。然らば他言召されぬといふ御誓言が承りたい。

平内　承知いたした。

（ト床の合方、刀掛より、小柄を持つて來り、金打する事よろしく、）

大石　かくの通り。

平内　先づはそれにて、手前も安堵。

大石　前野氏、明をこれへ。

平内　心得申した。

（トこれより誂への合方になり、平内、行燈の燈を手灯へ移し持つて、このうち、大石、以前の屏風を立廻し、懐中より畫巻物を出し、開き見せる。平内、悔りなし、）

ヤヽ、コリヤ、菱川師信が筆意を込めし畫巻物、

大石　廓にその名高窓が、身の行ひを其儘寫す傾城十二時。

（トこの時、下手の障子を明け、以前の高窓出掛り、これを覗ふこと宜しく。平内、あんまり相違せしといふ思入れにて。）

平　内　スリャ左程まで、其許には、アノ、高窓を御執心にて。

大　石　面目も無き事ながら、彼めに魂奪はれました。

平　内　左程執心召されしなら、身請をなして妾になどなさるゝ筈を、この如く畫面に寫せしその仔細は。

大　石　そも、昨年の六月より、二ヶ年越しに通ひますれど、遊女に稀なる彼が心底。妻子ある身で廓通ひは宜しからずと意見をなし、とかく心に隨はぬゆゑ、詮方つきて浮世繪師、當時都に名も高き菱川師信を密に頼み、彼が姿を寫し取つたる畫卷物。これへ通はぬ閑には、母女房や伜等に知れざる樣に、一間に籠り、書見と見せて詠める心底。斯樣なたはけな内藏之助と、お下げすみも御座らうが、英雄勇士も婦女子には心を動かす凡夫のはかなさ。必ず、お笑ひ下さるな。

（ト面目無きにこなし。これに二高窓は障子をそつと締める。平内、呆れし思入れあつて、氣を替へ、膝を小膝を打つて。）

平　内　オヽ、よくぞ心腹お明か

しあつた。手前も只の侍なら、御意見にても申せども、そこを云はぬが水魚の交り。日本一の智者と呼ばれし大石氏が、かくまで婦女子に心を寄せられしを、手前如きが生中にしたとて及ばぬ儀の為、其々に盡力致し、彼めをお手に入れませう。

大石　スリヤ、愚な奴とお笑ひなく。

平内　サアそこが信義を結びし仲。たとへ如何程、高窓が貴殿を嫌ひませうとも、かくいふ手前が説得なし、キットお手に入れるで御座らう。

大石　スリヤ、其許が御周旋にて。

平内　後ともいはず、たつた今、これへ呼んで掛合ひませう。

（ト立上る。これへ下手より、以前の高窓高篠を連れ、出て来り。）

高篠　イエ、お出でには及ばぬわいなア。

（ト前へ出る。大石この様子見て、）

大石　ヤ、そんなら、もしや二人とも。

（トこれにて高篠、高窓よろしくすまひ。）

高篠　今の御様子、高窓さんが障子越しに聞かしやんして、どうぞ、これ迄大石さんを情無うしたる申譯を、朋輩の妾から、詫して呉れとのくれ〲のお頼み。

高窓　お望のある御様子と、薄々聞いた大石様。とやかう云うては下されども、年端の行かぬ妾の為、お賜りなさると、これまでは情無うして居りましたが、妾の姿を寫し取り、それを眺めて楽むとの御眞實にほだされまして、勿體ないやら、嬉しいやらで、妾やしみじみ惚れましたわいなア。

平内　大石氏、如何で御座るナ。

大石　イヤモウ、今晩といふ今晩は、主人の敵を討ちしより、遙かに勝る身の本懐。（思入れ）コリヤ〱、太夫。亭主をこれへ呼んでくりやれ。

高窓　アイ〱。（ト下手障子屋臺の中へ入る。中にて、）

旦那さん〱。

（ト呼ぶ。これにて、踊り地になり、下手より高窓先に、亭主[illegible]、[illegible]亭主の拵へ、これへ以前の仲居、太鼓持、皆々附添ひ、出て来り。）

亭主　ヘイ〱、御用で御座りますか。

大石　用とは餘の儀でない。これなる高窓を身請け致す、左様思へ〱。

亭主　それは有難う御座りまする。太夫が身請は七百両。當人が得心なら、金子をお渡し下さりまして、手に手を取つていづれへなりと、お連れなされて下さりませ。

大石　七百両。承知致した。

平内　スリヤ、高窓を。

高篠　お身請けとナ。
仲居一　太夫さん、嘸、お嬉しう。
仲居四人　御座りませうナ。
高窓　こんな、嬉しい事は御座んせぬ。
仲居四　イヤお目出度う。
太鼓四人　御座りまする。
亭主　シテお身請けの當日は。
大石　明日ともいはず、山科より金子を取寄せ、今宵の身請け。（ト思入れ。懐中より金包を出し、）皆の者へ惣花にしやれ。
（ト投げてやる。亭主、取上げ見て、）
亭主　コリヤ、大枚五十兩。家内中への御祝儀に。
大石　宜しく分けてやつて呉りやれ。
亭主　ヘイ〳〵皆の者、お禮を申せ。
中居太鼓皆々　ヘイ〳〵有難う御座りまする。
（ト辭儀をなす。平内、につたりと思入れあつて、）
平内　これで、うつけの本性が。
大石　ヤヽ。
平内　イヤ、手附けの惣花。はでな御愉快。
高窓　思へば、今宵は十五夜に。
高篠　晴れて嬉しき月の影。
仲居一　風にも靡く絲薄。
仲居二　露を持ちたる白萩の。
仲居三　招き了せてしつぽりと。
太鼓一　丸くをさまるお團子の。
太鼓二　益々君の御盛んとは。
太鼓三　エヽお目出度う。
皆々　御座りまする。
（トこのうち、大石、高窓の顔と、件の畫卷の畫と見較べ居て、）
大石　ハテよく似せた、太夫の姿畫。
平内　それは手前が申受けん。
（ト取らうとする。一寸隱し、）
大石　これも太夫の正物ゆゑ。
平内　ハテよくお惚れ。
（ト思入れ。大石の背中を叩くを、木の頭。）
なされたなう。
（トにつたり笑ふ。大石面白ないといふ思入れ。皆々引張り宜しく踊り地にて、）
拍子幕
（ト幕引付けると、道具かけ廻しにて、直ぐに引き返す。）

九月

都山科閑居の場

（ト日覆の月附、九月に替り、）
本舞臺、三間の間。中足の二重。本緣附き。上手、一間塗骨障子屋臺。平常の所、

枝折戸。この外、建仁寺垣。二重正面、石摺の襖、舞臺前上下、四ツ目垣、これに菊の盛りを見せ、下手よき所に紅葉の立樹。日覆より同じく釣枝。總て山科、大石閑居の體。二重眞中に主税、袴形にてすまひ、平舞臺に子役兩人、吉千代大三郎にて、襷股立袴にて竹刀を持ち、試合をして居る。下手に吉右衛門着流しにて控へ居る。この見え。白囃子にて幕あく。

(ト子役兩人、試合宜しくあつて留る。)

主税　勝負は見えた。兩人控へい。

吉千代
大三郎　ハツ。(ト左右へ別れて辭儀する。)

寺坂　イヤモウ、坊樣方の御上達は、この頃になりめつきりとお太刀筋が上りました。憚りながら下郎めも恐悅に存じます。

主税　僅か二歳の違ひなれど、吉千代は兄たけあつて、大三郎より遙に勝れど、それに負けじと大三郎が一心籠めし只今の立合。兄も感心致したぞよ。

吉千代　まだ勝敗も定まりませぬに、勝負は見えたと仰しやりましたは。

大三郎　いかなる仔細で。

兩人　御座りますか。

主税　ハテ、勝敗を付くるに及ばぬ。兄吉千代が弟を待遇うて居る樣子ゆゑ、待てと留めし試合。總て勝負を見物致すに遠慮があつては面白からず。それゆゑ、待てと止めしぞ。

吉千代　スリヤ御推察なされまして、御不興で御座りまするか。

大三郎　そんなら、今度は御遠慮なしに。

主税　イヤ〳〵、最早今日は節句の事故、これ迄に致し、又、明日勉強致せ。

寺坂　それが宜しう御座ります。お稽古はこれきりに遊ばし、お奥へ御座つて御母樣へ、重陽の御祝儀を申上げられたが宜しう御座ります。

吉千代　左樣なら兄上樣。

大三郎　奥へ參るで。

兩人　御座りまする。

主税　サヽ、行きやれ〳〵。

(ト調べにて、子役兩人襷を取り、主税に辭儀をして、奥へはひる。寺坂、後を見送り、こなしあつて、)

寺坂　主税樣。シテ御親父内藏之助樣には、お宅へお歸りなされましたか。

主税　父上には奥の間にて、お寢つておいでなさるわい。

寺坂　スリヤ、昨夜のお疲れにて。

主税　又今日も節句の儀ゆゑ、親人には合口の平內殿が御入來にて、お呑み過ぎの腹直しとやらで、御酒宴が始まるであらう。お肴の用意を致して置きやれ。

寺坂　イヤもう、お節句ゆゑに菊酒のと、是非御酒宴が始まりませう。

主税　ドリヤ、某は今のうち、書見を致して置かうか。（ト矢張調べにて、寺坂奥へ入る。主税は有合ふ見臺を引寄せ、書物を見て居る。右の鳴物合方になり、向うより、前幕の谷坂（實は左右田孫兵衞）、山坂（實は山下甚吾）、袴羽織大小にて、出て來り、花道にて、）

山坂　左右田氏。最早御安心で御座るなう。

谷坂　御主人の仰せを受け、清水氏と我々兩人、間者に上りし甲斐あつて、內藏之助が放埓を、篤と見屆け立歸れば、最早江戶へ立歸つて用心の門が開かれまする。

山坂　清水氏にはそれゆゑに、今朝發足召されたれど、此儘歸るは殘念至極。

谷坂　高窓が事を種となし、內藏之助めの女房や母に立腹致させる毒を殘して歸る所存。

山坂　もし離別でも致しなば、猶々うつけに極りますゆゑ。

谷坂　江戶表へはよき土產。然らば山下甚吾殿。

山坂　先づ／＼お先へおいで下され。（ト兩人舞臺へ來り、枝折の外にて、）

谷坂　賴まう／＼。

主税　コリヤ誰ぞ居ぬか。御案內があるぞよ。

下女　ハイ／＼。（トおりん、下女の拵へにて出て來り、主税の前へ手をつかへ、）何ぞ御用で御座りまするか。

主税　庭口に案內がある。何方だか取次致せ。

下女　ハイ／＼。（トこちらへ來り、枝折戶を開け、）どちらからお出でなされました。

谷坂　われ／＼事は內藏之助殿と、豫ねて入魂を結んだる前野平內殿の朋友で御座る。

山坂　內藏之助殿、御在宅なれば、ちと御意得申す儀が御座つて。

谷坂　參つて御座る。

下女　オヤ、左樣で御座りますか。少しお待ちなさいませ。（トこちらへ來り、）若旦那樣、參りました／＼。

主税　參つたとは、何が參つた。

下女　ハイ、何時も來る吞み倒れの朋友だとか申して、又吞み倒しに參りましたわいなア。

主税　これはしたり、麁相な申すな。平內殿の御朋友とあれば、これへお通し申すがよい。

下女　ハイ／＼。（トこちらへ來り、）まア／＼、あれへお通りなされませ。

谷坂　然らば、許しやれ。（ト合方キツパリとなり、谷坂、山坂、上

手へ通り、宜しくすまふ。前へ出て、）
主税　取次の者より承れば、前野氏の御朋友とやら。拙者事は内藏之助が悴主税と申す若輩もの。以後はお見知りも下さりませ。
谷坂　これは〳〵、お初に面會致します。手前事は平内殿の朋友、谷坂伴吾と申す者。
山坂　また某は山坂阿武内と申す者、重陽の儀ゆゑお近付きがてら。
下女　又呑み倒しに。（ト云ひ掛るを、）
主税　ア、コレ、お茶莨盆を持つて參らぬか。
下女　ハイ〳〵。（ト不精々々に奥へ入る。）
谷坂　イヤ〳〵、必らずお構ひ下されな。今日我々入來せしは、ちと親父内藏之助殿にお談じ申す儀が御座つて、平内殿の傳言をお達し申しに參つて御座る。
主税　それは、近頃御苦勞千萬。只今父は加減惡しく、一間に臥し居りますれば、これへ呼出し、御面談致させませう。
（トこの時奥にて、）
およし　アイヤ、如何なる儀かは存じませねど、夫が名代、妾が承るで御座りませう。
（ト合方替つて、奥よりおよし、好みの拵へにて出て、宜しくすまふ。）
谷坂　さては、御身が内藏之助殿の御家内で御座るか。
およし　不束ながら、内藏之助が妻。お見知り置かれ下さりませう。
山坂　丁度幸ひ。
谷坂　エヘン〳〵。
（ト目配せする。およし、思入れありて、）
およし　シテ、御傳言と申されまするは、如何なる仔細か、妾へ仰せ聞けられ下さりませ。
谷坂　御家内に申すのも心苦しう御座れども、御病氣とあれば是非がない。
山坂　伴吾殿。仰せ出されい。
谷坂　一通り、お聞きなされい。
（ト合方キツパリとなり、）
その傳言は外でも御座らぬ。朋友前野平内殿には、今朝俄かに用事出來なし、國表へ出立召され、それについては大石氏よりお預り申せし、身請證文返しくれよと我等へ頼み。お目に懸つて渡さんと存じたれど、御病氣故、御家内樣へお渡し申せば、後にてお届け下されい。
（ト懐中より證文を出し、およしの前へ置く。これにておよし悔りして、）
およし　エヽ、スリヤ、アノ何と仰しやる。身請の證文を平内樣へお預け申し

て置きしとナ。
山　坂　七百兩といふ大金にて、先月半に扇屋の高窓太夫をお身請け召され、祇園新地に圍うて御座るが、まだ御存じは御座らぬか。
（トこの中、およし件の證文を開き見て、）
およし　スリヤ後の月、高窓をお身請けなされてありしとか。
谷　坂　酒と女の樽附は、德の樣だが、却つて御損。果は體を仕舞ひまする。
山　坂　その證書さへお渡し申せば、他に用無き我々兩人。
谷　坂　ドレ〳〵、お暇仕らう。（ト立ちかゝるゆゑ、）
主　税　只今麁茶を献じますれば、暫くお待ち下さりませ。
谷　坂　イヤ〳〵茶などは欲しく御座らぬ。したが世俗にいふ通り、齡取つてから始めたる浮氣は止まぬ大石殿。それに引替へ、御子息は道樂盛りにありながら、讀書に目をさらされて、お宅にちやんと御座るとは、世は逆なことで御座る。
山　坂　イヤ〳〵未だ前髪ゆゑ、遊びの味を知るまいが、親を見習ひ只今に、よいのらくらになるだらう。
谷　坂　内にはこんな美しい家内があるのに、又外に圍者とは呆れた好色。
山　坂　これで主人の敵討ちを致すなどとは、片腹痛い。
谷　坂　それも道理か。路中で落詩を立たされるにも、主恩重き大石が、色と酒とに目も内藏之助。
山　坂　赤穗でなうて阿呆浪人。
谷　坂　ハテ氣の毒ナ。
兩　人　ムヽハヽヽヽヽヽ。（ト笑ひながら門口へ出て、）
山　坂　これから後がどうなりますか、何處ぞそこらに隱れてゐて。
谷　坂　イヤ〳〵それでは仕組が古い。離緣をしたかしないかは、翌日の樣子で知れまする。
山　坂　然らば旅宿へ立歸り。
谷　坂　明日の噂を待ちませうわい。
（ト合方調べにて兩人向うへ入る。このうち奧より、以前の寺坂出て、枝折の外に伺ひ居て、落ちてある試合太刀を持ち、外へ出ようとするゆゑ、）
主　税　コリヤ吉右衞門。血相變へていづれへ行くぞ。
寺　坂　彼等は正しく吉良家の間者。後追駈けて一詮議。
主　税　イヤ、その詮議を致すに及ばぬ。先づ〳〵それに控へてよからう。
寺　坂　それぢやと申して。
主　税　ヤア、主の詞を用ゐぬか。
寺　坂　エヽ、いま〳〵しい。

（ト下に居る。無念の思入れにて、およしこなしあつて、）

およし　その吉右衞門の立腹も、短氣といへど無理ならず。一日見るより、間者とは知れてゐながら、其儘に惡口されるを堪へるも、夫の心が甲斐なきゆゑ。姑御樣へ、御相談を申上げねばならぬわえ。

主税　スリヤ、母上には。

寺坂　御老母樣へ。

およし　わしも愛想が盡きたわいなう。

（トこの時、上手障子の中にて、）

母　オヽ、嫁女。よういやつた。母も愛想が盡きたわいなう。

大石　アノお聲は。

寺坂　御母公樣。

（ト謠への合方になり、上手、障子を引抜く。正面に美事なる佛壇内に佛具宜しく飾りある事。此處に千壽院、褥の上にすまひ、珠數を爪ぐり居る。）

およし　スリヤ母君には。

三人　委細の事を。

母　今日は大石頼母殿の、月は替れど忌日ゆゑ、佛間に於て看經の耳を穢せし悴が行跡。障子越しにて聞取りしが、許由が耳のそれならで、落つる泪の瀧津瀬に、結ぶ甲斐なき胸の中。推量してたもいなう。

（ト愁ひの思入れ。およしこなしあつて、）

およし　始終をお聞き遊ばす上は、申すまでも御座りませねど、長の年月連添ひし夫の氣質に、妾も油斷致して、昨年より遊所通ひを致すのは敵の間者に心を許さす深き手段で御座りませうと、母君樣へ内々にて取計らうて、意見も致さず打過ぎましたが、今となり思へば、この身が無念にて、誠に本心放埓の夫が不始末承り、呆れ果てまして御座りまする。

母　それに付いて、母が頼みがあるが聞いてたもるか。

およし　これは又改まつた母君のそのお詞。何かは存ぜず、妾の身に叶ひました事なれば。

母　スリヤ、聞屆けてたもるとか。

およし　シテ、お頼みと仰しやりまするは、如何なる仔細で御座りまする。

母　どうぞ今から、この母を連れて、退いては呉れまいか。

三人　エヽ。何と仰しやりまする。

（トこれより謠への合方になり、）

母　改めていふには及ばねど、悴内藏之助は實子にあらず。他家より養子に貰ひしかど、今の所行に似もやらず、幼年よりの發明は、播州赤穗の城内にて、並ぶ者なき秀才に、冷光院樣の御鑑にて、城代家老に登庸ありしは、先祖の家

を他家より來て引起せし孝行者。過去り給ふ賴母殿も、嘸や冥途でお喜びと、永の年月悅びしその甲斐も無う主家の騷動。おのれ、やれ、主君の敵と上野殿をつけ覘ふ忰の所存と樂む中、日增しに募る遊所通ひ。誰しも悋氣はあるものを、嫁が愼み煙にも夫の不埒をこの母に隱してそれと知らさぬ程、心苦しく思へども、深き所存のある事と、放埒惰弱を其儘に、打捨て置きしが恥かしさ。今日といふ今日、愛想もこそも盡き果てゝ、最早片時もこの家に留まる心はさら〳〵無い。とあつて外に賴るべき緣者とてもあらざるゆゑ、一旦嫁して舅姑の固めを結ぶも緣ぞと思ひあきらめ、この母を一緒に伴ひいづれへなりと連れて退いてはたもるまいか。それがそなたへ賴みぢやわいなう。

（ト愁ひ、こなし宜しく、およし、思入れあつて、）

およし　勿體ない、そのお詞。そりやもう、お賴みなされませいでも、一旦親子の御緣を組み、產の母にも增さりたる姑御樣を、何としてお見捨て申して行かれませう。殊更實の母人も、三年以前にこの世を去り、便少なき妾ゆゑ、姑御樣を豐岡へお伴ひ申しまして、朝な夕なの御介抱致しまするで、御座りませう。

母　スリヤ聞屆けてたもるとか。何にもいはぬ、嬉しいわいなう。

主稅　さては、婆樣母上にも、御立腹をなされまして、里方但馬豐岡の石塚殿へ、諸共にお立退きある御所存とナ。

寺坂　その御立腹は御道理ながら、何卒お心取直され、何とかかんとか、旦那樣へ御意見をお加へ遊ばし、其上の事になされませ。これがお若い身ではなし、御年配のお方といひ、元より秀才英智なる旦那樣ゆゑ、忽ちに御本心にお返り遊ばし、御主君樣の敵をばお討ちなさるゝお心におなりなさるで御座りませう。下郎の口から小賢しく譬を申すも恐れながら、お庭に積る白菊を手折つて活けし活花も、眞は卽ち旦那樣、添も流も、奥樣や御母公樣のあしらひゆゑ、此儘崩すか矯直すか、善惡邪正は、白菊の花を枯らさぬ御思案こそ、願はしう御座りまするわえ。

およし　イヤ〳〵、それは大きな僻事。只今そちがいふ通り、これが若い身ではなし、四十路も越えし身の上に、酸いも甘いも御存じのお人が、色にお迷ひなされ、身を持崩す上からは、足らはぬ女の分際で、御意見申上げるとも御用ゐなされう筈がない。

母　ソリヤもう、嫁女がいふ如く、意見を

するは釋迦に說教。又只今より改心なし、人にいはれて大望を企つやうな所存では、所詮成就は覺束なし。

主税　スリヤどうあつても、婆様には。

母　嫁諸共に離別を受け、この家を立退く心ちやわいなう。

寺坂　さては、奥々奥様にも。

およし　主税を始め三人まで、子仲なしたる共にも、離別を受けねばならぬわいなう。

主税
寺坂　ハテ是非もない。

（ト本意なき思入れ。母、こなしあつて、）

母　思へば、孫など三人まで儲けし仲の夫婦間。

およし　たとへ放埒なされればとて、忠義の二字が世になくば。

主税　弓箭を捨てし身は安く、積りて見れば老の坂。

寺坂　御裕福なるお暮しに、見て見ぬふりもなされうが。

母　武家の行儀は忘れても、主君の御恩は忘られず。

およし　たゞ、殿様の御無念を思へば、寢ても忘れぬ程。

主税　汚名を忍ぶ年月よ。

寺坂　忍び方なき御立腹。

およし　胸も張裂く。

（ト四人顔見合せ、愁ひの思入れあつて、淚を拂ひ、）

四人　思ひだやなア。

（トこの模樣。時の鐘の合方にて、道具廻る。）

本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し、風雅なる襖閉て切り、正面の上の方、一間の床の間、前に花瓶、菊の花を入れてある事。この下手、一間の違棚、地袋戸棚。下手一間、腰張の茶壁。此處に結構なる絹布の夜具蒲團を敷き、前幕の大石着流し、平舞形にて寢て居る。枕許に畫巻物ある事。これを以前の吉千代大三郎くり擴げ、枕許にて見て居る。この見え。床の送りにて道具留る。

〽夢の世や。慈童が菊に邯鄲の榮華と見せて、三略の策をめぐらす、大石が底意も深く、肺肝の工夫を碎く枕許。子は白川の草紙にも、比する畫巻を繰り開き、兄弟餘念無かりける。

（トこのうち、吉千代大三郎兩人、件の畫巻物を見る事、宜しくあつて、）

大三郎　兄上様、コリヤ何の繪で御座ります か。

吉千代　わしにも譯が分らぬゆゑ、父上様に伺はうわいなう。

大三郎　左様ならさう致しませう。

〽兩人左右に立寄りて。

（ト二人、大石の枕許へ來り、）

吉千代　申し父上様、もう夕景で御座りますが。
大三郎　お目をお醒しなされませ。
吉千代　父上様。
大三郎　父上様。
〽揺り起されて目を醒し。
（ト大石、やはり寝てゐながら。）
大石　オヽ、誰かと思うたら、吉千代に大三郎。折角面白い夢を見て居つたのに、何用あつて起したのぢや。
吉千代　お枕許にこの様な畫巻物が御座りまするが。
大三郎　コリヤ何の繪で。
兩人　御座りますか。
〽聞かれて、心つくづくと頰杖なして起上り。
（ト大石、腹這ひになり思入れ。）
大石　イヤ、とんだ物を見付け居つて、父に赤面を致させをるわい。
吉千代　ナニ、赤面を。
兩人　なされますとは。
大石　イヤ其方たちはまだ知るまい。コリヤ島原の廓にて、父が馴染の太夫職を似顔寫せし畫巻物ぢや。
吉千代　さうしてこれをお枕許へ。
大三郎　なんでお置き。
兩人　なされました。
大石　イヤ、さまざまな事を聞きをるわい。
（ト合方になる。）
さう聞かれると面目ないが、父がためには六韜三略。大切な畫巻物ゆゑ、一寸晝寝を致すにも、かれめと一緒に居る心で、枕許にて繰開き、眺めながら臥して居るのぢや。その靈驗の著く、廓の態を夢に見て、太夫と二人さし向ひ、積る口說の數々を、いはれついひつ、樂しむ折から、其方たち二人に揺起され、肝腎な所で眼が醒めたが、吉千代も大三郎も、父を見習ひ、大きうなつたら斯ういふ綺麗な廓へ行き、太夫を買うて遊んで見やれ。それはそれは面白いものぢや。どれ繪解きをして遣はさう。
〽よしなき道へ引入れて、わが子に種をまく枕。廓の夢の醒めやらぬ、繪の具も床の裲襠や、彌陀淨土と夕告の折から誰か一間より、老母と共に女房が常に變りし面體も、腹改めて立出る。姿見るより兄弟が。
（トこのうち、大石腹這ひになり、件の畫巻物を段々に繰擴げ、兩人の子役に見せて居る。よき程に、上手の襖を明け、以前の母先に、およし立出て、母は上手、およし下手へすまふ。子供兩人、これを見て。）
吉千代　ヤ、母上様。
大三郎　婆様か。

大石　ナニ、母上が渡らせられたと。
〽流石、義理ある母の前。書卷を隱す搔卷や蒲團を拂ひ、座に直れば、老母はいとゞ恨めしく。
（トこのうち、大石、件の書卷物を手早く卷いて搔卷の中へ隱し、蒲團を後へ丸め、よろしくすまふ。こなしあつて、）
母　コリヤ内藏之助。ようも大事な孫共に廓通ひの繪解きをして、よしなき道を敎へて吳れしぞ。
大石　さては、母人お聞きありしか。
（ト思入れあつて）一大事とはなりにけり。
〽腹に殘りし酒の香を、詫に引出す夫の樣子。見る女房は詰め寄りて。
（トこのうち、大石生醉のこなしにて、俯き居る。およし、こなし、）
およし　モシ、旦那樣。今更、何を申しませうとも、所詮お耳へは入りますまいと存じますゆゑ、妾はもう何事も申しませぬが、どうぞ今日、改めて御離緣なされて下さりませ。
〽思ひつめたる一言も、二世の別れをよき幸ひ。
（ト大石、思入れあつて、）
大石　ナニ、離緣して吳れとナ、コリヤ女房。出かし居つた。ア、イヤ、離別とは忝い。丁度これに母人がおいであるこそ幸ひなれば、そちが何にも申さぬとあれば、手前も何も申さず、離別の狀を認め遣はす。
〽醉うたふりにて、立上るを。
（ト大石、ひよろ／＼としながら、立つて上手へ行かうとするを、）
母　コリヤ、内藏之助。それへ出い。
大石　何ぞ、御用で御座りまするか。
母　そちや、貞節なる妻を去り、身請けしてある遊女をば跡へ入れる心なるか。
大石　中々もつて左樣な儀は。
およし　イエ／＼、お隱し遊ばしまするナ。七百兩にてお身請をなされましたる證文が、コレ此處に御座りまする。
〽思ひ掛けなく、妻の手より身請の證出て恟り。
（トおよし、以前の證文を出して、大石に見せる。）
大石　どうしてそれが。
母　見下げ果てたるうつけ者めが。
（トこれより床の合方になる。）
それなる嫁女は、誰あらう但馬豐岡の城主京極侯の家老職石塚傳五右衞門の息女にて、過去り給ふ賴母殿の心に叶ひ當家へ嫁入り、假初ならぬ廿年連添ふのみか、三人迄も子仲なしたる妻ならずや。系圖正しき身分といひ、夫に貞節、姑へ孝心。女子の道に何一つ缺けし事なき妻を去り、素性賤しき君傾城、遊女とやらを身請けなし、妻にせうと

は何事ぞ。腹こそ痛めぬそちなれど、幼年の頃養子となし。

〽母は左樣なうつけには、育てぬものを。なんとしてそちに天魔が魅入りしぞ。

大切な身でありしながら、賣女に魂奪はれて、本國離散の其砌り企てせしも何處へやら、忘却なせしか、情なや。御恩をうけし大石の家は代々家老職。妻子眷屬養ひし其君恩を忘るゝは、畜生にも劣りし事。女ながらもこの母が、亡君御最期遊ばせし。(ト思入れ。)

〽その御無念は、片時も忘れし事はないわいなう。

それに何ぞや、其方は家老職の身でありながら、主家の恥辱も顧みぬ、かゝるうつけな人外と一つに居るも胸苦しく、嫁女を頼んで、この母は石塚殿の方へ行き、老年寄つて家もなく、氣がね苦勞もおのれゆゑ。いはうやうなき不孝者めが。

〽譯の白髪の母親が寛く齒嚙みの悔し泣き。かゝる歎きは疾くよりも覺悟の前と堪ゆれど、堪へぬものは君恩の涙ぞ、遣瀬なく泣き伏せば、傍に女房はたまり兼ね。

(トこの中、大石泪を隱すこなしあつて、トヾ、打臥して仕舞ふ事。およし、思入れあつて、)

およし　モシ旦那樣。もう何事も申すまいと思へど、いはで叶はぬは姑御樣のお歎きを見るにつけても、おいたはしい。そりやもうこれ迄、妾は生みの母にも增りたる御恩を請けし姑御ゆゑ、たとへ但馬へお連れ申し、御介抱を致せばとて、父の手許で、何一つ御不自由はおさせ申さねど。

〽長の年月嫁さへお心置かれ、朝夕の世話さへ嫁の手を借りず、お年は召せど無益には、人を召されぬ御氣質に。

まして斯ういふ子供等をお連れなされて厄介ぞと、嘸やお氣兼ねなされませう。それが今更目の前に、見え透くやうで苦勞になり、思ひ遣られてなりませぬ。

〽老の心を察しやる、嫁が孝心健氣さに義を金鐵の大石も、肝に磐石打たるゝ思ひ。亂れ心も、肝膽にかつての廉を取押へ。

(トこの中、大石愁ひの思入れ宜しくあつて、わざと氣を替へ、)

大石　イヤ母の述懷、女房の繰言、長々しく承り、御尤もには聞えますれど、爰をよく／＼お聞き下され。そりや手前が、母人や女房に無理でも申して、是非出て行けと申したら、そのお歎きも

御座らうが、義理ある中の母人ゆゑ、左樣な不當は決して申さぬ。それを手前が遊里へ通ひ、太夫を身請け致せしとて、お腹立てお見限りに預り、母人始め女房にまで愛想をつかされ、離別の狀認め與れとのお賴みにまかせ、止むを得ずして暇を遣はす。又御み足を留めんとて、只今よりして改心なし、大望の義を企つとも、一旦斯樣に身を持ち崩し、同志の者に疎まれし手前で御座れば、所詮無駄事。そこを存じて、敵討ちはさらりとやめて、一生涯この世を樂に送る心底。ドレ望みゆゑ、離別の狀を只今認め遣はさん。

〽歎きを隱す溜淚。こらへて奧へ入りにける。後に兩人、嫁姑、何と詞も泣くばかり。子は幼くも利發にて、始終の樣子打案じ。

(トこの中、大石思入れ有て、上手へ入る。

子役兩人、眞中へ出で、およしに縋る。)

吉千代　申し母上樣。お婆樣が、お腹立にてお里へ行くとおつしやるなら、お詫をなされませ。

大三郎　どうぞ、やつぱりこのお家に。

吉千代　おいでなされて。

兩　人　下さりませ。

〽右と左に、兄弟が縋る心のいぢらしく、歎きに沈む母親が。

(トこのうち、子役兩人、およしに縋る。これにておよしわつと泣き沈む。こなしあつて、)

およし　オヽ尤もぢや〳〵。嘸や二人の子心では、この家に此儘ゐたからうが、一緒に置いて行かれぬは、今も今とて其方たちに廓通ひを敎へる程な、心得違ひの父の許へ、殘してゐては亡君の御靈へ濟まぬわいなう。それゆゑ、母が豐岡のお爺樣の所へ、連れて行き、其方たち二人を成長させ、兄の主税と諸共に東へ下らせ、吉良殿のお乘物へなと近付かせ、たとへ本意は遂げずとも、敵を引受け切死にさせ、父が汚名を雪がせねば、母の役目が濟まぬわいなう。

〽云諭されて、子心に勇む吉千代大三郎。

(ト子役兩人、思入れあつて、)

吉千代　それゆゑ、試合の稽古して、殿樣の御無念を晴らしませうと思ひます。

大三郎　一太刀なりと、吉良樣をお怨み申して死ぬ時は。

吉千代　武士の本意で。

兩　人　御座ります。

〽死ぬを厭はぬ武士の胤、母と老母はうち悅び。

母　オヽよう云うた。出かしやつた。蛇

は寸にして昇天の萠しありとは、今ぞ知る。孫が健氣を聞く悦び、婆も嬉しう思ふわいなう。

およし　僅か七つか九つでも、君の御無念承繼いでかゝる萠しのあるものを、如何なればこそ、旦那樣。あんなしがないお心に、おなりなされた事なるぞ。ちつとは二人の子供等が、心にお恥ぢなされませいなア。

〽奥の夫に聞けがしに、謦むるも吐息。次の間に、始終聞居る吉右衛門、下女も泪に轉び出で。

（トこのうち、およしこなし宜しく。下手の襖をあけ、以前の寺坂吉右衛門先に、下女出て、）

寺坂　オヽ、お出かしなされた、坊樣方。そのお心のある上は、及ばずながら下郎めもお供致して東へ下り、やがて御本意遂げさしまして、人の笑ひとおなりなされた旦那樣の、御恥辱を雪ぐやうに致しまする。

下女　ホンニ〳〵、あのやうな助兵衛の旦那樣には、家來の方から愛想がつき、出て行く心になりました。御母公樣や御新造樣が、豐岡へいらつしやるなら、お邪魔ながら私もお供にお連れ下さりませ。

およし　さういふ心であるならば、連れて行かうわいなう。

寺坂　スリヤ下郎めも御一緒に、お連れなされて下さりますか。

およし　本國にゐた其時より、二人の子供を親切に世話してくれた吉右衛門。連れて行かいでなんとせう。

寺坂　スリヤお供が叶ひますとか。

下女　エヽ、有難う。

兩人　御座りまする。

〽悦び合ふぞ道理なり。口と心の裏道を行く大石は、一間より、衣服改め、双方を胸に疊んで、三方へ遺品の品の數々を載せて携へ、しづ〳〵出で。

（ト上手より、以前の大石繼裃に着換へ、三方に紫の帛紗をかけしを持ち、誂への一腰を携へ、出て來り、宜しくすまふ。これより、床のめりやすになり。）

大石　扨お望みに任せまして、母人には豐岡へお立退きのつもりに計らひ、倅主税に申付け、支度萬端致させ置かば、何時なりとも勝手次第。又女房には、離別の狀認め持參致したれば、これも隨意に致すがよい。（トおよしの前へ去り狀を出し、）又兩人のそれなる倅、男子は男に付くと申せど、何をいふにも幼年ゆゑ、母諸共に豐岡の石塚方にて成長なし、兄吉千代が人となり十五歲にも相成らば、御本家たる藝州

公へ系圖をもつて願ひ出で、たとへ僅かな祿たりとも、頂戴なして大石の家相續を致すがよい。卽ち系圖は兄への贈り物。又弟の大三郎は、この內藏之助が幼年の折、父より讓られ傳へたる一腰、小柄の表は金無垢にて、二句の唐歌彫付けあり。(ト思入れ。)

〽兄へは系圖、弟へは渡す刀の小柄を拔取り、

(ト件の帛紗を取退け、系圖の一卷を出し、吉千代の前へ出して、一腰を取上げ小柄を拔取り、彫付けてある詩を讀みながら。)

萬山不重君命重し。一命不輕して、義に依つて輕し。(ト思入れ。)サア、この意を必ず忘却致さず、いづれへなりと仕官なし、末世に美名を殘しくれよ。

(トこれまで眞面目にいつて、大三郎の前へ刀を置き、思入れあつて、氣をかへ。)なぞと口では立派に申せど、實も最早持崩れ、置いても邪魔な系圖と一腰、二人の悴に讓り遣はす。邪魔でないのはこの金子ぢや。(ト三方の上の百兩包を二つ取出し、又眞面目になり。)さて母人のお手當も如何やうなりと致したいが、當今手前も物入り多く、甚だ金子が逼迫ゆゑ、又後々より、追ひ〲に金策致し、お送り申す。當座の路用二百金。何卒お持ち下されい。

〽差出す金子、見もやらず。

(ト大石、母の前へ件の金を差出す。母むつとせしこなしにて。)

母　イヤ要りませぬ。人でなしの悴より、貢をうけるいはれはない。左樣な金子は、無駄な事。たとへ僅かな金子たりとも、貰うて行けば身の穢れぢや。

大石　さては、御意に叶ひませぬか。左樣に仰せなされずと、お持ちなさればよい事を。然らば斯樣仕らう。今日よりして隙をとり、お供にお連れなされまする寺坂吉右下女のりん、右兩人に持たせ上げますれば、旅中に於て宜しきやう。

寺坂　アイヤ、左樣な金子とあれば、頂戴致す謂れはなし。そちらへお返し申しまする。

下女　モシ〲吉右衞門さん。お前が嫌なら、妾が預かり、お賄ひをしようわいなア。

およし　アヽコレ、穢れた金子を取りやつたら、三世の緣もこれ切りぢやぞ。

下女　それでも、見す〲二百兩。

およし　必ず取つてはなりませぬぞ。

下女　はアい。

(ト是非なく控へる、大石思入れあつて。)

大石　ハテサテ、揃ひも揃つたる頑な

な人物ばかり。それ程嫌がる金子なら、無理とは決して申さぬ。先づ此方へ納めて置けば、父の遺品の系圖と一腰、去り狀持つて退散致せ。

〽樣子見て取り、子心に遺品の品を取り兼ねて。

(トこのうち、子役兩人、宜しくこなしあつて、)

吉千代　申し婆樣、これは如何。

兩人　致しませう。

母　家の系圖と一腰は、放埓者には不用であらう。それは貰うて行くがよい。

吉千代　左樣なればお遺品に。

大三郎　戴きまするで。

兩人　御座りまする。

〽祖母が許しに、兄弟が父の遺品と悅びて貰ふ系圖や一腰に、二世の夫の離緣狀。泪ながらに取る妻の心を汲みて都の別れ。

(トこのうち、吉千代は系圖、大三郎は一腰を手に取り、嬉しき思入れ、押戴き、およしは件の去り狀を取上げ、愁ひの思入れにて、懷中する。大石双方見て、愁ひを隱してこなしあつて、)

大石　夜船へ乘るとは申しながら、最早夕景、お支度を。

母　エヽ、そちの指圖は、受けませぬわいなう。

〽腹立つ儘に、立上る。次の一間を大石の主稅泣く〱立出づる。悴はそれへ手をつかへ。

主稅　ハッ、お支度萬端整ひますれば、いざ御發足なされませ。

〽樣子に母は訝かしく。

(トおよし、主稅の態を見て、心得ぬこなしにて、)

およし　コリヤ悴、定めて樣子は聞いたであらうが、お暇出でし上からは、母はこれより姑御樣と二人の子供を伴ひて、豐岡へ行く程に、そちも一緒に行くであらうの。

〽いはれてハット差詰まり。

主稅　ハッ、(ト思入れ。)お見送りは致しまするが、拙者ばかりは御一緒には。

およし　ムヽ、そんならそちは放埓者の夫の傍に居たいといやるか。

主稅　ハッ、居りたい事も御座りませねど、父の許しの出ぬうちは、御一緒には參られませぬ。

(トもぢ〱して居る。母思入れあつて、)

母　放埓者の悴に引きかへ、テモ物固い孫が心底。コリヤ〱主稅、心配しやるな。たとへ父が許さいでも、婆が許す。一緒に行きや。

主稅　デモ、私は、やはりこの家に。

およし　ムヽそんなら其方は、この家に殘つて居たい心なるか。

主税　どうぞ、この儘、私はお置きなされて下さりませ。

（トもぢ／＼して居るゆゑ、寺坂、前へ出て、）

寺坂　これはしたり、若旦那。如何なされたもので御座りまする。御恩になつた我々さへ、旦那様に愛想が盡き、御母公様のお供をして、豐岡へ參りまするに、貴方お一人、旦那のお傍に殘つておいでなされまするとは、放埒者が移りまするぞ。

主税　サア放埒が移らうとも、どうも一緒に行く譯には。

〽それと云はねど、兎や角と、殘りたがるを悟る母。

（トおよし、こなしあつて、）

およし　そんなら、そちは後に殘り、姑御様やこの母が、居ぬのを幸ひ、旦那殿と同じ様に遊里へ通ひ、放蕩不埒が致したいか。

主税　全く以て、左様な儀は。

およし　さなくば、母と諸共に豐岡へ行きませうぞ。

主税　サ、それは。

およし　否むは矢張り不埒がしたいか。

主税　全く以て。

およし　そんなら行くか。

主税　サア。

およし　サア。

兩人　サア／＼／＼。

およし　何の爲あつて、放埒の父の手許に殘りたいか。それが聞きたい。どうぢやぞいなう。（ト思入れ。）

〽問詰められて、返言に曇りなき身の當惑も、母が當然。神ならで佛の位牌取出し、情の笞てう／＼／＼。打たるゝ身より打つ悲しさ。

（トこのうち、およし紫の帛紗に包みし位牌を取出し、主税を引きつけ、散々に打擲なし、）

コリヤ倅。如何なればこそ、そちまでが放埒惰弱な夫を見習ひ、武士の性根を失ひしぞ。母はともあれ、姑御様が一緒に行けと仰しやるを、否むは正しく後へ殘り、放埒惰弱になりたいか。あれ見よ、淺野の家來たる大石親子は、君恩忘れ、色に魂奪はれて、不忠不義をば働くかと、人に疎まれ指さゝれ、笑はるゝのが口惜しさ。吉千代大三郎の兩人も一緒に連れて行くではないか。それに何ぞや、そち一人後へ殘るは何事ぞ。たとへ世に無きお方でも、爺様のお位牌は後へ殘してゆきともないと、姑御様が仰しやるゆゑ、石塚方へお連れ申し、總領ゆゑに其方を以て、大石の家相續と思ひし甲斐も情なや。後へ殘るとあるからは、曾祖父様のお

怒りをうけ繼ぐ母のこの折檻。何と骨身に應へたか。
〽又打ちすゑて突放す、情の笞荒折檻。傍に見兼ねる吉右衞門。
（トこのうち、およし、主税を打つて突放す。寺坂、傍へ差寄り、）
寺坂　モシ、若旦那。又下郎が差出るかと思召すかは存じませぬが、貴方のおためを思ひますゆゑ、どうも默つて居られませぬ。ソリヤ、もうお若い身そらでは、旦那樣と御一緒に後へ殘つて、おいでなされて、遊里通ひや色狂ひと、自由がしたう御座りませうが、それでは冥途の殿樣へ濟みませぬ。せめては、貴方が親御樣の汚名を雪ぐそのために、御舍弟樣と諸共に東へ下つて敵を討ち、末世に殘る譽れをして、美名をお上げなさらいでは、腰拔け武士だと云はれまするぞ。その他恥辱にならぬやう、及ばずながら下郎めが、お手助けを致しますれば、今母御樣の御意見につき、御老母樣とは御一緒に御出立をなされませ。モシ若旦那、お出でなされませ。さア〳〵早くお支度をなされませ。
（トいへども主税さし俯いて居るゆゑ、）
エヽ、これ程、下郎が申すのにお聞入れは御座りませぬか。不甲斐ないお心ぢやなア。
〽忠義に凝りし寺坂が、悔し泪ぞ道理なる。老母は始終うち見やり。
（トこのうち、寺坂宜しくこなし、母こなしありて、）
母　モウよい〳〵。捨てゝ置きや。もうもう左樣な不甲斐ない人非人の孫は要らぬ。後へ殘し行く程に、父と諸共惰弱になり、世の物笑ひになりませうぞ。其代りにはこの婆も孫でもなければ子でもない。七生までの勘當ぢやぞ。
〽立派にいへど、心にはあたら若木を斯くまでに、うつけにせしもわが悴。思へば憎し不愍やと、胸にせき來る血の涙。咽る老母に大石が介抱なせば、突退けて。
（トこのうち、母宜しくあつて、泪に咽びひよろ〳〵とする。大石、術なき思入れあつて、トヾ堪へかね、母を抱き起す。その手を拂ひ、きつとなつて、）
エヽ要らぬ介抱。穢れるわいなう。サア嫁女。來やれ。
〽泪の果てし中の間へ、支度に立つや嫁姑。二人の孫を伴ひて、家來引連れ入りにける。
（トこのうち、母は吉千代、およしは大三郎の手を引き、寺坂、下女ついて、上手へ入る。）
〽母の行く影伏拜み、口にいはねど

大石が詫びる不孝も、一筋の忠義に
絡む京調べ。
（トこのうち、大石上手へ向ひ、両手を
つき詫びるこなし宜しくあつて、後の下
手の壁に掛けてある、三味線を取り、こ
ちらへ來り。）
大石　アヽ今日は九月の節句なるに、
面白からぬ離別の混雜。三味線でも彈
いて飲みかけようかえ。
〽浅らさぬ歎き、遊興につのると見
する父の策。
（トこのうち、大石、三味線の調子を合は
せる事よろしく。主税愁ひの思入れあつ
て、大石の傍へ行き。）
主税　父上様へ、改めて一つのお願ひ
が御座りまする。
大石　何、改めて願ひとは。
主税　餘の儀にては御座りませぬが、
せめて一世のお別れに、祖母様ばかり
へ、かの儀を。
大石　スリヤ、一大事を明かしたいか。
主税　御存じなきゆゑあの様に、父や
拙者を人外と思召しての御立腹。餘り
と申せばおいたはしい。せめて大事の
小口なりとも。
大石　エヽそれをお明し申す程なら、
かくまで心は勞せぬわい。
主税　でも御座りませうが。（ト立掛か
るを、）
大石　ヤア不甲斐ない。
（ト三味線の撥にて主税の眉間を打つ。
これにて主税ハツト下に居る。双方見合
つて、道具替りの知らせ。）
うつけものめが。
〽いふも泪に。
（ト大石、愁ひの思入れ宜しく、床の淨り
時計の音にて、廻る。）

本舞臺。眞中に九尺の玄關、常足二重、
本屋根本庇、左右海鼠壁の杉戸、正面、白
地中形の襖。前に敷臺を取付け、二重の
上下、圓窓のある白壁。裾通り板羽目。
下手一面の四ツ目垣。これへ菊の盛りを
見せ、上の方よき所に松の立樹、日覆より
同じく釣り枝。總て玄關、庭續きの心よ
ろしく、床の淨りにて、道具留る。
〽暮近き早入相の鐘につれ、旅の用
意も伏見より夜船で下る浪花路や、
頃しも秋の菊見月、晝は身輕く朝夕
の冷氣を厭ふ雨掛の荷物は重き主の
恩。送る下郎が身支度に下女もがら
付く荷拵へ。
（ト上手より、以前の寺坂、鍋の一本差、
脚絆手甲草鞋にて、菅笠を取付けし雨掛
を擔ぎ出て來り、下女同じく旅姿、白地
浴衣を上へはをり、草履がけにて、大きな
風呂敷包みと縄で結びし下駄を提げ、出

て來る。このうち始終馬士唄の合方。)

下女　サア〳〵、吉右衛門さん。いづれ今夜は伏見から夜船へお乘りなさらうから、この包は此儘に、妾や抱へて行くわいなア。

寺坂　これはしたり、どうしたものだ。そんな大きな風呂敷包をぶら〳〵抱へて行かれるものか。惡く欲をかゝずと、中を減らして行きなせえ。

下女　なんの、お前、馬鹿らしい。御新造樣から頂戴したまだ新らしい桐の下駄。それにこの夏お貰ひ申した浴衣が二枚に、布子と袷。ちよく〳〵着の半纏と櫛道具に餘所行き帶。餘計なものはありやしない。

寺坂　そんなら勝手にするがいゝが、大きな包みや下駄を提げて、お上の後から附いて行つては、近處へ對して外聞が惡い。一足先へ行くがいゝ。

下女　そんなら、妾や先へ行つて、深草邊りで待たうわいなア。

寺坂　どうかさうして貰ひてえ。

下女　ドレ、それぢや、先へ行かうか。

〽欲と道連れ、大嵩な包み抱へて、とつぱくさ、二足三足四つ這ひに、こけておいどの思ひつき、雪轉しで出でて行く。

(ト下女、花道へ行き、をかしみの身振り宜しくあつて、下駄を手へはめ、包みを轉がしながら、向うへ入る。)

寺坂　いや欲ばつた女だなア。

〽常に馴れたる玄關前。草履を直す折からに、旅の調度も足弱の老母を先に、妻と子が、泪ながらに立出づれば、吉右衛門、手をつかへ。

(トこのうち玄關の中より、以前の母先に、およし子役二人、旅拵へに着替へ、出て來り、寺坂、下手に居て。)

ハゝツ、お支度萬端調ひますれば、イザ御出立なされませ。

母　チ、大儀〳〵。見やる通りの子供連れ。道中筋は猶の事。そち一人が便ゆゑ、何分世話を頼むぞや。

寺坂　其儀はお氣遣ひなされまするな。及ばずながら、下郎めが御介抱をば致しまする。

およし　本國離散の其時も、かういふ思ひであつたれど、又も歎きの重なりて、夫に別れ子に別れ、十二年この方住馴れし家を放るゝ不仕合せ。家來の手前も氣の毒ぢやわいなう。

〽返らぬ旅に繰返す、愚痴の泪ぞ哀れなる。折しも奥の襖もる風が誘ふか細糸の調も高き本調子。

(トこの留り、後にて、上方唄の合方になり、皆々これに聞耳立て。)

吉千代　アレ祖母樣、三味線の音が。

兩人　致しまする。

（トこれにて、母、思入れあつて、）

母　いはゞ親子が一世の別れ、人の皮きた人間なら、玄關迄も見送る筈。

およし　その禮儀さへ何處へやら。旅立つ者に當てつけた、あの三味線は、何事ぞ。

寺坂　あゝも、お心取亂し、たはけたお方になられしか。いつそ下郎が行きがけの。

母　ア、イヤ、最早これ迄。捨ておきや。

へ泪にわかぬ履物も、それかこれかと立出づる、庭に盛りし花までも萎れて露を銜草。

（トこのうち、皆々草履をはき、愁ひのこなしにて、下手へ行く。これにて知らせなしに、道具半廻りになり、下手一面の菊畑になり、後、白壁の張りもの。この中三味線、パッタリ止んで、上手の玄關へ以前の大石出て、これを見送り居る。子役兩人、これを見付け、後へ歸り大石の前へ手をつかへ、）

吉千代　さやうなれば、父上樣。

大三郎　隨分ともに。

兩人　御機嫌よう。

へいはれて、胸に張裂くる、泪隱してひれ伏せば、母はさこそと尻目に掛け。

（トこのうち、大石、玄關先式臺の柱の蔭へひれ伏す事宜しく。母これ

母　を見て、）

コリヤ嫁女。見やつたか。放蕩頼惰の人外でも、父と思へば孫どもが兩手をついて庭先へ禮儀を述べるいたはしさ。そちが腹とはいひながら、あんなうつけな悴めに、似氣なき孫であるわいなう。

およし　それでも、少しは人らしう、二人の子供に挨拶され、面目ないか、敷臺にさし俯いて居られまする。

寺坂　サア〳〵、坊樣。斯樣な處に長居を致すと、人でなしの臆病風が移りまする。こちらへおいでなされませ。

〽縋る子供を、寺坂が連れて氣もせく出立に、姑の手前女房は、未練を顔に見せねども、足の運びの後や先、思ひは殘る妹脊の別れ。

（トこのうち、寺坂、兩掛を置いて、二人の子供をこちらへ連れて來る。これにて母は吉千代、およしは大三郎の手を引き、花道へ掛かる。これにつれて道具丸て廻り、舞臺は一面に菊畑になり、皆々花道に留り、思入れありて、）

母　思へば今日は、重陽によき事菊の盃も世が世であらば、祝さんに。

およし　九月小袖も何處へやら、一世と二世の憂き別れ。

寺坂　主從三世も、咲く花を、後に殘して行く道も。

母　梅の名に呼ぶ、浪花津や。

およし　よしあし引きの大和路を。

寺坂　流石に曇る雨催ひ。

吉千代　どうやら悲しう。

兩人　御座りまする。

母　ア、コレ、未練な心は出すまいぞ。

〽心弱くも、足弱の夜船へ急ぐ旅枕、伏見をさして出でて行く。

（トこのうち、皆々愁ひのこなし宜しく、氣を替へて、向うへ入る。こゝへ上手より、大石草履を履き、出て來り、伸び上りながら向うを見送る。）

〽蔭見ゆる迄見送りて、こらゆる涙一時に、我を忘れて大石が、不覺の歎きはら〳〵〳〵。雨に溢るゝ懸樋の車軸を流す如くなり。

（ト大石、舞臺へどうとなり、愁ひの思入れ。）

大石　昨年來、不慮のみ多く、男子勝りの母人もわが胸中を御存じなきゆゑ、不忠不義と仰せありてわが家を捨てゝ妻諸共、孫の手を引きお出でありしが、思ひ廻せば、アヽおいたはしい。

（ト思入れ。めりやす。）

コレ母人。義理ある中の拙者めゆゑ、これまで成長の御丹誠も空しくなりし恩を仇、嘸人外とも思さんが、大望抱く身の上は、たとへ親子の中なりとも

秘する大事は明かされず。かゝる歎きのある事は、無くて叶はぬ離別と、覺悟は極め居りしかど、身請の一儀かせとなり、このお見限りをうけ、望む所のわが幸ひ。さはさりながら、幼年より父の教訓、母の金言、守りに守る內藏之助が二ヶ年越しの放埒に、母を欺く勿體無さ。これも偏へに亡君の修羅の御無念晴らさんと計る本意が遂げたさゆゑ。孝の一字を顧みず、忠義の二字に意を貫く、良雄が胸中本懐を遂せし砌りにお悟り下され。

〽不孝の罪を餘所ながら、詫びる賢者ぞ斯くやらん。こゝへ門外の小溝にあらで思慮深き間光興入來り。

（ト橋懸りより、前幕の間重次郎、着流し大小にて、出て來り、下手に居て、）

間　大石氏。苦肉の計策、圖に當り、嘸御滿足に御座りませう。

大石　重次郎殿。お悦び下され。去月貴殿が師信の倅と僞り、島原なる扇屋方へ夜半の頃、畫卷物を御持參下され、敵地の畫圖と聞ゆるやうに、密談召されしそれゆゑに、敵の間者が內見せんと望むを幸ひ開き見せしに、案に相違の遊女が姿繪。それゆゑ眞のうつけと悟り、最早都を引拂ひ、間者は東へ下りし樣子。

間　まつた、只今御閑居へ參る道にて、お出合ひ申し委細某承つたが、遊女を身請け致されしを、御老母君や御家內が御立腹にて、豫てより貴殿が頭痛に疾まれたる離別萬端整ひ、最早東へお下りも心に懸かる雲も無く、嘸御滿悅に御座りませう。

大石　仰せの如く、それゆゑに一つの安堵致して御座るが、大事の際に悴めが母へ密事を明かさんと、いひがひの無き我への勸め。

間　ムウシテ〳〵、大事をお明かしありしか。

大石　イヤ悴を打据ゑ、安々と母女房を離別致した。

間　流石は、大石內藏どのなり。

大石　先づ〳〵宅へお入り下され。

〽密事を語る折からに、主税は何か携へ出で。

（ト上手より以前の主税、紫の帛紗へ包みし短册を持ち出で來り、）

主税　父上へ申上げます。只今母が出立の後、とり片付けんと致せし所、鏡の上に斯樣なる包みし品が御座りました。

〽差出す帛紗開き見て。

（ト大石受取り、短册を出し、）

大石　コリヤこれ、母が自筆の短册に認め殘す一首の歌。

間　シテ／＼、それは何とで御座るナ。
大石　『遁れしと思ふ浮世にながらへて、子ゆゑにかゝる露の袖かな』
主税　スリヤ斯程まで、祖母様には。
大石　この内藏之助を情無しとお歎きあつての御述懐。
間　これも誰ゆゑ、吉良どののゆゑ。
主税　おのれ、上野。
主税 間　今にぞ思ひ。（トキツトなるを、）
大石　やがてお詫の。
（ト向うを見込むを、木の頭、）
時節があるわい。
（ト件の短册を押戴き、懷中する。間、主税引つ張りよろしく、）
〽後の譽ぞ。
（ト床の三重、本釣鐘の送りにて、）
幕

十月

松井町酒屋の場
吉良家奥殿の場

（ト日覆の月附、十月に替り、）
本舞臺。上手へ寄せて、三間の間。常足の二重。下手一間の落間。正面、板羽目。酒樽の書割。いつもの所、門口。この外、黒塀、用水桶。これへ本所松井町といふ札を打つ。二重の正面、暖簾口。この上一間の神棚。これへ神酒徳利、赤の飯なぞ、供へあり。上の方、中仕切のある間平戸の戸棚。此前に、帳場格子。下手の向う、板羽目。これへ帳面通等書割。門口へ伊勢屋といふ暖簾を掛け、總て酒屋店の體。こゝに粗末なる酒肴の道具を取散し、新相中の中間三人、酒に醉うたるこなしにて踊つて居る。下手に伊勢屋番頭伊吾助實は矢頭右衛門七、前垂掛け、向う鉢卷、襦袢肌脱にて呑口の栓にて、一升樽の底を叩き、囃したてゝ居て、この見え、かつぼれの唄へ角兵衛の唱物を冠せ、幕あく。
△□　沖の暗いのに白帆が見ゆる。あれは紀の國蜜柑船。
○　ソレ甘茶でかつぽれ。鹽茶でかつぽれ。
伊吾助　サア／＼、酒はいくらでもあるから、たんと呑んで踊つて下され。年に一度の夷講だ。
○　草鞋を造つて貰うて、溜めたなけなしの錢でせえ、年中酒に入上げることちとら。
△　只呑む酒と聞いた日にやア、明日が日、醉的にならうとも、呑まずにや居られねえ。
□　併し先刻から、三人で三升ばかりも食つたから、主人の前へは二升位に。
三人　さばを讀んでおいて貰はう。
伊吾助　イヤ今日ばかりは、一升でも餘計に呑んで下さる方が、家の旦那が悦

びます。

○　そいつァ、なんにしろ有難い。

△　とてもの序でに、明日の分まで。

□　呑み置きをして、置かにゃならねえ。

伊吾助　サア／＼、もつと踊つた／＼。

三　人　合點だ。

（ト右の唄になり、伊吾助樽を叩く。三人は頻りに踊つて居る。こゝへ暖簾口より伊勢屋主人五郎兵衛、實は神崎與五郎、青流し前垂掛け、町人の拵へにて出て來る。これを見て恟りして、）

伊吾助　ヤア旦那が來た／＼。

三　人　何だ。團子が來た。

伊吾助　イエサ、家の旦那よ。

三　人　そいつァ大變んだ。（ト皆々もぢ／＼して下に居る。）

五郎兵　コレ伊吾助、貴樣迄が同じ樣に商賣物の樽を叩き騷ぐとは、どういふものだ。鉢卷を取つて、肌を入れぬか。

伊吾助　へイ。

（トもぢ／＼して、下に居る。中間三人、氣味惡さうに、）

○　イヤこれは御亭主、五郎兵衛さんか。今日はこつちの夷講だといつて、中間仲間を呼んで下され。

△　こんなに御丁寧な御馳走になるとは、不斷碌な買物もしないで、誠にお氣の毒千萬だ。

□　ツイ酒が廻つて、踊り出したのが、伊吾助さんの科ではない。みんな酒の科。どうぞ勘辨。

三　人　してやつて下せえ。（ト手をついて詫びる。）

五郎兵　イエ／＼その御挨拶では痛み入ります。御案内の通り、私の家は男世帶で女房もなく、子供を入れて三人ぎり、別に親類といつては、御座りませぬから、年に一度の夷講も、內端ばかりでは淋しう御座りますから、それで皆さんをお招ぎ申しました。どうぞ、今日は御寬りと召上つて行つて下さいまし。

伊吾助　モシ旦那さん。お湯へでもお出でなさいませんか。

五郎兵　エヽ、又留守の中に騷がうと思つて。

伊吾助　どつこい、こいつは當てられた。

○　イヤ、醉うていふのぢやねえけれども、こつちの內の旦那位、氣前のいゝ人アありやしねえ。

△　さうとも／＼、何もかもいゝだらけ。先づ第一に世辭がよくつて、酒がよくつて、計りがいゝ。

□　そこで、男が勝れてよくつて、算筆がいゝといふ話。どうかいゝお神さんを持たせてえものだ。

伊吾助　わしも男振りでは負けねえ積り

だ。
○　イヤ伊吾助どんも男がいゝが。
△　親の仕付けが甘いかして。
□　惜しい事にはちつと甘味だ。
伊吾助　そのくせ、内は酒屋だが。
五郎兵　ハテ、貴樣は拔作だといふ事だ。
伊吾助　イエわしの名は伊吾助だ。
○　こいつア大笑ひだ。ハヽヽヽ。
五郎兵　イヤモウ、かういふ酒屋渡世は、中間衆を大事にして、御贔負に預からねば、よい店にはなりませぬ。實の所、賣込みまするには百兩位は貸込みませんでは、これで食べるといふやうにはなりませんが、御贔負のお蔭を持ち、先々月から店を出し、僅か三月になるやならずで、御屋敷樣のお出入を勤むるやうになりましたは、全く皆さんのお執りなし、有難い事で御座ります。
伊吾助　その替りには、油虫が。
五郎兵　ア、コレ。
伊吾助　どつこいしよ。（トロを押へる。）
○　御亭主。一つ猪口、獻じませう。
五郎兵　イエ折角の思召しだが、わしは少しもいけません。
△　酒屋の亭主が酒が嫌ひとは。
□　今まで少しも知らなんだ。
五郎兵　イエ利酒を致しまするには、下戸が一番よう知れます。
伊吾助　旦那の名代にわしが呑まう。
五郎兵　ホヽ、貴樣は呑むにや及ばねえ。
伊吾助　ホイ、又叱られたか。
○　イヤ下戸と云へば、今日は屋敷で時雨の茶の湯を催すといつて、さつき菓子屋を呼びに行つた。
△　大方、晩には靑黄粉の、又、喫みつくらをするだらうが、あんな眞似をして娯むとは。
□　殿樣方といふものは、よつ程馬鹿げた眞似をするものだ。
五郎兵　ヘエ、左樣なら、今晩はお奥にお茶の會が御座りまするか。
○　それから後が歌俳諧。
△　花を活けるの、香をきくのと。
□　又夜更かしをするだらう。
五郎兵　どうか、お奥へ取入つて。
中二人　エヽ。
五郎兵　大方、鷄の啼く迄お樂しみで御座りませう。
○　時に、大分御馳走になつた。そろそろと出かけよう。
五郎兵　まア宜しいでは御座りませぬか。
△　イヤ、門番がやかましいから、醉ひ倒れねえうち、歸るとしよう。
□　併し、足がひよろつくから、どうか部屋まで行けりやアいゝが。
伊吾助　錢の出ない酒だと思つて。

五郎兵衛　エヽ、又、口出しをするか。
伊吾助　ホイ、又叱られた。
〇　そんなら、御亭主。
五郎兵衛　お中間衆。
三　人　アヽ、醉うた〳〵。
（ト角力甚句の唄になり、中間三人ひよろ〳〵しながら橋懸りへ入る。伊吾助これを見送り、門口を締め、こちらへ來り、）
伊吾助 寶ハ矢頭右衛門七　神崎氏。
五郎兵衛 寶ハ神崎與五郎　ア、コレ。
（ト兩人邊へ思入れ。これより合方になる）
貴殿なり、某なり、敵地の樣子を探らんと、大石氏の內意をうけ、當地へ下り八月より、この松井町へ酒屋を出し、貴樣は年がお若い故、わざと愚かに見せかけて、屋敷へ入込み日每の探索。
矢　頭　中間共に酒を賣込み、又或時は振舞とて內へ引入れ、餘所ながら屋敷の樣子を探れども、中間小者に至るまで、嚴しく云付けあると見え、中々もつて大事を明かさず。
神　崎　いまだに密事の知れざるは、時節到來致さぬか。
矢　頭　大石氏にも、近々に當地へお着きと承れば。
神　崎　どうかそれまで密事を探り。
矢　頭　役目の規模が。
兩　人　立てたいものぢや。
（ト角兵衛の鳴物になり、向うより子役、角の大師の丁稚にて、あき樽を提げ、出て來る。後より前幕の寺坂吉右衛門、着流し一本差にて出て來り、花道にて、）
寺　坂　コリヤ〳〵、小僧。この近邊に伊勢五と申す、近頃出來た酒屋はないか。
丁　稚　ヘイ、わたくしの居る家が、伊勢五といふ酒屋で御座ります。
寺　坂　それは幸ひ、案內して呉りやれ。
丁　稚　ヘイ一緒にお出でなさい。（ト舞臺へ來り、）この家で御座ります。
寺　坂　何さま、暖簾に伊勢五とあるわい。
（ト丁稚、家へ入る。）
丁　稚　旦那、お客樣が參りました。
神　崎　何、お客來があるとナ。
寺　坂　御免下されい。
（ト家へ入る。神崎、寺坂を見て、）
神　崎　ヤ、そちは。（ト恟りをなす。）
寺　坂　ア、コレ。
（ト邊へ思入れ、神崎、氣を替へ、）
神　崎　これは田口の吉平樣。ようこそお訪ね下されました。
矢　頭　ドレ、お茶でもくんで來ようか。
（ト暖簾口へ入る。寺坂思入れあつて、）
寺　坂　やつぱり、以前の御商賣の酒屋をして御座るであらうと、一遍と尋ね

ましたが、丁度折よく小倅どんに道にて出逢ひ、聞いたる所こちらと知れて、やう〳〵お訪ね申して御座るわい。

神崎　何は兎もあれ、先づ〳〵これへ。

寺坂　然らば御免下されい。

（ト上手へ通る。神崎、思入れあつて、）

神崎　コリヤ長松。吉良様のお屋敷へ行つて御用はないかと聞いて來やれ。

丁稚　へイ〳〵畏りました。

（ト橋懸りへ入る。神崎、後見送り、）

神崎　コリヤ吉右衛門。どうしてこれに居る事を、そちは存じて參りしぞ。

（トこれより、合方になり、）

寺坂　委細を御存じあらざれば、その御不審は御尤。下郎に於ても、黨中へこの度首尾よく入つて御座る。

神崎　シテ〳〵、それは如何なる譯。仔細があらう、語り聞かせよ。

寺坂　即ち、證據は大石様より其許へのこの廻狀。これにて御疑念お晴らし下され。

（ト懐中より、手紙を出し、神崎へ渡す。神崎開き見て、口の中にて讀み、）

神崎　さては僅かな君祿を穢せし下郎の身をもつて、

この度同士に加はりしとナ。
寺坂　小身者の私ゆゑ、まさかの時に、は未練な性根を出すであらうと思召され、大石様にも一大事を少しもお明しなされませなんだが、先月都山科にて、敵の間者を欺くため御母公始め奥様坊様、残らず御離縁なされまして、下郎も附添ひ豊岡のお里方へお供せしが、流石は奥方およし様の御實父たる傳五衛門様。大三郎様へ大石様が遺品の印と仰しやつて、お譲りありしお刀の、小柄に彫りし詩文の表を御覽なされて、早くも悟り、さては大石内蔵之助は、近々東へ下向をなさん。汝も後より馳けつけて、一味同志に加へて貰へと、有難いお詞に、取つて返して、山科へ参つて見れば、案に違はず、江戸表へ御發足。お跡を慕ひ石部宿にて、やう／＼追付き、お里方の様子を告げて、誓ひを立て、一味の數に入つて御座る。
神崎　スリヤ、都より大石氏には最早お着きになられしか。
寺坂　卽ち、先日川崎の平間寺へ御着になり、暫く御寄留なされしが、當節にては石町の小麥屋方へ御逗留にて、垣見左内と御變名なされておいでなされまする。
（トこゝへ、奥より矢頭出て）
矢頭　委細奥にて承つたが、足輕づれの身を以て、君の御恩を報ぜんと一味同士に加はりしは、適れ忠義の吉右衛門。矢頭右衛門七、感服致す。
寺坂　これは／＼矢頭様。先刻一寸、お見受け申せど、お姿が變つて居りますゆゑ、心付かずに居りました。失禮、御免下さりませ。
神崎　そは、矢頭氏ばかりでなく、大石氏がお着きになされば、四十餘人の人にも、皆變名に姿を變へ、殘らず當地へ乘込み居らん。
矢頭　定めて、本所界隈にも、借店なして居られんが、互につゝむ身の上に、未だに巨細は辨へず。
寺坂　それぞ、下郎が隊長のお使ひにより、處々方々廻狀持ちて、駈歩けば、あらかた存じて居りまする。
神崎　シテ、變名の人々には、いづれに寓居致さるゝや。
矢頭　心得のため聞かして與りやれ。
寺坂　然らば、概略申上げん。
（トこれより替つた合方になり、）
先づ石町に小麥屋とて宿屋を出して居らるゝは、京地で田口十貞とて、變名召されし寺坂が大恩のある吉田氏。
神崎　シテ、諸士頭原氏には、いづれに住居召さるゝや。
寺坂　その原氏は、木挽町三丁目にて、

卜者となり、今のその名は和田定眞。

矢頭　シテ又、日頃風流なる大高氏には、いづれにて何商法を召さるゝぞ。

寺坂　大高氏には八百屋となり、連雀町の裏屋にて、鰥暮しの竹二郎。

神崎　シテ、武林只七殿は。

寺坂　夜麥蕎賣にて、當り屋矢七。

矢頭　シテ又、堀部安兵衞殿は。

寺坂　際物賣の長左衞門。

神崎　誠に案に違はずして、各々當地へ乘込まれ。

矢頭　下賤へ交り、身をやつし、艱難辛苦を召さるゝよナ。

寺坂　其他、菅谷不破赤垣四十餘人の方々には、親を失ひ子に別れ、二ヶ年越しの御苦勞は、中々詞に盡くされず。

神崎　わけて迷惑致し居るは、大石殿のお頼みにて、夜討の道具整へし。

矢頭　泉州堺の天野屋利平、召捕となり何時ぞやより、牢舍致して居るとやら。

寺坂　日毎嚴しき拷問にて、嘸や苦痛に堪へ兼ねませう。

神崎　これも吉田の館ゆゑ。

矢頭　時日過さず、やがてぞ本望。

寺坂　先づそれまでは、御兩所樣。

神崎　やはり、酒屋の伊勢屋五郎兵衞。

矢頭　拙者は手代の、甘味伊吾助。

寺坂　イヤ伊勢五の伊吾とは、それも御趣向。

（トこの留り、バタ／＼になり、橋懸りより以前の丁稚出て來り、門口を明けて、）

丁稚　吉良樣へ行つて參りましたら、夷講ゆゑ拂ひを遣るから、旦那に出ろと仰しやりました。

（トこれにて神崎、不審の思入れにて、）

神崎　ついそこれまで、屋敷内へ呼んだ事なき吉良樣が。

矢頭　旦那に出ろとは珍らしい。

寺坂　もしや身元の。（トいひ掛けるを、）

神崎　ア、コレ。（ト押へる。）何は格別、行つて來よう。

矢頭　ドレ、お羽織を持つて來ませう。

（ト暖簾口へ入る。）

丁稚　ヤア馬鹿が、大層氣が利いたなア。

寺坂　エヽ、小僧迄にあの樣に。

（トこゝへ矢頭、奥より羽織を持つて出て、神崎に渡す。神崎思入れあつて、）

神崎　人は不斷が。

（ト羽織をひろげ、塵を拂ふを道具替りの知らせ、）

大事で御座る。

（ト羽織を引掛ける。皆々引張り、宜しく、角兵衞の鳴物にて、道具廻る。）

本舞臺。四間通し。中足の二重。本緣附、本庇。いつもの所枝折戸。この外、正面、風雅なる板塀。二重の正面上の方、九尺の床の間。この下手一間の地袋。この下手、銀張の襖、左右の棲楽骨の障子を閉切り、平舞臺よき所に山茶花の盛りを見せ、紅葉の立樹、日覆より、同じく釣枝。總て吉良家奥殿の體。二重、上手に上野好みの捺へにて、褥の上にすまひ、眞中に一角、袴形にてすまひ、前に結構なる菓子鉢茶碗なぞ置き、下手に大和風呂の火鉢、これへ釜をかけ、傍に四方棚。これへ茶器を並べ、お梅、振袖姿の腰元、茶巾にて茶碗を拭ひ居る。この見得、琴唄の合方にて、道具留る。

（ト お梅、下手へ手をつかへ。）

お梅　御所望と御座りましたら、今一服差上げませう。

上野介　イヤ／＼、最早これで宜しい。サ、これへ參れ／＼。

お梅　清水さま、失禮御免下されませ。

（ト會釋して、上手上野の傍へすまふ。）

一角　拙者は無骨の生れゆゑ、お圍へ出て木行の濃茶を頂戴致すより、矢張、斯様な略手前にて、薄茶を頂戴致す方が、餘程勝手に御座ります。

上野介　一角は酒好なるを、宗旨違ひの菓子を勸め茶を呑ませるも、又一興。今日は時雨の催しで、餘程初冬を覺ゆるゆゑ、なる口なれば茶の湯より、酒の方が勝手であらうが、所を呑ませぬ予が氣質。とかく物は約束通り參つては面白うない。

お梅　左様な事を御意を遊ばしませずと、清水さまは御酒好ゆゑ、支度を仰せ付けられませ。

一角　イヤ／＼、必ず、お梅殿、御心配下されな。手前は、當節御酒よりか、菓子の方がよくなりました。

上野介　又一角が痩我慢。左様申すと、又手前もどうやら酒が呑みたうなつた。コリヤ梅、勝手へ料理を申付けえ。

お梅　畏りまして御座りまする。

一角　その御氣質を存じて居るゆゑ、お菓子がよいと申しましたが、實は御酒が呑みたうて、腹の蟲めが待ち兼ねて居ります。

上野介　コリヤ一角に計られしか。

お梅　ドレ、申付けて參りませう。

（ト奥へ入る。一角邊へ思入れあつて、）

一角　わが君様。ちと御用心遊ばしませんではならぬ儀が出來致しました。

上野介　ナニ、用心を致せとは。

（ト本調子の合方になり。）

一角　事新らしく申さずとも、御存じの事ながら、先頃君の内命蒙り、京地

へ上り、當の大敵、内藏之助の底意を探りし牧山氏より承れば、左樣な心底更になく、大金を費し遊女を請出し、義理ある母を追出し、數年連添ふ妻を離別。以ての外なる所行ゆゑ、敵討ちなぞ思ひも寄らずと、安堵致して當地へ歸り、君へも斯くと申上げ、用心の門を開きしが、こゝに一つの不審と申すは、先刻拙者、小家を出で、御前へ伺ひ仕らんと御玄關まで參りし所、熟醉なせし中間共、酒にたわいもなが〳〵と、御玄關先に寢て居るゆゑ、小者にいひつけ引起こさせ仔細を問へば、前町なる伊勢五と申す酒屋にて、夷講の振舞とて中間共を招請なし、呑ませしゆゑにかゝる仕儀と、詫入りますれど、合點行かず。たとへ祝日なればとて、分厘爭ふ商人が、かく三人の下部共に、足腰の立たざる程、酒を振舞ひますなどとは、近頃以て心得ずと、段々樣子聞糺せば、去る八日、いづれよりか當地へ開店致せし酒屋。男世帶と承り、怪しき奴と心得ますゆゑ、只今主人を屋敷へ呼び寄せ、お庭先へ廻しますれば、御詮議あるが肝要と、憚りながら存じます。

上野介　ヲヽ、よくぞ其方心付いた。然らば詮議は其方へ申付けたれば、これへ呼び出し、とくと調べを致して見やれ。

一角　委細承知仕ります。

（トバタ〳〵になり、橋懸りより、幕明の中間一人、出て來り、下手に居て、）

○　ハツ、清水樣へ申上げます。前町の伊勢屋五郎兵衞、御臺所へ見えまして御座ります。

一角　ヲヽソレ、待兼ねた。此處へ逃がさぬやうに引出し參れ。

○　畏つて御座ります。

（ト引返して入る。こゝへ奥より以前のお梅、蒔繪の廣蓋へ燗德利をのせ、持出て來り、よき所へ直し、）

お梅　只今、お肴が參りますれば、御酒を先へ持參致しました。

上野介　ヲヽ、然らば一獻過しながら、予はこれにて見物なさん。

一角　御前樣には、お梅殿が御意に入りで御座りまするナ。

上野介　奥めは利口を鼻にかけ、予に逆らうて面白うない。サア梅、波々と注いで呉りやれ。

お梅　お酌致すで御座りませう。

（トこの時、橋懸りにて、）

○　サア〳〵、御亭主。

中間二人　來なせえ〳〵。

（ト橋懸りより、以前の神崎の五郎兵衞、羽織着流しにて出る。これを中間三人、

取卷き出て來り、）

○　へイ／＼、前町の酒屋の亭主を。

二　人　連れまして御座ります。

（ト五郎兵衛、平舞臺下手下に居る。五郎兵衛を見て、）

一　角　伊勢屋五郎兵衛とは其方か。

五郎兵　へイ、左樣に御座りまする。御免なされて下さりませ。

（ト胡弓入り、）

一　角　承はれば、今日は其方宅ち夷講にて、中間共に酒を振舞ひ、大分賑はしい事ぢやさうナ。

五郎兵　イエ振舞ひと申しまするると、驕奢のやうにも聞えますれど、商人のホンノ身祝ひ。有合ひもの丶粗菜にて、店で商ふ御酒一献、差上げまして御座りまする。

一　角　イヤ中々以て、奇特な事ぢや。シテ其方はいづれより前町へ轉宅せしぞ。

（トこれにて、五郎兵衛思入れあつて、）

五郎兵　私事は美作の國津山の在より、當秋頃、御當地へ罷出まして、實家は卽ち酒造の問屋。それゆゑ八月、御當地へ新たに世帶を持ちまして、渡世を始めて御座りまする。

一　角　然らば問はんが、作州より出たる者が、何ゆゑ伊勢屋の家名を付けてをる。

五郎兵　サアそれは。

一　角　アノこ丶な、僞り者めが。

（トキツトいふ。これより謎への合方になり、）

總て、町人の家名といふは、先祖が出でし國の名を暖簾

へ付けるが定例にて、津山在より出でしなら津山屋とでも名乗るべきを、伊勢屋と名乗り、作州より出でし者とは如何なる譯。不都合ゆゑに押して糺せば、その返答に口籠り差支へしは、察する所、正しく武家出と覺えたり。淺野浪士の其中にて、何と申す奴なるか。サア、有態に白狀致せ。

五郎兵　ア、イヤ、暫らくお待ち下さりませ。その御詮議は、失禮ながらチト御無理かと存じます。

一角　何が、なんと。

五郎兵　ソリヤ、ハヤ、御武家の御身分なら、家の系圖も殘り居れば、先祖はいづれの者で、姓は源平藤橘と、其心得も御座りませうが、腹から下民の悲しさは、作州津山の在から出て、伊勢屋と名乘つて、不都合やらわるい事やら、心得ませず、お江戸は伊勢屋が多いゆゑ、流行る家名がよからうと、夢中で付けた酒屋店。お差合なら、明日から津山屋と家名を取替へませう。それになんぞや、あら／＼しく、武家出であらう、有態に白狀せよの、詮議のとは、チト御無體で御座りませう。

一角　イヤ餘人へ言譯なら、それにて濟むかは存ぜぬが、この一角はその手ぢや行かぬ。腹から下民と申せども、詞遣ひのその中に、自然と交る武家の應對。

五郎兵　ヤア。

一角　サ、隱しても隱されまい。吉良家に於て、さる者ありと呼ばれし清水一角が、一目見るより武家出なりと、睨んだ眼に外れがあらうや。但し、武家出でないといふ、なんぞ確かな證據があるか。

五郎兵　サヽ、それは。

一角　淺野浪士と白狀なすか。

五郎兵　サ、それは。

一角　サア。

五郎兵　サア。

兩人　サア／＼／＼。

一角　よもや證據は、あるまいがナ。

（トキツトいふ。これにて、五郎兵衞ぐつとつまる。このうち、上野之介、お梅に酌をさせて、これを見ながら、酒を呑み居て、）

上野介　ソレ、一角に一杯呑ませい。

（ト猪口をさす。お梅取次ぎ、こちらへ持つて來り、）

お梅　清水樣、御前樣から。

一角　ハツ有難く頂戴致しまする。

（ト思入れ。猪口を押戴き、お梅酌をして一角ぐつと呑み干し、）

今一獻、重杯致したう御座りまする。

上野介　ヲヽたんと呑め／＼。

（ト一角、酒を呑みながら、このうち、五郎兵衞思入れあつて、）

五郎兵　ハテ、爭はれぬこの身の素性。實は武家出で御座りまする。

三中人間　ヤア〳〵。（ト悔り思入れ。）

一角　さては、淺野の浪士よナ。（トキツトいふ。）

五郎兵　イヤそこはお目違ひ。かくいふ拙者は森家の浪人、淺野浪士なんぞとは此身に覺えぬお疑ひ。但し淺野浪士といふ、何ぞ證據は御座りまするか。

一角　ヤアどういへば斯ういふと、事を紛らすしぶとい奴。家内のやつらを呼びあげて、身元調べを致して吳れん。

五郎兵　ア、イヤ、其儀は益なき事。偏へに御用捨下されい。

一角　ヤア、留める程、猶怪しい。コリヤ中間共、家内の奴等を引立て參れ。

三中人間　ハヽ。

（ト立たうとする。こゝへ橋懸りより、以前の矢頭の伊吾助出て來り、この態を見て、）

伊吾助　アヽ、これ旦那。どうさつしやれた。大分歸りが遲う御座りますナ。

（ト前へ出る。これにて五郎兵衞、惡い所へ來たといふ思入れありて、）

五郎兵　エヽ、己は阿呆。何しにうせた。お庭先まで不禮な奴めが。

伊吾助　おまへの歸りが遲いゆゑ、それで迎ひに來ましたのさ。

五郎兵　エヽ迎へに參るに及ばぬ事だ。家へ歸つて居らう。

（トキツトいふ。一角、思入れあつて、）

一角　ソレ、そやつめを引据ゑい。

三中人間　ハツ。（ト伊吾助をとらへ、引据ゑるゆゑ、）

伊吾助　アヽこれ〳〵、こなた衆、どうさつしやるのだ。あんなに呑ましてやつたに、なんでわしをいぢめるのぢや。

○　オヽ不斷酒をまけて貰つたり、馳走になるこなた衆だから、こつちも庇つてやりたいが。

△　先刻圖武六醉つたばかり、玄關前へ倒れてしまひ、御不審の廉で掛合だ。

伊吾助　ハヽア、そんなら酒をたんと呑むと水を頭から掛けられる。ハヽヤレ寒いのに惡いきみだ。

一角　コリヤ二才、それへ出い。

伊吾助　二才とは、私の事で御座りますか。

一角　ヲヽ、サアづつづつとそれへ出い。

伊吾助　いろ〳〵な名があるものぢや。

（ト前へ出る。）

一角　エヽ頭が高い。下に居ぬか。（トキツトいふ。）

伊吾助　ヤレ、怖い伯父さんだ。（ト頭を

下げる。）
一角　シテ、その方は何れから今の酒屋へ參りしぞ。有體に申し上げい。
伊吾助　サ、それは。
（と思入れ。五郎兵衞の方を見る。これにて五郎兵衞、目まぜするゆゑ、）
何所から來たつけか、忘れてしまつた。
一角　ヤア白々しい青二才、ソレ、打据ゑて白狀させい。
○　恐れながら申上げます。この伊吾助は不斷から。
△　甘味〳〵と申しまして、餘程足りなう御座ります。
□　それゆゑ、御詮議なされましても。
○　所詮お無駄で。
三人　御座ります。
一角　ヤアわいらまで庇ひだて。然らば身共が調べて吳れん。
（ト庭下駄を履き、二重より下り、刀を拔いて伊吾助にさし付ける。伊吾助悔りして「アレエ」と逃げかゝるを中間三人、伊吾助を押へ付け、これにて五郎兵衞、入替つて一角の前へ出て、兩人、氣味合の思入れ宜しく。）
コリヤ五郎兵衞、詮議致すをなぜ留める。
五郎兵　身に覺えなき淺野家の浪人なりとて御詮議も、日頃愚かな手代をば、捕へてお調べなさらずと、この五郎兵衞にお尋ねなされ。存ぜぬ事は何處が何處まで知らぬといふより外はなし。御疑念晴れずば、私を切るとも突くともなされませ。伊勢屋五郎兵衞は男の端くれで御座りまする。
伊吾助　そんなら、旦那は切られるのか。ア、桑原〳〵。
（と捕へられながら、ふるへて居る。一角思入れあつて、）
一角　ヲヽ面白い。よく申した。これが腹から平民にて、當所で賣出す酒屋なら、取るに足らざる町人ゆゑ、をどしに拔きし一腰も、血を見ぬうちに納めんが、士族と一目美作の國に產れし汝と聞き、思ひ出雲の大社、結びし緣の荒磯は、魚の本場と東なる水に染りて、市川の流れを慕ふ今戶の鯉。丁度そつちも今日は献立欲しき夷講。帳〆なせし手討より、身共の手討に鳴戶鯛、尾鰭があると夕月の空も時雨の判然と解らぬ答の口曇り。右を左と云張るは茶の會の席を酒の座といつはる程の橫道者。酒の名に呼ぶ正宗の切味までには行くまいが、鈍きながらも敵役、廻るも君の嚴命に、辭退は恐れ直燒刃。御前に於て庖丁の手際も庭の俎石。骨のあるのを賞翫に、ドレ一料理致して吳れん。

（トキツトいふ。これへお梅出て、これを留め。）

お梅　清水樣、まア〳〵お待ち下さりませ。

一角　お梅殿、なぜ留めさつしやる。

お梅　まだ御詮議も屆かぬ中、御成敗をなされましては、そでない時は不覺ゆゑ、暫くお待ち下さいませ。

上野介　コレ〳〵梅、心配致すな。前町の町人風情、一人や二人殺したとて、仔細はないわ。これへ參れ。

お梅　それぢやと申しまして。

上野介　ハテこれへ參れと申すに。

お梅　ハアイ。

（ト是非なく、二重へ上り、上野の傍へすまふ。一角、思入れあつて。）

一角　イデ此上は。

（ト立掛かる。このうちうしろにて。）

奥方　ア、イヤその成敗、暫く待つた。

上野介　ヤ、あの聲は。

一角　奥方樣。

（ト合方キツパリとなり、正面の襖を明け、奥方裲襠形にて出て、眞中へすまふ。上野、思入れあつて。）

上野介　予が申しつけて、あれなる町人詮議致すに、其方は女の身にてなぜ留める。

一角　但し、彼等を詮議致すに、手掛りでも御座つてか。

上野介　仔細があらば、とくと申せ。

一角　一角、これにて承はらん。

奥方　イヤ留めしは、武士のあまり名義を知らぬゆゑ。

上野介　何と。

奥方　見るに忍びず聞くに堪へ兼ね、それゆゑ餘儀なう留めました。

上野介　シテ何故詮議致すか。

一角　武士の名義にかけまするナ。

奥方　士農工商四つの民、その上に立つ侍が、證據も無きに前町の者を呼寄せ、成敗なして相濟むか。

一角　ヤ。

奥方　サ、僅か高家の旗本ゆゑ、知行も多くあらざれば、この前町の町人こそ、大きくとれば領分の民百姓も同じ事。たとへ他國の產れにて、よしんば武家出であればとて、今は平民、町家へ変りこの地へ來り閑居なさば、それ〴〵出入を申付け、目を掛けて遣はしなば、あの屋敷のあるその蔭で、繁昌すると打悅び、まさかの時の用にも立たん。それに何ぞや、證據も無きに、中間共が祝日に呼ばれて馳走になりしとて、不審を立てゝ、この詮議は何と暴にはあらざるや。

一角　サアそれは。

奥方　但し、不審と申すには、外に確

かな證據あつてか。
一角　サアそれは。
奥方　サア。
一角　サア。
兩人　サア／＼／＼。
奥方　要らぬ詮議ぢや。控へてよからう。(トキツトいふ。)
上野介　スリヤ、忠臣たる一角に、そちは咎めを申付けるか。
奥方　その儀は君のお心任せ。いか樣とも遊ばしませ。わらはは憐れなる町人を、不愍に心得まするゆゑ、留めまして御座りまする。
(トこれにて一角思入れあつて、刀を鞘に納め。)
一角　善惡ともに、臣たる身は主君につくが、卽ち忠義。お家の爲を思へばこそ、かゝる暴なる詮議をすれど、控へて居ろと御意あれば、元より遺恨も無き町人。それを苛めて、宗旨違ひの憎まれ役にもなりたく御座らぬ。ドリヤ退出の致さうか。
(ト唄になり、思入れあつて、二重へ上り、一寸辭儀をなし、奥へ入る。奥方、思入れあつて、)
奥方　コリヤ前町の酒屋とやら。承はれば、中間共が每度厄介になるとやら、主人の身にては過分なるぞ。
五郎兵　その樣に仰しやられますると、却つて痛み入ります。イヤモウ、近頃、前町へ開店を致してより、お屋敷樣のお蔭にて、どうやらかうやら取付く身代。それゆゑ、今日夷講の眞似事致して、中間衆をお招き申して、麁末な馳走。
伊吾助　酒を呑ました返禮に、水より冷たい氷の刄、振舞はれる所であつたが、留めて下さる奥樣は、今日の夷で御座りまする。
○　イヤ不斷の馬鹿には珍らしい。
△　今日の夷は。
□　うまくやつたナ。
五郎兵　さやうなれば我々どもに、もうお疑ひは御座りませぬか。
奥方　ヲヽ仔細は無い。相變らず明日から出入をしませうぞ。
伊吾助　ヤレ／＼、それで落着いた。
○　それでわつちの。
△　義理も立ち。
五郎兵　これにて、お暇致します。
(ト唄になり、五郎兵衞辭儀をなし、先に立ち、枝折の外へ出で、伊吾助、氣をかへ、中間三人付いて橋懸りへ入る。上野、思入れあつて、)
上野介　コリヤ奥、そちやこの家の爲を思はず、憂ひを招く所存なるか。
奥方　何と仰しやりまする。

（トこれより變つた合方になり）

上野介　昨年の春、殿中にて刄傷の事件より、淺野の家來が予を恨み、敵を討たんと企てなすよし。それゆゑ忠臣一角が、既に去月上旬まで、京地に於て、種々の探索。又今日も前町なる酒屋に於て、不相應なる振舞を致せしとて、彼等を呼び出し、詮議なすは云はずと知れし忠義の道。それを女の分際にて、支へ立てして妨ぐるは、下世話に云へる女の猿智惠。怜悧しく致して牛賣損ふ譬に等しき差出口。キッと愼み控へて居らう。

（トキツトいふ。奥方、思入れあつて）

奥方　御尤もなる仰せながら、チト密々に我君へ申上度き儀もあれば、梅は暫く遠慮しや。

お梅　左樣なれば、妾はお次へ參るで御座りませう。

（ト唄になり、奥へ入る。これより、床の浄瑠璃になる。）

〽立ちて行く後は時雨の降掛り、庭の樹木や植込も濕りていとゞ物哀か。樣子ありげに奥方が、威儀改めてさし寄れば、吉良少將は氣味惡く。

（トこのうち、おすゝめて兩事になり、奥方こなしありて、前へ進む。上野、思入れありて）

上野介　シテ改めて密事とは、如何なる事を申すのぢや。猶豫致さず早く申せ。

奥方　お密談と申しまするは、餘の儀にては御座りませぬ。わが君樣に御生害をお勸め申上げませうと、餘人を遠ざけて御座りまする。

上野介　何と申す。（ト侮り思入れ。）

〽浮む泪を押隱し。

（ト奥方愁ひの思入れ。これより、笙の入りし床の合方になり。）

奥方　只今、清水一角に仰付けられ、前町の町人共を呼寄せて、定無き御詮議なされまするも、皆わが君の御所行が善からぬ故の御心配。その御恥辱を算へたて、妾の身として申出すは、心苦しき事ながら、明くれば丁度一昨年の春、公の御用につき、日光御參代の折柄も、傳奏岡部美濃殿より御進物が參らぬとて、種々手違ひのお指圖にて、恥辱を與へ給ひしゆゑ、しかも昨年如月はじめ、君を招待致せし上、屋敷内にて恨みを述べ、馳走管絃振舞はんと進りしところ、わが夫には犬つくばひにつくばひて御詫びありしと申す事。

上野介　ヤア。（トぎつくり思入れ。）

奥方　サ、隱すとすれど顯はるゝは、惡事千里の世の譬。その恥辱にも懲り給はず、又候三月饗應司を命ぜられたるお方へ對し、よからぬお指圖なされ

しならん。よく〳〵無念に思へばこそ、淺野殿には家を捨て多くの家來の難儀をも顧みずして、殿中にて御刄傷に及ばれしは忍び堪へざる事にこそ。まして況んや、そのうち田村の邸にて切腹あれど、當家へ別段御祟りなく、御安泰にてましますは、お心よいと思召すか。但しは、武士の情といふ事御存じは御座りませぬか。

〽君の御心一つより、淺野家にては數百人、祿に離れて轉勤も。

妻子眷屬引連れて、家を放れて離散なす。その心根は幾許ぞ。一人として、我君を恨まぬ者はよもあるまじ。たとへ大身小祿と差別はあれど、武士の家來を持つ身は同じ事。本家を賴み附人を抱へて、用心遊ばす程、お氣味が惡いと思召さば、なぜ速かに子息たる左兵衞佐へ世を讓り、貴方は切腹遊ばしませぬぞ。さすれば君を附覘ふ淺野浪士の恨も晴れ、當家も永續致しまするが、さも無き時は尊くも清和の御末の流を汲む吉良の御家は、遠からず滅亡なす事眼のあたり。世の諺にも、人は誠、人は情の下に住むと。陰德もなく利を貪り、たとへ如何程城廓を要害堅固に遊ばすとも、亡びる時は一時の煙。家が大事と思召さば、足らはぬながらこの御意見お用ひあつて、速かに御生害遊しませ。御介錯を致せし上、返す刀でわらはも共に自殺致して、あの世まで御供はきつと致しまする。又お用ひが御座りませねば、恐れ入つたる事ながら家のためには替へ難く、お命縮め奉り、悴を以て家督を立てん。サア、御生害遊ばすか、但しお命縮めませうか。サア〳〵〳〵〳〵。否やの御返事。わが君樣、是非ともお聞かせ下さりませ。

〽サア〳〵何とゝ詞づめ、隱し持つたる懷劍を、小脇に搔込みさし寄るにぞ、さしも我慢の吉良少將、荒肝取られ茫然と、暫し默して居給ひしが、騙すに手なし、後悔の色を顯はす空淚。

（トこのうち、奧方懷中より短刀を出し、上野の傍へせり詰める。これにて上野、よろしく思入れあつて、）

上野介　ハヽッ、誤つたり〳〵。持つべきものは妻なるぞ。そちなればこそ斯くまでに詞を盡し理を盡し、よくぞ意見を致し呉れた。ソリヤハヤ、我もそれらの儀に心付かぬにあらざれど、只今そちのいふ如く、清和の御末の流れを汲む高家といへど、小祿にて、世俗にいへる位倒れ。貧しく暮らす薄命も、年々勅使の御下向に指圖役を仰付けられ、其時々馳走の大役を勤むる諸侯の

家々より、進物數多貰ふにつけ、追ひ〱募る增長も、たとへ知行は小祿でも諸侯にまさる內福と、いはれん慾の物好み。又二ツには子の愛や夫婦の情に引かされて、人の命に限りのある浮世と知らで、今日まで榮耀榮華を致せしは、死に勝りたる老後の恥辱。今日といふ今日は誠に無明の夢醒めて、先非後悔致せし上は、そちの教訓身に應へ、嬉し泪がこぼれるぞえ。

〽心に泣かで、目にばかり泣くも當座の身遁れと、知らぬ奥方、我も折れて、はつとばかりに座を下り。

（ト上野、空涙をこぼし、愁ひの思入れ宜しく。奥方こなしあつて、下手へ下り。）

奥方　スリヤ不束の御意見を、君にはお用ひ遊ばして、アノ御生害遊ばしまするか。

上野介　ヲヽ致さいで何とせん。明日ともいはず今宵の中、左兵衛佐へ遺書を殘し、切腹なして相果てん。

奥方　そのお詞を聞く上は、只今用意を取揃へこれへ持參を致しませう。

上野介　イヤ〱これで切腹なさば、倅を始め臣下の者、留めだてなさんも計られず、寢所へ參つて何かの用意。

奥方　成程。さうで御座りまする。せめてこの世のお名殘りに、幸ひこれなるお盃を。

上野介　それも寢所で汲交さん。

奥方　左樣なれば、わが君樣。

上野介　そちも、支度致してよからう。

〽口に何やら空念佛。身震ひなして立上り。

（ト上野、思入れあつて、）

ア、思へば今日催せし時雨の茶の湯が、今生の名殘りの茶の湯と相成りしか。

奥方　そのお茶よりも、香花を明日は手向けて貰ふ身に。

上野介　三十一字を辭世の歌。

奥方　草の命も薄墨に。

上野介　しめる涙の小夜時雨。

奥方　イザお支度を遊ばしませ。

上野介　如何にも、力士の。

奥方　エヽ。

上野介　イヤサ、潔き死を致さうか。

〽しすましたりと、少將は虎口を遁れ入りにける。

（ト上野、思入れあつて奥へ入る。出語りになる。）

〽後には、一人奥方が、おいたはしやと後影、見送る目にも時雨して、そぼふる雨やぬれる袖、顏に押當て居たりしが、繰返したるかこち言。

奥方　家の爲ゆゑ、是非もなく氣強ういひはいふものゝ、お心が折れ給ひ、

わらはの意見をお用ひあつて、切腹すると仰せあれば、又おいたはしい我君様、色欲二道は世の中のその身を亡ぼす劒ゆゑ、きつと心に愼まねばならざるものを何として、かゝる賤しき御所行を、君には、これまで遊ばせしか。御家の系圖は、上も無き尊き御身でありながら、これを思へば、人の身は諺にいふ氏より育ち。

〽それも貧しきお暮しなら、御尤と思へども、何不足なき高家の筆頭、又御本家は諸侯にて連綿としてましませば。

お物好さへなされずは、私欲にふけり給はずとも、御安泰にてあるものを、慾には慾の限りなく、一つ叶へば又一つ叶へて、見度きお心より起りし事の御増長、お心柄とはいひながら、慾に御身を亡ぼし給ふ、その淺薄がおいとしい。

〽どうぞ、忰は足る事を知つて勤めに私なく、父の恥辱を雪ぐやう。

賢者と譽れを取らせたい。わらはが傍に居たならば、教導なすべき事もあらうが、今宵、わが君諸共に、死出の旅路へ行く皈。いうて還らぬ事ながら、このお心が一二年お早くお附きなされなば、かうした案事はあるまいに、後が苦勞になるわいなう。

〽思ひ餘つて、兎や角と案じる胸も安からぬ、後へ不意に組付く力士、もんどり打たせ、圖轉頭。投退け、見れば近習の武士。

(トこの中、奥方、愁ひのこなし宜しく、よき程に、二重の上手より、相中の近習一人、袴股立襷鉢巻にて出て、狙ひ覗ひ、奥方に組付く。奥方、柔術の手にて、二重より投退け、ちつと見て、)

ヤヽ推參なる近習の者。何ゆゑあつてこの狼藉。

〽はつたと睨むこなたより、又も一人組付くを拳を以て眞の當、倒るゝ間さへ荒男。右と左に又一人、双方一度に組付けば、捨身になつてかい潜り、女ながらも早速の術。えいやと、聲をかけまくも、かしこき君の嚴命と、續く力士が一統に折重つて取巻きたり。

(トこのうち、二重の上下より、相中の近習四人、同じ出立にて、奥方に組付く。奥方無手にて柔術の立廻り、宜しくあつて、とゞ奥方、四人の近習を二重より下へ投げ、踏段へ腰を掛け、懐劔を持つてキツトなり、)

無禮致さば、家來とて用捨致さず切捨てる。何故かゝる振舞なすか。その譯申せ。ドヾどうぢや。

〽折から此方に聲あつて。

上野介　その譯、只今申し聞かせん。

奥方　ヤヽあのお聲は。ムヽ。

（ト思入れ。誂への合方になり、二重の上手より以前の上野、胸當、ぶつさき羽織、馬乘袴、凛々しき拵へになり、これへ相中の近習二人、上野の兜頭巾を持つて出る。奥方この態を見て、）

さては、わらはを僞つてお命逃れんお心なるか。

上野介　女の身にて、文武に慢じ、學力あるを鼻にかけ、我を侮る諫めだて。用ひぬ時は飛掛り、手向ひなさん樣子ゆゑ、承引なして虎口を遁れ、近習の者に申付け、手捕りになして糺命さする。いで、尋常に捕縛を受けよ。

〽始終を聞いて、奥方は恨めし泪、少將の顏をハッタとねめ付けて。

（ト奥方、思入れあつて、）

奥方　エヽお情ない、わが君樣。御家の爲ゆゑ、御意見を申上げしに、かくまでに未練の御命延ばはりたいか。左程生害遊ばすを怖ろしく思召すなら、わらはがお敎へ申しまする。

〽いふより早く、肌くつろげ、懷劍拔いて脇腹へがばと突立て、苦痛の態。

（ト奥方、懷劍を腹へ突立てる。）

近習　ヤヽ、こりや奥樣には。

四人　御生害。

〽不愍と思へど、是非もなく。

（ト上野、思入れあつて、）

上野介　左程命が捨てたくば、止めは致さぬ勝手に致せ。我は命が惜しいゆゑ長命なして娛樂を盡さん。

奥方　サヽそれが淺とき御了簡。御家の滅亡なす所へ御心付かぬ我君樣。手を下ろさねど淺野殿も君ゆゑかゝる御切腹。やがて報いが參りまするぞ。

上野介　ヤア聞きたくもない世迷言。早く臨終致してしまへ。

奥方　たゞ不愍なは左兵衛佐。親の因果が子に報い、家に放れし其上に、强欲非道な吉良殿の子息と人に指さゝれ、笑はるゝのは眼のあたり。今際の別れ一言の敎訓致して死にたいが、それも叶はぬこの虜。

〽心殘りといひ死に、笛掻切つて、初霜の消えて果敢なくなりにけり。

上野介　ハテ頑な。

（トほろりと思入れあつて、涙を拂ふを道具替りの知らせ。）

奴ぢやなア。

（ト愁ひを隱して、あざ笑ふ。後、皆々引張り宜しく、寺鐘の送りにて、この道具廻る。）

十一月

裏田圃酉の町の場

（ト日覆の月附、十一月に替る。）

本舞臺、一面の平舞臺。向う一面、吉原の裏手を見たる田圃の遠見。上手、一間上等の葭簀張の出茶屋。御掛所の掛行燈。下手、松の立樹。日覆より同じく釣枝。總て酉の市裏田圃の景況宜しく。こゝに床几を三脚並べ、眞中の床几に、深編笠を冠り、緣取り袴、背割羽織、大小の侍一人、後向きに腰を掛け、田圃を詠めながら莨を呑み居る。左右の床几に酉の町歸りの仕出し四人、大頭、粟餅、熊手等を持ち、腰を掛け居る。この見え。双盤入り流行唄にて、道具留る。

○ 時に、皆さん。お天氣がいゝので、お西様は大當りで御座ります。

△ イヤモウ、門前の三つ股邊りは、人混みで困りました。

□ 熊手も大頭も、賣切れたといふは、何と珍しい事では御座りませぬか。

◇ これでは、觀音の年の市も、大方當るで御座りませう。

○ 觀音といへば、これから歸りに奥山を廻つて歸らう。

△ わしは、これから吉原を拔けて一廻り、素見して歸らう。

□ 又、まご〱して引張り上げられなさんな。

◇ 己も吉原へ荷擔をしよう。

四人 サア〱、行かう〱。

（ト仕出し、四人上下へ別れて入る。後、時の鐘になり、眞中後向きの侍、前へ出て、編笠を取りて、二役大石にて）

大石 浪々の身の氣散じは、供をも連れず只一人。今日は木枯、明日は枯野と、名所舊跡巡見せしが、流石は江戸の繁榮に、日本一の酉の市、貴賤老若差別なく、群集を競ふ參詣は、開運祈る鷲の宮。ハテ賑はしい事ではある。

（ト思入れあつて）正午と見える。日輪もハヤ南面へ廻りたり、ドリヤ歸宿致さうか。

（ト立上り、花道の方へ行きかゝる。この時、上手、葭簀の蔭より、齋藤源吾、五十日鬘、生平の打割襠高袴大小にて出て）

源吾 ア、イヤ、お侍。暫く、お待ち下されい。

（トこれにて、大石、振返り）

大石 お呼びなされたは、手前が事で御座るか。

源吾 いかにも左樣。暫時これへお歸り下され。

（ト大石、思入れあつて、歸り）

大石 シテお呼び留めなされたは、何ぞ御用で御座るか。

源　吾　お見受け申せば其許には、御浪人の御樣子ぢやが、いづれの御藩で御姓名は何と仰せられまする。手前承知の致したい。即ち、拙者の姓名は。

（トいひかけるを留めて、）

大　石　ア、イヤ、その御姓名は承りますまい。仔細御座つて、拙者事は、チト姓名は憚りますれば、矢張いづれの浪人か、知らぬ分にてお別れ申さん。それゆゑ貴殿の御姓名は、承はらぬが勝手で御座る。

源　吾　スリヤ姓名は、名乘れませぬとナ。

大　石　これには、仔細御座りますゆゑ、何卒拙者の姓名の儀は。

源　吾　名乘れぬ仔細は其許には、大望のあるそれゆゑに。

大　石　何といはるゝ。

（トこれより、誂への浮いた合方になる。）

源　吾　お隱しあるな。其許は播州の城主たる淺野殿の御家臣にて、而も城代國家老大石氏で御座らうがナ。

大　石　どうして、それを御存じにて。

源　吾　知らいでならうか。某は其許達が敵と覘ふ吉良家の家臣で御座る。

大　石　スリヤ、吉良殿の御家來なりしか。存ぜぬ事とて甚だ失禮。

源　吾　先づ〳〵これへお掛けなされい。

（ト床几へ掛ける。これより、合手キツパリとなる。）

承はれば其許には、先頃當地へ下られて垣見左内と變名なし、同志を語らひわが主人を敵とお覘ひなさるゝ由。御忠節の程感服致す。身共も其許と心は同じ忠義の道。主人の守護を仕れば、この細首のある中は、主人の首は渡されぬ。それゆゑ、今日途中にてお見掛

け申すを幸ひに、命を取るか取らるゝか。二つに一つの勝負をなし、片を付けたく存ずるゆゑ、それで態々呼留め申した。

大　石　(トキツトいふ。大石思入れあつて、)なんぞとは全く以て、世上の雜說。ソリヤハヤ、赤穗離散の節は、一家中の手前を思ひ、左樣な事も申したなれど、去る者日に疎しとやらで、その後都の山科へ田地を求め家をしつらへ、安穩に暮して見ますと、さて平民は氣樂な者と殆ど發明仕り、企てなぞはやめて御座る。よしんば大義を思ひ立つとも、一味なすべき相手が御座らぬ。江戸へ出まして旅宿を設け、變名なして居りまするも、淺野浪士といはれては肩身が狹う御座るゆゑ、かくの如くの深編笠。面體包み處々方々と遊歷致す內藏之助。命の遣り取り致すなどとは、平に御用捨下されい。

源　吾　スリヤ、其許には敵を討つ、アノ御所存は御座らぬとナ。

大　石　御疑念ならば手前の魂、これにて貴殿へお讓り申せば、命はお助け下されい。

(ト刀を取つて、床几の上へ差出す。源吾思入れありて、)

源　吾　扨は、京地の島原で遊女に心奪はれて、たはけを盡くすと承つたが、計略ならで全くの腰拔け武士になられしか。

大　石　イヤモウ、何と惡口致されても、この內藏之助是非が御座らぬ。これにて御暇仕る。

(ト立掛かるを、源吾、袂をとらへ、)

源　吾　スリヤ、この刀を投出して、助けて呉れと詫びさつしやるとナ。

大　石　ハテ左樣な物でも帶せばこそ、今日かゝる疑ひ受け、迷惑を仕れば、向後、手前は脫刀致す。

源　吾　イヤ、意氣地のねえ侍だなア。

(トあざ笑ふ。)

大　石　左樣御座らば、吉良家の御家來。

源　吾　恥辱を知らぬ大石殿。

大　石　これにてお別れ申しまする。

(ト唄になり、大石思入れあつて、向うへ入る。こゝへ上手、葭簀の蔭より、一角、打割野袴、◎同じ拵へにて出て、大石を見送りながら、前へ出る。源吾、兩人を見て、)

源　吾　御兩名、お聞きありしか。

一　角　恥辱を忍び、大義を計る反間苦肉の彼が振舞。

◎　清水氏と諸共に、茶店の蔭にて見受け居りしが。

一角　ハテ、恐ろしい奴ぢやなア。
（ト源吾、思入れ。合點の行かぬこなしにて、）
源吾　イヤなに、牧山氏。貴殿は先頃都にて大石めが惰弱を見屆け、御安堵召されて御主人へ用心の門を開かれよと、上申ありしお方でないか。今又拙者が斯くまでに惡口しても手出しをせず、歸り居つたる腰拔け武士。何ゆゑお恐れなさるのだ。
牧山　されば、彼めが其許と取合はざるは、先方の器量が餘程上手ゆゑ。
源吾　なんと。
（ト合方。）
一角　夜分であらば、三人にて無論彼めを打果たし、敵の根を絶ち葉を枯らさんが、晝中なれば是非が御座らぬ。
◎　又、某は京地において、度々出合ひ、彼と入魂を結び居れば、面會なすも不都合と、木蔭に隱れて、お手前に底意の程を探らせしが、たとへ腰拔臆病たりとも、かゝる群集の中なれば、眞劒勝負に到らぬ中、和の入るのはこれ必定。そこを計つて逃げながらも、往來の者の手前へ對し、詞戰ひ致すべきに。
一角　恥辱を恥辱と思はずして、平に詫び入り立別れしは、コリャ會稽の時到るを、相待つ所存に疑ひなし。ハテ恐るべし／＼。
源吾　イヤ、貴殿は左樣にお恐れ召さるが、仲達臥龍の琴を聞き、退陣せしと同論にて、世俗にいへる力負け。武士たる者がこの如く刀を投出し、こそ／＼と尻尾を卷いて逃げ居つたは、犬侍では御座らずや。
一角　刀を手前にお見せ下され。
（ト件の刀を取り、拵へを見る事あつて、鞘を拂ひ、中身を見る事宜しく、ム、と思入れ。この時、本釣鐘を打込み、一角、思入れあつて。）
流石彼めも物好きに、拵へといひ中身まで、麁相な品にはあらざれど、切先掛けて鍔元まで、曇りを生じ黄ばみ居るは、拭ひを掛けぬと相見ゆる。
源吾　それぞ卽ち、魂まで匹夫となりし確かな證據。
一角　ムヽ人立多き街にて、嘲弄されて恥を忍び、すご／＼歸りし彼が心底。反間苦肉と思ひしも、ムヽ。
◎　如何なる所存か、合點が參らぬ。
源吾　何と淸水氏。一旦は思ひ立ちし事もあらんが、去る者日々に疎しの譬へ。貧に迫りて、魂まで、腐りし事と覺えたり。
一角　いかさま、貴殿のいはるゝ如く、最早これにて安堵致した。
◎　然らば、手前はこの由を千坂氏へ申

通じ、安堵の思ひを致させませう。

一角 何さま。貴殿は御本家より附人なれば、千坂氏へお達し下されい。

○ つぶさに承知仕る。

(トこの時、太鼓入り、名古屋名物の唄になる。三人、思入れあつて、)

源吾 廓の騒ぎもつい後。

一角 こちらは、丁度前祝。

◎ 門も明けたる鷲の宮。

源吾 横へ切れ行く畦道も。

一角 はまれば深き溝傳ひ。

◎ 廓の紋日を幸ひに。

源吾 西から流す戌の町。

一角 今宵はしつぽり。

(ト刀を鞘へ納めるを木の頭、)

愉快と致さう。

(トこの仕組、宜しく。)

幕

十二月

吉良家討入の場

(ト日覆の月附十二月に替り、)

本舞臺。一面の平舞臺。正面、金地桐の紋散らし、翠簾、襖。日覆より同じく紋散らしの大欄間を下し、上下折廻し、杉戸の出入り。舞臺一面薄縁を敷詰め、總て吉良家奥殿宿直の間の體。眞中に書院。火鉢あり。此處に酒肴を取散らし、處々に朝顔附銀燭を照らし、前幕の源吾、孫兵衛、平馬、甚吾の諸士何れも酒宴の模樣。お梅、前幕の腰元にて酌をして居る。この模樣、管弦の鳴物にて、幕あく。

お梅 いづれも樣にも、今晩は御寛りと召上るやうにと、御前の仰付けで御座ります。

源吾 御懇情の段、有難いと仰上げられ下されい。(思入れ。)イヤなに、各々。今朝よりの大雪にて別段寒氣が身に應へ、一獻催したく存じた所へ、我君の御召しによつて、御殿へ出ての御酒頂戴。有難い儀では御座らぬか。

孫兵衛 左樣で御座る。愈々我君には御本家へ御轉居に相成る。今宵が卽ち、御名殘りの御茶の會を催されしが。

平馬 清水氏が御酒好き故、お茶が御酒と化けまして、我々共迄この酩酊。

甚吾 これと申すも、お蘭殿やお梅殿のお計ひ。器量もよいが心立まで、よいお捌きでは御座らぬか。

お梅 その樣に仰せられましては、却つて痛入りまする。

源吾 お蘭殿には、前町の酒屋五郎兵衛の妹にて、先頃在所より尋ね參り、彼の宅にて掛り人、厄介になり居られしを、我君のお目に留まり、清水氏の

御媒介にて當家へ召出し、御愛妾。
孫兵衛　これと申すも、奥方が先々月お隠れなされ、とかくお寢間御不自由ゆゑ。
平　馬　あの美しいお蘭殿を、我君毎夜の御寵愛。お次に宿直の我々は。
甚　吾　文彌筋で、お蘭殿が啜泣きを召さるのを、聞く迷惑は如何ばかり。
お　梅　アヽモシ。左樣な事を仰しやりませずと、まア御酒をお上りなされませ。
（ト酌をする。皆々酒盛りよろしく。）
源　吾　何は格別、我君にも先頃までは淺野浪士を御用心なされしが、淸水氏と某が西の町の歸るさに、大石めに出つくはし、彼奴の魂腐り居る事とくと見屆け、立歸り言上せしゆゑ、それよりして、當今にては御安心。
孫兵衛　又、前町の酒屋五郎兵衛、姑の程は淸水氏にも、淺野浪士であらうなぞと、御疑念でも御座つたが。
平　馬　雨降つて地固まるとやらで、それが却つて御緣と相成り。
甚　吾　當今にては御贔屓になされ、淸水氏の御吹擧にて、お蘭殿は君のお妾。
お　梅　奥樣のお隠れの後は、お側勤めの妾も心細くてなりませなんだが、お蘭樣が出來まして、心丈夫で御座りまする。
源　吾　然し、こなたも我君の御寵愛を蒙る身の上。嘸、内々で、悋氣の角を生やして居るに相違ない。
お　梅　イエ、妾へは御前樣は、嫌らしい事はなされませぬ。
源　吾　ハテ隠さるな。さうでなうて、この美しい別嬪を何で御前が見逃し置かうか。
お　梅　エヽ、もうお嬲りなされまするな。
孫兵衛　こりや嬲らずには。
三　人　居られぬわい。
（トこゝへ、上手より前幕の一角、裃大小にて出て來り。）
一　角　各々方、お夜詰御苦勞に存ずる。
源　吾　貴殿は淸水。
皆　々　一角殿。
（ト一角、宜しくすまひ。）
一　角　チトこれなる齋藤氏に、密談の儀もあれば、各々方には十分に御酒を頂戴召されし上にて、今宵は小屋へお引取りなされい。
孫兵衛　然らば我々三人は。
平　馬　最早十分酩酊致せば。
甚　吾　これにて小屋へ。
三　人　引取りませう。
源　吾　併し宿直が御無人では。
一　角　ハテ居らいでも。一角が一人居

れば千人力。その心配には及び申さぬ。
孫兵衛　左様御座らば、清水氏。
平馬　これにて退出仕れば。
甚吾　御前よしなに。
三人　願ひまする。
一角　其儀は手前承知致した。
（トこれにて、孫兵衛先に、平馬、甚吾、ついて、下手へ入る。思入れありて、）
お梅　ドレ、妾も。（ト立たうとするを、）
一角　イヤお梅殿はそれに居られよ。
お梅　ハイ。（ト下に居る。）
源吾　シテ、拙者めに御密談とは。
一角　他でも御座らぬ。お梅殿を貴殿へ媒介仕らんと。
両人　エヽ。
（ト恟りなす。これより誂への合方になり。）
一角　サアかう計り申しては、御合點が参るまいが、君には最早明日は御本家へ引移られ、それにつき、御意に入りのお蘭殿にお梅殿をお召連れなされたけれど、御本家へ御遠慮あれば、お蘭殿一人をお召連れにて、お梅殿は後へ残してお出でなされば、よき縁邊を取結び身の終りを付け度きゆゑ、一角、周旋致し呉れよと、お頼みに任せ、其許へお梅殿をお世話なさんと、疾くより存ぜし清水一角。一目見てさへ好いた同士と。（思入れ。）イヤサ、當人同士の御挨拶。この場で聞かせて下されい。
（トこれを聞き、お梅は嬉しきこなし。源吾、思入れあつて、）
源吾　ソリヤ、御殿が御寵愛のお梅殿を申受けるは望む所で御座れ共、相手が承引いたさねば。
お梅　イエ勿體ない。妾はアノ疾うから。（トいひかけ、恥かしきこなし。）
一角　齋藤氏がよいと申すか。
お梅　ハイ。（ト顔をかくす。）
一角　イヤよい釣合ひで御座るでなう。
源吾　イヤもう、お梅殿さへ承知なら、手前に於ては否やは御座らぬ。
一角　然らば一寸お蘭殿の部屋へ御座つて、内祝言。
源吾　ハテ、それでは餘り早急ゆゑ。
一角　御前のお許し出でし上は、不義いたづらといふではなし、お蘭の方にも萬事呑込み。
お梅　テモ有難い清水様。そんならどうぞ齋藤様。
源吾　なんだかこれは夢のやうだ。
お梅　ハテまアお出でなされませいなア。
（ト唄になり、お梅、源吾を連れて、下手、杉戸の中へ入る。後見送り。）

一角　奥方自殺の其後は、秦の始皇の阿房の宮にも増さりし當家の活計歡樂。それも今宵ぎり限りにて、明日は我君御本家へお越しになれば御遠慮勝。この境涯も出來まいわい。ドリヤ手酌で一献酌まうか。
（ト有合ふ銚子を取上げる。この以前、上手より、お蘭、愛妾の拵へ、しどけなき形にて、後に伺ひ居て、）
お蘭　アヽモシ、其お酌は妾にどうぞおさせ下さりませ。
（ト前へ出る。一角、お蘭を見て、）
一角　オヽ、お蘭殿。何時の間に。さては最早我君には。
お蘭　只今御寢なされましたれば、これからがこちらの樂み。お樂であらうが、清水樣。お酌をさせて下さりませ。（ト一角の傍へすまふ。）
一角　イヤお手前のお酌では、こりや一段と呑めまする。
お蘭　テモ、御樣子のよいことばつかり。お名殘り惜しう御座りますわいなア。
一角　手前も、どうやら、お手前が御前さまと御一緒に御本家へ行かるゝのが、本意ないやうで御座るわい。
（トこれよりなまめいたる合方になり、）
お蘭　不義は御家の御法度と、心で心に愼めど、あなたのやうなお方をば夫に持てば、一生涯女子の冥加に叶うた事と、明暮思うて居りましたが、それもかうした身の上に、せめて毎夜に清水樣が御前の御酒のお相手にお奥へお出でなされまして、その折お顏を眺めますのを、樂しみにして居りましたが、心に濟まぬ我君樣へ、この身を任せて居りまする果敢ない身をば、清水樣、不便とお思ひ下さりませ。
一角　イヤ、さういはれるとこちらで

も、心の寃をいはねばならぬ。手前も武士たる身を以て、色に心を奪はるゝは恥ぢ入る儀なりと愼みをれど、そもそも其許が前町の伊勢五にゐらるゝその折より、懸想致して執着心、然し掟を守るゆゑ、決して濫な儀は致さぬ心底。どうか相手をして下されい。御酒でも呑んで樂みませう。

お蘭　サア〳〵お上り下されませ。（ト大平の盞を取つて出す。）

一角　イヤ、これではあんまり大盃で御座る。

お蘭　イエお後をお助け申したければ、それでお上り下さりませ。

一角　イヤ助けて下さるとは忝い。（ト思入れ。お蘭酌をして、一角酒を呑む事宜しくありて。）眞にこれが眞見城。

お蘭　そのお呑みさしを妾が。（ト件の盃へ手を掛ける。）

一角　イヤ、それではあまり濫に相成る。（トぐつと呑干す。）

お蘭　テモお憎らしい。（ト一角をつめる。）

一角　アいたゝゝゝゝ。

お蘭　誰に會ひたう御座りまする。

一角　その會ひたいのは、この酒に。

お蘭　ドレお酌を致しませう。（ト又酒をつぐ事よろしく。）

一角　イヤなんでも酌は。（ト酒を一口呑み、盃を下に置くを、道具替りの知らせ。）たほで御座るテ。

（ト醉うたるこなし。此模樣浮いた合方。時の鐘にて、此道具廻る。）

本舞臺。正面に赤き門。左右日窓のある表長屋。處々に捨石。何れも雪の積りし道具。舞臺花道共一面に雪布を敷詰め、總て、吉良家表門の模樣。雪下し、時の鐘にて、道具留る。

（トこれより床の淨瑠璃になる。）

〽會稽の雪に輝く短册も、黄金花咲く年の暮。大石良雄を先に立て、續く間に岡島矢頭、兜頭巾に黑羽織、忠義の胸當打揃ふ、義を金石の面々に、文武智略の大竹に、鈎を掛矢の後押へ、名に大高の出立は、背に假名書きの合印。勇ましかりける次第なり。

（トこのうち、誂への鳴物。雪下しをあしらひ、向う東の揚幕より、大石、畫面の形、兜頭巾を冠り、龕を持ち出る。これへ若い衆の義士。陣太鼓を持ち付添ひ、間重次郎、岡島八十右衞門、矢頭右衞門七、村松喜兵衞、杉野十兵衞次、横川勘平、近松勘六、奥田孫太夫外總出の義士、同じ出立、銘々思ひ〳〵の得物を持ち出る。ずつと後より大高源吾、掛矢擔ぎ出て本

花道の付け際より鍵の手に並ぶ事宜しくありて、大石うしろを見返りて、ト合方になり)

大石　いかに方々。忰主税を魁首となし、裏手は吉田忠左衛門殿副將をなし下されば、表へ廻る同勢は、四十餘人を半に分け、僅かに二十餘名なれど、倶に天を戴かざる君の仇。

間　今宵ぞ積る白雪と、共に恨みの晴れ勝負。

岡島　吳越のためし、會稽の雪に雪ぐの聲あれば。

矢頭　花に嵐の障りある、過ぎし彌生の中空や。

村松　君の御無念承繼ぎし。

杉野　我々共は義を金鐵。

近松　盟約違へず今月今宵。

奥田　四十餘人を二手に分け。

横川　表へ向ふ面々には。

大石　大石内藏之助良雄。

間　間重次郎光興。

岡島　岡島八十右衛門常樹。

矢頭　矢頭右衛門七教兼。

村松　村松喜兵衛秀直。

杉野　杉野十平次行信。

近松　近松勘六行重。

奥田　奥田孫太夫重盛。

横川　横川勘平宗有。

㈠　倉橋傳助武行。

㈡　千葉三郎兵衛光忠。

㈢　間新六光風。

㈣　勝田新左衛門武高。

㈤　前原伊助宗房。

㈥　潮田又之丞友信。

㈦　三村次郎右衛門包常。

㈧　中村勘助正辰。

㈨　小野寺十內秀和。

㈩　早野和助貞之。

(十一)　岡野金右衛門光高。

(十二)　矢田五郎左衛門重因。

(十三)　間瀬孫九郎正義。

大高　後に控へし輩は、浮木の龜や優曇華の花と白雪會稽の時に大高源吾忠雄。水の流れと人の身も待ちし甲斐ある掛矢の大槌、敵の素頭粉微塵。打碎かんな手裏にあり。

大石　ホヽウ勇ましし。豫て期したる手筈の通り、夜討の大事は味方の變動。女童は目になかけそ。火の元別して、心を付け、各々互ひに合詞。(息入れ)山。

皆々　川。

大石　猶豫召されず、込入れ。方々。

大高　イデ、門を打折り吳れん。

〽勇氣含んで大高が、エイヤと聲もかけやの大力。雪は四方へ散亂す。

(トこのうち、皆々舞臺へ來り、上手に大

石、陣太鼓を取つて、キツト見え。眞中に大高掛矢を構へキツト見え。後皆々引張り宜しく雪おろし。床の淨りにて、道具廻る。）

本舞臺。元の御殿の道具。こゝに一角、酒に醉ひし心にて、袴の儘、宿直袋にもたれかゝり、頰杖をして寢て居る。この見え。やはり床の淨りにて、道具留る。

〽冬の夜も早更渡る子の刻の、鐘も凍りて白雪を貫く響、こう〳〵と外に音無き奥御殿。君が寢所へ一角が、鼾のあらし烈しくも、風がもて來る陣太鼓。

（トこのうち、よき程に本釣鐘を打込み、一角うつぶせに寢ること宜しく。文句の留り、向う揚幕にて、ドンと太鼓の頭を打込み、山鹿流の打ち方宜しく、ドン〳〵太鼓を打上げる。

〽淸水はむつくと起上り。

一　角　ハテ心得ぬ。今宵も最早三更過ぎ、雪に非常の愁ひもなく、家中一般寢鎭まり、陰に閉ぢたる折も折、表御門の東に當り、陽を發する太鼓の聲。

（ト思入れ。この時、又向うにて、ドンと打つ。一角、づか〳〵と舞臺前へ出て、耳の端へ手をかざし、聽耳立つる事ありて。）

殺氣を含むは、常ならず。

〽あなたの方をきつと見廻し。

熟醉なせしわが肝を、貫く闇は、豫てより古老の話に聞及ぶ、山鹿流の太鼓の打ち方。當今江湖にあの太鼓を熟練なせし武士は、松浦侯の御隱士に、續いて赤穗の。

（ト思入れ。指を折りかけ、心付いて。）

ヤヽヽヽ。（思入れ。）

〽扨こそ、夜討と打驚き、突立ち上り、大音上げ。

（ト一角、キツトなり。）

ヤア〳〵いづれもお出合ひなされ。夜討で御座る〳〵。

〽呼ばはる間さへ、霰降る矢先を切拔け、齋藤源吾、奥を目指して寄せ來り。

（トドン〳〵烈しく、向うより以前の源吾、袴股立、襦袢肌脱ぎ、手負ひのこなしにて拔刀を持ち、出て來り、一角を見て。）

源　吾　淸水氏。御油斷あるな。夜討で御座る〳〵。

一　角　ヲヽ待兼ねたり、齋藤氏。シテ〳〵樣子は、何と〳〵。

源　吾　ハツ。

（トこれよりノリになり。）

されば、拙者も大醉なし、君の宿直も出來ざれば、小屋へ引取り睡む折しも。

（思入れ。）

〽裏表より、一時に打立つ太鼓諸共

に、降つて湧いたる淺野の浪士。
過ぎし亡君の怨敵よ、呼ばはり〳〵討
入る樣子。こゝぞ大事と、某も小屋を
立出で渡合ひ。
〽上段下段、庭先の松を小楯に虚々
實々。暫しはいどみ爭ひしが、名に負
ふ敵は、兼ねてより企つ身體堅固にし
て、不意の夜討に、我々は素肌の事
ゆゑ敵し難く、數ヶ所の手疵。これ
までと覺悟は極め候へども、昔の御
樣子如何ぞと、お知らせ申しに參つ
て御座る。
〽ありし次第の物語。聞くに、一角、
氣をいら立て。
(トこのうち源吾、注進よろしくあつて納
る。一角肩衣を取退け、袴股立、下緒襷を
掛ける事など宜しくありて、)
一角　スリヤ、其許には敵のために數
ヶ所の手疵を負はれしか。

源吾　たとへ手疵は負うたりとも、未
だ屈する某ならず、いで、立歸つて一
働き。
一角　ヨヽ、出かされたり、齋藤氏。い
で〳〵防戰致されよ。
源吾　左樣御座らば、清水氏。
一角　早く〳〵。
源吾　ハッ。
〽はつと計りに出でて行く。
(ト源吾、向うへ引返して入る。)
一角　いで此上は一角が、必死の働き
致して呉れん。
〽立出でんと爲す、その所へ。
(ト上手の襖をあけ、以前のお蘭、懷劍を
拔き持ち出て、)
お蘭　一角、覺悟。
(ト切つて掛かるを、一角、一寸立ち廻り
懷劍を踏まへ、キツトなつて、)
角　ヤア誰かと思へば汝はお蘭。扨

は間者でありしよナ。
お蘭　ヲヽ酒屋五兵衛が妹と、僞り了
せし此身こそ、淺野浪士の一人たる山
岡角兵衛の妻のせつ。色に事寄せ大醉
させ、安々謀りし今宵の夜討。冥途の
道連れ。覺悟しや。
一角　さうとは知らず心を許し、熟睡
なせしは我が誤り。冥途の先驅させて
呉れん。
お蘭　何を小癪な。
(トこれより烈しき鳴物になり、兩人立
廻り宜しくありて、お蘭、肩先を切られ、
下手にドウとなる。一角、上手に刀を上
げ、キツト見え。ドン〳〵にて、この道
具廻る。)
本舞臺。上下一間宛常足の二重。眞中一
間、池の心にて橋を架けあり。舞臺よき
所に切穴。一面に氷張詰めある。雨落より

雪板を出し、後一面庭の遠見。花道一面雪布を敷詰め、總て與庭雪降の道具。眞中、橋の上に以前の大高、掛矢を振上げ居る。孫兵衛、平馬、甚吾其外、袴股立襷鉢卷の諸士抜刀にて取卷き居る。この見え。ドン／＼雪下しにて、道具留る。）

孫兵衛　扶持離されの淺野浪人。吉良家に於て隱れなき左右田孫兵衛が討取りえさせん。

平　馬　イデそッ首を。

皆　々　渡してしまへ。

大　高　ヤアほざいたり、蛆蟲めら。大高源吾が掛矢の手並。總振舞に致して見れん。

皆　々　何を小癪な。

（ト一寸立廻り、よき見え。これより誂への鳴物になり、孫兵衛、平馬、甚吾掛矢で打たれ、血を吐いて落入る事よろしく。後大勢かなはず向うへ逃げて入る。大高これを追うて入る。こゝへ上手より、以前の矢頭右衛門七、齋藤源吾と立廻りながら出て來る。）

源　吾　おのれは、酒屋の甘味、伊吾助。淺野浪士で、如何なる奴か。その名を名乘つて觀念なせ。

矢　頭　事も愚かや。某こそ、矢頭右衛門七教兼なり。冥途の手土産、聞いて置け。

源　吾　小癪なことを。

（ト思入れ。兩人立廻り、宜しくあつて、ト、矢頭誤つて二重より落ち切穴へ入る。源吾立掛けて突かうとする。この時上手にてエイと矢聲して、差金の矢、源吾へ立つ。源吾、どうとなる。）

ヤア何奴なれば、この助太刀。

（トこゝへ神崎、半弓持ち、出て來り、）

神　崎　伊勢屋五郎兵衛と變名せし神崎與五郎則安が、この世の暇、取らせ呉れん。

（ト思入れ。この時、水の音して矢頭、水入りになり、切穴より這上り出て、キット見え。このうち神崎源吾一寸立廻つて、源吾を立身に抉る。源吾苦しみ落入る。神崎矢頭を見て、）

神　崎　矢頭氏、別條なうて先づは祝着。

矢　頭　雪に辷りて思はぬ不覺。御助力の程忝い。

神　崎　イデ此上は敵の在處。

矢　頭　奥へ踏込み尋ね見ん。

神　崎　矢頭氏、おきやれ。

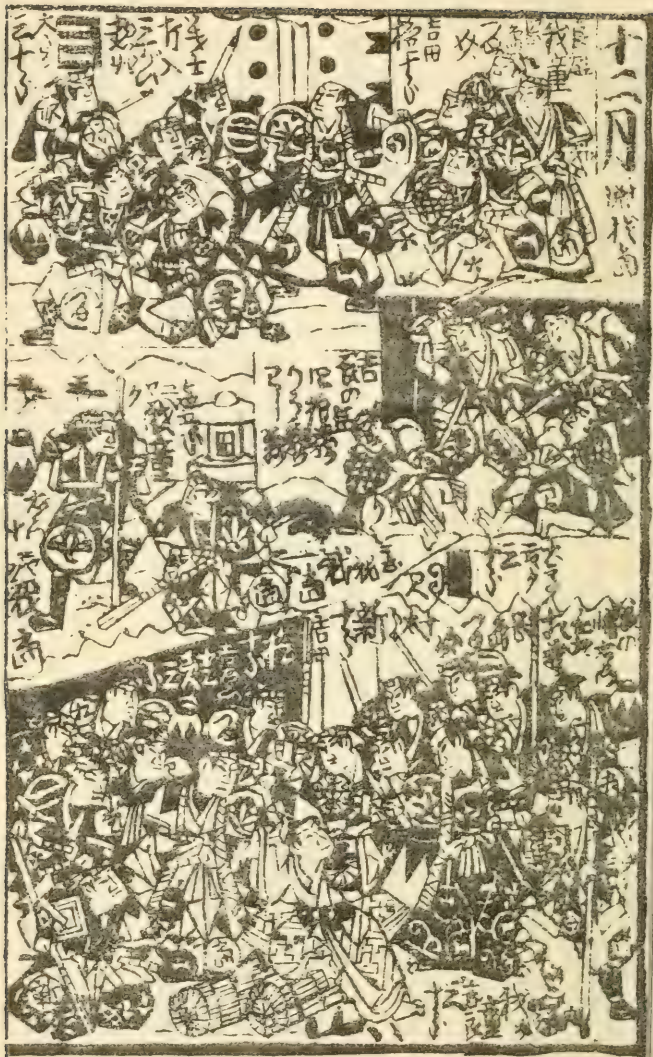
矢　頭　イザ御同伴。

（ト兩人、花道の方へ行きかゝる。此時、上手にて、）

一　角　ヤア／＼兩人。暫く待て。

兩　人　なんと。

（トキツトなる。上手より以前の一角、兩刀を持ち出て來る。）

神崎　汝は清水。
兩人　一角よナ。
一角　酒屋五郎兵衛。手代の伊吾助。汝二人を探して居つた。
神崎　望む所のよき相手。
矢頭　イデ引導を渡して呉れん。
一角　その引導は只今方、間者のお蘭を討取つて門出の血祭り致したれば、これよりしては汝等兩人。欺
き果せし恨の返禮。いでや討取り腹を癒ん。
神崎　スリヤ、お蘭には討たれしとナ。
矢頭　さう聞く上は重ね重ね。
一角　さいふ二人の素頭から。
神崎　何を。
兩人　小癪な。
(トこれより謡への鳴物になり、三人面白き立廻り、十分あつて、トヾ一角手を負ひ、眞中にどうとなる。神崎、矢頭、左右より詰め寄せる。この引張りにて一面の淺黄幕を振冠せる。ドン／＼にてつなぎ思ひ／＼の可笑みの仕出し、幕外へ出る。
仕出し　夜討だ／＼。
(ト逃げて入る。後の道具出來次第に、淺黄幕、切つて落す。)
本舞臺。淺黒幕。裾通り一面の柴垣。眞中に九尺の裝部屋。下手よき所に、切穴の井筒、雪持など、よろしく。上手に松の立樹。日覆より同じ釣枝。一面の雪布敷結め、ドン／＼にて道具納る。)
(ト雪下し、本釣鐘。謡への合方になり、日覆より雪を降らし、下手井筒の切穴より、上野、伺ひ出て、邊りへ思入れありて。)
上野　危き難を遁れんと、かねてしつらふこの拔井戸。少しも早く、ソレ。
(ト向うへ行きにかゝる。此時、向う揚幕の中にて、大勢、ありや／＼の聲する故、思入れあつて、後の裝部屋の戸を明け、中へ忍ぶ。こゝへ向うより重次郎、龕を持ち出て來る。こゝへ下手より、吉右衛門、蜜柑籠を肩に掛け、出て來る。花道にて重次郎に行會ひ、)
間　山。
寺坂　川。
(ト吉右衛門、思入れあつて、籠より蜜柑を一つ出し、)
息つきに、一つ召上りませ。
間　ヲヽ過分／＼。(思入れ。)シテ、そちは何者なるぞ。
寺坂　ヘヱ、寺坂吉右衛門めに御座りまする。
間　ヲヽ吉右衛門か。大儀／＼。其方は諸方を見廻り、各々方へ心を付けよ。
寺坂　畏つて御座りまする。
間　行け／＼。
寺坂　ハツ。

（ト吉右衛門、向うへ入る。間、舞臺へ來り、思入れあつて、）

間　此處は、吉良家の奥庭より遙に隔たる巽の方、東南の炭部屋へ雪に形遺く足跡の傳うて居るは心得ず。ソレ。

（ト思入れ。炭部屋の戸を、槍の石突きにてこじあけ、槍を入れる。手應へして中より炭俵を投げ出す事よろしく、トヾ上野出て、逃げようとするを、間、引きつけ、）

この炭部屋へ忍びし奴こそ、尋ぬる敵に似寄りの年齢。何者なるか。名を名乘れ。

上野介　イヤ、左様な者にはあらず。命を助け、見逃し呉れよ。

間　その返答こそ、愈々怪しい。

上野介　エヽ、こゝ放せ。

（ト宜しく立廻る。こゝへ上手より、岡島、拔刀を持ち出て來り、この中へ入り、ごつちやの立廻りあつて、トヾ岡島、上野の首を打落す。これにて誂への切首出る。間、岡島、互に透かして、）

間　山。

岡島　川。

間　岡島氏か。

岡島　間氏。

間　今突留めし相手こそ、正しく敵と覺しき奴なる故、拙者が仕留めし槍先なるも、何故手柄を奪はれしぞ。

岡島　さやうな事とも存ぜぬゆゑ、助太刀なしたる八十右衛門。たしか敵とお云ひやるには、何ぞ確かな證據がござるか。

間　サそれは。

岡島　さなくば、何で腹立ち召さる。

間　サそれは。

岡島　サア。

間　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

岡島　よも確かなる證據はあるまい。

（トキツトいふ。この時、上手にて、）

大石　アイヤ、その目利仕らん。

間岡島　何と。

（トこの時、知らせにつき、後黒幕を切つて落す。向う奥深き吉良家の奥庭。御殿を見たる雪降り灯入の遠見になる。大小の入りし鳴物にて、上手より大石先に、新相中の義士、手丸の提灯を持ち附添ひ、大石主税書面の拵へにて出る。）

間　貴殿は大石御親子なるか。

岡島　シテ御目利と仰せあるは。

間　何ぞ確かな。

兩人　證據でも。

大石　それなる首級は殿中にて君御及傳遊ばされし刀疵のこれあらば、吉良少將に相違なし。ソレ倅、改め見よ。

主税　ハツ。

（ト件の首を取上げ、刀の小柄にて髪を搔
分け、見る事あつて。）
眞に、これにありノ＼と、御無念残る
刀疵。

間　さては敵で。

岡島 間　ありしよナ。

大石　然らば、間十次郎殿一番槍を入
れられしゆゑ泉岳寺にて一の燒香。二
番は即ち岡島氏。

間　それで拙者の規模も相立ち。

岡島　又某も思はぬ高名。

主税　イデ／＼、人數を集め申さん。

（トこの時、橋懸りにて。）

吉田　その一番槍、暫く。

四人　あの聲は。

（ト鳴物キツパリとなり、橋懸りより、吉
田、胸當制羽織の義士にて、新相中の義
士二人附添ひ出で、皆々これを見て。）

大石　貴殿は副將。

四人　吉田氏。

吉田　吉良家に於て、名を得たる用人、
小森平八郎を先刻槍にて突留めしは豈
野三平が手柄ゆゑ、一番と書記し討死
なせし態に見せ掛け、計ひ度く存ずる
ゆゑ、此儀隊長大石氏の御賢慮如何と
伺ひ申す。

大石　チヽ、よくぞお心付かれたり。
それぞ、手前も願ひし所。

間　さはさりながら、御身の手柄を、世
に無き者にお讓りありし。

岡島　吉田氏の御芳志こそ、實に智仁
勇兼備なす。

主税　よき副將とや云ひ傳へん。我々
感服。

四人　致して御座る。

大石　コリヤ吉右衛門。其方は但馬豐
岡の石塚方へ使を致せ。

寺坂　ハツ。（思入れ。）恐れ多くは御
座れども、何卒拙者も諸共に。

大石　いづれの道も忠義なるぞ。

寺坂　ハヽハツ。

（こゝへ新相中の吉良の侍二人、炭部屋
より抜刀を持出て。）

侍二人　觀念。

（ト切つて掛かるを、間、岡島、上下にて
切倒し。）

大石　今ぞ本懐。主君の怨敵。

主税　多年の本望一時に達し。

間　安々討取り候上は。

岡島　日頃の欝憤。

寺坂　臣等が悦び、これに過ぎず。

吉田　嘸や、冥府の我君も御滿足に思
召さん。

（ト大石、呼子の笛を吹く。これにて上下
より、義士大勢出て左右下に居て。）

義士　我々一同。

皆々　恐悦に御座る。

大石　ハテ心地よい。

皆々　本望ぢやなア。

吉田　先づ、今日はこれぎり。

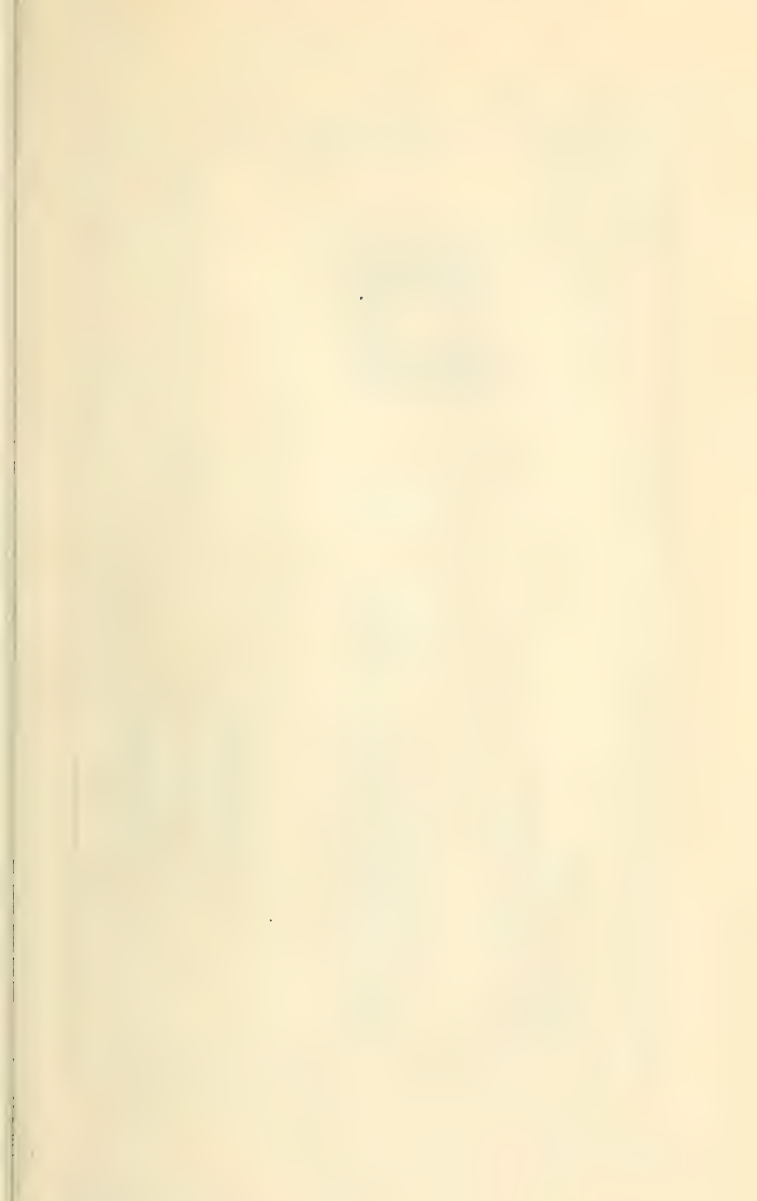
（ト皆々引張り宜しく、）

目出度く、打出し

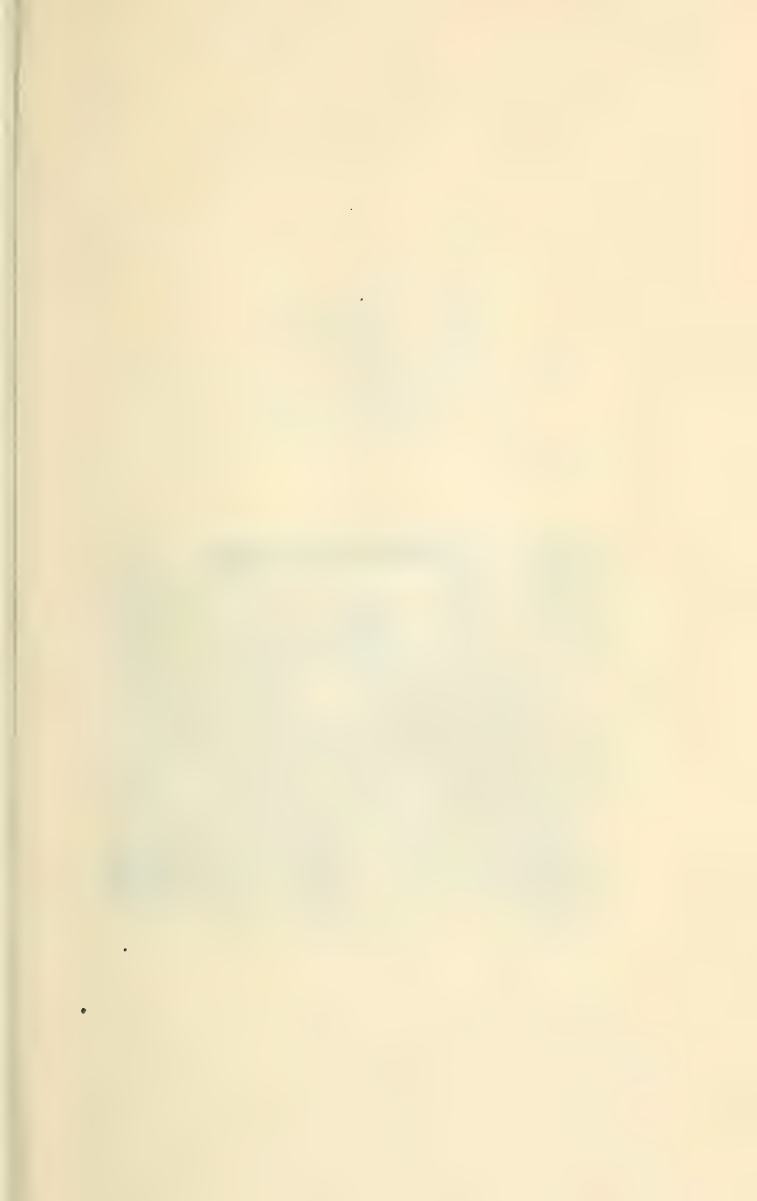
昭和三年七月二十五日印刷
昭和三年七月二十八日發行

日本名著全集 第一期出版
江戸文藝之部 第八卷
歌舞伎脚本集
（非賣品）

編輯發行兼印刷者 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

東海道四谷怪談

七百九十五頁

の挿畫の下半分へ上方だけを糊付にして、他方はめくつてのぞけるやうに願ひます。

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懷硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

正篇 ○芭蕉一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懷紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四卷 第五卷 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新曆 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○艶狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔曆 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島　○津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上下

○曆　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○樹久米松山　○富仁親王嵯峨鑑　○お染久松袂の白しぼり　○鬼鹿毛無佐志鐙　○愛護若塒箱　○傾城思升屋　○八百屋お七　○心中二つ腹帶　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○鬼一法眼三略卷　○壇浦兜軍記　○蘆屋道滿大内鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○釜淵雙紋巴　○ひらかな盛衰記　○御所櫻堀川夜討　○鵯山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中将姫京雛　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫗髪歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢音頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○新小夜嵐　○好色万金丹　○御前義經記　○傾城色三味線　○傾城禁短氣　○日本新永代藏　○世間息子氣質　○世間娘氣質　○浮世親仁氣質　○沖津白浪

第十巻 怪談名作集

○伽婢子　○狗張子　○怪談全書　○英草紙　○繁野話　○雨月物語　○唐錦　○莠句冊　○垣根草　○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記　○啌多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本　○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道

万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　⊙十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻　酒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の巻　○嫖客三體誌　○娼妓絹篩　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中醉語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫鹿子　○起承轉合　○梓町甲閨　○古契三娼　○濟都酒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の巻　○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三巻　讀本集

○櫻姬全傳曙草紙　○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○飛驒匠物語

第十四巻　滑稽本集

○風流志道軒傳○古朽木○阿多福假面○指面草○人遠○茶懸物○無彈砂子○小紋雅話○奇妙圖彙○浮世風呂○早變胸機關○客者評判記○浮世床○人間萬事虛誕計○同上後篇○假名手本藏意抄○一盃綺言○古今百馬鹿○八笑人○七偏人○柳巷訛言○市川評判圖會室の梅○福來雀○一雅話三笑○言葉の花○鯛の味噌津

第十五巻　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六巻　第十七巻　第十八巻　南總里見八犬傳　上中下

第十九巻　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅　○めでた百首　○かくれ里の記　○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）　○風來山人六々部集（後篇）　○風流志道軒　○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿巻　第廿一巻　偐紫田舍源氏　上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上下

○賀茂翁家集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○梶取魚彦家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍冊子 ○志濃夫廼舍家集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹）○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

○第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角）○五元集拾遺（同）○五元集脱漏（同）○雜談集（同）○類柑子（同）○玄峰集（嵐雪）○其袋（同）○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫）○鬼貫句選（鬼貫）○七車（同）○とくとくの句合（素堂）○韻塞（許六）○風俗文選（同）○葛の松原（支考）○笈日記（同）○雜文消息（許六・野坡）○蛙合（仙化）○俳諧職人盡（參和）○鶉衣（也有）○蕪村句集（蕪村）○蕪村文集（同）○新花摘（蕪村）○寫經社集（同）○十番左右句合（同）○明鴉（几董）○續明鴉（同）○新雜談集（同）○井華集（同）○太祇句集（太祇）○春泥句集（春泥）○三春日記（蓼太）○芙蓉文集（耳得）○白雄句集（白雄）○骨書（樗良）○俳ざんげ（大江丸）○はいかい袋（同）○曉臺句集（曉臺）○佐渡日記（同）○おらが春（一茶）○一茶句集（同）○鼠の道行（成美）○成美家集（同）○蔦眼集（道彥）○鶴芝 士朗）○斧の柄（乙二）○續絡歌仙（宜麥）○屠龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○灸すゑ巖の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所緣江戸櫻○常陸帶花栅○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○蒔繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間獄○尾上雲賤機帶○源氏十二段○頼光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鷄合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靭猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲絲亭環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新らつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間獄（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同(山歸り)○月花玆友鳥(山姥)○筐花手向橋(吉原雀)○復新三組盞(大山參り)○道行浮塒鷗○道行旅路の嫁入(八段目・おかげ參り)○六歌仙容彩(文屋・喜撰)○彌生の花淺草祭(惡玉)○おどけ俄煮珠取(玉屋)○道行旅路の花聟(落人)○再春菘種蒔(舌出し三番)○初霞淺間嶽(淺間)○〆能色相圖(神田祭)○造鈍菊睦言(菊畑三菊)○菊嬉聞睦言(お岩)○倭假名色七文字(手古舞)○再褄閨の小夜衣(白絲)○明烏花濡衣(浦里)○梅柳中宵月(清心)○日月星晝夜の織分(夜這星)○初櫓噂高島(三人三吉)○貨浴衣汗雷(夕立)○忍逢春雪解(三千歳)○色增栬夕映(雁金)○花雲助相肩(雲助)○青海波○助六曲輪菊(助六)

○新内節

○二重衣戀占(花咲網五郎)○若木仇名草(蘭蝶)○千日寺名殘鐘(三勝半七)○眞夢血染抱柏(花蘭平三)○歸咲名殘の命毛(尾上伊太八)○傾城音羽瀧(おとは七郎兵衛)○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪(浦里)○明烏後眞夢○累身賣の段

○蘭八節

○道行相合巨燵(梅川)○桂川戀の柵(お半)○鳥邊山○花街の色糸(植木屋)○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿(おひな吉三郎)○道行緣花房(お花半七)○口舌八景(小いな半兵衛)○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄(めりやす大薩摩を含む)

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子(相生獅子)○二人椀久○英獅子亂曲(枕獅子)○百千鳥娘道成寺(さなきだ道成寺)○高尾さんげの段(高尾懺悔)○天人羽衣○京鹿子娘道成寺(娘道成寺)○英執着獅子(執着獅子)○風流妹脊の杜建(杜建)○門出京人形(水仙丹前)○亂菊枕慈童(菊慈童)○鐘入解脫衣(解說)○劒烏帽子照葉盞(劒烏帽子)○柳緑諸鳥囀(鷺娘・うしろ面)○初咲法樂舞(法樂舞)○ねこのつま○乘掛情の夏小立(奥作)○鞭櫻宇佐幣○百夜車○妾の鏡關寺小町(關寺)○春調娘七種(七種)○童子面被(めんかぶり)○衣かづき思破車(やれ車)○童獅子○教草吉原雀(吉原雀)○相生獅子○嫐染分紅葉(うはなり)○假取安宅松(安宅)○御代松子日初戀(小松曳)○其容形七枚起請(こもそう)○關東小六後雛形(淡島)○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前(高砂丹前)○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形(雛形狂亂)○三重霞嬉敷顏鳥(三重霞傀儡師)○舞扇蘭生梅(舞扇)○濱松風戀歌(濱松風)○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪(汐汲・猿廻し・老女)○遅櫻手爾葉七字(花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蚤)○戀男調松風(調松風)○再春菘種蒔(舌出し三番叟)○戀罠奇掛合(大神)○四季詠寄三大字(門傾城・鹿島踊)○閏玆姿八景(節季候・心猿・兩女)○正札附根元草摺(正札附)○寄三津再十二支(小原女・乙姫・四つ竹)○其九繪彩四季櫻(丁稚・天下るの傾城)○四

○新獅子　○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）
○老松　○不動　○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入
娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿　○
復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）
○歌へすゞゝ餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）
○月雪花蒔繪の巵（月の卷）○拙筆力七以呂波（芝
瓶の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）○八重霞賤機
（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）○御蔵玉海老帶
手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容
彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日
○俄獅子　○外記の傀儡獅　○初しぐれ　○巽八景
○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳
○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）○島臺○
軒端松○士農工商○秋色種○雛鶴三番叟○
花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴龜
○五色の絲○今樣小鍛冶○柳糸引御攝（裸三番
叟）○壽　○鞍馬山○翁千歳三番叟○廓丹前
○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅
子○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に倘唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加 第廿九巻 謠曲三百番集

○脇能物

○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○代主○佐保山○松尾○養老○老松○白樂天○放生川○鵜龜○東方朔○白鬚○大社○寢覺○源太夫○道明寺○難波○鵜祭○輪藏○富士山○江島○賀茂○嵐山○氷室○逆矛○要石○和布刈○竹生島○九世戸○岩船○金札○吳服○西王母○右近○繪馬○鱗形○玉井○内外詣

○修羅物

○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經政○通盛○兼平○賴政○實盛○巴○清經○朝長○敦盛○生田敦盛

○三番目物

○野宮○井筒○芭蕉○采女○東北○梅○佛原○墨染櫻○身延○半蔀○夕顏○定家○江口○揚貴妃○雪○二人靜○千手○六浦○藤○杜若○羽衣○誓願寺○小鹽○雲林院○遊行柳○西行櫻○陀羅尼落葉○源氏供養○大原御幸○吉野靜○住吉詣○松風○熊野○草紙洗小町○山姬○祇王○胡蝶○吉野天人○鷺○葛城○龍田○三輪○卷絹○檜垣○關寺小町○鸚鵡小町○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月祓○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寬○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○成陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合浦○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨吟○護法○譽千○千引○常陸帶○空蟬○鶏龍田○阿古屋松○紫式部○鷺○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隱岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○翰○恭

其他

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に件ふ多量製産の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）

んひろみこゝ
五つとゝゝ
けさ芝居見て
わすれてみる
「助六さん

子画